水谷不倒生校訂

校訂 江戸作者淨瑠璃集

東京 博文館藏版

解題

金平時代には江戸淨瑠璃作者に岡清兵衛北條宮内等ありしゝ聞けど、所謂義太夫節の世となりて、竹本豐竹兩座の繁昌せし時代には、近松門左衛門以下の淨瑠璃作者みな大坂にあり、此の間江戸は暫く中絶の有樣なり。其の後再び江戸に淨瑠璃作者を出しゝは、豐竹肥前椽が江戸へ下りし後の事に屬す。豐竹肥前椽は大坂の產にして、淨瑠璃を好み、若年の頃より豐竹越前椽に隨ひてこれを學び、新太夫と號し、道頓堀の芝居を勤めて名聲ありしものなるが、享保十九年江戸へ下り、若松丹後椽名題にて芝居を興行し、葺屋町辰松八郎兵衛座をも勤め、元文年中新たに堺町に操座を興しぬ。最初は豐竹座にて用ひし並木宗輔等の舊作を語りけれども、漸く必要に迫られて明和の頃より新作を出しぬ。又豐竹新太夫座、等當時江戸の操座に

狂歌は由縁齋貞柳が流れを汲み、由甲齊こ號す、蓋し其の居所の京都油ノ小路押小路なりしを以て、其の片字を取りしなり。又作名に紀の上太郎こ名乘りしは、由緣齋に因みある紀ノ海音の紀を取りしものなりこいふ。元之助人形使の名人吉田冠子を贔負にせしより、彼れを介して當時名高き平賀源内に淨瑠璃を作らしめぬ。是れ源内が淨瑠璃の作に筆を着けし初めにして、すなはち『神靈矢口渡』は、元之助の誂へにて作り、戯號の福内鬼外も亦元之助が名附けし所なりこぞ。又元之助いたく圓山應擧の畵を好み、屢彼れをして種々の繪を書かしめたる事あり、ある時元之助應擧に四季の富士を畵かんことを求めたりしが、應擧は未だ富士を見ざれは畵き能はずこて斷りぬ。元之助さらばこ金四百兩を應擧に與へ、一年ゆるやかに富士を見物して來れこ命じて遣はしぬ。應擧やがて關東に下り、春夏

於ても、其の頃頻りに新作の淨瑠璃を出しゝが、是等を總括したるものを江戸作者の淨瑠璃といへり。本集に收めたる最初の二編すなはち『志賀の敵討』(安永五年)『糸櫻本町育』(同六年)は、江戸淨瑠璃の初出にはあらねど、作者紀の上太郎は、江戸淨瑠璃の新作を出すに多少の功勞ある人なれば、江戸作者の顏役こして、其の人の作を卷頭となしたり。

紀の上太郎は三井元之助と稱し、有名なる三井の一家なり。元之助三井家の事に就き、紀州家と爭ひし事ありしが、道理は貫きながら、一方は御三家といふ所にて、遠慮せざるを得ざる場合に立至り、やがて退隱し文學美術を友として、生涯を樂みたり。ある時の詠に

淋しさにせめて下戸でも來れかし
酒の減らぬをとりえにはして

烏亭焉馬　は桃栗山人柿發齋、又は野見てをなごんすみかね等の狂名あり。本所相生町五丁目に住居し、もこは大工の棟梁なり。俗稱和泉屋和助、中村氏、名は英祝、其の居所を竪川通りこ稱し又五代目團十郎こ義兄弟の約ありしを以て、立川淡州樓こ號しき。安永天明寛政間、一枚刷、洒落本、草双紙、淨瑠璃等にあまたの作あり。且久しく廢れたる落し咄を再興し、又劇塲に入込みては脚本作者の補助を爲しきこいふ。當時戲作界の先輩こして世の推す所こなり、文政五年八十歳にてみまかりぬ。淨璃瑠にては、紀の上太郎こ合作の「白石噺」及び本集に加へたる「伊達競阿國戲塲」等最も聞ゆ。

万象亭　は平賀源内の門人森島甫齋の戲號なり。

曲亭馬琴　の傳は普く人の知る所なればいはず、但し馬琴にも淨瑠璃の作あり、彼れが戲作者こして、何にても爲し得ざる

秋冬に異る景色の富士山を眺め、遂に四季の富士を畫き元之助に贈る。世に應擧には富士の畫なしと雖ども、全くこれなきにあらず、元之助の需に應じて畫きし四幅の外には生涯富士を畫かずといひ傳ふればなり。『碁太平記白石噺』は烏亭焉馬等と合作にして、之を作る時焉馬をして奥州訛を實地に研究せしむる爲め、彼れに旅費を與へて奥州へ遣りぬと、其の爲人の一班を窺ふに足るべし。而して鬼外といひ、焉馬といひ、共に江戸作者の先輩なりとすれば、彼等を奬勵したる元之助は、江戸作者を養成したるに少からざる關係を有する人といふべし。

福内鬼外　曩に『帝國文庫』『風來山人傑作集』の中に、『神靈矢口渡』以下數番の淨瑠璃を出したれば、本集には其の漏れたるもの三編『源氏大草紙』（明和七年）『荒御靈新田神德』（安永八年）『靈驗宮戸川』（安永八年）を收めて、源内の淨瑠璃を爰に全からしめたり。

りきといへば、此の作のいかに持囃されしかを志らん。
以上記したるもの丶外、本集に收めたる作者にして其の傳の詳ならざるもの二三に止まらず、是等は餘り多く作らざりし人、若くは補助作者にして名聲のさまで揚らざりし人と知るべし。

明治三十一年五月

校訂者識

ことのなきを見て、其多才は實に稱すべし、されど草双紙と淨瑠璃とには、縦令眞面目の作にあらずとするも、其の拙や遂に掩ふべからざるを見る。

松貫四　は近松貫四の略なり。通稱は万屋吉右衛門、葺屋町茶屋の主人なり。淨瑠璃數番を作る、有名なる『伽羅先代萩』又其の中にあり『吉野静人目千本』(安永四年)は吉田仲二との合作なり。

容楊黛　は『加々見舊錦繪』の作者にして、下谷長者町なる醫者松田某の作名なり、此新淨瑠璃天明二年二月より、堺町豊竹新太夫座に於て、操人形にかけられしに、大評判なりしかば、翌三月木挽町森田座に於て狂言に仕組み、大名題『鏡山故郷の錦繪』といひて、これ又なか／＼の大入にて評判よかりしかば、其の後も此の狂言しば／＼演せられ、殊に毎年三月諸家の奥女中が宿下りの時節には、必ず此の狂言を出さねばならぬ程とな

江戸作者淨瑠璃集

總目錄

河合正宗刀由來
芭蕉翁俳諧濫觴

志賀の敵討

作者　紀上太郎

奥方の御入と、呼次聲に當家の家老渡邊數太夫、同役瓦井又鱗諸共出向ひ、間も無く伽羅の香の先を拂ふて、備前の國生田の奥御簾外御前、姿は花や青柳の、姫は櫻桂とて、振と結袖年は未だ、いざよふ月と寐待月、御供には江戸詰の松尾半左衞門、奥方は猶さえ〲と、コレハ〱又鱗數太夫久々にての自が國入、家中皆も變らずか、と仰に兩人詞を揃へ、先以て江戸表夫殿にも、御機嫌宜敷段、追々承知、殊に此度珍らしく奥方の御入國、長途の御旅行恙なく御着座の段、恐悦至極と敬へば、イヤノウ自は前々も來りし此御國の下屋敷、庭の懸り草木の景色、何と桂見事じやないか、常々數太夫や又鱗の手入故、一入奇麗にノウ別て櫻は、連歌師松永貞徳の娘なれば、眺を篤と江戸へ歸り、親々にも咄の種と、いとゞ麗しく見へ給へば、半左衞門手を支へ、御兩所共一別以來、江戸御國と隔居れば、彼此公私に取紛れ、書状以て御尋も申さず、先以て此度奥方入せらるゝは、姫君初瀬の方、志賀の上野の城主より、御縁組の儀申來るに付、引出物に遣さるゝ刀、名作は數多有れ共、何れも御家重代の道具なれば、殿甚だ惜ませ給ひ、

江戸作者淨瑠璃集目次終

々な、刀の見分は奥の間にて、イザ又鱗數太夫、牛左衛門も一所に、と仰に式禮目禮の、中に住は東之介、ちらりと外にみなの川、見初めし戀の積る淵、奥深くこそ入給ふ、折柄來かゝる設樂傳八、奥方御着の恐悦を申上げんと、取次を待間奥より出つる深山木の、其梢とは姫の、櫻は花に顯れて、此のマア藤七樣は何故遲い、御供の乘を御上屋敷へ連れていた逆、斯う隙のいる筈はないが、とおちに心の迫り椽、傳八樣袖繕ふて、コレハ〳〵御姫中、長々の旅路嘸お勞れ、拙者は番頭役設樂傳八郎、奥方へ恐悅申上たし、イサ御取次、としたゝるい目元口元無理遣りに、生れも付かぬ愛敬顏、コレハしたり、お前が傳八樣とやらかいな、そしてお上屋敷から未だ松尾藤七殿は見えませぬかエ、ハア藤七郎をお尋は、何ぞ御用ばし有つてか、イヱ少つと妾が、ムヽ和女樣が御用とや、イヤマア江戸者は何うでも敏い、今上屋敷で始て逢ふたお供の藤七、偖好い男見ぬ內は拙者に及ぶ者は有まいと存居り、國中にも其噂區々、夫に上越す藤七めはおやかり者、併又氣を變へてお國の風味も試み給へ、とはうと抱き付後の方、牛左衛門が弟藤七郎、手首を取つて引摺り退け、コリヤ傳八郎殿何と爲さるゝ、ヤア何時の間に藤七殿、イヤ是はあの何物さ、長々の道中足に實がいつて、豆が出來たとお姫の咄故、鳥渡御容體見やうと思ふて、は道中は通し駕籠、道の一里其歩かれねは、豆の出來樣やうも無し、ハテ偖さう細に云ひても能い事を、譬ば道は歩かいでも、女中に豆は有る內、と云ひ捨勝手へ逃けて入る、

何卒一家中に、名作所持致す者有らば、召上られ、きつと御加増有るべき旨、先達而御承知の通、然るに貴殿御兩所共、名作の刀御所持の由、仰を越るゝに付、右の內見分やら、又御婚禮先格、萬事御兩所に御相談申せよと、奥方に添へられしは、元志賀の植野は某が生國、彼此を差含まれての事、万端御指圖下されよ、と四角四面も煩からず、物馴れてこそ見えにけれ、ホゝ成程、其儀に付、ハヤ悴共に申付け、御次迄持參致す、悴東之介瓦井政五郎、急で刀持參せよ、ハット答へて優男子、家中に夫と指折の、數太夫が一子東之介、此方は瓦井政五郎、家中一番横着物、共に若木の花の兄、顏も白梅紅梅や紅の紐、結び下たる刀箱、恭しく捧け出、東之介爽に、抑我家に傳ふる長光の刀は、其昔小豆を擔げたる男、一腰佩して行く道に、我先祖後より行く、俵を漏るゝ件の小豆、行者の鐺に當つて落つるを見れば、悉く斜に切れたり、訝と心を付れば、彼男の脇指の鞘破れて、切先少し出たるに、當つて切るゝを篤と見濟まし、無理に所望し改むれば、當國長船の長光なり、名作相違有らざれば迚、世擧つて小豆長光と云ふ、ホゝ我又持參したる刀こそ、相州五郎入道正宗、故有つて先祖より我家の重寶、正宗の刀は世に多けれど、此刀は十分の出來たるに因つて、世上にも家の苗字を呼んで、瓦井正宗共、又略して河井正宗共云ふ、斯程の刀、各家にも身にも替へざれ共、主君の御用に立つは家の面目、宜敷御賢慮下されよ、と兩人箱を御前に直し、遙に退つて控へ居る、ナゝ東之介政五郎も太儀

は惡からう、櫻も此方へ、と手を引張り、何の爰等に遠慮する事が有つて、と二人連、怪しの一間へ入にけり、跡に桂が右つ左いつ、何と云ひ懸け伺うせうと、胸に思ひを寄せひだの、袴立派に立出つる、東之介刀箱を床に直し、コレ〳〵お妙の誰とやら、拙者に御用と藤七郎の指圖、如何の儀にや、と三つ指に、ハイと云ふたが情一盃、顏を背けて詞なし、此方は一途の國侍、御用なくば拙者は直樣上屋敷へ立歸る、おさらば御免、と立上る袂をひかへて、あのアノ、あのとは、アノナ安濃の津とは何處で御座りますへ、ハテ異つた事のお尋、安濃の津とは伊勢の名所、サア其伊勢の海、清き渚のたま〳〵に、今日と云ふ今日見初めた思、此方の二人は飛て出、モヽ其樣永いさはり臺詞云ふて居ては、當世の色事はあかん〳〵、惚れたら惚れたで能いじやないか、ノウ櫻殿、サイナア大方東樣も、最前からの目顏でも、推量して御ざんしよ、コレハ迷惑千萬、と俯向く初心も、エヽ鈍なコリヤ碎けをれ〳〵、國の江戸のと隔つれど、色事は何處も同じ、秋の夕暮黄昏時、櫻と二人が點〳〵、恥しがるを無理無體、押遣り〳〵一間の襖、道岩木に有らざれば、厭で有らう樣もなし、此間に奥へ氣を付けよ、我等は勝手と懸知同志、とう〳〵渡した妹と背の、はしの間へとぞ別れ入、刀箱携へて立出づる政五郎、後に續いて傳八郎、何と今奥の樣子で何うやら刀は、數太夫の方が納りさうなぞや、サア其處で切味の事云ひ出したりや、明日樫原の土手にて死罪極る科人の二ッ胴受合ふた數太夫、刀は

跡打見遣り藤七郎、ヱヽ櫻殿何じや面白さうにお樂みなさるゝな、漸く今日の今來て、マウ色事の國入か、アヽ何云ふても西國者は賢い〳〵、我等が樣な東戎はお嫌ひ爲さるゝ筈の事、と云ふ胸座を、コレ藤七樣、爾云ふお前が跡へ殘り、お上屋敷に今迄何して居さんした、眞に今更云ふではないが、互に思ひ思はれても、堅い屋敷の勤奉公、奥と表は海山千里・お錠口の嚴しさ、遂に一度の逢瀨も成らず、〳〵思ふて居る矢先、今度のお供は、二人が中の結ぶの神かいな、戀路の初旅、初手の泊に思ひの丈、二夜で三夜さ重なる中の私語、後は晝でも人目を忍び、二町三町手を引て、嬉しい事を開度に、先の身の上案じられ、何うか斯うかの胸の中、思ひ遣つてくれもせず、何樂しみの段かいな、東戎と云はしやんすれど、妾も同じ東育、可愛と思ふて下され、と涙ぐめば、ヲツヽ誤り〳〵、偖東戎の次手に、東之介と云ふ奴見てか、アイ最前刀を持つてお出、夫をもう桂殿が散つと見やり強い思ひ入、ヲヽ左樣であらう、彼奴も連歌を爲り居つて、何日ぞや御參勤の時、江戸へ來て和女の親御貞德殿にも添削を頼むだ奴、したが堅いには困つたものと、咄半へ拵桂、櫻殿〳〵と、呼び〳〵出るを藤七郎、何と東之介好い男で有らうがな、彼をお前が取持つてくれと云はずば、首をやらうと道々も云ふたは實、何と違は有まいが、と云はれてはつと赤らむ顏、櫻は引取、コレハしたり何の爰等に遠慮する事が有つて、ナア藤七殿、それ〳〵然らば東之介呼出しておこさうか、したが外に人が有つて

やるぞい、爾して妹も見えず、お屋敷は堅い上別してお國は猶堅いぞ、明日數太夫殿試し者の見分役、妹の二ッ胴、腕を敷寢のちょんの間とは違ふぞや、連歌や色事にはかり懸つて居ては、ア、武藝の事は心得ない、汝試し物見た事有るか、コレ血を見て目を廻されな、と態と差合ひ詞の毒、更に此場の云譯も誤入たる藤七郎、半左衛門ぐつと引据ゑ、ヤイ常々身が云ふ事何と聞く、行餘力有る時は以て文を學ぶと有るは、武藝一通存じたる上敷島の道をも心懸く可き事、今傳八郎殿の一言、連歌にばかり魂奪はれ、武藝の事は知るまじとの詞、わりやさつと胸にこたへうがな、此以後連歌に心を寄すれば、兄でない弟でないぞ、武藝に心を委ねよ、と兄が眞身の強意見、藤七郎はさし俯向き、無念泪にくれ居たる、一間の中に東之助朔桂も今更に、出るも出られず氣の毒の、思ひは幾重も逼すらん、襟繕ふて御前に向ひ、私儀不行跡にて、武藝未熟ならんと傳八殿の批判、何共家中へ對し申譯なし、此上の願には武器の第一は弓矢を以て貴しとすれば、當所大宗寺の椽側を、京都卅三間堂に擬ひ、矢數を試み申たし、偏に願ひ奉る、と泪と共に願ふにぞ、ホヽ尤の願去ながら、假初ならぬ譽の業、吉日を撰らび申付けい、先夫迄は隨分共、稽古に油斷なき樣、と仰にハヽハツト半左衛門、藤七郎が身の面目、悦ぶ尾に村傳八郎、其見分は拙者仰を蒙らん、コリャ矢が通したい身が所へ、お頼みなさいと憎くて口、耳にも懸けず半左衛門、イザ渡邊殿、明日の御支度、御刀を直樣御持參なされい、と云ふ

名作手は枯れたり、すつぱりと行くは必定、其處で一ツの思案には、コレ斯う、と最前東が差置いたる長光の刀箱、あたふた開けて取出し、夫奥と勝手に氣を着け召され、とおのが刀の目釘を拔き、すり替へる掏摸根性、人は知らずや白鞘の、反も合はねば、其儘に、箱に納めて舊の所、何と傳八、此中の新身の刀、出來は可けれど、中々長光の傍へも寄らず、斯うすり替へて置からは、二ツ胴は思ひも寄らず、行かぬ所で此方の正宗、必とお役に立つる思案、と云ふに傳八横手を打、妙計々々、其處で渡邊親子は失敗る、所で彼の娘の桂、最前散と見て置いた、東めとのしだら、虫を拂ふてしてやるつもり、我等も何卒あの櫻を、夫は斯う〳〵耳に口、合點々々呑込んだ、がしたが藤七郎と云ふ奴、是迄間違ふて近付にも成らぬが、マア奈何な奴じやい、イヤなまぬるい白らけたしやつ面、最前爰で着くや否、モウおれを一本やり居つた、忌々しいと咄半、奥より入音、見付けられな、と點き〳〵、設樂は跡に、政五郎刀箱引抱へ、おのが宿所へ立歸へる、折柄奥より御簾外御前、松尾半左衞門數太夫後に續いて立出づる、奥方は閑雅に、今奥で云ふ通、政五郎が云ひし切味の事も一理あれば、彌々樫原の土手にて、死罪の科人二ツ胴、心得られたか數太夫、ハア成程々々委細承知仕る、して見分のお役目は、ヲヽ則松尾藤七郎、ハア畏り奉る、弟は何處に居る藤七郎〳〵、爰でと傳八一越調、藤七郎〳〵御前樣のお召じや、と喚き散らせば、一間より出つるを待兼、コレサ藤七、何處へすつ込で居

大方今日根に鍬を入る迄切つたものか、はて堵取捨置ば能いに、今日奥方の御入府故、終日身が内に居らねば、庭の掃除が行届かぬ、誰ぞ捨よ、と云付やり椽側に、烟草引寄せ眺に厭かぬ花壇の畦々、獨心を澄ませしが、モウ今宵も四ツでおらう、ドリャ休まうかと、つい立て、手水鉢に手を洗ひ、口嗽がんとする折柄、ヤレ暫く又鱗殿、其水口へ入られな、と云ふは何處と見廻せば、椽側下より突と數太夫、コハ何故と呆るゝ又鱗、塵打拂ひ邊見廻し小聲になり、某下家に忍びし様子、遂一に物語らんと、又鱗が傍近く、今日奥方の御前にて、仰付けられし彼拙者が所持長光の刀、明日二ツ胴の試し物、ものゝ見事にすつぱり云はせ、如何にも御用に立こむ物と、立歸へりとく改むれば、情なや切先より物打迄の鍛れ疵、万一二ツ胴を仕損ずる時は、我一分の耻にも有らず、家の寶蓮刀の名折、如何はせんと右つ左いつ、工風思案も隙有つてこそ、明日と限る大切の御用、所詮國中詮議したが迚、長光に及ぶ刀はよも有らじと思ふより、貴殿の秘藏の河井正宗、よし所望したり迚、讓られぬは必定、生中に口外して、他門へ洩れては耻辱の上の耻辱、邪なる事ながら、盗取らんと身を扮し、宵の間の出入に紛れ、椽の下に伺ふ内、手水鉢に怪しき一物、心を着れば蛇の頭、眼を怒らし水中を泳ぎ廻り、毒氣を含む其有様、彼眉間尺が例も思はれ、一寸の虫にも五分の魂、是こそ切られし其主に、仇を酬はん心かと、身の毛彌立つて恐しかりしが、能々思へは此事を、我知らせずば、暗々と毒虫の爲に、

に點き、東之介は何處に居る、と呼はる聲を機にして、出つるも少し疵持足、御用如何に、と差伺ふ、ヲヽ明日二ツ胴の試し物仰付けられた、最前の刀是へ持、若毀はなかつたか今一應改めん、ハツト心得東之介、箱差出せば紐解きかけ、蓋押開けて悄り仰天、皆々如何にと訝る中、東之介は差寄つて、親人刀が何とぞ致ましたかな、アヽイヤ何共せぬ、最早改むるに及ばぬ、と箱引抱へ立上れば、隨分首尾能う〳〵、と奥方皆々召連れて、奥へ入さの月の顏、桂櫻に此方の二人、同じ思ひや寒がる胸、胸の數々數太夫、御撿使御苦勞千万と、挨拶式禮藤七郎、取傳へたる梓弓、此方も御撿使御苦勞、といへど傳六臆れ頰、東之介も何となく、奥に心の後髮、引分れてぞ三重「立歸へる

第二

此花開いて後更に花なければと、珍づる心も隱逸と、名に負ふ菊の花畑、姊共に手燭を持たせ、我身も花に使はるゝ、瓦井又鱗が書院先、輪を抱への針金も、撓めつ透しつ餘念なき、コリヤ其手燭此方へ持て、アヽ夫々端の白に袖が觸る、移ろひかゝつた三番目の爪紅、散らすな〳〵、此紫には虫か付たか、アヽ心元ない、と見廻す足元、コリヤ何じやと、杖で探れば姊共、ヲヽ氣味惡る、コリヤ蛇が死で居る、と云ふに又鱗透し見て、ムヽコリヤ首なき蛇、察する所

落す、死骸片付け又一人、讀聞す其文言、新田の助兵衛、其方事醫者矢束井道伯の女房と密夫する所を見付られ、是非なく道伯を取て押さへ、陰嚢を締め候處、即死致す條、町所の訴の通り、白狀相違なきに依り打首申渡すものなり、と聞より南無三コリヤ堪らぬ、と迯出すを引捕へ、手取足取首の座に、無理に押さへて搔首は、人の女房をへし付し、因果とこそは知られたれ、二ツの死骸を洗ひ淸め、土壇に直し、足場の砂を搔き均し、下部は傍に控ゆれば、藤七郎は威儀を正し、イザ數太夫殿、御用意能くば御役目の二ツ胴、すつぱりと爲されよ、と指圖に徐々數太夫、老の心も凜々しげに、股立高く繩襷、易々奪ひし河井正宗、人は其共白鞘に、切柄嵌めて携へ出、拙者所持の小豆長光、切味心得なきと有つて、今日の試し物、御撿使御苦勞千万と、挨拶了つて土壇の前、刀すらりと拔放し、下部が漑くる水よりも、見ずや知ずや正宗と、云はゞ如何にと心を冷し、二尺三寸引そばめ、眼を配つて掌、中段に腰を据ゑ、刀の背を押當て、見當定め拜打ち、土壇の砂迄切込で、胴は左右へ四つの骸、藤七郎篤と見濟し、ホヽ適々渡邊殿お手の内と云ひ刀の切味、切も切たり見事〳〵、此に續く名作や有べき、イデ此通り方へ言上せん、心靜に御休息、後より御殿へお上りなされ、と下部引連れ徐々と、屋敷を指して立歸る、數太夫後打見遣り胸押下げ、暫時詞もなかりしが、何家來共、身は刀を淸め立歸らん、最早暮るに間も有まじ、宿所に歸り提燈以てお上屋敷へ迎に來よ、と追立やり、刀に水

て虫籠に、さつと濺れは此は如何に。忽音を止め草の露、虫は果敢なくなりにけり、ム丶笹にて打てば聲を發し、杓にて濺れは忽死す、偖は水に毒はなく柄杓に毒を仕込置しか、ム丶恩を見せて重代の刀掠め取りし計略か、政五郎、親父様、ハテなあ

第三

淋しさは、何國もと云ふ秋なれど。別て小凄き樫原の刑場に、今日斷罪の役人共、正面に土壇築き立、科人二人引据て、檢使の役目松尾藤七郎床几にかゝれば、數太夫是も此方に控へ居る、役人科人に打向ひ。讀聞かす一札、一猿猴の源太郎、其方事去冬聚樂町にて、梅鉢屋由兵衛が甥長吉に逢ひ、三百目ばかりの物持たるを殺し、懐中改め見候處。金子にては無之薩摩芋五ツ、之に由て内二ツを喰ひ。殘三ツを其場に捨置き立退きし段、間違とは云ひながら不屆至極に付、今日死罪申付るものなり。と云渡せば、ハア悲しや情なや、元私は大和の里芋うた芋の生、親芋子芋も有つたれど。善いも惡いも生れ付た手の長芋、土地の代官頭芋の咎を受け、妹の世話で借錢の横にねいもをつくて芋、たう〳〵のいも爰へ來て、身のはす芋と成果て、芋故命取らるゝと、思へば〳〵薯蕷の樣なねはて泪か流れます、と噦り上しは宛然に、ずゐきの泪と知れたり、ヤア細言云はずと早直れ、と下部が掛つて引据れば、役人後に立廻り、敢なく首を打

アヽイヤ其内逢ふ、と振切る袖、ムヽ成程正宗の刀徒は貰ふまい、交換して貰ふかい、アノ長光の刀とか、ヲヽテヤ汝が奪取つた正宗は、此長光と替へて貰ふ、と箱より出す以前の柄杓、見より恂り數太夫、ホヽ恂りは無々、柄杓に毒を仕込み置き、親人を欺り、掠取つた大盜人、ヤ一言も有まいが、と眼前證據にさしもの渡邊、其を傍に知られては觀念せよ政五郎、と打込む刀は河井正宗受くるは、早速柄杓の應待、飛退つて拔き合す刀は、逸小豆長光、閃く稲妻丁々な、折柄秋雨降切り、日もくれ羽鳥危さも、受けつ流しつ切結ぶ、車軸を流す提燈の、光を便に設樂傳八、刀すらりと渡邊が、兩足薙いで打倒せば、血氣強氣の政五郎、乘かゝて止の刀、無慙なりける最期なり、如何じや息は止つたか、ヲヽ傳八太儀々々、何うやら斯うやら、名作は二腰共旨い〳〵、と押戴く、折柄、向に人音足音、見付られな、と提燈吹消す暗紛れ、覺えの道筋走行く、東之介は、弟諸共父の遲さ氣遣しく、奴の五百藏提燈も、濡るばかりの吹降を、厭はぬ主從忠孝の、道を照して、歩み來る、何と弟此親父樣は何處へ、お出なされたでいナア、去れは今迄お戻りないは、お上屋敷にと思の外、御殿へも未だお上りなされぬげな、ノウ五百藏、左樣でござりまず、したが此したらでんに、何の爰等に御座りませう、なれ共お長屋中を一軒〳〵お迎に參り尋ても御座らぬから、よもやとは思へ共、じつとしても御座られぬ害、エヽ悪い此道はい、大分滑りまするぞ、と云ひつゝ行先弟小源太、顚く拍子提燈に、はつと滅

かけ押拭ひ、打眺め〳〵、アヽ適名作、紛失したる我長光迚もよも是には優るべき、計略を以てなんまと今日二ツ胴、間に合せど行末はとやせんかくやと、老人の心忙しき黄昏頃、政五郎は刀箱片手に抱へ息急き、見るより南無三難しと、行過ぐるを、コレ〳〵渡邊殿、偖今日の二ツ胴、すつぱりとなされたげなの、アヽお年に似合はぬ御丈夫、拙者も所持の刀共お試しの跡の體申請け、やつて見やうと存て罷越た刀、先何はとも有れ今日の御刀、御自慢の小豆長光、些と拝見仕たい、お見せなされまいかな、成程仰の通、今日は存の外の手際、老の腕首久しう致さぬ試し物、何うか斯うかと案じ居つたが、サ又其場に至れば勵も付くもの、シテ刀御覧なされたいとな、ハヽお若たは御奇特〳〵、お目に懸けたいものなれど、やう〳〵只今撿使の藤七郎罷歸り、未だ御前の御覧に入ねば、私には罷成らぬ、御見分相濟だ上、明日なり共明後日でも、お勝手次第お出なされ、何時でも御覧に入れん、最早日も暮かゝる、拙者は急用御免なれど、挨拶そこ〳〵過行を、イヤ長光の刀見度はない、お身が掠取つた此方の重代、正宗の刀置いて行き居れ、と聲懸られ、ぎつくりせしが數太夫、そりや何云ふ政五郎、エヽコリヤ又酒に醉たな、サヽ足下の赤い内歸りやれ、と無情き袂確と控へて、イヤコレ數太夫恍惚まい、譯は其方の胸に有らう、正宗の刀渡したし〳〵、ムヽ此上は何を隠さう、正宗の刀は汝が親又鱗に貰ふたはい、證據は則譲の一札、ナ何と見たか、此が欲くは小豆長光の刀、ヤ何が何と、

す、則殿の御恥辱、只表向は病死と言立て、時々に詮議せば知れぬと云ふ事よも有まじ、サヽ急く所でない、時節を待ち、じやと云ふて此無念、早まつて主親の恥、顯したいか狼狽者、殊に姫君御縁組の折柄、敵討の願出したり迚、不吉の願首尾も宜からじ、察する所數太夫程の者、扱合さぬ事は有まじ、今日試し物の刀にて打合ひしか、ムヽ偖は切殺し刀を奪取つたか、ヲヽ敵は慥に同家中、詮議は某胸に有り、事なく時を待たれよ、と云はれてはつと理の當然、然らば病死の御披露を、ヲヽサ云ふにや及ぶ此場の仕宜、互に隱密〳〵と、云へど無念は彌増の、草葉の露や袖袂、死骸を肩に僕の五百藏が、定めなき仇と情の二ッ胴、親子の縁の切づかや、回る因果の試し物、左右へ別れ三重「立歸る

第四

打群れて、嫁よ娘よ祖父祖母も、孫の手を引く梓弓、矢たけ心を張結し、今日ぞ矢數と、人群集、押合ひへし合ふ大宗寺、行くも歸るも取々に、聞さつ聞かれつ通り矢の、數も限らぬ賑しさ、何とまう幾程程通りましたな、アヽ好男子で御座ります、年は幾歳位であらうなア、今三千の幟が出ました、私は宵から見て居ました、是から内へ歸つて、息子を見せにお來しましよ、我等は親父と代合、どれ好男子見てこう、と云へば、此方は内へ行て、嬶めを一ッ通り矢數、

りし飛汁は、ヤア正しく是は人の血汐、ドレ〳〵眞にエヽ聞えた、コリヤ今日の死罪の血、モ親人の事案じる矢先、何時にない血を見て恟り、ハテ偖氣に罹る、其樣事云はぬ物、と行足元に、ヤア爰に人が殺して、ハテ夫も今日の試し物さ、と云へど氣がゝり明に透し、ヤアコリヤ親人數太夫樣、ハアはつとばかりに三人が、暫呆れて居たりしが、衣服を其儘切つたからは、山賊夜盜の所業にも有らず、ムヽ偖は意趣有る者の所業か、エヽ今一足早かりせば、と云ふも詮なき此有樣、若旦那、五百藏、エヽ口惜はいやい、ヲヽ御道理〳〵、御尤〳〵、と共淚詮方もなく見えにけり、斯かる折柄松尾半左衛門、是も同じく渡邊の歸の遲さは訝と、下屋敷よも歸りがけ、日早く見付てヒヤア數太夫殿は、人手に罹つて、エヽしなしたり殘念〳〵、半左衛門殿御推量下されよ、と前後不覺の有樣に、半左衛門力を付け、シテ證據になるべき品もなきや、と氣を付られて尤と、見廻す叢秋の野の、金紋の獅子の小柄、手に取上け火影にすかして、半左衛門殿、江戸表より昨今お着の貴殿なれば、お見覺も有るまじ、某とても覺なき小柄なれど、若や詮議の、ホヽ種共〳〵、ヌリヤ親の敵は知れませうかな、此上願奉る、是を證據に親の敵一太刀討つて手向たし、御前宜敷お執成單に頼む松尾殿、弟、五百藏來れ續けと驅出すを、ヤレ侍方々一途に逸るは尤なれど、主知れぬ小柄を手懸とは覺束なし、殊に渡邊數太夫とも云はるゝ武士、刀さへ拔合はせず、闇討に逢つたと云はゞ、一人一家の恥辱に有ら

態の、弓の樣子はドゥ何うで御座んす、去ればいなァ聞かしやんせ、爰を先途と藤七殿、息をも次がず肌脫ぎに、雪の肌を現はして、きり〳〵と引絞り、切つて放した身鹽梅、堪つた物では御座んせぬ、エゝしんきな桂殿、其樣咄を聞きには來ぬ、矢は何万本通つたへ、イゝエイナァ、仇矢はねつからない物を、撿使に立つた傳八が、今のは逸矢で通りに立たぬ、是は物に觸つたの、酢の蒟蒻の引くの山の、柱にすつたの擦つたのと、めつた無上に難付けて、昨日からの通り矢が、僅に三千五百本、此通りを御注進、イヤ奥樣はモウ爰へ、私は先へ棧敷の、お前方に與樣の、お越の樣子を知らせの使、其なら私も一所にと、戀に心も亂れ髪、楠の歯を引く早使、夜目に閃く鋲乘物、奥方に引添ひて、餘多の女中婢迄、お供は松尾年左衛門、徐々舁込む夜の道、又も駈け來る總きぬ〴〵、御乘物に手を支へ、申上げます矢數の次第、コレお前方も聞いておくれ、眞に〳〵腹の立つ、通つた矢さへ通らぬと、柔もふらぬ撿使の片意地、夫が心に障つたやら、堂の半を行くや行かず、ぱたり〳〵と落つる矢は、しんき氣の毒、漸々と昨日の朝から、只今迄凡三千五百六十七八本、桂櫻も其外も、口惜がつて力むやら、癪を發して痛がるやら、いつそ泣やらはやくやら、棧敷竹もめり〳〵〳〵、シテ弟めは何と〳〵、イゝエイナァ何とゝ云たか一向やくたい、勇む心も盡き弓の、矢つぎも次第に遅うなり、迚も此末通つたとて、モウ百本か二百本、最早夜明に程もなし、早々お入と曉を、告る鐘の音きこぬ

したく〳〵、と仇口交、おのがさま〴〵別れ行く、撿使の役目を幸に、戀の遺恨を晴さんと、あふぐ扇の風の神、取とは見えし設樂傳八立出つゝ、此方より來かゝる瓦井政五郎、コレハ〳〵傳八殿お役目御苦勞、拙者も間違ふて逢はぬ藤七郎、如何樣な事かと出かけました、矢數の次第は何まで御座る、サレバ〳〵兼てお噂申た通、なまぬるこい藤七郎がしやつ頰、見るも却々忌々しい、幸ひ拙者が今日の撿使、失敗してこまさうと、出入の矢師に呑込ませ、矢を歪はせて置きました、駈頰かゝせ御前を遠ざけ、彼戀人を手に入るゝ手段、ホヽコリヤ面白い、したが矢を歪はすも手緩い詮議、ハテ通つた矢でも通らぬと、當殿が云へば濟むでないか、イヤモ其處等に隨分如才はない、最早今夜も七ツで御座らう、イザ夜明迄の落着を御覽なされ、と惡鬼同士、佛の庭へ二人連、角を隱して急ぎ行く、追々駈け來る女中の早打、提燈片手に若葉殿か、爾云ふは紅葉殿、松尾殿の矢數の樣子、奥樣への御注進、シテ通り矢は何と〳〵、去ればの事で御座んする、夜中迄の通り矢は追々に聞かしやんしよ、八ツから七ツ迄は私が役目と、脇目もふらず見て居れば、差詰引結矢次早、贔負目かは知らねども、私が目には落ちた矢迚はないものを、何のかのと品を付け、傳八の意地惡頰、釆もふらずに通り矢が、今迄僅た三千二百、今七ツが打たれれば、此通御注進、後を篤り通り矢の、吉左右聞かせて下さんせ、と下居の矢次早、息をも次がず駈け行く、心ならねば姥櫻、駈け來る向ふへ桂が片息、互にはつたり提

し連歌の點取にも、三千六百點は大體では取られまい、と飽迄嘲弄過言、モウ是迄と刀四五寸拔かける。アレ止めよ、と與方初瓦井又麟、半左衛門飛で出、藤七郎が拳摑むでぐつと引据へ、エヽ倅不届とや云はん、コナ未練者、思込んだる今度の矢數、無念に思ふは尤なれど、矢が通らずば瀰閉口すべき筈、諸人の見る前撿使に立られし設樂殿に對し、爭ひたりとて今更何となるもの、武士の家に生れながら、矢弓の事に耻辱を取るは、倅が武士は捨つたはやい、ホヽまだ〳〵驚く事が有る、ヤア倅政五郎、最前の一通是へ持て、と又麟が詞に連れて政五郎、遠慮會釋も長刀、つか〳〵と立出、ホヽ藤七郎未だ間違ふて知人にもなりませぬ、初ての出合に能い物を進ぜうと、封じ文を押開き、天罰起請の事、と開く〳〵より悔り藤七郎、扶を捜しつゝつ〳〵、何と能い物が手に入ましたてや、一其方樣と夫婦の契約致候事實證なり、是から後は神おろし、宛名は松尾藤七郎樣より、何と覺えがござらうが、と云ふに又もや悔りの、胸を靜めて半左衛門、ムヽスリヤ其起請は、ヲヽ娘の櫻とチエ〳〵繰合ひ、何時の間にやらだいそれた、穿鑿ではござらぬか半左殿、シテ此落着は何となさるゝな、ハヽ不屆なる弟め、手打にして御前へ申譯、と刀の柄に手を懸ける、ヤレ待半左衛門、自が云ふ事あり、イヤサ奥樣何程仰せられても、不義の證據遁れぬ〳〵、イヤ藤七郎不義でない、トハ何故々々、起請の宛名松尾藤七と名名迄有るからは、遁れんやうはなけれ共、櫻と云ふ名は世界に幾人も有りさうなもの、尤起請

た〵が詞に、急き立女中仲間、弓も引き方奥方も、矢數の庭へと奥深さ、御法の庭も忽に、修羅の街や矢叫の、音も鬨の大宗寺、篝の烟立登る、屋根には非常をしめし役人、聲も勇み東雲に、東も白むしらま弓、引橫雲の天下、夜は仄々と明にけり、早射納の禮も濟み、其爭も群集の見物、各が樣々立歸れば、設樂傳八轍橫へ突と出、昨朝未明より今曉に至つて、晝夜が間總矢一萬二千本、通り矢僅に三千六百、射手松尾藤七郎檢證設樂傳八郎、とさも惡さげに呼はれば、休息の間も有りやなし、藤七郎立出ぐつと詰懸け、我手の內に覺え有つて、丈夫に五千は通りしと、思ふに違ふ今の詞、エヽ聞へた、コリャ傳八殿、御酒でも參つたの、イヤサ醉狂も事による、晴がましき滿座の中、サヽ有樣に云はれよと云ふをも待たず、アヽコレ〳〵〳〵藤七郎、お手前何時身共に酒饗つた、イツ盛らしやつた、エヽ何か通らぬ矢を通つたにしてくれいか。如何な事〳〵、正直一遍に守る此傳八、依怙贔負の沙汰存じもよらず、全體又お身が望が過ぎるはい、揚弓も引いた事のない身で、堂前とは餘りな太平樂、一文弓の滅多的か、烏威しの弓でも、貴樣よりは構がよい、ムヽスリャ眞實三千六百なうでは通らぬとな、ヲヽ檢證に立つた設樂傳八、三千六百はまだ贔負目が勝つて有はい、ハヽヽ何じや泣くか道理〳〵、ヤモ能きが上にも善れかしと、引立る樣に思ふても、諸人の見る前、ア氣の毒やの〳〵、不斷連歌にばかり心を入れるからの事さ、兎角息勢張つて弓矢より、花の本の付合でもお案じなされ、然

ヽ去とは〳〵悪い呑込、イヤサ其は左樣じやが存中に腹は替られぬ、政五郎より請取ましたる所、帳面の通相違御座りませぬ、ホヽ尤々、シテ又政五郎殿、其許の前日の當番は渡邊東之介、卅五懸相渡すと帳面には御座るが、お受取なされたか、ヱヽ成程受取まして御座る、爾んなら其夜に紛失致したな、サヽサヽ其時は拙者急用有つて、鳥渡他行致した跡で、默らしやれ、お廣間の當番他行致して事が濟むか、サヽ夫は轡の紛失、當番のお身が知らいで誰が知る、サ夫は儕盗んで何處に隱した、殊に其夜は渡邊數太夫仕置の場所にて、と云はれてぎつくり又鱗が、半左殿數太夫は病死致たじや御座らぬか、イヤ其夜病死仕れど、少し詮議の手懸に、ヤ是は差置き大切の轡、科は遁れぬ覺悟せよ、と極付けられて又鱗が、ソレと胸せ政五郎、モウ是迄と切付る、引摑いでもんどり打せ、投かゝる又鱗が、肘を確と、コリヤ何となさる、イヤ餘り不屆なる悴奴、手討に致さうと存じて、アヽイヤ大切の詮議有る政五郎、手討にはなりますまい、ソレ下部其政五郎に繩をかけ、牢屋へ引け、と下知に連れ、悶絶したる政五郎、下部が寄つて三寸繩、漸正氣吐く息も、無念と見遣る又鱗親子、御簾外御前立上り、イザ此通り殿樣へ通達せん、皆々おじや、と立給へど、道不便と女氣の、見返る瞳は兄弟、つれなき松尾の時雨の袖、此塲のしだら傳八も、打連れてこそ三重入にけれ、跡に呆然藤七郎、無念に五臟も散亂せしが、むつくと起きてきよろ〳〵〳〵、ハヽ參るは〳〵、去らば我も參らうか、と御堂に

こやつは、君傾城の常の事、奥の女に何のまあ其樣事、コリヤ何うでも藤七郎、遊所通の馴染の者が、今日の群集に紛來て、人知れず手渡たさうとがな思ふたを、落した物で有らうな、サア爾うで有らう、自が手廻の女に、其樣妄な事が有つては、第一殿樣へ自が立ちませぬ、夫共やつぱり不義にして自を不作法と、殿樣に叱らす心か政五郎、サ夫は、サ、何と、上から漲る俄水、工の網もつきぞ流され、返答もなく口籠る、半左衞門何も急き立、有難き御意殺すにも殺されず、命は助け勘當じや、エ、連歌にのみ心を寄せ、色に迷ひし倅が頬、見るも兄が頬汚し、七生迄の勘當じやと、睨む目の內おと、ひの、眞身も籠る落淚に、藤七郎は身の過、前後不覺に伏沈む、折柄來る若侍帳面抱へ、申上ます今日お廣間の當番、鶴見三左衞門より、御家老中へのお手紙、と差出せば又鱗が、何々お廣間の用心轡、拙者先月當番の砌は、三十五懸御座候處、今日相改め申處一懸紛失仕候、仍て引渡の帳面則お目に懸け候、然るべく御詮議下さるべく候、ム、松尾殿御覽なされ、ハ、成程承知致して御座る、ドレ帳面政五郎殿、傳八郎殿、ずつと出さしやい〳〵、先月廿七日迄は三十五懸、則政五郎の當番、翌廿七日は設樂傳八郎其日の所篤とお聞きなされ、一御廣間の明珍轡卅四懸、右御引渡し相改め請取候、何と御兩人如何で御座る、と云ふに傳八進出、成程先月廿八日は拙者が當番、則前日當番の政五郎殿より、卅四懸引渡されまして御座ります、アヽ是々傳八殿、さりとは呑込の悪い、其時にはコレアエ

つて居ても佛になるか、サヽ其處じやはいの、一切衆生の迷と云つぱ、煩惱の山高く、妄執の雲霞ふ故、ヲツト合點、眞如の月立隱れ、迷ふ心の暗となる、其迷を晴さんと思はゝ、南無阿彌陀佛と唱へよと云ふ事か、エヽまそつと實の有る事を仰せられい、サ何と知らぬ〱、コレ皆の衆、お師匠樣が說法に仰せらるゝ、極重惡人とは彼の樣な者で有ろ、坊主をちやつちやらむちやらに爲るはい、モちやつちやらむちやらに爲やつても、むちやつちやつちやらに爲やつても、博識多才の心の內、露程も浮氣に乘せられ、迷ふ心が少もない、現世未來を取外し、宙宇に迷ふ惡性者、アレ〱彼の姿を見や〱、ヲヽ此姿見たか、ヲヽ見たは、夫世の中の樂は、月雪花とは申せ共、人の心を慰めて、たんのうさすが第一なり、先たんのうと申するは、都三條石垣の主夜神樣を申すなり、其はだんのう、だんのうと申するは、寺の旦那を申すなり、其はだんは、だんはと申すは、物見遊山に酒入れて腰に付けるを申すなり、其はたんぽ、たんぽや〱甘いたんぽ〱、夢の浮世にナ戲れ遊べ、ソレ〱〱渡した、請取たりや此坊主、坊主〱小坊主豆の粉に糠坊主、浮に浮かるゝ瓢簞の、ヨイ〱〱やつとさ、とてちん〱〱、ヤコリヤ〱坊主共、いで〱此次手に色事さゝやう語つて聞かせん、朝起とうして鏡に向ひ、齒磨揚枝は柳の眉つき、女に逢ふても應待つん〱、三味線尤も囓るべし、伽羅をきく逆鼻に懸けるな、鞠も少は心懸け、わりやぽん〱皷も些と打習へ、連歌は思の枕にふしもの、五十

上り本尊を、打眺め、ヤレ堅は〳〵、一心不亂衆生濟度と、眞顏になり笑もせず、此堅さでは嘸や〳〵、にはかの趣向も下手で有ろ、死なざ止むまい南無阿彌陀、〳〵南無阿彌陀、常念佛の同宿共、酒の醉かと立出て、コレ〳〵滅相な、爰は遊里ではないはい、寺じやぞや、勿體ない念佛を園八節で、エヽ穢らはしい早う疾と出やれ〳〵、イヤ〳〵でん〳〵、出虫でざかま打わろ、われても末に逢んとぞ、思ふ心の知らせたや、知らぬか〳〵、しらん笑容の花の顏、若木の櫻、月と都をふらねばなんよサ、やつさ〳〵かゝろの音に、沖の鷗や磯千鳥、戲れ遊ぶ其景色、詠に倦かぬ色事を、些と習らせたい、坊主練れ給へ〳〵、景清も花見の座には七兵衞、練れ給へ〳〵、ハテ埒もない和郎じやはいの、去ながら、と其心を披し、一念發起菩提心、得道して念佛の、道にも趣き給ふべし、サア皆の衆、と聲を揃へなまいだ〳〵、アヽ御無用〳〵、色と酒とを打捨て、外に樂む事が有らうか、樂まうと思へばこそ、壽命百年祈もすれ、兎角浮世は弓の張より君が目のはり、鷲の羽よりも君か白齒に、思ひ染羽の指も切らうの心意氣、眞に二人が其中差は、とつと手に手を握皮、他人逸れ矢のそれ〳〵、其處に面影手束弓、袖を引やら心引やら、色と酒とがあらずんば、佛も何を樂むやらん、中にも老分圓西坊ずつと出、儕もしつこい思入、彌なら色事も叱るまいが、我等が勸める念佛は申すか〳〵、ヤヽコリヤ面白い、貴樣は少し咄せるはいの、念佛さへ申せば、兄の勘當意見も用ひず、晝夜色事に掛

て萎々奥へ行く、半左衛門立上り、ヤ下部其大切の科人、政五郎拷問をする早く引け、と呼ばゝる聲に牢の戸開き引出す、不便と更に云ひ人なさ我武者者、惡事はしたゝかに政五郎、我身にかゝる水責の、重なる責に弛みもせず、遠慮も白洲に大胡座、半左衛門温和に、コリャ政五郎未だ白狀せぬな、改め云ふに及ばね共、お廣間の轡一懸紛失、何者の所爲共知らね共、差當る該夜の當番、コリャ其方が不念と云ふもの、何ぞ言譯の筋か又は詮議の手懸も有らば早く云つて了へさ、但入用有つて盜んだか、と理非明白の問狀にも、びく共せずじろりと見て、ヱゝ貴樣は〳〵、知らぬと云ふより外云譯はないはいの、尤該夜は些と用が有つて外へ出た事も有る、若や其跡で何奴ぞ盜だか、ヱゝごくにも立たぬ物盜り居つて、おれを斯樣目に逢はせ居る、と空嘯いたる詮議の紛れ、一條繩とは見えざりけり、半左衛門庭に下り立ち、繩めに刀やつと突立、一拗拗られ、アイタゝゝ、イヤモウ何の樣に責められても知らぬ事は知らぬが、何と斯うせうかい、高が轡盜んだ迚、首の飛ぶ程の事も有まい、壹そ盜だに成つてやらうが、繩解いて赦してくれぬかい、ムゝ面白い、サ其轡何用有つて盜んだ、アイタゝゝ、ヱゝ痛いはいの〳〵、コレ惡い合點、眞實盜みはせぬけれど、早う埓が付けて貰ひたさに、ア盜んだと白狀せうかと云ふ事いの、イヤ其ばかりでない、まだ白狀せい、ヤ何と、サ其夜渡邊數太夫樫原の土手にて人知らず殺したで有らうがな、と云はれてぎつくり、復たきよろり、ヤア云はぬとて

年の榮花も一旬百韻の歡樂も、實粟飯かしく樣なるゝ、又の取遣り、面白何共悲なり、と口から出次第坊主共、倶に浮かれて連れ物狂ひ、何處ともなく狂ひ行く、圍心で 三重 是非もなき

第五

月と日と、何時か泪の暮果て、今日忌明ぞ、渡邊の數太夫が後家お菅、夫と子故に身は殘り、切つて捨てたる黑髮は、現世未來の二ッ髻、東之介も小源太も、喪服改め上屋敷、徐々と入來れば、立出つる半左衛門、コレハ〳〵何れもお揃ひなされし、今日御出勤かな重疊〳〵、と挨拶すればお菅は手を支き、先達夫數太夫不慮に相果て、其に迷途の道伴と思ひきゝ、直二人の子供、輪廻に引かれうか〳〵、と佛事涙と日も過ぎて、今日脫ぎ替へし麻衣、唯此上は松尾殿のお情にて敵の詮議、アコレ〳〵其後は云はぬ事、ナ何事も半左衛門胸に有る、東殿に源太、必ず〳〵敵抔と云ふ事、確な證據出つる迄は、口外する事ではないぞ、小源太抔は幼少の事、爰を能う合點せよ、數太夫途中に殺されしなんどゝ、世上に沙汰有つては第一お家の瑕、何處から何う廻つて却てお咎の筋に成らうも知れぬ、然すれば却々敵討の段ではないぞ、ナ斯う云ふ内も人や聞く、敵も大方推量に違ふまい、半左衛門追付け討たすぞ、サ、泣くまい〳〵、コレハしたりお袋、サ、奥へ行て出勤のお禮申されよ、といひと賴母しき詞の端、渡邊兄弟親子も連れ

責めて、復も牢屋の地獄門、錠前し折柄奥より小源太が、只今御前樣の御意には、此度姫君樣御縁組の儀、刀の儀に付彼是と珍事出來、因て江戸表殿樣より御下知有る迄、只何となく御延引の段、志賀の上野へ御使者遣さるべき由、其に付何か御談事有るべき間、皆々御前へお越、と云ふに又鱗平左衞門、設樂も後に附添ふて、奥深くにぞ入にけれ、雪ならば、幾度袖と詠じけん、櫻は心も散々に、泪のふゞき拂ひ兼、志賀の里は藤七樣の古郷、若や其へお越し有りしか、昨日の矢數の其塲より、御勘當のお身の上、お心も亂るゝ筈、誰が御介抱申やら、と思へば在るにもあられぬ思ひ、寧そ爾うじやと駈け出つる、弱腰はうと傳八が、コリヤ〳〵命取り奴樣々、藤七は昨日の塲から、氣違になつて行方が知れぬげな、今奥で志賀へお使者に行けと有を、病氣と云ひ立、東之介ににじり附けたも、そもじに心が引かれる故、藤七が樣な不器用者なり、コレ我等馬は素より、乘る事萬事器用肌、弓鞠庖丁碁双六、按摩けんびき針の療治、アヽコレ〳〵、お前は病氣でお使者を斷りじやないかいな、イヤサ按摩けんびき針の療治で、本復したそもじも次手に、我等が針立てやらう、と追廻され庭におりしも、松尾が若黨寶井晋介、見るより設樂を二三間、投却けられて夢見た心地、わりや誰じや、イヤ私は松尾藤七郎が家來寶井晋介で御座ります、ムヽ其晋介が、身共をナニ何とするや、イヤ御病氣と承た故、按摩けんびき針の療治して上ましやうと存じて、サイヤモ病氣はよくなつた、がまちつと引張

云はさずにおかうか、と復も拗るに。アイタヽヽ、痛いはいの〳〵、ヤモ是が眞の附會じや、と素知らぬ振の減らず口、折に入來る親父又鱗、後に續いて設樂傳八、ホヽコリヤ半左衛門殿、御自身の拷問御苦勞〳〵。まだ悴奴は白狀致さぬな。ヱヽ強情い奴、存じた事なら有樣にナ、潔白とナツ傳八殿、成程〳〵。ハテ知らぬ事は知らぬと、つい云へば濟む事で御座るてや、アレ今御兩人の云はるゝ通、今の譯有樣に潔白と云へさ、ハテ轡はおれが盜んだにして置れいの、イヤ左樣斗では、と刀の鐺又鱗見兼て。ヤコレ半左殿、轡を盜んだと申からは、詮議は相濟だじや御座らぬか、畢竟は武器の事、餘り結構なと存じての出來心でがな、スリヤ先武術の心掛能いと云ふ者。云はゞ若輩者の事、親の身で贔負も致す樣にお聞なされては迷惑じやが、ソレ〳〵イヤモ連歌亂舞に心を入れて、肝心要の矢數抔射損するよりは勝な事、と何がな追從傍諂る、耳にも懸けず半左衛門。イヤ轡より外に詮議の條有つて、ムヽそりや又何で、渡邊數太夫死去の事にて、ヤヽナヽ何とお云やる、數太夫が死去悴が存じた事かな、イヤサまあ〳〵左樣物、此詮議奥方より拙者に仰付られたれば、餘人の批判御無用〳〵、追々詮議の筋も分れば、仕上を追付御覽に入れん、と胸に答ふる一言に、此方の二人は顏見合、殘る詮議の一條は、百物語の終ひ口、底氣味惡くしらけ居る、居所の歩みや、未の半刻、ホヽ最早八ツ半、詮議は明日、科人引け、と下知に連れ、引立らるゝ縛繩、繫がる親子が顏と顏、心の鬼が身を

長光の刀、親死去の砌より紛失して有まいかな、エヽ、イヤサ其處じやて、其長光の盜賊が知れたは、エヽそりや誰で御座りますへ、ヲヽ聞たいは尤々、長光の刀を盜み、數太夫を殺したは、コリヤ悴政五郎じやはやい、エヽ、サヽ其處じやて、此度轡の詮議につれ、拷門の苦痛に堪兼、數太夫を殺し長光の刀盜だと、苦しさに逸云ふまいものでもないは、サヽ其處じやて、數代家老職の渡邊、途中で盜賊に逢ひ、刀さへも拔合はさず、闇打に討れたと有つては、數太夫が武士の立たぬのみか、先祖代々忠功の家に瑕を付けると云ふ物、サヽ其處じやて、親の敵と汝等兄弟、政五郎を討つた所が、兄弟は手柄者と譽る者も有らうが、親數太夫は臆病者よ腰拔よと指し笑ふがわりや嬉しいか、サヽ其處じやて、其處で彼の牢を開け、政五郎を遁してしまへば、親數太夫は病死の分、敵討つ詮議も要らず、代々の地行も其儘、身共も一子政五郎が命の代り、長光の刀の在所を尋ね、返して遣らうはさ、スリヤ十方八方善いと云ふもの、何と小源太合點が行たか、と詞を盡す謀計の程、恐しくも又いぢらしし、逆子心辨なく、辨說に云廻され稍領きしが、イエ彼の牢が開けたうても、鍵は半左衞門殿の懷中に在れは、ムヽ爾なら大方得心したな、ホヽ過分〳〵、そりや牢屋の鍵、コヽ、こりや又何うして、ヤコリヤ何も云ふな、日暮早々人顔見えぬ時刻を見合し、ハア心得ました、と鍵携へて驅け行く小源太又鱗が、しすましたりと獨笑み、おのが謀計の奧深さ、座敷〳〵は燭臺に、闇を照らせど丸井が、謀計

る所が有る、歸つて養生する氣じや、とする氣を病氣に紛して、手持不沙汰に逝歸る、ヲ、能い所へ晋介殿、イヤ能い處じや御座りませぬ、昨日大宗寺の譯承つて馳け着けた所が、若旦那樣はかいくれ知れず、此上は親旦那にお目に懸り、お叱りの譯も聞いた上、仕樣ぞあらんと參つた晋介、何と親旦那のうけは如何で御座ります、イエ〳〵〳〵大體の事ではない、到底勘當赦さぬ氣質、其故私もいつその事、是斯う〳〵と私語き頷き、爾なら後程、晋介殿、合點で御座ります、と奥と勝手へ別れ入る、旅立に、日の善惡も主命に、役目を渡邊東之介、弟引連れ立出て、何源太、今御前にて聞通り、傳八が病氣に付、此度の御使者、某に仰せ付られ直樣發足、が心に罹る親の敵、萬事心を着けて見よ、則ち此は親人の、御死骸の傍に有し小柄、此を以て他國するも如何、殊に敵も同家中と、半左衞門殿の詞もあれば、其方へ預け置く、必ず人目にかゝらぬ樣、身は出立と立上れば、然らば早うお戻り、と暫時の別も押俯向く、見すぼらしげな立姿、見返り見送る兄弟の、此ぞ此の世の暇なる、夫共白洲を出て行く、早入相のかねてより、工も深き荒井又鱗、襖押開け搖ぎ出、小源太兄に別れ、嘸便なく思ふな、ガ暫時の事じや氣遣ひすな、ハ、兄樣も御前の御用、大切な御使者の役目、私が身に取つても有難う存じます、ヲ、出來す〳〵、ヤ何小源太、身が密に云聞かす事がある、サ近う〳〵、と膝行り寄、此度轡の紛失に付、悴政五郎牢舍致いて居るは、サ我も知つて居る通、まつた其方の家の小豆

ゝ云やらにや濟まぬ、お預りの半左衞門樣のお爲にならぬ、サゝ云てたも〳〵、コレハしたり些とものを云やいの、と搖する拍子に諸肌脫げ、見れば敢なや懷中にて、以前の小柄突立、早死切し其風情、コレハと驚く母よりも、愕り仰天半左衞門、エゝしなしたり南無三寶、詮議の種を失ふたか、エゝ口惜や無念やと、途方に暮れて居たりしが、すつくと立つて聲高く、倅政五郎何國迄かは逃延びん、股立凜々しく駈け出す、轡の盜賊暫く待、ヤア何と、お廣間の用心轡わりや何故盜んだ、ヤア血迷ふたか又鱗、其盜賊こそお身が倅政五郎サ、イヽヤ左樣でない、コナ横道者奴が、汝が盜んで置きながら、倅に科を塗り付ける卑怯者、政五郎を止むるに及ばぬ、お身繩に縛つて牢舍しやれ、何が何と、ヤア〳〵設樂傳八其品此へ、と詞の下、ハツトゝ答へて用心轡、松尾が目先へ差出し、何と膽が潰れるか、われが留守へ踏込で、家搜索したれば此轡、隱し在るを見付けたが、何と是でも言譯あるか、サ腕を廻せ、と詰掛け〳〵、目前證據何と返答半左衞門、前後不覺に見えけるが、泪拂ふて又鱗に打向ひ、某少し所存有つて、成程轡盜み申た、斯く顯るゝ上と云ひ、大切の科人は取逃し、證據になる可き小源太は相果る、モ重々の過申さう樣はなけれ共、此上のお情には切腹仰付けられなば、武士の冥加に叶ひし仕合、コレ傳八殿、何れも賴み奉る、と合す兩手に血の泪、理責めて哀なり、イヽヤ成らぬ、イヤモとんと成らぬ事さ、重罪の科人まだ詮議の筋も有る、汝が生國志賀の上野へもかけ合ふた

の雲に暗紛れ、心も月の丸額、白洲の砂も宛然に、薄き氷を渡邊小源太、夏を信濃の湖や、すはと云はゞ一大事と、眼を配り忍び足、難なく牢屋の錠前を、開けば出つる政五郎、ものをも言はず頷く計、のつさ〳〵と出て行く、小源太は牢の戸を、舊の如くに閉めんとするを、ヤ曲者見付けた居り合へ、と又鱗が聲に連れ、手燭手に〳〵一家中、ばら〳〵と庭に駈け居り、晝かと照らす白洲には、小源太うろ〳〵詮方なく、かつぱと座れば又鱗聲かけ、ヤア儕は渡邊小源太奴、大切の詮議有る科人何故逃した、ヤア〳〵宇左衛門殿、大切の科人小源太奴が取逃したお出なされ、と呼はる聲、追取刀に駈け來る松尾、ヤア小源太、何如牢屋を開きしぞ、サ譯が有らう、サア有樣に云譯せよ、爾は云へ鍵は身共が懷中、堵は合鍵を拵へたな、コリヤ其方計が智惠で有るまい、きつと外に頼人が有らう、サ如何じや、と氣を苛立て、又鱗やつと目をむき出し、ヤア惡い丁稚奴、取別け忰な事なれば贔屓はならぬ、サ有樣に譯を吐かせ、此滿座の中で云へば、先祖の家に瑕が付く抔と思ふて、ナ吐かさぬか、日頃から儕が懇意な政五郎、逃して遣つたと、サ我一人が罪にして了へば、家に瑕も付かず親の耻も顯れず、濟むなぞゝ思ふがならぬ〳〵、サ吐かせサ云ふて見よ、と詞の裏、家中の諸士も聲揃へ、吐かせ〳〵と結かけられ、幼心に徨々と、泣より外の事ぞなき、樣子を聞いて駈け來る母親、コレ〳〵〳〵、小源太如何した事で逃しやつた、是には深い譯が有らう、智惠の付け人も何處ぞに有らうし、サ

の裏さら〳〵、投げる風鈴奥方取上げ、ム、明星や櫻定めぬ山かづら、ホ、出來ました、夜明けぬ內に、と障子ばつたり立切る折柄、駈け來る設樂傳八が、家來引卒れ追取卷き、ヤア大盜人の松尾が家來、其方に忍ぶは慥に櫻、こりやまだ盜かしたらいで、僞は女衒を働くか、サア戀人を渡せばよし、いやと吐かせば設樂が手並、目に物見せんと呼はつたり、ヲ、合點と身搆し、差添渡せば櫻も小褄、ソレト掛聲僕共、一度に掛るを縱橫無盡、逃ぐるを遣らじと三重「追ふて行く、行過して傳八が、サアしてやつた櫻が後、放せやらじと爭合ふ內、取つて返へす晋介を、見るより傳八手に持つた、花を捨てゞ逃失せける、何處迄もと追かけ行くを、留むる櫻に繫れて、進勇まぬ心の駒、今日よりお主に放れ駒、追付廻る逢坂の、關路の駒と勇む足、引連れ舘を三重「出て行く

第六

世渡も忠に寢顏播磨潟、何とこしかまの徒荷持、五百藏が侘住、東之介も何日ぞやより、母諸共に匿ひて、重荷に小附朝夕の、煙の立場もなかりけり、妹のおよつは留守の間も、洗濯物をし現にも、忘れもやらぬ初戀路、東之介に神かけて、のりかい物の艶も能く、かいしようらしうて可愛らし、柊持つて納戸より立出つる東之介、ホおよつ精が出るノウ、今日は節分じやにマア

上首打放す、マア夫迄はお念佛でも題目でも、勝手次第に申てお居やれ、ハレ笑止千万、と已が謀計の唉壺の體、お菅は近く差寄つて、お用ひ有るか無いかは知らぬが、小源太が此死骸、何卒母に下されなば有難ふ存ますと、泪片手に願ふにぞ、ヲヽ勝手に取置け、併渡邊の家も今日限り、エヽ、早く長屋を明渡せ、スリヤ東之介も、ヲヽ科人は同類、歸つて來る其門よりぼつ拂へ、ソレ侍中、半左衞門を引立召され、ハツトかゝれる罪科も、裏をかゝれし明珍作、道具落しに半左衞門、母は死骸を襠に、載せて袂を引綱や、引かれ引かるゝ袖の海、哀れ果敢なき裏表、隔心に寶井晉介、韋駝天走に駈け來る裏門、內の樣子を見越しの松、懸けたる風鈴ばつたりと、落つれば悄り仰く松の茂み、櫻樣か、晉介殿、ヲヽ嬉しや、と飛下るれば、コレ荒增は聞いた〳〵、お前を伴れます用意の物調へに出た留守の內、傳八奴が踏込で、家搜索したと聞く無念さ、シテ其後は斯々と耳語く人も聞く人も、共に吐息を吐くばかり、物見の亭の障子押明け御簾外御前、其に居るは何者じやと、仰せに晉介櫻を圍ひ、イヤ松尾藤七郎が家來、寶井晉介で御座ります、ヲヽ聞及んだ晉介、主の風雅を見習ふ由、幸自が連歌の一句見せる次手、今風に落ちた風鈴の短冊、コレ此短冊に付代へて、と投出し給ふを拾ひ取り、空に透し見て、スリヤ櫻殿の事御存知にて、拙者に附添ひ、アヽ是れ〳〵、成程其句には附惡からうが、何も云はずと其短冊、必ず人が見ては惡い早う是へ、と宣給ふにぞ、兼て嗜む矢立の筆、短冊

か、サア其邊に如才は御座りませぬが、改め申すではなけれ共、何日ぞや志賀の上野へ、御使者にお出なされたお留守の間、政五郎が事に就て御知行も召上られ、併やれ此僕奴も其時お國に居つたらば、小源太樣にやみ〳〵お腹はさせませぬもの、お前も私も道で聞いて仕樣もなし、其からすご〳〵私が在所此播磨路、お袋樣も御一所に、眞に不自由なお暮し、シタガ其不自由ながら御養生、わなたにはめつきりお肥り、何處も彼も御丈夫に、實が入りまして僕奴が嬉しさ、何がお氣に入るまいものでもない、不束な妹奴迄を、ハヽヽイヤ麥飯も折節は可い者で御座りますと、洒落を交ぜての咄聲、洩れ聞えてや母お菅、かゝる歎に身も瘦せて、しほ〳〵と立出、ヲヽ五百藏戾やつたか、未だ政五郎が在家も知れぬとかや、夫の敵も外ならずとは思へ共、頼に思ふ松尾殿は牢舍せられ、敵の詮議は差措いて、小源太が逃した政五郎を、尋ね出さねば渡邊の家も立ず、其さへ出たら夫の敵も知れさうなものなれど、と云ふて在家の手掛も、と後は涙の喞言、五百藏目を擦り、御尤で御座ります、したが今夜は節分、左樣な事はマア西の海へさらり、目出度う豆をお祝なされませ、ヤ其豆で思出した、ヤ申若旦那樣、お屋敷の女中桂樣とやらも、お館を欠落なされて知れぬげに御座ります、コレハてつきりお前の跡を慕ふてとの噂、これも何卒尋ね逢ふたら私が家へと存ます、と差合關はぬ正直に、アヽ是兄樣そりやもう尋んと止にしたが善いはいの、ハテわれが知つた事じやないて、イヤ〳〵五百藏其樣な事は私

洗濯物も休みやいの、夫はさうと此五百藏、今日はおれが旅立、殊に節分じやによつて、例より働も早う了ふて、鰯も買つて戻らうと云ふたが、何處に何うして居る事じや、ドレ一ト走り行て見て來う、と行く袖じつと、申東樣、モ何處へも行かずと止に遊ばせ、お旅立の名殘と云ひ、節分で御座ります、ヲヽ節分なら何處へも行かぬものか、アイ私や此横槌抱いて寢る事は厭が御座ります、ムヽ横槌が厭なら、何なりと間に合ひさうな物を抱いて寢たが善いはいの、アレ又其樣胴欲な、惡體らしい事仰有ると抓るぞへ、アコレ〳〵危いソレ柊で、イエ〳〵衝いてもだんない、と競り合ふ柏子指先ぐつしやり、是はしたり危いと云ふのに其見やいの、何のお前樣の事じやもの、シタガ兄樣の正月ごに、節分早々から血が付いて、アヽ氣がゝりや、と初心の、案じも氣の毒東之介、アヽ氣に懸やんな〳〵、赤う成つたは色直し、其方と追付け祝言する瑞相と思やいの、と云へばおよつは忽體ないお主樣と如何してまあ、ムウ其方は夫婦になるが厭か、何の厭では、爾なら斯うじや、ヲヽ嬉しやと、締合ふて、鳥渡命の洗濯は、横槌よりも節分の、鬼の來ぬ間と知られたり、折柄歸る五百藏が、何心なく潜りをがらり、互に胸り粹な兄、素知らぬ振に内に入り、ハヽ若旦那嘸お待兼、今日は思の外旅人も多うて、妹悅べ大分仕事をして來たはい、偖先御祝儀の鰯三疋、コレ走元へやつて置け、と竹杖ぐるめに差出せば、ホヽ疲勞ておろ、おれも愈發足のつもりじやが、政五郎の在家の手掛りも聞かなんだ

た事がある、數太夫殿の死骸の傍に有つた小柄、小源太が持つて居たを、東之介に渡さうと思ふたか、五百藏其方に預けませうか、ナアよつおじやと四ッの袖、同じ思ひの神垣へ、乾に行こそ喪なり、引違ふて八百屋の男、門口通るを八百藏呼止め、コレ〳〵八百屋殿、鳥渡太儀ながら寄つて下され、ホイ用なら寄らうが、御山さうに何買ふぞい、イヤ今日は節分でもあり、ムヽ外に心祝もあれば、ヨウ、鱠もせにやならず、ヨウ、大根一本置ていてくれ、エヽ夫見たかな、左樣な事で有らうと思ふた、とぶつ〳〵内に荷を見廻し、アノなめでもない、椎茸でもない樣な物は何じやいの、此かへサ、是は紅葉の木に出來た茸じやげな、今朝市へ持つては來たれど、如何して食ふ物じややら、毒が有るやら知れぬ故買人もなし、其處で上の町の醫者殿の處へ往つて行て尋たら、紅葉の木に出來た茸毒ではないが、ママ聞かつしやれ、異つた事の、此を食ふと可笑うなつて笑ふ程に〳〵、モ一向とんと留度がないげな、則ア、巻懐食鏡とやら云ふ書物に、其通書いて有とて、出して見せさしやつたけれど一ッも讀めぬ、四角な字ばかりて、繪のない本で御座つたが、何と導そ此を置いてこかい、アヽ滅相な其樣物何う食はるゝ、物でハテ高が笑ふ斗、泣より增じや置いてこ、ムヽシテ價は何程、イヤモ何程見せ廻つたとて、喰人のない物無價やるはいの、ムヽ無價か、何とまそつと負ぬかい、何云ふぞい、無價の上如何負かる物で、一割はお定り、何ぞ負に添へぬかと云ふ事、イヤ

事、差當る正五郎が行方、草を分けても尋ね捜し、父の敵も詮議して、尊靈に手向けたし、一時遲いは一時の不孝、日ばしたなれど豫ての用意、母人お暇給はらん、と願ふに母も、ヲヽ夫々、爾無うては叶はぬ筈、後の明日のと云ふも未練、自も武士の娘名殘は惜まぬ早う行や、したが祝ふて盃を、ハツト心得五百藏が、指圖に是非なく缺德利、目には泪のおよつが酌、今宵一夜を留たさも、云ふに鰯の燒肴、お旅立なら熬豆や、有るに任せて取肴、さいつさゝれつ、サア此盃母が納めましよ、軈て目出度う歸を待、五百藏飲んで納めてたも、ハイ去らは目出度う一盃頂載、へヽ此鰯門口へトやらかさうと思ふたが、まゝよ一口に食つてくりよ、したが頭は鹹さうな、信心からでも鹹うては、と捩切つて、ヤコリヤ御吉相、敵討の門出に首を取るとは、マア／＼目出度い／＼、と祝ふて納むる盃に、母もいそ／＼東之介、早出立と立上れば、コレ其方一人では心元ない、大和の郡山には、自が弟蘭又右衞門と云ふて、幼少で別れて逢はね共、力量も有るとの事聞及ぶ、何かの事も相談して、必ず／＼早まるまい、と見送る母よりおよつが名殘、盡させぬ事と五百藏が、戸口をさすが武士の、母人頼むを云捨に、見返りもせず出て行く／＼、後打詠め母お菅、暫時泪に暮れけるが、アヽ泣くまい／＼、ほつしりと爲て居りや、小源太が事や色々の事思ひ出す、爭そ氏神樣へ參ゐつて來ましよ、ハイ其も宜う御座りましよ、コリヤおよつよ、お供して參つて來い、そんならよつを借りませう、ヤ眞にとんと忘れ

た筋じやに依つて、催促すると云ふ筋じやは、其方も無いと云ふ筋ならば、斷り云やる筋も聞えては有る筋しやが、此身代で十兩と云ふ金の筋は、逆樣にして振るうても出ぬ筋の上、是迄の利息さへ濟まぬ筋では、貸したおれが男が立たぬと云ふ筋になつたは、其處であの妹のおよつは、艶しうて而も甘さうな筋じやによつて、金子の代りにおれがてかけやうの筋にしたいと云ふ筋じやが、サア聞筋か聞かぬ筋か、サヽヽ今筋を立ちやいの、と立つる腹より男より、額に立たる筋右衛門、息筋張つてしやべりけり、成程〲筋道を立てのお腹立申上やうも御座りませぬ、コリヤおよつ、夫れ寒いに御酒一ツあげんかい、ヱアノ最前八百屋が置いて行つた物が有る程に、其をお吸物にして早う〲、アコレ馳走の筋とんと無用、サア金子は如何するぞい、サア其儀で御座ります、あの妹をあげましては、獨住の私留守が如何もなりませぬ、じやと申て徒荷物風情、急には如何も、爾なら何の筋に費やつた、イヤ主人のと云はんとせしが、ヱ物で御座ります、偶然友達に誘はれまして、室の傾城屋へふと參じまして、其から此方、アヽコレ〲〲其筋なら、モヽ一寸も待つ事ならぬ、何じや室の傾城居へ、アノ和御寮が、措きあがれ、コリヤ一盃おれを欺つたな、と腹立半へおよつがちろり、茶碗を添へて差出す、措けやい、したが最前からしやべり續けて、殊におよの坊が逢つて來てくれた物、呑で遣ろかと茶碗に息なし、コリヤ此酒も恩に被る筋じやないぞよ、およの志受ける筋じや、とはんてながら

〳〵正味の無價じや、爾なら買つてやりもせい、アヽ何でも笑ふとは目出度い〳〵、笑ふ門には福來る、節分早々から機嫌がよい、來年は福が來るで有ろ、アヽコレ〳〵めつたに來年の事云やんな、紅葉の茸は食ひでも、節分の鬼が門口から笑ふはいの、と荷を擔け小當にあて、立歸る、小褄搔取りすた〳〵と、妹のおよつは立歸り、コレ兄樣、神樣の社内で大勢の侍衆が、乘物を續がせて、來てお袋樣へ御臺樣が仰有るには、追放は表向、老年の事なり女の身、外に尋ねる事も有とて、お乘物で直にお上り、シテ侍が云ふには、此文を東樣へ渡せと云ふに依つて、お留守の譯を云ふたれば、爾なら兄の五百藏とやらに見せと、云ふて言傳つて歸つた、と一通渡せば打詠め〳〵、渡邊東之介殿へ荒尾帶刀、ムヽコリヤ江戸の御家老、其をおれにとは合點が行かぬ、ガ何にせよ、と封切らんとする所へ、來たぞ〳〵村一番の粹が來たぞ、何でも鳥渡荒增の、筋を聞くとぐつと呑込む荒增の筋右衞門、來たぞ〳〵、と喚き散らして打通れば、エコレハ筋右衞門能うこそ〳〵、ヲツト〳〵其臺詞一番貰ひましよ、彼の金子は如何するのじや、サア夫は、モ此際にはきつと、ガマア今日は節分の事、アヽ是よ節分は知つた事、ガじたい此家に何ら云ふ筋で金子が要るぞ、サ其筋が聞きたいはい、又去月其方が難儀だらけな筋を云ふたに依つて、貸して遣つたと云ふ筋じやは、ハテ筋道の立て惡い筋でさへなけりや、一月二月延ばして遣る筋も有るはいの、一筋に正直なおれなりやこそ、貸した筋も限りの筋になつ

猶ならぬ、疾と行にや、と衝出せば、足も蹌踉何やら物も云ひたげに、すれど笑に力抜け、蹌踉蹣跚立寄るを、表へ突出し、鬼は外福は内へと蒸豆や、兄は勝手へ、筋右衛門、夢か現か外にころりと高鼾、泣寝入じやない其儘に、笑ひ寝入は珍らしゝ、納戸を出つる妹のおよつ、行燈片手に徐々と、人目を忍ぶ物案じ、東之介が行末を、思ひ遣りたる淋しさも、誰に語らん人とては、泣て詠むる其方の空、一間を出つる兄五百藏、妹わりや何して居る、兄様お前はいかう顔付が悪いが、何処ぞ悪いかへ、イヤ何処も悪ふはないが、筋右衛門は行んだか門を見てくれ、アイと表へ何氣なく、出つるを見るより肌押脱ぎ、脇差すらつと抜放し、腹にぐつと突き立つる、妹は悩り飛で入り、コレコレ兄様、何で腹を切らしやんす、氣が違ふたか如何せうぞ、醫者殿呼びに走らうか、薬はないか、と處女氣に、狼狽するぞいぢらしき、ア騒くな妹、譯は最前其方が渡した此一通、讀んで見よ、と投出せば、行燈引寄せエヽ、押啓き、エヽ何じややら私が目にはねつから讀めぬ、いの字と手紙と書いて有る、ヲヽ其りや手紙以てじや、手紙以て申入候そして、エヽ氣の急く釋すんと、エヽそれ讀んで聞かさう、と苦しむ片手に引手繰り、手紙以て申入候、其許老母を傍に致候譯は、某を敵と思はれ候由、一向覺え御座なく候間、其望を止め、改めて請取に御出なさるべく候、其節御渡申べく候、渡邊東之介殿へ瓦井政五郎、エヽ、夫なら先に氏神様で、御前様のお使といふたは、ヲヽ政五郎が味方の者共、お袋様を奪ふ

も色の道、不調法なお吸物、何卒あがつて下さんせ、と据ゑるは以前の紅葉茸一口吸ふて、ヤコリヤ堪らぬ、上々極々茶碗酒、呑では吸ひ食ては呑む、大事ないならお熱うお替なされませ、爾なら輕うお汁ばかり、ヤイ八百藏金子は如何じや、もちろん〳〵目、サアお吸物と茸のひらじひ、其口へも一ツと、盛かけ〳〵茸の効能、酒も廻つて筋右衞門、へヽヽ〳〵コリヤ八百藏如何するぞい、ムヽ金子は濟まさぬか、ハヽヽヘヽヽヽ、イヤモ御機嫌宜う御酒飲つて下されまして、措い〳〵、其機嫌次手に金子の事も、マア三ケ月お待なされて、ヤイ〳〵〳〵何吐かすぞい、機嫌はずんと善くないぞ、へヽヽハヽヽヽ、ヤモ其樣にお笑の出と云ふのはノウ妹、さいなあ、常から笑顏の好いお方、とのぼしかけられ、ヤ可笑うないはい、へヽヽへヽヽヽ、サア妹よこすか、二ツに一ツの返事をせいやい、モヽモウ腹が立つて〳〵如何もならぬが、ハテめんやうな、來る節季も〳〵、同じ事聞きに來ぬぞ、佛の顏も三度ヤけたいじやぞ、へヽヽへヽヽ、ヤ忌々しいぞ、へヽヽへヽヽハテめんやうな、寧そ腹が縒れる、と抑へる側腹、兄も可笑しさ妹は、貰ひ笑ひにころりと倒け、腹を抱へて迯げて入る、ヤイ〳〵〳〵笑ふない〳〵、へヽヽへヽヽヽ、モヽ泪が零れる程腹は立つが、ハテめんやうな、如何した事やら可笑うなつて何うもならぬ、如何するぞい、と睨む目の玉皺面も、内から崩す吹出し笑、ムヽヽムヽヽヽ、アヽコリヤ喃寧そ何うもならぬ、と餘念なき弱みを見込て、金子も今と云ふてはない、妹やる事

泪も我家の雨やさめ、斯くては果てじと氣を取直し、ヤア泣て居て事が濟むか、敵遠のしせぬ中に、一時も早く旦那に追付、始終の樣子を申上げよ、サ早く〱、アイ、是がまあ見捨て何と、ヤア狼狽者、人の見ぬ内ヤレ行け〱、遲なはれば不忠になるが、と呵られて、アイ〱〱と、小柄を嶋田の雨ざし笄、小褄を帶の二重三重、引締めながら門の口、ヤア筋右エ門樣か、コリヤ何も言ふな聞いた〱、荒増の筋右衛門にはいはぬ、おりやあんまり哀れな咄聞いて、笑ふ事は何處へやら、悲しさに醉も醒たはい、何も斯も合點じや、後の事は氣遣ひせず、けがせぬやうに早く行け、コリヤ五百藏氣を確と持、我が忠義と不幸を感じて、貸した金の事は偖措き、跡式何かも此筋右衛門が呑込だ、心置なう成佛せい、と正直一偏賴母しき、詞に莞爾と笑顔の禮、南無阿彌陀佛の信心から、鰯の頭も光明遍照、心の鬼の角も折れ、目も泣潰す佟や、此世を出づる寶船、とほの眠りや、浮世の夢の皆目ざめ、浪の泪の袖袂、さらりと拂ふて鳥が鳴く〱、東之介が其跡を、泣く〱慕ふて三重出て行く

第七

ござれ〱〱、引連れ立つてござれの、寛濶男の八文字、振出せ〱そろ〱と、彼方も此方も通りもの、わい〱のわいとさ、亭主は居ぬか亭主〱、ハイ〱〱是は〱お揃ひ

取り、人質にする謀じやはやい、エヽ今其狀を見ると追驅けて、と心は矢竹に思へどな、コリヤ妹、今迄其方にも隱して居たが、二月許以前より病付た虐、御主人を育む身、我にも苦を懸けまいと、隱して毎日〳〵、ぶがんな體を揉む故に、此頃は一向に食も咽喉へ通らねば、どうで死ぬる此體で、一味大勢有る中へ、生中一人手向ひせば、叶はぬのみかお袋樣に、過有つては罪に罪を重ぬる五百藏、敵討のお供もせず、剩預りの、大事〳〵の御隱居樣、暗々と奪取られ、一も取らず二も取らず、三世のお主のお目に懸り、言譯何と五百藏が、今日に縮まる絕體絕命、此上賴むは我ばかり、最前お袋樣より預つた、此獅子の小柄、何卒旦那に廻り會ひ、お渡申て右の次第、敵も此邊に居るに極る、叔父御又右衞門樣に御相談なされ、早く御詮議遊ばしませ、言譯なさに僕奴は、腹割切いてくたばりましたと、せめては少しお呵の、輕いやうに執成を賴む〳〵、と妹に手を合したるいぢらしさ、およつは正體泣倒れ、今のお前のお詞は、無理とは更々思はねど、大事の〳〵母御樣、敵の方へ奪はれたは、皆私が身の過失、其上お前が死なしやんして、誰を便に母御樣を、取戾さうと思ふてぞ、父樣にも母樣にも、思ふて暮らす兄樣に、別れて誰を賴みにせう、思へば先刻にお前の布子、血の付いたのも此樣な、悲しい事の有う兆、物が知らすと知りもせず、徒事についまぎれ、およそになつた不孝者、堪忍してと計りにて、わつと泣音も餘所へや泄れん、と袂を口に、押込み〳〵、泣音おとせぬ兄弟の、

樣只今是へお入、と知らせに出迎ふ中戶口、先生と持囃されて鼻高く、人の頭に置頭巾、誰もお髭の塵を取る、琥珀の袴大小も、流石櫻江林左衞門、後に付添ふ虛無僧姿は瓦井政五郎、深編笠の日蔭の身、門弟數多附從へ、高品屋にぞ入來る、お出を待ちや憧れしと、門弟亭主が案內に、虛無僧諸共上座に直り、コレハ〳〵何れも、今日は彼此御心入の儀共千萬〳〵、又此なる修業者は、兼てお咄申した遁れぬ一族さ、いかい今日のお催、氣晴にと召伴れました、と云ふに修業者門人に打向ひ、今日櫻江殿を御招待の儀承つて、羨しく推參の失禮、虛無僧の法と申し、殊に人中へは遠慮の身、天蓋此儘御免〳〵、と挨拶すれば林左衞門、何門弟中彼お噂の又右衞門は、此へ參りますかな、成程拙者此へ參るや否、直樣尋ねましたる處、人の噂に違なく、桂女と申す太夫に現を脫かし、每夜〳〵通ひまするげにござります、ムヽ今參る道で承れば、渡道橋邊に眼醫者を致いて居るとの事、如何樣劍術よりは眼藥の方が增でござる、アヽ未熟な奴〳〵、彼でも一家中に指南をして居たじやまで、ハヽ如何樣早先頃御前での先生の御手際、何が大兵の又右衞門を一突になされた所、一國是沙汰でござりました、其故師匠の門は此方からおけて仕舞、改て櫻江先生へ入門、彌此上に御引廻し、と手を支ゆれば、アヽ善い御了簡、凡日本國中に恐しと存する者もござらぬ、拙者程の者が今一二人でござらうならば、神佛も無益の沙汰、流行風痲疹なんども怖恐れて根を斷つ道理でござれ共、天地の間はアヽ能く入合せた

なされて御來臨、サア〱〱奧へ〱〱〱、イヤサ豫て申付る通り、今宵は我々は先生を饗應、女郎藝子共は皆々來て居るか、いへまう〱最前から上座敷へ、太夫樣方は山盛になつてござります、藝子樣はおいよ樣に、お此樣に、おちせ樣に、琴野樣に、小菊樣に、おくみ樣に、おとも樣に、おてる樣に、お絹樣に、お樂樣に、ヤイ〱〱夫聞くに及ばぬ、料理萬事氣を付け召され、かみや梅干の取肴出すまいぞ、又お惡口、マア〱〱奧へ、夫仲居共お銚子お盃、アイヤ〱最早先生のお出に間も有まい、身共等は爰で待合さう、イヤ申お前樣方は先生々々とばかり仰有ますが、マ其お名は何と申まして、何國のお方でござりますへ、ホヽ我等が先生と云ふは、和州郡山の家中、櫻江林左衛門と云ふて鎗の大名人、一國に誰並ぶ者もない、同家中に蘭又右衛門と云ふ劔術者、先頃互に兵法の事を云募り、御前に於て仕合ふた所が、又右衛門は小太刀を打落され、何の苦もなく打負けた、イヤモ眞劔でも有らうならば、蘭は芋串鎗玉に上げらるゝのさ、身共等も以前は又右衛門の門弟で有つたが、其から殘らず櫻江に入門、其を耻辱と思ふたやら、お暇を頂戴して又右衛門は浪人、此大坂に居ると聞いたが、何と亭主嚴しいものか、是は如何な事、成程私共も其噂は承つて居りまする、其又右衛門と申す御浪人も、先日から毎夜〱爰へお通ひなされ、桂女樣と申す太夫樣にきついきつしり、今宵もお約束でござりますれば、追付お出でござりませう、と噂半へ僕がすた〱、先生

給へ、ヤ夫は左様と、お斷を申さねばなりませぬ、今晩大座敷は大和郡山の御家中、櫻江林左衞門様と申すお歴々、大座敷故お前様はこつそり小座敷、ム、何櫻江が來て居るとや、見付けられては互の邪魔、太夫サアおじや、マアお先へコレお杉とのや、付まして行や、亭主案内、カウお出なされませ、契りのそをだに後に色になれ行戀衣、跡には獨桂女が、厭苦さこしかた行末を、案じ餘りて忍び音に、稍差俯向き居たりしが、アヽ儘よ案じたとて詮ない事、お行衞知れぬ東様、緣さへ有れば逢はれぬと、云ふ事も有まい、と紛す便有合ふ琴の糸調、桂女太夫主とやら、躾ながらお琴に一曲合せませう、と立出る以前の虚無僧、コレハまあ誰様か知らぬが、不調法な琴の調、お竹には合ひますまい、イヤサ其處を合せて貰ひたいな、合せて貰ひたいと仰有るは、逢ふて貰ひたいと仰有るのかへ、マア其樣物、互の心を斗爲巾の、愛憐〱と引締めて、一から十迄調べて見たい、ドレお顔を、イヤ天蓋は暫く御免、ハテ御隠しなさるを無理にとは申ますまい、顔も心も知らぬお方に、逢はれぬと云ふのか、傾城は一夜流れ、情を賣るがみすぎじやないか、厭でござんす、イヤサ此返事聞かぬ内は、琴の調止めて貰ふ、琴は漲る瀑布の形、穢しい事聞いた耳を、洗ひ清める心の糸筋、ホヽ許由が古事面白い、巣父は穢れた瀑布の流、牛に引いて歸る共、すやを引いては歸るまい、併費した口を、瀟洒と竹で清めて出直さうか、アノお前がと身を背け、調ぶる琴の調子よく、思はぬ人に塞止られて、今は野

物、と自慢高慢鼻高品屋、亭主がによつと申上ます、爰は餘り端近、奥座敷に皆お待兼、如何樣人目を避くる人も有り、修業者門弟中何れも奥へ、先はお入わられませう、補の下樋の塞き兼て、人目堤もアヽ儘よ、大象も根腐髪に繋かれて、引かれ曲輪の色酒に、氣も蘭の又右衛門、何時しか爰に姑の、桂も今は桂女と、里に名有ての太夫職、高品屋が中戸口、立休らへば、コレ太夫、蘭又右衛門共云はれて、郡山では劍術の師匠もした者が、今は眼醫者の素漢貧、目藥貝程な家は打捨ての廓通ひ、浪人は喰はねど、高品屋の酒呑までには居られぬ〳〵、アヽ誰やらが發句に、人は武士何故傾城に嫌がられ、とは金言、是程心を盡すのに、何故打解けてたもらぬぞいの、コレハまた又さんの詞共覺えませぬ、花は吉野人は武士とやら、花はみよし野の花を嫌ふ人がござんすかへ、ハテ心に花さへ有るならば、侍でも町人でも譬へ非人乞食でも、惚いで何とせうぞいな、身には錦を裝飾つても、心に花香のないお方は、煎じ茶糟の飲餘り、軀が有らうが有まいが、ほんの浮氣の水の出ばな、山吹色でも狐色でも、何處ぞで剝が顯れて、愛憎の盡るは知れて有る、其處の所を呑込ねば、苦界はならぬと口車、廻はらぬ舌でよう〳〵適名唱青樓一、物云ふ花の立姿、散らぬ梢の雲の肌、みつの詠を引包め、最中の月の桂女樣どホヽやつちや〳〵、ヲヽ厭いな、上氣でおくれないますな、と覆ふ袂や襠の、連れて座敷に打通れば、亭主立出、コレハ〳〵蘭樣、太夫衆と御一所、餘りなひけらかし、人の見る目も耻

今宵一夜は女房同然、武士の身として不義の詞、今一言謂つてごらうじ、其座は立たしませぬぞ、身請せう、何と、イヤサ身の代何萬何千兩でも、櫻江林左衛門身請して召連れます、ハヽ浪人の身で何として行かぬ事じや、傾城買も質草の息の切れぬうち止めた方が増で有ろ、と悪口嘲弄けら〳〵笑ひ、折柄風呂敷包擔た男内を覗いて、ヤイ其處に居るは又右衛門じやないか、ヤ貸物屋殿、何じや貸物屋殿吐すない〳〵、此内貸して置いた縮緬の小袖羽織、一昨日限に返す筈、音も沙汰もせぬ故、そこらで聞けば新町通しやると聞く、眼醫者の分で傾城買、ヤコリヤいかぬ事と思ふから、一徧尋ねてマヽ善い所で逢ふたはい、損料しよかい、サア夫は、有るまいサさり〳〵脱げ、逆も損料はよこすまい、斯う人中で耻かゝすのが損料代、代物よこせと無理無體、コレハと立寄る太夫も突却け、情も蘭又右衛門紙子一點、アヽよい樣〳〵、太夫樣餘り可愛がらしやんすな、薄いぞへ〳〵、すつての事に代物も危ない事、と風呂敷包を引擔げてぞ立歸る、跡には桂女氣の毒の、おろ〳〵すれば林左衛門、ハヽヽヽ錦の褥に虱一疋、傾城買は似合ぬ〳〵、ホヽ破れたる縕袍を着て、狐革を耻ぬは君子の徳、ソレ〳〵紙子姿に編笠は傾城買のお定、爰等は粹の悦ふ所、何うやら酒の裏に入つて、ホヽ如何樣わつさり呑み直さうか、太夫おじや、櫻江殿後刻、御意得ませう、寄邊定めぬ泡沫の、寧そ泡とも消もせで、誰ぞ頼まう、櫻江林右衛門殿、同道の虚無僧に、鳥渡逢ひたいと云ふておりやれ、と云ふ

澤の一ツ水、澄まぬ心の中にも暫し、住むは緣の月の顏、表へ來かゝる東之介、およつ諸共三味線鼓弓、忍ぶ姿の相の山、心々の糸竹や、ハテ面白い表の三味線、琴の音色に耳を澄まし、鼓弓の音の感に堪へ、竹の一曲身に泌々、ハテ面白い事じやなわ、樣子有げな相の山、大事ござんせぬ、笠取つて入らしやんせ、如何樣身共も近付に、眞に優しい太夫樣、お心有りげな修業者樣、互に笠取つていざお近付に、イヤ修業者天蓋取る事無用、相の山編笠脫ぐな、と兩方一度に聲をかけ、立出つる櫻江蘭、成程繁昌の所柄、うかつに笠も取られまい、世に零落し袖乞同然の相の山、人中で笠脫がば耻に耻を重ぬるやうなもの、修業者も奧へ行て一獻吸まれよ、相の山も勝手へ行て休息しやれ、ハテ偖行やれと兩人が、胸に一物相の山、心を跡に虛無僧も、奧と勝手へ別れ入る、ホヽ蘭又右衞門殿、櫻江林左衞門殿、一別以來〳〵ハテ異つた處で御意得ましたなわ、爾ならお知己かへ、ホヽ和女が桂女太夫とやら、又右殿の御秘藏な、ハレ見事、浪人の痩頤で通はしやるも無理でない、ガ太夫お身が何程に思ふても蘭殿にはおしはと云ふ御內證が有る、又妾になつたとて、高が素浪人の分際、ヤ又右殿お氣には障へられな、何と太夫身が心に隨ふてたもらぬか、アノお前にかへ、イヤおれでない則今奧へ行た虛無僧、和女に強い執心、万更の初對面でもない、顏を見たら偖はと云ひさうなもの、ありや身が、アヽイヤ何にもせよ何卒逢ふて遣る氣はないか、櫻江殿默らつしやい、傾城桂女は今宵拙者求めたれば、

およつは東を引立〳〵、サア〳〵早うお出なされませ、此様所にお前を置くと、大體心遣な事じやない、殊に最前の虚無僧は慥に政五郎、如何な事が出來様も知れぬ、サア〳〵お出、と引張る袖を振放し、およつ嗜め、此様に姿窶して歩くのも其政五郎に逢ふ爲、殊に不思議に逢ふた政右衛門殿、何かの事も頼まにやならぬ、イヤ〳〵〳〵お前様は久しぶりにてお逢ひなされた、桂様とやらに、逢ひたいのでござんす、と引摺る袖を桂女が振放して、東様聞えませぬ、お前に逢ふとお館を、忍出でも行先知らぬ女の足、途人買に勾引され、今此流の身となつても、片時忘れはせぬものを、何處の玻璃の破片やら、水晶のけづり屑やら知れぬ、艶い娘御と二人連、眞に最前見た時は、ヲヽしつて毎晩變る枕の床、泣いて見せるは御商買、お娼妓様措かしやんせ、サア〳〵お出、と袖袂、ヲヽ處女のなめくさり、ヱヽ其口が倘惡い、と悋氣辛氣の姫小松、引かれ引かるゝ折柄に、太夫〳〵桂女〳〵、と呼びつゝ又右衛門、ちやつと飛退き素知らぬ顔、桂女去りとは手が惡い、爰に何して居やる、イヱあの先刻の相の山聞かうと思ふて、夫で爰に、ムヽコリヤ宜かろ、サア相の山始めい、と太夫が膝を盧生が枕、所望に是非なく身の上を、素は浮氣でおひそめ川の、深うなる程逢はれはせいで、越すに越されぬ人目の關よ、寒の師走も日の六月も、厭苦い勤に日を暮らしやるか、顔に細が可愛や見ゆる、爾云ふて下さんすりや大體や大方、太夫何云やるぞいの、イヱサア大體大方面白い事じやござんせぬと云ふ

聲聞いて政五郎、天蓋取つて探り出て、爾云ふは傳八殿、マア〳〵此方へと内に入る、則此に居らるゝが伯父林左衛門殿、堵は貴殿が設樂殿、以後はお見知下されう、此度用向に付出坂致いたが、政五郎殿の親父又鱗殿よりの密談、其仔細は一家中の賢人立する奴輩は、大方仕舞付けた所、殿の歸國今一呼吸、心に任せぬ事だらけ、寧そ殿を毒害し、一國を横領とは思へ共、今殺しては一國の心散々、其處で殿を啞にするか盲にするか、所で萬事心の儘、威勢の付いた上は此方のもの、此處の所を善い分別も有らばとの事、又此刀は數太夫が小豆長光、先達松尾半左衛門預り置いたも自と手に入り、河井正宗は又鱗殿に納め置かれ、長光は政五郎殿にお渡申せとの事、と聞いて櫻江横手を拍ち、面白し〳〵、盲には幸の又右衛門、眼醫者をすれば眼一通の事は詳しければ、潰れる仕樣のない事も有まい、併拙者が逢ふては異なものと、思案の體に政五郎、某面を見知らねば、又右衛門が宅へ參り、幸某も眼病なれば、療治の次手に毒藥も、ヲヽ夫こそ屈竟一、明日早々、ガ悟られぬ樣に合點か、イヤ何最前の相の山、人目を包むは慥に東之介、此處に長居は無益、彼虜も心元なし、汝は早く立歸れ、ヤア門弟中お出なされ、御苦勞ながら此修行者、旅宿迄送屆けて下されう、ハヽ畏ました、イザお立なされなせう、ホヽ此傳八も御同道申たいが、東之介が居らば篤と見屆け後より歸宅、長光の刀も虚無僧には却て目立つ、明日持參仕ふ、然らはお去らば傳八殿、政五郎殿、シイ別れて入るや月の顏、

め、疊に喰付泣居たる、又右衛門大欠伸、ヤレかしましや〳〵郡山では林左衛門に滿座の中で大耻かゝされ、夫から斷然侍に倦果て眼醫者の世渡り、姉聟位の敵はてゝとんと流して色遊び、殊に相手の政五郎には林左衛門が腰押し、ナウ恐しや〳〵命有つての侍、兎角浮世は、コレ太夫此方向や、かつら女も有やらん、御免候へ甚だ酩酊、今の世の中に、色事を嫌ふ者と、鼻の低い和蘭人はマア無いもの、面白うない長口上、此方から退屈、アレ〳〵〳〵奥の騷はとちてん〳〵、津山お龜女郎、津山の山の雉子の鳥、蔦に憧れて立兼る、ハテおじやいの、と太夫を引立、さんばよけんとふける、騷に紛らし入にけり、東之介は詮方も、途方に暮れて居たりしが、母人に聞いたとは雲泥の又右衛門殿、とは云へ深い思案有つてか、何にせよ今一應賴んで見ん、和女は爰にと立上る、此方の人影南無三寶、見付けられじと袖覆ひ、奥の間指して入る跡へ、設樂傳八ちろ〳〵目、モウ御免〳〵醉ふた〳〵〳〵、と千鳥足出會頭に、ホヽ若いお娘の物思ひ、エヽ我は相の山じやな、頸筋元のくつきり堪らぬ〳〵、コリヤおれが云ふ事聞いてくれるか、サ返事はアイカ〳〵、相の山ならわりがた山、と凭れ懸るや繻子の襟、ムヽずへつく〳〵、髮も美しう、とんはうも今流行る糸卷じやな、と詠める笄以前の小柄、ムヽ此笄は、イエコリヤ大事の、ハテナ變つた笄獅子の金紋、コリヤ笄じやない小柄じやな、アイイヽエ、何卒此が貰ひたい、なりませぬ、イヤなのでもならいでも貰はにやおかぬ、ムウ滅多には

事じやはいな、ムヽ面白い〳〵、次手に和女も琴を合はしやいの、アイ、思ふや二人が生存へて、居るも不思議の內ぞかし、久しぶりにて相の山、逢ひに來たさにみつ繼の、三は切れても二世の緣、一期離れぬ心ぞや、ヲヽ〳〵〳〵嬉うござんす〳〵、ヤヽ何と、嬉し悲うござんする、およつはぴんと顏背け、此方の正體なしを他の娼奴がかけるとさ、侍に見付けられたら、眞に〳〵能い氣味で、戀が商賣なれば、人を欺すが得手物じや、桂女に間夫が附いて、浮名が立つが氣の毒、エヽ忌々しい相の山止け〳〵、とろ〳〵寢やうと思へば氣に罹る、歌の唱歌、何の間夫が有る物、よし有つてからが見付次第骨も體も、ほつき〳〵とへし折つてくれう物、ハヽヽハヽヽヽ、太夫まそつと寄りやいの、としなだれ懸るを、堪へ兼東之介ぐつと詰懸け、ヤコレ叔父者人、ヤ又右衞門殿、母人幼少より別れてござれば、甥の東之介お見知有らう樣はなけれ共、此女は居敷の妼、拙者と譯有る事知つての徒か、又知らずの色狂ひか、よし夫は兎もあれ。親人の御死去の樣子、御存知ない事は有まい、現在の姉聟の敵、倶々に尋ねたとて笑ふ者もござるまい、其上郡山も不首尾のさん〴〵、浪人の身ながら傾城狂、此方は天魔が見入りましたか、エヽ不所存な叔父者人、と疊みかけたる意見にも、現半分とろ〳〵目、二階に櫻江始終の樣子、伺ひ見るとも東之介、斯う云ふがお腹が立つならば、幾重にも心を入替へ、申々見る陰もない東之介、誰を力に敵を討たう、コレ助太刀してたべ蘭殿と、或は怒り或は諫

えた療治、イヤまう療治よりは御養生が第一、世間でも申通り一淫二酒三湯四力五行六音七煙八火とやら、一淫とは色事第一お毒、二酒の酒はさけ、三湯は風呂の事、五行は遠路歩行く事、六音とは音曲謠淨瑠理稽古なさるゝお方も有らうが、お目の惡い内は御無用、七煙八火は煙と火、隨分烟る所やなどはお毒、何方もお忘れなされなや、と見聞物馴れはつさいに、醫者めかしても何處やらに、昔殘りし俤は、更に子持と見えざりし、ハイ〳〵私は眵目で、モ朝起際にはどんと引着て明きませぬ、嚊めに舐つてくれてゝ申すりや、汚穢てゝ厭がります、二三年前嚊めが眵目を煩ふた時は、隨分精出して舐つて遣りましたが、年老ますれば嚊にさへ嫌はれます、と述懐なみだにほろ〳〵すれば、ヲゝお道理〳〵、したが眵目はほんの上部の事、お前上でござんすれば、まだお強い所がござります、と云はれて、アイタゝモゝ其樣に美しいお前が、しなつこらしう仰有ると、彼の今の一淫が兆します、と惡洒落の、折柄表へ舁來る駕籠、ホゝコリヤ餘程大病じやさうなはいの、と噂の内駕籠舁込み、垂を上ぐれば、ヤア療治人じやなうて御亭主じや、と恟り女房が氣の毒顔、コレ〳〵此方の人、目を覺して出やしやんせ、療治人も澤山來てじや、コレ〳〵〳〵、と搖起され、イヤまう酒はいけぬ〳〵、水ぞうすい云付けたか、七ツが鳴つたら駕籠云ふて遣れ、アゝコレ内じやはいの、マゝ御覽じませ遠方へ療治に行かれまして、先で酒が過ぎたさうにござります、と取繕へば、ハゝ何ても一淫二酒共過

しがらしやんすお前に詮議が、エヽ面倒なと引手繰る、どつこい然はと競合ふ拍子、燭臺倒けて眞暗、掬取る機に小柄は椽端、互に其共白張の、障子の彼方はさわぎの最中、此方は二人が探り足、獅子の小柄此方へ渡せ、サア此方へ渡さんせ、探り出たる東が手先、小柄を取つたも知らばこそ、獅子は何處じやく、聲を知邊に傳八が、打込む白刄をひらりと避し、油斷は致さぬく、危かりける三重「次第なり、探り寄つて東之介、設樂が兩足薙倒し、刀掬取り吭のくさり、聲立てさせじとおよつが袂、手燭片手に又右衛門、ホヽ天晴出來した東之介、色に迷はぬ蘭が、胸中桂女に委細聞け、東樣疑晴して下さんせ、すりや倶々敵討の、シイ云ふにや及ぶ、と死骸に立寄り一腰拔取り、東之介納めて置やれ、エヽ此刀は、渡邊重代小豆長光、エヽ忝い、太夫去らば、お近い内にエ

第八

世を渡る、渡邊橋の片邊、蘭又右衛門が住家には、眼病一切妙藥の、聞付けて來る療治人、看板目的絳絹の切、押合ひ擧つて先繰に、女房お鹽がさし藥、目元の鹽湯ぬるがねの、手元も輕く尻輕に、出歩く夫の里通ひ、内で拵ぐは二階から、目藥とこそ知られたり、ヲヽ何方も昨日より見直しました、夫又右衛門療治致す筈なれど、一兩日些内用、其故私が不調法ながら見覺

らに參つたが、何うやら無茶苦茶〳〵、イヤ是金五郎、外の事は儘にして、桂女が身請の沙汰、他へ遣つては此又右衛門如何も立たぬ譯が有る、マア手付の百兩を親方へ渡して置き、其上での又分別、暫く勝手で待つてたも、ハイ及ばずながら私も勝手で一思案、ヲヽおれも一間で一工面、然らば後に、と兩人は、奥と勝手へ入る跡に、女房お鹽がすつくり、と案じに胸も解け遣らず、合點の行かぬ主の心、廓通の夜晝なし、朝夕の煙さへ、立つ共知らぬ憂き世帶、賴み少なき浪人の、行末何となる事ぞ、と胸に迫りし喞ち言、息急き飛脚が看板目印、ハイ申屆けまする、と封じ文投込倉皇立歸る、早邪推の女房が、邊見廻し竊と取り、又樣參る桂より、エヽモ眞に腹が立つ、如何な事が書いて有る、啓けて見るのが腹愈と、啓けば内は繪唐紙や、世尊寺やうのちらし書き、テモマ美しう能う書きくさる事はいの、何じや夕しは寛々おめもじ、たんと〳〵嬉しい御事に候、ヲヽ定し嬉しいお事じやあろ、こちや嬉しいお事も久しう遠ざかつて居るはいの、堵は國元父樣よりお文屆けまゐり候、ムウ爾なら其傾城づらの親元迄、狀通する樣になりくさつたかいの、エヽ餘でござんす又右衛門殿、又市と云ふて七ツになる、子迄有る中じやないかいな、恩に懸けるじやないけれども、辛抱して居る女房は、何になれとの事じやいな、私や腹が立つ〳〵〳〵はいな、諸事おめもじと申殘まゐらせ候、目出度かしく、何の此が目出度い事、一ツも目出度い事はござんせぬ、此方や悲しいと又一通、ナニ〳〵一筆啓

ぎたと見える、と云へば一人が、アヽコレ御亭主、内の療治も内儀任せ、ソリヤ聞えませぬ目醫者樣と、徒口々を云捨に、各が樣々立歸れば、駕籠から漸々又右衛門、ホ何時の間にやら戻つて居る、此又市は何處へ行た、遊にでも行居つたか、ヤ駕籠の者太儀〱、ハイ〱左樣ならお暇と、歸るを待兼女房が、コレマア嗜しやんせ、郡山を浪人してから、此大坂へ來ると其儘、廓通の晝夜流連、内の療治も私任せ、如何程精出して目藥貝を藏に積んでも、エヽ嗜しい今迄は仕官の身の究屈さ、浪人すれば世間憚る事もなく、今遊ばいで何時樂しもう、イエ左樣じやござんせぬ、備前にござる姉聟渡邊數太夫樣、人手にお果なされた噂、スリヤ里通ひ所じやない、エヽ其を儕に習ふか、イヽエそれでも、ハテ默れと云はヽ默らう、と爭ふ所へ廓の亭主、咳拂して内に入る、見るに惘り又右衛門、イヤ〱申、私も廓では人に知られた高品屋金五郎、所柄じや、粹じや、何にも樣子は存じませぬ、昔の書物に有る通り、里の金には詰るが例とやら、私の方に少々のお拂の殘もナ、昨日の貸物屋の樣子、何にも云はぬは我等も粹じや、が夫はマア放て置いて、お報に參つたはお馴染の桂女樣、昨日初てお越なされし櫻江林左衛門樣が急に身請の相談で、今朝早々親方へ手付金、百兩お渡しなされたとの事、後金は五百兩、都合六百兩で相談極り、お勤も今朝からは引かして有るとの噂、是迄毎日〱揚詰の桂女樣、外の手へ遣つては、マア第一此金五郎、曲輪中へ顔が立たぬによつて、鳥渡お報やら御相談や

を思ひ遣る、忍び泪に書く文字も、にじみ勝ちなる三下り半、コレ去狀は遣るものの、年が明いたら元の通、變らぬ夫婦の中、アイ其一言が何よりも、私や堪能するはいな、と取付く膝に降る時雨、外に知られぬ雨雫、暖簾押上げ金五郎、其奉公の入口は私が致します、アよく〱の事なりやこそ、お子樣迄有る間を、振捨お別れなされます奥樣のお心、推量致して泪が溢れます、私が一ッ判で三年切て金百兩、證文は後での事、親方へ掛合ひ、其百兩は直に桂樣の手附、殘金の五百兩は、明日中に出來ませねば、林左衛門へ桂女樣を遣らねばなりませぬぞへ、じや程に早う才覺なされませ、私はつひ一走、百兩の手附渡したら、請取つて奥樣をお迎に來る、ドリヤ行て來うと、一散に、廓を指して走行く、夫婦は跡に顏と顏、見合すばかり詞なく、背ける淚義理の糸、何の頑是も七ッ子の、持遊片手に門の口、お母樣戻つた〱、コレ父樣見さつしやれ、私や金時じや勇者じや、アヽちんとかつた飯喰を、と云ふ顏見るよりくり出つる、胸に淚を保兼ね、今別るゝとは知らぬ子の、私を尋ねて泣で有ろ、可愛の者やと抱き締め、身を浮くばかりせぐり泣、漸々淚の顏を上け、コレ此方の人、私が行だ其跡で、此又市が尋ぬるなら、灸すゑに行たとなり、嘘吐いて泣きやらぬやうに賴みます、何角に付けてお前のお世話、常々彼の子は寢が惡い、氣を付けて下さんせ、中お前も灸でもすゑて、隨分養生して下さんせ、煩はしやんすりや彼の子の難儀、酒でも飲つて苦にせぬやうに、コレ申私しや、ア

上致候、然れば敵詮議の爲、毎度遊里へ御通ひの由尤に候、エヽ何の事じやいな、就ては先達而御頼申上候通、娘桂事段々御世話の由忝く、此上貴殿のお世話にて身拔致し、東之介に添はせ度頼入候、此方浪人の身何か心に任せず候、瓦井政五郎儀未だ行衛知れ申さず候や、松尾半左衛門も愈死罪に相極り候、急々備前、御下り可然候、蘭又右衛門殿粂山隼人、ムヽ爾なら廓通ひも身請の事も、女房其で疑晴れうがの、此方の人謝ました、心の通りで大事の状、ホヽ他見なければ苦しうない、と烟草盆提げ奥より出、其方に始終は咄さね共、此隼人と云ふは、某幼少の時分柳生流の我師匠、其娘の桂女頼むとの一言、受合ひしは武士の魂、コリヤ是非に及ばぬ所、林左衛門に桂女を身請せられては、隼人に番ひし詞が立たぬ、とは云ふ物の六百兩の金、ハテ何うがな、と兩手を組み、武藝は世上に隱れなく、誰恐なき蘭も、任せぬ物は金の才覺、施す術もなかりけり、聞く女房が泪ぐみ、郡山の家中で、一と云ふて指折の内證よしも、此樣に下れば下る物のかいな、嘸口惜かろ齒痒かろ、無念にござんしよ蘭殿、ガ申爰に又一の思案、遺恨ある林左衛門に、桂女殿を身請せられては、お前の武士は立ちますまい、じや程に私に暇を下さんせ、何と、去狀下さんせ、ムヽ去狀くれいと云やるのは、偖は其身を賣つてなと、アイ手附の金を拵へて、お前の武士が立てたいはいな、女房出來した過分々々、浪人しても蘭又右衛門、女房賣つては苗氏の瑕、去狀遣るが心の禮と、硯引寄せ磨る墨も、妻の心

されうか、仰の通先々此へ、然らば御免、と挨拶し、のさ〳〵歩むも探足、ソレ女房共、お煙草盆又市よお茶わげい、アヽイヤ〳〵おかまひ御無用、早速お頼申たいは某が眼病、サヽ御覧下されい、成程烏渡拜見、ムヽコリャ一通の眼病、我等が家の秘密の藥、お用ひ有れば早速平愈、其は大慶、まだ外に密々お頼み申度仔細も有れば、人をお避け下されい、何か知らねどコリャ女房、悴を伴れて勝手へ立、サアお頼の仔細はな、逆もの事に御誓言で承りたい、ヲヽ尤斯の通、と脇差に小柄押當丁々、ヲヽ先以て忝い、拙者がお願の仔細と云ふは、眼の潰れる藥が欲い、エ何が何と、イヤサ明白には云はれぬ入用、其代には斯の通禮金如何程でも、と用意の財布五百兩、合點行かねど差當る、身請の金の五百兩、明な眼を盲さするは其道に有らね共、差詰まつた金の入用、宜うござります、藥五百兩で賣ませう、コレハ〳〵承知有つて拙者も大慶、シテ其藥は、則此一包家傳の妙藥、此藥をさす時は、如何様なる眼病でも忽に平癒、又此藥に肺の臟の生血を混へ呑ます時は、暫時が間に眼盲る、施すまじき秘藏なれども、何を云ふも五百兩の金が欲しさ、ホヽ過分〳〵、シテ其肺の臟の生血は、アノイヤそりや此方に用意なき物、お前様は侍、死罪に極まる科人を、アヽイヤ〳〵人に知らさぬ密事なれば、左様手延には成難し、大枚の金子を出すも、調へ難き藥が欲しさ、ハテ是非に及ばぬ殘念至極、金子を持つて空しく歸る、と立上る內表には、息急き來かゝる金五郎、暫時躊ふ門の口、始終

ノ廓は氣が晴れて面白い、と泣かぬ顔する心根を、思ひ廻して又右衞門、心の内で手を合はせ、常の強氣の百増倍、身節も砕くる隠し泣、何も知らぬ稚子が、アレ〱母様が泣くはい〱、弱者じや〱、コレコレ父様、其方向かすと此方向いて見やしやれ、と背中敲かれ涙の顔、見せじと呑込〱て、ヲヽ母様は弱者じや、われは強い者じや程にナ、必ず泣くなよ、母様はなあつゝをするゑに行くによつて、晩から父様が抱いて寝る、ヨ強いやつじや勇者じやと、稱揚せば、流石子供氣に、母様が留守でも、おりや強い勇者じやによつて待て居る、早う戻つて下されや、エヽ眠むたい〱、エヽもう何處へも行かずと、抱いて寝て下されいのう、ヲヽ能う云ふて給もつた〱、其様に云ふて給もるので、一倍戀しい得忘れぬ離れられぬ、と聲をあげ、抱き締め〱引寄せて、我子を間に沖の石、乾く間もなき袖の浪、折柄表へ徐々と、供人數多打圍み、乘物の戸を押開けば、研かで曇る心の角、石か瓦井政五郎、刀を杖に徐々出、ホヽ櫻江の門弟方、何れも御苦勞千萬、長々の拙者が眼病、其上密々の療治も有れば、暫く近邊に控へ召され、早く〱、と追立遣り、門口に探り寄り、眼醫者蘭氏のお宅は此か、御療治申請けたい、と云へ共此方はつぎはなく、アヽイヤ今日は些と取込、明日お出なされませ、ハレヤレ其は迷惑千萬、遙々尋ね參つた者、然らば藥ばかり求めたい、價は其方望次第、五百兩でも千兩でも、と云ふは入口小判の耳寄、アヽ成程〱、則拙者又右衞門如何にも御療治、なされて下

、ハヽヽヽ五百兩と云ふ大金じや物、悴の一疋や二疋に替られまい、然し目の不自由な某なれば、犬猫の血をすり替ても見えねば此との證據がない、迚もの事に悴奴は、某が料理した其後で、五百兩の金は遣る、コリヤ〳〵坊よ、爰へ來い〳〵、ヲヽ好い子や〳〵、コリヤ此叔父が好物遣る、と云ひつゝ下緒の玉襷、脇差すらりと拔放す、アレエと泣出し取縋る、父も眼は眩めども、爰ぞと堪ゆる武士の義理、表はいつそ正體なく、エヽ酷い鬼よ蛇よ、幼少者を酷たらしい、私から先へ殺せやいと、叫べど聲の出ばこそ、悶え憧れて差込む癪、内には瓦井探寄り、又市を片手に摑み、肌押脱がせ鳩尾先、ぐつと通せば七轉八倒、思切つても又右衞門、苦しむ聲の身に徹へ、我身を寸斷に劃かるゝよりも猶脈苦く、母は外面に血の涙、血汐を取つて印籠へ絞り込み〳〵、ハレヤレ脆い奴なうくたばつた、ア幼少さうても人間の子、鰻劃〳〵とは違ひ、餘程氣骨の折れるもの、ソリヤ約束の五百兩、忝しと押戴き門口押開け、金五郎樣子は後で先此金、廓へ渡して身請を賴む、女房は後から、早く〳〵と差出す、取も戰々金五郎、物も得言はず色青褪め、這々廓へ逃歸る、お臘は我子にし噛付、涙の限り聲限り、詮方もなく取亂す、女房を諫め又右衞門、我子の亡骸抱上げ、せめて死骸に一遍の、回向をせんと一間なる、佛間へ泣々入にけり。兼て聞きたる闇が、住家を尋ね東之介、渡邊橋を其處此處と、人の教の表札は、爰ぞと思はず見合はす顏、ヤア其方は瓦井政五郎、方々と行衞を尋ねしに、思ひも寄らず

の様子立聞く女房、コレ此方の人、私や最前から聞いて居る、案じに案じた五百兩、思ひも寄らぬ天の扶け、私を殺して生血を取り、早う此金役に立、お前の武士を立てたべ、憂き勤をしやうより、寧そ死ぬるが私や嬉しい、サア／＼早う殺して、と命惜まぬ健氣さは、五臟六腑に泌み渡り、何も云はぬ女房共、命をくれい、と引寄せる門より飛込む金五郎、ヲヽ滅相な／＼／＼、マヽお待なされませ、申し又右衛門様、お前のお賴みで三年切つて百兩借り、直に手附に遣りました、請取はコレ／＼／＼是に、此請取が有るからは、マウお前様の物じやでござりませぬぞへ、コリャ御思案が違ました、と理の當然に詞なく、差俯向きて居たりけり、ムヽ爾なら此も役に立たぬか、然らば拙者は罷歸る、と立上る袂に縋り、アヽイヤ申、成程生血調へませう、暫くお待下され、と女房金五郎諸共に、門へ突出し戸をぴつしやり、音に駈出る我子の又市、母様何處へ行かつしやる、おれも行かう、と泣出す、泣さじ物と口に手を當て、是や我子の肉を食む餓鬼道、畜生共思されんが、なうて叶はぬ金の代り、忰が命差上げませう、といふを立聞く女房が恟り、エヽ滅相な此方の人、お前は狂氣か血迷ふてか、如何に武士の義理じやとて、我子の血汐を取ると云ふ、酷い事が有るものかいな、イヤ／＼／＼何ぼでも殺させぬ／＼／＼、エヽ誰ぞ止めてくれぬかいの、マア／＼／＼待つて下さんせ、蘭殿我夫、と押せど敲けどかきがねの、義理に凝つたる蘭も、道理に咽ぶ血の淚、憐を知らぬ不敵の瓦井、ホヽム

錆となり、東之助が助太刀、閻魔王と相談せよ、ヤア〳〵後詰の門弟中、眞劍の勝負見物あれ、と袴の股立大樣に、用意の襷眞紅の房、覺えの管鎗二間一尺、八角削を引しごき〳〵、さも凛々しげに身構へたり、此方も重代來國俊、禮儀を正して立向かふ、互に手練の氣配目配、ヤア〳〵、やつと懸聲早速を踏み、胸板目懸け突出す管鎗、ひらりと見せたる刀の鞘、付入一眼繰出す二早速、飛越跳趣千辛萬苦、二十ヶ條の秘密の手の內、花やかにも又いさぎよし、櫻江謂つて突出す鹽首、柳生流の太刀捌、林左衞門が眉間より、眞向懸けて拜打、漂ふ所を飛懸り、直に止の一刀、門弟共口々に御手の內恐入る、お術とは存ぜずして、此迄の無禮の段、御赦免有つて和州へ御歸參、何卒指南賴入る、と皆々大地に平伏す、耳にもかけず敵に向ひ、先達も云通り、今眼病の其方、打取て手柄にならず、一端此場は助くる間、怖々せずと立歸れ、ヲヽ此政五郎も其通、誠眼病ならずんば、眼前の叔父の敵、首を胴に附けては置かぬ、命冥加な蛆虫奴等、最早歸るが用はないか、併逃隱るゝと思はるゝも殘念、兩人共身が供して我住所をも見屆置け、ナニサ〳〵逃隱るゝ共、天地の間何程の事か有らん、譬へば汝水に隱るゝ術を爲さば、我又大海を渡る術を以て、搜出すに手間暇いらず、盲を送る手引には、門弟共が分相應、入らざる細言吐かさず共、難有しと三拜し、首を抱へて早歸れ、と助くる大膽逼るゝ不敵、思へば無念と東之介、抑へる蘭荒けなく、我子の亡骸舁いて出、取附く母よ伯母從弟、野邊の

今日の出會、天道のお引合、エヽ悉し〳〵、何日ぞや樫原にて汝に討れし渡邊數太夫が忰、同苗東之介、確な證據は親人の、死骸の傍に獅子の小柄、倶に天を戴かぬ親の敵、イザ來い勝負、と結寄せる、剛惡手垂の政五郎も眼病に氣後し、左右なうも立合はず、猶豫の體に立ちたる折柄、櫻江林左衛門お菅に拔身差付〳〵、ヤア人達の敵討、疎忽ひろげば母めを芋串、サア〳〵如何じや、と手結の人質、眼前敵を置きながら、母の難儀に進みもやらず、能く〳〵武運に盡きたか、と無念涙ぞ道理なる、ヤア〳〵早まるな東之介、暫く待て、と聲を懸け、立出つる又右衛門、袴の股立覺えの一腰、徐々と一間を立出づる、最前我家へ來りしより、政五郎とは疾く知つたり、併敵の實否未だ不分明、よし實の敵たれば迚、眼盲たる政五郎、討取つて大人氣なし、蘭が家の秘藥、日を追つて養生加へ、眼病快癒するならば、其時こそは潔く、敵と名告つて勝負を遂げよ、此場は助ける早歸れ、ヤア〳〵櫻江能く聞け、武士の道に有るまじき人質とは未練千萬、郡山の御前にて木太刀の勝負に負けしは、浪人して姉聟の敵討、助太刀せんず我計略、其人質を返し與へ、此所に於て尋常に眞劍の勝負を遂げよ、相手になつて得させんぞ、と徐々庭に下立たり、さればこそ此男は、郡山の家中にて、其名を天下に蘭の、武名は四方に隱れなし、林左衛門莞爾と笑ひ、虜を返し勝負とは、浪人しても流石は蘭、ヲヽ出來す〳〵、其方が望に任せ、此人質は返してくれん、然し入ざる武邊だて、今此場に於て、櫻江が鎗先の

郎一目見るより、ヤアこりや兄者人半左衛門殿、コハ何故に此有様、と前後不覺に見えにけり、猪は正氣にならしやんしたか、様子を云へば長い事、事の様子は此高札、と云ふに立寄り繰返し〳〵、すりや數太夫が敵を、ム、何にもせよ、と取上ぐる首の髻、ハテ心得ぬとわけ目解けば出づる一通、封じめ切つて星明、讀む度々に悔り〳〵、コリヤ櫻、様子は道々物語らん、兄の敵は又鱗親子、一太刀討て亡き兄の、迷途の妄執晴させません、先々首を葬らん、と夫婦が手昇の腰車、廻る血筋の血の涙、我身の志賀の浦傳ひ、泣々打件れ三重立歸る

第十

早東雲の朝朗、風より罪の身に泌みて、何國を當に兎井親子、爲せる惡事の現れて、我身の志賀の濱傳ひ、居所の歩みと白泡はませし轡の音、普代の家人引率れて、驅け出す馬の尾筒を摑んで、一息繼きたる又右衛門、見るより悔り政五郎、ソレと胸に數多の家來、主人を圍ひ切つて掛る、多勢を相手に事ともせず、薙立〳〵切散らす、東桂が夫婦連、身輕に扮装つ白小袖、親の敵の政五郎、サア〳〵勝負と詰掛くる、物をも云はず政五郎、馬上より打つ刀、丁と受けたる東之介、蘭すかあず又鱗が、馬の太腹一刀、乘人は濱へ眞逆様、迯散る家來が取つて返し、主を助けて蘭と、火花を散し切結ぶ、切合ながら又右衛門、コリヤ〳〵東之介、又鱗と此から

送りや門送り、今は花なき土人形、切合ひ人形の修羅道に、因果は廻る風車、持遊箱の棺桶に、涙の雨のふり〳〵太皷、跡に思ひや三重殘るらん

第九

風の音さへ物荒れて、いと物凄き志賀の濱、無殘や松尾半左衞門、義によつてかゝるはたものに、武名を埋む高札に、科の次第を斯くぞとも、知らず量らず狂ひ人の、晝とも分かず夜ぞとも、何時の松尾の藤七が、亂れ心の亂れ髪、コレ〳〵些と物問ふ、唐土の揚貴妃と、七福人が口說したと、長崎の吉原で噂が有つたを知つて居やるか、何じや知らぬ、ハヽヽ知らぬとは云はさぬ〳〵、ヨイ〳〵〳〵宵は待詫夜中は怨み、曉起きて空見れば、稚兒の樣な傾城が、紫盃手に据ゑて、一ッ參れ此殿、二つ參れ此殿、三ッ目の肴にはからなしから梅、開かぬ運の是非もなやと、泣きつ笑いつ徨々と、更に正體涙なる、漸々跡を櫻木が、まだ現ない此有樣、コレ氣を鎭めて下さんせ、と介抱涙に見廻す高札、ヤアこりや兄御半左衞門樣のお首、ハアはつとばかりに歎きしが、何を云ふても此有樣、お首を此儘置く時は、末代迄もお名の耻、女の一念此首を、と小褄凛々しく梟木に、漸々と攀登り、首に手を懸け力を入れ、引けどしやくれど大盤石、弱き力も一念力、打ちたる釘も折れ鈍け、首諸共に夫の上にどうと落つれば、藤七

よ、此一通は政五郎が筆跡、數太夫殿を討たる文體、半左衛門が髻より出しも、則此手紙を證據となして、東殿、こなたに敵を討せよとの、心は察しても東殿、こなたに敵討せては、彌我武士立たずと、晋介と言合せ、幸惡事顯れて、國遠したる瓦非親子、尋搜して討んものと、兄の心をむそくして、我身を立し邪非道、天道許し給はねば、同じ所に在りながら、貴殿に手柄を超えられしは、弓矢神にも見放されしと、身を悔んでの此しだち、と拳を握る血の涙、ヲヽお道理、と櫻が歎、晋介も無念さと、主人の心推量り、土に喰付男泣、道柱は女同士、如何ぞ仕樣はないかいな、樣子を聞けば身に窄制れ、櫻樣の心根迄、思ひ遣られてお悼や、と云ふに東も貰泣、共に袂を絞りけり、思定めて藤七が、刀逆手に我腹へ、突込まんとする所、其手を聢と又右衛門、イヤ〳〵放して死なせてたべ、とあせるを抑へて、拙者蘭又右衛門、此に居る東が叔父、樣子を聞けばお笑止ながら、死しては松尾の家も立つまじ、此手紙を髻に込められし、御舍兄の志は、此場にて政五郎を討つたる東之介、親の敵の證據の此狀、此にて兄御の意も立つ道理、併家が立たねば、武士道が立たぬと思切り給はゞ、輪廻を斷つが先祖へ孝行、一子出家の功力には、九族天に生ずると、佛の誓お賴あらば、半左殿の後世の爲、修羅の苦患をお助あれ、と理の當然に藤七郎、思直して髻拂ひ、實誤つたり〳〵、蘭殿の教化に會ひ、此松尾が松の葉の、狹き心も廣々と、廣き芭蕉の葉の如く、今より我名を芭蕉と改め、姿

くたは殘らず身共が受取つた、優曇華まさりの政五郎、天の與ふる親の敵、逃すな後れな踏込んで勝負〳〵、と勵まされ、叔父の詞に氣は鐵石、此方は强氣の手練の太刀先、老功の叉鎌に未熟なれ共多勢の助太刀、闘を中に取卷き、爰を最期と戰ひしは、危くも又目覺し、天の賞罰目前に、邪の刄は鈍り、叉鎌主從數ケ所の深手、漂ふ所を切伏せ〳〵首打落す此方には、氣は早れども弱き東桂も受太刀危き所、又右衛門が拜打ち、弓手の肩先したゝかに切下ぐれば、東桂が寸斷切、乘掛つて止の刀、嬉しうござる叔父者人、出來した東、と三人が、悦び合ふが道理なる、かゝる所へ松尾藤七櫻晉介伴ふて、此體見るより南無三寶、しなしたり殘念、と三人顏を見合せて、無念の涙はら〳〵、五臟を絞るばかりなり、仔細ぞあらんと躊躇ふ間に、東桂は落涙の、樣子は如何にと尋ねられ、面目なげに藤七が、朋輩の東殿、年來の親の敵、討果せたる目出度折柄、不吉の泣顏不禮ともお蔑も耻しけれど、一通聞いてたべ、貴殿御流浪の其跡にて、兄松尾半左衛門、數太夫を討たる事、政五郎が口より白狀させんと、計略の僞りを盜み、瓦井親子を計るぞと、思の外に小源太が横死、兄は轡の盜賊となり、此志賀にて獄門にかゝる、我は矢數の其場より、思ひの餘に心亂れ、兄が死罪も露知らず、晉介櫻が養育にて、梟木に肆されし、兄が無念の死顏を、見るより忽本心に立歸つたは、藤七がまだも武運に盡きざる證、此上は瓦井親子、兄半左衛門が敵なれば、討つて本望達せんと、コレ〳〵是見られ

糸櫻本町育

作者 紀上太郎
補助 達田辨二

淺草の段

抑當時金龍山淺草寺と申は、人皇三十四代推古天皇の御宇、海中より出現の靈像で御座る。常に開帳は叶ひませぬ、近う寄て御縁を結ばれませう、內陣は結縁で御座ると、縁起さら〱貴賤群集、押合へしあひ南無阿彌陀、後堂へと打むれ行く、群集の中に一際立、上列赤城殿の奥方、御國歸りの道よりも、大悲の誓かけ頼む、開帳參りも腰元は、男を拜む尻目遣ひ、神原左五郎山住五平太、御供にて暫し床几に休らひ給ふ、山住五平太しや〱り出御前には御覧なされしか、只今參る道の因果地藏、偖きつい流行やう、何でも私が因果で御座るとさへいへば、モどんな六ケ敷願でも、又はどんな及ばぬ戀路でも、つひずる〱と叶ひますと、小糸を横に鹽の眼は、隨分細い心でも、只常體の目玉なり、腰元お熊がとんきよ聲、わしは金龍山の餅屋ばつかり覗いたゆゑ、とんと因果を見はづした、のう小糸殿、ヲヽさもし、夫はさうと今來る

を變たる印の一句、船となり帆となる風の芭蕉かな、此句を今より元として、俳諧歌の一派を弘め、諸國行脚も兄の爲、菩提の爲と立より、晋介櫻も髻を、拂へば拂ふ浮世の塵、行脚のお供の私も、寶井の字の一字、晋介の晋の字を合せて、今より寶晋齊、無念を忘れし隠者の身の、角を隠せし其角の、文字を其角と俳名せん、と兩腰がらりと投捨たり、芭蕉翁桃青とて、古今稀代の宗匠の、武士と出家の裏表、二の折三の折々は、文の便を桂様、名殘の折に種々の事、思出す櫻かな、別れ盡させぬ月の座の、桂夫婦が見送る袖、涙落込む湖は、匂の花の香しき、志賀に名高き敵討、拙き筆に書納む

志賀の敵討終

或は人相の善惡、失物欠落夢判じ、年寄の銀煙管、若息子の紙子羽織、叔父貴のにきび、母者人の聲がはり、小娘の疳氣まで、寄妙な見通し錢次第、手の筋見るははうらくなりとぞ喋舌ける、そんなら法樂から見て貰ふと、腰元のお熊が出す手を打詠め、ハヽ先器用筋と見えるは、名をさいて見せうか、ムヽきのか、おけふか、おことか、おかいか、おなあか、イヽヱお熊といひやんす、ムヽ成程白木屋の樣な筋じや、偖から見た所にこなたの望事は、中の芝居が見たからうが、それ〳〵笑ひを含んでじやと、いふうち小糸が思ひ付、五平太に吹込ば、呑込で罷出、偖是なるは拙者が妻同然の者、手の筋を見て貰ふと、いやがる太夫を無理やりに、押出せば花唉が、若彼人に逢瀨もやと、差出す手先顏と顏、ヤア網樣、そなたは、アヽコレ慥に夫、と見通しの法印樣、めつたに危相な事はおるまい、考違いもある物、急ずと私が身の上、樣子があらうと何事も、あたりさはりのない樣に、ナ占つて下さんせ、ムヽお前がアノあなたの奥樣ハテなア、いか樣知ぬ人心、手前がせうげな儘に、人の詞も眞實震の卦と思ひ、発上斷まされてのぼり詰、親のかん中連を受て、當卦本卦を追出され、モウ絶體絶命とは思へど、せめて今一度は、逢ふて不思議、逢はぬも不思議の占屋さん、利根さうに女の詞を、一代の守り本尊とはいかい白痴、微塵もゆこんは殘らぬと、いふは心の占屋さん、餘所に云なす恨の箸木、サア夫には段々樣子もあれど、今は人目の、ナ、せき立心をよう靜めて、手の筋見てと差出すを、

道でも、ふくりん糖や弘慶子、かはつた形じやないかいな、サあの弘慶子といふは、何の薬じや夫知てか、どうやら何ぞに付たらば、ひりくしさうに思はるゝと、袖打覆へば腰元小糸、アレくく御前様御覧じませ、アノ向ふにある提燈、サお熊殿、讀るか爰から讀んで見や、ヲゝ何じや、三浦屋の花咲ア、どんなる女郎じや見たいな、と噂半へ里馴て、苦界苦にせぬしこなしも、二十の上は三ッか四ッ、五ッの町に名も高く、今をさかりの花咲が、今日身揚の觀音詣、奥方の御意承り、神原左五郎立出て卒爾ながらお傾城、是に御座るは拙者が主人の奥方、廓の風俗珍らしく、暫く御足を留たしと、御意は請ても田舎の不骨、中やうも存せぬながら、情を商ふお傾城、苦しからずば是にて一服、頼入と三ッ指に、ホゝゝゝヲゝかた、しだが廓の内ではなし、粋も不粋もいらぬ爰、女中様のお客といひ、何の遠慮も長煙管、もみお煙草と大やうに、おめる氣色も投嶋田、髪を詠めつ衣裳の摸様、屋敷女中の物見たけ、叩き頷き嘻し、行水と散花を、つかい捨たる身はもとへ、何れかへらぬ世の中や、憂勘當にあひ馴し、彼花咲に逢たさの、身は占のうら表、町家へと聲高く、當卦本卦の占、願ひ望の考て、手の筋見るはうらくと、呼びあるく身は本町に、名高き中根屋綱五郎が、成る果こそ淺猿しき、腰元共聞付て、何でも是もお慰み、手の筋を見てもらひなぶらうではあるまいか、コリヤよからうとお熊が立出、コレうらなひ、と呼ばれてこなたに畏り、拙者がうらないは弘法大師一子相傳にて、

の樣な生白けた男は嫌、わたしが好はかう色も薄赤うて、鎌髭あつて強さうで、侍らしい男がすき男の目には鈴を張とやらいふに、お前の樣な糸のやうな、ひがいすな侍と女夫になるといやいなと、振付られて手をもぢ〳〵、後に立聞山住五平太、コリヤ註文は我が事と、衣紋繕ひ鬢かき撫、左五郎〳〵と、いふに悔りコレサ神原、御奉納の色紙は貴樣の役目、今御前のお尋、早く〳〵と胴調聲、うろ〳〵きよろ〳〵神原は、御前へこそは驅り行く、入替つて五平太が、コレサ是々つれないぞや〳〵、此間見ると口說、逢ふと口說、心を盡す心中男、そうむごうはせぬものだ、アレ〳〵〳〵、あの川へ渡せる橋も、わづな橋とは文字にさへ、吾妻橋と讀はいなあ。コレ〳〵是さ〳〵、拜む〳〵、そしてから今のお詞を聞所が、強さうな男を御吟味なさるゝ思召かな、アイモわたしや、芝居見にいても三五郎や八百藏はきつい嫌、わたしが贔負は左右衞門助五郎、何敵役が御贔負とや、友右衞門魚樂なら、我等へ札の落る筈、コレ色薄赤く強さうで、きつとした侍らしい此五平太、コレ〳〵〳〵相談する氣は中橋かと、じつと取手を押退、お嗜なされませ、不義はお家の御法度、今も今とて左五郎殿の詞、振付たを御存じないかへ、但しお國へ歸り、御家老樣へ此通り申上うか、ヒヤウすりやアノ、立役も敵役も嫌じやは、ハイ二度みだらな事おつしやると、其分では赦しなせぬぞ、が只今は旅懸の事、以來をきつとおたしなみと、堅う出られて、ハイ〳〵委細承知仕る、必御沙汰御無用と、眞面目に白け

どれと取手を袖の內、夫と云ねどしめる手に、變らぬ心江戶くやり、秩父戀のきなりなり、折から宿坊圓了院、奥方の前に手をつかへ、御國御發駕の今日、當寺へ立寄られ、御家の重寶定家卿の小倉色紙、御奉納下さる由先達て御知せ、則客殿しつらい置候へば、早御入と慇懃に、奥方もしとやかに、夫は御念の入し事、イザお傾城も御苦勞ながら、酒一つすゝめたし、是非にとばかり御挨拶、辭むも愛嬌こぼれ梅、別るゝ心鶯や、經讀む寺の宿坊へ、皆々引連入り給ふ、後にうつかり綱五郎、ア思ひも寄ぬ今のしだら、しかし花咲は請出されたか、但は噓か、アヽ儘よ、情を賣が其身の商賣、我らも商賣始ましよと、葭簀園の張襖、懸看板の書判も、兎角穴めがむづかしいと、獨つぶやき机を直し、浮世の迷ひを待居たる、月花の、外に男といふ詠、屋敷勤の外めづらしく、往來を見んと腰元の、小糸が後から神原左五郎、小糸殿〳〵、そもじは此處に何してぞ、アイ開帳參りの女中を見やうと思ふて、ムヽイヤ女中じやあるまい、當世のきん〳〵男を見立にお出なされたか、我らが樣な田舍侍は御意に入らぬも御尤、去ながらそこがお情、コレ此文あけて見た迚も、あんまり罸も當るまい、コレどうぞいのうと寄添ば、つんとすげなう立退て、左五郎樣堅ひ屋敷の御格式、御存じないことはあるまい、そんなみだらなことをして、侍が濟ますかへ、お國へ歸れば猶の事、お年寄の尾上殿岩藤殿、不義はお家の嚴しい御法度、若お方が袖褄引とも、かんまへてうかされなとの云付、殊にわたしや、お前

たり次第、イエ〳〵申、こんな物は入ませぬ、ムヽそんならそなたは何か望、ハイお情らしい女中様、毎夜〳〵のお餘りがあるならば、何ぞお情に戴せて下さりませと、付込ねだりごす聲に、道それしやの物馴て、成程勤の身なれば、情をくれとは何にもせよ嬉しい事、シタガ親方に養るゝ身、わしが儘にも、ならぬといふのか、ソそんなら爰へは何しにお出、サアアノわたしや待人を、ヲツト見て貰ひにと云やうなことであろ、ハテ當世の若者は、客に女郎を買せて置て、こつそり小宿のちよん〳〵幕、へゝゝモウ金といふてはない體、モ惚たが因果地藏様か御照覽、アイどうぞお情に横ばん切して下さりませと、口說かゝるは身を知ぬ、破布子に緋縮緬、縫どつゞれの取合せ、岩のはざまに浮草の、花の咲出し如くなり、何と詮方花咲が、イヤモウそう云れては、逢ねばならぬ様なれど、今日はお客に買れぬ此身、身揚は女郎の榮燿、今日一日はわしらが氣休み、廓の內なら情を賣が身の代かはり、廓の外では常の女も同じ事、ハテいつなりと廓へさへ御ざんしたら、情を賣て上やんしよと、理詰に此方も口あんごり、そんなら必廓では、サアお近い內にも言捨に、小褄かい取衣紋坂、吉原さして立歸る、うろ〳〵眼に山住五平太、ハテ面妖な、コリヤ非人、爰らへ二十二三の男と十七八ばかりの女はこぬか、テモきついせき様、イヤサ是が急ずに居られうか、コリヤ乞食ではない、コレ先生〳〵、どうぞ敎てくれぬかい、イヤモ事によつたら敎ませうが、夫聞てどうなされます、ヲヽサ聞せてさへ

る後より、五平太〳〵今御前のお召、早く〳〵と左五郎が、呼聲しほに手持無沙汰、こそ〳〵〳〵と迯て行く、傍り見廻しコレ小糸、左五郎樣、云合せた通り、なんなと五平太が口説の根は切て仕舞た、さいなア、毎日〳〵口説が嫌さ、お前とわしが中のこと、若や知ては互の身の上。夫故お前を振て見せたりや、本かと思ふてよい氣味〳〵、サア是からは本間の色事、コレ嘘じやないかや、何のいなア、わたしやいつそと寄添て、抱き付身はとてもなら、體も一所に、なりたい思ひ、後に立聞綱五郎、ヨウ〳〵有難の、ヨヨ、恐ろしいの、二人が絢りア、是々、怖がる所じやない、何かの事を見通しの占屋さん、なるかならぬの手の筋から、文の墨色よしあしに、戀といふ字の書判も、穴數一ッの考へ物、粹じや通じや大事ない、葭簀の内を貸てやろ、つひちよこ〳〵と小ぎりめに、ちよんぎまりとはどうあらう、サア〳〵早うといふを機、目元に物を云せ合、そんなら暫く此内を、ハテお辭儀には及ばぬと、二人を突やり押やつて、偖どうせう豆藏でも見てこうか、奥山一遍あるいて來たら、其間に大方埒もあくこと、赤繩を結んだ綱五郎、氣を通してぞ急行く、座敷をぬけて花咲が、勤の外の酒機嫌、戀しき人に淡路嶋、思ひに通ふ千鳥足、わたり見廻し占の、看板目當に、綱樣〳〵是はしたり、留守かいなと、覗く葭簀に怪敷影、ヲヽしんきやと立退は、樣子伺ふ乞食が、下わりませ〳〵、ヲヽ知ぬわいのハイお結搆な女中樣、戴して下わりませと、藪から出した亂咲、怖さ半分山吹色、禿が包手わ

ゝも、机に直る折からに、すぎかいの糸によりくる老の波、本町二丁目、中根屋の母妙閑、娘お房を杖柱、開帳參りの手には珠數、現世未來の願より、勘當の子に逢たさの、心を米の袋から、報謝も涙の種蒔て、鳩鷄を見るからに、誰が生とし生るもの、子を悲しまぬはなきものを、三人の子は持ながら、兄の綱五郎は勘當する。妹は藁の上からお屋敷へ養子にやる、そなた一人を力草、兄めはどこに居る事ぞと、思へば後生もどこへやら、觀音樣に向ふても、綱五郎が息才と、祈る母が心も知ず、勘當の詫にも來ず、來たらゆるそと思ふばかり、親の心子知ずと、因果な奴めと憂時は、恨ながらも去とては、我子の行衞安穩と、祈る心ぞ哀れなり、又かゝ樣の兄樣のこと、云出して泣しやんす。どうぞ廻り逢たらば、勘當赦して上まして、ヲヽそりやおれに如才はない、よつ程墻も踏だからは、赦さいで何とせう、そなたも脊丈の伸るまで、かうして置管はなけれども、親父殿は去年秋死しやる。兄が内へ戻らぬ内は、わしが力がない故に、二十の今日まで嫁入もさせぬ、ちつとの間じや辛抱しや、ヲヽ何のまあ、わたしやいつ迄も、嫁入はせいでも大事ない、兄樣と二人して、お前を樂に養います、お心遣さしやんすなと、いふにほろりと涙ぐみ、よういふてくれたなア、夫に付ても養子にやつた、妹は無事で居ることか。其後便も聞ねば、案じらるゝとくど／＼と、思ひに足も踏迷ふ、親の心は子しらずと、譬のふしの陰陽師、幸の占屋さへ、子供らが身の行末、念ばらし占ふて貰ふと、立寄て小

くるゝなど、褒美は望次第、サどうか〳〵、マヽ急ずとお聞なされませ、イヤサ是がせかずに居られうか、ムヽ褒美とあれば、サどうか〳〵、云ずはなるまい、サヽヽどうか〳〵何と〳〵、エヽ去とてはやかましい、イヤサ是がせかずに居られうか、サヽどうか〳〵、とせき立山住、立寄る非人、コレかう〳〵と囁けば、ヒヤウそんなら此内、シイ、引摺出してどうなされます、知れたと重て置て四にする、シイ、サ切てお前の言譯は、ムヽサそれは、人を殺せばお侍様でも御切腹か、輕うて御扶持は上りなすぞへ、ムヽいか様そこがあるわいの、サ夫じやによつて、いつそかうなされませぬか、と耳に口、ヤ面白い、そんならあの色紙を盗んで、シイ、褒美はきつさり御合點か、いけど悪事を呑込〳〵、浦山しげに葭簀の方、戀と慾とが右左、立別れてぞ入にける、うそ〳〵戻る綱五郎、モウよい時分と葭簀の圍、這入かゝつて南無三まだじやと咳拂ひ、何とモウよからふじやないかな、イヤモさう永う盃がふさがつては、迷惑至極の占屋さん、ちと足り苦しうして置やんせと、詞に遣はお紅葉、顔を赤めて左五郎小糸、どなたか知ぬが此御恩、アヽお禮うけよとて取持は仕らぬ、アヽ夫女中様、髩に紙が付てある、お侍ツレ、お前の右の口元に、紅粉が少しと氣を付られ、髪を直して顔ふくやら、わけも媚く戀中の、御縁もあらばと互の會釋、詞少なに別れ行く、エヽうまいことして置ながら、何喰ぬ顔で、ハヽヽ、夫はさうと、花咲はいんだか、不思議に廻り逢たもの、残り多やと云つ

は絹五郎、ヤレなつかしや〳〵、よう息才で居てたもつた、がなぜ初から有様に、打明てはたもらぬぞ、年寄た此母が、尋焦れて居る心、少しは推量せよかしと、母と妹は取縋り、嬉し懐し親と子が、悦び涙ぞ道理なる、ハヽ誤ました母者人、只今の身を恥て、名乘まじと思ひしが、親父様の御死去のこと、聞て我身も忘れ果、面目もなき御對面と、大地に喰付泣ゐたる、イヤ〳〵泣て居る處でない、さつきにからの詞の端、モウ根性も直つたさうな、アイ〳〵さうぞ兄様の御勘當、ヲヽ赦さいで何とせう、スリヤアノ御勘當御免とな、ヲヽ早う連て歸り、伯父御十兵衛殿にも相談して、早う家か渡したい、ハヽヽ有難し、然らば直様御供と、店片付るも妹か手傳、今日御勘當赦んとは、夢にも知ぬ占やさん、是か誠に陰陽師、身の上知すと戯て、始の歎引替て、親子兄弟水入ず、盡せぬ縁の綱五郎、引連いそき立歸る、色紙の箱を引抱へ、しすまし顔に以前の乞食、後から付て山住五平太、コリヤ本名は最前聞た九郎兵衛とやら、其代物を代なして、出生のつるに、ヲヽ合點、お前も彼奴めをぼいまくり、彼戀人を、呑込だ重て、さらばと乞食は、何所ともなく迯失けり、色紙の見えぬに神原左五郎、氣も狂亂の亂れ髪、駈出すを五平太聲かけ、コレ左五郎、おはたゝしい何事じや、イヤサ大切の小倉色紙、お次の床に置たる處、かいくれに行方知れず、ヤア〳〵そりやヲヽ大事、マ飛だことの、夫がなければ國へ歸つて、わりや言譯はないぞよわれ、コリヤ生恥晒さうより、今爰で腹切てくたはつて仕舞

腰をかゞめ、お邪魔ながらちよつと御覽じて下さりませ、モ年寄まして惡い入まい、肉を出ました子供の身の上、息才でをりますことか、とつくりと御覽じて下さりませ、と差出す手の筋よりも親子の血筋、夫とも知ず知ぬ同士、何心なく綱五郎、見るよりハツト愕りの、胸なでおろし素知らぬふり、悟られまじと作り聲、アヽ能お手の筋、したが一人の男の子はあれど、御勘當なされたの、其人も今では根性も改まり、先非を悔てゐらるれど、町所の人目もあれば、詫に行にも行れぬしぎ、年月の立に付、兩親の御高恩、骨身にしみ〴〵忘られず、思ひ出す度毎に、泣てばつかり暮されます、ヲヽ見通しのお占、よう當りました其通り、シテ其兄めは何所に居ますと、問はれて胸も張裂く思ひ、イヤ隨分無事で御座れども、今は西國邊に居らるれば、つい廻り逢事も御座るまい、コレお房、遠國に居るといのう、老さらばいし此母が、いつまで命がある物ぞ、つひ廻り逢事も、ならぬといふは前世の、いかなる報ひか淺ましやと、わつとばかりに母お房、歎と見兼綱五郎、忍び涙は編笠の、いひ甲斐もなき風情なり、涙拂ふて綱五郎、成程御歎は斷りながら、お歸りあつてお連合とも御仕事なされ、相應な御養子でもなされませ、情なや、其連合は去年の秋死れましたわいのう、何親人は御死去とや、ハアトツトばかりに綱五郎は、前後不覺の有樣に、お房が夫と見付る顏、エヽお前は兄樣、綱五郎樣じやないかいな、コレ〳〵かゝ樣〳〵、兄樣じやはいな〳〵〳〵、ヤア〳〵どれ〳〵、本にそなた

ふ聲々賑はしく、赤城殿の國館、奥は年々暮毎に、煤掃過は女中達、殿御始め御家老も、どうに上るを樂みに、男の肌に觸るのは、年に一度の天の川、ノウお梶殿小笹殿、いつでも此樣に年の暮には、人見るとどうに上、日頃惡いと思ふ人は、どつさり落して腰を打し、ヱヽ可愛男は、上るふりで手を握るのが皆樂しみ、サレバイノ、お暇の出た神原左五郎殿、何でも此暮には思ひ入手を握り、どこもかしこもしめ付うと思ふたに、サイノウ、夫に付ても小糸殿、左五郎殿との譯は、こちらも知て知ぬ體してやつたが、お年寄の岩藤殿が聞付て、殊に懷胎じやとて此頃からの責せつてう、そして御用人の五平太面が、全體惚て口説たを、振付られた意趣ばらし、岩藤殿は五平太殿の伯母御なりや、一入詮議に念が入と、噂なかばへ奥よりも、御一家よりの歳暮の御使者、四角四面の根來主膳、お女中、歳暮目出たう御座る、明春ゆる〳〵御意得ませうと、出るを見るより主膳殿、お祝申ませう、といふより早くばら〳〵〳〵、手取足取女中達、めでた〳〵の若松樣よ、枝も榮える葉もしげる、おめでたや、千代のこひやうたんじやよい〳〵、アヽモウ御免〳〵、偖々御苦勞かたじけないと、麻上下も皺だらけ、腰をさすつて逃歸る、夫々そこへ御家老樣、上る色目をけどられなと、小影にかくるゝ其所へ、道家老の勿體らしく、白と黑とのわはせ贅、朱鞘の大小のつし〳〵、熨斗目も立派に入來る、夫とかけ聲、五六人、コリヤたまらぬと、袖ふり放し驅出すを、御嘉例がはづれます、ならぬ〳〵と武者ぶり

さ、朋輩のよしみ、介錯して取さうと、心付られ若氣の左五郎、南無阿彌陀佛と覺悟の體、ヤレ待暫しと奥方に、引添腰元小糸は半亂、生た心地はなかりけり、思はず紛失の色紙、誰が業とも知ねば、切腹とは麁忽〳〵、イヤサ奥樣、夫れ程に仰せられても紛失の言譯は、ハテ今日此所にて此色紙か失んとて、言譯の仕置はない筈、預りの左五郎切腹して、誰な色紙の詮議はするぞ、サソレハ、但しお身に云付たら、いつ何日までに吟味して、差出す思案ばしあつての事か、サア夫は、推參千萬控て居よと、てつぺい搓に五平太が、しがんだ顔の苦味にて、小糸か癪は下りけり、神原左五郎兩手をつき、不調法なる拙者めを、生延よとは冥加なし、此儘お暇下し置れば、雲の上地の底と潜ても、尋出して其時は、ヲヽ替らぬ主從歸參を待と、早御立の臺笠立笠、涙の雨は凌ぎかね、小糸か心の亂糸、いとし可愛も仇枕、是非なく〳〵も立上る、扶持放れの左五郎に、大小無益と五平太が、直樣にもぎ取ば、よしや此身は暫の恥、假令町人商人の姿となるとても、小倉色紙を取返さいで置べきかと、詞のはしは嘘もなく、本町二丁目糸屋にて、妹のお房に左七とて、世に諷れし優男、末に浮名を三重「流しける

第二　屋形の段

是の御殿は目出たい御殿、鶴と龜とが舞遊ぶ、おめでたや、千代のこおめでたやよい〳〵、諷

コリヤもう兼ていふた通りせずばなるまいわいの、サ夫について力ノおろし薬、やつと調へました、ガ是を飲しては、ハテ飲すといふて駭したりや、懐胎してをるは定、怖さにうんといふまいものでもない、又嫌とぬかせば此方も意地、口押割ても飲さにや置ぬ、ムヽ面白い、然らば後程伯母者人、ヲヽ合點〳〵、ヤコレ〳〵お婢衆、此藥煎じて置しやれ、大事の藥じや麁末にせまいぞ、サア甥の殿イザ奥へと、呑込一味のきはひ口、伯母に打連入にけり。始終を聞て立出る、女中預り尾上とて、文庫結のしめくゝり、襟姿しとやかに、ドレ其藥と手に取てつく〳〵見、ムヽよし〳〵、夫早う煎じてやらしやんせと、袂の内で摺替て、素知ぬ體に奥へ入る、少身の身の悲しさは、我子にも奥と表と分隔、逢ことかたき石塚彌三兵衛、願書携へおづ〳〵と錠口を差覗、ヤ何女中方、勘定役石塚彌三兵衛、御願に參つたと、御老女方へ御取次と打萎れてぞ控へ居る、ゆがみにゆがむ岩藤が、出合頭に彌三兵衛を、見ても見ぬふり錠口の、顏ばつたり女共、小糸めを引摺出せ、ドリヤ一責と當こすり、煙草の煙り空うそふく、ヤイまをし岩藤様、彌三兵衛で御座ります、御願ひの一通り、お聞なされて下さりませう、知りませぬ、今日の取次の當番は相役尾上、わしは小糸を詮議の役、依怙贔負のない正道な仕様、顏の外から聞しやれと、態と親子の顏さへも、見せぬ胴慾彌三兵衛は、涙かくして、サ其娘小糸めが事に付てのお願、知ぬわいの、イヤサ小糸となをすは義理ある娘、實の親は江戸本町二

付、女中相手に力も出されず、多勢に無勢御家老も、是非なく女中のお手車、千代のこひやうたんじやよい〳〵、アイタゝゝ、こんな時には劍術やはらも何の益にも立ぬもの、是が家老の樣かいと、苦り切て逃行く後、どつと笑を催せり、後へ入來る山住五平太、又立かゝる女中達、睨み廻して、うぬら五平太に指でもさすと、どこもかしこも引まくるぞ、ヲゝまくるならまくつて見や、捲らるゝが怖いとて、お舘の祝儀ははづされぬと、强う出られて、コレサ〳〵眞平御免、實はかうじや、此上下小袖は今日藏おろし、皺になつては正月か見苦しい、爰は一偏にお情〳〵、奥樣へは上た分にして、御嘉例は濟しておくりやれ、是じや〳〵と額を疊、ハテさうおつしやれば上にくひ、赦してあげるお通りと、いふに嬉しくヤレ〳〵かたじけない、此お禮はきつと〳〵、薩摩芋三貫目ばかり進上と、いひつゝ通るをやり過し、後抱に惣がゝり、憎さもにくしと歌なしに、敷居へどつさり腰骨うたせ、手を打叩き迯て入、五平太は顏しかめ、アゝゑらい目に合せおつた、智惠まん〳〵たる某も、だますに手なし、つひ落しても能事を、意地惡う敷居の上、陰嚢ひしやといはしたと、しがみかへつて居る所へ、奥御殿お年寄とて鼻高く、おのが儘なる老女岩藤、のう〳〵と立出て、ヤレ五平太か待兼ました、ヲゝ伯母者人、偖小糸めはどうで御座る、サレバイノ表向はきつと責て內證では、五平太にうんとさへいへば、御前樣へはよいやうにいふて赦してやると、割つ口說ついふて見れど、頭振ばかり振くさる、

忍ぶさへ、我身一ツの命ならねば、〳〵と、思ふばかりを、露の世に、ならがへなく〳〵畏る、岩藤は目をむき出し、ヤイ小女郎に、毎日〳〵此年寄に、世話をかける横着者、欠落した左五郎と、不儀しておらうがな、そして奉納の小倉色紙も、儕が盗んだに違ひはあるまい、サア有樣にぬかしをれと、いがみかゝれば顔を上、身に覺あることなら、なん〳〵の誓文、隠さう樣はなけれども、知ぬといふか申譯、色紙を盗んで何のまあ、いやだまりをらう、左五郎とちえ〳〵くり合、色紙を盗んで賣代なし、小宿遣入の元手にせうとて、やつたには違ひない、是は又御無理ばかり、其色紙ゆゑにこそ左五郎樣の御落度、有所さへ知たらば、歸参さしやんすお身の上、さうぬかすが心得ぬ、不義の證據は儕が懐胎、隠せば爲にならぬぞよ、サ泣て事が濟むか、ぬかせ〳〵と煙管おつ取、かよはき體をりう〳〵〳〵、襖隔て彌三兵衛が、なをし〳〵岩藤樣、そりやあんまり、何か餘り、奥向の事こなたが知た事じやない、すつこんでゐさしやれと、又も煙管にばつた〳〵、親は吾身を打るゝ思ひ、襖一重か七重八重、かさなる責苦うき難儀、モウ堪忍とばかりにて、どうと伏てぞ泣居たる、ヱゝ其吠頬が猶惜いと、煙管もまだるく有合帶振上る、其手をしつかと、ホウ尾上殿、コリヤ小糸をかばふのか、イヤお前樣をかばふて、ムゝそりや又何故、ハテ小糸もお上のお腰元、若や面に疵でも付か、萬一急所にあたつた時は、お前の難儀と思ふ故、だまらしやれ尾上殿、此詮議はわしが役、急所に當つて死だら

丁目、中根屋と申す糸商賣、藁の上から貰置、ヱ八釜しい、取次は尾上殿、コレヤ女ども、ツレ小糸を引摺てうせ上れ、とわゝりちらける憎々しさ、奥より出る山住五平太、何岩藤殿、拙者は御用に付て江戸表へ發足、隨分ともおぬかりはあるまいがな、ナソレ今の事を、ヲゝ夫は合點、伯母に如才はないわいの、氣遣せずと早う戻りやと、頷き合て出行先、ホ彌三兵衛、何じや泣か、エゝ小糸が事に付てか、コリヤ尤、嘸娘に逢たからう、が何度逢たうても勘定役ぐらゐではお錠口は通られぬ、そこは用人の忝けなさ、我内も同然に、どこまでも行ぬける、ハゝゝゝ、ヤ此敷居が越たからうがならぬわい、家柄といふものは違つたものさ、よい年しても奥へは叶はぬ、拙者などは水の出端の若盛、女が見るとびろ〳〵と、びろ付程の美男なれど、何所までもつか〳〵通る御用人、が出頭もはや御用の多さで甚迷惑、江戸へ出ても屋敷の付合、今日は吉原明日は深川のと、遊ぶことにもほつとするわい、ヤ又堺町ふきや町の茶屋どもか料理、深川の西の宮、洲崎の升屋大川屋、樂庵の白川のと、モうまい物も毎日は難儀なことさ、お身などは何が、朝は茶粥に燒味噌、晝は座禪豆もみ大根、祝儀日などはくわつと奢つてさんまの干物、ハゝゝゝ、どりや、參らうと惡口嘲哢、疊蹴立て出て行く、武家の役儀ぞ是非もなき、岩藤は膝立直し、此小糸めは何してをる、きり〳〵うせうとつこど聲、もれて一間を立出る、無慘やな糸が身の糸より細く窶れ果、日毎の責に泣明し、褄は重ねぬ小夜衣、重き其身を

すりや小糸が懐胎は僞に相違御座らぬな、サア夫は、小糸が言譯立上は、覺悟しやれ岩藤殿と、詰かけられてアヽ是々々、こなたは氣が違ふたか、此婆には何科あつて、ヤア科のない事いはふか、墮胎の藥は天下の法度、何所から求て御座んした、サア夫は、人を損なふ人非人、覺悟めされといふより早く、襟髮取てもんどり打せ、又立かゝる脾腹を一あて、庭にどつさりころ〳〵、心地よかりし有樣なり、彌三兵衞庭に駈おりて、憎さも憎しと引立るを、アヽコレ聊示せまいぞ、其氣を付る藥は爰にと、摺替置たる以前の毒藥手に渡せば、畏つたと水鉢の、杓にうつして口押劑、流し入れば目をはつちり、夢見た心地に起上れば、尾上は詞改めて、正氣付たか岩藤殿、今日よりは長のお暇、早く館を立ていきや、彌三兵衞殿のお願は奥樣へ窺はん、小糸御座れと大やうに、襠さばき彌三兵衞親子、不審晴れねど尾上樣、御前宜しうお取置、ヲヽお次に暫く御休息、小糸はこちへ、聽て吉左右松の間の、襖押明け別れ入る、後に岩藤恨しげに、惡の報ひは覿面に、廻る藥の腹わたを、引くりかへす苦しさに、アイタ、アイタと眼顏を顰め、のたくり廻る其所へ、尾上か指圖に下部ども、割竹てん手に日頃の憎さ、爰でこそと口々に、コリヤ老め立上れと、叩き立られコレ〳〵、今迄の朋輩中、ちつとはよしみも、何好み、澤山さうに呼使ひ、むごい目見せた其替と、情用捨もはつた〳〵、打立られし羽拔鳥、見返り〳〵出て行く、いとゞ短き冬の日の、早暮すぎて奥御殿、樣子聞かんと彌三兵衞が庭の

ば、ハテお仕置にあふばかり、入ざるお構ひ御無用と、強き言葉も理の當然、さすが尾上も力なく、すご〳〵立て隔の襖、引明るノウ父様か、小糸かと、いふに云れぬ親子の歎、岩藤が尖聲、ヤ是尾上殿、咎人に親子の對面なりますまい、其襖さいた〳〵、イヤ彌三兵衛殿の願の取・次、夫ゆゑ明た此襖、取次は私が役、入ざるおかまひ御無用と、しつぺい返しにしかな顔、何かは傍り見廻して、煎じ立たる以前の藥、茶碗に受て、サア小糸是を呑、ヱヽ是は、ヲ墮胎のおろし藥、ヱヽ懷胎が噓なら呑で見しや、アヽ夫は、但は懷胎か、イヽヱ、呑ぬか〳〵呑をれと、髻引寄せせちがふ有様、親の心は半狂亂、見えぬがましのなま中に、眼前娘が命の瀨戶、此方は情もあらきの岩藤、彌三兵衛たまらず駈寄を、アヽコレ〳〵其敷居越る時は、お家の法をそむく科人、デモ目前に娘の難儀、ハテ何事も此尾上が胸にある、此願書讀む間、じつとして見て御座れ、ヲヽさうじや尾上殿、やしぶとい女郎め今の間に、憂目を見せんと口おし割、茶碗の藥無理やりに、目鼻も分ず流し込む、小糸が身には熱湯を、呑よりつらき苦しみに、身一ツならぬ憂事の、重なる思ひ幾重にも、赦してたべといふ聲も、咽につまりし有様を、見る悲しさは子の百倍、何とせん角とせんと、心ばかりに身をあせり、わつと許りに泣沈み、前後正體泣ゐたる、襟繕ふて尾上は立寄、ヤコレ岩藤殿、おろし藥は利ましたか、されば飲ば忽おりる筈、ハテ面妖な、ハヽヽヽ、ヤ何小糸、心持はどのやうなや、イヱ何とも御座りませぬ、

氣な處を覺なんし、エヽ八釜しいわい、氣に入ぬによつて買放しならば、おれが氣に入て見たが能と、いへば牽頭が、アヽ申々一度で行ぬは客の恥、二度で行ぬは女郎の恥とやら申ます、いヽへいなア權樣、アリャ床花が惜いのさ、エヽいま〳〵しい何ぬかすぞい、引退れめ、横面はりのめすぞ、ヲット〳〵琴野さん、鳥渡彈な、僭爰で一ッ上ますか、大谷の廣治で御座ります、雨のふる夜はな一人床し、有難い、エヽ次は嵐雷子で御座ります、雪のふる夜はな小幡の里に、すごい〳〵、イヤモおそろしいわい、そんなら此五平太も一節やらずはなるまい、ヨウこりや有難い、さらば聽聞仕らうか、東西〳〵、愛護の若に二世までと、いふて別れて其後は、文もとゞかず顏も見ず、それさへ今は其人も、館を出てひえの山、ヲヽモいつそ調子が合ぬわいな、エヽけちな三絃じやなアヽムヽ聞えた上方ぶしだによつて受取れぬな、よいはお駒を語らう、人任にした上で、モウ堪忍をしてやると、いふて堪納しかられたんのう、アヽ夫は流行歌じやわいな、ヲヽ本になア、エヽわれが彈やうが悪いゆゑ、飛だ所へ連て行わい、そして最前呼にやつた、たいこ持の左七とやら、モウ來さうなものヽ、イヤまをし由樣、何故にアノ左七を、其樣にお待なされます、サレハサ彼奴は身共と元は朋輩、神原左五郎とゆつたやつ、そら打てしくじり、此吉原に牽頭持して居ると聞た故、呼付てこまらしてやらうと思ふてさ、ハテなあ、道理で人柄のよいえい男と思ふたと、いふに琴野が、イヤアノ左七樣は、今度の俄の

切戸にイて、ハテ心得ぬ娘は慥に懐妊と、思ひの外のおろし藥、情ある尾上殿の詞といひ、ハテ不審と獨言、手燭片手にしづ〳〵尾上、小糸を後に押かこひ、傍り見廻しそろ〳〵と、庭に下立切戸の外、小糸を突出し、彌三兵衛殿、お願の通り小糸はお暇、何娘にはお暇とや、ハヽヽヽ有難やと手を合せ、見合す灯影蠟燭の、しんは泣寄親と子が、悦ぶも又涙なり、アコレ禮をいふて居る所じやない、可愛男の行衞を尋ね、恙なく身二ツに、ヱヽ、スリヤ最前のおろし藥は、ヤレちつとも氣遣ひ中橋の、まさや藥の實母散、ヱヽかたじけない

第三 中の町の段

花に遊ばゝ、日本堤や衣紋坂、江戸町すみ町素見の地廻り、ひけ四ツ鐘四ツさん〳〵きのじ屋、有難山屋の豆腐でやうわり向ひ酒、わい〳〵のわいとさ、中山樣、お一ツお上り、ヲヽ呑々、夫はさうと此花咲や、半時九郎兵衞もモウ來さうなものだなア、ハイ〳〵、もう追付お出で御座りませう、ヱヽ僭とまをし山樣。シテお前樣は、マヽどなた樣に、ハテ僭誰の彼のといふ段じやないは、五平太が氣にさへ入ば、直に受出しおかみ樣、夫に何のかのと八釜しい女郎ども、客かさすといはゞ、此五丁町は此山住皆知たもの、おれに逢ふ女郎はない、といへば藝者の琴野か口まつ又萬八を云なんす、お前の樣に女郎樣方を、一切買になんすはきつい野暮、ちと意

こなたと分隔は、ャ無とは云さぬ九郎兵衛が、頼かゝつた此返事、聞ぬうちは一寸も動かさぬ、イヤ何九郎兵衛とやら、何故直には云ぬぞい、五丁町に名の知れた本町綱五郎、最前から聞てゐるが、たいこ持頼んでくどかすとは、通り者には似合ぬ〳〵、ムヽ儕が本町綱五郎じやな。名は聞ど逢は始、半時九郎兵衛、本町綱五郎、以後は、見知て貰ふと、江戸のはえぬき男の生粋、詞もさつぱり見事なり、左七は中へ分入て、御直に何角の立引は、どちらが負ても意趣のはし、いざこざなしに爰は一番、私が貰ひます、後方までに、ムヽ面白い、見事われが此事を、ハテ偖さざな九郎兵衛様、マア奥で一献おあがりなされませ、そんなら左七、花咲を九郎兵衛に、サヽヽ何も角も此胸にきつと、返事を待て居るぞよ、先お入なされませ、戀といふ字は、詞の糸で結んで其下心、俄見がてら綱五郎が、母の手をひき妹のお房、七年三ッの年ばいも、男えらみに肌知らず、袖はとめても何所やらに、未通は見えてかあゆらし、ア申母様、今の雛子は面白いことじや御座んせぬか、ヲイノ此年になるまで、終に吉原で俄のはやしといふは、今年が見初、サイナ、夫にあの太鼓打たひとりの人、いとしらしい男じやと、噂の人は目の先に、思案工夫の筆頭の左七、見るからぞつと戀風の、ふくむ目元も愛嬌あり、母は夫とも氣も付ず、綱五郎も來てゐるであらうが、何所にゐるぞい逢たいと、いふは幸ひ渡に船、お房は左七が傍に寄、申近頃申兼ましたが、本町の綱五郎といふ人の、遊んで居られます茶屋はどこで

囃役に太鼓の役、夫で來なんせんのさ、本になアもう俄も來さうなものと、噂半へ俄の囃子、遠音に聞ゆるすり鉦太鼓、そりやこそ來たはと店の端、くづれかゝつて待居たる、見物群集を制する棒つき、先行燈も花やかに、江戸珍らしき祇園ばやし、五平太始め末社ども、所望〳〵も聞捨に、地囃子打て行過る、向ふへ來かゝる半時九郎兵衞、見るより五平太牽頭ども、まうしお頼申やす九郎樣、爰でと頼にうなづき、俄のはやし一番所望だ、頼ては半時九郎兵衞、頼まれて貰ひましよと、いふに是非なく打かゝる、隣の簾押あげて、爰でちよつくらはやしてくんな、嘘のない本町綱五郎、はやし所望と聲懸られ、あなたこなたの氣を鉦太鼓、三絃のどうしてよからうろ〳〵と、する内左七が、アヽさう一時に兩方からおつしやつては、私等が大のけんうん、後先を申ては、お互に御不足勝、又同じことを二度お聞なさるも畢竟御無益、爰はわたしが中を取て、お二人の眞中で囃しましよ、夫で双方御了簡と、いひつゝ太鼓の音色よく、よいや〳〵と見物群衆、ちり〴〵ざめき別れ行く、夫と目まぜに五平太が、簾おろせば半時九郎兵衞、牽頭の左七とやらちよつと逢たいと、呼に是非なく立戻り、何の御用で御座ります、イヤ外のことでもない、三浦屋の花咲、毎晩通へど振付る、聞ば本町綱五郎とやらいふ二才め、深う馴染でをるとのこと、又手前も其座敷は格別に勸ると聞たゆゑ、どうぞ貰ふてくれまいか、ハヽヽ是は又迷惑千萬、お客の座敷勤るは牽頭の役、十方旦那のわたしか身、どなた

て、嬉し恥し母の前、わき目にちらすはぢ紅葉、母は引取、サお房歸りやしよ、晩には必ず戻らしやれと、我子思ひの姥櫻、さくらに曇る花の町、後にも必引さるゝ、娘を連て立歸る、引違へて花咲が、網樣〳〵、お前も兼て知てゐさんす九郎兵衛が、わしを身受するといふて追付手附を渡す相談、聞と其儘知さうと、思へど叶はぬ勤の此身、どうぞ仕樣はないかいなと、おろ〳〵涙に、スリヤ九郎兵衛は、手附の相談するといふか、今も今とて九郎兵衛が一言、もう腕づくと思へども、左七が挨拶深切を、無下にもならず後までにと受合ふたが、シテ其手附の金は何程、アイ百兩で御座んすと、いふ內奧より、花咲樣〳〵、エゝ何をいふ間もない、後に〳〵と花咲は、暖簾押上入後に、其百兩貸ましよと、投出す顏は、ヤアわりや左七、此金はどうして、イヤ夫には段々譯あることと、邊り見廻し小聲になり、元私は武士の果、大切の小倉色紙を、去年淺草の寺內にて、盜まれたる科によつて流浪の身、其盜人といふは、アノ隣に居る山住五平太、元私が朋輩、慥に彼奴が仕業と思へども、夫といふ證據もなく、付つ廻しつ伺ふ內、傍を放れぬ半時九郎兵衛、サ此奴も素性の知れぬやつ、二人を捕へ詮議せば、色紙の有所明白に知れるは必定、ガサ何をいふても非力の私、力に及はぬ無念の月日、御用立此金は、浪人しても武士のたしなみ、今日の手附の間に合せ、こなたの難儀を救ふといふも、男と見込で頼みたさ、此左七が力となり、二人を捕へて小倉の色紙、二度我手に入やうに、コレ偏に頼

御座ります、御存ならばどうぞ教て下さんせ、ハイ〳〵則其隣の近江屋、わたしも隨分お近付で御座ります、お名はへ、たいこの左七と申ます、テモよい名じやなあ、どこに居さんすえ、ハイとつと水道尻に居ります、お前獨かへ、コレお房、そんな事は聞いでも大事ない、ちよつと兄を呼出して、ハイ〳〵私が呼出して上ましよ、と內へ這入ば、テモ氣のよいお方、男振なら、氣立なら物和かでしやんとして、好た風じやと伸上り、見るうち出る綱五郎、ホ母者人、お房、俄御見物で御座りますか、ホイノ、夫はさうとちと內へも歸らしやれ、夕邊からの流連なら、酒も大方過たであらう、此春勘當赦してから、內の事はそなた任せ、ひよつと身上しもつれては、あの母があまやかし、勘當赦したばかりで、よい老舖の商賣を、散々にしたといはれては、そちは元より、行先の近い此身、死て未來で親父殿へ、どう言譯はあらうと思ふぞ、どうぞ心を入替て、糸屋の家の續くやう、思案してたも綱五郎と、打淚ぐむ眞身の意見、誤り入つて綱五郎、ハヽ成程私が不調法、ふつゝり廓通ひはやめて、ヤレふつゝり止いといふではない、若者のことなりや、友達中や廓の手前、付合もあるもの、夫知ぬおれでもないが、此お房も嫁入時分、どうぞよい處へ片付て、わしに樂させてくれ、コレ兄樣、わしや何處へも行くこといや、そんな事はほつて置て、アノナ、アノ囃子の太鼓打た、左七さんとやらいふお人は、お內儀樣が御座んすかへ、ムヽイヤありや獨住、スリヤおかみ樣はないかいと、味な所へ念押

うが、氣遣ちつとも仲の町。ヤコレ落着て居なさいと、命は露塵大丈夫の、江戸の育ぞ頼母しさ、そんなら此金親方へ、イヤサ夫では此男が、其處はたいこが取計ひ、首尾よく色紙のかへるまで、矢張わたしはたいこの左七、綱様後にとおん〳〵ばせより、揚屋をさして馳り行く、透を見合せ駈出る花咲、相も變らぬ九郎兵衞が、身受の談合わしや氣が揉てなりやんせん、左七様の心ざし、お前は受て下さんしたが、さればいの、夫に付て隣の侍、五平太めは矢張居るか、イヱ五平太はたつた今、裏の方から大門口へ、ヤア夫やつてはと駈出すを、裾に縋つてコレ待た、氣相かへてコリヤ何所へ、様子聞ねば放さぬ〳〵、ヤア面倒なと突飛し、後を慕ふて三重「追て行く、早引四ツに地廻りの、往來も絶て日本堤、鼻歌諷ふて五平太が、歸る後より綱五郎、小腰かゞめて、まをしお侍様、ちよつとお待下さりませ、ムヽ待と留たは何やつだ、イヤ綱五郎と申者で御座ります、が其元様は、山住五平太様じや御座りませぬか、成程身共は五平太じやが、其綱五郎が何の用、イヤ外の事でも御座りませぬ、其元様は小倉色紙を、御所持なされて御座るとの噂、何と卒爾ながら、ちよつと拜見仕りたい、ムヽイヤ身共覺ないわい、イヽヤないとは云さぬ、淺草寺の寺内に於て、何がなんと、ヘヽヽヽ、どうぞお見せ下さりませ、こいつ馬鹿なことをいふ二才め。酒に喰ひ醉たか。ヱヽ聞えた、覺ないこと云掛て、金でもせうといふ腹だな、惡く騷ぐと其分には赦されねど、爰は場所が惡い、サそこ退てとほせ、

む、綱五郎殿と、額を大地に押さげて、思ひ入たる其風情、いかにもお頼の一通りは聞たれど、女郎のことに金借て、肩持たといはれては、どうも此綱五郎顏が立ぬ、マア此頼は呑込れぬさ、財布を取て投返せば、ハツト左七は當惑の、胸を極めて綱五郎が、一腰拔て取直せば、是はど恟り止むる綱五郎、イヤ〳〵、色紙を二度取返さでは、此身は一生埋木の、花に呼れつ色里に、生恥さらす率頭、何と恥辱が雪れう、生て甲斐なき我命、放して死して下されと、涙ぐみたる心根を、思ひやつて綱五郎、ム丶成程、わしを男と見込で、命にかへての頼み、ハテもう夫程に思はんすことなら、頼まれて進ぜませうわい、そんならアノ聞届て下さりますか、サア頼まれて進ぜるからは、私もこんなに無心がある、爰をよう聞て下んせ、色紙の詮議の相手は侍、一人は名にある半時九郎兵衛、まさかの時は命づく、命を捨れば家が立ぬ、さつきにも母者人の意見、親の後を絕しては、折角勘當赦された、此綱五郎先祖へ對してどうも立ぬ、が爰がこなんへ私が頼み、さつきにちらりと見た、妹のお房が素振、何とあいつと女夫になつて下んすまいか、エ丶、サこれ家をさへ繼で貰へば、假令命を打やつても心が殘らぬ、突込で色紙の詮議、命にかけて取返して進ぜませう、エ丶有難いかたじけない、さうおつしやることなれば、いか樣ともお詞に從ひませう、去ながら私が難儀に付て、お前の命に及ぶ事を、ハテ何のいの、モ頼むといはれちや、一寸も引ぬが仕にせの綱五郎、九郎兵衛であらうが、侍であら

第四

繁昌の、町は八百八丁なる、其中々に取分て、本町二丁目中根屋と、暖簾古く仕にせたる、店には母や娘のお房、手馴し業も糸による、さゝがにならで夕暮の、空に焦るゝ花嫁は、散事知ぬ入相の、鐘待兼る風情なり、表へいそ〳〵此家の伯父、唐棧留の袴さへ、昔渡りのかうかつ親仁、あの屋十兵衛に付添て、左七もあぢな縁の糸、結ばれし身も紛失の、色紙の行衛詮議のよるべ、聟と呼るゝ昨日今日、町の目見えを引連て、歸るを見るより母娘、コレハ〳〵十兵衛様いかいお世話、伯父様きつい御苦勞様と、挨拶あいそいつよりも、増る思ひを目の色に、出さぬ綱五郎奥より出、是は〳〵伯父者人、お年寄の御苦勞千萬、町向は濟ましたかな、ヲゝ濟まし〳〵、イヤ何妙閑殿、是に居らるゝ左七殿は、お房がきつい戀聟、アコリヤうつむくは、何も恥しいことはないわいやい、所に氏素性も正しい人と、兄綱五郎の合點づくで、夕邊さらりと祝言の盃も濟で、女夫は寢間へ這入、お袋も休ましやつた後で、綱五郎がおれへの頼、勘當のうち流浪した加減やら、兎角病身に御座る、幸ひ左七をお房に見合す上は、家相續は氣遣ない、わしも安堵しましたれば、ついでに明日町の名前も讓替て下されと、事を分ておれへの賴み、幸ひ今日は町の算用寄合、左七を連て町中目見えの上、讓替も濟み帳面も改ました、成

イヤ通すまい、足元の明いうち、そり〳〵色紙を出さいでは、奴はいひがけひろぐな、身が懐中、色紙かなくば何とする、ハテ前先見ぬことをいはうかい、色紙がなくば此體、存分にならうわい、面白い、しかとなれよと詞詰、内懐まで明ひろげ、サアどこにある、ヤ、サ見ぬかやい、兩の袂にや紙屑もないぞよ、サア夫は、ヤ大泥棒めがと、鬢摑んで土に摺付、よく太平をぬかしたな、どの口からぬかした、マ此頤かや、此腮たか、ヱヽ白けたしやツ面、見るもなか〳〵いま〳〵しいと、刀の鍔にて眉間くわつり、流るゝ血汐、ヤわりや男の頬に疵付たな、ヲヽ付たりやどうする泥棒めと、鍔も砕と續け折、モウ是迄と綱五郎、ひらりと拔たる刀の光、肩先ずつくり五平太が、拔合せててう〳〵〳〵、打合ふ光は闇の夜の、星か螢か電光石火、あやふかりける次第なり、始の深手にたゞよふすきま、疊かけ〳〵、乘かゝつて綱五郎、咽笛ぐつと十々止の刀、心地よかりし有樣なり、うそ〳〵來かゝる半時九郎兵衞、樣子聞とも白刃の血刀、襦袢の片袖引ちぎり、血押拭ふて投やる後、そつと拾ふて歸るとも、知ぬ綱五郎溜息つき、慥に色紙と思ひの外、ムヽ偖は氣取つて九郎兵衞に渡したか、何にもせよ此死骸、人に見せじと見廻す所へ、提燈さげてあの屋十兵衞、火影にすかして見合す顔、綱五郎じやないか、伯父者人か、提燈吹消し一散に、闇はあやなし三重

ムヽ面は是まで見知て居れど、物いふたは一昨日初、ガマ何と思ふて此方の内へ、イヤ別の事でもない、一昨日から僕に逢ふて後追ふて廻つた、ガ大方内に居様と思ふて來た譯は、此間僕が取た花咲か手附證文、何とおれに呉ぬかい、ハテ御山な、高が女郎の出入、其様に聲高にいはいでも、やる筋なれば此綱五郎、未練は殘さぬ、さつぱりとやる、ガ又やるまじき筋なれば、金輪際よりやるまいかい、ムヽコリャ尤じや、そちも大枚の金、百兩といふ物出した手附證文只貰ふといふでもない、コレこれで貰ふと懐より、取出すは血汐の片袖、見るよりはつと綱五郎、身の一大事二ツには、母に聞せまじ知せじと、心は千々に塞がる胸、ヘヽヽムヽ何と結構な代物であらうがなア、サいやといへば代官所へじや、アヽ是九郎兵衛、成程此の手附證文、僕れにやらうが明日まで待てくれ、コヽならぬわい、待くらゐなら又外に、結構な代物があれど、急に金にならぬ故、モ明日のことは措置、一時も待ぬ半時九郎兵衛、ぐづ／＼ぬかしや此袖が、たつた今代官所、サ否か應かの一口商、ぎり／＼ぬかせど憎體も、握つた證據に腰強く、弱身へ付込いがみ面、ハテモさういやりや是非がない、證文は渡さうが、襦袢の事は命づくじや命はちつとも惜まぬ共、今死るまでも母者人の耳へ入とうない、コレ爰は僕も男づくじや、何と河岸まで歩んでたもらんか、其上で證文と、其片袖とを引替に、ムヽハテもう證文さへくれる氣なら、夫ほどの事は不承しやうわい、サヽこい、來いと先に立、無理の理詰もつてでない

程〳〵其事は今朝もちよつと聞ました、ハテもう脊丈のびた此お房、餘所へ嫁入さすれば兄の物入、五年六年內を出て、うき艱難しやつた綱五郎、兎角アノ子の心任せにしてやつて下さりませ、兄や娘や聟殿の、手にかゝつて介抱受け送られうと思へば、こんな嬉しい事は御座らぬ、わし程果報な者はないと、悅ぶ親の心根を、思ひやる程綱五郎、明日をも知ぬ我命と、知れぬ母のいたはしやと、ぐし〳〵胸へあたりの人目、まぎらす煙草の煙より、敢果なき此身と喰しばる、吸口かみけるばかりなり、知ぬが花聟左七も挨拶、不思議の御緣で親子の約束、モ何にもどんと存ませぬ私、とかく宜敷お指圖を、お願申上まする、ヲゝ此十兵衞も年寄て子とてもない身、此方から賴みますぞや、ヱゝ聞ば生れは上州とやら、イヤもう斯成も皆先生の因緣づく、ヱゝかういやおぢな云分じやが、親も子も義理ある中が猶大切、お袋も是からは此左七殿を、綱五郎じやと思ふて可愛がり、ハテ其位に思はねば、隔た親子はなじゆくせぬもの、又綱五郎は勘當赦さぬ昔と思ふて、ないものにして居やつしやれ、ハゝゝア、とつともう餘り目出た嬉しうて、何やらいかう理に入てきさうな、サゝ是から奥へいて、打解た盃しませう、ヲゝそれ〳〵夕邊の殘でコレお房、アイ〳〵本に御苦勞休め、伯父様に酒一つ、兄様お出、左七様、こちの人さへ云兼て、また恥しき初女夫、打連奥へ入相過ぎ、空の雨夜の暗きより、心の暗き半時九郎兵衞、門口より聲高に、綱五郎内にかと、いふを聞付出る戸口、顏を覗いて、

の上から二十年の、年月育てあげられし、大恩のある父様に、親子の縁は身を切より、つらい悲い憂思ひ、まだ其上にはづかしや、十月のお腹を苦しめし、産の恩ある母様に、又苦をかけに戻されし、切ない苦しいわたしが胸、あけていふのも恥しながら、母様、わたしやお屋敷の、御法度を背いたわいな、アヤア〳〵何といやる、御法度を背たとは、偖はそなたは不義しやつたの、アヽ是お袋、不義なればサ命がない、そこを存て何にもいはぬ、サ其云れぬ病の相手は、不慮の儀に付御暇、今此江戸に居るとのこと、聞と彼めが癪の種、其上に早七月、屋敷の内で産落さば、間難とてもなさ、少身の某が住居、お上へ知れたら娘も孫も、いぢらしい目を見やうかと、夫が不便さ可愛さに、二十年來手塩にかけ、蝶よ花よと樂みし、たつた一人の此娘を、縁切て返しに參る身が心、どの樣におもはうと思やる、アヽ町人の身分ならばな、早速聟よ舅よと、取結びもあるべきに、刀差す身の情なさ、召連參る道々も、彼が姿を見るに付、何の因果で是程まで、育上たる娘に別るゝことじやと思ふ程、一足歩めば二足後へ、寄年の身の便なさ、子といふものゝあればこそ、忠も盡せ義も磨け、一人の娘に引別れ、何樂みに扶持知行、淺ましの武士やと、表を立て何事も、いはぬといひし詞の下、取亂したる恩愛の、涙は武士も町人も、別に替らぬ忍び泣、跡も涙に娘は猶、有難涙名殘の涙、涙々は玉川の、六ツの袂を絞りけり、彌三兵衛は泣目を拂ひ、ハア是は武士のあるまじき未練の涙、お袋の手前も面目ない、シ

と、云れぬ血汐の片袖に、道理が負てしほ〳〵と、伴ひ川岸へと行空の、親ならぬ、親の心の闇ならで、義理の子故に迷ふ身の道さへくらき町筋を、尋ね尋ねて石塚彌三兵衞、小糸を連て提燈の、火影にすかす門の口、絶て程經し老人の、心覺に打頷き、戸を引明て上り口、頼ませうと訪ふ聲、母は聞付一間を出、行燈差出し[illegible]などにしづ〳〵と、娘を伴ひ石塚彌三兵衞、ホヽ久々中絶致せし某、御見忘れも御尤、召連たる此娘は、藁の上より養子に貰ひし、上州赤城の家中、石塚彌三兵衞で御座る。マア〳〵是へお通りなされませと、奥底もなき挨拶に、上座に通れば母妙閑、血筋ゆかしき我子の傍、ホヽ産落した母なれども、藁の上から養子にやつたそなた、モ本に我子ながら始て逢も同じ事、ヤレ〳〵マア美しう、よい器量に成人しやつたのう、親御達の育のよさと思はるゝ、コレ〳〵マちと仰向て顔見しやいのと、餘念なき母、娘は只、さしうつむいて答なし、彌三兵衞詞改めて、イヤ是お袋、はる〴〵と尋參つた仔細といふは別儀でない、樣子あつて此娘、實の親御へお戻しまをす、ヱヽそりや又何故で御座ります、サレバ二十年の今日が日まで、實の親より大切に、孝行にしてくれたも、縁なきことは力なし、といふて娘にけし程も科はない、樣子は彼に聞れよと、濡り勝なる詞のはし、ムヽお怒の體もなく、御不便におつしやりながら、實の親へ戻すとは、ハテ心得ぬコレ娘、樣子はどうじや、サいふて聞しや、早う〳〵とせつかれて、小糸はやう〳〵顔をあげ、藁

やゝと駈寄れば、姉樣かいなと手を取合ひ、眞は泣寄おとゞいが、何に付ても目にうるむ、涙は女の道具なり、ヲヽ妹何にも氣遣に思やることはないぞや、綱五郎樣といふ憐な兄樣のある上に、夕邊ござんしたこちの人、左七樣とて夫は〳〵氣立のよい、モウ〳〵〳〵母樣の前で云にくいが、其モウ男のよさ、そなたもわしにあやかりして、あんなよい殿御持す程に、何にも案じることはないぞや、ヤアノ母樣へ、左七樣起して、此子に近付にせうかいな、ヲヽ聟殿もねむたかろが、本の里子の戻つたやうに、うい〳〵しうして居やる、左七樣にも引合して、此暮が賴ませう、ちよつと起して呼でおじやと、詞の內に妹お房、一間へ入てよい男、持た自慢を今逢た、妹に見せる鼻の先、行燈の火に見合す顏、ヤアお前は、アヽ是々、サコレ妹御、何もかも一間で樣子は聞て居りました、何にもマア今晩はおつしやるな、不思議の御緣でこなたの內へ參るからは、兄弟同樣のこな樣の身の上、身に引かけてお世話致す〳〵、御身の上の色咄には、お袋や姉御の傍ではさし合もあるもの、ナコレ何事も推量致して居りまする、目で留られ詮方も、いふて能やら惡いやら、憎い中にも可愛男、差控ゆれは夫ぞとは、知ぬが佛母と姉、ヲヽ聟殿よい推量、身贔負をする樣なれど、モ若い時にはある習ひ、モ思ひも寄ぬ對面倒な小姑が、どこからやら戻つて來たと、うるさうも思はしやろが、こな樣の妹と思ふて、遠慮なう呵りまはして下さりませ、賴ます、私やもう何かの氣草臥、奥へ行て休みます、若者は

テ御子息綱五郎殿は御留守よな、御歸宅の節よきやうに賴入、ヤ何小糸、いふまではなけれども、若彼人にめぐり逢ば、夫とても貯へなき浪人の身の上、假令袖褄結んでも、裏屋長屋の住居するとも、貞女の道を忘るゝな、無事で暮せよ、お袋さらばといひ捨て、しづ／＼立て表の方、見返りもせず出て行く、是のう暫と駈寄る戸口、外からぴつゝやり立切線、別れてこそは立歸る、後は親子が詞さへ、泣連歸る雁の音も、おぼろ／＼に春の夜の、霞か埋む鐘の聲、跡は娘の傍に寄、コレ小糸、何もきな／＼と思やることはない、世間にない習いじやなし、そして本に姉のお房、兄弟とはいふものゝ、二十年ぶりでの名乘合、また近付にする人がある、夕邊姉のお房に能聟とつての、夫は／＼よい氣な人、本に明日まで延すもどうやらいなもの、マア／＼今夜引合せう、姉や、お房／＼と呼聲に、アイと答へて姉お房、一間の內より立出て、ヲゝ母樣赦して下さんせ、夕邊夜の更た加減か、酒が廻ると伯父樣も御寢なる、わたしも左七樣も、アノ四疊半でふせりました、そしてアノ其處に御座る女中樣は、どこから見えたお客で御座んすへ、ヲゝ我身としたことが、いかに夕邊の草臥じやとて、さつきにからのもや／＼、二人ながら根から知ずか、知ぬがとは何事じやいな、さればいの、爰に居やるは二十年以前、藁の上から養子にやつた、そなたの妹じやわいの、マア／＼樣子は長い事、養父石塚彌三兵衛樣がたつた今、連て戻しに御座つたわいのう、ヱゝそんならあの子が妹で御座んすか、のう懷

間を待兼て、小糸は左七にしがみ付、聞えぬわいなと泣出す、口に袖あて、コレ聲が高い、譯を語るもせつろしい此時宜、コレ紛失の色紙詮議の間、そなたの爲にも實の兄、綱五郎殿の情にて、暫よるべの此聟入、胴慾な者聞えぬ者と、恨むは重々尤なれど、愛をそなたの親里とは、夢にも知ぬ此左五郎、去ながら、夕邊の祝言今日の讓、一旦綱五郎殿へ契約の、義理を立るも今宵一夜、今夜中には色紙の有所も知れる筈、コレ暫の事と辛抱しや、殊に又アノお房が心ざし、是とても捨られずと、詞に小糸は恨み泣、左五郎樣、聞えませぬ、ソモヤ二人が馴染たを、いふは今更愚痴なれど、去年の彌生の雛祭、桃と柳の女夫花、浦山しいといふたのを、目で合點して其時に、柳の糸の名によせて、私は三千年かはらぬと、花によそへて謎々を、とく下紐の結ばれて、お身の難儀の憂別れ、只ならぬ身を胴慾に、何のいなせも音信も、泣てくらせし憂月日、聟入せねば色紙の詮議、しられぬことでもあるまいに、たつた一夜が二夜さの、姉御の心ざし捨られぬとは餘りな、移り心と取付て、恨かこつそ道理なる、左七は只ハア〳〵と、手當やうにお房か手前、奥を見やりて立つ居つ、うろつく中に姉お房、茶碗片手に黑丸子、サア〳〵一ぺん煎て取て來た、白湯も涌して來た程に、一口呑やとさし置ど、腹立涙に身を投伏、正體なければ夫ぞとは、露知ぬ身の氣も付ず、ヲヽコリヤもう餘程きつい癪、今さはつたら惡からう、此儘寢かして置がよい、モウ夜も更た左七樣、サア〳〵ごんせと手を引れ、何と詮方

若同士、コレ小糸、聟殿や姉にも何かの話しや、ャ夫はさうと此綱五郎、又どこへぞ行きやつたさうな、ア薄着して風引ねばよいが、本に苦のやむ隙がないと、兎に角物を思はする、子故にかこつ我居間へ、入やいるさのつき穩なさ、左七小糸は顏と顏、わけて云れぬ、もつれ糸、お房は立て押入の、蒲團取出し塗枕、今宵は伯父様もお泊、妹も奥に寢やるであろ、どうやら奥は氣が置るゝ、サア左七様、二階でお前と私は寢て、誰憚らぬ一ツ夜着、サア〳〵妹、そなたも早う、母様のお傍へ行てもう休みや、サアござんせと嬉しげに、いそ〳〵したる姉娘、ヱヱ何のこつちやいな〳〵〳〵、ホンニあたお目出度、あた阿呆らしい、又聟様も聟様、こんな處へ聟入するといふ樣な事が、マ何處の國にあるものじやいな、コレ〳〵妹なに云やる、斯な處と卑下しやるは尤もやが、今夜からはこちの旦那殿、そなたもどうぞ主の世話になつて、又主のやうなよい男、持してやらうと又しても、男自慢が口先へ、出るに付ても燃上る、胸の焔炎のやる瀨なく、嫌で御座んす、何のよい男の何のとて、人の心を思ひやりもない、畜生のやうな、猫のやうな犬のやうな、モ本に〳〵私や嚙付たいと、袖を喰しめ〳〵て、身を顫はせし腹立涙、道理と思へど此場の此宜、いふにいはれず胸板に、釘かすがいを打るゝ思ひ、悟れまじとコレお房、二十年も育られた、爺御に利れた水離れ、是りやきつい疳癪と見ゆる、夫黑丸子でもあるなら、白湯も一口持ておじや、早う〳〵に何の氣も、付ぬ未通の姉娘、奥へ行く

石塚彌三兵衛殿へ養子にやつた妹、マア〳〵何はともあれ健勝で嬉しい、ヤ夫はさうと母者人、少し話たいこともあり、コレ小糸、そなたも草臥て居やうし、奥へ行てもう休みや、アイヽサヽヽ、アイ行きや、早う〳〵とせり立られ、休む心は泣〳〵も、只眼にかゝる二階の方、思はじ見まじと思ふ程、思ひやる瀬も夏の虫、我をこがせる煩悩の、くらき火蔭のねたましく、是非なく奥へ入にけり、後打見やり綱五郎、母の傍へさし寄て、ヤコレ母者人、ちと無心があるが聞て下さりませぬかいヽ、ヲヽあの人としたことが、親子の中に無心とは何事じや、いや外のことでもない此綱五郎、又勘當がしてほしい、ヤア何といやる綱五郎、尤若氣の廓通、死しやつた親父殿の堅い氣で、勘當をさつしやつたも、本の鹽踏すため、追出した其後で、母が案じは幾世の思ひ、五年六年泣暮し、漸と尋合ひ、勘當赦して間もないに、又勘當してくれとは、氣が違ふたか綱五郎。アいや氣も心も違はねども、本のたとへにいふ通り、乞食三日すると忘られぬと、勘當赦されて内へ戻つて其氣づまり、もう〳〵商賣がうるさうて、内に居ることがいやで、ヤヽ第一こなたの顔見る事が眞から底から、どこんといやじや、じや程に、たつた今又勘當して下され、いやといはしやつても、どういはしやつても、こちから親を勘當じやと、投出す詞に母親が、愛想もこそも付つめた、腹立涙聲ふるはし、ヤイ罰あたりの不孝者め、是程に思ふ此母に、何か不足で其樣な、愛想づかしをようもいふな、モウ〳〵とんと思ひ切た、望の通

見かへる聟、何の心もなまめく姉、身を顫はして妹泣、三人三ツのかなわの火、登る二階は燈火も、いとしめやかに見えければ、小糸はあるにもあられぬ思ひ、前後不覺のうらみ泣、千の万のといふたとて、姉樣のことなれば、所詮此家で添れぬ緣、とは云もの丶左五郎樣、替り安いは男の癖、ひよつと私に愛想がつき、姉樣と此家で、一生添ふといふ樣な、ひよんな氣にわらしやんしたら、私やマア何とせうぞいな〳〵、ヲ丶さうじや、生て憂恥さらさうより、憎い男へ面あてに、死ると覺悟極ても、又引さる丶我夫の、心は何と白紙や、のべに今置く露淚、口紅紛筆の我とわが、思ひ血を吐く時鳥、月がないたか一聲も、哀をそゆるものとては、夜半の嵐のしみ〴〵と、身にしむ母の恩の程、思ひ續て綱五郎、九郎兵衛に契約の、時刻は今宵明六ツの、鐘はかねての生死の境、今一度母に今生の、暇乞をと我家の軒、戶を引開れは驚く小糸、誰樣じや今頃に、どこの人じやと書置を、袂へ隱す顏形、じろ〳〵眺め綱五郎、どこの人じやといふ、こなたはどうやら見た樣なが、マアこなたは何所の人じや、アイ、私は爰な娘で御座んす、ヤ何じや娘じや、アイ、そしてお前は何所のお人じやへ、私かへ、私は爰の息子じや、ヱ丶そんならお前が兄樣、綱五郎樣でござんすかと、いへど不審の一間より、ヲ丶合點が行まい綱五郎、戾りやつたかと母妙閑、一間をとつかは立出て、ヲ丶不審は尤、コレ此娘はそなたの妹、藁の上から養子にやつて今の名は小糸、譯はゆるりと明日でも話さう、ム丶すりや、

入譯左七の樣子、マヅかう〳〵して呉とおれへの頼み、ハテもう返らぬ事は是非がない、一先爰を立退さうと思へども、云ば一軒の主、欠落になつては家が立ぬ、幸ひ左七にお房を娶せ、聟にしたのも、コレ、こなたの心を休めうと、綱五郎が孝行、私も又世を廣う綱五郎を庇保ふ心、町の讓も濟だ上、夫からは上方へでも落さうと、心を碎いた昨日からの、コレ此したら、死れた兄貴佐右衛門殿が、臨終の枕元へおれを呼で、コリヤ十兵衛、勘當はしたれども、只不便なは綱五郎、性根さへ直つたら、勘當赦して内へ入、おれに替つて世話してくれと、コレ〳〵苦しい中ではろりつと、涙を滾して目をふさがれた、兄貴の末期の詞といひ、おれじやと云て子とてはなし、甥と云のも綱五郎一人、若や繩目にかゝらうかと、昨日今日も一粒の、菩薩か咽へ通りませぬわいの、何の因果で此樣な、憂目を見せてくれるぞと、歎けば母は正體なく、夫程までに綱五郎を、可愛がつて下さるが嬉しう御座るかたじけない、が去とては聞えぬぞや綱五郎、人を殺せば科人と、辨へ知ぬそなたじやなし、明日をも知れぬ年寄た、此母に憂目を見よといふことか、是を思へば死しやつた、親父樣が仕合せじや、一年後に生殘り、情ない目に逢ふことやと、母と伯父とが手を取て、十兵衛樣お袋と、顔見合せて一時に、わつと泣出す二階にも、お房が泣聲段梯子、踏はづすやら落るやら、情ない左七樣が〳〵、書置殘して二階から、どつちへやら行しやつたわいなあと、聞て悔り綱五郎、共に慌てゝ十兵衛も、ドレ

り勘當する、出て行きをれ、コリヤかたじけないは、アヽ案じるより産が安い、とおまちやな母者人、ぐど〳〵〳〵と埒が明まいと思ふたが、イヤもうとんとのゝ宮、世間が廣ふなつたやうな、ヤコレ親でなければお房めも、今夜戻つた小糸めも、兄弟でない程に、重てどこで逢ふとも、物もいふな他人じや、と言聞して下されや、どりや是から出掛うと、大手を振て表の方、綱五郎待や、親子は一世、此世ばかりで又逢れぬ、母が顏も見もしたり、そなたの顏も此母にとつくりと見せてたも、エナヽ何といはつしやると、肝に應へて立留れば、二階の障子しめ明に、樣子立聞聟左七、母は溜來る涙ながら、人を殺した科のある綱、親兄弟にかゝらぬやう、妹のお房に聟取て俄の讓、其上勘當してくれといやるそなたの心、又さつきに奥からちよつと見た、九郎兵衞とやらが持て來た、血に染つた片袖は、アリヤ私が縫ふたそなたの繻袢、エヽサ是、何ぼ女子に生れても、そなたを産だ母じやわいのう、壁に馬を乘かけた樣に、昨日から今日の時宜、其處へ心が付いでかいのう、ムヽスリヤ、何かの樣子を御存か、ハア、はつと驚く綱五郎、二階も障子を締切る胸板、一間の内より伯父十兵衞走り出て、コレお袋、私もとも〳〵隱したを了簡して下されや、勘當赦して間もないに、廓通ひの綱五郎、意見して連れ戻ろと、尋に行く日本堤、行かゝつたれば人殺し、怖々ながら提燈で顏見れば綱五郎、コリヤたまらぬ、マヽどういふ譯と樣子問ふ間も人目のこはさ、無理やりにこちの内へ連て戻り、何角の

ひ化粧も宵のまゝ、髪も艶なき油町、お前の目元のしほ町に、いとしらしさの淺からぬ、あさくら橋の橋柱、淵は瀬となる人心、もし兩國の二道は、風に靡くや柳橋、何の變らういつまでも、嘘じやないかやかや町の、可愛さを目にもりた町、正八幡も往昔の、武士の冥加に盡たりと、憂事に氣を黑船町、とは目に夫と觀音の、塔は五重か三重の、罪深き身にいとゞ猶、義理の父さん眞實の、母樣も嘸お腹立、國から深い中じやとは、知せ給はぬ姉樣の、私を恨んで御座んせう、堪忍してとばかりにて、縋り付のもつかるゝも、淚にくれの朝顏や、共に萎るゝ顏と顏、男も淚にかきくれて、死る覺悟に書殘し、爰までは出たれど、色紙を搜し出すまでは、死に死れぬ我命、しばし浮世をかくれ笠、身の置所も定まらず、そなたは糸屋へ立歸り、身二ツになり腹な子を、大事に育てたもいのと、いへば女は縋り付、無理は男の癖なれど、斯樣難儀になつたのも、根をたんだへて行時は、みんな私が戀路から、お前に浮世を忍ばせて、何と身も世もありそ海、若和布かる磯猿猴すむ、山家住居も野の末の、月もる宿もあばら屋も、何の苦にせう厭やせぬ、連て退のが嫌ならば、とても覺悟を極めた此身、お前の手にかけ今此所で、殺してたべと取付いて、はかなぐど〱口說言、花の街や花の露、ぬれて戾りの醉ざまし、うはさ櫻はつひ風かはるわくしよもの、見事に咲たとは、咲た櫻を染たとさ、染た此紋どうじやいな、かげひなた、あるのはしんき、つゝいゝもの、梅を誓に折とは何じやいな、昨日にかは

〳〵〳〵マア〳〵其書置を讀で見やと、老のそゞろの身もふるひ、行燈提げる手もわな〳〵、土器揺込む眞暗がり、エヽどんな人じやと綱五郎、勝手へ燈しに行隙に、小糸は一間を忍び足、夫の後を慕はんと、心あてども潜りを難なく、表へ立出れば、小屋根に隠れし左七が門へ、ふはと飛たる妹脊の縁、物をも云ず手に手を取り、軒に忍べば綱五郎、やう〳〵燈し來る行燈、お房がうろ〳〵又ばつたり、エヽ面倒な、讀には及ばぬ其書置、此綱五郎が樣子を聞て、死る覺悟に違ひはあるまい、今宵中には手に入る色紙、左七が死ぬ其内に、取返して渡さねば、折角盡した心ざしも水の泡、母者人さらば、伯父人後を頼と云捨て、一散に駈行ば、お房も夫の行衛をと駈出るを母と伯父、留むるうちに外面の二人、道を違へて妹背鳥、塒を立や明六ツの、鐘は上野か淺草か、夜明ぬうちにと三重

第五　道行妹背の組糸。

いとしさはいとゞ染込む小紫、色に出たる江戸鹿子、いふにいはれぬ恩と義理、戀と情にからまれし、うき身を何と左五郎が、小糸諸共本町の、糸屋をぬけて出る夜は、まだほの〴〵の朝霞、見えつ隠れつ行道の、あてどもいづく一筋に、繫がれ出て通町、三丁過て今の身は、してうにかゝる惡縁の、いかなる業かてんま町、死出の旅路の門出は、留てとまらぬ旅籠町、けは

を殺し、死體をどんぶりいはしたまで、黒い眼で睨んで置た、こな言ぬかしやたつた今、代官所へ注進して、三寸繩に縛上させうか、スリヤどういふても色紙は渡さぬな、エイ、毒喰ば皿、儕も生ては置れぬと、いふより早く九郎兵衛が、先を取んと拔放し、切付るを身をかはし、拔合したる白刄と白刄、光りに恟り駕の者、喧嘩〳〵と狼狽騷ぎ、駕を捨てぞ迯て行、こなたは互ひに身の大事、命限り根限り、疊かけてぞ三重切結ぶ、剛惡不敵の九郎兵衛も、義心の刄に切立られ、のたれ廻つて死でけり、駕の繩目をやう〳〵に、引切り〳〵駈出る花咲、綱五郎樣、コリヤ何にもいふな、心を付よと立寄て、死骸の懷中、搜り見れども色紙はなし、コハ〳〵いかにと訝る中、爰に何やら落てあると、取上るを綱五郎、すかし詠て、ヤアこりや質札、偖は色紙を質に入、身受の後金渡したな、是さへあれば氣遣なし、かたじけなしと押戴く、後にはら〳〵所の大勢、ヤレ人殺とわめく聲、砂を摑んで眼つぶし、花咲來いと引立〳〵、川岸に幸ひ繫る猪牙船、飛乘る間もなく櫓を押あて、後しら波とぞ三重成にける

第七　行德の段

下總の、行德村に住ながら、身に德もなき貧しさは、持て生れたぼんのくぼ、茂治作といふ小百性、二畝か見世にならく〳〵と、草履草鞋の紐よりも、細き煙の詫住居、岩藤は此家へ敷金

るとさ、明日は筑紫へ行んすか、留る袂におだ卷の、糸による柳はしんき、亂れ髮、諷ひさゝめく聲々に、聞流し行水の音、大川筋の舟よばひ、空しらじ〱と東雲に、すは身の上を人や知る、人や留めんこなたへと、手に手をとりの双羽翼、可愛となけど憎まるゝ、里の鴉の告げ渡る、廓の樣子よそながら、聞も心の力草、知邊の方にしばらくは、身を寄せ浪や花川戸、花の姿や花の袖、吉左右待ん待乳山、吉原さしてぞ三重「急ぎける

第六　駒形の段

聖天町の方よりも、息をばかりにゑいさつさ、ぐる〱卷の吉原駕、後からひつ添ふ半時九郎兵衛、駒形堂につく息杖、向ふへ人影南無三寶、見付られなとよけるうち、待た〱と駈來る本町、棒鼻しつかと支へたり、コリヤ何とする綱五郎、イヤ何ともせぬ、いかにも儕が望の通り、百兩の手附證文、繻袢の袖とかへ〲に渡したれば、そちの十分、おれも又そつちから、ちつと受取たい物があるわい、ムヽそりや何を、イヤ外の物じやない、定家卿の小倉色紙、五平太が手から請取、儕が持て居ようがな、ヨ何がなんと、イヤサあらがうな九郎兵衛、宵に儕が詞のはし、急に金になりにくい代物と、ぬかしたが此方の聞かけ、三寸爼板見拔た綱五郎、きり〱渡して貰ふかい、ムヽさうぬかしや面白い、たとへ證據は渡しても、日本堤で五平太

アヽ高がよぼけたひんこ親仁、夜晝おれが血氣に任せてせこめたら、半期か一年で見送つてしまをゝし、聞や吉原に娘とやらが勤して、大分よい女郎と聞ば、本に無盡をかるけ氣で、親子になつたよしみには、年が明たら年切増、年が明たら年切増、皺のよるまで勤さしたら、萬更捨金にもなるまいと思やこそ、貧乏神の神主を、見るやうなこなたを、おれが男に持たじやないか、サアかういふが腹が立なら、勝手にしやれ、こなたの身の上といふは、油つぎの會所を見る樣な、アノ佛壇と、對王時代の古つづら、底の拔た鍋釜と、紙屑籠も一所に脊負て、今此内を出て行なりと、貸た金を耳揃へて戻しなりと、二ツ一ツの返事じやと、口へ出儘の惡口雜言、いひ込られて一言も、もぢ〳〵として茂治作が、律義一ぺん返答も、貧苦をくやむばかりなり、折から來るは、めくり友達、さんまの彦治がぬつと入、ハアヽ久しい物の、又女夫喧嘩でゑすか、大方親仁殿の口が過たものじやあろ、かういや婆樣の贔負をするやうなが、何もこなたがいふ筋はない筈じやて、重てからきつと嗜まつしやれ、いやコレお岩樣、もう〳〵今日は私が挨拶、了簡さんせ〳〵、そして今夜は蕎麥切屋のこんかてら、お前を連て暮早々、來てくれと賴んで居た、アレ德願寺の暮六ツが鳴る、エヽそしてまだ内證で、こなんに話して儲る口もあり、サア〳〵行うじやあるまいかと、人喰馬に相口の、儲と聞て顔色かはり、ハテもうこなたの挨拶なら、了簡ならぬ所なれど、無下にもなるまい、コレ親仁殿、重て乾度たしなま

持て後連と、形も容もかはる世も、金の光りの高枕、茂治作は德願寺の同向も濟でいつきせき、歸る我家の門の口、見れば女房が圍爐端、ふんぞり返る寢姿に、呆れ果てつごと聲、コリヤ嗅、お岩〳〵、ヱヽマア〳〵脊戸門を明ひろげて、何としたどぶざりさま、起ぬかやいと枕元、つぶやく聲に目を覺し、ヱヽ八釜しいわいの、脊戸門を明て用心が悪か、何故内に居やらぬぞいの、ヤイヤイ、儕マそんな口をきヽおるまい、毎晩〳〵夜を晝と、めぐりを引にうせては夜を明し、晝になると立な物を横へもせず、おれがちよつと德願寺樣へ御同向に參つてくる内、起て居ることがならぬかい、アノ愛な引ずり女子め、と疊叩いて腹立聲、お岩はぢら〳〵茂治作が、顏を細目に起上り、コレべら坊親仁、こなたはコリヤ氣が違つたの、何じやと思ふて其樣な、太平をいやるぞいの、コレ此おれはの、赤城の奥御殿で、お年寄樣ともいはれた身、何の爲に數金持て、こなたの樣な老耄の、何の益にも立ぬくにや〳〵〳〵と、わたしんきな男を持ぞいの、おれが心任せに暮さうと思やこそ、十五兩の末進に詰つて、ぎつちかつとして居やつた金を立替、雨が降と傘さヽねば、住れぬ家を建直し、たつた一人客があると、産月に氣の付たやうに、騷ぎ廻つて借あるく、諸道具を買ならべ、見世にアレ少づヽの物を置て商さすは、コリヤマア誰が金じやと思やるぞ、皆此お岩樣のお金じやぞや、本におれも此内へ來る時は、まだみづ〳〵としたわしが、あんな男を持たといふは、餘程無分別じやが、とは思ふたれど、

までは、我さへ浮世忍ぶ身に、そなたの風情目に立ば、一倍心が引さるゝ、親仁殿をよう頼んで、隨分人目にかゝらぬやう、暫く身をば隱してたもと、いへば花咲涙聲、ひよんな私に繋かれて、うき御難儀をさせますと、思へば胸が碎ける樣な、貧しう暮して御座つても、頼母しい私が父樣、去ながら聞ば此春母樣を、呼しやんしたとのことなれば、お心知ぬ今の母樣、お前は大事のお身の上、暫く後の辻堂に、待て居て下さんせ、父樣に私が逢て、何かの話した上で、後からお知せ申ませう、ヲゝ尤、そんなら必辻堂に、親仁殿へもよいやうに、頼むぐ／＼と綱五郎、辻堂さして引返す、花咲は父親の、床しなつかし逢たさも、蜒持足のうら若き、戸を押開て入ければ、茂治作は看經の珠數繰さし、そなたじや誰じやと見合す顏、ヤアそなたは娘のお咲じやないか、とゝ樣久しうござんすと、いふに立寄、ヲゝマアようおじたつの、ヱゝモ夫からどんと便もないが、どうかかうかと案じてばかり、ヤ夫はさうと、今時分に人も連ずムゝハゝア、何やらそぶ／＼そなたの樣子、聞ねではなけれども、今のかゝの手前を思ふて、齒ぶしへも出さなんだ、そして其、云かはした綱五郎殿とやらの事、昨日も今日も談義の場で、餘所事に聞て居て、心がもや／＼案じられたが、其お人はどうしられた、アイ譯をうす／＼御存ならば、お話まをすも長い事、たつた今門口まで、お送て來てゝおつたれど、今の母樣のお心も知れず、マアお前に私が逢て其上でと、アノ後の辻堂に待合して御座んす筈、フゝ夫は出かし

しやれや、そして夫おれが行た留守の間に、水も汲んだり、明日の麥もよばして、佛壇の掃除から、買て來た鰒も料理して、又それ戻る時分には、茶も涌して寢所も敷て置しやれと、喚き散して錢財市、片手に提て二人連、伴ひてこそ出て行く、後打詠め茂治作が、口惜いとは思へども、勝れぬものは敷金の、才覺何と泣ばかり、しほ／＼立て火打箱、打石の火のばら／＼と、落る涙にしめる炭、漸と燈して佛壇の、佛の箔の薄かりし、縁は先立女房が、位牌に向ふくもり聲、コレ嚊、勘忍してたもや、取分今夜はそなたの逮夜、さぞや草葉の蔭からも、いらぬこととして後連持て、今にも娘の花咲が、廓の年期明歸つたら、アノわんざんな繼母めか、むごうつらう當るであろ。夫も皆おれが心からと、恨んでばかり居やるであろ、尤じや道理じやが、モあの樣な根性の、惡い者とは露知ず、アノ今來た彥治が仲人、敷金持て來る女房と、聞くと其儘後先の、聞合せもせず呼入れたは、未進を立いと庄屋殿から、嚴しい催促、娘かてとよう知つて、年切増て金立いと、在所の衆のすゝめ、可愛さうにお咲めに、長の苦界をさす悲しさ、詮方盡て敷金の、付た女房入たも、本の娘か可愛さが、却て仇になつたのじやと、生たる人にいふ如く、老のぐど／＼悔み泣、珠數をこづたふ淚なり、忍ぶ身は薄の穗風しみ／＼と、まだ近付にならねども、綱五郎は花咲を、親里に預け置、色紙の有所尋んと、二人連立夜の道、コレ花咲、九郎兵衛を殺した塲で、手に入た色紙の質札、有所は知れても請出す、金の才覺する

來た、今のそなたの母じやぞや、ヱヽ是は〳〵、お前はアノ、お母様で御座んすか、本の娘と思召、可愛がつて下さりませ、ヲヽあの子としたことが、可愛がらいでよいものかいの、取分ちいさいから廓の勤、嘸や苦勞をしやろうと、思へば〳〵悲しうて、本に〳〵夜の目も碌に合ませなんだ、マア〳〵〳〵よう戻つて下さつたと、猫なで聲も氣味惡く、イヤ是お咲や、聞きやアノ、そなたの深う云交した、其本町糸屋の綱五郎殿とやらが、アノ人を殺して欠落をしられたげなの、ヱヽ、アヽ是、何のわしに隱す事、そなたのいとしがりやる人の事、假令どの樣な事があるとても、命にかけて庇保ふ氣、定めて一所に連立ておじやつたじやあらう、サア〳〵早う呼んで來て、此母にも逢してたも、イヱ〳〵〳〵、そりやお前のお聞違、何のそんなことは、ヤイ賣女め、ヱヽいけましじ〳〵とした此面はい、そんなでいく婆じやないわいやい、其綱五郎めが殺した、山住五平太といふは、おれが大事の甥の殿、甥の敵注進して、綱五郎めをさがし、夫とも知ずふか〳〵と、うせたはおのらが運の盡、サア綱五郎めは何所に居る、有樣にいや、アイ、サいやいの、アイ、ヱヽしぶとい女郎さいめ、どうでからうせさぬかすまいと、有合ふ細引追取て、立かゝれば花咲が、とやせん方も表の方へ迯行先を立塞がり、コリヤどこへ行、よそへ行なら綱五郎が、居る處を知して行け、アノ爰な横着者、サア、痛い目せぬうち早ういへ、ヱヽし太女めじやと、かよはき小腕ぐつと捻上、用捨も荒くしばり繩、ノウ悲しや

た、よう氣が付たな、イヤもうひよんな噂を持てな、われが手前も面目ない、ちいさいから苦勞してくれた、其われが惚た男、命も何も打やつて世話する筈じやが、サ今の噂めが其根性の惡さ〳〵、こちの内にはどうも置れぬ、が能思案か有はい、ソレ儕も知ていよ、水戸街道の新宿村に、おれが妹、ナヤ儕にいふては埒が明まい、おれがつい一走りいて、綱五郎殿に逢て來う、其間留守して居や、噂め今夜もめくりにうせて、夜が明ねば戻らねば、マア氣遣はない程に、案じずと留守してをれい、つい行て來ると子故には、暗き道さへ厭なく、辻堂さして急ぎ行く、また宵ながら淋しさは、何れ在所の習かや、思ひはいつか花咲が、憂を喞てる獨言、おいとしや父樣の、年寄しやんしてお氣扱ひ、とつくりとした入譯を、御存はあるまいし、人殺しの綱五郎樣、どうて遁れぬ天の網、私も共々死出の旅、覺悟は遠から極てをります、今お眼にかゝるのが、一生のお暇乞にならうも知れぬ、何やかや餘所ながら、云たい事はたんとおれど、お顔を見ると悲しうて、一ツも口へは出ぬわいな、若もの事があつたらば、嘸お便もあるまいし、お歎を思ひやる、不孝を赦して下さんせと、憂身の上や親の事、思ひ續し口説泣、袖は涙の露しぐれ、人のあはれは白髮のお岩、見たか知たか我家の内、指足拔足立戻り、づツと這入れば花咲は、悔り仰天うろ〳〵目元、アヽコレ〳〵〳〵、何にも氣遣な者じや御座らぬ、今そこで親仁殿に逢て、咄で聞た、そなたは娘の花咲とやら、ヲヽ美しい能器量やの、私は此春嫁入て

をいろりへ焔き立、あふぎ立れば目を白黒、苦しむ婆の田樂責、心地よくこそ見えにけれ、時分はよしとさんまの彦治、婆樣首尾はとづッと入、見るより悔りコリャならぬと、逃出すを引摑、大方儕も合盜め、觀念せよと前なる井戸へ、ざんぶと打込む水の音、三人打連おちこちの、新宿村へと三重

第八　小石川の段

武藏野に、一村薄穗に出て、亂れ合たる糸筋の、分ていはれぬ戀中の、僞りならぬ本町を、死に出しも兎に角に死れぬ命暫くも、義理と戀とにつながるゝ、駒込邊の小借家を、假の浮世の假住居、店借て來て昨日今日、左七か留守にしはたらと、小糸が長屋呼わるけば、かたじけないと夕暮より、相借家の惣頭、身のすぎはいは福の神、大黒舞の槌右衛門、元手入ずに口先で、世を淡島の權兵衛と、薄い身代吹ば飛、風の神の喜左衛門、三人打連ぞや〳〵と、上れば直に座敷やら、臺所やら隔なう御念頃に致しましよ、先御亭主に近付に成ませうかい、ハイ不躾ながらアノ兄樣は、急な用でちよつとそこまで出られました、折角お招きをしまして、不調法な亭主ぶり、モウ歸らしやんすで御座りませう、夫までに御酒一ッと、恥しさうに出すちろり、盆に載たる筒茶碗、見るより先へ魂は、酒はゆなりし呑助達、腰はお留守に淡島權兵衛、手早

と花咲が、身もだへしたる叫び泣、ヱヽ胴欲な情ない、いかにまゝしい中じやとて、能々の縁なればこそ、親となり子となるも先の世からの因縁づく、元より知ぬことなれば、責殺さるゝも厭はねど、あんまり氣強いかゝ樣と、身をふるはして泣しづむ、ヱヽまだぬけ〳〵とわらがうかど、繩先柱にくゝり付、庭に有合ふ青松葉、いろりへへし込押込んで、團扇おつとりばつた〳〵、煽ぎ立たる苛責の責、娑婆の三途の白髮婆、眞黑々と立上る、煙の中に花咲が、阿鼻叫喚の苦みも、夫の爲と胸をすへ、覺悟はすれど苦しさつらさ、父樣戻つて下されのう、父樣のうも煙にむせ、聲さへも出ぬ地獄の責、目も當られぬいぢらしさ、ヱヽ儕も〳〵情のこわい、是でもいはぬか、ドレ〳〵モウ是から、むごい料理をせざなるまいと、出刃庖丁をおつ取て、傍り見合し有合ふ砥石、ねた刄を合す折こそあれ、綱五郎を引連て、歸る茂吉作我家の内、娘の泣聲綱五郎、肝に應へて門の戸を、はつしと蹴破り駈入て、此體見るより飛かゝり、婆が首筋鷲摑。まつさか樣にどうと打付、縛め解けば花咲が、蘇生つたる嬉しさは、何にたとへん方もなし、ヲヽよう戻つて下さんした、最ちつと遲いと今爰で、殺さるゝのであつたわいな、ヲヽさうあらう道理〳〵、今親仁殿の話に聞たれど、是程にはと思ひしが、ヤモ呆れ果たる猫又婆め、花咲が仕返しに、是々儕をおれがさいなむ、コレ親仁殿、其荷ひ棒、任せ合點日頃の意趣、手傳はして下されと、引張蛸の棒縛り、圍爐の傍へ引据ゆれば、今の返報花咲が、松葉

玕張たる聲はり上、一ツ長屋の權兵衞殿、マ一ツ參つて猿となる、ハヽヽコリヤかたじけない、
差詰此權兵衞、何ぞ一ツするのじやが、謠は知ず、淨瑠理は節がいけず、ヲヽ有ぞ〳〵ゑらい
事をして見せう、此間見て來た堺町で、今流行る輕業、むさん飛をして見せう、コレハよかろ
と相借家に、のぼし立られ淡島が、着たる紙衣の袖なし羽織、引くりかへす黃金裏、身拵する
其隙に、大黑舞が持て出る、爼板足次其上に、四方のゑだるを積重ね、風の神が口まつの、出
放題なる口上いひ、大黑三味彈た〳〵、偖東西、いよ〳〵御覽に入ますするが、むさん飛ちん職、
舛の上の輕身、發端がしやちほこ立、足頭に付ますれば、鶺鴒の水遊び、ハリトヲ〳〵〳〵、
足外へうつりますれば香爐獅子、手を放し立上りますれば野中の一本杉、其體逆に戻りますれ
ば、元の香爐獅子と戻りまする、ハリトヲ〳〵〳〵、と口上に、一ツもいかぬ舛の上、計の輕
業見る如く、家椊碎けてころ〳〵〳〵、腰骨かまちでどうと打、庭へどつさり打こけて、物を
もいはずぎつく〳〵、小糸も氣の毒かけ寄て、お怪俄はないかと撫擦れば、相借家もうろたへ
さはぎ、藥よ水よと抱起せば、やう〳〵に人心地、アヽ〳〵恨しの風の神、大黑殿も聞えませ
ぬぞや、おれが仕付ぬ輕業を、留てくれたら此樣に、腰骨は打まいもの、アヽ腰いたや堪がた
や、思へば〳〵商賣の、淡島殿も聞えませぬと、恨しげなる聲音にて、そも〳〵紀州名草の郡、
加田淡嶋大明神、女中樣方の腰より下のわづらひは、直してやろとの御誓願に、此權兵衞が腰

に茶碗取上て、ハレヤレ〳〵そんならアノ御亭主は、お前の兄御で御座りますかへ、ハテ倩なア、私は又若い女夫の宿這入、ハアヽ何でもこいつは、お駒才三なぞとやらかして來た、宿這入じやなと思ふたが、そんならお前は妹御で御座りますかいな、シテ見ますれば爰に三味線も御座りますが、ちと承はりたいなア、ヤ倩何れも御酒か出ました、ヱヽ此長屋の付合は、茶碗で一盃切が定りなれど、ガ一盃ぎりといふも氣がヽり、われら此茶碗で二盃續て廻しませう、ヤいづれも早う御座るお酌、ハヽヽと慮外と酒追從、一ツ受てぐいと吞、倩もうましと舌鼓、待兼山の大黒舞、咽を鳴して、サア〳〵淡島殿、お盃頂戴いたさう、ハアこりや御造作で御座りますよ、見た處か二人なからいやしう育ぬ人と見えました、隨分と世帯を大切になされ、こちらも此長屋へ來た時分は、夫は〳〵苦しい事か御座つた〳〵、が大黒殿のお蔭で、どうやらかうやら暮しまする、いやマア一ツ下されうと、引受てぐいと吞、倩もよい氣味、コリヤ御酒に念か入ました、池田屋の山くか四方の赤さうに御座る、アいや風喜先生嘸お待遠、イヤもう先きにから魂はちろりの中へ飛でしまつた、マア二三盃續けて給ふといけちな上戶の息なし吞、お酌度々ハヽヽお慮外で御座ります、ヲツトヽヽヽ、ハアコリヤ鷄を呼ぶやうなことを申た、ちよつとお間を淡島殿、イヤモウとんとわれらは二盃ぎり、マ一ツ吞と此顏か、眞赤に猿の様になりまする、ハテ堵吞なりをしてじきする人、其代此大黒が一番祝儀を參らしませうと、

ゝモ本に浮世に倦果た、と語るを聞にいとゞ猶、小糸は浮む目に涙、本にお前はわし故に、たんと苦勞をさしやんすのう、思へば〳〵私ほど、親に不孝な者はない、國の義理ある父樣に、思ひをかけて憂別れ、又もや產の母樣の、お氣を背いて姉樣に、添ていさんすお前と連立、退て二人が此樣に、添て居るとの取沙汰を、聞しやんしたら嘸やさぞ、姉樣のお憎しみ、母樣のお腹立、思ひやる程悲うて、私はいつそ死たいと、夫の膝に取付て、隣憚る忍び泣、左七も涙の眼を拂ひ、アヽ埒もない事思出し、思ひ出す程留どがない、千萬いふてもかへらぬ事、さつぱりと思ひかへて、サヽわつさりとしや〳〵、偖また斯して宿這入をしたからは、何ぞ商賣がなうては成まいが、といつておれは商ひの事は何にも知ず、ヤよい思付が有はいの、そなたは三味線をよう彈やるが、何といつそ町藝者に出てくれぬかい、アイモ私が樣な不束な三味線でも、徒に立ならお前の爲、ヲヽそりや忝ない〳〵、したが極ねばならぬことがあるわいの、コレ必轉ぶことはならぬぞや、あれまだあんなじやら〳〵と、お前を置て仇枕、交す心はないわいな、ヲツト誤り〳〵、が夫はさうと稽古のため、何ぞ彈ては見やらぬか、コレうさ晴しによかろぞや、アイ私も屋敷で彈た儘、撥の持やうも忘れたが、彈て見やうと樫棹の、憂を三筋のいとしらべ、思ふ中にも隔ての襖、有に甲斐なき捨小舟、ヨウ〳〵、こちの女房の命取め、何いふじややら、すつきりとモツ手が廻らぬわいな、大事ない〳〵、わしは白浪うつゝなさ、

骨の、折たを見すゞ見ぬ顔して、知ぬふりはお胴慾な、餘り氣強い淡樣と、醉が廻つてすゝり上、しやくり上たる泣上戸、相借家は天窓をかき、是は偖情ない、又例の泣上戸、はんにやれ〳〵、こなたの樣に泣年增が、大根畠にあつたらば、嘸かし時行であらうにと、仇口ましくら相借家、立ぬ權兵衞を肩にかけ、引立れども足立ず、こいつはいかぬ、いつそ拍子でやつてくりや、一ッとや一ッ長屋の權兵衞殿、輕業しくじり腰拔たんのう、立れぬたんのう立足も、しどろもどろに歸りけり、詫住居には取分て、哀を添る初夜の鐘、心も細き行燈の、灯をかき立ても後先を、思ひ續てしよんぼりと、佐七樣はなぜ遲い、何して居さんす事じややら、早う戻つてくれたがよい、住馴ぬ故かして、どうやら氣味の惡い內と、すみ〴〵詠る女氣の、待身になるなかゝる身に、形も像も面瘦し、佐七は積る憂事の、うきが中なる憂世帶、うと〳〵戻る我家の內、ちらりと見るより走り出、ヲゝ戻らしやんしたか、待兼た、今迄何して居やしやんした、遲かつた案じたと、女房顏してちとばかり、世帶めかすも可愛らし、ヲゝ道理〳〵、嘸待兼て居やらう、早う戻ろと思ふたれど、綱五郎殿の安否も聞たし、二ッには紛失の色紙、行方も知れうかと、あつちこつちと駈步き、思はず夜に入た、イヤ是小糸、今更いふには及ばねど、糸屋の內の騷動、居るに居られぬ品になり、連て退た其時は、死る覺悟に極たが、色紙の有所知るまでは、どうも死にも死れぬと、未練に命ながらへて、せうことなしの宿這入、ア

か、僻此間江戸四里四方を、一遍三界尋ね捜した、知れぬこそ道理なれ、爰で尋逢たは僻等が運の盡、お天道樣のお知せじや、サ左七を爰へ出せ〳〵、出し居らぬかと、疊叩けば小糸は只、アイ〳〵〳〵とばかりにて、何といらへは泣よりも、外に返事はなかりけり、ムヽ内に居らぬか、留守ならば、留守にもせよ、戻りをるまで爰は動かぬ、エヽ僻は〳〵、マいはふ所のない徒者じやぞよ、僻は藁の上から彌三兵衞殿へ養子にやつて、育られた恩も思はず、色事で居敷をしくじり、親里へ戻つた晩に、マわらうことかあるまいことか、姉聟の左七と色事して、内を欠落するといふやうな、又こんな素早い性の惡い女子が、此廣い江戸中にま一人とあるものじやないわいやい、よたかめ助兵衞め、本に〳〵意見するも餘り阿呆らしいて呆か舞ふて臍が可笑がつて茶を沸す、其樣な徒女郎とは知ず、死れた親父の作右衞門殿はな、血の尾じやとて僻を、大體可愛がられたことじやない、けれども彌三兵衞殿へ、やらねばならぬ義理になり、養子にやられた後でも、どうぞあいつばかりは、せめて達者で、屋敷で出世をさせたいと、コリヤ伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕樣へは月參りをしられたはやい、夫に又聞ては居らうが、兄の綱五郎はな、左七め故に人を殺し、勘當せねばならぬやうになつて、其晩から行衞知れず、夫におのいらは欠落、どんと糸屋の内はらんちき騷じやわい、其中でもアレ見をれ、お房はな不所存な、左七めがことを、いひ出しては泣、思ひ出してはなき、モ泣明し泣暮し、

夜の寢覺の其睦言も、思ひ出す程いとしさの、ぞつと身も世もわられうものか、思ひ廻せば姉樣の、私を恨んで居やしやんしよ、堪忍して下さんせ〳〵、せめて名古屋の二重の帶が、三重廻る、ヲツトよし〳〵、いやモウ一廉の藝者樣じやわいの、そしてそなたの其振袖、今では丁どもつけの幸ひ、去ながら、長屋の衆の思惑もあれば、晝の内は妹と兄樣、入相がごんと鳴と、直に濡事女夫の初り、是を思へばアノ鐘は、暮六ツじやないぬれ六ツじや、エヽ何をじやら〳〵てんがう口、サアもう四ツでも御座んせう、炬燵に火もよい寢やしやんせぬか、テモ女はじたい床急ぎ、コレ今夜は私は精進じや、アレまたわんな惡口ばかり、よい加減に置てなと、蒲團一ツが玉の床、思ひ近江の疊の上、浮世の塵をひしき物、割なき夢や結ぶらん、妹と脊の、流れは同じみなの川、深い淺いの分隔、姉のお房は戀聟の、左七を戀し小石川、其隱れ家へより糸の、手を引伯父の十兵衞が、心も暗き小提燈、尋當りし門の口、コレお房、口の長屋で聞て來た、左七と小糸の隱れ家は、大方爰に極つた、なま中に案内したら、風をくらうて迯うも知れぬ、どうぞしやうがありそなものと、いふ〳〵咄すも二人は氣懸り、戸の隙間から差覗けば、慥に伯父の十兵衞殿、置去にせし姉のお房、南無三寶とうろたへ、騷ぐ内の物音、十兵衞表の戸をこぢ放し、はいるを見るより炬燵の内、小糸は何と詮方も、納戸へ迯込後影、コリヤ〳〵〳〵見付た待をれと、駈上つて引摺戻し、どうど打付、ヤイ爰な畜生め、犬めふんばり女郎め

ふつゝり思ひ切り、姉様に添せまするが皆様へ、私が此世の申譯、ムヽそんなら得心して、左七を姉へ戻してくれるか、ヲヽ出かした〳〵、よう思ひ切た、イヱ〳〵夫では此姉か、どうも心が濟ませぬ、ハテ偖又鈍な事を云出すやつじやわい、マヽ何じやあらうと、此伯父が胸にあり、左七が戻つた上のこと、夫迄奥に待て居よ、サヽお房こちへと、手を引て、納戸へ這入る後影、見るより小糸は駈寄つて、蒲團も櫓も取て除け、コレ左七樣どうせうぞいなう、どうせうと取付縋れば、聲が高い、最前よりの一伍一什、聞は聞くほどのめ〳〵と、どうも生ては居られぬ時宜、又五平太や九郎兵衞を手にかけたは、此左七と書置して、恩のある綱五郎殿の命に替れば、糸屋の家も立といふもの、そなたは後にながらへて、お袋への孝行、私が死だら亡跡の、香花でも取てたも、小糸、さらばと立上る、裾に取付、マヽ待て下さんせ尤じや〳〵、サア留はせぬ〳〵、コレ事を分てのお詞を、惡う聞ではなけれども、逢なれ初て二年の、人目にせかれせかるゝも、戀路の中の樂みに、破ても末に間の戸の、影やお庭の小柴垣、荻吹風におそはれて、帶のしやらどけ亂れ髮、結ぶえにしは七月の、お腹に宿る月の數、重るお身の御難儀も、皆私しから起つた事、夫にお前を先立て、何樂みにながらやう、一所に殺して下さんせ、むごいつれない心やと、恨み口說くぞ道理なり、ヲヽ誤つたこらへてたも、とてもかくてもながらへず、死ると覺悟極たそなた、コレ一所に死で未來で添ふ、エヽ嬉しう御座んす〳〵。

どう〳〵目を泣潰して仕舞たはやい、俺やモあいつが可愛うて〳〵ならぬ程、おのらがモ憎うて〳〵ならぬわい、いとしいはお袋、いつぞ泣もせずうろ〳〵と、子供のことばかり案じ、一昨日から床に付て食もいかず、藥も咽へは通らぬはい〳〵、そりや誰が業じや、皆俺が業じやぞよ、俯向いてばかり居ることはないわい、面を上いやい〳〵、夫にまあおのいらは、ぬつくりと店借して、二人暮そと思ひ居るか、コリヤ天道樣といふものがあつて、ヨウあたゝかに暮されうかいなあ、サア左七めが事思ひ切て、糸屋の内へ戻すか、コリヤ返事をしをれやい〳〵、アとはいふものゝ、そちにも尤な筋もあるけれども、儕が思ひ切て左七を糸屋の内へ戻すと、母の病氣も直れば家も立、姉も悦びや目も直る、合點がいたか〳〵、サヽヽ合點がいたら今爰で、思ひ切といへ〳〵、サぬかさぬかい、コリヤ小糸、どうぞ思ひ切といふてくれと、賺しつ嚇しつ理を分て、いふて聞せど目にたもつ、涙は聲に顯はせり、お房はわつと泣出し、嫌はしやんす左七樣、無理に添ふといふではない、そなたに添して母樣の、お年の上の御苦勞を、させましともないはツかりじや、眼が潰れたら猶の事、愛想が盡るは定のもの、疎まれてから去れうより、いつそそなたの美しう、添せて私は尼ともなり、あなたの聲を餘所ながら、聞いて暮すか樂みと、いふも哀な心つき、小糸は始終顏をも得上ず、明ていはれぬ身の上を、死る覺悟に胸を据、伯父樣のお腹立、姉樣のお心根、御尤ともお道理とも、申上う詞かない、私や

故に人を殺し、お尋者になつても、色紙を尋て渡さねば、男が立ぬと綱五郎は、アレ遠國へも立退ず、うろ〳〵として居るぞや、可愛さうに夫程に、思ふ心ざしは無足し、糸屋の家を建もせず、色紙もお主へ差上ず、死でこなた濟ますか、サア夫は、サどうじや、返事があるなら聞ませうと、理に責られて當惑涙、お房はかねて用意の剃刀、自害と見ゆれば十兵衛押留、ヲヽ倅がのも尤じや〳〵、道理じや尤じやが、コリヤ爰をよう聞いてくれ、そちが今死るとは、只さへ枕の上らぬお袋、夫こそ直にころりと往生、さすればそちが死るのは、親を殺すも同じこと、親殺しになつても大事ないか、大事ない死々々、ア斯はいふものゝ、下地から譯のあることと聞たら、何の生て居たからう、死うといふも尤じや〳〵、がまたこちらの二人のやつらも尤じや、爰の道理を聞譯て、三人共に死でくれな、どうぞ思ひ留つてくれと、三方四方の命をば、繋ぎ留たる糸屋の伯父、死も死れぬ三人が、涙は千筋百筋に、もつれ合たる糸口の、一度にわつと聲を上、泣しづむこそ道理なれ、世を忍ぶ、かやにも心奥ふかき、長屋を尋ね綱五郎が、後より付たる捕手の夫、とは知ずして門の戸叩き、左七殿の內は爰か、綱五郎が尋て來たと、いふ聲聞より以前の捕人、飛が如くに引返す、內には皆々愕りの、中に十兵衛戸を引開け、這入るを見るより後ばつたり、外面おやぶむ計りなり、イヤ伯父者人、何にも怖いことは御座りませぬ、頼れた小倉の色紙、取返すないは男の意地、命惜んで逃隠れたが、もう

そんなら早う爰を出て、心中所は、シイ聲が高いと口に袖、左七樣の聲がする、戻つてかへと姉お房、納戸を出るもさぐり足、イヤなうし左七樣、小糸に樣子は聞しやんしよ、母樣のお歎き、伯父さんのお氣苦勞、中に立た此房が、心の中の切なさは、針の褥に寢るよりも、つらい苦しい憂思ひ、私はふつゝり思ひ切、諦めて居る程に、何卒戻つて妹と、中よう添て家を立、母樣や伯父樣の、お氣を休めて下さんせと、手を合したるいぢらしさ、死る覺悟極めたる、思ひを夫と悟られじと、ヲヽ是お房、ようまあ尋ねて來て給つた、今戻つて何も角も、樣子は聞た、モウ〳〵是から直に往で其方と、一生添ふ氣じや程に、ノマ伯父御と連立先へ往で、ノツレ先へ出て、ソレ待ていやと、小糸に知らす裏表、おふさ必ず欺されな、ありや皆嘘じや僞じやと、納戸を出る伯父十兵衛、コレ左七殿、此方が糸屋の內を出た後に、殘して在た書置、お袋にも姉にも見せず、俺が胸に一ツで讀で見た、小糸とは國から譯のあること故、死るとある書置、讀で見ておれも恟り、所に又うす〳〵聞は、此邊に店借して、二人世帶を持て居るとの噂、ムヽそんなら國から譯のあるといふも、死ると書たもコリヤ皆嘘じやわい、エヽ憎いやつら義理知ず、おのれやれ引ずつて戻つて、何でも姉めに添さうと、思ふ心の一徹で、コリヤ小糸、さつきのやうにいふたのじやが、奥から立聞して居れば、腹まで大きうなつて、モウ七月といふ事は、夢にもおはれ知なんだ、さういふ譯なら尤じや、道理じやがコレ左七殿、こなた

て數多の捕手、少し白けて見えにけり、かゝる所へ、待た／＼と石塚彌三兵衞、岩藤に繩をかけて引立來たり、淺草の寺内において、色紙を盗取たるは、山住五平太と此岩藤が白狀、九郎兵衞とても其同類、色紙を首尾よく取返し、左五郎先地に歸る上は、兩人ともに殺し德と、江戸屋敷より御指圖、則殿の御墨付と、差上げ見すれば人々は、嬉しさいはん方もなし、左七が國へかへり咲、お房小糸は妻妾と、むすぶ糸屋の後取は、緣の綱五郎本町に、育つけなげの糸櫻、花は三芳野男氣は、花のお江戸の直たゞ中、なかはわたると讀む文字、新につゞる假名書の、仕いろ筆の內匠よく、むらがり來たる御贔負を、力鬼百合伊久千代も、袖をつらぬる君が代は、關の戸ざゝぬをだ卷の、いとゆかしてき御惠、榮ふる春こそ久しけれ

こつちから名乘つて出る氣、コレ左七殿、お賴の色紙、受取しやれと懷より、取出し手に渡せば、押戴き〱、ハア有難し忝なし、男づくとはいひながら、何の好身のない拙者が、お賴み申たばつかりに、科人にして死せては、生面下げて此左七、生ながらへては居られませぬ、科を我身に引受て、ハテ倚惡い合點な人、男と見込で賴れたら、命を捨ても引ぬといふは、ソリヤ何國でも同じ事、昔大坂の黒船忠右衛門、好身もない五郎八に賴れたばかりに、獄門の庄兵衛を殺し、科人となつた是も是男の意氣づく、ハテ大坂ばかりに男があるじやあるまいし、花のお江戸の本町生れ、命をかばふ心なら、天窓から賴りやせぬと、投出したる命の安賣、高いは性根の据ゑ處、江戸の生粹混りなし、本町育と知れたり、十兵衛は淚ながら、そちは覺悟極ても、母の歎を思ひやり、一先爰を落てくれと、いふに二人の妹も、母樣のお歎を、思ひやつて暫しでも、落延て下さんせと、取付縋れば十兵衛が、用意の路金財布の紐、首にかけたる天の綱、世間に人音物騷がしく、戸の透間より差覗けば、表は數多の捕手の人數、犇りわな〱驚く人々、綱五郎ちつともさはがす、名乘つて出ようと思へども、一旦伯父貴の詞を立、母への孝に切拔けん、左七殿は小糸を連、伯父者人はお房諸共、怪我せぬやうに裏道から、落たく〱と追やり〱、身拵する間もなく、捕たく〱と捕手の人數、戸を打破つて込入るを、やり過してかた車、どつこいさうはと取付を、振りほどいて胸矢倉、打付く〱掴み投げ、投げつけられ

源氏大草紙

作者　福内鬼外

狡兎死て良狗烹られ、高鳥盡て良弓藏る、古今同じき世の常と、張子房は赤松子に託し、范蠡は五湖に遁る、治亂に達せし智者の擧、爰に傳へて八十二代後鳥羽院の御宇に當つて、武將源の朝臣頼朝卿、六十餘州の惣追補使、と威光輝く鎌倉山、チロシ「時世ぞ盛り盛んなる、頃は建久元年如月下旬、兼て宿願ましませば、鶴が岡八幡宮造營有、遷宮の儀式嚴に、拜殿に幔幕打せ、上壇の間に座し給へば、御座の左右は三老職、畠山庄司重忠、和田左衛門義盛、梶原平三景時を始として、御譜代外樣の大小名、列を正して伺公有、頼朝仰出さるゝは、今天下一統して、四海を掌握する事も、代々源氏を守の氏神、八幡宮の御加護なれば、神恩を報せん爲、此御社を造營せり、夫に付傍に兼て申渡せしごとく、奉納有べき繪馬の趣向、見やうするはと御諚有、重忠御意を承り、夫々と有ければ、ハッと答へて扈從達、手々に繪馬を持運び、御前に並ぶれば、大將熟々御覽有、ホヽ何れも心を込られて、物好多き其中に、景時と記せし繪馬、柳の古木、切株に蘗の生出る、傍に斧を畫しは、心有げな繪馬の趣向、子細いかにと有ければ、

糸櫻本町育 終

モノ赦されぬ、と膝立直し、反を打て詰がくれば、重忠騒ず、ホヽ惡逆無道の御邊が及、仁義を守る重忠が體にはよも立ず、立て見られよ景時と、ちつ共痿ぬ優美の詞、ヲヽ其息の音を留てくれん、と立寛るを和田義盛、中に立て押止め、御前なるぞ、と制せられ、不承〳〵に座に直れば、頼朝卿御氣色有、無益の論に時移れり、兼て申渡せしごとく、此鶴が岡造營の嘉儀、猶も武運祈の爲、源家に傳る蟬折の名管を以て、舞樂興行有べき爲、當時笛に名を得たる義盛が甥、荏柄平太胤直に先達て、蟬折の名管を渡し置、笛の調子も調ひつらん、是にて一曲聞まほしと、仰に義盛首を下、我子同然の荏柄平太、此度の御用承る事、家の面目身の冥加、斯る御用もあらんかと、神樂堂迄召連たり、ソレ〳〵、と呼次にぞ、ハツ、と答へて立出る荏柄平太胤直、笛箱携へ座に直れば、義盛聲かけ、サア〳〵平太御意成ぞ、急て笛を仕れ、ハヽアとは有難き上意の趣、未熟なる拙藝、此度舞樂第一の、笛の御役蒙る事、冥加に叶し仕合、と帛紗解て笛箱の、蓋を開けばコハいかに、重代りの木の折計り、内には笛のあら不思議、といふに驚く人々、義盛苛つて、ヤア大切の名管何として紛失せし、と面色變はれば、胤直は身拵して懸出すを、義盛制してヤア狼狽者何國へ行、イヤ笛の盗人詮議して、身の言譯を仕る、と又懸出すを取て引伏、扇を以て丁々々、エヽ憎い奴、並ならぬ名管故、不淨穢を憚りて、平常に事皆り、猥に出さず、箱の儘にて取扱ふ程の御笛なれば、片時も身を放さず、大事にかけ

したり顔に梶原平三、ハア御尋なく共申上んと存せし所、平家の大敵亡びて後、義經の悪工、親兄の禮を忘れ君に逆ひ、剰奥州へ逃下り秀衡を頼にして、旗上せんと計る内、秀衡病死の虚に乘し、我君の討手として、是成義盛馳向ひ、一戰に討亡して、君の病を除くといへ共、靜が腹に出生せし、經若といふ小倅、未此世に生存へ、又義經重恩の武士鈴木三郎重家、討死に洩しと聞ば、彼是以て心懸り、敵の末は根を斷て葉を枯さん、若捨置は此繪馬に畵いたる柳のごとく、再榮へん義經が余類、草を分つて捜し出し、切ん願の繪馬の祈。御賢慮廻らさるべしと奸曲邪智の辨説を、重忠引取。コハ心得ぬ景時殿の御評議、義經の事はいふて返らず、漸殘る經若君は、現在君の甥ならずや、御有家知るならば、相應の所領を給り、御連枝の數に加へん事公の政道なり、と云せも果ず、ヤア又しても重忠の仁義立。既に我君頼朝卿も、池の禪尼や重盛の、御恵なし共が助し故、今源氏の御代と成、先其ごとく義經が小倅も、助置ば後日の仇、イヤ左樣には候まじ、平家の亡し其根ざし、君を助し故にはあらず、入道の悪逆。天の咎は理の當然、又經若君を助ん事は、昔武王紂を討て其子を封じ、殷の祀を繼しめ給ふ、ましてや科なき義經の御身、舌三寸の災に罹り給し御落命、ムヽ舌三寸の災とは、此景時が義經を讒言せしとの當言か、ホヽいふ迄もなく逆櫓の意恨、御邊が讒言せし事は、童迄も能知たり、まだ其上に經若君迄、捜し出して殺さんとは。ヱヽ見さげ果たる心根、と一本刺れて急立梶原、

死べき命生存へ、剰數代の知行所藤代迄を取上られ、有に甲斐なき身の上も、靜御前の御腹に、出生有し若君都に殘りましませば、何卒守立旗上し、亡君の御無念を散ぜんと思立、尋れ共お行衛知れず、若や敵の手へ渡りしかと、思廻せば安堵ならず、鎌倉へ入込ならば、定て樣子も知れんかと、思立たる旅なれば、是より鎌倉へ行、余所ながら樣子を聞ん、汝は始ての事なれば、見物旁江の島へ參詣し、人の噂に氣を付よ、必々形素振悟られぬが肝要、アレアノ磯續が七里が濱、夫を過れば極樂寺の切通し、通拔ればはつひ鎌倉、初瀬の門前にて待受ん、早く來れ、と云含、立別れば要之助、船を目當に急ぎ行、寒からず又暑からぬ春の日の、心浮立海原に、飾立たる御座船を、繫捨てざは〳〵と、數多の女中に取卷れ、上る姿のしどけなき、義盛の乙娘、千種の姫は茫然と、戀に心も沖の方、詠めやつたる後から、外珍らしき娘共、中々お姫樣、何を其樣に茫乎と、沖汀御覽遊ばさずと、此方の磯へ入つしやつて、美しい此貝を、サア〳〵お拾ひ遊ばしませ、と騷立れど一心不亂、心引るゝ後髮、お局は心付、扨は先刻の若衆樣に、戀のいろはにはの字なら、打明て御意遊ばせ、常々大殿樣の仰には、男は娘が望次第との事なれば、お耳立ても大事ない、殊にマア誰々も見とれる程に美しい、今のお若衆、賤しい人でもなささうな、若もさうなら私等が、取持して上ませうと、せがみ立られ千種の姫、先刻にちらと見初てより、有にあられぬ物思、オゝ恥しと振袖に、包に餘る腦なり、娘中はそゝり立、

て守るべきを、疎略にせしより奪取れ、剩狼狽廻る盜人の、詮議せんとは、何を證據何國を當途、ヤア血迷ふたる空氣者、諸大名の見る前義盛が恥暴し、我君への申譯御前にて手討にする、そこ動くなと、老人の心苛立怒の聲、賴朝暫と止め給ひ、義盛が立腹尤ながら、今平太を殺したり共、笛の盜人出るにあらず、抑此笛は我先祖六孫王より傳る名管、紛失有ては源氏の瑕瑾。盜人の出る迄、平太は重き科人なれば。重忠に預け置、詮議怠るべからず、と徐々と立給へば、還御ぞふと呼はつて、警蹕の聲囂しく、前後を圍ふ供奉の面々、臺笠立笠大鳥毛、取治たる六十余州、動かぬ御代ぞ三重豐なる、渡津海の、其波間より現れて、爰に鎭座の江の嶋の、神に歩の船の足、招く幟の絶間さへ、渚に群ふ參詣は、武家町人の分ちなき、片瀨の濱ぞ賑はしき、世を忍ぶ、深編笠の浪人姿、義經の舊臣鈴木三郎重家が、跡に付添丸額、一子要之助諸共に、磯邊間近く歩寄、コリヤ〳〵悴アノ向に見ゆるが江の嶋、此方の在所が腰越村、亡君義經公御在世の砌、梶原が讒言にて、此處より追返され給しを、思出すも奇怪、と詠やつたる目の内に、無念の涙潸々と、拳を握れば要之助、かく落ぶれし身の上も、皆梶原が業なれば、見付次第に差違へ、義經樣の御無念を、イヤ〳〵弟龜井六郎を始、衣川にて死出の御供、此重家は父郡司殿の老病を見舞の爲、國へ歸りし其跡にて、鎌倉の討手として、和田義盛に責寄られ、是非に及ばぬ御生害、重恩の主君を先立、生存有べき謂なければ、和田梶原と差違、

方の仕合、サア〳〵ちやつとと抱付を、姫共が後から、擽るやら抓るやら、エヽ忌々しい衒妻共、と張退揮退騒ぐ中、物に馴たるお局が、姫君の手を引て、逃て行共尻餅を、附々は是幸、砂を掴んで投付れば、平次は目口も赤らむ顔、赦せ〳〵、と悶る内、皆ばら〳〵と逃る共、しらぬ盲の滅法掴、コリヤしてやつた、と抱付手隙、いつの間にかは兄源太、エヽ戯けめ、と叱られて、コリヤ〳〵どうじや、と狼狽るを、エヽ馬鹿面めが嗜め、と云はれて元来むしやくしや腹、何俺を嗜め所か、此方も大磯の吾妻野に首だけ登つても叶はぬ筈、荏柄平太に先越され、其腹立に蟬折の、笛を盗で其科を、シイエヽ夫を爰でいふ事かは、兼て父景時殿、頼朝を亡して、天下を一呑謀叛の企、氣にかゝる和田の一族、仕廻ふて退る笛の紛失、ひい共云さす其盗人を、塗付る思案の段々コリヤかう〳〵、と聞けば、平次ぞく〳〵小踊して、兄貴の思案は又格別、荏柄を仕廻ふて此方の望、吾妻野が手に入上、又其笛の盗人を、朝比奈に塗付れば、尻の來る氣遣なく、兼て俺が惚て居る、喜瀬川めが是迄は、アノ朝比奈に心中立、おれを振た意趣返し、何も角も成就する、うまい趣向といきり出、萬事は幕の内にて、と兄弟打連入にけり、

又も此方へ着船の、陸へ上りし乘合の、中に一際目に立て、粋な容は大磯に、並び名取の吾妻野が、心に深き立願の、江の島詣て歸るさを、やり手禿が取々に、中々先きに岩本院で頼なんした、願掛とやら云なんしたも、大方は荏柄樣のお命乞で有いせう、サイノ思ひがけなき主の

そんならいつそお若衆様を、爰に待受口說て見やう、モウ追付下向であらう、イヤ〱〱大勢寄て騒いだら、取逃すまい物でもない、マア〱こちへとお局が、差圖に是非なく姫君も、幕の内へと入給ふ、かくぞとは、いざ白砂の磯傳ひ、父の教を一筋に、要之助が下向道、とつかは急ぐ向より、窶す姿は千種姫、手籠に小貝携へて、サア〱貝を買しやんせ、貝の名所數々の、中に取譯此浦の、浪に寄るてふしほらしさ、其俤の鏡貝、移る心の色貝や、君が目元の鹽貝を、いつの世にかは忘貝、心うつとり空蟬貝、我身を焦す螢貝、胸に思の數々は、蠣つくされぬ筆貝に、雁の便の玉章貝、よいお返事を松河貝、貝めせ〱、と付纒ふ、要之助は急の道、イヽヱ我は急用なれば、貝は望にござらぬ、と行んとする間に腰元共、ばら〱と立懸り、姫御前の身で恥しい、貝を賣ふと押付業、仕懸た戀を外さうとは、不甲斐ないお若衆様、何ぼ逃ても逃さぬ爲、此お羽織を質取、と手々に剝取無理無體、幕の内へと伴ふ折柄、ヲヽ其貝は俺が買ふ、と云つヽ出る梶原平次、手持無沙汰に千種の姫、逃んとするを引捕へ、常々俺が文玉章、口說時には返事もせず、生娘かと思ふて居れば、そこの手の骨やら知もしない若衆めに、胸の悪い濡詮索、ヤイそこな磔若衆め、なくなれば赦してこます、さもなければ目に物見せん、といど憎さげの雑言も、望有身は堪忍の、胸を擦つて要之助、鎌倉さして急ぎ行、跡には平次が鷲鵰、あつたら物を若衆めに、すつての事ぱつちりと、初物七十五日とやら、來合したは此

細らしう、待と聲掛留て出て、云分有ならいへ聞ん、と切及廻せば、ハヽヽヽテモ扨も不粋なわろでは有はいの、おれは荏柄が立願に、親父の代參江の島詣、けふ一日は和田義盛、堅い所を買うと思ふて、カノ芝居の花道から、呼る樣に小林朝比奈が留たと、大薩摩と出懸ても、窮屈なが嫌ひ故、烏帽子も素袍も先刻に脱で、コレ此通の忍姿、是より直に大磯へ、仕懸る思案、畜生め、おれと一所にいく氣はないか、と脊中をとんと叩かれて、下地は好なり御意はよし、そんならおれも直にいかうか、したが今日は俺も代參なれば、皈つて親父に逢ざ成まい、エヽまだ靑いぞよ〳〵、さう律義では埒明ぬ、おいらは親父と念佛は、身震する程きつい嫌じや、やゝもすれば二親が、部屋へ押込出さぬ思案も、二階の窓からこそ〳〵ナコリヤこそ〳〵、と目遣を吞込、此方は粋の德、やり手禿に黙合、そつと其場を外す共、しらぬ源太が圖に乘て、サアそんならいくは行うけれ共、何を云てもお敵めが、と振向て、コリヤどうじや咄の內に放鳥、いつの間にやら飛で仕廻ふた、エヽ一杯喰て腹が立、憎い女め目に物見せん、と月夜の釜に佛頂面、跡を慕ふて追駈行、朝比奈ふつと吹出し、いかい痴漢、と呟く所へ、撥鬢天窓に短い彩織、見馴ぬ男がすた〳〵と、朝比奈を見て小腰を屈め、申々お前樣は朝比奈樣でござりますか、ム此義秀に何の用事、ハイ左樣なれば此お文、と差出す文箱手に取て、何朝樣まいる喜瀨川より、ムヽそちは廓で見馴ぬ男、ことづかつてゞも來たのか、イエ〳〵私は

災難、蟬打の笛が見えねば、どう成行も知れぬと聞故、悲しい時の神叩き、天女樣への立願も、何卒主の明が立なんして、わつちも廓の苦患を遁れ、本の女夫と成いす樣に、と願立するも身勝手計、サア〳〵暮にならぬ内早う〳〵、と行所へ、漸見付た逃さいぞ、と走出たる梶原源太、外されもせず吾妻野が、ヲヽ源太樣よう參りなんしたの、イヤおりや辨天より其方が信仰、けふ參詣と聞た故、此所に待てゐた、廓へいては度々振れ、云たい事も得云ぬしだら、詰る所は荏柄といふ虫めが付て居る故じや、其平太めは笛の事で窄屋の住居、頓ての內笠の着られぬ男めに、心中は入ぬ物、コレ馴染を變へるが上分別。と撓垂れかゝれば、ホヽヽぬしや馬鹿らしう御ざんす、黴の生る臺辭止なんし、長くいふには及びんせぬ、さつぱりと返事しやんしよわつちや主は好いせぬから、逢事否でござんす、アイ置なんし、と彼方向、ムヽさう手強う出られては、おれも男の一分立ぬ、よい〳〵此方も男の意地、是から屋敷へ連歸り、無理やりに抱て寢る、と引立て行んとす、やり手禿が取付を、踏やら蹴やら擲やら持餘したる向より、誰とも白聲高々と、待ヱイ、此源太が仕懸た戀を、待と留たは何奴だやい、和田が三男小林朝比奈がおつ留めた待上れやい、かゝる所へ小林朝比奈は、鎌倉一の優男、雪の顏、綠の髮、奇麗で花車ですうわりと、女たらしの伊達姿、裾蹴散して步寄、吾妻野を引分れば、ヲヽよい所へ朝比奈樣、よう留てくんなんした、と悅び勇めば源太が不興、ヤア朝比奈、いはれぬ所へ子

ゝれ、ときめ付られて覺えなき、身に降かゝる災難も、言譯なければハアハッと、無念涙に暮居たる、梶原兄弟したり顔、笛の盗人知たる上は、舘へ引て拷問せん、サア泥坊めうせをれ、と追立られてもか弱き朝比奈、是非なく〳〵も、三重引れ行、梶原兄弟が智略にて、朝比奈三郎を、無實の罪の落し穴、戀の意恨は押隠し、笛の詮議を表向、呂律の合ぬ評定も、一越調の役所の備、非常を糺す非常の詮議、浮べる雲の上見ぬ鷲、權威を振ふ羽がい下、番場忠太進出、コリャ〳〵者共、兼て申渡した通、今日の御詮議は平次樣のお引受、右の者共參り次第、早速に申上よ、と云も切ぬに、取次役人罷出、大磯の曲屋山田屋半治と申者、傾城喜瀬川を召連、只今是へ、と詞の下、おめず臆せぬ八文字、浮節繁き川竹の、流寄る身の泡沫や、逢はれぬ首尾は村雲の、月を隔てし胸の闇、いつか明なん朝比奈に、二世の契も味氣なく、別れし譯も白洲の上、覺束なくも畏る、夫と見るより忠太聲かけ、ヤア聞及んだ大磯の傾城喜瀬川とは儕よな、御詮議の筋有て四時迄に召連來れと、親方めに申付しに、遲參の段不屆千万、憎奴と叱られて、親方はおづ〳〵尻込、喜瀬川臆せず、ヲゝ恐ろの忠太樣の白々しい、しらぬ顔置なんし、源太樣や平次樣見えなんす度毎に、來なんしての惡洒落、いやがる禿や新造衆に、しみしつこい濡事、毎度烟管で追廻され、鐘馗樣に行合た赤兒を見る樣に、拜む〳〵と逃廻り、細目しなんした其顔で、べかこ人形か何ぞの樣に、其處等中を睨廻して、ヲゝ笑止やぼらしい止なんし、

此間、大坂から下りましたふるなの辨助と申座頭、喜瀨川樣からお文も上たし、次手にお目にかゝつて置、此後萬事お賴申せ、又云たい事もたんと有ば、晩に必お出る樣に、とくれ〲の御口上、ムゝそんなら今夜いて逢ふ、そちは先へ立皈れ、ハイ然らばお先へおさらば、と足早にこそ立皈る、朝比奈も浮立計り、封を切んとする所へ、ぬつと出たる梶原兄弟、ちやつと文箱を懷へ、押隱してさあらぬ体、ヲゝ是は〲御兄弟共、モウお皈か、何と〲是から直に廓へいて、惣仕廻と出懸る工合、夫はさうと朝比奈殿、貴樣が今懷へ入たは、何やら面白さうな蒔繪の文箱、定て彼から來たので有う、外の客に肌ふれず、そもじ樣と二世かけて、夫婦に成んの〲し、起請などといふ樣な物でがなござらう、あやかる爲にちよと拜見、イヤ〲是は內證物、どうもお目に懸られぬ、イヤサ見せられぬと有ば、猶更見たい平に〲と兄弟が、兩手を捕へて往生ずくめ、非力の朝比奈詮方もなんなく文箱引出し、ヘエ何じや朝樣まゐる喜瀨川より、イヤコリヤ堪らぬ味い趣向、と紐引ち切て蓋明れば、中より出たる錦の袋、思ひ寄ねば朝比奈が、悔するを突飛し、兄弟とつくと見改め、烟管筒かと思の外、紛ひなき蜀紅の錦、コリヤコレ紛失したる蟬折の笛の袋、と聞て仰天朝比奈が、扨は今の使といふは、紛れ者で有たか、と駈出すを引捕、ヤそこへ〲、イヤサ夫が蟬折の袋なれば、今來た使は、ハヽヽ其使とは何の使、行衞しれぬ蟬折の笛、我盜んで其科を言拔うとは横着者、四も五もいらぬ繩か

々と打詠め、コリヤ〳〵者共、此女めは身が詮議する、暫次に扣よ、と云渡す內取次役人、慌敷罷出、雪の下の町人共、何か御訴訟の事有と、大勢連にて參つたり、いかゞ計ひ申さんや、と窺へば平次景高、ヤアけふはいかう取込なれば、重ねて參れと申付、追返せよと下知の內、下りませい〳〵と、下部が割竹さはひと見えし大男、物をもいはぬ懷手、何の遠慮も並居る眞中、どつかり据し不敵者、跡に付添町人共、白洲の隅に蹲る、是非に及ばず景高も、番場忠太に目交し、喜瀨川を一間に追やり、不肖〴〵に威儀を繕ひ、ヤア何奴なれば慮外千萬、呼出すをも待ずして、尾籠の振廻推參至極と、究付れ共、きよろりがみそ、町人共は震聲、ハイ〳〵申上まする、私は雪の下燒物類を商ひます、瀨戸物やの彌吉と申者でござります、今日愛な男めが、瓶を買たいと申ますに依て、大なが八百文、小いが四百文、どれなりと買しやれと、申ましたれば四百の方の小いを、買て皈て間もないに、小うて役に立ぬ、大な方と替たいとの事、どれを賣も商賣、持て進じよと申て、大な瓶を出しましたれば、小いを殘して置て、大なを振擔げて皈ります、アヽコレ〳〵〳〵、先の瓶は八百文、まだ四百文價が不足じや、置しやれと申たれば、大な目玉剝出しまして、算用しらない大痴漢め、先に四百拂つて有、又四百に買た瓶を、其方へ下にやるからは、四百の錢と四百の瓶、合せて二四の八百文、大な瓶の代は濟だとの云分、成程算用は合ますれど、どうか錢が足ませぬで、色々と申ますれば、滅多無上に張

とすつかり云れて、白ける忠太、親方は氣の毒がり、アヽコレ〳〵、廓の癖が爰へ出て、ずは〳〵と出放題、お役人様へ無禮云やるな、ハイイヤ物でござります、何か喜瀬川に御詮議の筋がある、今日四時御役所迄、召連來れと仰付られ、畏たとお請申夜の内からの身支度、朝寢仕初た女郎共、擲起してソリヤ髪よ、白粉よ、何じやはかじやと隙入、大磯から遙々と、お屋敷迄参る事、何ぞ御土産でも上たいと、喜瀬川の心付、大さうな物は目立て悪いと、名方の錦袋圓、忠太様へ一包、お下役様方へもお前から、能様に御配分頼上ます。と扇に載せし紙包、云ぬ色なる山吹の、包をそつと指出す、番場忠太手に取上、いかにも名方の金袋圓、しかもおれには合藥、流石は商賣柄程有て、氣の付た土産物、ハテいはれぬ心遣、近比以て痛入、切角の志、無にも成まい受納致そ、いか様大磯から、も五六里に餘つた道、ぴらしやらした女連、遲なつたも無理でない、万事はおれが呑込だ、と忽替る機關的、慾の深みは池の端、金袋圓の効目なり、してやつたりと親方は、どうでもお馴染の忠太様万事宜う頼上ます、私が内での立者、御詮議が隙取ば、家内の口が未刻、刻限の延ぬ内、早うお返し上さりませ、ムヽソリヤ皆忠太が合點じや、早う濟せて返す様に、殿へ取なししてやろう、汝は先へ立歸れ、といふに親方悦立嬉しさ、然らばお頼申ます。結搆な忠太様、お氣の短い其代、お爪の長で算用つく〳〵、お暇申、と口の内、呟々出て行、かくと聞より立出る、梶原平次景高、皆々はつと頭を下れば、寛

い、高が四百の錢出して、元安な喧嘩の買出し、全體彼奴等が誤りや、割を付てくれべいと思つたが、骸骨の樣な野郎めらが來あがつて、いざこざをぬかすから、闇雲に踏のめした、何だ人を傷めたが重罪だ、おらは男だによつて腕先で見付るはい、今時は旦那衆顏してけつかる和郎が、じうわり〳〵と口先で、人を殺す蜈蚣とやら蜒蚰とやらは、重罪は扨置似合た烏帽子狩衣で、萬歲になと出やがれ、何の事た咄の樣な、と當擦られて平次が赤面、云せて置ば圖ない惡口、何にもせよ詮議の有奴、牢へ打込拷問せん、ヤア〳〵者共其奴めを引立よ、と急け老騷がぬ大膽者、ハヽヽヽコリャ臍が錢獨舞廻すは、ヤア者共其奴めを引立よとは、去迚は久しいもんだよ、そんなで往く男じやないはい、牢に入たか這入てやるべい、ヤイ二合半共、おれ樣が牢へお入遊す案內しろ、とずつと立、平次が方を睨付、雜人共に取卷れ、牢屋を指して步み行、町人共は重荷を下し、先々是で寬いだ、イザお暇と役人へ、一禮いふて立皈る、平次ははつと精疲し、エヽ邪魔な奴がうせをつて、大事の詮議遲なはつた、アリヤ〳〵忠太、喜瀨川を呼出せ、畏つて立より早く、伴ひ出れば兼ての相圖、數多の役人番塲諸共、其塲を外せば平次景高、つか〳〵と立寄て、コレ最前から嘸待遠、詮議といふは別儀でない、源氏の重寶蟬折の笛、在柄平太の預りしを、盜だ奴は其樣の深間朝比奈三郞め、面に似合ぬ大泥坊、遁かれ疾かれ死罪は遁れず、元の起りは彼奴めが、廓通ひの小尻が詰りて、詮事なしの出來心、殊更笛

擲します、ソリヤ喧嘩よと其處らから、出る程な者生殺し、暴者よと町内は、寄て集つて棒ちぎり木、イヤモ此奴めが手酷い働、片端から微塵骨灰、目を廻したが五十三人、疵を負たが七十八人、鎌倉中の大騒、兎角下では濟されぬ、御月番の梶原樣へ申上て、捕手を向て貰ひましよと申たれば、此男めが申ますは、梶原樣なら用も有、此方からお役所へ參じませうと申て、といふを打消、エヽ何の事た馬鹿面め、顋叩上るな、いつおれが梶原樣とゆつたぞい、鰹節が所なら、行べいとゆつたはい、大漢痴め、と張込れ、アレ〳〵あれをお聞なされませ、御前共憚らぬあんなぞんざい申上ます、アイ乾度御詮議下さりませ、といふに景高首傾け、ムヽ四百の瓶を調へ皈り、其瓶を持て來て八百の瓶と代たとは何と忠太、ハアいか樣四百の錢と四百の瓶で八百文の瓶を持皈れば、どうか算用は合た處で、又錢が足ぬ樣な、と主從評議を彼男くつ〳〵と吹出し、エヽ安本丹の親玉めら、算用も絲瓜も入ない、四百の瓶を戻して、八百文の瓶買ふには、未錢が四百行ねば算用は合ないはへ、所を四百で濟すとは皆おれが大無理だ、コリヤ能咄本にも書て有、芝居でも能する事だ、仰山さうに評議なぞゝは、よい見せ物だ、と嘲る詞、忠太居丈高に成、ヤア存外成下郎め、無理と知て無理を仕懸る、大衒め其上多くの人を傷し段、旁以て重罪遁れぬ、腕を廻せ、と詰付られ、何の事たい御大層に、目を剜て乞食の閻魔見る樣に、コレびて付と虫が出るぞよ、おらが腕は海鼠と違つて、親父の細工の骨が有は

の二つ有、春の彼岸の中日に、緩りつと聞やんせう、といはれて劫腹、モウよい〳〵、そんなら此方も仕方有、ヤア〳〵忠太科人を引出せ、ハット答へて奥庭より、出る姿も面痩て、髪も心も取乱す、朝比奈三郎が無實の罪の座敷牢、荒くれ武士に引立られ、心ならずも立出る、それと見るより喜瀬川が、ムヽ憐しのお姿や、と縋付て泣出すを、平次は立寄取て引退、エヽ忌々しい引さらめ、此狀に成下つても、朝比奈めに心中立、俺に靡かぬ意趣晴、目の前で責めてくれん、サア朝比奈、先達てより詮議の笛、我盗んだとつひ一口、云て仕廻は埒が明、サアサア何と、と詰付られ、義秀無念の顔振上、譬幾度責る共、いつ迄も知らぬ笛、盗んだ覺毛頭なし、ヤアいふな〳〵、いか樣に陳じても、袋を以て居たが證據、よい〳〵どふで口先ではぬかすまい、ソレ家來共、畏つて双方より、サア〳〵早〳〵まき出せろ、と叩立らる割竹の、音に驚く喜瀬川が、耐兼て駈寄を、平次が捕て動さず、サア最前もいふ通、應と云へば直に身請、否といへば此泥坊を責殺すが、サ何と〳〵、と忠太諸共牛頭馬頭が、詰懸詰寄呵責の杖、叩き立られ朝比奈は、小袖も顏も打裂れ、無念と焦る血の涙、傍に見る目の悲さ辛さ、ワット許に泣沈む、平次心地能げに打點き、泥坊めにいはれぬ義理立、何ぼ泣てももう叶はぬ、其涙を百步一、俺に流してくれるなら、朝比奈が責を赦し、其樣は元來活計歡樂、サア〳〵どうじや〳〵と責懸られ、喜瀬川聲も揺曇、アイもうかう成上からは、どうなり共成ませう、其替にはあの

の袋を入た、文箱の上が其様の名付、夫故詮議は表向、爰が一の相談づく、そもじが今でも朝比奈と、念頃切ておれがいふ様にさへなれば、ハテ存せぬで事が濟、夫共に嫌といへば、今日から直に牢屋の住居、詰る所は由井が濱で、美しい其首が丸潰爪を切る様に、ヲ丶嫌な事、おれを振て手もやらさぬ、情所を鳶烏に、揚詰にせられうとは、イヤモ思ひ出すもぞつとする、サア／＼どうじや、と猫撫聲、喜瀨川萎る丶氣を取直し、ホ丶丶丶平次様の譯もない、朝比奈様は大名の御子、何のさもしい盜など仕なんせう様はなけれ共、どこぞの誰ぞが戀の意趣、無實の科も災難も、本の起は皆私故、何ぼ勤の身じや迚も、世にある時は馴染の難儀さんすを振捨て、念切てお前のいふ事、聞やせうといふ様な、喜瀨川じやと思はんすか、牢へ入共死る共、二人一所は兼ての覺悟、せめてものお情に、一所に置て下さんせ、とおろ／＼涙糸萩の、露に萎る丶風情なり、平次は茫然有頂天、イヤモいつ見ても／＼、寒う成程美しい、顔に似合ぬ心の難面さ、今日屋敷へ來たを幸、其様さへ合點なりや、親方に相談して、直に身請の金渡す、朝比奈めを思切、應と云てくれ給へ、と擂付引付有様は、燒大根に人喰犬、歯を落すべき身振なり、喜瀨川は取て突退、エ丶嫌らしい聞共ない、どんな憂目も夫の爲、變せぬが勤の誠、水責火責は扨置て、車裂に合逆も、お前に任す體はない、とびんと刎られ釣針に、懸た河豚の膨面、ム丶スリヤどう有ても俺がいふ事、アイ聞く耳は持やんせぬ、そんな永い濡事は、正月

も、堪忍して生存へ、百千年の御壽命過、未來へござんす夫迄は、半座を分て待ます、といふも苦しさ息使、刃物を抜て持直し、吭掻切し健氣の止、盛の花に天狗風、十八年は一期の夢、覺て果敢なく成にけり、朝比奈は氣も絶入計り、人目もわかぬ男泣、梶原主從葬禮の、供に外れしごとくにて、手持無沙汰の佛頂面、ナント忠太コリヤマアどうした物で有う、どうと申て切角の御趣向も、肝心の佛のない堂とやらで、女が死だりや皆無駄事、いつそ次手に朝比奈を、ヲヽサ〳〵筈は女が盗だと、白状をした上は、此奴も同罪戀の意趣、叩殺せと、下知より早く、又振上る下部が割竹、既に斯よと見えたる所へ、葉に葉立以前のきほひ、下部を張退叩退、朝比奈を後に圍ひすつくと立たる有樣は、危所で鴻門に、高祖を助し樊噲が、元服したるごとくなり、梶原主從反打懸、ヤア存外威蛆虫め、ソレ者共討て取、畏つて茅の穗先、拔連〳〵切てかゝるを、引外し及物逆取廻斬、恥も恥辱も命が物種、叶はぬ赦せと逃散れば、梶原主從堪り兼、輿を指て逃て行、相手なければ朝比奈が、塵打拂 兩手を突、私は御知行所、金澤の百姓孫作が忰熊藏と申者、お前の御難儀と聞ました故、日頃好な喧嘩に事寄、態科を拵て、此屋敷へ入込しは、御難儀を救ん爲、私が在所へ御供申、お隱ひ申ませう、ムヽ扨は其方は孫作が忰よな、志は過分なれ共、盗人の名が付ば、どふで遁れぬ我身の憂目、其力に後日の難儀を懸んが、イヤ〳〵そんな案じはなされずと、早くお出と勸る内、數多の人音門の音、扨は表を

責を、赦して進せて下さんせ、とどうと轉びて泣叫ぶ、してやつたりと平次が悦、コリヤ〳〵忠太、暫く責を赦めてこませ、と喜瀨川を抱起し、さう得心なりや言分ない、是迄朝比奈に義理立て、俺を振た意趣返、目の前で抱て寢るが責てもの腹癒、けふから俺が奥樣なれば指ても差た奴が有と、今の通責てくれる、と朝比奈を尻目に懸、押を强う鯱張ても、兎角物には時節が有物、今の優しいお返事で、腰から佛に成樣で、御本尊の不動尊から、火炎が立て堪忍ならぬ、サア〳〵寢間へと、取手を拂ひ、平次が差添拔くより早く、我と我、腹へ突込覺悟の自害、梶原主從朝比奈も、倶に驚計なり、喜瀨川苦しき顔を上、ノウ朝比奈樣、お前の責苦を助んと、心に思はぬ根なし言、平次樣に靡ふと、云た時は嘸や嘸、水臭い女じやと、思はんしたでござんしよ、譬いか成責を受、身は八裂に成迚も、厭ぬ覺悟の上成共、可愛お前を目の前で、打るゝ辛さ、我身をば、切るゝよりは百倍の、義理を立れば私故、お前の責に責を重ぬ、又其責を助けんと、思へばお前と縁を切、平次樣に添ねばならぬ、兎にも角にも我身の難儀、生て居れぬ女の操、コレ申平次樣、彼方をお憎みなさんすも、元の起は妾が有故、モノから成た上からは、笛を盜だ科人は、此喜瀨川じやと了簡付、朝比奈樣のお命を、何卒助て下さんせ、コレ手を合せて拜みます、夫故に女の身で、世間にない圖な切腹も、笛を盜で言譯なく、腹を切て死だりと、科を引受死る氣を、不便と思ふて下さんせ、名殘惜は朝比奈樣、どんな憂目に逢迚

春めく空に冴返る、袖の吹雪や玉散霰、眼の光地に落て、氷を結ぶ谷川の、水猶寒き古の、燕の荊軻や魯國の朱家、命を塵より輕ずる、例を爰に俠客の、類稀なる物語、世々に傳て著し

第二

伊豆箱根、續く三島の神垣や、石の鳥居苔蒸して、最神々たる常盤木の、移る景能き池水も、澄るは神の心かや、世渡の種は樣々、草原に駕突き据ゑて膝枕、抱ながらの居眠も、足音聞て目を覺し、駕やろ〳〵峠迄、乘らしやれぬか、親方小田原迄やりませうか、と云へ共通は馬の耳、風に任する雲助の、生業とこそ見えにけれ、下りの方から又一人、是も同じく襤褸の脊中、臂を廻して掻ながら、ホヽ儕まだ爰に居るか、今日は通がなささうな、ヲヽ新米の五助か、臺なし今日は明ぬ〳〵、適乘とぬかす奴は、强氣に安う付あがる、呑ねばならず喰ねばならず、でしんで持てしんどせうより、曉には大方和田樣が、お歸なさるであらうから、長持に行積おや、ホンニさうだナ、此間神明樣への通夜籠、今日で七日の御願明、何と思やるお大名の身の上で、何が辛うて七日の大願、通夜籠なさるゝぞい、アヽ大蛇になりや苦が增じや、夫を思へば此方等は、去迚は安樂世界、どの宿でもお定の十七文さへ拂へば、屋根代から荷賃、蒲團には生佛の千手觀音迄添て貸、其跡は錢がなけりや何食ないと心任せ、お大名より遙上り、公家

閉込て、討て取んず方便よな、とやせんかくやと一思案、見越の松を幸に、朝比奈を抱上、續て上る高塀の、外は並木の松原へ、終にひらりと下立て、コレ〳〵串朝比奈樣、此道筋を東へ眞直に切通迄落た〳〵、我等は追手を防がん、と、朝比奈を勸やり、見送る後へ番場忠太、大勢引連追取卷、儕下郎の分際で、慮外の段々其上に、詮議有朝比奈を、何國へ落した有樣に白狀し居れ、と呼はつたり、ホヽヽ、相手欲い胴ふくらへ、お出は近頃忝茄子、かゝる鴫燒命の串差、我等が手料理振廻ん、と後に高塀並木の松、小楯に取て待懸たり、物な云せそ討取、と荒井源八黑塚鬼平、捕たと蒐る一番手引外して二人が髻、兩手に摑んで顏打詠め、ホヽヽ揃ひに揃ふ人相は、鼻の下より頤の、短ひ命と投飛せば、石に頭を打碎れ、命は荒井目を白黑塚、ぎやつと計に息絶たり、續て懸る秋山藤内、猪熊九郎が突捧刺股、兩手に摑んで、コリャ〳〵〳〵逡巡所を蜻蛉返、一人立ては叶ふまい、惣蒐りに討取、と忠太が下知に大勢が、右往左往に追取卷、討て蒐るを事共せず、當を幸人礫、投出す捕手棟上の、もち餘したる、三重〽次第なり、此勢に氣を呑れ、猫に追れし鼠泣、ちう共云ぬ忠太が逃足、數多の下部も一同に、連々潑と逃散たり、ホヽヽ相手に成者最ないか、氣味好〳〵心地好、よし〳〵是より熊藏が、朝比奈樣の御供し、我家に隱ふ上からは、譬討手が向ふ共、隱ひ遂るが男の意地、と踏出す足音どう〳〵、動せず騷ぬ金剛力、龍に羽有虎に角、千里の野邊の一足飛、風を起して行道の、

よと俄の上意、是非に及ず昨朝未明に首給る、此趣を御知せの爲、近經參上仕る、と聞も敢ず親子は仰天、義盛怒の聲震し、ヤア麁忽成重忠が計ひ、譬極る科にもせよ、此義盛も三老職、いかに上意なれば迚、一應の相談なく、首討しとは奇怪千万、義盛を踏付たる、重忠に返事はない、早く返れ近經と、以の外の不首尾には、何といふべき詞なく、苦々敷も本田次郎、鎌倉指て引返す、義盛は地團太踏、譬平太が重罪なり共、此義盛が是迄の、忠義にめてゝ赦免有筈、いよ／＼最早此上は、一族語ひ鎌倉御所、踏破て目に物見せん、悴續と駈出すを、常盛は引止め、いかなるお恨有ば迚、臣として君に敵對、ヤアいふな／＼、荏柄平太を殺されては、未來の兄へ言譯立ぬ、其上數度の勳功を、早くも忘し馬鹿大將に、仁義立は無益の至、そこ退悴と又駈出すを、袖に縋て止むれば、ヤア放せ／＼、と爭ふ所へ、何國より共白羽の矢、二人が中をすつと通、社壇の柱にかつきと立ば、親子は恟り、コハ何者の仕業ぞ、と見遣る、彼方の繁みの影、ヲヽ其射手は是に有、と弓籙を携へて、動き出たる梶原平三、思ひ懸ねば親子は驚き、コハ何故に梶原殿、ホヽ此景時が來し譯、今射付たるソレ其矢、折て見れば知る事、と云に常盛ずつと寄、矢を引抜てはつきと折ば、景時微笑、ムヽ然らば此矢を殘らず一度に、サ折て見れよ常盛、と矢籙諸共差出せば、悟き義盛屹度見て、コハ珍敷梶原殿、一本の矢は折安く數の矢は折ぬといふ、唐土の古事を、ヲヽサ其氣の付ぬ義盛殿、和田の一門廣し共、日本國に比ふ

衆に近い迚雲の上人を形取て、此徒等が名を雲助とは、上手な作者が付た物だ、サアこいつも例のぼん屋へいて、丁半組うじや有まいか、そんなら駕は爰に置、一軍仕てこうかと、蒲團の紐も締なき、迂散な形の三幅對、巻た表具の軸を出る、心なき身の雲助は、打連宿へ走行、和田左衛門義盛が嫡子、新左衛門常盛、父義盛の宿願も、けふで七日の満日と、用意の酒肴釣臺に取持せ、鳥居の際に歩寄、コリヤ〳〵家來共、其釣臺諸共に、神主方に待て居よ、と云付やつて徐々と、歩む社の方よりも、立出る父義盛、夫と見るより、ハア親人、御機嫌の體恐悦と、悦ぶ顔を打守、苦切て父義盛、サレバ〳〵一族多き其中に、譯て荏柄平太が事は、兄和田五郎殿遺言といひ、幼少より手鹽に懸て育たれば我子同然の親、不慮の難儀を救んと、思ふ内に重る難儀、平太が預る蟬折の笛、何故に新比奈が盗べき謂なし、見顯せし梶原兄弟、物臭しとは思へ共、證據なければ詮議もならず、行衛知ぬ義秀といひ、平太めが牢舎といひ、彼是以て老の屈詫、兎角神慮の助を受んと、思付たる此大願、七日に満ずる今日只今、二の烏喰合て、本社の前に落たるは、甚不吉の神の告、心ならずと物語る、ハツト思へど常盛は、ハアイヤ夫は烏に限らず、都て諸鳥の餌を爭ひ、喰合落るは儘有事、神の告には候まじ、と詞も未終らぬ所へ、息を切たる早使本田次郎近經、二人が前に両手を付、主人重忠申越しは、江柄平太殿御事、大切なる源氏の重寶、蟬折の笛を盗れしは、甚不埒の至なりと、頼朝卿御怒強く、急ぎ断罪申付

が三島の社、是からは鎌倉近所、必々悟られぬ様に遊しませ、いかに世の末なれば迚、歩や跣足の長の旅、君も習はぬ杖草鞋、移變りし悲さと、涙含は靜御前、ヲゝ何から何迄心使、梶原が讒言故、奥州の高舘とやらで御最期、都に殘りし自が、聞た時の悲さ辛さ、同じ路にと幾度か、我身の覺悟は極たれど、此若を守立て、何卒世にも立せんと、思ふ計りを力草、御家來は皆討死、寄方なき身上を、漸嵯峨の奥山家、鎌倉の詮議強けれ共、寄逢迚もなき時節、せめては鈴木三郎が、生殘て居るとやら聞た計りを賴にて、紀州とやらへ下らんと、思ふ内に重家も、本領を召放され、行衞知ずと云に付、便る方なき憂身をば、其方が遙々尋てくれて、出羽とやらんへ下らんと、思ひ立は立ながら、行先難儀の旅の空、身に代ての世話苦勞、死でも忘はしませぬ、と手を合すれば、ヲゝ勿體ない、兼々義經樣のお物語、お前方のお身上、都に殘り給ふ由、夫次信の父、私が爲には舅、佐藤庄司の聞れまして、何卒迎へ奉り、お隱ひ申さんとは思へ共、次信忠信兄弟共討死の後、引續て奥州の騷動、從ふ者も皆討死、人らしい家來もなく、其上鎌倉の詮議強ければ、男は目に立て結句惡い、私にお迎申て來い、まさかの時詮議に合は、經若樣の御身代にと、幼なけれし共此次丸、コレ又惡さ仕やらずと、若君樣に付て居や、兼々も云ふ通り、今でも討手に出合たら、其方を若君樣じやと云程にの、譬餘所の伯父樣が來て、殺さうと云迚も、次丸じやとはいやんなや、いつ迄も經若じやと、大人しう云物ぞと、敎る詞に

れば、只一本の矢よりも細し、其一本の矢を以て、六十餘州を覆さんとは、ハヽヽヽヽ近頃以て浮雲物、ムヽスリヤ最前よりの始終の様子、ヲヽサ聞た故に入ざる世話、此景時が兼ての大望、夫故にこそ義經を始、義仲範頼淸水の冠者、源氏の骨に成奴等は、口先で亡して、折を見合せ頼朝を刺殺し、天下を一呑とは思へ共、貴處と重忠が氣に喰ぬ故、今迄は旗上せぬ、何卒邪魔を拂んと、思ふ矢先の通夜籠、人なきを幸に、忍入て遠矢に懸んと、思の外なる貴殿の大望、寧そ大事を打明て、倶々力に成思案、得心さへ仕召るれば、重忠一人は又仕安い、ハテ大望だに成就せば、東三十三ヶ國は此梶原、西三十三ヶ國は貴殿の物、何と此相談はどうでござると、燃る火に、柴焚付られ、義盛殆笑壺に入、ホヽ〳〵面白し〳〵、斯心の揃ふといふも、時節到來神の告、先程烏の喰合て、死せしは則友喰の、頼朝義經討亡し、日本國を占んとは、兩虎爭ふ時は、一虎其虚に乘といふ軍慮の奥議、ホヽヽ天晴〳〵、此義盛が胸腹中と、聞て常盛勇をなし、今迄父の企も、味方なき故不得心、和田梶原が一味せば、唐天竺が一に成共、イヤモ手に立者は覺なし、我本國に立歸り、謀叛の臍を堅めん、といふに二人が、シイ音高し人や聞、萬事は密々鎌倉にて、イザ同道と暮急く、時刻も七ツ斑猫に、加へし一味砒霜の毒、傍を睨んで立歸る、落人の身は自ら、夕日映き菅笠も、傾く運の日影草、白川が介抱にて、靜御前經若君、同じ出立の次丸が、御手を引も便なく、漸と辿り着、サア申靜様若君様、モフ爰

數多の敵を切散し、取て返して、靜樣イノウ若君樣イノウ、此次丸はどうした、と其處よ爰よと尋捜せど人影の、ヤア扨は討手に奪れしか、エヽ殘念や、と齒嚙をなし、譬奈落の底迄も、取返さいで置うかと、駈出す此方の池水より、這出る新五が濡鼠、どつこい遣らぬと駈寄を、振返つて拜打、跡を慕ふて三重、追て行、爰も名高き武藏の國、八の詠の風景は、和ぐ文字も金澤の、孫作といふ小百姓、産付たる正直の、頭に宿る髮筋も、二筋三筋五筋や、六十に近き女房、が此浦風の落葉焚、煙も細き營の、渡世苦にせぬ野良息子、名も闇雲の熊藏が、朝比奈を己が内に隱まひて、事もなげ成晝寢の夢、傍に響く高鼾、不敵にも又頼もしゝ、孫作灰吹こつち〱、イヤノウ婆又野良めが高鼾、夜は長起朝は長寢、未其上に晝寢しをる、困つた物じやないかいの、ヲヽ日が長いで退屈の晝寢、吹透して風引う、ドレ何ぞ裾に、と立母親、ハテ扨さう其方が、姑息で育た故に我儘八百、其處中を相手にして、喧嘩するが商賣同然、破落者に仕てのけた、夫はさうと朝比奈樣がお淋しがろ、早う御膳の拵やれ、イヤ〱朝比奈樣も今熟睡、御目が覺たかドレ見て來ませう、ヲヽそんなら俺もお傍へいて、口下手に咄でも何をがなお慰、サアお來やれ、と打連て、奥の一間へ入跡へ、親分内にござるか、とずつと這入生皮男、跡から又來るぶう〱が、天窓をぐる〱繩からげ、上口からどつてう聲、ヤア大きな事が起つて來た、コレ尻持を頼に來た、ちやつと起て下され〱早う〱、と搖り起せば、欠交くら

稚子が、アイよう覺てをりまする、誰でも來て切うといふなら、俺は源氏の大將義經が子經若といふ者じやと云分は安い事じや、と云ば若君頑是なく、スリヤ俺はいつ迄も次丸に成るのかへ、と聞て次丸慢勝に、そんなら俺が大將じや、サア次丸供せい、ヲ、經若樣イザお出、と主と家來の入違、同じ八つの稚子が、教を守る愛らしさ、靜御前も白川も、憂を忘る丶折柄に、梶原が郎等醒井新五、大勢引連どつと駈付、ソレ遁すな、と下知すれば、心得たりと白川が、三人を後に圍ひ、ヤア何者なれば遣らぬ遁さぬ、人違して後悔すなと、云せも立ず、イヤ隱しても隱させぬ、經若靜が詮議の爲、主人梶原の下知を請、方々搜して此所で、見付たは百年め、邪魔せずと渡せばよし、さもなければ儕め共、搦捕て目に物見せん、何と〳〵、と罵つたり、愚人に聞す詞はない、と靜御前も諸共に、用意の一腰抜放し、縱横無盡に切立られ、皆散々に逃て行、跡にて二人の稚子が、母樣喃と彷徨內、取て返して白川が、眼を配る傍の辻籠、是幸と二人を押込、必物を仰しやるな、と垂を下して隱す內、又も取卷捕手の大勢、左知たりと渡合、命限と追駈行、小蔭に窺ふ以前の駕舁、何でも味い金儲、と走寄て振擔げ、行方知ず成にけり、靜御前は漸と、討手の圍は遁れても、方角さへも知ぬ道、心どき〳〵足も空、見渡す後へ醒井新五、してやつたりと立寄向へ、出合頭に新米の、五助が見るより飛乘り、新五が襟髮かい摑、池へざんぶと投込で、靜御前を引抱へ、逸參にこそ駈り行、斯とは知ず白川が、

首傾け、有ぞ〳〵サア〳〵〳〵、モヽ近年の上分別が出來てきた、ナント斯しては如何でござる、二ッにせうにも相手が強し、呉てやるには猶惜し、男は當つて碎いじや、寧そ沙汰なしに堪忍してやりましよかい、ヲヽソリヤ早結構過た了簡じや、ハアテ跡の滅物じやなし、嗅を借た利金には、息子を此方へ引奪れば、モ餘大きな損徳も、內證濟にしませう、併し世間へぱつとせぬ樣、密夫には俺が方から、鬼殺の一二升も買てやつて、口留をして置ば、氣懸はそつ共ない事、ムヽそんなら夫はマア濟だは、ホヽ儕や馬士の猿助じやないか、ア親分聞て下され、胴てつ腹の熱かへる程、でつかいめに出合たから、此方を賴んで敵を取て貰にやならない、昨日小田原から皈りがけ、侍の荷を付たが、豪う貫目が有た故、酒代を貰ふと云たればの、無體の野良めで呉まいとぬかしわがる、そこで何が聞ぬ氣な此男、エヽあたけたいな磔柱め、儕が腰に箝て居る、節分の料理屑が怖ふて、五十三次跨に引狹んで、上り下りが成物かい、目腐錢の五十三十、おへない米の糠侍、溝漬の壓石にする土左衞門の幽靈め、仇忌々しいぞ、怪體じや〳〵〳〵と、手酷う張込でやりました、ホヽ夫は好氣味じや、アヽ好意味じやござらぬ、と云と彼侍めが、鼻捻り引拔て、己が天窻をすこたんぴしやり、西瓜畑へ雷の落た樣に、微塵に叩碎をつた、ハテナ夫は酷めに合たな、ヤモ夫で俺もこハりと目を廻したが、そこら中が寄て集て馬士やわい〳〵と呼聲が、幽に聞えると思たが、ソリヤ氣付よ人參よ、先天窻が大事

目を覺し、旨う寢てゐる、胴ぶくら又端喧嘩の尻持か、イヤ〳〵そつとの事じやでんせぬ、コレ聞て下され、といへば跡から、イヤ俺がのから、イヤ俺が先じや、イヤ俺じや〳〵、と爭へば、コレ〳〵〳〵、エヽ喧しいわい跡の先とは言ず共、マア喜次六から云た〳〵、イヤサ是が云ずに置れうか、立ぬ〳〵モヽ男が立ぬじやによつて、立て貰はにや、アイ人中へ顏の出されぬ大出入、コレ親方聞て下さんせ、俺は一昨年の秋、房州へ鰯網に雇はれ、三年振で戻つて見れば、マア〳〵聞て下され、内の嬶めが二月生の、しかも首玉の入た、男子を引抱てけつかる、密夫めを詮議すれば、隣村の與五八め、腹が立て〳〵、どうも堪忍がならぬから、此方に尻持賴に來た、サコレ立て下され親分賴む〳〵、とてつぺいから、湯氣を立て腹立聲、ちつと實の有喧嘩かと思や、エヽ忌々しい密夫出入、ソリヤ俺が尻持迄もなく、其密夫めを引摺寄、幼兒め共三つ重ね、六ツにして仕廻ツしやれ、と云れて恂り色眞青、ハテ滅相なそんな事が出來るなら、此方に尻持賴んはいの、コレ彼方は强し此方は弱し、そこで此方を賴に來ました、じやと云て外の喧嘩と違つて、俺が行て叩れもすまいし、どうぞよい仕樣が有が、ヲ斯さあれ、そうで不埒な女房添て居て面汚さうより、寧そ密夫めに誤證文を書せて、くれてやつたがよかろかいの、ハア成程夫もさうでござるかいの、が密夫こそすれ、平生はモずんと氣前のよい、アノ嬶を、彼奴めに只やつてのけるも、いかにしても惜いもんでござるはいの、と迷惑さうに

と差俯けば、エヽ去とはアヽお氣の弱い、其樣に跡先を案じては、天が落うか地が破うかと、夜が寢らるゝ物じやござりませぬ、大概世間は三寸の見直、エヽ嘸お淋かろに、何ぞお慰でも有ばよいに、鎌倉と違つて在所は何角が不自由勝、瀬畑の牛房や大根、内の明ぬ詮義、責て手作の喧嘩など、お目に懸うと思ふても、折惡う碌な相手もなければ、お淋いめをさせまする、エヽ仇忌々しい。とつかうどに、亭主の好を客へ出す、詞も時の饗應なり、孫作も両手を附、イヤモヽお遠慮はずんと御無用、此村は親御義盛樣の御知行所、お地頭樣の若殿を、お世話申は百性冥加と申者、全體私等は、母御巴御前樣からお目を戴た者共、お前の御難儀と聞て、影ながら氣の毒に思ふ矢先、災も三年と、熊藏めが喧嘩好、御難儀を救ふと云も因縁と申物、アイ親父殿の申通、御不自由にはござりませうけれども、お心置なういつ迄も、御機嫌克御逗留遊しませして下さりませ、と割なき詞の折柄に、表に見馴ぬ鋲乘物、忍びの附々若黨が門口より、孫作宅は是成か、巴御前忍の御入と、聞て驚く人々より、朝比奈は猶悔り俺はどうも母人に、お目に懸て詞がない、ハテ能ござんす俺が呑込んだ、と熊藏に打連立、奥へ入跡引立て、孫作夫婦出迎へば、乘物の戸を開せて立出る巴御前、ドレ其品是へ、と帛包手づから携へ、コリヤ〳〵者共、自は余程の隙入、此村境に待て居よと、附々を追返し、靜々と座に着給ひ、ノウ久しや夫婦の衆、マア〳〵健で目出度、と親しき詞に頭を摺付、ハアヽ御前樣には御機嫌で、

の物だと、三尺手拭でぐる〳〵、其上をコレ此繩で、結つて有ても當分の、合せ物は離れ物、どうで死るでござらう、息の有内に其侍を、ホヽソリヤ大な災難で有た、エイハ今夜俺が泊へ仕懸、仕返してやろ氣遣すな、と云に嬉しさ氣も落膽、涙の顔を振上て、エヽ頼しい親方、モウ其詞で成佛しまする、此樣にお世話に成のも、前生からの約束事、未來は一蓮托生、半座を分て待ます、と是を最期の詞かと、思へど更にけんによもなし、熊藏は腹筋撚、ハヽヽエ甚い戲けで有はいの、爰迄歩行て來る手疵、高の知た事で有う、と泣面を引捕へ、繩と手拭引解き、ヤコリヤ何ぢや、些とばかりのかすり傷、漸々皮の剝た分、と云れて權助人心地、我手に天窻振て見て、ヤア本に破ぬは、コリヤ大な堀出仕た、天窻一つ丸設じや、エヽ碌な喧嘩でも仕あがるかと思へば、外聞惡い蔑坊め、とつとゝ皈れ、と呵れながら減ず口、マア爰へ來ればこそ、七面倒な二人が出入、薩張と相濟だ、ヤコレ貴樣は何と思はしやる、親分の捌は分な物じや、アどうでも餅は餅屋ぢやの、コレ親分甚い世話でごんだ、お禮は重て〳〵、と二人は勇み立皈る、熊藏は呆れ顔、アヽ世には痴者も有物、と烟管取出すつぱ〳〵、燻る烟草の烟より、思は晴ぬ日影の身、朝比奈三郎は、孫作夫婦に伴はれ、悄々として立出る、熊藏見るより畏り、ホヽコリヤ朝比奈樣、嘸御退屈でござりませう、イヤ喃熊藏、只今奥にて孫作夫婦にも云通り、不慮の難義を其方の蔭で、危い命助られ、まだ其上に世話に成、禮は詞に盡されず、

ら、是々熊藏殿、樣、梶原樣の御家來を、貴樣が今打殺と、其尻は村中の難儀、爰は一番此庄屋に免じて、お役人樣方のお命を、助けてやつて下さるまいか、ハテ高が侍風情、殺した迚手柄にも成まい、コリヤイ〳〵お役人樣めら、助難い命なれ共、此庄屋が割に入て、お情深い熊藏樣の、お慈悲を以て助て貰ふ、サア皆謝つたと云た〳〵、と云れて銘々手を合せ、御免〳〵と詫れば、エヽ頭が高い〳〵、忝なくも此庄屋は、わり樣達が命の親、其代に年貢は未進、手酷う責と、罰が當るぞ覺て居ろ、と力む可笑き熊藏も、機を拔れ拍子もなく、エヽ叩殺す奴等なれど、庄屋殿の挨拶故、命助る此以後共、朝比奈樣の詮議に來ると、今度は傍ら命はないが合點か、エヽ申々何のいの、是に懲いでよいものか、エヽお慈悲深い結構な、氣味の惡いお顏付、何しに重ねて參りませう何卒助けて下さりませ、と又潸々と泣ければ、ヲヽ吼る程悲くば、助てこます早飯れ、傍らが樣なこてれつに、相手に成隙がない、長居ひろぐと叩出すぞ、と睨散して入にけり、剛平漸起直り、コリヤ〳〵家來共、アヽ汝等も嘸痛からうが、出家侍、犬畜生、借た物貴れると、踏れだり叩れたりが術なうては、ナカ〳〵侍と云商賣が、一日も成物かい、足元の明るい内、さらばお暇申さう、と立上れ共脚腰立ず、提灯で餅ぐにや〳〵〳〵、是はお旦那危ないと、立寄家來も又ぐにや〳〵、主從一度に顏見合せ、エヽ扨悲や腰痛や、斯ぐにや〳〵とぐにや付を、女房共が見るならば、嘸もぜがしくや思ふらん、それ腰は蒟蒻に似

と挨拶の内巴御前、二の包を直し置、何から禮を云ふやら、倅朝比奈が難儀を救ひ、此家に隱ひ呉し由、密に聞て自が嬉しさ、夫に隱して忍の見舞、夫婦の衆へ一禮、何をがなと思へども、急の事故用意もなう、麁末ながら此二品、印計りの手土產、を渡せば夫婦は押戴き、ハア有難い御褒美のお詞、また其上に拜領物、ハア冥加に余る仕合、爰は端近見苦けれども、奥の一間で緩と、何やら角やらの御物語、ホヽ自も密々に、云たい事もたんと有、イザマアあれへ、と夫婦が案內、奥の一間へ入給ふ、斯る所へぞや〳〵と、庄屋が案內先に立、梶原が郎等沼淵團平、手の者引具し駈來り、捕た〳〵と乱入、數多の家來が鼻の先、ぬつと出たる熊藏が、有無も云せず片端より、腰ぼん〳〵踏飛せば、團平苛て、ヤア下郎め手向か、儕日外身が主人、梶原公の館にて、樣々の狼藉我儘、剰詮議有朝比奈めを奪取て皈りし段、重々の不屈、召捕て來れよと、主人梶原の下知を受、沼淵團平向ふたり、サア尋常に繩かゝれ、手向ひろがば首にして連行ん、いかに〳〵、と罵つたり、熊藏は蹈反返り、空嘯て、ムヽヽイヤ是お待、余り強く呼ると、顋の懸金が外るぞや、いかにも其朝比奈樣は、俺が内にござれ共、貴樣の樣に新五左や盛相めらが、太平樂を吐く迚、返事マアならない、一昨日來い、とひやうまづく、短氣の團平拔打に、眞向微塵と切付るを、腕首摑んで筋斗打せ、腰の番を踏付れば、是はと立寄る家來も相伴、攧退張退踏飛し、一人宛は間垂しと、板戸蹴放振上るを、庄屋が見兼て怖々なが

廻なされし迄、段々のお腹立、先刻に下されし帛包、明て見ればコレ此裝束、どうで助らぬお前の命、潔うお腹召れて下さりませ、と涙と倶に進むれば、朝比奈顔を振上て、跡の跡迄、心を付ての世話苦勞、いかなれば某が、惰弱に生れし色好、常々母の御意見を用ひざる天罰にて、色より起りし身の謬、盗賊の名を付られ、卑怯未練の振廻も、非力に生れし身の因果、熊藏が情にて、一應命は助つても、迚も武士の交ならねば、疾より覺悟極しが、兄弟は多けれど、母人の子といふは、某一人の事なれば、男増の母上でも、跡の歎を思ひ遣、是迄は打過しが、どうで遁れぬ我身の上、親子の對面叶ねど、お聲を聞たを未來へ土産、サア／＼孫作介錯を頼入、と三寶取て押戴、腹切刀取上れば、モウ今が御最期かと、見遣る此方へ駈出る女房、ノウ是待てと立寄を、物をも云ず孫作が、引退る内義秀は、刀逆手に取直し、腹へぐつと突立る、ぱつと立たる血煙に、我を忘れて駈寄る孫作、女房もしがみ付、わつと計りに泣出す、朝比奈苦しき息を吐、長松の元に清風有とは古人の詞、然るに此義秀、父は天下に隠れなき、勇將と呼れ給ひし、朝日將軍義仲公、母人は又女ながら、音に聞へし巴御前、育られしは和田義盛、是以て名高き勇士、其悴たる朝比奈が、いかなれば人並より、遙劣りし非力者、是より迷し酒色の二ッ、夫故にこそ數ならぬ、梶原が下郎に迄、打擲せられし身の恥辱、子に持給ふ母人の、御顔迄を穢せし段、嘸や惜しと思すらん、此世でさへも此通、未來に在す義仲公へ、どの面下て對

てぐにや〳〵す、庄屋は挨拶をして立て徘徊す、アヽ浦山しの有様や、と髭喰そらして男泣、傍に庄屋は氣の毒顔、去にも去れず立開かり、アヽ扨々笑止千万な、中々其様な足元では、屋敷へは皈られまい、と云て駕はなし、俺が負ても行れず、エヽ何卒仕様は有まいか、ハテどうがな、と首傾、ヲヽさうじや〳〵、と庄屋が一期の分別袋、有合ふ戸板持出し、團平を引摺乗、引縄付て、サア〳〵是でよい〳〵、いかに家來の面々聞給へ、此處に足腰の、立ぬも皆宿業のなす所、一引引ば千僧供養、二引引は萬僧供養、サア〳〵寄て引れよ、と云ば皆々立懸り、一引引てひよろ〳〵〳〵、二引引ては又ひよろ〳〵〳〵、庄屋は可笑鍋引提、滅多矢鱈に打鳴し、辰巳上りの聲張上、捕手の役人足が折、自力にては叶ひ難く、他力を以て足代成就致します、お志はござりませぬか、足代の建立〳〵、奉加〳〵と聲を上、引摺廻して出て行、永き日の、まだ暮兼し軒の褄、柳の糸の徐に、動く共なき春風の、運ぶ深山の斧の音、丁々として幽なる、蛙の聲も雉子の音も、いとゞ詫敷昏黄の、彌時移る田家の春、無殘やな朝比奈は、母の對面叶はねば、覺悟極めし死出立、無紋の上下白小袖、腹切刀三寶に、携へ出る一間の内、萎れながらに座を占る、夫と見より孫作が、踏所も知ず走出、ヲヽさうなうては叶はぬ筈、よう覺悟遊ばした喃、最前ちらりと申せし通、母御様へ色々と、御詫申て見ますれど、聟舅を盗ぬにもせよ、云譯立ねば則科人、盗賊の名が付ては、お家に疵の付事、二には梶原が舘にて、未練の振

胤は、熊谷殿にて有しよな、知ぬ事とて無禮の段々、是迄は巴樣を、親と思ひし身の恐、真平御免下されませ、と云に母親咽返り、生落して今日が日迄、我子と得云ぬお主扱ひ、今に成ての名乘合、思へば薄き親子の緣、せめて二日か三日成共、生存へて我子ぞや、と堪能する程云たいと、口說立れば巴御前、ヲヽ二親の歎を思ひ、其方の命助けたいは山々なれ共、熊藏が云れぬ願立、其方の舞儀を敎ひし事、鎌倉に隱れなければ、其方計りか熊藏が、科人と成殺されては、一人ならず二人の命、折角是迄心を碎き、取替難し詮もなく、義仲樣の血脈が、絕果る計か此巴が、二張の弓貞女の道を背たる、心盡も皆徒事、何卒して名將の、胤を此世に殘さんと、忠義厚き孫作夫婦は、一生其身を土堀、土百姓と成果るも、熊藏が身を全うせん、心遣は須彌大海、深い心を汲分て、現在夫婦が血を分し、其方を死せて下されと、死裝束の手土產を、持て來た心の內、醜い其胴慾共、此身を斷々に切れてなり共、義仲樣の御胤を、此世に殘さん其爲と、丁聞付て下されと、わつと斗に泣給へば、孫作は堰來る淚、呑込〱手負の耳際、コリヤやい倅有難い、今のお詞我々連が、倅の身で忝なくも、源氏の大將義仲樣のお子樣に成代つて、死れば己そ誰有う、巴樣の枕本の御介抱、有難いと御禮申せ、日頃美々敷形容、ア鳶が鷹じや能子を持たと、云こそせね心の自慢、お屋敷へは遠慮して、月々の登城日に、態々鎌倉の大手先に、彷徨として居るも、其方の姿が見たい計り、寒い事も暑い事も、飢ひ事も打忘れ、

面せん、チヱ殘念や口惜やな、生ては母へ義理立ず、死で行にも行れぬ身の、六の街に迷ふ共、せめては鬼共蛇共成、憎しと思ふ梶原を、取殺さいで置べきかと、身を悔みたる無念の涙、孫作夫婦は氣も狂亂、お道理樣やと計にて、又潸々と泣居たる、イア其迷は此巴が晴させて取せうと、立出給へば手負は嬉しく、コハ御對面有難、と悦ぶ顏を熟々と打守り、ヲヽ此母計が對面ならず、二親共に對面させう、と云に朝比奈慟し、扨は父義盛公にも、イヤ〳〵其方の實の親と云は、夫に居る孫作夫婦、と聞て手負は又慟り、堪兼て孫作が、ヲヽヽヽ其跡は此親が、直に咄して聞さう、元俺も腹からの百姓でなく、巴樣の親御兼遠樣に譜代の御家來、エヽ思ひ出すも二昔、義仲樣の御威勢を、アノ梶原が妬みにて、御謀叛との讒言故、鎌倉より討手向ひ、宇治勢田の手も責破られ、終に粟津の戰に、敵なくも討れ給ふ、其時に巴樣は、是非討死との御覺悟、お腹には七月の、しかも左孕は男のお子、御平產遊して、父御の敵梶原を、お討せなさるが、討死より增つたる御奉公と、留めても聞入なく、敵陣へ駈入んと、勇める馬の轡を取て、引立るを、ハナセ〳〵、放せ〳〵と、鐙の鳩胸で幾度か蹴られながらも、其場を立退落延る所を、義盛樣に出合て生捕れ給ひしも御緣の端、程なく和子を御平產、され共梶原が清水の冠者樣の樣に、又讒言は知た事、エヽどうがなと思ふ中、此婆が同じく平產、後の爲にと取換て、育たる子はあの熊藏、と聞て手負は起直り、扨は私はお前の子にて、義仲公の御

く鎌倉の、今よりしては我身の公着、先立し朝比奈が恩を忘れぬ其爲に、朝比奈三郎義秀と改名せん、と勇の詞末世に傳ふる出立は此理と知れたり、三人歎も打忘れ、ホヽ潔し頼し、と仰立れば三郎義秀、梶原が讒言にて、義仲公の敢なき御最期、餘所事なりと思の外、現在父の修羅道の、御無念の月日共、知で送りし殘念さよ、是より直に梶原が、館に踏込一々に、首引抜父の御無念、味方の教養先立し、朝比奈が恨も共に晴さんと、怒の眥血を濺ぎ、眉毛逆立無念の形相、母人さらばと云捨て、表を指して駈出すを、ヤレ待朝比奈云事有、義仲公の御胤ながら、民家に育し其方の力、馬士下郎は手に合ふ共、勇士の勝負心元なし、イデ勇力を試ん、と襟ひらりと脱捨給ひ、庭に生たる檞の立木、根でしにぐつと引抜て、小脇に掻込突立上り、傳へ聞く獅子の子は、數千丈の岩壁より投落して例見る、我子の勇力どざんなれ、と打付給ふを引外し、投れば宙に飛上る、早足の振廻烈しき勇力、又打付るを宙にて留、コリヤ〳〵〳〵と引力、大地も踏拔計りにて、双方互角の根限り、揉合拍子に檞の生木、中よりさゝらと捻切て、直と立たる親子の有様、目覺しくも又醜しゝ、朝比奈莞爾と打笑、ナント母人、是でも梶原は討ますまいかな、ヲヽ夫で思ひ置事なし、イデ門出の餞別せん、とずつと寄て死骸の刀、取手も見せず我と我、咽にかはと突立れば、是はと驚く孫作夫婦、流石の朝比奈惘動轉、何故の御自害と、取付縋れば、ヤア何故とは曲もなや、是迄は其方の身の上、人となさんと思ふも力、

あんけらぽんと立て居て、幾度か見附から通れ〳〵と叩れても、性懲もなう立廻れど、外の行列目に付ず、餘所ながらにも其方を見りや、嬉うて〳〵皈りは足も地に付ず、親の欲目子故の闇、兼ての覺悟も打忘れ、ア、果報負せねばよいが、冥加に盡ねばよいがと、思ふたが案の定まだしもお身代じやと諦りやこそ、物も言るれ活ても居れ、外の事で死だなら、身が砕けるで有うぞと、云ふ聲胸に塞れは、母は正體泣膨す、目を押拭ひ〳〵、親子は一世と云からは、未來で逢はれぬ暇乞、コレ〳〵〳〵、切なく共唯一言、親父樣か母人かと、云て別れて下され、と歎く詞が通じてや、手負も今はの目を見開き、ハア有難や忝なや、惰弱に生れし我故に、親々の名を穢すかと、思ふに違ふお身代、親父樣母樣、巴樣へお禮を、と云も苦しき斷末魔、照日に向ふ初雪の、消るが如く息絶たり、人々死骸に取付て、前後も分ず泣沈むは、理せめて哀なり、斯る樣子を最前より、忍んで聞居る闇銅の權助、物影より踊出、ヤア朝比奈を取替當し、樣子殘らず聞屆た、生捕て金にする、と駈込一間の障子越、取て投出す人礫ぐわんと共云ぬ闇銅の權助、此世の鳴は止つたり、人々是はと驚く内、後の障子颯と開き、直と立たる熊藏が、素袍の袂のつしりと、雲に羽を伸す鶴の丸、剃下天窓に烏帽子の懸緒、さも目覺しき其出立、四方を睨と打守り、田鼠化して鶉と成、雀海中に入て蛤と成、先程よりの物語、我こそ朝日將軍義仲公の忘れ形身と、初て聞たる我身の上、土産に給ひし帛包、此素袍に染込だる、千代を壽

生れて泣ぬ荒涙、淀の河瀬の水車、面に注ぐ如くにて、凄しくも又痛々し、孫作ハット心付、迚も悔で返らぬ事、斯る様子の流布せぬ内、朝比奈様は是よりも、諸國を廻る武者修行、我々夫婦は姿を變へ、上なる山に庵を結び、お前の出世と此里の、風景共に能見るの、文字を取て能見堂、今に傳へて金澤の、賓八景の筆の跡、其名を假の朝比奈が、今日を命の瀬戸の月、孫作夫婦は泣々も、巴御前の亡骸を、送る乙艫に返る帆も、弘誓の船に歎乃唱ふる稱名暮の鐘、迷ひを晴す遺言を、守るもよしや義秀が、追付敵を内川の、雪積次第の一人旅、再び運を平瀉の、使を聞ん雁金の、羽がい道し老の身の、命は何と洲崎の嵐、晴ても晴ぬ別の涙、隨分無事で御機嫌に、必々今迄の、短氣な出して下さるなど、いと念頃に夕日さす、野島の浦に寄る浪の、浦山しさも身に知て、絞る袂は夜の雨、いつかは爰に小泉と、心殘して出て行

第三

海道筋の案内は、四季に杜絶ぬ賑の、旅人を當に世を渡る、藤澤の宿外れ、葭簀圍ひし茶屋の軒、ぼんじやり風の品者が、汲で出す茶の花香より、娘の顔に引されて、誰も思ひの大和茶は、近年流行の仕出しなり、コレ姉樣爰へも最一つ、俺にも、と口々呑で、なんと可内、いつ見てもきついい物だよ、ハテ扮名代の茶釜娘、笠森お仙以來の評判、嵯峨や身延の出開帳で、通りの

孫作夫婦が忠義にて、斯迄育ちし大恩は、産の親より百倍ぞや、人目を思ひ是迄に、しみ〴〵禮も云ずか、適來りし今日のしだら、土産と名付し二包も、我産の子の其方には、出世を壽く素袍の舞鶴、夫婦が産だ朝比奈には、死出の公着の白小袖、麻上下に腹切刀、夫婦の衆の否共云ず、殺して呉た心の内、健氣な心に恥入て、どうも生ては居られぬ義理、二には朝比奈が、一徹短慮を諫んと、思ひ設し此自害、コリヤ義秀、父親の仇を報はんとは、更々無理とは思はね共、天下を吞んと計る梶原、其方一人が駈入て、やはか仕果せらるべきか、匹夫下郎の犬死を、血氣の勇士の、骸の恥辱とする事ぞ、母が末期の詞を守り、隨分命を全うし、何卒世にも出るならば、經陀羅尼にも勝つた追善、龍は池中に潜つても、時を得て天に昇り、韓信が胯漂母の食、皆堪忍を守りし故、人の鑑と云るゝぞや、いかなる難儀に逢迚も、短氣を出してくれるなと、理を盡したる教訓の、膽に答へて朝比奈が、はら〳〵〳〵と溢る涙、孫作夫婦は手を合せ、我々への義理立に、お自害を遊ばすとは、冥加の程も恐しい、と云聲涙に咽返り、身も崩折れ伏沈む、朝比奈ハッと居直りて、ハア有難し〳〵、母の末期の御一言、骨に通つて忘れ難し、是より我は武者修行、諸國に程能城地を見立、軍勢を駈催し、梶原父子を討亡し、御無念晴し奉らん、ヲゝ其合點さへいたならば、モウ思ひ置事微塵もなし、何れも去ば、と聲の下、刀を拔ば俯に、がつばと伏たる此世の別、ワツと泣出す夫婦より、天魔を挫ぐ朝比奈が、

寄親子して、髮形剃れば越中の、褌一の丸剃男、親子は驚き、是はマア興がる、先刻着て出た古袷は、何處へどうして此お姿、よもや博奕は打やなされじ、どういふ事とおろ〳〵涙、ハヽヽコリヤ面白いは、男は裸百貫、潰に懸ても五十貫が物は慥、今日も鎌倉から荷物が出で、百七十文じめたけれど、餅屋と酒屋へ三十日の拂、エイカ〳〵飯に大屋様へ寄たれば、三月の店賃が不足して居る、乾度よこせとぬかしをる、高が一分に足らぬ金、何の其惜さも惜し、拂ふべいと思ふても、三文もないじや、エイカ〳〵所で袷をぐる〳〵〳〵、エイカ〳〵そこで店賃を濟せた身祝、菎蒻の田樂で、二十四文がの引懸たじや、所で酔たでゑすは、何とエイカ〳〵、何の夫がえい事が有ぞいな、そしてマア滅相な、着替のないは知て居て、裡にならずと斷の、云ひ様も有さうな物、ひよんな事や、と氣を揉所へ、門口から小底がによつこり、五助殿庄屋殿から急用じや、ちやつと御ざれ、と焦れ共、イヤ〳〵何ぼ庄屋殿のお詫宜でも、往く事は罷ならんじや、ハアテ拙夫でも嚴しいお尋者の御詮義、是非ござらにや濟ぬ事、サア歩はつしやれ、と引立れば、アヽコレ〳〵先生、行事は易けれ共、見らるヽ通り褌一つ、何ぼ痩ても庄屋殿は村中の束じや、其束殿の内へ、白衣ではいかれない、ホンニさうじやコレ〳〵お内儀、何ぞ着せてやらんせ、と云た女房氣の毒がり、何ぞと云たち着替はなし、せめて是なと風防ぎ、と袖無羽織打着すれば、差心得て娘が前垂、ムヽ是で裝束相濟んだ、ハアこりや阿蘭陀人の夜

多い此海道、往來の人を釣寄て、犬に掛鯛目の正月、斯云者が世間に流行、コリヤ宅助、手を握るが嬉しい迚、無上に呑で腹を下すなよ、イヤ其や云れぬ我が燒餠だい、ほんに其燒餠で氣が付た、空腹に茶を呑だら、疝氣めが高鳴しをる、五文餠でもしてこまそ、サア來い〳〵、と打連立、エヽ悪々しい俄雨、と呟き〳〵そこ〳〵に、茶の錢拂ふて立歸る、ホヽコリヤ又悪い時、降て來た、コレ娘、もう此雨で通りも有まい、店も仕舞て休みやいの、と云苑出る母親が、床几片付煙草盆、茶碗取々內に入、ノウ樣樣、もうお仕立物は濟ましたか、サレバイノ、次第に寒空に成故に、旦那殿の袖無羽織、新らしい物と違ひ、色紙の當る洗濯物は手間が取る、漸と今絎仕舞、まだ仕付縫も出來ぬ共、最う飯拵へに懸らざ成まい、それはさうと此方の人は、もうお歸りで有さうな物、サイナ俄雨故、用意もなう濡なさるでござんせう、と親子が咄の最中へ、息杖腰にぶら〳〵と、身は蓑虫のひよろ〳〵〳〵〳〵、主の五助が門口から、嚊よ娘よ今還御なされた、と舌も廻らぬ千鳥足、ソリヤお歸りと立內に、蓑をも脫ず座敷の眞中、ヤゑつとこさせとどつかり据れば、親子は立寄、是はマア怪しからぬ酒の醉、ソシテマ滅相な、蓑を着ながら座敷の上、何處もかも雫だらけ、テエ脫して、と立寄れば、アヽコレ〳〵お構ひ下されな、寒いによつて飲たでゑす、飲たによつて醉たでゑす、醉たによつて脫ぬでゑすは、嚊衆お娘微塵も無理では有まいがの、じやといふて是が、マア脫いでをう成物ぞいの、と無理に立

暮故、所縁ある藤澤寺へ、其方を預置ながら、顔見る迄は案じの種、サア此方へ上りやいの、イエ〳〵そこ處じやござりませぬ、靜樣を詮議する迚、和田義盛梶原平次、此宿へ入込で村中の騒動と、聞て母親胸騒、ソリヤマアどうせう要之助、アヽイヤ申、シテマア父樣は、どこへお出なされました、さればいの父樣は、庄屋殿から呼に來て、先刻にお出なされたいの、エヽ夫も確然此詮議でござりませう、そんならいつそ靜樣を、落しまする思案はないか、イエ〳〵〳〵四方八方役人が取卷ば、そんな事では濟ますまい、じやといふて是がマア、ほんにさうじや此車町に、白川殿が忍んでござる、其方ちよつと一走、呼で來てもらぬか、アイそんなら私は參りませう、靜御前を出さぬ樣、ヲヽ跡氣遣はずと早ういきや、アイ〳〵と要之助、逸足出して馳り行、跡に吐胸を突ばかり、思案に暮て立つ居つ、見遣る向ふへ立皈る、鈴木三郎重家、初に變る衣裳付、上下大小爽に、昔に皈る錦の袖、跡に引添ふ和田左衞門義盛、梶原平次景高、嚴づかま敷座に着けば、呆れ果て女房が、夫の傍にすつと寄、是はマア怪しからぬ、どうした譯、と尋に重家、サレバ〳〵先程庄屋方へ招寄、あれにござる御兩人のお眼鏡にて、頼朝卿へ召抱へられ、以前の如く紀劦の藤代下されんとの嚴命、ムヽスリヤあのお前は、義經樣の御恩を忘れ、頼朝樣へ奉公遊はす、お心でござりますか、ハテ扨何事も此重家が胸に有、默つて居やれ、と制しても、イヤ〳〵〳〵義經樣の御厚恩、御最期のお供を、すべき筈の身な

這に行樣な形じや。さらば參上仕う。とひよろ付足に小庭が厄介。肩に打懸出て行。跡打眺め女房は。娘の手を取上座へ直し。遙下つて手を仕へ。勿体ない誰有う。源氏の大將義經樣のお臺所。御同然の靜御前樣。御世が御世なら輿車。いかに世を忍ぶお身なれば迚。爲されも付ぬ茶屋の業。往來の人にお顔を晒すも。鎌倉の詮議强ければ。隱し立は猶ならずと。夫鈴木三郎が深い方便。京の御所方に勤て居た。娘の小よしと云ふらし。若詮議が有迚も。お顔を見しつた者なければ。いつ迄も吾助が娘と云募る。兼ての思案萬事にお氣を付られて。悟られてはし給はるな。と語るも聞くも涙なる。いつぞや三島の難儀の時。思ひ懸なく重家殿に廻り逢。樣々の介抱。自が身は兎も角も。大切な經若丸。其時の騷動より。敵の手へ渡たれば。何卒再び取返す。賴に思ふは夫婦の衆能にと計り打萎れ。又も涙にくれ給ふ。ヲヽ其儀はお氣遣遊ばすな。其時散々のお身の上。此間次信殿のお連合。白川殿にも尋逢。御一所には目に立迚。此裏町に忍ばせ置夫は毎日小揚に托付鎌倉へ入込。經若樣のお身の上は。義盛が方に御座遊ばすとの。慥な樣子を聞たれば。白川殿と心を合せ。近々に奪取る思案。必お氣もじ遊ばすな。マア〳〵奧へ。と勸められ。涙ながらに立て行。跡に女房只一人。心も細き物思ひ。先刻に庄屋から呼に來たは。若此事では有まいか。と疵持足の氣扱ひ。思ひ過しの折柄に。息急來るは此家の一子。這入を見付て。ヲヽ要之助か。よう來てくれた。二三日は逢なんだ。ほんに貧しい

何の讒言、頼朝卿の卜意を請、義盛殿と此景高が詮議する靜御前、汝と倶に引縛り拷問するは安けれ共、武士の情二には、義經が家來の汝、手殺しにせまい爲、頼朝卿へ召出して殺させてやる大恩、有難いと三拜はし居らいで、ひつこしやつこと理窟ばる浪人の痩骨、挫ぎ付て討さにやならぬ、と云れて鈴木も百年め、刀の柄の碎る計り、握詰たる無念の顔色、モウ斯成上からは、娘にして仮ればよし、是非と有ば絶體絶命、サア返答聞んと極返し、五臟六腑を揉上て、額に流る丶玉の汗、梶原も云懸り、青筋張て競合中、義盛は古兵、彼奴荒立ては事の破れと、真綿で首の緊括り、二人が中へ割て入、先梶原殿お待なされ、最前から見受るに、思ひ込だ重家が振廻、娘と云に違ひも有まい、と云に悔ヤ丶丶義盛殿何を證據に、イヤサ重家が娘に違なければ、此方にも一の所望、ノウ鈴木殿、拙者が忰新左衛門常盛、未婦妻も御ざらねば幸此方の娘小よしとやら、申受て拙者が花嫁、常盛に娶せたい、此相談はどうでござらう、と物に馴たる古狸、腹に毛のない白化の、裏へ持込一工、重家ハットは思へ共、一寸遁れ即座の返答、コレハ〳〵思懸なき義盛殿の御一言、スリヤ靜との御疑は、ハテ晴いで嫁に取る丶物か、然らば追て日を撰み、イヤ〳〵此義盛は老人、物事が氣短、日を見る事は大嫌、嫁入は則今晩、捺は元來入ず、夫共又其方に嫌と有ば一詮義、と乘引させぬ釘鎹、打て變たる詮義の手詰、梶原一圓吞込ず、詮義仕懸た靜御前、若取逃さば後日の難儀、アヽイヤ今宵輿を入る迄は、大

れ共、折惡う親御の御病氣、介抱願ふて國へ皈つた跡での御最期、其時には殉死でも切樣に仰つたが、いかに貧苦が辛い迚、鈴木の三郎共云る丶武士が、二君に仕へて抑やそも、未來にましますす義經樣や、親御鈴木郡司樣へ、忠孝が立者か、思案仕替て下さんせ、と恨の泪堰き敢へず、ム丶此方が重家の御内證でござるな、拙者和田義盛お近付になり申さう、ナニ義經へ義理が立ぬ杯とは、ソリヤ女儀の狹い了簡、既に義經親兄の禮を忘れ、頼朝卿を亡さんと計る、人面獸心天道は正直、此義盛が討手の切先、衣川の泡と消、修羅の奴と成たる義經、何の義理も糸瓜も入ぬ、ノフ梶原殿、ナントさうではござらぬか、成程謀叛人の義經が家來なりや、縛り首にもすべき所、本領を下されんとは、我君の御仁政、有難く思ひ召され、と惡口取々擣り兼、差出る女房重家が、引捕へて動せず、ノウ御兩所、今日是迄御出有し御用の樣子、仰聞され下されい、ホ丶重家が奉公始、申付るは別儀でない、汝が内に靜御前、隱ひ置條紛れなく、詮議の爲に我々兩人向ふたり、サア首討て渡されよ、と云に重家空惚け、ハ丶丶是は〳〵、和田殿のお詞共覺えず、浪々の身の重家、親子三人暮し兼る茅屋、靜御前樣を隱はんとは、ヤアいふな〳〵、其親子三人が白徒、我子と名を付白化の隱ひ者、讐餘人は欺く共、此義盛を謀らんとは、其手は喰ぬ出直せと、云れて重家膽に燒鉄、イヤどう有ても拙者が娘に違ひござらぬ、立身出世も子孫の爲、我娘を灩にして、首討事罷ならぬ、ヤア詞甘きに付上り、罷ならぬとは

成共、忠義に凝たる一念力、義盛親子が首掻切、御若樣を御供せん、母樣氣遣遊ばすな、とさしもに逸る勇士の二葉、娘姿や姫百合の、心鬼百合鬼一口、迎の來るに間も有まい、サアサア用意と拔目なく、取急ぐ縁の糸、結の神や、三重「雉子山鳥秋鹿も、慕ふは戀の常ながら、殘るは君が袖の香、奧より洩るゝ爪音と、見越の松を吹風と、互に調べ扇が谷、和田左衛門義盛が館には、今宵俄に嫁御の輿入、上下の騷大方ならず、美麗を盡すはき掃除、庭に盛砂箒目に、武家の行儀を顯はせり、忍ぶれど、色に出にけり我戀は、物や思ふと人問ど、何と答も媚ける、姿の花も義盛の、秘藏娘の千種の姫、數多の女中に傅れ、出る一間の紅葉して、風も色有風情なり、優に座に着給へば、男欲しがる色盛、御殿育の上づれに、目口乾きの小笹が手を突、憚ながらお姫樣へ、皆の者が打揃ふてお尋申上まする、當春江の島詣の時、美しいお若衆樣と、不思議な戀の御趣向、寸善尺魔と邪魔か入て、ついお別なされてより、お心がもちやくちや〳〵、夫から廻つた戀煩、祈禱よ醫者よ占よ、御鬮よ棒よ足は擂木、鬼子母神樣や稻荷樣へ、お百度參も矮狗に伽羅、すつきり醒ぬ御病氣が、先程から物忘れした樣に、さつぱりとお心よいは、マどういふ事で有うぞと、色々お次で評義して、濟ぬ故お尋申上ます、と云を若葉が引取て、ヲヽ皆樣は未知ずかへ、其若衆樣にお別れなされてより、お名も所も知ぬ故、お姫樣の物思ひ、サア女の念は岩通すと、段々手を廻してお聞なされた所が、其若衆樣はの、義經樣の

勢の馳走人、四方八方付置ば、逃隱るゝ氣遣なし、輿入は彌今晩、イサ御出、と立上れば、梶原も不肖〳〵、挨拶もなく默禮計り、面脹して立歸る、夫婦は門の戸はたと立、小聲に成て、ノウ我夫、どう成かう成云拔ても、跡の難儀は靜樣を娘にして、義盛へ御渡なされるお心かへ、ハテ滅相な、靜樣を敵の手へ渡す程なりや、いさせさと今の樣に爭はせぬわい、夫ならば又嫁入を、ヲヽサ其嫁入を否と云と首討と云ふ一手透、してうに懸る詮義の手詰、是非に及ず一寸遁れ、請合事は請合しが、差當る嫁入の難儀、最早御運も是限り、一方を切拔て、我本國へお共せん、女房用意、と氣を揉所へ、ヲヽ其嫁入の人替り、是にて用意致せしと、奥より出る白川が、跡に伴ふ要之助、見變す計の島田髷、女姿に驚く夫婦、や思ひ懸なき白川殿、委細の樣子は、サレバイノ、最前此子が急の知せ、思案に盡し思付、眞逆の時は首討て、お身代に立ん物と、彼子にも呑込せ、僞に似せし髮形、裏道より忍入、靜樣と入替置、すはと云ば首討んと、思の外に義盛が、工の裏の裏の裏、此子を嫁に拵へて、和田が館へ伴ひ行、經若樣を奪取方便、と聞て重家感じ入、ホヽ流石次信殿の御内方程有て、驚入たる即座の方便、と云に女房待んせや、顔形は似せたり共、肝心の床の內、見出されては重る難儀、イヤ〳〵其儀は氣遣さしやんすな、此白川が乳人の役、傍を離れず付添へば、折を伺ひ義盛親子、ムヽ面白し〳〵、此重家は九の、鐘を合圖に裏門より、忍入て助太刀せん、悴ぬかるな、アイ〳〵、譬罔兩鬼神

取持計りでもござらぬ、貴殿の二心詮議せよ、と親景時が下知を受、推參致し候、と苦り切て云放せば、義盛はせゝら笑ひ、某に不審とは身に取て覺なし、さればく、今日貴殿と同道にて、詮議仕懸た靜が事、重家が口車、娘なりとの云廻しを、得心するさへ心得ぬに、常盛に娶さんと、早速の云約束、是不審の第一、又先達て義經が小倅、犬骨折て鷹の餌食と、貴殿の方へ奪取ながら、我館に隱ひ置く條、彼是以て心得ず、今宵九つの鐘を相圖、首討て渡さるとか、異議に及ばゞ賴朝へ申上うか、當時出頭の親景時、賴朝卿は立うと伏うと、親次第サヽ何とくく、と傍若無人、常盛引取、コレハくく何事かと存ぜしに、さしてもなき御不審、今晩婚禮の一件は、追て樣子知る事、又經若丸が首討には、何時でも御用次第、何の手間隙入ぬ事、別してもない儀を仰出さうな、梶原殿には似合ぬ、と一本刺れて痛み入、そさう出られては近頃迷惑、實を申さば親景時、愛な親父と大望の企、賴朝を亡して、日本を半分分け、源氏の余類を一定でも生置ては、後日の邪魔と思ふからの心遣、二つには又根が他人故、少した事にも互の疑、蟻の穴から堤とやら、疑は破の本、其疑のない樣に、愛な娘千種の前を、手前が妻に申受れば、聟なり舅なり、婿なり小舅なり、微塵も如在は出來申さぬ、サコレ此景高が一生の賴、是非に千種を申受ると、已が得手に帆を上て、戀の湊へ乘かける、義盛は苦笑ひ、ハヽヽヽコリヤハヤ似合しき御相談、早速應と申たいが、頭踏へし常盛さへ、未緣邊調はねば、此儀は兎

御家來、鈴木三郎樣の御子息、要之助樣と云お人で有たといの、と云ても御在家が知ねば、いとゞ重る御病氣、先刻に大殿樣お飯の祈、御意遊ばすには、鈴木三郎樣のお娘御小よし樣と云のを、愛な若殿常盛樣と御縁組が極つて、今宵俄のお輿入、スリヤ繋がる御家門中、いつお逢なされうと、自由な事に成て來たは、結の神の引合せと、夫で俄に御病氣が御快氣、久し振でお髮も上り、浮々とした御顏、目出度事じやないかいの、と咄せば皆が手を打て、扨もしたり、そんならさうとお姫樣、とう御披露の有さうな物、お前計が浮々と、ひよんな夢でもごろじやるなと、嬲れば姫は顏赤め、聞やる通の譯なれば、自が心の嬉しさ、疾にも咄す筈なれ共、必人におつしやるなと、鳴瀨がきつう留た故、遲なはつたは堪てと、袖打覆へばお局が、コレ皆の衆、餘ざは〳〵と氣を惡がつて貰ふまい、若此事が大殿樣のお耳へ入と、大事の時の邪魔に成、仕課せる迄必沙汰なし、悟られぬが肝心、ひそ〳〵潜く表の方、梶原平次景高樣、御出と告る聲、ソリヤ又例の蜒蚰殿、いけ好ない顏しながら、お姫樣に惚くさつて、しみしたゝるい濡事、傍から見ても腹が立、サア〳〵お入遊せと、さゞめき立て奧御殿、皆引連て入給ふ、程なく入來る緩怠面、梶原平次景高のつさ〳〵と打通れば、立出る和田義盛、跡に續いて嫡子新左衞門常盛、ひらにわれへの辭儀作法、座に着ば義盛、御存の如く、今日は悴常盛が妻迎へ、お取持下されんと景高殿の御來臨忝しと、常盛倶々挨拶すれば、イヤサ拙者今日參る事、

ひ御計ひ正眞正銘紛ひない、鈴木が娘小よし御寮人入すの花嫁、靜樣かそでないかは、お寢間の内でも知る事、仰山さうに責道具、ヲゝきやうこつな義盛樣、と云せも立ず、默れ女、此義盛が眼力、白い黒いを見て置た、邪摩ひろぐと儕め其拷問せん、とはつたと睨めぞ、ちつ共痿ず、成程拷問はお勝手次第、嫁御に付添乳母の役、是程でも麁相が有ては親御への云譯立ね、誠拷問なされた上、靜樣でない時は、お恥辱に成ませう、ヤア小癪な女め、ソレ常盛物な言せぞ拷問せよ、と投つて立上るを、景高押へて、アコレせかれまい常盛、ヤア景高殿何でお留なされるぞ、されば〳〵から留たも盜人の晝寢、最前御親父の云るゝには、常盛が祝言が調ふた其上では、千種を己に呉んとの云分、味な所へ解けて來たと、輿の入のを待て居たに、思ひ懸なき親父のねちみやく、ハテ靜で有うが有まいが、から乘懸た所を、拷問なぞゝはいかい野暮、四も五もなしに祝言して千秋萬歲、其序に千種を己が女房にすれば、どこも彼も丸う治る、譬木の節でも、梶原が呑込ば頓着もへちまも入らぬ、コレ親父殿、昔氣質は西の海へさらり〳〵、氣を通して千種を己が女房にくれる氣は中橋か、としよげに成たる得手勝手、道の義盛拍子拔、思案仕易へて、いか樣僅女の一人や二人、義盛が手を下し拷問せんも大人げなし、ヤコリヤ〳〵、千種、此詮議は汝に預る、水喰はせて拷問せよ、と云に恟り、アノマア爺樣の滅相な、姫御前の身で拷問とは、イヤサ女の詮議女が相應、若其上で白狀せずんば、又詮議の仕方もあ

角常盛が、祝言等も相濟で、緩りつと御相談、先々奥へ、と云内に、嫁御のお入とさゞめく聲々、三人席を改れば、待女郎は娘の千種、衣服改め出向へば、梅の梢を柳腰、女出立に要之助、嫁入小袖綿帽子、深い方便は常ならぬ、經若君を奪取ん、工と人は白川が、跡に付添ふ乳母役、覺悟はしても敵の中、心細くも座に着けば、義盛聲懸、ホヽ思の外早い輿入、後なは乳母なるかと、問れて會釋し、仰に任せ俄の嫁入、御存の鈴木が身の上、乳母にも姥にも、私一人の嫁御のお供、萬事不調法の所は、お呵なされて下さりませ、ホヽヽ、と紛らせても、油斷ならざる胸の内、薄氷を踏如くなり、常盛父に打向ひ、申付たる用意の吸物、時分はいかに、と云に義盛、ヤア〳〵云付置し兼ての馳走、早く出せ、と呼はれば、ハッと答へて切戸口、料理にあらぬ梯子水桶責道具、廣庭狹しと居並んだり、見るに二人は心も空、思ひ懸なき梶原も、千種も驚く計りなり、景高殿、義盛が嫁への馳走、御覽じて御安堵なされう、いかにもヤモ怪しからぬ御獻立、煤掃の河豚汁より氣味の惡い御馳走、アイヤそりや御合點の參らぬ筈、今日貴殿も見らるゝ通、鈴木めが一生懸命、是非靜なりと詮議せば、舊鼠却つて猫を喰んず面魂、誠逸物の猫と云は、牡丹の花に居眠て、爪を隱す義盛が計略、娘と云へば娘にして、否と云さぬ即座の縁組、から我内へ引入たれば、袋の鼠籠の鳥、かけ構はぬ詮議の仕方、後學の爲御覽あれ、と工を顯す一言に、梶原はぎつちり閉口、爰ぞ大事と白川が、胸を据て近く摺寄、疑深

鬱晴し、片瀬の濱で無理やりに、取て置たる此お羽織、姫共に着せて、要様じやと云て見ても、似ても似付ぬ雪と墨、戀し床しい數々が、嵩じ〳〵て戀煩ひ、死ぬる命を漸々と、今日貴方のお入と聞ば、縁に繋がる要様、又逢事も成うかと、悦んだ甲斐もなう、父上の無得心、アヽ云出しなされては、片意地に變せぬ御氣質、お前の御縁の切るゝなら、要様に逢事も、どうで叶はぬ私が悪縁、死る氣に極てゐれど、お前のお顔を見るに付、思ひ續けてやる方なさ、せめて添事ならずとも、我夫か女房かと、一言云て死だなら、賽の河原へ行もせず、未來でなりとも添れうかと、思ふにかひなき身の上を、哀と思ふて給はれ、とかつぱと伏して正體なく、娘心の一筋に、思ひ餘りし戀の淵、深き思案の白川が、何がな鹽に付入て、經若君を奪取んと、心で點き抱起し、コレ扨お氣の弱い、夫程要様が戀しくば、私が逢せて上ませう、ムヽスリヤまあほんかいの、何の嘘を申ませう、其證據は此羽織を、小よし様にかう着せまし、今宵は要様の名代に、夫婦の盃させませう、と云に姫は飛立思ひ、お羽織召た其お姿、似たとは愚やつぱりほんぼの要様、わしや嬉しい、と抱付、要之助も下行水、心を汲で白川が、目まぜと仕形で呑込せ、猫君に振付られ、楊子の嫁御寮、弟御様の名代に、お姫様とあの一間で、緩りつと御寝なりませ、夫は嬉しやサアお出、と云れて要はうぢ〳〵と、乳母さうしても大事ないかや、ハテ何も彼も私が合點、お心置なうしつぽりと、其代にはナ彼大事の〳〵戀路の常、別れて又

らん、しつかりと預たぞ、サ梶原殿、最前からのお氣晴し、奥の座敷で御酒一ツ、イザ御出、と進られ、不承／＼に梶原も、常盛諸共打連て、帳臺深く入にけり、跡に二人は胸撫下し、どう成事ぞと見る内に、ずんと立て千種の姫、椽先へ歩み出、コリヤ／＼者共最早用事は相濟だ、皆引／＼と、追退け、嫁の傍に立寄て、最前から取紛れ、御挨拶も得申さぬ、私は千種と申て常盛が妹なりや、お前の爲にも妹、可愛つがて下さりませ、と云に少しは落付ども、見出されじと差俯き、只アイ／＼と計りなり、ヲゝ初々しいはお道理／＼、其上マアあられもない父樣の我儘、片意地なは生れ付、辛抱なされて下さりませ、コレ乳母お鬱としかろ、帽子も取て寛がせましたがよいわいの、デハ私が、と立懸り、帽子外して髮押通し、見れば見る程戀人の、其面相に生寫し、いとゞ思は十寸穗の薄、亂るゝ心穗に出て、ノフ乳母御兄弟とは云ながら、貴方のお顏は弟御の、要之助樣に似たとは愚、瓜を二つに割ずに其儘、ムゝスリヤお前は、アノ要樣を御存なされてござりますか、ヲゝ知て居る段かいの、其證據はコレ爰に、と身輕に立て一間より、取出す包は天人の、羽衣ならぬ紀念の羽織、今日初てお目に懸りし姉樣の手前、いき過た女じやとお蔑も恥しながら、當春江の島にて、見初參らせ可愛らしいと思ふより、心がひよんな物に成て、うぢ／＼してゐるを、婢共に急立られ、漸お傍へ立寄て、兎や角する内つひお別れ、夫から館へ皈つても、常々お顏が目の先へ、見える樣なも夢現、せめてもの

が小倅、次丸と申て則此女が産だ悴、紛れ者を掴んではと存ずるから、色々と詮議して誠の經若と申も相知てはござれ共、今一應詮議せん爲、コレ此女を縛り繩、經若を引出せば、此奴めが龍木阿彌、樣子を篤と御覽なされ、ヤア〳〵誰か有、經若を引出せ、畏て家來共、遠慮會釋も追立る、哀果敢なき幼子の、雲井を慕ふ籠の鳥、敵の擒と形ふりも、小手を赦めし羽がいじめ、白川は氣も消々、繩を限に立寄て、互に見合す顏と顏、ヤア其方は我子の次丸か、と云んとせしが待暫し、扨は常々云聞せし、眞逆の時はお身替と、敎しを忘れもせず、經若樣に成果せ、死る心の健氣さを、思へば胸も張裂如く、漸々心を押沈め、ノウお久しや經若樣、いつぞやの騷動以後、此家へ在す樣子を聞、重家と心を合せ、奪取方便も今此時宜、迚も遁れぬ御命、常々も申せし通り、未練な事おつしやると、鎌倉武士の物笑、源氏のお名を穢す時は、私が恨むる計りか、先立給ふ父樣、コレ父樣義經樣迄がお呵なされる、必々物おつしやらず、敎ましたお念佛、首差延て潔ふ切れて死んで下さりませ、と口にはいへど心には、神佛のお力にて、命を助て給はれと、百千無量の物思、次丸泪の顏を上、ヲヽ其氣遣は仕やんな、己はよう覺えてゐる、源氏の大將義經が子じや物、殺されても泣はせねど、其方が泣さやるで己も悲しい、必泣て下さるな、死だ跡でも人が問なら、いふ事をよう聞て、泣ずに死だ強い者じやと、たんと譽て下され、と合點はしてもわぜなき詞、ヲヽようおつしやつた、ようおつしやつて下さ

逢手引の事が、肝心要の締くゝり、必おぬかり遊ばすな、と無理に押やる屏風の内、枕は戀の橋柱、渡り逢瀨の天の川、襖ひつしやり立退て、ほつと溜息次の間へ歩出、テモまあ宵からひあいな事、鰐の口を遁れたれば、是からは姫を語ひ、經若樣を奪取思案、それはそうと娘御が、要樣の名代、姉御樣と思の外、モウ今頃はしつぽりと、冷汗かなと獨言、夜もしん〳〵と更渡り、夜半を告る鐘の聲、胸に響て白川が、ヲゝ今撞たは九ツの、兼て手筈の重家殿、裏門より忍び入相圖の刻限、奥へ忍んで奪取ん、と用意の懷劍携へて、指足拔足一間の杉戶、氣轉きかして花生の、水を敷居に流し懸、體を寄てしめ明に、明り障子や幾間の襖、生るが如き彩色の、繪にも心を奥の間へ、忍び入んとする所に、白川待、と聲懸られ、ハッと驚飛退しが、ホゝゝ思ひ懸ない名に悔り、此方の事ではなかつたと、又立直り行んとす、ヤア佐藤三郎兵衞次信か女房白川待、と呼はる聲、遁れぬ所と振返れば、後の襖さつと開き、顯はれ出たる義盛景高、見るに仰天胸を据、エゝ仕損ぜしか殘念や、と懷劍拔で突かゝるを、ヤアほで轉業をしをるな、と引外して腕捻上、用意の早繩小手縛椽柱に猿繫ぎ、無念〳〵とあせるを見捨て、ノウ景高殿、細工は流々義盛が、仕上をとくと御らうじたか、成程委細拜見致した、ヤ是は是で相濟んだり、九ツの鐘は最前鳴たに、なぜ經若が首を討なされぬ、サレバ其儀でござる、先達て經若丸、召捕置てはござれ共、密に樣子承はれば、經若が二人有との取沙汰、一人は慥次信

可愛さうによういやつた、遖は父の子程有、健氣にも能う死だ、と草葉の陰で父樣が、お譽めなされてござんせう、思ひ出すも恨めしや、源平晴の八島の軍、義經樣の危いお命、お馬の先に立塞り、能登殿の大矢を請留、お命に代しを、古今の忠義と世の人に、譽られ給ふ父御にも、をさ／＼劣らぬ其方の最期、お主も二代家來も二代、世間に希なる忠臣を、夫子に持しは我身の因果、いかなる人が武士の、忠義といふもの拵へて、今此憂目を見するぞと、譯も涙に取亂し、物狂はしき風情なり、かゝる樣子はいざしらぬ、鈴木三郎重家は、經若君の御最期と、聞くと等しく死物狂ひ、宙を駈つて來るより早く、白川が禁切り解き、豫ての相圖を待ち請んと、立忍ぶ内經若君、果敢なくならせ給ふとは、エヽしなしたり口惜や、と地團太踏んで無念の齒嚙み、イヤ／＼／＼今死んだは我子の次丸じやはいのう、ムヽスリヤ經若樣の御身の上、サアお行衛は知れねども、お命に氣遣ない、ムヽヤ何にもせよ憎き義盛、恨みの一太刀目に物見せんと、直と立て大音上、ヤア義盛は何國にある、鈴木三郎重家見參せん、出合やつ、と呼はれ共、靜まり返つて音もせず、ヤア風を喰ふて迯たるか、イデ一詮義と、ずつと寄り障子ぐわらりと踏開けば、こはいかに、三國一の聟樣と、謳ひさゞめく女中の聲々、千種の姫と要之助、變る出立の色直し、並ぶ姿や一對の、妹背を結ぶ尉と姥、千年を祝ふ島臺に、長柄の銚子三々九度、二度悔りの鈴木三郎、白川と顏見合せ、呆れ果たる一間の内、千秋萬歲の千年の玉を奉

つたの・コレノウ妾も泣きやしませぬ〳〵、といへ共堰來る涙の熱湯、義盛後へ立廻れば、今が此世の別れか、と思へば骨も碎る計り、いつそ我子と云事を、打明て助うかイヤ〳〵、是程迄に仕果せし。お身代り仕損じては世の譏、盡せし忠義も水の泡、とはいへ一人も一人からと、美しう生れた子を、目の前殺すを何とマア、餘所に見て居られうぞ、と彼方を思ひ此方には、次丸は尋常に。西に向ひ眼を閉、南無阿彌陀佛〳〵の聲諸共、鋭き和田が刄の光、首は前にぞ落にける、わつと計に白川は、前後不覺に取亂し、身も浮く計に泣沈む、義盛はしづ〳〵と、首を器に取納め、梶原が手に渡せば、ヤコレハ〳〵御苦勞、イヤモ疑さらりと晴申た、親景時も嘸悦び、是より直にお暇申さう、然らば萬事は又重て、おさらばさらばと梶原は、己が館へ、義盛は刀引提入にけり、跡打眺め白川は、夢共更に辨へず、死骸の傍に差寄て、抱上んも縛り繩、落る涙を止め兼、暫し詞もなかりしが、やゝ有て顏振上、ノウ次丸、思も寄ぬ今宵の對面、飛立樣に思ひしが、忠義の二字にからまれて、親子の名乘も餘所になし、嚊樣か我が子かと。云はれぬ最期の悲しさ辛さ、母は未だしも豫ての覺悟、七つや八つの稚な氣に、お主の爲と合點して、卑怯未練な詞もなく、ようお身代に立てくれたな、譬丈夫の魂でも。振上し刄の下では亂るゝと聞くものを、況して辨へ知らぬ身が、世間の子なら逃げ隱れ、見苦しき目を見せんもの、敎た詞を忘れもせず、源氏の大將義經が子じやもの、殺されても泣ぬとは、

を雲助に仕立て、奪取たる二人の稚子、其の親々の面ざしに、似たる血筋は爭はれぬ、次信が忘れ筐と悟りながらも、幾度問へ共經若なりと同じ返答、ハア恥しさは氏育、末代武士の鑑と成る、父の忠義を次丸か、今日のお役に立果せ、梶原を欺きしは健氣の最期、去ながら、此の義盛が難面も、首討つ時の心のせつなさ、白川殿の心では、鬼畜の樣に思すらん、朝比奈と云ひ巴か最期、心を痛る老のいりまへ、又其の上に娘が戀病、當分の病氣でさへ案じるは親の習ひ、似合の緣を結び得し、我が悅びに引當て、心の內のせつなさを、知らぬ鬼でもござらぬ、ことさしもに猛き義盛が、五臟を絞る溜涙、白川ゐるにも有れぬ思ひ、久しう別れてゐた內にも、嘸かし日頃此の母を、戀慕ふたでござんせう、ヲヽ晝の中は經若に成果せた心でも、虫の所爲折々は、よう寢て居ても魘れて、むつくと起ては喚樣喃と駈け廻り、泣むで焦るゝ酷らしさ、ヲヽ尤じや道理じや／＼、可愛の者や、とどうと伏し、又さめ／＼と歎くにぞ、思ひ遣りたる人々も、倶に涙に紅の、園に植て隱なき忠義の苧を散らせしと、歎けど返らぬあの世の旅、義盛は涙を拂ひ、コレ／＼重家、貴殿親子は是よりも、靜御前の御供し、義經公の御跡慕ひ、蝦夷が島へ渡海有、長の旅路に足弱の、娘が事を、と口籠る、流石恩愛親子の名殘、ヲヽ云ふにや及ぶ、是迄の貴殿の大恩、忘るべき重家ならず、と詞數云はで別るゝ、忠臣義士、浮木の龜や優曇華の花嫁諸共立出る、我は無常を悟の種、散り行く柳は綠子の、連なき娑婆に秋の空、世の

つる、と謠の聲と諸共に、縹の素袍立烏帽子、悠々然たる和田義盛、何か白木の三方を、常盛に取持せ、目通りに差置き、娘千種が戀聟、要之助への聟引出、サア披見有、と指出す三方、訝りながら、重家が一通取て押開き、何々飛札披見令候、然ば忰經若丸、遠路の所送り下され、御厚志過分の至に候、建久元年七月七日和田左衞門殿へ源の義經判、と讀も終らず膝立直し、ア、ラ不思議や、此の世を去らせ給ひたる、我君の御直筆、經若君の御身の上、書き印せし年月と云ひ、彼是以て心得ず、と白川諸共詰め寄れば、ホ、其の不審は尤至極、梶原が讒言にて、科なき御身を狹められ、數度の憂目を陸奧に、忍ばせ給ふ義經の御難義、何卒救ひ奉つらんと、重忠と心を合せ、頼朝卿へ諫言も、佞人巷に蔓れば、思ふに任せぬ世の成り行き、是非に及ばず義經の討手、義盛が承け、難なく破りし衣川、忍びを以て內通し、城に火を掛け、義經公討死と披露して、密に落し奉り、日本の地は心ならず、と蝦夷島へ押渡り、島の夷を切り從へ、義經大王と申奉るは、則ち判官義經公、經若君を送りしも、某が寸志の忠義、と始めて明す義盛が、詞に三拜九拜、餘りの事に詞も出ず、悅び勇む計りなり、常盛も進み出、父義盛の心盡し、荏柄平太が仕落を幸ひ、君を恨むる體に持成、梶原が謀叛に組せしも、佞人原に心を赦させ經若丸靜御前の御命を、救ん爲の謀、然れ共邪智深き梶原が、手詰の詮議止む事を得ず、痛ましくも次丸を殺せし、と語るを引取父義盛、ヲ、サ梶原が手へ渡さじと、譜代の家來

は胸を押沈め、思ひ廻せば廻す程、悪縁契り不甲斐ない、俺故さまぐ〱憂苦労、禮は詞に盡されず、と打萎るれば吾妻野は、ソリヤ何いはんす、平太様、今更云ふも愚痴なれど、妾は漸々突出の分も白歯の初店を、ふつとお前に見立られ、好いた客じやと思ふても、まだ物馴れぬ恥しさ、寒い振して抱付、つひ初會から帯紐も、解てからうじて深うなり、次第に募る居續に、一座の客も氣がつまり、茶屋や牽頭も邪魔に成り、色が悪いの痩たの、と傍輩衆の悪口も、人目も義理も外聞も、互にじつと引しめて、お前の體が妾ぢややら、妾が心かお前やら、いつそ比翼の鳥となり、飛で仕舞と戯言を、思ひ當りし今の身の、死で未來へ往た迚も、人を助くる如來様、よもや野暮でも有まいし、物日〱の苦労もなく、鎗手の呵らぬ極樂で、世帯を持て嬰兒生んで、主と暮すが嬉しい、とすがり寄たる袖袂、涙の雨や露防ぐ、菅の小笠の一群も、十から上は五つ六つ、七つ立していそ〱と、子供道者が歌ひ連、無理を夕立聲搔曇り、振つ振れつ起き別れても、思ひ廻せば此の胸が、ハレやくたいもない事じや、面も被らず來わいナ、口説時雨の袖打濡り、乾つ干れつ立分れても、喰付かれたる其の跡が、ハレやくたいもない事じや、面も被らず來たわいナ、其の一節も身の上に、ありし昔の忍ばしく、憂しと見し世ぞ小石原、躓く度にほろ〱と、裾から先へ茜さし、東雲告ぐる鳥の聲、最期をいざや急がんと、手に手を取て引く空の、松吹風や波の音、眠りの夢は、三重「覺めにけり、物事の廣き譬に云ひ

交も稻妻に、譬へし法の敎の道、消ゆるを待ん露の身の、置き所さへ白川が、涙ながらの暇乞、同じ浮世の戀無常、跡に焚火も庭火と門火、名は替れども武士の、義理は替らぬ日の本の、弓矢の譽義盛が、智略は今に隱れなし、

第四　道行夢の浮橋

戀詫て打寢る中に行通ふ、夢か現か現なく、焦るゝ袖の涙川、人目堤に漸と、我が身を竊み、何處ぞと、行先とても夏草の、茂りて深き、吾妻野は積る思ひも水に書く、荏柄の平太諸共に慣れし廓を忍び出で、覺悟極めし死出立、手に持つ珠數の玉の緒も、短き夜半の更渡り、そこ共分ずたど〳〵と、迷ひ出るぞ是非なけれ、暗きより、暗きに迷ふ戀の闇、思ひ有身は自から風の音にも心置き、追手や尋ね小餘綾のいそげば跡に宿河原、今死ぬる身も煩惱の、犬の聲々ヲゝ恐、と抱きつく〳〵山寺に、消滅々爲と鳴る鐘は、冥途の旅の力草、あの世は蓮の三つ蒲團、五々の菩薩は三弦を、彈てどうして高麗寺、こんな縁は尋ても、よもや有まい、唐土が、原に飛交ふ螢火も、若は二人が魂の、先へ行かと疑はれ、覺悟の上も今更に、心細さは山下の宿打過ぎて最期塲は浮名流さん花水の、橋より右へ在所道、せめて名殘に顏と顏、互に見まく星明り、分る街は此の世やら、死んで來たやら南やら、譯も涙に紅の、肌着も濕す斗也、平太

い、つい一走り取て來やんせう、コレ駕の衆、私は跡の立場へ行て、落した薬取て來る其の内は、涼しい所で暫く待て居さつしやい、若殿が發つたら、抑て上て下されや、賴みまする、と云捨て、とつかはとして走り行く、跡見送りて駕の者、コリヤ棒組、何處がよからう、ヲヽあの森蔭がよかんべい、おつと任せ、と夏木立、蟬鳴森へ擔ぎ込、梶原が郎等番場の忠太、家來引連れ汗零く、コリヤ／＼若共、今日は源太樣のお使、大磯の傾城東野を連れて來れば、一廉の御褒美、隨分拔るな油斷すな、心得たんぽの森蔭に、有共知らず急ぎ行く、人の子と、知つてはならぬ商賣や、大磯の女衒、手の裏八兵衞、駕を舁せて歩み行る、東の方より來る人の商賣も又頰や顏、汗手拭でふきながら、はたと行合ひ、ヲヽ八兵衞殿、是は半公、貴樣は何處へ、イヤ何處へじやない、貴樣の内へ、ムヽ私も又此方の所へ約束の踊子、駕に乘て行く所、幸な所で逢た、ナント大分揃ひなしたか、サレバ夫に付て大困り、此の間の闘しさ、めぐり打つ隙もござらぬ、聞かつしやる通り、重忠樣の御下屋敷、三浦の海で涼の趣向、四十八艘の屋根船船頭に揃を着せ、踊り子を乘る故、百人餘の請合、方々捜して大分極つた、是で丁ど人數が揃ふた、アヽヤレ／＼ちつと落付た、貴樣の世話に如在は有まい、どれ開張と駕の垂、明て悔りぼた餅を、棚から落したお多福に、蒼い臭のぱつと散る、花色染の白ぬかり、梅に留りし鶯も、鼻を抓んで法華經を、ひよけ經と鳴く風情なり、半六居丈高に成り、コレ／＼八兵衞、喰

傳ふ、實に鎌倉の海道筋、往來多き其の中に、よい〳〵肩せい、靜に跨ぎじや合點と澁紙體眞黑な、身の色こぼす汗だら〳〵、擔いで通る駕の內。ワツト泣き出す女の聲、是はと驚き夫なりに、駕突下す間もなく、跡より驅け來る鎗手のお倉、垂れを明くれば東野が、ノウ平太樣待ていな、と走り出るを抱き留め、コレ東樣嗜まんせ、氣が違ふたか。と叱られて、漸々に心付き、扨は夢でわつたさうな、ノウお倉聞て下され、平太樣と連立て、心中に出てそこ爰と、狼狽ると思ふ內、目が覺たれば駕の內、どんな切ないめに遭ても、平太樣と一所に居たい、やつぱり夢で置きたい、と悶え歎けば、ヲヽつがもない、花柄樣とは深い中、其の平太樣は笛の事故、重忠樣のお屋敷で、殺されなさつて夫よりも、二年以來のぶら〳〵病、種々の療治も効ず親分の了簡で、保養がてら箱根へ湯治、道々の風景、氣を晴さうとは思ひなんせず、くよ〳〵と案じて居なさる故、とんだ夢見なんす、病氣が重れば其の身の損、コレ死で花實が咲かいなと諫られておろ〳〵淚、夫程の事辨へぬ私でもなけれ共、どうした緣やら花柄樣、新造の時から相惚の、互に易るな易らじと、云ひ交せしを情なや、大事の笛を盜まれて、殺され給ふ其の日より、未來の供と思ひ詰、覺悟極めて居ながらも、死後れたが恥かしい、と又潸然と泣ければ、ヲヽこな子はわつけもない、夫で病氣が猶重らう、又癪の詰ぬ內、お藥上うと懷探し、エヽ先きの立場で上た跡を、床几の上につひ置て、取り急いで忘れて來た、藥がなうては心細

へ見せると、兩國へ出して見せ物にせうと云ひますはいの、ハヽヽヽこんな者連て來て金にせうとは太印、と數へ立たる惡態に、堪り兼て駕の內、つか〳〵と走り出で、半六が胸倉取て引据ゑ、コレ爰な人、默りなさろ、扨ても〳〵お身樣はおやてんこちもない、俺が器量の棚下しサアおし申されて犬か猫か鼬サアの樣にがうべり申が、俺も在所サアでは吉兵衛サアの姉のお菊といふてや、村の人が天人のようがうだアと譽め申よ、開帳參りに來申たを、お屋敷の踊サアにいつて吳ろとおぎやり申、踊の事なら俺は在所で二番とは下り申さないから、いつてくれべいと思つて、駕サアで來申たを、お身サアが種々さつたのちくをぶん拔てさましめさる、論より證據サアだ、さらば踊つて見せ申べい、と身拵へして立上り、おうわにぶん出せちやかまかさうだぞ、瀧田川では紅葉を流すナ、ソウダカ〳〵わしは踊で汗流すなまめだ、アヨヲエ、おなまめだんぶつおなまめだんぶつなまめだヨヲエ、エツサラサノサ、芝の車は牛故廻る、わしは踊で目が廻る、なまめだ、アヨヲエ、おなまめだんぶつおなまめだんぶつなまめだヨヲエエツサラサノサ、アヽ草臥た、と大肌脫ぎ團扇遣ひの大の字形、乳はぶた〳〵古川藥師の銀杏の木かと怪まる、半六は呆れ顏、えいかげんが有物だ、こんな氣遣を連れ廻つて、おこはに懸る泥坊の相手に成る隙がない、と行んとするを、コリヤ〳〵待半六、氣に入にや入ぬで濟む、泥坊呼はり置にしろ、俺も手の裏八兵衛といふてや、女衒仲間で口をきく、湯屋の窓でけむつ

せ者にも程が有はいの、夜鷹に出しても月夜には蔭へ廻して賣にやいけぬ、替玉にはかならぬ代物、こんな玉が踊子で候と、お大名へ出さるゝ物かいの、かういふ代物で濟む位なりや、大磯迄頼にや來ぬ、大屋の内にも、三弦かぢる鼻垂れ娘がいくらも有、忝くも半六が手先には、辨天の地藏のと、美し揃の異名付を、すぐり立た其の中へ、こんな者が出さるゝ物かいの、余り人を茶にするな、と急き騒がず、イヤコレ〳〵其の樣には云はつしやるな、私も如在はちつ共ないけれ共、踊子の大寄せ、鎌倉で足ぬ故、大磯迄騒ぎ歩く、モ俺も色々世話やけど、因幡は丁字屋の敷初でいく筈、お秀は中近江へ先約、大文字屋の子供は片時も隙がない、其の外も皆間違ひ、せう事なしの思ひ付、此の娘は田舍から開帳參に來たを幸、ハテ踊子の一束も有中へ、五疋三疋ねき物を突き雜ぜても、余り目にも立つまい、濟みさへすりや、此の娘にや朝鮮鼈甲の櫛と、銀流の笄を買てやる約束、コレ花代は貴樣と山割、高かろよかろ安かろ惡るかろと云ふからは、ハテ扨高が引物だと、了簡さつしやれ、ハテ滅相な人じやわいの、何ぽ丸許に成迚も、相手が秩父の重忠樣、上坪を喰はして失敗ちや株仕廻ひ、そして惡いと云ふても大概が有物、云はずと貴樣の商賣筋、素人目に美しう見えるやつでさへ、鼻のしまりが惡いの、ヤレ唇が薄いの何のかのと、僅の疵でも廿兩卅兩、直段の違ふ女の器量、夫にマアアレ見やつしやれ、猫背中に狐尻、頬高く鼻底く、出額に猿眼、鳴聲鵺に似たりけり、是を三河屋

尾が出る、すきんせんを止なされ、アイ夫も合點でござりんす、ソレ〜夫が、と打とけて、ぞつと笑を催ふせり、ナント半六殿、是で云分有まいかの、何さ間が欠けるからの擾騒、是でさつぱり大の極り、そんなら目出度打ませう、ヨイ〜〜と手を打て、サヽヽ駕の衆、早うやつて下され、と悦び勇み、半六は、東野が駕急がせて、三浦の方へ走り行く、跡に八兵衛塵打拂ひ、エヽ大きな無駄をして除けた、コレ駕の衆大儀ながら此の引け者、連れて皈つて下され、とお菊を乘せて垂下し、舁上んとする所へ、駈け來る番場の忠太、駕を見るより飛蒐り、ソレ家來共、まつかせ、と擔いて行を八兵衛が、震ひながらに詫るも聞ず、鎗手めが白狀で、吾妻野が此所に休んで居る事皆聞た、言拔んとは横着者、其の手を喰べる忠太ならず、邪魔ひろぐな、と突き飛し、飛が如くに、三重「走り行く、一ツ四ユ二ン十イ八マ、奥は酒宴の大騷、肴の林酒の海、漫々たる景色を、三浦の磯邊に立續く、秩父の庄司重忠の、物好きしたる下屋敷、三弦、太鼓高なしに、晝夜を分ぬ賑ひなり、濱邊傳ひにうそ〜と、窺ひ來る梶原源太、相圖の咳二つ三つ、籬の蔭より番場忠太、御用いかに、と立出れば、近う〜と招き寄せ、ナント忠太、其の意得ざる重忠が振舞、病氣と云立出仕を止め、此の三浦の下屋敷に引籠り、やり放しの大騷ぎ、取分け今日は揃舟にて大趣向との風聞、弟平治と牒し合せ、其の虚に乘て討取る方便、ハア御意の通り物堅き重忠、俄の奢合點参らず、此の忠太が存ずるは、兼て親旦

たい男だ、うぬらに嘲されるのじやないわい、エイかと思つて磔面めが、ヲヽ口をきくか知らないが、人を盲に仕上る長太郎坊主じやないかい、エヽ此の横つ倒しめ、ヤア此奴が、うぬが、と摑合ひ、互に劣らぬ我慢者、打つ叩つ蹴つ踏づ、上を下へと揉合へば、見兼て支へる駕の者、お菊も倶々取付くを、取て刎退け踏飛し、持餘したる折柄に、ヲヽ其の喧嘩貰いんせう、妾が留めた、と引分る、東野が顔見て悄り、コリヤ飛んだ所へ東様、ヲヽ八兵衛様半六様、日頃念頃な様にもない、嗜んし、と云ふに半六、イヤ腹が立まいか、理屈を聞て下さりませ、アイ先きにからの詰め開き、皆聞て居やんす、明日の藝者が間違ふては、どうもお前が立ぬとは尤、そこを立る私が了簡、マア〳〵〳〵下に居て聞なんし、擊た迚叩いた迚、足ぬ藝者が出來はすまい、温順しう了簡しなんし、其の代り足ぬと云ふ明日の藝者の代には、私が行てやりんせう、と聞て悄り、エイソリヤ飛だ事だ、アイお前方さへ合點なりや、座敷の事はどうなり間を合しんせう、イヤソリヤ早お前なら三弦はなり藝も有、雀網で孔雀なれど、親方樣が何とでどんせうの、イエ〳〵其の氣遣はしなんすな、箱根湯治で氣儘の保養、五日三日隙取ても氣遣な事はない、妾も重忠樣の屋敷と聞ば行たい事がござんす故、幸の相談、と云ふに二人は安堵の思ひ、ヤレ〳〵是で寛いだ、八兵衛殿、かうしませう、今濱の手で名の高い、お國じやと云ふて連れて行う、ヲヽ夫はよい思ひ付、併し踊子に仕立ても、廓の詞が出た時は、天窓隠して尻

此の三浦の沖にて鎌倉の諸大名を初め、下々迄も舟涼み、分て今年は種々の思ひ付、サそこを負ぬ今日の趣向、コリヤわいらも皆見て置く〳〵、アイ〳〵モ大さうな御趣向が早く見たい、お石様、其の障子を殘らずさつと明けなよ、と手々に障子押明れば、夕陽眩き海原に、浮べる舟の數々は、屋形屋根船猪牙平田、思ひ〳〵の涼み舟、秋の木の葉の散り布きて、流もあへぬ景色なり、お豊様、アレ見な、アノ屋根舟はをもと様、彼方向たはおもん様、アノ醫者様がゑいかと思ふて、しな垂れて見とむない、コレ〳〵此方の屋形に身をして居るは一瓢が、如在でわろ、イヤ〳〵おりや白鬼に富士藏じやはいな、ヲヽイ〳〵と呼ど逹かぬ海の面、次第にさげる船續き、さも花やかに飾り立、色有藝者取乘て、其の數四十八艘の、揃の舟に船頭も、揃ひ衣裝の紅絞り、夕日照添ふ龍田川、唐紅は千早振、神代も聞ぬ遊びなり、磯邊の見物取々の、噂も時の戯と、暫く興にぞ入にける、かゝる折節、取次の侍、罷出で、仰付られし藝者のお國只今是へ參上、と詞の下に立出る、女藝者のお國とは、假の姿の吾妻野が、心に望み有磯海、深き思案を押隱し、やつせばうつる髮容、皆様御免と座に着ば、重忠見るより、ホヽ聞及んだお國、サヽ是へ、と差招けば、態と詞もしとやかに、アイお屋敷は初て上りましたれば、何の勝手も存じませぬ、皆様御引廻を、と會釋溢るゝ挨拶に、豫て能い人柄と聞き及んだ程有て、褄外れの尋常さ、物云ひの柔和さ、イヤモ格別〳〵、名代の藝が早く見たい、奥の一間で所望

那樣御謀叛の企、折を見合せ重忠を闇討の催し、若しや方便を悟りての作病ではござりますまいか、ヲヽ夫ならば猶更大事、諸大名は過半味方、重忠さへ仕廻てのければ大望は成就する必ずぬかるな油斷すな、畏り候、と番場は濱邊へ景季は、とある小蔭に立忍ぶ、晩に忍ばゞ裏から忍べ、表や八重垣錠が下りる、八重垣表や、表や八重垣錠がおりる、ソレカチヤウカ〳〵さんまよナ、浮れ出たる重忠を、取廻したる踊子共、コレお幸樣、其のお銚子持つて來ないナイエ夫よりはお豐樣、殿樣のお烟草入、アイお前のお烟草入は、お石樣が持じやわいな、アヽコリヤ〳〵、其の樣にざは〳〵と、御前の殿樣のと、餘り儕等が勸め過る故、俺は却て氣が詰る、若い時から此の重忠、軍をしたり本讀んだり、角の取れぬ石部金吉、今大平の樂みを、知らぬも去とは野暮の至りと、悟を開いての大磯遊び、義藤辨魚と洒落のめし、大通の仲間入、勿論さん〳〵と出かけて、猪牙に乘のずいき、中の町ぎまりのぐひ呑、銀烟管のやにさがり、烟草ばく〳〵喰はせても、りやんこの堅みがまだ拔ない、人は武士、なぜ傾城にいやがられと云ふ附合の通りじやナ、所で氣を替へて此の遊び、是からは殿樣事をぐつと流のちよん〳〵幕、と現たはひも中の間の、敷居隔て、本田治郎、御窺ひと手を突けば、ヲヽ堅し〳〵、御家老の白鼠先生、言ひ付た今日の趣向はどうでゑす〳〵、ハア仰付られし揃の舟共、段々沖へ乘出し、夜に入ては玉屋が花火申付置候、と聞て重忠、ヲツトよし〳〵、いつの年でも夏の内は

す泣沈む、興は酒宴も酣に、ほろ酔ひ機嫌の重忠は、鼓片手に立出て、ハヽ其處に居るは誰じや、と云ふに愕り泣顔隠し、アイ私でござります、ムヽお國か、何か思ひ有げな姿、雨を帯たる芙蓉の顔、ハアそう〳〵、最前そもじを見初てよりの物思ひ、一樹の蔭に立寄て、一河の流を汲む酒を、いかで見捨給ふべき、サア〳〵どうじや、と眞面目なり、ホヽヽ初て參た私お慰のお嬲か、イヤ〳〵嬲杯とは勿體ない、誓文我等首だけ〳〵、亂れ心の花かづら、かゝる姿は又世にも、類ひ嵐の山櫻、手折にや置ぬ、と寄添ば、仕濟したりと吾妻野が、用意の懐劔抜きそばめ、寄らんとすれど脇目も觸らず、不思議や今迄有つる女〳〵、とり〴〵化生の姿を顯し、或は巖に火焔を放ち、又は虚空に炎を降らし、と謠の聲と諸共に、重忠やらぬ、と突蒐るを、引外して突き飛し、惟茂少しも騒ぎ給はず、又突懸るを腕首捕へ、何故に此の狼藉、子細ぬかせ、と刎退れば、吾妻野無念の聲震ひ、何故とは覺があらう、其方の手に懸け殺したる荏柄の平太が所縁の者、敵を討ん其の爲に、藝者と成て入込だ、サア〳〵サヽヽ勝負〳〵、と身を焦燥る、ムヽ荏柄が敵を覘ふからは、聞及ぶ大磯の傾城よな、流の女に似合ざる健氣者、其の志に賞で勝負して取せん、去ながら荏柄平太は大切なる、源家の重寶蟬折の笛、君より預け給ひしを盗まれし不屆、頼朝卿御怒強く、首討てと有、上意に任せ家來に云ひ付討せたり是重忠が私ならず、巳が罪巳を責る天下の政道、誰を恨ん樣もなし、尼法師とも樣を變へ、跡

〳〵。ナア皆來れ、と騷立て、打連てこそ入にけり、世を憂しと、忍ぶ山路の花も散り。しんき難面や同じ身に、同じ思ひの片し貝、わつちや深うは喰ぬものを、殿樣の無理強、家がくる〳〵舞ますによ、と座敷を外す吾妻野が、そつと傍りを見廻して、ホンニ思へば味氣ない、主に分れて早や二年、有にあられぬ胸の內、思ひ廻せば廻す程、科なき御身を重忠に、むざ〳〵と殺されし、恨めしさ口惜しさ、二世と交せし夫の敵、重忠を恨みんと、姿を變へて入込みながら、思ふに任せぬ女の身、エヽ馬鹿らしい、ならふ事なら、公平樣や辨慶樣を見る樣な、强い男に生れて、アノ憎い重忠を切てやりたいナ、梅を命の春さへも、浮世の夢を散り果て、何の事やら袖の露、又も此の世に初櫻、ホンニさうじや、女の念力岩通すとやら、なんぼ强い重忠でも、夫を思ふ一念力、喰ひ付いても此の恨晴さいで置うか、から云ふ事とは露知らず、國にござんす嚊樣が、此の中の便にも、久々煩ふと聞て心元ない、隨分と養生して、早う年明皈つて來れ、待て居るとのお文、わしが死だと聞なんしたら、お年寄の嘸力落し、勤の身の夫程に、義理立ず共、濟さうな物を、素人心に思ひなんせうが、勤の中で一筋に、思ひ込たる尤愛しさは、勿體ないが死なんした父樣の事も、年寄なんした嚊樣の事も、死で地獄へ追やられ、閻魔樣が呵なんせうが、火の車で責られうが、妾何とも思ひやせぬ、不孝者罰當り、心が鬼に成たのも殿御故じやと、了簡して、赦して下され嚊樣、とわつと計りに聲を上げ、前後も知ら

目の内据てすつくと立ち、アラ恨しや腹立や、二人寝る夜の闇の内、云ひ交したる睦言も、今は恨の飛鳥川、淵は瀬と成る床の海、八苦の浪風忽ちに、無明の業火、無間の炎、思ひの薪身を焦す、娑婆の妄執晴さん、と逆立つ髪も諸共に、亂れ心の正體なく、かつぱと倒れ伏し轉ぶ源太は驚き立寄て、印籠の蘇香圓、柄杓の水を口移し、様々の介抱に、漸に起き直り、忙然と氣抜けの體、コレ〳〵氣が付たか、モ興がつた今の有様、猿の死靈でも有まい、イエ〳〵思ひ出すも慄と仕やんす、ソレ其のお前の懐から、荏柄様が出なさつて、わつちに種々の恨み言、其の跡は覺えやせぬ、と云ふに源太が猶不審、傍きよろ〳〵懐をそつと覗て、ムヽ聞えた〳〵荏柄めが殺されし、元の發りは蟬折の笛、其の笛が懐、エヽスリヤお前、イヤサ其の笛がふと出たら、其方は嘸嬉しかろ、イエ〳〵モフ〳〵今ので愛想が盡た故、平太様の事はふつつりと思ひ切ります、そんなら俺が云ふ事を、アイどう成共、と抱付く拍子、懐へ手を差入、引出す笛を引たくり、エヽしぶとき女郎め、此の源太が盗んだ笛を、奪取んとは及ばぬ事、と突き飛す手にしがみ付、夫の命に換へし笛、取返さいで置うか、と思ひ込んだる女の一念、倒けつ轉びつ爭ふ拍子、傍の井戸へ投込んだり、時に不思議や井の底より、心耳を澄す笛の音と、倶に燃え立つ燄の中、顯はれ出し平太が姿、ハッ、と驚く吾妻野より、源太も仰天底氣味悪く、逃行くがんづか引摑み、二三間投付れば、ほう〳〵起て夢心地、ヤア推參なる幽靈め、と摑蒐る

怨に弔らへ、と聞も敢へず、イヤそりや御卑怯、此の場に成て言譯とは、重忠樣には似合ませぬ、サア尋常に勝負有、と苛て蒐るを身をかはし、エヽ面倒な、と急所の當身、うんと仰けに反返るを、見向もやらず悠々と、奥の一間に入にける、暑き日も、暮てそよ〳〵香り來る、磯吹風の冷やりと、顔に當つて吾妻野が、息吹返し漸に人心地、勃然と起て身拵へ、奥を目懸けて駈入るを、傍に忍ぶ景季が、抱き留れば悄りし、お前は源太樣、爰放して、と身を悶掻くサヽヽ先刻にからの樣子、段々あれに忍んで皆聞た、荏柄が敵を討んとは、去迚は心中者、其の性根を見込だ故、酷うされゝばされる程、ぞつこん惚れた此の源太が、そもじへの心中に重忠を討てやらう、ムヽスリヤお前の助太刀して、イヤ〳〵手を下す迄もない、今日の遊興を幸に、軍勢を伏せ置たれば、重忠は網代の魚、彼奴さへ殺せば跡は仕安い、頼朝を討亡ぼし天下をせしめる兼ての工夫、俺に靡は玉の輿、サア〳〵どうじや、と手を取ば、ハアテ重忠さへ討て仕廻ば、荏柄樣への義理が立故、其の跡ではどうなりと、お前の心に隨ひませう、ソリヤ眞實かだまではないかや、何の嘘を申ませう、夫は近頃忝い、そんならちよつと、と抱付ば、何とか仕けん吾妻野は、手足がた〳〵身を震い、アレ〳〵平太樣が、と云ふ聲に、源太も悄りうろ〳〵眼、吾妻野は怪氣に、五體苦しむ曇り聲、何と言なんす、修羅の妄執晴がたく、再び娑婆に來なんしたとか、何私に恨が有、サア恨が有なら云ひなんせ、と請つ答つ獨言

つて、投込む一間の陣太皷に、とんと當りし筒の響、手を取る樣に、三重聞ゆれば、濱手には豫てより、約を定めし本田四郎、仕懸し花火は相圖の狼烟、天を焦せば沖の方、相圖を合す責太皷、亂調子に打立て〳〵、漕出す船は一樣の、揃ひの藝者引換へて、松明提灯旗指物、浪に映ふ有樣は、さも目醒しき風情なり、恂しながら梶原兄弟、死物狂ひと駈向ふ、さしつたりと渡り合、火花を散して責戰ふ、手を碎きたる働に、さしもの大勢堪り兼、濱邊を指して逃行く所に、沖の方なる兵船より、射懸る矢先は雨霰、一度に倒れる雜兵共、算を亂せる如くなり、梶原兄弟度を失ひ、うろ付向ふへ荏柄平太、本田次郎が立向ひ、取て引敷く膝の下、一度に繩を掛けにけり、重忠徐々立出給ひ、ホヽ手柄〳〵、胤長が今日の働、賴朝卿へ言上せば御悦喜あらん、繩付引け、と先に立、智仁勇備の畠山、君々たれば臣も又、僞りならぬ本田次郎、時を荏柄が會稽の、耻辱を雪ぐ水底は、計り知られぬ智惠の海、三浦の沖の揃ひ船、方便を筆に書き殘す

第五

怪きを見て怪まざれは、怪み自破るとかや、出羽國湯殿山は、隱れ名高き大山にて、峯峙ちて谷深く、梢は雲に埋て、岩に碎る瀧の音、いと物凄き風情なり、朝比奈三郎義秀は、我身を

をはつたと睨め付け、我を誠の幽靈と思ふか、イヤコヽナ痴け者めが、去年の春鶴が岡にて、大切の笛を盗まれ、お預の身となりしを、汝等親子が種々の讒言、既に死罪に極りしを、重忠の情にて命助り、此の下屋敷に身を忍べり、勿論笛の盗人は、汝と云ふ事悟れ共、證據なければ某が、身の言譯も立難く、空しく月日を送る內、敵を討んと吾妻野が入込しを幸、豫てまさかの便にと、拔け道の此の空井より、思ひ付たる重忠の方便にて、牒し合せし今の狂言、コリャ見よ笛は我が手に入たり、一盃參つて能い氣味〳〵、笛を盗み其の上に、及ばぬ謀叛を企つる、邪非道の人非人、腕を廻せと摑め付くれば、さしもの源太も顋喰ひ違ひ、呆れ果て居たりしが、エヽ殘念や口惜しや、儕らが方便に陷られし、其の返報是見よ、と相圖の呼子吹き立れば、四方の繁み谷々より、數多の伏勢顯はれ出で、弟平次眞先がけ、どつと上げたる鬨、潮の涌が如くなり、景季勇で、ヤア〳〵者共、智惠自慢する重忠め、荏柄ぐるみに討取れ、と下知に隨ふ雜兵共、右往左往に押寄る、胤長はちつ共臆せず、吾妻野を奥へ追遣り、諸肌脫ば肌には着込小手脚當、太刀脇狹み突立ち上り、佞人一味の蛆虫めら、何萬騎有迚も何程の事有ん、と切て出んとする所に、一間の內より高聲に、ヤア〳〵胤長騒がれて、秩父の重忠是に有と障子颯と押開き、番場の忠太が腕捻上げ、優美の音聲爽に、我が遊興の虛を見込み、淺まき方便の梶原が、謀の裏を搔き、叛逆を見顯はし、討取る方便を見すべし、と忠太が首を捻切

國にて蝦夷に至り、御身の上の噂有、同じ源氏の血筋なれば、何卒して招き寄せ、一方の大將に賴んと、義經公の御懇望、今此の所へ來り給ふも、我が仙術のなす所、急いで蝦夷へ渡り給へ、と終始委しき物語、朝比奈は心解け、ホヽ扨は聞及ぶ海存仙人よな、思ひ寄ぬ義經の情忝なし、去ながら父義仲の仇敵梶原を討ぬ內、日本の地は離れ難し、ホヽ夫にこそ幸有、重忠の智謀にて、梶原が謀叛顯はれ、今合戰眞最中、道は遙に隔たる共、此の海存が仙術にて、暫時に彼の地へ伴ひ申さん、此の杖に取付給へ、と云ふかと思へば、諸共に、雲井遙に上りける、

重忠が計略にて、梶原兄弟擒と成ば、景時は一味を隨へ、鎌倉御所に責寄る、重忠義盛在柄の平太、所々の持口差堅め、喚き叫んで責め戰ふ、必死と定めし謀叛の族、息をも繼す揉立れば、さしも多勢の鎌倉勢、少し白らけて見えたる所に、小山の如き武者一騎、敵陣より裏切し、顯はれ出るは三郎義秀、コリヤ堪らぬ、と寄手の軍勢、むら〳〵ぱつと逃散れば、梶原も耐へ兼、逃げ行く馬の尾筒を摑み、コリヤ〳〵と引戾し、どつと引据ゑ乘懸り、數年の惡逆父の仇、思ひ知れ、と首引拔き、謀叛の棟梁梶原を、朝比奈三郎義秀が討捕たり、と呼はれば、義盛重忠在柄の平太、海存も顯はれ出、有し次第を委しく語り、諸士は凱陣朝比奈は、海存諸共義經の、跡を慕ふて急ぎ行く、實や異國の果迄も、日本の勇猛隱れなく、源氏の末は萬々歲、五穀豐饒に民榮へ、動かぬ御代こそ目出度けれ

鍛ふ武者修行、深山幽谷嫌ひなく、足に任せて登りしが、はつと草臥立留り、扨思ふたより高い山、此の山上には地獄ありと、世上の取沙汰見き及ぶ、聞屆ぬも卑怯の到り、イザせんじやうして地獄の奴原、十王を始とし、獄卒共を取てしめ、味方に付ん、と獨言、猶山深く行く所に、髪はおどろに角生たる、五色の鬼共顯れ出で、手々に得物打振り〳〵、無緣の亡者來りたり、かゝれ〳〵、と追取卷く、大膽不敵の朝比奈は、少も騷がすせゝら笑ひ、ホヽ地獄塞げの糟鬼共、目に物見せん、と大手を擴げ、追駈〳〵追廻し、取て投出す鬼礫、末世の今に至る迄、朝比奈三郎が、地獄破りと名に高し、獄卒共は堪り兼、叶はぬ赦せと迯て行く〳〵、ヤア見かけに寄ぬ鬼味噌共、と續て駈出す岨影より、顯はれ出たる異形の人相、童眼鶴髪古木の杖、木の葉衣はいと氣高く、羽扇を以て差招く、義秀乾度見、ヤアちよござい成化物め、と摑蒐ればふうわりと、大地を離れて虛空に上り、莞爾と笑てつゝ立ば、さしもの朝比奈怙然として詠め入る、翁凛たる聲音にて、善哉〳〵某こそ義經公の近臣常陸坊海存なり、我奧州駒形が嶽の岩窟にて、異人に仙術を學び得たり、必ず怪み給ふべからず、抑我君義經公、蝦夷が島へ渡らせ給ひ、嶋を切靡け、義經大王と恭れ給ふ、猶又韃靼へ押し渡り、切靡んとの御催、味方の勇士を招かん爲、我は再び日本へ渡り、世俗の噂を幸に、此の山に引籠り、家來を獄卒に拵へ立、人の剛臆を試し見て、味方に付ん謀、先達て義盛より、經若君を送り參らせ、靜御前鈴木が一族、皆堅

矢口後日 荒御靈新田神德

作者　東都　福内鬼外
全　門人森羅萬象
浪花　二一天作

第一　鎌倉御所の段

抑南の朝の將軍新田左兵衛佐義興、無邪志の國矢口の渡に逝せ給ひければ、土人等其丘に宮柱、太敷建て新田大明神と稱へ奉り、御稜威を畏み奉りければ、和享給へる御神德、カロシ「世々に傳へて著き、人皇九十九代の帝、後光嚴院の御宇に當つて、我日の本の外迄も、皆掌の内に握り、武威は四海に跨りて、踏治めたる足利や、二代の武將征夷大將軍源義詮公、大廣間に出御わりければ、御座の側は當時の管領畠山尾張守義深、我威を表に立烏帽子、大紋の袖いかめしく、角菱立てし面構へ、次の席には竹澤監物が弟 同苗修理亮宗時、胸に惡事の相談を、江田の判官が弟彈正與連、其外昵近譜代の面々、綺羅を飾りて參列あり、頃は貞治二つの年、三月上の九日や、何か上意の旨ありと、召に應じて近江の國守佐々木判官秀詮レ名代

源氏大草紙終

神德は、普く人の知る所、靈驗なしとはいはれまじ、眼前寄特は義興の、靈を込たる廟所の上、生たる竹は枝葉なく眞生に立延て、遙梢に少しの枝葉、是を名付けて旗竿竹とて、見る目驚く不思議の一ッ、扨は又空飛ぶ鳥、廟所の上を過る時は、二ッに裂て落ると聞く、斯神罰のはげ敷時は、方々も存じの前、又一心に祈る時は、運を守り災を拂ふこと、響の聲に應ずる如し、必ず護すること勿れと、仰に臆まぬ尾張守、上意を返すは憚りなれども、神は和光同塵とて、本地垂跡兩部の神道、心なき鳥翅、飛ば飛なり夫なりに、赦して置が天の道、又竹とても其通り、天然自然の形を變せず、常の儘にて生立こそ、直なる神の心ならずや、空飛鳥の命を斷ち、性に違ひし旗竿竹、一ッとして神道の誠の道に叶はねば、罰も利生も荒振神、夫を兩段再拜して、御信仰とは如何なり、夫にをる衣紋之介、あくちも切ぬ形をして、謂ざる神だゝきと、傍若無人にいひ解せば、ホヽ理なる汝が一言、去ながら鬼神のことは、一槪に凡慮を以て論じ難し、物の性を失はぬを誠の神の道とせば、高良の神の湯起請も、湯は湯の性を其儘に、燒爛るべき筈なるを、燒ねが即神國の、奇瑞を顯す神變不思議、又は一夜に千本の松を生ぜし北野の神德、是等も天地自然にあらずと、悉く拔捨んや、サ返答聞ん義深と、問詰られてイヤ夫は、サア〳〵何と、に尾張守、口を噤んで閉口す、大將猶も衣紋之介を近く召れ、幸なるかな明日は、新田の社の緣日なれば、此御敎書を奉納し、武州荏原の一郡を寄附すべしと、仰にはつと

として、嫡子衣紋之介秀頼、齡は十五の角髪も、二葉に著き生立や、古實を正し入來れば、後に隨ふ家老職多賀將監輝門、遙末座に平伏す、義詮仰出さるゝは、汝を召すこと余の儀にあらず、佐々木の家には先祖より傳はりし、雨降の玉といへる名玉あり、いか程の旱魃にも、水に入れば忽に雲起り雨降こと、其隱れあらざれば、汝が領分一ヶ國の旱魃を救んより、一天下の救となさば民の悦び、去に依て彼雨降の名玉を差上させん其爲に、召寄たりとありければ、衣紋之介猶もひれ伏、ハア上意の趣委細承知仕る、此儀は豫て管領畠山義深殿より、御内意仰聞られ、早速國元へ申遣し候、幸父判官秀詮參勤の節に候へば、程なく持參仕るべしと、お請申せば大將重ねて、新田義興が一子德壽丸、幷に弟小太郎義峯等を守立、新田の城に楯籠る由良兵庫之介を責落さんと、亡父尊氏公御在世の砌、度々討手を向られたれ共、中途に於て雷火に打れ、味方の軍兵多くの死亡、夫よりして引續き、鎌倉近郷種々の妖怪是ぞ正敷義興が、怒の靈のなす所、打捨置ば民の歎き、兼て信心なすと聞ば、衣紋之介を差遣はし、神すゞしめの祈りをなさん、秀頼其旨心得よと、仰にハット衣紋之介、委細畏り奉ると、お請を打消す畠山、イヤ君の仰さることながら、討手の勢の死亡せしは時の天變、夫を新田の祟などゝ、罸も利生も神德も、あるか無かの新田の社へ、御使を遣はされんは世上の嘲、お家の名折れ、且は武威の薄きに似たり、御賢慮有て然るべう候と、したり顔に相演れば、イヤトヨ義深、新田の社の

退出の八ツ下り、連ぬる袖もきらゝかに、輝く神の御像、虚靈不昧を象りて、敬ふに威を白銅鏡、曇ぬ君が御治世は、風に偃す民草や、天の八重雲吹拂ひ、しげさが本を切拂ふ、鎌倉山の星月夜、榮ふる御代ぞ、三重寛なる

第二　矢口村神前の段

君と神との道直に、治る春ぞ目出たさ〳〵、鎌倉殿の命を請け、佐々木衣紋之介秀頼、相役には竹澤修理亮宗時、武藏國矢口村、新田の社の鳥居先、床几直させ並居たる、斯る折しも向ふより、木綿衣の道心者、二人が前に手を支へ、私めは道念と申て、此社の世話役坊主、先以て今日は將軍樣よりの御代參、御苦勞千萬お有難ふ存ますると、ありべかゝりの挨拶を、竹澤ぐつと睨み付け、ヤイ〳〵腐れ願人め、貴人の前にて憚らず、のし上つたる慮外もの、ムゝ我々が參詣を嗅付て來をつた、コリヤお餘り貰ひの鉢ち坊主な、アレ家來ども引ずり退よと、嵩にかゝれば、へゝゝゝ、コレそんなに毀すまいてや、慮外ながら此坊主、元來新田の御内に於て、身は輕けれど譜代の家來、新田の社建立と、所々方々を勸化して、此社を建たのは、誰知らない者はない、いはゞ別當同然の此坊主、挨拶したが誤りか、とやり込られて逆立竹澤、ヤア推參なるづく入めと、切及廻すを衣紋之介押留め、ナニ其方が聞及ぶ道念よな、某當社を信

領掌の、衣紋之介が喜悦の眉、燒面仲間の竹澤宗時、憚もなくしやゝり出、義深殿のいはるゝ通り、心元なき新田の神德、罰が當る物ならば、最前から譏はしる、尾張守殿の頰がまち、歪むかすじるか仕さうなもの、夫をしゝらの神德は、勇者に勝れぬ新田の社、拙者も佐々木殿同道し、拜んで歸るか踏潰すか、罰と利生を吟味の役目、仰付られ下されよと、いふに大將打頷き給ひ、いかにも信せぬ方々が、疑心を晴す爲なれば、望の役目許すぞと、御氣色殊に麗き、御前の首尾合よき折と、江田彈正進み出、イヤ何衣紋之介殿、貴殿の姉初花姫に、畠山殿の甚い執心、私等媒介致さんと、前以て申入るれど、今に返答煮切らず、君の御前で左も右も、腰の切た挨拶聞んと、いひかけられて衣紋之介、返答跌めば白砂より、多賀將監引取て、アヽいや其儀はお氣遣御無用、承引あらうが有まいが、是非拙者が受合て、初花姫を差上んと、いふを抑へる衣紋之介、コリヤ〳〵將監、姉上の御緣邊は、思ふ人へ心任せと、祖父君の御遺言、夫を知りつゝ其一言、申直せといふをも聞かず、イヤサ腹這出の若旦那、御存ある事でない、兎角拙者に御任と、いふも平壓彈正興連、主人の名代仕る、將監が受合からは、否でも應でも初花姫は、畠山へ娶せよと、君の仰が即結納、お詞願ひ奉ると、無理押付けの横車、寄らず障らぬ御大將、イヤ緣組のことばかりは、婦人の心に任する習ひ、强て結ぶは不緣の元、此儀は追て差當る、翌の役目を怠るな、ヤヨ兩人と徐々と、帳臺深く入給へば、お請申て各々は、早

事ちうやう時の過ち、退りをらうと極付る、ハヽヽヽ口利根に云消ても、靈驗奇瑞はまだある〳〵、お前の兄御の監物樣、義岑樣を搦めんと、家來諸共船に飛乘り、櫓を押切てエイサッサ、川の半に乘出す、此御神の御罰にて、不思議や俄に風起り、川浪逆立かき曇る、空に雷電霹靂、空中より聲高く、ヤア〳〵監物慥に聞け、新田左兵衛佐義興が、一念爰に顯はれて、恨をなさん思ひ知れ、と呼はる聲の下よりも、小山の如く波立て、船を搖りすゑ搖りおろせば、廣言吐た監物殿、がた〳〵わな〳〵膽礬色、猶も吹來る暴風、船は碎て、羽子板屋根板ばら〳〵〳〵、お前の兄御の水練自慢、れてさをやつても叶はゞこそ、浮つ沈んづどんぶりこ〳〵、どんぶり〳〵〳〵こ、水を喰ふてがぶ〳〵〳〵、上より黑雲覆ひかゝり、甲冑を帶したる義興樣の御姿、馬上ゆゝしく出立て、御手を述て監物殿の、頭を摑むと見えけるが、さらり竹澤から竹割、是も珍事かちうやうか、サア〳〵何とゝ問詰られ、返答しかなの宗時は、面膨らしてゐたりける、仕舞付ねば衣紋之介、イヤ何道念、詮なき論議は無益の沙汰、急ぎ神前へ罷越、天下泰平武運長久の御祈、丹精を拔んで奉れ、早疾く〳〵に道念は、一禮述て入にける、後見送つて燃杭に、火を竹澤が燒半分、眞赤になつて立上り、憎い坊主がぬかしざま、思へば新田の社こそ、兄監物が敵なれ、宮も鳥居も踏碎き、修羅の妄執晴さんと、行んとするを衣紋之介押留め、神慮をすゞしめ奉れと、君の仰を請ながら、麁忽なる振舞と、いふをも聞ぬ刎袴、持餘

仰なし、毎度差越す代參にて、我名は定て知りつらん、近江國主佐々木判官が忰衣紋之介、扨改めていふ事あり、今日我々參詣の子細といつぱ、義興公の御怒止時なく、樣々の御祟、其神靈を宥めん爲、征夷大將軍足利の義詮公より、寄附なし給ふ社領の御敎書、謹んで請取よと、恭しく差出せば、ハヽヽヽハツト押戴き、悅び勇むばかりなり、秀頼重ねて家來に云付、一つの包取出させ、此黃金一包は、衣紋之介が寸志の奉納、弓矢を守りの御祈禱、よしなに賴むと有りければ、宗時はせゝら笑、イヤモ聞ば聞ほど馬鹿な詮索、卑怯至極の神せゝり、なぜとおいやれ、其業に達しなば百發百中心の儘、すりや神力は借ずと濟む事、殊更神も神による、大馬鹿者の新田義興、我等が兄の監物に一盃喰され、矢口の渡しで頓兵衞が、穴を刳明け待とも知らず、船に取乘ぶく〳〵〳〵、古今無双の大べら坊、夫を神じやの佛じやのと、信心召るゝ衣紋之介殿、若輩千萬淺はか〳〵、昨日御前でも申た通り、神德が有かないか、吟味に參つた修理亮、先見た所が格別に、罸も利生もなさそうな、新田じやなうて似た山明神、斯いはれるが悔しくば、罸を當ぬか義興と、無法の雜云堪へぬ道念、イヤア竹澤樣、おらが旦那の罸利生お前はよく知らしやる筈、防門の宰相淸忠殿、畠山入道江田の判官、笠木の壓でびつしやりと、こけら鮓にならしやつたは、殿も直さず此鳥居、こな樣も所緣のある人、滅多なことをいはしやつたら、ぐわらんといふ目に逢つしやろ、ヤア喧いは、コリヤヤイ、其笠木の落たのは、珍

斯の次第、御免なされて下さりませと、時宜の替りに目をぱち〳〵、ムヽそんなら此以後、此お宮を打毀さうとは云ぬか、何が扨〳〵、ムヽ夫ならばお詫申てやらう、隨分信を取をらうと、律義一遍正直の、頭を土に摺付て、南無新田大明神樣、惡人めらが誤りまする、お赦しなされて下さりませ。南無新田樣〳〵、サアおらが通りにして見をれと、いふに主從聲揃へ、てうち〳〵あはゝ、つぶりてん〳〵よ、かいぐり〳〵〳〵よ、あんよは上手轉ぶはお下手、ハア有難やと一同に、下る頭も身も自由、此奴は動は〳〵。コリャ奇妙だと主從が、腕振て見つ首振つ、悦び合ふぞをかしけれ、衣紋之介はいとゞ猶、肝に銘ずる矢口の神德、有合家來も諸共に、ハツト感ずるばかりなり、衣紋之介は差寄て、斯る不思議を見る上は、よもや疑候まじ、お立なされい宗時殿と、いふに頷き、イカニモ〳〵、罸が當るか當らぬか、吟味に參つた某が役目、規模が顯れいかばかり大慶至極、イザ罷らうと立上れば、謂ぬ毒の試は、相伴人の迷惑だと、家來が小言も聞ぬ風、見送る道念衣紋之介、還しの拍手や、打連てこそ立歸る、後見送つて道念は、ヤレ〳〵飛んだ和郎がある物だ、相手になつて競合立、ぐつたりと沓入、ドリャ草臥直し一服せうと、煙管取出し吹く煙、されば吳の太伯は弟季歷に世を讓り、身退きたる古事を、思ひ合せて今爰に、新田小太郎義岑公、世を忍びたる目せき笠、供をも連ず只一人、鳥居の元に步み寄る、夫と見るより道念が、アヽヤレ〳〵、お前樣は、義岑樣じやござりませぬか、ヤ

したる其所へ、ぬつと出たる道念坊、ヤレ滅相な竹澤樣、足手かいさまは駈歩行、他力を借て漸と、成就した此お宮を、毀されて此坊主が立物か、やらぬ〳〵と支ゆれば、ヤア面倒なと突退蹴退け、家來續けと無法の主從、あれに荒出す其折しも、不思議や社壇鳴動して、踏出す儘に立竦み、宗時始め家來共、竦ばり返る大の字形、靜な風によく伸した、奴凧見る如くなり、道念は氣味よがり、ヒヤア些とさうでござるまい、悉皆さうした身鹽梅、水銀人形七段返り、ヤアテン、カラ〳〵〳〵、ナント旦那の御神罰、首尾よう參つてお慰、どつと誉たか、イヨ〳〵竦はつたのめ、イヨ飛魚の干物めと、嘲弄されて修理亮、エヽ憎い栃坊主め、イデ物見せんも口計り、働く目玉は手遊の、べかこ人形に異ず、思へば無念と氣を苛ち、エヽ臆したるか家來共、身に搆はずと踏込と、いふに家來は口を揃へ、アレ旦那は人の無理ばかり、踏込うにも行うにも、五體は襦袢に百が糊、天日に干たる如くにて、しやちばり返る板天神、端錢を落しても、拾はれもせぬ此しだら、コリヤマア何たる事だぞと、竦り上たる家來共、手鼻かむやらかまれねば、溢す泪と二本棒、口へじよろ〳〵咽び泣、ナント見られたか竹澤殿、抑に抑れぬ神の咎、此上は兎に角に、お詫申に如はなし、といふに我慢の角も折れ、イヤモ是に懲ぬ物はない、お詫を頼む道念坊、是じや〳〵と拜む氣も、開つた儘手は寄らず、漸動く指の先、家來の面々口々に、私共は露塵ほども曲つた心はござりませぬぞ、此お旦那の云付故、主命是非なく

あれで縁と御物語、ヲヽ左も右もと義岑公、打連立て歩み行、我は物には狂はねど〳〵、物こそ我を狂はする、狂ひ亂れて現なく、折た翳の一枝も、あたら櫻の科は散ぞ恨なる、花も憂し風もつらし、散ばぞ誘ふ誘へばぞ散る、花の姿の亂咲、髪も所體もほら〳〵と、下着の褄の八重一重、蹴返す裾の緋櫻や、紅梅櫻樺櫻、此世の緣は薄櫻、淺黄櫻と散花の、彼岸櫻と後の世を、結ぶ緣の糸櫻、又逢事も有明の、夫を頼みに塩竈や、煙となり又雲となる、其妄執の晴やらず、初花姫の身を借て、戀しき人に逢たや見たや、我夫のうと狂つ舞つ、花のしもとの亂咲、狂ひ疲れて伏轉ぶ、後を追ひ〳〵腰元共、乳母狭衣も走り寄り、ノウ現なやお姫樣、正氣を付て給はれと、さま〴〵勞り參らする、何事やらんと義岑公、道念諸共立出給ふ、姿見るより狂ひ人は、ノウ可懷や義岑樣と、縋り付は此方も吃驚、ムヽ見ればやん事なき上臈の、物狂はしきは、ムヽエヽ扨は、戀人を慕ひ焦れし狂亂か、又は物の魅なるか、去ながら終に逢たる事なければ、知人ならぬ某を、義岑と呼掛しは、ハテ心得ずと不審の體、ノウ恨しの仰やな、君に思ひを懸しより、いつそ命を捨小舟、心は千船百船や、棚なし小舟甲良のとを、渡る舩人梶をたへ、行衛も知らぬ物思ひ、父の心の荒浪に、身は浮舟の纜も、切て冥途へ出船の、宙有の旅に浮れ舟、弘誓の舟に乘も得ず、浮みもやらず浮々と、あてがれ焦れ來りたり、親と一所でないといふ、一ッの功を遂るなら、未來で添と仰やつた、詞は嘘か僞か、酷い難面胴慾い

レ〳〵お久しやと、いふに此方も笠掻投り、ヤレ道念か久しやと、一ッ所へ寄集り、ほんに何から申ませうやら、臺樣にも御機嫌で、モウお子樣でも出來ましたか、といふにはらりと涙ぐみ、ヲヽ其臺も去年の秋、持病の癪のしもつれで、老少不定の世の習ひ、不便な事をしたはいのと、聞て此方も悄りし、スリヤアノ臺樣は、ハアアおいとしや、私等が内にござました時分、不思議な緣で世話になり、親兄弟もない身じやさかい、其方を親と思ふてゐる、死る時の末期の水も、おれが取うと仰やつた、其有難さ忝なさ、逆に流れぬ物ながら、此死水の約束は、あちらこちらになりましたと、啜り上るぞ殊勝なる、アヽ埒もない、泣が亡者の爲にはならぬ、アヽ南無阿彌陀〳〵、イヤ申こんなことは差置て、心得ぬは只一人、何した譯でござります、といふに領く義岑公、某が體不審尤、我甥の德壽丸、未だ年も行かざれば、此義岑に新田の家名を繼せんと、兵庫介がたつての勸め、去ながら今足利の天下となれ共、南朝へ手差せず、新田の城へも攻寄ざるは、兄義興の武威神德、幼少なれども德壽丸は、現在の嫡子なれば、德壽丸をさし置て、身不肖の義岑が、家を繼べき謂なしと、國遠したる了簡は、窃に鎌倉方へ近寄て南朝へ志を運ぶ武士味方に招き、和田楠と牒し合せ、南方より立狹み、鎌倉を攻亡し、兄義興の修羅の妄執晴さん爲、思ひ立たる此姿と、聞て道念横手を打、ヲヽ適な思し召、鎌倉方へ取入には、よき手懸りもござりませう、何を申すも爰は往還、アレ向ふの茶店は私が馴染の内

き、お手を取々乳母妼、亡者の婚禮媒介は、此道念が天窓役、是がほんの戀無常、と打連れ立て急ぎ行く、道引遣へのつか〳〵、忍び出立の江田彈正、直には行ぬ蟹侍、主の權威を甲に着る、同じ穴なる岸本新吾、聲も密々差寄て、イヤノゥ新吾殿、貴殿の主人畠山殿、御執心の初花姫、某が仲人で家老の將監は合點なれど、埒の明ぬが面倒さに、今日同道申たは、幸當社の緣日とて、參詣する初花姫、待伏して引さらへ、直に貴殿へ手渡しと、拙者が家來の雁介を疾より犬に入置たりと、聞て新吾が出來た〳〵、猶も委敷御相談、イザお先へと打連て、宮居の蔭へ入日さす、春の夕暮まばゆげに、義岑公は茶店より、窃と出るも思ひの種、ハア物は疑はれぬ、焦れ死たるお船が魂、初花姫が姿を借り、我に枕を交すとは、よく〳〵深き志、不便の者やいぢらしやと、過し事共思ひ出し、悲歎の涙にくれゐたる、後を慕ふて初花姫、エヽ手の惡い義岑様、ほんに不思議な御緣にて、恥しい物の怪も、二人か中の結ぶの神、さりながら婚禮の盃して、お前に抱れた寢た事も、一向覺ず漸々と、正氣に成たは可愛と、後でお前が抱しめし、其睦言から氣が付て、どういふ譯で此お人と、爰で寢てゐる事やらと、案じて見れば始終のわけ、夢幻のおろ覺、嬉い亡者の引合、必見捨て下さんすな、と縺れ寄しは蝶々の花の露吸ふ風情なり、義岑公は振放し、物の怪の直る迄、一旦の事は格別、こなたは誰あらう佐々木家の秘藏姫、我も望ある身なれば、浮名が立ば互の難儀、思ひ切て下されと、いはれて

前後も分ず抱き付、かつぱと臥して泣ゐたる、義岑は人知らぬ、其かねごとの覺ある、胸に迫りて惘然と、詞も涙にくれ給ふ。乳母狹衣も不審顏、コレヤ道念樣、先程から取紛れ、御挨拶も申ませぬ、ヲイノ私も先から遠慮して、態と扣へてをりました、此方がお供と見えたれば、アイ是なるは私が御主人、佐々木近江判官樣の御息女初花姬、今日弟御衣紋之介助樣、此お宮へ御代參、兼て御信仰の神ゆゑ、姬にも參詣、常よりも不慮の病氣、何方樣かは存ませぬが貴方樣へひよんなお世話、御免なされて下さりませ、申道念樣先程矢口の渡場から、寒氣立しと申されしが、夫から俄の此狂氣、どうした事でござりませうと、聞て道念思案顏、ムヽハヽ夫で聞えた、夫なれば譯のある事、ハア若い娘の一筋に、思ひ込だ一念、浮みもやらぬ姬君に乘移り戀慕ふ、アヽいとしや、南無阿彌陀佛〳〵と、回向の聲に皆吃驚、スリヤ姬君の物の怪は、ヲイノ渡し守の頓兵衞が娘、お船の死靈に極つた、ハヽ彼奴も野暮ではないはいのと、いふに猶しも呆れゐる、道念騷ず、イヤ是お乳母殿、是は只では直るまい、何といつそ斯しては義岑樣にお預申、假に婚禮事の盃でも取交したら、死靈の亡者が堪納して、つひ退は定の物、義岑樣も御不肖ながら、初物は七十五日、大事の箱入破物の、損じぬやうに賴みますと、いふに吹出す婢共、乳母もをかしさ笑を含み、そんならお前よいやうに、幸に持せのさゝえ。爰は人目も遠慮あり、アノ茶屋へと勸むれば、姬はいそ〳〵勇み立、義岑公は今更に、何と挨拶面映

聞ば苦しき聲音にて、ヲヽ其姫を何の苦もなく引捕へんと、思ひの外に此重傷、外の醫者では癒るまい、玄白老を頼んで、和蘭流の膏薬を付て貰ふて下されと、いふも切なき息使ひ、彈正疵口改めて、僅計りの疵なれども、首の骨より咽笛へかゝつたれば、玄伯でももう叶はぬ、いひ置事はござらぬかと、いはれていとゞ氣もめいり、ハア悲や口惜や、花は三吉野人は武士、主人の爲に討死するは、疊の上ののたれ死には勝たり、とはいひながら畢丸持たる効もなく、女に突れて此狀は、屍の耻辱其上に、近年旦那の撿役で、五人扶持に八石の切米の其内を、三石二斗の借米にて、只た四石八斗の正味、其上相場の安い米、いかに忠義といへばとて、討死するとはおはぬ者、安い命と思ふ程、黄泉の障り修羅道の、迷ひの種にて候と、是を最期の言葉にて、敢なく息は絶果たり、彈正は目を摺赤め、回向せんにも何宗やら、知ぬが佛に打向ひ南無妙法蓮陀佛〳〵と、唱へる所へ義岑公、姫の身の上氣遣しく、取て返せば彈正は、コリヤ堪らぬと逝行を、逝さじ遣じと追懸るを、後の方より奴の雁介、どつこいやらぬと摑み付、折よく來かゝる道念が、近邊に有合ふ茶店の手桶、天窓へざつぶり水煙、おさらばさらばと一散に、飛ぶが如くに三重「行雲も

第三　京極館の段

ハツト急のぼし、ソリヤ曲がない義岑様。そんなら先刻に可愛の、忘れはせぬのと仰やつたはお船へ立る心中で、私はお嫌なされるか、死靈の所爲でも物の怪でも、抱れて寢たは私が體お船とお前に慰れ、亡者の退た脱蟬の、そなたは嫌じやと突出され、世間の人に指ざゝれ、生てゐらるゝ物かいなと、差添を拔放し、既に自害と見えければ、義岑周章押留め、サア〳〵どう共なりませうと、漸々刄物捩取て、鞘に納むる胸と胸、二世も三世も變りはせじ必見捨給ふなど、互にひしと抱き付、割なき中となりにけり、樣子伺ふ江田の彈正、奴雁介諸共に、面を隱せし頰冠り、二人ははつと遁出す、先を塞いでヤア逃まい〳〵、おやかり物のお相伴、捨分しろと無二無三、初花姫を引立る、コハ狼籍と義岑公、するりと拔たる刀の稻妻、仕組の狂言ソリヤ拔た、叶はぬ赦せと遁行を、何處迄もと追て行く、跡にひや〳〵初花姫、怪我遊すなと氣を揉む所へ、周章ふためき駈來る狹衣、此間に早うと立出る、向ふへぬつと岸本新吾、サアしてやつたと引立る、さうはさせぬと狹衣が、懷劍拔いて突かくる、エヽ面倒なと取て引伏せ、今が最期と振上る、姬は詮方後より、怖々突込む懷劍の、纖弱き腕も急所の痛手、かつぱと伏す間に起上り、見て吃驚の狹衣が、怖さ悲哀さ諸共に、夢路を辿る如くにて、こけつ轉びつ落て行く、跡に新吾が血みどろちんがい、起ては倒れ、こけては這、悶え苦しむ其所へ、取て返す江田彈正、斯くと見るより、ヤア〳〵新吾殿手を負はれしか、初花姫が行衞は何とゝ、

監が申通り、程なう御着でござりませう、お氣遣遊ばしますなど、共々宥め給ふにぞ、ヲヽいやればさうも思はれる、シタガ、殿のお着の遲いも氣懸り、又自らが此間、心遣は初花姫、過去給ひし舅君、分て日頃の御不便がり、女子なれ共惣領、必ず他家へ緣組無用、領分の內田上郡七百町の地を分て、姫が氣に入り筋目も正しき者あらば、呼入て娶せよと、一昨年の冬、御逝去の、御遺言にも此事ばかり、夫故欲がる方があつても、緣組の沙汰もなう、是迄も打過しに、管領畠山殿より達ての所望、江田彈正が取持にて、則將監の承はり、斷いへば當時の勢ひ此方の爲にならぬと、默止されぬ今度の所望、何事もお着の上でと思ふ中、日外矢口へ參詣の砌、新田小太郎義岑殿、見初しが緣となり、互の出會折惡く、江田彈正が行合せ口論に及び、剩へ畠山の家來、岸本新吾を姫が手に掛け、乳母狹衣諸共に行方知れず、殿樣のお着の上、何云譯のあるべきと、彼方此方を思ひ遣り、御目も潤みましませば、衣紋之介も將監も、何といふべき詞なく、差俯いてゐたりけり、奧方重ねて、ノウ將監今日改めて其方に相談、もう一昔殿のお妾お筆の方、御寵愛に誇つての我儘、折しも懷妊、彌と身の高ぶり、我君も愛想が盡其方へお預け、間もなうお筆は產後に病死し、誕生は男の子、呼取が本意なれど、物堅き秀詮卿、お筆の方の我儘を憎み給ひ、館へも寄せられず、自らや衣紋之介も對面叶はず、ツヒ光陰も十二年、腹は貸れど大切な殿の血筋、今日こそ親子の名乘を願ひ、直に引取り置積り、名

治る天もほど〳〵に、御代の春こそ恙なれや、佐々木近江の判官秀詮卿の一搆、今日參勤の鎌倉入、上下賑ふ大書院、御一家御家門待受の、使者悦びの口上長々と、太刀折紙の折目高、或は卷物千鯛箱、數の進物格式の、銘々主人の申付、禮儀亂さぬ受取渡し、武家の風儀ぞ正しけれ、詰所より立出るは、執權多賀の將監輝門、骨柄衣服勿體も、奏者の上座に押直り、先以て御使者御苦勞千万、先刻よりの御口上、衣紋之介へ達せし所、嘉例を欠さず御使者の趣、祝着致す、併し大殿判官秀詮、只今に着致さず、遠見の者も歸らされば、夜に入るも計りがたし、各々樣には御歸り下さるべし、御挨拶は是よりとの儀、此旨宜敷御執達と、慇懃に相述れば、各々ハツト領掌し、ソレ取次中お敷臺迄送られよと、將監が差圖につれ、互に式禮目禮の、使者は館へ立歸る、奥より騷々侍女中、將監が側に出、殿樣の御着、毎年よりは甚い遲さ、御前樣若殿樣にもお待兼、お心ゆるしに此所へ、お出なりと案内の、表の座敷いつになき、秀詮の奥方久賢御前、後に隨ふ衣紋之介、徐々と立出給ひ、ノウ將監、毎年夕邊は小田原のお泊、夫なれば早い筈、何して遲い事じやいのと、尋る内も兎や角と、案じは女儀の常なれや、ハアいかさま餘程の御隙入、去りながら、アレ御覽遊ばせ御庭の樹々も春めき、又御道中の遠山など、ちら〳〵と見ゆるも能お慰み、昨今のうらゝかさ、定て梅澤大磯邊で、所々の御遊覽、御供司は縣の三郎。拔目なき萬事の差配、憚りながら御心遣は御無用と、申上れは衣紋之介、ホヽ將

しと〳〵舁込む旅乗物、川田甚平引添て、直に書院へ舁上させ、何れも御太儀、イザ休息召れよと、詞にハツトお供の面々、いそ〳〵長屋へ退出す、奥方若殿待兼の、御乗物に差寄て、手づから戸を明け悦びの、秀詮殿は常ならぬ、刀に縋り出給ふ、不審にハツト御顔を、守り詰たる其内に、設けの褥に座し給ふ、衣服を見れば流るゝ血汐、コハ〳〵いかにコハいかにと、皆々呆れ介抱の、先立ものは涙なり、判官苦しき御聲にて、ヲゝ驚きは尤至極、某がコゝ此有様、知たる者はアレアノ甚平一人、外へは洩さぬ家の大事、コリヤ甚平、着する迄はおのれやれ、奥を初め悴へ對面、跡目の事此世の名殘、云聞して相果んと、心の張弓苦しさを隠し堪へしが、コリヤ此介抱に心氣の緩み急所の惱、我に代て昨夜の次第、ソレ早く〳〵と氣を揉み氣を揉む息切れの、血汐は瀧を爭へり、奥方有にもあられぬ思ひ、コレ甚平、殿様のアノ御重傷、何とお嘲しなるものぞ、早う様子をサア〳〵、と急立給へば甚平は、諸肌拔で脇腹へ、差添がはと突立る、人々是はと又驚き、氣丈の老人這寄て、イヤ〳〵お騒ぎ下さるな、申上る一通り、昨夜小田原の御泊、例の如く御寝所へ入參らせ、お次に宿直致せしに、刻限も丑滿頃、頻に殿の御聲にて、甚平參れ只一人、早く〳〵と召るゝ故、モ何事かと駈付れば、アノ御手疵、次第は如何と窺へば、臥所の下より狙ひのわざ物、シヤうぬ召捕んと立騒げば、遉は御主人、ヤア甚平、斯る狼藉身の不運、世上へ洩ては氏の穢、家の断絶近習の者へも深く秘せと、丈夫の仰も

も爲丸迚發明な、生れと聞てわらはが樂み、衣紋之介の大きな便り、ほんにお着の遲いも幸、呼迎へて先逢たい、イザ早うと、仰は實も貞女の操、奥床しくぞ見えにける、將監は感じ入、ハヽア適の御賢慮、爲丸君の御悦び、育上たる拙者が大慶此上のあるべきや、御運枝多さは御家の繁榮、兼ては願ひ奉らんと、今日は爲丸君、表の一間へ御供申、イサ御誘引申さんと、いひつゝ立て一間より、伴ひ出る爲丸君、公服の小袖上下の、ゆきたけ迄も作法ある、席を隔ておはします、奥方見るより餘念なく、ヲヽ聞たより猶よい成人、ノウ衣紋之介、ハヽア私も此樣な悦びはござりませぬ、コレ爲丸、噂ばかりで逢ざりしが、先々無事で互の珍重、サア〳〵近うと親兄の、重き仰に威儀繕ひ、ハア母樣の御機嫌、兄上の麗しい御樣子、初ての御對面、お嬉うぞんじます、幼少より將監が所にゐて、父樣は勿論、御二人樣へも何卒お目に掛りたいと、明暮願ふてをりましたに、母樣のお情にて、兄樣へもお目に掛り、又父樣のお着の上、お願ひなされて御一所に置れんとは、有難う存ます、親き中の敬ひは、利發にも又愛らしゝ、母上いとゞ不便さの、ヲヽ是からは母が秘藏します、サア〳〵ずつと爰へ寄やと、仰に共々衣紋之介、遠慮せずと母樣のお側へ寄りや、平に〳〵と大人しく、御親子兄弟御中も、一方ならぬ御因、將監も手を取て、イザ御出と勸めやり、共に傅き奉る、追々歸る遠見の足輕、只今殿樣の御着なりと、申上れば人々は、御座を設けて待給ふ、御行列は表に殘し、昵近ばかり附添て、

將軍家へ差上んと、國元より持參せしに、參勤の日に紛失、我は犬死よつく武運に盡果たるか、コリャ三郎將監、急病と披露して、衣紋之介を跡目の願ひ、力を合せ玉の詮議も怠るな、只何事も賴むぞよ、コレ久賢、初花姫はなぜ見えぬ、そちらは誰と見廻し給ふ、奥方猶も介抱の、淚片手にコレヤ爲丸でござります、今日御着の悦びに、親子名乘の御願ひと、母の詞に爲丸君、泣めを拂ひ申とゝ樣、是迄は將監が屋敷にゐて、一日もお側にゐず、おかゝ樣のお執成で、お目見を致さうと、御着を待てゐましたに、こんな悲い御對面、中兄樣、何處の奴が此樣に、父樣を突をつた、敵を取て下されと、しやくり上たる弟が、歎の中にも健氣の詞、胸に應へて衣紋之介、此事世上へ聞えては、氏の穢家の斷絕、深く秘せと父上のお詞が重き故、俱に天を戴かぬ父の敵を尋出し、討事ならぬ我々は、弓矢神にも天道にも、見放されたか淺ましやと、兄弟顏を見合て、齒を喰緊る無念泣、奥方始め一同は、淚果しはなかりけり、判官苦しぎ目を見開き、ノウ奥、兄弟揃ふて今の對面、身に取て過分なぞや、衣紋之介は何事も、事穩便に取計ひ、家を立るが先祖へ孝行、コリャ爲丸、今逢て今別れる、父が心を推量せよ、此上は母兄を、大事にするが我への追善、衣紋之介も不便を加へ、兄弟中よう成人せよ、敵の行衞は縣の三郎、時節を待て討せてくれ、いひ置事も是切と、息も絶々四苦八苦、終に此世を去り給ふ、人々わつと聲を揚け、正體淚に伏沈む、久賢御前は噎返り、御機嫌よいお顏を見、爲丸も引合

拙者めが、無念さ何と申べき、只穩便に取計へと、御諚を守つてすご〳〵と、御供したる甚平が申譯は、マヽ此切腹、奧樣申々若殿樣、御供しながら此しだら嘸御蔑み、切ては冥途の御先駈、跡で宜く御執成、ノウ將監殿、お賴申モウ是切と、握り詰たる刀の柄、ぐり〳〵と引廻し、敢なき最期ぞ無慘なる、將監は眉を顰め、心得ぬは縣の三郎、供司の身分として、此場へ參らぬ不審さと、詞も未だ終らぬ次の間、躓き〳〵駈來る、縣の三郎行春、此體見るより狼狽顚倒、何れも御免と秀詮の、御膝元に駈寄て、申々三郎めでござります、御心底御惱み、申上べき樣もなし、奧樣ャ若殿樣嘸御歎き、ノウ將監殿、昨夜小田原の宿迄御供申、御本陣へ入間もなく、跡より早打、某預り奉るお家の重寶雨降の玉、御跡荷の長持へ入置しに、箱根の坂の切所にて、何者とも知ず、奪取て立退しと急ぎの注進、すは御大事ととつて返し、詮議すれ共、盜賊は行方なし、三島の方へ遁行しと、少しの手懸り賴みにして、追掛て詮議最中、かゝる大事と甚平が窃の報知、玉の詮議も夫なりに、息を切て馳付たり、ヤハア甚平も相果たか、エヽ我君樣何をいふも此御重傷、エヽ殘念やと拳を握り齒を喰ひ緊り、千々に碎くる心の悔み、思ひやるさへ味氣なき、大息はつと秀詮殿、ヲヽ待兼た三郎、スリャ玉は奪れ、盜賊は知れぬとな、エヽ口惜や腹立や、そも雨降の玉といへるは、いかなる旱魃ひでりにも、水に入れば其儘に、降雨車軸を流す故、國を治る稀代の名玉、先祖佐々木の太郎定綱より、代々傳はる家の重寶、

錯と手練の鍔元、確と押へコハ狂氣せしか將監と、云せも立ず、ヤア首討はまだ仕合、尋常に覺悟せよと、又切懸ればはつしと請、イヤサ是お急なされな將監殿、年紀といひ職義に似合ぬ、ナ、何とサア縣三郎行春、切腹の式法とくと存じてをる、殿の横死玉の紛失、イヤサ是周章て腹は切申さぬ、ヤア卑怯至極、疑かゝる其方命を捨るが申譯、甚平がよき手本、へ、、ハ、、、イヤ此三郎甚平と一口には申されぬ、某が所存御方若殿へ申上、其上にて兎も角も、お引なされと跳返し、睨み合たる家老と家老、物音聞付久賢御前、衣紋之介も駈出給ひ、二人が中に立並び、將監が疑も理の當然、又三郎が常々の忠節、不所存あらう樣もないと、鎮める奥方衣紋之介、ハア母人の御意の如く、双方倶に忠義の諍ひ、併し死を惜むべき三郎ならず、將監控へよ三郎も、所存の程申聞せよ、と理非明白の衣紋之介、實旃檀の二葉なり、將監は、不承〳〵、納る刀三郎は飛退つて頭を下、疑を受たる上、申譯の切腹ならば、モ一命は塵芥、然れ共大殿の御最期玉の紛失、彼といひ是といひ、當家に望をかくる族、サ是あるに極つたり、マツヽ身に覺なき證據は、則殿の御遺言、御跡目と玉の詮議、賴むとある末期の一句、イヤモむざと切腹は得仕らぬ、併しながら、假にも疑受たる某、御暇を給はりなば、敵の所在玉の行衛、手段を以て詮出さん、此旨願ひ奉ると、懸河の辨舌忠臣の、誠は鬼神も感じけん、將監も理に服し、返答なければ久賢御前、ヲヽ尤の願ひ、心使のない此時、衣紋之介の力にも

せ、初花はいやらず共、親子四人祝の盃、願ひし効も淺ましい御別れ、餘り本意ない情ない、又殘り多いは初花姫、親子は一世と聞物を、暇乞さへせぬ不孝、不孝な子が可愛と、跡で此事聞たなら、歎の程を思ひやる、御着の祝と此樣に、數の進物取はやし、賑な座敷へ出で、待ていたのは冥途への參勤を、見立る爲であつたかと、思へば〳〵忌しやと、三人寄て秀詮の死骸の顏を打詠め〳〵、コレ我夫、申父上、とゝ樣と、泪の雫白雨に、霰だばしる如くにて、目も當られぬ風情なり、將監三郎詞を揃へ、御跡目濟迄は御尊骸の殯、萬事の用意仕らん、イザ先奥の御殿へと、兩人寄て亡骸を、褥と共に舁上れば、奥方はじめ衣紋之介、爲九君もかき曇る、泪ながらに御手をかけ、奥の殿へぞ入給ふ、暫く時を寫し繪の、左右の襖押開けて立出る兩執權、席を改め多賀將監、ノウ三郎殿、見らるゝ通りの此爲體、跡目の願ひは若君にて讀事は相濟み濟ぬは貴殿、察する所日頃の出頭、奢に長じて廓通ひ、揚代等に差支へ、サ得てある習ひ、玉を以て金銀を借受召れたか、サ其云譯立難く、道中より引返して、跡での狼藉、サアよもや貴殿の業でもあるまい、ガ折がわるい、此將監疑ひ申す、サア一旦の若氣に其身を忘れ、或は家國を押領など、思ひ立、惡に染たる五體でも、水責火責天秤責、脊筋を斷割鉛の熱湯、手を盡し責るなら、サ其工をいふは治定、さすれば其儘鋸引、逆磔は天下の大法、其身の破滅はいふに及ばず、主人の家迄斷絶するナ合點か、そこを存て將監が、日頃の好すゝめ申、イザ介

花見御遊山物語、假初のお出にも、お側の女中供廻り、大勢連て出たお屋敷、今宵は乳母が只一人、お供申て塀の外、爰にゐるのも氣が後れ、怖い〳〵で肩身もすぼり、身すぼらしい此お姿、大名の姫君の、あられう物かおいとしやと、乳母が親身の氣扱ひ、コレヤ姫君樣、今日は慥に殿樣のお着、いつもの御祝儀謠囃で今頃まで、賑な筈なるに、打しめつたは合點いかぬ、ヲヽそれ〳〵、アレあの二階でお經の聲の聞ゆるは、アイ奥樣さうにござります、アレ〳〵鈴が鳴まする、ほんにアノ影は母樣の後姿、申初花でござります、餘りお目に懸りたさ、乳母を使に參じました、嘸憎い奴不孝者と、お叱なされてござりませうが、迚もの事のお情に、只た一目、お逢なされて下さりませ、申々コレ申と、見上見やりつ足つま立、いへ共屆かぬ塀の上、思はず知らず聲を上、わつとばかりに泣給ふ、音に二階も障子を開け、ハテ心得ぬ今の泣聲、紛ひもなき初花姫、如何して爰へ來た事ぞ、ムウ判官樣に非業の別れ、本意なさに、姫が事迄くよ〳〵と、思ふての此看經讀誦も、そゞろ心の迷ひ、思ひなしで有たかと、の給ふ母の獨言、下には姫が聞取て、エヽ非業の別れと仰るは、スリヤとゝ樣はお果なされましたな、ハア、ハツトばかりに倒れ果、コリヤマア何とせうぞ、どうせうぞいのと身を震はし、堪入消入叫び泣、奥方も飛立ばかり、ヤア娘かといひたさも、後先思ひ押鎮め、ムウ今泣たのは子規、夏に先立不遠慮者、深山に巢をくふ鶯か、夫婦の中に育ても、成人しては其親を、振捨て己が儘、

と、旁留る筈なれど、道理を盡した其方の心底、見所あれば暇をやる、隨分無事で、何角の詮議と、後は詞も口籠れば、衣紋之介も聲曇り、堅固で早う歸參せよ、待てゐるぞの有難さ、骨身に應へ三郞は、ハヽヽヽハツトひれ伏ば、將監も此場の時宜ノウ三郞殿、何を申も忠義より、今の如く刀三昧、ハア御念に及ばず、留まるも出るも互の胸と胸、ヲヽいかにもと兩人が、善か惡かは白洲の上、おり立三郞しほ〳〵と、館の名殘振返り、見る目も淚見送るも、淚ながらに二方は、將監に傅れ、心細くも三重「入給ふ、果しなき、淚の雫水晶の、珠數の玉の緒堪兼て、いづくに心奧方は、二階の佛明御明の影細々と誦經の聲、思ひの絆鈴の音も、濕るばかりに哀なり、花は根に、歸るを歸り來たるは、徒な嵐の吹荒み、何となり行身の果と、思へばいとゞ懷しく、切ても一度母上の、お顏を見たや逢たやと、迷ひ出たる初花姬、乳母が手引を杖柱、塀の外面に休らひて、ノウ狹衣、矢口參りの騷動より、義岑樣のお行衞しれず、館へは猶歸られず、知邊の方に隱はれ、世に味氣なき我身の上、餘所ながら母樣へ、乞暇を申上、其上は兎も角もと、胸を定めてやう〳〵と、爰迄は來れ共、迂濶に屋敷へ這入もならず、是といふも何故ぞ、我身の戀に、親々の案じも忘れ、家出した不孝の罪、モウ罰が當つたかと、聲も得立ぬ忍び泣、乳母も目を摩り、ヲヽ其お悔は御尤、私迚も同じ罪、奥樣のさぞお叱り、餘り大事に思ひ過て、御異見も仕さうな者が戀の取持、返つてお身の仇となる、アヽ移り變るは世の習ひ、

に出世すると、引立れば振放す、ヤア面倒なとちめらうめ、ソレ引括れと下知すれば、心得雁介無理無體、姫を引立彈正は、乳母を手籠の其折から、縣の三郎行春が、奴の浪平、主人の供の遲れ馳、夫と見るより雁介が、弱腰摑んで狗兒投、彈正を放退蹴退け、傍に圍ひ突立ば、二人はハット嬉しさも、鷲に追れし枯野の小鳥、懷見付し心地なり、彈正主從アイタ〻〻、痛い脚腰踏召〱、ヤア夢見たかと思ひの外、三郎が家來の糟奴、コリヤ、うぬ、うぬ、〱〱〱手酷い目に合せたな、アイタ〱〱一體どいつも盆なし共、一ツ繩に括し上、初花姫は畠山への進上物、奴めは豆腐切、乳母めは鮓の重石にすると、強い顏して長口上、其間に手早く二人を落し、ふんちがつて打笑ひ、ヘ〻ハ〻〻、お暇の出た縣が家來、彈正でも雁介でも只一ひしぎ、コリヤ此浪平を搦んとは、閻魔に敵たふ有罪餓鬼、おがらの脚ぼしぼつき〱。ひしいで吳んと嘲たり、ソレと聲懸雁介が、捕たとかゝるを眼潰し、コリヤさせぬはと彈正が、後矢筈に腔を抱く、ほぐれて前へ片手投、透さず襟じめ肘落し、右から入身の襟首捕へ引寄る、間もあらせず、むしやぶり付、双方天窓をくわち〱、突飛されてコリヤ叶はぬ、赦せ〱と遁吼を、ヤア遁さじ物と駈行浪平、せちがふ雁介、シヤ面倒なと引擔ぎ、二三間投付れば、腰をさすつて一散に、御面〱と迯て行、イデ彈正めをイヤ〱〱、軈て主人の出世迄、暫しが內の隱れ笠、隱れ裝とく災は、ナイ〱〱、程なく歸參花かいらぎ、鞘も目に立大脇差、

子で子にならぬ杜鵑、と世の諺も今身の上、とはいふ物の夫は烏類、人間は又格別、子は振捨て出行共、親は忘れず朝夕に、いかなる所に居る事ぞと、夜の眼も合ぬ憂苦勞、又父御の別れ聞、ヲヽ驚は尤じや、道理じや〳〵、コレ道理じやはいの、譯を聞ほど歎かます、ソレデモどうぞ、ハテいふも悲い心が急く、呼歸したいは山々なれど、此中へ戻りては、思ひ合た雄鳥との、比翼の中を引分て、直に彼の畠山時鳥と啼すが嫌さ、此譯を聞分て、里の知邊に時を待、コリヤ傍に附添乳母鳥も、介抱こそ思ひやる、暫しの間と辛抱させ、夜の臥所は狹衣の、一重を分けて大切に、風も引すな息災で、軈て戻つてたもる樣に、賴む〳〵と恩愛の、慈悲の敎は看經の、經の外なる功德なり、初花姬も狹衣も、兩手を合せ立つ居つ、有難淚果しなき、奥方は心付、暇乞にと佛間の手燭、內外見廻し欄干に、差出す明り、ヤア母樣、娘、必ず短氣を出さぬやうに、隨分無事で、母樣にも御機嫌よう、ヤ奥樣、ヲヽ、さらばと立切る二階の障子、心強くも入給ふ、二人は御後打詠め〳〵、コハそも何と詮方も、前後不覺に伏沈む、折から來かゝる江田彈正、奴の雁介先に立、うそ〳〵窺ふ提灯の、明にきよろ付蚤取眼、斯と見るよりつゝと寄り、ヤア初花姬、狹衣、爰で逢たは幸々、サアうせがあれと引立る、乳母は振切り後に圍ひ、ヤア一度ならず附纏ひ、姬君を何しやる、狼籍すれば赦さぬと、口にはいへど心は危々、彈正主從吹出し、イヤモ謂ぬ乳母めがほざき言、將監と牒し合せ、畠山へ連行ば、其褒美

三口有はい、ムヽ何だ金の當が三口有か、ソリヤ耳寄、夫で些と落付た、イヤ些さうもござるまい、シテ其心當りはどうだ、サ其三口有中で、第一番の心當といつぱ、ムヽいつぱ、サア此繁花な江戸なれば、五兩や七兩はツヒ落して有うかと思ふて、毎日おれは拾ひに歩行、ハテ滅相な男だ、そんな雲摑むやうな事いはずと、跡の二口が聞たいはい、シテ其次な心當は、第二番めの心當は、俺が方から遣て置た、質物書入の證文を、何卒貴樣が落してくれば、俺は頓と有卦に入る、エヽべら棒め、相手になる隙がないはい、アヽイヤ今一口殘つたが至極慥な心當、ムヽ至極慥なとおれば面白い、アイヤ慥は慥なれど、貴樣の前では些と遠慮でいひ難い、イヤワリヤ悪い合點、慥に手に入心當なりや、借人の仕合貸人の悦び、何の遠慮に及ばぬ事、俺も聞て落付たい、ソンナラいふて見やうか、ずんと慥な心當といふは、食傷か疫病で貴樣が轉りとやつてくれゝば、借た金は濟ではないか、エヽ忌々しいどてれつめ、金戻さない其上に、人を茶にする土左衛門め、何の事だい咄の樣な、と咬付やうな腹立聲、エヽ素人らしい事いふなやい、惣じておいらが仲間では、勝た時は拂ひ、負た時は踏のめす正直正路な附合、したが今のは戯言、本の心當といふは、コレ斯々じやと耳に口、ムヽコリヤ些と雲に汁、そんなら往て相談せうと、頷き囁き打連立て行後へ、棧留縞にお納戸茶の、裏もちつくり青ざめし、病後の顔も漸くと、太縞の羽織小短き、冬の日脚も八ツ下り、閙しさうに菊田屋宗兵衛、取るゝ物のない

角鍔しやんと伊達奴、ヤッコノ、此々奴が忠義、印は大紋振り出す袂、振り返り見返る名殘は京極の、舘を後に三重「立出る

第四　四谷新宿菊田屋の段

四ッ谷新宿馬草の中に、紫羅傘咲とはしほらしや、甲府街道秩父道、二ッに分る追分や、通路自由に何不足、内藤宿の室の梅、飯は盛ねど飯盛に、腹はれ客の喰ひ込、山の大將登り坂、新日暮の繁昌を、皆見に北をまかす氣の、男女の藝者茶屋煮賣、數の商人諸職人、すぎはひ多き其中に、稽古淨瑠璃連中の、贔負を賴む張札は、菊田屋の宗兵衞が、語る長地の其中に、つまらぬ事に相の山、其日暮しの小ヲクリも、辛き浮世の胡麻鹽に、氣を取フシと見えにけり、折節表をいつこかは、うさんな形の大男、小鬧しげに行後より、ヲヽイ〳〵とさまたの十兵衞、万八待と呼止め、イヤ是手が惡るい外すない〳〵、此さまたが魅ては、外しても外させぬ、コリヤヤイ日外貸た、五兩の金は何するのだ、大森迄はる〴〵と、いつ往ても大方留守、たま〳〵内に居る時は、酢の蒟蒻のと拔上手、所詮當のない金なら、證文に書入た、質物を請取べいハハ、イヤ質物渡す迄もない、心當りは大分ある、イヤ何の事だい、今時わいらが懷で、五兩といふ金、びん付ではあるまいし、イヤ出來まいと思ふがせつかい、ずんど慥な心當り、しかも

見えさうな時分だと、噂半へ三人連、中にもきん〳〵市の亟、林右先生早いお出、僕今日は此邊の羽織の内にすこ氣あり、しめこの兎ちよん〳〵幕、大の極りと出懸山の所、茂四郎仁兵衛におだてられ、深川で洒落のめし、此二人がいちや付を、我等引立ぐい歸りと、本田天窓のやに下り、天に向つて吹煙り、鐵枴仙や出ぬらん、茂四郎仁兵衛口々に、ハテ扨夫は大きな鐵炮、今日爰へ來る筈なれば、ぐい流しといはれたを、無理に連立て歸りました、夫は兎もあれ、今日は稽古をよしにして、些運らうでは有まいか、おつとよかろと毛氈廣げ、手ん手に用意四文錢、座取も時の運次第、運る浮世は車座に、づらりと並ぶ愚も、樂は苦の元九と六を、折角踏だ大引が、運り渡すはエヽどんな、どん〳〵太鼓で二百の負、勝て兜の鬼に、鐵棒あざ青二、青十青馬きり〳〵と、一打てしるばんこの數、暫く時を移しける、折もこそあれ門口より、爰じや〳〵、と菰包の半櫃を差荷ひ、ずつと這入て些頼みましよ、菊田屋の宗兵衛樣は爰でござりますか、新地からの屆荷物、アノ慥に渡しました、鳴子の方へ參ります、受取や歸りに貰ひましよ、棒も預て置ますと、とつかはとして出て行、ホヽ身代が直つたか、大層な代物が來るの、イヤコレ〳〵〳〵、一寸待て下されませ、新地から荷の來る覺はないが、門違ではあるまいかと、立寄見れば差札に、四ッ谷新宿菊田屋宗兵衛樣、ハテ俺が名は書てあるが、何であらうと棒引拔、菰切解き明んとすれば、不思議やな、ひしぎの笛の音太鼓の音、ヒウドロ〳〵

内は、戸ざゝぬ御代と掛鐵も、掛ぬ門の戸ぐわらりと明、ずつと這入我家の内、思ひも寄ぬ寢返りの大欠び、廻らぬ舌で、ムヽヽ宗兵衞殿お歸りか、ヤア人の留守へ來て寢てゐるは何者だと、差覗いて、ホ誰かと思や林右衞門樣、どこで上たかよいお色、頭は悉皆鮹の湯で立、サアお起りませ、ムヽ〳〵と起る片手に目を摩々、しどろもどろの足元は、せんまい人形のせんまいに、損じの出來た身振なり、漸取付流し元、檜杓で水をがぶ〳〵〳〵、ハアえい氣味だ、エツフウホヽ此寒いにえい御元氣でござります、イヤモウえいか惡いか知ねいが、今日は見番へ呼れて馳走、大勢の藝者の中で、式部めがおつをやる、彼奴は何でも氣がわるさうなと、俺も十分乘が來て、吸物椀でぐい呑、其勢で三光院へ往たれば、此宿での先生、松坂屋の扇野、山城屋の明石、橋本の元町、三幅對の掛物に、我等布袋の置物と、しやれころばして又呑だ、ナント新宿もきつい物に成たではござらぬか、貴樣が來てまだ間もなけれ共、アレあの通り月會の、床迄が立派に出來た、サア一段聞て下され、愛護の若に二世迄と、いふて別れて其後は、文も屆かず顏も見ず、夫さへ今は其人に、ゴウ〳〵〳〵、申々淨瑠璃を語りながら、鼾が出ます、些元氣をお出しなされませ、ヲツト合點だ、虎も半分毛をむしられ、雨戸に合栓合くゝろ、さつと佐々木が打渡つて、申々、ソリヤ藥袋でござります、藥袋か何だか、此家はぐる〳〵と廻る、廻るにしては一分二百の店賃は高いもんだ、ヤ夫はさうと市之亟や茂四郎仁兵衞、モウ

ア是は誤り奉る、お初穗と有た故、いつもの格で十二銅、ほんに常の神樣とは違ふ筈じや、思ひ切て四文錢二本で、二四の八百文、何卒是で御了簡氏子を、省いて下さりませと、差出せば手に取て、ムヽ折角汝が志、不足なれ共着服するぞ、是からは林右衛門方へ鎭座致さう、ハア悲しや夫は去とはお情ない、私は段々の不の字盡し、お前樣がござつても、何一ッ備へる物もござりませぬ、其無いが乃公が好物なり、其上に乃公が居たら、水も呑れぬやうに守つてやらう、ハアコリヤ堪らぬ、そんなら負ては居ますれど、私もお初穗と、懷搜して南鐐一片、殘りの三人顏見合せ、何と思やるぞ是から此方等が内へでざらうと、御托宣が出れば仕舞じや、いつその事前廣に、お初穗上て仕舞と、三人前で一歩二朱、惣々合して二分八百、澁々に打領き、是で一應歸つてとらす、又見合せて來るであらうと、いふに五人が口を揃へ、イヤモウ〳〵〳〵、何卒お出なされぬ樣、遠い所へ御遷宮を願上ます、ムヽそんならわいら俺を祭る眞言がある、眼を閉て一ッ心に鉦太鼓で囃し立ば、再び此地へ來るまじ、ハア夫は何よりお安い事、シテ其眞言はどう申ます、ヲヽ得心なら敎てやらう、おんびんぼう〳〵すかんびんそはか、〳〵、サア眞言は覺えた〳〵、サア目を眠て一心不亂、やつてくれうと鉦太鼓、拍子揃へて、おんびんぼう〳〵すかんびんそはか、〳〵〳〵〳〵、拍子取内取散す、錢を殘らず盆ござの、毛氈ぐるみ引抱へ、逸足出して駈出す、一間の内より高聲に、ヤア〳〵貧乏神暫く待て、忝な

に皆吃驚、コリヤ幽靈の箱入か、雷の捨子かと、取々評議の其内に、又ドロ〳〵の拍子に連、天窓で蓋を押明て、ぬつと出たる異形の相、有合ふ人々、わら肝取れ眺め居る、異形の物は悠々と、お上に上つて上座に突立さも、陰々たる聲音にて、善哉〳〵我は是、貧耗神の正體なり。色事朝寢勝負好、親の讓の商賣や、百姓する事まだるく思ひ、地道な事をいやがりて、智惠もなくして山事請負、一度に金を設けたがる、是皆我等が氏子なり、我其昔年久敷、曾我の家に逗留し、近年段々氏子も殖え、近い頃新地へ往て、菊田屋とは馴染なるに、我を振捨此所へ出張をなし、仕合がよいと聞たゆゑ、後を慕ふて來り、此家に長く逗留し、隨分守つてとらすべし、宗兵衛大きに恐れ入、額を疊にすり付〳〵、ハア御神詫の趣、委細承知仕つてはござりますが、御覽の如く私も、新地から此宿へ出帳致し、やう〳〵渡出の稽古淨るり、御町内のお影にて、些息を致す所、只今お出下されては、去とては迷惑千萬、何卒お歸下さりませ、南無貧乏神大明神〳〵と、合掌すれば、ムヽ斯いふ形でゐるからは、人身ながらも人間共が、いやがるも尤至極、夫程うるさく思ふなら、初穗を上ば歸つて取せう、ハア但しはいやか、ハア否なら守る、モ何のいやでござりましよと、有合ふ錢を十二銅、紙に包んで差出せば、冠打振りイヤ慮外者、此貧乏神を侮て、目腐錢の十二銅、新地から是迄來ては、日雇代にも釣合ぬ、神は非禮を請ぬといふを知ざるかと、肩肘怒らし目を剝出し、澁團扇を差のばし、煽ぎ立れば、ハ

笛太皷の元入して、かゝる手段を失策て、斯露顯た上からは、モウ破れかぶれ只は歸らぬ、てらをしてくれたと思ふて、此金は俺が貰ふ、もし又否といふが最期の介、お代官所へ訴て、博奕の尻破り、サア何だ〳〵と腰を据ゑ、のさばりかへる不敵者、大黑天は立寄て、小槌を以て萬八が、天窓を叩かれ、アイタヽヽ、うろ付拍子惣々が、以前の錢金取返し、憎さも憎しと撲のめせば、コリャ堪らぬと一散に、後をも見ずして逃てゆく、人々信心肝に銘じ、ハア有難や尊やと、禮拜すれば林右衛門、日頃苦勞致しますも、お前のお目に掛りたいばかり、數年の大願成就致し、不思議にお目に掛りました、モウ金持に成たやうな心持が致します、嬶や息子が嬉悦ぶでござりましよ、是からお供致しましよ、跡かまはずと私方へ、早う御出下さりませと、いふを押へる市の丞、イヤ是人には辭儀のあるものだ、慢勝なことといはつしやるな、申大黑樣、私方狹うはござりますれど、さつぱりといたして置ました、何卒お出下さりませ、イヤ茂四郎がお供致そ、イヤ仁兵衛方へ御來臨、イヤ我等が先じや、イヤ俺と、互に競合大欲心、宗兵衛大に腹を立、コレ滅相な、おらが内へえいやつとお出なされた大黑樣を、そゝのかして貰ふまい、去とは横着千万な、罷ならぬと突飛せば、イヤ遠慮するも事に寄る、是がほんの寶の山、淺草市でも盜んで來る、況や腸持の大黑樣の奪取勝ち、サア是からは腕づくだ、其方へやつて能物か、イヤ己が、俤かと、後は互に大肌脫、五人が一ツにからみ合、上を下へと大騷

くも此内に、大黒天が控へたり、止れやつと呼つて、かゝる所に鎭座とは、いかでか思ひ月會の、床の御簾をさつと卷上、色黒々と福々しく、括り頭布や打出の小槌、紛ふ方なき大黒天、皆々ハッとひれ伏ば、貧乏神は身の毛立ち、顫ひ戰きうづくまる、大黒天は勇み出、大黒舞を見さいな〳〵、大黒と申は、摩訶迦羅天のてん〳〵、天下泰平國土安全、五穀成就と守る故、家のお守の大黒柱、信心堅固の其ゆゑ、甲子待の備へ物、二股大根好故に、大根喰天と浮名立、扨又お寺の大黒は、大穴むちの命より、ひよんなる異名を付られて、そこの裏店彼處の新道、柿の暖簾に豆屋と書て、松茸賣なら這入しやんせの、天に天人地に踊子、おいらが仲間に辨財天、妙音てんつるつる〳〵〳〵、てんつる〳〵チッテットン、神祇釋敎戀無常、士農工商おしなべて、己が渡世に油斷せず、稼に追付貧乏なく、磨いて光らぬ玉はなし、心だに誠の道に叶ひなば、祈らず迚も神や守らん〳〵、と神詫あれば人々は、ハッと渇仰なしにける、大黒重ねて神託には、ヤア皆の者、アノ貧乏神といふ奴こそ、騙に來りし不屈者、彼奴が面を洗ふて見よ、畏つたと立懸り、遁んとするを無理無體、流の水を懸るやら、たはしで磨られくま取の、繪の具は落て見合す顏、ヤレ儕はぶつたくりの萬八め、太い奴と蹴つ踏つ、アヽコレ待て下され、有樣は打負て、十兵衞に借た金、毎日促かれ術なさに、彼其以前生麥村で、道念に欺された、コン〳〵〳〵のおつかぶせ、貧乏神は燒直し、破れ帷巾澁團扇、菓子袋の古頭巾、

今度は大黒腹を立、そこらは若い衆頼みます、コレ此萬八めを、しめろやい、ヨイサヨイコレハノ、サヨイヤサア、是から拍子で送りましよ、風の神送つた〱、風の神送つたと、押立てこそ三重に送り行く

第五　道行枕屏夢路の双蝶

轉寢に、戀しき人を見てしより、夢てふ物は頼みそめてき、夢か現か幻か、我も知らねば人は猶、知らぬ旅路をそこ爰と、賤が手業に薪こる、鎌倉山を余所に見て、海道筋も冬空は、人目も草も枯尾花、招くも若や追手かと、遣難持足曳の、山のあなたの横雲は、まだ夜深きに有明の、月を田面の薄氷、移り變れる品容、窶せば鄙の人柄に、新田小太郎義岑公、初花姫と諸共に、浮れ出るぞわりなけれ、踏も習はぬ玉鉾の、道も覺えぬ樂みは、じつと手と手をしめ合て、人目堤の小蔭では、だき月影を闇にして、枕二ッを星明り、落葉の布團睦言の、よぎなき事ぞ恨めしき、アレ〱〱、空飛鳥も生し立、木にも妹脊の有ばにぞ、比翼連理の浮名立、たつきも知ぬ山の奥、虎伏す野邊の果迄も、見捨じのかじ退かじ離れまじ、遅れはせじと十塚はと、姫は漸走り付、姿も吉田はしたなう、所體亂るゝ上拍尾、見るに付ても後先を、思ひ續けて義岑公、世になき我を左程迄、慕ふて下さる志、忘れはせじ去ながら、執心深き畠山、いかなる

ぎ、見兼て支へる大黑天、引張るはづみ面頭巾、脫たる顏を見付る宗兵衞、ヤヽヽこな樣は道念樣といふに皆々吃驚し、手持無沙汰に眺めゐる、道念にこ〳〵と、ヤレ〳〵久し振で宗兵衞樣にお目に掛りました、いかいお世話になりまして、お庇陰で名を揚げました、私も先年生麥村にゐた時は、いかいお世話になりまして、お庇陰で名を揚げました、今は大森へ引越て、相應な庵を持、新田の社建立と所々市々勸化して、お宮も日に增し御繁昌、此間萬八が博奕に負けて惡仕事、貧乏神に化て、爰な內へ來るといふ趣向をちらと聞たゆゑ、お馴染の宗兵衞樣を騙せては濟まいと、貧乏神を取ひしぎ、大黑の思ひ付、裏口からそつと這入り、アノ月會の床の內に隱れて居て、思ひ入をやらかしましたが、首尾やういて仕合しましたと、いふに皆々肝を潰し、コレハ出來たと悅ぶ所へ、ずつと這入萬八が、ヤア何も角も皆聞た、ヤイづく入め、一度ならず又俺を騙したな、目に物見せんと、掴み掛るを惣々が、寄て集つて引縛り、有合ふ菰でぐる〳〵卷、聲立させなと口へ捻藁、宗兵衞俄の思ひ付、イヤコリヤ此奴を斯せよと、手足もぐる〳〵菰じとみ、斯見た所が藁人形、元の頭巾を引被せ、庭に有合ふ半櫃の、棒に𢌞とくヽし付、幸町內祈禱の爲、風の神を送つてやろ、サア道念樣御太儀ながら、音頭〳〵、ヲツト心得芥拂ひ、追取て先に立、昔の通りやつてくりよ、掴み面はる此萬八が、ヨク〳〵慾の深い事は麴町の井戶よ、ヨイ〳〵ヨイ〳〵〳〵、アリヤコリヤリヤ、練馬大根で太いの根と來た萬八が、爪の長さが三十三間三尺三寸、三分三厘三毛三弗、

第六　大森村庵室の段

むつくと起て義岑公、やらぬ遁さぬ返せ〳〵と呼はりながら、刀追取駈出す、コリヤ何事と主の道念、走り出抱き留、コレ氣が違ふたか義岑樣と、いふに漸々心付、傍見廻し、扨は夢にてありけるか、歌の趣向に案じ入、机に懸り目睡うち、初花姫と連立て鎌倉を忍び出、此傍へと呻吟うち、追手に出合戰ひしと、夢に見た故今の爲體、必ず案じてたもるなと、聞て落付道念が、是はしたり、日頃戀しい〳〵と、思ひ暮してござるゆゑ、そんな夢御覽じます、佐々木のお家も常春のもちやくちや、又お前樣も此大森にお忍びなされ、初花姫の緣に便り、佐々木の一族を宮方へ招き寄る、軍法やら色事やら、私は生麥村から此所へ引越、方々を勸化して、矢口の社を建たれば、浮世に望のない坊主、世に捨られの氣散じ、今日は取分今年の初雪、アレ庭の景色御覽じませ、散殘る蔦紅葉に、雪の積た所は、ア何もいへぬじやござりませぬか、シ々が雪めも腹のよい時見ては面白いやうな者の、寒いには困りますてや、ドリヤ火鉢上ましよと、勝手へ立てこて〳〵と、茶釜の下の焚落し、火鉢の灰は淺けれど、饗す心深草燒、イヤモゥお腹がお空なされうが、ア何もお菜があるまいはい、ほんに夫よ、此中名主の息子殿に、手本を書ておやりなされたで、親父がはた〳〵嬉しがつて、お客樣へ上て下されと、今朝程大き

仇をか信濃坂、燒餅坂は善惡の、境木村と隔たらば、武藏相摸の苦に苦をかける、親への不孝を顧ば、是より鎌倉へ立歸り、兼て欲がる畠山へ、嫁入するが夫々に、身の程ケ谷を知る道理、思案しかへて下されと、いふも切なき詞のはし、聞より姫は急のぼし、今更それは胴慾な、國を隔てゝ見ず知らぬ、お前とつひした轉寢は、味な緣も何の其、科を此身に追分と、起請誓紙は互の胸に、書て置たる神奈川や、子安と聞ばやゝ產んで、千代萬代の壽を、家は松竹鶴見村、夫婦橋ぞとの給ひし、詞も嘘の川崎か、可惜瘢は玉川の、流れの末は六鄉の、わたしが胸の苦しさを、思ひやつてと計にて、縋り付てぞ泣ゐたる、義岑公は漸と、賺し宥めて行先に、里の子供の聲々に、恨み喞つもナ、實からしんぞ、氣に當ろとは夢々知らなんだ、起請誓紙は疑ひ晴し、ヲヽよい事の〳〵、可愛〳〵と欺して置て、憎やくだかけまだ宵ながら、思ひ立身もナ、兼てはしんぞ、旅のつらさは夢々知らなんだ、二人行身に後先忘れ、ヲヽよい事の〳〵、晴る〳〵と欺して置て、憎や村雨まだ宵ながら、唄ふ一節身の上に、思ひ當りの遠慮なく、手に手を取て行跡より、頭巾眞深に來かゝる兩人、夫と見るより聲を掛け、ヤア〳〵義岑、我々は畠山より初花姫が討手の者、渡せ〳〵と呼はつたり、驚きながら義岑公、愚人に聞かす詞はなしと、拔合して丁々はつし、コリヤ堪らぬと遁出す、兩人やらじと追ふも、轉寢の枕さわがし夢でゝろ

れる雪の景色、せめて一首の口號、と墨磨り流し筆を染、机に肘を打持せ、案じ入たる好の道、更に餘念はなかりけり、雪降は、冬籠りせる草も木も、春に知れぬ、花ぞ咲、姿の花や白妙の、六ッの花片ちら〳〵と、吹返したる紅裏へ、早咲椿火を燈す、燈籠鬢の艶に、戀の重荷や傘の、行つ戻りつ庵の外、てんぽの皮と聲張上け、ノウ〳〵夫なるお方に申べき事の候、義岑はつと振り仰向、見れば襟筋しろ〴〵と、雪にも恥ぬ顔容、在所に稀なぽつとり者、狐狸の化たるか、又雪女とやらいふものか、何にもせよ能き慰と落付顔、イカニ女中、申べき事の候とは、そも何事を仰らるゝにて候ぞ、女はハツト袖覆ふ、顔は上氣のはぢ紅葉、だく付胸を押鎮め、徐々側へ歩みより、じつと見交す二瞼の、眼元の愛の矢先には、いかな男も魂を、射て落さるゝ風情なり、色好みの義岑公、首筋元からひいやりと、脊筋へ應ゆる戀風を、じつと鎮てさあらぬ體、女は猶も手をもぢ〳〵、ほんに私とした事か、お近付でもない貴方の内へ、押付がましうやられもない、大膽者と嘸お叱り、堪忍なされて下さりませ、と後は詞も口の内、ハアテ其言譯には及びませぬ、シテ御用の其品は、アイお前さんに割ない御無心がござんする、お聞なされて下さんしよか、ハテ身に應じた事ならば、アゝ嬉しや〳〵、モゝ夫聞てモ頓と落付ましたわ、お頼申其譯は、お前樣はアノ、お歌がお上手と聞まし、詠でお貰ひ申たさ、押付てマア參じました、ハテノウ、夫は何より安い御用にて候、シテお頼の歌の題は、アイ私のお頼申其歌

な蓋茶椀に、煮豆を入ておこしました、中には生姜椎茸銀杏乾瓢氷蒟蒻ハアまだ何やらモ一色、ム丶夫よ錦麩、お客樣に笑はれまいと、へ丶大分張込でよこしました、ドリヤ茶を入て上なしよと、立を制へて、アイヤお坊、まだ給たうはござらぬ、ハテそんなら空てから上りませ、料理のないお飯は腹を減して上るが馳走、扨先程の夢話しに付、かねてお話し申た通り、初花姫の乳母狹衣は、元生麥村の者で、宿下りの時折々逢て、私も知る人村に子供もある事なり、お前は爰にござるなり、是非尋ねて見えませう、先刻の夢が心元ない、村外れ迄往て見ませう、ハテ扨いらざる此雪降に、イエ〳〵そんな事は搆ひませぬ、夫ばかりでもなく、隣村の五郎作に、念佛講の懸錢、預て置たも取て來たし、次手に廻つて參りませうと、ばつてう笠を打被り、年は寄ても岩疊作り、勇む心の駒下駄に、足元輕く出て行、後見送つて義岑公、四方の景色を打詠め、誠や謝惠連が雪の賦に、袨袖冶さに艶、玉顏婬を掩りと、書しも雪の褒詞、夫に付ても初花姫、我故再び舘へは、歸られぬ首尾と聞つるが、いかなる所に呻吟て、我を慕ん不便やと、暫し涙にくれけるが、君や來し我や行けん思はへず、夢か現か寢てか覺てかとは、ハ丶昔男の戀知りに、女の元よりおこせし歌、夫は逢しを夢かと詠、我は久敷よすがさへ、聞ぬ思ひを夢に見る、薄き緣の果敢なさと、忘れ兼たる戀衣、落る泪も雪しぶき、袖の氷柱となりぬらん、ハア迷ふたり〳〵、夏の梢と冬枯は、天地自然の世の盛衰、悔まじ歎まじ、木々に積

を引合て入跡を、立切る襖は岩戸の扉、常闇の世となりぬらん、裏の細道横筋違、ぶつたくりの万八が、さまたの十兵衛諸共に、立留まつて窃々聲、コリヤ〳〵万八、日外から促げる金、此庵室で渡さうと、堅々手前は請合て、引ずり廻るが必定渡すか、我いふ事の當にならない、此中も新宿で、手に取やうな魂膽事、どうかいけさうに思ふた故、俺もふはと乘が來て、道具衣裳の仕入に、小一貫又倒れた、正直の盗人に負ひだ、今日の金も呑込ぬぞい、イヤ是十兵衛、大事の門出先折て貰ふまい、握拳で大地を打ば外るゝ共、今日の金に違いはないが、貴樣が居ては邪魔になる、一寸其邊へ、ヲヽ任せと早合點、藪の小陰に立忍ぶ、跡に殘つて万八が、一人呑込したり顔、領き〳〵澤邊の鷺の、小鮎を狙ふ指足拔足、窺ひ寄て一間へ踏込、伏たる二人が襟がみ掴み、傍に響くどつてう聲、密夫見付た許さぬと、呼ばり〳〵両手に二人を引摺出、俺はマア何處の馬の骨やら牛の骨やら、生な緩けたしやつ面で、忝なくもぶつたくりの万八が女房を背中に引摺込、ようウムスツをやりをつたナ、代官所へ引摺て、直に笠の臺座が挿替、又首代は天下の定法、鳥渡障りが三百匁、帶紐解て緩りと、隣知らずの氣儘の兩搗、少なうても三三の九百匁、金に直して十五兩、サア出すか、但は代官所へ引立うか、どうだ〳〵と胸筋引張、いかみかゝりしぶつたくり、理の當然に義岑公、近邊の聞え面目なさ、どうなる事か白糸の、染て悔しき胸の内、女は元よりさし俯き、兎角の應もなかりけり、万八は猶聲高、ヤイべ

の題は、歌の題は、サアアノマア、思ふて未だ逢ざる戀、ムヽ扨是は餘程六ケ敷お望にて候、シテ其戀歌を詠で貰ふ其心は、さればいな、私達も岩木ならねば、好たと思ふ殿御が有て、此方に惚ても彼方が好ねば、云出しても恥晒し、殿御の惚る戀の歌、お詠なされて下さんせ、ムヽこりや六ケ敷お好み、去ながら其美しひ御器量に、未熟なる我等が歌には、心餘りて詞足ず、御免〳〵とありければ、ムヽそんなら外に先達て、いひ交したお方があるかへ、イヤあるでもなしないでもなし、元來拙者嫌ひでは猶なけれど、我等も度々懲た物、浮名が立ては互に惡い、我等は急の用事あり、又重ねてと起立る、女は着と引留め、義岑樣いかに賤しい私じや迚、さうはなされぬもの、ふつと此家へお出の時、散とお姿見初しより、可愛らしい殿御じやと、思ひ詰ても人目の關、今日幸と此雪で、通りの少い透間を見て、來やうと思へど恥しく、酒を過して漸々、思ひ切て來た物を、外さうとはお情ない、餘り難面胴慾な、田舎育ちの賤の女が、及ばぬ殿御に惚るとは、繻子の小袖に木綿裏、そぐはぬ緣もせう事がないと思ふて下さんせ、難面心持ながら、可愛らしい殿振に、生れて來ねがよいはいな、思ひ思ふた効あつて、今日といふ今日邂逅に、盲の龜の優曇花の、放れる事は私やいや〳〵、いつそ殺して下さんせと、縋り付たる戀の淵、深き思ひに義岑公、氣は空蟬の脱にて、互ひにひしと抱き付、思ひ餘りて今更に、何と岩間の苔清水、下行水の中々に、しめ合しめ寄口と口、奥の一間へいざ〳〵と、手

万八、首尾はどうだ、音せぬは物になつたか早う渡せ。サ請取うといはれる術なさ、折がわるい今些と待てと、いふにいはれぬ身振のをかしさ、おりくは所體改ためて、万八が側に寄、コレ兄樣、常々私が異見でも、聞入ぬ惡者附合、まや事おこはの惡仕事、他人は固り現在の、妹でさへ愛想が盡る、鎌倉にござる母樣から、文の來る度お前の事、箸折かゞみの小供の身の上、苦にさしやんすも尤、何卒性根を改めて、惡者附合ふつゝり止、何事なりと商賣を、思ひ付て下さんせ、頼ますると親身の意見、万八は佛頂面、へゝ何の事だい、詮議坊主が呆れるはい、口利さうな意見だて、置てくれい、こりや傍や他人と頷き合、此兄を突出し物にして、酷たらしうおこはに懸、未だ其上に、俺が身持の棚卸し迄しあがつて、よう酷い目に合せたな、覺えておれと怒の大聲、聞える外から十兵衛が、堪へ兼てずつと出、どうだ萬八鹽梅は、イヤ鹽梅やら三盃やら、どうといふたら又失策た、エゝ口惜や是非もなや、智謀計略兼ね備へし、此萬八が軍法なれ共、妹めが裏返り、敵に勢が加はつた故、謀の裏をかゝれ、約束した五兩の金、棒にふるなの歸名でも、モウ物にはなりそもない、晴の博奕にくら賽を、叩き破れた同然だと、しよげになつたる計なり、エゝ忌々しい、所詮われが仕事じや往くまい、サア妹を請取はい、サア渡せ、コレ見ろ、われが印形の證文、一札の事、一金五兩借用申所實正なり、もし遲滯に及候はゞ、質物として妹おりくを相渡すべきものなりと、印形があるからは、しやつとでもいひ

ら棒め、俺が方から割を付て、お慈悲なお捌き、云聞しても有共無共ねかさぬからは、代官所へ連て行、サアうせおがれと、肩口摑み、引立行んとする所を、女は中に立隔たり、手をもぎ放して、コレ兄樣えい、加減ならおかさんせと、いはれて吃驚、コリヤ〳〵女房共、其筈ではなかつたぞ、コリヤ麁相いふな、われは女房おれは亭主、ナコリヤ万八が女房だぞ〳〵、屹度女房箱入のお内儀樣ぞと、目まぜと仕方で呑込す、ホヽヽ何じややら一人合點、日頃からお前の放埓、女郎狂や博奕の元手、合點もさせず無理無體、私を證文に書入て、十兵衞が方で借た金、催促せられ仕方なさに、樣々の惡計、頃者四ツ谷の新宿で、しくぢつたのも聞てゐる、そんな目に逢ても懲ず、忍んでござる此お方、金のありそな風體、斯々して強請うと、おこはとやら筒持とやら、恐ろしい工みごと、いやといへば十兵衞が、證文に入てある、私して女郎屋へ賣うといふ、夫がいやさに一寸遁れ、又此方にお下地から、好たお人と思ふを幸、耻かしい事いふて、手が入ば足が入と、何やら是やら彼方も得心、日頃の望私や嬉しい、何のマア滅相な、大愛可愛い彼のお方を、強請せてよい物か、申義岑樣、アリヤ夫ではござんせぬ、ぶつたくりの万八といふちや、モヽヽそこらあたりの困り者、兄樣なれど惡者なりや他人も同然、お搆なされて下さりますな、といふに落付義岑公、万八は三五の十八、結句呆れてものも得いはず、眞面目になつたる此方には、樣子いかゞと十兵衞が、藪の間から顏差出し、コリヤ〳〵

ア其方は姫のおりくじやないか、ヲヽほんに母樣、テモ扨も〳〵マア〳〵お久しうござんす、ヲヽ其方も息災で嬉しい、ほんに何からいはふやら、アノ兄めも無事なかの、アイお前もおまめで嬉しうござんす、したが、今時分何いふ譯で、ヲヽ樣子話せば長い事、其話しは緩りつと、シテ又そなたは何して爰へと、問掛られて當座の間に合、私は爰な道念殿に、仕立物頼れて、ムヽそんなら知て居やらう、新田小太郎義岑樣といふ御方が、お出なされてござらうがのと、いはれて娘は蹶持足、アノ母樣のそんな、事誰がいふて、ヲイノ、今道で道念殿に逢て、いつぞやから爰にござる樣子、篤〳〵と聞て來た、ムヽスリヤ彼方とお近付かへ、ヲヽ近付の段かいの、夫には段々譯あること、ヤ何かは差置て、サア〳〵申御姫樣、是へお入遊せと、上座に傅き參らせて、コリヤ娘、あなたが佐々木の御姫樣、此母がお乳を上た、初花姫樣じや、ソレお目見申しや、イヤ申お姫樣、是が兼々申上ました、娘のりくでござりますと、いふに娘は手を支へ、コレハ〳〵思ひも寄ぬ輕々しいお出、段々母が御厚恩の、お禮は詞に盡ませぬ、何いふ譯で此が姿と、不審立れば姫君は、ヲヽ乳母の娘おりく、兼て樣子は聞ました、頼み少き自ら、能に頼むとばかりにて、打萎てれぞおはします、ヲヽ勿體ない、私が娘に何御遠慮、コリヤ娘、義岑樣はお留守かの、イエ〳〵、今奥でお轉寢、ムヽそんならそなた奥へ往て、お姫樣が遥々と、尋ねてお出遊ばしたと、申てたもといふ顔を、しげ〳〵と打守り、ムヽスリヤ、あ

人はない、質物のおくりは俺が方へ流れ込、サア〳〵來やれと手を取れば、突飛してコレ十兵衛殿、置て下され、私や此お方といふ乾度した主のある身、アイ慮外ながら、奥様でござんす、慥な夫のある身なれば、兄様の儘にもなりませぬ、何じややら、えいかと思ふて厚顔しい、置てくりやれと、云れて二人は又ぐんにやり、コリヤハア酒買て尻切る、と、飛だ事になつた、此仕舞は何付う、ハテモウ是からは破れかぶれ、二人ながら引ずつて、代官所で譯立る、夫がよかろ、サアうせあがれと、取付二人を義岑公、右と左へずでんどう、拔手も見せず胸打に、りう〳〵はつしと打のめされ、アイタ〳〵〳〵、御免〳〵と脛腰さすり、後をも見ずして逃歸る、おりくはほつと溜息つき、最前からひよんな事でお心遣ひ、ほんに不思議な御縁にて、モウ斯なつた上からは、お見捨なされて下さんすな、ハテ袖振合も他生の縁、何の見捨てよい物か、シタガ、今のもやくれで氣が揉めた、幸庵主が嗜み酒、奥へ往て一ッ呑う、サア〳〵此方へと伴ひて、一間の内へ入給ふ、戀路には憂こと多しうき事は、戀路の中の道具にて、月に村雲世の人の、心の嵐難面も、吹散されて初花姫、乳母狭衣が介抱にて、習はぬ道の旅疲れ、漸〳〵と迪り付、申お姫様、是が今道で逢ました、道念の庵室でござります、ヲヽ嬉しや、早う義岑様に逢してたも、アイお待遊ばしませや、もし誰ぞ遠慮な人が來てゐまい物でもない、お前は暫しお忍びと、小陰に忍ばせ門の口、賴ませう〳〵といふ聲の、出合頭におりくが顔、ヤ

居たる、乳母は娘を取て捻ぢ伏、拳振上げ丁々々、怒りの泪聲振ひ、エヽ儕は〳〵、コリヤヤイ、彼方を何方と思ふ、此母が御主人は儕が爲にもお主でないか、コリヤ我が父御はな、十八年以前に死しやつた、兄は七ツ、儕は二ツ、養育仕兼て居た所、不思議な御縁で、御屋敷へ乳母奉公、お宛行を續けて、ソレ儕も兄めも人となした、スリヤお屋敷の御恩で育つた、一筋ならぬ大恩、兄めといひ、儕迄が氣儘者、コリヤ、よう物を合點せい、母もそちらが父御を、男に持て來た身なれば、殿御の大事大切な、離惜い譯も知てはゐれど、お主には替られぬ、愛の道理を聞分て、何卒思ひ切てくれ、ヨよい子じや、コリヤ親が手を合す、思ひ切れ、切てくれと、嘲しつ賺しつ樣々に、詞を盡し宥むれば、おりくは噎上げ〳〵て、母樣勘忍して下さんせ。外の事なら何成共、お詞は背くまい、是ばかりは何も〳〵、思ひ切れぬ得きらぬ、せめて一月半月共、添た上ならどう有うか、日外ちらと見初てより、戀焦れたる義岑樣、漸不思議な御縁にて、今日といふ今日新枕、願ひ叶ふてアヽ嬉しや、内へ歸れば兄樣が、無理の有條いおられる、幸外に人はなし、道念樣が歸つてなら、樣子打明相談し、此内に隱れてゐて、義岑樣の朝夕の、御膳拵へお小袖の、洗ひすゝぎもして上うと、私や先刻にから女房の、心になつて居るものを、惡い時分にお姫樣、あた胴慾な母樣、身は八裂にさかれても、離れる事は私しやいや〳〵、嫌じや嫌じやと取亂し、物狂しき風情なり、母も不便と思へ共、態と聲を勵して、ムヽ

なたと義岑様は、ヲイヤイ、義岑様の奥様じやはいやい、エヽ、ヲヽ合點が行まい、當春からのもやくや、ャ其方が聞て入らぬ事、苦にさせまいと思ふて、態と便りもせなんだが、コリヤお姫様はな、義岑様ゆゑ、親御様の御勘當お請遊ばし、此母と只二人、知邊の方にお忍び、頻にお慕ひ遊ばすゆゑ、義岑様の御在所、此村と聞届け、窃にお供申たはいのと、話す内より娘はハツト、胸へ差込嫉妬の炎、申母様、お前もマ滅相な、結構な雪が降て、面白い最中に、モ無遠慮千萬な、お姫様のお供して來るといふ様な、途方もない事があることでござんすか、義岑様に逢せます事はなりませぬ、疾々去で下さりませと、つゝけりいふに姫君も、扨はと悟り角ぐむ聲、ムヽ先刻から詞の端々形素振、合點がいかぬと思ふたれど、乳母の娘の其方なればゞ、よもやと了簡付て居たが、今の詞でさらりと知れた、扨はそなたは義岑様を寢取しやつたの、アイ、私しや今日約束して、義岑様のアイ、奥様でござりますと、いふを押へる母親が、コリヤ〳〵慮外者、默つて居よと引据ても、イエ〳〵、構うて下さんすな、兄様とやつゝ返しつゝ、命に懸た大事の殿御、何ぼ親のかうけでも、是ばかりは聞ませぬ、サアお姫様、一時も此内に、置ます事は成ませぬ、サヽヽ早う往で下さんせ、イヤ推參な、自らは先約、何のそなたに負うぞ、ヲヽお姫様でも是ばかりは、見事そなたが、イヤお前がと、角めだつたる姫薊、一間の内には義岑公、初めにひよつと出そゝくれ、今更出るに出られもせず、少さうなつて聞

體、叱り付て追出せしが、彼が身になつては、思ひ思ふた殿御に別れ、此母には勘當うけ、嘸悲しかろ口惜かろ、アヽ短氣な事なをしてくれねばよいが、道念殿の歸つてなら、ちよと一走り行て貰ひたい、是はマア何うして戻りが遲いぞと、表の方を打詠め〳〵、泪にくるゝ折からに、すた〳〵歸る主の道念、おりくが死骸戸板に乘せ、村の者共附添ふて、コレ〳〵お乳母殿狹衣殿、今俺が戻りがけ、此方の娘のおりくが、村外れの土手の松に、首括つて居た故、村の衆を賴んで、死骸を持て戻りましたと、聞より周章駈寄る狹衣、義岑公も姫君も、斯と聞より走り出、跡や枕に取縋り、前後も分ず泣居たる、村の者共笑止がり、アイ坊樣、私等はモウ歸ります、アヽいかいお力落しやと、年も氣象も色々の泪こぼして立歸へる、乳母は正體泣はらす、目を押拭ひ〳〵、コリヤ〳〵〳〵おりくよ、扨は最前母が意見、腹立て死だか、コリヤ譬鳥類畜類でも、子を思はぬ者があらうか、まして國所を隔てゝ、久し振で逢た娘、可愛うなうて何とせう、お主へ義理を思ふ故、酷ういふたは堪へてくれ、可愛の最期と抱き付、人目も耻ず泣入は、姫は死骸を押動し、コレ〳〵おりく、最前互ひの腹立紛れ、はしたなういふたのが、今更悔しい耻かしい、嘸ら自が憎からう、堪忍して下されと、歎き沈めば義岑公、眠るが如き死顏に、其睦言の笑顏、今目の先にちらつきて、口にはいはで心には、百千無量の物思ひ、ことはりせめて哀なり、道念泪の目を摺り赤め、ハア花の盛を散せて退た、コレ〳〵死骸

スリヤ何あつても義岑様を、思ひ切事ならぬじやな、アイ夫がお氣に入ずば手に掛け殺して下さりませ、サア〱〱〱、殺さしやんせ〱〱、いつそ殺して下さんせいのう、ヲヽ望なら殺してやらう、と懷劍拔て突掛る、姫君は押隔て、コレ乳母、麁相しやんなと、押留られて母親は、わつとばかりに聲を上げ、暫し詞もなかりしが、エヽコリヤ、上々樣のお心は又格別、戀の敵の儕でさへ、命を庇ふて下さるに、恩も情も知ぬ畜生、勘當じや出て失う、エヽ夫は、ヲヽ俺も年は寄、兄めは有てもない同然、頼に思ふ儕めを、勘當するもお主へ義理、義岑樣の事思ひ切りや、何時でも赦してやる、サア一時も爰には置ぬ、出て行なれ、アイ、サア行やい、アイ、エヽ行をらぬかと、門先へ無理に突出す剛意見、おりくはしほ〱立上り、夫に引るゝ後髮、泪ながらに出て行、後の哀と知れたり、サアお姫樣、奥へお入遊ばしませ、夫でも餘まり、イエ〱何のお構ひ遊ばしますなと、心殘れど姫君を、伴ひ一間へ入にけり、仕濟したりと万八十兵衞、小陰より踊出、コレ〱十兵衞、今の女がお尋の、佐々木家の姫君初花姫、代官所へ注進すれば、褒美はしたゝか急げ〱、ヲヽ万八は爰に居て、遁さぬ樣にがんばれ〱、合點〱と領合、出て行十兵衞万八は、又も小陰に忍び居る、既に其日も入相の、遠寺の鐘のかう〱と、野風に雪を吹下し、閃く星の空寒さ、透間の風は防げ共、防ぎ兼たる恩愛の、遉に乳母は目も合ず、一間を出るも子故の闇、お主大事と一筋に、可愛や娘を無理無

人音、何事やらんと人々は、死骸を奥へ舁込んで、二方忍ばせ待所へ、多賀將監が家來洲股丹平、家來引連どつと込入、ヤア〳〵此内に佐々木家の姫君初花姫、忍び居るよし訴人あつて慥・に聞、此姫君は兼てより、主人將監計ひにて、管領畠山へ遣す筈の所に、義岑とチエ〳〵繰合、欠落して行衛知れず、畠山へ渡さねば主人將監顏が立ぬ、去に依て方々搜し、聞付たれば百年め、搦め取て渡すか、異義に及ば丶首討て立歸る、何と〳〵と罵たり、叶はぬ所と狹衣道念、ハヽア御存の上は隱すに及ばず、成程首討てお渡し申ませう、と請合内に裏口より、ヤア〳〵御撿使、御油斷あるなと、聲を掛てずつと出、ハイ私は万八と申て先程御注進に遣した、十兵衛が仲間の者でござります、此母や坊主めが、首討うと請合たは、私が妹めが首縊つて死ました、其死首を渡さうといふ、謀でござりまするど、いはせも立ず狹衣が、エヽ儕は〳〵憎い奴と、掴み懸るをはつしと蹴倒し、是はと立寄道念を、同じく蹴倒し足下に踏へ、懐より早繩取出し、二人一所に椽柱へ、ぐる〳〵卷に緊付られ、エヽ親を縛る惡人めと、怒りの聲に、エヽ喧い婆々塞げと、手拭にて猿轡、撿使の前に立開り、サア是で邪魔する氣遣はござりませぬ、扨お前方は、姫の首討て行うと仰るは、惡い了簡じやぞへ、畠山へ嫁にやるには腰より下が猶大切、其上首で請取と、得て贋首を掴むもの、何の高が女郎一匹、私に仰付らるれば、引括つて上ませうが、御用意はよござりますか、ホヽういやつ〳〵、ソレ家來共、用意の乘物、

の懐にあつた書置、是讀で見やしやませ、と差出すを姫君は、涙ながらに押開き、何々此世の名殘と書殘しまゐらせ候、今日母樣に久々にてお目に懸り、山々嬉しく存まゐらせ候、ヲヽ道理じや〳〵、二ツの年から殘して置て、お屋敷へ御奉公、漸二年か三年に一度宿下りして逢かばかり、今日久しぶりで逢たのが、嬉しうなうて何とせう、私事不思議なる御縁にて、義岑樣に馴染めまゐらせ候へ共、お姫樣の御事は、夢にも存せぬ先の事ゆゑ、さら〳〵寢取中心にては御座なく候、ヲヽ夫も尤知ぬ筈じやはいの、エヽ何、思ひ思ふた殿御ゆゑ、義理も作法も打忘れ、お姫樣へ慮外の段、宜うお詫願上まゐらせ候、コレ乳母、ソリヤ自らも同じ事、段々母樣の御意見、無理とはさら〳〵存せず候へ共、内へ歸り候へば、兄樣の金のかたに、十兵衛方へ參り女郎に賣れまゐらせ候、エヽまだ兄めが根性が直りをらぬか、テモ扨も情ない、エヽ親兄の爲には、勤するも厭ひ申さず候へ共、一旦義岑樣のお情受け、外の男に肌觸候ては、女の道に背き候ゆゑ、母樣の御歎も厭はず相果まゐらせ候、去ながら義岑樣お姫樣とは二世三世の御中ゆゑ、死行先も賴みなく候へ共、お姫樣の御緣盡候跡にては、私に御添せ下され度、是のみ幾重にも〳〵願上まゐらせ候、夫迄は未來にて千年でも万年でも寡婦暮しにて相待まゐらせ候〳〵、コレ〳〵猶々書に、隨分母樣御機嫌よく、兄樣の御心直り候やうに、御意見賴上まゐらせ候、と讀も終らず一同に、わつとばかりに泣居たる、かゝる折しも表の方に數多の

らしい積轡、がんぢ搦みにした時は、此手がしびれる様にござつた、よく〳〵俺は悪人に生れ付たかと思や、コレ骨身が砕て悲いと、一生にない萬八が、大聲揚げて泣出せば、ヲヽ尤じや道理じやと、乳母は固より義岑公、初花姫も道念も一度にわつと取亂し、身も浮ばかりに見えにけり、何時の間にかは十兵衛が、身代の手め見付た、此通り注進と、驅出すを萬八が、飛かゝつて引捕へ、だんびら引拔芋刺し割り、椽柱に突付られ、悶え苦しむ有様は、平た蜘蛛見る如くなり、コレ〳〵道念殿、母者人、先刻の奴等が歸らぬ内、お二方のお供して、銚子の方まで落た〳〵、おれは跡から夫路金と、投出すは褒美の金、そんなら先へ、ヲヽ跡搆はずとござうませ、ぱつと立たる血煙を、見捨てこそは三輩急ぎ行

第七　大磯揚屋段

戀に通はゞ大磯小磯化粧坂、時酒挙酒朝酒無理酒分れ酒、わい〳〵のワイトサ、罷出たる者は、此大磯の廓に隠れもない牽頭次郎吉、同平治と申者でござる、此度多賀大臣様、扇屋の花扇様と申太夫様を揚詰の今宵の趣向、身振聲色も古めかしけれど、此所で大坂生玉萬歳を相勤まする、サア琴野様、相方を頼みます、アイ〳〵合點でござんする、愛嬌わりける新玉の、年立返る朝より、通ひ〳〵て揚詰とは、誠に目出たう侍ける、申太夫様、長事は御儀屈、是から早う

ハット心得昇据る、其暇に万八は、奥へ踏込ばつた〱、見るもいぶせき初花姫、がんぢ搦の猿轡、小脇に掻込ずつと出、駕籠へ捻込細引で、手早に括り網乗物、丹平殆ど感じ入、扨々氣轉の利た奴、ソレ褒美くれると投出す十兩、ハア丶コリヤ有難いと戴く内、勇みに勇む丹平主従、乗物ぼつ立急ぎ行く、跡打詠め万八が、母者人道念殿、嘸痛からうと猿轡、早縄共に引解けば、乳母は怒の歯を噛緊め、エ丶能も〱お姫様を、敵の手へ渡したなアと、掴みかゝるをア丶是々々、夫には云譯、イヤ何の云譯聞事ないと、又立掛る一間より、ヤア〱狭衣初花姫は是にあり、聊爾なせそと義岑公、姫を誘ひ出給ふ、顔は姫君體はおりく、ヤアと驚く狭衣道念、スリヤ最前渡したは、オイノ、妹のおりくが死骸に、姫君のお小袖を、スリヤわが身は善心になり居つたか、コレ母者人、先刻にから姫君を逃すまいと、椽の下に隠れてゐた故、おりくが様子聞ました、可愛や義岑様へ心中立、十兵衛が手へ行を嫌がり、死だといふ書置、俺が人並な人間なら、死る氣にもなるまい、スリヤ兄が手を下して殺したも同然、おりや先刻にから椽柱に、かおり付て泣てばかり居ました、俺が性根もこんな時直らずば、直る時節はあるまいと、一念發起しましたはいの、こなたの思ひ付た通り、首切て渡しては、贋首の吟味が六ケ敷、猿轡で顔隠し、體ぐるみに渡した故、まんまと一盃喰せました、したが何處でも心中や首縊は、親兄弟からお願申て、死骸貰ふて分相應の問弔ひする物を、私は妹が死骸を、コレ黠た

うはい、サア隱居の水揚とかけて、結城座の芝居と解く、心は、ハテ出來さむなうてつひ出來て這入をむなうてぐつと這入た、こいつは出來た、サ是といふも町中樣御贔屓のお取立、大八車に御祝儀の樽を乘て、小歌節でお出なされた、其小歌は何と、物と酒に亂れて人の女房の尻抓る、何とやいな、よしな、をかし、兎角浮世は色と酒とに銅鑼鐃鈸も、すぺらぽんと打込だ、戲れ遊べえ、コリャヤイ〳〵、騷ぎもえい加減なら置わがれ、誰わらう此淵股丹平が御主人、多賀常監樣と云ちや、些煙たい旦那だ、戀なればこそ花扇に、度々通へど振付て逢ぬゆゑ、立引づくの揚詰居續け、身仕舞に歸つてモウ二時になるが、間夫狂でもしてゐるか、わいらが騷ぎ紛らしても肝心の旦那が浮ねば、附て來た俺が立ない、何奴も此奴も人を茶にするいけ好ない奴等だと、虎の威を借狐寄、稻荷の鳥居越て來た、琴野が氣轉の笑ひ顏、ホヽヽ丹平樣の仰んすも無理ならねど、太夫樣も身仕舞で、手間の取るも尤じやはいな、ノウ治郎吉樣平治樣、成程琴野樣の仰やる通り、如才のない其證據、お出なさる先へ立て、御進物の此臺の物、約束堅き石臺へ、松に櫻の取合は、早う來てぺた付まり、松が花じやといふ心か、いかにも數ある肴の中、腎藥とのお氣付は、千秋萬歲の痴話此玉子を肴にして、一ッ上れと浮拍子、そゝり上てゝ騷がす常監、ハヽヽがや〳〵と姦い、遲うても早うても、揚詰にしたからは手活の花、遲い內合受すれば、間夫がわらうが虫がわらうが、來る事ならぬ屋敷の內、丹平が少い了

相の山、いか樣よからう、汝はさゝら我等は四ツ竹、サア其簓摺れ〳〵、イヤ太夫樣、れこさを何するのじやえ、右に簓左に相口、と斜に構へてごし〳〵、ムゝ込だ〳〵、何にも文言は入ぬかへ、ハテ默つて摺れ、アイ死だやうにして居よかい、エゝ忌々しい、云度ば合間〳〵にいへ、ほんに爾じや、面々の事はむけ〳〵じや、爛りよと儘よてすりさへすりやよござんしよ、ごし〳〵〳〵、此樣にてすつても、えい時にえいといはんせにや拍子がない、アゝコリヤ戯言いはずと相の山始めい〳〵、夕邊朝の鐘の聲、アゝコリヤ〳〵アリヤ〳〵〳〵〳〵、サア〳〵〳〵埒もない物に成た、簓と相口とが引付たはいな、何せうぞいの〳〵〳〵、犬なら水を掛る所じや、エゝぐつと引放せ、無理に引放したら、心中に出やしよまいかな、白痴めが、ハアコリヤ簓と相口じやはいな、エゝ口合所か、力に任せてぐつと拔、拔たら喚が本意ながらう、ヤツトコナノヨイ、諸行無常と響けども、聞て驚く人もなし、ヤレコリヤ〳〵〳〵〳〵、何じや〳〵〳〵目が舞たら氣付をやらうか、アゝ苦しやたへ難や、氣付より茶漬が一盃給たいなり、ハゝゝ、是々太夫樣、大きな事が出來たはいな、俺が事を笑はんすけれど、お前も目は一ツ果敢ないぞへ、又白痴を盡しをる、本じやわいな、是が何處に、エゝ聞えた、中の土手で見えなんだ、ハゝゝ、イヤ太夫樣、又かいやい謎々が有が何と解て見さんせんか、何じや謎があるる解て見やうマアいふて見い、隱居の水揚、ナアニムゝ隱居の水揚〳〵、ムゝコリヤ解ぬ流さ

粋なお前を粋でかしに、いふと思ふておくれなエ、粋でかし〳〵と、此場を散す目と仕形、ヲヽ琴野様のけうこつな、何いふ心でいやじややら私が心を見ぬいてか、知ないがな、何程粋じやといはしやんしても、見せたい心が見せられねば、やつぱり野夫でござんする、コレ彌生ゝ・煙草注や、アイと差出す煙管の烟、匂ひを含む請答、實も常盤の位とて、いふも更ならしこなしなり、琴野は手を打さつても我折、勤氣去て實で逢ふと、云ぬ計りの今の謎〳〵、誤りやしたと相槌を、打ば響の將監が、ム、コリヤ琴野呑込だ、おれが心を疑ふ太夫、身請して連歸る、ソレ丹平、亭主に逢て金渡せ、ハツト心得、丹平は二階をおりる勇み足、後は賑ふ大騷ぎ、數々廻る盃に、めれんの將監居眠が、直に裡に入高鼾、何の様子も白川夜船、亭頭末社が口々に、今おこしたら叱られう、お枕お蒲團我々は、奥二階で呑臨う、サア〳〵彼へと騷立、お客寐かして一間へ外す、してやんしてどうしたな、呑で騷いであんけらこん、けらこんけゝあんけらしくじるな、やつさもつさそつちでせい、ペンペコ〳〵ペン、琴野様かいな、アイナ〳〵、打連てこそ入にけれ、しめて寢る夜の長かれや、つらい勤めも浮世は車、廻る紋日の品もよく、人なき折を幸と、面を隱せし忍びの曲者、伺ひ寄て將監を、眞二ツと切付る、さしつたりと身を交し、又切付る、腕首捕へ見合す顔は、ヤア汝は我組下の守山軍八、何故に切掛し所存ぬかせと突飛せば、少しも蹲まず、コレ將監殿、兼て思ひ立たる大望、佐々木の家國横領せん爲、

喧嘩はずと騒げ〳〵、ソリヤ結構な旦那のお捌き、祝ふてしめろ、ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵、祝ふて三度シヤン〳〵ノシヤン、酒になつたと騒ぐ内、琴野が引出す三絃の、無理もいふたり云譯したり、ほんに心のやるせがなうて、寢ても丸寢か一重がよいに、二重三重帯解にもしんき、歌の半に牽頭が聲々、アレ〳〵〳〵太夫様が見えるは〳〵、風流と意氣地とはでの三道具、揃ふ姿は梅が香を、柳の枝に取混て、咲や櫻の花扇、戀の要の締括り、虚と實と手の内に、摑揚げの八文字、對の禿に定紋の、提灯目立朧夜や、月宮殿の戸を明て、乙女の姿今爰に暫し留むる揚屋入、夫太夫様の御入と、賑ふ中に丹平が、コレ太夫主、お出の遲いで旦那の不機嫌、斯申せば味噌らしいが、今佐々木の家は立うと伏うと、自由自在の旦那の勢、我等を始一家中、はむさの面々少からず、いかに張が強い達背酷い振やう、何程惚てござつても、餘り面白うはござるまい、些立て貰ひましよと、又起り出す消炭せりふ、ホヽヽ其様に腹立さんすも、本をいへば不勤の、私が惡い誤りませう、アレ丹平様、太夫様が誤りなされたといな、旦那も是で御了簡と、宥むる琴野、ハヽヽヽ默つて居れど此將監、ぞつこん太夫に惚たが高、誤らせても又氣の毒、イヽエイナア、誤る事は誤つて、いやなお客は振付て、逢ぬも勤の又意氣地、とずつけりいはれてさしもの將監、上すきのさう、見て取琴野、ソリヤ太夫様、出來過ます、何でいな、ハテ今のやうに仰有つては、此座が濟ぬ、ナコレ濟ませぬぞへ、客様を立て下さんせ、

るより、ハア將監樣へ申上ます、主人彈正申ますするは、今朝の御狀の趣、委細承知仕ました、お預りの品後刻持參、シイ、ハア猶委しくは御返書に申上ます、ヲヽモウ能々、立歸つて彈正殿へ御返書慥に請取ました、彌後刻相待ますると申してくりやれ、使太儀、露の身も、いつか廓に住馴て、爰程ほんに能ことは、ないと思ふも皆男故、早かう〳〵と迎來寺の、寢よとの鐘は色里の、睦言口舌しめやかに、鎭る物音折よしと、忍び出たる花扇、あたり見廻し臺の側、立寄てほと〳〵〳〵、叩く相圖の石臺より、ぬつと出たる縣の三郎、物をもいはず抱付、泪に誠をあらはせり、ホヽ危所へ忍び込しを、女心の兎や角と氣遣は尤々、思ひ寄ぬお家の災難、流浪せし此三郎、玉の行衞敵の詮議と、心を配りし甲斐あつて、其方の庇陰で今日といふ今日、此石臺に隱れゐて、委細聞たは天の助、弓矢神の御加護、是といふも其方の庇陰、忝ないと手を合せば、アヽ女房に何の禮、若や顯れもしやうかと、最前から幾世の案じ、ムヽ密事は殘らず聞たりしが、證據になるは彈正より、奴が持參せし書狀、奪取る思案はあるまいか、アノそんなら後に奧へ往て、首尾見合せて騙して見ませう、マア夫迄はアノ一間で、まだ話したい事もある、サアござんせと手を取ば、ハテ扨そこ所じやない、爰放しやと、立上るを引留め、エヽ人の思ふやうにもない、いかに男の癖じや迚、餘り氣強い三郎樣、お前と私が其中は、つひ假初の事かいな、末はかうして斯してと、云かはしたる言の葉を、若やおいやと思

江田彈正殿と牒し合せ、箱根の切所で佐々木の重寶雨降の玉を奪ひ取、縣の三郎を出し拔、其夜小田原の本陣へは、此軍八が忍び込、椽の下より大殿秀詮、狙ひ濟してぐすとやつたも、此方が國を押領すれば、此軍八家老になさんと兼ての約束、大望成就今や〳〵と待てゐる其內に、大事を忘れた女郎狂ひ、此廓に居續け、こなたがさうした心では、大望成就せぬのみか、大事が露顯ては此軍八、主殺し竹鋸り、いつそこなたを仕舞て退け、後の難儀を防がんと、忍び入たる今宵の時宜、覺悟召れと叉切付る、刄物をはつしと蹴落し、ハヽヽ燕雀何ぞ鴻鵠の志を知ん、コリヤ此將監が廓通の智謀計略、汝等如きの知事ならず、ムヽ廓通ひが計略とは、ホヽ大殿は殺し、玉は一味の手へ入たれば、此上は衣紋之介、捻り殺すは安けれども、只煙たきは縣の三郎、先達て罪に落し、詰腹切せんと思ひの外、暇を乞請、立出るは胸に一物油斷ならず、何卒して打殺さんと、樣々心を盡せども、影を隱して近寄ず、兼て傾城花扇とは、深く契りしと聞及ぶ故、我此廓へ入込で、彼傾城を揚詰にせば、三郎が來るは必定、見付次第に打殺さんと、夫故に此廓通ひ、疑ひを晴されよ、と聞て軍八横手を打、ハア左樣とは夢にも存ぜず、無禮の段々眞平御免、イヤ〳〵油斷なき志感心致いた、不思議な參會廓酒、打寬いで一献汲ん、イヤ〳〵其思召承はる上は、立歸つて屋敷の手都合、然らば後刻、おさらばと、とつかはとして立歸る、江田彈正が僕雁介、文箱手に持うそ〳〵と、伺ひ來る二階の廊下、夫と見

り付、胸は轉倒身は戰々、取て突退け、是太夫何ぞ吃驚、ハテ扱そもじは風流な琴の稽古、我等は家業の武藝の稽古、と拔身を篤と打眺め、血も付ず手應もせざりしは、ハレ訝しと又ぐつすり、我苦しみを突る丶苦しみ、わつとばかりに打伏て、前後正體泣ゐたる、ハテ扱興かる何故の其歎、ハテ怪しやと刀の切先、守り詰たる氣配目配、拔身を鞘に納めた顏、ム丶互の稽古もモウ是切、何太夫、後に逢ふといひ捨て奥の一間へ歩行、後には夢共辨へず、周章ふためき石臺を、開けど内にはあら不思議と、見廻す後の襖の陰より、立出る縣の三郎、ム丶驚きは尤、邪智深き將監、油斷ならずと兼てより、コレ此通り石臺の後に穴を拵置、我家に傳はりし、忍の術にて一間に隱れ、もし將監が探しに懸らば、只一討と待懸しに、彼奴も去者けどりしにや、一間の詮議仕殘して、奥へ往たゆゑ互の無事、去ながら此所に長居はならず、其方は彼一通を、何卒奪ひ取り拔出よ、浪平を迎におこさう、そんなら早う、ヲヽ合點と、いふも密に出て行、後には獨りとつおひつ、思案にくれてゐたりしが、先の素振を見られし上は、騙しても賺しても、どうで一通は渡すまい、證據なうては三郎樣の出世もならず、ヲヽ夫よ、高が死ると覺悟して命限りと、帶引締、驅行廊下の此方より、コレ待んせと立覆へば、ム丶惡い所へ來野樣留立して、怪我さんすなと、突退行を押留め、イヤ留はせぬ、お前の望の彼一通は、コレ爰にと、渡すを取て見改め、ム丶此一通を何してお前が、サイノ何卒して奪取んと、戯言交

ふてか、たとへ心に染ず共、粋なお前の事なれば、苦界する身を立る迚、義理一遍の附合は、結句心の揉る種、しんきな上にいつぞやから、アノ將監が揚詰に、二人が中を隔られ、しみじみ腹も立田山、夜は曉の夢ならで、晴て逢れぬ身の憂さ、神や佛の惠にて、稀に逢瀬の今宵の首尾、寢た逆罰も當まい、夫につれない男氣は、餘り酷いと縋り付、離れ難なき折柄に、太夫〳〵と將監が、聲に吃驚石臺へ、窃と忍ばせさあらぬ體、ヤ何是太夫、ヲヽ將監樣まだおよらずかへ、およらずとは胴慾な、是迄樣々口說共、帶を解ぬのみならず、我等を打やり爰へ來て、何してお出なされるぞ、アイ彼私は、ヲヽほんに夫々、此間習うた琴歌、忘れぬ樣に稽古して見やふと思ふて、ムヽいか樣夫は嘸面白からう、些爪音を承はらうかいと、いはれて是非なく側にある、琴引寄てかき鳴す、いつしかに、我寢覺をも誘ひ來て、妻乞鹿の聲上枯て、秋に逢てふ淺茅原、淺い心と思ふは嘘か、枕に問しやんせ、ムヽ歌の唱歌は閨の露、淺い心と思ふは嘘か、枕に問しやんせとは、スリヤまだ疑ひは晴ぬじや迄、ホヽヽ惚た顏するお前の心、身請といふも、イヤ嘘ではない、イヽエ嘘じや、イヤほんじや、ほんに應も空吹風よ、風に亂れし玉櫛笥、將監は石臺に眼を付て立寄ば、思はずしらず立上る、ハテ扨何をうろたゆる、シテ今の歌の跡、サア〳〵と促かれて、はらげ髮して逢夜もありし、うつり懷し床しや袖に、袖に隙なき閨の露、透を窺ふ將監は、拔手も見せず石臺へ、ぐつと突込刀の光、ノウ悲しやと縋

そと靜りて、稍も暗く人月の、道のあいろも見え分ず、心覺は花水の、橋を目當に花扇、廓を漸遠近の、往來を伺ふ向ふより、息急來る提灯に、見付られじと身を忍ぶ、兼ての手筈、三郎が、下知を受たる奴の浪平、歩むも氣配提灯の、火影に散と見付る人影、ヤア其所にござるは太夫樣、ヤアこなたは浪平殿、アヽ嬉しやと計りにて、覺ずほつと溜息は、地獄で佛に逢た嬉しさ、最前旦那のお話で、委く聞た今宵の時宜、シテ彼狀は、サレバイノ、三郎樣に約束せし、密事の一通奪取、思案に盡たる所に、葵子の琴野といふ人は、元がお家の御家來筋、樣子話せば長いこと、樣々と世話になり、狀を貰ふて漸と、爰迄逃て來れ共、今に顚か納らぬと、健氣なやうでも女氣の、心遣ぞやるせなき、浪平ぞく〱勇立、一通開き提灯の、火影に篤り讀終り、ホヽ流石は旦那の思はく樣、エヽ有難いおでかしなされた、斯いふ內も追手が氣遣、お其中さん去ながら、コレ此書面の通りなれば、彈正めが此所へ、玉を持て來るは必定、爰に待受引捕へ、めつきしやつきした上で、玉を請取お跡から、お前は直に旦那の方迄、お先へお出なされませ、平塚の町はづれ、ヲヽ二三度もいたゆゑに、能知て居る主の隱れ家、此方は跡から怪我せぬ樣、イヤ些とも氣遣ごはりませぬ、アレ〱向ふへ來る提灯、慥に彈正、お前はこちらの畔道から、サア〱早うを力草、氣を弓張の提灯の、明を賴みに落てゆく、跡見送て浪平は、ヘエヽ忝ない〱、是さへあれば否應なし、追付旦那の出世の種、エヽ嬉しや悅し

りに惚た風、懷へ手を入て、奪ひ取しは私が寸志。三郎樣歸參あらば、佐々木のお家のよい錘、ム、其譯知たはお前は何人、聞れて琴野は噎返り、暫し應もなかりしが、身の上語るも面目ない、父は佐々木家、譜代の家來、川田甚平と申者、去年の春大殿樣御參勤の御泊り、小田原の本陣にて不慮の御事。お供申せし身のいひ譯、御館へお着の上、腹切て敢なき最期、玉の行衛も殿の横死も、將監が所爲ならんと、推量しても時の勢ひ、外に子もなき父の後目、潰されしも將監が、忠義をそねむ邪非道、父の無念母の歎き、己れやれ喰付てなりと、思へど効なき女わざ、流浪の身を幸に、藝子となつて廓へ入込、將監が惡事の段々、見出す方便の三郎樣へ、御加勢申も古主へ忠義、父が未來へ追善と、思ふも果敢なき身の上を、哀と思ふて下さんせと、聲も得立ぬ忍び泣、樣子を聞て貰ひ泣、互に袂を絞りけり、見咎られては互の難儀、盡せし心も水の泡。お前は今の一通といひ、殊に身請の相談あれば、此廓を拔出て、三郎樣の隱家迄、落す方便はコレ斯と。琴野が氣轉廊下の揚板、人の來ぬ間と心は散亂欄檻より、塀に渡せる歩みの板、見越の松に此抱、打掛て飛んせと、渡して捕ゆる板の端、雲の梯虹の橋、危き悲哀さ身はわな〳〵、漸取付松枝へ、抱引掛け一思ひと、思へど心後れ走せ、夫と見るより洲股丹平、有無をもいはず歩みの板、半渡るを琴野は早業、打かへされてずでん倒、眞逆に即死の丹平、此間に早うおさらばの、聲を力に飛下て、闇はあやなし三重「四方の空、世間もひつ

奴は起てゐて寢言をぬかすか、但し熱に冒されたか、ハヽヽヽと行過る、袂に縋つてサア一應では、御承知もござりますまい、シタが慥に今宵は御懷中にある事を篤と存じて、願ますのでナではります、ヤイ〳〵〳〵いや早此奴氣違さうだ、エヽ聞えた、三郎めも扶持放され、破れ編笠破れ扇、門々に立て御子孫も繁昌、アイ永々の浪人御合力を賴上ますと、稼でもいけないから、合力の壁訴訟か、夫なれば一錢二錢、放り出しくれまいものでもない、何じや、三郎が流浪の果となりし名玉を渡せしとは、ハヽヽ何の事だ、イヤモウ取所もない空氣やつ、潔白な彈正そんな事聞さや耳が穢れる、アヽ不便な野郎めだ、ナア、と又行過るを立塞がり、スリヤ何しても、御承引下されぬじやな、ヲヽくどい〳〵、然らば是をと以前の一通、はつと仰天ヤア夫は、サア是でも御存じないじやな、動きの取れぬ自筆の御狀、じやに依て達てお願、フヽン謀書謀判も世にある習ひ、身に覺えはなけれ共、其手跡を見改め、證據を以て俱々詮議ナ合點か、夜が更ると身は眼病、雁介提灯是へ、ナイ、浪平サア〳〵近うと招き寄、イヤ此明りでは瞞と知らぬ雁介、蠟燭の心を切、サどれ〳〵、どれと見るふりに、火先へずつと差付る、コハたばかられしと取間もなく、野風に連て燃散たり、浪平は地團駄踏み、ヘヱヽしなしたり殘念と、拳を握り齒嚙をなし、土邊にどうど座を組で、暫し詞もなかりけり、彈正はしたり顏、ヘヽヽヽ今ぬかした證據、ドヽどこに、ハア夫は彼方が提灯で、ヤア夫がたりの下司奴め、喰

やと、天にも上る心地して、待間もとけし長繩手、箱提灯の光より、惡にきろ付眼付、のさばり返つて江田彈正、主に劣らぬ奴雁介、いかつがましく立歸り、兎角する内、モウ八ツ過、埒もなう夜が更ました。ハテナア急いで來れど遲はつて、併し將監密事の出會、更たもましだと行過る。待設けたる浪平が思案取々、何でも下から取入んと、小腰を屈め立寄て、申彈正樣、憚ながら縣の三郎が家來、浪平でござります、些お願の筋あつて、最前から是に相待をりました、暫くお控へ下されと、いふを彈正打眺め、ム、三郎が家來浪平な、此彈正に何の用、ハア御願と申は別儀でもござりませぬ、先達て大殿樣御參勤の砌、お家の重寶雨降の玉、紛失せしと箱根よりの早打、御供ながらも主人三郎、本陣より取て返し右の詮議、情なや其夜の御泊、大殿には不慮の御最期。御供司の身分として、其場所に居合さず、剩預りの寶も奪れ申譯立がたく、御暇下され身退き、玉の行衞お主の仇を詮議ながら身の漂泊、と悔む詞を打消て、ヤイ〱去迚は喧しい、我が主人の漂泊、長物語聞には來ぬ、ナア雁介、左樣共〱、扶持放されの彼等が身の上、何のお構、早く揚屋へ御入と、先に立を、成程〱畢竟本意なさの長口上御退屈、お叱は御尤、差當て御願、ふう願は何と早くいへ、サア短う申せば主人三郎、流浪の基となりしお家の名玉、只今爰で奴めに、お渡しなされて下されと、思懸なき詞にぎつくり、胸に當れば空呆け、ホヽ何事かと思つたら夫が願か、玉とやら寶とやら。此方には覺えない、此

ナア夫は格別、まへかどぶたれた其返報、今爰で意趣を晴し、玉は儕に渡さうか、エヽ、ぶちかへされるはいやか、ハア、いやなら渡さぬ、マッタ惡く手向ひろぐと、玉を打破、三郎めが出世の種、立所に丁つて退る、サ返答、サア、サ、サ、サ、サア〳〵どうだと無理無體、無念と思へど此場の手詰、荒立ては寶といひ、主人の流浪、今此時爰ぞと思案押極め、過去し事なれ共、下郎の身として、お歴々の彈正樣へ、手向せしはモッ重々の不調法、御打擲に預りませう、サ手向ひ致さぬ印は是と、投出す脇差、體も共に投出す丈夫、強うていとゞ不便なり、ヲヽよい覺悟、腹いた上で渡してくりやう、サア雁介我から踏、イヤ〳〵初足はお旦那、ホヽウ辭儀なしに實祝と、脊骨をぐつと踏飛す、拙者は爰をと肩先をつさり、蹴たり踏だり右左り、投り情けも二人が打擲、髮も衣類も砂まぶれ、手向ひならぬ忍び泣、主人の爲と堪へる難儀、心ぞ思ひやられたり、モウよい加減と双方が、目配せ鋭き劍の下、さそくの浪平搔潛つてすつくと立、ホヽウさこそ〳〵、儕等二人捻殺すは安けれ共、玉をせしめた其後でと、虫を殺してしないがい、是から手柄の太序の始り、覺悟ひろげと尻引からげ、身繕ひ、ヤア伸過た毛野郎め、疊んで仕舞と狙ひ寄、ヲヽ此方の望は先是とさし込懷、手先の包引出す名玉、渡さじ物と抑へる彈正、支へる雁介ばつた〳〵、急所の當身、倒るゝ拍子名玉は、前なる溝へころ〳〵〳〵、是はと立寄其内に、怪や水氣陰々と立登り、一天忽ちかき曇り、頻に雷電はたゝがみ、降出雨

物に飢しか、さま〴〵の企み事、雁介存分に撲のめせ、ハア御意なく共其積り、最前から色々と、途方もない事ぬかしあがる、コリヤヤイ證據がないとて今になり、ハア〳〵〳〵で濟されうか、仕置の仕樣は眞向と振上る、腕首取てヤア何ひろぐ、コリヤ主從して遣仕事に懸さらしたなア、モウ赦されぬと出掛うなれど、サア何を申も大切な主人が身の上、燒失しても慥な證據、申々彈正樣、願の通り其重寶、お渡しなされ下さるれば、佐々木のお家も長久主人が歸參、又物數ならぬ共奴めが、モ世々代々の悦び、憚ながら下世話に申、蚤の息が天とやら、コレヤ首尾ようお渡し下されなば、事穩便に濟した上、彈正樣の御身分は、浪平めが何處迄も、ハアから申は過言の至り、御免下され、サア申高いも低いも奉公忠義は同じ事、コレサ雁介お身も主人を思ふは互、只幾重にも執成頼む、コレサ〳〵雁介、夫は酷い、申彈正樣、御慈悲に、サ是望に願ひ奉つる、と彼方を頼み此方を拜み、頭を下つ手をすりつ、主人を思ふ眞實の、涙は袖にばら〳〵〳〵、忠義は外にだいなしの、流石に男一匹なり、彈正猶もせゝら笑ひ、アレ雁介見苦う吼るは〳〵、ハアヽ哀な事を見る事かな、コリヤヤイ有樣は彈正、玉を懐中に納めてゐる、渡してくれうか、ハヤア有難い、マアならない、コリヤ浪平當春佐々木の門前で、酷く投たを覺えてをるか、ハツア其儀はほんの時の拍子、思はず知らず、イヤ〳〵いふな〳〵、全體三郎めが出頭だて、夫に連て儕迄、身に過た手轉業、罰が當て主從共、狼狽廻るは其身の錆、

紋之介秀頼卿、家に根繼の礎や、松葉が谷の下屋敷、お庭の樹々も春めきし、花の盛も餘所に見て、新田大明神へ御立願、上段の間に注連引生へ、閉籠りたる御齋、神々敷も殊勝なり、お次の間には婢共、掃除仕舞と寄集り、ナント皆の衆、去年の春お姫樣は、義岑樣との色事で、お行衞が知ぬ故、ア丶ひよんな事じやと、思ふ間もなく大殿樣の御不幸、上々樣の御歎に、御家老の縣三郎行春樣、雨降の玉の紛失、何やかやで御浪人、お屋敷はひそ〲ばかり、漸此頃大殿樣の御一周忌も濟だれど、當殿樣は何した事か、此お下屋敷へ引籠り、どつちへもお出ないは何いふ事でござんしよと、尋に照葉がしや丶り出、さればいの、新田樣へ御立願一七日のお齋、今日が滿ずる御願明故、母御樣や弟御の爲丸樣もお入の筈、モウお出に間もあるまい、皆野良かはいて叱られまいと、話し半ばへ道念坊、とぱかは立出、へ丶女中方又例の色話しか、今日が七日の御願明、頃日中毎日〲イヤお三寸で候の、イヤお備で候のと、おればかり追遣ひ、こなた方はのらかはく、些嗜んだがよござるはい、イエ〲無精ではなけれ共、お齋の注連の内、靈驗新な新田樣、女の身では勿體ない故、夫で態と參りませぬ、イヤ〲夫は惡い了簡、何の神樣が女を嫌なされうぞ、きついお好の其證據、北野清水祇園樣、大坂では高津生玉、神樣の邊には得て女郎屋が澤山な、近い所は音羽、赤木神明稻荷前、一ヶ谷お旅富が岡、尊い神のお山々は、どこでも女郎がある故に、女郎の名をお山と申因縁斯の通りなり、こな樣方の

は車軸の如く、山河も一同に動搖せり、浪平は鴈と見濟し、エヽ有難し〳〵不思議は元より雨降の玉、イデ取上んと捜せ共、雨にあいろも見えばこそ、こなたの二人も起立て、ヤア雁介聞しに勝る玉の奇特、容易彼めに渡さうか、ぬかるな合點と切付る、マカセテおけろと身の捫、又切付る彈正が、柄先沈んで跳返し、捨たる脇差取間も遲しと切あふ刄、二人を相手に眞の闇、目覺かゝりける三重「有樣なり、强氣の浪平蟬ばこそ、聲を知邊に付入て、ばつさり雁介横車、手並に吃驚逃出す彈正、飛かゝつて襟がみ摑み、拔身かた手にぞうどのめらせ上に引敷、ヤイ極惡の人非人、サア玉は目前身が手の物、是からうぬをしたい儘、最前の仕返し、斯して腹をイヤ斯して主人の恨み身の恨、一度に報ふ儕が天罸、思ひ知と土に摺付泥に捻ぢ込、モウ一思ひと胸板を芋刺劍り七轉八倒もがき死、惡の報ひぞ心地よき、早告渡る鐘の聲、夜はほの〴〵と明にけり、浪平勇んでハヽハヽ有難し〳〵と、おぞり上つて立寄ば、不淨を拂ふ名玉の、水氣に又ぁ篠突雨、流るゝ泥水赫々と、光を放つ寄代の寶、手に取上て押戴き、是さへあれば主人の寃、晴行さうに鳴神の、心の勇稲妻より、足を早めて三重「走りゆく

第八　松葉谷下屋敷の段

佐々木近江判官秀詮卿、不慮の横死も密々に、事をはからふ表向、後日の願立月日、嫡子衣

兄慕ふ稚氣に、關の戸も感じ入、ほんに〳〵常々から、御兄弟お中かようて、片時お側をお放れ遊ばさねば、お懷しいはお道理と、申詞に後室は、ほろりと浮む御泪、爲丸とはなさぬ中、腹は假なれど産の子の、衣紋之介に替らぬ不便さ、殊に兄弟睦じく、學問武藝もとも勵み、精出しやるを見るに付、大殿此世にましまさは、嘸や悦び給はんと、忘るゝ隙はないはいのと、又思ひ出す御歎、お側の女中一同に、お道理樣やと計りにて、共に袂を絞りけり、一間の内より道念坊立出て兩手をつき、後室樣爲丸樣へ、殿樣よりのお使、今日はようお入遊ばしました、早速お目に懸りまする筈なれ共、八ツの時計鳴迄は齋の内なれば、後程お目に懸りませう、御機嫌宜しう夕方迄、御遊山遊ばしませうと、私にもお伽仕りまをせとの、御意の趣相述れば、ヲヽ念の入た使の口上、そんなら皆亭座敷で久し振のうさ晴し、ハアいか樣にも御尤、此將監は據なき要用あれば、暫く是にソレ女房共お供申せ、アイ〳〵サア〳〵お出遊ばしませと、案内に心關の戸が、詞に隨ひ久賢御前、皆々引連入給ふ、後見送て將監は、何か工みの一思案時分はよしとお次より、立出る守山軍八、三方に對の瓶子、土器添て差置は、將監は一間に向ひ、先達て後室樣より、新田の社へ御代參、神前へ備へし御酒差上よとの仰に任せ、則ち持參仕ると、申上れば一間より齋姿其儀に、立出給ふ衣紋之介、ホヽ將監太儀〳〵、母樣のお心付、矢口の社へ備へし御酒、頂戴せんと有ければ、將監は三方引寄、手づから三寸を注合せ、ソレ

内宮には、朱の玉垣眞中に、ちよつぽりと高間が原、上の方にはむしやくしやと、鬢附付て結程な、神とゞまりましますゆゑ、是を號て地者とも、又本肉共中なり、我等が天の逆鉾で、海原を掻さがしてやりたけれど、出家の身なれば是非なくも、あつたらわざの持殺し、無念類はなかりけりと、生れ付たる剽輕者、女中は一度に吹出し、本に何時でも氣作な坊樣、後室樣や爲丸樣、お入あつた其上では久しぶりの藝盡し、彼得手物のコン〳〵、狐の物眞似が聞たいはいの、ヲツト吞込そこらに脫は中村の仲藏でも親王でも、お望次第と走り行、程なく表へ先走り、後室樣御入と、知せにハツト惣中、ソリヤこそお入と立騷ぎ、打連表へ出向ふ、花散て、匂は殘る梅が枝の、すんど遉に取なりも、目立ぬ風の折曲や、神に祈の日數さへ、我子待間の久賢御前、爲丸君誘ふて徐々と入給へば、後に隨ふ執權職、多賀の將監輝門、女房閨の戶諸共に、禮儀正しく座に直り、將監は謹んで、今日は後室樣爲丸樣、久々にて此お屋敷へ入せられしに、天氣も宜しく恐悅と、申上れば久賢御前、ヲゝ將監のいやる通り、去年大殿樣に別れ參らせ、あるにあられぬ物思ひ、此屋敷へも打絕しが、衣紋之介が重き祈願、今日が滿ずる七日といひ、庭の櫻も咲たればと、其方の勸め、久し振でよい氣晴し、癪も大分快い、コレ爲丸、氣が付やう、女共に案內させ、庭の花でも詠めておじや、イエ〳〵兄君樣の御齋、久しう御目に懸りませねば、お懷しうござります、お目に懸つて御一所に、お庭へも參じませうと、

器量發明打揃へば、今年は十六、來年の春は早々元服させ、筋目の家より嫁を取り、何はどうしてかうしてと、思ひし事も皆徒事、日頃信ずる新田樣、靈驗あらたな神樣の、お力にさへ叶はぬは、能々因果の寄合と、口說立〳〵、かつぱと臥して泣給ふ、斷せめて哀なり、泪の隙より爲丸君ヤイ將監、先程聞ば兄樣へ、毒を上たは軍八とな、主殺しの大罪人、拷問にかけ白狀させ、同類を顯して刑罰するが國の法、せめて兄樣への申譯、なぜ首討た早まつたと、賢しき詞に關の戶も、ヲヽコリヤよいお氣の付所、つか〳〵と立寄て、夫の膝に膝突付、コレ申將監殿、今爲丸樣の仰る通り、詮議すべきを其儘に、首討たとは合點が行ぬ、狼狽てか血迷ふてかと、問ど騷がず、ムヽコリヤ尤の御不審、夫式の事に氣が付いで、佐々木の家の家老職、一國の政務が成うか、軍八めを拷問し同類を明す時は、此事世上の沙汰になり、佐々木のお家斷絕、事穩便に取計ひ、お國を立る將監が計策、女童の知る事ならず、と詞を工みのいひ廻し、スリヤ敵の同類を、詮議さへ叶はぬかと、又も泪にくれ給ふ、御歎は御尤、去ながら、所詮返らぬ御悔、ソレ女房奧へお供仕れ、此上迚も將監が、萬事惡くは計ふまじ、娘共は殿の尊骸、一間の内へ守奉れ、早く〳〵、ハツト答て愁中、一間へ舁込亡骸の、コレノウ今が見納かと、歎せ給ふ二方を、漸痛る將監夫婦、帳臺深く入にけり、常に替らぬ日影さへ、只何となく物詫て、徐に吹く春風も、無常の風と吹變る、効なき魂を呼子鳥、植込に鳴く鶯の、ホヽ法花經

軍八お酌仕れと詞の內に衣紋之介、土器取上一ツ受、武運長久安全と、三度戴きずつと干し、將監も頂戴せよと、御土器を差給へば、ハアハツト押戴き、請んとすれば軍八が、瓶子くわらりと打落し、コレハと周章立退內、衣紋之介は惣身の熱、次第〳〵に色替り、悶え苦しむ毒酒の驗、刀を杖にたぢ〳〵〳〵、立んとすれど足竦み、舌强張て聲出ず、眼釣上げ虛空を摑み、ぎやつと血を吐倒れ伏す、折柄來懸る女中の驚、ノウ悲や殿樣の御最期と、呼はる聲に屋敷の男女、スハヤ大事と驚き騷ぎ、上を下へと返しける、將監は眼を配り、透を伺ひ軍八が、首をはつしと打落し、血押拭ふて居所へ、こけつ轉つ久賢御前、爲丸關の戶諸共に、周章ふためき樣々に、良藥秘術を盡せ共、早脈も絕え事切て、臟腑とろける稀代の毒藥、コレモウ手足は冷切た、お顏の色も紫に、モウ御療治も叶はぬか、コレ〳〵母じや衣紋之介、兄樣のう〳〵、殿樣申と三人が、死骸にひしと抱付、前後不覺に取亂すは、目も當られぬ次第なり、將監も萎れ顏、軍八めが惡工み、殿を毒害致せし科、首討て候と、己が惡事を押隱す、工の程ぞ恐ろし、後室は漸と、泪の顏を振上て、いかなる過去の報ひぞや、去年の春大殿樣、思ひも寄ぬ御最期浮世に惡き悲しみも、何卒あの子を守育て此家を繼せんと、思ふばかりを力にて、可笑からぬ命を存へ、公の事世間の沙汰、國に仕置の事迄も、いはれぬ女の世話苦勞、夜の目の合ぬも若年な、衣紋之介を世の人に、笑はせまいと一筋に、心を盡せし甲斐あつて、年よりは大人しく、

聞えも如何なり、と一家中評議の上、此將監が預り、當る十日に男子出生、お筆は血の上にてくたばる、其節女房關の戸は、未だ妾宅の圍者、折よく是も男子平産、人知ぬを幸に、お筆が産だ水子を殺し、我子を殿の胤なりと、披露せしは則ち其方、主あしらひに育て置しは、大殿始め衣紋之介、方便を以て仕舞て退け、其方を國の守になさん爲、忠義立する三郎めは、兼て一味の江田竹澤と牒し合、玉を盜んでしくじらせ、邪魔を拂ふて漸と、主人の根を斷たれば、差當る後目は汝、世話やくも我子の可愛さ、疑はしくば證據を見せんと、爲丸が左手の腕、小袖を捲り我も又、同じく腕を差寄れば、所も替らぬ讓の痣、是ばかりでは疑晴まじ、猶も證據と椽の先の手水鉢に差かゝり、二人の小指突破て、落る血汐は水の面、流れて一所に混じ合ふ、實に同根同性の親子の印ぞ不思議なる、ナント見たか、紛もない我子の印、佐々木の家を奪取べき時節到來、コリャ親が惡い事はせぬ、早う衣類を改よと、小袖脱せて着替さす、姿の花や花色の、熨斗目の丈も長上下、大小しやんと、ムゝよい〳〵、天晴國取出來す〳〵と、大欲無道の惡人も、子には目のなき親心、爲丸は透間を見て、差添拔て我腹へ、ぐつと突込覺悟の切腹、さしもの將監吃驚の、此方の障子押開き駈出る關の戸が、ヲゝ爲丸出來しやつた〳〵、よう死で給つたと、縋り付を取て突退け、エゝ聞えませぬかゝ樣、何程父樣が惡人でも、お前が側に付てゐて、御意見をなさるなら、斯いふ事もあるまいに、お前までが一ツになり、水子

も自ら、法の手向と忌はしき、爲丸君を先に立奥より出る多賀將監、小袖上下麻袴に、手づから携へ座に直り、改めて爲丸樣へ申上奉る、兄君不意の御遠行、表向は御病氣御大切と申立、お前樣を後日の願、是より直に管領職の館へお供仕らん、イザ御服召替られよと、袴の紐に手を掛れば、振放して爲丸君、イヤ〳〵兄樣の後目に立は俺や否じや、ムヽ是は異がる、外に御兄弟迚もなく、差詰お前が御後目、大名にお成なされるが、何していやでござります。ヲヽ不審ならいふて聞さう、父樣といひ兄樣、皆不慮の御最期、スリヤ我國を望む謀叛人があるは必定、おれも浮々後目に立、又むざ〳〵と殺されては、先祖へ不孝母樣のお歎き、イヤ〳〵夫は惡い御了簡。此將監が居るからは指も差す事じやござりませぬ、ムヽそんなら父樣兄樣を、なぜ見殺にしやつたぞと、利發の詞にさしもの將監、返す詞もなかりけり、ヲヽ何をいふても返らぬ事、俺は是より世を捨てゝ高野山にて出家となり、父樣や兄樣の御菩提を問ん覺悟。國の事は母樣と、よいやうに相談してたも、かゝ樣が戀しければ、お目にかゝれば御留なされる、宜しう申上てくれと、稚心の一筋に思ひ切て立出る、將監は四邊を見廻し、悴待、爲丸待てと呼はる聲、思ひ懸なく吃驚し、つか〳〵と立歸り、ヤヽ推參なり將監、此爲丸を我子とは、ヲヽ事成就する迄は、口外せまじと思ひしかど、小賢き其方、却て間違と成ゆゑに、一通りいひ聞す、先殿の妾、お筆の方といへるば、殿のお胤を身に宿し、寵愛に誇り樣々の我儘、世上の

殿樣の毒藥を、直す藥はない事かと、縋り歎けばエヽ喧しい、思ひ込だ大望、釋迦孔子の意見でも、いつかな〳〵變せぬ性根、役にも立ぬ仁義だて、身の欲知ぬたわけめと、突退られて關の戶は、爲丸が刀拔取て、咽にがはと突通し、コレ爲丸何程いふても變せぬ惡心、思ひ切て俺も死ると、這寄這寄手負と手負、爲丸臨終の目を開き、樣子一々聞ました、さうとは知らいで最前から、恨いふたは赦して下され、お前はやつぱりかゝ樣ぞや、ヲヽようい ふてたもつた、モウ何にも物いやんな、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と双方一度、健氣に貫く止めの刀、無慘といふも愚なり、惡に徹たる將監は少しも屈せず、數年の工み皆徒事、よい〳〵是からは直付に、佐々木の家國押領せんと、奥を目懸て駈入所に、長刀小脇に久賢御前、ヤア〳〵將監、惡事の段々皆聞た、夫の敵我子の敵、覺悟せよと詰懸る、ヤア家國を望む此將監、女の手際に行べきかと、拔合せて丁々はつし、終には長刀打落し、飛かゝつて膝に引敷き、既に斯よと見えたる所に、矢一ツ來つて將監が、右手の肩先ずつぱと立、さしもの强氣も爰へ兼、尻居にどうと倒れ伏す、一間の內より高聲に、ヤア〳〵將監慥に聞、衣紋之介秀賴公、縣の三郎行春が守護せしぞと、弓矢携さへ悠々と、君を傅き立出れば、ては〳〵いかにコハいかにと、呆れ果たるばかりなり、倶に驚く久賢御前、ヤア最御死にやつた衣紋之介、コリヤマア夢ではないかいの、ハア有難や嬉しやと、悦ぶも又淚なり、將監は膝立直し、アヽラ不思議や、我家に持傳へし、

の私を取替て、大殿樣の胤と僞り、剩三代相恩のお主樣、御二方迄殺すとは、人ではない鬼か蛇か、鬼の女房の鬼神とやら、揃ひに揃ふ大惡人、愛想が盡て私や死ます、必ず〳〵死だ後で、回向して下さりますな、お前方の回向は請ぬ、未來へ往ても大殿樣や、可愛がつて下さつた、後室樣をいつ迄も、親と思ふてをりまする、取譯て衣紋介樣、私をほんの弟と思ひ、武藝の稽古物讀も、片時お傍をはなされず、一ツ所に起伏の、お顏をやつぱり見るやうな、此世ばかりか彼世でも、惡人の子といふ事が知たなら、弟にして下さるまいかと、死行先も便がない、二ツにはお前方は、親でなければ搆はねど、段々の惡事が顯はれ、碌な死はなされまいと、思へば夫も悲いと、身を揉みおせり疵口の、血汐に爭ふ血の泪、噎上〳〵せくり出す、稚心ぞいぢらしき、母は狂亂身も世もあられず、ヲヽ尤じや〳〵、我子ながらも健氣の心、今更の云譯ならねど、そなたを產だ其時は、本妻ならぬ日陰の身、其上に初產、前後も覺えぬ其中で取替られ、後で聞ても仕樣もなく、生れ付たる片意地を、折にふれて諫ても、今でさへあの通り、血氣の時は猶の氣強く、女の知た事でないと、一口にやり込られ、其後は內へ入り、奥樣と呼れても、我子と得いはでそなたを養育、段々成人するに付、冥加の程も恐ろしく、十三年の今日まで、案じぬ日とてもなかりしぞや、コレ爲丸、父御と一所でないといふ、疑を晴してたも、エヽ是我夫、是程泣が耳へ入ぬ、聞えぬか、あの子は可愛うないかいの、何卒本心に立歸り、

へる、三郎は進み出、ヤア將監謀計は一旦の利潤たりといへ共、終に神明の御罰を蒙る、身の程知らぬ惡逆無道、主人を弑せし人面獸心、天罰思ひ知たかと、鋭き詞の釘鎹、剛惡無双の將監は、痛手に屈せず立上り、斯迄仕込し我計畧、いかなる奇瑞を見ればとて、此儘にて置べきか、手並を見せんと立寄て、庭に仕掛し相圖の狼煙、ぱつと燃立つ煙と共に、四方を取巻鐘太鼓、時をどつとぞ上にける、驚く後室衣紋之介、制し留めて縣の三郎、眼を配立たる所へ、小手脚當に身を堅め、馳付る奴の浪平、主人三郎が計畧にて、御譜代恩顧の御家中を、潜に語ひ手筈を定め、君を守護し候所に、相圖の狼煙に一味の惡黨、數百人御門前迄押寄しを、兼て期したる味方の勢、仕懸置たる弩を、一度に放せば堪りかね、逃るを追懸け追詰て、殘らず討取候と勢込で呼はれば、御二方は三郎が、智謀計略拔目なき、忠義を感ずるばかりなり、將監刀拔放し、ぐつと突込む左の脇腹、右へきりゝと引廻し、ヘエゝ口惜や腹立や、三郎に支へられ、我望達せずとも、思ひ込だる初一念、大六天の魔王と成て、生替り、死替り佐々木の家を辱んと、無念の顔色血を注ぎ、眼釣上げ髪逆立、惡に根強其形相、凄じくも又不敵なり、三郎はわざ笑ひ、ヤア及ばぬ望みは蟷螂が、己と報ふ身の破滅、大殿樣へ御手向、いざといふ間も衣紋之介、刀の稻妻將監が、首は前にぞ落にける、三郎は一間より雨降の玉を捧げ出、名玉再び御手に入しは、陪臣ながら浪平が忠義の働き、御褒美の御詞下さるべしと、有りし次第を物

鴆毒を以て殺したれば、耆婆扁鵲が藥にても、蘇生すべき謂はなし、ホヽ其疑は尤至極、最前汝が毒害せし、殿の死骸を改め見せんと、一間の障子押開き、上なる絹を引退れば、コハいかに、神の心は白幣、さも潔よき幣帛に、勿體なくも穢れし毒酒、ハヽハツト人々は思はず知ず飛退り、扨は新田大明神の、急難救はせ給ひしか、ハアヽ有難や尊やと、感涙肝にめいずる神德、武藏の國荏原郡、矢口の村に隱れなき、新田大明神の靈驗は、末世の今に著き、後室勇みの御聲にて、神の奇瑞は申も恐れ、又不思議なは三郎が身の上、いつの間に此館へ、ハア其御不審は御尤、大殿の御最期、雨降の玉の紛失、皆將監が惡心と睨みし故、方便を以て廓へ入込、奸佞邪智の者共が密事の段々聞屆、其上家來浪平が働にて、玉は我手に入たれ共、惡人蔓る御館、表向より差上なば、又災を招く基と、道念が生れつき、正直なるを見込しゆゑ、潛に内談仕り、此所へ忍び込、我君を守護し參らせ、兼て信仰の御神ゆゑ、七日の間齋にて、新田の神を祈しに、主從共時夜の靈夢、將監が惡事の御告、彌深く閉籠り、眠る共なき其内に、右の次第に候と、始終委き物語、衣紋之介はしとやかに、後室に打向ひ、謀洩んかと、三郎道念が密談深く包隱せし故、最前よりも兎や角と、御心を痛めし不孝、御免なされて下さりませ、ヲヽ此母が案じより、不便なは爲丸が、稚心に義を守り、死たる事のいぢらしやと、御親子死骸の側に寄り、未來永々我子ぞや、我弟ぞよ快く、成佛せよとばかりにて、跡は涙に噎か

しや義岑公、徐々と立出給へば、夫と見るより上生阿闍梨、ハット敬ひ奉る、義岑御聲麗しくいかに阿闍梨、今足利の天下となれ共、管領畠山義深が非道の政務萬民の歎き、此虚に乘て計らはんと、表を隋弱に氣をゆるさせ、關八州の武士を、忍び〳〵宮方に招き寄せ、和田楠にも内通し、不日に旗を上んづ手都合、夫迄暫し身の隱れ家、父義貞の所縁ありとて段々の深切いつの世にかは忘るべき、其上此程打續き、お船が菩提を追福の、晝夜の勤行忝けなしと、仰に阿闍梨は猶もひれ伏し、有縁無縁の差別なく、回向をするは出家の役、況や當寺は御父君義貞公御歸依有し大旦那、お船か菩提弔らふも、身に應じたる事なれば、お禮を受る筈もなしと、木を切て投出したる、出家氣質ぞ殊勝なる、義岑重ねて、由緒ある此寺なれ共、我は都に人となり、委しく樣子知ざれば、寺の由來二ツには、此櫻を父義貞の誓の櫻と名に呼ぶ因緣、物語られよとありければ、阿闍梨はハット袖かき合せ、夫我等の本尊千手薩埵の靈像は、人皇四十五代聖武帝の御宇、神龜五年行基菩薩、此地に來りて觀音の影向を、寫し彫める尊像なり其後我祖師弘法大師、是も不思議の告あつて、一宇の堂を草創あり、或時國に疫癘流行り、諸人の惱み人種も盡るばかりの事なりしを、一人の老僧有て我庵の觀音に、祈を懸よと敎へに任せ、人々爰に來りつゝ、祈れは忽ち平癒せり、民の歡大方ならず、彼老僧の吾庵と、敎へ給ひし詞により、吾庵山とは號たり、扨又誓の櫻とは、去る元弘三年に、御父君義貞公、相摸入

語れば、感ずる後室衣紋之介、武士に取立得さすべし、當座の褒美と御手づから、下し給はる御一腰、ハヽヽヽハツト頂戴は、冥加に餘る身の歡、君々たれば臣々たる、聖の教目の當り、勸善懲惡淨玻璃の、鏡を照す佛の道、神の敎の道直に、歩みを運ぶ武藏の國、矢口の村に跡垂し、新田大明神の靈驗を、傳へる昔物語、今の世迄も三重隠れなし

第九　山口觀音の段

佛の誓今爰に〳〵、迷ひをいざや晴さん、抑是は武州入間の郡、山口觀音利生の道場、此吾庵の窟に禪居を占め、瑜伽の門派に濫吹せる、求道の沙門上生とは我事なり、扨も此度新田小太郎義岑公、初花姫と諸共に、お船が菩提を弔はんと、我寺に來り給ひ、三日三夜の大法事、今日滿願の日に當り候、又是成一樹の櫻は、義岑公の御父、新田左中將義貞公の、誓の櫻と申習はし、名木といひ所縁といひ、一枝手向度候へ共、かゝる名木を手折んも、落花狼藉心なく候得ば、手折で直に手向の花、南無幽靈出離生死、頓證菩提と回向あり、見渡せば古き名所樣々に、有といふなる遁水の、遁隠れても世を渡る、民の手業の何故に、堀難の井の水鏡を、今も原て久米川や、青梅も余所に人見山、關戸もさゝぬ所澤、水は流れて入間川、岸村山の里つゞき、限りも知ぬ武藏野は、今日はなやぎぞ若草の、妻も籠れり我も籠れり、此寺の所縁もよ

袖香爐、手向の花や阿伽の水、涙と共に合掌し、暫し詞もなかりしが、ノウお船殿、過し頃矢口詣の折からに、道よりぞつと寒け立、氣は怔然と夢幻、義岑樣に妹脊の語らひ、此世を去し魂が、我身を假の新枕、思ひを晴し立退し、後の我身は義岑樣に、何の所緣もなけれ共、一人の心は千萬人、可愛らしいいとしらしい殿振は、誰目で見ても違ひなく、惚たが因果でな樣を、戀の媒介氏神と、手前勝手な理を付て、逢夜重なるいつしかに、永き妹脊の語らひを、草葉の陰より嘸まさぞ、大事の殿御を寢取れし、憎い女じや恨めしいと、嗔恚の炎苦しみを、思ひ廻せば廻すほど、私や徒者道しらず、いつそ此身を墨染の、尼法師とも樣を變へ、菩提を問が道なれ共、思ひ切れぬ心の迷ひ、どんな恨を身に受て、此世の災難あの世では、阿鼻焦熱の苦しみも、八寒地獄劒の山、苦患に苦患を重る共、義岑樣に片時も、得離れはせぬ退はせぬ赦して下されお船殿と、繪像に取付縋り付、聲の限りを泣盡すはいた／＼しくも哀なり、燃る火の薪は假の形にて、空より出て又空に、歸り兼たる輪回の絆、お船が姿あり／＼と、影の如くに顯はるれば、夫と見るより初花姫、怖さ悲しさ身はわな／＼、恐れ慄き顫ひ居る、アヽラ閻浮戀しや懷しや、さなきだに女は五障三從の、罪深き身をいかなれば、父の惡逆邪より、さしも名高き名將の、義興樣を害したる、惡の報ひは針の先、夫とは知ず義岑樣の、お姿を見初しより、迚も女に生るゝなら、あんな殿御に添たいと、思ひ餘りてやう／＼と、優いお詞聞

道を亡ぼさんと上州より義兵を發し、分梅河原の一戰に、利を失ひて引退ぞき、此寺に御通夜あり、紙の願書を捧げらる、其夜の夢に觀世音、御手の弓矢を授け給ふ、義貞公は夢覺て、心に誓ひ庭前の、櫻の枝を鞭となし、鎌倉に馳向ひ、相摸入道一家を亡し、震襟休め奉る、去に依て此一木を、義貞公の誓の櫻と申事、此謂にて候と、いとも委き物語、義岑感涙堰敢ず、大悲の奇瑞親人の、忠義無二の誠より、感應ありしも僻言ならず、さは去ながら左程迄、智仁勇備の親人も、傾く御運是非なくも、尊氏に世を狹められ、終に越路の雪と消、萬夫不當の義貞公も、淵に投打玉川の、底の水屑と失給ふ、當家の運の拙き上に腑甲斐なき義岑が、斯成ゆきし身の上を、嘸や父上兄上の、蔑み給はん面目なやと、悲歎の涙にくれ給へば、ハア御歎きは去事ながら、顏回孔子も時に合ず、殊に南朝の御衰、大厦の倒るゝは一木の力を以て救ひ難し、只何事も過去よりの約束事と思し召せ、敵となり又味方となるも、蝸牛の角の爭ひにて、遍ねく照す毘廬遮那佛、草木國土悉皆成佛、猶も亡者の手向草、いざゝせ給へと勸むれば、義岑公は萋々と、上生阿闍梨に誘はれ、本堂さして入船と、又出る船の戀の海、深さ妹脊の中々に、今は一入増花の、初花姫も諸共に、お船が菩提亡靈へ、手づから手向の花籠に、菫蒲公英九輪草、吊ふ法の庭櫻、目には涙の玉椿、雨を帶たる海棠の、花の物いふ唇に、唱る經は亡人の、苦海を渡る棹の歌、お船が姿寫繪は、花と花との下枝に、懸る手品もたほやかに、取出す振の

を放ち顯れ給ふ、實や火阬變成池念彼觀音の力に依て、お船が姿忽に、蓮花の上に立よと見えしが、いと嬉しげなる聲を上げ、有難き御弔、此山口の觀世音の功力に依て、忽ち天上の果を得たり、猶も佛力擁護の印、衆生に示す羽衣の曲、狂言綺語も讚佛乘、報恩謝德と夕月の影も目ざまし　三重「春霞

天津空誓ひの櫻

古寺のみぎりの櫻年經ても、猶あらたなる誓かな、有難や千々に手向る染紙に、そみし輪回の罪消て、天上の果を請たるぞや、此歡にいざさらば、人間の御遊のかたみの舞、さすや桂の宮人の、天の羽袖や小着衣、一ッに奏る名殘の袂、返す〳〵も面白や、抑廣寒宮中には、玉斧のしゆり鮮明に、瑠璃の梁瑪瑙の階、白衣黑衣の天人の、數も珊瑚の珠の笛、笙ちやく琴鼓、今爰に花降て、妙なるや靈香四方に薫ず、面白の今の音樂の音、天の原ふりさけ見れば霞立、空にもいつしか行春の、浦山しけに打詠め、迦陵頻伽の馴々し、聲さらに雁金の歸り行、天路と聞ば懷しや、實乙女子の霓裳羽衣の曲をなし、天の羽風のひら〳〵〳〵、と雨に潤ふ花の袖吾妻遊びの駿河舞、此時や始なるらん、花の色香も能姥櫻、姿艶しやはら〳〵〳〵と、二重の帶をきり〳〵としやんと緣結び、お乳や乳母の癖として、背に子を負ひ寢させて置て、いんのこ

嬉しさ、お側へ寄ば淺ましや。御旗の咎にて、正氣を失ふ悶絶も、恐れず懲ず附纏へど。兄を殺せし敵の娘、此世で添事ならぬ共、親と一所でないといふ、一ッの功を立るなら、未來で添ふのお詞を、せめて此世の思ひ出と、御身替と覺悟して、刄に懸り死たりし、邪淫の惡鬼は身を責て、其念力の、道もさかしき劔の山の上に戀しき人はおはすれ、嬉しやとて攀登れば、劔は身を通し、盤石は骨を碎く、鐵杖振立て午頭馬頭の、呵責の聲は天地に響き、百千萬の雷の一度に落る苦しさこはさ猶其中にも魂の、慕ふ一圖にやう〳〵と、お前の姿を假初に、義岑樣に見えしより、心の迷ひ彌まして、益募る地獄の責、母は先立父は猶、同じく地獄の奴となり兄弟とてもあらがねの、土に印の塚もなく、只一口の念佛を手向る人もあらざれば、億萬劫を經る迚も、浮む瀨更にあらざりしを、義岑樣の御情、尊き御僧の御追善、お前の心の優くも、恨み嫉妬の念もなく、眞實心の御手向に、地獄の苦しみやう〳〵と暫く遁れ來りたり、今は妬も春の夜の、夢の間の暇さへ、冥途の使しげゝれば、暇申さんさらばぞと、いふ間も嵐の吹來り、ぱつと燃立火の車、無明の猛火身を責れど、アラ堪がたや苦しやと、七轉八倒さんらんを見るに堪兼初花姬、心はかゝりは焦慮ども、寄に寄れぬ業火の炎、身を切碎く劒の山、詮方涙こなたより、走り出たる上生阿闍梨、珠數押揉で立向ひ、聲を限りの普門品、一心讀誦の祈の印不思議や虛空に音樂聞え、〳〵花降異香四方に薰じ、紫雲靉靆其中に、千手薩埵の御姿、光り

て、天の羽衣春風に、靉靆たなびく武藏野の、廣き惠も末遠く、山口しるき源の、榮を爰に調の音色、四の緒の琵琶鳴も外ならず、靈香薫する花の夕映、草の所縁や紫の、雲に紛れて失にけり、か丶る所へ、竹澤修理介宗時、手の者引具しどつと駈着、義岑と初花姫、此所に忍び居る由聞出したり、踏込で搦捕と、奥を目掛て駈入所に、堂の陰より萬八が、さうはさせぬと跡出、忠義始の手並を見よと、縱横無盡に切立れば、さしもの大勢堪りかね、逃るをやらじと追て行く、透を窺ひ竹澤が、只一人取て返し、奥を目懸て駈入所に、待設けたる義岑公、兄の敵の片破ど、首宙に討落し、四方を白眼んで立たる所へ、暫し／＼と呼はつて、衣紋之介秀頼、後に從ふ縣の三郎、管領畠山義深に繩をかけ、浪平に引立させ、御目通りに愼んで、主人足利義詮より、義岑公へ使者の趣、固より新田足利は、同じ清和の源氏と源氏、矛盾に及ぶ筈ならねど、惡逆無道の畠山、江田竹澤が讒言にて、心ならずも敵味方、今より水魚の因をなし、南朝北朝御和睦、誓の印畠山を御勝手次第、御刑罰下さるべしとの、申付にて候と、相演れば義岑莞爾と打笑ひ給ひ、私の意趣ならねば、君と／＼と御和睦、四海靜謐民の歎、何しに否み申べき、惡の張本畠山、夫首討といふ所へ、敵の首を引提て、取て返す萬八が、立寄て義深が、首をはつしと討落し、歡び勇む勝鬨を、聞に嬉しき初花姫、一間の内より走り出、兄弟主從聟小舅、語合たる身の上や、五倫の道も明けく、五穀豐饒の秋津國、治る御代こそめでたけれ

〳〵といふた物な、めなかけさうよかあゆらしさに、愛盛りあすれば冠〳〵、手打臙の目、扨も其方は誰人の子なれば、定家かづらか、放れかたやの〳〵、手車に乘て參ろの東山や、西山北嵯峨の、踊は對の帽子をしやんと着て、踊る振が見事へ、花見て戻ろ〳〵、花には憂を打忘れ面白や、九重の都に恥ぬ江戸櫻、千代のためしと菊櫻、匂ひ櫻や八重一重、君が櫓のうす櫻、そん夫は誠によういふた、忍ぶ夜の〳〵、月は少しは遲櫻、有明櫻戀の邪魔、闇に照すは緋櫻に、濱で見事な鹽竈や、そん夫は誠によういふた、たとへ〳〵野の末山櫻、虎の尾住し奥迄も、二人誓の伊勢櫻、起請誓紙を墨染や、そん夫は誠によういふた、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも戀しさ人は、どれ〳〵見たい物じや、とこゑ〳〵お參りやつてとうげにめされよ、科をばいちやが負ひ參らしよ、しはらしや、見れば五色の綾の竹、綾のしとねもへ君と我二人、緣の結ぶの常陸帶、天津乙女は誰袖觸し姿よし、驛路の鈴振れば、鳴もよしエイ〳〵〳〵ナ、一の子寶揃て〳〵、さつさ時雨か鈴の音か、日本めで度春の山は三笠、待ば甘露の日傘月の笠ほと開た〳〵、秋は猶紅葉文字笠、それへ〳〵、夫じやいの、誠に鵲の橋を渡した〳〵、解ぬ思ひの戀にもあるに、數々の文に私や欺されて、忍ぶ其夜は闇こそよけれ、こん〳〵來ぬ夜はつん〳〵面憎、我獨枕かたしき夜もすがら、ほんに憎いじやないかいな、憂やつらや空も懷し雲波、花鳥飛交ふ雲の袖、駈巡り返す乙女子の、袰も妙なりや東歌、去程に〳〵時移つ

靈驗宮戸川

作者　福内鬼外

經に曰、十方諸國土無刹不現身と、佛の利益いちじるき、頃は人王三十四代、推古帝の御宇に當て、武州宮戸川に漁し檜熊兄弟、網裏に出現ましませし、末代不思議の靈像は、誠なるかな孝悌忠義の殺生は、菩薩萬行に越るといふ、譬にもれぬ大悲の救世、妙なる花の盛なる、往昔を爰に慕堂、淺草寺のはじめなる、チロシ「御代の光りは長閑なる、頃は彌生の春の空、櫻ほころぶ南面の、常の御座に出御なる、玉座の方は曾我の大臣蝦夷公、胸の一物押かくす、上べばかりの容躰、階下には二代の老臣秦の川勝、面にしるき正直の、頭に於る年の霜、次に並居る大臣の家臣土師の連、其外百官百司の面々、威儀を正して參列あり、腋門の方よりも遠慮白砂をざいや〳〵、木綿ぎでらの百性共、初て登る雲の上、居所知らずうろたゆれば、連は眼に角立、ヤア見苦敷きりうお共、玉座近く尾籠の振舞、退れやいと睨付れば、秦の川勝しとやかに、さな云そ連殿見れば賤しき土民共、定て訴訟有ての義、申せ聞んとありければ、庄屋の杢兵衛おづ〳〵這出、私共は武藏の國淺草の百性共、聖德太子樣御在世の砌、觀音樣の

荒御靈新田神德 終

ゝた此舍人、天竺の釋迦如來は、母の脇腹を破つて生れた、出口知ずの生れ損ひ、唐土の老子はお袋の腹に八十年宿つたれど、生れた所が大聖人、よしや夫は兎も角も、まんろくな十月めに、産聲揚た連殿、鎗おとがひの猿眼、人間はづれのしかみ顏、悉皆九十九の鼻欠さる、一疋の猿を笑ふも同然、飛退つてお居やれと、やり込られてぐつとせき上、ヤア牛扶持食が留ない腮骨、今一言云つて見よ、腮切てきりさげると、切及廻せばクツ〱と噴出し、ハヽヽ猿殿か赤うなられた、生れ損といふたのを今一遍聞たいとな、安いことといふて聞そ、猿眼〱生れ損の鎗頤、モウゆるされぬと鯉口四五寸、蝦夷聲かけ、コリヤ待、連、下郎をとらへて論は無益調子丸も靜まれと、制する詞に是非なくも、睨み殘して控へ居る、大臣しとやかに正笏し、人氣和せざれば亂を生ず、假初にも若宮の即位を難ずる者あるは、人を以ていはしむる天照神の神勅ならん、されども是は凡慮の至り、明日三輪の神前にて、神慮に任す二の御鬮、宮御參詣ましまして吉凶を定め給ひ、其上にて御位定め、是に越たることあらじと、阿波の鳴門に浪風の、なきは工のわり磯海、實尤もなる大臣の了簡、いなむ人やはあるべきと、直に玉座へ奏聞の、折も正午の時告、早退參と各は、立や日わしの、長き代の君か惠の寛やかに、四海の浪も豐浦の宮、宮居久しき三重「御代なれや

御堂が立て、仕切てある反甫中、荒地に致すも費な物、伺ふた上畑にしやうと村中が寄合付、お伺ひのため參りましたと、辰巳あがりの關東なまり、蝦夷公ほく〱打頷き、尤なる願の趣、蝦夷の大臣が聞屆た、いかやうとも計へと、いふを暫と川勝押留、イヤノウ蝦夷公の仰に候へ共、觀音堂建立は聖德太子の御心願、無足に致すはいかゞなりと、いひも切せずさうでない、大切なる本尊、太子の姬君綾歌姬に言號の進中臣、取失ひし落度によつて、當時勅勘の日蔭者、スリヤ御堂を建立しても世俗にいふ佛の無堂、近頃無益の儀、イヤ左樣には申されまい、紛失の本尊を尋出さん故にこそ、心を盡す進中臣、此儀は追て沙汰あるべし、罷立とありければ、ハツト答へて立上る、實あさくさの百姓とて、そさくさとして出て行く、御帳臺の內よりも、典侍の局立出て、蝦夷樣川勝樣、主上此程の綸言には、女皇の御身として、萬機をすぶる政、母大臣樣を補し給ふ、聖德太子の若宮山脊の宮へ、御位を讓られんとの內勅、かた〲評議あるべしと、仰は重き國家の大事、善とも惡とも誰あつて、詞を出す人はなし、土師の連しやく〱り出、憚りなることながら、山脊の宮樣は母御のお腹に三年宿る、イヤモ法量もない長逗留、申て見れば人間はづれ、日の御繼にはなりますまいと、恐げもなく云放せば、こらへかねて末座より、宮の舍人調子丸、連が前へつゝと寄、イヤコレ連殿とやらむら氣殿とやら、只今あれで聞て居れば、身が若宮樣を、人間はづれとえらひ雜言、過行き給ふ御主君に、聞はつ

定まる夫はありながら、勅勘の御身の中臣様、ヾ何所にぞうとの便もなし、今日の祈は夫ならず、弟宮と申も勿體ない、山背の宮様御位定めの御參籠、よいが上にもよい様にと、自も歩を運ぶ、其守目次手には、殿御の事も、とにつこりは、謄こぼるゝ恥しみ、調子丸引取て、成程御意の通り、今日若宮様には、御大切の御社參、姫君様も倶々に、御願込は御尤、先々宮居へ御參詣、神主方にてお待受、入せ給へと附々も、倶に袖振神樂の鈴、打連てこそ入給ふ、我獨澄と思へど濁る世の、いつしか露も打晴れて、朝日待得し浪人の、深編笠も雲の上、歸る雁金音をば鳴く、尾羽のかれたる跡からは、角前髪の用あり氣、さし寄て袖を控へ、卒爾ながらお笠でお顔は見えねども、お姿に覺あり、紛ふことなき進中臣様、友成めで御座りますと、いふに此方も邊りを見廻し、編笠取て是は〳〵、絶て久しき主從の、世を忍ぶ某を、アイヤ三代相恩の主君、何とて見違へたてまつらん、今更申すもいかゞなれども、其身すぼらしき御姿も、我々親子がなす所、親にて候檜熊郷領、聖徳太子様より、御預りの閻浮提金の觀世音、何者とも知れず寶藏へ忍び入、奪ひ取て行衛知れず、申譯に父は切腹、其御咎とてかやうに、勅勘の御身とならせられ、剰御浪々の御身の上、所々方々と御有家を求しに、今日ふしぎに此所にて御目にかゝるも、主從の盡せぬ御緣、御壯健の御有様、拜しまをして恐悦と、目にもつ涙はら〳〵と、昔を忍ぶしほらしさ、中臣公も御落涙、ヲヽ尤々、是も偏に明神の御加

第二

足引の、大和は爰ぞ杉立る、神代のまゝのとてしへに、糸筋長きおだまきの、三輪明神の鳥居前、葭簀圍の水茶屋も、春風渡る往かへり、休まぬ人に休む人、價千金茶の錢も、今を春邊と賑へり、茶店の嚊は空打ながめ、ヲゝとやかういふ中最早晝前、今日は宮様のお成とやら御幸とやら、今に雜式の鐵棒のと人ばらひ、ドリヤ、此間に晝餉したゝめて來ませうと、取なりしやんと水茶屋の、葭簀引寄せ出て行く、きぬつらき、其衣の香は梅かほる、色と情の莟の花、被まばゆき御所風は、聖德太子の姫君に、名も綾歌の綾錦、包む笑顏の細眉に、殿御ほしさのぼんじやりは、繕はぬ程おてやかさ、お供の腰元下女婢、かしづき役は調子丸、偖々お早いお御足、外珍らしき姫君樣、腰元衆もとつかはと、急ぎに急ぐ三輪詣で、春めき渡る鳥居前、又かうした風景はどうも／＼と、いへば腰元口々に、お姫樣のおかげにて、今日は思はぬよいのん氣、道すがらも夫は／＼よい男の見わき、イヤホンニ其男で思ひ出した、お姫樣のお言號進中臣樣、勅勘の身とやらで、御婚禮も御延引、さぞ姫君樣にもお待かね、大方其願込の御參詣、此明神樣は取分て、夫婦妹背を守らせ給ふと聞ば、こちらも末によい殿御、あてがうて下さる樣に、お願まをして置ぞやと、何の害もなき下女婢の、詞に姫も打笑給ひ、皆の者が云通り、

ながら、今日爰迄參りしも、若宮の愛らしさ、嘸御成人ましまさん、餘所ながら御顔も拜したし、一ツには尊像再び我手に入ならば、其時こそ御赦免の御願ひ、お執成給はれ川勝殿と、低頭平身身を愼み、思ひ入てぞ見えけり、川勝は取敢ず、御念の入たる御願ひ、綾歌姫の御言號、聟かねとまをし、何とて如才のあるべきぞ、紛失の御佛さへ御手に入らば、勅勘御免は眼のあたり、必々氣遣したまふな、いまだ有所も知れぬとな、隨分と御詮議あれ、追付目出度御對面まをさせんと力を付る老人の、殘る方なき慈愛の詞、ハアハツト領掌あたりに人音、見付られじと中臣公、編笠手早に身を忍ぶ、宮居の方よりつき〳〵隨ひ、心かたちも綾歌姫、君の迎に出給へば、川勝は手をつかへ、是は〳〵姫君樣、早御社參相濟御下向か、イヤ〳〵左にあらず、自もお願をなす神詣、一ツには若宮樣を御待請、わざ〳〵是迄、是は〳〵御苦勞至極、君にも御機嫌うるはしく只今社參、シテ御供は調子丸太儀〳〵、ハア今日は別して、御大切なる御社參と承る、川勝樣にも御苦勞と、互の挨拶とり〴〵の、御車に引添て、皆々宮居へ詣であり、邊り見廻し進中臣、立出て見送〳〵、正しく言號ある綾歌姫、婚禮延引さぞ女心に恨あらん、勅勘さへ御赦免あれば、追付目出度迎ひ取らん、夫を力に待給へ、心に任せぬ世のさまと、暫し涙にくれ給ふ、連にはぐれて友なしの、鴛鴦の思ひ羽片はかい、十五六なる娘盛、見そめし戀人夫ぞとは、いふにいはれぬ思惑の、恥しいのが戀なれや、人なき茶見世を幸に、心

護、我も再び其尊像を尋出し、太子樣御遺言の通り、一宇を建て安置申さぬ其中は、人に面は合さじと、見る如く日蔭の身、世は聖徳に治るといへども、佞人讒者時を窺ふ此時節、尊像さへ手に入らば、山背の宮の隨身秦の川勝、是を力に勅勘の御詫まをさんと思へども、何をいふにも肝心の尊像の、何國に渡らせ給ふやら、今以て行衞知れず、是非もなき世の有樣と、仰に友成謹で、御氣遣遊ばすな、我々兄弟三人、女でこそあれ妹も一人あり、唐天竺へ渡らば格別、此日の本の中ならば、身を粉にはたいてなりと、尊像を尋出し奉らん、先達て兄濱成は、東の方、武成と拙者めは五畿七道、捜し出して御手に入れん、武成とまをし合せ、川勝樣へも近日侍候仕り、御勅勘の詫の綱、萬事よろしく計らひ申さん、御心安く思し召せと、諫まをせば中臣公、ヲヽ末頼もしき汝が心底、隨分と油斷なく、心付るが肝要〳〵、人目もあればいざ〳〵と、宣ふ詞に友成は、名殘をしげに見返り〳〵、お別れ申して急ぎ行く、折もこそあれ御社參ぞふ、と警蹕の聲喧〳〵、御先をはらふ御車は、聖徳太子の忘れ筐、山春の宮御位定、きしる音さへ潔よき、御車添は御隨臣秦の川勝、非道を正す役目の素袍、侍烏帽子年ばいも白髮交りの勿體に、威儀を改め歩み來る、斯と見るより進中臣、はるか傍に平伏す、川勝は一揖し、コハ珍らし中臣公、先以て御勇健の體重疊と、挨拶あれば進中臣、今更改め申さずとも某が罪、お預りの尊像を失ひ奉りしは、家來檜熊郡領が落度とは申ながら我あやまり、勅勘の身を持ち

調子丸殿へ川勝よりと、讀み終つて打頷き、しからば姫君幸の茶屋が床几、しばし御待下さるべし、一走りいて參らんと、使に連立とつかはと、一の杉へと引かへす、後にざは〳〵女中達、何を云やらかしましき、中を窺ふ曲者が、黑裝束に大びらはつ込、目ばかり出したる、頭巾の角々、夥多の女はり退踏退、姫君の弱腰引抱へて仁王立、のう悲やと宣ふ聲、耳へも入ず驅出す、どつこいやらぬと葭簀の内、飛出る中臣公、かんづか取て引戻せば、心得たりと振ほどき、手練の當身にさしもの中臣、うんと悶絶其隙に、姫君抱曲者は、何國ともなく遁れ行く、騷に連て葭簀の内、驚出たる以前の娘、見れば男は氣絶の體、わはてふためきコリヤどうせうと、立たり居たり、暫途方にくれけるが、やう〳〵に心づき、柄杓の水を口から口、抱きかゝへて、ヱヽせんな呼返さうにもお名は知らず、コレナウ旅のお侍様と、いふに氣の付進中臣、むつくと起て、ヤアそなたは最前の娘、曲者は取逃したか、イデ、遠くは行くまじ追駈んと、駈出す裾をひかへる袖、振切〳〵驅行を、放れはせじと帶引しめ、小褄引上かひ〴〵しく同く後を慕ひゆく、既に其日も未の刻、還御の時刻御車を、東頭にさしらする、隨身舍人しと〳〵と、列を亂さぬ鳥居前、賽の其所へ、並木の茂み主は誰とも白羽の尖矢、御車におやまたず、發矢と立ば乳母の聲、わつと叫ぶに驚く川勝、走寄て翠簾引ちぎり、見れば玉體恙もなし、抱傳奉る、乳母のしがらみ朱になつて事切れたり、ハツト仰天川勝が、玉體抱きたて

を汲出す茶の花香、さし出す茶碗のくつきりは、おむろ燒より割やすき、思ひ切てすか〳〵と、お茶上ませうと差出す。うさを慰む色好、振返つて是は〳〵、お茶とは手づからかたじけない。さて見事此茶見世の主なるや。ムヽかぶり振のはさうでもなく、ハテ合點の行かぬ御女中、ハア、やさしいお志、御馳走のお茶賞翫致そと、茶碗片手にしめる手をしめかへすさへてはではに、赤らむ顔の袖屏風。合點行かぬとおつしやれと、女御后も賤の女も、惚るといふ字に二ツはない、情に隔は有明の、伏屋の月日も玉簾も、影は一ツの長枕、いとし可愛い戀の戀、歌をよまねば返歌もなく、文玉章を打越て、姫御前の身のはづかしい、なんざら夫と打付は、よく〳〵惚たと思し召。おはれみ給へと只管に、やいの〳〵も面はゆげ、凭れかゝりし藤かづら。眞實見えて、かはゆらし。中臣邊りを見廻し、切なる心かたじけない、何迚むげになすべきぞ、幸葭簀に人もなし、二世のかためは簾の中と、心時めくあだ心、打連奥へぞ入にけり。

まだ青柳の糸長さ、春の日脚も斜なる、歩路下向の綾歌姫、女房達は待兼顔、イヤまをしお姫樣、お下向のお次手に、帶解の地藏樣、安部の文珠か岡寺か、初瀬へちよつと結ぶの神、姫君樣と中臣樣、つひ御祝言ある樣に、すら〳〵ずつと御參詣と、勸まをせば姫君も、倶に浮立給ふ折から、神主方から急使、調子丸樣是においでなさるゝかと、差出す一通手に取上、何々、今日社參の儀につき、密に申談ず仔細あれば、拜殿の南、一の杉まで只今參らるべし早々以上、

と、後に從ひ官女達、料具花形御酒洗米、手々に捧座に直る、浮橋はしとやかに、イヤノウ我夫、今日は日柄もよう、三輪明神の神前にて、神慮に任かす御位定め、善か惡かの注進は、まだなけれども大吉と、御鬮の上には知れたこと、綾歌樣にも宮樣の、よいか上にもよかれかしと、明神樣へ御參詣、猶も神慮を仰んため、かやうに神の供物、取したゝめて候と、聞て豐勝打うなつき、ヲゝ能こそ心付たりし、きつと御鬮は大吉と、思へどそこが天道次第、兎に角三輪の神力を、祈りまをすにしくはなしと、夫婦か合す拍手も、陰陽和合神明の、加彼力祈る其折から、さがれ〳〵と仕丁か割竹、打れながらも厭ひなく、おづ〳〵入來る二人の浪人、どふぞお願ひ、イヤさがれ〳〵とせちがう聲、ヤレ喧しと立寄る豐勝、見合す顏は、ヤ武成友成、ハヽヽ豐勝公にてましますかと、敬ひ白洲にうづくまる、イヤ仕丁ども、此兩人には用事あり、皆立者立と追退て、ハレ珍らしや檜熊兄弟、願とは何の仔細、物語られよと尋れは、武成ハツト恐れ入、今更まをすも繰言ながら、我々が主人進中臣、過去給ひし聖德太子樣より、御預りの觀世音、武州淺草に一宇を建、金龍山淺草寺と號し、安置なすべき尊像を、奪取れし落度とて勅勘の身となり、世を見限つて行衞知れず、其尊像を奪はれしは、我々が父檜熊郡領、腹切て相果たれど、言譯立ぬ主人の落度、思ひ廻せは廻す程、其殘念さ口惜さ、お察し下されよと兄か悔を引取る友成、只今友成か申す通り、失させ給ひし尊像を、兄にて候濱成諸共、所々方

まつり、四方へ屹度眼を配り、アヽラ心得ぬ今の尖矢、正しく逆徒の奴等あつて、君を弑し奉らんとは、恐しく〱、ソレ仕丁ども狩出せ、畏つたと雑人原、並木のくま〲駈廻る、川勝天地を拜し、ハア有難き宮の御運、天照御神御力を添給ふか、神力應護のなす所、ハアかたじけなし〱と、宮居の方を伏拜〱、悦び勇む小陰より、又も飛來る尖矢の、川勝か脇腹より肋をかけて發矢と立、うんとはいへど大丈夫、振返つて邊りを見廻し、エヽ是程のへろ〱矢に、命は捨ぬと片手に若宮、急所の痛手に屈せぬ老人、翠簾の出しぬき引ちぎり、矢をかなぐりて疵の口、しつかと引しめ力足、踏しめ〱、一度ならず三度までも、御運目出度若宮の、命の長柄片手押、さはがず御所へと三重

第三

行空の、春も半に立わたる、霞が外におぼろしく、列々椿火をともす、花も木の芽も程々に、君か惠に青丹よし、寧樂の宮居の春の景、眺におかぬ風情なり、聖德太子の御忘紀念山脊の宮の御館、三輪明神へ御社參の、御留守居とて未明より、川勝か嫡子秦の豐勝、非道を守り相詰る、時しも如月中空や、御簾の追風もて來るは、梅か薰か夫ならで、衣の苗木の端手ならず、又じみならぬ御所風は、豐勝が妻浮橋、二八が中の久丸と、乳人に抱せ立出る、裲襠のつしり

駈出す折から、還御ぞふとしらせの間もなく、御庭先へきしらす御車、乳母にかはつて川勝が、宮を守護して車より、下る膝節がつくりは、痛手の業と知らぬ嫁、ヲヽ御痲痺があぶなやと、豊勝諸共勦はれども、アヽいや痲痺も切まをさぬ、小石に躓き、つひがつくりと、いふも途切の聲音といひ、父の顔色常ならぬは、只事ならずと豊勝が、イヤ何親人、御供の行列は不揃と云、殊さら乳母のしがらみも、見えぬはいかにと尋れば、ムヽ其しがらみは何ヲヽ夫々、持病の癪が指込で、神主方に暫く養生、宮様にもおひもじからん、嫁女お乳と抱かせ參らせ、ヤコリヤ乳母、久丸は夫へ寢せ付次へ立、官女達も休足あれ、と追立やり、後先見廻し、コリヤ〳〵忰、ゆるかせならぬ大變あり、若宮の供奉なし參らせ、三輪明神より還御ある、宮の御車目當にて、何國よりとも白羽の矢、天照神の御加護にや、矢先はそれてお乳母、急所に當つて敢なき最期、何者の業なるか、詮議せんと駈出す處に、口惜や又も飛來る尖矢、我脇腹にまづこの如くと、上着をぬけば流るゝ血汐、コハ何者の仕業ぞと、驚く豊勝浮橋が、ノウ悲しやと駈寄ても聲立られぬないじやくり、ヤア泣て居る處でなし、未練未練と押退け〳〵、なに忰、姫君の御車聞たか、ハア只今夫と青侍が注進、駈付て一詮議と、踏出す所へ宮の還御、夫故しばし猶豫せり、遠くは行まじ曲者共、からめ取て父上の敵、女房よきに御介抱と、言捨て駈出す、ヤヽ待悴と呼留め、斯る工をする族、何べん〳〵として居らん、取分て心得ぬは、我手に入し

々と尋れど、行衛知れざる御佛の、再び出させ給ふまで、我々兄弟三人を、いかなる罪にも行ひ給ひ、主人中臣の勅勘を、何卒御赦免ある様に、禁庭への御取成、偏に願ひ奉ると、兄弟額を地に摺付、涙にくれて願ふにぞ、豊勝大いに感じ入、ハヽア尤なる兄弟が願ひ、こなたにても綾歌姫に、言號ある中臣卿、中々麁略に存ぜざる故、潜に御行衛をさがせ共、今以て有家も知れず勿論勅勘の身となり給へば、假初ならぬ禁裏の御沙汰、若宮還御の其上にて、父川勝にも物語、よしなに計らひ申べし、人目立ば却つてさまたげ、先今日は歸られよと、仰に少しは安堵の思ひ、猶此上にもお見捨なく、偏に願ひたてまつる、仰に任せイザ退參、おさらば、さらばと兄弟は、すご〳〵表へ出て行く、後見送つてイヤノウ浮橋、春の日脚もはや八ツ過、宮姫君の今以て、お歸りなきは心得ず、サレバイナ、最前から自も、夫が心にかゝります、お迎いながらそこらまで、ヲヽ某も其了簡と、身繕する折こそあれ、姫君の御輿添、片息になつて立歸り、今日姫君三輪明神へ御參詣の其折柄、面を隱せし曲者共、ぱつと押込無法の狼籍、お供の面々皆ちり〳〵に逃失て、姫君の御行衛知れずと、聞て急立豊勝か、シテ〳〵お供の調子丸は、されば候調子丸、神主方に用ありとて、立越たるは夫より以前、調子丸だに居合さば、姫君様も御安體、我等も天窓はぶたれじと、瘤をさすつて逃込ば、聞く人々は驚きの餘りのことに詞も出ず、豊勝はつゝ立上り、かゝる狼籍あるからは、宮の御安否心元なし、イテ一走と

捨て行れませう、責て今はの際までも、御介抱をと打伏て、身も浮橋か血の涙、夫婦歎にくれ〴〵も、落んず氣色はなかりけり、川勝態と聲荒らげ、ヤア不所存ある汝が詞、君に仕へて親を忘るゝは、臣たる者の道なるを、うろたへたるかたわけ者、末期も近き某に、氣を揉すが面白いか、是非に落ずば勘當ぞと、鋭き詞に豐勝が、涙は重き額を上、コハ勿體なき御詞、成程仰に隨つて、一先此場を落申さん、といふにはやりと、ヲゝ出かした〳〵、嫁女も泣ずに早用意と、せり立られて泣々も、夫婦が急ぎの旅支度、今の今迄若宮の、御代にとこそは祈りしに、かゝる事とは得ぞしらぬ、水の流れと人の身の、せきとめられぬ夫婦が涙、用意そこ〳〵若宮を、夫が抱き浮橋は、寢入久丸抱上て、悄々庭に、祖父樣にお暇乞をとゆり起され、イヤジヤ〳〵、かゝ樣いやじや、祖父樣だつことやんちや聲、思ひ切ても川勝が、孫が寢覺に思はずも、吾を忘れて椽先へ、ヲゝ坊よ久丸よ、コリヤ此祖父はな、遠い處へ行く程に、早う成人して、秦の家名を受繼よ、さらば〳〵と目に涙、辨へ知らぬ久丸が、だつこ〳〵とせちがふて、泣ばぼつちり目覺す若宮、ゆふりすかして豐勝が、君ゆゑ心を盡す父、せめて此世のお暇乞と、敎へまをせば頑是なく、いたいけ盛の手を上て、さらばよ〳〵は主從が此世のさらば川勝が、肉もとろくる有難なみだ、御運至らまし〳〵て、追付御世に出給ふを、草葉の陰より悅ばん、時刻うつれば早落よ、落よ〳〵と、落入聲音、是今生の別れぞと、五體を絞るう

コレ此書翰と、指出す一通、取より早く押開き、何々、兼々御懇望の綾歌姫、今日三輪へ社參に付、則某供奉いたせば、方便を以て御手に入申べく間、御人數御用意なさるべく候、名は記さねども見覺ある、調子丸が此書翰、ヲヽサ成程、調子丸が手跡ながら、忠義一圖の彼が性質、二心をいだく若者ならず、正しく姫君を奪し奴原、贋筆を以て調子丸に、罪を負せん計略と、心に納め歸りしと、父が詞に眉をひそめ、仰の通り調子丸か日頃の忠節、よもやとは思へども、そこが下郎の淺ましさ、金銀に眼くれ、姫君を奪はせしと思ひ合する青侍が注進、大切の御供先、神主方に所用ありと、其場をはづすは合點行ず、書翰といひ樣子といひ、彼奴が所爲に極つたりと、聞て川勝地團駄踏み、日頃より如才なき賴母敷若者、よもやと猶豫は我誤り、臍をかんでもかへらぬ後悔、姫君は女儀といひ、戀慕の者の業と見ゆれば、お命には別條あるまじ、去にても天にも地にも、かけかへなき宮の御無難、まだしも此上の悅びぞや、佞人はびこる都の內、置奉るは危し〳〵、我に替つて汝等夫婦、人知れぬ片山里へ、一先供奉したてまつり、時節を待て御位に、即奉るが良計ぞや、サヽ、一寸も早く、心せく早立退よと急立川勝、存夫婦は夢とも辨へず、コハ思ひかけなき御詞、父を見捨て我々夫婦何國へ立退まをすべき、存も寄ずといふを打消、ヤア愚々、のぶかに射込し此尖矢、娑婆の名殘も今しばし、終焉ちかき某に、心殘さず疾落よ、イヤ〳〵縱令ぞのやうに仰あるとても、大事の〳〵舅御樣、何と見

原に賴まれしとは、何を以ての御一言、ヤアいふな〳〵、汝が佞人合體は、證跡あつて能知たり、ムヽ其證據とは、ホヽヲ左程潔白なる調子丸、佞人原へ內通の、此一通は何故書たと、投出す書翰押開き、讀も終らず仰天し、ムヽ我手に見まがふ此贋筆、是にも思ひ合せたる、某が身の申譯、一通り御聞あれ、今日姬のお供なし、三輪の社へ詣づる折しも、神主方よりコレ此一通、手跡は紛はぬ川勝公、何か御用の仔細あり、神主方へ參るべしと、見覺ある此直筆、取物も取敢ず、神主方へ立越れば、跡方もなき假り事、コハ心得ずと立戾れば、早姬君はましまさず、南無三寶と心も空、そこよ爰よと尋れども、かいくれ見えさせ給はぬ故、生面下に歸りしは、委細の譯を申上、腹かつさばかん拙者が覺悟、我筆跡に贋たる、此一通を見るに付、偖は川勝公の書翰といひしも、曲者の仕業かと、聞より川勝、ヤア〳〵ナヽ何といふ、スリヤ神主方へ參るべしと、我手を寫す此一通、偖は偖はと兩人が、手に取上て無念の吐息、エヽ仕なしたり〳〵、誤つて疑ふ時は、人と倶に亡ぶとかや、我手に入りし其密書、偽筆の程も計がたしと、一應決着せざりしかど、其場をはづすは二心と、思ひ込だは川勝が、一生の誤ぞや、あつたらしき若者を、むざ〳〵殺す殘念さよと、悔歎けば摺寄て、スリヤお疑晴れましたか、ハアヽ嬉しやかたじけなや、ヲヽ我も宮のお供なし、歸りまをしの其折柄、相手は知れぬ一ツの矢、乳母といひ我腦腹、ムヽ夫で聞えし御痛手、シテ宮樣のお行衞は、ヲヽ忰夫婦に御供させ、と

き淚、一足行ては振返り、二足行ては立戻り、見返る夫婦、川勝が影見ゆるまで延上り、見送り見返り出て行く、コリャ宮樣の御事を、くれ〴〵も大事にせよ、賴む〳〵と死る今はの際までも、忠義に碎く心の誠、アヽモウいたか、、習はぬ旅に足弱連、急いで道で怪我するなよ、アおいとしや若宮樣、畢竟御幼稚なればこそ、御歎もましまさね、賴み少なき世の中に、何國の誰をあてどとも、行衞定めぬ御身の上、夫婦の者の心遣、嘸や苦勞に身も勞れん、不便の者やと後先を、思ひ廻せば胸せまり、覺えずわつと聲立て、こたへ〴〵し溜淚、深山の奥の雪解て、漲り落る如くなり、永き日も、早暮近く、胸も闇暗調子丸、息もすた〳〵立戻り、ヤアそこにおはすは川勝公にてましますか、何故に其深手と、いはせも果ず、ヤア待て居た調子丸、牛におとりし牛飼の人畜生、天罸思ひ知らさんと、いふもいら立川勝が、無念に凝たる鋭き太刀筋、無刀のあしらひ調子丸、ヤレ待給へも聞ばこそ、肋をかけて肩先より、ばらりずんと切下られ、ウンとのめるを疊かけ、踏込〳〵數ケ所の深手、ヤレ暫くお赦しあれと、いふもいはせず附廻され、是非に及ばず調子丸、一腰投出し兩手を上、ヤア筋によつては一命を、さら〳〵惜む某ならず、何故の御手討、仔細をお聞せ下されよと、いふ顏ハッタト怒の面色、ヤア何故とはしらじ〳〵しい、サア何奴に賴まれて、姫君を盜ませた、眞直に白狀せよと、髻を取て捻伏れど、身に覺なき調子丸、コハ情なき御詞、姫君を奪はれては、いかにも拙者が落度なれども、佞人

丁稚め、儕が供して綾歌は、まろが后に立んため、まつた一色の拵へ狀は、儕等二人同士討させん我計畧、一ばい喰つてよい樣〳〵、序に宮めを捻り殺さんと來りしに、思ひの外先へ廻つて、豐勝めが連て退しは殘念なれど、我勢を以て尋出さんは、袋の鼠籠の鳥、ナント肝が潰れたかと、始てわかす謀計は、往昔守屋大臣に、遙上趣す逆臣なり、聞く兩人は無念の齒嚙、エヽたばかられしか奇怪也、かゝる佞人と知ならば、疾に仕樣もあるべきに、今更いふて詮なきこと、强惡不敵の蝦夷大臣、思ひ知れやと詰寄れば、かんらゝゝからと笑ひ、べら坊ぞめがもがくは〳〵、是より不日に旗上して、帝を取て押込、我一天の主と成り、人王三十五代の帝蝦夷天王、一天萬乘の御高座に押上る此尊體、切れたいがまアならぬ、馬鹿つくすなと冷笑ふ、ヤア聞ば聞ほど憎い雜言、王位を犯す叛逆人、觀念せよと切付るを、發矢と蹴倒す早速の蝦夷、川勝すかさず打かゝる、刄をもぎつて切下られ、無念〳〵のもだえ死、其間に起立調子丸、切てかゝるをひつぱづし、よろぼふ所を蹈倒し、起しも立ず止の刀、哀れ敢果なき二人が最期、無殘なりける次第なり、蝦夷は笑壺に入相の、兼て用意の家來ども、召の黑駒引立させ、先に進んで土師の連、イザ御歸舘と椽先に、馬引直せば、其儘ひらりと馬の脊の、撓めばかりに打跨り、乘出す足並しと〳〵、四の蹄に四夷八荒、踏したがへん手始吉、いそふれヤツト追立て、勇み進んで立歸る、舘の騷動聞よりも、取てかへす武成友成、馳込書院に二人

くに落し參らせたり、ハヽア御尤なる御分別、若宮の御安泰、せめて今はの悦びぞや、サア去ながら川勝公、今御最期有時は、世は常闇の天か下、萬民の歎きいかばかり、取分ていたはしきは、宮姫君の御身の末、何と成行き給ふべき、國柱の川勝公、すくふ醫療はなきことか、耆婆扁鵲が藥もがなと、歎も切なる忠義の詞、川勝涙にかきくれて、イヤ〳〵我は老人と云、所詮遁れぬ急所の痛手、存命思ひも寄ず、かへす〳〵も某が、思慮薄き老の一徹、花の盛の調子丸、末頼みある若者を、討たる我は天下の科人、サア存分に切さいなみ、せめて恨を晴してたべ、ヤレ勿體なし某こそ、有に甲斐なき牛飼づれ、冥加にあまる御詞、死出の山道、三途の川瀨御供し、せめて御恩を報せんと、いふも苦しき息遣い、去にても川勝公、我々をたばかりて、斯まで不覺を取せしは、ヲヽなみ〳〵ならぬ反間の謀、たばかられたる口惜さよ、そも何者の所爲なるぞと、うめき罵る後の方、ヲヽ其曲者爰にあり、尊顔拜したてまつれと、御簾引ちぎつて蝦夷の大臣、傍を睨んでつゝ立たり、兩人血走る眼を見開き、ヤア儕は是まで忠臣無二と見せかけしは、天下を望む謀計なるよな、ハヽヽ田氏たらんと狐鳴して、民の心をまどはせしは、毛唐人のまどろい計畧、夫よりは近道に、金錢を以て心をとらかし、町人百姓はいふに及ばず公家武家までも大半味方、今日小びつちよめを一矢にてと、思ふ矢先は逸たれど、二の矢はづれぬ儕が胸板、へゝ悔しいか〳〵、もがいてもモウ叶はぬ、コリヤ牛飼の素

第四

苟も義を後にして利を先とせば、奪はずんば饜ず、と孟子の金言宜るかな、蘇我の大臣蝦夷公、王位を奪ふ謀反の企、一天四海を一呑と、我慢の鼻も高圓山、岨陰に幔幕打せ、金巾子の冠袞龍の御衣、天子にかはらぬ其出立、雲に羽をのす兩翅、阿曇雲貫土師連、其外一味徒黨の公卿、所せきまで居並んで、廻る盃酒の海、うたてかりける催しなり、大臣寛々と左右を見廻し、當今推古天皇をぼつ下し、我天子の位に即んと、兼てより望みしかど、聖徳太子中臣なんど、佛法を以て人をなづけ、我大望の妨となる故、是非なく是迄で猶豫せしが、聖徳太子が死だを幸ひ、中臣めが預りし閻浮提金の觀音の像、先達て忍びを入て盗取らせ、中臣を科に落し、勅勘の身となしたれども、太子が小忰山脊の宮を守立、當今を太子に立、御位を譲らんと、秦の川勝調子丸なんど、邪魔になる奴原方便を以て殺し、山脊の宮中臣なんど、行方さへも知れず、誰憚る者もなく、謀叛一味の連判をなさんため、今日是へ招いたり、ソレ〳〵と有ければ、畏つて土師連、一ッの箱を携へ出、蓋を開いて取出すは、傍も輝く觀世音、手に携へてコレ見られよ、是こそは先達て、太子中臣相談し、武州豐島郡淺草村に安置せんと謀たる閻浮提金の觀世音、我君密に奪取置れしが、今日謀叛一味の連判、熊野の牛王も若輩らしく、湯起請も古ければ、いよ〳〵佛法に歸依せず、太子方へ心を寄ぬといふ證據のため、此佛を足

の死骸、ヤア川勝公には早御最期、願の綱も切れ果しと、兄弟白洲にどうと伏、暫し涙に咽びしが、思ひ返してイヤなに弟、今更悔んで甲斐なきこと、一先此場を立去つて、濱成殿に談合し、時節を待ん尤と、立歸らんとする所へ、蝦夷が家の子久留嶋團六、大勢引連どつと込入、ヤア〳〵者ども館の奴原皆殺と、我君の御指圖、手柄は仕勝働けと、下知に從ひ荒しこども、駈入る先に兄弟が、立塞つてどつこひどこい、蝦夷が家來と聞からは、川勝公の追善供養、弟合點か、合點と、引尻からげて二王立、團六いらつて、ヤア青葉も切ぬ毛二才か、支たてとは片腹〳〵、古いやつだか家來とも、かたつぱしから討て取れ、畏つたと無二無三、得物〳〵を引提〳〵、打てかゝるを渡り合、火花を散して三重戰ふたり、強力雙無の兄弟が、神變不思議の働きに、叶はぬ赦せと皆ちり〴〵、こらへ兼て團六が、切てかゝるを踏倒し、足は武成平は友成、エイヤ〳〵と引力に、胴よりさつと引切て、莞爾と笑つて立たりしは、凡人業とは見ざりける、道理なるかな末の世に、神と崇る兄弟が、踏出す足音どう〳〵、友成龍の勢あれば、武成虎の勇猛力、御所を睨んではら〳〵〳〵と、流す涙は誠なり、死行く秦の川勝は、適れ君に忠義なり、舍人が最期は無慙なり、二人は古今の勇士なりと、貴賤上下をおしなべて、感せぬものこそなかりけり

一刀に打て捨よ、隨分ぬかるな油斷すな、汝等は暫く休足仕れと、指圖に隨ひ一味の銘々、幕の内へぞ入にける、程もあらせず、佐伯眞人國村、長袴の裾踏したし、折目正しく入來れば連が下知に荒しこども、ばら／＼と追取卷、とつたとかゝるをじろりと見やりハテ心得ぬ、何故に此國村、繩かゝる覺なし、控へられよと突放し、さわらぬ體に行過る、又もとつたと組付を、左手右手へ取て投、猶もしづ／＼打通り、御座を見るより、ハヽヽハツトばかり恐れ入てひれ伏は、蝦夷は態とやはらかに、仰々しい皆引／＼、ムヽ國村、態とも呼寄んと思ひし處、能ぞ來りし太儀／＼、サヽ是へ／＼と差招き、我かね／＼大望を思ひ立、幸ひ今日は日柄もよければ、一天萬乘の位に卽んと、コレ見よ、天子に替らぬ此出立、サ其方は何とか思ふ、サ所存の程をいへ聞んと、裏問ふ詞國村は、猶も平伏手をつかへ、コハ新しき御諚かな、君に仕ゆる家來の身で、御主人の御出世を、歡ばざる者や候べき、君天子の御位に卽給ふは、此上もなき御悅、恐悅至極に存じたてまつり候と、何氣なく相述る、案に相違の雲貫は、横間よりしやくり出、イヤコレ國村、座なりの間に合いはずとも、心底殘らず有樣に、申上られよと、いふ顏尻目に打詠、コハ雲貫殿のお詞とも存ぜぬ、國村は武士で御座るぞ、生れて以來座なりの間に合、追從まをした覺はなし、心底を殘りなく、有體にいへなんどとは、そりや商人匹夫の詞武士の上には入ぬこと、ハヽヽヽと苦笑ひ、一本さゝれて引込雲貫、大臣詞を荒らけ、ヤア國

にかけ、蹈せんために持參せり、何れも是を蹈給はんや、いかに／＼とありければ、皆一同に詞を揃へ姥か丶たらしの佛の敎へ、固より信ずるに足ざれば、觀音も塊同然、是を蹈んに何の事と、事もなげなる顏色に、蝦夷はく／＼打頷き、ムヽ其詞を聞くからは、蹈するにも及ばねども、假初ならぬ大義の企、心を試すが第一なれば、我目の前で蹈せて見ん、ソレ／＼といふ所へ、取次の諸太夫罷出佐伯の國村參上せり、通し申さんやと伺へば、大臣眉に皺を寄、ヤア方々佐伯の國村は我譜代の家來なれども、日頃片意地なる生れ付、やゝもすれば仁義立、此度の謀叛きやつに知らさば諫るは必定と、是まで色にも出さゝれども、頓にけどりしと覺ゆれば、今日の連判を聞付、意見に來りしに違なし、コリヤ／＼雲貫、ソレゑい加減に云紛らして追返せと、流石底氣味惡工み、雲貫かぶり打振てコハ我君の御諚ながら、譬へ譜代の御家來にもせよ、心合ねば御大望の妨、是へ呼寄せ心底を搜り見て、いよ／＼心に背くならば、軍の血祭打殺か近道と、詞の尾に付土師連、コハ尤なる雲貫の御計ひ、御主人の御心に背く國村、御招もなきに參りしは、御推量の通り、ちんぷんかんの長談議、諫言せんため參つたと覺たり、所詮邪魔な國村、某參り三寸繩にく丶し上、御前へ引立をすべし、異議に及ばゝ討て捨ん、者共續と先に立、砂ふみ蹴立駈り行く、蝦夷後を打詠めコリヤ／＼雲貫、追付國村參るべし、其方は爰にあつて、渠めが心底虛實を伺ひ、いよ／＼一味同心ならずば、只

介抱にて都を落延、父聖德太子の所緣ある、攝津の國天王寺、社家の方に忍び居るよし承り、踏込で奪取り、アノ乘物へ連來り候と、聞て雲貫大きに悅び、ヲヽ手柄〳〵、嘸我君の御歡、褒美は追て御沙汰あらん、休足せよと追立やり、イデ我君へ申上んと、行んとする幕の內より立出る蝦夷大臣、ホヽ戀焦れた姬が來たとな、早く逢たい是へ〳〵、ハツトいらへて雲貫が、掛し繩綱てつとり早く、駕の戸明れは轉び出で、何のわかちも夢現、あやめも知らぬ綾歌姬、泣より外のことぞなき、蝦夷つく〴〵と打守り、兼て美人と聞及び、見ぬ戀にあこがれた綾歌姬、テモ偖も見事〳〵、我萬乘の位に即ども定まれる后もなし、そちは聖德太子が娘なれば、筋目といひ器量といひ、后に立て不足なし、今日より寢屋の伽、サア〳〵爰へと摺寄て、無理に手を取引寄る、かなしさこはさおづ〳〵と、身も振はれて後退り、自は中臣樣に、親々からの言號、外の人に靡いては、女の道に背くといひ、殿御に逢て言譯立ず、どうぞ赦して中臣樣の、おはする所へやつて下され、コレ情じや慈悲じやと手を合せ、わつと計りに泣叫ぶ、ムヽ何じや、言號の中臣に逢たいとな、コリヤヤイ、中臣めは觀音を失ふて、禁庭へ言譯立ず勅勘の身となり、行衛知れずの宿なし、大方乞食になつて居るか、但しは何處ぞでくたばつたか、世になき者を慕ふより、おれに靡けばお后樣、日本國の女の司、コレヽ氣をもませずと、サア〳〵寢間へ手入ずの初物、七十五日身の祈禱、我らもどうやら武者震ひ、コリヤ雲貫、氣轉を

村、汝常々書籍を好、道立する所存にて、我謀叛と聞ならば、唐の大和の引事にて、諷諫んと存の外、上ぬんめりの間に合、ヤ其手は喰はぬ、サア汝が腸を洗ひ、本心を顯はせと、烈しき詞ちつとも動せず、コハ存じよらざる御疑、和漢の書籍に眼を晒し、仁義を守る此國村故此度の思召立、恐悦至極と申上奉りまして御座る、彼殷の紂王無道なりしかば、周の武王是を討つ、臣下の身として主君を討は非道には似たれども、其例なきにしもあらず、當今推古天皇、聖徳太子がすゝめに依て、佛法を歸依し、日本神國の教をなみす、其無道の天子をほつ下し、君萬乘の大床に座し、天下の政の取行ひ、太平の世となし給はんは、文武の教理人の道なるを、理にくらき輩の、非道と思ひ猶豫するは、彼伯夷叔齊か首陽の下に餓たりし大海を耳かきではかる、イヤモ小さい了簡腹の皮、ハヽヽとあざけり笑ふ、懸河の辨舌、大臣雲貫口あんごり、顏と顏とを見合せて、暫し呆れて居たりしが、ナント聞たか雲貫、申詞に僞もなささうなハヽ、アいかにも左樣、馬には乘て見よ、人には添て見とよ申通り、仁義立する腐學者役に立ずの國村と、思ひの外なる掘出、一味連判に加へ、然るべうと相述れば、ヲヽ我も滿足皆の者にも引合せ、あれにて一獻イザ來れと、寛々として大臣は、二人を引連入にけり、時もこそあれ雲貫が郎等栗隈軍次、繩網かけし乘物釣らせ、息を切て馳來り、旦那〳〵と呼聲に、立出る阿曇の雲貫、ヲヽ軍次首尾は何とじや、されば候綾歌姫、去る三輪の騒動の砌、腰元が

が面白いと申す譯は、さはらば落ん玉笹の霰、どなたでもござれ〳〵、心よしは父なし子を產とやら、俗に申す助べいは、靡かせて面白からず、此姫君は言號ばかりで、まだ寢ぬ男に心中立は、女のきつすい戀の氏神、靡かせてお手に入ば、今いや〳〵とはる意地が、外へまはつてこつちのうまみ、爰を口說が戀の魂膽、夫ともお世話なしにアイ〳〵と、御意に從ふのがお好ならば、世に澤山な君傾城、ころび藝者を、召寄せられて事相濟、御麁相と申せし國村めが誤か、と花も實もある詞にぎつちり、ムヽさういへば聞えたが、此女は中臣に言號、主ある女に不義放埓、決て御無用なぞと意見しさうな其方が、我にすゝむる心底は、ハア此姫は聖德太子の姬宮、王位を出て遠からねども、人臣の中臣へ、言號せし其譯は、佛法好の信心仲間、太子の物好禁庭へ、中立ての言號、然に中臣、觀音を失なふて、勅勘の身となり、天上の札削られ、行衛知ねばサ死だも同然、いはば主なき寡女、后に立て苦しからず、此國村にお預あらば、姬君を口說落して、お手に入れんと、いふを差出る阿曇連貞、イヤそりやならぬ、御自分が內方は、秦の川勝が娘にて、此娘が家來なれば、女房の內緣罷ならぬ、ハヽヽ女房の緣に引れ、君の大事を疎略にする、國村ではござらぬと、二人が爭ひ蝦夷は目配、ソレ觀音ヲツト心得雲貫が、以前の佛像差出せば、サア國村、申詞に僞りなくば、此觀音を足にかけ、踏で見よと手詰の詞、何の猶豫も立寄て、さん〴〵に踏にじり、いま〳〵しい此佛像、見るも穢れ

きかして寢所の用意、どうもならぬとしなだるゝは、雨にしほれし萩の花、敷て臥猪の床の内思ひやるさへいた〳〵し、姫は正體泣倒れ、浮世の中に住人の、數も限もなけれども、有が中にも自ほど、かなしい物はよもあらじ、二親にはおくれ參らせ、言號の我夫は、お行衞知れず剰へ、賴みに思ふ川勝や、調子丸は敢ない最期、弟宮には生別れ、便なぎさの捨小舟、よる方もなき身の上を、あはれと思ひ見赦して、中臣樣に逢して下され、如何なる憂目にあふとても、靡くことはいやじや〳〵、いやじや〳〵と隙を見て、遁んとするを引捕へ、ヤアしぶとい女郎め天下を奪ふ蝦夷が勢、空飛鳥も睨み落す、こしやくな道立、詞を背き是非否とぬかしや切殺すサア〳〵どうじやと、短氣短慮の亂れ燒、じり〳〵と付廻され、アレヘ〳〵と逃廻るを、追詰〳〵、サア靡か、エヽ、但しいやか、エヽ、サどうじや〳〵とひらめく刄、姫は心も消入思ひ、どんな責に合ふとても、靡くことはいやじや〳〵、死でしまへば中臣樣へ申譯立、いつそ殺して下さんせ、ヲヽ望に任せ一討と、振上る刀の腕首、ヤア國村、樣子も知らず何故留た、ハアイヤあれにて委細承はる、此姫を殺されんとは、憚ながら我君の、御麁相かと存じ奉ります、ヤア我心に從はざる女、殺が麁相か誤か、ハアイヤ、御麁相とまをすはそのこと、拙者めは又意地強く、靡かぬ女が面白く、うまみがあるかと存ます、ヤアいはせて置ば種々のたは言、靡かぬ女が面白いとは、蝦夷をなぶるか嘲弄するか、ハアコハ恐れ多き御一言、靡かぬ

集り、ナント思やる皆の衆、どんな内でも長う勤りやあらの見えるものなれど、こなたのやうに旦那樣奥樣の、お氣が揃ふて、情深い結構な、御夫婦中の睦しいは、どこにもありやせまい、ヲイノ、似た者が夫婦になるといふて、梅に鶯牡丹に蝶、柳に燕卯の花に子規、お定りの取合、アイヤ〳〵、さうもいはれぬぞや、アノ美しいお姫樣に、蝦夷樣が惚るとは、不相應なことではないかいの、アヽイヱ〳〵われも繪にあること、また手入ずのお姫樣の、牡丹の蕾を念かける、獅子鼻の蝦夷樣、柳に梟梅に烏、アノ鼻でついいたら、今で流行の玄伯樣の、膏藥もらはごなるまい、わしらがやうな不自由な身でも、あんな男はいやじや〳〵、そんならいづそ雲貫樣にしやらぬか、エヽめつさうな。しがみ火鉢が呆れると、一度にどつと打笑ふ、そとかはり來る衣の香や、國村が妻の閨、しとやかに立出、ヲヽ皆の者ざわ〳〵と、浮世話も姬君のお慰みによからうが、誰ぞお傍に居てゐるかや、アイ、さつきにお姫樣の御意遊ばしますは、お經を書寫す其内は、氣が散れば惡い、皆次へいて休めとおつしやつてゞ御座ります、ヲヽマお氣のつきるにと、云つゝ襖押開けば、囚の身の置所、定めなき世の飛鳥川、昨日にかはる經机、寫は普門凡人の、御種ならぬ綾歌姬、時の不肖に命毛も、切るゝばかりの物思ひ、コレノ立膝、何日毎夜の心遣、川勝が娘のそなたなれども、夫に隨ふは女の道、今は蝦夷が譜代の家來、國村の妻なれば、分隔もあるべきを、昔のよしみと自を、身にかへての世話苦勞、ヲヽ嬉

と引摑み、谷底深く投込ば、蝦夷ほく〳〵打頷き、疑ひ晴れた此上は、姫を汝に預るぞ、口説落して我手に入れよ、今日の參會是まで〳〵、いざ歸らんと立出れば、御立ぞふと呼はる聲、連を始め一味の公卿、前後左右を取卷て、歩路を辿り立歸る、御後見送り國村は、家來參れと呼出し、姫君の御手をとり、我乘物へ乘參らせ、立歸らんとする所に、不思議や以前の谷底より、ハツトかゞやく光明に、國村は乾度目を付、アヽラ不思議や、最前捨たる觀音の尊像よりアレ〳〵〳〵、光明の輝くは、アラ〳〵不思議と兩手を組、またゝきもせず守り居る、猶も光明輝きて、觀世音の尊像は、東をさして飛去は、身の毛もよだつてさしもの國村、正法に奇特なしとは聞つれど、目前かゝる奇瑞を見る事、アヽラ、恐しやと虛空に目を付、呆然として詠め居る、小蔭にかくれし栗隱軍次踊出、イデ觀音を追駈て、落る處を見屆んと、勢ひ込で駈出すを、國村すかさず小柄の手裏劍、乘物ヤレ

第五

奈良の都の八重一重、實九重の花盛、見越の木々も年經て、わざとならざる枝振は、心床しき一搆、佐伯眞人國村が館には、綾歌姫を預りて、お氣の結ぼれ御病氣の、出もやせんと樣々に勦り傅き參らする、心遣ぞ賴もしき、御用の隙を樂みに、心に苦のない腰元ども、一ツ處へ寄

頃愛にしのだなる〳〵社へ歩みを運びて、七日なん〳〵なよへ、材木にけつまづかずに、むさいもの踏ずに、ヤレコリヤ錢やろきたないお方となんよへ、ハヽヽヽ此踊お望なら添まするが與勘平、先効能を知らないか、聞べいだがいふべいか、ねぶとや腫物、肩や腰の痛む所へ張たら與勘平、微塵もいつはり、ナイ〳〵〳〵と、かッつくばふ、甚興に入せ給へば、腰元どもはざわ〳〵と、ヲヽどれも〳〵太儀〳〵御褒美御酒はお次で下さる、サア〳〵てちへと案内に連、皆々一間へ入にける、程なく旦那お歸りと、呼次聲に妻の曙、腰元引連出向ふ、佐伯の眞人國村は、日々の出仕も事繁く、漸く御前を申の刻、日闌て歸る上下も、行儀正しき我家の内ホヽ與、留守に替る事もなく、姫君も御機嫌よいか、ハア御留守の内お姫樣、きまぐ〳〵御慰め申しても、固うき〳〵とも遊ばさず、お前はいつ〳〵より遲いお歸り、御所の樣子氣遣はしう存ます、サレバ〳〵、戀は思案の外とやら、主人蝦夷公姫君に戀慕深く、是非口說落せよと、今日もかはらず阿曇の雲貫、追付口說に見える筈、若靡かずば今日中、首討て立歸れよと嚴敷仰と、聞て驚く女房が、スリヤアノお姫樣の御命、ヤアめろ〳〵と未練の落涙、とくと奥にて言聞さん、イサ、イザ來れと打連て、常の居間へぞ入にける、人なき折を幸ひと、うそ〳〵何ふ齋藥賣、廣庭傳ひ前栽の、蔭に身をよせ忍び足、息を詰たる落椽先、心を配り氣を配る、一間の内に主の聲、御得心なき上は是非に及ばず、姫君の御首討たてまつらんと、聞て恂り、ヤ

しいぞや、川勝が死にやつてより、ちり〴〵の身の上、中臣様のお行衛を、尋ることは措置てそなたの弟豐勝夫婦は、弟宮を伴ひて、都を立退行衛も知れず、そなたも又父にはおくれ、弟には生別れ、心にあまるかなしみを、自に氣を落さすまいと、歎をかくす心根が、一倍いとしい〳〵と、身を知る雨に御袖を絞り給へば諸共に、胸までせきくる涙をば、呑込〳〵、ホヽヽ、又お姫様のきな〳〵とおむつがり、有爲轉變の世の習ひ、後先をくよ〳〵とお案じ遊ばし、大事のお身に御病氣でも出れば惡い、幸ひ夫も出仕の留守、何をがなお慰みと、今洛中で専ら流行、浮世藝者やをかしい物賣、御覽に入よと申付て置ました、サア〳〵女共、用意がよくば是へ通せと、差圖にざわつく腰元婢、襖立切御簾おろす、上を下へと立騷ぐ、程なく入來る切戸口、鉦打鳴し二人連、拍子とり〴〵噂の飴賣、形も揃ひの聲高く、偖若衆の色通ひ、紋日日柄とくる球數の、藝者女郎を買集、ひく三味の、あけも白歯のあどけなくびんしやん、強てひそる程かはいだア、かはいだア、かはいだ偖當世の立者は、仲藏幸四郎三津五郎、又坂東のきゝ者は、時に大谷友右衛門、贔負市川團十は、木場についでの親父分、其くせ年は若いだ、わかいだ〳〵、サア〳〵お買なされ名物飴お女中方のお上りなされて、紅鐵漿のはげぬ事又お腹へ入て其塩梅、好た男と雨の夜に、しつぽり抱れて寢た心地、お召なされとしやべりける、次へ出るはだいなしの、奴姿に狭箱、京より來る輿勘平膏藥、奈良の都はやう〳〵と、此

日〳〵來ると思ひ、出向もせぬ眞人國村、上使を安くあしらふなと、わめき散すこなたより、一間の障子開が、ほろ醉機嫌の千鳥足、銚子盃携へ出、コレハ〳〵雲貫樣、御役目とは申しながら、毎日〳〵御苦勞樣、アヽイヤ是奧方、苦勞は身共が役目、姫を預る國村、上使の來るに何故出ませぬ、近頃不躾千萬と、役目を甲にきめ付れば、ホヽヽ其お咎は御尤、夫も毎日の出仕、いつ迚も退りは遲く、どうやらコウ勞た樣に見えます故、マア酒一つとすゝめてもいや〳〵大事の御用がある、よしにせうの吞まいのと、モヲ〳〵生れ付の堅くろしさ、命があつての御奉公で御座んすと、私が酌で無理無體、寢酒一つに和いで、そんなら其方も一ツ吞みや、ちよつと押へて間の手を、しめて其儘轉び寢の、ホヽヽ本にあられもないことまで、お話申すも雲貫樣、御心安いに何事も、お赦しなされてお前もマア、お氣晴しに酒一つと、ほのめかしたる微醉の、機嫌上戸と見えにけり、アヽコレサコレ、酒所では御座らぬ、主人蝦夷公の御心かけられし綾歌姫、口說落して手に入れよと、大切の役目承はり、張良陳平が智慧をふるひ、每日〳〵口說て見れども、合點せぬ情張娘、此雲貫が足は擂子木、旦那殿の擂鉢はどな目をむき出し、是非今日中に合點せずば、首討て立歸れとの仰、今日が絕體絕命、手短に口說て見んと、立上るを押留、ヤモさう氣短におつしやつては、色事は出來ませぬ、本にマアお前は、生れて色事といふことを、なされたことはないさうな、ヤコレ奧方、餘り人を茶にな

なに姫君の御首とや、夫では折角心を盡し、忍び入たる甲斐もなし、一間へ踏込命限り、イヤ〳〵、急ては事を仕損ぜん、とくと樣子を伺んと、鯉口くつろげ身を堅め、差足拔足猶奧深く、忍び行く、思ひかけなき後より、下郎め待てと呼かけられ、ハツト驚き振返れば、すつくと立たる主の國村、すかさぬ氣轉の膏藥賣、根太や腫物に付たら與勘平、我等も早く歸つたが與勘平と云捨て立出る、武成待といふに恟り振返りしが、ハヽヽヽハレヤレ〳〵、ヤモ聞なれぬ名に恟り、何の事だとつぶやきて、又立出る、ヤア〳〵進中臣が家來、檜熊の郡領が悴武州淺草にて人となりし檜熊の次郎武成、遁れんとは卑怯者と、聲かけられて武成、つか〳〵と立歸り、主人中臣卿に言號の姫君を、奪取んと姿をやつし入込しに、斯見顯はされし上からは絕體絕命、サア尋常に姫君を渡すか、異儀に及ばゝ撫切と、反打て詰かくれば、ハヽヽヽ此國村が預りの綾歌姫、汝ごときが奪取んとは、猫の額にある物を、鼷鼠が念けがる、身の程知らぬ大膽者、ヤ及ばぬ望腹の皮、追付首討姫が死骸、望みならばとらせんと、惡口雜言たまりかね、椽先へ駈上り、疊かけて切付るを、心得たりと手練のあしらい、難なく刄物打落し、取て引伏、用意の早繩、高手小手、無念〳〵と齒嚙をなせば、下郎めがいはれぬ手向、コリヤ追付姫はナ、此世の暇、ヤ儕も冥途の供させんと、繩付宙に引立て、一間の內へぞ入にける、時しも表騷がしく、入來る阿曇の雲貫、上使の權柄のつさ〳〵、いかつがましく打通り、ヤア每

稽古して、口説落すがよささうな物の様に存ますと、云廻されてふはと乗、ハアヽコリヤ尤な様に存られます、シテどう致せば其稽古が、そんなら私が弟子に成て、色事の秘事口傳習ふお氣なら敎て上う、夫は近頃かたじけない、今日より色事の先生と仰ぎ願たてまつる、シテ先いかゞ仕つらん、エヽモさう四角四面ではどうも稽古がなりませぬ、マア其上下や大小を、ヲットヽ合點といふより早く、袴肩衣大小も、取て投やる丸腰白衣、ヲヽそれ／＼、是からが稽古始め、色と酒とは離れぬ中、マア／＼一ツ上つてから、アヽイヤ拙者深うは下されぬ、此大盃ではエヽ埒の明ぬ、夫では稽古は成ませぬ、アヽコレ然らば一ツおつぎなされ、ヲツトヽヽヽぐつと我呑の無意氣酒、憚りながら先生へ、イエ／＼さう堅くろしい盃は、請取ことはなりませぬ、そんなら最一ツ改めてと、早二ツ目は酒か酒、呑ほして下の置、サア／＼上う／＼アイわたしや下地かわるによつて、御酒は御免なされませ、イヤ／＼／＼夫れは御無理とだぶ／＼／＼、どうも急にはたべにくい、私が付さし憚りながら、お助なさつて下さんせ、ソレハ千万かたじけないが、御亭主が見たら呵らうぞや、何のアヽ酔倒れて奥に寢て居られます、ヤ夫はうまいとぐつとほす、助八盃とさをします、サア／＼上う、イヤモさう／＼はたべられぬ御免／＼、ヲヽ本にわたしが酌はお氣に入ぬ故、上らぬ筈と氣をもたれ、そんならたべると引受／＼、現たわいのどろ／＼目、まをし先生へ、何と身共などが様な無男にも、惚てくれてが

されいゝ、拙者とても岩木ならねば、色事も存て居る、毎晩宿で女房どもを抱て寢申す、ホヽヽ、内方の奥樣か、そりやお定まりの御夫婦中、朝夕の御膳も同然、色事とは申されませぬ、女郎藝子後家娘、腰元婢閨ひ者、互に思ひ思はれて、忍び合のか本の色事、其下地の稽古がなうてアノ生娘のお姫樣、口說落さうと思召は、憚りながら、ちと御麁相かと存じまする、ムヽ、コリヤ餘程六ヶ敷もので御座るの、成程身共も折〳〵の付合に、女郎を求めに參つても、いつとてもゝふられまする、又宿元の召使に、小容貌のよいやつかあれば、湯殿や人の見ぬ所で、ちよびと手を握つて見れば、味な身をして笑ふ故、シヤこいつ承知の助と、女房どもが寢息を伺ひこれさをやつて仕かければ、むく〳〵と起上つて、コレまをし旦那樣、慢なこと遊ばすと、奧樣へ告ますと、突そこなふた海鼠見る樣に、堅くなつては埓明ず、毎度すご〳〵歸つて、篤と思案すれば、いか樣色事の出來ぬも尤と存ずるは、某か顏を、瓦師かどうぞ、鬼瓦の手本にしたいと申した、夫故さつぱり思ひ切、悟道いたして罷在、夫御覽じませの、さういふことでお姫樣を口說うと思召は、ソリヤ三甫右衞門に十郎をさす樣なもの、蝦夷樣も腹立紛れ、合點せずは首討と、おつしやることはおつしやつても、根が惚て御座るお姫樣、首にしてお歸りなされた時、首討といふたはおぞし、夫程のこと得さとらぬ、アノ雲貫の不屆者、あいつの首を切てしまへ、と祟のくるは定のもの、ヤコレハサテ不氣味千萬、サアそんならマア色事の魂膽を

是は又かはつたお尋、尤御主人は大切なれども女の身は三界に家なし、親を捨ても連添夫に從ふは貞女の道、スリヤ夫より大切なものは、よもや外にはござんすまい、ムウさこそあらんと聲を上、ヤアヽヽ家來ども、云付置し科人を是へ引、ハツトいらへて引出す、無慘なるかな姫君は、見る目いぶせき縛り繩、かゝる試は又世にも、あらしこ共に引立られ、涙にわかち正體も、なくヽヽ庭に出給ふ、夫と見るより女房は、いとをしの御有樣と、駈寄を引留め、ヤア者共、皆引ヽヽと追立やり、コリヤ女房、今更云に及ばねど、そちは川勝が娘なれば、汝が爲にも主君の姫、又某は蛭夜公譜代の家來、主君の心に從はざる綾歌姫、今宵中に首討との主命某が討は安けれども、汝が爲には古主の姫君、人手にかくるも殘念ならん、最期の稱名お勸めをし、心よく首討て相渡せ、サ是にて討と腰刀、すらりと拔て投出せば、恟り仰天詰寄て、是岡村殿、私が爲にも御主といふこと知つて居ながら姫君の、御首討とは勿體ない、胴慾なこといはずとも、どうぞあなたを助ます、了簡はないかいなと、いふもおろヽヽ涙聲、サヽさうあらふ得討まい、左いふそちが心と知て、認置たる此一通、サ是を見よと差出す、手に取て、押開き、ヤアヽヽヽヽ是は去状暇の状、何科あつて私をば、ヤア何科とは狼狽者、たつた今そちが詞、主君より親よりも、連添夫が大切といふたでないか、其大切な某が詞に背く不届者但又首討か、離縁するかサアヽヽ何とゝきめ付られ、妻は身も世もあられぬ思ひ、今仰やつた

御座らうかな、無て何といたしませう、色事は氣でするど、器量には寄ませぬ、アノもたせぶりが憎らしいと、太股ふつゝり、アイタヽヽイヤモ、痛うても能痛い、首筋元からぞつとして、生れて合ぬ飛だ目に、逢た時には笠ぬげじや、是が勘忍なる物かと、ひつたり抱付後よりずつと出たる主の國村、襟髮摑んで二三間、投付られたも有頂天、漸と起上り、顔見て恂り、ヱヽ南無三と、逃んとするをヤどこえ〳〵、主ある女に不義ろひぐ、俤動くな眞二ツと、せり詰られて、アヽコレ〳〵〳〵、今のは本の出來心、眞平〳〵、コレ男が手を合して拜みまをす、斯までせば某が、命惜むに似たれども、密夫して切れたと申しては、餘り外聞宜うもなし、盜まれた貴樣も立ぬ、殊に寢たと申すではなし、本のさはり三百目、金に直して五兩簡、お暇まをすぎしよげになり、逃んとせしが待〳〵〳〵、大事のことを忘れて居た、おれは慥上使に來たのじや、イヤ〳〵此儘では歸られまいと、肩衣取て肩に打かけ、エヘン〳〵、上使の趣餘の儀にあらずと、力んで見ても氣味惡く、大小袴一くるめ、引抱て立上り、只今の御花、負相撲に下さると、こそ〳〵と逃歸る、後打詠め女房は、夫の傍に摺寄て、イヤまをし國村殿、お前の敎の通りにして、マア雲貫は歸したれど、案じらるゝは姫君のお身の上、マどうしやうと思召と、問はれて國村詞を正し、イヤなに女房、改めて其方に尋たい仔細ありと、いふは外のことでもない、何と連添夫が大切なか、又女ながらも相恩の、御主人が大切なか夫が聞たい

より、さつそくの國村手練の手裏劍、ウント計りに鄕內は、其儘息は絕にけり、見るに驚く稻目の兵太、逃しは立じと武成が、切込太刀先受とめる、飴の荷箱も眞二ッ、餘る刄に兵太が肩先袈裟にすつぱと切下せば、ぱつと血烟諸共に、箱の中より合圖の狼煙、焰々として立登れば、微に聞ゆる鐘太鼓、コハ〳〵いかにと驚く人々、國村は騷がぬ面色、斯わらんと期したる故、茨萱原切開き、兼て付置山手の拔道、夫をしるべに御供まをし、早立退と情の詞、武成ハット感し入、最前奥にて承はる、重々厚き志、仰に隨ひ立退ん、たとへ伏勢あるとても、切破つて通らんに、何條事のかたかるべき、サヽヽイサ御立とすゝむるにぞ、女房曙心も空、我々御供まをした後、蝦夷樣への言譯を、お前は何となされます、夫ばつかりが氣がゝりと、緣は切つても引さるゝ、夫思ひぞやるせなきヲヽ其言譯はマヅ斯と、いふより早く拔はなす、刀をぐつと弓手の脇、突込血汐に目も紅い、妻は元より姬君も、コハ〳〵いかにと呆るゝ武成、曙は氣も狂亂、姬君樣の御命、助け給ふが嬉しさに、蝦夷樣への言譯に、腹遊ばすといふことを、露塵程も氣の付ぬは、私が鈍な生れから、斯いふ覺悟といふ事を、何故明しては下さんせぬ、聞えぬ夫と姬諸共、取付縋れば、アヽイヤ〳〵、此國村は蝦夷が家來、姬君の爲に切腹はせぬ主人のために命を捨る、國村が所存一通り聞てたべ、情なや蝦夷公、惡逆日々に增長し、王位を奪ふ謀反の企、我に隱して一味連判、勿體なや觀世音の尊像を、土足にかけさせ誓を立る御

入譯に、一ツも無理はなけれども、十五の秋嫁入てより今日か日まで、一言の詞咎め不機嫌なお顏も見ねば、見られもせず、人も羨む夫婦中、仕落があつて去るゝなら、諦め樣もあるものを、厭もわかれもせぬ中で、義理に迫つて暇の狀、夫か悲しいつらいとて、現在お主の姫君のお首が討るゝものかいな、姫君樣も御機嫌よく、お前と緣も切ぬやう、思案工夫はないことかと、口說き歎けば姫君も、神佛にも見放され、果報拙き自ゆゑ、厭ぬ夫婦の中を裂く、未來の罪も恐しい、とても遁れぬ我命、そなたの手にかけ首討つて、夫婦中よう添ふてたべと、白洲にかつぱと打伏て、身も浮くばかりに見えにけり、國村は物をもいはず、ずんと立て泣沈む妻を引立庭におり、所詮首は得討まい、夫婦でないぞ緣切た、此家に置こと片時も叶はぬ、去なから、武士が女房を去に、暇の印なくては叶はじ、ハテ何をがな、ヲヽ夫よと、姫のいましめ引解き、サア暇の印、おん供申せと思ひかけなき一言に、二人は呆れて詞も出す、夫の心は知ねども、只伏拜むばかりなり、サア時うつゝて人目に立ば、我志も水の泡サア〳〵行け〳〵スリヤ姫君をお助申し、私を去て立退せ、ヲヽサそこらへ出ればまだ外に、力になる道連もあらう、サ早く〳〵とせり立折から、始終聞たる二人の飴賣、小陰より踊出、蝦夷公の命を受け稻目兵太石塚鄕內、飴賣と身をやつし、忍び入て皆聞いた、此趣を注進と、駈行く向ふへ武成が、さうはさせぬと顯れ出、二人を相手に切付れば、まつかせ合點と兩人が、拔合せたる後

ぬ、谺に響く鐘太鼓、夫かあらぬか法の聲、無常の風と諸共に別れて、こそは三重出て行く

第六　道行夢路新枕

戀しさの、積り〳〵て寢やの戸を、漏て胡蝶の夢にさへ、忘れもやらぬ俤の、見しやそれぞとわかぬ間に、雲井を出し落人の、心盡しはより糸の、もつれて解けぬ綾歌姫、思ひ合ふたる中臣に、不思議にめぐりおふ鳥の、羽翼重ねし妹脊鶴、霞む外山やあきしの丶、里は寢よげの若草に、休ふ袖の朝ぼらけ、東路さして鳥が鳴く、なれにし奈良の七重八重、つい九重も隔りて、振さけ見れば伊勢の海、浪間を分る蜑小舟、礒はうない小松の葉、ちゝりちり〳〵ちりひぢの、泥は廣き春の野に、菫たんぽゝ萌出る、つくしの筆のちらし書、ちらす白ゆふ神かけて、本の女夫に鳴見潟、もしや心のふた川と、案じ過しの花ぐもり、日影の御身をいつしかに、尋求むる御俤の、色はちり行山吹の、下行く水の眞砂原、濱松風の音さへも、わはや追人と見返れば、心にかゝる山の端へ、入相近き旅人の、宿り爭ふむら雀、泊り〳〵のうかれ女が、引く三味線の蝶々に、さまよ、戀人脊戸口に、立て叩く月の影、思はせ振の憎らしや、本にかへ、さうじやえ〳〵、さまよ、娘の門口に、立て卷たる機の糸、浮ぬ顔付にくらしや、本にかへ、さうじやえ〳〵、うたふも一夜流の身、夫に引かへ自は、言號ある殿御さへ、文のたよりも音信も、

催し、聞捨られぬ御大事、御諫言をしても、飜へさぬ御振舞、其上主ある此姫君に不義放埒揃に揃ふ大惡無道、頓て報はん天の責、主君の憂目を見んよりも、腹かき切んと幾度か、思ひ立は立たれど、某空しくなるならば、佞人共の謀に落入て、犬死せんも口惜と、詞を工に言廻し、姫君を預る其時より、何卒落し參らせて、責て主君の惡名を、一ツなりとも雪ぎなば、寸志の忠義と思へども、女房の緣に引れ、助しと云れては、尸の耻辱と思ふより、厭ぬ夫婦の緣を切、コリヤ他人となつて助しぞや、かゝる術をなさんため、勿躰なくも御佛を、土足にかけし我身の罪、未來は焦熱八寒の、苦しみ請るも主君の爲、推量われ武成と、忠義に凝たる武士の、淚に血汐を争へり、妻は正體泣くづおれ、常々からも御主人を、大事〳〵と一筋に、誠を照す天道樣。鏡も見えぬか曇つたか、神や佛も恨しい、如何なる人が武士の、忠義と云物拵へて、斯る憂目を見するぞと、譯も淚に取亂し、前後不覺に泣沈む、理り責てあはれなり、ヤア未練なり女房、アレ〳〵近付鉦太鼓、無益の歎に隙取て、姫君を奪ひ取れ、某が志無足にするかヤアたわけ者、武成も何猶豫、早々姫の御供と、詞にハット心付、ハアヽ誤つたり實誠、觀世音の尊像と、搜し出して御主人の、再び世に出たまふまで、我古鄕の武藏野の、淺草村の隱家へ、奧方諸共御供と、二人を伴ひ立出る、此世の別れ今暫しと、縋る曙明やらぬ、心の闇に綾歌姫、果し淚に吳竹の、臥床定めぬ旅の空、手負は西方極樂世界、爰を去ること遠から

中々と御脊中を、撫つ擦りつ勦れば、やう〳〵心押しづめ、邊り見廻し〳〵て、偖は夢にてありしよな、戀し〳〵と思ひ寢の、中臣樣に廻り合、倶に東の旅の空、憂が中にも嬉しさは、明暮思ふかず〳〵の、其言の葉も胴慾に、振捨給ふ我夫の、後を慕ふと思ひしが、夢であつたかなつかしや、最一度見たい御顔せ、なぜ夢ならば何時までも、覺ずにゐつてはくれぬぞと、返らぬことをかき口說、焦れ歎かせ給ふにぞ、お道理樣やと瞽も、倶に涙にくれけるが、夫の最期もどふぞして、中臣樣にお前をば、添せましたい志、夫ゆゑに私も、武成殿と倶々に、東へ御供申しますも、御夫婦にさせましたいばかり、必氣遣遊ばしますなや、去ながら昨日馬入とやらの川端で、蝦夷の追手に取卷れ、武成殿は敵を防ぎ後より追付、姫君をお供して落延よと詞に從ひ、爰までは來れども、ならはせ給はぬうき旅路、御身足も痛みませうと、此辻堂にやすらひて、待合す內お前樣も、私も倶に寢氣の來たは、旅のつかれに日頃から、戀し〳〵と思召、中臣樣を御覽じたも、御尤で御座ります、とはいふもの丶おいたはしや、屛風襖の繪ならでは、しろし召れぬ山坂の、風さへよけぬ辻堂に、お召の儘の旅枕、草の褥に御寢なるとは、偖も〳〵あぢきなき、世の有樣やとばかりにて、御手を取てさめ〴〵と、果し涙は春の雨、いと丶哀を添ぬらん、折から同勢引具して、蝦夷が家來市倉字惣太、斯と見るより辻堂を、追取卷て大音上、ヤア主人の心懸られたる、綾歌姫を連退たは、不忠もの丶國村が女房よな、追懸

泣て暮せし一年の、花も紅葉も目に付ず、いつ咲たやら散たやら、胸に思ひは有明の、盡ぬ赤繩を憎らしや、仇なる雲におはばれて、斯る憂身の旅の空、不便とも可愛とも、思ふて給はれ我夫と、膝に凭れてかこち言、恨み歎かせ給ふにぞ、中臣卿も打しほれ、世になき吾を左程まで、思ふて下さる志、忘れは置じ去ながら、勅勘御免なき内は、添れぬ縁と諦て、蝦夷の公に身を任せ、御身うきめを遁れてたべ、さら／＼恨と思はじと、宣ふ顏をつれ／＼と、姫は見る目に涙ぐみ、エゝうたての御胴慾な、姫御前の身のたしなみは、親の赦した殿御より、仇し枕はかはさじと、心に誓いつまでも、立通す氣を情ない、蝦夷の公に身を任せ、何とながらへ居られうぞ、むごいつれない中臣樣、千鳥を友に浪こゆる、あら磯島も梅知らぬ、國の果でも厭やせぬ、連て退てと一筋に、思ひ詰たる花に蝶、はなれがたなき夕日影、ヲゝ理りながら我とても、世を忍ぶ身に行先の、人目の里は赦すまじ、さらばとばかり振きる袖、コレのう暫と縋れども、すがる甲斐なき山かつら、明行く空に三保の松、富士の雪風さら／＼／＼、ひるかへしたるくれないの、裾もはら／＼しどけなき、草の枕に旅寢の夢、覺て後なき三重はかなさよ、所の名さい堺木と、武藏相摸の兩國を、分る印の辻堂に、御いたはしや綾歌姫、曙一人が傳きて、嵐をふせぐ菅の笠、顏をかくして夢結ぶ、世の成行ぞ是非なけれ、のうコレ我夫／＼と、おそはれ走り出たまへば、曙驚き抱留、コレ／＼まをしお姫樣／＼、お心が付ましたか、

ばしませ。死る命は惜からねど、只さへ物うき旅の空、傳く者もちり〴〵に、生別れ死別れ、無お便があるまいと、思ひ廻せば死ともない、死ともないと思へども、最早心がきえ〴〵と、引入るやうに成たれば、責て息ある其内に、片時も爰を落延てたべ、早う〳〵と云聲も、頼み少なき其有様、姫はあるにもあられぬ思ひ、のういとをしや淺猿や、連添夫に死別れ、便なき身も自を、介抱してのうき旅路、心づくしの其上に、刃にかゝりをちこちの、知人もなき道野邊の、土となる身のいたはしや、國村といひ其方といひ、二人が二人自故、命を捨る恩の程、いつの世にかは報ずべき、中臣様と諸共に、世にも出なばそなたの菩提、此辻堂の地藏尊、一字の堂を供養せん、及にかゝり死する身の、迷を晴して死でたも、くげんを導き給はれと、佛を頼み手負に縋り、只願くは地藏尊、ならふことならどうぞして、命を助けてたび給へ、コレ〳〵曙そなたに別れてゐてどさへ、何所をせうどに行べきと、我身のうさと別れ路の、涙々の境木や、今に殘りて曙が、菩提の爲といちじるき、燒餅坂の山傳ひ、伺寄たる市倉宇惣太、サアしてやつたと引立れば、喃かなしやと姫君の、聲に驚く曙が、くらむ心を取直し、切てかゝるもよろ〳〵〳〵、面倒なと市倉が、片手なぐりも請はづし、かつぱと伏ば姫君を、宙に引立馳行く向ふへ、敵を切抜け武成が、心も空に馳來り、飛かゝつて姫君奪ひ取、がんづか摑んで引くりかへし、大地へどうと打付れば、手負の曙乘かゝり、恨の太刀先ずだ〳〵切、ぐつと留

て打殺し、姫を奪ひ取連歸れと、我君の仰をうけ、此街道を追懸しに、武成めが手強働き、相役兵馬に彼奴めを渡し、後を慕ふて此所へ出合ふたは百年目、サア姫を渡して縄かゝれ、何と〳〵と呼はつたり、ヤア事をかしい毛才六、おのらが様なへろ〳〵武士、幾人あつても人形も同然、微塵もこつちの苦にならぬ、曙がお供した姫君様、欲くは首から置て行きや、ヤア延過ためろさいめ、息の根留んと一時に、切てかゝるを事ともせず、弓手にはらひ馬手にうけ、飛違へ切開き、男勝りのかい〳〵しく、忠義に凝つたる太刀先刄先切、立て〳〵追て行く、後に姫君ハア〳〵と、長追しやんな戻つてたも。アヽあぶない、アヽあぶない、エヽ此武成は何故遅い、曙一人にあの大勢、もしものことがあつたらば、自は何とせう、コレのうこれと身をあせり、叫び給へど、甲斐もあらしに、聞ゆる太刀音人音、聞たび〳〵に身をひやす、千々の思ひも紅の、血汐に染る曙が、數ケ所の手疵刀を杖、よろぼい〳〵立歸れば、姫は見るより氣もきえ〳〵、のういとをしや悲やと、取付すがり泣給ふ、手負は息をほつとつき、お姫様が、お身にお怪我は御座りませぬか、ハアヽ嬉しやかたじけなや、コレまをし泣て御座る處じやない、又も敵の來ぬうちに、片時も早う此道を、一足も落延て、情ある家を頼んで御身を忍び、武成殿の見えるのを、お待合せなされませ、私が御供いたしたけれど、此深手では叶ふまじ、爰に殘つて敵を防ぎ、命があらばどうぞして、又もやお目にかゝりませう、とは思へども、大方是が今生の。お暇乞で御座りませう、随分お命恙なう、中臣様にめぐり逢、目出たう祝言遊

お乳をお貸まをしやいの、其代そなたには、好物やらうと針箱より、でん〳〵太鼓ふり鼓、起上り小法師、ヤころ〳〵、遊びに餘念七轉び、八起といへる世の中の、諺はありながら、誰わすらう聖德太子の御若宮、お乳姆の氏系圖も、撰にえらむ御身なるに、蝦夷がために世をせばめられ、斯淺ましきあばら家にて、悴が乳の呑殘り、ハヽア勿體なや、恐れ多やと、そゞろ涙にくれけるが、ハヽヽ又ひよんな事を思ひ出した、ヤ是女房ども、吾儕も聞て居やつた通、最前の醫者の詞、段々と重る御病氣、此儘では直るまい、仕方があらうといはれたは、人參を入うといふことであらうと、サ推量はしたれども、買べき方便もなければ、押てだまつて居は居たが、重つては取返しがならぬ、夫婦の者が身を賣てなりとも、人參を調へ上て見たい、サイナ、私もそう思ふた故、心用意と納戸より、取出す風呂敷包、ムヽ都を立退其時も、心せかれて用意も薄く、永の流浪の其内に、何も角も賣喰、三ツ四ツ殘る古着まで、拾ひ集て沖の石、乾く間を待洗濯さへ、することとならぬ身の上にて、心用意の一包とは、合點行ずと引解き、ヤコリヤ是そなたの下着、段々寒うなる時節、是脫でたまるものか、テモマアめつさうな和郎ではあるわいの、イヽエイナ、若宮樣の御病氣、捨置て若も重つた其時は、悔んで返らぬ後の歎き、お主の爲には我身を捨、子を殺しても忠義を立るが武士の習、まして一重の此小袖、脫でも後に御主人の、御恩を厚く着て居ると、思へば寒うも御座りませぬ、片時も早く人參を調

をさすがにも、武士の妻なる健氣のはたらき、ホヽヲ出かされたと武成が、聲に落着心のたるみ、アヽ嬉しやと一言が、此世の名殘わだし野の、露と消行く三重うき身かや

第七

世をうらむ、氣は播磨潟斑鳩の、村はまだらの町並に、透間の風のやゝ寒さ、秦の豐勝が埴生の住居、聖德太子の忘れ紀念、山脊の宮を傅きて、種々の難義に相生の、双子とはいひくろめても、くろめ兼たるかせ世帶、わけて女房浮橋が、仕付もなれぬ賤の業、さいつ頃より若宮の、御不例何と病身より、見るめ刈てふ蜑ならで、墻だれ衣前垂の、日も暮かゝる秋の野の、虫も貧苦を悔りて、繼褄させとや鳴ならん、豐勝傍へさし寄て、ヤコレ女房ども、さつきに上た加減の御藥、御容體はどうじやの、サイナア、あのお藥を上てから、大分お足も暖り、すや〳〵と御寢なります、ムウ夫は重疊、そんならお乳を上て見や、アイといらへて女房が、乳房を含め參らすれば、ヲヽ大分お乳の上りぶりが能ような、アヽソレ〳〵、又坊主めが邪魔しをる、おれが抱うと手を出せば、久丸はやんちや聲、坊が大事のうま〳〵を、呑すことはいやじや〳〵、きかん〳〵と足摺に、こいつ意地のはつた坊主め、こつちへこいと手を取れば、アヽコレイナア其樣に荒けなうさしやんすと、猶逆立てやかましい、コレ坊、ちつとの間此坊樣に、

りでおりそなものと、見やる表へ息せきと、小首傾け立歸る、豊勝がくつたく顔、ヲヽ待兼て居ましたわいの、人參は調ふたかへ、サレバ〳〵、彼品を代なして人參を調へ、醫者の方へ往て相談して見たれば、仕方があらうといふたのは、人參のことではない、全体アノ病根は、一人の乳を二人で吞、一人の子は丈夫にて、乳の吸も強ゆゑ、能所を皆吸出し、段々太つて息才な、今一人は生質の虚弱な上、麻疹後の弱が直らず、乳の吸が甲斐なく、すひからした後を吞故、段々と衰へてアノ病、是が募つて疳になれば療治はない、二人の子を別々に、育さへすりや快氣する、仕方といふは此事と、存の外なる醫者の詞、折角吾身か心を盡しやつた、人參も無に成たと、聞て女房當惑し、そんならどうがよござんしよ、サレバサ、己は道々篤と思案を極て來た、ヤコレ女房、何であらうとおれがいふてと吞くまい、驚くまいと誓言が聞たい、ヱ、是は又改まつたお詞、夫に隨ふは女の道、誓言は立ぬとても、いやさ、どうあらうと誓言立ちやれと、いふに不審は晴ねども、アイ、何々の誓文、ムヽそんならからうと脇差引拔、我子の胸先突付る、女房驚き、コレ氣が違ふたかこちの人、何科あつて久丸を、サヽヽ、誓言立は、サ爰の事、二ツや三ツの此忰、科のあらう樣もなく、假令科があつたりとも、身にかへても助るが親の慈悲、最前醫者のいふ通り、一人の乳を二人で吞に、若宮はひがいす、此坊主めは丈夫な生れ、乳の吸樣が違ふによつて、若宮のコレ此御病氣、元來乳母を置力はなく、里子に賴

へて來て下さんせと、お主思ひの烈女の操、夫はほろりと涙を滾し、ヲヽ可愛や〳〵ナア、不運な夫に連添ゆゑ、いかい苦勞をしやるのう、そんならいて來う、隨分と若宮樣に氣を付さやと、思ひを包む風呂敷に、かゝる涙の玉鉾の、道を急いで出て行く、ヲヽ主とした事が、日が暮たに小提燈、點しては行かしやんせず、暗うて道で困りなさろと、云つゝ立て戶を引立、灯ともす頃を商賣の、夜明と思ふ荷賣、温飩蕎麥切、入麪や素麪、呼はり〳〵此家の門口、くわらりと明て、ホヽお家樣、坊樣の氣色はよいかな、一人でさへ話世な子供、双子を育るはもう大底なことではあるまい、今出かけで暖な、蕎麥でも温飩でも上りませんか、錢はいつでもようごんす、ヲヽ惣兵衞樣のいつも〳〵、深切にかたじけなう御座んすが、飯も焚て置ましたれば、今夜はよしに致しませう、やそんならモウ參りませう、モほんに〳〵わしらが商賣も、風鈴組の何のとて、段々と仲間がふへて、や盛が惡いの、下地が能ないの、何の角のとて小言いふ癖、やゝともすれば喰遁におひます、油斷のならぬ世の中、そしてマア御亭主樣は御留守さうな、夜よなかまで御精がでやんすの、イヽエイナ此坊が煩ふ故、稼も止て醫者樣へ、藥の相談に參られました、夫はいかいお心遣、宜しう心得て下さりませ、歸りに又寄ませうと、いひつゝ出て門口から、温飩蕎麥切〳〵、次の町へと賣て行く、後に女房獨言、本に浮世に鬼はないと、馴染も薄いに惣兵衞殿、ちよつちよと寄て深切ぶり、ソレハさうとこちの人、もうお歸

明ぬと門口へ、突出して後ひつしやり、サア〳〵行きやれ、アイアイと、歩むも夢の心地にて、二足三足夜嵐の、身にしみ綿も薄布子、うすき親子の契ぞと、思へば夫も諸共に、泣たい所を喰しばり、ヱヽまだ行ぬかと、聲に門の戸そつと明、呵る振して差覗く、妻はやう〳〵氣を取直し、ヲヽさうじや、お主樣にはかへられぬと、思ひ切ても行き惱む、子ゆゑの闇の後髮、引るゝ恩愛すゝむは忠義、心は二筋一筋道、行かう人聲物音も、若や夫が呼とゞめ、よしにといふかと振返り、見れば我家も遠ざかり、次第〳〵に町並も、後は遙に鳴子引、秋の田面の假初に、歩くともなく行くともなく、袖に涙の露寒さ、冬を隣の村境、紫苑龍膽女郎花、萩もあらはにほら〳〵と、躓く石の玉柏、二ツ三ツ四ツ辻堂にやう〳〵辿り着にけり、母は邊を見廻して、我子をそつと抱上、心も闇の星明、顏打守り〳〵、暫し涙にくれけるが、ノウ久丸、親子一世の別れじや程にの、やんちやいはずとつくりと、能乳を呑でたもや、そなたがあつては此乳が、若宮樣へ思ふ樣に上られず、御病氣が直らぬゆゑ、夫で捨子にするのじやわいの、うき世の義理にからまれて、西も東も知らぬ子を、捨るも忠義御主人の、お命助ん其爲と、稚心に聞譯て、コレ、此母や父樣を、恨んでばしたもるなや、とはいへ鳥類畜類さへ、啄み與へ乳を含、其身をいとはず子をかばい、養育するが天の道、いかに忠義といへばとて、一人の我子を捨るとは、鳥獸にも劣たか、世が世の時の綾錦、金襴緞子に引かへて、見る目いぶせき樒柑

むわてもなし、所詮此悴を殺して仕まひ、宮様一人になる時は、乳を十分に上る故、御病氣か直らうかと、サ思ひ付て殺のじや、お主の爲には我身を捨、子を殺しても忠義を立るが、武士の習と、ソレ最前もいふたじやないか、まさかの時は卑怯の留ざま、夫でも武士の女房かと、思ひ詰たる夫の魂、アイ成程〱其お呵は無理ならねど、よう思ふても見やしやんせ、舅御様はお果遊ばす、只一人の姉御様は、日外道にて別れし後にて、敵なくならせ給ふと聞けば、殘る血筋は、コレ〱コレイナ此子ばかり、蝶よ花よと明暮に、貧苦も忘れてくらすのも、此子一人がある故ぞや、何ぼお主の爲じやとて、殺すといふは無得心、外に仕様はないことか、コレ、思案仕替て下さんせ、やいのやいのと取縋れば、夫も流石恩愛に、刄金もなまり手も痺れ、千々に碎くる胸の内、しばし猶豫居たりしが、ハアヽさうじや、一圖に迫る心より、殺さうとまで思ひ詰たは、我ながら麁忽〱、ムウ子を捨る藪とやらいふ世の譬、今一思ひに殺さんより、捨子となさば運に叶ひ、命助り万に一ツ、廻り逢まい物でもない、ヲヽさうじやと納戸より、反古に入たる樒柑籠、責て是をと羽織打敷すかし乗、人の見ぬ間と駈出すを、女房頓て押とゞめ、親子一世の暇乞、名殘に乳も呑せたい、私をやつて下さんせ、ヲヽ夫はさうなりとも、じやがつひ近所へ捨ては、後の詮議が八釜しい、村はづれの辻堂に捨置て、思ひ切て早く歸りやれ、アイ〱といらへて樒柑籠、請取手先もふるはれて、わつとばかりに取亂す、ヱヽ埒の

こか爰かと暗まぎれ、捜しまはれど何國にも、犬狼にも喰れしか、ハアしなしたり不便やと、夫婦はどうと倒れ伏、正體もなき折からに、遙に聞ゆる數多の足音高提燈、コハ何事と、驚く夫婦は蹠持足、宮樣の御身の上が氣遣はし、イザ歸らんと心も空、泣々我家へ立歸る

第八

ヤアいか程に働くども、多勢を以て取圍めば、迚も叶はぬ汝が手向、聖徳太子が小悴由希の宮、此内に圍ひ置條訴人あつて明白、討取て來れよと蝦夷公の命を受、土師の連が向ふたからは、遁れぬ所と覺悟して、首討て渡さは、かくまふた科赦してくれん、あらがはゞ目に物見せん、サいかに〳〵と手詰の詞、詮方盡て豐勝は、どつかと座し、ハア是非に及ばぬ此場の時宜、いかにも我首討てお渡し申さん。去ながら、人間の種ならぬ若宮の御首、むざ〳〵討んも恐れ多し、御召物を改め、責て末期の香花、暫時の猶豫、否村はづれまで御引取下されうや、夫ともに御承知なくば、太刀の刄金のつゞかんだけ、切て〳〵切死、サア御返答承はらんと覺悟の詞、連はく〳〵打頷き、ム、窮鼠却つて猫をはむ、荒立て我組子、一人でも討すは費、コリヤヤイ蝦夷公の御威勢を以て、十重二十重に取圍めば、逃かくれは猶ならぬ、暫時の用捨してくれん、夜半の鐘の鳴を相圖に、首請取に來るべし、家來參れと引連て心を殘し立歸る、後見送つて、

籠、木綿物さへ肌薄き、乞食非人の此境界、是が太子の御傳、川勝樣の孫君の、わらう姿か淺ましやと、抱きしめ〳〵、かつぱと伏て泣居たる、只さへ我は悲きに、物思へとや秋の夜の、虫の聲々物さびて、紅葉ばさそふ風の音、いとゞ心も細道の、遙向ふの松原に、星かあらぬか提燈の、火影かすかに鉦太鼓、迷子の乙吉ャアイ、ャアイ、餘所の哀を催して、あてども無しに尋行く、母は身もよもあられぬ思ひ、何國の誰かは知ねども、見えぬ我子を苦にやんで、近所邊りの人頼、尋ぬるくは親の慈悲、同じ親でも吾々は、態々捨る難面さを、世間の親にくらぶれば、魔王か外道か鬼か蛇か、敵と敵が親子となり、こんな憂目を見ることかと、口說たて〳〵、又さめ〴〵と泣けるが、思ひ直してハアさうじや、いつまで泣ても盡ぬ名殘、若や人に見付られては、宮樣のお爲にならず、幸ひすや〳〵寢入ばな、とそつと寢さする籠の內、南無天道樣佛神樣、どうぞ情ある人に拾はせてたび給へと、行ては戾り戾りては、盡ぬ名殘をやう〳〵と、思ひ切てぞ立出る、同じ歎に豐勝は、我子の名殘女房の、遲もいかゞと若宮を、抱參らせてそこ爰と、尋搜せど烏羽玉の、暗きより、暗きに迷ふ親心、思ひ切ても堪兼て、又立戾る女房も、互にしたひ夜の道、思はずはたと行當り、ャア誰じや、さういふ聲は女房ども、おれも悴に今一度、サイナ私も捨ては歸りしが、最一度顏が、ムヽシテ捨た所は、アイアレアノ辻堂と、搜りより心覺の密柑籠、ャアコリャ內に久丸は、ハア悲しや、といふに夫も仰天し、そ

の下地拵へ、買氣はないかと平氣な詞、合點行ねどこなたは耳より、ムヽスリヤ、此方の譯知つて、身代賣て下さるとや、ヲイノヽ、代物見せずば落着まいと、行燈引提げ荷箱の上、蒲團をそつとすや〳〵寢顔、ヤア、コリヤさつきに捨た我子の久丸、ノウなつかしやと立寄る女房、アヽヽコレ〳〵、拾ふたからはこつちの物、滅太に傍へ寄らしやますな、サア欲くば賣て進ぜんしよ、ハア成程、心ありげな惣兵衛殿、いかにも其代物買ませう、シテマア直段は何程で御座る、サレバサ不景氣な時節がら、高はつては商が出來やすまい、殊に向口のすくない代物、こんな口があれば堀出、常はこつちから里扶持やらにや、請取人のない此代物、隨分と負て進ぜう、ヲヽかたじけない惣兵衛樣、此御恩は忘れませぬ、そんならおあしは幾程ばかり、アイ、ずんと負て進ぜんしよ、カフト、鐙踏張元直限り引下て、一文も懸直いはず、引ぬ處か金千兩と、聞て驚く女房を、引退て進み出、ハアヽ成程、千兩といはしやるも高くはない、十万兩は惜置、天地と釣かへの大事の代物、世が世の時であるならば、價は望に任さんが、御存の今の身の上、そこの所を汲譯て、了簡付て下されかし、再び世にも出るならば、金銀の山を築、お禮をさん惣兵衛殿、アヽコレ〳〵、明日鹽のからい物喰ふかとて、宵から水を呑でも居られやせぬてや、貴樣の出世かいつの事やら、ハテ來年の事いや鬼が笑ひやす、先の千兩より今の十兩、おぶつて擲たやうなこなたの身代、千兩は惜置、壹歩も金は出來やしよない、金かなくばない樣

妻の浮橋、夫の傍へにじり寄、コレまをしお前はマア今の討手に、若宮樣の御首討てお渡し申さうとお請合なされたが、眞實宮樣を討奉るお心で御座んすかへ、ナニ馬鹿な、若宮を討はせなら、是程辛苦はせぬはやい、そんなら今アノ連とやらに、サアいやといへば多勢に無勢、據なく一寸遁れ、請合は請合しか、まさかの時のお身代と、兼て覺悟の悴さへ、今宵に限つて捨たるは、若宮樣の御運の末、積善の家には餘慶ありと聞ものを、いかなれば聖徳太子、國家を安じ民を憐み、御佛の再來と、呼ばれ給ひし御身なるに、現在お子の若宮樣、是までの御かんなん、まだ其上に今宵の時宜、サイナ、僅か一時半時の違ひで、捨てしまふて今の後悔、ヲヽ過去の因緣定まる業、神佛のお力にも、叶はぬ事かと身を顫はし、夫婦は顏を見合せて、泣より外のことぞなき、折しも表に聲高く、身代や〳〵、身代は御用にないかの、身代を賣ましよかと、荷箱かたげておつと入る、けんどん屋の惣兵衞、思ひがけなく夫婦は驚き、惣兵衞は落着顏、珍しい商賣故、悔りは尤じやが、わしも是までの商、毎晩〳〵所々方々、溫飩蕎麥切、麪麵や素麵と、聲のありたけ精一ぱい、二六時中賣歩き、足の裏はわさびをおろし、大根限り稼いでも、ねぶかい儲もないさかいで、內証らんびんすかんぴん、とうからしあん仕直して、商賣を替てこまそと、思ふ矢先の身代賣、智惠をふるふた上子がごんすよ、大事な命のつなぎにして、こなたの手打にしなの蕎麥、えいかげんな出を遣、討手の方へぶつかけて、濟す工夫

秋の夜や長別れに後の世を、頼は佛紙さへも、破し行燈もちらつきて、風の前なる燈火の、消ると知らて稚子の、乳房銜へて餘念なき、顔も此世の見納めと、夫婦は覺えす咽かへり、わつと計に泣沈む、聲も遠寺の鐘てより、夜半と限る約束に、手勢引具し士師の連、此家の前後を追取卷、ヤア〳〵豐勝、約束の刻限、山脊の宮が首請取ん、早く渡せと呼はつたり、ホヽ契約せし宮の御首、渡し申さん請取れよと、涙はらうて女房が、抱し我子をもぎ放し、かたじけなくも人王三十二代の帝、用明天皇の御孫、聖徳太子の御子、山脊の宮の御首討奉る、是見よと脇差するりと拔放し、既にかうよと見えける所、ヤア〳〵御撿使、其小悴は贋物、實の宮は爰にありと、小陰を出るけんどん屋、連樣のお頼ゆゑ、此内へ犬に入つて、見定めた若宮の贋と本手、あの小悴はあいつが子で、宵に捨たを拾ふて來て、樣々の口車でちよろまかして、取替た正眞の若宮、ほえ廻つて八釜しさかいで、猿轡でく〳〵し上、荷箱へ入れて置ました、討てお渡し申さんと、聞より夫婦は狂氣の如く、ヱヽたばかられしか殘念やと、飛でかゝるを、ソレ動かすなと連が下知、數多の家來が落重なり、多勢を頼に腕捻上、手込のうちにけんどん屋は、荷箱の中より若宮引出し、首をはつしと討落し、連が前に差置ば、うい奴出かいた〳〵、汝が魂を見込し故、一大事を頼し處、健氣の働、いさい蝦夷公へ申上、武士に取立得させん、ソレ當座の褒美、と投出す百兩、是は有難茄子漬、剛の者と譽られたより、此百兩暖なれば、

の、ハテ又、相談もおろかいの、ナント代物替にする氣はごんせんかい、ハア代物かへと申してからが、段々と貧苦にせまり、衣類手道具腰の物、賣代なして此體たらく、イヤおるてや〳〵、ずんとよい代物がおるてや、彼こなたか大事がる、アレアノ、奥に寢て居るアノ代物、同じ位の年恰好、ふとつたと痩たと掛て見たら、五百目か三百匁目がたの違おらうけれど、紙屑を買やうに秤目もせゝられまい、よごんす引替にして進ぜんしよ、イエ〳〵あのお子は譯おつて、どうも人手へ渡されませぬ、イヤお內儀樣、ソリヤ惡い了簡じや、そんならこなはんの內に置て、討手に首を切すがよいか、忠義とやらが立ますかと、のつぴきならぬ理の當然、豐勝は思案を極め、ハテ誤つた惣兵衞殿、成程代物替にして貰ひませう、合點が參りましたか、ムヽソリヤ能了簡マヽヽそんなら商が出來たといふもの、祝ふて一つ打ませう、シヤン〳〵〳〵と、手をうつ內に、女房は是非も納戶へ行ながら、どうなることとも若宮の、お目が覺たらむづからんと、そつと抱上け惣兵衞に、渡す心も心ならず、荷箱の上の久丸を、抱き取たる內懷、可愛や宵から寒からうと、溫めたとて間もなう、御身代に殺すかと、思へば身も世もあられぬ苦しさ、惣兵衞は若宮を、懷へ捻込で、わしが爲にはどちらでも、同じ心の拾子、腹も痛めぬ子に嗅も、嘸悅ぶで御座りませう、我等が內は仲町の裏店、路次は四ツ切、夫より內なら何時ても逢にごんせ、お暇申すと荷を振りかたげ、溫飩蕎麥切〳〵しやんと歩み行く、ヤヽ更渡る

何となう御暇給はり、方々と流浪の身、何卒古主へ歸參の願と、思ひながらも心に任せず、年月を重ぬる其内に、川勝公は蝦夷が爲に御身を亡し、御家も沒落と、聞より無念骨髓に徹し、蝦夷が館へ駈込んで差違へ、大殿樣の修羅の鬱憤晴さんと思ひしが、イヤ〳〵、夫よりはお前樣のお行衛尋ね、お力になるが死に增つたる忠義ぞと、方々搜す其内に、此所の御隱家、慥に夫と知れがたく、うかつに名乘つて出られもせず、忍び〳〵御樣子伺ふ內、土師の連我を招き、犬に入よの頼は幸ひ、若宮樣のお命に、かはらせ給ふ若殿、久丸君の御爲に、悴音吉を殺せしは、平內兵衛が寸志の忠義と、我子を手盛にけんどん屋が、打て替たる忠臣は、末世に輝く金龍山、淺草寺の境內に、石の印の朽やらず、豐勝夫婦は感じ入り、倩は平內兵衛にてありけるよな、屋敷を出て二十餘年、恩も見せざる我々を、主と敬ひ子を殺し、難儀を救ふ志、いつの世にかは報せんと、夫の詞に浮橋は、若宮樣や久丸が、助りて嬉しい程、夫婦の心根思ひやる、取分てお內儀は、思ひもかけぬ親子の別れ、嘸本意なからう悲しかろ、いとをしの有樣やと、身につまされしかこち泣、おさおはいらへの詞さへ、しやくり上〳〵、胸へさし込癪つかへ、疊に喰付苦しめば、淚まぎらす平內兵衛、コリヤ女房、どうぞお家へ歸參して、御奉公が申したいと、云くらした念が屆き、今日といふ今日御用に立、若宮樣若君樣の御命目出度御繁昌さ、何ほゆることがある、夫程お身代を悲しがるは、日頃御主人が大切なと、いふた詞は

商賣に身を入れて、天秤棒に蒔繪を置、荷箱を堆朱、金具の大平を拵て、夜鷹蕎麥の惣代に、仰付られ下さるべしと、一人ほく〳〵悦べば、ヤア〳〵家來ども、宮が首さへ請取れば、此連が役目は濟だ、そいつらにお搆なしと、首を家來に取持せ、いかつかましく立歸る、後には積る夫婦が恨、宮の敵と切付るを、荷箱を小楯、ヤ早まり給ふな御夫婦、若宮御安體にてましますぞと、荷箱のうちより傅き奉り、猿轡引解けば、わつと泣出す宮の御聲、ヤア御存命にてましますかと、抱取て女房が、乳房を含め御顔を、差覗〳〵、悦び合ふぞ道理なり、豊勝は惣兵衞に打向ひ、最前のしだらに引かへ、思ひがけなき若宮の御存命、討手に渡せし首といひ、彼是以て不審晴れず、と尋る表に女の聲、ヤアこちの人は爰にさうなと、すつと入る女房おさち、コレ惣兵衞殿、こなたは〳〵の、宵からこちの音吉が、迷子になつて行衞が知れず、長屋衆を頼んで、音吉返せの鉦太鼓、夜かなひと夜尋て居るに、爰に何して御座るぞ、聞えぬ人やと恨の詞、ヲヽ息子が事なら尋るにや及ばぬ、爰に居るはいやい、ヤア何音吉はどれどこに、ヲヽ、逢してやろと最前の、首なき死骸差出せば、一目見るより、ヤア、是や音吉を誰が切た、何者が殺したぞ、可愛の者やと抱付、歎く女房に目もやらず、飛退つて兩手をつき、御幼少にて御別れなをせし故、御見覺は御座なき筈、私こそはお家譜代の御家來、久米の平内兵衞照景と申す者、若氣の至り是なる女と不義の科、縛り首にもあふべき所、御父川勝公のお情にて、

くるやうにおつたはやい〳〵、夫はまだしも其後は、泣せてはならぬ故、可愛さうに猿轡、うん〳〵とうごめくを、荷箱へ入てかつぎ廻り、若殿樣の御身代りと、思ひ切て一思ひに、首切る時の心の內、コリヤ、どの樣にあらうと思ふぞやい〳〵、推量してくれ女房と、いふにおさぢは頭振ふり、聞ば聞ほど胸がさける、モウいふて下さるな、死たいわいのと打伏て、聲の限を泣つくすは、目もあてられぬ次第なり、豐勝立て一間より、持出るは宮の御裝束、汝が心は主思ひ、久丸が身代なれども、誠は宮の御身代、せめて冥途の公服にと、死骸にかくれば平內夫婦、ハア冥加なや勿體なや、命一ツ捨ずんば、陪臣の悴風情、御裝束を着る事も、泣てかへらぬ野邊のいとなみ、寶祚の御末ぞと、世上へ知らすも一ツの方便、心ばかりの輿車、廻りわふたる主從が、追付朝敵打ほろばし、君は歸洛の御所車、御身代と覺悟せし。我子の無事を見るにつけ、思ひ廻せばまはす程、心細さの糸車、賤のおだまき操返し、女同士のくど〳〵〳〵と、片輪車のよるべなき、賽の河原の石の數、一重積では父戀し、二重積では母戀し、こいし戀しの石車、積る思ひは稚子の、かたみに殘る風車、何に付てもいぢらしく、我は二日と水車、心を久米の平內夫婦、野邊の送りと三重「立出る

第九

皆嘘言か、猥猾者めと叱られて、女房は猶せき上、武家に育つたわたしぢやもの、お主の爲の御身代。夫悔むではなけれども、かういふ譯じやと得心させ、暇乞して殺すなら、是程にもわるまいもの、さもしさ暮しの裏屋住、あの子を寢さして夜食の拵へ、井戸ばたから歸つて見れば、かいくれに見えぬ故、狐狸がかどはかしたか、神隱しとやらいふものか、若人買の業ではないかと、案じくらして太皷鉦、手足は血みどろ泥まぶれ、日頃はこわいと晝でさへ、得行ぬ野はづれ山坂を、尋ねあるくも子故の闇、現在親のこな樣が、盗み出して殺さうとは、コレ、是程も氣が付ぬ故、わらぬ苦勞をしたはいの、お主の爲にかう〱すると、いふて聞して下さつたとて、めつたに人にいふ樣な、女子でないといふことも、是まで連添女房の心、知つて居ながら胴慾な、むごひ仕方と身を投伏し、消入〱泣沈む、夫も胸まで滿くる涙、呑込み〱、ヲヽ其恨尤じや、大事の〱御身代と、案じ過して隱した故、氣を揉せたは堪忍してくれ、去ながら、そなたの苦勞は尋る内にも、どこぞに居よかとまだも賴み、おれは我子を盗出し、抱ては行けどお身代と、覺悟極た心からは、生た忰の樣には思はず、石塔を抱たと思へば、手足もしびれて歩かれぬ、さうとは知らず坊主めは、嬶へいかうと泣故に、道でこれ、此風車と白せつから、買てやつたら機嫌も直り、はた〱と悦んで、たい〱すると押載き、爺も喰へとて喰かけを、おれが口へ押込だは。親子一世の暇乞、水盃のかはりじやと、思へば骨身も砕

りてお行衛知れず、我々は此体たらく、何卒尊像を尋出し、太子様御遺言の通り、此淺草に一宇を立、主人の御家を取立、親人の迷ひ晴さんと思へども、今に尊像出給はず、先達て蝦夷か手へ奪取置しかど、光りを放ち飛去給ふ程、靈顯あらたの御佛なれば、我々が志通せぬことはよもあるまじ、觀世音の妙智力には、枯たる木にも花さかせ、向ふ刄も段々こはれ、水火の難も救はんと、御誓願はありながら、拙き運の主従は、御佛のお力にも、及ばぬことかと世を恨み、身をかこちたる悔泣、ことはりとこそ聞えたれ、濱成涙押拭ひ、我々こそ身の欲で、主人へ忠義信心怠らずと思へども、佛のお目で御覽じては、忠義は薄く信心がたらぬ故、水底にかくれ給ひ、出現なきと覺えたり、今日より心一決して、尊像出させ給ふまでは、此所を立去まじと、大願おこし探して見ん、ヲヽ望む所の御指圖、是非々々出させ給はずば、此川浪い身を捨て、再び宿へは歸るまじと、思ひ詰たる捨身の行、斯いふうちも手間つぶし、川下より片端から、探して見るが念晴し、此世の名殘暇乞、サア々々やらうと網を取直し、漕出さんとする所へ、ヲヽイ々々と聲かゝり來るゑせ者は、並木村に隱れなき、通り者の秋九郎、コレ々々兄弟の衆、逢たが幸ひ話たい其譯は、こなた衆が妹お藤が事、第一器量が吉野山、其上氣立がわつさり者、そこで我ら大に氣あり、ナントおれが女房にくれる氣は、中町か々々、尤こなた衆の氏系圖、昔は殿樣今では其樣、我々か商賣は、丁と半とのいきさつで、一夜けんきやう

往昔は、草茫々たる武藏野や、人もまばらに隅田川、こなたの岸は海道の、往來の足におのづから、草の淺さを名に呼んで、淺草村と著き、爰に檜熊の濱成同武成、友成といふ三人の兄弟あり、父は檜熊の郡領とて、豐嶋郡の領主なりしが、觀世音の尊像を、紛失なしたる罪に伏し、世を去り領地も沒收せられ、あるに甲斐なき身馴棹、小船に打乘尊像の、有所求る綱の目に、風もたまらぬ彌生の空、そこか爰かと一心不亂、南無觀世音菩薩、南無觀世音菩薩と、口に佛の水底を、さがし歩くぞ奇特なる、兄弟岸に船差寄せ、イカニ武成友成、おことらも知る通り、此隅田川とまをすは、當國秩父の奥より流れ出、上にては荒川と呼び、近き邊りを隅田川、又は淺草川ともいひ、川末に至りては宮戸川と呼做はし、利根につゞける大河にて、底深く水つよし、然に宮戸川の沖にわたつて、夜な／＼光明輝くは、觀世音の尊像水中にまします故と、誰いふとなくいひ習はせしは、天に口なし、人を以ていはしむるの道理、何卒さがし奉り、御主人中臣樣へ差上なば、來末に御座る親父樣への追善供養、是に過たることあらじと、人目には獵師と見せ、毎夜網を入れども、今に尊像の有所知れざるは、是非もなき次第やと、打涙ぐみ語にぞ、武成友成詞を揃へ、いかにも兄者人の仰の通り、御主人中臣樣、聖徳太子樣より預り給ひし、閻浮提金の觀世音の尊像を盜れ、親人檜熊の郡領殿は、守護の役目の言譯なしと、腹切て果られし、其時の御無念はいかばかり、思ひ出すも胸塞かる、御主人は世を見限

四國を廻りて猿となるの〳〵と、前も歌にまで歌はれたわつちなれど、年を寄ては埒明ず、力業は仕得す元手はなし、そこで思ひ付た此形、前髪かづら大振袖、此河岸端に立て居て、若衆の通るを見かけ、まをし〳〵遊んで行なと可愛らしい聲色で、若衆の夜鷹を始たが、サテ思ひの外の大當り、元手の入は白粉ばかり、折には須磨の浦千鳥、といふ奥の手をくらはせて、毎晩二百か三百宛、しめこの兎月影に、お前を見ちかへ呼かけて、化のかは顯して退ました、是か本の月夜に釜、ぬかれるはわしが商賣、コレから前髪かづら冠つた形は、昔駒込吉祥院の小性吉三郎といふ代物を、二十四文で遊ぶとは、二十四孝の郭巨とやらで、金の釜の掘出し若衆、お前も一切ちよん極り、ちよつきり遊んで行きなよ、コレ秋九様氣はねかへと、しなだれかゝれば、アゝ埒もねへおれはきうくつなことはきついきらいだ、高野六十那智八十と聲にやいへど、神武天皇様以來、親仁の若衆は是か見始め、そして貝酌子の嚏したやうな其しやつ面、蓼酢でもいけはしねへ、モ誤つた是だ〳〵、本に商賣は草の種とやら、去とてはけしからねへ、飛だ思付をやらかしたが、毎晩〳〵遊ぶやつらが、うまう喰ていけばよいが、てんねき黒いやつに見付られて、化か顯れた其時は、マアどうちやらかすぞ、へゝ夫こそ味噌じやねへが、智惠さん〳〵たる此佐次兵衛、既に此中去るお屋敷の仲間衆に馴染か出來て、六百で泊に往て、夜の明るまで寝忘れて、狼狽て起るとて、此鬘を此様におつことしたを見付られ、大かたり泥

摑み取り、貴様らのお爲にもならぬ柴〳〵、呑込山かと一人して、受つ答へつ早合點、濱成詞を和げて、イヤモ秋九郎様のお詞かたじけなうは御座りますが、親兄弟がまゝにもならぬ物は縁邊、急にどうとのお返事もなりませぬ、其上貧乏忙しい我々が此拵、相手になつて居られませぬ、又其中といひ捨て、船押出せば秋九郎、アイヤコレ〳〵、さうもぎどうにはいはねへものだよ、ヲゝイ〳〵と呼べど、わめけど其甲斐も、はるかに隔たる船と陸、後に殘つて只獨、おつたら口の秋九郎、エゝいま〳〵しいと獨言さ〳〵行過ぐる、思ひかけなき小蔭より、まをし〳〵遊んで行なと聲かけて、引とゞむるを腹立まぎれ、取て突のけ月影に、すかし詠てアゝラ怪しや、まをし〳〵と留たゆゑ、夜鷹かと思ふて見れば、怪有化鳥な形、ムゝ聞えた〳〵、偖は狐の化そこない、コリや誰じやと思ふ、かたじけなくも並木の大通、秋九郎様といつてや、湯屋の窓でけむつたい男だによ、うぬらに化されてたまる物かい、不景氣な畜生め、ぶち殺して藥喰と、摑みかゝればアゝまをし〳〵、そんな者じや御座りませぬ、コレ私で御座りますと、ちやくどはづせし前髪鬘、下は白髪の撥鬢奴、天窓は藥罐、顔には白粉、體は振袖、鳴聲のろまに似たりけり、二度悔りの秋九郎、ヤゝゝわり様は一ツ長屋の佐次兵衛ではねへか、どうしたことでソレ其形はと、問かけられてサレバサ、わつちや若時から小器用で、藝一道は何でもござれ、前も讃岐の金比羅で、猿の輕業大當をした故に、一ツとさ一ッ長屋の佐次兵衛殿、

夜よなか御精が出ます、ホコリヤ秋九郎殿、何方へ御座らしやる、ハイ此中おめへのお賴の品、方々探せど生憎と、出來かねたのをえんやらやつと目付た故、只今お寺へ參りがけ、能ところでお目にかゝりました、サア和尚樣、大の極りちよ〳〵らでやござりませぬよ、御賴の彼若衆、よい代物が出ましたと、聞て和尚は打頷き、夫は近頃かたじけない、アノ幸ひの月明り、ためつすかめつ差覗き、ホヽ色白なよい生れつき、年はいくつ名は何といふぞ、アイ年は明て十二、名は猿之助と申しやす、ハテノウ猿之助とはおつかない名で御座るの、アイ夫は此秋九郎が能存じてをります、此若衆の親は元來か四國生れ、佐次兵衞の緣を取て、此子を猿之助と付ました、ムヽ、先猿といふ字の目出度さは、器量が十人なみにもまさる、ムヽ、彼の處が女にも劣さる、ムヽ、こつちはいはざる、ムヽ、お前は知らざる、ムヽ、昔まつからうさる所から掘出の此若衆、ムヽ成程〳〵、隨分脊格好は能さうなが、老眼で委うは見えかねると、月明りへ立廻れば、コリヤたまらぬと秋九郎、我身をちやくと隔の垣、イヤモお目利には及びませぬ、私が能見て置きましたからは、本阿彌の極同然、先脊はすらりつとして、高からず低からず、ムヽ、腰も屈まず、ムヽ、成程〳〵そう見えます、肌はねんめりやは〳〵ぼちや〳〵として渡り綿子の如し、ムヽ、痩ぼつちの鮫肌にては御座なく候、成程〳〵さう見えます、鼻筋通つて顏は丸

棒、其分では濟されぬと、どうづかれた其後を、旣に大屋へ預んと、上を下へと大騷ぎ、尻の割るといふこと、此時よりぞ始りける、ムヽスリヤとんだ大事、シテしまひはどう付た、サアそこが床かけの傳授事、何をいふても返事せず、しやくり上〳〵、只さめ〴〵と泣居たれば、客もあくたい盡さ草臥、少し氣のめいつた時分、淚と共にかき口說、私じやとて能年して、若衆になるは其術なさせつくろしさ、餘り氣味の能物じや御座りませねば、何のマア好このんでしはしませねど、一人の孫が疱瘡、なみの惡か不仕合、たゝきはづしや食はづす、倅も嫁も稼をやめ、看病にかゝつてゐる故、今日の煙も立兼る、傍で見る目のいぢらしさ、しやうことなしの此商賣、哀れと思ふて下さんせと、時に凭れて正體なく、かつぱと伏て泣ければ、さすが鬼神に横道なし、こけめらが哀れかつて、六百の約束を、二朱銀一枚投出して、アヽいはれを聞ば氣の毒千萬、隨分孫を大事にせよと、何ぼ世間がせち辛くても、迷ひ安きは色の道、金の取るは此商賣と、詰すも慾の川邊の螢、己が尻の光より、きんか天窓と目の玉の、光爭ふばかりなり、ムヽソリヤとんだこと束もねへ、いゝ株にあり付たと、話の最中、りん〳〵〳〵と鈴の音、秋九郎耳そば立、アレあの鈴の音は、鐵砲和尙が奉加から歸りがけ、此中おれに賴んで置たことがある、コレから〳〵と囁いて佐次兵衛を物蔭へ、隱す間もなく鈴打鳴らし、相州小田原相談寺鐵砲和尙、しやれ塔建立といふも口僻長纒手、步み來るを秋九郎、コレハ〳〵和尙樣、

衞が所はきつい繁昌で皆ゝはさかつて居る、取敢ず是で致しませう、是太夫ソレお染といはゞ立たかな、嫁入姿でころりとせい、コレころりとせい、コノヲゝ〳〵あるかいな、今宵はしつぽり御樣と新枕、コレ新枕、ヲゝヲゝゝ〳〵嬉しかろ、鹽屋女房衆は能女房じやへ、コレヤツトセイ能女房じやへ、ヲゝヲゝゝ〳〵外にあるかいな、ソリヤ〳〵〳〵そこらでちよつこり日和見や〳〵、ヲゝヲゝゝ〳〵おろかいな、早めてこい、そつこでせい、と秋九郎、こそ〳〵〳〵と歸るとも、知らで闇に乘蹈の柏子、鬘のぬげたを見付る和尙、ヲヤ〳〵〳〵〳〵、若衆の天窓が乘鑵と化たは、是が本の飛だ茶釜、狸か狐か天狗かと、呆れた顏に佐次兵衞は、破れかぶれと聲張上、相州小田原相談寺鐵砲和尙髑髏に聞け、己主坊め其鼻で、多くの若衆をせつながらせし報により、地獄へ連行き、釜煮にせん其爲に、愛宕山の次郎坊若衆と化て來つたりと、荒におれ出す忿怒の形相、和尙がたじ〳〵齒の根も合はず、助たまへ南無阿彌陀〳〵と後をも見ずして逃歸れば、ヤア逃るとて逃がさうかと、後を慕ふて追かけしが、立歸つて夫よ〳〵、秋九郎が三兩壹步、追付て割前取んが、イヤ〳〵人間業ではおこすまい、ヲゝ夫よ日頃信ずる大山不動へ誓をかけ、天狗の序に天狗となし、秋九郎が三兩一步の割前をとらしめ給へ、南無奇妙頂禮、さんげ〳〵大山大聖不動明王、とうよく三兩まんざらせんから相談せなんだらよかつた、今更うんといふておこすまいのうまくさまんだ奇妙頂禮と飛が如くに三里「走行く、やゝ更

顏、ムヽ、皺少もなし、成程〳〵さう見えます、齒並よく、ムヽ、少々拔ても目に立ず、成程〳〵さう見えます、生際薄からず濃からず、ムヽ、白髪一本もなし、成程〳〵さう見えます、大極上々無類飛切札廻し安賣、篤と夫から御覧じませう、成程〳〵こなたの肝煎ほどあつて、殘る處もない上臀、抱へませうが嘸給金が高う御座らう、幾程ばかりで御座る、アイ、五年切つて百五十兩、ワアヽコレ〳〵〳〵、和尚樣〳〵〳〵、アヽイヤ氣が付ました、餘り高さに悔りをして目を廻しました、サヽヽそこが拙者が働き、ちつとこちらに急に金の入譯合ゆゑ、ぎり〳〵の所をぶん負て申します、金三兩お渡しなさりや五年は借置、十年でも百年でも、ムヽ、千年でも万年でも、ムヽ、年季なしにお寺へ上切に上ますると、聞て尙和は笑壺に入、夫はきつく安い代物、餘り安すぎて合點が參らぬ、盜物では御座らぬか、ヤ尙和樣つひぞねへ、そんなら止になされませ、いつそ連て歸りませう、サア若衆あゆびねへかと氣を持されて、アヽコレ〳〵今のはおれが出そこない、疑の心といふて、佛のおきらひなさること、いざござなしに抱へましよ、是が即安心決定、直に給金渡しませうと、臍くり金を小粒で十三、壹歩は貴樣へ骨折賃と、請取渡しを見て居る若衆、羨しげに立寄るを、秋九郎は咳ばらい、ヱヘン〳〵此若衆は、ずんど氣の奇麗な生れ、錢金の中に置ても、お氣遣は御座りませぬ、そして又踊か名人、鳥渡お目にかけませう、そんなら向ふ嶋の大黑屋孫兵衛が所で座敷借ませう、イヤ孫兵

川風も、いとはで命捨小舟、弘誓の舟と一筋に、覺悟極めし胸の內、殊勝にも又いぢらしゝ、遠目に見付る五太夫が、ヤア〳〵家來ども、アレアノ川下へ舟漕出し、網を打つ三人は、たしか濱成兄弟の奴原、いかにも左樣で御座りますと、家來諸共目も放さず、見るとも知らず兄弟は、たぐり寄せては又かける、臂は腱の身塩梅、拍子取揖おも揖に、水と船との退かげん、心に念彼觀音力、一心凝たる網の中、月の光か夫ならで、邊りまばゆき光明を、見付る此方も共に恟り、ヤア〳〵者共、今の光りアリヤ何だ、イカニモアレ〳〵又光るは、偖も不思議といふうちに、猶赫奕たる光明に、兄弟勇んで引あぐる、網にかゝりし尊像は、紛ふ方なき閻浮提金、ハア〳〵有難しかたじけなしと押戴き、三拜九拜天にも上る悦び涙、五太夫いらつて、アレ觀音を引上たは、サア〳〵つゞけと用意の舟に飛乘〳〵、合圖の法螺を吹立〳〵、漕出す、兄弟は陸の騷ぎ、油斷ならずと沖の方、船をはるかに漕退くれば、方々手分の庄屋年寄、思ひ〳〵に漕出し〳〵、物騷しく聞えける、尊像大事と濱成は、只一人小船に乘、櫓を押切て陸に上り駈出す向ふより、數多の足音立戾れば、こなたも人聲、とやせんかくやと尊像を、草むらに隱す間もなく、ばら〳〵と追取卷、ヤア〳〵濱成觀音を、渡せ〳〵とせちがへば、ヤア愚人に聞す詞はなしと、拔合して丁々發矢、叶はぬゆるせと逆行を、遁さじやらじと三重追て行く、實や短き春の夜の、しのゝめ告る明烏、夜はほの〴〵と明にけり、里の子供の打連立て、籠を脊

渡る短か夜や、往來も途絶る川端傳ひ、家來引連歩み來る、所の大官蛇塚五太夫、追々來るは近郷の、庄屋年寄御前に平伏ば、床几直させ寛々と腰打かけ、ホヽ何れも太儀〳〵、夜更て此所へ呼寄せし、仔細といつぱ、天竺より渡りたる閻浮提金の觀世音の像、聖德太子の思ひ付にて、聟中臣と牒し合せ、此淺草に安置して金龍山淺草寺といふ伽藍を建んと催す中、太子のてこねたはこつちの仕合、主人蝦夷公大望の思ひ立、彼觀音が世にあつては、諸人が佛法に歸依し、道の法のと譯隔をぬかし、謀叛の邪魔になる故に、佛法を破却せんため、密に彼觀音を奪取、太子方の奴原、そろ〳〵と仕舞て退、大望の旗上げ、一味連判のどさくさまぎれ、彼觀音がなくなつた故、方々探せど今に知れず、然に此淺草川の川下、宮戸川の浪間に、夜な〳〵不思議の光さすは、觀音の所爲なりとの取沙汰、又濱成兄弟三人の奴等は、親檜熊郡領が觀音を盜まれ、腹切てくたばつた故、知行に放れ、今は獵師と成下つたを悔しがつて、毎夜〳〵網を入、彼觀音を探すよし、若も彼奴らが手に入て、中臣が世に出れば、蝦夷公大望の妨、見付次第引たくりて差上よ、サア汝等は此川端に隱れ居て、法螺を合圖に駈付よ、急げ〳〵、ハツトこゝろえ庄屋年寄、川下さして別れ行く、頃は彌生の十七夜、照もせず、曇りもやらぬと詠じたる、朧月夜も武藏野は、影もなく〳〵又隈もなく、流れはるけき隅田川、水に映じてあり〳〵と、さながら晝の如くなり、濱成兄弟三人は、そこよ爰よと打網の、袖の雫や腰簑も、氷るばかりの

けり、ホヲヽ出かした弟、兄者人、ハア有難しと尊像を、守たてまつり、逸参に後を見ずして
三童立帰る

第十

野邊近く、家居し居れば鶯の、鳴なる聲は朝な〳〵、聞淺草の草の庵、うつれば替る詫住居、檜熊濱成兄弟が、留守を預る妹は、元手も細き揚枝店、五倍子の粉を挽臼さへも、まはらぬ渡世くるしの、磨揚枝や房揚枝、かざる表の目印は、銀杏の古木下枝を、かた取軒の藤の棚、春知り顔に咲亂す、情盛や戀盛、銀杏のお藤と名にしおふ、奥街道の通筋、田舎道者の四五人連、店先に立留り、是が銀杏のお藤サアが揚枝店、本宮八町の日のふんばり共とは違つてアレ見なさろ、咲た藤より生た藤サアかあらくめんごい、今朝の立が早いでまだ店は出はるまい、顔見ることはなるまいが、と案じ申したが、思ひの外早く店をつん出し申された、自分は旦方達へ土産に名物の揚枝サアを調べい、うん共は宿の嚊へふしの粉を土産にすべい、おれにもけなる突へもと、買むくつけに商上手、たつた今夜か明たに、お前方は早いお立で御座んすなア、夕邊は千住泊かへ、サレバサ聞てくれなさろ、草加から日が暮まをしたを、お女郎を調べいと、がいに急いで千住サアに泊り申したが、運の悪さと自分は狐臭のある女郎サアに取當、

中にきり〳〵しやんと脊負て、鎌腰につんざして、賤の手業の名も朝草を、輕い足取ちよこ〳〵走、松もこい八もこい、誘連たる草苅童、皆こい〳〵、コレ〳〵爰によい草がある、サア〳〵苅うと立ならひ、手々に鎌を振廻し、苅や白茅の穂に出る、わるさ盛の鬼薊、ちよつと手を出す早蕨を、じやうだん問荊と年かさか、はづす棘や葎、ヲツト虎杖赤地利、薺蒲公英壺紫花、ごぎやう黄瓜菜佛の座、思ひかけなき目先の尊像、ハツト飛退きコリヤ何だと、驚く子供の其中に、山の大將長之助、イヤ〳〵おつかない物ではない、是は彼のお觸の有た觀音樣、かうして置は勿體ない、ヲヽ觀音樣なら捨ては置れぬ、お堂を拵へ入たがよい、ヲヽ夫かよかろと、そこら見廻し立枯の、藜の草を切取て、心ばかりの四足堂、尊像を据え奉り、一度に合掌禮拜す、稚心のしほらしさ、藜堂とて今の世まで、其名は隱れなかりけり、斯る時しも五太夫主從濱成を見失ひ、船を早めて着間を待兼、飛上り〳〵、きよろ〳〵目玉尊像見付て、ヤア〳〵觀音が爰にある、してやつたりと立寄るを、草苅共は押隔、此尊像はわしらが拾ふた、やることはならない〳〵、ヤア推參な小びつちよめら、一々首をならべんと、切てかゝるを事ともせず、手々に鎌を打振〳〵、有往左往に三重戰ひしが、佛力加る草苅に、切立られて五太夫主從、かいふつて迯出す所へ、取てかへす兄弟が、かくと見るより五太夫が、首筋摑んでぐつとさし上、ざんぶと打込む川の中、水を喰ふてあつぷ〳〵、天罪佛罪目のあたり、こゝちよくこそ見えに

戀しと明暮に、慕ふ餘りに面痩て、見る目いぶせき御風情、イヤノウお藤、中臣樣や弟宮のお身の上、案じ續て夜の目も合ず、悲しい浮世にながらへて、憂思ひをせうよりも、いつそ死たい／＼と、かこち給へば、ヲヽ又さな／＼と、お心弱いことおつしやります、譬のふしの浮世は車、又廻り逢ふとやら申します、したがお言號の聟君中臣樣、御婚禮もなされぬ内、散々のお身の上、戀しいは御尤、私が身にも覺ある、おはもじい事ながら、思ひ出すとやる瀨がない、話てなりとうさ晴し、お聞きなされて下さりませ、日外兄樣達に連られて、大和廻りから京登り、三輪のお山へ參詣の時、どう間違ふてか道におくれましてな、私一人うろ／＼と、茶店の内をそこか爰かと、一ぺん尋る其内に、深編笠の浪人姿、立派なお侍樣かござんした故、事をし／＼私は連にはぐれて難儀致します者で御座ります、斯樣／＼の風俗の人を、お見請はなされませぬかへと、編笠の内を覗いた所が其美しさ可愛らしさ、年の頃は二十三四で、とんと生た雛樣見るやうなお顏、テモマアあの樣な御奇麗ないとしらしい殿御もあるものかと、思ひ付とサア身中が震ふて來ましてな、夫からモウ何にもいはれぬと思ひなされませ、夫からうお／＼と居たればな、わつちもちつとばかり氣がわつたかしてな、アヽ夫は嘸難儀であらうのうと、手を握られた其時は、私はどつといつそ夢中になりまして、夫から手が入れば足が入、茶見世の座敷でツヒ轉び寢、互に名所聞き置て、又の逢瀨と思ふ間も、憎らしい邪魔が入、別

なじやうにもかじやうにも夜中臭くて我折をした、コリヤハアいけないことだとまだ東も白まぬないに、千住サアを立まをしたと、聞て殘りの道者共、ヲヽ夫で聞え申した、いつもしつぶかなお身樣が、無上に早く起なされて喧くいきやり申して、樂んで居る自分共を叩き起し、寢いあげくに小塚原で、犬サアに取巻れてたまげ申した、夕邊の勤はお身サア一人で拂ひなさろ、ヲヤ〳〵〳〵おつかない、ソリヤあちらこちらだんべい、皆かめんごいを取て、おれに狐臭を拖せ申したからは、おれが勤は何やうにも惣々から拂ひなさろ、思ひなしか體サアがまだ臭、然れば背中がうぢ〳〵と千手觀音サアがうつりやしまをさないか、イヤ其千手觀音で思ひ付申した、彼天竺から渡つた閻浮團子とやらぼた餅とやらの觀音サアを、此所へ建立し申すと、沙汰のあつたは久しい事だが、まだ明地で御座りまをす、サレバサ其觀音サアが借金にせつかれ申たか、欠落をしたか、いまだに行衛サアが知れまをさぬ、コリヤハアこちらが知らチエ事だ、サア〳〵急いで參るべい、ソレ姉ツ樣錢子を取なさろ、ヲヽ皆樣ようお召なさんした、又お下向にお寄なさんせへ、アイおさらばで御座りまをすと、つひいふことにも尻ばかりに、訛ちらして急ぎ行く〳〵、お藤は邊り見廻して、一間の方に打向ひ、まをし〳〵お姬樣、朝のうちは人通もなければ、誰に遠慮も御座りませぬ、是へお出遊ばして、藤でも御覽遊ばせと、呼れて障子押開き、立出給ふ綾歌姬、忍ぶ此身は久方の、天津乙女の地に落て、いつか歸らん雲の上、我夫

やる時分から惚て居るわしじや、何でも今日はよい返事と、しなだれかゝれど、こなたは搆はず引臼の、音にまぎらすばかりなり、テモマア情のこわいお茶ッひいじや、是程いふのに、責て八釜しいとなど思はぬかい、イヽエ何とも思はぬはいなア、初のうちはうるさかつたけれど、毎日〳〵のことじやもの、役じやと思ふて聞て居る、モウ耳がたこになつたはいなア、ヤたことは、別してありがたい、たもじと聞てはたまらぬ〳〵、逆縁ながらと後から、無理にべつたり抱付、エヽ何じやいな、わた阿呆らしい、店の先で外聞が悪いわいな、放さんせいなア〳〵と、いへど聞ぬ無理無體、振放せば向ふ抱、ちよつと口〳〵顔脊け、詮方盡て有合ふ五倍子の粉、摑んで顔はふしだらけ、コリヤむごいめに合したと、目顔しかめて狼狽る、其間にちやつと飛退いて、夫々見やしやんせ、餘りひつかうじやうだんさしやんすによつて、其樣な目に合しやんす、今度からひつこいと、又ふしの粉じや忘れしやんすな、ヲヽよい樣じやと門口へ、突出して後ひつしやり、方角忘れ探り廻る、コリヤえらい目に合したな、目の中へふしの粉とは餘りじや、目の玉がびんろうじに成たかして、そこら邊りが眞黒じや、コリヤモいくぢはないわいと、探り廻れど緞帳、柱で天窓、アイタヽヽ、表へ來かゝる虚無僧の、笛を耳へ入ばこそ、コリヤいま〳〵しい目にあふた、目が明ぬわい〳〵、どうすりや此目が秋九郎、おへないとんちきむごたらしい、コリヤマどうした物であらう、ヤ思ひ付た事があると、袂から出

れ〳〵になりたれど、其俤を片時も、忘るゝ隙は御座んせぬ、終した緣も好た同士、忘れられぬが戀路の習ひ、ましてお言號の殿御の事、明暮お慕ひ遊ばすは、お道理樣やと諸共に、身につまされし貰ひ泣、思ひ出しては猶更に、いとゞ床しさ小石道、アレ〳〵誰やら來る足音、マア〳〵奥へと姬君を、一間へ忍ばせさわらぬ體、コリヤ、コリヤ〳〵〳〵、お藤逃な〳〵と、わめき散して秋九郎、店の先に大胡座、お藤コリヤマどうして吳るぞいやい〳〵、日にお百度參りする程來て、願のかいだるいほど口說のに、酢のこんにやくのとぬらくら返事、いつそけじやうでやらかさうと、夕邊も兄貴に相談すりや、こいつも同くぬらくら〳〵、ずる〳〵べつたりにするのか、さう茶にしられてはおれも立ぬ、今日は又腰を据て得心するまで居催促、借金口說に口說つもりじや、コリヤヤイ〳〵お藤、あんまりじやぞよ〳〵、此樣にもがかすことはないわい、大がいなら聞てくれいやい、一體貴樣惡い合點じや、何ぞ色事といふ者は、貴樣やわしらが初じやあるまいし、百人首の中にある、小野小町を見い、日本中はおろか、唐天竺にも又とあるまい程の美人、時に公家の、アヽてきが名は何とやらいふたはい、アヽアレハ何でもちつとばかりといふ樣な名じやあつたわい、アヽ〳〵夫〳〵少將よ、其少將が九十九夜サ通ふたとサ、とう〳〵百日目に小町を蹴倒した、夫でさへ今仰山にいふが、又おれはそんなことじやない、百ケ日や三百ケ日や三年や七年や十年や二十年のことじやない、吾儕が腹の内に居

人にさへ、お心多い戯れ事、餘り氣強い胴慾なと、口說たてたるすがり泣、お膝にどんと打伏て、溢て流は谷川の、下行く水にさそふらん、娘はむつと中押分、エヽお姫様わたいやらしい何じやいな、戀に上下の隔はない、中臣様やらどなたやら、知らぬ先なりや是非がない、何ぼお言號でも、あなたと寢のはわしが先、お慮外ながらお前様に、添せますことはなりませぬと、御手を取て引退る、イヤ〳〵何ぼ其樣にいやつても、親々からの約束で、天下晴た我殿御、イエ〳〵夫程大事の殿御なら、なぜ吸付て居やしやんせぬ、手放して置しやんしたが、お前の誤り私が先、イヽヤ自、イヤわたしと、引つ、引れつ今更に、何と言葉も中に立、梅と櫻を兩の手に、持あましたる折柄に、息せき歸る武成が、何の心も我家の門口、夫と見るより走入、コハ思ひかけなき我君樣、存じ寄ざる御對面、としさつて頭を下にける。三人ながら手持なく、じつと靜まるばかりなり、中臣卿詞を正し、ヲヽ珍らしや武成、はる〴〵尋下つたる、樣子は追て、何角指置あはたゞしき體、ハヽさん候、觀世音の尊像を探し出し奉らんと、兄弟三人心を合せ、此曉隅田川の川裙なる、宮戸川の沖に於て、網にて引上奉りしを、敵方より奪取んと、多勢を以て取圍みしを、やう〳〵切拔尊像を、守奉り歸りし所、不思議に是へ御入ありしは觀音薩埵の御引合せ、ハヽヽ有難しかたじけなしと、懷中の包より、尊像を取出し、謹んで捧ぐれば、塵結んでから手水、押戴き〳〵、是も偏に兄弟が、厚き忠義のなす所と、御

す淺黄頭巾、探り當つて竹切取上、叶ひませぬめく〳〵〳〵、盲には、何も後生と思召、娘のたこを、どうぞとらして下さりませ、めく〳〵〳〵と洒落ちらし、野郎蜘を見る如く、這廻つてぞ歸りけり、後は門の戸そつと明、ても憎らしいあの形わいの、夫はさうと、能所へ虛無僧樣がござんして、惡魔を拂ふて下さんした、マア入つてお茶でも上りませ、夫は近頃かたじけない、然らば御免なりませうと、しづ〳〵と入る形恰好、お藤は始終心を付、差覗いたる笠の內、ヤアお前は、こなたはと、互に恟り天蓋を、脫ば猶更違ない、日外三輪の茶店にて、初てお目にかゝつた娘御、お前のことを明暮に、思ふてくらす此月日、所もあらうに私が內で、不思議に逢ふたは深い緣、夢ではないかヲゝ嬉しと、縋り付ば抱寄せ、じつとしむればしめかへし、口と口とはなま中に、いはぬ色なる山吹の、離れがたなき風情にて、嬉し淚ぞ道理なる、一間の襖あらけなく、姬君は走り出で、二人が中を引分る、ヤアそなたは綾歌、爰へはどうしてくと、不思議立そこに娘のお藤、ムウ綾歌樣を御存の、お前はそんなら、ヲゝ中臣樣じやわいの、エゝ、そなたの爲にもお主樣、知らぬこととはいひながら、恨しい我君樣、お前の御行衞方々と、尋兼たる其內に、賴に思ふ川勝や、調子丸は敢ない最期、自は蝦夷公にとらはれ、悲しい內に無體の戀慕、不思議に命助りしは、樣子を話せば長いこと、武成の介抱にて、此內に身を忍び、辛苦苦勞の憂身の上、不便なとも可愛とも、思召れぬお心から、假に出合ふた

のが無理じや〳〵、コレイナ〳〵放してやつて下さんせ〳〵〳〵、ヲヽさう聞ば尤じやが、ようものを合點せい、コリヤヤイ、牛は牛連といふてな、マ色事も相應があるものじや、アレアノ表の藤の花を見よ、假令松でも銀杏でも、好た木にまとひ付が、本の木と木の仲間同士、どの樣に蔓る藤でも、天へのぼつてお日樣に、からみ付た例はないわい、コリヤ中臣樣は誰わらう、お主樣なり雲の上人、夫に賤しい我々風情が、戀焦れるは今いふた、カノ藤のつるがお日樣に、まとひ付うとするも同然じやわい、及ばぬ戀と諦めて、ふッつりと思ひ切、ヨヽコレ妹、よいものじや、どうぞ思ひ切てたも、ヤヽ思ひ切てくれやいと、詞をつくし理を盡す、意見も兄が眞身なり、イヱ〳〵どう思ひ廻しても、わしや何ぼでも思ひ切れぬわいな、モ思ひ切うと思ふても、儘にならぬが戀路の因果、面難は男氣の癖が浮氣か知ねども、深さ心は湖の、底の底まで連添と、思ひしことも淺はかな、女心のやるせなさ、戀焦れたる我殿御、人に寢取れおめ〳〵と、どうまあ何と見て居られう、兄樣のお詞でも、是ばかりは存さます、いやで御座んす、わしやいやじや、いやじや〳〵いやじやわいなと一筋に思ひ詰たる心根を、不便とは思へども、忠義に心取直し、ア夫ほどに思ふもの、どうぞしてとは思へども、モ此人ばかりは所詮叶はぬ、コリヤ此兄が一生の頼みじや、さつぱりと思ひ切れ、ヨ思ひ切れと、云ども更に聞入れず、又駈行くを取て引据ゑ、ヤ此奴が〳〵若者のある習ひと、了簡すれば方圖

悦びは限りなし、武成勇んで、委細のことは追てお話、爰は端近人目もあり、アノ一間にて姫君と、積ることども御物語、ヲヽ兎も角もと姫君伴ひ、心殘れど奥の一間へ入給ふ、後にうつとり妹は、思ひ亂るゝもつれ糸、ほどけ兼たる胸の内、知らぬ武成飛立嬉しさ、サア／＼妹悦べ／＼、觀音様は手に入、御主人様はお出遊ばす、モ此様な嬉しいことはない、やそれよ、我君とお姫様はお言號ばかりで、御祝言はまだなかつた、幸ひのよい折から、ソレお盃の用意しや妹、コリヤヤイ、何をうつかりとして居るぞい、ソレ何なりともお肴、ハアかうと、鮑はあれども片思ひ、祝言には忌物、ヤ本にそれよ、御夫婦中の睦しい様に、むつの煮たがあろ、又お子様もたんと出來る様に、數の子もよかろかいなア、ヤコリヤ妹そりやまあ何の眞似じややい、ヱヽ恨めしい聞えませぬ、ヤヽヽ何いふのじや、ヱヽ聞えた、偖は旦那の男振に、むだ惚の岡燒か、ヱヽたわけめが嗜み居れと、呵られてわつと泣、モ兄様の手前、恥しい事ながら、今更のことではなく、思ひそめしは過し春、お主様とも露知らず、初て三輪の神かけて、二世三世とも心では、契をこめし戀人様、何ぼ言號の姫君じやとて、目の前での祝言を、モどう見て居らるゝものぞいな、ヱヽ／＼恨めしい綾歌姫、聞えませぬは中臣様と、一間を目かけ駈行くを、引戻して、コリヤ妹、ムヽすりや、先達て御主人に、アイお主様やらどなたやら、知らぬ先に惚たお方、いかにお前が兄様じやとて、譯も知らずに呵らしやんすは、ソリヤお前

勿体なさ、堪忍して下さんせ〳〵、エヽヽモウ〳〵〳〵ふつつりと思ひ切りました、必案じて下さんすな、きつぱりと思ひ切てはナヽモウ〳〵あつちの方を見るもいや、わしや見やせぬ〳〵と、立派にいへど娘氣の、心引るゝ奥の間は、琴のしらべのしめやかに、明渡る、空の景色も、うらゝかに、ムヽウあの爪音はお姫様、ハテナア、たま〳〵の今日の逢瀬、何かなしにしつぽりと、御寢なるであらうと、思ふたは下々の心。ア上ツ方といふものは、本にゆるりかんとしたもの、めつさうな琴所かいなア、みだりの眉か、朝寢の髪か、すいた枝振り、したいてかをる、ムヽウ聞えた、お姫様の初戀、打付には耻しい故、歌によそへてぬれの仕かけか、ナヽ美や京しい、すかいで是が梅の花、やどる鶯、きのあふたどし、逢ふて嬉しき、新枕、今の唱歌は、逢ふて嬉しき、新枕〳〵、ムヽスリヤ、さつきにから聞取うち、モウ御婚禮はとうに濟で後の惱み、是聞かしのアノ琴歌、エヽ見えらしい、あつかましい、いま〳〵しい、腹が立、何のことじやいなア〳〵〳〵、おのれ一間へ踏込で、憎しと思ふ綾歌姫、恨をいはで置べきかと、又も逆立瞋恚の炎、行んとするぞ縛繩、命限り根限り、引れて棚はゆき〳〵〳〵、我名も藤もちり〳〵に、花も心も乱れ、乱るゝ乱れ髪、思ひ詰たる嫉妬の一念、鬼ともなり蛇ともなり、姿の鱗心の角、氣を紅うらのひら〳〵〳〵、引どしやくれどたよりない、エヽ恨めしい此繩目、解いて欲いと身もだえし、かつぱと伏て泣居たる、斯る樣子を最前より、見た

もない、コリヤわそこへやつてはな、御主人達へどうも言譯かないわいやい、是非とぬかせば、手は見せぬど、嚇しの刄拔放せば、サア切らしやんせ、生て居るうちは思ひ切られぬ、お前の手にかけさつぱりと、殺して下さんせ切しやんせ〱〱、ムヽすりや、命捨ても、思ひ切ることはならぬな、アイ、エヽ淺ましい心じやなア、モ是非に及ばぬ、觀念と、振上ながら、いかにお主の爲じやとて、現在眞身の妹を、兄が手にかけ殺すとは、前世の業か因果かと、思ひ廻せば可愛やなア、渡世もさもしき楊枝店、往來の人に顔さらし、兄貴を始め弟諸共、獵師まで落ぶれて、心を盡せし甲斐わつて、尋ね當りし觀世音、嬉しや長の憂苦勞、昔語と思ひしに、ふつて湧たる此しだら、マよく〱不運な生れ性、草葉の蔭で二親が、嘸や恨におぼすらんと、思へば不便さいじらしさ、思はず刀をがばと捨、どうと座してぞ泣居たる、時しも表へどや〱と、草刈童三人連、門口より聲高に、濟成樣友成樣、二人の衆が大勢に取卷れ、危いゆゑに知せに來た、早う加勢にいかしやれと、いひ捨又も引返す、南無三寶と武成は、駈出せしがいや〱〱、此儘にて出て行れず、後も氣遣ひ先も危し、兎やせん角やと思案を極め、有合細引たぐり寄せ、泣入る妹を小手縛り、藤の幹にからみ付、コリヤ必恨と思ひ居るなと、いふ間も氣遣ふ心も空、飛が如くに走行く、後にお藤は打萎れ、しばし思ひにくれけるが、心で心取直し、眞は泣寄り兄樣の、かたじけない御意見、皆わたしがいたづらからお心痛める

ナンノことだと、取て突退け逸散に、行方知れずなりにけり、コレ兄様いのう〳〵、秋九郎が中臣様のお首を切て逃たわいの〳〵〳〵、エヽ悲しや情なや、さつきの御意見聞入ず、及ばぬ戀の妬故、秋九郎めにだまされ、大事の〳〵お主様、私が口から訴人して、殺させましたも同じこと嘸や憎しと思召、此世で添れず未來でも、所詮添ては下さるまい、最早お顔を見ることも、叶はぬかいの〳〵〳〵、何の因果でこんな目に、逢事ぞいのと身をもだへ、立たり居たりうろ〳〵と、取亂したる叫び泣、餘所の見る目もいぢらしき、漸く顔を振上て、思へば憎い秋九郎、喰付てなりとも敵を打、其後にて潔よう、死でしまふが我君や、兄様達へ身の言譯、アヽどうぞ此繩の、解やうはないことか、エヽどうせうぞいなア、ヲヽさうじや、引ては切ぬ此いましめ、明暮賴む觀音様、此繩解いてたび給へと、心の誓店先の、臼に身を寄せ後手に、摺付〳〵摺付る、女の一念佛の功力、ねんなう切る繩縛、ハヽア有難しと逸散に、倒つ轉びつ走行く、斯とは知らず濱成兄弟、やう〳〵切拔我内へ、歸るも忍ぶ廻り道、コレ〳〵兄者人、一先御主人中臣様を、都の方へ御供せん、イヤ〳〵此友成が存ずるには、密に船にて、安房下總の方へ立退き時節を待たん、ホヽヲ尤去ながら、先御主人へは、兩人とも御目見えをなした、其上でと、評議まち〳〵なる所へ、道が違ふて半途より、引返す妹のお藤、コレ〳〵〳〵兄様達、秋九郎めが私をだまし、中臣様のお首を切て立退ましたと、皆まで聞かず三人は、勢込で駈出

か聞たからそ〳〵と、伺ひ寄て秋九郎、コリヤお藤、ヤアこなさんはと逃んとする、コリヤヤイ〳〵、何は逃てもソレ其繩、さつきにおれをむごたらしい、めく〳〵〳〵の其報、へゝゝ天人のはぢに付た樣な其形、どうせうとかうせうと自由なれど、得心せにや面白ない、サア〳〵、どうぞ、きまつてくれのかね、コレサ、どうじや〳〵と猫撫聲、ハテどうなりとならう程に、マア此繩解いて下さんせいな、ヲツト合點、といひたいがマアならぬ、おれに繩解して置て、奥へはいとやらかして、好た男に逢坂の、ハゝゝマア、さうはならぬ漬〳〵、サア應といやよいめに合す、又いやとぬかしや、此だんびらが、どてつ腹へ御見舞まをす、サアいやか、おうか、サ返事せい、成程切られて死ませうが、責て此世の思ひ出に、奥に御座る姫君や、中臣樣にたつた一言、恨をいふた其上で、死でも思ひは御座んせぬ、コレ〳〵後生じや、慈悲じやとかき口說、ムゝすりや此繩を解いてやれば、奥に居る幻妻や、中臣に逢ふた上で、アイ、ヲゝ夫聞ふ爲ばかりと、尻引からげ身拵、奥の一間へ駈入たり、ハツト驚き身をあせり、いかゞと見やる間もなく、ばつたり太刀音諸共に、首提げて秋九郎、すつくと立たる有樣に、娘は見るより、ヤア其首は中臣樣、コリヤもがくな〳〵、こつちを殺すと始にいふては、有樣にぬかすまいと、ぬれに事寄せ白狀させ、一ぱいかいたおれが狂言、コリヤ此首を代官所へ持て行けば、御褒美はしつかり物、ヱゝいけすかないとち女郎、奴等にけじめくわされてたまるものかい、

す、勸善懲惡御佛は、直に此地へ安置せん、一味の職人呼び集め、今日は三月十八日、最上吉日新始め、本堂山門隨身門、其名も響く雷神門、五重の塔の尊くも、天下泰平參詣群集、お藤が名代揚枝店、兄弟は實かくれなき、三社權現草刈は、十社の神と末の世に、其名は隱れ中臣の、由來を筆に書殘す

第十一

弱能强を制する事、是天のなす所とかや、されば智勇の進の中臣、檜熊兄弟が忠臣によつて、再び手に入る觀世音、太子の遺敎いちじるく、武州淺草金龍山に安置あり、堂塔伽藍成就して、衆人の渇仰いやましに、歩を運ぶ人群集、妙なる靈地ぞありがたき、猶近在近國都鄙遠近、日參講中つどひ寄り、思ひ〳〵の旗幟、地内は柳桃さくら、賑ふ春の松かさね、裝束正しく進の中臣、何と思はるゝ檜熊兄弟、斯る靈地となりしより、日毎參詣引もきらず、信心の講中を軍卒として、都へ上り朝敵蝦夷を亡さんと、宣ふ詞の引ざるうち、蝦夷の大臣に大繩がけ、山脊の宮を守り奉り、久米平内秦の豐勝、大息ついて驅來り、尊像再び御手に入り、大伽藍成就の趣を傳へ聞き、東へ向ふ蝦夷の大臣、途中にて出合一戰に打亡し、雲貫連斯の如、首にして持參つかまつり候と、申しもをはらずヲゝ目出たし〳〵、山脊の宮の御即位、都をさして登

す、ヤア〳〵兄弟しばらく待、中臣は是にありと障子をさつと押開き、立出給ふ中臣卿、後に從ふ綾歌姫、おの〳〵裝束改めて、悠然として立給へば、コハ〳〵いかにと兄弟は、呆れ果たるばかりなり、ホヽ驚きは尤、暫まどろむ夢のうち、汝が急難を救はんと佛の御告、夢覺て邊りを見れば、最前の尊像はましまさず、是は正しく觀世音、身替に立せ給ひしは、ハヽア恐れ多や勿體なやと、聞よりはつと人々は、奇異の思ひをなす折しも、はるかに聞ゆる鐘太鼓、鬨をどつとぞ上にける、兄弟はつと立上り、敵の寄ると覺たり、イデ一當と駈出す處へ、草刈童の十人連、秋九郎を高手小手に縛め、山の大將長之助、尊像を差上て眞先に進み出、代官の下地によつて、近郷の百性ども、此内へ押寄んとはかりしを、太子の御恩を請し諸職人關廻し、惡人どもを討取しに、秋九郎めが中臣樣の御首を討たりと、持て歩くは觀音樣、ハツアヽヽ勿體ないと我々が、寄てたかつて縛り上、尊像を取返せしと差出せば、濱成請取謹んで、中臣公へ捧ぐれば、上段へ据奉り、各々ハツト渇仰す、ことはりなるかな今の世まで、金龍山淺草寺、日本一の靈佛と、拜れ給ふぞ有難き、お藤は立寄り、濱成が脇差拔とり自害と見ゆれば、中臣卿刄物もぎ取、ホヽ身の言譯は尤ながら、悋氣嫉妬も正直の心より起るといひ、兄弟が忠義にて、本知に返れば我も又、今までの中臣ならず、姫は本妻其方は妾として召仕んと、仰嬉しき濱成も、ハア有難き御惠と、捨たる脇指振上て、秋九郎が細首を、水もたまらず打落

伊達競阿國戯場

作者　烏亭焉馬
　　　達田辨二

今來古往俯して察、仰で見れば慨として、一度は滿一度は闕、或は亂れ或は治る、其君權明なる則ば、家國わやうからずと、唐土のたとへを爰に大倭、足利八代の武將義滿公の御仁政ヲロシ「波しづかなる、四ッの海、未中年にましますといへども、御病身の御勞、殊に茶道を好ませ給へば、御舍弟左金吾賴兼公に、禁裏守護の職を預、閑靜の地に御隱居の願、兼々建し普請の結搆、成就せししらせによつて、時の官領細川修理之助勝元、智仁の聞え隱れなき、文武兼備の其骨柄、同じく山名伊豆入道宗全、邪智佞奸を押かくす、長けんの袖廣椽先、しづ〳〵と立出るは、賴兼公の執權、仁木彈正左衞門敎將、後に續て板棡志妻、各席に着座ある、勝元姿儀を正し、將軍義滿公には御多病にまします上、座禪觀法の御暇には、風雅に御心を寄せ給ひ、物靜かなる此景地に三重の樓閣を築き、兼て後世の御營、金閣寺と寺號を御付遊ばされ、庫裏方丈に至るまで、普請麁末のなき樣にとの御諚、滯なく成就せし上からは、近々御入の內見分、

るべし、佛敵ほろび國安全、弓は袋に太刀は鞘、四海浪風鬼は外、福は内込大入の、どうから〳〵太鼓の音、鷄驚かぬ豐竹の、代々に傳し一節を、國萬歳と祝しけり

靈驗宮戸川　終

ぞや放埒の惰弱のとは、宗全様には少しお心がちいさい様に存じまするとすこしもひるまぬ侍の、詞を返す板桐志妻、官領職に向つて、彈正左衛門詞か過る、言號の姫を嫌ひ、輿入も何のかのと延引させ、傾城に性根をうばはれ、十日も二十日も廓に居續、アノはうらつなる頼兼公を、室町の御後目とは、イヤハヤ餘りなる詮索、夫に又、さらはれた娘を、押付て嫁入りさせうと思し召、勝元様のお心も、アヽ何とやら當世めくと、山名と眼と眼を見合して、傍若無人の詞の端、無法の族に詞わらそひ、無益の至りと耳にもかけず聞ぬ顔、彈正左衛門眼に角立、ヤア上を恐れぬ板桐が案外千萬、聞捨ならずと教將が、立掛るをせいする勝元、ヤレ性急なり仁木教將、しづまられよと押なだめ、聲は雷を恐れずと、板桐ごときの田夫野人、何云てきかせたりとも牛に經文、無益の詮議、貴殿はソレ、とくつりといさむるは臣下の道、世の人口をふさぐか忠義、アイヤ何宗全殿、用事もすめばはやお暇、いか様拙者も御同道、まづ／＼お先へ、しからばと、表にかざる伊達道具、はや供ぶれをお先手の、歩行が袖ふる虎の威を、振ふ山名が尻につく志妻、はかりしられぬ教將が、善悪二ッ一すぢに、底意は深き細川に、つれてやかたへ大重三

第二

山名殿には御老體の御苦勞千萬、早見分も相濟ぬれば、打くつろいで御休息と、挨拶有ば山名入道、アヽこれは〳〵勝元殿、某杯は晩年に及ぶといへ共、苦勞なとも存せぬ勤、アヽ我君には惡い了簡、今時分から佛なぶり、茶の湯の歌のと氣のつまる事計り、我でに年をよせる樣な物、夫に引かへ御舍弟の賴兼公、島原の傾城高雄とやらんにうつゝを拔し、晝夜をわかぬ廓通ひ、放埒だじやくの其人に、禁庭の守護覺束ない、せひ〳〵御隱居がなされたくば、先々將軍の御血筋、大江の圖幸鬼行殿、伯父御なれどもまだ年若、後目相續ある時は、足利の御代長久ならんに、ヤモ室町の館を芝居事には仕兼ぬはうらつ、ハヽヽヽアイヤ誠に細川殿の御息女とは、言號ある賴兼公、お氣に障り申たらば老人にめんじ御免あれと、出はうだいなる一言も、事を好まぬ細川勝元、彈正左衞門進み寄り。コハ宗全樣の仰とも存せぬお詞、賴兼公の御身持放埒とは、何を證據のさかしらこと、承らんと結寄る彈正、細川せいして、コレサ敎將、宗全殿の御詞は國家の爲、心にさゆるは返つて不忠、夫に付先だつて願上し、お國とやらん臺頭の女舞、洛外四條河原において、かぶき芝居を赦しくれよとの願、則我君へ御伺申せし處、此頃諸國の軍も治り、一天下おだやかなれば、益々人氣をやわらぐる女舞、差赦し遣すべしとの御諚、敎將其旨云付られよと、詞にはつと仁木彈正、ハアいか樣是は我君の御政德、普四海にしらする爲、御尤なる君の御賢慮、賴兼公も將軍の御弟君、折々の廓通ひはなされ內、夫に何

ふたぞ、又ならぬといへば、コヽ此刀の切れんばいたつた一口商に、細川返答を聞うかい、イヤ中お侍樣、劍術の御手練はきつい物で御座りますが、曲輪の諸譯女郎買のいきぢは、へゝゝ、まだ御存じござりませぬそうな、ヤお腹は立さつしやりまするな、傾城買斗りは力業や劍術ではヤモどんといかぬ物でござります、ハテ先の相手が高が女、アノ酒といふ物は何國の井戸からわいて出るやら、かまぼこも鰹節も海の中に居ると思ふてゐる、甘物なれば男同士の立引とはとんと世界の違ふた物じや程に、おまへに野暮な事をやめにして、角なしのひらがなで物を云ふたがようござります、イヤサ詞をかざらぬが侍の本意、事によつては男女の論はない、と一つ握つて提切にしても武士の風儀を立ねば置ぬ、ソリやはや武家方には武家の風儀があれば、傾城は傾城の風儀で、そつちからいやみからみで高雄殿を無理に貰ふといはんすれば、金輪際此細川か高雄殿の尻持てようやるまいと、云ふたならこな樣も武士の風儀でわしを切ざ成ますすい、切て勝事を知つてござれは切れて勝事も知つて居ます、サアすつぱりと切て貰ひましよ、と命を座と投かけて、得手に取つたる四ツいぎは、分てはしさの里澤が、氣味惡ながら負ぬ顔、いよ〳〵我が腰押で、高雄をやる事ならぬとぬかせば、是非に及ばぬ相手にしてくれうが、身も出取を望む身の上、くるわの内は場所が惡い、朱雀野に待ておらう、いかにも面白い、島原の外も染るや相の花、相を血汐に染なしても、高雄殿はようやるまいわい、いよ〳〵細川朱雀

しづめてせう、アリヤサコリヤサ、ヤツトセイヨイ〳〵、腰骨どうと二人の奴、雀踊のちうとも云はず、頬をしかめて逃て行、關取の絹川谷藏、見事じや三浦屋の高雄が客、頼とやらの尻持て力自慢の角力取でも、今五幾内に誰わつて指も得さゝぬ無敵流の開山、黑澤官藏了戒の此刀、二尺三寸伊達にはさゝぬ、手の内が見てもらひたい、絹川そこへ出て近付にならうかい、へゝゝアノわしが事かへ、いかにも、成程アゝ武家方といふ物は立派な物じや、刀の講釋からさきへ云ふて、此絹川に近付にならうとは、近付に成なと云ふなぞでごんすかへ、わしも絹川の谷藏といふ、ちいさい角力取なれども此繁華の島原で、侍衆に出合おくれを取つたと云はれては、番附や勝負附の出る度に、人の口の端にかゝるが外聞が惡ひ、こなさんのそばへいて、膝と膝とを摺付て、へゝお知人に成ませうと、おめずおくせぬ關取風、床几に腰をかけ向ひ、すわやと見ゆるばかりなり、ムゝいか樣傍でよう見れば、すこやかな頬構へ、可愛やお身も立引とやら腰押とやらで、疊の上ではよう死まい、黑澤官藏が手の内はちよつとマア、こんな物じやと有合ふ火入摑ひしいでそらさぬ顏、ハテ驚入たお手の内、力づくで行く事なら、わしも絹川と云ふ角力取、いかぬこども御座んすまいが、無敵流とやらの御手練、イヤモきつい事でござりますわい、すりや絹川、お身は此官藏には及ばぬといふことな、イヤモ何と致しましして、ムゝハゝゝまだしも夫はよい了簡、三浦屋の太夫高雄は、此黑澤官藏が手の内で貰

敷が持る物じや御座りませぬわいな、イヤモウわしも有樣はちつと物事を和らかに堅事を云ふまいと思ふても、じだらくなことがきついきらい、いかにお客じやと云ふても、殿樣のやうに五日も十日も居續なされては濟やせぬ、今日は是非〳〵御歸館あられませう、エヽ何じやいな憎てらしい、此高雄が心も知らいであほうらしい、なんぼでも歸しますことは、ならぬわいなア・アイヤ〳〵、こりや德兵衞のいやる通、一先御歸館遊ばす樣に、此女之助も存まする、エヽ女之助も同じ樣にそろ〳〵、と堅仲間へ引込れたな、德兵衞があの堅くろしいは生れ付の病じやと思やこそ、いや又あの樣に云ふを逆に出て居續をせねば、張合がなうて面白ない、やつぱり堅ぞうも一興かい、サア〳〵お安酒々、アイ〳〵、かはらぬわたしがお酌、殿樣始みな樣をあれんになさで置うか、東西〳〵さて是よりは足利の賴兼公、御酒宴の始り其爲の口上左樣に、イヤモ此絹川もそろ〳〵向酒と來てをりました、一ツ下さりませうかい、絹川さそう、ちよつと申上ませう、そんなら太夫間してたも、盃に向へば違ふ人心、常にはづかしたはむれを、酒を力に云てのきよ、すこしほろゑふ顏もみぢ、花とならべしめうとごと、是は〳〵ようこそ御出でヽ、奧へ、アイヤ〳〵、御客人もあるさうなが、人目を忍ぶ曲輪通ひ、座敷の内も此編笠、どらぬは武士の面ぶせ、小座敷へサア案内しやれ、ハイ〳〵奧二階へ御供致しませう、サア〳〵是へと案内に、打連通る奧二階、女之助氣をせき立、ヤア不禮成侍、我君樣の是にござる

野で、お侍様かならず待てをりまするると、詞をつかふ弓取と、角力取との立引に、立別れたる離座敷、にらみ廻して入にけり、様子を聞て頼兼公、小性は井筒女之助、高雄も倶にいそ〳〵と、中居のお安、亭主徳兵衛、絹川をあふぎ立、ヲヽ絹川さん出來しました〳〵、サイナわしやあぶ〳〵と思ふて居た、イツモツ絹川とは思はぬ絹川大明神様、サア〳〵爰へおじや〳〵、御主君の御身に若ものことがある時は、お傍に付添ふ女之助が身の浮沈、りゝふじんに狼籍せば、討放さうと思ふて居た、イヤモあなた方がお構なさることは御座りませぬ、どの様な出入に成りなしても相手は絹川、傍から彼是おつしやりますと、返つてお爲になりませぬ、必何もおつしやりますな、いか様こりや絹川様のおつしやる通、君子はあやうきに近寄ずとまをせば、一先今日はお歸り遊ばされまするがしかるべう存じまする、ハヽヽヽ又相かはらず堅うやつたは〳〵、イヤモ堅うては色事といふ物はとんと呑る物じやない、ちつと揚屋の亭主らしう、人の面白がるやうに物を云ふたがよいわいの、太夫と寝て居る枕元へ來ても、三ツ指で、左様しからば、氣がつまつて成物じやない、ちとしやれなと稽古しや〳〵、夫御らうじませ旦那様、わたしが常々からまをしませぬか、お前の様な揚屋の亭主が何國の曲輪にある物で御座ります、酒と三味線と嘘つくことが嫌ひで假初にも、子曰青表紙の本見てござんすも、浄瑠璃本かと思へは、わしらが目には一ッも讀ぬ四角字、ほんに〳〵淋しいことばつかりが好で、お客の座

そそ、月もかすむや春のあけぼの、思ひ廻せばア、浮世じやなア、あられもない姿となり、此くるわへ入込しは、夫彈正の云付、御主君賴兼公、晝夜をわかぬくるわ通ひ、もしものことがある時は、お家の大事、幸ひ此裏藤は、先將軍義政公に、お部屋に仕へたわしなれば、室町殿のお館で、顏見しられぬを幸ひに、姿をかへて餘所ながら、我君に心を付よと、其日から此嶋原へ、現在產の娘にさへ、有馬へ湯治と僞つて、お主へ忠義夫の爲、去ながら、見たい逢たいは娘の河內、母を戀しう思ふであろと、忠と貞女を恩愛の、緣に引るゝ後帶、花の振袖香に匂ふ、仁木彈正が娘の河內、供の下部をかしこに殘し、まづ〳〵入くる顏と顏ヤアそなたは娘じやないかいの、エゝお前は母樣裏藤樣、爰にはどうして此お姿、樣子はどうで御座んすと、更にふしんは晴やらず、ヲゝ合點が行まい、其方にまでかくして湯治と僞り、爰にこうして居る事は、夫の云付我君樣の御爲、やうすは追て長い事、さうしてマアそなたは爰へ何の用でおじやつたや、アイわたしは、先將軍義政公の御墓所、さきかた御前樣より御內意の御使、賴兼公のお迎やら、又外にちよつと逢たいお方もあり、ムゝウ成程御前樣のお心こめし、此御使者に女の、ホゝゝイヤサ女のそなたを、ムゝと心にうなづき、コレ娘我君樣へ御使者の趣、お取次の其人をドレ呼出してやりませう、とつくりと御口上を、ソレまをしやいのと汲でとる、井筒にかけしなぞ〳〵は、お主の情汲分し、母は座敷へ入る後に、殘る娘は主親の、情でしたふ其

に、笠をも取ずおくへ通る推參者、引出して面ぱく〳〵と立上る、ヤイ〳〵女之助そなたは又短氣の病かおこつたな、兄義政公が御教訓なされ、向後侍の心を退いて、女の心に成て物事を堪忍せよと、御付なされた井筒女之助、そなたは又忘れたかと、御仰半へ亭主がかけ出、まをし〳〵高雄様、今のお侍様は此間から二三度御忍びて御出なされ、どうぞ高尾に逢してくれとおつしやるけれど、お前様は殿様の揚づめ、殊にお二人の中、私もどうぞと存じまして、つひにつかぬ嘘をつき、色々と申て居ましたが、もうさう〳〵御斷りの云様もござりませぬ、まをし太夫樣、コリヤお前の禿衆をちよつとかして下さりませ、責て禿衆で座敷をくろたら御座ります、コレ小枝太夫様のかはりにちよつと來て下され、賴む〳〵に禿の亭枝、亭主に連て行く後に、高尾はもだつくしんき顔、エヽ聞とむないさつきにも、官藏とやらいふ侍が、わたしを貰ふの何のといふ、アリヤお前の伯父御鬼行様に賴まれて、此間も伯父様から、わたしが方へ來た文を、コレ爰に持て居るわいな、モほんにうるさいことだらけ、殿様どうぞよい御思案遊してと、其儘膝に寄そうて、こぼす涙は戀の淵、アヽ沈んで來て面白うない、サア〳〵太夫皆もおくへ、まづ御入あられませう、露の身も、くるわの里にすみなれて、こゝ程ほんによいことはないと思ふも男ゆへ、もらすまいとてさる所のよどへ、つゝむ心のうたゝねも、まをし〳〵とおこされて、かねの音しらず時酒の、ひよんなうききよに只二人、ひよんなひよんな此身にわいそもて

緣と月日を辛抱して、待て下され河内殿と、いふに否とも岩橋の、落てはひなき思ひ川、誠の水や増ぬらん、ヨウ〳〵色事師めと高雄引連賴兼公、立出給へば、二人ははつと、顔に照添ふ夕日影、いとゞまばゆき折からは、案内もなく大江圖幸、つか〳〵と打通れば、皆々是はと驚くうち、上座にむつと押直り、ホヲ、思ひ寄なき此鬼行、悔りでおらう肝がつぶれう、我甥なれど賴兼は、室町殿とうやまらるゝ身の果報、伯父の身ながら家來同然の某、甥の草をかるといへども、見す〳〵家の滅亡を、よう見てゐぬは伯父のよしみ、足利九代の武將たりと、既にちか〴〵禁庭より、綸旨の勅使も御入あるよし、夫に何ぞや傾城に、性根を奪はれ、晝夜曲輪に居びたれ遊び、放埒とや云はん言語同斷、此儘に差置ば、天下の兵亂目前におこるは治定、奢り長ぜしあまり、先祖尊氏將軍、北朝の帝より給はりしてうりうしと云ふ名木、足利重代の重寶なるを寶藏より取出し、勿體なくも下駄に刻、其方が泥脚に掛、曲輪通ひにはき歩く由。先祖へ對して不孝とやいはん放逸千萬、先差當つて此返答は賴兼、サア何とじやどうじややい、イヤ申し我君様、すりやあなたの召まするアノ御下駄が、お家重寶の名木とまをすてとは、サレバイノ、此賴兼に無二の忠臣仁木彈正左衞門が、我に與へしアノ下駄が、御先祖よりの重寶とは、夢にも知らぬ此賴兼、さはいへよもや敎將が、我に難義のかゝることを、と思へど明て言譯せば、我に忠義の仁木が身の上、とやせん角やと思案の體、まをし我君、御言譯

人に、逢ばどうしてかうしてと、胸はどき〳〵とけしなき、我君への御使とは、誰人なるぞと女之助、是は〳〵珍らしい、仁木殿の御息女河内殿、きさかた御前樣より我君への御使とは、先以て御苦勞千萬、御口上の趣御聞られ下さるべしと、下座へさがつて兩手をつき、禮儀正しく使者のつかひ、焦れ慕ふた戀人に、心のたけの山々を、いはふ〳〵と道々は、思ふた事も百分一、おぼこ育のもぢ〳〵と、アノきさかた御前樣より御口上の趣に、賴兼公には此程より曲輪からお歸りもなされぬよし、アノさうして曲輪といふ物は、美しい女中の多い所なれば、殿樣より第一付てござんす、女之助樣が氣遣で〳〵、きつうアノソレ御臺樣の御あんじ、殊に賴兼樣には、細川の姬君とお言號もあることなれば、わたしが心に引くらべて、お姬樣のお心も推量しておいとほしく、お迎に行て女之助樣も一所に、手を引あふて連立てかへれとの、御口上で御座りまする、是は〳〵左樣のお使なれば侍中でお遣されいで、女中の身の御苦勞千萬、御口上の趣を、ドリヤ申上んと立袖を、恨めしさうに引とゞめ、女之助樣そりやあんまりお氣强ひ、是まで千束の文の數、一度の返事夏草の、焦るゝ身より主樣に、緣を結ぶの神參り、七の社へ願がけも、儘ならぬ身は朝夕の、人目にせかれ合す手も、逢た見たさにやう〳〵と、來たわたしをば胴慾に、思ひやりないお心と、口說き泣こそわりなけれ、ホヲ、せつ成こなたの志、かたじけないぞや嬉しいぞや、去ながら親々の赦しなければ、掟を背く不義の科。

に不足もない伯父御樣が、傾城狂ひの言譯、へゝ憚りながらちよつと承はりたう御座りますと云はれてぎつちり肝にこたへ、思案しかへて空笑い、ムゝハゝムゝハゝゝムハゝゝイヤサナニ細川、狂言の先取置う、コレ賴兼、さつきにから云ふたのは此鬼行が思付、十日餘りの居續、遊びの趣向が盡てであらうと芝居でする敵役、ナント伯父大領の役はよくはまつたであらうが、作者は則此鬼行、何と新しい趣向じやないかハゝゝ、サゝ打寛いでわつさりと酒にせう〳〵。エゝほんにあんまりな惡じやれ、此高雄はさつきにから、癪が胸まで差込んだわいな、イヤモ此賴兼も餘程心をいためたわいの、サア〳〵そんなら奧でわつさりと呑直そ、皆々來いのめやうたへや一寸さきは闇の夜、やんしてどうしてどうしたは、おが見んすにだまされた、わい〳〵のわいどナ、イヤまをしお侍樣、お悅び下さりませ、親方に折乘致しましてお前樣の御望通りに、ムゝ高雄が身請首尾成たか、最前お渡し下さりました三十兩の爲替證文、親方へ渡しまして、コリヤこれ高雄殿の年季證文、引替にお受取下りませい、ムゝどれ〳〵コレハ〳〵其方の大きな働、何をいふも火急な事、金子入用は親方が勝手次第、最前渡した證文の宛名、揚屋方にて何時なりとも、請取召れ、太儀太儀と證文を、取納るも編笠を、ぬかぬ不思儀と中居のお安、物蔭よりも氣を付て、始終の樣子伺ひ居る、ハイ〳〵成程委細畏りまして御座りまする、去ながらケ樣に身受は濟ましたが、かんじんの高雄樣へは、また樣子を申しませねば、

が御座りませねば、コレまをし女之助樣、父樣の御身の上にどうぞ難儀のかゝらぬ樣に、イエ〳〵何事も皆、此高雄からおこつた事、殿樣の御難儀を、わたしにおはせて此高雄、切てなりとも、きざんでなりとも、言譯になることなら、して上まして下さんせ、鬼行はゑせ笑ひ、一ッ穴の女狐、男狐化のかはの顯れ口、はえても泣てももう叶はぬ、サア賴兼言譯なくば、今爰で腹を切、伯父のよしみに介錯をしてくれうサア、さつぱりと腹切と、詰寄り詰寄る手詰の場所、イヤ必麁相遊ばしますな、御家の重寳を盗出した盗賊は、此細川の谷藏と、一間を出て眞中に押直り、サア鬼行公、科人は、此谷藏、縄打てなりとも首なりとも、勝手次第になされませう、ムヽハテ横合から物好な盗賊が出たことじやなア、名乘て出たればしよことがない、うぬに縄打引立てくれうか、賴兼禁廷守護の身を以て、晝夜曲輪に居續の放埒惰弱の傾城狂ひ、此言譯はあるまい〳〵、イヤまをし鬼行樣、いかさま伯父御樣は伯父御樣はどわつて、賴兼公のくるわ通ひの御諫言、御尤に存まする、何にも知らぬ角力取の此細川、人の話に聞はつゝた文字にさへ、人の城を傾むけるとやら恐しい傾城、お咎なさるゝ伯父御樣が、高雄殿を手に入んと、お年に似合ぬ色狂ひ、何が何と、此鬼行が色狂ひとは、何を以て慮外な下郎め、へゝゝこはい顏して候べく候、コレ高雄殿、さつきにいはんした其狀を、コレナ此手跡は、我君もお見知あらう、伯父御の御手、高雄殿まゐる鬼行より、賴兼公は御若年、御年

かへらず、裏藤さらばともぎどうに、障子をはたと入後は、途方にくれし裏藤が、しばし詞もなかりしが、エヽ胴慾な彈正殿、河内と云ふ年たけた、娘まである其中を、今更去の何のとは、餘まり呆れて物が云はれぬわいのう、ヲヽ夫々幸ひ來てゐる娘の河内、此譯いふて倶々に、夫の心をいさめなば、娘に心引されて思ひとゞまることもやと、いとゞ思ひに暮近く、しほ〱奥へ入相の、折柄歸る亭主德兵衞、マア何よりかより、御二人樣のお耳へ入ねばならぬこと、いふ聲もれて賴兼公、高雄も倶に女之助、後に續て立出る、是は〱殿樣高雄樣、マア早速さをし上ねばならぬ事、先程のお侍樣が、親方のまをす程身の代を出して、高雄樣の身受たつた今相濟ました、コレ太夫マ思ひも寄ぬそなたの身受、いよ〱夫に極まらば此賴兼は何とせうぞいの、女之助能いしあんはあるまいか、太夫そなたはマどうせうと思やるぞ、サアわたしじやとて是がマア、夢見たようなこと、せめて夕邊か今朝にでも、さういふことを聞たなら、仕樣もやうも有う物、殿物わたしは覺悟極て居りまする、ほんに敢果ない浮世じやなアと、顏見合せて詞さへ、途方に暮れし一間より、立出る仁木數將、賴兼公のお心に叶ひし傾城の高雄、室町のお館へ伴ひ來れど、義政公の御内意の御諚、則ち是が御墨附、ヤアそなたは彈正、ムヽこりやこれ高雄か年季前文、拙者めが寸志の忠義、長居は恐れ此笠の、座敷の内もぬがぬは人目、夜の編笠曲輪の習ひ、お先へお暇、我君には後より御歸館、とゆう〱として立歸る、イ

お屋敷へ上ますするは、一兩日致してから、アイヤモ其儀は苦しうない、此證文取置は、五日三日おそくとも、とかく高雄か得心する樣に、イヤもうそこに如在は御座りませぬ、夫はさうと高雄樣の親方に、ちよつとお逢下さりますまいか、左樣ならば一走りいて呼で參りましよ、暫く爰にお待なされて、ヤコノヤお安〳〵、アイ〳〵何でござんすへ、ヤ此お客樣にソレなんなりと、煮花でもして上ましてたも、コレ早う〳〵と云捨て、とつかはとして出て行く、後に中居がつく〳〵と、物ごし詞のはし〳〵まで、夫彈正左衛門に似と思へど迂濶にも、武士の忍びの其姿、思ひ付たる勝手口、有合したる丸盆に、茶碗を乘せてしづ〳〵と、指出しながら目を付て、ヤア此顏はこちの人彈正殿、シイ女房裏藤聲が高い、イヱ〳〵〳〵高うてもひくうても、アノ高雄殿を請出して、こな樣何にさしやんすへ、ヲヽサ、身が女房にするわい、ヱヽそりや眞實で御座んすか〳〵、コレお前は氣が違はせぬかへ〳〵、あれ程迄に賴兼樣の、思ふて御座る其中を、知てござんす敎將殿、夫なればこそ此わたしを、此樣な姿にして、曲輪へ入込氣を付て、御介抱まをせとの、夫の詞を背くまい、忠義じやと思へばこそ、可愛娘を振捨て、あられもない中居奉公、夫さへあるに御主人の、思ふてござる高雄殿を、戀に上下の隔はない、過つる彌生の花寄に、思ひ初たる高雄太夫、賴兼公の曲輪通ひも、懷からぬアレあの器量、思ひ切れぬ戀はくせ物、女房去た、今日から高雄は身が女房、ヱヽとびつくり駈寄目先、覆水盆に

第三

マア胴慾な絹川殿、此高雄には何の誤り、何の科あつて此様にむごたらしう殺しやるのじや、エヽこなたは〳〵、鬼かいのう蛇かいのう、ヲヽ尤じや道理じや、コレ高雄殿、苦しからうがとつくりと聞いて下され、こなたをば身受させ、室町のお館へやつては、殿様のお爲にならぬはいのう、ヤアそりや又何で行事ならぬ其譯聞う、ムヽ聞えたわいの、殿様の言號細川の御姫様は、こなたの昔のお主筋といふことは、遠から聞いてゐたわいのう、此高雄がお館へ行ば、こなたの主の歌形姫と、祝言の邪魔になると思ふて、夫でわたしを殺しやるのか、但しは姫の云付か、エヽ心のせまい歌形姫、町人の身の上でも、妾めかけはあるならひ、ましてあなたは誰あらう、足利の頼兼様、エヽさもしいわいのう〳〵、胴慾な絹川殿と、怒つ泣つ身をもだへ、痛手に苦しむ疵口の、血汐に爭ふ血の涙、一ッに落る泉水の、からくれなゐに水の色、紅葉を流す如くなり、絹川も心根を、尤とは思ども、イヤコレさら〳〵さう云ふ事ではない、御館の悪人共、頼兼公を失はんと、工のなはを掛おふせて、こなたお館へ引入るは、我君様を放埓の罪に落さん結構と、聞たるは此絹川一人、手にかけるは國家の爲、いとしいと思はしやる我君様のお爲じや程に、此所を聞分て、いさぎよう死で下されコレ、頼まする高雄殿と、云聞して

ヤモどうでも敎將でなければ夜が明けぬ、サイナわたしは餘りで本の樣には思はれぬ、ア、嬉しやと浮立つ高雄、樣子立聞く裏藤親子、夫の心の判じ物、解て一間を走り出で、悅び合ぞ道理なり、サア〳〵おめで度善は急げじや片時も早う、成程〳〵、高雄殿も一所にとは存ずれど、是なる河内は表向きさかた御前樣よりのお迎、殿樣にはマヅお先へ、高雄殿の身の上は、亭主よろしく取計ひ。成程〳〵乾度わたしが預りました、傍輩衆にも暇乞一兩日は曲輪の名殘サアもう斯う儘になりたるからは、ちつとの內は別れてゐるも又花香、裏藤親子、女之助一所に供しや、そんなら殿樣、高雄さん必待て居りまする、亭主さらばと女之助、心とり〳〵拂親も、供に館へ歸り花、殘る高雄の花紅葉、打連館へ歸らるゝ、サア〳〵まをし太夫樣、是から曲輪のお名殘、どつと祝ふて大酒盛常はならねど此德兵衛、奧で一ツと引連て、入さの月の陰よりも、くらき心の圖幸鬼行、同腹中の黑澤官藏、雀踊の以前の奴官藏樣か、峯平浪平、鬼行樣、ホヲまんまと首尾よふ高雄めを、室町の館へ引入アノ彈正めが實事を誠と思ひ、一ぱいくらふたうつけ者の賴兼、早先たつて官領山名宗全殿と示合せ、等持院へ押込手筈官藏始兩人とも、太儀であつたと根づよく仕込し工の樣子、始終とつくと立聞く絹川、目先き官藏手練の手裏劔

雲霧に、晴ぬ恨は有明の、付まとわつてくる〳〵、切と拂へど執着の、愛に顯れかしこに立、行をやらじと引戻され、エヽ淺ましい高雄殿、あれ程事譯いひ聞かすに、去とては聞分ない、コレ恨をはらしてうかまつしやれ、イヽヤイヤ〳〵、深き恨は長くの苦げん、倶に憂目を三ツ瀨川、ぐれんの浪は池の面、逆立水はざわ〳〵〳〵、絹川不便と手を合せ、一生正念三界城、南無阿彌陀佛と唱捨行を、やらじと

第四

花ちりて夏は淋しき嵯峨の道、爰ぞ三條千本の、町をはなれて畑道、往來まれなるたそがれ時、うそ〳〵來る二人連、顏をかくせし頰かむり、小陰に立寄り、コリヤ峯平、此官藏が鬼行樣に頼れて高雄が買論、意地を持せてきやんなど首尾よう身受させ、屋敷へやれば賴兼は、淺うらつ者の科を云立、切腹させて仕舞ふ積り、仕損せたと思ふたが、かんじんの玉にする高雄めが行かた、絹川めが手にかけて殺したとも云ふ噂、夫も知らずに登り詰た賴兼め、先達て山名宗全殿の計ひで、等持院へ押こめの、身を持ながら高雄に逢たがり、今日も又嶋原へ行たと云ふこと逢ひはないか、成程〳〵乾度此峰平めが見屆ましてござります、ムヽよし〳〵、押こめの身のことなれば、定めて供は大勢はあるまいな、成程左樣で御座ります、供とまをすは彼絹川め只

も、イヤ／＼／＼、只一筋にいとしいと、思ひ込だ殿樣、お傍に居たい添たいと、願が叶ふてうけ出され、今お館へ行身の上、だまし殺に殺すとは、餘り氣づよい胴慾じや、といふて叶はぬ此深手、アヽ只なつかしいは賴兼樣、最一度お顏が見て死たい、斯ならうとは露知らず、今の今まで悦んで、嬉しや曲輪の苦をのがれ、思ひ合ふた殿樣の、館へ行たら朝夕も、お傍はなれぬ鴛鴦と、つがひしことも水の泡、又二ツには兄樣や、たつた一人の妹に、不自由なくらしもさせまいと、樂んだのも夢の夢、斯ういふ内にも殿樣の、お顏が目先にちら／＼と、死ぬさきから宙宇の闇、いとし可愛の其人を、此世に殘して死ると思へば、何ぼうでもわしや、死とむない／＼も苦しげに、今を限りの其有樣、見る目もいとゞいぢらしさ、絹川不便の淚ながら、コレ高雄殿、何事も定まつた因緣づくと諦めて、迷はぬやうに快う、臨終をして下され、イヤ何ぼうでも死ぬ／＼、譬此身は死るとも、魂魄此世にとゞまり、むごいつれない絹川殿、人に報ひがあるものか、ない物か、生替り死替り、こなたの身に付まとふて、恨をなさで置うかと、顏見詰たる今はの有樣、さも物すごき其風情、心弱くて叶はじと、氣を取直して絹川が、ヲヽ恨まば恨め主人のお爲、お家の大事にやかへられぬと、とゞめをぐつと流石の絹川、何國の誰が娘かは、不便とよはる目に淚、死骸をすぐに泉水へ、ざんぶと打込む水の音、人や聞かんと身を冷す、風かあらぬか一しきり、ぞつと身の毛も立退向ふに、ぱつと燃立心意の炎、高雄が姿

明りはしらぬお侍か、ちよつと此頃見て置た小柄の手の內、何もかも此谷藏が地獄耳へ、とつくりと突拔たれば、此場の樣子もたいがい知れた、誰ぞに賴れたのじやな、コリヤ谷藏、重ね〴〵にくいやつじや、ソレ縛つて屋敷へ引やい〳〵、かしこまりました、私にお任せなされませ、サア其賴れてをそこへまき出せ、イヤ誰にも賴りやせぬ、吾につがふた曲輪の立引、おれが心一つの意地じや、こま言いはずなソレ兩人、まつかせ合點と切込二人、さしつたりと身を開き、引つかんで二三間、前なる川へ投込ば、水をくらうてあつぷ〳〵、すかさず官藏後より、拔打に切付るを拔合して切結び、勢込んだる絹川が、踊上つて切込刀、請はづして肩さきを、袈裟にすつぱと切下げられ、うんとばかりに倒るゝ官藏、サア私はこゝを片付、後から追付きます程に、お前樣は南禪寺の方へ向け、一時も早うおこしなされ下さりませ、サア〳〵早うと氣をせけば、そんならおれは先へ行く、必早う來てたもや、お氣遣遊ばすな、直に私追付きます、サヽ早う〳〵、そんなら行は行うが、道は知らず暗さはくらし、谷藏〳〵提燈持やい、アヽまをし〳〵わかりがわつては惡うござりますと、いふ間に川よりはい上る、二人の奴が後より、物をも云はず切かゝる、心得たりと腕ねぢ上、三條通を眞直に左へ〳〵と、お越あられ下さりませ、アヽまをし〳〵跣足ではおみ足が、殊に大事の此御下駄、まづ〳〵是を召まして、一先こゝをヲヽ合點じや、そんなら先へと賴兼公、知らぬ道筋そこゝと、歩み給ふぞいたは

一人、ホヲ面白い波平を最前より嶋原へ遣し、賴兼が歸りを知らする手筈、忍び歩行のことなれば、西口を出て千本通りを、此道へ來るは治定、待伏して喧嘩に事寄、打殺してしまふ積、隨分其方氣を付よと、見やる向ふへすた〳〵息、驅來るは奴波平、アヽ官藏樣、只今賴兼を駕籠に乘せ、絹川が附添て西口を出る所、先へかけ拔け韋駄天走り、追付爰へ參る駕籠が、ヲヽ出來した〳〵、コリヤ兩人、谷藏めは其方兩人に打任す、身は賴兼めをぶつぱなす、喧嘩の仕かけはナコリヤ、斯う〳〵とさゝやき〳〵、木影へ隱るゝ間もなく、駕籠に引添ふ絹川は、高雄が事を我君に、包隱してさま〴〵と、心を碎く後先より、おつ取卷たる頰かむり、ひらりと見せたる拔身の光り、のう悲しやと駕籠打捨、後をも見ずして迯て行く、すかし詠て絹川が、ムヽ聞えた、こりやわいらは人をおどして物を取、追剝の見習じやな、へヽヽいかに人通がなければとて、まだ暮れもせぬうちからハア、うぬらコリヤ命がねぐさつたな、邪魔せずとそこ退うと、駕籠を圍ふて仁王立、イヤ絹川わりや、此官藏を覺えて居るかと、木かげより立出、朱雀野に待て居ると、口ばかりの腕なしめ、此官藏がもらひかけた傾城の高雄、賴兼に受出せては身が武士が立ぬ、二人ともに觀念ひろげ、おいら二人も此間の踊の仕返し、絹川一寸もやることなるまいわい、絹川〳〵、官藏とは先日くるわで慮外云ふたやつか、にくいやつじやナ、そいつしばれやい、成程私がよろしうはからひます、ムヽ聞えた黑澤とやらくらがりとやら、

はあはうめを付て、墓参りに遣しました、もう追付け歸るでござりませう、ム〻夫は道理〳〵あの子も大抵の力落ではないてや、ヤ夫はさうと三ふ殿、ちつとこなたに尋たい事がござると云ふて爰に御座る衆は、皆安心い中のことなれば、何にもこな樣一ツも遠慮する事は御座りませぬぞへ、外のことでもない此佛のことじや、一しきりのこな樣のどうらくで、嶋原へうかれて行れて、大分繁昌の太夫になされたといふ噂、ア〻仕合じやといふて居たが、思ひがけない不仕合、ア〻誰やらあだいな噂しました、彼嶋原の高雄とやら風巾の尾とやらいふおけんせんが、絹川といふ相撲取に、むり殺に殺されたとやら、何とやらかとやら聞ましたが、よもやそなん事は御座りますまいのう三ふ殿と、問れてぎつくりわたる胸、ハ〻〻ハレヤレやくたいもない、左樣なことでは決して御座りませぬ、全躰あいつは癪持で御座りましたが、急に取詰まして、思ひがけもない死を致しました、可愛ことを、ヤ本に話ばかりに氣をとられ、酒のかんが通りすぎよと、云つひ〻立て釜の前、燃え兼る火に出る涙、紛し兼ねたるばかりなり、入相過て宵月や、覺束なくも我君の、御身の上を絹川が、癪持足の後よりも、犬と思しき忍びの者付來るとも知らぬ戸に、思はずばつたり内に悔り、三ふ殿、アレハ何じや、仰山な音でござるぞや、イヤ大方犬で御座りませう、きらずを外に出して置ましたが、又くらいに來たのであろと、云ひつ〻表の戸を開き、すかし眺て、ム〻見ればくつきやうの若い人、何とぞさんしたの

しさ、後見送りて絹川か、サアもう心が落付た、是からは猶千人力と、見おくる内に起立官藏、よろめきながら二人の奴、又切付るをはら／＼と、切たふせば、もう叶はぬと官藏が、逃出すを飛掛り、どうと引伏のつかゝり、我君樣に仇するやつ、うぬらを生てはお家の仇、ぐつと笑込とゞめの刀、折から向に人聲足音、見付られては身の大事と、主人の後を一散に、飛ぶが如くに、

第五

願以此功德平等と、打納たる鉦の音は、南禪寺の門前に、名代もあつき湯豆腐屋、三ふは妹か不慮の死を、世間へ隱しなき跡を、當世模樣の龍田川、小袖を傍の屛風にかけ、前に手向の香花も、はかなき名のみ殘りなく、弔ふ高雄が一七日、中陰とこそ知られたり、燗鍋とさん手の物と、湯豆腐豆な亭主ぶり、ヤレ／＼御講中樣方、どなたも／＼いかい御苦勞で御座りまするサア／＼一ツあがつて下さりませと、午房のふと煑人參の、したしみ深き講頭、アヽイヤイヤ何にもかまはしやりますな、心遣は無用で御座りまする、今日は蹴上の三星屋へ、法事によばれて爰が二度目、イヤモ是が本のひん僧の重時と云ふのじや、ヤ時に就て妹御はどつちへぞいかれましたか、サレハ聞て下さりませ、葬禮の時分には取乱して供にも立ませず、夫ゆゑ今日

こちへはいらんせと伴ひ入、賴もしげなる一言が、我力より百倍の、小腰かゞめて入跡は、奥に氣を付傍へ寄、テモよい男じや、かつぽくと云ひふとり肉、時にアヽわしを見かけて、かくまふてくれといはしやる、其仔細は、ハ仔細といふは此通りと、さし出す脇指手に取て、ムヽ鯉口にしたふ血、サヽ夫じやによつてお賴をす、ムヽして喧嘩の樣子は、サレハ主人とまをすはやんごとなき御方、曲輪の出入が意趣となり、御忍びの歸るさを、待伏したる其所は、西三條の野はづれ、人通りなき黄昏時、忍びの御供と用捨をすれば、よわみへ付込相手は三人御主人には替られず、三人ともに仕留コレ、シイハテ小氣味のよい今の話、ようごんすかくまいませう、すりや樣子を聞て御得心の上、ハテ町人でこそあれわしも男じや、ハアヽかたじけない〳〵、其詞を聞く上は、何をかくさうわしが名は、アヽイヤ〳〵待しやれ、今は聞ますまいかくまひおふせた其上では、何時でも聞かれること、萬一ひよつともれた時は、わしが口からと、疑れるも口惜い、ハテかうなるも因緣づく、心置なう横にでもならんせと、實賴もしき男氣、斯る有たき風情なり、谷藏はあたりを詠め、アヽイヤ御亭主、見れば法事の體でもなし、不幸でも御座りましたか、アイヤモ話をするも淚の種、わしか妹が二人ごんすが、揃つきの妹は仔細あつて、外へ出して置ましたが、可愛ことは此間なくなりました、ハテ扨夫は笑止なこと、袖振合も生他の緣、せめて一遍の回向ても致しませうわい、ハテさてこな樣は見かけに

か、ハヽイヤ殊の外道をせきまして、どんと息を切しまして御座ります、御無心ながら水を一ツ、御振舞なされては下さるまいかと、いふに心得內に入、水しらずにも世は情、しづかにまゐれとさし出す茶碗、押いたゞいてぐつと呑、一息ほつとつく有樣、何角樣子の有顏と、見て取る生得男氣は、持て生れた主の三ふ、見りやいから取亂してござるが、こな樣コリヤ樣子の有人じやわいの、ハアヽ御推量の通、御主人の爲、アイヤ何ともまをし兼ましたが、暫の間こなたの內に、かくまふてくれといはんすのか、いかにも左樣、ムヽそりやはや事と品とによつたら、かくまふまいものでもないが、アレ見やんす通り、今は內に客がある、ちつとの間そこらに待て居やんせ、能時分に知らせませうと、云ひつゝとつかは內に入、ヘヽヽヽコレハ〳〵不調法な亭主ぶり、何もないが一つ上つて下さりましたか、イヤモたべました〳〵、サヽもうお暇まをしませう、アヽイヤ〳〵まをし、ハアヽ何やらお賴申たいことがあると、妹めがまをして、居りました、ハアヽ夫は何であらうな、ヱヽそりや大方石塔のことであろ、そんなら皆の衆、とてものことにもそつと待て、妹御に逢ふていにませう、付合じや、奧で五十番くらはそうじやあるまいかアヽ講頭たしなまつしやれ、アヽイヤ〳〵さういはしやんな、骨牌の數も四十八枚、則彌陀の御誓願、佛は見通しいざござれと、打連てこそ入にけり、あたり見廻し表の戶、そつと押明け小聲になり、最前のお人そこにか、サもう氣遣はない、サヽマヽ

見失ふた、エヽモしんきなことをしたわいと、いふもしどなき娘氣の、くらさに迷ふ戀路の闇サア何じやか知らぬか、めつた矢鱈に走つて行れた、ありやたしかに富でもあたつたわいな、てきにかゝつて此樣に遲うなつた、此通り旦那樣へ、わしや正直に云ひますぞへ、エヽコレイのうめつさうな、兄樣に云ふてたまるものか、かんまへてそんなこと、いふてたもんな頼ぞやヲツト賴まんすなら云ひますまい、コレ其替りに、おれが常々ほしいといふた、博多の帶買ふて下んすか、サアそりやどうなりとしやうわいの、そんなら必博多の帶、忘れまいぞと、我家の門口、ハもう寢たさうな、旦那樣戻つたぞへ〳〵と、頻りに擲く表の戸、何を馬鹿めがやかましいと、云ひつゝ立て押開き、ヲ妹やれ〳〵待かねました、嘸草臥てあろ、お前も淋しうござんせう、イヤさうもなかつた、留主の内は講中が、百萬遍の念佛で、淋しうも思はなんだ、がきつう隙が入たのう、若い者の夜に入て、重てたしなみませうぞ、大方又あほうめが道草をしをつたであろ、イヽエ旦那樣道草はたべませぬ、寺で素麪をたべました、夫から歸る道で逢ました、そりや誰に、エヽ逢たわいな、誰に逢たぞいやい、ハテ木綿川よ、アヽ木綿川はよい男じや、成程アノ子の惚なさつたも尤じや、アヽ是いのう何をいふのじやぞいの、ヲヽ南無三博多の帶とまぎらかす、何をぬかすやらおのれが云ふことは一ツも譯かしれぬ、竪から見ても横から見ても、あはうではあるわいの、イヤ夫はさうと妹講中はまだ奥にじや、夜食でも

似ぬしはらしい心のお人じやのう、夫は近頃かたじけなうごんす、サア〳〵そんなら是へと、おくそこもなき魂の導か、ふしぎに廻り着なれたる、小袖の模樣は覺の目印、ハツト驚く絹川か、偖は此家の妹かと、胸にひいやり冷風の、吹ともなしにざわ〳〵〳〵、高雄が妄執晴やらぬ、何の心も振仰ぎ、恟りあやしみ駈寄三ふ、立身でおはひ、御亭主、後に逢せう、と心に何角一物を、わからぬ胸の納戸の內、後には三ふが思案顏、ハテ心得ぬアノ小袖、仕ある如く動しは、心の迷か但し又、好にかゝりし非業の死、可愛や妹迷ふて居るか道理じや〳〵、尤じや、出離生死頓生菩提、なむあみだ佛〳〵、もがきくれてもり出す香やかき立る、御あかしの火も細々と、いとゞふさがる胸の闇、くらき道筋恩愛の、血筋しんみの袴あり、うと〳〵戻る妹の累、後から付て丁稚の德次、コレ累樣〳〵、お前の用のある時にはふら〳〵して居て內の近所になると滅多無上に走らんすわいの、サイのう兄樣が、待てござんせうと氣が付たらモヲ〳〵心がせいてどうもならぬわいの、何をいはんすやら、此樣に遲うなつたは、さつきに寺町の辻でちらりと見た、此春お前が清水で見初さんした、角力取の、ソレ色男よ、ヱヽあいつが名は何とやら、どうやら物着の樣な名であつたが、ヲヽ夫木綿川よ、わしが自由になるならナア、どうぞお前とひとつにしてやりたいわいな、さればいのわしも明くれなつかしう思ふて居たが、今日ふしぎに廻り逢、つきせぬ緣と嬉しうて、心のたけをと思ふた內、かいくれに

しが行て買て來てやろ、コリヤおはうよ、ソレ提燈ともせと尻輕く、兄弟中も宵の口、うた丶寢入もねいられず、立出る絹川を、ちらりと見るより累か悄り、樣子は何も知らぬ三ふ、ヤお客人どこへござる、アヽイヤさつきにお話をしたお方の身の上、どう思ふても心掛り、そこらまで行て見て來ませう、ムヽさう思はんすも尤じや、が幸ひの所じや、妹こゝへおじや〳〵ちよつと近付にして置う、爰に居るお人は、前かどおれがきつう世話になつた人じや、ムヽそんなら兄樣、お前さんお近付かへ、ヲヽそりやマアようお近付で御座んすなア、お前樣は又ようお出なさんしたなあ、今夜尋て見た故、四五日もこちの内に、ソレ隨分馳走してたもや、ヲ馳走せいでよい物かいな、四五日といはずとも、いつまでも〳〵御座んしたがよござんす、本にまアようお出なさんしたなあ、イヤお客人、是がわしが妹でござんす、名は累といひまする、アイ〳〵私が名は累と申ます、ほんにまあようお出なさんしたなあ、近付になつて隨分可愛がつて遣て下さんせと、引合すのは戀したふ、其人ぞとはしらはりの、行燈のかげに阿呆が見付、アヽあの人じや〳〵〳〵、ヤイ〳〵何をぬかすのじやたわけ者、ハテ偖お前はきつい野暮じやわいな、とうから主に其後は、云はず語らず我心、ムヽテン〳〵〳〵、ヱヽよい加減に置やがれと、天窓をぴつしやり、あいたし小隅へかゞみゐる、夫とさとれど兄弟の、さし合くつて知らぬ顏、イヤ三ふ殿、是がこな樣の妹御か、偖も〳〵よい樂かでござんすのう、わしは

して進せたいが、何ぞ拵へてたもらぬか、アイ〳〵わたしもさう思ふて氣がせいた、どうぞおかずになる物がと、云ふに德次がしてやつたと、提て出たる肴籠、へゝさす物じやないわい、大方今夜は入うと思ふて、晝肴屋で一番鯛、何と一かどの法事でござんしよが、ヱゝごくだうめと、傍に有合しゆろ箒、擲き廻され迯廻る、音に驚き駈出る講中、中に分入押分れば、イヱイヱ餘りな大馬鹿め、性根玉の付樣に、サア〳〵〳〵ようござる〳〵、いつもはとあれ今日は逮夜、マア〳〵了簡してやらしやれと、挨拶とり〳〵押しづめ、ヤ妹御お歸りか、何かわしともに用があるさうなが、今夜はいかう遲なりました、又明日でも來て聞ませう、サア皆の衆もうお暇まをさうと、立上れば引留、夫でもまをしお夜食を、拵かけて置ました、何はなくともお茶漬でも、アゝやくたいもない、まだ中陰も長いこと、ゆるりと馳走になりませう、さらば〳〵と立出れば、三ふも表へ門送り、挨拶後に聞なして、皆々我家へ立歸る、後に德次が吐息つき、ヱゝ中陰と云物ない物じや、高雄樣のおかげで、先しゆろ箒は助かつた、今度あんなことがあつたら、累樣お前又死で下さんせ、ヱゝどんなこと云ふて又、呵られうと思ふて、イヤまをし兄樣、姉樣の日頃お好の、白川橋の輕燒買て戻つて供うと思ふたが、日の暮れ故に氣がせいて、とんと忘れて歸りました、わたしや氣にかゝる一走り行てかうか、アゝめつさうなよしにしや〳〵、もう五ツも打たであろ、女の夜道いらぬ物、併し夫ほど氣にかゝるなら、わ

清水の、地主の櫻もちり〴〵に、鳴鐘に氣もせきせられ、最一度お顔もどこへやら、霞かくれに歸る雁、文の當ども泣明し、合ぬ夜の目にもる涙、一ッ枕をいつとても、ぬらさぬ夜半も、ないわいな、餘まりむごひ胴慾と、くどきかこつぞわりなさよ、ヲヽイヤモウ、さう思ふてくだんすは嬉しけれど、惣體相撲取や淨瑠璃太夫に、女はきつい毒じやとやら。分て相撲といふ者は、今日爰に居るかと思へば、明日は仙臺へ行うやら、長崎へ行うやら、住所も知れぬ身の上、なまし中緣を結んでは、お前の爲にもなるまいし、又兄御の思はくどうも濟ぬわいのう、殊にわしも望のある大事の身、此事ばかりはさつぱりと、思ひ切て下されと、聞てがつくり女氣の何と詮方一筋に、思ひは深き谷藏が一腰に手をかくれば、コハ何事と、もぎ取手先に縋付きイエ〳〵放して下さんせ〳〵、お前の心にどの樣な願望があらうとも知らず、女のはづかしい事の數々云盡し、願叶はぬ上からは、生て思ひをしやうよりは、いつそ殺して下さんせと又取すがれば谷藏も、流が岩木にあらぬ身の、ハテ緣といふものは味な物じやなア、姊の高雄が恨のある此おれを、現在の妹の、マ夫程までにおれが事を、ヘヽヽムヽ、志請ました、何にも云ぬコレ嬉しいと、しつかと引寄抱しむる。四手がらみや花相撲、行司は爰にと一間より、きてんきかして持出る、枕屏風を阿呆の德次、東西〳〵、片屋に痛が御座りますゆゑ、勝負は追てとらせますと、搆ふ屏風は戀の關、妹脊の結びと成にけり、ハヽヽヽハヽヽヽヽコレ累

兄御の、きつい御世話になりまする、よう禮云ふてくださんせ、時にわしは、ちよつと見て來ませうと、立上る袖兄の前、こは〳〵そつと恥かしく、どつちへお出なさんすへ、イヤ連が一人見える筈、夫を尋に、マア滅相なこといはしやんせ、此暗いのにお一人で、わしや氣遣な氣が濟ぬ、もしや迷子にでもならしやんして、又見えぬ樣になつたら惡い、お連のお方がござんすまで、二年も五年も百年も、待合して御座んすが、わしやよからうと思ひます、としどもなまめく詞さへ、はづかしさうなおぼこ氣の、手の置所なか〳〵に、赤らむ顔はみかいから、色香こもりて可愛らし、始終のそぶり見てとる兄、かうしませう、買物に行ついで、わしが尋て來てやらう、アヽイヤそれでも夜道と云ひ、お見知りも御座るまい、ハテそこらはめつたにさすものじやないわいの、さつきに聞た話の都合、まんざら雪を墨とも見違はしますまい、其上こさなんは餘り外へ出るはいらぬ物、幸ひ留守はわいら二人、氣を付て下さんせと、粋どほして出て行く、氣もやはらかに豆腐屋の、亭主はちやうちん提げて、アヽ妹めが、おつようやりをればよいか、アヽ儘よと、とつかは彼所へ出て行く、後は互に詞さへ、岩間の花の片男波、寄ては歸る風情にて、汲で來る茶も傍へ寄、鹽のさし引それぞとは、汲めども態と知らぬふりアコレ〳〵妹御、不思議の縁でお世話になりやんす、ヤモ何も構ふてくだんすなと戴く手をばじつと取、わたしに何にも云はさぬ樣、其お詞は何ぞいな、過し彌生の花の頃、思ひ初たは

〳〵、ようまアお出遊ばしたと、俱に介抱德次は不審、顏を詠て居るばかり、谷藏、そちが內か、ハイヤ私が宅ではござりませねど、隨分念頃な者の所でござりますれば、お心置なう、ヲヽイヤもうそなたに別てから、道は知らず暗うはなる、モウ〳〵大きに草臥た、コリヤ〳〵二人ながら爰へ來て、足でもさすれ、と仰に德次がむつと顏、ヱヽ何じやい〳〵、いけぞんざいな、餘り安くすない〳〵、一貫が豆腐買に來ても、めつたに足を揉樣な德次じやないわい、といふを打消、イヤおみわしは私がなでませう、イヤコレ累、お湯漬でも上ましたい、ちよつと拵てたもらぬか、アイ〳〵合點で御座んする、コレ德次そなたも來て手傳ふてたも、ヱヽ何の知れもせぬ人に、構はずと置しやんせと、力む阿呆を引連て、勝手へこそは入にけり、賴兼公聲をひそめて、シテ最前の者共は、ハアヽ我君樣に仇する者共、官藏始三人とも、ムヽ皆切てしまふたか、ハアヽ併お忍びの事なれば、御前のお名が出ては如何、世間を渡る相撲取の此絹川、何國までも相手は私、御前のことは露程も、ヤ御安堵遊ばされ下さりませうと、云內表に聞ゆる足音、はつと驚き大事のお身、見付られじと見廻す戶棚、ヤ是幸ひの御隱家、御窮屈ながら暫の內、是へ御入下さりませと、御手を取つて戶棚の戶、明て入る間に歸る三ふ、門の戶くわらりと見付る俤、仔細わらんと納る胸、互に夫と知らぬ名の、ホ御亭主今歸りか、ヱお客人嘸待かね、今の戶棚のくわつたりは、ハヽイヤ其元なれば氣遣なけれど、人目忍ぶの

樣、アヽモウ音がせぬ、アノ木綿川樣と累樣とは色かへ、左樣じや／＼、コレ誰か來るか表に氣を付けては居る程になア、用があるなら呼ばんせと、云棄勝手へ入にけり、實や高きも卑しきも、戀の道には譯隔なき人ぞとは白露の、消し高雄に迷ひ道、不慮の難儀を漸と、遁れて爰に賴兼公、絹川が敎さへ、しろし召れぬ夜の道、そこやかしこと、さまよひ給ひ、アヽしんどや／＼、谷藏がいふた三條通りを眞直に南禪寺の方へ行といふたが、ヱヽモとつと咽がかわいてどうもならぬわい、そこらに葛水はあるまいかな、アヽ是に付ても逢たいは高雄がこと、絹川がいふには、急病で親里へいたといふ、本に又太夫も太夫じや、行なら行とちよつといふておこしさうなものじやが、此四五日は出輪へ行ても逢れはせず、とんと便さへせぬは、太夫が心が替つたか、アヽ何にも替らう筈はないがな、ヱヽモどうぞ逢たいことではあるぞ、アイタヽヽ、どつと足は痛し、どうぞ湯をとらしたい物じやが、ヲヽ向ふに火の見える家がある、是幸ひと歩寄、ヤイちよつと爰明てくれやい、早う／＼とのたまふ聲に阿呆か駈出、何じや／＼／＼豆腐か、豆腐は賣切たによつて、アノ夫今最中豆をようしてゐるわい、あしたござれ、イヤそんな事じやない、早う明てくれやい、早う明いと御聾耳に絹川が、走り出て表の戶、ぐわらりと引明、ヤ我君樣、絹川か、ヤレ／＼わか身に逢たかつた／＼わいの、イヤ御前より私めがと、內へ伴ひ悅ぶ主從、累も立出コレまをし、偖は今の話のお方樣でござんすか、ヲヽ是は

手向はせぬとつくりと、先々一通り言事あり、イヤ面倒な聞ことなしと、又振上る手先に取付コレ〳〵〳〵兄樣、何かは知らねど絹川樣、いふ事ありとのお詞は、深い樣子もござんせう、御氣をしづめて一通り、聞て進せて下さんせと、兄と夫の中に立、心遣の憂涙、ヲヽ累殿よう留て下さつた、イヤコレ三ふ殿、此脇差の鞘ながら相手になるおれが心、又最前アノ位牌に、俗名高雄と書て有を知りながら、絹川といふ本名を包まず名乘此谷藏、さら〳〵卑怯未練でない、がどうも命の捨られぬと云ふは、マ何をかくそう戶棚の內にましますは、勿體なくも足利左金吾賴兼公、又我父は細川家の侍、故あつて浪人となり、埴生村に引籠り、土百性にて身まかりし、今はの際まで古主の事、何卒御恩を報じてくれと父の詞、おのれやれ何をかなと君へ附添、年月心を碎し所に、官領の姬君と緣邊極る賴兼公、侫人奸者の謀計にて、姬樣を嫌はせ高雄を身受し館へ引入、御身持を惰弱にさせ、夫を科に取て押込、御家を奪ん謀と、聞知つたるは此絹川、惡人どもが餌にならしやつたは、高雄殿の身の不運、手にかけたはお家のため君御婚禮濟ざるうち、死では亡父へ言譯なし、サコレ爰の所を聞分て、此敵討どうぞ延して下さる樣、コレ偏に賴存ずると、忠義一途をさつぱりと、言流したる絹川の、辨舌水の如くなり三ふはくと〳〵聞屆、ハアヽ道はお侍の種、驚き入た忠義の程、聞屆ました敵討隨分待て進ぜませう、スリヤ只今申した通りを、いかにも聞分ておりますわいの、ハアヽかたじけなしと

伊達模様、宵に話した大事のお主、ヤサ命にかへぬ踊帷子、此戸棚へしつかりと、來るか表に預つて下さるまいかい、ムヽちらと見た模様のはし〴〵、そんなら今のが、こな樣のと、思案の胸は妹の、高雄が片身の染色も、しつくと合た心の割符、打うなづいてへヽヽ、わしが性根玉を見すえて、大事のヤサ大事の物を預さんす程の中、名を知らぬもどうやらいな物じや、宵に聞も男らしうないと聞なんだこなたの名、ちよつと聞して下さるまいか、是は〳〵、イヤモ宵にさへお話まをさうと云ふた身の上、わしが生れは下總の埴生村、所に絹川と云ふ川がござんす、夫をかた取て絹川の谷藏といふ、アイ相撲取でごんすわいの、ムヽ、すりやこなたがアノ、絹川の谷藏殿か、ムウ、こなたがいよ〳〵絹川なれば、妹の敵、覺悟せいとずいと拔て切かくれば、飛しさつて煙草盆、はつしと受留マア待た、待とは絹川おくれたか、町人なれども妹高雄が敵、のめ〳〵と見遁さうかと又切込、拔身をあしらふ脇指の、鞘口受て渡合ふ、音に驚き駈出る累、何と詮方女氣も、夫を思ふ心の働き、枕屛風を追取て、合せた中へとつさりと、我身をしつに厭はゞこそ、ヤアそこ退妹、そちには今日まで明さねども、妹高雄を手にかけたは、コリヤ此絹川の谷藏じやはやい、ヱヽそんなら何といはしやんす、アノ姉樣を手にかけたは、此絹川樣で御座んしたか、ハアはつとばかりに當惑涙、ヤア返らぬことを何めろ〳〵、イヤ未練なり絹川、立寄て勝負〳〵、と累を引退振上る、拔身の下へ投出す一腰、コレ

直に門出の旅出立じや、妹早う支度をせいと、打連入る後陰、伏拜み〳〵、エヽ兄樣かたじけない、日頃の願叶ふといふも、みんなお前の情ゆえ、死でも忘れは致しませぬと、云つゝ立て鏡臺を、かたへに直す勝手より、立出るあはうの德次、エヽ儕今夜は替つた夜じや、逮夜かと思へば、やつとう〳〵切合かあるわい、こりやじつと見ては居られぬわいと、ぐつと尻引からげて、何かなしに裏口へ通かけて見たれば、ちやんと中が直つて又婚禮じや、何でも是や盆も正月も、祭も彼岸もゐのこも初午も、一つになつたやうな、コレ累樣、大方いらうと思ふてな、隣のかみ樣の綿帽子をかつて來た、ヤ夫はさうと、さつきの横柄な奴はどこにゐるへ、エヽまだいかぬさうな、お前と細川樣大事の婚禮に、あんなやつが内にゐては、どうやら邪魔をしさうなやつじやぞへ、どうぞいなしたい物じやが、ヲツト〳〵よい思案があるぞ、此中おれにすへるといはんした三升や、ちやんと袂に隱して置た、へヽヽこいつで一番まじなうてこまさうと、裝取出し庭におり、テモマアおかしな下駄をはいてうせた、何でもようきくやうに大きうしてすへてこまそと、もぐさ掴んで行燈の火、マヽマア是でよいは〳〵、コレ〳〵累樣、用かあるなら呼ばしやんせ、開やんすと云捨て、とつかは走り入にけり、累は向ふ鏡臺の、うつれば變る戀無常、嶋田を解いて丸髷に、尺長かけし二世の縁、長き契の夜も既に、丑滿過る風に連、くんじ渡れる名木の、薫りに累は不審顏、ハテ替つた薰がする事やと、邊り見廻し〳〵

悦ぶ絹川、累は嬉しさ其百倍、兄様ようまあ聞分てと、いふも切なき心根を思ひ廻して立寄戸棚、錠前しつかと、ヤコレ絹川殿、こなたの爲には大切な、御方びらは此三ふが、命にかけて預つたが、人をあやめたこなたの身、願望の叶ふまでは、一先本國下總の、埴生村へ影隱して時節を待が忠義とやらではあるまいか、ハ成程お志はかたじけなけれど、此絹川かお傍に居ずば、サヽ夫も此三ふがひそかにお館へ御供なをすが、夫ともに氣遣はしくば、妹の此累、人質ではない高雄が敵、一人はやられぬ付てやる、ア夫も面倒かい、不承ながら一生女房に持てやつてくだんすまいか、スリヤ是わしが爲にも大事のお主の此戸棚、ノコレ聞分て下されと、義理と忠義と恩愛に、からむ妹脊の縁の綱、落付胸は絹川が、ハヽ何が借仇を情に引かへて、我身様の御介抱まで殘る方なき志、此世は愚未來まで、女房の此累スリヤアノ添ふてやつて下さるか、コレ〳〵妹悦べ、アレ絹川が女房に持てやろうとやい、ハア嬉しふござんす〳〵、かたじけない、是も偏に兄様のおかげ〳〵と手を合せ、嬉し涙ぞ道理なる、ヤモから心か解合は、未來の高雄が恨もあるまい、責てちよつと祝言の、まなびなりともさせたいが、姉の忌中のたばね髮、ヤコレ累、つひちよこ〳〵と結直せ、其間に奥で何角の話、いか樣我君様のお身の上、お館の樣子とつくりと、お頼みまをすは小舅殿、聟殿こちへと先に立消し獨の妹は、まだ家の棟をはな嫁と、戀も無常も世の中は、夢か現か現とも、わかぬ今宵の三々九度

の付下駄、ハツト取上煙を清める絹川が、顔をじろりと恨めしげに、消て留る筐の小袖、ハテ怪しやと見廻すこなたに累が有様、コハ何事と立寄つて、コリヤ〳〵累氣を付よと、抱き起して顔見れば、不思議や今まで嬋娟たる、容顔忽地悪女の相、死靈の念こそ恐しき、悔りしながら邊の丸綿、直に打着抱しめながら、エヽまだ浮ばずか高雄殿、何事も我君のお爲と思ひあきらめて、恨を晴して下されや、南無阿彌陀佛〳〵と、唱る内より主の三ぶ、銚子盃持て出、コレ〳〵心ばかりの此祝言、ちよつと結びの盃をと、様子は何も白露の、涙かくしてのう三ぶ殿、斯う互に得心の上、盃せずとも夫婦は夫婦、夜明ぬうちに旅立を、サア〳〵夫も尤、がいはゞ妹が一世一度、サアそなたから取上てと、立寄て綿帽子、取て見る顔おそろしく兄、ヤ其顔は、サヽヽヽコレ驚くことはない三ぶ殿、高雄の執着故、チコレサ高雄殿の執着故、譬面體替るとも、一旦約せし女房の此累、イヤサコレ何も案じる事はないわいの、ハかたじけない〳〵過分にござるわいの〳〵、何にも云ませぬ絹川殿、コレ必見捨て下さるな、とかうする内早七ツ、夜明ぬうちに片時も早う、そんなら三ぶ殿、我君様の御事を、サヽ夫合點、只氣にかゝるは妹が事、アヽコレ呑込で居ますわいの、女房とも〳〵〳〵、サア〳〵、コレ累々おじやと、手を取て立出れば、漸心は付たれど、我面ざしの替りしとも、知らぬ旅路へ女夫連、出行く姿恨めしと、晴ぬ高雄が執念の、残る小袖に引戻され、かつぱと轉べば絹川が、立寄い

て、又も鏡にさし向ふ、魂魄を、此世に返す名香の、夫かあらぬかあだし世の、思ひ思はれ添ふ中を、其絹川の柵に、せきとめられし其上を、刄にかけし仇波の、泡と消たる傾城の、高雄か姿あり〳〵と、うつりうつろふ鏡の面、はつと累が胸騷ぎ、見やる小袖に俤の、妹々ヱヽそなたは恨めしい、戀しと思ふ殿樣に、添さぬ恨は山々の、谷藏と女夫にして、添す事はならぬわいのう、ヱヽ姉樣、夫はお前胴慾で御座んすぞへ、お前アノ絹川樣に恨があるは尤なれども、思ひ思ふた絹川樣、兄樣さへ了簡して、女夫にして下さんすに、お前もどうぞ堪忍し恨をはらし私をば、女夫にして下さんせ、コレ拜みますわいなア〳〵、コレ賴みますわいなあ〳〵、いや〳〵〳〵、思ふ中をばせき留て、刄にかけし絹川に、何とそなたを添されう、サア妹思ひ切りや、イヱ〳〵〳〵、何ぼどう云しやんしても、思ひ切事わたしはいやで御座んするモウ云出しても下さんすな〳〵、ヱヽ聞分ないぞや妹、是程云ふに聞分ず、いよ〳〵思ひ切れずば、そなたの皮肉へ分入て、絹川に愛相をつかさせ、そなたの身にあやまらさせるが、夫でもそなたは夫婦になるか、ヱヽ姉樣そりやあんまりで御座んせう、そういはしやんすりやわしも意地づく、アイ大事ごんせぬ〳〵、命にかけて添とげまする、イヤ添さぬと爭ひも、此世を去し亡魂に、引戾さるゝ黑髮の、風に亂るゝ紅葉ばの縫の小袖のひら〳〵〳〵、娑婆と冥途の兄弟の、いどみつかれて妹の累、うんとばかりに倒れ伏、音に驚き駈出しが、えならぬ薫に氣

刻前より神前に、白朮を焚、其火を火繩にうつし、京中のものども家々に持歸る、又往來の群集通りながら、惡口雜言いひちらし、云負る者は必其年惡さといふ、サ是則おけらの神事、隨分狼籍なき樣にと、聞て尤道理之助、ハア、夫で因緣謂れがさらりつと知れました、おけらと云は何の事じやと思ふたれば、びやくじゆつとやらいふ藥のことで御座りますか、身共がいつぞや痳病でこまつてをりました時、仲間どもが是を呑といふてくれたのは丁度、きり〴〵すの膝のないやうな虫。呑と其儘つひ直つた、後で聞ばおけらとやら、ヱヽ思ひ出してもどうやら咽がむずつくと、云ば志妻が苦笑ひ、ヤコリヤ何を云めさる、今宵は節分のまなびをなし、豆を打てついなを壽、サア其豆をまくは伯父御樣にはきつい禁物、ソリヤ又何故に、ハテ鬼行じやないかいのう。イヤモどういへばかう云と早く社へ參詣あれ、ヲヽ參ります〳〵、若樣御息才諸事は我に、任ておけらの祠でせいと、踊る拍子に鳥居へぴつしやり、アイタヽヽ併頭を打は福は內、鬼はそとにと伯父御樣、後程お目にと走行く、後に三人邊を見廻し、茂左八は聲をひそめ、鬼行公には兼々思召の通り、賴兼公を押込、兼若の世となれば、是からはお心次第、去ながら、任せぬは仁木が娘河內、今に色よき返事なきよし、此義は如何と問へば鬼行、サレバ〳〵、仁木さへ得心なさば、無理に我方へ婚禮させん、折を以て汝取持、ハア仰までも候はず、某宜敷御取持仕らんが、兼若へ家督相續なし、此上の御思案はと、伺ふ內より板切志妻、

たはるうしろより、捕たとかゝる以前の忍び、得たりと披間大袈裟に、切ても切れぬ執着の、小袖に三ふが目を付て、ぐつと疊へ突立ながら、隨分達者で二人とも、三ふ殿さらば、兄様おまめでおさらばと、いへど心は引さるゝ、忽ち片足わし引の、山鳥ならぬ妹背鳥、行衛遥の旅の空、付まとはるゝ執着の、慕ひ行くこそ

第六

八雲立、出雲八重垣妻こめに、其素盞嗚の神徳を、爰にうつして祇園の社、今日は白朮の神事とて、老若男女わかちなく、貴賤郡集をなしにける、室町殿の若君、御家督の御祈とて、一家中は元より、諸士の面々御代參、則御馳走の役人はやつこ茂左八、晝より爰に入相のかねて工の人心、正直の頭にやどる神ならで、邪見に見ゆる有髪の顏色、當家の伯父大江の圖幸鬼行、胸に一物我慢心、角をかくして出來る、後に引添板切志妻、慾と色との二本棒、長は夏の日あし迚、尤道理之助打連て、鳥居間近く歩みくる、茂三八は出迎ひ、コレハ〳〵早い御入、先達て仁木彈正殿にも參詣、拙者めも早朝より相詰罷在、今日は五月晦日、兼若君御家督の御祝儀とて、當社に於て大晦日、白朮の神事を取越、又六日朔日には、元日の壽をなし、則春を祝ふ其用意申付候と、高慢らしく相述れば、鬼行は物知顏、誠に今日おけらの神事といふは、亥

とは來たがそしてマア、爰に居れば彼お方に逢れるかや、わしやどうやら恥しいと、袖打おはふ有樣は、まだ咲兼る冬の梅、ほに顯るゝ風情なり、ヲゝこなお子わいの、色事遊ばす樣にもない、餘りなおぼこさ、お前もちつと嗜なされ、ホンニ戀には身をやつせと、大ていや大方の辛抱で、よいめに逢れるものかいな、今日此お社へ御代參にお出遊ばす井筒樣、何かなしに抱付て、日頃の思ひをお晴し遊ばせ、ソレ〳〵向に見ゆるのが慥にさうじや、大小さいてきつとして、又優形なあのお姿、紛もない井筒樣、わたしが居てはけつく邪魔、思ひのたけをマゝおつしやれと、鳥居の方へはづし行く、斯とは知らず女之助、當世樣の華車姿、一際目立男ぶり、戀しき人のありぞとも、知らず來かゝり見合す顏、ヤアコレハ〳〵河内殿、くれに及んで只一人、爰に何して御座るぞ、ムゝ聞えた、外に增花さかすお心か、ヲゝ嘸面白うござりましよなア、と云ひつゝ行くを引とゞめ、エゝ女之助樣聞えませぬ、何して居るとは餘所〳〵しい、お前に逢たいばつかりに、今宵の神事をかこ付て、此お社へ參りしも、過し逢瀨のお詞に、緣と月日を待てとある、其一言がしみ〴〵と、身一つにふる涙の雨、ぬれてかはらぬ袖袂、思ひ餘りて今日爰へ、お出の樣子聞し故、お父樣へおかくしまをし、來た甲斐もなう胴慾な、むごいつれないお心と、膝に寄添ふ限泣、袴のひだの涙川、戀路の花やながすらん、ヲゝ今の樣にいふたのは、わしが誤り堪へて下され、左程切なる志、エゝ忘れは置ぬ、コレからとじつとし

夫は拙者仁木と牒し合、兼若呪咀の儀は、彼修驗者貴藏院に賴置、今日是へ參る筈、アレ〳〵そこへと、いふ間もなく出來る貴藏院、さも恐しきいが栗天窓、ゑみ出る眼に邊を睨、危き箱を携へて、しづ〳〵と歩來る、志妻聲かけ、早かりし貴藏殿、貴僧にかね〴〵御賴の一大事、夫に付鬼行公にもお待兼、サア〳〵是へと招かれて、貴藏院は件の箱、目通りに据置て、何れも是を御覽あれ、鬼行公より御賴の通り、我法力にて呪咀なすは、サコレ此箱の內へ、藁人形を仕立、四十四本の釘を打、願主仁木彈正敎將と書付しは、彈正殿の心あつての事、則御寢所より、東の角に當る人家、雨落なき處へいけ置ば、七日の內には命をたつ我密法、必氣遣したまふなと、語るを聞て三人は、したり〳〵、何角の樣子は社守の方、貴僧は是より其箱を、コリヤかう〳〵と耳に口、合點〳〵、我は是より法力を以て忍び入、わはよくば兼若を、只一思ひに捻殺さん、ヲヽ氣味よし〳〵心地よし、偏に賴と三人は、別れて社へ貴藏院、元來し道へ立歸る、神垣に、殘る夕日も影薄く、黃昏近き鳥居先、人を待身か待るゝか、姿なまめく取なりは、仁木彈正が娘河內、目にも入たきかぞいろの、育てし花の振袖も、歩路をひらふ神詣、供には一人如才なき、腰女さつきといふ女、コレまをしお姬樣、今來た道で見た男、色白で鼻筋通り、髮は本田の當世風、丁度勘三の門之助見るやうな男、女之助樣かと思ふたと打笑へば、河內はいとゞおもはゆく、そなたの詞に隨ふて女の身の大膽な、外の者へは沙汰なしに、來て

とては氣の短い、イヤハヤ氣の短い、言分ありとまをすにこそ、只今の樣にまをしたは、拙者が誤り〳〵、イヤもう暮れ六ッ過、神事にもはや間はあるまい、コリヤ志妻茂左八を介抱して、後より來れと言捨て、見返りもせず立歸る、彈正後を打詠め、家來參れと呼出し、其方どもは娘を同道いたし、一刻も早く屋敷へ歸れ、ナニ女之助は神主方に神事の用意、我も後より立歸らんが、早く〳〵と、いふに侍腰元さつき、サア〳〵御立とすゝむれども、とかういらへも夏の夜の、まだよい事か惡やら、女之助も立しほの、渚に殘るうたかたの、かいなく〳〵も兩方へ、引別れゆくあじきなさ、見送る彈正茂左八は、むつくと起て邊を見廻し、ナントうまう參つたではござらぬか、兼々心憎き井筒外記左衛門、悴女之助と貴殿の娘、緣組すれば姻同士、心合せてはからはゞ、大望成就去ながら、コノ緣組の仕樣はいかゞなさるゝぞ、ホヽ夫こそは外記左衛門に、のつ引させぬ我工と、聞て志妻がしたり顏、兼若を調伏のことは貴藏院に賴み置、最前あれにてお話の、手短き工夫ありとはな、ヲヽ夫こそは大毒藥の秘書、某が手に入れば是を以て事を計らん、夫に何ぞや法力なぞとは、イヤハヤハヽヽヽまだるい〳〵、成就する上は、鬼行如きか下には付ぬ、我家國を納んに、何の手間隙入るべきぞ、兩人共悦べと、勢ひ込でぞ語るにぞ、ムヽスリヤ其毒をもつて、シイ聲が高い、寶壽院にて何かは話さん、兩人參れと先に立、打連てこそ入にけり、賑敷、闇もあかるき提燈の、井筒にうつす月岡は、今日若

むれば嬉しさの袖から、袖へ手を入て、どこが戀やら情やら、餘所の見る目も可愛らし、いつの間にか鬼行が、者共參れと呼はれば、やつさ茂左八、志妻も供に立出れば、ハツト驚く兩人は、今更何いふ事も、さしうつむいたるばかりなり、鬼行はむくりをにやし、ヤア神前をも憚らず不義放埒、外記左衛門が云付か、何にもせよ不屆奴、夫引括れといふ聲に、畏まつたと茂左八が、立寄後に仁木彈正、腕首摑んで突退れば、是はとかゝるをしんの當、うんとのつける反返る、ヤヽ何やつと鬼行がふり返つて、ヤハコリヤ彈正、茂左八には何科あつて此手ごめ、又女之助と河内が不義、見付た故繩打處何故に妨る、ムヽ聞えた、兩執權の子供故、親々の我儘かと、塗桶天窓を振廻し、眞黑になつて腹立顔、イヤおせきなされな、あなた樣には關東生れ、夫ゆゑ譯は御存ない筈、此兩人の者共は、末振分髪の頃よりも、互に親共、言號最早近々吉日をえらみ、祝言させんと存る所、サ此程の御取込、主人の御身持を諫まをす所へ榮耀らしい、イヤ悴が婚禮などと、外記左衛門も申上がたく、夫ゆゑ言上も仕らぬ、若君御家督ある上は、早速に御願まをし、近々婚姻の取結ぶ契約が、又たとへ不義があるにもせよ、當時御家の兩執權、餘人の手はかりまをさぬ、此方にて取計ひまをす、夫に何ぞや今の手ごめ、理不盡なる有樣、夫故に斯の仕合、また不義とおつしやる方々を、詮議致さばそてどから、罪に大江の鬼行樣、何と仰はござりますがやと、きめ付られて鬼行が、コレサ／＼氣の短い、さり

すつくと折助が、衿髪攫んで引くり返せば、はう〳〵に起上り、コリヤ儕歩仲間の分際で、慮外やつすつこんでおれと、いふに折助打笑ひ、ハヽヽヽ主人を捕へて理不盡の有樣を、見てゐる奴が廣世界にござりませうか、といふも久しいせりふ、モシわしとても木竹ではなし、ちつとはきんも承知で居ります、何も角もお任せあらば、お取持致しませう、アヽコレ折助殿、めつたなことをいふまいぞ、ハテ此奴が承知の筋、お氣遣なされますなと、いふに志妻はふはと乘、コレナニ此戀貴公がお取持下されうとや、承知之助殿、見らるゝ通り我ら生付は、餘り惡男にあらず、又能男といふでもなし、凡中位な男なれども、氣取は隨分面白い、何と君のお心のわかる樣に、其元の取持偏に賴存ずる、サ其首尾も追付夜神樂、おけらの參りも大勢見ゆる、四ッ時分には皆々お歸り其節、彼くら闇を幸ひ私が能時分は、相圖に咳をする程に、其時は御合點か、おつとよし〳〵有難い〳〵、諸事は公にお任せまをす、隨分合點で御座ります、去ながら、最前の慮外は御免下さりませ、御叮嚀なる御挨拶、大通の身分にも、投らるゝはまゝあること、諸事は後程〳〵と、うぬ惚だみそ鼻の先、智惠をふるつて折助も、月間作ひ別れ行く、早神前に燈火の、おけら下向の一群か、火繩打振り行當り、互に顔も知らぬどし、スリヤ阿呆よ目があぶないわい、いかひたわけといひ懸るも、おけらの神事と知られたり、イヤさういふ儕が阿呆じや、儕が留守の內にはな、嚊が間夫して居くさる、ナンノ夫より儕マア、今

君の御武運を、祈る歩の道筋も、供の奴の折助が、コレまをし月岡様、私は新參者、旦那様のお氣に入有難い仕合、今日はおけらの神事とやら、見物せうと存まして、お願まをしてお前のお供、女之助様もまだお歸りあるまい、偖々結搆な社でござります、サイノウ今日は若君様御家督あるに付、めでたい御神事自も忍の參詣、ちよつと寶壽院は御取込か、そなた見て來てたもいのと、いふに奴がナイ〳〵、そんならちよつと參りましよと、返事も足もかる〳〵と、鳥居の内へ走入る、月岡はとやかくと、只若君の御事を、願ふも神のみづ垣を、伏拜む折からに、よいふしを、爰にも松の板切志妻、見るよりはうと抱付、飛退て、誰じや、あだ不作法なと咎られ、コレ〳〵さのみつれなくの給ひぞ、またうすぐらき此中でも、見違ふ物かいな、深山がらすも古ければ、月と見た目に違はない、彼唐土の七賢人が歌に、月々に月見る月は多けれど、秋の月より眞丸な、角のとれたる粹な君、くどけど〳〵かまはぬは、揚句は知れた長芋の、奴の情はない物かと、下から志妻が上手には、いかぬわしでも帯解て、逢ねばならぬ付合をあのゝものゝとちよ〳〵らにて、合ずにすますおいらんの、帯紐とかぬはア、〳〵胴慾じや、コリヤ美婦人イヤ美しいのめ、イヤモウトント、モウどこもかしこもとげ〳〵と、わつちやいつそ消たいわいな〳〵、イヤモウトントモウ、とやかう云内寸善尺魔、どこぞ能所が、アゝモウトント、モウおう夫々爰が則結ぶの神垣、天井を見る氣遣ない、サアマアこゝでと引立る、後へ

るせうがには、かんせうがにひねせうか、たとへ向ふが鬼神にもしろ紙にもしろ、サそんな事で動くのじやアねヱ、うごかねヱといつちやア、石臼のほぞの拔たのか、氣轉のきかねヱ居候か、雪降に百で乘た駕籠か、またも動かねヱものは灸ばかりの痛なしも聞て呆れるヱおきアがれ、話の樣なと出放題、イヤこいつやく拂ひの云樣なことぬかす、儕が樣なことといふと、何じやか知らぬがとんとむちやじやわや／＼、そんな事いはずと早ういんで、そこらのねきで轉んで鼻でも打、ナント此猿松め鼻の穴へ指を突込んで、しやつ頬の皮をひんめくるぞ、コノ嶋の夷め、何じやい／＼おれが島の夷ならわりや、わりやあづまの夷じやはやい、福の神めと、何をいふやら疊みかけ、惡口雜言嘲立られ、コリヤ／＼我其詞ヨヽ覺てゐよ、今度逢た時には、天窓てん／＼してこますと、詞戰ひ闇の夜に、紛れてこそは立歸る、後に折助大聲に、コレヤイまちやアがれ猿やア、べらぼう鼻垂しめ、相手にならぬか、ハヽヽヽいかいたわけ、コリヤ咽が喝いて來た、ドリヤ往て一ぱい呑できよう、ホンニ板切志妻がこと、其主に今社務所方で三人の話した密事、何か彈正が兩人の中へ手渡しするとは、コリヤ何でも能手掛、志妻をだまして懷中を詮議、夫と伺ふ身繕、神樂紛れて入にけり、きねが鼓の拍子よく、取持顏で板切志妻、そろ／＼とさぐり足、折助や、折ばうや、折ばうはまだ來ぬか、折助殿はなぜ遲い、草鞋か出來ぬか門とめか、イヤまだ四ツには少し間もあらう、アヽ儘ならぬ浮世とは、その通人の

日は下帯がない故に、かりてうせたでないかいやいと、めつたにいふも悔りと、邊り詠て口どまくれ、返答なければ大勢が、どりやこそ負たと手を打て、どつと笑ふて行過る、向に來かゝる參詣に、又惡たいの買懸り、此晦日に今しまふたか、テモ僭は貧乏らしい顏付と、云へばこちらもへらず口、ヲゝ僭が樣に盗人をせねば、夫故遲い夜盗の提燈とぼしめと、いひさま是も鳥居の內、又も來かゝる參詣を、コリヤ待やあがれと呼とむれば、せいがないはと急ぎ行く、折助は最前より、群集の中に居たりしが、向ふ鉢卷太平樂、强込聲も高々と、どきやがれ〳〵、何のこつた、つがもないこつたが、又どいつでも相手になつて見やアがれと、いふ聲聞て悔りし、コリヤこいつきさやうと酒に醉たのか、但し氣違があたぜんくさい奴めじやと、適都のやさ惡たひ、コレヱ〳〵誰だと思やアがる、江戸の折助だは折だぞ〳〵、折樣だぞ、とんだことじやがぎやつと云と、引窓から富士を拜んで、鶴龜の日傘乳母太神樂で育てられ、虎屋のあんころ四方が味噌玉川の上水を、大船で汲んで呑んだ男だぞ、うぬらが相手にや有難と思やアがれ、灰吹から龍燈、やはぐろ壺から猩々小僧が出た樣なもんだ、たわ言をつかずともだまつてけつがれ、何のこつたアつがもねヱ、テモゑらひだんじやな、けたいが惡ひぞよ、わりやどこのはりつけめじや、すさまじいことぬかす、相手なら橋詰まで出て貰ふわい、イヤ途方もない奴じやアねヱか、何だはりつけた、野郎のこしはりじやあんまいし、コレヱ〳〵相手にな

ら君の口へ、どりや口うつしと立かゝれば、南無三寶と道理之助、逃んとするを投助が、直に其儘抱付吸付口うつし、いやがる拍子に舌の先、一寸ばかり喰切れ、あつとばかりに板切志妻、うめき苦しむ眞の闇、道理之助はとつかはと、逃て行衛も折助が、さぐりて志妻が懷を、さがせど何もあら金の、土にのた打其風情、フンこいつが持ねば茂左八めと、いふに月岡コレ／＼折助、早う此場を先お出と、聲をしるべに取付志妻、エヽ面倒なと折助が、腰骨ぽん／＼踏付／＼、サア／＼此間に月岡樣、そなたも早うと兩人は、館をさして立歸る、後にむざんや板切志妻、追駈んにも腰立ず、舌は痛て血は流れ、涙流るゝ二筋の、かはり果たる有樣に、立上りては、ヘヽヽ月岡殿アイタヽヽヽ、打倒れてはヘヽヽ折助やい、アイタヽヽヽ、いかなる運に月岡と、こがれ慕ふぞぶさまなり、折から來かゝる廻の奴、提燈さげて大勢連、志妻見るよりコレ／＼奴共と、呼ば恟り立留り、マテ／＼ヤア何やら恐しい聲がすると、こはたゝ立寄提燈上て、ヤアコリヤ志妻樣、口から血出してうなり聲は、偖は常々大酒呑、それが當つてそてつとやらかと、いふに一人がコリヤ馬鹿いへ、そてつといふはお庭にある、是は吐血といふ物だ、ホンニとてつもない事じや、どうしたことじやと立よれば、志妻は苦しき聲音にて、某最前月岡と、折助めに出合、某が舌を月岡めが喰切て、斯の仕合といへば皆々笑ひ出し、何をいふことやら唐人の寢言、コリヤそうも知ぬ／＼、ハテ偖、夫は汝等が惡い聞やう、

いひ置しぞ、アヽモウ來さうな物じやがと、欠伸交りの鼻歌は、一切遊びの四ッ前から、明を待か如く、鳥居のかげより折助は、道理之助に無理無體、月岡が上着を打着、云合ねてもいやがるを、漸連て月岡も、倶に隱るゝくらり闇を、指足拔足折助は、相圖のしはぶき咳ばらひ、待に待たる板切志妻、コレハ／＼折助丈、諸事はいかい御世話、かたじけない祝着滿足過分有難し、イヤモウトントモウ、胸には一ぱい滿くれど、云とうてもどうも出ぬ、彼戀人は何所にじやど、云ば折助コレ月岡樣、恥しいこはと御座らぬ、ちよつとお物をおつしやりませ、ソレ彼と袖引は、わしやどうも恥しいと、後で合す付聲も、志妻が耳に嬉しさは、百千万の詞より身にしみて、そんならもはや君にはお出か、ヱヽ有難いと道之理助が、着たる上着を引ばれば、迷惑さうに振もぎる、ソレ夫は胴慾思はせぶりと、とんとおいどを叩かれて、悔りわつといふ口を、折助押へていはせねば、只ムヽムウといふばかり、志妻は何の氣も付ず、ムヽとうなり給ふは癪ばしおこり給ふかと、問へば折助そりやお返事と、又月岡が袖引にぞ、アイわたしやどうも癪がさしこんで痛、今宵のごげんは赦してと、氣をもたされてアヽコレ／＼、夫は近頃つがもない、此樣なよい首尾がある物か、ヱヽナンゾ虫藥を、イヤモウトントモウ、ふさがせることばかり、幸ひ爰に弘慶子、癪や痞に奇妙じやは、馬鹿／＼しくも紙入から、さぐり取出し嚙ぐだき、ヱヽ折も折とて邊に白湯も水もなし、折助殿いやみは少し御免あれ、我等が口か

はんと、いふに大勢聲揃へ、舌切志妻お宿はどこだ、チヨツ〳〵チヨ、舌切志妻お宿はどこだ、チヨツ〳〵チヨ、舌切志妻お宿はどこだ、チヨツ〳〵チヨ、ちよつといてこと大勢が、聲を揃て隠里、打連てこそ立歸る

第七

智者は惑はず勇者は恐れず、荒獅子男之助直勝は、心も猛き直宿守、趙雲、姜維が大膽にも、勝りはするとも劣らじと、悠然として座したるは、實頼もしく見えにけり、アヽラ怪しや、今東雲にも及ばんとする折柄、たけ抜群の鼠の形、異國本朝例を知らず、我聞、唐土宋の高宗の時、嶺南列夏秋の間雨降らず、淸遠翁源眞陽の三色、鼠の害を苦しむ事甚し、魚鳥蛇の類、皆化して鼠となる、眞陽の人一ッの鼠を獲たり、胸に蛇の鱗あり、漁父或夜網打ば魚數百を得て、見れば悉く鼠となりし例は、夷堅志の書中に見えたり、形は常に變らねども、さも凄まじき大鼠、ハテ、怪しき物を見ることじやよなアと、刀携へ頰杖突、まだゝきもせず詠めゐる、時に不思議や件の鼠、勢ひ込で若君の、御寢間近くも飛行を、スハ曲者よと男之助、邊に有合鐵骨の、扇追取り發矢と打、わつと一聲うめくと見えしが、一ッの煙立のぼれば、不思議や修驗の貴藏院、忽然と顯れ出で、ヤ荒獅子男之助、我仁木彈正が賴によつて、若君の御寢所守護

月岡が舌を喰切た、ムヽ月岡が舌を喰切たとは何のことと、大勢わからぬ言舌に、志妻はじれて詮方も、なく／＼指先で、書ども無事の奴共、イヤモウおいらは生付て祐筆ゆゑ一ッもよめぬ、ヲヽ夫々此様にまた祐筆が揃ふ物かいの、アヽ是を知つたら向ふの無筆を頼んで來れはよかつたと、何れも分らぬ顔付の、中に福助つぶて文字、ぞれ／＼おれがと立寄て、提灯指寄せ、ムヽ是はまてよ／＼。下は讀ねど上は正月の月の字、アヽ常から扶持も切米もみんな、酒やの通に入上、ろくに飯も食はぬ故、くはづ／＼するといふことか、アイヤさうでも是ははんじ物、何にもしろ此有様くはつはつらひといふ地口のてにはの悪口合も血が流れば大事じや、銘々旦那の迎に來れども、御家中なれば捨はて置れぬ、御中屋敷へ二三町、送つて來ても手間はいらぬ、お頭衆へ申上、あの衆の吟味で事が濟、おいらが爰で論ずるより、雀の千聲鶴の一聲、マア／＼お宿へ送つてこう、ソリヤ尤と銘々が、左右の手を取り腰を抱き、引立られてふな／＼と、糸目の切し奴凧、釣合悪く見えにける、福助は立上り、コリヤ／＼汝等さのみ驚くべからず、我朝にても例あり、語つてきかせんよつく聞、昔々其昔、祖父と祖母があつたとさ、祖父は山へ草刈に、祖母は川へ濯洗に、其主留の間に摺置し、糊を雀がなめしとて、ばゝあばくやの剪刀にて、舌をちよつきり切たること、コレ赤本にれい／＼たり、イヤアヨイイヤアホウ／＼、夫を學びて是よりも、志妻の宿所へ此人數、送り届ける道すがら、行列の口拍子、イテはから

君様、あの志妻めが、アコレ〱、滅多にひよかすかいはぬ物、ホヲヽ、尤〻道理之助、イヤ又あの伯父御様の、顔付のにく〱しさ、鬼行とは能付たぞ、思へば尤も道理之助、男にしては美しい、器量を名付て女之助、是も尤道理之助、道理のないはわし獨り、かあいといふて暮の鐘、イヤモ〱〱、舊冬はせがまれたぞ〱、アニ分ほしいと眞面目顔、月岡はおかしさ隠し、ヲヽいつでも機嫌のよい顔付、もはや若君様にも御參内の時刻、御裝束遊ばす間、上段の御居間も片付、御膳の用意も申付、其元様も早う御支度、コレ〱、又一人で遊んでゐないぞやと、いはれて尤道理之助、アヽドリヤ〱〱早う、いて來うぞ、が又男之助がおれを見たら、鼻の下が京間だと、目をむき出して呵おろ、本に夫よ、彼正月の學じやげな、晩にはたんと福引ひかうわいの、コレ又そんなことばかり、サア〱、早う行かしやんせ〱、アヽ行きます〱、お前までが其様に、こはい顔すりや正月と思ふてか、正月は穴一福引、かた足上てゐんが〱、刎廻るやら踊るやら、疊の上もいたづらの、上段の間へ走り行く、後打詠め月岡は、しとやかに手をつかへ、父井筒外記左衞門、常々の教には、君子は沽酒市脯不喰とをせば、假初の御膳迄、心を付て上ませいと、申付まして御座りまする、何やら油斷ならざるお舘の有様、夫故に此月岡、何かと心はゆるしませねど、諸士は大勢お傍には男之助と、弟女之助ばかり、本に私は夜の目もろくに臥りませぬ、何によらず御心をお付遊ばされませと、

の爲、我法力の仕はしめ、なぜ鐵骨の扇を持てヤ打しぞと、いへば重勝カラ〳〵ハヽヽヽと打笑ひ、ヤア若君の守護とは、エつがもない、大黑殿の仕はじめには、大き過たるぞぶ鼠、化の皮を顯したら、うぬらも仲間のよい見世物、家に鼠國に盜人、其盜賊の大將を、サア眞直にぬかしおがれ、さないと忽はり殺ぞと、勢込だる其有樣、ヤア愚々、汝勇力ありとても、我法力のげばくにかけ、立所に憂目を見せん、ヤ賣僧如きが鳩のかいててつぽうを云散し、法力とはことおかしやと、立かゝれば貴藏院、いら高珠數を押もんで、抑我法行ふといつぱ、邪に組する外道の密法、立處に奇瑞見せんといら高の、珠數の響も館の震動、シャ物々しと重勝が、刀引拔き切かくれど、五體すくんでたぢ〳〵〳〵、へゝ殘念やと切付れば、形は消て雲霧か、夫かあらぬか庭の面、切込む飛石電光石火、いづこまでもと追て行く、斯とは知らぬ月岡は、道理之助諸共に、若君をかしづき奉り、しづ〳〵と立出、今日は御祝儀に就、早々お目覺遊はされ、殊に御機嫌よく、昨日は祇園に於て、おけらの御神事とやらも相濟、假にけふしは春を學びの御壽、モ個程お目出度儀はござりませぬと、申上れば若君は、皆の者此程の心遣、過分過分との給へば、道理之助は目をこすり、テモサテモ〳〵今日は大きにねむたい、また夕べのけづりかけとやら、おけらとやら、モ色々なやつごうせ、其上かつばめが出たさうで、高野六十那智八十と、おれをとらへてへゝゝ無理無體、モやう〳〵のことで逃て戻つた、ヤまをし若

露も一つに打かくれば、怪しや青き其色の、枯葉の如くなりにけり、偖こそ〳〵、青桐の葉は毒を知と聞し故、御膳のつゆをおきせへ集め、此葉へかくればヲヽアレ〳〵、色を變せし桐の葉の不思議、偖は兼若君へ鴆毒を以て、弑し奉らんとの工であつたか、ヲヽ夫を知らいで〳〵、上ましてよい物か、アヽ御運目出度御命、佛神の加護ありがたしと、悦び勇む其處へ、斯とは知らず茂左八が、しすまし顔で次の間より、樣子伺ふ出合頭、月岡見るより、コレ〳〵茂左八殿、用事あるサ御前へと、云れていやとも板椽に、遙さがつて畏る、別の儀では御座りませぬ、今朝の御膳はどうやら何か怪しき色、御役儀を此方で、吟味致す樣なれど、今一度お毒見あれど、いふに茂左八胸に釘、三寸俎板見拔れしと、思へど何とも思はぬ顔色、イヤコレ月岡殿、拙者事は御膳番、お毒見致し來れど、終に二度の御吟味を、仰られたる覺は御座らぬ、サアノ覺えなくとも此方にも、怪しきことは幾重にも、吟味いたすがお守の役、といへば茂左八そら笑ひ、アいかさま井筒外記左衛門殿は、彼下世話にいふ通り、よその德利より内のきつくりとやら、女之助月岡ともに、若君のお側に附置、手前勝手の執權顔、人を疑ふ野狐同然の根性、夫に又男之助の我儘、ヤ此方も仁木彈正殿の組下、其元のお指圖は受けさせぬ、怪しくば其御膳、そもじ試み致されよと、横に車の一寸のかれ、始終の樣子男之助、次の間より立出て、イヤコレ茂左八殿、只今あれにて承はれば、役儀〳〵とおいやるが、貴殿が役儀は相濟

申上れば、兼若君、ヲヽそち達が心遣、嬉しい／＼去ながら、道理之助が話には、父上は傾城とやらいふ物をお買遊ばしたとのこと、坊も持遊びに、求て來てたもいの、ヱヽマア／＼あの阿呆が、いろ／＼のこと申上る程にの、イヤまをし若君様、父上様には、其傾城をお買遊ばしたが誤りとなり、ヱ情なや、御身は等持院へ御閑居、サア其今いやつた所に、父上のお出遊ばすと聞た故、面白い所であらうと思ふて、道理之助に聞たれば、朝夕とも只お獨、侍ともたつた二人、お傍に居るとの事、嘸お淋しからうと思へば、おなつかしい、ぼんも行う程に、月岡も供しやと、譯も頑是もなまなかに、何と返答月岡が、イヱ／＼、夫は道理之助が大きな僞り、モソレ／＼大體面白いで御座ります、モハヤ父上様には御隱居、スリヤ若君様には今までとは違ひ、お家の御政道がお大事でござりますれば、輕々しうお出はなりませぬぞへ、是に付ても御部屋様が御存生で御座るならば嘸お悦、ア又思へば結句お歎でもあらうと、ほろりとこぼす朝露の、草にも心奥の間より、腰元女中がてん／＼に、御膳の調度取揃へ、月岡が前に差置ば、ヲヽいづれも太儀／＼、用事あれば呼ぶ程に、暫く休息しや、あいと返事も長局、皆々かしこへ入にけり、御膳取上月岡は、既に据んとしたりしが、又下に置き親椀の、忠と智惠との中かさの、蓋を取ばてはいかに、椀中變せし其色を、例すしやうもしげりたる、桐の青葉も手は屆かず、かんざし拔て氣轉の手裏劔、はつしと落る桐の一葉、天下の秋をしる椀の、

の入平、ホヲ庭の掃除は福助か、花壇には藍一本もなし、太儀〳〵、それ部屋へ行て酒でも呑で、休息せろと、いふに悔り何だこやつ、いつの間にやらそこへのし上つて、鬼一もどきをやりをるは、こりやいおらにばかり骨折して、わりや此頃は色事をかせぐげな、イヤサおらが色事よりこちの若旦那女之助樣、昨日祇園で仁木の娘御と、でつかちない色事をとつ初なされて、夫が彼意地惡の鬼行樣の目にかゝつて、いかう八釜しかつたげな、ヲゝサ〳〵さういふ噂、イヤ又あの若旦那の器量では、惚ぬ女子はわつちの麁相だ、ヱゝおらも女と酒とばくちとは大好だが、長半組にも錢はなし、酒を呑にや酒屋は貸さず、色事せうにも相手はなし、つまる所が町の厄介、ドレ是から部屋へ行て、又五人組でも頼むべいと、仇口々に打連て、奴部屋へと入にけり、女之助は彈正が情に、科はのがれても世の口の端と、物堅き親の心をはかりかね、案じ煩ひ一間より、しほ〳〵出る物思ひ、樣子は何か白玉が、障子開いて我子の傍、心ならねばにおり寄、コレ女之助、我身はマアいかう顏持か惡が、マ何ぞ苦になる種でも拵へやつたかや、此母に遠慮はない、有樣に話やいのう、アレあの庭の花あやめ、人も花も一盛、色に迷ふはあるならひ、さしも名高き賴政も、あやめの前の見ぬ戀に、あこかれしも情を知る武者の弓矢の德にむかへし妻、ハテ思ひ合ふた花あやめ、似合ふた緣があるならば、父樣へ願ふて表向、嫁に迎へて添してやる、ヤコレ必氣遣しやんな、モ力になるはそなた一人、ひよんなことを

うが、若此御膳にあやまちあれば、此方の役儀が立ぬ、是非いやとおいやれば、此重勝が目の前で、口を割てもヤ毒見させうぞ、ヤア舌長なり男之助、若又あやまちなき時は、ハテ知れたこと、男之助が此首進上まをす、ヤてりや面白いわい、毒見もせうが此御膳、わぬしは君臣の禮を知つておゐやるか、主人の膳を家來の身で、直に食すれば不禮の至り、次へ立て盛かへんと、何かな此場を逃口上、ヤアとても首懸したる男之助、不禮もへちまも構はせぬ、一寸も動すこと罷ならぬ、サ爰で喰へ、異議に及ぶと手は見せぬと、反打てつめかくれば、今はぐんにやり左茂八が、うぬが手盛の毒藥を、喰ふて見るとは直のなつた、命の相場心の内、是を知たら茄子漬、古をどうぞ食たいと、ふぐにはあらぬ身の毒の、丁度死との約束かと、涙と汗は一時に、おはちの露や増ぬらん、サア／＼毒見と月岡が、さし出膳を是非なくも、こは／＼食ふ毒の試、コレ／＼男之助、毒味致した何ともないわい、サ首を渡せといふ内も、次第に毒氣めぐると見えしが、七顛八倒忽ちに、のつけにそつて死でけり、男之助は聲高く、ヤア／＼人々今日の朝御膳に、怪しきことの候ぞ、出合給へと呼はれば、仕候の面々腰元ども、道理之助も走り出で、兩官領執權職へ注進と、上を下へと三重立騷ぐ、定なき世に、猶武士の身の上は、敢果なき譬咲花の夕邊にひらきあしたには、散る花盛り、夏草も、老を樂しむ物好は、非倚外記左衞門が一構、主人の留守と目をぬく奴、砂にのらかく竹箒、椽側に大胡座、髭もみ上て奴

く、早次の間へさと薫る、花橘の振袖に、床しさかくす丸綿も、押て嫁入を連てくる、夫の心裏靜か、何角白木の刀箱、目八分に携て、しとやかに座に直り、私事は仁木彈正左衞門が妻、これなるは娘河内、夫彈正申越まするは、昨日祇園の社に於て、御子息女之助樣と、此方の娘河内と、何とやら譯わる事ども、大江の圖幸鬼行樣に見付られ、不義はお家の御法度と、お咎に逢し臨へ、夫彈正左衞門、折よくも參り合せ、娘河内は女之助と稚き時分より、親々約束にて、言號せし上は、お咎に逢ふいはれなしと、さつぱりと言譯立、事納りしは双方の家の無事、月日を過さばいかゞとそんじ、早々今日押付嫁入、則此一品は、引出物やら寸志やら、御披見わつて祝言の、御用意なされて下さりませ、コレ娘見御樣へ御挨拶もしやいのと、云へど娘はいらへさへ、こわさ恥し取変て、さしうつむいて居たりける、外記左衞門はつく〴〵と、巧わる仁木が娘、押て我家へ嫁入は、仔細わらんと件の箱、蓋押開てよく見れば、刀一腰添たる短冊、くらべこし振分髮も肩過ぬ、君ならずして誰か上べき、ムヽ此古歌は伊勢物語、ハテどうかなと思案の内、屹度目の付刀の拵、目貫も椽も一樣に、山鳥につゝじの彫物、我手に入たる小柄の摸樣、偖はと思ひ合する夫、妻は樣子を露程も、知らず親子に打向、コレハ〳〵裏靜樣、互に似合ふた緣といひ、思ひ合ふたことならば、願ふてもないもつけの幸ひ、彈正樣の其お心、當時お家の御執權、仁木樣のお娘御、夫も否とは、アイヤコレ奧たまりめされ、何

氣に病んで、煩ふてばしたもんなやと、男の子には母親の、おいたてないは町人も、武家も替らぬ習ひかや、ハテ是は〱母人の、存寄ぬ御仰、なか〱以て女之助左樣の事では御座りませぬと、いふも赤らむ顏の色、うつらふ井筒外記左衞門、お家の武運長久を、祈る祇園の社より、しづ〱と立歸れば、妻も倶々女之助、いんきんに手をつかへ、コレハ〱親人樣、今朝は早々の御參詣、御苦勞千萬に存じます、ホンニマア嘸お草臥なされませう、奧へ御座つて少しお休、アヽいや〱、年は寄ても外記左衞門、二十町や三十町は、さのみ苦にもなりをさぬ、別して若君兼若樣の御祈禱、祇園の社で夕邊の行ひ、則是がおけらのお守、イヤナニ女之助、床の間に篝火を淸めて御造酒も供やれ、早く〱と老人の、詞にはつと女之助、一間へこそは入にけり、後は夫婦が差向、イヤのう我夫、惣領のアノ民部は、先渡邊民部左衞門が、家を繼子かないとて貰かけられ、代々御家老の家筋なり、後々には女之助か力にもと養子にやつて、今は渡邊民部左衞門と、いふれつきとした家老職、此程は御用につき、關東へ下向の留守、月岡は女の事、便にするは女之助、相應な嫁もあらば呼取て老の樂しみ、ちつと心が休たうござりまするど、遠矢からちよつと射て見る弓取の、妻も子故に引るゝ血筋、玄關の侍あわたゞしく、只今仁木彈正樣より、嫁君の御輿入と、聞て白玉是はと當惑、外記左衞門は呆れ顏、何嫁入り、定めし夫は門違ひ、左樣お覺え曾てなし、早々表へ返答せよ、早く〱といふ間もな

二人とも、夫婦になして下さりませと、母の取なし裏藤が、繰返しての押願、たつて獨りの此娘、嫁入といへばいそ／＼と、來た甲斐もなう聟殿の、顔をも見せず其上に、掟を立てやみ／＼と、殺して何を樂しみに、生ながらへてゐられうが、二人三人にかゝる命、白玉様の心根も、私が思ひに引くらべて、悲しいは同じこと、子ならで親は泣ぬ物、思ひ直して御了簡、頼上ます／＼と、子故にいとゞ取亂す、親の闇こそ道理なれ。ヤアくど／＼と返らぬ操言、所詮かなはぬ此祝言、口でむだ／＼いはんより、悴と縁組ならぬといふ印は是と指添の、小柄を拔て差出し、彈正殿より送られし、引出物の此刀と、同じ摸様の此小柄と、いふに親子がとく／＼と、見れば覺の夫の差料、此小柄がどうして爰にと、晴ぬ思ひは重なる胸、さしうつむいて詞なし。外記左衛門は意地強く、不義の科ある我悴、お家の掟に行ふからは、其娘も不義の相手、スリヤどうあつても縁組は、ハテ此世の縁を切目の小柄、ハテ女房奥へ、サアぐず付ずとはやてちへと、せり立られて泣々も、思ひはおなじ恩愛の、子に引さるゝ母と母、別れてこそは入おとに、親子はとかういらへさへ、何と恨を裏藤が、立端泣入る娘の顔、つく／＼と打守り／＼、娘は母に附く例ひと、こがれ／＼た女之助、添せたいが一ぱいで、折角連て來たものを、舅御の聞入なく、暇の印と渡されし、此小柄は夫の差科、ムヽ合點が行かぬ、深さ樣子があるにせよ、エヽ聞えぬは女之助、深うかはせし兼言も、今更替る飛鳥川、エヽ水臭い／＼、井筒と苗

を女の小さし出た、夫をさし置飽相の一言、イヤナニ裏藤殿、彈正殿より送られし、此二品の引出物、歌の心の判字もの、解て夫婦の盃を、させてやりたいものなれども、マアならぬ、早く連て歸られよと、詞にはつと驚く娘、裏藤はせき立て、ヤア此祝言の取結び、叶はぬ時は二人とも、不義の科あるお家の掟、互に若木の花盛、むざ〳〵散すか散さぬは、親々の心の風、燒野の雉子夜の鶴、子を悲まぬはなきものを、ならぬとおしつやるお詞は、憚ながら外記左衛門樣、恩愛も情もソリヤ御存ないとまをす物、イヤサ夫は女の手前了簡、其本亂れて末納らずと、賴兼公には御身持放埒故、御閑居に押込の御身となり給ひ、當時若君樣の御代となり、お家の政道誰あつて納る者もなく、一二をあらそふ仁木井筒、其子供が不義せしと、言號なんどゝ言立、婚禮を取結ばゞ、此後外にて不義あるとも、只言號〳〵と政道は皆くらやみ、悴が不義に極らば、首討て掟を立る、其方も其娘、いか樣とも計らひ召され、又此筒井が家は、賴兼公御取立の忠義の家筋、斯樣の緣組思ひも寄ず、早々連てお歸りやれと、つッ立上る裾を控へ、サア其思召しも無理ならねど、夫では娘を殺さにやならぬ、コレまをしどうぞ今日の祝言を、御取結び下さる樣の私が願、いかにもさうじや裏藤樣、コレまをし我夫、侍の我も事による、祝言さすれば不義にもならず無事な顏、もし悲しい憂目を見せるならば、其時の母が思ひは、その樣にあらうと思召、お前ばかりの子ではなし、氣づよい事をおつしやらずと、願かなへて

悟でも、何と是が殺されう、赦してたもと子を思ふ、親の迷ひぞ道理なる、エヽ母樣御未練な、引出物の此刀は、死なでかなはぬ約束事、ようわきらめて居りまする、サア〳〵早う殺して下さんせ、コレイナア〳〵まをし母樣、此樣にまをしても、お聞入は御座りませぬか、エヽ不甲斐ないお前は頼まぬ、離別の印の此小柄、母樣さらばと取上れば、是はとばかり母親は、小柄もぎとり聲を上、エヽ聞えぬは舅姑、女夫にすれば助かる二人、娘が爱で自害せば、女之助も不義の相手、死ずば掟はサ立まいが、生先ある女之助、死でもよいか殺す氣か、そりや親じやない鬼じや〳〵〳〵わいのう、コレ娘そなたも母を振捨て、一人死とはきよくがない、どちらも〳〵餘りな、むごいわいなと聲を上、恨のかず〳〵胸に釘、立聞く白玉こたへかね、思はず一間を轉び出、ヲヽ裏藤樣尤じや〳〵、子を殺したい親々が、廣い世界におろかいのう、さつきにからわの一間で、親子御樣のお心根、聞ば聞ほどおいとしい、心つよいは我夫、最前からいろ〳〵と、願ふて見ても聞入なう、掟を背し女之助、腹切せて介錯せいと、胴慾な無理ばかり、夫が何と殺されう、我強ばかりが武士かいのう、コレ〳〵嫁御寮、必々はやまるまいと、留てもとまらぬ三人が、涙は三ツの瀧浪の、岩にせかるゝ風情なり、折から表騒かしく、御舘の一大事と呼はり〳〵伊藤傳藏、息つぎあへず駈入ば、何事やらんと外記左衞門、追取刀に立出て、御舘の一大事とは心元なし、サ其樣子を早く〳〵、されば候今朝若君樣の

字は誰が付た、コレ娘とてもくさつた男の根性、長うゐる程恥のはぢ、サアおじやいのとやけ腹立、引立れどもしく〳〵と、泣くづをれしいぢらしさ、見る目不便の涙をかくし、コレイノ〳〵、なぜ立ちやらぬぞいのう、サア〳〵早うかへりやいのうと、いへば娘は顔を上、なうし母様、歸れとはソリヤアノ祝言の忌詞で御座んすわいなあ、ヲヽわつけもない此子わいの、去れてしまふて忌詞所かいのう、イヽエわたしや去れは致しませぬ、夫でも暇の此小柄、あれまたあんなことおつしやる、稚時から手習の間に、女庭訓や、唐のやまとの文のかず、女は夫を大切に、朝夕神とも佛とも、思ふが女子の嗜と、お敎なされたお詞を、コレまをしお前は忘れてござりますか、夫にまだ〳〵ありがたい、父様のおつしやるには、掟を背きしそちなれども、どうぞ助てやりたさに、女之助へ嫁入さす、女夫中よう初孫の、顔を見せるが孝行と、子安のお守お手づから下さりましたありがたさ、冥加ないやら嬉しいやら、悦んで來た物を、此儘去られて歸りなば、父様の御志、無にするのみか私が身は、やつぱり元の不義の科、とても死る命なら、思ふ殿御の此お館、爰で死れば本望じや、母様の手にかけて、サア〳〵早う殺して〳〵と、覺悟極しいぢらしさ、後は詞もないじやくり、見る目もいとゞ裏藤が、道理じや〳〵、尤じやわいのう、氣づよい夫彈正殿さへ、そなたの命助けんため、押て嫁入も聞入なく、舅御の堅意地ゆへ、殺さにやならぬ義理詰は、わしに切とのことなるか、そなたは死る覺

義教公へ奉る、軍用の調法と御取立下され、ハヽヽヽア冥加にあまる身の出世、某悴に至るまで、東山家の執權職、兄の民部左衛門は、渡邊の苗字を繼、普代忘れぬ主君の御恩、過つる五月二十六夜、我家の塀を乘越す曲者、スハ搦め捕つて一詮議と、ねらひ寄たる我を目がけ、打かけたるは、ナソレ最前の其小柄、無念ながら取迯し、寶藏へ駈入つて、改見れば南無三寶、毒藥の秘書紛失、密に在家を探す折から、最前送りし引出物の此刀、目貫も椽も其小柄と、同じ模樣の山鳥につゝじの彫物、まつた短册の歌の心はくらべこし、刀と小柄をくらべよと、掛たる謎は彈正が、毒藥秘書の盜賊は、我と知せて娘を送、科ある悴か命を助、味方に付んと思ふは愚、武士の命は義によつて、輕しとしらぬ彈正が、慾に迷し魂と、思ひし所に今の早打、惡事の次第一々に、顯さんとは思へども、我罪をも糺さずして、人の罪は糺されずと、悴に切腹させんため、態と氣強くはからひしに、ホヲヽよく腹切た出かしたなア、其方が切腹は、謀叛人を詮議する、我爲の獄木も同然、コリヤ、心よう成佛せよと、父の詞は名僧の、導よりも身にこたへ、ハアヽかたじけない親人樣、武士の家に生し身の、御馬先の討死が、御主君のお身替に、命を捨るは弓取の身の譽、いはゞ忠にも孝にもならず、犬死する此身をば、ヱヽ、ありがたい今のお詞、さは去ながら淺ましや、人非人の娘とも、知で結びし妹脊の緣、情なの身の果やと、血汐にまじる血の涙、いとゞ心はくれなゐの、母は正體泣入る親子、有にもあられ

朝御膳、何者やらん毒殺の企あつて、毒見いたせしやつこ茂左八、忽惣身粟立、其儘血を吐き相果候、ムヽウ、シテ〳〵、若君様には御あやまちはなかりしか、さん候若君様の御傍には、御息女の月岡殿、直宿は荒獅子男之助、心ゆるさぬめのとの兩人、お傍に御座あるゆえ、御別條はなけれども、舘の騒動一方ならず、早く御出仕然るべしと、申捨てぞ引かへす、人々是はと二度悄り、外記左衞門は一間の内、何角心に打うなづき、出仕の用意と駈入たり、心ならねば白玉は、奥も氣遣ひ此場も氣遣ひ、行つ居りつ氣は轉動、コレ〳〵まをし白玉様、若君様の一大事、こゝ構はずとマア奥へ、早う〳〵とせき立一間、千秋万歳の、千箱の玉を奉ると、祝義の小謡、コハいかにと、不審立寄障子の内、外記左衞門が嫁の河内、改て祝言させう、花聟の支度を見よと押明れば、兼て覺悟の女之助、朱に染なす死装束、母はびつくり裏藤親子、取付すがり泣よりは、外に詞は外記左衞門、双手を組で默然たり、手負はくるしき息をつき、まをし母人様、必歎いて下さりますな、最前よりの様子をば、聞と極めし身の覺悟、主親の目をかすめたる、不忠不義の根性から、親に先立不孝の罪、御許しなされて下さりませと、いふも切なき有様に、父はしはるゝ目をしばたゝき、出來した悴、親の心を推量して、いさぎよき此切腹、ホヽ夫でこそ民部が弟、外記左衞門が子なるぞよ、イヤノウ裏藤親子の衆、我胸中を物語らん、元某か先祖といふは、肥前國長崎の出生なりしが、南蠻流の秘法の毒藥、先君

筒女之助、汲かはしたる息の通路、早う早うと裏藤が、コレ〳〵娘、惡人の血筋を切り、夫と結ぶ妹脊の緣、一世一度の夫婦のかため、苦痛を助り臨終しや、南無阿彌陀佛と唱ふる聲、夫婦のかためと一言が、苦しき中の力草、小柄を拔ば引息の、絶て敢果なくなりにけり、わつとばかりに母親は、娘の死骸に縋付き、本によく〳〵嬉しいやら、此死顏のにこ〳〵と、コレ〳〵、笑ふやうなと抱きしめ、涙の限り泣つくす、ことはりせめていぢらしき、外記左衛門血汐の小柄、手に取上て打詠め、忰も嫁も一時に、殺す小柄の此主の、惡事もつひに顯るゝ、摸樣はつゝじに山鳥の、譬をとれば雉の子が、色よき鳥を取らんとて、二足三足いつとなく、山奥深く日を暮し、歸るさ忘れ迷ふ子の、猪狼の餌食となる、先其如く彈正が、其身を忘れし惡事の山、登りつめたる身の果は、虎狼の害はまのあたり、不便なれども惡人を、親に持たは嫁の不運、思ひ合たる二人が中、水の出花の若い同士、後先知らぬ轉合、夫ほどのこと辨へぬ外記左衛門ではなけれども、お主を狙ふ大惡人、所詮此世で添れぬ二人、未來で早う添してやりたさ、見殺しにする親心は、鳥獸にもおとつたかと、こたへ〳〵し溜涙、母と母とも取亂し、泣て小袖の縫の糸、涙に解るばかりなり、ハヽアかたじけない親人樣、此小袖の血汐の盃、惡人の緣切たる血筋、祝言すれば不義の汚名、消て未來の女房河内、イデ追付んと引廻す、一間のうちより聲高く、ヤア〳〵井筒女之助、いひ聞すことこそあれ、暫く苦痛をこたへよと、

す娘の河内、有合ふ小柄取より早く、咽へがはと突立る、是はと驚く母と母、涙そゞろの介抱に、娘はくるしき顏を上、恥しや今までは、父樣の惡事とは知らず、舅御樣を勿體ない、心で恨で居りました、因果な縁を結んだ故、いとしい殿御をやみ〳〵と、腹切せます罪科も、私が仕かけた不義いたづら、憎い奴とのお呵も、遊ばされずお情深い親御樣、祝言させてやらうとある、其お詞が身にあまり、殿御と一所に死るのが、せめて此身の本望ぞや、まをしコレまをし女之助樣、お前も私も未來では、父樣や母樣の、おゆるし受た本の女夫、三途の川も死出の山もかならず、見捨て下さんすなと、苦しき骸をはい寄て、見れば見かはす今はと今際、いひたいことも二親の、手前を恥て得云ぬ、心をさつして母親が、コレ〳〵もうかうなつては親々に、かくすことは微塵もない、今はの際の夫婦中、二世も三世も夫婦じやと、いふて聞せてやりやいのう、アヽ奥樣のかたじけない、娘が迷もはらすため、どうぞお慈悲に夫婦の盃、お願ひをすも申されぬ、惡人の子の此娘、只何事もお二人の、お慈悲〳〵と手を合せ、歎くを不便と外記左衞門、滾るゝ涙を押拭ひ、軒に巢をくふ燕も、そだつる雛を鳶鷹に、取れた時のかなしみは、母鳥ばかりか雄鳥も、泣かなしむは同じこと、まして人間親子の情、コレ〳〵裏藤殿、譬惡人の娘なりとも、女は三界に家なしと、家を出れば憚なし、ソレ女房、二人が迷をはらすため、息あるうちに夫婦の盃、嫁から呑でさす酒は、則河内が血汐の小柄、夫は非

ゝといふ様なことかいのう、ヲヽ成程奥様さうで御座んす、力量すぐれし其人は、雨垂腕をはちくとやら、噂に聞けど今見る始、かゝる勇士もあることやと、互に驚き譽るにぞ、イヤ／＼さにてはよもあらじ、時は午なり若君の、あたらせ給ふは火曜星、土邊の水にぬれざるは、此土中に陰邪の惡氣、籠わるに違ひはあらじと、花檀の鍬を手早く追取り、かはきし土を堀退くれば、中より怪しき桐の箱、願主は、仁木彈正敎將、讀も終らず荒獅子井筒、偖こそ君を咒咀の法、工を顯し一味の奴原、根をたつて巣を枯さん、ハア、ハヽヽありがたし／＼と、悦び勇み立たる兩人、中にいさまぬ裏藤が、お家の榮は夫の身に、むくふ因果は車の輪、廻り／＼て筒井筒、かへらぬ物は元の水、おしや今日までなでし子の、散て散果なきはゝ木々も、うき世の塵と切はらふ、身はそき尼となく／＼も、死骸を抱き出る母、殘れる母も諸共に、同じ思ひに呉竹の、直なる神の御守、守護して出る男之助、外記左衞門はしづ／＼と、伴の箱を携へて、打連上る上舘、暇乞をと死顏を、見せるも見るも有爲無常、實にまぼろしの世の中やと、行も殘るも三重「涙なり

第八

小雨いとはず戀する妹か、誰を待身かしよぼ／＼ぬれて、ぬれは戀路のよい辻占よ、謳ひうた

褄踏明け男之助、眞中に押直り、今朝御膳の鴆毒より、舘の騷動大方ならず、正しく兇行、彈正などが工し所爲とは思へども、此家に秘しある毒藥の書、是物臭しと思ふより、貴殿親子の心を伺ひ、裏道より忍び入り、一伍一什は最前より、一間の内にて見屆たり、ハア丶今に始ぬ親子の忠義、感せし餘りに此一卷、管領細川勝元公の仰を受、義を金鐵に堅たる、忠臣の士を集る連判狀、女之助が未來の土産、息あるうちに血判させんと、偖こそ最期をとゞめたりと、手負の前に押開けば、ハア丶コハ冥加なき御情、不忠に死る未來の迷、晴して給はるありかたやと、血汐をぐつと押ねむる、身の悦びにがつくりと、絶入息に取亂す。母は元より父親も、泣じとこたゆる武士の、泣ぬはなをも哀れなり、ハア丶實誠忘れたり、平安鎮護の祇園の守、若君樣の御身の上、御あやまちのなき樣にと、最前載き歸りしが、倅が最期に忌服恐れ、其元御持參下さるべし、併し御邊も血汐の穢れ、水清くしてたまりなければ、きたなきことは荒獅子殿、實尤もと手洗水、はんどうの口押捻て、古木のかいな指出せば、不思儀や水は手に溜らず、三寸ばかり上にて別れ、左右へ飛ちる其有樣、目はなしもせず見入し人々、外記左衞門屹度見て、ハテナ怪しや、年は甲、天の客氣は大蔭の濕土に當る地の主氣は小陰君火、みなぎる水は太陽寒水みづを克せは火は土を生ず、土は 則 肉なれば、腕をはぢきほとばしるは、水克火のたゝかい、ホ丶ホ丶丶、希代の業を見ることじやよなア、但男之助樣の武勇に、水も恐る

に、油斷も隙もなる物じやないわいの、そんなだゝむさいことしやると、天窓から噛付と、云はれて野良の安珍顔、アヽイヤコレ〳〵、あれは與右衛門樣が、我事をおれにおふせていはしやるのじやわいの、アノ茂次が娘のおそよこそ、疾うからへ、愛の與右衛門樣に惚てゐるわいの、與右衛門樣も又、へゝあのおそよには、ハヽどうやらちつと氣があるそうな、イヤコレ何のおれはマア、可愛そなたを退て、そんな心はないわいのう、ムウスリヤ眞實で御座んすか、ヲヽ夫で心が落付た、アヽ嬉しやと手を取て、道々はなすこともある、サヽ〳〵ごんせと氣もそヾろ、伴ひてこそ立歸る、後にはくわつと焚る火の、累が胸のとけしなく、夫の傍へさし寄て、コレこちの人、ほんに〳〵こなさんは〳〵、餘りな惡性じやぞへ、今與之吉がいふたのは、本のことで御座んすかへ、モ今更いふではなけれども、二人が中は兄樣の、情で結ぶ緣の糸、解てお前がよそ外に、仇し心が出來たらば、わしや何とせうどうせうぞ、アレ見やしやんせ木々でさへ、女夫のやうに思はるゝ、男の松を力にて、付まとはるゝ藤かづらも、細き女の心では、思ひ過しがするわいなと、目には淚をはやたもち、ほろりと溢す露しづく、エヽ我身もマア、何のことじやぞいの、今與之吉のいふたのはありや、おれかなぶつてやつた其仕返しをして往にをつたのじやわいの、無こつちや〳〵、イヱ〳〵〳〵〳〵ないことじや御座んすまい、からいへばわしが口から、器量自慢をするやうなれど、京の内を出た時分、こな樣の云しやん

ふは下總に、所の名さへ埴生村、われし住居にわらくれし、相撲取の絹川が、累を連て古里へ、うき世をしばし忍ぶ名も、百性の與右衞門と、替りし業もならふより、なれぬ累も夫思ふ、身に苅り豆を脊に負ひ、畑より歸る女夫連、ヲヽ與之吉樣、おまこ樣、よう手傳ふて下さんしたのう、わしらは仕付ぬこと故に、お前方に振向て、苅て置て貰ふたかり豆を、内まで運ぶが二人の仕業、マア〱休んで下さんせや、ホンニ二人ながらいかい太儀であつたの、それ累、茶でも沸して呑しやいの、偖マア今年は十分の物成、きつい上作、近年に覺えぬ豐年、わせの豆さへ落こぼれる世の中じや、ハア其豆に付ておまこよ、かくすことはない、ヨ與之吉とノソレ出合の所がなくば、何時でもこちの内を貸てやらう程に、ヘト精一ばいちぎれ〱、アレ又與右衞門樣の、惡口いふてなぶつてじや、そんな覺はないもせぬ物、ハテわれ程浮名の立た二人が中、隱しても人がよう知て居るわい、イヤまをし與右衞門樣、おまこと私が中を、マ其樣に人が噂しますかへ、噂所かいのアノナソレ、夕邊下手の方でうたふを聞けば、アヽ何とやら面白う節付て、ヲヽそれ〱、おまこ殿やれおまこ殿ソレ、晩けも行べいが何所にねる、東窓に窓の下、おまこと與之吉は違ない、おや〱〱どうせうのう與之吉樣、ヘヽヽアイヤコレおまこ油斷しやんな、マダソレ藪ぎはの茂次が娘おそよにも、アノ與之吉が晩げも行べが何所にねるといふたげなぞやと、なぶればおまこは眞受に受、男の胸倉しつかと取、コナコヽな性惡男

さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しいと寄添ふて、まだうら若き女夫中、世帯なれぬも戀ならん、折から來るは此村で、立られもせず權道な、事を身過にぶら／＼と、懷手して門口から、ハヽアコリヤ晝中に手詰るな／＼、ヤコレ見とむない置てくれ／＼、ナヽ何を金五郎のしやら／＼と惡口をいやるぞいの、エそしてマア我身はなんと思ふて、イヤ何とヽはちつと、おれが金儲け筋について、そなたに問たいことがあつて來た、がまあ口祝にコレ嗅乘、何と一ぱい呑せて下さんせぬかい、ヲヽ心安いことなれど、折節とつた酒はなし、一走りいて買て來やんしよ、女房どもそんならちよつと行て買ふておじやと、投出す腰のはした錢、みじかきおあしいとひなく、小褄引上げ酒德利、提てとつかはかしてなる、酒屋をさして急行く、後は互にさし向ひ、膝摺寄せて金五郎、アイヤ與右衛門、外に誰も聞人はなし、貴樣にちつと尋たいことがあるといふは、外のことでもない、此四五年以前在所を出て、上方で相撲取をして居やつたといふ噂、内にいやる時分から小達者にはあり、何でもマアよいことじやといふて居たが、其時の吾儕の名乘は、何といふた聞たいと、只何となく和らかに、裏問かヽる心に一物、何のことかと思ふたら仰山なものヽ聞やう、成程吾身のいやる通り、上方へ登つてから、相撲部屋へ這入ては居たが、イヤモ人に知らるヽ程なことではないわいの、アヽ其時のわしが名は、絹川といはふがの、ヤ、イヤサ絹川の谷藏といはふがなと、いはれて胸にぎつくりと。わたれど猶も

すは、わしが願の叶ふまで、神樣への願立じや、必々鏡をば見てくれなとのお前の賴、女の身のたしなみも男のためと誓を立、面かげさへも見ぬやうに、するは御前が大切さ、どうぞ願の叶ふやうと、夫ゆゑ鏡は見ぬけれど、京で生れて世の人に、袖褄引れ近所でも、アレ、豆腐屋の娘は半四郎に似てあるの、杜若にとんと生寫しじやのと、噂せられた此わしが、在所生れのおそよとやらに、見かへられては立ませぬと、悋氣の中へ取交た、器量自慢もいつしかに、姉が死靈に面さしの、替りしことはいざ知らぬ、心のうちの不便やと、おもふ思ひをさとられじと、ハテさて〳〵何をやくたいもないこと云やるぞいの、モそなたの樣な美しい女房持てゐて、此田舍の土だらけな、ソシテアノひなたくさい女に、目もやらるゝ物かいの、內を出る時門口で、轉んで足こそ跛なれ、顏なら風俗なら、此下總一國を搜したとて、そなたの樣な女子が、最一人あつたらお目にかゝらぬ、江戸の吉原へ突出しにしても、二人とさがる器量じやないわいの、モ本に〳〵わしが樣な、女房果報のある者はないぞいの、たとへ又、天女が天下り、情所を見せかけても、七里けんばい氣はうつらぬ、ヤコレ、氣遣のきの字に、長點かけたりこちの辨天、船饅頭の取梶も、今宵の風まん取かけるぞ、船玉淸めてへゝコレ供へ給へと、いふにつてり折れ安さ、女心の一筋に、偖はさうかと目でしむる、ヱゝぐち者めがとざれ言も、惡女を美女にいひなして、夫と知らせぬ與右衞門が、心遣ひぞせつなけれ、流石女の淺はかに、

付、何でも都北白川、父は吉田の何某と、梅若くさい生れ付、そこでおれが思ふには、こいつはよい代物が手に入つた、江戸の吉原へ賣てやつたら、百兩には捨てもなること、昨日の晩からこつちの內に、しつかと圍ふて置た、幸ひ吉原の花扇屋の亭主、筑波參りの戻りかけ、此在所に逗留して居る、ちよつと其事話たら、見ぬ先から飛付て、百兩には直がなつた、我身が其絹川なら、渡してやる品もあらうが、絹川でもない人に、渡すこともマアないと云ふ物、イヤモ何じやか知らぬが、此間は金儲がふるやうなと、話す度々與右衞門が、胸にあたりし姫が身の上、夫こそは御主人といへば、我身の一大事、とやせん角やと胸の內、ちゞに碎くる思ひなり、思案を極めさあらぬ風情、ハテ偖そなたはよい仕合、よい金の蔓に取付きやつたのう、が今のそなたの話の樣子では、餘程よい代物の樣に思はるゝ、金五郎笑ふてたもんな、見ぬ戀にあこがれた、物は談合じやが何と、おれが女房にたもらぬか、累といふ女房のある上、ハテ偖我身も粹の樣にもない、よう思ふても見てたも、あた外聞の惡い、冬爪にあて身くらわした樣な面、何日まで女房に持て居られるものぞ、スリヤ眞實女房に、何の嘘をいふ物ぞ、ハテあぢいに黄色にうこん色にかゝらみかけるの、面白い女房にやろ、やるはやるが與右衞門、サ金せうかい、アイヤ其金はないが、あるまい何のあらう、吾儕達の歯にはちと合にくい、明ん事じやよしにしやれ、ドリヤ花扇の亭主に引合、久し振で百兩の金の顏を拜うと、立上る袖引とめ、

そらさぬ顔、何のいの、伊達殿や稻川殿のやうな關取なら、所の名を付もせうが、ヤモわが名さへろくに、忘れるやうなはした相撲、所の名折なんのマア、と輪に吹いて居る煙草の煙、ヲヽ名乘れまい、いはれぬ筈じや、其絹川といふ奴は、一人ならず、三人四人の人殺し、ぐれが廻つて身の置所がなさに、上方からうろ〳〵と、こゝら邊りへ迯てうせたげな、アヽ命といふ物は惜い者じやさうな、弱いやつ未練な奴、ヘヽハヽ今にでもおれが手先へ廻るが最期の助、お尋物の絹川、引括つて褒美にする、のうそんな物じやないか與右衛門と、知つて云ふのか知らぬのか、通りかねたる煙管の小より、ムヽ成程つい聞た時には其絹川、卑怯者とも思はるれど、天晴な男じや、ハテ何故といや、三人四人の人をあやめる大丈夫、それほどの魂で、何の迯げかくれしてたまる物かいの、定て夫は大切ない、お主の爲といふやうなことでがなあらう、マアそんな物じやあるまいかい、ムウいか樣、まさういへばそんな物かい、そんなら夫はさうよ、ハテかはつたこともあるものじや聞ても、昨日絹川の堤で、年の頃十六七でもあらうか、尋常なうづ高い娘が、絹川を教へてくれといふによつて、絹川といふは此川じやといふたれば、イヤ川のことぢやない、絹川といふ相撲取を尋る者、供をして來た者もあつたれど、昨日とやら道ではぐれ、所は知ず道はしれず、絹川〳〵とあちこちでたづね、やう〳〵爰まで來た、どうぞ絹川にあはしてくれと、わしを佛の樣に手を合して泣ての賴、褄はづれといひ詞

石の海、うき世に秋の日の脚も、片足短き女房の、累はとつかは酒屋から、歸る我家の黄昏時、はつと驚き懐へ、隱すわいろも夕間暮、ヲヽ嘸待兼さしやんせう、此在所の酒は、悪いとやらいはしやんすによつて、隣村までいて買て來やんした、夫はマアさうと、金五郎樣はどこにじやへ、イヤモ待兼て疾うにいんでしまうた、エヽモ本に氣の短いお人ではあるぞ、折角買て戻つた酒、そんならお前呑しやんせぬか、アヽいや〳〵、おれはモウ酒所じやないわいのと、何所やら濟ぬ夫の顔、つい目に付も惚た中、心にかゝる傍へ寄、コレこちの人、いから顔の色もわるし、お前は何とござしやんしたか、そしてマアついにない、日頃好な酒もいや、ムヽ何ぞこりや樣子のあることで御座んすの、女房のわしに隱さずと、ちよつと聞して下さんせと、聞たがるのも夫思ふ、心遣ひぞ道理なる、不便とは思へども、漏ては事の妨と、夫とはいはで、コレ累、今迄そなたにいはなんだが、何をかくさうアノ金五郎には、親の代から百兩と云ふ借がある、此中から其金を、戻せ〳〵といらだての催促、色々といひ延したが、切ぱつまつて今夜の夜半、どうあつても其金を、立ねばならぬことになり、請合ふことは請合ふたが、土か砂を見るやうに、百兩といふ大枚の金、早速調ふあてもなし、いつそ毒喰はゞ皿、破れかぶれ、アノ金五郎を切殺し、エヽサコリヤさうも思ふて見たが、又外に工面の仕樣もあらうかと、今其思案最中と、語る夫の今の間に、ふつて湧たる身の難儀、妻も途方に呉羽鳥、只涙ぐみ居た

金五郎金渡そ、が今はない、あつちこつちに預て置た金、取集るに間があらう、今夜の九ツまで待てたも、夜半の鐘を合圖に百兩の金渡そ、ハテ夫程にいふことなら、友達のよしみ、夜半までは待てやらうが、必約束違へぬ樣に、併累が手前もあり、爰の內へ其幻妻連て來るはおれも氣の毒、斯うせう、絹川の土橋まで、金揃へて持ておじや、ヲヽ夫ではおれも勝手がよい、出合ふ處は土橋の際、金と、代物、引替に、必何處へも、合點じやと、慾のくまたか兩の手に、握つた思案を心に納め、一人笑して立歸る、後は思ひに花ぞ散る、物思へとや入相の、鐘にせかるゝ百兩の、才覺なんと與右衞門が、思案に胸のくれ近く、思ひ廻せばまはす程、お館の騷動ゆゑ、一旦此絹川がお供して立退しと、風聞せし賴兼公、都のうちにおはすとも、辨へなき娘君樣、女心にはる〴〵と、慕ふてお出遊ばしたか、何にもせよちよつとマア、お目にかゝつて、アイヤ〳〵曲にいがんだ金五郎め、絹川と知れては、我身の大事姫君の、御身の上にかゝる難義、とあつて百兩の金はなし、所詮手短に金五郎めを、追駈て討放し、姫君の御供して、立退より外はなし、ヲヽさうじやと、駈出す足にまとひつく、前垂の紐恩愛の、縁に引るゝ後髮、此儘に立退かば、嘸や後にて女房が、何にも知ずに見捨たかと、恨むであらう泣であろ、兄の三ふに詞をつがい、假令どの樣な事あつても、一生見捨まいといふた女房、義理の欠るもお主のため、了簡して下され三ふ殿、こらへてくれ女房ども、せめて一筆殘さんと、捜す硯の

ませぬ、私は江戸吉原の女郎屋に御座りますが、金五郎様に御相談仕かけました奉公人、金持て來い、此方様に、待て居るとおつしやりましたが、ハテ面妖などつちへお出なされましたか、どうぞお目にかゝりたい物じやがと、いふうちふつと氣の付く累、我身を賣て百兩の、金調へる手寄には、是幸ひと笑顔して、どうで見える金五郎様、入つてお待なされませ、ハイ／＼左様ならばお邪魔ながら、ャ御免なされて下されませと、知らぬ人にも取入るは、商賣筋の上手者、累は傍へ煙草盆、いひよるしほに茶を指出し、イャまをしお前は、アノ吉原の女郎屋さんで御座んすか、そんならお前に折入て、お頼まをしたいことがござんすと、いふは外のことでもない、夫が手詰の難儀につき、急に金の入ことがあつて、身を賣たいといふ人が御座んすが、今いふて今相談の、出來る物で御座んすか、いやもう夫は商賣づくいつでも、談合出來まする、マア其本人の年頃は、されば十七八で御座んする、よし、顔のすまい立入の様子、サア顔形風俗は、江戸でいふて見やうならば、歌舞妓芝居の半四郎によう似てござんすといな、夫はきつい代物じや、どうぞわしが方へ相談を極ませう、そして金の望は、アイ百兩にさへ買て下さんすりや、年は五年が十年でも、夫に厭ひは御座んせぬ、ャモ今の話の通りなら、隨分百兩に買ませう、幸ひ金は持て居る、相談さへ極つたら、直に連ていにたいもの、そんならそうして下さんせ、エヽかたじけない、したが、今いふ通り夫のある身、互に得心づくの暇乞する間、ア

りしが、日頃夫の突詰し、心を夫とくみ取て、エヽやくたいもない與右衛門樣、何のマア百兩やそこらの金、其樣に苦にさしやんすことはないわいな、又よい思案も御座んせう、コレ短氣をやめて下さんせへ、お前の其短氣ゆゑ、人をあやめて、コリヤサア若其事が顯れて、どんな憂目に逢はしやんせうかと、本に夜の目も合ぬわいな、今此日蔭の身となつたも、皆こな樣の心から、若ものことがあつたらば、後に殘つたわしが身は、どの樣にあらうぞと、ちつとは又女房の心、推量してくれたがよいと、夫思ひの一筋に、聲も得上ぬ忍び泣、夫も不便の涙をかくし、夫程にまでおれがこと思ふてたもる志、惡うは請けぬ嬉しいぞや、コレ何にもかも得心してゐる、ムヽこんならば何事も、聞譯て下さんしたか、エヽ嬉しう御座んす、九ツ迄では間もある、一寸延れば尋延る、マア〳〵奧へござんして、酒でも一ツ呑しやんせ、所かはれは品とやら、又よい思案も出よぞいなと、奧へすゝめる女房の顏、見るにほろりと落方の、涙を隱す懷ひ、書殘したる其後を、書に入るこそ哀なり、折柄表へ合羽がけ、所見なれぬ一腰も、はでな拵へ取形は、遉それやと門口から、ちつとお頼ましませう、與右衛門樣とは此方で御座りますか、金五郎樣といふお方が、お前樣にと承はりましたが、ちよつとお目にかゝりたう御座りまするど、いへどこなたは耳にも入らず、通つて下さんせ、エヽ何じやら、邪魔らしい、奉加所かいな、わしが所は宗旨が違ますと、胸のもや〳〵愛想なき、イヤ左樣な者では御座り

んせ、つらい苦界へ身を賣より、昔にかはる面ざしとも、何にも知ぬ心根が、其百倍のいぢらしさ、五體をしめ木にしめ付られ、油ぬかるゝ思ひなり、折からいきせき村の歩、文をし〳〵與右衛門様、山名宗全様から繪姿をもつて、お尋なさる者がある、今ござりませとお代官の云付、サア〳〵今じやとせり立れば、はつとばかりに與右衛門が、重なる思ひは命を的、胸を据へたる魂の、一腰ぼつこみ立出れば、コレ待しやんせ與右衛門殿、さつきにから云通り、短氣を出して下さんすなと、いふまもせはしくサアまたし、早う〳〵とせつかれて、代官所へと出て行く、後影さへ名殘かと、見やる目に湧雨涙、しほ〳〵立て押入の、冬の支度の縮入れ、やう〳〵裾を合せ物、はなれ物とはいひながら、兼て斯なる身と知は、せめて不自由のなき様に、洗濯物の糊立も、涙にしめる糸筋や、針のみゝすの見えわかぬ、あくびまじくら納戸より、立出る以前の男、ア、旅くたびれで思はず知ず、する〳〵とやつてのけた、サアまたしお内儀様、暇乞も済だなら、おつ極しましよかい、ヲヽ嘸お待遠にござんせう、サアそんなら其百両の金、渡して下さんせ、そりや何時でも渡しませうか、シテ其奉公人は、ハイ私で御座んすわいな、エヽ何をじやら〳〵と、サア〳〵氣がせく頼ます、イヤまたしじやら〳〵では御座なせぬ、眞實誓文わたしが身を賣のでござんす、エヽこな様は何をいふのじやぞいの、夫さつきにいはんした、半四郎といふ代物、さいなア、私がことで御座んすわいな、ヤア此人は氣が違ふたさ

レわの納戸でしばしの内、そんなら必何もかも、手廻し早う頼みますと、いそ〳〵として彼の男、納戸へこそは入にけり、累は後を見送りて、手詰の金の今の間に、つい調ふて嬉しやと、思へば悲しきうき別れ、アヽ是とても男のため、とてものことにいさぎよう、夫に泣顔見せぬのが、別れる此身の置土産と、氣を取直す一間より、何心なく出る與右衛門、顔を見る目もふさがる思ひ、押かくして傍へより、イヤまをしこちの人、わたしやお前に願がある、聞届けて下さんすか、改つた女房ども、願とはそりや何事、サア日頃お前のいはしやんすには、鏡を見ると添ふては居ぬ、暇をやるといはしやんした、其鏡が見たう御座んす、ムヽ何といやる、そんならそなたは、暇くれといやるのか、アイ今宵に迫つた手詰の金、勤にやつて下さんせと、我顔形のかはりしとは、知らぬ不便さいぢらしさ、何のまア其顔で、といふも云はれぬ苦しさの、胸に涙を呑込ながら、エヽ埒もない、たとへどの樣なことがあつても、そなたに勤奉公さして、兄の三ふへ立物か、さいな、夫じやによつて暇の状、ひま下さんせ與右衛門殿、とはいふもの、世の中に、女房は夫に去れまい、暇取まいとする筈を、緣切れても嬉しいと、思ふ心を推量して、可愛と思ふて下さんせと、思はずわつと聲立て、取付縋る蔦の葉の、袖にしがらむ憂涙、とゞめかねたるばかりなり、本にわたしとしたことが、よう得心をして居ながらどううろたへて泣たやら、年の立間は射る矢より、早う戻つて元の女夫、必々夫までは、まめで暮して下さ

かういふことゝも露知ず、今の今迄わしが身で、器量自慢をして居たが、恥しいやら、エヽづツともう悲しいやら、なに面目に與右衛門殿、どうマア顔が合されう、せめて夫と同じ名の、絹川へ身を投て、死るは未來で連そふ心、とは云ながらさつぱりと、思い切れぬ惚た中、死だあとでは美しい、女中を女房に持しやんしよ、そればつかりが氣にかゝる、是が迷ひの種となり、よう浮まぬで御座んせう、可愛と思ふて折節の、御回向頼み上ますと、くどき立〳〵絶入ばかり泣つくす、沈む重りと連なる。苅豆籠を身のしづに、おはれおはるゝ死神の、もし仕損せば身の恥と、見廻す傍に鎌もせで、磨立鎌は今宵誰、草葉の露と消えよとか、いとゞあはれを添に來る、秋雨の音立歸る、夫の足音今更に、顔を合すも恥しく、見付られじと吹消す行燈、火が消てある女房とも、累々と與右衛門が、すれ違ふたる門の口、誰じや〳〵そこへ出るのは、累じやないか、といふ聲後に聞さして、女心の一筋に、こけつ轉びつ走行く、ハテ怪しやと見る影は、たしか女房と思へども、あやも分らぬ眞の闇、後を慕ふて三重

第九

行空の、捨に行く、身にはいとはぬ村雨の、涙あらそふ絹川の、堤傳ひにうろ〳〵と、走りつまづきやう〳〵と、胸撫おろし撫おろし、今のは慥に與右衛門殿、後から追て見えし故、藪

うな、そんならこな様が半四郎、アイヤヤ長四郎が聞て呆れるわい、コレイノウこな様を誰がマア、夜たかにも欲がる者はないぞや、エヽ夫やまあ何で其様に、何で其様にもあつかましい、餘り呆れて物が云れぬわいの、ハア貴様こりや鏡見たことはないの、アイちと樣子がござんして、鏡見ることはならぬわいな、ムヽいか様さうであろ、生れてから鏡見たことあるまい、コレこなたの顏の容體をいふて聞そか、ぐるり高のちよつぽり鼻、しかも出齒ではげか見えて、其かはりにちんばと來てゐる、エヽ、ヤエヽもすさまじいわい、幸ひ爰に髭拔鏡、けうけやんな御面相、とつくりと見やしやれと、懷より取出し、やけ腹立にさし付れば、思はず始て見る顏に、はつと愕りまだ外に、人もゐるやと見廻せば、我ならずして面影は、よもやと又も取上て、見れば見る程情なや、コハそもいかに悲やと、彼方へうろ〳〵此方へはしり、狂氣の如く身をもだへ、鏡を發失と打付て、我身をぞうと打倒れ、聲をばかりに叫び泣、あはれにも又いぢらしき、エヽいま〳〵しい隙づいやし、此樣な化物を、百兩は措置て、米一舛でも買人はないと、つぶやき〳〵立上り、せめてお脚で腹いよと、泣入る累を踏飛し、足を早めて立歸る、前後正體泣くづをれ、顏も得上ず居たりしが、アヽ思へば〳〵恥しや、かういふわしが顏故に、鏡を見せぬ夫か心、其顏もせず朝夕に、可愛がつて下さんした、お情過てなさけなや、何故打明て有樣に、いふて聞せて下さんせぬ、又姉樣も胴慾な、現在の妹を、是程までに憎いかへ、

日こな樣のことを話たれば、あいつもきつい變者じや、有もせまいに、こな樣を百兩にて賣てくれい、今夜九ツまでに金拵へて渡さう、したが累にはかくしたい、どうぞ此土橋まで連て來てくれい、金と引替にしやうといふかた〳〵の約束で、追付爰へ金持て來る筈じや程に、其絹川とやらいふお尋者を戀したふて、倶に憂目に逢ふより、アノ與右衛門が處へ行んすれば、おれも世話した甲斐あつて、百兩といふ金あたゝまる、又こな樣も早速よい男に有付といふもの、スリヤ是二人ながらよい仕合といふものじや、ナ何と嬉しいか、ヲヽおれも嬉しい〳〵と、おのが工の得手勝手、木影に始終立聞く累、偖は夫が都にて、いひかはしたる女よな、我にかくせし百兩の、金の入譯夫の心、聞ば聞ほど腹立やと、逆立胸を押さげて、猶も樣子をうゝかひ居る、姫はとかうのいらへさへ、涙に咽び給ひしが、漸に顏を上、そなたのたんと世話なれど、どうぞ尋る絹川に、逢せて下され賴みます、誠浮世の情ぞや、コレ慈悲で御座ると手を合す、拜むわいのとばかりにて、又さめ〴〵と泣給ふ、ヱヽめろ〳〵といまはしい幻妻じや、とこぼえてもどうしても、與右衛門が所へやらにや置ぬ、イヤトぬかすと此川へどんぶり、サアわいといへ、サアどうじやいやい、サア〳〵何とゝせちがふ所へ、息せき來る與右衛門は、累が行衛見失ひ、うろ〳〵尋る出合頭、ヤ金五郎じやないか、與右衛門か、テモ早う仕かけたなア、ヲヽシテ約束の其女は、ヲヽ連て來たとも〳〵、金と代物引替じやと、泣入姫を突出せば、さ

蔭へかくれたが、定てわしを尋にか、外に用でも出來たのか、アレあの向ふの畑の方へ行しやんした、後姿が此世の名殘、覺悟はよう極ては居れど、最一度逢たい與右衛門殿、アイヤ〳〵、此淺ましい顔形、まだ此上に水におぼれ、どのやうにならうと思へば、一倍愛想がつきようかと、夫が悲しい〳〵と、土邊にどうと身を投伏し、正體涙にくれけるが、アヽ悔まじ歎まじ、とてもながらへ果ぬ身と、小石拾ふてそこゝと、尋る心ぞ哀れなり、折から向ふに聞ゆる人聲、見付られては叶はじと、見やる稻村幸ひと、身をひそめてぞかくれ居る、程なく出來る金五郎、欲に光らす小提燈、なやませ給ふ姫君の、手を引立て土橋の上、ヱヽ道々も云聞すに、さりとてはどひつこい、コレ女中様よう聞んせや、こな様が泣しみづいて逢たがる、其絹川の谷藏といふ相撲取は、此近邊にはマアないは、又有た處が、人殺のお尋者じや、定て大方上方で、女房に持うならうのと、堅ういひかはさんしたこともある故、此下總三界まで、尋てごんしたどいふ様なことであらうが、そんな科人を捜して添ふより、幸ひなよい事があるわいの、ヱヽ此在所に、與右衛門と云ふ、夫は〳〵よい男がある、時に此女房が累といふじや、其又累が顔形、イヤモウどうも二目と目當て見られた面じやないわいの、そこで、カノ與右衛門めも、女房の累が傍では可愛の、イヤ不便なと日頃から、欺しすかして添ふては居れど、どうぞ幸ひなことがあつたら、其女房の累を追まくつて、よい女房と仕替たい〳〵と思ふて居る矢先、今

人せうといふ程の、又敵役でもないが、金づくばかりはどうもならぬ、さつきに約束した百兩、ナサ其百兩さへ今渡すなら、呑込ないものでもない、サ金しやう、イヤ其金が今は、ないか、あるまい、何のあろぞい、アノ爰な大泥棒の盜人野郎めが、コリャ己を絹川といふことは、晝わたつて見てとつくりとすいて置たわい、けれども、百兩の金渡さうとぬかす、以前は相撲取もして居つたことなれば、相應にかまひともあつて、金があるまいものでもない、マア百兩引たくつて、其後で訴人して、又褒美の金してやつて、二はいしてくりやうと思ふたが、圖へいかなんだ、モウ此上は二人ながら訴人して、褒美の金にしてこまそと、駈出すを引戻し、モツさうぬかせば百年目、どうも生ては置れぬと、ずいと拔て切かくれば、彼奴もしれ者拔合せ、二打三打うち合〳〵、コレ〳〵まをし必どつちへも行まいぞ、こつちを片付立退んと、堤傳に切結ぶ、逃行く金五郎のがさじと、後を慕ふて追ふて行く、後には一人歌方姫、怖さひやいさわな〳〵と、心も空にふる雨は、ぬれぬ思ひの稻村に、始終聞ほどせきのぼす、心の角を押かくし、知らず顔にて走りより、ヲヽコレハ〳〵、今絹川殿の頼ましやつた、上方の女中とはお前か、わしは近所の者、絹川のいはるゝに、追付そこへ行程に、ちつとの間心をつけてくれいといふて、ヲヽホンニおいとしや〳〵、此下總三界迄、戀したふて御座んした、アノ谷藏殿とは、定て深う言交さんした中でわらうのと、さはらぬ體に問かくれば、姫君何の氣も付ず、コ

し出す提燈火あかりに、ヤアこなたは絹川、アコレ〳〵、ヲヽ本に爰は絹川、ナコレ爰は絹川の堤、サ人目堤、ナコレ人通りもある此往還、何事も私が、アイヤサわしが此胸に、ナア爰でとやかう云と惡ひ、くはしいことはサ、くはしいこと金五郎に頼んで置た、によつていふと惡い、ノウ金五郎、さうじやないか、と此場を紛らす詞の端、心遣いぞやる瀨なき、二人が素振きよろ〳〵と、見すます金五郎唖を呑込、ハヽアヤコレ與右衞門、此女が今の素振、又我が其詞の端、コリヤとうでも我は、お尋の絹川に違ないわい、サア夫はさ、何と〳〵、問詰られて與右衞門が、覺悟の胸はすゑながら、打明て得心させ、一先此場を納んと、思案極て、ヤコレ金五郎、そなたを男と見込で頼むが、何と爰は一番わしを立てたもらぬか、トハ何事じや、サ成程おれは其人殺の絹川じや、ヲさうであらう、我が絹川なれば此女は、さつきに代官へ配付の廻つた、歌方姫とやら、うらない姫とやらじやな、アヽイヤめつさうな、さうじやない〳〵、イヤモ決してさうではないぞや、モかう尋常に人殺の絹川と名乘からは、何にも隱さぬ、サそなたを男と見込だ故、ヤコレ金五郎、何をかくそう此女は上方で、深う言交した女房じやわいの、アヽコレ夫はハテ偖モウかうなつては、此人に何にも隱すことはない、ノウ金五郎、アレよく〳〵おれを思へばこそ、マはる〴〵と此下總まで、ヲヽ慕ふて來た心底者じや程に、どうぞ、呑込んでたもらぬか、ムそりやはや友達づくのこと、さう打明て名乘そなたを、是非訴

此様に腹は立まいもの、是までわしに、鏡を見などいはしやつたは、かういふ顔を知らせまいとの志、ほんに〳〵其様にまでわしがことを、思ふて下さるかと、死る覺悟の其中でも、嬉しうて〳〵、拝んではつかり居たわいの、が今よく〳〵思ふて見れば、敵討を延して貰ふた、兄様への義理ばかりでわつたかいの、其義理も又忘れて、ソレ其様な美しい、女房を都へ呼にやり、わしに難題いひかけて、追出す心であらうがの、ヱヽこな様は、恨しい心ない人じやのうと、腹立涙はら〳〵と、思ひ違も一圖の恨、ムヽ偖は最前金五郎にいふた様子を、そなたは聞て居やつたか、ヲヽ何もかも聞た〳〵、サア夫聞やつたら、さう思ふも無理ならねど、アリヤ金五郎への僞りじや、何をかくそう此お方は、足利頼兼公と言號ある、おれが古主細川のお姫様じやはやい、疑はらして倶々に、都へ御供し、頼兼公と御祝言までは、コレお力になつてたもと、いひ聞しても聞譯ぬ、其魂は付まとふ、高雄が執心同性の、血筋の皮肉へ分入つて、姫に妬の執着と、夫婦の中を逆立髪、二ツに通ふうはがれ聲、イヽヤイヤ其言譯聞ぬ〳〵、まだ〳〵わしを賺すのじや、都に御座る頼兼様、言號の姫君が、此下總へ何しに尋てござるもの、サア夫はの、世上を知し召されぬ姫君、イヤ〳〵〳〵〳〵何にも聞ぬ〳〵〳〵、又其上に百兩の金、金五郎に借たとは何でいやつた、サア其入譯をとつくりと、打明なんだは思ひ違のおれが誤り、ヲヽ思ひ違したであろ、思ひ違せいでかいのう、コレこなたが可愛がる其女に、入る金

レハ〳〵しはらしい、ようこそ尋て下さつた、がさら〳〵さういふ譯ではない、自が戀したふお方はと、いはんとせしか後先を、思ひ廻して口籠れば、偖はといよ〳〵累が胸、燃立つ嗔恚を顯す面色、何じやさら〳〵さうではない、マさうではない、エヽこなたは〳〵のう、さつきにからの樣子はの、アレアノ稻村に隱れて居て、とつくりと聞たわいの、ようも〳〵はる〴〵の此下總まで、男を寢取におじやつたのと、はつたと睨む其有樣、ぞつと身の毛も露程も、覺えなき身の歌方姫、何と云出す言葉さへ、そゞろに震ふおろ〳〵聲、そんならこなたは、アノ絹川のお內儀かや、自は其樣な、恨を受るものじやない、必竟相いはしやんなや、エヽ此絹川は何してぞと、駈行き給ふを引戾し、襟際しつかと聲ふるはし、まだのめ〳〵と言拔て、夫の跡を慕ふのか、エヽ腹のたつ〳〵と、引廻し〳〵、引廻されて歌方姫、多くの人にかしづかれ、敬はれぬる御身の上、鄙の旅路を只一人、さまよひ給ふうき中に、思はぬ難にあはれとも、いふべき人も遠近の、彼より外泣ばかり、累は猶も齒嚙をなし、エヽ思へば〳〵憎い女、生置て我夫に、おめ〳〵と添さうより、殺して俱に冥途の道連、觀念しやと鎌追取る、光は稻妻與右衞門が、宙を飛んで駈戾り、ハツトばかりに累を引退、コハ何事と押隔たる夫の顏、見るより猶もせき立累、其儘夫にしがみ付、コレ與右衞門殿、エヽこな樣は〳〵のう、コレからういふわしが見とむない、顏形になつた故、愛想の盡たは無理ならねど、明していふて下さつたら、

勢の人を殺した絹川の谷藏は埴生村の與右衞門で御座りますと、代官所へ訴人して、二人ともに目憂を見せて腹いると、狂氣の如く駈出せば、驚く與右衞門姫君も、こは〳〵縋る袖袂、見るも腹立面憎やと、持たる鎌にて姫君の肩先すつはり、あつとばかりにかよはき御身、ハツト恟り氣は轉倒、もぎ取る鎌を放さばこそ、せり合て刄先は累が咽喉、流るゝ血汐に又恟り、コハあやまちし可愛やと、抱かゝへて介抱に、苦しむ中にも逆立面色、コリャわしを殺すのじやの、イヤ〳〵さら〳〵さうではない、コリャ怪我じやわやい堪忍せよ、イヤ〳〵殺すのじや〳〵、ヲゝ殺さば殺せ、とても添れぬ我身の上、死だあとでも此恨、晴さいで置うかと、哮り罵る黒髮を、手にからまいてはら〳〵涙、エゝ情ない因果じやなア、大切な姫君に、あやまちさせて御主人へ、どうも〳〵言譯がないわいやい、是程のこと聞譯ぬ、兼ての氣質ではなけれども、何をいふても魂は入かはつて、高雄殿の惡念が皆なす業、三ふ殿につがふた詞もあれど、主人へ言譯二ツには、所詮叶はぬ急所の痛手、我手にかゝつて死でくれ、去ながら、本心ならぬ女房を、殺すおれが心の内、どのやうにあらうと思ふぞやい、かう云譯とは露知らぬ、世間の人の口の端に、埴生村の與右衞門が女房累は、心も器量も惡女故、夫に殺され死だ跡、さま〴〵の仇をせしと、末々までも因果話を殘さうかと、夫が不便な可愛と、さしも丈夫の男氣も、愚痴に返りし恩愛の、涙累が物語、今に殘るも哀れなり、猶も燃立執着心、姫を〳〵と

とは知いでの、現在此わしは勤奉公に、身を賣うとまでしたわいの、エヽ思へば〳〵、我ために仇敵の其女、喰付ても此恨はらさいで置うかと、又駈寄るを取て引寄、エヽ是程に事を分て言聞すに、聞譯のないアノ爰な業ざらしめが、コレ累、なぜ其樣に物の道理を辨へぬぞ、トハいふものゝ、思ひ廻せば二人が因果、我手にかけし高雄殿の執着の、はれぬ不思議はそなたの内で、泊り合せた其夜のしだら、夫婦の中をさけんとて、面體ばかりかソレ足までも、生も付ぬかたわとなる、サ假令どのやうな見苦しい、顏形になりやつたとて、三ふ殿の志といひ、故郷をはなれてはる〴〵と、此下總の草の中、仕付もせぬ百姓業、不自由な世帶を苦にもせず、誠を盡してたもる心底、心の器量は昔の百倍、コレ何の愛想をつかさうぞ、コリヤとつくりと氣をしづめて、聞てくれ女房ども、まこと絹川谷藏が女房の累、本心五體の内にあるならば、此道理を聞譯て、姫君の御難儀といふ、此與右衛門が一生懸命の場所、恨をはらして倶々に、心便になつてたも、ヨヽコリヤ女房ども、心を付よ女房と、身にせまつたる切なさを、たもちかねたる男泣、心の内こそやるせなき、猶立去らぬ執念は、妬恨の二ツの角、生へ出るばかりの怒の顏色、イヤ何にも心は違はぬ、違ふたのはてなたの心、さつきにも其樣に、涙を滾して此わしを、誠しやかにだましやつたぞや、モウ其手はくはぬわいの、日頃はいとしい可愛と、思ひ込だ我夫に、欺されたと思へば、憎いのも又百倍じや、モウ此上は姉樣を手にかけて、大

が亡執忽に、恨の雲の雨晴て、もれ出る月によく見れば、昔にかへる累の顏、イヤ偖は此名號の功力によつて、高雄殿の執念も立去しよな、ハアいぢらしや可愛やと、立寄死骸抱しめ又今更のうき涙、コリヤ魂こゝを去ずんば、よつく聞女房とも、最前我を代官所へ呼付しは、姫君のことはや訴人せし者あり、首討て渡せとある、山名宗全より嚴しき云付、元の面體となつたる幸、そちか首を以て御身代りとし此場を濟して、密に姫君御供すれば、適れの忠義なるぞよ、ナコリヤ夫を未來の引導に、快く成佛せよと、鎌取直してかき切んと、思へど不便いぢらしや、眠れる如き佛顏、見るに目もくれ手もしびれ、骨も碎くるうき思ひ、小蔭にかくれし旅人が、今は絕かね轉び出、コリヤ絹川、首切ぬ内此兒に、たつた一目篤りと、暇乞させてくれとわつと泣聲、ヤア三ふ殿か、ホイ、はつとばかりに脇指を、拔より早く我腹へ、突立んとする手を押へ、コリヤ待て絹川うろたへたか、何で死のじや、腹切るのじや、何で死とは三ふ殿、恩と義理とにからまれた女房の累を殺し、何とてなたへ此顏が、のめ／＼生て會されう、放して死して下されいのう、ヲゝ尤じや道理じや／＼、がまん氣を靜めておれがいふことを聞やれのう、コレ絹川、お舘の樣子知らせたさ、又妹にも逢たさに、尋ね下つた此下總、最前爰へ來かゝつて、何にもかもとつくりと、樣子は殘らず見屆た、コレ微塵も恨と思ひはせぬ、皆是前生の因緣事と、おりや諦めてさつきにから、アレあの小蔭で念佛ばかりをなして居たわいの、

駈寄る累、ヱヽ是非に及ばぬもう是迄、苦痛助り臨終せよと、思ひ切て打込む鎌、かつぱと轉ぶ土橋の草葉、朱に染なす血汐の堤、ともにすべつてころ〳〵、頃しも秋雨降頻る、天のかなしみ目前に、敵同志を先生から、結び合した惡念かと、涙ながらにとゞめる鎌、無慘の有樣見捨るも、御主大事と駈寄て、抱きかゝへ介抱に、ふつと氣の付歌方姬、ヤアそなたは絹川、姬君樣スリヤお身にお怪我は御座りませぬか、さればいの、自も肩先から切れしと思ひしが、其後は氣を失ひ、何事も知ざりし、マ不思議なことゝ撫廻す、肌身に添し祐天の、六字の名號表具とも、斜に切しはコハいかにと、仰に與右衞門心付、ハヽア偖は常々御信心淺からぬ、祐天樣のお影故、御身にあやまちなかりしか、ハアありがたし〳〵、是に付ても不便やと、見れば女房が敢なき最期、ヱヽ早まりし是非もなや、赦してくれよ女房と、立寄る死骸、ヤアお內儀は殺されてか、ハ偖も〳〵むごたらしい、仕樣もやうもあるべきに、短氣なことをと御悔、與右衞門もせきくる涙、因果の道理と云ながら、兄弟ともに我手にかけ、殺す此身は何たる業、兄の三ふへの言譯は、姬君をお館へ御供をした上は、腹かき切て後から追付、コリヤ必々六道の辻で、待つて居てくれよと、死骸にひしと抱付、取亂したる悔泣、ことはり責て道理なり、歌方姬も共涙、我君樣を戀慕ひ、そなたを尋來た故に、いとしや敢果ない此有樣、せめて未來は成佛と、六字の名號死顏に、押當給へばこは不思議や、はつと飛去る一ツの心火、高雄

ひ込、是も浮世の因果か義理か、ノウ三ふ殿、サヽ夫も尤、こなたも〳〵と、みかき合ふたる男同志、互にかくす泣顔に、隠し兼たる涙なり、與右衛門はつと心付、コレ〳〵三ふ殿、此絹川は累か首、代官所へ持参せん、こなたは姫君御供して、片時も早う都の方へ、後より追付道筋は、コレ〳〵かうと耳に口、ヲヽ成程〳〵、そんなら妹が其首を、首尾よく敵の手に渡し、夫を功に人殺の、科をいひ抜け絹川殿、必早うと立寄て、責て累が此死骸、頼寺へと思へとも、事顕れては一大事、此絹川の名の絹川へ、未來は一蓮托生と、涙と倶に流しやる、水葬禮や兄夫、姫もとも〳〵手を合せ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀彌〳〵彌陀佛と、唱ふる聲や鉦の音、愛別離苦を今爰に、見捨見捨るうき別れ、逃のびたりし金五郎、いつの間にかは伺ひ寄り、姫を引立駈出す、がんづか摑んで引戻し、足下にしつかと跡付て、ヤア性懲もなき泥棒め、助留ては後の邪魔、ソレ、毒喰ば皿、ヲヽさらば、さらばの聲ばかり、別れてこそは急行く

第十

工匠の規矩曲といへども、物を素直になす、善政を興す事は、手を覆すより易しとかや、人は性善備りて、これを用れば善、用ざれば悪となる、井筒仁木が訴訟の趣、今日は山名が旅館に

京三界から此國まで、百五十里もある所を、もう五丁か三丁で、そなたの所へ落着今夜、こんな憂目を見るといふも、定つた因果であらうぞいのと、兄が悔に絹川も、重なる思ひに氣もうろ〳〵、すりや何角の様子を最前から、ヲイノもう出やうか〳〵とは思ふたれど、來る道筋も姫君を嚴しい詮議、高雄が恨で替し面體、其累をこなたの手にかけ、殺せば死靈は立去る道理、もしも元の器量になつたら、姫君の御身替とわしも思ひ付た故、たつた一人の妹を、見殺にするおれが氣は、マどのやうにあらうと思ふぞ、コレ絹川、恨もせぬ、悔もせぬ、昔の顔になつたを幸、姫君のお身替りに立、命全う御主人の、御先途を見屆けるは、責て妹が罪亡し、死だ後でのあいつが忠義、譽てやつて未來まで、女房と思つて月々の、命日逮夜に一遍の、回向をしてやつて下さつたら、わしも嬉しいあいつも又、外の千聲萬部より、悦んで成佛するであらうはいのう、可愛や早う二親には死別れ、おれを父親母親とも、思ふて成人するうちも、母があつたら縫針も敎て人にも笑はれまい、父があつたらかうもせうと、あいつが思はぬことまでも、思ふもかいの廻らぬから、不由自をさせた身の果は、生れ故郷の地を放れ、此下總の國へ來て、刄にかゝり死るといふは、よく〳〵因果な生れ性、コレ聞屆て最期をとゞまり、後弔ふてやつて下され、ヤ、コレ頼まする〳〵もせき上て、わつとばかりのくどき泣、姫はとかうも泣くづをれ、正體涙絹川も、死も死れぬ此場の時宜、現在女房を手にかけて、又身替と思

の悦び押かくし、帛紗に包みし小柄取出し、イヤナニ彈正殿、此小柄御存で御座らうの、ムヽ山鳥につゝじの彫、聊以て存ぜぬ、夫は格別、官領職の御前といひ、其上帯刀を戒む中へ、持參なしたる其小柄、上を恐れぬ不禮の品、早持て歸りめされ、イヤ彈正殿とぼけない、是こを倅女之助へ、汝が娘を婚禮の節、引手物の刀、拵へは山鳥につゝじの彫、コレ此小柄の模様も同作、藥法の秘書紛失の節、盗賊が打かけし手裏劔、合せて見ればしつくりと、刀に添しは此短冊、歌は則くらべこし、振分髪もかたすぎぬ、君ならずして誰かあぐべき、此歌を謎に解ば、娘と倅が縁を結び、汝が邪の魂と加擔せよといふ心のくらべこし、スリヤ兼若君毒殺の、工も違はぬ仁木彈正、サア此言譯はと差出せば、塲席紛らす高笑、ムヽヽイヤなに井筒殿、其刀は五月二十八日、茂左八が持參なし、親重代の一腰なれども、老さらばいし母一人、長病にて難儀いたす、本の寶は身の差合せ、人參代に求くれよと、只管の頼み故、武士の見捨がたく調て遣しなした、幸ひ娘が婚禮の聟引手、さい屈強の業物ゆゑ、添てやりしは心あること、夫に何ぞや此彈正を伺ふなぞとは、アヽ井筒殿嗜めされ、察する處左茂八めが、彼の毒藥の秘書盗取り、若君へ毒害をなしたる故、主人を討る天罪にて、自業自滅の悪事の報、其毒喰つてくたばつたは、不忠者のよい見せしめで御座るてや、己が悪事を其儘に、鸚鵡返しの受答へ、びつくともせぬ大丈夫、外記左衛門猶詰寄り、汝蘇秦張儀が辯を僞り、富樓那か舌を振ひても、

於て、黑白有無の評議とて、山名持豐入道宗全、大廣間に立出れば、隨ふ諸武士管領の、權威を白洲に徒士足輕、列を正して控しは、嚴重にこそ見えにける、取次の侍罷出、仁木井筒兩人の者、今朝より相詰罷あり、いまだ勝元公には御入なし、如何いたし候はんと相述れば、イヤ勝元には大內の御用につき、此席へは參らぬ筈、某一人にて取計ふ間、兩人とも早う是へ呼出せ、ハット答て表口、井筒外記左衞門政武、仁木彈正左衞門敎將、急で是へ出ませいと、聲に隨ひ外記左衞門、禮儀を糺す麻上下、つるゝ艾の直ならぬ、曲るいばらの仁木彈正、胸に針持顏色の、双方別つて相詰る、侍共立出て、イザ御兩人、官領職の御前なるぞ、作法の通り刀を此方へお渡しあれと、銘々刀を預れば、人を見おろす山名宗全、彈正に打向ひ、此程の評定には申開きさあるやうなれど、未しかと相分らず、又外記左衞門が願筋は、兼て申達せし、毒殺調伏の儀、申譯あらば、屹度返答仕れと、仰に彈正容儀を繕ひ、ハッ仰の通り、此間の三ケ條早速申譯立候處、又候二ケ條の難題、且以覺えなしと、いはせも敢ずぐつと睨付、ヤア主人を毒殺調伏などとまをすことを、外記左衞門もむざと願出べきや、ソレ井筒、證據があらば差出し、潔白に吟味をとげよと、打て替りし山名が詞、ハット嬉しき外記左衞門、座上を屹度見てければ、勝元の御出もなし、コハ心得ぬ宗全の、今の詞、偖は此程の裁判、評議の沙汰悪く、我と我身が恥しく、改たまふかかたじけなや、是も偏に若君の、御運いみじき印かと、心

持參せい、アイといらへもかいしよげに、おめる色なき月岡が、心曇らぬ名月や、只身の上をまつかひも、親の難儀と白木の箱、うや／＼しく持出れば、外記左衛門は件の箱、彈正が前に置、鷺を烏と爭ふとも、是ばかりは覺があらうと、蓋押明れは中よりも、其さも怪しき藁人形、惣身に數多の釘を打、箱の上に記したる、願主は則仁木彈正　サア此短冊と此手跡、言譯はあるまい／＼、尋常に謀反と名乘と、親子詰寄り詰かくれば、ちつとも臆せずじろりと見やり、コリヤあまり騷ぐな官領職の御前じやぞ、いかにも其箱は某が仕業、偖こそ／＼、スリヤ若君を調伏なすのか、イヽヤ此彈正を調伏なすのだ、何がなんと、ヲヽ不審尤、我若君の御身持、放埒だじやくを諫かね、君を諫て用ひなき時は、臣死との古語に基き、我と我身を調伏の人形、夫故に箱に書しは我姓名、外に願書の印があるかと、いふに娘が是父上、何ぞれかぞれ落度を見付、科に落さうとする工、殊に勝元樣の御出はなし、コレよう思案して御やりませと、遉女の氣は張弓、心の弦の一筋に、切もやせんと案じ居る、父はほく／＼打頷き、箱取上てホヽ夫よの、思ひ當ることこそあれ、唐土の建張といふ者、ろかんはうしやの藥を以て、せんだんの板に書付置、死後に及び湯をそゝぎしに、生害の内の遺書、こと／＼く顯せし樣もある、正にろかんはうしやの藥ならん、ソレ娘臺子の湯を持て來いと、父が指圖にわくせくと、臺子にたぎる湯を乞受、箱にそゝげと夫そとも、一字一點顯れず、偖は底をと打返し、かけても見ても知れざ

此詮議正して見せん、コレ此短冊は御身が手跡であらうがな、いかにも自筆、ヲヽ其詞がよい證據と、外記左衞門は手をつかへ、則此短冊が、謀叛の證據にまがひ御座りませぬと、いふに彈正是さ〳〵、其短冊を證據とは、イヤコレ外記左衞門だまりめされ、御覽の通りの老耄親父、イヤはや取所も御座りませぬ、先日よりまをすこと、是にて御推察下さりませう、取處なき老耄と、惡口雜言あざ笑ふ、耳にもかけぬ外記左衞門、懷中より一通取を出し、イヤサ彈正此一通覺あらんと押開き、此度毒殺の一儀仕果するに於ては褒美は望次第、やつさ茂左八殿へ仁木彈正、此短冊の筆跡と、寸分違ぬ此一札、サア是でも何とあらごうかと、うんとも云はさぬ手鏡に、さしもの彈正當惑の、詞もなしの返事まで、出もやせんと案じ顏、色目見てとる山名宗全、證據になるべき其一札、某とくと披見せん、サア是へ〳〵の詞に隨ひ、何心なく差出す一通、山名は心に一物の、短冊取上詠る片手、工の密書は火入の中、ぱつとふすぼる煙より、恟り仰天外記左衞門、ヤア證據になるべき其密書、火中なされし宗全樣、思召あつてのことかと目に角立れば、ヤア某に向ひ無禮の過言、證據といふ故披見なすに、火中なしたるなぞとは、何をいふ外記左衞門と、空嘯いたるとぼけ顏、スリヤ今の密書は、ヤア密書とは事おかしや、取に足らざる此短册、是が證據になる氣かと、白洲へ投出す傍若無人、短册取上外記左衞門、餘りといへば非義非道と、暫〳〵詞もなかりしが、お次に向ひ聲高く、ナニ娘月岡預りし品を

ム、聞えた、此程の取扱、宗全老衰いたした故、是程のこと不分明と、夫故の御入來かと、いへども勝元取あへず、イヤ此度の取捌きは、假初ならぬ天下の大事、いまだ中年の拙者、古老の山名殿、御評儀見分致さば、且は身の後學にも成べきと存ぜし故、今朝早々御用の筋相勤、押て推參仕る、御賢慮の程承はりたしと、物にさはらぬ柔和の挨拶、言葉も清き細川の、心の渠は大河なり、サテ〳〵御念の入た御挨拶、エヽ先達て毒殺の儀も、白とも黑ともいまだ分からぬ此裁判、去ながら外記左衞門めは不埒者、今日までをす儀も一ツとして分明ならず、サア外記左衞門、其箱に若君調伏のしるしがあるか、サぞうじやと、いはれてハツト頭を下げ、アヽイヤ證據とまをすは、只今火中なされし毒殺の密書、ヤア又しても〳〵老耄の繰言、此宗全何にも受取た覺はない、デモ只今の、サヽヽ何がなんと、其箱に證據があるか、サア夫は、サヽ何と、權威も高き山名が勢ひ、てつぺいくだしにきめ付られ、我身もひく〳〵水溜る、井筒が無念口惜さ、拳を握り控ゆれば、娘も共に萎れ居る、一言の返答もないは此程の裁許にも皆僞、イヤハヤ外記贔負のお方も、嘸殘念に御座らうと、何がなこする當詞、勝元はしとやかに、コレハ〳〵宗全殿の仰とも覺えぬ一言、假にも天下の政事を承り、理非明白を心懸、依怙に寄ず、贔負にかゝはらざることこそ、銘々の職と心得罷ある、此席の內に、誰か左樣の者あらんや、天下の邪を正す、役儀を以て邪を行ひ、或は時の權威によつて下を惠まず、已にへつらふ者を以て

れば、詮方なげに顔見合、父上、娘、大事の密書は火中をなし、又候や此箱も、正しく夫と知りながら、此場の證據とならざるは、我々が武運の盡、ヱヽ味氣なの世の中や、弓矢神にも天道にも、見放されしか悲しやと、悔歎に月岡も、涙にくもる一時雨、はれぬ此場のうき思ひ、弱身へ付込山名宗全、ヤア外記左衞門、箱に文字が顯れたかと、いはれて井筒が胸はとうづき、イヤサ斯まで試し見ますれども、文字は元より調伏の、證據となるべきしるしとては、ヤア無て此場が濟うと思ふか、イヽヤ左樣おつしやる宗全樣、裁判の筋が違ます、やゝもすれば肩持顏、最前の密書の譯も、と云せも立ず、ヤア肩持顏とは推參千万、夫引立よと下知なせば、外記左衞門はたまりかね、摑みかゝらん其勢、仕候の面々口々に、官領職に慮外あらば、若君の御爲ならぬと、聲かけられて外記左衞門、主君の爲とこたへる胸、傍にハア〳〵月岡も、無念に思へど詮方も、何と詞もなき折から、ヤア〳〵かた〴〵、細川修理太夫勝元、夫へ參り篤と吟味仕らん、先々控へめされいと、聞より親子嬉し顏、仁木山名と見合す顏、鳥なき里の蝙蝠が、はびこる中へ鳳凰の、現れ出し如くにて、何の音色も出ればこそ、靜まりかへつて控へ居る、細川修理太夫勝元、善惡邪正を取さばく、智仁は兼て人も知る、流石名におふ官領の、右の座にこそ押直れば、宗全はさあらぬ體、コレハ〳〵勝元殿、貴殿には今日大内の御用懸、夫故今日の評定も、某一人にて取計らふ所に、其御用を指置、又候此場へ御出は心得ませぬ、

さばよもや、了簡は致されまい、此上に何をまをさんも計られず、殊に某は近々本國へ罷歸る、べん〳〵と待ても居られぬ、縛り首にも行ふ奴、切腹とはまだしも武士の法、ソレ侍ども、老耄めに刀を渡せ、はつと答へて差置刀、證據なければ勝元も、押て留るに留られず、古老の權威を見せ付る、きつい山名を仁木が楯、煙草引よせ宗全が、煙もふとき工なり、わるびれもせぬ外記左衛門、肩衣刎のけ身繕、刀引拔く體見るより、娘はゐるにもゐられぬ思ひ、コレまをし父上、此場で御生害わらずとも、あなた方の御怒を、どうぞなだむる御了簡はないかいなア、エヽ餘りじや宗全樣、たつた今の其密書、知らぬとは大膽な、御家のことを思はずば、女でこそあれ此月岡、恨をはらさで置べきか、とはいふものヽ、其箱故のお咎なら、持參いたした私、どうぞ父の代りに此月岡、罪に行ひ下さりませと、忠と孝とにかきくれし、涙交りのくどき言、ヤア見苦しいよまい言、老ひさらばいし外記左衛門、腹かつさばきて死るとは、また冥加に盡ざる某、思ひ切て歎きはせぬ、儕も武士の娘でないか、卑法未練な外記左衛門と、人々に笑はせるか、留立すると勘當じやと、刀引拔中卷の、神も佛もなき世かと、有にもゐられず月岡は、コレまをし父樣、スリヤどうあつても御生害、くどい〳〵、さは去ながら伜民部、關東より歸國せば、我切腹を云聞せ、御名を雪ぐべし、モウ是までと突込刀、心も空に月岡が、詮方涙に只おろ〳〵、白洲の方騒しく、駈込む渡邊民部之助、父の有樣見るよりも、はつとばかり

是を助け、已が疎き者をば理を非に落さんとする者あらば、誠に是こそ天下の大罪人、立所にて某が、首を刎て獄門の木に曝さんものと、尻目にぐつと仁者の目の内、見すかす詞に宗全は、色をかへて閉口す、勝元白洲を詠めやり、コリヤ外記左衛門、われはマア何を狼狽たぞ、悴民部も近く歸國致すでないか、夫を待て何事も、兩人にて相談すべき所、尤時日を移されぬことながら、性急もことによる、先日よりも對座なす此評議、今日慥な証據差上し所、火中なしたる何ぞとは、コリヤ宗全殿を誰とか思ふ、當時官領の出頭、何にもせよ直に手渡なんぞゝは、不禮とや云はん、ハテ麁相千万、事を企んと思ふものは、密計はどこして人を惑はすといふ所へ心の付ざるか、其方が落度は、兼若丸の落度となるが、ヱヽ爰な不忠者めがと、口には呵れど心には、老の一徹殘念やと、思へどいはれぬ此場のしぎ、外記左衛門頭を下ハツ勝元公の凛々たる嚴命に恐入、若君調伏の證據ともなるべき品を持參致せど、邪心の謀計深く、現在の證據を取れ、夫と分明ならざるによつて、某が落度となり、返つて主人の御爲にもならず、取所なき不忠の某、申譯には此皺腹、何卒仰付られ下さらば、武士の冥加ありがたしと、低頭平身願ふにぞ、仁愛深き細川勝元、コリヤ〳〵外記左衛門、何をいふ、今いふ通り、いまだ渡邊民部も歸國なさず、一兩日は延引申付る、ナソレ顔の筋あらば申て見よ、ヤ勝元殿手ぬるし〳〵、某に向ひイヤ密書を火中なし何ぞと、まをしかけ致す老耄、貴殿に對して斯樣の慮外をまを

調伏をなしたるとの一言、汝足利家の執權職ならずや、主人より高祿戴き、何不足なき身を以て、已が身の調伏を、サヽヽ何として祈りしぞ、サア夫は、兼若の調伏か、サア其儀は、サア何と、主を補佐するは執權の役、賴兼が惰弱も皆汝等が誤、夫故アレ外記左衞門は切腹を致したはい、假令いか程の落度あるにもせよ、武士たる者のなせ切腹はつかまつらぬ、人を呪ひ家を亡さんと、神をこらしめ調伏なさんには、願文なくては納めがたし、何にもせよ其箱、ソレ民部之助、とくと改め見よ、畏つたと立寄る箱、中には以前の人形ばかり、外に怪しき物見えぬをさす、ムヽ、スリヤ其藁人形は仁木彈正、目前我が親の敵、此小柄を以て父が鬱憤はらせよと、仰に民部は實誠、存念立ず父は切腹、晉の豫讓は衣を裂く、我は目の前父の敵と、小柄片手に人形の、只中すつかりかき切て、ヤコレ〳〵親人、時日をうつさず詮議を遂、惡人をもをまづこの如くにと、かしこへ投付、歎を見せぬ勇氣の有樣、勝元はじろ〳〵見やり、ヤ、コリヤ待々民部其藁人形是へ持、ハット民部か取上るを、夫はと立寄る彈正を、突退け御前へ差上る、とつくと詠め切口より、引出す紙は怪の願書、偖こそ〳〵工んだり、是こそ兼若丸調伏の願書、仁木彈正敎將、是に增たる證據やわらん、民部之助是を以て實否を糺せ、サ早う〳〵と投出す、ハット悅ぶ民部之助、手負の傍へ走寄り、コレ親人お悅びなされませ、斯る證據の出る上は、犬死では御座りませぬ、ヘエヽいまだ武運に盡ざる所、コリヤ〳〵妹悅べ〳〵、ア

にどうと伏、歎のうちにも悦ぶ妹、手負は見るより、ヤ悴民部之助、ヲヽ待兼たはやい、ハア御存生の内歸國いたし何程か、ヲヽ我も大慶〳〵、ヱヽ證據がなくて殘念、口惜いはやい、ハア委細はわれにて承る、是期に及び申上る詞もなしと、無念悲しさこたゆる淚、宗全聲かけ、ヤア汝は渡邊民部之助、井筒外記が願の場所、此方より沙汰もなきに、歸國早々大切の場へ罷出るは、上を恐れぬ慮外者、アレ家來とも引出せ、畏つたと立かゝる、コリヤ〳〵待と押留め、イヤナニ宗全殿、訴へもなく是へ出しは渠が誤、併し親子一生の別れ、了簡をして遣れい、コリヤ民部、願の筋もあらば、苦しうない申上い、ハアヽ仰かたじけなし、先達て親外記左衛門より書中の知せ、今日關東より歸國いたす所、此程度々の御評議、今日は有無の御裁判と承り、夫故參上仕る所に、親ども生害と承り、眼くらみし不禮の段、眞平御免なし下され、此上拙者に仰付られ、今一評議御願、としとやかに相述る、ヤアならぬ〳〵、今日黑白相分り、目前にて外記左衛門切腹なす上は、科は外記左衛門に極る、彈正は申譯立たといふもの、殊に汝は關東へ罷越、此儀に於ては何も知まじ、外の願はかなはぬ〳〵と、いふを制する勝元が、イヤ〳〵山名殿、民部が願はかなはぬにもせよ、まだ評議が殘りました、ヱヽ失禮ながら御覽あれ、ナニ仁木彈正、汝にも科がかゝつてあるぞ、コハ勝元公の仰とも存ぜぬ、申譯立し此彈正、ヤアいふな敎將、最前月岡が持參せし奉納の箱の表に、願主仁木彈正敎將としるす、我と我身の

利の家は礎堅し、猶此上某も、よきに取なし致すべし、イヤコレ勝て甲の緒をしむるといふ諺、何かに心をナ付られよと、始終を氣遣ふ勝元の、仰に民部はありがた涙、並居る諸士も打連て、一間へこそは入にける、こたへ〳〵し月岡が、死骸に犇と取付いて、わつとばかりに泣出し、忠義とは云ながら、情ない此生害、お留まをすことさへならず、責て悲しさ泣たさも、官領職の御前ゆゑ、今までこらへて居たわいのう、武士の種とて同じ人、現在親の切腹を、兄弟傍で見て居るとは、是も誰ゆへ彈正殿、ヱヽこなたは〳〵のう、アノマア素知ぬ顔わいの、ヤヽよく〳〵因果な我々と、くどき歎けば民部之助、彈正が前くひしばる、胸に涙を押へかね、兄弟ぞうと伏沈む、心ぞ思ひやられたり、彈正は最前より、空うそふいて居たりしが、何思ひけん兄弟が前にさしより、イヤハヤ御兩所の歎き察しまをす、併し此陰謀も某一人の企でもない、マダ外に屹度した一味あり、夫故最前御親父の切腹も、心に思へど留もならず、イヤモ天晴親も親なり子も子なり、人は死て名を殘すとやら、某も向後心を改め、忠勤の勵みまをさん、ナント貴殿宜敷取なしまをしておくりやれまいか、其證據は是此一味徒黨の連判を見せまをさんと、いふに民部は心をゆるし、改るに憚ることなしとやら、仁木井筒は代々の執權職、右申さるゝが實心ならば、ドレ其書物拜見いたさう、ヲヽ是を見やれと懷中より、投出す一卷取上て、開く油斷を彈正が、觀念ひろげといふ間もなく、隠し置たる懷劍を、拔手も見

イ〳〵さうで御座んすとも、是々父上お心を慥にと、呼ば苦しさ打忘れ、ヤ何といふ、若君諷伏の願書出でたるか、我存念も相立しか、エヽ嬉しやナア、といふも次第に老木の枝、折てあの世へ落入親、コレまをしと駈よる妹、押ゆる民部は涙をかくし、彈正に打向ひ、サア此願書覺あらん、七日が内に御命を奪はんとの文言、のがれぬ所サア白狀、いかに〳〵と詰寄れば、さしもの彈正眼血走り、無念の拳に持たる扇、工の要もばら〳〵〳〵、返答もなく見えにける、勝元仁木をはつたと睨付、ヤア人非人の分として、卑怯詞を飾り、已が罪をかくさんとする、コナ不敵の國賊、最早言譯あるまい〳〵、イヤナニ宗全殿お聞の通り、仁木彈正が罪明白の上は、急ぎ罪科に仰付らるべしと、のつ引ならぬ證據の宗全、イヤまだ罪科には行はれぬ、そりや又何故に、ハテ一應も再應も拷問に及び、彼が口から白狀致さぬうちは、ムヽ斯まで罪に服する彈正、拷問なぞと手延にめさるゝ、宗全殿の御胸中、何とやら心得まをさぬ、左樣なされても天下の法が立ますか、サア夫は、何と、エヽどういへばかういふと、何ぞといふときめる人、成程慥な證據あれば科人はマア彈正、が併しかれめは足利譜代の侍、武者所へも召さるゝ敎將、殊に義政公へも申上、其上科は申付ん、某が舘に置ば籠の鳥、まだも彈正、願あらば願ふて見ん、ナ民部之助、イサ勝元殿奧の間へと、いふに否とも細川が、深き情を隔る境、疑しくも立上り、ナニ民部之助、老父の愁傷察し入る、去ながら、かやうに工露顯の上は、足

付られ下されと、禮儀を乱さぬ丈夫の手負、苦しうない是非〳〵との給へば、辞退は却つて無禮の至りと、両手を上て押戴き、冥加もこぼるゝ手もふるふ、妹が持添へ介抱に、ぐつと一口又うんと、倒るゝ兄をかき抱き、ヤアコレ〳〵兄様のう〳〵、ヲヽ〳〵イヤ何の是しきの淺手、若君の御先途見屆る其中は死ぬ〳〵妹、アイ〳〵さうで御座んすとも、弟も親も皆先立、便りに思ふ兄様まで、此有様はヤアめろ〳〵とよまい言、コリヤ勝元公の御傍近うは憚かり、民部之助は最早退出仕らうと、常にかはらぬ式禮目禮、世にもあはれと勝元が、イヤ其儘の歩行心元ない、ソレ家來共乘物持、はつと答て舁据れば、わりかた涙身に餘る、下しめ解て疵口を、しつかと締る妹が氣轉、深手を厭はぬ民部之助、刀を杖に立上れば、コレノウ兄上待給へ、ソレ其深手にてどうマア屋敷へ歸られう、御乘物に召ませい、イヤ〳〵御台命の御前憚多し、親人の亡骸を、よき様に取片付、我は只此儘に、イヱ〳〵夫でも其弱り、たわけ者め、民部之助性根はたしかじやぞ、今日は如何なる吉日ぞ、足利のお家萬代當久の門出なれば、妹目出度一さし舞んと、さしも血汐に紅の、扇ひらいて聲をあげ、一張の弓の勢たり、東南北西の敵は安々と、よろぼい〳〵はつたりと、轉ぶを抱る月岡が、滾す涙に水増る、與ひは同じ細川も、長居は却つて悪かりなんと、其座を立て歸らるゝ、見送る勇者、見かへる仁者、表に泣ぬ兩人が、心絞るゝ裏門口、なく〳〵伴ひ出て行く、始終の様子奥よりも、大江の圖幸鬼行忍び出で

せず切付る、其儘そこゝ倒れ伏す、ヤア欺し打とは卑怯者と、月岡すかさず死骸の刀、取らんとするを彈正が、手練の當身にうんとばかり、危くも又無慘なり、彈正は一人笑、ハヽヽヽいらざる親子が忠義立、此くたばつた樣わいの、此奴らを片付れば、けぶたい奴は勝元ばかり、先こいつらが止をと、劍懷逆手に立寄て、突込切先白洲にぐつしやり、起る間切る間とたんの柏子、肋をかけて切付られ、尻居にどうとめくるめき、合もすかさず切付れば、心得下より突かける、彼方を突ば此方も切れ、修羅の街にことならず、忠臣こつたる念力にや、難なく民部彈正を、取つて押へて止の刀、エヽ嬉しやとばかりにて、前身も倶にたぢ／＼、音に氣の付月岡が、起上つてヤア兄樣、是いなアお心を付て下さんせ、コレ／＼なをし兄樣、コリヤマアどうせう／＼と、途方涙に暮れ居たる、一間へ聞えて細川勝元、白銀の器うや／＼しく、手負の傍へさしより給ひ、ヲヽ出來したり民部之助、斯る忠義の武士を、家來に持し兼若、いみじき果報といふべきや、又拙といふべきや、同じ祿を食みながら、重恩の家を改役させんと謀む彈正が今の死樣、夫に引かへ汝等親子が忠誠、ホヽ天晴／＼感じ入、物の數にはあらねども官領の列を穢す細川修理太夫勝元が、コリヤ藥湯を與ふるぞ、暫の苦痛を遁れよと、涙片手に差出し給へば、やう／＼心付けるか、民部は苦しき息をつぎ、コハ有難し／＼、官領の御手づから、藥湯を給はること、冥加に餘る身の仕合せ、去ながら、血汐の穢れ恐あれば、只仰

お手柄荒獅子様、様子は殘らず承る、勝元公の御計いにて、惡人どもは一々に、からめ取て糺明、お家は萬代不易ぞと、勇立たる忠義の若者、皆一同に悦びの、聲も豊に竹の葉の、榮え榮ゆる繁昌は、神慮にかけて祈るなり

邊を詠め、事露顯の上は我身の上、兼て宗全と工の通り、館の奴原皆殺し、心がゝりは勝元め、遠くは行くまじ打て取らん、軍勢集むる我密計と、有合ふ火入おつ取て、目あては庭の繁みの松、枝にあたれば合圖の狼烟、四方に合する貝鐘太皷、天のこがせる提燈松明、夥多の軍兵集りしは、稻麻竹葦の如くなり、鬼行は動き出て、ヤア〳〵者ども、是より直に細川を、追駈て討取べし、我は諸軍を引卒し、室町へ押寄て、兼若を人質に支ゆる奴原討取らん、いそふれやつといふ間もなく、書院の椽側はつたりと、板敷疊めり〳〵〳〵、ぐつと下より押上る、恟り轉ける鬼行が、コハ何事と取付疊、兩手にぐつとさし上て、顯れ出しは實誠、荒獅子男之助重勝、邊を睨んで立たるは、天の岩戸を手力雄の、其神力も斯やらん、鬼行は色青ざめ、コリヤ〳〵者ども、今下より顯れしは、あうんの仁王の宿なしか、但は地震の幽靈か、何にもせよ討取と、いへば重勝打笑ひ、外記が切腹民部が忠義、聞より忍ぶ椽の下、後の祭の鬼行め、儕も地獄の使にやると、板敷ぐるみに打付れば、夥多の軍勢打倒され、惣身は疵のひどい目に、大江の圖幸鬼行は、痛さこらへて大聲上、手に餘らば鎗ぶすま、大勢寄て打て取と、口は達者に軍兵の、肩にかゝつて遁げて行く、かしこまつたと取卷奴原、掴んでかしこへ人礫、凄じかりける勢なり、荒獅子が勇力に、夥多の家來もちり〴〵ぱつと、秋の木の葉の吹散るごとく、近付者もなかりける、斯る處へ絹川は、姫君の御供まをし、鬼行に繩をかけ、中に引立て驅來り、ハアヽ天晴

石田詰將棊軍配

作者
万象亭
隅田喜四郎
中田林七
芝叟
双木千竹
松鬼眠

說苑に曰く、國の興らんとする時や、天賢人と極諫の士とを與へ、國の亡びんとする時や、天亂人と善諛の者とを與ふとなん、古人の金言宜なるかな、右大將頼朝公、天の時待て出龍の、土中を伊豆の石橋山、チロシ「鋭き剛鐵薙拂ふ、鎌倉山に殿造り、時めき給ふ御身にも、遁れ給はぬ有爲無常、正治の春の露霜と、物換り星移りたる二つの年、御一周忌の佛事とて、幕打紫えし御廟の前、法華堂の住僧、岩國院の雲海長老、胸に我慢の緋の衣、袈裟引纒ひ床几に凭り、施行の下知ぞ喝呼がまし、長老下部に打向ひ、イヤナニ者共、今日は先君朝頼公の御忌日とて、後室政子御前、御幼君頼家公諸共に、當時の出頭石田の判官爲久殿を御供にて、朝疾くより御參詣付ては御追善の施行として、鎌倉へ立入る所の非人乞食の者共に、鳥目一貫文宛下し置か

伊達競阿國戲場 終

ばかり、手ざしもやらず立上る、長老聲かけ、コリヤ〳〵侍浪人、お上から下さる其鳥目、有難いと三拜して頂戴を致す筈、其儘打捨て立歸るは言語道斷、コヽナ物知らずの浪人め、ときめ付くれども少しも騷がず、イカニモ此錢氣に喰はぬ、ハテ何故とお云やれさ、斯く貧窮に落ぶれたれども、今にもわれ志を得るときは、軍配取て諸軍の懸引、一方の旗頭と仰れんと存ずれば、穢い汚い下主下郎、町人風情同然に、此青緡の繋ぎ錢、取上る腕はおりない、頼朝公の御佛事、施行ありと聞くよりも、哀れ古今の名將の、御供米の餘りなりとも、申受くるものならば、鎌倉殿の御扶持と存じ、なんぼう大慶なるべきに、存の外なる體たらく、あたら贅足引たるな、と袖打拂ひ行かんとす、雲海長老ぐつと急き立、ヤア憎いぬかしざま、ソレ討伏せよ、と下知につれ、畏つたと下部ども、棒打揮つて立かゝれば、シヤ小癪なる蛆虫め、と云はせも立てず左右より、一度に蒐るを扇のあしらひ、苛つて打つを手練の手並、長老聲かけ、手ぬるし〳〵、手向ひなさば打捨てよ、承る、と拔翳し、我討止めんと犇めいたり、ヤレ待て暫時雲海長老、早まるな者共、と聲をかけて立出る石田判官爲久、麁忽なる家來共、皆退け〳〵、ハアはつ、と恐れて下部共、皆々彼處に平伏す、爲久素袍の袖掻合せ、最前より小蔭にて、具に聞いたる詞の道理、殊更只者ならざる今の働、ホヽウ奧床し頼もしゝ、然りながら、徳を韜み光を隱す、滄浪の水に纓を洗ふは性を養ふ一つならんが、イヤ侍の上に無い事、袋に入つた

れんとある上の御意、早呼出して相渡せと、傳ふる下知の下役人、ヤア〳〵門外に控へたる乞食共、御施行の鳥目を下し置かるゝ、疾う〳〵出て受取り候へ、ハッ、と答へて這出る、思ひ深草少將ならで、片輪車の躄こそ、足の痛にさりとては、小まちまするとロ合も、戴く錢の追從は、彌陀の光に劣らめや、其誓願は四十八文、五十九十陸路をちんがちが、山でも坂でも足曳の、びつこの乞食が受取りしは、どうやらお足が短うて拔けはせぬか、とぶつ〳〵と小數讀み〳〵突く杖に、八十の衢は分れども、清光を見ざれば時の移るをも辨へぬ、癩病やみの盲目に御法施あれ、と乞ひければ、ソレ、と指圖に鳥の目を、指貫きし青緡は、是ぞ盲の貫緡や、其位山貴きは雲の上人、賤しきは薦を敷寢の緦人は、彼片岡に打臥せし、達磨の化身か、さりとては怪訝な形ぢや、と笑ひける、跡へ門並彈語り、誰も手の内破布子、肩裾結んだ乞食の、嚊が娘かいと可愛らし、三味線のてんと上駒くつきりに、氣も上調子足輕が、志かや袂より、添へて遣るのも美目による、三十二銅と知られたり、其外あやとり金輪切、放下の類に至る迄、皆々施行給はれば、片手に涙片手には、勿體ながら御回向、誓に洩れぬ阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と伏拜み、門前指して出て行く、侍の尾羽打枯れて寄邊なき、漂泊の身の素浪人、笠傾けて立留り、今日は先君賴朝公の御佛事、御執行ありと承りはる〴〵推參致せし者、御施行に預らん、と慇懃に相述ぶれば、作法知らざる下部共、ソレ戴け、と投出す青緡、尻目にぢつと見た

直様屋敷へ立越えて、身が退出を相待つべし、者共路次の案内致せ、ハッ、と答へて勝武が、紙子羽織も今の間に、心呉郡の綾錦、古郷にわらで爲久が、屋敷へこそは急ぎ行く、人音なければ石田判官、ナニ雲海長老、貴僧も兼て知らるゝ通、當時天下の一老たる、北條遠江守時政は、蒙古退治に彼地へ發向、和田は後詰の加勢として、出陣なせし其後は、自然と天下の政道、畠山重忠が手に屬し、譜代外樣の面々は、有れども無きが如く、皆偏執の心を懷くは、我大望成就の時節、諸士に勸めて内亂起させ、重忠を無き者にし、我一天下の大老となり、終には頼家ばい込んで、將軍の職に押ならんと、思ひ立つたる密事の根組、政子の方の御前をも、惡ざまになしたれば、疎ませ給ふ女の淺はか、此程重忠所勞とて、今日廟參をもせざるこそ、彼奴氣取りしと覺えたり、然すれば事を手延にせば、我計略の顯れんと、思ひ付いたる一儀あり、長老近う、と耳に口、ムウム、面白し〳〵、然らば愚僧は御兩所に、右の次第を申上げ、御用意せさせ奉らん、と頷き囁き入る間もなく、御譜代外樣の大小名、參詣さふ、と取次が、呼はる聲の下よりも、大紋の袖さはやかに、出仕の綺羅を春風や、初音は藪の竹の下、法はけ木村土井稜谷、稻毛の三郎兒玉の一黨、其外譜代外樣の面々、列を正して相詰むれば、判官爲久一揖し、ホヽウ打揃ふての御參詣、イデ此旨を言上せん、と幕の前に謹んで、政子御前へ申上げ奉る、御廟參の面々、何れも御前に相詰め候、御對面あるべしと、引絞る、幕の内にはコ

弓を張り、鋒に納めた劍を振ひ、主取致す所存はなきやと、裏問へば、此方も詞を改めて、コハ冥加なき御諚を蒙ふる、御覽の如き見る蔭もなき素浪人、主取を致せとは、御吹擧下さる御所存よな、然りながら些存ずる胸あれば、假令高祿賜はるとも、主人に依りて望まぬ某、又小地たりとも望んで仕ふる主人もあり、何れの道仕官には望ある某、迚もの事に主人の姓名、仰聞けられ下さるべし、と實に頼もしき一言に、爲久猶も威儀を正し、ホヽッ道理なり至極せり、主人と云ふは外でもなし、不足ながら此爲久、某が片腕と頼まれて呉れられんや、若も得心あるならば、所領は即ち一萬石、赤澤山にて知行せん、ナント頼まれ呉れられうや、返答聞かん、と他事なき詞、ハッ、とばかりに笠脱捨て、物數ならぬ某を、斯程に迄の御懇望、殊更當時の出頭たる石田判官爲久殿、主人に取つて不足なし、何かは違背致すべき、志賀左膳勝武を召仕はれ下さるべし、弓矢取つての事ならば、如何樣な儀なりとも仰付けられ下されかし、凡兵術の事に於ては、孫呉が奧義も胸に湛へ、誰恐ろしくも候はず、少しも氣遣ひあられな、と事もなげなる大丈夫、扨こそ石田判官に、過ぎたるものが二つあり、志賀左膳と唄はれしは、此勝武が事なりけり、手持無沙汰に雲海長老、コレハ〳〵左樣とも存ぜず、先程より無禮の段々、石田殿とは入魂の拙僧、以後は互に御別懇、それは此方とても御同然、コレハ〳〵、と互に一禮事終れば、爲久喜悦の眉を開く、早速ながら其方に、申談ずる事あれども、何を申すも人近し、

はぬとは何を以て、ハテサテ知れた事、重忠殿は天下の大老、官位と云ひ器量と云ひ、殊更四相を悟る名將ぢやござりませぬかえ、附從ふ面々は、本田榛澤由井なんど、一騎當千の侍衆が附張つて居やしやる所へ、新酒の醉の頭がち、分別もなう切込ましやつたら、飛んで火に入る夏の蟲、危いものぢや、と擬笑へば、シャ憎いほざき事、門出の血祭放し討、オヽ合點、と駈寄るを、石田制して、ャア待たれよ方々、最前より伺ふ所、盲ながらも適れ曲者、察する所一の谷合戰の砌、智重忠と攻口の遺恨に依て、軍中を立退き面體姿を變へ、折を窺ふ大江の兵部廣元殿と、サ見たは僻目か、よもや違ひはあるまいがや、と星を指されて詞を正し、ホヽ有繋は爲久能く見られた、貴殿推察の通、過ぎつる頃の戰に、我攻口を重忠に拔駈しられ、男に耻辱を與へし重忠、其無念止む事を得ず、何卒重忠を討取り此耻辱雪がんと、荒炭にて聲を嗄らし、膝を以て面體變へ、心を凝らす僞癩病、折を待つたる効もなく、兩眼つぶれし口惜さ、拳を握る時に幸ひ、只今小陰に立聞せし、重忠追罰の御企事、荒立つるものならば、彼が恩顧の東國勢、鋒を負うて馳集り、事を起すは必定せり、只今よりは穩便に、謀を帷幕の内に廻らし、彼奴を討取る計略は、我方寸の内に在り、此大江にお任せあらば、兩眼は盲いたりとも、軍書に曝せし眼瞳、明り走りて調略せん、石田の判官爲久殿、と實にも名に負ふ谷川や、深さ軍慮は比類なし、爲久殆ど打笑み、ハア時なるかな〳〵、軍術名うての廣元殿味方あるものな

ハ如何に、思寄なき頼家公、丁稚姿の木綿物、御母君は前垂に、置手拭もかいしよげに、一つ竈の釜の前、餘の事に人々は、悔り仰天呆れ果て、暫時詞もなかりけり、母君御聲しとやかに、自が此姿、人々は嘸不審ならん、我夫兵衛佐頼朝公、未だ左遷の御徒然、蛭が小島の茅屋へ、忍び〳〵の御宮仕へ、或は飯炊き水を汲み、盡す心に愛で給ひ、冥加に餘る御情、御臺所とかしづかれ、今の榮躍の身となりし、昔知つたる庄司重忠、自を輕しめて蔑に思ふより、頼家を主とも思はず、我意の擧動あることは、判官が注進にて具に聞きし此政子、終には重忠に隘められ、此子も妾も今の間に、斯かる姿と成果ば、心の内の口惜さ、推量せよや人々と、涙は淀の片瀬川、袖に堰き兼ね給ひける、諸士に擢で孫八左衛門、イカニモ御前の仰に違はず、重忠が大老顏、打捨て置かば威勢に誇り、如何なる事をか仕らん、君の病の根を斷つ爲、是より我々重忠が、屋敷へ押寄せ打果さん、と勇立つたる血氣の若者、爲久爰ぞと心の笑壺、ホヽ潔し〳〵、後詰は某仕らん、早急がれよ、と勸められ、眞帆に追風の逸男共、追取刀て駈出す所へ、ヤレ旦那方お待なされませ、と聲をかけ立出る以前の盲目、杖を力の探り足、ヤア何者かと思ふたりや、癩病盲の胴乞食め、待つたは何故なぞ留めた、アヽイヤサそないにお急きなされますな、斯う申すは慮外ながら、所詮お前方のお手際で行く重忠殿ぢやござりませぬ、大きな目に逢ふより入らぬ事ぢや、と云はせも立てずぐつと睨付け、ヤア案外なる癩病め、手に合

庄司重忠、大紋の袖袴かに、威わつて而も猛からぬ、寛仁大度の御粧ひ、ハツ、と敬ひ奉れば、ヤヨ近經、重忠出仕の道すがら、穩便にこそ致せよと申付け置きたるに、尾籠の働き差控へよ、君命じて召す時は、駕を待たずして行く急ぎの御用、皆供せよ、と宣ふ所へ、幼君の御傅片岡造酒頭春久、慌しく馳來り、重忠公候な、今日の御出仕は以の外の事に候、去ぬる頃法華堂にて、大江の兵部廣元を召抱へ給ひしより、心を合す石田が謀計、今日御殿に組子を伏せ置き、貴君を討たんず術等が手配、御急病と仰立てられ、是より御歸宅あるべし、と密々聲に訴ふれば、重忠甚だ御悦喜あり、日頃の入魂に危急の注進祝着せり、然りながら身に誤のあればこそ、政子御前の御憎しみ、不忠なる時は刑罰加はると、忠經の本文目の當り、いでや御前へ罷出で、臣が過失糺さんず所存あれば、一人も供叶はず、是より屋敷へ立歸れ、早う／＼、と追立て遣り、行かんとし給ふお袖に縋り、危きに臨まざるは君子の徳、平更御出仕御無用、と留むる兩人振拂ひ、見返りもせぬ誠忠は、天の感應佛神の、應護もなどや無かるべき、後に二人は顔見合せ、ナント近經、打捨て置かれぬ御大事、和殿は直樣御跡慕ひ、館の虚實を伺はれよ、案内知つたる某は、御所の裏より忍び入り、スハ事こそと見るならば、中門口より由井が濱、早船にて御供せん、ぬかるな近經、合點ぢや、と左右へ別るゝ忠臣義士、頼もしかりし三重次第なり、鎌倉御所の廣椽に床几立てさせ石田の判官、其方の方には大江の廣元、庭に並居

らば、頼家公の御代萬歳、お詞あられよ政子様、と勸め申せば御母君、今日只今改めて、大江は味方の軍師となし、又石田の判官には、預け取らする此裁判、是ぞ諸軍の司の印、逆臣庄司重忠父子を亡ぼす術頼むぞよ、と仰は重き天下の亂、豊に富みし鎌倉の、亡ぶる基ぞ是非なけれ、二人ハアはつ、と領掌の、時も黄昏雲海長老、早御歸舘と促せば、皆供せよ、と幼君の、上意は重く身は輕き、竈將軍前垂に、飯炊姿の御母君、引添ふ大江が襤褸の褞袍、供奉は大紋緋の衣、水ふりの練物見る如く、取合せたるお供立、歩路を還御なり給ふ、暫時治る鎌倉山、御舘を指して三重

第二

ヤア畠山の重忠公、鎌倉御所よりお召に依て、御出仕の大下馬先、面を隠せし曲者共、物をも云はず無法の狼藉、苗字を聞いては目を廻し、名を聞いては夜泣も止まる、本田の次郎近經が守護なすからは、めゝしやてめらが及ばぬ刃向ひ、道を突開いて通しやがれ、と十里に響く大音聲、シヤ吐したり本田瓜、根腐り命の六皮半、しやつぷり云はして呉れんず、と茅の穂先事ともせず、引寄せ〳〵投付けられ、叶はぬ赦せ、と逃散たり、ヤア逃るとて逃さんや、イデぼつかけて鏖殺し、と勢込んで駈出せば、ヤレ待て本田、と乗物の戸を押開き、出給ふ畠山の

たる後蔭、得こそはやらじと飛蒐る、途端にどつさり素股の鐵砲、燻り返る二人が最期、庭先屹と目早き重忠、ムヽ透垣の蔭なるは、舊玉の次郎候ナ、狼籍者を打止められしは神妙にこそ候へと、先を取られて今更に、じつと消えたき種が嶋、こそ〳〵と逃げて行く、重忠近邊見廻し、片岡が云ひしに違はず、佞人輩が調略にて、身を失はん結構ナ、天道誠を照し給へば、何程に計るとも、いかでか凶事のあるべきや、少しも恐れず奥御殿、薄氷を踏む疊の海原、胸の大海廣書院、ハレ心得ぬ御調度掛に、かざされし陰の弓、陽の弓の外、番弓一張も見えざるは、扨は、と云ふ間も飛來る矢先、狙ひは外れて、はた〳〵はづるゝ襖の上段に、御簾卷上げさせ政子御前、爲久守護して控へたり、見るより、ハッ、と平伏あり、畠山の庄司重忠、お召に依て參上、と云ひも切らせず判官が、ソレ、と相圖に弓手の組子、矢襖作つて取卷いたり、コハ〳〵仰々しき有樣かな、此重忠に御咎の筋あらば、首差延べて御刑罰の刄を受けんに、御念過ぎたる御事、と云ふを打消し、默り召され、上部を繕る忠臣顔、政子の御方直々に御尋の仔細あり、吟味の内は方々退け、ハッ、とお次へ立つて行く、政子御聲鋭げに、庄司重忠衝と寄れ、尋ねたき一條は、大老の位に誇り、賞罰を恣にし、我意の舉動ある事は、幼少の賴家を蔑にしての儀か、返答聞かんと、仰せあり、ハア御上意に候へども、恐れながら一言申上げ奉らん、身不肖なれども、先君の御見出しに預りて、三老の一に加はる某、罪あれば罰を加へ、

る一味の面々、樣子は如何と待つ所へ取て返す以前の曲者、庭上に大息つぎ、石田の判官膝立て直し、待兼ねし忍びの者、首尾は何と、ハアヽヽ仰に從ひ下馬先に、我々疾くより待伏し、重忠を討取らんと、拔連れ〳〵追取卷き、ホヽウ出かす〳〵、シテ〳〵如何ぢや、アイサ數ならぬ我々迄火花を散らして切結ぶ、例の本田が入礫、寄付く事も相叶はず、這々逃延び候。と色靑ざめて注進す、廣元騷がず、イヤナニ石田、然らば程なく庄司重忠、館へ出仕致すべし、牒し置きたる手配を、ナソレ傳へられよ、と詞の下、心得判官向側に向ひ、竹の下の孫八左衞門、後谷の荒次郎は杉戸の蔭に身を潛め、取て押へて刺通されよ、手にあつからば舊玉の次郎、ハアヽ如何計らひ候はん、オヽサ組子の鐵砲つるべかけ、垣を小楯に打止められよ、若もや此塲を通拔け、奧御殿へ踏込まば、土井彌太郎弓奉行、コリヤ矢襖作つて射て落せ、と下知相終れば大江の廣元、萬一重忠奇計を廻らし、今日の命は遁るゝとも、伊達錦戸が殘黨に、調じ合せし奧州勢、討手に下して後陣を立切り、引挾んで討取らば、ヤハカ遁れん網代の魚、ハヽヽヽ心地よし〳〵、と勇立つたる表の方、重忠出仕、と奏者が聲、ぬかるな〳〵面々、仕損ずな、と別れて忍ぶぞ危けれ、然れば斧鑕の誅わりと雖も、是が爲に懼れざるは忠臣の勇なりとかや。武威東國に照輝く、畠山の庄司重忠、烏帽子の懸緒長廊下の杉戸引開け打通る、後に身構へ重忠待て、ムウ誰かと思へば竹の下、後谷諸共出迎ひナ、太儀にこそ、とさわらぬ體、蕩々巍々

ん、武勇と云ひ家柄と云ひ、此討手に向はん者、其方ならで外になし、直樣彼地へ立越えて、勝利の勝鬨揚げて給も、賴むぞヤイノ。と和かに、大江石田が計略の、奥の手深き上意には、ハッ、とばかりに吐胸の體、爲久差寄り、コレサ重忠、お請は何とでござる、イカニモお請は陸奥追伐。畏つたる庄司重忠、出陣致せし其後は、暫く天下の政事、貴殿に預け申すべし、早お暇と、立上る、先を塞いで土井舊玉木村稻毛の諸侍、鯉口寛げ詰寄つたり、爲久突立ち、イヤノウ重忠、敵追討の貴殿の働、上覽あらんず御前の所望、イデ一勝負、と忍の柄、イカニモ御前の上意とあらば、嗜む一手を御覽に入れん、と眼を配る左右より、切込む白刄を手練の太刀もぎ、頭上へ電光四寸の開き、拂ふ下段を飛鳥の翔り、凡人業とは見えざりける、隙を窺ふ石田が柄先、押ゆる上段閃く長刀、石突しつかと隙さぬ重忠、危ふかりける三重「戀にや夜も日も飽かぬものじやとナ、親の意見〳〵でも、ぬるぬつとも寢る間に通ふは、是ぞ惡所の色里、ソイ〳〵ノワイトサ、ナント都路、今日は宅の親玉が、鎌倉御所へ出仕の留守、ぬるぬつと拔けて出た畠山の六郎重保、斯う見晴した由井が濱、アレ向ふが江の嶋三浦三崎、春の海邊に住吉の濱、と歌に讀んではあるけれど、此景色には何として、ナア仲居共、跣で裸で榮螺取る、蜑を雇うて此海の、鮑取らそぢやあるまいか、ノウ太夫都路、と云へど應へも身を背け、つんと捌けぬ薄煙、煙管で顏を、あつ〳〵オヽあつ、何とするぞい、熱いかえ、知れた事、エヽ眞に

功あれば賞を與へ、士を懐くるは國家の爲、諸士の頭を踏まゆれば、身を高ぶるにあらざれども、自然と人の敬ふは、是役儀の然らしむる所、全く我意を振ふにあらず、此段御賢慮を下さるべしと、謹んで言上あり、然らば拙者が相尋ねん、頼朝公の怨敵たる、義經公の靈を祭る、白旗大明神へ、社領を奉納せられしは、幼君調伏の爲ならん、サ眞直に白狀あれさ、イカニモ其こそ仔細あり、去年正月十一日、頼朝公の御逝去は、義經公の恨の一念、猶も血筋の頼家公、御身の安全祈りの爲、神すゝしめの神領寄附、但調伏とおいやるには證據ばし候か、イヤサ其は、ハテ思慮もなき爲久殿、以來を屹度嗜まれよ、と云込められてもひるまぬ爲久、イヤすんと嗜まい、人の身の上より貴殿の子息六郎重保、化粧坂の遊女にはたへ、今日も由井が濱で汐干狩の礒せゝり、人の非は目に見えても、我子に甘い得手勝手、それで天下の政道を取捌かるゝぢや迄、ムゝゝハゝゝゝ、と擬笑へば、重忠、ハツ、ト驚き、初めて聞いたる悴が不屆、勘當致すが身の面晴、只管仰ぎ奉るは、臣が不肖をお赦しあり、御心解けし御上意を、偏に願ひ奉ると、低頭平身身を謙り、誠を盡して述べければ、御顏容も打解け給ひ、畢竟今日召出し、相尋ねたる趣も、其心底を聞かん爲、扨こそ斯は計ひしぞや、付ては申渡す一件、此程日々に注進あり、伊達錦戸の殘黨輩、奥州に一揆を起し亂暴に及ぶ由、大國と云ひ逆徒の大軍、假令大名五頭六頭差向ひたりとも敗軍するは疑なし、然らば味方の心憶し、敵は愈々潰に乘ら

やあるまいし、無理な口說に緣切つて、花扇さんに逢はうでナ、腹が立つなら謝ります、機嫌直して下さんせ、と云ふもおろ〱淚ぐむ、ア丶措いて貰を〱、オ丶氣晴しに來て、泣顏見るより然らばお暇申さうか、と立上るを、コレ待たしやんせ、成程お前氣が濟むまい、其言譯は今爰で、コレ子供、預けた物を持つておぢや、アイ、と禿が剃刀の、太刀取役は仲居のお辰、盃臺に差出す小指、既に切らんとする折柄、待てヱお辰、今都路が心中に、指を切らんとする所へ、サレバイナ、待てと聲かけなさつたは誰樣ぢやえ、イヤノウ誰さんでござんすえ、と見やる向ふへ幇間、目吉が得手の大薩摩、素袍は鶴の凧、胴懸烏帽子引かけて、くわつさ〱と歩出で、左右の髭を掻撫で〱、鬼か、インニヤ、人か、ウンエ、はたな三本ころ柿の、葛西菜だモサ、オ丶目吉のが仰山な、何事かと思ふて愕りしたわいな、イヤ申し旦那、今日の口說の俄狂言、朝比奈の身振、胴懸烏帽子景物の、凧はきつしりでござりませうが、ナント此狂言の御褒美に、太夫樣との仲直り、お辰銚子、と目吉が頓智、しやんと納まる朝比奈の、俄狂言大當り、コリヤ出かした、ヤモ根も無い事ぢやと思ふても、ひよつとした言懸り、太夫飲んでおれへ獻しや、そんなら疑晴れたかえ、と互に寄添ひひつたりと、抱付いたは春の蝶、花の露吸ふ風情なり、ヨツ〱畜類寒鳶、コレお辰どの、モウ〱〱、旦那のこつてり見て、凡そ生ある者として、是が堪へて居られうか、と身悶えすれば、テモ怺へ勢の無い奴ぢや、コ

憎てらしい、と太股ふつゝり、アイタヽヽ是は又きつい御馳走、顏は熱し太股は痛し、ヤコリャお辰、天氣は好いに、きつうし波が荒いわいの、エヽ聞えた何ぞ外に面白い事が出來たな。われが面白い事があれば、おれをば自暴とさしても大事ないか、餘り痴話るなよ、そんな事はナ、われが可愛がる男にせいやい、と云ふ胸倉をコレ重さん、そりやお前の心の引競べ、何ぢやら花扇さんと云ふ、美しい奧樣が、お前疾うからあらうがナ、何吐すのぢや、そんな嘘が能う言はれるナ、花扇とやら花團扇とやら知らぬわい、然うして男の胸倉を取て放さぬか、イャ放さぬ、何故惡性さんす吟味する、ハアこりや可笑いわい、猿の尻笑ひと、儕が惡性棚へ上げて置いて、我が何處に惡性する、又私が外に何で面白い事があらうぞいナ、イヽャ有るわい、ハテ此頃の晩行た時、田舍の客ぢやあた好がぬのと、我等には一盃喰はせ、廻り座敷の名代新造、扨寢る程に白河夜船、話對手もあらばこそ、夜の更ける程氣は揉める、障子の間から覗いたりや、彼客めと凭合ひ、面白さうに彈唄ひ、見るより勃と持病の肝癪、其返禮の花扇、先ざつと云はうなら惡性かはきの附合ぢや、サ斯う打破つて出るからは、表だつたの切盃、子供銚子、と取上ぐる、其手をじつと顏眺め、ソリャ餘りぢや重保樣、好かぬお客に貸借も、好いたお前に逢ふ夜さの、貰ふ手管の詞質、斷り云うて聞分けぬ、田舍の客に留められて、心に染まぬ憂き節を、切ては歌に忍駒、帶紐解いて餘の客と、寐ぬを知らせの糸の音を、知らぬお前ぢ

のお秀とて、優らしい心な者、隠れて暮す片時も、夫婦になつて諸共に、憂き目を凌ぐお心は、コレござんせぬかと、くよ〳〵と、あどない内に眞實の、道理を盡す口説泣き、アヽ聞分けた忝い、今の奴等が歸らぬ内、些も早く落延びん、サア來い都路、ござんせ、と手を鳥が鳴く東路や、こけつ轉びつ落ちて行く、間もあらせず佐和山伯耆、取て返して、ヤア〳〵者共、今重保と名乘る人に、力んで見たが丸腰故、一旦逃げたは卑怯にあらず、ヲヽ大小取りに戻つたのぢや、然れども戻つて見てあれば、形も見えぬは逃延びたか、ムウ待てよ、爰ぞ日頃の軍術智謀、學び置いたる卜占八卦、それよ〳〵、と傍なる小石拾ふて、コリヤ二人の奴等が落行きさし、其方角はコレ此石、飛んだ所が即ち方角、石は三角三の數、三々波と出た賽の表、慥に是は賽の河原、箱根の方へうせたは治定、皆斯う參れ、と佐和山が、蚤取眼で素股の砂道、折から四方に攻太鼓、駈違ひたる人馬の音、物騷がしき汐風に、寄る荒浪押切り〳〵、さつさ早船片闘が、下知に片息火水の楫取、ヤレ船留めよ、と庄司重忠、政子御前の御前で、申開きし身の不首、倭人輩が讒言の、無實の明り立つたれど、御心解けぬ御難題、奥洲一揆の蜂起こそ、正しく大江が謀、內通にて牒し合せ、引包んで討たんず略と、見透したるに違ひはあらで、それ恐るゝにあらざれども、君の憎しみ受けたる某、假令功成り名遂げても、何思ひ出のあるべきや、アレ見られよ、奥州迄も遣立てず、我を討たんず石田が軍勢、船を目當に近寄る物音、讒者の

リヤ〳〵其方には褒美を取らせう、と投出す山吹大名捌き、コリヤ忝い旦那づら、是からわつさりと酒にせう、先づ初獻には花嫁御、オゝ好かん、重さん一つ獻うかえ、千秋萬歳の痴話魂膽の玉子酒、爰は差詰拙者がお肴、ムゝ肴とは例の惡身か、ハイ如何にも惡身、と立上り、油斷を見濟し、六郎が小腕取つて引立つる、コリヤ何すると、突飛ばせば、うつそりの六郎重保、幇間の日吉と姿を窶し、馬鹿を盡した某こそ、爲久公の御内にて、佐和山伯耆景次といふ名うての士、大江殿の仰を受け、そゝなかしたる身持放埒、其を落度に殿中にて、重忠に勘當させたは、儕等親子を遠ざける謀、すつぱり參つた上からは、人知れず打殺す、者共參れ、の聲より早く、十手打振る家來共、其所動くな、と取圍めば、仲居禿は恟りうろ〳〵、ノツ恐ろしや、と逃げて行く〳〵、重保女を後に圍ひ、扨は儕は石田が家來、佐和山にてありしよな、儕等が術にて勘當と聞くからは、一本立の六郎重保、目に物見せんと、覺えの業物、口に似合ぬ佐和山が、一足出して逃出せば、家來も續いて皆ちり〳〵、六郎濱邊へどつかと座し、物をも云はず覺悟の刄、其手に縋つて、マア〳〵待つて下さんせ、イヤ〳〵放せ、イヤ放さぬ、コレ親御樣の勘當受け、死なうと思ふて切らしやんすを、無理とはさら〳〵思はねど、色に溺れて、御不興受け、お果なさらば御身の恥、お家の名折如何計り、是をとつくりと思案して、父御樣へのお詫言、所詮斯うなる上からは、廓へ戻らず二人連、千住村の新介と、云ふ頼もしい私が父樣、殊更妹

は本田が仁王立、心安しと身繕ふ、間もなく哄と捕手の面々、近經覺悟、と追取卷く、本田くつ〳〵〳〵、噴出し、云はずと知れた石田が手の者、此近經が對手には、鬼と野曝れの有財餓鬼、捻殺して呉れんず、と罵る下より突出す突棒、心得琴柱の身をもぢり、むだ打さす股引寄せ〳〵、片端摑んで三重打付ける、勇猛無雙の働に、たゞよふ捕手を蹴飛ばす鐵脚、なぐり込だる水の沫、對手なければ、本田の次郎御所へ踏込み石田めが、素首引抜き君への土産、と駈出せしが、イヤ〳〵〳〵、其よりは先づ差當る、重保公に追付かん、然うぢや〳〵、と踏出す、向ふに敵なく鐵壁の、楯をも碎く大强力士、虎も尾を垂れ長橋の、蛟も淵に隱るべき、軍にたゞ勝本田が武勇、貴賤上下押なべて、感ぜぬ者こそ三重なかりけり、

第三

薪樵る鎌倉山に隣りたる、八つの詠を金澤や、六浦の郷の館城、東南には海を受け、西には遠山漂渺と、雲も及ばぬ高根より、眞白に見ゆる雪の色、比類なければおのづから、富士見の館と皆人の、仰ぐ眺ぞ啻ならね、館の主千葉之介常胤は、先つ頃より病氣と云立て、本國下總にましませば、御留守居には堀部肥後の左衞門貞元、鎌倉御所よりお召に依て、出仕の跡の廣書院、きかん〳〵、いやぢや〳〵、とわんぱくは、弟君の胤若丸、引かれて出る姉八千代、言譯

錆矢受けんより、腹切つて相果てん、介錯頼む春久、と思切つたる御差添、片岡慌て押止め、コハ云効なき御有様、死は一旦にして易しとは、斯かる時の事にぞある、生延ばつて幼君の、生行先の御後見、遊ばされんとは思さずや、と諫め申せど中々に、聞し召されぬ御覺悟、既に危き其所へ、ヤレ我君お待あれ、と聲も凛々しき血氣の若武者、兵具きらめく宇治萬治郎、軍勢引連れ渚にひれ伏し、恐れ多くは候へども、今御生害あるときは、上意を戻かせ給ふに似たり、三度諫めて身退く、古人の跡を追ひ給ひ、奥洲勢を攻靡け、彼地を君の御座所、是長久の策、早先陣には榛澤六郎出立致し候、と謹んで相述ぶれば、ホウ出かしたり萬治郎、道理に當る汝が詞、迎ひの軍勢來りし上は、是より直樣出立せん、と御悦びの折も折、又も聞ゆる攻太鼓、スハ事こそと見る所へ、荒れに荒れたる本田の次郎、韋駄天走りに馳來り、我君是にか先づ〳〵安堵、君を失ひ奉らんと、石田に荷擔の鎌倉武士、某待受けぼつ散さん、是非に及ばず御前にて、御不興ありし重保公、只今途中に御目見、御在所も知れたれば、後より御供仕らん、サいざさせ給へ、と勸むれば、重忠御感淺からず、我兩腕の二人が忠義、無そくに受けず打立たん、片岡さらば、と陸に折から、宇治が牽出す黑の駒、手綱搔繰り召し給へば、造酒頭も勇立ち、某斯くてある内は、利害を說いて政子の方の、御疑ひの御心を、申ほどきて君臣の、御仲結び奉らん、おさらばさらば、と夕汐の、寄來る敵の貝鐘に、紛れて別るゝ海と陸、後に

ヤツトコトンノトンツトロ〱トンノトン、どん〱唐辛、アヽ嗜ましやれ千久阿彌殿、和子樣交せずに一人遊、ドレ其人形こちへ、と引たくられ、エヽ〱、足摺したる空泣に、ワアイ〱笑へ千久阿彌が泣きをるわえ、坊は强うて泣きやせぬ、と變る笑顔は千久阿彌が、智慧の網雜魚撥返り、サア是からは奥の間で、此繰の切淨瑠璃、見物は姉御樣、サア胤若樣八千代樣、ナニ兩人共身に續いて斯う參れと、氣輕口輕浮し立て、そやし立てゝぞ入りにける、衣の香の、そよと音なふ御帳臺、千葉の奥方八城御前、しとやかに立出で給ひ、イヤノウ松が枝近う寄りや、其方も知つて居やる通、當春畠山の庄司重忠樣、佞人讒者の計ひにて奥州へ御發向、然るに伊達の殘黨等、甲を脫いで降參し、却て大江石田が惡事、鎌倉へ言上せんと打登らんず企を、聞くより又も讒言搆へ、逆意といひなして討手向ふと聞くよりも、我夫千葉之介常胤殿、誠を守るお心より所勞と披露し、有樣は本國の軍勢從へ、重忠樣へ一味の御加勢、今日貞元を召されしは、若や其事洩聞え、其故の事なるかと、案じ過しをするわいのう、成程其お案じはお道理ながら、物に慣れたる夫左衞門、御前の首尾も眞圓う、障る雲かき今宵の明月、日も暮れる迄緩々と、お歌の御趣向遊ばしませ、と女同士は主從も、物和かにしほら敷、ホンニ私とした事が、思あるまゝはつたりと、忘れて居た今宵の月見、それは然うと其方に話さにや濟まぬ事、此程每夜夢ともなく自が枕元、殿樣の軍中へ馳付けて、お馬先の働を致したがる人あれど、路

聞かず、コレ姉樣、切角坊が捕へた雀を、何故に放して遣らしやつた、償ふて返しや〳〵、と取付くを、ノウ疎ましや、と引分くる、左衞門か妻松が枝、オヽやんちやな和子ではあるわいな、何をそないに無理おつしやる、と押退くれば姉君は、ノウ松が枝聞いて給も、家の内へ雀の這入るは、善くない事の前徵ぢやと、常々聞いて置いた故、母樣のお納戸で、彼子の捕へた雀の子、父上樣の御病氣と云ひ、何如やら心にかゝりもする、殊更八月十五日、鶴が岡の八幡樣では、放生會さへある日ぢや故放して遣つたは惡かつた、坊が怺へて給るやう詫して給も、とおろ〳〵と、淚ぐむ姉胤君は、譯聞分けぬすゝり泣、オヽ八千代樣は、お十五だけ優らしいお心付、申し和子樣、雀の子がお欲しくば、お氣に入の關內に、何ぼなり取らし上げましよ、ちやつと御機嫌お直し遊ばせ、オヽ好いお子じや、ちやつと御機嫌お直し遊ばせ。エヽ又お茶道の千久阿彌殿は、此樣な時にお伽はせいで、何所に這入つて居る事ぞ、イヽヤ騷れそ方々、茶道の千久阿彌是にあり、それへ參つて對面せん、テンツテン〳〵テレツテン〳〵、こちらは金年こちらは辨慶、テンツテン〳〵テレツテン〳〵、どつちも强い切合人形、テンツテン〳〵はつし〳〵、と打合ふて、見すれば其儘移氣に、其人形おれが遣ふ、此方へおこせ、金平かぶりを打掉つて、テンツテン〳〵テレツテン〳〵、切角仕掛けた此軍、テンツテン〳〵、勝負つかねばむだ働、投げて吳れんと梅王丸、クワタ〳〵テンツテン〳〵、踏む足音は、ツヽトン〳〵

ります、サア〳〵〳〵關内が此私に、サア〳〵大事だや〳〵、テモ化物と云ふものは油斷のならぬ、もう關内に化けたかいの、逢ふたら取つて咬むであろ、如何したものであらうなア〳〵、コレ〳〵松が枝下に居や、其奴が願とは昨夜の事の能試し、早呼出しや、と御の下、呼次ぐ女中の聲に連れ、庭の切戸もきり〳〵と、捻切端折の剃下奴、白洲にハツ、とかつ突這ふ、松が枝足を踏緊め〳〵、イヤそこな關内の化物め、化生のものか魔生の者か正體を顯せ、と奥歯咬緊め頓聲、是は扨、松が枝樣、いつも〳〵お氣輕な、ヤ其お詞に附まして、お屆と申しまするは、今度殿樣の奥州御下向、もつそう首突出して、御用に立つべいと存じても、草履草鞋の端錢、陣笠の代にも足らないと、氣を揉散す小屋の向ふ、御兩門の石垣に、でつかちない狸の穴、彼奴めは癪氣持おやゝら、毎夜さ爐で私の股火の相伴、餘り路銀が欲しさの儘、ヤコレ狸めの如何すべい、貴樣も遁れぬ金の事だ、お身才覺は出來ないかと、戲言を申したら、サお聞きなさい、人間物を知らないとやら、畜生の心でもさせらないこんだと思つたか、今朝隣方役狸が、紙に包んで金五兩、てんとくしの上へけゝて置き、穴の中へ這入りました、嬉しいとも恭ひとも、根性骨の所が思はれて、たんだ涙が飜れました、アツア然うだ畜生でも志、戴くべいと開けて見たらば、木の葉でもない駿河小判、能々見れば殿樣の月に星の極印がてつかり、見るよりぞつと怖氣が立ち、若盗人の御詮議でもかゝつたら、何とすべいと存ずるから、取敢ずへや

銀の術に盡果てたり、何卒金子給べのうと、云ふも跡なき聲はして、形は目にも遮らず、と宣ふ内より身を縮め、エヽ又御前樣の、私を恐がらさうと思召して、お噓でござりませうがな、シタガお噓であらうと思ひながらも、如何やら襟からぞく〳〵と、シテ其後は何と致しました、と恐い程猶聞きたがる、化物話と狂言の、話は女中の好物なり、然ればいのう、又もや今朝の曉に、同じ聲音同じ願、何者なるぞと問ふたれば、お屋敷には住ながら、あからさまにお目見のならぬ者、忠義の人に與へる金、五つ賜はれ御前樣、何卒〳〵、といふ聲も、涙を含む詞の端、シテ何者に與ふるぞと、私も恐々云ふたれば、お草履摑みの關内に、遣はし度と、云ふは正しく耳の際、忠義とわれば聞捨て難く、枕箪笥の金五兩、紙にて包み投出せば、忽ち響寺々の、かねも見えざる奇代の妖怪、若や子供の闇などへ、出ねば可いがと苦勞になる、不思議な事ではないかいの、と語る人より聞く人は、肩身を縮め顫ひしが、ラモマア〳〵お氣丈な御前樣、それが私で御覽じませ、申し〳〵と云はれたら、目を廻して退けうもの、シタガ忠義の人を助ける、金とは御武運を守神、然うして見れば化物も、亦可愛いもの、ホヽホンによく思ひ廻す程、恐うも何ともない事を、と云へど依然膝摺寄せ、近邊見らるゝばかりなり、松枝が殿へ申上げます、オヽ誰ぢやいのう滅相な、人に慄然さした程にの、シテ取次は何事ぢや、ハイ別の事でもござりませぬ、何やらお届申す事があるてゝ、お仲間の關内がお庭に扣へて居

木源藏秀義は老功の兵故、白川に關を搆へ、逆徒の勢を喰止めさすれば、左右なくも攻上らず、睨合ふて對陣す、付ては東國の諸大名、若重忠に荷擔せば、安からぬ一大事、然るに依て東國の面々は、其妻子を人質として、鎌倉御所へ召取らるゝ、常胤殿にも病氣とて、國元にお居やれば、急ぎ内室八城御前、兄弟の子供諸共、此伯耆に受取來れと、爲久公の御指圖、早疾く渡せと、權柄なり。松が枝、ハツ、と頭を下げ、石田樣の仰の趣、畏り奉る、併し主人常胤に限り、二心の無い事は天道樣がよく御存じ、然れども物騷しき折柄なれば、御臺所を人質になさるゝ事、御無理とは存せねども、此金澤に差置かるれば、やつぱり鎌倉の內も同然、お歸りなされて此由を、默れ女、仰出されて二言はない、二言辭吐かせば慥に曲事、首筋そびいて引立行かん、と突立上ればしつかと引留め、イヤ申し佐和山殿、事を分けて云聞かすに、聞く耳持たぬ犬侍、石田づれが家來の分で、千葉殿のお館へ踏込まんとは叶はぬ事、女ながらも此松が枝、伯耆でも鷹取でも、灰とも思はぬ覺えの手先。成らば手柄に通つて見や、シヤ幻妻めが味をやる、退かねば斯うぢや、と蹴上ぐる腰骨、ひらりと襠留むる柔術、纒ふて留むる藤葛、引いつ引かれつ爭ふ最中、戻りかゝつて景次が、腰骨發矢と蹴落せば、夢見た如く起返り、ヤヽ併りや肥後左衞門、佐和山ともあらう者を、イヤはうきな目に逢したな、ハヽヽ、コハ景次殿の詞とも存せぬ、只今のは其許が椽の框に躓き召されて、頭落召された其庭先、拙者は一向

ゝ御注進申上げます、此上の御慈悲には、思込んだる下郎が一念、お暇さへ下さらば、泥を嘗め土を頬張つてなりとも、御陣所へ推參して、御奉公が申したい、下主奴めが願の段、可からう樣に松が枝樣、御前樣へお執成願上げます〳〵、と額を土邊に摺込んで、思入つたる訴訟なり、奇異の念の晴渡る、八城御前も御感心、ナント松が枝聞きやつたか、畜類でさへ憐れと思ふ閨内が忠義の程、暇遣らいで何とせう、旅の用意は其金子、直樣そちに與ゆるぞよ、スリヤお金迄下されて、心置なう旅立仕や、と仰は奴が身に餘り、はろり〳〵と角鍔に、落かゝりたる有難涙、松が枝も力を添へ、夫左衞門戻られたら、定めて御褒美の沙汰もあろ、其金には限らぬ程に、用があるなら遠慮なう、私に云やや、とありければ、只手を合せ伏拜み、御前樣松が枝殿、お禮は何にも申しませぬ、ヤ是も全く狸のお蔭、此禮には小豆飯油揚にこのしろの、ヤこりや狐の獻立じや、エ何がよかろなあ、オゝそれよ大事の睾丸引包む、褌買ふてやりましよ、と悦び勇む表の方、石田殿より御使者、と玄關番が呼はるにぞ、何事やらん氣遣はし、松が枝可きに挨拶仕や、奴後に、と下部にも、詞賜はり奥の方、隔つ切戸の閨内も、已が部屋へと立つて行く、松が枝は座を改め待間程なく入來る、石田が郎黨佐和山伯耆、主の威光の撥袴、肩肘怒らし上座に直り、ムゝ其方は肥後の左衞門が女房松が枝な、貞元未だ退出せずば、名代として承れ、畠山の庄司重忠、鎌倉を攻めんず叛逆、主人爲久公の下知に依て、州の住人佐々

入つの藏、東方には十の藏、惡魔外道も一打と、閃く木刀丁と受け、持つて開いて附込む切先、アヽコリヤ〳〵待て〳〵奴、ハテ〳〵怪しやな、只今汝が打かけたは、二姓の太刀と見しは僻目か、夫其太刀は二姓の太刀とて、身が流義では嫌ふ事だ、サ何故と云へ、假令木太刀で保つたもの、其が眞の刄物で見い、お師匠樣が眞二つ、師匠を二つに切る時は、即ち二姓の太刀とて、當流では相用ひぬ、飲込過ぎず早まらず、ヤコレ〳〵〳〵。必ず早まるな奴殿、夫兵法の極意といつぱ、コリヤ〳〵おれが講釋する内に、打かける事は成らぬぞ、夫兵法の、極意といつぱ、エヽ氣味の惡い面すない、夫兵法の極意といつぱ、獅子の奮迅虎亂入、鴨の入首鶴の御拾ひ、達摩大師の座禪車。弘法大師の淸めの水、とくるり〳〵と揮廻す、木太刀は電光横なぐり、車輪の打込躍越え、難なく木刀打落せば、飛退つて、ヤコレ〳〵〳〵〳〵必す早まるな奴殿、と刀の鯉口拔く間も早業、眞の當、うんと仰氣に倒るれば、關内出かした、其働見る上は、許して遣す奥州下向、認め置きし此密書は、常胤公へ差上げよ、心得たるか、と差出せば、ハヽヽ有難や忝なや、見出に預る奴めが、身はしいびしはになるとても、人手に渡さぬ此御狀、些も氣遣ひ下さりますな、彼奴めが正氣の付かぬ内、お旦那方を裏門から、其事は氣遣ひすな、松が枝來れ、關内さらば、早疾く急げ、と左衞門が、下知に心も關内奴、別れてこそは出て行く、人音止めば佐和山伯耆、むつくと立つて傍りを見廻し、空悶絶して聞

存せぬ事さ、イヤサ正しく汝が、ムウいかさま其は然うもあつたか、何でも襟元がむづりと云つたが、其から後は眞晴闇、すんてんころりで氣が付いた、イヤ是は放て置いて、人質の八城御前、さり〳〵渡せ、と詰かくれば肥後の左衛門打頷き、イカニモ其儀は御前に於て畏つたる此貞元、拙者がお供仕るも、其許にお渡し申すも、申して見れば同じ事、併し大切なる人質な、預り召さるゝ道すがら、虚事でもあらば拙者が落度、貴殿の手の内見ぬ内は、浮とお渡し申されずと、念押す詞に面膨し、和主は身共を茶にするな、斯かる役儀を蒙るからは、道の警固も用意した、此伯耆が同勢は、若黨槍持草履取、都合其勢五人餘騎、又手練の兵法は、佐和山石尊大權現、大天狗小天狗より相傳したる、南無奈妙頂禮流、木太刀に取つては家の物、手の内見たくば對手を出しやれさ、ホそれこそ拙者が望む所、ナニお草履摘みの關内奴、木刀持參仕れと、聲に應じて庭先へ太刀打違へて畏る、ナンダ對手に此奴が、奴を對手に立合は、茗荷屋紋次郎ではあるまいし、外に對手と云ひたいが、先づわれで了簡せう、シタが徒仲間と立合ふては、武士の諸侍一分が廢る、勝負の内は身が弟子分、然う心得て對手になれ、イヤモお立合さへ下さらば、ぶち殺されても本望だ、只今お次で承れば、南無歸妙頂禮流、イカニモお弟子になりますべいと、岩をつくねし身の搆へ、氣味惡けれど云がゝり、ナンノ膽だと高股立、夫兵法の極意といつぱ、一眼二早足三な四ゆ、五番に河内の壺阪寺、六道能化の七福神、八方に

彼五陵が母親の、操には及ばずとも、切ては夫常胤殿の、弓矢の強みになれかしと、最期の有様是見よ、と襟押寛げ見せ給へば、雪の胸先氷の刄、血は紅の瀧、ノウ悲しや、と大聲揚げ、ハア、お出かし遊ばされた御臺様、退引ならぬ今日の難題、若人質となり給はゞ、常胤公の勇氣や怯れん、御臺へ御自害勸めんにも、御心底を測り兼ね、落ちさせ給へと申せしは、お心を引見ん爲、ホゥ道は千葉の御内室、尤も斯うてそあるべけれ、息引取らせ給はぬ中、御兩所へお暇乞、と勸め申せば苦しげに、此體を見るならば、松が枝始め二人の子供、よもや見捨て行きはせまい、持病の癪と噓吐いて、欺して早う落して給も、ハア畏り奉る、と衣引繕ひ取繕ひ、松が枝はお次に居るか、御兄弟の御供せい女房共、と曇聲、アイ、と云ふ間も松が枝が、二方伴ひ轉び出で、コレ申し左衞門殿、わしや先きにからお次の間で、何も角も立聞して、泣いてばつかり居たわいな、お痛はしや御前様、と云ふを云せず、ヤイたはけづらめ、御臺様のアノお癪は、是非に及ばず突詰めた、ナコレ常々からのあの御持病、それに何が悲しうて、泣面かはく、コレ申し御兩所様、今お別れなさるれば、長の旅路のお顏の見納め、よく〱お暇乞遊ばせ、と表面を作る左衞門が、胸は張裂く思ひなり、胤若はおとなしく、母様お癪が痛むかや、今も奥でおつしやる通、姉様と松が枝連れて父様の所へ參じます、早うお癪が快うなつたら、後から來て下さりませ、と手をつかゆれば姉八千代、胤若の云やる通、お先で待つて居りますする、

取つた、千葉之助が重忠一味、此由主人へ注進と、逸足出して駈行く庭先、引違へて茶道の千久阿彌、大息ついで駈來り、御注進、と呼はるにぞ、追取刀に一間より、肥後左衞門、衝と出で、慌しや茶道の千久阿彌、注進とは何事なるぞ、されば候悶絶したる佐和山伯耆、千葉の常胤逆意の趣、鎌倉御所へ言上と、早馬にて駈出したは、油斷ならざる御大事、御用意あれ、と訴ふれば、ホウ其こそは兼て期したる事、程なく向はん鎌倉勢、一家中へ觸廻し防矢の手配せよ、畏つた、と千久阿彌は、表を指して引返す、肥後の左衞門一間に向ひ、聞召さるゝ如く事急なり、御前様には松が枝を召連れられ、一先館を落ちさせ給へ、と申上げたる聲の下、襖引開け八城御前、御身もだゆく立出給ひ、アヽ左衞門が心遣ひ、過分なるぞや嬉しいぞや、是迄包みし事なるも、石田の判官自に心をかけ、折に觸れつゝ數通の艶書、手にさへ觸れず押戻せど、猶懲りずまは手を替へて、種々の横戀慕、人質に事寄せて、自を館へ引入れ、子供を伽に口說落さん爲久が下心、假令此場を落延びても、行く先々を狩探され、終に擒とならんより、此館にて潔く、死ぬると覺悟極めしぞや、と仰打消し、アヽ然りとては惡い御合點、御兄弟のお子達諸共、奥州の御陣所へ、片時も早う落ちさせ給へ、サヽ早う〳〵、と氣をわせれば、イヤノウ貞元、自が附添ひては、戀の恨に子供迄、如何なる憂き目に逢ひやせんと、父のお跡を奥州へ、兄弟連にて落行けど、云含めたる妾が覺悟、滎陽の劍に伏し、我子に忠を勵ませし、

ぬのみかおいとしや、如何に落目と云ひながら、お年も行かぬお二人樣、世に頼りなき旅の空、お力とては病身な、有るに効なき私一人、思ひ廻せば此胸が、裂ける樣だ、と口說立て、淚の限泣盡す、秋の野分に吹亂す、尾花が上の露の玉、拂ひもあへぬ如くなり、盡きぬ歎と氣を取直し、云ふても泣いても詮ない事、もう諦めて參ります、シタガ是左衞門殿、お前は一人跡に殘り、如何なさんすお氣ぢやえ、知れた事此當士見の館を、枕に打死なさんず、コリヤ、討ち討たるゝは武士の常、例令此塲は別るゝとも、出逢ふ所は三途の川端、私も頓て行くわいな、何にも云ふな、と詞數、云はぬは云ふにますら男が、思ひ切つたる玉の緒の、今ぞ絕行く四苦八苦、アレ母樣が、と駈寄るを、立身て隱す袖の雨、絞り盡せぬ憂き別、母樣おさらば、左衞門殿、おさらば、さらばと夕まぐれ、是ぞ此世の別とは、後にぞ思ひ合せける、貞元は伸上り、隨分ともに身を凝らし、お二方の御介抱、くれ〴〵も賴んだぞよ、とはいへ愍然や女房が、武士に連添ふ役目とて、夫の討死けなげにも、振捨て行く心の中、別けていとしき二人の子供、長の旅路の明暮に、世に在さぬ母君を、慕ひ給はん痛はしやと、怺へ〳〵し溜淚、身も浮くばかりに見えけるが、心で心取直し、不覺の歎に勇氣の撓み、敵込入らぬ其內に、然うぢや〳〵、と御臺の亡骸、掻抱きたる庭の面、此井筒こそ最倔强、心ばかりの水葬、とざんぶと打込み合掌の、此方の庭先駈來る千久阿彌、白柄の薙刀滴る血汐、首二三級引提來り、扨も大手の合戰

シタガお顏の色も惡し、如何やら離れて行きともない、お藥たんと召上り、煩はぬ樣に遊ばして、お健でござつて下さりませ、と別れ兼ねたる涙聲、臨終の耳に通じてや、物云ひたげに見え給へど、舌硬ばりたる斷末間、左衞門は堪り兼ね、何にも御存じ知せ給はず、能く優らしい事御意なされた、アレ母君もお悦び、ハヽアアレお聞き遊ばせ、嬉しいぞよと御意遊ばす、ヤイ女房、われも主從三世の名殘、お暇乞仕れ、と其と云はれぬ貞元が、心遣ひぞ遣瀬なき、松が枝はしやくり上げ、斯ういふ事のある端か、今日お子達の手に逢ふた、雀は性を入替へて、冥途の鳥の親鳥に、お別れ遊ばす物の告、何程云ふても盡せぬお名殘、さつぱり心に諦めて、口數多うは申さぬ、と咽返りたる血の涙、歎けば終に姉八千代、松が枝が泣やるので、如何やら悲しうなつて來て、一層お傍が退きともない、オヽそりや其筈でござりますわいなア〳〵、是が此世のイヤアノ謂はゞ暫時のお別でも、親子一世の離れ際、お道理樣やいならしや、と夫婦は顏を見合せて胸に漲る悲みは、雌雄の荒浪打寄せて、心の岸や穿つらん、斯かる歎にいとゞ猶、吹すさみたる木枯に、連れて聞ゆる攻太鼓、アレ聞け松が枝、佐和山が注進にて、軍勢寄すると覺えたり、二方の御供せよ、とせり立てられて女房は、夫が渡す一腰をさしもさばかり住馴れて、玉を磨ける御館、今日請納めと思ふにぞ、引戻さるゝ後髮、定めなき世と云ひながら、昨日迄も今朝迄も、夫婦一所に宮仕へ、其お主には引別れ、又とお顏を見る事も、叶は

ぞ赤口日、邪正を糺す日月の、眼も昏み給ひしな、と血汐に咽ぶ無念の涙、喰しばりたる庭先へ、又も込入る佐和山伯耆、隙を窺ひ切付くるを、かんつかしつかと丈夫の手負、八城御前へ御手向、觀念せよ、と捻伏せて、既に危く見えたる所へ、矢一つ來つて左衞門が、太腹發矢と射徹したり、シヤ殘念や口惜や、心かばりは逸れども、急所の矢疵に五體の惱亂、今ぞ堀邊が最期の有樣、見置いて手本に仕れ、と鏑矢引拔き我と我、手に留めの矢先、時維八月十五日、富士見の館の沒落に、美名を殘す堀邊が討死、比類あらざる忠臣なり、斯かる折から入來る石田の判官、六具ひつしと弓携へ、鎧突して勇の大音、心をかけた八城御前、くたばつたは殘念なれ、と兼て望みし此館、即ち身共が莊園に、申受けたは勿怪の幸、ハヽヽヽ心地よや悦ばしや、早此館を落去の上は、佐々木の源藏秀義に、防がせ置きたる重忠め、若白川を驅破らば、那須野が原にて討取る計略、軍師は名に負ふ大江の廣元、和田北條も攻滅ぼし、賴家政子は我手の物、六十餘州を掌握し、威を海内に輝かす、願も三成天の原、月宮殿も及びなき、館の板敷とう／＼、踏納めたる石田が威勢、恐れぬ者こそなかりけり

第四

わしが思ふ樣に浮世がならば、獨寢せまい寢もせまい、狹い浮世じやないものを、世渡りを何

始まり、敵は新手を入替へ〳〵、短兵急に攻立つれば、味方は必死の死物狂、退くな進めと揉立つれど、多勢に無勢相叶はず、是非に及ばず皆討死、ホヽウ其こそは覺悟の前、シテ〳〵二人の御方は、然れば候御兩所樣、松が枝殿が甲斐〳〵しく、瀬戸の獵船飛乘る艫綱、遣らじと留める石田が軍兵、某斯と水車、八雙三段の薙刀に、薙散したる働の、其間に船は沖の方、嶋隱れ行く汐曇り、其より直樣引返し、犬鷄に至る迄、刺殺し〳〵、早城中に一人も、生殘る者候はず、と語るを聞くも潔し、貞元莞爾と打はヽ笑み、驚入つたる汝が忠節、今こそ思ひ置く事なし、幸ひ爰に月見の設け、此世の名殘に一獻酌まん、お酌ぞふ、とたんぶと受け、勇士の交り、頼ある仲の差向ひ、戴く盃千久阿彌が、重盃御免、とぐつと干し、イデお肴仕らん、と合口拔く間も脇腹へ、がわと突立て引廻し、此お肴で左衞門殿御酒、お勝手お先へ參る、おさらば、さらばと吭剜切り、かつぱと伏して死したりし、茶道が討死、宇治の茶の、名も芳しき次第なり、手勢引具し佐和山伯耆、庭先に吐と込入り、千葉が逆心露顯の上は、主君のお心懸けられて、八城御前相渡し、降參致さば其方が、命ばかりは助けて呉れん、何と〳〵と呼はつたり、貞元怒の髪逆立て、シヤ穢らはしや愚人輩、對手欲しうて居た所へ、參合せた命の寂滅、目に物見せん、と覺えの太大刀、逃ぐるを遣らじと三重追ふて行く、大手は矢叫び太刀音に、須彌も崩るゝ鬨の聲、多勢が中を切拔けて、よろぼひ〳〵手負の貞元、眼眩んでどつかと座し、ヘエヽ天なるかな命なるかな、千葉代々の富士見の城、早落城に及びしな、則ち今日

もなし、此上の願には、私が器量が人並ならつひ内證で、ナア申し好い相談も出來うもの、ドリャ餅包んで仕廻はうか、と仕事にかゝる手品さへ、容には替る器用さよ、ホンニとつと忘れて居りました、横町の秋田屋から、杉の中折一つ詰めて呉れと申して來る、隣の猿島屋からは、桐の方にして呉れとの誂へ、ナント私が詰めませうか、アノ云はしやんす事わいゝ時世とは云ひながら、誰あらう秩父様の御家臣、宇治萬治郎様ともあらう身が、何ぼ人目を忍べばとて、賤しい餅屋の店の手傳ひ、もう〳〵そんな事は放て置いて下さんせ、と涙ぐめば、ハテ扨譯もない、そりやマア何の事でござりますえ、以前は以前、今は此家の居候、切ては冥加の爲、此折は私が詰めませう、イエ〳〵手次手なり私が詰めます、ほんに此餅に付ても、十人並に美しう出來上つたは重り合ひ、肌と肌とをひつたりと抱付いたる箱の中、包の形も不器用に、出來たは此方へ撥出され、對手のないは其身の業、外面に見えぬ此餡の、溶ける思はあるまい、とそつと脇から懸けて見る、謎は戀路の壁訴訟、折から表へ無僕の侍、様子ありげに打窺ひ、道通りの者、店先無心申さん、と入る體見るより萬治郎、物に心を奥座敷、此場を外す其跡へ、三伏の夏さへ出さぬ懐手、爰で男を立嶋や、鼻股の鷲右衛門と云ふ通り者、大道一ぱい大股に、遠慮會釋も門口から、お娘如何ぢや親父は留守か、アイ、オゝ誰ぞと思ふたら鷲右衛門様ようお出なさんした、ホ何の悪う來うぞい、ヤコリャお侍、何方へ行かすのぢや、ア大方百性せ

ど千住の町端、新助と云ふ親父あり、娘二人を餅店の、仕出し名物茶巾餅、包むとすれど人も知る、姉は流れの名取草、國も傾く花なれど、妹は其に似もつかず、云ふに云はれぬ、不器量も、親孝行と人愛の、心は並びなかりけり、店にお客か寄食者か、知らぬ風俗厚鬢男、一人蒸籠詰かける、買人隙なき忙しさ、前垂襷はづす間も、馴れし在所の細道を、とつかは戻る娘のお秀、申し萬次郎樣、お前に店を振任せ、アノマア埓の明かぬ檜物屋、せき立に往て漸今戻りました、嘸おせわしかつたでござんせう、もう休んで下さんせ、イヤ申しお秀樣、其樣に云ふて下さりますな、幾人わつても手の足らぬ流行店、其中へ大勢連の寄食者、親御新介樣の思召、お前の手前餘り氣の毒さに、お手傳ひは申せども、信濃者に劣つた新參、如何せい斯うせいと云付さつしやつて下さりませ、オヽアノ萬次郎樣の云はしやんす事わい、樣子は知つてござんす通、アノ奥に居る姉樣は、稚い時から廓の勤、緣でがなお前のお主重保樣に馴染み、大事のお胤を身に宿し、此度一所に都を落ち、影を隱させますも、ハテ親子なり姉妹なり、其お後を尋ねてござんしたお前、何にも遠慮なさるゝ事はござんせぬぞえ、ヤ其はさうと重保樣には、今朝早々成田の不動樣へ御參詣、かてゝ加へて父樣は、庄屋殿から呼に來る、あたふたと行かしやんして、今に戻らしやんせぬ此遲さ、若や姉樣の事ではあるまいか、とわしや其が氣にかゝれど、お前といふ慥なお方が、居やしやんすりや、父樣の好い談合對手、さのみ案じる事

古い編笠が欲しいと云ふやうなざまで、何ぢや家の內に居る女が望ぢや、ヤこいつは可笑しいわい、大平樂か唐變木か知らぬが、揚屋ぢやあるまいし、腮も大概に叩いて置かんせ、又地獄でも買ふ氣なら、江戸に澤山あるぢやないか、アヽ聞えた、隱し遊女を見付けて歩き、買德にせうと、思ひて其で竹光の威しか、物好な事でござんすのう、が又そんな脅喝喰ふ樣な親父ぢやない、所詮戻られても、こなん方の手には終へぬ、埒の明かぬ出入ぢや、きり〳〵歸らしやれ、ハヽヽこんな素町人めが入らざる出しや張、其方連が存じた事ではない、主人が歸り次第此方へ抱へる女、おれが方へ相談して見せませう、見事其方が、こなんが、ムヽヽハヽヽヽ、何の道主人の戻る迄、納戸でゆつくり一寢入、拙者も一間を借用申す、お侍、鷲左衞門とやら、後に逢ひませう、後刻、とばかり、詞にも、奧ある花の櫻木に、此方は曲るすね木松、互に、摩合ふ其中を、隔つる袖の葉隱れや、お二人共に奧へ、と詞一つを兩方へ、引別れてぞ入りにける、淺瀨漕ぐ、棚無小船あんじりと。坐りもやらで娘氣の、奧を見やりつ門口を、差覗いては獨言、合點の行かぬは今のお二人、何にもせよ父樣の、戻らしやんした上の事、早う戻つてお呉れいで、と待憧るゝとも白髮の親父、爪繰る珠數の水晶は、透徹れども氣は曇り、とぼ〳〵歸る我家の內、オヽ父樣戻らしやんしたか、と云ふ聲聞いて一間より、駈出る萬治郎、新助樣お歸りなされましたか、いかうお間が入りましたな、サイナモお戻りの遲いので。いつ

ぶりであろ、シタガ今時の百性は、頓としるが足りやんせぬ、私等が毎年酉の市に、種々と工夫しても、素人の方が遙高うて、博奕打もあかぬから、私も樗蒲の堂取ろより、是からちとひりを張かけて見やうかと出掛けたが、爰の親父もよう出歩くぞ、茶瓶頭を揮立て、何所をはつき廻るのぢや、風雅者ではあるノウお娘、何マアこちの父樣に限つて、そんな所ぢやないわいな、アイヤそれでも風雅人に違はない、何故と云や、マア親父の頭が、茶釜か商賣が茶巾か、其上貴樣の頭が、茶の湯茶碗と來て居るわハヽヽヽ、オ鼻股樣とした事が、何時來ても惡口ばかり、イヤ惡口ぢやない、世間で專ら爰の親父の事を、茶釜親父〳〵と評判するぞや、未だ一つ味な事が有るてや、爰の內には美しい女が隱してあるげな、若商物なら吉原は、一ぱいにする此はな股、何所へなりと望の女郎屋へ、遣つてやらうと思ふて、それ相談に來たのぢや、が一服喫んで待たうか、と慾の爪磨ぐ鷲右衞門、煙草すぱ〳〵たは臼形、此方に休らふ侍は、さあらぬ體にて娘に向ひ、今彼男が申す通、此內に匿ひある女、屋敷勤も致すならば、拙者も召抱へに參つた者、主人他行とある上は、是にて暫く歸りを待たん、是はマアお二人共、異つた事のお尋、御覽じます通目狹い內に、殊に出居衆は所の御法度、其は定めて門違でがな、コレ〳〵お娘、隱しやんな〳〵、何も角も能く嗅いで居る此鼻股、假令又どんな事聞いたとて、他外の事ぢやなし、向ふへ立つ樣な敵役ぢやないわい、シタが其方なお侍、謠は知つて居るか、

ある世の習ひ、其さへならぬ不器量は、如何した過去の報ぞ、と浮世を喞ち身を恨み、聲も得立てぬ泣ぢやくり、親父も奥歯喰緊り、オヽ娘尤ぢや道理ぢや、其ぢやてゝ生付の事なら、今更悔んでも返らぬ事、シタガ我さへ得心して、廓へ往て呉れる心なら、も一走り往て親方と、相談して見やうかい、ナア私が様な者を姉様の代には、サそこが相談ぢや、向ふは廣い廓の事、勤にも段々があるげな、勿論姉めが年の殘はもう五年、其所へ我を十年程も、切らうとさへ云ふたらば、得心せまいものでもないかい、サア親方様とやらが、合點なりやそりや十年が二十年でも、往てくれるか、オヽ能う云ふて呉れたな〱、シタガわりや何ぞ外に願があらうがな、サ隱すなやい知つて居る、コレ萬治郎様、こな様に又おれが一つ願がある、聞いて下さますか、ハイ如何様な儀なりとも、身に叶ふた事ならば、サちつとゝやつとと不承して下されねばなりませぬ、と云ふは外の事でも無い、コヽヽ此娘、サ此娘と夫婦になつてやつて下さりませ、エイ、イヤサ日頃からあいつが素振、こな様に眞底惚れては居れど、モ我身の見つともないに耻入つて、得云出さぬと、サ見た目は違ふまい、コリヤヤイ、コリヤわれを生した親ぢやもの、其位の事知らいでわいヤイ、切てもの心ゆかしに、こな様が女房に持つてやろと云ふて下さると、廓へ往て勤めるにも勢があつて、年の明くを待つ力がある、爰は一つ此親が娘へ慈悲、こな様へ頼む、得心して遣つて下さるか、と思ひがけなき一言を、聞く嬉しさと耻か

そ案じた段ではござんせぬ、何は兎もあれ、お前に話さにやならぬ譯、オヽサ〳〵其方より、此方に話さにやならぬ其譯は、コレ二人とも爰へ〳〵、と小聲になり、彼姉めが親方化粧坂の轡屋めが、庄屋の玄關へれてさに直り、そちが娘都路客諸共、匿ひある事違ひなし、身請金を渡すか、都路を連歸らうか、返答次第代官所へお願ひ申す、と遁れぬ手詰、エヽ、と二人は俄の仰天、オヽ驚きは道理、後方迄に如何樣にも、譯立をしませう、暫く待つて下されと云延し、戻る道々種々思案して見ても、金の心當りとては、富の札一枚買ふてはなし、彼姉めは先亭主が在世の內、年貢に窮つて化粧坂へ賣られた娘、此お秀とは胤異りの姉妹、死んだ女房が末期迄、云出したは姉めが事、おれが爲には義理ある娘、殊に只の身でもなし、今朝庄屋から呼に來ると、てつきり此事を胸に釘、差當つた手詰の場所、膝とも談合マ如何したら可からうの、と聞くに吐胸の萬治郎、斯くあらんとは兼てより、思ひし事も今更に、暫時詞も無かりしが、御老人の當惑御道理千萬、假令如何樣な事あればとて、主人の胤を懷胎の都路殿、廓へ返す事思ひも寄らず、と申して用金の貯畜とても、サそこでおやに依て談合、三人寄れば文珠とやら、娘汝も何ぞ持合せの智慧は無いかいやい、斯う寄合ふて搜したら、些は出さうなものぢやが、と凝る程いとゞ氣は縺れ、額に皺の寄るばかり、娘はわつと泣出し、他外の娘御達、斯う云ふ義理に迫つた時、我と我身を捨小舟、流の道に沈んでも、親姉樣の難儀をば、救ふは往々

殊に水晶の大玉、こちとらの持物ではなけれど、行德の德願寺樣が、コレ新助、珠數は後生の爲ばかりぢやない、子孫繁昌を祈る道具ぢやと、授けて下さつたコヽヽ此親粒子粒、ハテ一旦は別れても、末では一つに繋れ揃ふと云ふ、愛が彼煩惱即菩提の心、佛の教に違はない、月日の立つは此珠數の廻る通、何にもきな〳〵思ふ事はない、是からおれは往て來る程に、そんなら父樣、何卒首尾して、サヽヽ合點ぢや、仲人は宵とやら其方も奧へ、ソレ人目にかゝらぬ樣に仕や、アイ、眞に何やかや話もあらうし、心殘りのない樣に、オヽそれ〳〵、暇乞も何も角も、ようしての〳〵待つて居や、ドリヤ此珠數を斯う首に引懸けて、曇り霞のない、水晶の樣な新助が心、親方に打明けて、得心さして來ませう、と立派に云ふて立ちながら、涙ほろりと都路も、奧へ紛らす內と外、殘る二人は今更に、誰憚らぬ中なれど、互に何と岩橋の、渡り兼ねたる妹と背の、道は異れど妻戀の、而もいざよふ月の顏、頭巾で隱す後帶、袱紗包の重箱を、提げて店先差覗き、ハイおむつかしながら茶巾少し計、お賣なされて下さんせ、と愛想溢るゝ品形、ヤ眞にお前は日外から、毎日の樣に見える女中樣、大事のお得意、マア〳〵此方へ、と慣れた挨拶、傍に聞くお秀は勃と悋氣の初物、オヽめつさうな、何所の女中ぢややら、知れもせぬのに慣々しい、イヱ〳〵茶巾はモウござんせぬ、あんな女中に搆はずと、此方へごんせ、とひつしよなく、引立つる袖此方にも、留むる袖を揮切つて、連れて納戸へ入る跡に、

しさ、顔に散敷く薄紅葉、アノ父樣の譯もない、顔が顔なら心迄、深山の猿木の實をば、廣い世界の餘物、誰妻櫛に差當て、主の心は知りもせで、わしや耻かしいそんな事、終ぞじらにも云ふてばし下さんすな、と袖覆ふ、會釋も胸に一ぱいの、思を包む心根は、他目に見えていぢらしき、ハテ扨處女らしい、そんな頓着所かい、サア萬治郎樣こな樣のお返事は、何が扨〳〵、斯樣に御恩に預る我々、何の否と申しませう、そんなら然うして下さるか、エヽ忝い〳〵、娘悅べ、女房に持つてやろといやい、オヽ嬉しかろ〳〵、おれも嬉しい〳〵、と悅ぶ間もなう川竹の、憂節繁き苦界とは、知らぬ心の憫然やと、せき來る淚を飮込み呑込む一間より、千秋萬歲と心で謠ふ姉都路、銚子盃携へ出で、アヽ父樣冥加ない、お年の上のお氣苦勞、コレノウ妹、悚へて給も、此身一つは厭はねど、お腹に五月大切な、お胤を宿したばつかりに、義理ある其方に憂き勤、赦して袂に詫淚、アノ姉樣の勿體ない、稚い時から今迄も、苦勞なされたお前への、切ては少しの御孝行、オヽ妹忝い、今から其方も憂き勤、是迄お前が、其方がお前が〳〵、と顔と顔とに散る淚、袖は二つの川柳、風に抱合ふ風情なり、ハテ扨くど〳〵〳〵、役にも立たぬ事云ふ手間で、コレ姉、二人の者に其盃、差詰其方は仲人役、ぐづ〳〵せずとサア早う、アイ、眞に善は急げじや千代八千代、それ者の酌に嫁の盃、さいつさゝれつ献々九献ざつと祝儀は納りける、新助も手を拍つて、しやんと目出たい三國一、が物の譬はコレ此珠數

た、何と相談が出來ませうか、出來るとも〳〵、どの樣にも出來ませう、それは近頃忝い、見さつしやります通の不器量者、姉めが代などと思はしましては腹が立ちませう、畢竟此親父に欺されたと思ふて、アレ〳〵又親父殿が痛入つた口上、アヽ姉御の事は、身受なりや五百兩とも云ふ所なれども、親の立金、ハテしよ事がない、此親方が災難に逢ふたとあきらめて、マア百兩よ、所で妹御の年はやつぱり五年に定め、上端の金はどれ程の望ぢやの、サ其も道理でござります、あの樣な娘を代に遣しますからは、少々金も添へませずば、御得心もござりますまい、其金の工面が出來れば、コレ〳〵親父殿、それは此丁子屋を逆捻といふもの、サヽヽそんなら斯うしませう〳〵、エとんと二十兩かい、エヽ何ぢや二十兩、其は餘りお情ない、ヤアそれでは氣に入らぬか、エヽそんならば三十兩、エヽ、と呆れて興覺顏、コレ親方殿、此方によく〳〵の義理因緣があればこそ、割つ口說いつ皺頭を、地に即けて賴むぢやないかいの、ならねばならぬで濟む事を、アヽヽ阿呆らしい、嬲らしやるは聞えませぬ、樣子に依ては了簡しませぬぞ、アヽコレ〳〵それは短氣な親父殿、あゝ云ふ代物を下から出たは此方の不調法、頓と何がなしに五十兩、今其方に渡しませう、エイ、そんなら此方へ五十兩、ハテ斯う云ふしらの相談に、何の太鼓付しませうぞいの、幸ひ爰に、と五十兩包を前に差置けば、恟りしながら今更に、夢ではないかと心を靜め、そんならば斯うぢやの、妹めを姉め

今來た娘はつゝほりと、仕廻も付けず佛のない、如何して腹を癒ようやら、只我一人燒餅も、燒かれぬ傍に、オゝ此餅が、大方彼お方の包ましやんしたのであらう、是を此儘貰ふて行かうか、イヤ〳〵若爰の娘御が、包んだのなら大きな壺、こちらがさうであらうか、但是か、オゝ眞に斯うして居る間に、ひよつと又彼娘御と、いつその事奥へ往て、イヤ〳〵さうもなるまいが、エゝ〳〵何ぢややらづゝとモウ、あた腹の立つ氣の濟まぬ、と思へばいとゞ上氣して、髻の簪さす間なき、手の置所納戸口、暖簾の風も氣にかゝる、表に往來の多き中、人の目に立つ派手男、云はねど其やと見え透ず、軒の看板に領き、親父の内は爰、ハゝあの餅包んで居るのが、今の話の娘おやな、と咳拂ひして内に入り、コレ姉樣火一つ貸して下さんせ、と云へども此方は空吹く風、アイ其所に有りさうにござんす、とすげない愛想と氣も付かず、じろ〳〵眺めて、テモ見事、目元鼻筋膚のかゝり、親父が話の茶巾餅、あんに相違、と見惚れ居る、娘は小腹立迷ひ、何を云ふやら奥の間へ、氣を空蟬の脱衣、何のまゝよも女の一圖、帶引締めて納戸口、思ひつめて駈行く跡、見送り〳〵轡屋が、コレは氣疎い金ぢや〳〵、アゝ早う極めて行きたいが、もう親父も戻らるゝ筈ぢやが、と競ひかゝつて待つ處へ、心を千々に碎いては、足さへ地にもつか〳〵と、歸る親父を待兼ねて、オゝ親父殿戻つてか、是は親方樣、お早うござりました、然うして娘は見て下さりましたか、見た段かいの、モウ〳〵ずんど念入つて見まし

詮方も、泣叫ぶこそ道理なる、斯かる事とも白玉の、露踏分けて以前の轡屋、駕籠を庭迄舁入れさせ、サア〳〵暇乞も濟んだら、能加減に連れて去なうかい、ヲヽ是は御苦勞でござります、サア娘、親方樣が連立つて行かうと云はしやる、サア駕籠に乘りや、アイ、と返事の後聲も、名殘を鴛鴦の水離れ、立兼る顏打眺め、コレ親父殿、コリャ誰ぢや、早う爰の娘を出しや、かアテおれが娘の其お秀、ムヽ是も娘か、テモ扨も惡い細工の、イヤコレ、おれが約束した今一人の娘を呼んで貰ひませう、イヤ私が娘と云ふは其ばかり、何ぢや娘は是ばかりぢや、ヤコレ親父、此娘を百兩の百五十兩のと、金出して抱へるたはけがあるものか、小錢百五十にも否ぢやわいの、サア〳〵先に此店で、餅包んで居た娘を出しや、と近所も搆はぬわヽり聲、新助一圓合點行かず、テモ變つた事云ふ親方殿、おれが娘と云ふは此お秀ぢやが、若おれが留守の内に、何所ぞの娘でも見えたか、アイナ最前何所の娘御やら見えて、それは〳〵厚皮ましい、サア其で讀めた、おれが面妖な、在鄕ぢやてヽ廓ぢやてと、四角な顏は四角で、低い鼻は低いに違はあるまいと思ふたて、イヤ是轡屋殿、最前見やしやつたは大方他の娘でがな、と半分聞かず氣色を變へ、コレ親父、わり樣は庄屋殿で何と云ふた、エ彼餅包んで居る娘が、欠落した者の妹でござります、年は可い程切つて相談して下されと、云ふたぢやないか、コリャ吹替を喰したな、其ぢや行かぬ〳〵、先の五十兩も返し、埋んである都路を出しや、サ出さねば直に

が代にお取なされまして、エヽ其上へ此五十兩私に下さりますか、サヽ〳〵其所が互の不承づくといふもの、成程慥に取受りました、其は千萬忝い、サア埒は明いたと云ふ物、直に證文もしてしまひましよ、ドレ〳〵硯、かり金の文にはあらで、定つたお仕着せの文句さら〳〵、サア親父殿判捺さしやれ、オヽ爰と爰とへ、オツトよし〳〵、其で判の數の合つた、マア相濟んだ、と親方は、今朝に異りし笑顏、ナントいつそ奉公人連れて行かうかい、ヲヽ如何なりともぢやが、迚もなら、とつくりと何やかや、云聞して遣りたうござります、そんなら斯うしませう、庄屋殿へも濟んだ樣子を斷つて、駕籠拵へて迎に來う、其間に隨分暇乞、往て來ませう、と轡屋は、ほた〳〵勇行く後を、見送る親父は不思議の思ひ、心ならねば納戸口、殿聟其所にか、娘々、と呼ぶ聲も、薄き緣の初夫婦、連れて勝手を立出る、娘の顏の泣腫れて、コレ父樣、暇取る程何やかや、氣の殘る事ばかり、わしや早う廓へ行きたいわいな、オヽ其もよからうか、聟殿にとつくりと暇乞したか、アレ又父樣のわつけもない、モウ諦めて居るものを、早う廓へ行きやんしよ、と立つを引留め萬次郎、コレお秀、何にも云はぬ忝い、幸ひ爰にコレ此銚子、暇乞の盃獻さうか、イエ〳〵そんな盃は、モウ止めて下さんせ、さつきに貰ふた大事の盃、是を廓へ持つて往て、お顏の見たい折からは、此盃を見るならば、お傍に附添ひ居る心、わたしや其を〳〵樂みに、と盃大事と懷へ、泣く聲隱す心根を、思ひやりつ三人が、涙を何と

様の御假名が、イヤ拙者事は此邊にそと致した浪人なれば、假名名乘るも嗚呼がましい、其は兎もあれ好もなき、妹を代に遣つては、其許達が心濟も致すまい、エヽ左樣なら斯う致さう、妹が身の代を受取らう、サア身の代と申して、ちと譯あつて漸く爰に五十兩、イヤサ僅な金子受取らうとて、一人の妹を勤奉公には遣らぬ、此身の代には此方に望がある、オヽ外に望と仰しやるは、此家の娘が貰ひたい、エヽ何が何と、イヤサ身が妹の代には、奥に居るあの都路が所望致したい、と聞いて此方は猶悔り、初の難儀に又百倍、吐胸に吐胸つくばかり、親父はいつそ胴を据ゑ、イヤコレお侍、都路とやら田舍路とやら、此方に知りませぬぞ、イヤサ隠じ召さるゝな、但奥へ踏込み、都路を引立歸らうか、ハヽヽヽ破家なれども此親父が爲の城廓、無躰に踏込召さるゝと、お侍と云はさぬぞえ、ヤ小癪な老耄、其處退いて通さぬか、いつかな事成りませぬ、イヤちよこ才な、と詰寄る侍、隔つる萬治郎、お秀も傍にうろ／＼と、留め兼ねたる一間より、ヤア／＼石田方の軍師志賀左膳、畠山の家臣本田の治郎近經が見參せん、と呼はつて普の襖さつと開き、衣服大小綺羅やかに、邊も輝く其出立、お秀は目早く、ヤアお前は鷲右衛門殿、ホヽウ不審は道理、某馬鹿者となつて徘徊せしも、主君重保守護の爲、其は格別、ヤ卑怯なり志賀左膳、一人の妹を餌に飼ひ、畠山の血脈を懸胎せし傾城都路、人質にせんなどゝは、左膳とも覺えぬ擧動、ヤ片腹痛しと嘲る一言、星を指されて志賀左膳、ホヽ流石の本田至

代官所へ、此街の様子も、杢割つてこますのぢや、と駈出す所を万治郎、お秀も倶に取縋り、マア〳〵待つて、も聞かばこそ、突退け撥引け行く處に、ヤレ待て轡屋、其譯身共が糺さん、と一間に休らふ侍が、引連出る以前の娘、ヤアお前先のお娘御、如何して奥に、と云ふをも聞かず、コリヤ〳〵轡屋、最前此店で見極めたと云ふは此娘か、如何にも左様でござります、サ然らば此娘を渡す、連立つて早歸れ、と思ひがけなき詞に恟り、新助傍に差寄つて、イヤ申しお侍様、何とも合點の參りませぬは、終しかお目に懸つた事もない貴所様が、其娘御を私が娘の代に、オヽ其不審も道理、最前よりふと參りかゞり、餘りと致した笑止さに、拙者が妹を奉公に遣せば、事濟むではござらぬか、ナこりや親方、成程最前見ましたは、其娘御なれども、其許様ハ何國の誰か御相對も、イヤサ名所は娘にゆる〳〵と歸つて聞け、兄親が合點して遣る娘、氣遣ひせずと連れて歸れさ、そんなら兄様、私がお願ひ申した事を、オヽサ何も角も此兄が胸に在る、いぢむぢ云はずと駕籠に乘りや、ぢやと申して、彼子は如何も、と立寄り三人押隔て、サ早う乘りや、アイ、とは云へど戀人の、其手枕に引替へて、夜毎に異る仇枕、乾く間もなき袂ぞと、沈む思を尻目で睨む、兄も眞身の血の涙、互に隱す駕籠の垂、ばつさり下せば、わつ、と泣く聲聞せじと轡屋は、駕籠を早めて立歸る、萬治郎は摺寄つて、縁も無い我々が、難儀に替へて妹御を、お遣りなされて下さります御心底、如何にしても其意得難し、先づ其許

恐れながら重保樣の爲には、身も同然の此親爺、コレ此首を討取つて、切ては是を功にして、今日の所は此儘に、戰場の再會と、立別れて下さらば、新助が爲の經陀羅尼、和子樣お願ひ申します、本田樣にも此場の所、お聞屆あるやうに、偏に願ひ奉る、と彼方此方へ詞廻り、以前の金を打眺め、コレお妹御樣、お赦されて下さりませ〳〵、切ては此金を廓へ戻し、少しなりとも苦界を早う脱れさつしやるやう、コレ左膳樣、宜しくお願ひ申します、孰もおさらば、姉妹共にさらばよ、と云ふも忙しき斷末間、引取る息の敢なくも、老木の花ぞ散失せけり、姉妹わつと取縋る、中に妹が喞言、拇樣に離れしより、父樣一人を杖柱、娘可愛が定ならば、日頃の短氣も武士氣も、止めて長生して給べと、願ひし事も今日の今、徒となり行く前より、死なねばならぬ此身をば、後に殘りし因果や、と聲をばかりの口說泣、思ひやりつゝ人々も、涙の珠の千住川、隄も張裂くばかりなり、左膳も悲歎の涙を拂ひ、扨は我々を育てたる、新平にてありしよな、疾より其と知るならば、生害はさせまじもの、妹が身の上は凱陣の後計らへば、些も氣遣ふ事でなし、只此金は此儘に、お秀とやらへ置土產、親新平が亡跡を、可さに弔ひ得させよと、詞も重き主人の惠、エヽ有難涙、別の涙、涙々の姉妹、共に萎る、近經も、死骸の傍に差寄つて、襟にかけたる珠數取出し、ヤアいかに左膳、コレ此珠數は新助が、末期迄所持せし一連、幸ひなるかな此念珠、汝是より所持なさば、亡き新助も主從と、倶に出陣せし

當の一言、我苟も石田が軍師と仰がれ、軍術肺肝を碎くと雖も、大將の器は未だ備はらざる石田なれば、羽翼とすべき味方もなく、惡き計策なれども、都路が懷胎こそ幸ひ、彼を人質となすならば、智勇烈しき重忠も、恩愛の伽に、鋭き矢先折けんは必定と、扨こそ仕込みし密謀も、斯く顯るれば是非もなし、此上は互の鉾先、いざ立向ひて勝負〳〵、と詰かくる、新助中を押隔て、マヽヽ待たしやませ〳〵、ムヽ扨は此方が志賀左膳殿ぢやよな、と立寄る振にて左膳が差添、拔くより早く我腹へ、ぐつと突込む新助が、思ひがけなき生害に、人々是はと立騷ぐ、音に驚き都路も、一間を駈出で縋付き、コレノウ父樣〳〵、と妹も倶に取縋り、介抱おろか泣くばかり、手負は苦しき聲を揚げ、ヤレ驚くまい騷ぐまい、ノウ左膳樣、此親爺見覺えてはござるまい、お前樣を守育てた、高宮新平でござるわいのう、誠に思へば一昔、元暦の亂より主從散々となり、其より我は爰に流浪來り、茶巾餅屋の新助となつたるのも早十八年、貧しう暮す此年月、御兄弟の行末を、案じぬ日とてはござりませぬわいの、知らぬ事と云ひながら、我娘の代に主君の娘御を、勤奉公に遣ると云ふやうな、因果な者が今一人とはござりますまい、未來にござる親旦那や、奧樣へ申譯の此切腹、こなた樣が石田方になつてござるとは夢にも知らず、二人の子供は皆畠山方となり、知らず圖らず古主に敵たふ此親爺、皺腹の一つや二つや切つたとて、お詫の種にはエヽ足らぬ〳〵、然りながら此上のお願には、都路が親なれば、

第五　道行郷の鶴

飛鳥川、と渡る人の船手して、浮世と云ふも理や、さま〲變るなか〲に、思の露の乾かぬは、下葉之介常胤が、故郷に殘す兄弟が、父母の跡奥州は、彼方の空と松が枝も、馴れし館を遠近の、間もなく病の床に臥し、思はず日數立足も、未だたよ〱と賴りなく、辿り行くこそ哀なる、急がんと、思へばいとゞ捗取らで、心も千々の千住道、未だ幼き胤若が、飛んづ跳ねつも越が谷は、此方よ彼方よと八千代迄、走り躓き早杉戸、幸手も近やさるにても、爰迄は辿りし事もたなさかに、聞傳へにし道なれど、是から先は松が枝も、闇に礫をうつとりと、又胸先へ差す癪を、右と左に取付いて、痛はる効も嵐さへ、防ぎ兼ねたる袖屏風、ヤンレコリヤ〱買しやませ、お子樣方の慰弄、羯皷は取分ひらきさへ、かしこ〱と響そやさる、起縁もよしや足曳の、其山鳥のお望次第、羯皷は幸ひ撥簽の、我等が手細工、召ませい、とぞ賣りにけり、聞くに此方は渡に船、アラ珍しの商人や、定めて此邊の人ならん、御覽の通稚いを連れて旅の者、道を案内の賴もなし、世の中は情とやら、是より陸奥の道筋を、詳しく敎へて給はれかし、其こそ易きお尋なれ、イデ〱敎へ參らせん、と羯皷の拍子に擬へて、見渡せば〱、利根の川筋漕ぐ舟の、さつさ漣波白波の、盛は四季の山櫻、櫻よ櫻、今は白雪咲く花に、古河

心、我は是より都路どの、重保公へお渡し申し、直樣奥州に馳下り、假令夜戰朝霧に、敵は誰とか見へ別ず。此水晶の光ある、珠數をかけたる武者ならば、攻口緩めと觸知さん、切ては主人新助に、重保公が情の返禮、ヤ心得たるか、と手に渡せば、左膳殆ど感じ入り、背くは匹夫の爲ならん、と其儘頸に打かくる、實にも左膳が出陣に、水晶の珠數懸けたるも、其行末の知れざるも、理由は斯くと知られける、萬治郎乾度空打眺め、アレ〳〵〳〵北斗に向ふ衆星の、東にかざす彼光、合戰に日なき天の告、早出立、と勸むれば、本田近經小躍りし、面白し〳〵、寄合勢の蚊蜻蛉共、我槍先で一挫ぎ、ハヽヽ心地よや、と勇の大音、コハ本田とも覺えぬ擧動、爰は忍びの隱家ならずや、殊に大將重保公、不興も未だ赦ざる中、愼まずんば事の破れ、別れ〳〵に落行かれよ、實に道理、と打和ぎ、情は情仇は仇、表は敵の志賀左膳、此場は此儘立別れ、那須野の原にて再會〳〵、オヽ云ふにや及ぶ宇治本田、首洗つて待たれよ、と不敵に放つ戰の廣言、ホヽ〳〵ホヽヽいしくも云ふたり腹痛し、天に逆ふ石田の逆徒、首引攫えて軍門に、梟して見せんは瞬く内、ヤ細言云はずと早歸れ、さらば〳〵も睨合、中に涙の魂呼ひ、返らぬ歎姉妹が、野邊の送葬も亡骸に、唱ふる彌陀の名號は、陸奥の旅出の門送、有爲轉變の世の中や、戀と無常を修羅道に、見捨てる宇治は血氣の若者、本田の豪傑左膳が英雄、三の鼎と鳴響く、戰の高名戰場を、約して別れ三重「出て行く

く、ほんに跡から大田原、小田守神かしらにきて、森こう〳〵と物寂びて、御燈の影の尊くも、我や願をかけまくも、軍に渇仰參拜の其の柏手を指して、アレ鍋懸の里近し、私も手鍋提げてなど、お腹の嬰兒を悦んで、親子三人暮したら、嬉しからうと思ふから、終假初の惡性も、せき留た夜のさゝめ言、それがかうじて口舌して、私が心を知ぬか何ぞの樣に、ないもせぬこと云ひ並べ、俯いて居た衿筋を、お前の足でけがな事、微塵も無理と思はぬは、深う思ふて下さんす、男の心の廻り氣と、眞實拜んで居る物を、世間を晴て何時の世に、ほんの女夫にならるゝかと啣ち涙に道の邊の、清水流るゝ柳陰、男も不便と云ながら、只何事も親人の、御勘氣許りた上のと、兎に角急く道もせに、人の見る目と隔ても、里の子供が取卷は、忍ぶに餘る手鞠歌、とん〳〵〳〵とん、とはやめて戀の、淵瀬にしげる吉原、客を待夜は仲の丁字の花を詠めて、逢ば口說の千話言、中は深川濡れて兩國行大橋に、通ふ誠を寢間でしつぽり、靈岸嶋の朝霧拂ひ淸めて、思ふ願を神明樣へかけた品川、三三四三つや四谷の夜半も、まだ根津音羽とん〳〵、いくついてもア能い手鞠、と夕暮に、心も關の程近く、宿り求めん此方へと、互に手に手鳥が啼く、吾妻からげもはら〳〵と、かしこにこそは三重

第六

や憧るゝ、戀人の、招く手拍子足拍子、しとゝん飛んだり壬生の里、と云はねど知し召るらん、是からは又和子樣の、お氣慰みとおどけ歌、猫唐獅子狐きたに遣れ、狸や腹つたほゝ打やらいで、獸狼顏仕やれ、鼬や犬に嚙まれた、よいやよすがの浮拍子、方々樣には夢にだに、お存しわらし我は是、人にても無し里に棲む、獸と云はん髭親爺、若し夜に入らば提灯も、我通力にて供せんと、約束希有な口々に、雀の宮の留女、控ゆる袖を片敷の、小蔭に暫時三重「休らひぬ

道行四季の手鞠賣

サア〳〵召ませ〳〵買しやんせ、お江戸町中大評判、流行手鞠の縫摸樣、四季の花鳥はなくらべ、唐子唐獅子唐錦、取分名代の紋盡し、先市川に思ひ彌增す三升とは、色のいの字を結綿に、しめて互に若松の、そりや惡性と三つ扇、浮名はぱつと橘や、袖に縫てふ三つ銀杏、重ね扇に松の字は、千代をこめたる契かや、其の外小手鞠大手鞠、數も限らぬ縫紋は、千草結びの緣定め、買なさんせと婉し、長の旅路もまめやかに、番放れぬ妹脊鳥、跡になりふりしやんとして、前になりては振返り、互に顏を都路が、何處やらはでにしど氣なく、廓育の取成を、尤むる人目重保も、窶す姿の鞠賣り、戀の重荷を奧州の、陣屋を指して行く道も、冬の日脚のせはしな

見くらべて濟ぬ顏、寶引繩の二筋に、心悼める風情なり、イヤア送るのじややらくゝるのじややら、とんと譯が知ませぬ、ハテ鈍な奴ではある、早く送れさ、イヤサ早くくゝれ、と兩方から同し旦那が下知二つ、いかにとばかり大勢が、暫時わぐんで見へにける、中にも家來の佐平治が、イヤ中今の間に、旦那が對になりまして、何方がどうじや、我々の眼力に及びませぬ、コナ痴漢者共、石田の家臣伯耆といふ武士が二人有う筈がない、佐和山と名乘武士外に有べき樣はなし、ハテ怪敷や、ヤイ其處な佐和山、向の溝端へ出て水鏡に顏を移せ、ヲヽサ某も移す其方も移せ、ヲヽ移すは〳〵〳〵、サア移したは、己も移すは〳〵〳〵、サア移したは、と一の溝に二つの顏、乾度詠めて我ながら、憔れたり衰へたり、和主が己か己が和主か、獅子鼻に出づ尻迄、微塵も替らぬ衣裝の摸樣、でつかりそげた額迄、コレ〳〵〳〵違はぬ〳〵、違はぬ親の不細工、と互に呆れし斗なり、件の佐平治又差出、此の詮議は仕樣が有、是此方な旦那、お前は何時から石田樣へ味方して、何處の生れじや、夫聞う、ヲヽ某は近江の國、親佐和山が呑拔で、大津の身代を疊み、伯耆〳〵と既に賣れんとした所、石田樣が御狩の次手、拙者が宅へお腰を懸られ、未だ其の時は某も、水の垂る樣な前髮盛り、石田樣のお目に留り、お尻から堀出しのお傍勤め、其の因果で今にやつぱり裏門のお長家住居、傍等も存じて居る通り、決定違ひは有まいが、と語るを聞て家來共、成程〳〵旦那の仰せに違ひない、サア此方な

冬木立、鷲の子も藪影に、舌宇都の宮の宿にや、二人の子供の手を引て、息もひや〳〵松が枝が、敵の追手に取卷れ、漸〳〵こゝ迄遁れ來て、ヤレ〳〵ひやいな恐ろしや、思ひも寄らぬ危い事、マア〳〵爰で暫時と、柴打拂ふて休らふ所へ、蚤取眼で佐和山伯耆、手の者引具し追取卷き、そりやこそ千葉の小びつちよめ、松が枝諸共討て取れ、と下知に從ひ數多の下部、遁さぬやらぬとひしめいたり、松が枝二人を押圍ひ、ヤアぎやう〳〵しい遁らぬ呼はり、女と思ひ侮つて、聊爾仕やると赦さぬ、と嗜め一腰拔放せば、小癪な女め、物な云はせそ合點か、と茅の穗先拔連れ〳〵、討て懸るを切拂ひ、女ながらも流石の手練、根づを流す上段下段、數刻挑み戰ひしが、こりや叶はぬと、佐和山が、逸足出せば下部共、嵐の木の葉と迯行を、遣らじ返せと追て行、跡に危々兄弟が、コレノウ松が枝長追仕やんな、戻つてたも危い恐い、と泣叫び、案じ果し長藪の、小道を拔驅け佐和山が、松が枝は家來に任せ、小びつちよめを、と仕たり顏、そりやこそ爰に二人の餓鬼共、鷲が見付た巣の雛鳥、遁れぬ所じや觀念せい、ソレ家來共引括れ、と旣に危き其所へ、不思議や颯と山風の、吹き行く跡に顯はるゝ、姿は同じ佐和山伯耆、コリヤ〳〵待家來共、此の兄弟の者、石田方へ渡されぬ、隨分勦り大切に、白川の關迄送り屆けよ、はつ、と何でも夢中に請る家來共、此方の伯耆聲荒らげ、コリヤヤイ家來共、何をうぢ付。其の餓鬼共早く引くゝれさ、ハア、コリヤ家來共、早く白川迄送る用意、ハア、とは云へど大勢が、顏

川迄早くやりませい、畏つたと家來共、二人の子供の傍に寄、ハレ能お子供樣方や、恐れながら御ばゐ、と追從たら〱言散せば、胤君は大人しく、そんなら松が枝に逢してたもるか、イヤ松が枝樣は跡から上ます、先々早く、と兄弟を、諫め賺して落しやる、跡打眺め以前の伯耆、コリヤ〱少しでも惡心を起しなば、今の小判は皆木の葉となる事、奇妙頂禮〱、アヽ申〱左樣な惡心は微塵毛頭ござりませぬ、ナ申旦那、如何にも〱、申金福神樣、何卒とてもの事に其のお小槌樣を私に、ヲヽ授くべし〱、と小槌を渡し、福神は、八疊敷程光を放し、かき消す如く失にけり、佐和山主從打連立、アレアノ向ふにちらりちら〱、ちらりん〱と、風鈴蕎麥を見る如き火は、茶屋が軒端と見はんべる、アレ糸竹の音色優しく、慥に女郎屋なんなるべし、我に從ひ來れや來れ、と衣紋繕ひ行く程に、ヲヽ來たぞ〱〱、サア來たぞ、儕等も見立て上れ〱、今宵は已が奢る〱、コリヤ若者、三番目の八丈の着物を着て居るのが能ぞ、モウ早々と臺の物で責かけるが、肴は何だ鯛の濱燒、コリヤ妙でゑす〱、何盃か、扨も味し〱、とは云ふ物の、此の酒はどうやら馬屋の香がする樣な、エヽシテ君のお名は何と、ナニきぬた、ハアきぬたを下から讀ば狸、道理できさん〱たるお姿じやねいじや〱〱〱チヘカ、何モウ寐かすか、コリヤ三ツ蒲團とは有難い、併し此の夜着は衿で目を突く樣な、さらば是から喜見城、寄添給へとたはいなく、前後も知らず伏にける、多勢を相手に松が枝が、數ケ

旦那は相濟だ、其方の旦那の身の上は、ホヽ知た事、天から降らず地からも涌ず、お定りのむしやくしやとした穴から出た、何だ穴から、穴不思議な所から能う出たな、シテ御知行は、身が知行は持前の金、納た鍛冶屋鞴等に風を與へ、雨の夜は川邊に蟹取、池端の藻を葛城の神ならで、諸人に福を與へん爲、金銀錢を吹屋に住、コレ此の小槌を所持する、金福神とは我が事なり、今熟々と汝等が、生業を考へ見るに、若誤て其の子供を石田方へ擒になどしたならば、世上で流行る七色唐辛、地獄へ落すべし、ても七色の地獄といつぱ、とん〳〵唐辛、すは〳〵辛いはなんばの地獄、ふん〳〵辛いは胡椒の地獄、ひり〳〵と辛いは山椒地獄、鼻を通すは辛の地獄、七色唐辛、此の苦しみを立所に受ん事疑ひなし、又心を改め見遁すならば、壽命は龜を富士の山より高く積み、財寶は小判で、近江の湖を埋る程な事いと安し、努々疑ふ事勿れ、と聞て皆々頭を土、申々福神樣、追手に參るも私業ではござりませぬ、何を申も手柄を致し、褒美の金を戴きたい斗でござります、其のお寶さへお授けなされて下さらば、追手の役は打遣つて、七色唐辛の地獄を遁れ度でござります、申福神樣お慈悲〳〵と、大勢が、詞をそろへて願ふにぞ、善哉〳〵望みに任せ得さすべし、と打出の小槌振上れば、金の山を駿河小判、はらり〳〵と投げ散らす、深山颪に山吹の、花吹散す如くなり、伯耆を初め數多の家來、皆慾面の引張合、袖へ捻込袂へくすね、追手の事は打忘れ、コリヤヤイ家來共、アノ小びちつよ樣を、白

第七

雲秦嶺に横つて家何國にか有、雪藍關を擁して馬前まず、其の詩の唐土は、いざ白川の名にも似ぬ、厳發だつ山中に、風も洩さぬ關の戸や、頃しも冬の野も山も、落葉を埋む雪降りて、見るに花わる四方の景、庭に奴が寄こぞり、揉手を口に暖むる、息は火桶の替りかや、折もぞや〱二三人、所めいたる商人が、脊にしつかとおふ布の、目に角立て、コリヤ待ろ、鎌倉からの仰に寄て、佐々木源藏秀義様、御番なさるゝ此の關所、荷物まけ出し見せをろ、と叱り付られ早合點、ハイ拙者共は狭の里の細布賣でゑす、いし達が樣だわらくいかひ體にや、合ふ布はない事、若し夫とも目鏡に入たが有は、どれなりと取やれては、と銘々反物並べ立て、置く十露盤の桁違ひ、粒の揃ふた商人共、通れ〱にハイ〱〱、手早に包み急ぎ行く、道引違へて向ふより、行衛定めぬ旅の僧、身は雲水共へんさん共、うさんに見ゆる破衣、立留まつて聲繕ひ、抑是は筑紫方より罷出たる母衣蝙道心と申す僧にて候、此の度歌枕一見と存じ、千賀の浦へと急ぎ候、と云ふを奴が聞き咎め、何だ此奴、エヽ括り枕か木枕なら聞えたが、歌枕とは何のこんだ、と取わへぬ顔じろ〱見て、ア遉は下々の下主じやよな、歌枕とは歌人の、名所古跡を尋ること、我には赦せ敷島の道な留そと殊勝なり、奴共は横手を打ち、ハヽア夫でさつ

所の疵を大童、刀を杖に突く息も、今を限りの聲を上げ、いと樣喃、八千代樣亂若樣と、呼と叫べと其の甲斐も、嵐の谺音づれて、又顯るゝ以前の變化、申松が枝樣、エヽ殘念なる御有樣、申私めはお屋敷に古う住ました畜生めでござりまする、其の深手では所詮御供は叶ひますまい、ガお氣遣ひなされますな、お二人樣は疾く白川迄落しました、是から乾度私が付添て參りまする、併し關所を越ば聞ゆる大原、犬狼の澤山な國故に、あれから先はどうもお供が出來ませぬ、其の替り忠臣の人にお渡し申まする、お氣遣なことはちつともござりませぬぞ、ヤア扨は屋敷に住し者よなう、シテ二人のお子達は、先達て白川の方へ、そんなら御無事か、アヽ嬉しや、にがつくりと、哀れ果敢なくなりにけり、野風身に泌み目覺す追手、一玩みと小合點き、尾光を一ふり打振れば、一同にくるりと蜻蛉がへり、此方へふれば彼方へくるり、彼方へふれば此方へかへり、くるり〳〵くる〳〵〳〵、性根限り玩まれ、數多の追手は不拔玉、此方は畢丸腹鼓、嬉しやさらば是よりは、姫君和子樣お二人を、白川迄の御見送り、若い衆方も賴みます、サア〳〵是から拍子でやつてくりよ、そくしんしげもぐゑんさい、八もくさいはいきりやきんなん、おとわにてんもく、さゝがにやれきんた、ソレカーラニアタテコびやうどうじやれきんた、ひやうらんどん〳〵、打舞ふ野路の夕嵐に、浮されてこそ三重

奴とは、ひきれい千万、俺は福嶋の御城下へ通る者だサ、いざこざなしに通せろ〳〵、イヤ滅多には通されない、此の關所の掟なりや、其の荷物から改める、と立懸れば佛頂面、エヽ何の角のと喧しい、ソレ改めろと、觀世縒ぐる〳〵引解く行李のわた蓋、内には何にも大なしにでつかり釘拔く奴の定紋、ムヽ夫で讀めた、儕二合半の焚冷しだな、許してくれる、とつとと行ろ、ヲヽ行いでは、と脇指に又も行李を括り付、行かんと駈け出す一間の内、曲者待てと聲掛けて、此家の主佐々木源藏、衣服改め役所に立出、ヤイ夫なる下部つヽと寄れ、最前より見る所、ヤヽ一曲有る面構へ、シテ所持致した其の密書は、何者に頼まれた、エヽ、イヤサ、一字七佛忍摺、なんどヽ云ふ密書の法に引替へて、紙縒の紙にひねり込、余人の眼は晦まさうが、此の秀義や夫では行かぬ、サア眞直に白狀せよ、と三寸俎板見拔た眼力、隱す密書の顯れに、手取早く觀世縒、火鉢の中へ打込だり、ヤア憎い曲者め、ソレ者共寄て搦め取れ、畏つた、とわらして共、騷がぬ源藏悠然と、火箸手草に見物の、庭は奴が死者狂ひ、捕た、と蒐るをおとがひ突、コリヤさせぬはと後抱き、沈んでどつさり車投、續てむんづと羽がひじめ、まつかせ合點、と大手を廣げ、鳥の羽たヽき刎飛され、一度にかヽれ、と駈け寄るを、飛退つて落たる脇差、拔しも果ず火箸の手裏劍、上着の衿際くつすりと、木戸の柱へ縫ひ付られ、拔かんと焦るを大勢が、手取り足取り繩目の關内、喰縛りたる口惜涙、源藏乾度見、ホヽウ出かした〳〵、

ばり理けつが聞えた、此比聞ばお江戸では、大方狂歌がはやるげな、エヽ此の雲の景色で、サ何ぞ一つ所望だ〳〵、とせり立られてぐにやとなり、エイアノ愚僧に歌讀かへ、イヤモ見えばつかりは言はぬ事、是でとんと手目が上つた、歌も人の讀だのを聞た斗で、我等は讀ぬじや、が愚僧も元は一寺の院主、ちとした事で傘一本、されば佛も凡夫も、元一體と說給へば、三十一文字も三弦で、唄ふ小唄も二つはなし、爰も流れの里の內、まぶなやん衆の墨染に、着つゝ馴にし衣から、鉦鼓も曲て鐘木町、擲き上たる不埒より、とう〳〵檀家に追立られ、お拂ひ箱じやと思はんせ、シテ〳〵どうじや、サイナア寺を開けば傘に、人目包みてしよんぼりと、格子先迄焦れ寄、ムウ馴染の君が散と見て、涙にくれたといふ爰か、イヤモ涙は扨置て、三弦取てかく斗、坊樣忍ばゞ闇が能い、月夜には、天窓がふらりしやらりと、サイナ〳〵、振り立て〳〵喋舌りしは、云ずと知れた辻談義、手の隙がない通つた〳〵、心得竹杖すた〳〵〳〵、すた〳〵坊主の來る時は、世の中能いとや申します、すた〳〵〳〵や、と拍子取り、足を早めて通り行く、道をとつかは皮柄の、東の間厭ふやつてらさ、柳行李も風に連れ、さつさとせきに關內が、通りかゝるを立塞がり、コリヤ奴め、爰を何處だとか思ふ、忝くも佐々木秀義樣の、お固めなさるゝお關所だはい、俺が前へちよつつく匍ひ、どれからどれへ通りまする者ではりますると斷つて通り居ろ、と役目を笠にきめ付れば、ヤ此奴が〳〵、奴が口から奴を捕へて

ハテどうかな、と當惑に都路ふつと心付、いつぞやお前のお咄に、源藏樣とはお近付ではないとやら、お顔知すば噓ついて、ヲヽコリャ能い所へ氣が付た、胸膨れのした儘に、足元の事に氣が付なんだ、是がほんの負た子に教へられて、どうかかうかの瀨踏せう、サア〳〵おぢや、と笠傾け、役所の前を行過されば、照葉聲掛け、コレ〳〵旅の人、爰は大事の關所なれば、どれからどれへと一通り、名乘た上で通りやいの、と詞ひいやり疵持足、ハイ〳〵私共兩人は、二本松迄參る者、お通しなされて下さりませ、と笠取る顔を見て悄り、ヤアお前はいつぞや見初めたお方、といふもいはれぬ此場の時宜、此方は夫と白砂の前、日は暮れかゝる足弱連れ、お許しあれ、と行んとす、ア是待た旅の者、女でこそ有此の關守、終一通りの人なら見通しもせうけれど、其方の樣なうさんらしい、そして可愛らしい憐しらしい商人は、滅多に通さぬ關所の作法、マアさう思うて下さんせ、と顔に照葉の櫨紅葉、二人はもぢ〳〵、迷惑ながら、草鞋解々割膝三つ指、何じやいなあ、遠くへずつと退て居ずと爰へおじや、ハイ〳〵、わしが傍へ、引付て假名實名、夫よりはマア差當つて問たいは、どうした譯で女中連、旅する譯も何も角も、とつくり詮議した上で、五十年もそして又、百年も留めた上、彌相違がないならば、通しなりともどうなりとも、そりや其時の事いの、と戀の渡りをかけ橋や、其の一言に絆まりし、葛城ならぬ詞の謎、都路はむつと顔、ヲヤ呆れんすによ、五十年の百年のと、關の戸も有樣

其奴詮議の有奴なれば奥庭へ引廻せ、承はる、と大勢が、追立られて入にけり、此方の襖訪ひて、洩來る振りの留木さへ、ぽつとりとして端手ならぬ、娘照葉は優やかに、父の前に手を支へ、お年の上の御大役、お宮仕もせう物と、國から態々參じても、お肩揉ませうイヤ能、お腰打ませうイヤ夫には及ばぬと仰しやれど、朝から晩迄役所の御吟味、今日は殊なう雪も降る、冷が入たらお身の毒、往來途絶し今の內、爰は妾にお預なされ、其の內暫時お休と、親を思ひの孝行心、源藏はく〳〵打點首き、はや六十も越たれば、其方が案じも理りながら、仙臺に陣を張り、畠山の重忠が軍勢を留めん者、秀義ならで外になしと、石田の判官が吹擧にて、幼君の命を蒙むり相守る此の關所、武備を表に張らざるは、油斷と見せ懸け重忠に、泡吹せんず謀、別して云ふは其方が兄、佐々木三郎盛綱は、奥州勢に一味合體、治男の高綱諸共に、幼君に仕ゆる某、親子兄弟敵味方と成たる上は、畠山が手の者を、少しでも用捨せば、血筋の緣に引れしなんど、云ひさがされんも心外千万、其方が優敷詞に赦し、暫時は預る此の關所、必ず麁略召るな、と念の折釘打返す、本卦返りの岩疊作り、鍛ひ磨くや銅金の、刀提引入にけり、梓弓矢竹心や武士の、矢壷籙は負もせで、戀の重荷を奥州の、道案內も白川や、關所の前に立休らふ、イヤノウ都路、万治郎が差圖故、俺と汝は引放れ、手鞠賣と狀を變へ、父上のおはします、陣屋へ急ぐ道すがら、聞しに違はぬ此の關所、重保と見るならば、そも安穩には通すまじ、

わつちや何にも云ひせんけれど、關所の法じやの何の迚、取付たり吸付たり、仇舌たるい娘御樣、ヲヽしたたるいとはそもどの事、アイわつちやする筈でしたたるいのじや、入らぬお世話構ひなんすな、さういふ其方構やんな、イヽエずんど構ひす、わつちが殿御で妾が構ふに、關守樣は扨置て、鎌倉の將軍樣でも、地獄にござる閻魔樣でも、何とも云ふ人はおざんすまい、イヽヤ有はいの、そりや又何處に、ヲヽ爰に、エヽ置なんし、とはしたなく、行儀壞れて嗜の、里の言葉に言廻され、嗔恚の角を振袖や、詞詰袖口ばやに意地を、針目の縺るゝ爭ひ、娘默れ、それでもお前、ハテサ默れといへば控へて居ろう、と叱り付られ、手持なく、なけくびしたる娘の斷葉、秀義は詞を正し、イヤノゥ旅人、此の白川の關を越れば、名にし負ひたる阿武隈川、夫を渡つて根田須加川、泊りへ着くには道も遠く、殊更に此の大雪、見苦しけれど身が屋敷に、今宵一宿仕召れ、と留むる一物重保は、心に頷き頭を下げ、コハ有難き御惠、然らば仰に隨ひませう、と打解る顏娘が悦び、粹な父樣忝ひ、サアかうお出で、と氣も浮々、浮ばぬ都路口の內、エヽ物騷な泊り宿、安達が原の黑塚より、白歯の安中の鬼一口、油斷がならぬ、と六郎に、付纏つて人相の、鐘に散り行く花ならで、降り積む雪に心なく、跡踏付る高足駄、のつさく〱と井上治郎、案內もなくずつと通れば、源藏威儀を改めて、何が差置、井上殿、忍びやかに來られしは、子細ばしいな、ホヽウ其元の添役迚、差添られし此の村澄、推參せしは別儀にあら

に、悠長らしい事斗、そしてどうやらそは〳〵と、味な事をいひなんす、留られて能いことなら、來年の春長に、ゆるりと爰へ泊りに來いせう、此の樣な所へ居なんせずと、サア來なんし、と手を取れば袖引留めて、ソリヤ成まい、詮議の濟ぬ此の商人、妾が赦さぬ其の内は、往來叶はぬ此の關所、夫程に行きたいなら、そもじばつかり往たが能い、是いのう手鞠屋殿、アノ手ずさみにつく鞠の、數も積りし年月の、胸にからみし糸筋の、縺るゝ思ひいはず共、エ、とつとモウ推してくれたが能いはいな、脇へ外して見ぬ顏は、難面はいな、と取り付いて、思ひのたけを友禪や、顏に散しの紅鹿子、其手を取て突放し、拜みいす置てくんなんしよ、未だ娘御と思ひの外、わた厚かましい事を云ひなんす、コレ此の道連の手鞠屋殿は、妾が大事のお人でおさんす、譬夫こそ虎伏す野邊、鯨に魚虎磁石に針、どつて迄も付纏て、一所に行かねばなりいせん程にな、さう心得てくんなんし、とつつけり云へば堪へぬ娘、イヤ〳〵なんぼ其の樣に云やつても、關所の掟は背かせぬ、と又立寄つて引立れば、さうはさゝぬ、と引放し、互の色目穗に出る、尾花が中の男郎花、楓の手先繊分けの、色香亂るゝ風情なり、何事かはと奥の間より、出る主が咳に、消え入る娘都路も、どうやら心ぞ置れける、源藏苦りし澁々聲、若き女子の有まじい高聲は何事、シテ爭ふは如何なる子細、と問はれて、はつと口どまぐれ、サア夫はな、妾が關所の作法を立て、詮議をせうと思ふても、アノ女中が邪魔ばつかり、アヽこれ、

色いらゝげて、ヤア口のませたわつぱしめ、そんなら僻ぬかし居れ、イエ〳〵やつぱり妾も存じませぬ、と同じく姉が取り敢へねば、ヲゝ能い〳〵、親の名隠すは彌々曲事、此の頃聞ば千葉の助が二人の子供、奥州へ下る旨、正敷それ、と見た目は違はじ、イデ一詮義、と立上る、ヤレ待れよ、なぜ止めさつしやる、イヤ全く止めは仕らぬ、が貴殿の様に云はれては、幼少者は怖ぢ恐れ、云ふべき事も申さぬ物、マ下にござつてお尋なされ、イヤナニ稚い者能う聞けよ、下主下郎の悴ならば、吟味も遂げず通さんなれど、幼少なれど両腰を手挟む故、其の姓名を相尋ぬる、悪しく身共が斗らはぬ、首に懸けしは守袋か、如何なる者ぞ心得ず、中改めて取せん、と事を分けたる秀義が、詞聞き分け温順しく、其の様に云ふて下さるに寄て、大事の〳〵守じやけれど、お前にばかり見せまする、と渡せば取つて改たむる、中に込たる紙包み、上總の國の惣鎮守、八幡の守と書き付しは、胸にしつかり覺の手跡、扨は古き好身ある、千葉が二人の子なるよな、其の儘に通しやせつ、イヤ〳〵君に弓引く一族を、見逃さんは不忠の到り、兎やせん角やととつ置つ、道の佐々木も猶豫の體、どうでござるか源藏殿、手懸りでもござるかな、と問ひ覓けられてさはらぬ體、アイヤさしたる證據もなき上は、氏なき者の子と見えます、コリヤ兄弟の者、身が云ふ事を承はれ、いか程武士は倦ふても、いはぬと一旦言ひ出しては、一分試しに刻まれても、云はぬが武士の意地と云ふ物、兎角いふては爲にならぬ、が又どの様

ず、鎌倉より飛札到來斯の通り、と差出せば、秀義取て押開き、ナニ〳〵さいつ頃鎌倉を出奔せし畠山六郎重保、父重忠が跡を追ひ、奥州へ下る條、注進わつて具に聞く、然らば其の道白川に出んか、貴殿等兩人心を合せ、討取に於ては尤も大切たるべき者なり、石田の判官爲久判、と讀終れば膝擦り寄せ、なんと見られしか源藏殿、先刻家來が注進に、人品骨柄の能い男、此の地に見なれぬ女を召連れ、罷り通ると承はる、なんと其の重保臭い奴は、まだ關所へかゝらずやと、問ひ寛れば聲を潜め、ホヽウ斯く有んと存ぜし故、其の兩人は早疾くより、ムヽ留め有とな、出來た〳〵、然らば某加勢して、引包んで討取らん、ヤレ音高し村澄殿、高の知れたる小伜一人、討捨るになんの手間隙、今宵八聲の鷄を相圖に、首搔き切りて相渡さん、貴殿は直樣此の地を出立、鎌倉表へ差上られよ、と云へば井上すく〳〵小躍り、然らば万事拔りなく、ナヽかう〳〵、と耳に口、牒し合する密談は、洩さぬ關の道も瀨や、爰に哀を止めしは、千葉の助常胤が、二人の子供が身の上なり、杖よ柱と賴みたる、松が枝にさへ引き別れ、侍づく者は雨風を、防ぐ甲斐なき小笠より、外には便りなく〳〵も、漸々關所に差し寛れば、治郎見尤め尖り聲、コリヤヤイ餓鬼共、待居らう、ムウ見た所がまんざらに、拔參りの子供と見えず、國所から親の姓名、キリ〳〵扱かせ、と押柄なり、胤若はむつと顏、イヤ〳〵父樣の名は俺や知らぬ、知つて居ても侍の、行儀を知らぬ慮外者にいふ口持たぬ、と云ひ放せば、治郎面

澄にた〳〵笑壺に入り、小手を寛めた情の罪科、何奴も此奴も慄へて居るか、へゝゝ寒いか〳〵、僻等が慄うでどうやら俺も寒くなつた、ヲゝ寒む〳〵〳〵、ハゝゝフゝゝゝ冷凍へてくたばらぬ内、ちやつとぬかしては仕廻ひでな、追付謬りました、申しませうとこ吼な、と惡口だら〳〵座敷に上り、イヤノウ秀義殿、最早木戸も打たれば、奥へ參つて雪見酒、八聲の鷄の謠ふ迄、御造作になりませうか、いかにも〳〵、いざ此方へ、と先に立ち、心殘れど是非なくも、襖引き明け入にけり、跡に悄然兄弟が、木戸の板戸に隔られ、呼ぶは關所の外が濱、安方鳥のそれならで、塒分けたる雛鳥の、同じ古巣の共捿みを、戀しのびつゝ差し寄つて、姉樣イのう、胤若のう、と互にあこがれ呼交はし、覗く透間も雪明り、羽根が欲しや、と打臥して、泣き喚ぶこそ道理なり、頃は霜月半は過、實に寒國の慣とて、峯吹き送る雪颪、姉は帶紐とく〳〵と、上着の小袖脱ぎ捨てゝ、ノウ胤若、吾儕より此の八千代は、小袖を一重厚ら着てさへ膚を通す此の大雪、余長もない其方の身は、冷へ凍えて堪るまい、其方に着せうと今脱だ此の小袖、其方らへ遣らうと思へども、エゝどうもならぬ、爰に有此の小袖、其方の身に着たと思ふて辛抱してたもいの、といふも戰々夜嵐に、間なく隙なく心なく、降くる雪は身に應へ、齒の根も合はぬ震ひ聲、胤若震ふ聲隱し、イエ〳〵坊は着いでも能い程に、脱つしやつた其の小袖は、やつぱり着て居て下されや、ぼんこそ皆な衣脱いで、お前に着せたが弟の役、お前

に陳じても、云はさずに置くべきか、ノウ井上殿、何とさうではござらぬか、と父の姓名明すなど、噛んで含める情の謎、心盡しぞ淺からね、治郎は夫と氣も付かず、イカニモ貴殿の云はるゝ如く、骨を拉いで云はしてくれん、と足駄踏しめ、白洲に下り立ち、サアちつぺいめ、意地むだ拔かすと息の根止めるぞ、夫でも儕ぬかさぬか、とせちがひ蒐れど悪びれず、どんな事云ふて威しても畏うない、父樣の名は知らぬわいのう、エヽしぶとい小びつちよめ、サア女よ押默言つて居をらずと、千葉が二人の子供じやと有樣にぬかしをれ、イエ〳〵私共は左樣な者ではござりませぬ、お赦しなされて下さりませ、ヤア默れ女郎、甘ういや付上り、土性骨のしぶとひ奴ら、しつこうぬかさにやまづかう、と取て捻伏せ、高歯の足駄目鼻も分かず、打据ゑられ息もヒイ〳〵、絶え入る斗り、上に源藏留もならず、隱し涙に暮六つの、拍子木の音喧すく、エヽもつと拷問せうと思へば最早日が暮た、去るにても此の餓鬼奴ら、引緊りて獄屋へ入れば風を防で結句暖か、ムウ思ひ付た、と八千代が衿髮、摑んでどつさり關所の門、コリヤ姉樣をどうすると、聞ゆる胤若引つ抱へ、儕めは此方へうせ上れ、としめ出す木戸の戸ぐわつたひし、撃てどしやくれど其の甲斐も、塞がる胸にせき來る悲しみ、ノウ是姉樣胤若のう、お前も其方も此の樣に、引分けられた木戸の外、是申し拜みます、假令死とも兄弟一所、一つに置て下されと、喞ち詫れど返答も、涙しめ出す關の戸や、泣目も明ぬ兄弟が、心ぞ思ひやられたり、村

に止め止められつゝ、眞は泣寄兄弟が、姿も雪に埋もれて、木戸にひつしと抱き付、泣聲さへも冷閉だて、足摺したる有樣は、目も當てられずいぢらしき、八千代心を取直し、アヽ歎くまい悔むまい、所詮からなる上からは、其方の死にやるも止めやるまい、姉もコレ此の守り刀で、其方と一所に行く程にの、今唱ふる念佛の、申終りが此の世の名殘、先立もせぬ後もせぬ、息を一つに引き取つて、冥途の道へ連れ立ませう、と泣々云へば胤若も、嬉しげに打點き、ヲヽそんならお前も死しやるかや、坊ばつかりでは淋しかろと案じたに、姉樣と一所に行きや嬉しい〳〵、エヽ此の世の心殘りには、同じ所に居ながらも、母樣じやと思ふて居る、お前のお顔の見られぬが俺や悲しい、としやくり泣き、ヲヽそりや俺とても同じこつちやはいのう〳〵、云へば云ふ程未練が起る程に、必ず念佛忘りやんなや、アイ〳〵南無阿彌陀佛〳〵、と互の覺悟、折よく聞き付、奥庭より蹴けつ轉びつ、駈け出る奴、申し〳〵〳〵、關内でござりまするぞ、胤若樣八千代樣、必ず〳〵早まつて下さりますな、と留むる聲を力草、ヲヽ關内か能い所へ、べいよどうして爰に居る、と聲のみ洩るゝ戸の透間、ヤレ聲高におつしやるな、當秋お暇下されて、お館を出し折柄、道にて聞はお家の沒落、南無三寶、と取て返せば、早石田めが住家となる、其の時の殘念さ、イヤ〳〵此の樣な事で隙取よりは、貞元殿の密書をば、旦那へ上んと心急き、人目を忍ぶ紙縒の密書、源藏めに嗅ぎ付られ、後悔跡で返らぬ縄目、お詫の種はお二人

が一重脱しやつたら、俺は裸になりまする、と云ふ聲聞き付け姉八千代、アヽコレわつけもない〳〵、コレ〳〵そんなら姉も衣着る程にの、何處ぞ其處らに木陰も有ば、せめては其處へ身を寄せて、夜風凌いで居てたもや、アヽ思へば〳〵淺間敷や、時代に連るといひながら、千葉の助常胤の、二人の子供と侍づかれ、透間の風も厭し身が、習もつかぬ旅の空、松が枝に離れてから、今日此の關へ來る道も、里の童が取り卷て、知らぬ子供と打擲き、疲て人の軒の下、茶屋の床几に休らへど、お錢持たねば横着者、掏兒よかたりと追立てられ、やる方もなき憂苦勞、まだ其の上に此の難儀、松が枝が居やつたら、此の辛いめは見まいもの、どこにどうして居る事ぞ、松が枝喃と妹弟が、今は此の世になき人と、知らぬ冥途の魂呼ば、谺のみこそ應へける、稚心に胤若は、常々父のお咄に、侍と云ふ者は、まさかの時は腹切て、死恥隱すとの給ひしは、かゝる折ぞと覺悟を極め、コレ姉樣、お前を其方らの木戸の外へ、閉め出したこそ幸なれ、これからもつと先へ往つて、夕邊のやうな辻堂が有たなら、そこへ寐ねして風引て下さるな、坊は痛くも腹切て、流石侍の子程有、擊ち擲かれたを無念と思ひ、見事に死んだと云はれるが、俺や嬉しうござります、姉樣さらば、と覺悟の聲、ヤレ早まつてたまるないのう〳〵、其方が爰で腹切たら、父樣や母樣へ、なんと云譯せうぞいのう、妾から先へ死せてたも、アヽコレ姉樣待て下さりませ、必ず死で下さるなや、ヲヽそんなら其方も、アイ〳〵お前も、と互

左右に疾くよりも、窺ふ曲者四邊に目配り、一心通じて關内が、念なう荒繩擦切る手先、ヤレ嬉しや、と起立つ間もなく忍びの侍、其の儘むんづと二人の兄弟、アレエ〳〵の聲斗、飛が如くに跡白雪、關内は地團太踏み、エヽ仕なしたり殘念や、追駈やうにも相手は二人、一人を追ば一人が迯る。エヽ是もやつぱり佐々木が仕業、目指す敵は此の家の主、喰ひ付ても此の恨晴さいで置うか、と踊り上り飛上り、奥深くこそ駈り行く、客饗應の奥座敷、外して井上呼子の高音、相圖に入來る家來の面々、イヤなに者共、此の家に籠る六郎重保、若し源藏が手に餘らば、矢襖作りて射て落せ、ハツト領掌家來共、別れて忍ぶ奥の間は、琴の音色も更渡る、憎からぬものとては、いとゞ侘しさは獨り眺むる閨の月、草の庵の夜の雪、日頃戀しい〳〵、と思ひ暮し、お留申したアノ御方を、畠山の重保樣とも露知らず、去年の秋、江の島詣での時、思ひ初めたが初戀路、焦れ〳〵て思はずも、けふ廻り逢ふ此の關所、御目にかゝるも盡せぬ緣、アヽ嬉しやと思ふた甲斐も情なや、苦は色かゆる今のお詞、此の重保に添たくば、父源藏を味方に付るか、得心なくば首討てとの御難題、何ぼ娘が不便なとて、忠義一圖なアノ父樣、何のお味方なされうぞ、況て子の身で勿體ない、お首が討るゝものかいな、親にも身にも引換て、慕ひ慕ふた殿御のお頼、叶へたうて〳〵ならぬけれど、是斗はどうもならぬわいな、重保樣に添ふ事もならねば、生て居たとて甲斐ない事、何にもせよ父上へお願申し、お聞入なき時は、

様、拙者めが居りますれば、モ滅多な事さすこつちやではりませぬ、必ず〳〵死でやなど下さりますな。エヽエ。ヲヽそんなら死なずに居る程に、姉様や已を連れて、父上に逢せくれいやい、ナイ〳〵、イヤモお供致さうと存じても、コレ御覧遊ばせ、此の様に縛られ、両腕共に叶ひませぬ。シテお二方の御供は、松が枝様と聞ましたが、サア松が枝は追手の者と切合つて居やつた。已等には先へ行けといやつたに寄て、先へ来ての此の難儀、ムウすりや松が枝様は追手を防いで、エヽ怪我なされねばよいがな、アツア浮世は車と譬に違はぬ、此の春の大雪には、ソリヤ若様のお雪見じやと、大勢の小性衆が、綾や緞子の敷蒲団、お乳の人じやの、お守のと、人の屏風で取廻し、此の奴がお庭先で、でつかちない雪転し、猫か犬か解ない、雲の兎が御意に入て、是をべいに取らせとて、いたいけなお手づから、召してござつたお羽織を、戴く事は戴いても、何のマア松の木のやうな荒くれ腕、通す事もならねども、有難さは五體に通りましたわいの、イヤ又天道と云ふものは、慈悲深いものじやと思ふたが、料もないお子達の、じゆつながつてござるのに、せめて雪を小降になぞする事はならぬかい、と見上る目さへ紅の、霰たばしる血の涙、エヽけち忌々しい、云へば云ふ程降つてくる、モこんなうそ鈍な事云ふ内に、此の縄解かずに置うか、と木戸の柱に擦付〳〵、擦切る肥肉、血汐は雪を染りなして、紅蓮地獄や八寒の、呵責はまさに身にかゝる、縄引切つてお二人を、助んものと身を悶掻く、關所の

したうてもどうも刀が、アイアノ荷箱に主の刀が、ヤヲサ、、、、そんなら早うと、氣も關內、奥と口とへ心を配り、庭へ駈下り取出す一腰、渡せば取て脇挿み、シテ此方樣の嗜みは、豫て用意の此の懷劍、寢所は奥の間、合點、と踏み出す疊の緣傳ひ、忍び入てこそ不敵なり、旣に五更の鐘に連れ、金鷄羽打て曉の光を流す橫雲や、八聲の相圖に井上治郎、股立凛々敷廣椽先、源藏殿やおはする、畠山の六郎が首お渡し有れ、と大音聲、ホヽウ夫へ參て相渡さん、と襖引明け佐々木源藏、首桶小脇にしづ〳〵立出で、イザ改て請取れよ、と蓋押開けば、とつくと見、元結切つてちつはろ髮、血に面はまみれたれど、相違もなき前髮首、身共は是より鎌倉へ、此の首持參仕らん、シテ彼の兩人の小忰めは、イヤ其の儀も此の源藏が胸に有、然らば直樣お役目御苦勞、おさらば、と式禮目禮井上は、雪踏立て、急ぎ行く、跡見送りて源藏は、何角思ひの有磯海、底白浪の音に通ふ、有合ふ皷取上て、實や人の、親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふては、今こそ思ひ知れたれ、と聲打曇る後には、差足拔足都路が、油斷見すまし突かくる、懷劍持つ手を拂ひ退け、ヤ某を討んとは淺とき女の謀、手鞠賣と身を略せしは傾城都路、エヽヤ知るまじと思ふか、連れの男は六郎重保、昨夜留めしが身が計略、最早首討て鎌倉へ渡したわやい、エヽすりやアノ六郎樣を、ハアはつ、と計に都路は、胸も張り裂く口惜淚、エヽさういふ事とも露知らず、殿樣にお譽のお詞受うものと、思ひし事も水の泡、大事

覺悟極めて居りまする、申〳〵重保樣、とても此の世で添はれずば、未來で添ふて下さんせ、エ今一度お顏がしみ〳〵と、見たいはいな、と伏し沈み、聲も忍びの噓泣、覺悟極めて奧の間へ、歩む疊の目て淚、落て流れの川竹や、渡りくらべし粹の身は、人の辛さもしみ〴〵と、身につまさるゝ都路が、跡打見やり一人言、照葉樣の今のお歎き、アノ小陰で立聞して、悋氣所は何處へやら、どうぞ首尾能う父御樣を、お味方にお付遊ばせへ、アイヤ〳〵、爺御樣がお味方なされたら、彼方は御本妻、コリャかうしては居られぬはいな、と云ふてどうせうぞ、ヲゝそれ〳〵、どうかかふかの解らぬ內、殿御を連まして、此の場を退が上分別、さうじや〳〵、と帶引緊め、驅け入らんとする後より、イヤ其の分別惡からう、と立出る奴關內、ムウ終に見知らぬ奴殿、其方の知た事じやない、ヲゝサ我は知らぬ事じやが、此方樣の今の分別、重保樣が聞しやつたら、謀の邪魔する女、隙くれると、叱らつしやるは定の物、夫が憐しさ丸う納る思案を借に出ました、と早の空に夕立の、降蒐つたる雲助奴、テモマア粹な能いお奴樣、どうぞ其の思案を、サゝ貸ませう〳〵、コレ其の思案と云ふはの、佐々木が寢間へ忍び込、源藏奴を擊放し、照葉に鼻を明したがよごんすはいの、じやといふて、女の身でどうマア夫が、サゝゝコレ氣遣ひせまい、我もお味方の者でござんす、最前此の關所へ捕へられて縛り付られたが、どうやらかうやら繩は引切た、が腰の物も取上られ、流石刀一本御ざんせぬ、俺が加勢

悴、其奴め諸共に見遁し置しも我が寸志、ムウそれに居るは夜前留つた手鞠屋よな、取に足らざる下主下郎、關所を通し遣せしに、何用有て立皈つた、狼狽者め、と籠る情は善心か、底意白髮の佐々木が詞、聞咎め六郎重保、スリヤ某が首なりと、身代を以て鎌倉を欺き、此の攻口に懸られじと、扨こそ斯は謀りしな、智勇正しき佐々木とも覺えぬ振舞、シテ小ざかしき一言、某が所存の程一通り語り聞せん、石田判官内外を縫まへにし、幼君の仰と僞り、我意を振ふと知りつゝも、下知を守る所存と云つぱ、鎌倉の恩澤を蒙りし此の源藏、善惡虚實は兎も角も、賴家公の仰とある其の一言は默されずと、義を重んずる心底を、能く知つたる娘の照葉、重保殿の難題を、立れば不孝と思案を極め、首を男に仕立上げ、六郎殿の身代として、未來の緣を結びくれよ、としみ〴〵と搔口說く、ヲゝ末期の願ひ聞き屆けたと云ひ聞せば、尋常に襟搔上げ、親が刄を持たる健氣さ、適は我が子なるぞよ、ホウ出かいたと云ひたさを、喰ひしばりたる胸の內、あはれ世が世で有ならば、似合ひ頃なる重保殿、聟よ舅と云ひ交さば、彼が悅び某が、老の樂いかばかり、エゝ命長き耻多しと、由なき老後の武達邊、肉身分し悴とは、鎬を削る敵味方、月とも眺め花とも見る、其の愛し子の照葉めが、首討つ時の我が心、コレマどの樣にあらうと思ふぞ、是迄數ケ度の戰場にて、思ふ敵を組敷て、首搔時の嬉しさとは、雲泥萬里の違ひにて、太刀筋しどろに有しぞや、と百萬騎の強敵を、留むる軍慮は持たれ共、瞼

の〳〵重保樣。ようむごたらしう切りやつたのう、此の都路が恨みの刄、思ひ知らせん覺悟仕や、と又突蒐るを鼓のあしらひ。後詰は關内飛で出で、御兄弟の御子達を、浮き目に合せた御主の敵、觀念せよと切付る、二人が切先身を轉し、弱腰はつしと蹴落す椽側、思へば無念、と目配し飛び蒐らんず二人が血相、ヤア〳〵兩人早まるな、聊爾なせそ、と聲を掛け、小庭の陰より六郎重保、跡に引添ふ宇治万二郎佐々木盛綱、同じく稚子誘へば、見るに二人は二度恟り、ヤアお前は御無事で、ヲお二人樣も御息才、是はマア何たる事じや、夢ではないか都路樣、ヲヽ嬉しかろ奴殿、と詞そヾろの悦は、醫者も見切た卒中風、亡者の廿四時目に蘇生たるごとくなり。佐々木の三郎詞を正し、君御下向ましますの由、万治郎殿より知らせの使、あるは布賣鉢ひらきと、樣を替へたる忍びの注進、お迎として夜前より、忍び寄たる關所の外、サレバ〳〵某逆も左の如く、見え隱れに守護せん爲め、窺ひ來りし木戸の外、云ひ合さねど兩人が、斗ず助けし二人の子供、去にても心得ぬは、秀義の所存の程、裏口より忍びやかに重保を落せしは、石田が逆意を疎じて、重忠公に降參召さるゝ所存よな、と云はせも果ず、源藏秀義、奧齒嚙割る嘲り笑ひ、儕を知つて他を知らぬを、遼東の豕と古人の譬、其の身の心に引較べ、降參などゝは穢はしい、殊更重保を落せしとは、紛らはしき宇治が詞、コリャ誠畠山の六郎は某最前首討て、井上に渡したれば、存命すべきいはれなし、又古より好身ある千葉が

の光り、雪が有ぬか見越の山々。風に飜めく怪しの白旗、人々素破やと見構へす、ヤア〳〵騒がれな旁、あれこそ身共が手にかけし畠山の重保を、野邊の送りの旗天蓋、悪魔を拂ふ鉦太皷、葬る寺は仙臺の、瑞巖寺迄見送りは、他生の縁の旅宿の好身。頼むは手鞠屋二人の者、能にと斗り、秀義が夫と岩出の道摺導、重保はつと感心有、敵ながらも適れ佐々木、我に代りし亡骸を、冥土へ導く旗手こそ、此の世を去つて厭離穢土、極樂淨土へ死出の旅、南無阿彌陀佛、と御回向、此の奴めも憚ながら、アノ御死骸を見送るが、せめてお禮の端くれ、と二人を勦り立上れば、ホヽウ頼母敷首途や、分て倅は敵味方、娑婆の名殘の餞別せん、と扇おつ取り立上り、疾く〳〵立やたつか弓の、心赦すな關守の人々、暇申してさらばよ、と見交す胸の愛別離苦、餘所にもそれと白川の、關かはら〳〵落かゝる、袖に涙の陸奥や、末松島の二葉なる、二代の執權重保の、御供申人々は、仙臺指して、三重出て行く

を洩る〻恩愛の、涙を防ぐ兼にける、都路は咽せ返り、ノウ愛しの御最期や、其のお心に耻入つて、妾が縁は此の世ぎり、未來永々末かけて、結ぶ堅めは妾が媒、迷はず成佛遊ばせ、としやくりあげたる口說言、心酌みたる六郎は、萎る〻瞼押隱し、今此の關所を通りしは、貴殿の情、さりながら、此の儘に差置くは、あつたら敷武士の、後ろ闇きに有らざるや、ホヽウそれにこそ子細有り、人氣和せざる石田が裁配、鎌倉滅亡近きに有、貴殿一人討つたりとて、天の利を得し重忠の、鉾先やはかなまらんや、殊更其の體、供をも具せず、足弱連れの旅の者、見遁し通して害なき事、よしんば其元重忠の、後詰の軍勢引從へ、此の山道へ蒐らるれば、其の時こそは此の佐々木、あはよく通し申さんや、といふを打消し宇治萬治郎、コハ口廣し秀義殿、譬孫呉が奧義を振ひ、關所を固め防ぐ共、我樊噲の力を以て押破らんはいと安し、と勢ひ蒐れど騷がぬ佐々木、イヤ〳〵それは血氣の勇、騎馬の三騎も立ざる山合、横矢に懸つて射落さば、仇矢嵐に木の葉武者、むら〳〵ぱつと追崩さん、盛綱引取れ、イヤノウ親人、其の戰の虚を窺ひ、案內知つたる間道より、後の山道打越ん、ホヽヽ其の間道も豫て大磐石を釣べ懸け、切て落さん我が手配り、然らば山の谷傳ひ、アノ庭先の抜道より、先此のごとく犇々と、押寄せられたる其の時の、用意はいかにサヽいかに、何と〳〵〳〵、と詰寄る二人、イヤ云れざる問言かな、敵の陣所へ踏込む面々、虚氣し魂取り挫がん、と傍の皷飛石に、はつしと忽ち狼煙

宇賀道者源氏鑑

作者　福松陶芋

山は淺黄に紅葉の〱、盛を染て詠ん、抑このふたりの女は、伊豆國の住人伊藤入道祐親が娘、櫻木梓といへる姉妹にて候、爰に仙洞後白河院、城州の國高雄の山上に於て、紅葉の御遊を催され、天上の樂しみを摸れんとて、七夕誕生の女を召れし、紅葉の橋を修補はせ、叡覽あり度勅により、賤しき女の姿に倣ひ、只今高雄にのぼらばやと存候、頃しも空を渡雁、あたら白雲書ちらす、其文月の封を切し、上の五日の曙に、木々の閨もる朝影、照添ふ布の赤前垂、しやんとしめたる黑繻子の、帶で文なす木綿地に、夏の楓を靑々と、染て間もなき、燦としてどこやらに、廿を含む顏形、差懸りたる紅葉も、耻て色をや增ぬらん、姉の櫻木三方に、乘て恭う白木の文箱、いと淸氣なる石上に、直せば妹の梓姬、短冊のせたる三方を、かたへに直ししとやかに、イヤ申姉さま、さしてへだゝる國ならねど、世の亂にて引わかれ、いかゞ過させ給ふやと、あんじ暮せし折からに、七月七日に誕生せし、姉妹あらばとお召の御用、揃もそろふた生れ日の、緣でつながる御目もじ、なんぼう嬉しうござんすと、いひ慰れは姉さくら木、

石田詰將棊軍配 終

一世の民歌て曰、風枝裊々として鳥屢啼、雨夜沈々として花空しく散、何れの日り風定り、いづれの夜か雨はれんと、天いはしむる人の口、さがなき浮世の外に出、叡慮清く渡らせたまふ後白河院の御聖徳、チロシ「暴て仰ぎたてまつる、星塵積つて治承四年、秋七月上の五日、山城の國高雄山にて、けふしも紅葉の御遊とて、錦の幔幕圍遶して、君こそ今ぞ假初の、皇居の結構清らにして、風の光も殊更なり、早刻限と幕排はせ、玉座の左りに、時の相國藤原忠雅卿、右に當つて藤丞相兼實卿、今製の紗冠立涌の、袍の兩袖刷ひ、御たか玉座に咫尺あれば、其外正從の二位三位、冠の巾子も高雄山、森然として伺公有、仙洞諸卿に向はせたまひ、イヤノウ一の人、此秋は事變り、まだくもみでる當所の楓、詠もさらと慕はしく、銀河の橋をしつらはせ、けふ天上の遊をうつし、其紅を弄べど、都に歸れば此山も、いさ白雲の中に有と、思へば詠もいみじからず、忠雅や兼實の、詠めいかにと宣へば、兩卿ハット領掌あり、中にも忠雅正笏有、コハいぶかしき勅言、斯珍らかなる紅葉を、跡に見なせば白雲との御歎、ムツ紅葉をあとに白雲とは、斯万全の平家の紅葉も、暴惡炕陽と募り、皆散々に成行ば、跡白雲の源氏の代と、未然を招く叡智かも、兼實はいかゞおぼすやと、忠雅卿の仰に丞相、思案の眉を排き給ひ、誠に今こそ識得せり、露まで染むる紅葉の、清く盛れる夕邊より、四季かはりなき白雲の、朝を賴む叡慮やと、奏上あれば仙洞も、御衣を猥りて世の中を、かこちたまふぞい

ホンニそなたのいやる通り、今源平と立わかれ、へだたる月日の霧晴て、今日といふけふ姉妹が、積る思ひを明かすのは、七夕さまの引合、いざや紅葉の橋をしつらひ、秋の詠をいそがんと、ついしめ直す前だれの、裾に露引谷川を、へだてゝ盛る紅葉が枝、引撓めたる織の、手まづさへぎる二人の女、念力巖にさしかゝる、枝と枝とを組合せ、橋をかたどる初紅葉、錦の帯を引はへて、旭にさらす風情なり、櫻木木の間飛で下り、サア仕馴ぬ事も君が爲、コレよう出來たじやないかいの、シテ此文箱は我君の、紅葉をめでさせたまひたる、御製なりと恭々敷、枝を傳ひて紅葉の橋の、上にしつかと揚羽の蝶、ひらりと飛ば妹の梓、三方引寄短冊を、手に取うつして、コレ姉さま、此短冊はかしこくも、けふのお供の公卿、紅葉を詠じたまへたる、歌の數々多ければ、共々紅葉の橋がへに、むすび提て下さんせと、賴む木かげに姉櫻木、妹と共に短冊を、取々結ぶ手に織し、錦の閨に横姫の、耻る袖ひめ匂ふ姫、けふし逢はおふかはと、ふたり手に手を取かはし、悦ぶ中に姉櫻木、幕のこなたに兩手をつきて、前の兵衛督光能卿へ、是より伺ひ奉る、仰に隨ひ紅葉の橋、今只しつらひお暇と、願ふ言の葉幕の內、光能卿の聲として、いしくも斗ひ得てしかな、賤の姿橋の紅葉、君にも叡覽ましませしぞ、最早暇をとらするとの、仰に妹姉立上り、スハ冥加なや勿體なや、わやしの身をば苟初にも、君の詠に備へしとは、返々もありがたやと、皇居の幔幕ふし拜み、よろこび勇麓なる、旅宿をさして立かへる、

うつれども、夫と答ふる人なければ、額をもたげ見上るにぞ、玉座御簾諸公卿は、皆退出の體たらく、強氣の文覺氣を揉上げ、ヘツヱ口惜や淺ましや、押隱居の臆病天子、平家方の聞えを懼れ、遊さりたまふか是非もなや、せめて附添ふ阿呆公家、抓みころして腹いんと、走りかゝつて遠慮なく、玉座の御簾を引ちぎれば、褥を除かせ前兵衛督光能卿、故實の束帶はなやかに、太刀拔かざし悖然と、突立たまへば流石の文覺、おぼえず跡にたぢ〳〵、扣へて樣子を伺ひ居る、光能はつたと睨付たまひ、アヽラをこがましや文覺、かゝる短氣の振廻にて、大惡の平氏亡んとは、ハヽヽ蟷螂が斧、堅剛大樹にあたるも同然、其上罪なき平家の徒、追討せんとは卒忽の願ひ、御遊みつれば我君にも、早裏道より還幸あり、供奉を放れし此光能、密に達させ給ひしは、源氏重代鬼切丸、天下を思ふ文覺へ、世を思ふ君の賜と、鞘に治て渡したまへば、文覺御太刀を押戴き、スリヤ此おん太刀が平家追討、ハテサテせかれそ文覺、罪なき平家を追討とは、思ひもよらぬ願ひ事、幸是なる紅葉の橋、君叡覽の上なれば、凡下の眼に觸も恐れ、其一枝をこゝろ拂ひ、御太刀の切味試みて、密に伊豆に下るべしと、裁許に文覺立上り、賜ふ所の鬼切丸、拔より早く大木の、枝をはつしと切落せば、餝し橋は闌干と、落重りし其上に、さも堆き白木の文箱、文覺謹んで手に捧げ、先刻あれにて承はるに、此おふみ箱は紅葉の御製、恐有と指出せば、光能莞爾と打笑たまひ、ノウ其御製こそ伊豆への家づと、厚く拜

たはしき、折しも不思儀や谷川の、岸に倚つ大盤石、ずつと兩手に差上て、下より出たる荒法師、墨の衣に藁襷、玉座を睨んで突立ば、仙洞はじめ奉り、伺公の面々魂窮、忙然としておはします、いぜんの僧は大石を、谷に屠て飛しさり、狼籍尾籠は申すも愚、我こそ文覺といふ青入道、去年伊豆に流罪せられ、無念の月日を渡る内、故左馬頭の一息、兵衛佐に應接せしに、自然と備はる武將の器量、扨こそ平家を手の下に、討べきをのこと相せしかば、一七日の入定と僞り、其地を穿つて山裡に脱出、容を雨露に荒法師、徑に福原の都に上り、平家追討の院宣を、此若者に申下し、我本懷を達せんと、馳付都の風説に、來る五日の己の一點、君此山に御幸のよし、アラ嬉れしや時こそと、當月二日の夜にまぎれ、當山の體けみするに、まだ秋なれぬ此谷に、ふた木の楓事變り、もみでる詠めに心づき、こゝぞ皇居と押斗り、先此通り大地を穿ち、有合磐石引かつぎ、身を潜し事三日三夜、水穀咽を通せずして、待設たる今日只今、天の與ふる院宣を、兵衛佐にたまはらば、生々世々の大恩と、思ひつめてぞ願ひける、仙侗つく〲文覺が、容貌叡覽ましく〱て、とかうの宣命わらしに連、さつと御簾に入たまへば、逆鱗もやと忠雅兼實、列座の諸卿追々に、天機の程を恐れみて、皇居の内に入たまふ、斯とはしらず文覺は、低頭平身わさからず、猶も詞を改て、院宣だに賜らば、東八個國の家人を催し、平家追討時ならず、民萬歳を唱へん事、炳然たりと理をつくし、衣を振ひ大地を擲、奏する時刻

嫁櫻木、お乘物よお腰元、徒若黨に包れて、わしが樣なるさもしい姿は、翠簾に紙して覗かんもの、かく落ぶるゝ淺間しさ、我身でこの身がうるさいに、大助さまや我々を、いたわるそなたの心根を、思ひまはせばやるせなと、涙ながらの一札に、手助兩眼しばたゝき、アゝ不斷同じ事ばかり、コレ今でも平家にくみなさればナコレ妹御梓さまの通、お大名の姫君樣どもてはやす事、コレ此わしさへ知つて居に、アノ物識の旦那樣、なんでしらずにござりませう、けれ共ナやつぱりかうしたお暮し、どうでも譯の有ての貧乏、案じて癪の催促せうより、アレ〳〵〳〵あの山の景色、青い空に白鷺がヒラ〳〵〳〵と、勞を厭ふ手助がこゝろ、酌ば涙のさくら木は、うつむく額を漸上げ、サアいつそ儘とは思へ共、我夫には死わかれ、ハテサテそれが又惡ひ、一たん死だ若だん那樣、ぎばへんてつも叶はぬ事、なんでお案じなされますと、おどしつすかせし主思ひ、額の汗にわらはせり、さくら木笠を取上て、ほんにそなたのいやる通り、世は七ころび八起とやら、ドレいのうかと立上り、コレ手助、道が二筋有が右かいの、イヤ〳〵〳〵おまちなされませと、突たる杖をしんやと立、秋の田の、かりほのいほの、ソリヤこけた、そちらへお出と先に立、右なる道をいそ〳〵と、すぎ行わとにぬつと出る、稻むらかげの塊坊主、さくら木が袖に引すがり、ナコレ〳〵奧樣、一文おくれなされませ、コレつきやるないの、イヤつきやいたしませぬ程に、どうぞ一文〳〵と、より添ふ乞食を、手助ねめつけ、ヤイこゝ

頂有べしと、眼でしらする文箱の內、いかなる御製と文覺は、鬼切丸をこなたに直し、紐をとく〳〵一通取上、何心なく聲はり上、早く清盛法師並に一類を追討すべき事、ヤアコリア院宣、とは文覺眼が眩んだ、則紅葉の御製の、ナ其短冊を賴朝へ、下し置れん叡慮にて、傳待たまふ折に幸、思ひがけさへ荒法師の、手に握り込天が下と、意味濃なる一言に、文覺文箱拜頂有、玉坐の跡を伏拜み、院宣額に摺付〳〵、悅び餘り詞もなく、只ハアツ〳〵と斗りにて、光能卿の顏色を、打詠めたる目の肌に、淚鮫立文覺が、心の內ぞ賴もしき、光能歡喜の眉尻高く、コレ〳〵文覺、數月の大望成就して、嘸な滿足推察せり、此場の事は穩便と、邪正の未來光能の、內意に文覺勇立、ハヽヽハア有難し〳〵と、文箱の院宣鬼切丸、左右に提げ立田川、君をさみせし口の葉を、雪く會稽伊豆の國、やがて我名も高雄山、念力岩を通天の、橋の上なる賜は、そも六韜としら木の內、不日の內に文覺が、剃たる顱まる〳〵と、治る御代を松の葉の、散うせずして正木の葛、祝籠たる院宣を、押戴ひて大三重別れ行、道は蛛蜘のあみの目に、かゝる言葉を案內にて、いそぐ小道に踏返す、石橋山に打死せし、夫の眞田に別れしが、花ならなくに櫻木が、胸は爪木と裂思ひ、色にいでたる紅葉の御遊、首尾よく濟んて歸るさの、供の手助が小風呂敷、輕い足とり高雄山、麓の杜を假の宿、しばらく息をつきにけり、櫻木菅笠かたへに直し、イヤノウ手助、移れはかはる世の中、今源の代なりせば、きつとした大名三浦黨の

なたはわしが兄御、伊藤九郎祐兼樣、扣て居やと呵られて、でもアイ〳〵と尻込し、艸をむしつて蹐る、櫻木兩手を地に付て、イヤナニ兄御、夫與市殿討死より、後家を立るも外ならず、互にかたらふ初戀に、とり替したる請起文、宇賀神樣の秘法にて、誓詞を背かば蛭と蛇、一生惣身に纒ひ付、苦しみ見する冥罰ありと、とり替したる二通の内、其一通を身に付て、討死なされし事なれば、一生心に後家立て、未來の夫の目の前にて、彌陀の利劔で切髮を、誓紙にかへんと死を待心、コレ推量して下さんせと、涙ながらに詫ければ、九郎祐兼もてあつかひ、サテ〳〵兄弟とは生るれど、源氏に血すぢを引故か、イヤハヤモハヤ我の折れた馬鹿者、いつそばらして仕廻ふと、たぶさ摑んで引たふせば、さうはさせぬと引かたげ、どつしり投出す下助が手並、九郎祐兼目鼻をしかめ、サテ〳〵ゑらい䑓力、ソレ家來共組取れと、下知にむらむら數多の家來、とつたとかゝれば手助かだんびら、拔間もみせぬ早業に、深手淺手は運次第、力次第に切まくられ、にげゆく大勢餘さじと、太刀打ふつて追て行、ヲイ〳〵と櫻木が、見やるを祐兼蹐のめし、サアおれが云事聞ぬからは、コリヤ此拔身でぶち放し、首にして持歸る、返答なんとゝ問つむれば、櫻木淚の目を開き、なんといはんす、お前の手にかけ殺すとなヲヽサヽテモ忝うござんす、いつそころして下さんせと、ツヒいひたうてもどうも云れぬ、當年七つになる獨子と、百六歲の祖父樣を、別れし夫に預れば、命は戀結ふた髮、さはらす事も

なうんつくめ、某が旦那は大びん乏、こちに貰てもたらぬ所帶、目きゝしされと呵られても、へらぬは乞食の秘密聲、イヤマヲシとふからたしなんで置ましただなさま、さうおつしやらずとたつた一文、ヲゝ嘸や難儀の上ならめと、身につまされてさくら木が、放る一せん押戴き、乞食は木かげに兩人は、急ぐ道筋ヲゝイ〳〵と聲かけて、きたるは誰か旅裝束、はでに促裝伊藤九郎祐兼、供人引ぐし馳付れば、それと見るよりさくら木は、立歸りてヤア兄さまか、おなつかしやと縋り付、顏つく〳〵と詠るを、九郎祐兼取て投、コリヤヤイ妹、おなつかし所かやい、儕一人故親兄弟、マ大體の難儀と思ふか、とはまた何でへ、ハテ知れた事、儕一人源氏方に縁を組、コレ此兄や親人は、手柄をしても水の泡、則昨日六波羅にて、清盛公の仰には、三浦大助が首討か、左なくば櫻木呼返すか、二ツに一つの返答せよと、のつぴきならぬ御上意畏て馳付た、幸髮さへきらぬ草後家、いさ連歸るとひつ立れば、さくら木返答涙にくれし、返答なければ九郎はせき立、扇を持てりう〳〵〳〵、うせをらぬかと打やれは、手助九郎を取て引のけ、ヤア黑とやら白とやら、此お奴をどなたと思ふ、忝くも櫻木樣の御家來、御手助の手助といふ者、コリヤ目も有る鼻も油斷はせぬ、夫に主人を、イヤりう〳〵〳〵と、なぜ此樣に打付たと、九郎が扇の返り討、打付られておはさぬ九郎、イヤ下郎めが小しやくなと、ねめ廻す顏指さして、テモよう似た〳〵、彩の兀たこまいぬと、嘲る詞を櫻木制して、コレ手助、あ

又討込を左りにすかし、落たる刀とる間も見せず、九郎が肩先ひいやりと、深手のひとかせたおく〳〵、櫻木あぶ〳〵身をもだへ、心ははやれど縄目のいせき、見やりもやらぬ乞食坊主、九郎が骸に乘かゝり、留の刀さすがは兄弟、コレ殺さずともよい樣にと、あせる物音かしましと、腰なる手拭ひ櫻木が、口にあつればコレノウと、叫ぶ聲先消々に、ぐつとしめたる猿轡、憎やと思へど命の親、恩と讎とを目の前に、狂ふ姿をかくさんと、有合稲村引かぶせ。九郎が死骸に腰うちかけ、溜息ついたる黒坊主、垢の鏽たる指折て、ムヽツあの女をコウ〳〵、ムツ何でも百兩、シテ此死がいどうせうと、思案なかばにばた〳〵、人音ちかく聞ゆれば、うろ〳〵きよろ〳〵、即坐の氣轉、死骸を堤に引ずり上、膝をくゞませて後にまはり、死骸の腹を十文字に、かき切〳〵刀ののり、ふいて治て引直し、指添咽にさし貫き、邊の血を足のさき、砂かきよせて隠す内、荒にあれたる奴の手助、討取首を珠數つなぎ、葛に貫くわら〳〵と、引すりかへる柳かげ、ヤア櫻木樣はいづくにぞと、見まはす邊りは以前の乞食、ヘツヱしなしたり口惜しや、早九郎めに奪はれしか、無念〳〵と立たる後に、コレお奴樣、思を知らねば犬畜生、乞食はすれど人の數、先の奥樣は此坊主が、其道を落しました、イヤなんといふ、櫻木樣を此道へシテ九郎殿はなんと〳〵、ソノ九郎殿とはお侍じやな、アレ〳〵〳〵あの通り、奥さまを取逃し、國元への云譯とて、腹十文字に搔切て、さもいさぎよき御最期と、僞る詞を

アイ成りませぬと、云さる詞に九郎はせき立、餘波情も妹に、打込刀を後より、取より早く蹴とばして、すつくと立たる以前の乞食、見るより櫻木とびたつ計り、起上りたる九郎か恟り、乞食は青みしまなこの玉、浮出る程に睨まはし、コレそな赤つらのお旦那、わしや最前から見てゐるに、現在の妹を殺し、マヽなんとするのじや、コレ乞食はすれど吠はせぬ、又ほえさせて聞ても居ぬ、こなたの妹御此坊主にくだされ、びくともひるまぬ面體に、おつ／＼立寄祐兼が、さあらぬ體に聲はげまし、やあ草乞食の死損ひ、某が事を誰だと思ふ、東國にて並なき大名、伊藤入道祐親が一子、同苗九郎祐兼、手向ひろぐと爲にならぬ、似合たやうに在々にへちまい、喰さしくらつてけつかれと、強う見すればせゝらわらひ、アヽこはや／＼、大名さまでもお公家さまでも、法を破れば無位無格、四も五もいらぬ妹御は、坊主が貰ふたとつと、歸りやと罵る詞たまり兼、九郎が拔打引ぱづし、急所の一當うんと反る、九郎が體を見兼る櫻木、立寄る肩先引摑み、お世話無用と刀の下げ緒、取て押へて引からげ、柳の木影に括りつくれば、コレどうしやるとあせる間に、九郎は漸起上り、妹渡せと切込腕先、サア尋常に歸ればよし、さないとかうじやと腕首を、しめ付られて、アイタヽヽアヽいぬる／＼ずんといぬる、スリヤ此坊主が貰ふたと、約束かため突飛せば、遙にこけて腕首打振、エヽどんくさいと胸勘定、ムウ妹をつれ行ねば、清盛公や親人への、云わけにはツヽそれよ、腹さるよりもコレ斯うと、

ヽそれが何じや、サ夫について咄がある、わりやしるまいが前のお頭の其憎さ、くひ付うやうにあつたれど、手下の事なりやしやう事なし、ソコデ十兩の仕事は七兩か八兩、五兩の仕事は二兩か三兩かで濟した、時に今のお頭にはびたひら半、とんとコレれきがならぬ、けつく着て居る席でも、賣代なして差出したい、ヲヽそれが何じやさ、サわの氣持で盜人のお頭、おりやもづんと合點せぬと、問ばへまむし打笑ひ、やいばか盡すな、それ詮義して銀に成るか、コレ膳所の糟屋の藏は、土藏の茅ぶき、内はぽか〱うまそな鹽梅、捨物にしてかゝろでは有まいかと、めい〱咄の桁違、口は動けどふら〱と、又も寢轉表の方、しづ〱と來入る玄田民部、淺黃繻子の長羽織に、朽葉錦の裡照て、茶色の小袖、指大ざら、ふたりの女を供につれ、樒水提子持運ばせ、門の左右の墓の前、合掌すればふたりの女、樒を手向け阿迦の水、汲替〱諸ともに、珠數の音のみ聞えしは、不審にも又殊勝なり、民部潤ふ目を開き、イヤノウ月野花野、我盜賊の頭となり、兩眼財貨にうちくらみ、千兩殖れは二千兩、のぞみつきせぬ煩惱より、富貴自在を祈りの爲、宇賀の神璵を勸請し、七歲未滿の子を殺し、其首討て牲とし、財寶のる七七日、七日〱に殺す子は、今日迄に都合七人、則死骸を此墓に、葬る度々見る度々、嘸や此子の親々が、尋ん歎ん恨んと、思へは七ツの石塔が、蠢やうに見えるは天罰、赦してたまはれ親々達、ぼんよ冥途に待て居や、我阿鼻無間に身を沈、そなた衆の苦を助ん、暫しの榮花

眞うけの手助、ムウスリヤ櫻木さまには恙なう、此道筋をお歸りとや、成程お歸りなされました、則當坐の御褒美に下されたは此紙入。お見知有かと指出せば、手助が見るより天地を拜し、いかなる神の加護により、此場を救はれたまひしか、程はあるまい追付んと、敵の首をくわら〳〵、引わかれてぞ三重「出て行く近江の國比良山の奥深み、蘇生と號る幽谷あり、行雲積翠を掠め、驅烟螺髮を蒸、松檜鬱として音もなく、鳥跡殘つて聲もなく、人間界外と思しきに、大厦一堆巍々たり。丹銅を以て瓦とし、玄鐵以て礎とし、要害堅固の壘に、眼をうばふ希代の結搆、此家の主は賊徒の張本玄田民部、諸國の惡黨手下に屬し、金銀財寶虜取、榮花を鎖す不老門、扉の左右に壘々と、七ツの墓を連ねしは、樣子ありけに見えにけり。門の內には猿の市、人面傳兵衞、しやぐまの彌八、三人拵くたびれ寢、足と足との肉笆、高下の鼾蕭々たる、風に目覺す猿の市、むつくと起てア丶ひだる、イヤ人面起さいやい〳〵と、呼起されて人面傳兵衞、ウント踏伸空打詠、ヱ丶なぜおこした、まだ初夜にもならぬ日加減、ヱ丶せんけたいと云樣に、またもころりと寢ころぶを、コレ〳〵たしなめやい〳〵、夕べいたした錢金、お頭に手渡しもせず、ひよと盜まれたらなんとする、コリヤ尤と起上り、めい〳〵懷かきさがし、ヲツとあるは〳〵、イヤナニましら、おりやとんと合點せぬ事が有はい、アノお頭の樣子きが付たか、インヤ、第一情ふかうて義理づよく、こちとらをつかはしやるにも、一度とむりな事がない、ヲ

三人の者共、日頃の云付置を何と聞、汝等共を盜に出すは、國に名高き町人の、金銀財寶積重ね、七重八重に圍置を、一命捨て奪とる手筈、それに引かへ此金は、無理非道なるめくさり金、盜に道はなけれども、弋すれども宿を射ず、コリヤヤイ猿、われが此二歩の金は、稚いときより一錢二錢、汗の玉數ため〳〵て、一生一度の拔參宮、イヽエ道者では、イヤだまりおらう、一生一度のぬけ參宮、思ひ立たる甲斐もなう、ようもうばひ取たるなと、壹貫の錢引掴、猿が骸に打付られ、目はなしかめてそろ〳〵と、勝手の方に匍出る、ヤイ〳〵そこな人面め、コリヤ此銀は法師の官銀、是も同く命の露銀、三粒四粒の貰ため、艸履鼻紙帶紐の、代なし餘取あつめ、金十兩と成たるは、我身にとつての十万兩、彼が身にても一生の、大望成就なうして、舌を噛か首しめるか、非業の最期を目の前に、見るより難面此金と、包をほときはら〳〵〳〵、打付られて人面は、雨にうたるゝ鷄の、啼尾を垂れし如くにて、跡しさりして引退く、ヤイしやく〳〵の彌八、ヘッエ、おのれも憎いやつ、飛脚の金を奪取、急用便利の道を斷ば、其者ばかりか兩國の、難儀をしらぬ人畜めと、三兩の金打つけられ、なんとしやぐまは戸闔を、足で探て跡しさり、ふた目見られぬ所體なり、跡に民部は手を拱き、思案に胸を痛めしが、何思ひけん與の間に、傳ふ鈴の緒引手につれ、襖音して立出る、花野月野がしとやかに、御用いかにと手を支は、イヤ外の事でもない、いつもの通宇賀神に、神酒神燈の用意〳〵と、差圖に

は萬代の、苦患と知ては居ながらも、心を蕩かす色欲と、齒を嚙しめてア丶儘よ、イサ休足と顏ふり上、門內へこそ打連入、內には三人晝寢の最中、サテ〳〵氣がるな奴共じや、ソレ花野、目をさまさせよと云付て、上座に通る靑疊、月野が褥敷島の、活慶爰に寄けり、花野は持たる手擔子の水、杓に汲取三人が、ね耳にさんぶり起上り、降つたはと三人恂り目覺し、耳傾け門內さして入にける、民部莞爾と打詠、テモね耳に水とは臥龍も跳、先兩人は休息と、いたはる詞にアイ〳〵〳〵間の襖を押明て、ひと間の內に入にける、跡に民部は猿に向ひ、ヤイ市よ、夕べの仕事はとうじやどうじや、ハイ夕べの仕事は無益の殺生、きのふ大津の店さし頃、うろつく女の懷より、ぷんと匂ふた金三步、兩替店にてでつくわし、幸宿屋を尋る故、わしは宿屋の味噌すり男と、だまして磯邊に連出し、手込に奪取二步一貫、はづかしながらと差出せは、へまむし傳兵衛手柄がは、イヤ私は常々お咄の通、纔な金に目をかけず、耳を揃へて八九兩、袷の襟に縫込で、コト〳〵〳〵と坐頭坊、ちらと見付て眞裸、傍なる池にどんぶりこと、いかつがましく投出す金、跡にしやくまの彌八が十面、コリヤ市よへまよ、わぬしどもか銀とは違ひ、コレ小奇麗な金二兩、東の國から西の國へ、行かふるかぽつかぽか、刀の鞘に狀箱結付、ツ丶テンテンのてんつる男、行違ひにもんどり打せ、そつと取たる武士の金と、三人自慢の鼻高く、跡しら波の物語、きくに民部は目もうるみ、拾三兩と二步の金、や丶暫く押戴き、ナニ

さん、ナニ花野晴太喜藏が歸りなば、奪ひし小兒は首にして、宇賀の社に備へよと、いふ間に心月野が差配、舁出す乘物戸を開けば、花野はひと間の刀を提げ、渡すを受取戸を引立、神前佛前氣を付よと、差圖にアイと奥の間へ、民部は乘物いそがせて、九條の里へと出て行、か丶る所に由水天元、飯櫃脊負ふてひよこ〱走り、內に入より、どつさり下しヘマムヤアイ猿ヤアイと、呼に隨ひふたりが立出、ヤアどうじや〱、どうは馬なり此仕合、お頭さまに見參して、褒美をすつしりせしめるわい、コレ此櫃が千兩道具、ヒヤアそりやマア何じや、指て見い〱、マアかうみた所は飯櫃、エツ聞えた卷ものでも盜んできたか、イヤ〱〱七里けんぱいそんなじやない、ドレ拜ませうと立上り、ドレ御大切の寶物なれば、暫の間お下に〱、何の事じやしやらつくな、ハテ飯櫃の開帳じやと、ひらく內より櫻木が、立出る姿投入りに、立仲したる芍藥の、芥にまじる風情にて、打涙ぐみ座につけば、何んときついか、捨賣にしても二百兩と、自慢に猿がけら〱笑ひ、ヲヽ代物はよい代物、シタガお頭に見せたら、すぶゐらう呵れおろ、ソリヤ何で何で〱〱、マア人の云事聞いやい、おいら夕べ精出して、頭痛のする程呵れた、見れば美しいお內儀樣、口も腕もハヽヽマアむごつけなうくゝつたな、コレそんな苦しみ見せぬ物、おれでさへいたはしうて、ねつから涙が出ぬはへやい、アノ慈悲深いお頭の、留主で大きな仕合者と、そしれば天元何で〱、何でも金にしてこますと、明櫃か

二人は奥の間の、金地の襖ぬり骨の、障子ひらけば正面に、比良の谷峯崔嵬と、見え渡りたる絶景は。杜李も筆をや嚙ぬらん、庭の一字は宇賀神を、祀る祠に三寸備へ、火を改る神灯も、月野花野が取調べ、民部が前に手を支へ、只今用意と斷れば、民部褥を立あがり、洗面盥手懇に、宇賀の社にうち向ひ、やゝ默然と神拜終、席を改めイヤノウ月野花野、つれ〴〵なるまゝに某か、かゝる世過の物語、耻かしながら聞てたも、そも〳〵此蘇生が谷といつぱ、地あつて其名なかつし所に、先年盜人の頭領、玄田民部といへる者、此谷に籠つて惡黨をあつめ、金銀財寶掠取、斯美をつくせし搆へをなし、眉目よき女を勾引、或はひさぎ或はころし、隨ふ者は閨にいれ、惡逆日目に盛なり、しかつし所此民部、樣子有て先民部を殺し、惡黨なびける其時に、虎口の難をのかれし故、蘇生が谷とは名つけたり、其後某此家に止り、殘る惡黨手下につけ、富有の者の金銀を、奪とらせし其子細は、都九條の遊君曙、比翼とかたらふ戀中より、義心を捨ての切取强盜、扨又おことを勾引、妓家に賣んとせし所に、何れも親々難儀のよし、聞より胸にひつしやりと、あたるはあれなる子供の牲、嘸や其父其母の、歎かんものと思ふ折、親の歎と有一言、聞すてならず此樣に、かくまひ置は稚子の、追善供養の志、香花をとらせん爲なるぞと、色と欲とにくらむ目に、湛る淚溢さぬは、深き小池に蓴の、海苔を持たる如くなり、暫くあつて立上り、アヽよしなや、泣も笑ふも世の習、乘物云付都に出、曙大夫と氣を晴

しみ切なる市太郎、コレそこなこはい人、母さまに逢せてたも、かゝ様いのう〳〵と、慕ふを傍できく母は、爰にといはんと猿ぐつわ、突立上り我子の傍に、よるを人面叉引する、エウ迯くさるな、コレぼんよ〳〵、かゝさんに逢たいか、ドリヤ逢そ〳〵と櫻木を、實の母とは露しらず、引立そばに摺よすれば、苦痛の中にも悦ぶ母、其子はそれと知ねとも、かゝさんかいのと拵付は、拐立たる女の姿、アレイ〳〵と逃廻り、そんなかゝ様コチヤしらぬと、先當なしのめんないちどり、襖にあたり障子にあたり逃るわが子の跡を追ふ、足音聞て寄付ねば、櫻木かつぱとふし轉ひ、身を狂はして泣沈めば、人面くつ〳〵吹出して、テモあの女はよつ程のおきちしやな、よその子供にゐら涙と、いへば人面物知り顔、コリヤヤイあれをしらぬか、アリヤナ自身にわんな子があつて、それを思ふて泣のじやいやい、いつた儘にして狂はせい〳〵、こちやねてこますと人面猿、高麗緣も芝原も、差別荒毛の足投出し、大の字なりにねはらばふ、嘴木立寄りエヽようねるはろじや、ドレ一服いたして跡での仕事と、大火皿のきせる取出し、すつぱ〳〵と吹烟、市太郎は聲かぎり、かゝさまいのうかゝさまと、泣さけぶ聲櫻木か、からだに釘鍼さす如く、くるしむ母は猿ぐつわ、泣子はめんない千鳥あし、尋ぬる聲色尋ぬる目色、しらぬ喜藏、吸がら打出し、庖丁取上なむあみた〳〵、コリヤぼんよおもとらこと、取て引よせ引伏れば、櫻木身を楯押圍へば。喜藏も鬼の目に涙、そなたは此子か可愛か、ほんに子

たげ肝煎の、喜作方へと急ぎ行、跡に二人はむしやくしや腹、それとは知らぬ嘴太喜藏、欲のぼろ武者布袋、脊中に打かけ入來り、ヤアしんぞやと袋を卸、ヤイヘマ市か、テモねむたさうな顏じやな、ヲヽねむたいが何とする、コレハ意地の惡い、何で腹を立るぞい、サアがきめぶち殺して、福の神を祝へ〳〵、ヒヤア此女はどこで釣た、テモよい器量とつぶやき〳〵、袋の口より引ずり出すは、兩眼つゝみし稚子を、我子と見るよりかけよる櫻木、猿がとらへて、コリヤトツコイ逃るとて、逃さうかと、引据られて櫻木は、泣にも聲の立ばこそ、戀しい我子のしよげ姿、打ながめたる有樣は、聲なき冬の蛬、壁によろぼふごとく也、人面稚子とつて引寄、コレ此子はなぜに目は包んだ、可愛さうに明てくれへ、アイヤ〳〵〳〵〳〵明な〳〵、殺す時に見物見すれば、驚いて逃かくるゝ、顱剃てくれるさへ、ねきづくじやないかいやい、コリヤてんごうすないやいと、嘴太苦もなく突立上り、庭の隅より取出す庖丁、アヽ錆たりや鰹節、是で六人仕廻つけた、七日〳〵に砥石の面、ドレお見廻と立上る、喜藏が體を見る母は、現在我子を傍に置、殺さるゝとハ曲もなや、いかなる罪の報ひぞと、思へどしやくれと身は叶はず、只じろ〳〵と見る目の責、嘴太出刄をとぎ上て、ヲヽ切るは〳〵、イヤこな女中、こなんも殺さるゝと思ふて泣のか、ハヽヽヽヽコリヤおかしい、コレ此ゑごをばらすのじや、そつちのきづかひうつぱれて、サア機嫌直しへヽヽから笑ふたり泣たりと、罵る詞は叫喚の、苦し

此家の主民部様、お情ぶかいおかたなれば、氣をしつかりと持んせと、つひ馴やすらぐ女同士、櫻木頭を振り上れば、顔に亂るゝ黒髪は、柳ごしなる月の顔、化粧も涙の血に染て、二人の者に打向ひ、さも憂歎に詠れば、ヲヽお道理と花野が寄添ひ、いたはる隙も荒者天元、肝煎喜之作連來り、用意の辻籠押明て、うん共すん共櫻木を、無理に引立打込て、谷川傳ひに出て行、ふたりは跡を見送りて、鐘に涙を打そへて、竊をいだきひとまなる、佛前さして入にける、去程に三浦大助義明は、諸源沒して平氏の繁榮、悪世の粟をはまさる迚、數多の家門に引放れ、比良の山下に蟄居して、断食數月に及びしかば、正八幡の靈夢を蒙り、此山中にわけ入て、四季隔なき薇をとり、飢を凌で山道を、下る姿は鼠の居士衣、髪毛眉に亂散、眼は天地に輝て、頬骨南露に荒道者、藤葛の杖により、左りに一束の蕨を携へ、山腹につゝ立冷々と、山下のけしきを詠めしは、波羅奈の一角、本朝の小角なんぞとゝあやしめり、しばらく有て麓なる、僻地の家居をきつと見をろし、シヤゝふしんなる此谷陰、人跡必絶たるに、華麗の結構嚴重なり、ホヽヲ傳へ聞此山中に、賊徒の張本栖棲せしとは、此谷底にて有つるよな、我保元の亂れより、源氏再興なさん爲、數多の子共孫共を、諸國に手分、源軍の催促に日をうつせども、三浦に傳ふる宇賀丸の、鐙を賊徒に奪はれしより、貧窶日に増甚しく、軍用金子の才覺絶せり、然るに今日計らずも、麓に見當る賊徒の塒、ひつさがひて金銀財寶奪ひ取て陣裏の用金、イヤ〳〵

にはなりたい物、行合の女中さへ、あの通り誠の母に見せたなら、此喜藏を鬼よ蛇と、思へばかびた涙がでる、此ごろから六人迄、同じ年ごろの子を殺すに、大根牛房を切る樣に、思ふてゐたにこの子に限り、どうやら此目が涙を出しをる、泣ては商賣ができぬ、泣な〳〵と氣強の喜藏、目を瞬けはさくら木は、百倍まさる悲しさに、せきくる涙も落次第、足摺しての泣じやくり、時刻うつると喜藏は突立、市太郎取て引よすれば、さもおとなしく坐を組で、コレおりや死ぬるのか、イヤ〳〵〳〵殺しやせぬと、思ひきつたるでば庖丁、咽にあつれはさくら木が、わつて入て邪广するを、エヽ面倒なと刎退〳〵、ぐつと貫くなまくら物、市太郎はくるしさに、手足をもたへ反かへり、息絶かぬるだんまつま、見てつけ廻すさくら木は、餘りの事に涙もいです、うろ〳〵きよろ〳〵正體なし、喜藏首をうち落し、手にとり上れは櫻木が、袖に喰付一念の、はなれぬ母子の因縁を、何心なく嘴太が、袖口きつて首とり上、よ程術ないかして、コレ此女中の袖口に、くひ付たのを離しをらぬと、首たづさへて一間の内、神前さして入にける、跡に櫻木軀をながめ、是が三浦の惣領かと、かつぱと伏したる其折から、奥より立出る月野花野、鉦と撞木を手に持て、出るも同じ無常氣を、無常が示す南無阿彌陀、なまいだみだと打ならし、死骸の前に香花を、手向る後ろに繩目の女、身につまされて打驚き、いたはる中にも月野が會釋、コレ申女中樣、勾引されてお出たか、私らとてもおんなじみ、必お歎きなさるゝな、

漂然たる源氏の末、忠義の武士を招折、いぬ腹きつて手からに成か、昨日文覺といふ沙門來り、我に源氏を興せとて、コレ預置たる鬼切丸、その上平家追討の院宣、主君に下りしと、ひそかに拜見得させしより、好武士を募ふに付、思ひ出すは眞田與市、ながらへ此世にあるならば、元來文武を兼たる若者、百千万騎の采配を、とらせて不足なき器量、老生不定といひながら、老曉し身は殘り、盛りの花は風におる、哀れ又くる春あらば、祖父が爲には大孝心、源家に取ては大忠臣、其かたみなる孫嫁曾孫、行末問ふもとはるゝも、大助獨のこし置、汝が死んで何とする、大馬鹿ものとねめたる目に、麓の谷をきつと見くだし、コリヤヤイ此谷かげのひと搆は、盗人の張本民部が隠れ家、今日眼に遮しは、讀天我に手をおろし、軍用金を與へたまふと、思ひながらも不義の金、いかゞはせんと工夫の最中、嫁の千人二千人ぶちころせしとても物數ならねど、又も思案の眉をひらき、何思ひけん石上に、すつくと立て天を拜し、譬は不義の金たりとも、忠臣義士の麗水に、漱きあげて出陣せん、續れやつと居士衣の裾、まくりあげて太刀拔かざし、手助きたれといふまもなく、山坂岩角嫌なく、峯を飛りて谷かげの、麓をさしてくだりける、蘇生か谷には四人の者、前後不覺の寢入端、大助漸門前に、走りついて大音上げ、いかに若共慥にきけ、源家に其名かんばしき、三浦大助義明、軍用金を借用せんと、主從二騎にて駈付たり、貯所の金銀有は、とう／＼渡せと呼はれば、夢まじくらの四人が悔り、

〳〵非道に集る金銀にて、軍を師ひば摩利支天、お咎あらんも計られず、とはいふ物の目の前に、つみかさねたる軍用金、イデばひとらんと身構て、突たる杖に仕込置、太刀抜かざし駈出しが立どまり、ムウ此大助が薇をくふも、平氏の穢を厭へばこそ、すりや瓜田に履を猶さらに、思ひ凝て抜たる刀、柄を両手に握りつめ、時をうつして突立たり、かゝる所に奴の手助、大肌抜て髪振みだし、息をばかりに走付、ホツト溜いき大助の、膝元ちかく跪ひ、さん候仰にしたがひ櫻木さまのお供にて、高雄山の御用を仕廻、まかり歸る道すがらにて、櫻木さまの兄で九郎どのとやら、源氏に縁を組置ば、平家に疑ひうくるとて、さくら木さまを引立る、渡さじものと挑合、あまたの家來討取る間に、さくらぎ様のおゆくゑ知れず、ヘツヱしなしたりと見まはす後、九郎どのには御切腹、さくらぎ様には恙なう、おかへり有しと聞しを悦び、お跡慕ふてかへりしに、平家がたより多勢を催し、三浦の家を滅却すとて、御假住居を打毀、のこれる物は樹木ばかり、嫁君にも市太郎さまも、おゆくゑ知れねば拳を握り、白意か嶽に駈上るに、我君見えさせたまはぬ故、いかゞはせんと見渡す所に、幽の人影目あてとして、馳さんじての御注進、御家の大事とせき立て、涙をながし述ければ、大助びくとも顔色變ぜず、ムヽ今蹈でんで奪はんか、イヤ〳〵、といふて天のハテ何とせうど、空嘯吹たる主人の體、氣早の手助たもち兼、今こそ不覺の申わけと、抜とる刃物を大助刎除、テサテ狼狽た素丁僕め、斯

この家の賊徒にうばはれしか、然るに今日大助が、手にいる事も天の命、なぜか受けずに有べきと、ぎつくと打かけしつかとしめ、立出る向ふに以前の悪黨、得物〳〵を引さげて、討てかゝるを、コリヤ〳〵望むところと手助があしらひ、其まに大助義明、着たる鎧の初勝負、うけどれヤット切かくる、四人は揃ふ強力荒物、時を移して採合しが、いさんで手助が切落す、あたまの血汐赤熊の彌八、にげて傳兵衛死んだか猿、人面芋虫ひつしやびしや、皆一同に息たゆれば、外道より外逃ばなく、心地よくこそ見えにけれ、大助五つの首うち落し、ヲゝ潔よし心地よし、今日手にいる此宇賀丸、七歳未満の子をころし、牲として祭るときは、金銀米錢心の儘、軍用金も心の儘、平家を挫も心のまゝ、我名も心の儘にして、宇賀道者義明と呼ん、則宇賀は此鎧、道者は我形我容、字を直に義明とせん、アフゝ滿足とふみならす、老の足音力ッてム、手助が勢どう〳〵ど、是よりすぐに諸國に渡り、軍勢催し頼朝を、大將軍と守立て、比良の暮雪の白旗を、風に靡けて矢橋の歸帆、ひら〳〵たなびく敵の赤幟、瀬田の入日と傾く運命すは、時こそと味方の勢、射たつる矢先は唐崎の、雨や霰れと亂れかゝらば、平家の城郭石山の、秋の月日をたゝぬうち、大將副將木の葉武者、吹立追立粟津の晴嵐、さつ〳〵〳〵と悪徒を拂ひ、不日に天下を堅田の浦、實も太平落鴈の、求食田面に萬民の、抃悦せんことコレ〳〵〳〵、此宇賀道者が結構に、たんだくせりと天に跳、地に駈めぐる勢にて、近江の國を

用意するまもあらせばこそ、大切主從踏込ば、心得たりと四人の者、ひと間にかけたる業物を、拔つれ〳〵切りかゝるを、主從左右に立わかれ、ふたり〳〵を相手にとり、秘術を盡せば四人の者、さゝへかねてや足早に、谷かげ深く逃失たり、大助ほく〳〵打うなづき、手助續けと奥の間の、襖蹴離す其內に、月野花野が身輕の出立、襷しつかと長刀掛へ、飛で出間も薙込ば、シヤ物々しと大助主從、ふた打三打うつ間もなく、ふたりの女を取て引ふせ、コリヤヤイ女、汝等共は勾引されて來りしな、兩人共に古鄕に歸す、少も氣遣ひいたすなよ、サア金銀の有所、我に敎えさせよと、問へば兩人詞を揃へ、愚かな仰を聞事かな、われ〳〵此家に命を續き、何しに未練の心有らんと、思ひきつたる顏色を、大助いかゞと見廻す萩垣、是くつきやうと枯藤の、葛たぐつて兩人の、女をしつかと括付、サア邪广拂ふた踏込と、主從內外改れど、僅に落ちる八丸雨、貯ふ財の見えざれば、呆れはてたる向ふの方、ひとつの祠でさんなれと、大助立より見る三方、稚き子供の生首を、不審と取上、ヒヤアと驚く我孫の、生顏かはらぬ有さまに、流石の大助はら〳〵〳〵、こぼす淚をじぶかりて、覗く手助が又愕り、ヤア市太郞さまと、立よるをはつたと蹴倒し、持たる首大地にびつしやり、ヱイと足下にふみ挫ば、微塵になつて失にける、大助爰ぞとひとつの祠、刀の脊にて打碎けば、金と誰とか白糸の、鎧一領幻出せり、コハいぶかしと引上れは、三浦の重寶宇賀丸なり、天のあたへと押戴き、扨こそ〳〵此鎧は、

木と横たへて、牢輿庭にかきすえさせ、いかつがましく打通れは、時政きよろりと空打詠め、秋の夕べの淋さに、卵のやうな世界から、首斗出す蓮の莟、四條五條の橋の上、赤銅作とおぼしめせと、脇息ひきよせ坦然と、正體もなき時政の、日頃の行義引かへて、坐席しらけて見えにけり、祐親大きにむくりをにやし、コレサ時政何をおいやる、大切なる流人を呼よせ、挨拶もなく空嘯、コレ此伊藤を欺にするのか、イヤサ此しやつ面が見えぬかと、せきにせいて問つむれは、時政脇息大鼓になぞらへ、其時時政少しも騒がず〳〵、口上業にて叶ふまじと、比取人に向ふか如く、脇息に引直せは、ハアツヽテン〳〵と、いひさまかつぱと打ふして、前後を忘する健忘の、病に興をさましける、遉の伊藤悔りして、コリヤ一向むちやくちや、よし〳〵けふ來たのは費にして、又出なほさじやなるまいと、不承〳〵に立上り、ソレ家來共、流人の牢輿舁出せキヤツト下知の内、轡々と聲掛て、襖引あけ政姫が、立出る姿立烏帽子、大紋大小花やかに、さすが時政の娘とは、いはねどしるき取なりに、伊藤いよ〳〵仰天して、コリヤ又どうじや、思ひがけなき息女の侶裝、しつかい狂言みるやうなと、嘲る詞に政姫は、さもしとやかに手をつかへ、父時政が病體、私がかゝる形容、ひと通り申上ん、この頃よりもお聞の通り、父時政には病の床、健忘とやらいふ難症にて、氣分惡しくと思ふやいな、目もくらみ耳も塞り、心もうつけてまづ此通り、けふ賴朝さま御入とて、何かにつけて心遣ひ、もはやお成と聞安堵。

立いつる

第一

蕭何は汗馬の勞なくして、其功漢家に歴然たり、北條四郎時政は、世と推移る伊豆國、流人頼朝預りの、目附役とて館内も、自然と行義嚴なり、頃しも仲秋の月見とて、作法の箒目鮮に、垣の結目も新にして、又あらたなる手洗鉢、水さへ匂ふ庭搆、あるじの所勞に吹風は、魂もたする植木にも、茅にも心奥座敷、ゆるぎ出るは北條時政、鉢卷しめて政姫を、杖よ柱と縁端に、どつかと坐して庭打ながめ、イヤコレ政姫、我計ずも病に沈み、流人對顔絶せしかば、目附役も必竟名計り、然るによつて今日は、月見の招請旁に、迎の牢輿橋越ゆれは、早來臨に程有まじ。平生もいひ聞す通り、我此病は健忘とて、見聞無益の症なれば、今日客對覺束なし、万端我になりかはり、心を配り饗せと、指圖に姫は思ひ入る、戀の木かげに頼朝の、心をさぐる能折と、悦ぶ心押隱し、コレハ〳〵事改る仰事、此頃よりのおしつらひ、しばしもお傍を離れぬ私、叶はぬ用迄御名代と、父に力を政姫の、戀から出たる孝行は、あいに色增風情なり、かゝる所に表のかた、只今御客御入來と、奏者がとり次聲につれ、ソレ用意せよ政姫と、父の氣遣アイ〳〵と、ひと間をさして入跡に、案内させて伊藤入道祐親、顏は嶮岨の山法師、大小枯

はつ〳〵と、時政の病體政姫の、取形不審の御眉持、イヤノウ政姫、時政かゝる病氣にて、けふの招請心得す、配所の月とはいひながら、流人なれば何事も、皆うさつらさの種となる、殊に病中保養の妨、伊藤が舘に歸らんと、突立たまふ小袖に縋り、コレ我君様には、何と思召るゝぞ、私が装ふ此装束、則北條四郎時政　賴朝卿を招ぎし子細は、某が娘政姫、君に心を寄るといへども、千束の文の返事もなく、つれなうなさるゝ御心、きかまほしと問かくれば、コレ〳〵何事かと思ひしに、存設けぬ問事、そもじの玉章見るたびに、アラ嬉しやと思へ共、斯落ぶれし此賴朝、縁をくまばそもじの難儀、又時政の赦しもなく、旁以てつれなくもてなし、思ひきらせん我所存、イヱ〳〵〳〵その御心なら何故に、梓姫とはふかいお契り、入道さまのお赦しでも、ござんしたといふ樣な、イヤサ梓ひめは格別の沙汰、いかんとなれは此賴朝、梓が所に身を寄れば、心にあらぬ閨の伽、シテおなかのやゝは、ハテ雨は石錐ならず、我は梓を思ふにあらず、長〳〵かたらふしるしの腹姫、ムウそんなら今にも父上の赦しがでるなら、ハテその時は千束の返事、只ひと口に夫婦の約束、ハア忝うござんす、サア私が詮議は是切、是からは此政姫、安藝守平清盛、賴朝公への尋なれば、上坐御免と席をかへ、ナニサ兵衞佐、貴殿には文覺といふ法師をかたらひ、平家追討の院宣を受、三浦大助義明と心を合せ、源氏の餘類をかり集め、平家を亡す下工と、疾注進の者あれば、實虚の白狀あれかしと、少し照たる眼尻

その弱りより付入病、それに付て私が名代、父の裝束父の大小、此姿にて賴朝樣、明曉までお預り、今にも本性に歸られなば、其もと樣のお出の樣子、自ら宜敷申聞ん、お隙におわらば御滯留、ご繁多ならばお歸りと、しやんと述たる詞の端、部屋ばなれとは見えざりき、入道わたまがつし〳〵、テモ奇妙だ、此間から病氣といやるは、まづこの通のやくたいか、コリヤモウ時政には死人も同然、ナニコレ政姬殿、なんと致しませう、先今日は罷かへり、近日流人を猶又同道、イヤ〳〵今にも時政快氣の上、大切なお客なせいなした、伊藤に直談して、樣子を正すと刀提げ、ソレ乘物よは日頃の氣質、そこを思ふて姬ごぜに、大紋大小父の魂、ア、イヤ〳〵〳〵今日はマア〳〵引とりませう、ム、ウすりや時政をうさんに思ひ、お預けなされぬお心か、サア〳〵さうではござらぬ、流人目附の時政ぞの、そこに如在はござらぬぞ、サアそんならお預け申ませう、サア夫では、夫がならずは時政は、二心でも、イヤ〳〵〳〵テモ情ない、そんなら流人を乾度あづけた、成程たしかにお預、委細は明日〳〵と、伊藤はわたまかきすゑし、牢輿尻目に荒鷹の、摑し鳥を引わかれ、館をさして立歸る、跡に政姬打伏し、父をいたはる其隙に、姥共がそれ〳〵に、介抱をはつて立上れば、折しも秋の山もせに、赭らむ木の間笛による、鹿のあゆみや牢輿の、戸をひき明て賴朝の、やつれたまひし雨の手を、雨の袖越引上て、敬ひ上座に伴へど、口上出かねとお〳〵と、もみ手に愛ぞ溢れける、兵衛佐に

釋も抱付、泣いる心ぞわりなけれ、頼朝誓詞を下に置、サテ〳〵おどろき入たる心底、二言わらじと小指を噛、血を滴んとしたまふ所に、千秋萬歳の千箱の玉を奉ると、謠かなで〳〵立出るは、當時に名高き宇賀道者、百六歳の白髪に、色を爭ふ白糸緘、上に着せし狂文の、綾の居士衣の袖かき上、瓶子土器携て、座の中腹に引直せは、頼朝誰共見しり給はず、姫もうろ〳〵宇賀道者、頼朝卿を上座に移し、某事は關八州に隱れなき、衣笠の城主三浦大助義明といつし者、御父頭殿最期の後、本國に立歸り、無念の月日を送る内、平家の祿をはむまじと、都近く居を構へ、江州比良の山上に、四季隔なき薇を採り、時節を伺ひ居たりしに、文覺といふ沙門來り、頼朝平家を亡したまふと、知せを聞たる其嬉しさ、とはいふ物の用金乏く、いかゞせんと思ふ折から、天の與か佛神の、加護より得たるコレ此鎧、宇賀丸と號て三浦の重寶、我手にいるより福徳自在、サア此上はよき武士を靡ん物と、一番に駈付たるは北條時政、委細を語り進むれ共、味方にも參らず、敵對も致さず、我を留て一ケ月、則今日頼朝を、此家に招と聞嬉しさ、本望成就の吉相を、祝ふて携ふ二品と、事明白なる演説に、頼朝席を立たまひ、サテハ聞及びし大助よな、百餘の齡の身ながらも、かく勇しきは佛神同然、上座慮外と立給へは、御手に縋り宇賀道者ハヽヽ勿體なき御一言、生て海月の骨いためず、世にありがたき主從の、かためめの御盃と土器を、兵衛佐に參らすれば、政姫案に相違して、二世の固か主從の、固にかはる

に、怒を含み問かくれは、割符を合せしこと葉のはし〳〵、仰天ありしがさわらぬ體、ホウいしくも難ぜし一不審、然といへども此賴朝、かく迄虜となる上は、明日をも知らぬ身の上に、讎を報する所存ありとは、滿足至極の沙汰ながら、さら〳〵我身に覺なしと、仰を聞さし、イヱ〳〵、覺ないとは御卑怯千萬、既に去る七月五日、高雄山にて御遊の折、紅葉の御製を準へて、下しおかれし文箱の院宣、又三浦大助は、宇賀道者義明と名を改め、家に傳る鎧をまつり、軍用金を取しらべ、只今軍評議の最中、斯明にしれたる上は、お包なくとも白狀と、委き尋は胸に釘、爰ぞ大事と賴朝卿、忍ぶにたへざる氣を鎭め、段々委細の問事なから、知らざるをしらざるとする聖の詞、我身に覺あらされは、譬いかなる責災難、受たりとても他を恨す、我運命の拙き所、サア何分にも計へと、思ひ切たる顏色に、政姬用意の牛王とも出し、ムウ夫ほど覺ない事ならば、サア是に神文遊ばせと、退引ならぬ手詰の詮議、色目をみせじと一通の、牛王を受取手の重み、大盤石を受たる如く、呆果ておはせしが、ムウするや覺なき誓詞、此牛王に、アイおかきなされて下さんせと、和りしめて政姬が、ひんと刎たる片袖は、文の返事のない返事と、ついさとらるゝおぼこさよ、賴朝是非なく牛王を開き、誓詞を讀て驚きたまひ、ヒヤアコリヤ夫婦かための起請、イヽヱなんで、夫はおまへのお見違へ、よう讀なはして下さんせ、斯らまで心を盡すのに、つれないおかたと大紋の、衣紋みだれて傍により、遠慮會

朋輩の信なか〳〵赦さぬ、一筋うけとれ義明と、五善を機矢先に政姫、ヲヽ面白し〳〵、源氏の大將頼朝に、妻あることを知ざるや、見覺る爲此わばら、ひと矢所望と立塞る、時政少しも蹰はず、ホヽウ心妙なる女義の體、眞正中と十三束、切て放せば政姫が、左の袖を貫しは、思ひよらざる目當なり、道者矢がらを取上れば、結びつけたる一通を、コハいぶかしと押開き、ヒヤア時政には御味方と、いふ聲押へて北條四郎、ヤア敵の大將よつく聞かれよ、我大病と僞つて、伊藤をたばかりふしぎの見參、以後の落堵は渠一人、四郎も面晴健忘と、コレ御油斷有は大敵〳〵、サア油斷なくばサア勝負、落よ〳〵を兩眼の、瞳で知らする人目の關、娘を取て突出し、敵の妻女さらば、おさらば、無事で堅固でサア勝負と、いはぬはいふに政姫に、心を殘す時政の、正しき影に頼朝卿、三人の心義明、伴ひ館を立歸る、山里に憂白菊と育しに、など川竹の繁く、玉の砂の起伏に、憂目を都九條の里、格子際なる大戸口、柿の暖簾もふうはりと、綿屋が奥の賑はひは、玄田民部が居續に、亭主も心浮拍子、琴三絃の音も近て、ありし昔は月花を、詠めて憂を晴せしに、今は越路の月花と、人に見られて人の憂、晴せば增る身の憂の、長柄に花を櫻木が、武家の行義も八文字、昔し風なる襠は、着形に心つき出しの、其日其夜の客つゞき、柳水大夫ともてはやされ、つひ踏馴し塗下駄の、音もから〳〵傘に、同じ出立の曙が、道中花手に二人連、綿が籠に立寄て、コレサア柳水主、わたしやこなんに頼が有、聞

不機嫌顔、襖相手に水鳥の、中を嫉し河骨の、花に科ある風情なり、頼朝土器とり上たまへば、政姫傍で見ぬふりも、顔か見たさに立直り、思ひ盛なす土器を、いざ大助へとさし給へば、道者うけ取押載き、コレ政姫どの、時政お味方なき内は、夫婦といふ事決してならぬ、コレ此盃は主従の固、ナアコレ此山伏か進上申、事濟まではしつかりと、預りめさと指付られ、政姫ゆめの覺たる心地、土器とり上押載、そんなら父上味方の上、是ぞ夫婦の盃と、肌に抱しめ悦べは、道者時政の枕に立寄り、いかに四郎慥にきかれよ、今日までの饗は千萬滿足、然れは只今主人に對面、も早この場を立去て、戰場にての返禮と、頼朝卿の御手を取、庭に折しも政姫は、私も一所にゆきたいと、烏帽子大紋かなぐり捨、取付袖口ふり放し、引わけ〳〵立出れは、頼朝白洲に佇みたまひ、イヤサ大助麁忽な有そ、此場を去は安けれ共、跡にて時政の難儀となるならは、いかゝはせんと有ければ、深智の義明手を拱き、暫く工夫の其折から、ふしたる時政つゝくと立、ヤア〳〵それに打せたまふは、源氏の大將頼朝公には有さるか、北條是に扣へたり、身動き有は只一矢と、床なる弓矢携ゆれは、道者頼朝を押圍ひ、コレサ時政早まるな、今矢面に一命を、果すはさら〳〵惜まねど、大義を興す頼朝を、文覺に渡す其間、命を預けよ時政と、いはせも果ず、ヤア〳〵おくれたるか宇賀道者、今頼朝を見遁しては、流人警固の伊藤が落堵、コレ此四郎は眩忘にて、頼朝此家に入たまふも、立出たまふも知らざれども、

はたにゐて、外の女に肌ふれさんすと、取付て殺との事いな、おまへもちつとたしなまんせと、いひ捨ふたりは襠の、小褄ほら〳〵奥に入、跡に喜之作けてん顔、コリヤ奇妙だ〳〵、つく〳〵思へは烟草屋のお霧、一度か二度か逢たけれと、夫れから梨子も礫もなく、すほぽん〳〵と過せしに、其樣にまで思ふてなら、仕樣もやうも有た物と、両手を組てさしうつむく、折から表に入來る武士、三人の供をとめし具して、綿やが簾に立かゝり、いかに誰か有、此家の亭主に對面と、坂東聲にて呼はれば、亭主喜之作取あへず、ハイ亭主は直に私、御用ならばおはいりと、挨拶すれば表の侍、イヤ大義ながらちよと是まで、某は股野の五郎景久といふ者、汝に談ずる子細有、ひと先是にて樣子を聞、其上得と熟談せんと、聞より氣早の喜之作が、悔り立しが着物の裾を、疊に縫付られ、五體すくめは又仰天、ヒヤアお霧どのがござつた、コレ了簡していんで下され、こなたのさうした心底とは、コレ夢にも知らぬが佛さま、拜みじや程にいなしやれと、挨拶間違ひ股野はつゝ立、コレサ亭主、田舍者と心得、色々のたわけを盡す、用事みてねばまかり歸らぬ、コリヤ隙どると爲にならぬ、早立上れと怒の面體、アゝ情なや〳〵、拜といふても聞入ぬは、よつ程わしを思ふてじやの、コレ砥石の塔烟筒の卒都婆、ゐと懇に吊ふほどに、どうぞ了簡〳〵と、汗をながして詫にける、一徹短慮の股野五郎、ずんと立て走より、亭主を取て突とばせは、笄ぬけてひよろ〳〵〳〵、うろつく亭主をハツタと睨、ヤイ爰な

て下んすがおいやかへ、アノ曙主とした事が、同し勤の中じや物、身にさへ叶ふ事ならば、サア聞て下んすかへ、サイナアア、おうれしうござんす、詞にだすもつらけれど、わたしや民さんの機嫌を損じ、解たまんまのお添臥、それといふて捨もやらず、傍に置ての酒事斗り、どうぞ詫して下さんせと、頼を柳水聞さして、コレハ〳〵何いはんすやら、終に目顔にも見ぬ民様、お理のごんかいな、といふて詫ねばおまへの難儀、今なんとせうとさしうつむき、思案半に曙が、ふつと氣の付奥の首尾、ホンニ民さんのお待兼、隙取たなら猶不首尾、サアお出やと先に立、のれん打明いりにける、内には喜之作晝寢の體、ふたりの大夫立別れ、コレ柳水す、喜之作さんかようねてじや、なんぞだまして笑種ど、いふに柳水が推なれて、ヲヽ幸よひ事がござんす、こなんの笄おくさんせと、取てふたりのかんざしを、袷の裳に指貫き、疊に縫付傍により、コレ喜之作様、コレ申コレと、起せばむつくと悯り、コレハ〳〵大夫さんか、テモ早いお出、民さんには奥にお休、場さんにはまだ、ムユウ、チエ、ハア奥への口合は、目をする〳〵と渡世の道、手洗の水も洩れざりき、柳水は片頰に打咲て、コレ喜之作さん、おまへにちつと内證咄、アノナこなんの懇して居さんす、烟草屋のお霧殿が、おまへの事をあんじづめ、それが病の元と成、きのふの晝暮死んしてな、ヒヤア、シテ〳〵どうでござんす、サア死なんす折の云置に、わしや耻かしい事ながら、綿喜様に懇して、思ひが増て死るの故、魂ハ綿さんの

柳水のやの字も出さぬ樣に、賴む〳〵と密談の、聲もれてんや股野五郎、一間の襖押あくれば、大場か十面喜之作は、思案顏して扣へ居る、股野五郎坐につきて、コレ〳〵大場との、御老人故延引と、思ひの外のお早いお出、サアこなたへと請ずれば、大場の太郎せゝら笑ひ、コレは〳〵御叮嚀、老人に不相應の役目、ケ樣な處へ參るのは、白髮に對して遲參せりと、事々しくも返答する、股野寬度の詞にて、ハヽ〳〵物堅い大場殿、遊所故にお出にくひ、コリヤさうも有そな事、とはいへ亭主、コリヤ滯留中は兩人ながら、當所の遊君伽として、心を赦めて彼詮議、ナモシ大場殿、夫が孔明琴の段、御同意あるやと問かくれは、下地の好を隱し藝、眉皺つくる大場太郎、イヤもう貴殿御存の通り、女きらひの此大場、遊ぶは笑止にござれ共、詮議の爲なら、いかにもせん議の爲と、股野亭主に打向ひ、コリヤ喜之作とやら、我この間より聞及ふ、柳水大夫といふ突だし、古今の氣量と專風聞、我相方にしてたもれ、早う〳〵に喜之作は、もだ〳〵うじ〳〵大場太郎、コリヤ亭主何をうろつく、お望の女呼でこい、コリヤよんでこい、呼んで參じは參じますか、ハアノ柳水さまには、ハテ呼んでこいと太郎か氣遣ひ、こなたに股野が睨出す目玉、身もひや〳〵と喜之作が、勝手をさして入にける、程もあらせず柳水大夫、禿の春野引連て、入くる姿水引に、わらぬ波理紗の帶紐を、むすぶ椽の包み花、紙と花とは顏と襟、さしうつむいて座につけば、大場は消もいりたき風情、いはさぬ前と聲あらゝげ、

泥作め、立ことならすば無用の足、股野がきつて切りさげると、鍔元くつろげ詰よれは、喜之作遙飛しさり、アレ〳〵そさうなされますな、只今表へ出ませぬは、鼻が戀人お霧上﨟が、きのふ死なれて其魂、私か裳にとらへ付、身動きならぬ難儀の折、お影で死靈も去りました、お有がたやと平伏す、股野は亭主を屹と睨、ハヽヽヽいかさま茶屋といふものは、さわる氣持が相應ならめ、大ばかものめと坐を改め、コリヤ亭主近う〳〵、是へ參れと和らかに、出る程喜之作氣味わるく、一二寸つゝ摺よれは、服野の五郎小聲になり、コレヤ亭主、此家の內に盜人の張本、毎日毎晩入込由、夙に聞て羅越、吟味の間滯留せん、其盜人を召捕手引、屹度申渡したぞ、コリヤ新五新六、供部屋わらば休足せよ、おれも坐敷を借申と、突立上る押かけ客、大場氣の毒なから喜之作が、伴ひ一間に兩人は、勝手の方に入にける、かゝる所に入來るは、大太郎景親、石橋山の合戰にうち勝、飽まで驕る面魂、在京所用の暇を伺ひ、毎日通ふ九條の里、いつにかはりて大勢の、供人表に待せおき、錦屋が坐敷に打通れは、亭主喜之作出迎ひ、テモ懇なお道ぐさ、太夫さまには眞白い、首で鷺ほと延て有、さァ〳〵いつもの中二階と、とり持喜之作押鎭め、コリヤ〳〵亭主、今日は公用半分、柳水大夫も先さたなし、シテ御用とは、イヤ氣遣の用ならず、先日以來御吟味ある、盜人の張本人玄田民部、折々當所に來るよし、搦とつて差出せと、淸盛公の內命にて、服野と某立越た、其股野が前なれば日頃の咄は大禁物、

にこけたる民部、コリヤなせこかした、なんでおれをあそこへやらぬ、コリヤ酔ては居ぬぞ、ゑはぬ〳〵づんと酔はぬ、酔はぬ證據に酒のむと、たはいなければ大場と股野、目ばなしもせす伺ひ居る、喜之作心得銚子盃、手つからとつて差出し、ヱヽ中居めが百病走で大きな迷わく、コレ大夫す、おまへの酌なら水でもだんない、とんと民すは渡したと、こなたの坐敷に手をつかへ、イヤ申おふたり樣、あのお客はとつとの田舍、平生しごく正直一偏、一はい過きればあの通り、おかまいなく共サア御酒と、とり持こなたに曙が、盃とつて民部に渡し、サアお飮、ヲヽよかろ、もれ〳〵〳〵と引受て、コリヤ大夫、受はうけても面かづき、二重の口ではよう飮れぬ、コレ大儀ながら名代と、盃わたせば、ヲヽヽあはらしつね〳〵下戸としりながら、私に飮してこまらすのかへ、イヤ〳〵〳〵こまらすのじやない、いつかいのじや、サア御名代名代と、ひら無理押に曙が、すつと飮でヲヽわる、コレ飮んだぞへ、ムウ飮だかハヽヽおりや見なんだ、爰はお手元ドレお肴、ひとさし舞はんと立上るを、ヱヽなんじやいなおかんせと、立を引すへいたはれば、こなたの大場は一心不亂、民部が體を見ほはす目劔、股野柳水は始終の詰り、喜之作は、氣の毒頭格別なり、曙盃取上て、サア又飮だぞへ、ホウ見事〳〵、然らは頂戴仕らん、サアとくと盛々、イヤナニ大夫、コリヤどんな事してのけた、面かづいて酒が飮ぬ、夫の名代女房の役、サア飮でたもコレ此盃を飮でたも、コレ此盃を飮ねばの、そなたを

ハアヽ珍らしいお傾城、小袖山の繪本で見たが始り、生てみるは是か終り、ハヽヽ見しらぬ女中しやのと、しやんと一本ことばの釘、股野はわさとしなだれより、ムヽきゝ及んだ柳水大夫、コリヤ喜之作、此女は某が受出す、外に客でもあるならば、其縁きつと切て仕廻、またふかまとやらが有ならは、無理に受出す所存でない、篤とやうすをきかせよと、せりかけられて喜之作が、氣作の間に合行つまり、アヽ申お方には大切な、ナヽヽ何といふ、何で其女に大切な人はない筈、とつく吟味と大場がくさび、うち込股野が詰ひらき、ハテサテ貴公にはお世話無用、御老人に似合た樣に、御酒でも參つてござれさ、イヤナニ柳水とやら、此頃より逢かゝつた、客かわらは其名をいへ、コリヤこはい事も何にもないと、問はれて柳水は手をつかへ、お客と申て外ならす、大場といふを打消して、ヤアかしましい女め、大ばか者が汝か客か、それをいふのは大な耻、コリヤサヽ夫をいへばナコリヤ、大な耻、耻しや／＼と我身の上、よそへて留る口先を、又もまた野がさゝゆる折から、奥に謠の聲聞へ、持たる撥をは劒と定め、心意のほむらは大皷の烽火、天に上れば比翼の鳥、ツヽテン／＼と拍子とり、うちは大皷をうちならし、有おふ翁の部をかつき、大夫が裲引かけて、しやんと結びし抱帶、狂ひ出るは玄田民部、コレあぶないと曙が、ひつ添ふ跡に喜之作が、うぢ／＼きよろ／＼氣を付れど、民部は厭ふ氣色もなく、大場股野が眞中に、坐を設れは曙が、コレお客じやと引出せは、こなたの坐敷

コレ見や下着はひつたり大汗、ふいてたもれと摺よれば、柳水はわざと身をよせて、ムウそんなら今のお客様は、もさ様ではしでざんすかい、ヲヽもさもさとんとやれもさうらやれじや、ホヽしんき、さうとはしらでうか〳〵と、ヲヽモウよい〳〵、サア日頃からくど〳〵通り、ちよつと此間に帶々と、引よせらるゝ柳水が袖へ、ちきるゝ胸の癪押へ、コレ何さんす、私が帶の解れぬ樣子、知て居ながら何ぞいの、といふてこれが見て居らりよか、サイナアそこを辛抱心底づく、此頃からもいふ通り、先立夫にとりかはした、宇賀の神璽の起請文、やぶれば蛇と蛭の責め、其神あげの返事迄、待んせ待との約束を、忘るゝ程の心中なら、外のお方に逢しやんせと、はね付られて大塲太郎、ヱヽ仕廻たと見廻す後、幸ひ爰に天神を、祭の神酒が一對有、のんでこますと錫取上、のんで柳水に取すかり、留るも聞ずヲヽ氣味よや、イヤモウのんだりや猶寢たいと、又摺よるを宥る折、人音聞ゆる下坐敷、されども彼人夜は來れども晝見えす、ある夜のむつ言に、御身いかなる故により、晝をば何とうば玉の、夜ならで通ひたまはぬは、いと不審多き事なり、コレ民さん、謠ところじやでざんすまい、何がお氣にいらぬやら、重る馴染に帶紐の、とけぬ私か胸のうち、思ひやつてと取縋り、歎く曙突飛し、ヱヽ何をほざくと思へば、いつでも其事、コリヤヤイよう合點せい、マア我が水臭い根生から、洗直せとは又何で、ハテおれが居續に居るなら、わが身も爰に付て居て、お顏がわるいソレお藥、出るには羽

嫌ふと思はれては、どうもそなたに義理がたゝぬ、所でそなたが名代して、そなたの疑そなたが晴しやと、まんざらの無理相手にならず、いつそ下戸の腹立飲、又引受て、ヲヽ術なコレ民さん、終に雫も飲ぬのに、丁度是で盃五つ、サアお客の邪魔じや奥へいて、モウ寢やんしよと袖引ば、むつくと起てしら〳〵笑ひ、テモ床早い女中じやの、わしやなんぼでもといふ身振、ハヽヽたまらぬ〳〵コレあつちが客ならこつちも客、遣ひ捨る金は金、だまつて居やとやりこめて、大鼓とん〳〵打立て、ヤア思ひ付た喜之作〳〵、アイ〳〵〳〵何でござりまする、ヲヽ何でもないがこんな事、喜之作が手踏が手を組合せ、ヤアできた〳〵、是こそ玉の輿車と、上にしつかと跨がれば、何んでお機嫌とり〴〵に、ひと間の内に入にける、跡に大塲が短氣虫、シャ奇怪なる狼藉者、首ひきぬいて腹いんと、なけ出す大塲を柳水が引とめ、コレ塲さん私が旁に居る故に、ちつとひぞりかヲヽ憎と、つめれば大塲もおと〳〵、股野はわざと氣の付ぬ、體にもてなし立上り、ナニコリヤ亭主、今の男はたゞものならず、樣子を伺ひ引括る、大場殿には老人故、しばらく休息あるべしと、奥にかけ込股野が勢ひ、留めもならず喜之作は、一間へ伴ひ入にける、大場は表に立出て、コリャ〳〵皆の者、用事あらば呼出さん、まづ其迄は下宿へ引と、下知を待たる家來共、皆うち連れて出て行、跡に大塲はそろ〳〵と、梯子音すな靜にと、柳水を引連中二階、上るより早腹匍寢、柳水そなたが大事をいふまいかと、

あまりの事に詞なく、嬉し悲しの涙のみ、暫あつて聲ふるはし、石橋山にて討死と、人をたばかり傾城狂ひ、ヘツヱあさましい與市殿と、いふ口ふさいで玄田民部、一間をはなれて小聲になり、コリヤヤイ女房共、希有の對面驚は尤、我初陣の石橋山、討死せしと世間の風説、それにおめ〳〵立歸らば、大助様の御怒、御勘當は必定と、わざと浮世にかゝる暮し、シテ此勤は何故と、半分聞さし櫻木は、又もすり寄聲荒く、ヘツヱ爰な人でなし、玄田民部といはんすからは、盗人の張本、サヽヽ夫いふてよい物か、マヽヽマア何で其由しりつるか、何で知るとは愚の仰、私か今迄憂苦勞、あるが中にもさいつ頃、高雄山の麓にて、難儀にかゝる奥山の、人なき所に連行しに、其家の主民部とやら、ヘツヱ憎や〳〵と思ふたのは、すりやお前故勤の身、コレよう思ふて下さんせ、稚なじみの女房の身の代、役に立ての傾城狂ひ、見て居られうか居られまいか、心に問ふて見さんせと、縋り付て諫むれば、與市手に手を取かはし、ムウスリヤ先月勾引、百兩に賣たるはそなた、ハテ何とせう、どうも思ひきられぬ曙、コレ手を合すこらへてたも、勤は引てやる程に、誰にも與市は討死と、沙汰してたもと詫ければ、ヘツヱさうまではお前をたぶらかす、曙さまにはどのやうな、氏神様が付てかと、じろ〳〵見やる襖の内、闇にわかちもないじやくり、膝も摧けど摺つける、髮にみだるゝ心を察し、そなたの歎も理ながら、思ひ切られぬ一通り、マアせかずとも聞てたも、イヱ〳〵聞ことはちつ共な

織入にはお湯と、女房めかねばならぬのに、只うはむきの勤ばかり、少たしなめと呵られて、曙民部が膝にもたれ、サアお前がさうした心なら、今から羽織のきせかへ迄、私が役にするわいな、たんと遠慮したかはり、どれしつかりと抱付と、手をさし廻す三重の帶、解て色付下坐敷、上には大塲がふら〱と、閉つく眼押開、コレどうじや、蛇でも非でもたつた一度、眞似なとしやうと柳水を引よせ、力にまかせて抱しむれば、下に曙コレ民さん、どうぞ首尾して下さんせ、上にもどうぞ下にもどうぞ、ふたつ寄たき諸分なり、下には曙醉顏に、聲もふるふてコレ民さん、どうでもおいやが定ならば、いつそ殺して下さんせ、膝にすり付歎くにぞ、ホヽ今宵はおつ付抱てねる、氣づかひせず共寢て居やと、押倒さるゝ曙が、恥かしいのに醉まして、ムヽそんなら今宵が姬始　アお嬉しうござんすと、蒲團とる手も紅葉して、とんととけたる小男鹿の、月に醉ふす風情にて、安堵の思ひすやすやと、寢いるまいとは思へども、現に夢やむすぶらん、民部はなにか思案がほ、曙がそば徐々と、立出る跡の襖をさす、音に惕り柳水大夫、きゝ咎めたる謠聲、いかゞと下を氣つかへ共、大塲に心沖の石、濡る袂をよきて取、床の三弦調かへ、心なき、空にも溢す雨の夜は、なかぬもをしの妻むすびと、うたふ柳水をいぶかりて、下から伺ふ上よりも、覗く二人が顏とかは、ヤアと惕り燭臺を、互に消して櫻木は、二階の障子ヒツシャリと、遉夫婦の緣盡ず、ばつたり行合胷盡し、しつかと取て身を引そひ、

鋸屑とやら、顔も得見ぬ市太郎、殺せしなどゝはコリヤ何事、コレ空とぼけ置んせ〳〵、則私を勾引、責さいなんだ仲間の者、可愛やあの子を袋に入、兩眼包んで引出し、牲とやらに供へるとて、私か前に引直すを、我子と見れども猿轡、物はいはれず摺よりて、いたはる事も繩目の身、市太郎は一筋に、かゝ様〳〵と慕ふ故、母が涙に聲あらば、爰に居ると知らせうにも、叶はぬ事にもがく身は、紅蓮の氷に閉つめられ、劔の山は目の前に、庖丁振上突かくる、刀の下に兩膝立、覺悟さはめし健氣さも、いはけないのが正直にて、手足を悶苦しむ體、見まいとする程見る母が、手足もがるゝ苦しみの、魂はとうから骸をぬけ、我子の冥途の導を、すげなう切たる稚首、私が袖に喰付て、はなさぬ母子の血筋の縁、つながる袖口きり拂ひ、神に備へし悪黨を、手下につけて知らぬ顔、此様にまでどうよくに、ようも〳〵ならんした、いつそ討死なされたなら、斯した歎きあるまいと、恨み歎くをきく與市、耳より五臓にしみ渡り、覺えずわつと男泣、愛着執着歯にかみしめ、涌くる涙を呑込んで、ムウ先日七人の子を殺し、宇賀丸の鎧を祭り、筋なき金銀集し折、結願の日にころせしは、行空しらぬ迷ひ子と、月の花のが知せしに、扨は我子市太郎、ヘツヱ人の酬が立處に、當る驗は我子に響き、はかない最期を遂たるよな、是といふも曙に、氣を奪れし冥罰と、諦てたも女房と、倶に涙にむせかへる、夫の執念櫻木が、恨の聲もうそかれて、コレ與市殿、傾城にほだされた、心にめんして市太郎が、

い、サアお心を飜し、私を連て此家を出、大助さまにお仕と、髪逆立て諫むれば、與市は思案の手を拱き、猶豫の體に櫻木が、つめ寄〳〵女の片意地、私が諫受たまはずは、眞田與市義貞こそ、討死したと僞る由、万の人に告知らすと、立ば與市がやり過し、是非なく拔たる刀の光り、櫻木心得とびのけば、闇を目當の仇討に、櫻木刄物を取て押へ、コレ〳〵此さくら木は何科で、殺さうとは餘りぞや、おまへに別れて其後は、妻戸打雨軒吹風、もしや殿御と雪の夜も、寒さいとはず窓の戸を、明暮案じて居たりしぞや、又其上に大助樣、平家に命をつがれんより、飢て死んと覺悟の上、お飯一口お湯一口、召上られて立ぬく氣も、明暮お前の事ばかり、適與市は秘藏孫、健氣に死だと口では立派、一間の內ではほろ〳〵と、獨言をつぶやいて、泣てござるお姿を、襖の間から見る私が、心の爪を放さるゝ、血汐は淚と流るゝを、包む袂に市太郎が、嚊樣何で泣んすと、何にも知でおろ〳〵と、泣子の顏と泣親の、心もしらで面白う、遊んでござるばつかりか、コレ〳〵〳〵殺さうとは、何事と、縋りついたる刀の下、與市も岩木ならざれば、ヲゝ道理じや〳〵、さうしたそなたの心故、思ひださぬ日はなけれど、いかなる緣か曙に、おひそめしよりうつとりと、氣を纒はるゝ戀衣、とはいひそなたの其心底、忘れぬ證據は此起請、サア其起請で殺さうとは、サア夫は、サア〳〵〳〵何故私が殺したい、まだその上に一人の子、頑是ない者殺さんしたと、寄るを突退け詞を正し、いへば云るゝ

を襷にかけ、裡絹取て鉢卷しめ、思ひ付たる疊の縁、はら〳〵さつと切拂ひ、取るより早く裾引上、しつかとしむる抱へ帶、太刀振上て切入らんと、見わたす一間も眞の闇、探りよつて襖の引手、押せどしやくれど明ばこそ、コハ口惜と躊躇しが、刄物を帶に差貫き、兩手をかけて押力、女の念力神力佛力、一度にさつと一間の襖、内より開て立出る侍、照向提灯ひつさげて、照す座敷の黑裝束、左右に別れて黑繻子の、裡付上下黑光絹の、衣服大小流石に曲物、樣子わらんと櫻木は、衝立影に身を忍ぶ、こなたの兩人提灯を照し合て、ヤア汝は民部と、いふは何者とは慮外千萬、忝も清盛公の臣下、股野五郎景久といふ者、シテ又其景久殿が何故に、我を狙ふは何と〳〵、ヤアぬらくらといひほぐすな、汝は當時徘徊する、盜人の張本玄田の何某、サア繩かゝれと股野五郎、提灯投すて上下の、肩衣刎て股立を、捕て見せんと身構へたり、民部も心得身拵へ、互に坐敷を闇討の、聲をしるべに切付る、櫻木わぶ〳〵衝立影、ふたりは秘術を盡せども、くらさはくらし提灯の、こけたる向ふは明かに、見ゆれば切込切結び、暫し戰ひ居たりしが、面倒なりと双方より、刀物を捨て組かゝれは、心得たりと揉合組合、エイヤ〳〵の聲はかり、夫々勝負も分ざりしに、民部が力や增りけん、股野を組伏せ膝に敷、ため息ついたる有樣は、事逞敷見えにける、民部捨たる刀物や有と、さがす其間に中二階、障子を開いて大塲の太郎、手燭さし出し聲をかけ、ヤア上が服野か下が服野か、加勢は是と手裡劍を、打ん

非業の最期を赦せとは、そりや惡魔とも惡鬼とも、名の付やうが有かいな、せめて此後心を改め、眞田與市義貞は、文武兼たる武士と、世にうたはれてたまはらば、市太郎が迷も晴れ、私もほんまの夫婦中、コレお心がかはらねば、千年でも万年でも、お傍に付て邪魔すると、つめ寄櫻木取て引伏せ、コリヤヤイ此場の事を見ずしらず、立去る心は、ないとも〳〵微塵もないぞへ、ムウスリヤどうでも承引せぬな、女房去たぞ、コリヤ與市が妻になりたくは、勝手次第に分別せよ、起請を返すと打付て、襖引立奥に入、跡に櫻木我夫の、後姿も闇々と、見捨られたる一間の方、探り當りし燭臺に、すげなくきえし蠟燭の、白きを明りと取出す、掛地は何かしら紙に、かいたる物を燭臺に、掛て念珠を手に爪繰り、アヽうらめしの世の樣や、二世と契りし夫はあの體、こんど〳〵と育たる、其子は僅の此掛地、まだ不叶ないろはの清書、お師匠樣の褒美の朱書、逆朱ともなり佛菩薩の、手を取たまふ名號とも、思へばくらき此闇に、我子の顔があり〳〵と、眠る眼に遮るは、魂此世に殘りしか、殘らば是を聞てたも、そなたの慕やる父樣には、天魔といふもの魅をなし、傾城狂ひに身を崩し、其銀支に切取强盜、それで足ひで人の子を、殺すが上にそなた迄、刄にかけしは父樣ぞや、其起とは曙ゆゑ、ヘツヱ面憎の傾城やと、見まはす疊に白きは刄物、天の與へと押戴き、イデ曙をさし殺し、夫の心を改めん、もし仕損せば未來にて、ゆるりと乳も含せう、待て居や、と立上り、襠の襟ひつぱさき、表の絹

道を急かせ立かへる、暫く有て股野五郎、民部が縄をときほどけば、櫻木又も恟りして、子細わらんと氣をつむる、與市上下取つくろい、少しも動ずる氣色なく、坐を改むれば股野五郎、同じく騒がぬ面體にて、イヤサコレ眞田殿、七人目に殺せし子をなしたる女儀、貞心見えて頼もし〳〵、委細の事をお物語、然るべしと相述れは、與市つゝ立一間なる、襖ひらいて取出す、女の死首三方に、のせて上坐に引直し、コリャヤイ女房、大助殿へも知らさぬ密事、汝が貞心故語てきかす、先年頼朝流罪有、伊豆に蟄居の其内に、對面とげて約せしには、十万兩の用金を、才覺なして時節を待、此頼朝に力を添は、平家の復讎遂たる上、三浦一黨恩賞あらんと、指揮を受たる此與市、アラ嬉しや本望や、いで用金の才覺と、思ひ立たる氣ははやれど、最苟には成就せじと、思案にこつたる其折から、眞田與市は股野に討れ、石橋山にて落命せしと、世間の風說、幸ひに、喜之作と云談、家内の代物基とし、揚屋を修繕ひ諸人を招き、追々金銀集る内、天の導たまひしや、凶徒の張本玄田民部、此地に通ひ金を散らす、扨こそ時節到來と、民部か歸路を慕ひしに、近江國比良山の谷蔭、甍を並べし一構、金銀財寶積重ぬ、扨こそ用金でざんなれと、賊首民部を討果し、附属の惡黨三十人、我一力になぐり立、奪ひ取たる黄金は、三万兩に向たり、すは本望半せりと、殘る所の七萬兩、いかゞはせんと思ひ付、惡事と知ての切取强盜、我も同く民部と名づけ、夜白に集る金銀も、いとはか〳〵しき事あらねば、家に

とすれど眞の闇、組伏られたる股野五郎、ヘッエ口惜や殘念や、盜人風情が手籠になる、我運命も是限りと、いふ聲聞より大場太郎、ヒヤア下なるが服野かと、二階を下る其隙にも、民部は刀物を尋れば、さくら木共にあぶ〳〵と、帶に貫く刀物を取り、投出す間もなき後の方、大場が民部を引のくれば、服野すかさず起上り、何の苦もなく民部を引伏せ、同しく溜息ついたるは、危き次第と見えにける、大場は灯火燭臺に、うつし取る間に服野五郎、民部に繩かけ突とばせば、遙こなたに繩目の民部、差うつむいたる無念の顏、漸上げて二人を睨、ヘッエ心得ぬ服野殿、我浪人は致せども、切取强盜覺へなしと、いふを打消大場太郎、ヤア陳ずるとて赦さうか、則證據は是かうと、衡立蹴とばす其内に、つゝくり立し櫻木を、見るよりハット驚く民部、大場太郎立直り、サア證據といふは此女、民部といへる盜人より、此家に賣られて勤るを、我に告しは實正明白、返答有やときめ付れは、民部面目涙にくれ、差俯向て身をあせれば、夫としらで櫻木か、訴人は我身の血を絞り、夫の顏を汚せしかと、はな〳〵ふるふて詞なし、股野とつくと立上り、コリヤ〳〵新五新六、申付たる揚提灯、大場殿の乗物と、差圖に舁込腰黑に、あまたの家來が引そふて、綿屋が前にぞ相つむる、股野大場に打向ひ、サア此上は拙者が計らひ、嘸御老體御くたびれ、早一刻も御歸宅と、挨拶すれば大場太郎、われは顏に立上り、然らは万端ぬかりなう、計はれそと表へ出、股野か用意の乗物に、さも悠々とのり移り、

よし、大場此地に入込より、是なる喜之作に牒合、大場に渠を付おけば、心にかゝる事もなし、今こそ軍金御目にかけんと、間毎の襖一同に、はらへば不思議や又ばら〳〵、飛ちる跡に二重の襖、國金方金張ならべ、四方を圍めば麗々と、淨瑠璃界に紫満黄金、布並しに彷彿たり、股野五郎勇み立、當時は敵と隔共、以後は互に、ヲヽサ〳〵兄弟同然、兄父に明さぬ一大事、互に談ずる其上に、石橋山の合戰にて、あさりの與市を手にかけて、此眞田をば討取しと、平家を欺たまはる大恩、俗山渤海兩の手で、握りこんたる十萬兩、今にくちせぬ撒金殿、どうぞ踏出す勢に、聲泣かゝる櫻木も、我子の清書手に取りて、字に腸がわるならば、父上樣の善心を、悦んでたも市太郎と、涙かくせば義貞は、よそめに見やる我子の筆、一一文々是眞佛と、せきくる涙振りはらひ、軍の門途血祭りと、曙が首とり上れば、涙ながらに櫻木は、夫の本心聞く嬉しさ、實も蘇生が谷寄に、平家をたばかる眞田が奇計、股野が義心は石橋山、守奉る大將は、三天未曾有の富士蓬萊、兩士の家名は命廬八萬、崑崙呂宋葱領の、絶頂上に爛然たり、ヲヽさもさうづと股野五郎、櫻木引連立出る、跡はこがねの花やかに、遊所に殘る義貞が、智畧の程こそゆゝしけれ

第三　道行嫐獅子

傳はる宇賀丸に、七歳末滿の子を備へ、金銀財寶祈る時は、心の儘と聞しかと、右の鎧を祭りしに、日數二月と越ざる内、十万兩の金子調ふ、其黄金を貯へんに、塀を高うし倉を建、家を圍ふは安けれども、斯せは人の不審もやと、家來喜之作と申合せ、襖切戸を二重に拵へ、圍おいたる十萬兩、尤比良の隱家に、貯おかんもむべなれども、手下の諸者野心を起し、一金にても手を掛ば、コレ人望の妨を計り、傾城狂を幸に、蘇生が谷を流るゝ川、底を撫して通路とし、毎月此地に運ぶ金、誰氣を付る者もなし、殊更去る七日には、不慮なる盜賊我家に來り、金銀奪はんと欲せしかど、右の通にはからひ置ば、家に殘せし金なく、我重寶の鎧を盜、行方知れず迯失たり、早速詮義と思へども、頓て天下を切靡けば、大日本は手の內と、鎧の穿鑿捨置たり、扨これなるは傾城曙、大事を明し納得させ、首になしたも此密事、他聞を忌て命の無心、可愛や一度帶紐も、解ねど我を大事にかけ、義理を立たる中ながら、女に赦さぬ大事故、既にそなたも手にかけんと、討込む腕の狂ひより、遁れて夫婦の對面と、汗を流して物語れば、櫻木傍にすり寄て、そんな事とは露しらず、夫を恨みし女の淺果敢、お赦有と取縋り、嬉し悲しさ二行の、涙に瀬なす計なり、股野五郎魏然と立、コレサ義貞能聞れよ、貴殿賊首の名を取れば、最早この地の滯留ならず、今晩直に此家を出、石橋山に發行あれ、櫻木どのは拙者が預り、後來伊豆にさし向ん、早早出陣用意あれど、すゝむる詞に與市は突立、アゝラ面白し心地

どりは艸津か瀬田か、いつそ石部といそげども、裾に氣の張足取を、風が邪魔してヲヽしんき、ほんに思へば我々が、國に殘せし夫や子の、行末問も御主人の、おかげ〳〵と踏足の、數をせいての思がへしと、手を引合て行跡に、我ぞ男と喜之作が、心自慢の入袖に、いそ〳〵急ぐ笠も日も、しばし傾城、跡に烟殘れるあの山をこへて、主人に近江國船中道中恙なく、守らせたまへと念願し、伊勢を三河や遠江、桑名を渡し押舟は、ゑいやさら〳〵さつ〳〵と、心の波に立月日、七十五里も我他の、噂する間に艤と、いさめすかされ夜を重ね、行ばほどなく伊豆國、小浦の里に着にける、垂乳根の、枝葉榮ゆる往還筋、道者順禮馬駕も、通ふ上下の袖泥障、鞭の名所に踏草鞋、連る軒やくさ津の町、姥が餅とて賣弘む、茶屋の主は後家お米、年斗りよるむく犬の、斑に兀る額際、欲に焦るゝ圍爐裡椽、烟管の跡を膝でふせ、烟る薪を吹たつれは、客の來ぬ間に床几の塵、掃とる手助か透仕事、母と一所に身を忍び、主人の行衞慕へども、手馴り波の粟餅に、工夫分別餡こかし、店に並べて擔子の水、酌込釜を焚たつる、母子が胸は水と火の、中を隔つる金設け、所帶に如在なかりける、尖れる茅の棟先に、のつと日の出の茶のみ頃、店に立寄る道者順禮、中に聲高九州訛、サア爰が名代の姥が餅、高が五文か六文の事、流行唄でも買たと思ひ、喰ておかしやれと竹子笠、ぬげば同行それ〳〵に、運ぶ取持頬張口の餅啣な、コレ同行衆、わしや大坂で聞たが、京の九條とやら七條とやらに、綿屋といふ揚屋が

賀茂川の、水も硯に濁る世は、仇に紅出る秋の葉を、嘸など慕ふ東山、跡に見捨て立出る、月野花野が旅裝、略す姿の染浴衣、きても見よかし扇笠、しやんとりゝしき抱帶、露縮緬のしめ加減、まだしどろなる艶風を、鄙に馴たる風俗に、人を欺く作花、賣聲媚く其跡に、荷箱かる〳〵獅子頭、顱にかづいて喜之作が、伊豆の國なる御主人に、廻り大津を足早に、瀨田の長橋打渡り、暫く息を突出しの、旅に廓の氣もかはり、僅五錢か三錢に、代なす花に媚獅子、サア〳〵稚子達買たりと、三八三つに立別れ、子供たらしの出合口、喜之作態と十面作り、抑杜丹の截花、始る昔を尋るに、諸越といふ片在所に、葉公といふ野漢有、墨繪の蛇を好れし故、ある時毒蛇が匍出ければ、恟りくる〳〵逊廻り、足を擂木と作花、床の柱に投入て、信をこらして見る時は、天より花降り異香薫じ、誠の花の魂を摸し、今咲たやと見顧獅子、親獅子子獅子狂ひ獅子、猛き心もひなびたる、姿も花に戯れて、永き日脚もくれの鐘、ならばまゝよと夕月夜、我は古栖に、花は直に相應なるのを上ますと、つぐる詞の面白く、里の童がより集ひ、めい〳〵買取はや〳〵と、皆が笑顔を作花、手に持ながら拍子取、月を鐘と引ならし、嵐が雲を梳返し、油しんどろ夜の雨、雪をけはひと解流し、木の葉に三井の鐘つけて、べにをしんどろ瀨田の照と、うたふ聲々みどり子は、橋をとん〳〵とんば髮、手に持花も損ね形、我家〳〵に立歸る、跡に三人顏見合せ、互につかれ厭合、又立いづるしめ搦、荷箱を肩に置露の、假のや

兵馬といふ者、氣量骨柄勝れしとて、大場殿の家人となり、今上京して罷在に、此度股野五郎景久殿、源氏の餘類に心を寄せ、反忠の志ありと雖、それといふべき證據なければは、某共を股野殿に付置るゝ、幸、今日此所に、休息ありと聞しかは、是究竟の折なれば、其方萬事に心を付、股野殿の所存を聞、此繼原に告しらさば、褒美は望に任すべし、是は褒美の手附ぞと、投出す小判一兩に、兩眼くらむお米が欲心、コレハ〳〵何より安いお頼、隨分共々耳の醉程聞さがし、お知せ申し上ませうと、戴く小判の耳と口、約束もるゝ一間の手助、襖に引添立聞とも、しらぬ白髮の屑紙祖母、横紙繼原横柄に、別れて旅宿に立歸る、跡にお米は小判取出し、嬉しさうなる顏肌も、皺が邪魔するゑそ笑、斯とはしらず入來る庄屋、何の者もなき卵虫走り、入るより早く、コレおばゝ、手助は上下着ましたか、アレ〳〵お先道具がそれそこに、油斷あるなといふ間もなく、行列美々敷揃ひの先供、長柄弓鎗鉄炮の、威勢烈敷股野の五郎、乘物昇込艸津の庄屋、手助を伴ひ蹲る、股野の五郎景久は、關東下向の上使迚、道中衣裳の伊達羽織、刀ひつさげ悠々と上坐に通り、近衆を招ぎ、コリャ用意の乘物是に直し、いづれも休息いたさせよ、イヤナニ庄屋、其方も引取て、暫の間往來の、人留屹度相守れと、裁斷嚴敷一言に、ハツト立出る庄屋に添、皆々下宿へ出て行、跡に股野は手助を招き、ナニ手助とやら、三浦大助義明に仕へ、忠勤烈敷草履取は、ムウ其方で有たな、某は股野五郎景久といふ、おや

わるげな、時に其揚屋の內で、大がたりの盜人めが、ゑずう銀をつかふたげなと、咄しは主の身の上と、しらで聞入手助が頬杖、こなたに中國木綿賣、ムウそんなら銀の百目も遣ふたかの、イヤ〳〵〳〵さうした事でござらぬ、つい一口に千貫目、ヤア〳〵〳〵ゑらう遣ふたの、こちや其金が有ばの、荷商賣隱居して、鰯のぬたでも喰て居よに、どんなやつじやと打笑ひ、打つれてこそ出て行、跡に手助は店先を、とりかた付る表のかた、づか〳〵入來る庄屋庄作、糊氣絕たる麻上下、手に橋かけて內に入、コレ手助、そなたは果報なものじやの、股野五郞景久樣といふ、歷々とした大名が、直にお逢なさるゝとの仰付、サア此上下着て居やしやれ、どうでも立身出世の筋と、聞は耳より主のお米、イヤモヲシお庄屋樣、出來合のおもでも、アヽイヤ〳〵〳〵お世話御無用、今心よう喰せて置、節季の書出し見るやうな、こはや〳〵と兩袖を、左右の頰に押あてゝ、ちよこ〳〵走り立歸る、跡にお米がしやぎり聲、ヤイ〳〵手助、三浦殿に奉公させ、給銀取た時とは違ひ、何ぞ母かたそくはないぞ、コリヤヤイ所に今日は殿樣の御用、大方そちが命を貰ひ、生肝取て藥に入、お姬樣が飮しやるか、さうなくば試物、すりや內端にしても百兩か二百兩、生肝でも死肝でも、差出して金を取、此母に樂させい、サア洗濯衣物着直せと、難面詞も眞實の、母に答ふる詞なく、しほ〳〵一間に入と見るより、表に忍びし侍が、合羽ながらに上座に通り、子細有氣のひそ〳〵聲、某共は東國方の侍、織原

位牌の面に激かけ、コレ見よ老女、万一他言有時は、まづ此通り未來にて、先立夫は修羅の苦患、洗清むる追善は、御代萬歳と唱ふる迄、服野の五郎が預る、位牌をしつかと懐中し、用意に持せし乘物の、戸を引明れは其内に、ヤア櫻木樣かと乘物の、戸をさし籠る手助が手先、イヤ申服野樣、御乘物の脇に散た此一通、御大切の御狀もやと、差出す白紙押ひらき、讀取文章、ヒヤアスリヤアノ櫻木が、善と見ゆれど立よれば、大塒が蔭に櫻木の、花吹ちらす風の音、ハヽヽ成ほど葉が落せし文と、何心なく袖に入、立かゝりたる乘物の、内を勘ふ思案の壺、手助はすつくと立上り、着せし上下引めくれば、下に着たるは紺の臺なし、一間の脇差横たへて、母の傍にどつかと坐し、コレ〳〵母樣、只今服野樣が一大事のお頼、コレ申拜ます、お心を飜かへし、頼れて下さりませと、詰寄〳〵願ふにぞ、お米はわざとけでん顔、コレヤ何にや、是程頼まれて居るのに何を疑ふ、コリヤヤイよう合點して物をいへ、連合ひ夫を修羅道に、落すは現在位牌の穢、何の大事を渡さうかと、和らぐ詞に釘鎹、ムウスリヤ先程立寄た、旅裝束の侍は、お知人でござるか、イヽヤ、そんな者はおりやしらぬ、アノ旅裝束の侍を、ヲヽ知らぬ〳〵ずんとしらぬ、ムウシテ源氏方にかたうどする、服野樣のやうな御身體の、お方が有ば注進せよと渡したる、褒美の手附金壹兩、おまへの懐中に有事も、お知なさいぬお心か、ホヽヽわの手助とした事が、何のわしが懐に、小判か有てよい物か、スリヤ一兩の小判が

しの大名、今度淸盛公の鈞命にて、關東表に發行し、流人兵衛佐賴朝を、尋出して首討取。上使に下向の道序、此茶店に立寄しは、そちが氣量を聞及び、ちと賴度子細有て、暫休息いたせしが、何と聞ておくりやらうずやと、いと懇なる演說に、手助は主人の敵の名、胸にぱつしとさはらぬ體、コレ〳〵事新なる御仰、いかなる御用にかかる共、お受申さで有べきやと、涼く返す詞のにべ、もしや以前の侍が、母に告たる大事やと、心遣ひの面體を、それと悟て股野五郎、イヤコレそれなる老女、おことは手助が母なるか、近ふ〳〵と呼立られ、御寄るお米が疵持足、樣子あらんと相する股野、さあらぬ體に詞を和らげ、ナニサ老女、おことにも景久が、ちと賴みたき樣子有、聞ておくりやる心底か、返答いかにと問かけられ、アヽアノおつしやる事はいの、いかなる御用か知らぬ共、お受申さで何とせうと、心の夜叉を口の端に、欺く露の玉よりも、見透工を氣づかふ手助、母の無筆を幸ひに、かたへの硯引よせて、いざ白紙にさら〳〵と、書認る其內に、景久猶も詞を添、コレサおばゝ、彌賴むが合點しやの、アイ成程お受申ませう、ムウすりや賴入一大事、後日の他言、ヲヽ愚のお詞、大事を人に聞しては、そりや賴れたといふのでは、ないならかうじやと指添を、拔より早くお米が小指、はつしと切ばふたりが仰天、ヤレ驚くな樣子有と、ずんと立て佛壇の、位牌取出し讀下し、眞譽圓僕禪定門、承安三年八月五日、察する所此位牌は、是なる女の連合ならめと、落ちる小指の血を絞り、

〱、マア此様な畜生とは、しらで育た親煩悩、なぜにおれが氣を背かず、股野殿の二心、なぜ注進して褒美はくれぬ、最早いふても返らぬ事、サア〱おのれも早う死をれ、あの世がわれば連行て、噛付喰付抓裂、ずた〱にして腹いるわい、アヽ苦しや〱と、塞る眼をむき出して、睨つけられたる手助が胸、火輪におさるゝ如くにて、わな〱ふるひ居たりしが、せめて苦痛を見せまじと、思ひ切たる留の刀、あへなく息は絶果たり、手助拔とる刀を直に、主の敵と切込ば、股野の五郎しつかと押へ、コレサ手助、眞實の親殺し、大罪人は相手にとらぬ、此景久が斗らふ旨有、聊爾をすなと留められ、手助ハアッと當惑して、躊ふ内に櫻木が、コレ申股野様、どうぞ仕様はないかいな、手助が科もない様に、どうぞ夫に逢せてと、涙さき立つ心根を、思ひやつたる股野五郎、コリヤ手助、心を正してよつく聞け、頼朝天下をしろしめさば、眞田の與市義貞が家來、同苗兵衛義幸は、治承無双の忠臣と、御聽に達して亡母の、恥を雪で得させんぞ、殊更主人の苗跡を、受繼事も家來の面目、必悔む事なけれぞ、賞ずる詞に手助は摺寄、イヤサ股野さま、その御詞が御成敗か、イヤ〱成敗は成敗褒美は褒美、シテ御成敗とは、ヲヽ此通りと沓籍に、掛たる錢の貫緡を、手助が骸に打かけて、コレ是が則紲繩、かけて頼むは櫻木殿、頃日伊豆に蟄居する、眞田の與市に渡してくれよ、ヒヤア何と御意なさる、御主人眞田の與市様、御堅體にておはすかと、問は櫻木引取て、様子知ねば不審

おまへの懐には、ヲヽないとも〳〵、アノ旅裝束の侍小判、ハヽハアツと斗に手助は當惑、母の惡心欲心を、恨る甲斐もあら涙、こらへ兼て聲あらゝげ、コレ母樣、三浦の家は大事のお主、其御主の身の上を、大場が家來に注進して、褒美の手附取樣な、お心では有まいけれど、旅裝束の侍を、しらぬと仰しやる一言に、先立父御を修羅道に、まざ〳〵墮罪する迚も、彌御存じなされぬかと、猶詰寄をさはがぬお米、コレハマアなんぞいの、しらぬ故にしらぬといふと、一圖にかたまる貪欲邪慳、淺猿さよと斗にて、ひがめる母を打詠、上氣に燃立目の光、刀の光と見る間もなく、母を引寄一えぐり、ぐつと貫くお米が苦しみ、櫻木それと見るよりも、乘物押明飛で出ノウ手助かなつかしやと、いふも甲斐なき手負の母、二人の介抱おろ〳〵と、涙先立斗なり、股野五郎喟然とたんじ、ホヽツ直なるかな手助、天下の爲主人の爲、眞實の母を刄にかけ、我身に無量の罪科を受、身の潔白を現せし、心底さつして詞なし、大名高家と呼るゝ我ゝ、ホヽウ耻入たるおこの者と、賞美の詞に漸と、手助は眼押開き、コレ母樣、嘸不孝者子畜生と、お恨あらんと思へども、此一大事を大場に洩せば、蟻の一穴天下の破、頼朝樣の御本望、大助さまの御欝憤、旦那樣の冥土の障、かく迄剛なる股野樣、二心と告げば御切腹、スリヤ主の敵も得討ねば、義責理責の一刀、死出のお供は此手助、本望遂て跡から參る、待てござれと握込、柄も碎る四苦八苦、今は際の母は聲ふるひ、コレ手助へツヱおのれは〳〵

も、自然と威有股野五郎、下向を急ぎ別れ行、源家に不臣の棟梁たる、伊藤入道祐親、生國伊豆に館を構へ、匠わかせし廣書院、松の間桐の間鶴の間より、通ふ廊下を渡る日も、遙に見ゆる亭坐敷、楼作りにて藁葺は、奥頼敷見えにける、げに山里の老木にも、莟萌でる梓姫、父入道の寵愛も、頼朝落去の其後は、戀煩ひに夜を重ね、せめては夢に戀人の、居馴れたまひし亭ざしき、障子開かせ四方山の、お伽さま／＼此頃は、都者とて入込し、月野花野がお氣に入、容體かはる秋の庭、櫻も花を重ねけり。梓は脇息鉢卷に、助けられたる聲細く、イヤノゥ月野、此頃供に付てきた、喜之作とやら呼でたも、又面白う物いはせ、氣をはらさんと有ければ、アイと往來も長廊下、月野はお次に出て行、跡に花野は何がなと、思ひ付たる庭櫻、ホンニナアお姫樣、此庭櫻の時ならず、花を持しは花聟を、お持なさるゝおしるしと、云などさむれば梓姫、イヤトヨ花野聞てたも、大場の太郎景親が、今日自と祝言の、盃するを聞しより、又病増るに思ひもまさり、頼朝樣の身の上が、案じらるゝと斗にて、さしうつむいて詞なし、折からはか／＼喜之作は、月野が跡に引添ふて、渡殿の影に蹲る、月野が取次梓姫、是へ／＼と招寄せ、是喜之作とやら、そなたは物になれたる迚、月野花野が物語り、それに付て問たいは、此庭櫻の歸り花、なぜに盛りを見せつるか、聞かまほしと有ければ、善之作折しも櫻の前、何思ひけん大音上、ヤア／＼御庭前の櫻の木、いかなる譯に花咲し、名乘きかんと呼はつたり、

も尤、となたに別れて自か、うき節しげき川竹に、身を浮沈む其内に、思ひかけなき我夫に、逢たは夢か幻か、又引わかるゝ伊豆國、送り届てたもいのと、取付歎けば手助は氣をせき、ヤア何とおつしやる、股野様に討れたまふ、與市さまが、ヲヽ無事なる様子知せんと、服野は席を改めて、コレ手助とつくと聞、股野眞田と敵味方と、隔つは平家をたばかる工、誠は互に兄弟の、約束なして源軍の、陣用金を才覺して、兵衛佐殿守護する故、コリヤ眞田與市は第一の忠臣、次には我も列すると、演說あれば手助は突立、ハヽア有がたや冥加なや、已に今日亡君の、仇を報ずる時節なりと、味方顏して油斷を斗り、只一討と狙ひ寄、股野様は源氏方、與市様は御堅固と、聞一言は万部の經、サア竹鋸でも歩様でも、お望次第に遊ばせと、つめよる骸に貫緡の、緡目は内外のから縛り、服野はわざと勇立、ヤア／＼手助、母を殺せし成敗の、繩をかけたる其貫緡、伊豆の國への路銀の心、コリヤ心を付よと有ければ、手助は一身八難に、行わたつたる紲に、物をもいはず櫻木が、顏打詠て泣沈めば、股野突立お米が死骸、明のり物に取納め、柝木クワッシと打立れば、音に從ふ供廻り、其身も靜に乘物の、戸を引立てコリヤ／＼亭主、先その方は一兩日、此地に有て大馬鹿狗、欺き歸すが一の術、それなる女を、ナコレ某が屋敷に、送り届けた其上では、望の通りナ成敗する、先夫迄の紲は、其貫差に氣を付よと、詞殘せば櫻木が、物云たさも下部の手前、手助は返答淚をかくし、頭を垂る禮譲

至て重しと雖、拙者が石橋山の功に申替、コレ御教書を持參せり、最早此上は梓姫、定めて妻に下さるで有うの、何が扨〳〵元より約束の上なれば、とはいふもののあの娘、イヤ懐姙も知て居ます、毛頭苦しかりませぬ、マヅ御教書を渡しませうと、差出文箱を受取伊藤、紐をとく〳〵一通取わげ、さら〳〵さつと讀下し、ムウ扨は閉門御赦免、成程拙者が功を捨、貰ひ受たる御閉門、コレハ〳〵過分至極、いざ此上は一刻も、梓姫との婚姻を、取結ぶのが一禮と、突立伊藤を大場が押へ、イヤサコレ舅殿、序ながら御意得度は、彼時政が病氣の實否、篤と御裁許なされしかと、問はれて伊藤差心得、サレバ其事でござる、北條時政健忘とは、且以て其意を得ず、今日迎を差越たれば、追付召連來るべし、其下詮議の仕樣はさま〳〵、扨又この頃奉公せし、月野花野といふ女、ひと曲有と見受し故、北條來らば出迎ひ、虚病ならばだまし討、實病ならば源氏の白旗、彼が矢先にかけさせて、疑はらす我所存と、自慢たら〳〵相述れば、大場太郎横手をうち、いや早老功驚入、拙者が樣に寄年は、必定浮世の費ながら、ふと思ひ付しは股野五郎、二心の證據詮議の爲、家來兵馬を殘し置、拔がけ致して推參せしが、イヤモウ貴公の謀計には、大場閉口仕ると、舅を立るひね親仁、實に蒲塞瓜の花聟なり、ふたりはほく〳〵打うなづく、折から取次奏者番、只今北條時政樣、おん入なりと知らすれば、伊藤用意の白旗を、さつと櫻に桟作り、聟殿いざと渡殿を傳ひて打連奥に入、間もあらせず玄關より、

月野は氣の毒がは、コレ喜之作とのめつさうな、たしなましやんせと呵られて、喜之作ちつともわろびれず、イヤサハテ月の樣、櫻がどうして開たか、聞せてくれいとおつしやる故、直に問のが慥に思ひ、それで呼はる頓智の男、ハテやくたいもない何言んす、昔の人の言の葉にも、花もの云ぬといふではないかへ、イヤ〳〵〳〵それは大嘘、此間こちの門先て、西の河原の物語、委しく尋參らすれは、サア是なら鼻が物いふと、口を噤める鼻聲に、姫も笑の折からに、襖開て鶴の間に、ゆるぎ出たる伊藤入道、亭に向つて聲高く、ヤアどいつもこいつも泥坊計り、娘につけてはおかれぬ〳〵、三人ながら立上れと、呵りつけられ喜之作は、猶も白洲にひらた蜘、打連一間に迯て入、跡に伊藤は梓に向ひ、コリヤ娘、儕が骸は大事の身ぞよ、大場に渡すその内に、急變わつては互の難儀、藥がほしくば鈴ならせと、一間の障子さし込置、其身は渡殿ふみならし、のつさ〳〵と鶴の間に、どつかと坐して自若たり、折しも玄關騒がしく、奏者の侍走り出、只今追手の御門迄、大場樣がお出なされ、今日閉門御免につき、大戶を開て通るとの御意、畏て御門を開き、追付それへと云捨て、表玄關に出て行、伊藤心に點く折から、遠慮もなげに大場太郎、素袍に立烏帽子、格を正して入來れは、入道寛然と打詠め、コレハ〳〵大場殿、けふの御用は別してお世話、老後の大慶この上なし、いざこなたへと饗せは、大場太郎上座に直り、ナニサモ伊藤殿、御用といふて外ならず、貴殿賴朝を取迯し、其罪

お招き申せしは、健忘とやらの御病症、虚實分明ならざれは、コレ試の此弓矢、其爭ひは君子國、僞かざらぬ證據の的、あの庭櫻の源氏の白旗、射とめて見られよ時政と、思ひがけなき所望の弓、受取ながら北條は、暫工風に凝たるが、ホウ事々敷御疑ひ、今大名ともてはやされ、平家に恩澤厚き身に、何とて虚病を搆ふべき、心正しき弓勢を、御目にかけんと矢頃よく、工と知ぬ白羽の矢、射法腕に逞筋膂、切て放てばあやまたず、櫻にかけたる白旗に、はつしと立たる一筋は、案に相違の振廻也、伊藤大塲は口あんぐり、時政胸をはりさく思ひ、穂に顯はるゝ二人の女、小褄りゝしく時政の、左右にわかれて詞を揃へ、源氏の重寶白旗を、矢先にかけたる北條殿、狂氣か病氣か本心か、云わけあれと詰寄たり、伊藤大塲は不審の體、北條持たる弓を捨、ムウ何といふ、此北條が白旗を、射破たるを狂氣か病氣か、ハゝゝゝ女のいらぬ差配だて、心正しき拳の固め、本性徹底も違はぬ〳〵、ムウすりや本性の時政、ヲゝサ〳〵と回首する、ふたりの女は猶詰寄、コレ人でなしの犬侍、頼朝公を守立て、大將軍に仰がんと、詞を番へと云ばこそ、北條ふたりの女を引立、庭に出るをイヤ〳〵〳〵、大惡人めと嚙付袖、エゝ面倒なと引掴む、髻ほどけて亂るゝ髮、手にからまいて庭の面、井筒にふたりの髮を纏ひ、上にしつかり踏石の、壓石に押れて二人の女、むねん〳〵と身をあせり、涙はら〳〵振亂す、髮の紲ぞ是非もなき、伊藤大塲は北條の、工としらで打悦び、イサマツ奥へと伊藤が案内、打連

歩來るは北條時政、頭にいたゞく卷纓の、冠狩衣麻袴、小笹たづさへつる〳〵と、鶴を畫し一間に佇み、四方詠むる目はきよろり、足はうか〳〵氣はそゞろ、自然と病症顯はせり、斯と聞得て出向ふ、月野が棒ぐ三方に、のしを祝ひの口明と、運ぶ花野が花香酌、茶臺を前に差出せば、北條じろ〳〵打詠、茶はきらひ、水はつめたし湯はあつし、つひ持合の酒たべふ、げにや小竹葉の春風に、醉て緋純子緋縮面、緋桃緋ざくら灯ともす梅、其科人は白梅と、正体なければ二人の女、長押の長刀取直し、双方一度に薙込ば、ドツコイあぶない合點と、二柄の鐏元しつかと取、ウヽヽ、古艸履に銀箔瓢簞に金口、古い〳〵と云さして、ふたりの長刀振放し、ちつたる小笹取上て、打ばてふ〳〵ひらめく刄先、心得タテツテ飛んで退、コリヤ〳〵〳〵〳〵と拂ふをぬけ、テニヌネ蚤取眼の配、油斷見すまし双方より、切込長刀討落し、左右に踏だる早足の鍛練、呆れ果たる手並なり、時政漸顏色變じ、ヤア爰はいづくと見廻し〳〵、ムウ又健忘におかされて、是まで來るかヲヽさうじや、伊藤殿のお招、それを聞よりいつもの病氣、面目もなき此裝束、イヤノウ女中今ふみ付たる長刀にて、お怪我どもはなかりしか、武士に似合ぬ放心を、沙汰ばし有なと柔和の挨拶、月野花野は興さめて、答ふる詞もなき内に、委細是より見聞と、襖引明伊藤入道、弓箭携へ立出れは、大場の太郎も引添て、横柄に坐を連ぬれば、月野花野は立直り、樣子いかにと伺ひ居る、伊藤入道弓とり直し、コワ珍らしき北條殿、今日

申しお姫様、我々迚も本國に、歸らぬ内は後家同然、黒髪切てたまはらば、すぐにお前を御供して頼朝さまのお跡を慕はん、サア遊ばせと勧められ、梓は是非なく立上り、懐劍ぬきとりわな〳〵と、振ふも戀によるべの髮、ふつッ〳〵と切捨れば、アヽ嬉しやと月野花野、ざんぎり髮の振分姿、サア一刻も落延ん、幸ひ是なる櫻が枝、塀を越るに天の梯、喜之作殿は姫君を、表門より伴ひ出、互に今津の新茶屋にて、ヲット心得喜之作が、尻ひつからぐる其隙に、二人の女は櫻が枝、取付上る梯作、なんなく塀によぢ登り、ひらり〳〵と飛越れば、サアしてやつたと喜之作が、姫の手を引立出る、脊骨にはつしと立一矢、うんといふ間も荒重藤、矢がらと共に朽果けり、ハット驚く梓姫、コレのう〳〵と喜之作が、死骸にとり付抱つき、可愛の者やと計にて、わかち涙の其折ふし、ひと間にからりと弓投捨、さあらぬ體にて立出る、伊藤入道祐親、妻の芦部と諸共に、椽端近く座を設け、コリヤ梓姫こなたへと、父の詞に悔りと、立かひもなき喜之作が、軀を見すて鶴の間に、涙かくして座に付ば、入道娘の傍により、コリヤヤイ梓、けふ大場殿と婚禮させ、向後樂な住居をさす、追付これにて夫婦の盃、其上大場が住國に、玉の輿にて連歸り、馳走するとの物語、ハテサテ我は果報者、委細はばゝに云付置た、ヒッとでも頼朝を、詞に出したら此刀と、芦部に渡し空仰のき、奥の一間に入跡に、母の芦部は刀を取上、サア〳〵〳〵提髮しや白無垢じや、コレ姫用意じやいの、二人の親に物いはせて、見れ

ひと間に入にける、既に今宵は婚禮と、騷を得手に喜之作が、醉ふたとさ〳〵、佛は三万三百三、樽は三億三千挺、底をヒッシャリ打碎き、漲る酒が舞上り、天より甘露が降ならば、コレ〳〵〳〵〳〵此やうに、大盃を笠にすりや、陶淵樣の置頭巾、ヲゝそれ〳〵、醫者の陶淵さんの置頭巾と、たはひなき體みる二人、かゝるうきめは神ならぬ、髮を井筒にしめ付られ、苦しむ中にも月野が氣を張り、ノウ〳〵喜之作殿、コレ此體が見えるかと、さも恨めしく呼聲に、喜之作よろ〳〵這よりて、ハゝア面白い事してじやの、コリヤ究屈にごんしよがの、ドレ石放つてあげましよと、口はかる〳〵かるはづみ、蟻が茶臼を引やうに、石に手をかけイヤヱイ〳〵〳〵と、押どしやくれど動ばこそ、腰骨ぎく〳〵汗たら〳〵、醉も自然と醒きつたり、此體みるより梓姬、渡殿傳ひ走寄、ノウ何故に此體と、いたはる姬のつなでを得、花野やう〳〵目を開き、コレ申しお姬樣、賴朝樣を大切に、思ひ過して此姿と、淚ながらに語るにぞ、姬も共々目を瞬き、イヤノウ二人の衆、此家の内にて自が、たつた一人の殿樣思ひ、爺さまはあの通り、母樣は難面お生れ、賴に思ふ姉樣は、いづくの里にましますやら、心に任せぬ此場の時宜、仕やう摸やうはないかいと、歎けば喜之作醉醒に、顏靑ざめてうろ〳〵と、二人が體を氣の毒に、打詠めしが思案をすへ、イヤお姬樣、たつた一つの分別とは、せめてふたりの髮を切、この場を迯すが上分別と、いふてあの髮むざ〳〵と、きらるゝ物かと梓姬、詮方心月野が諫て、イヤ

り、ヘツエそこな畜生乳母、三年以前母さまに、別れぬ迄はうば〳〵と、呼しも今は母様と、果報恨む自が、心はこんな折の爲、あゝした氣持の父樣故、一度の詫二度の詫、三度が四度に重らども、そなたに諫を容させんと、思ふて實の母樣より、猶大切にする甲斐も、なまなか殺さばいつその事、頼朝樣のお目にとむ、此顏なぜにつきくさつた、今にも奥の佛壇の、扉開けば母様に、どうぞ此顏でわはれうぞ、といふて明暮備へるお經、誰が替りに供養せん、ひとかたならぬ惡人めと、怒る涙は花橘、雨にうたるゝ如くなり、何思ひけん母芦部、泣入る梓が手を取は、慮外ものめと振放すを、無理に引立廻廊を、渡る藁屋の亭坐敷、放せ赦せとあせる姫、漸上坐に押直し、其身は遙に引退り、とこうの詞只一口、わつと泣たる蘆部が體、ふしぎながらも梓姫、血汐の眼見開いで、コリヤヤイうばの畜生め、頼朝さまの御坐所で、殺してくれるは嬉しいが、お腹のやゝはどうしてくれる、コレ惡人め畜生めと、狂ひ歎けば乳母蘆部、イヤ申しお姫様、私が本心これからうと、兩袖拔はその下に、着たる白無垢一面に、こま〳〵書たる墨付に、様子あらんと跪ふ姫、蘆部は用意の懷劍を、取より早く咽笛を、指貫ぬけば梓姫、憎しと思へど恩愛に、覺えず蘆部に縋り付、いたはりたまふ姫の手を、じつと握りて聲ひそめ、コレお姫さま、今までかくした一通り、聞て疑ひ晴たまへ、元私はあやしの身、春は木の芽夏は散る、麥の落穂に秋は苅、田の面に殘るひろひ粒、冬は飢たり寒へたり、くらせし身の上愼

ばしく／＼泣て計、ヲヽ嬉し泣か、ソリヤモウ道理とうらはらの、母の袂に引縋り、コレ母様、ツヒ云にくひ事ながら、わたしやどうも祝言、ナニ祝言する事、アイいやでござんす、ヤア／＼／＼何といふ、おのりや大場殿を嫌ふのじやな、コリヤヤイ四十の男に腹籠女、是が天下の夫婦の定、それにいやじや、サア二口いふたらコレからじやと、すらりと抜たる刄の光、身は惜まねど懐胎を、大事と姫は飛び退は、身抜ながらにつめ寄芦部、ナニ是がこはいか、サアこはいなら髪結直せ、サア／＼／＼とせりかけられ、梓は呵嘖の親の責、左右の詞も涙を押へ、コレ申母様、一生一度のわたしが願、どうぞ我子に月日を見せ、其上ならばどの様な、汐汲濱に遠ざかり、賤山の端に住迚も、お指圖背かぬ其代り、どうぞ暫く祝言を、お詫なされて下さんせと、繼しい母にとり付て、眞實眞身の血の涙、袂を染て喞ちける、蘆部は抜身振上て、ヤアいろ／＼の事聞たうない、朝頼殿に心中だて、其子を産で死る覺悟、コレ此年迄いきはだかり、まだちつぼけなそなたの工、知らぬと思ふがホヽヽヽわしやおかしい、いやといやれば首じやぞや、首がいやなら其腹を、ぐつと突うか切うかと、付廻されて梓姫、逆るを蘆部引とらへ、膝に引敷突刀、目當は顔にずく／＼二太刀、つかれて血塗の、梓は苦しき息をつき、コレノウ云まい／＼とは思へども、モウ云ねばどうもならぬ、今はの大望只一言、いはして下され繼母さま、詞かはれば引起す、蘆部をはつたと睨む姫、顔に漲る涙と血汐、袖にふきとり上坐に直

る、白無垢なみだにおやなして、すつと立て押入より、とり出す鏡臺蓋取て、見ればふた目と見られぬ形、はあつと斗に蓋覆ひ、かくあさましき姿にて、頼朝樣にまみえなば、うるさしむさしとお心が、替らば過しお情も、ともに盡せばいつそ今、死でのけたい腹帯を、といてのけたや〳〵見たやと、どきつく胸に手もわな〳〵、ふるへばふるふ顔ばせを、見ればみるほど淺ましやと、醜なき鏡を投捨れば、風にふらはり鶴の間に、木の間の月と落ちつたり、梓は我身と人の身を、思ひあはせてかつぱとふし、姿亂れて泣居たる、折しも奏者兩手をつき、三浦の家にましませし、櫻木樣の御入と、告るも知らで梓姬、正體泣入こなたより、いつなき春とて櫻木が年經て爰にかへり花、色香も絶えて便りなき、屋敷の住居かはり行、供は手助が貫差の、錢をかけたる紐の、儘にもならぬ世の中に、案じ煩ひ入來り、コリヤ手助、昔の勝手は覺ても。恰好しらぬ此家の體、そなたは奧に案内を乞、梓に姉が來りしと、告ておじやれといひ付られ、ナイ〳〵佞邪の伊藤が館、半夏の鶴の間さし覗けば、上には梓が泣入體、下にはこけたる喜之作が、死がいをそれと知らずして、表に出て打笑ひ、イヤモウお屋敷は大酒盛、あそこ爰が皆はふなら、梓樣は亭ざしきに、私がやうな男めは、ついその先に寢て居ます、けなりい事やと吹聽する、櫻木漸氣の付て、ホンニけふは大場殿に、妹の梓が婚禮と、聞しに違はぬ内の體、ドレ遠慮はいるまいからおじやと、入ばたばしる血汐に驚き、ヤア手助そりや死骸じやはいの、

むも、大事の姫に乳上て、乳母よ傅と呼るゝ故、筋目たゞしき身と思はせ、かざるけはいに馴ぬ身も、先の母様おかまいなく、御臨終の今は迄、わし〳〵と呼よせて、お頼ありしはお前のこと、どうぞ流人頼朝様へ、宮仕でもするやうに、育てくれよの云置も、早消え〳〵と過たまふ、其後私が奥様よ、北の方よと呼るゝ上、一夜こすかこさぬ内、梓さうせいこうせいと、いふて過せし乳母が口、裂るゝよりもつらけれど、じつとこらへし奥様に、なつたは父御の悪心を、諫んものと思ひ詰、繼母根性幸に、鬼の女房の鬼人となり、云たい事は此小袖に、書ては泣見ては泣、折を見合せ父上を、諫めすかすもおまへのおなか、どうぞたやすう御産の紐、解て和子にも月日を見せ、年の五つも越へたらば、過去たまふ母さまの、香花を孫御に取らせなば、是に越す追善あるまじと、思ひ付たる其お顏、二かせ疵を付たる時、腕はぬけても五つの指、ちぎれる斗りの苦しみを、隠すは奥の壁に耳、つれなうもてなす此うばが、蚊にも刺さぬ御顏を、畸人になしたも大場めに、思ひきらせば緣も切、おなかのやゝのお爲じやと、思ふてなしたる此罪業、私が追善供養には、死骸の前で提髮結、白むく帽子祝言の、姿は佛の來迎と、云おく聲もはかなくて、秋の櫻と息絶ゆる、梓は蘆部の死骸にそひ、痛手を忘れ引しめ〳〵、身を顫はして居たりしが、やゝ泣じつむ顏を上、アヽ世の中は爪木より、花さく事を知らずして、暮せし日數も波の泡、果敢なく消し乳母への供養、せめて是をと用意有、小袖引よせ打懸

御本妻。そなたはお閨の花紅葉、サア〳〵早うとせりたつれば。それとは道娘氣に、誠と思ひ顔形。忘れて悦ぶ心根を、思ひやつたる櫻木が、泣たさこらへてコレ妹、その衣裳では行れまい、わしは此家に滯留して、父上樣を味方につけ、めでたう跡からこふ程に、祝言事もはつて置。此着物きて居てたもと、我着馴たる上小袖、渡せば梓いそ〳〵と、きたる白むく脱かへて、姉の假と白菊の、きせ綿入をしむる帶、そんならわたしや、モウいきやるか、ソレ供しやと押つけに、手助はがてん行先は。心にうなつき櫻木を、跡にみすてゝ白歯の娘、何心なく出てゆく、殘るさくら木貝獨、指うつむいて居たりしが、見つけられじと傍にちる、白むく着替しむる帶、手にも哀れの糸竹を、奥にしらべる三下り、梅はちり行櫻はさかず、空常かよふ雲の色、花と詠る妻思ひと。うたふ一間に打向ひ、罪はろぼしの獨言、コレ爺さん。今にお心さがなうして、梓が事もごぞんじなく。面白さうに酒肴、梅はちりゆく私が身、櫻はさかぬ妹が。おなかに大事のやゝ有迚、命を惜む氣の毒さに、頼朝樣のお召と僞り、賺して落した姉が身も、夫に去れてきたわいな、おまへの首がお味方かと、頼朝さまの御前にて、いひつけられた其悲しさ。はる〲きたもおまへ故。かはひらしい詞もなう、やみ〲かへる此場の體、私しにかはらぬ妹が、難儀とみしゆゑ詞を僞り、いつそ妹が身にかはり、ことよひ大場と夫婦の盃、其上自害せんものと、思ひ定めし胸の中、推量あれ父上と、涙ながらに懐より、我子の假の清書を、

ヒヤウホンニ死人じやと、尻ひつからげよく見れば、箆深に立たる矢疵のからだ、驚ながら櫻木が、見上る上には梓姫、打伏したるを氣遣はしく、わせればそれと梓姫、泣入る顔をふり上て、ヤア夫なるは姉さまかと。見下す顔の疵見あげ、さくら木猶もせき立て、ヤアなんとして其お姿と。問へは梓も涙を拂ひ、私がかゝる有樣は、大場の太郎が横戀慕、私を妻によびとると、父上さまを欺しこみ、すでにけうしも祝言の、盃しては我君に、いひ譯なんと岩田帶、大場に思ひきらせんと、乳母のおし部が斗ひにて、顔を損ふ此心、コレ推量して下さんせと、かたるも涙聞耳も、涙をこぼす姉さくら木、スリヤけう祝言のとり結び、夫故顔をかきさいて、大場に思ひ切らるゝとな、アイかゝる姿も我君を、思ふてなしたる事ながら、モウ殿さまへは逢れませぬ、けふこの形で祝言する、前にこの子を誕生して、死たいわいのと歎聲、からだに立程覺ゆる櫻木、ムウスリヤ大場太郎がそなたに迄、難儀かけしか腹立やと、思へど勤のことなれば、明しもやらずうか〳〵と、何か手助にさゝやけば、心得手助が棧作り、登るこなたの櫻か枝、是屈竟と驅上れば、梓は蘆部が死骸をかくし、障子をさして渡殿に、立出る姫を目印に、よぢ登りたる手助が介抱、そろ〳〵歩む鶴の間、飛石傳ひ白洲にこそはたどり寄、櫻木わざと打臥て、ヲゝまめにして嬉しい〳〵、自が爰に來るのは、頼朝の仰にて、そなたを迎ひに來たわいの、ヱウそりや何故でござんす、ハテ知れた事、子までなしたる中故に、政姫さまは

れしふたつの首、飛よと見へて櫻木が、咽にがばと飛付は、惣身に散て蛭となり、拂へど〳〵諸方も、阿鼻大地獄の蛭の責、受たる姿すつくと立、眼を見つめ齒を噛しめ、苦痛を忍ぶ櫻木が、心ぞ思ひやられける、後にすつくり北條時政、そしらぬ體の諸聲、地を走る獸空を駈る翼まで、子を思はぬはなき物を、いはんヤアと見やれは櫻木が、悟られまじと綿帽子、とる間も見せぬ花嫁の、體は可責の責よりも、思ひやられて四郎時政、ムウ夫なるは梓殿じやの、アイムウ祝言の用意とて白無垢帽子サゾ〳〵嬉しう御ざらう、アイハヽヽ嬉しいはづ〳〵、何ぼうれしうても祝言はさゝぬ、ヱウハテ頼朝の種を宿し、大場に嫁ぎ契りを重ね、腹胎の子を育んとは、奇怪なり横着なり、今一刀に五臟を斷、腹ながきぬを引ずり出し、ほてつぱら人並なら、ソコデ祝言さしてやろと、つれない詞は櫻木が、今はの身にての大慈悲心、覺へず傍にすり寄て、アヽ有がたうござんすと、いふ口押へて時政が、見かはす顔を帽子で隔て、イヤノウ梓摩、蛭に惣身を縛はるゝ、苦しみさつてコリヤ外に居る、梓姫の腹胎の子も、無事には置ぬ指殺す、覺悟はよいか逃まいぞ、逃な逃よとおしゆれば、櫻木おはて立上るを、ドッコイさせぬと膝に引敷、小聲になつて涙を押へ、コレノウ櫻木殿、わざ〳〵夫を慕ひくる、石橋山にて暇をとり、かゝる大事を身にうくるは、とりも直さす討死同前、或は繩目或は勤め、その上遥の旅路の難儀、こらへ〳〵て添たいと、思ふ夫に見はなされ、歸る我家の妹の難儀、皆我親のな

手にとり直して打詠め、コレ市太郎祖様の所は爰じやぞや、コレお前の孫は爰に居ます、ヘツエ淺間しいお心、アヽはかないそなたの身、必母を待て居や、コレノウ〳〵と親と子を、恨歎ひとつの身、世に置ばなき風情にて、泣入斗ぞ儘なりき、時をうつして椽先に、落ちる鏡とりあげて、今ぞ未來へ嫁入と、そゝける髮を撫上て、容を寫す鏡の内、あやしや蟲ふたつの蛇、首尾逼々と狂ひ出し、飛上らんず勢も、井筒におさるゝ大石の、重石に骸を痛るありさま、ハアと驚く鏡を捨、見やる井筒にあや敷も、ふたつの髮先大石に、纒ふを蛇と見まがいしは、不義禁る神の德、鏡に顯れ出るかと、走寄て井筒の髮、手に取上て淚ぐみ、誰くろ髮かしらね共、自然とへびと見えたるは、我を禁しむ此白無垢、苟ながら大場が妻、スリヤ不義者の此櫻木、といふて妹が此難儀、死ぬ身の姉が救ふのを、無理と思さば神樣でも、恨めしいぞいぞうよくと、握し髮先ふるふ手に、動とみえしがこはいかに、己と蛇に性を變、兩手にまとへば飛しさり、逃るを跡よりふたつの蛇、追かけ追つめ骸に纒へば、幸有あふ鏡の刀、はつし〳〵と打付て、暫く時を移しける、折しもつつくと後の方、忍び出たる北條時政、樣子あらんと刀を杖、鼻息もせず考居る、櫻木ねんなうふたつの蛇、鏡にかけて寸々に、切拂ふたる亡骸を、見れば我身もこはけ立、引取息をつぎかへ〳〵、漸匐寄手洗鉢、杓追とつて酌水に、以前の蛇の首と首、水に從ひくるふ〳〵と、めぐる輪回の恐ろしく、持たる柄杓なけすつれば、水を放

大搗が邪智、ヤア心得ぬ時政、今迄病氣と披露して、馬鹿をつくすに似合ぬ仕方、殊更かれが娘政姫、頼朝に付添へちまへば、斷さる源氏のその枝葉、いで改めんと立よれば、伊藤も倶々毒氣を吹、猶も切羽のつめ開き、流石の北條當惑の、こなたの亭座敷、障子蹴はなしつゝ立しは、道者義明が異形の體、二條の弓に蓬の矢、兩手に携へ凛然と、さも殷々たる聲をかけ、ヤア〳〵北條時政、かゝる子細も有らんかと、忍び入たる宇賀道者、頼朝のお胤を破る、敵は遁れぬ覺悟〳〵、則持たる此弓矢は、大悲のつる音烈らして、智恵の三ッ羽の徳により、一度放せは千の矢先、うけ取やつと呼はつたり、思ひかけなき事なれば、三人途方にくれたる時政、ヤアせかれそ義明、貴殿當時に長命たる故、今仙人の術を得て、天地に願頭あるよしは、とく承はつて隱れれは、決して手向ひ仕らぬ、證據は是と廻廊傳ひ、袖に包し櫻木が、五藏と蛭を恭しく、道者に渡せは受取て、木の葉衣の懐に、しつかと入て目を瞬き、ヘッエ口惜き御身の上、せめて此子は此里に、葬る野邊の幡天蓋、幸ひこれなる白旗を、借用せんと手を指のべ、引ばはなるゝ櫻木に、矢から斗そ殘りける、夫わたしては叶はぬと、伊藤大搗が立よれば、ちつ共臆せぬ宇賀道者、廻廊蹴立て鶴の間の、白洲におりて、櫻木の本につゝと立上り、ヤア〳〵方々、平家の運命尽たる證據、旗のお禮に知らせんと、北條四郎が射つけし矢、引ばはらりとめぐる櫻、皮を放れて其内に、大宰大貳と印せしは、樣子ありげに見えにける、北條時政

す業と、女心にあきらむ孝心、思ひやつていたはしく、刃にかける我所存、尤かゝる貞心を。與市にとくと語聞せ、未來の緣は繫んと、いたはる詞にさくら木は、泣入顔を振上て、スリヤ樣子を、イヤ知らぬ〳〵。サアぶち殺すと櫻木を、膝にひつしき一刀、腹にぐつと差貫く、苦痛をみせじときり〳〵〳〵、五臟を摑んで引出せば、櫻木ハアツといふ間もなく、息たゆれば惣身の蛭、ばら〳〵散て死たるは、不思儀といふも愚かなり、時政奇異の思ひをなし、見ればはかなき櫻木が、血にそんたる白無垢の、姿に淚せき兼ながら、袖引ちぎり落散る蛭、つかみ出したる五臟を包み、人に見せじと小脇にかい込、ヤア伊藤大場殿、今祝言の盃と、呼はる聲に伊藤入道、大場の太郎打連て、襖はた〳〵立出れば、思ひがけなき一間の死骸、兩人びつくり呆顔、時政ちつとも動ぜぬ面體、ホウ驚くは尤ながら、コリヤよう合點あれ、此梓は敵の種、身にやどすればやつぱり敵、それを女房に宿の妻、あまりといへばきやうがる振廻、病者とて北條を、おなぶりなさる計ひか、又は二心かサア〳〵〳〵、返答聞んと明辨の、理につめられて返答なく、伊藤はやう〳〵平氣になり、イヤさういはしやれば尤じやが、何で其子は殺しやつた、イヤサ娘御は手にかけぬ、コリヤ是見られしか此姙子、腹をたつて取出し、伊豆の島地に葬て、源氏の枝葉を斷時政、麁忽有やと兩人を、ひつしやり押ゆる計ひは、末の世までも朽やらで、蛭が兒島と名付しも、此因緣としられたり、伊藤入道つきはなく、さし扣へしが

吐普加身と物いひ初し神靈、すいしやく爰に伊豆の國、末世の人の先兆を、三島の森と名に高き、鳥居色つく秋の山、爰に源將兵衛佐、道者義明の斗ひにて、鵐の窟に蟄居有、文覺法師に身を寄て、けふ神拜の御供には、眞田與市義貞、只一人の供奉ながら、千騎に當る勢ひ、頼みて爰に頼朝卿、神前近く休らひたまひ、コリヤ義貞、我暴平に窘られ、無念の月日年に、平家追討の院宣下り、石橋山の戰ひに、打まけたるは一の術、梶原殿野に牒し合せ、謀計未練の頼朝と、平家に心忍ませて、不意に大軍起さん爲、今軍金を調へしも、必竟汝が切なる忠臣、悦ばしやと宣へば、ハアツと斗りに眞田與市、ありがた涙眼にうかめ、コハ勿體なき御仰、かくなり給ふ上なれば、纔の金錢御用に立、とかく神鬮に日限定め、旗上いそぎ給ふべし、いざ御立と進れば、實に理りと御大將、鳥居をあての森影道、神前さして過たまふ、かゝる所に鐘太皷、列卒の大勢弓矢を携へ、おうきと叫んで狩立る、大將分たる綴原兵馬、多勢の中にすつくと立、コリヤ〳〵者共、今狩だしたる白狐、此森かげに逃しに極る、コリヤ油斷して取逃さば、乾度曲事といひ付て、又打立る鐘太皷、森かげ深く責入ける、暫くありて頼朝卿、與市もろ共神拜終り、神鬮の日限極月二日、殊更天恩門出よしと、主從喜悦の眉を開き、悠然として立出給ひ、コレサ義貞、神主式部が告たる通り、彌極月二日の出陣、必定のよし告知せば、文覺道者も悦ばんと、仰に與市いさみ立、アゝラ心地よや滿足や、折しも聞ゆる鐘太皷、是勝時の前

詰寄て、ヤア心得ぬ此文字、道者斗ひおかれしや、返答あれと兩人も、勇かゝれば宇賀道者、ヤアかしましい毛二才達、問はずとこちから敎てやる、そも此文字は頼朝公、此亭坐しきに籠居の內、憎や淸盛呪咀せんと、人なき折に此櫻木、龐涓樹下の例を引、皮をめぐりて書たる四字、則死する文字の正中、ゐとめて貰ふた八重櫻、今咲花の時來ると、源氏を導く天道の、手先に得たる此白旗、手向ひひろかば只ひと矢、千の先矢と荒涼の、詞に伊藤たまり兼、夫家來共遁すなと、呼はる聲にばた／＼／＼、群くる大勢とり卷ば、こなたの三人刀に反、我討とらんと扣へ居る、道者義明は默然と、兩手に秘契の呪咀をなし、弓矢いたゞき引つがへば、ソレ遁すなといふ聲に、むら／＼ばつと切込多勢、事おかしやと靈弦を、利て放せはこはいかに、道者が詞に違ひなく、一矢は千の矢さきとなり、雨や霰と乱れ落、皆ちり／＼に逃行ば、北條大場入道も、手向ひならぬ妙術に、恐れてひと間に逃入たり、跡にすつくり宇賀道者、瘦腕瘦骨健に立たる勢岱山木、千里にはこる虎の尾の、上に死たる姥ざくら、こなたに臥たる櫻木が、からだは緋櫻心は墨染、吊ふ袖のちごさくら、宇賀の神璵の冥罸に、蛭が兒島の名を殘し、伊藤が館を立出る。

第四

と呻吟ふ様、早智の眞田横手を打、ホウ察する所以前の狐、命の恩を報せんと、敵をたばかるていたらく、暫く爰に御休らひ、様子御覧と木かげの内、侘び忍ぶ間もなく、提灯ぶら〳〵油揚、鼠におどる兵馬が下知、受て浮立多勢の士卒、道もしどろに拍子取、是から冥土は三百里、火なしに道中がなる物か、アリヤコリヤハツアしてこゆさせ、いさむ大勢鼻先次第、西へ三人東へ五人、皆ちり〳〵に散失たり、跡に繼原つくねんと、足をとゞめて四方を詠め、コリヤヤイ辰兵衛、皆の者はどこへいた、エウどこにゐたかは存じませぬが、殘つて居るのは漸三人、日雇の源四郎、おはさみ箱のせち右衛門、旦那に私添ますれば、都合四人といふを打けし、エヽいま〳〵しい毛二才めと、呵り付て立がり、皆こうこいと繼原が、下知に随ふ三人は、同し所をくる〳〵〳〵、臼をめぐれる蟻の市、人界でみる如くなり、民部渡れやましたりけん、傍なる石に腰うちかけ、炭たいまつをからりと捨、イヤナニ家來ども、もはや二三里あゆめ共、頼朝主従行衛しれず、殊に召つれたる組子の者、いつくに隠れてけつかるやら、マヅ休足して氣を鎮め、穿鑿とげんと詠すれば、鎗持辰兵衛進出、私がつく〳〵勘へますに、今朝の狩出し正六つ時、今までわづか三時か四時、それに日が暮人が失せ、どうも合點が参ませねど又氣にかゝる口上に、繼原くわつとにらみ付、ヤアばか〳〵しきよまい事、たとへ頼朝天地を出、虚空に栖をなす迚も、尋出さて置くべきか、いざ改めんとツヽ立ば、殘る三人茅原を、踏さへ足

表と、共にことぶく折からに、矢ひとつ受たる白狐、御大將の衣の裾、したひよれば眞田與市、取て引よせ兩手をかけ、捻ころさんず勢ひを、大將しばしと留給ひ、コリヤ〳〵與市そこつなせそ、無慙無念の狩人だに、懷に入鳥をたすく、殊に今日は大切の祝日、命をたすけ得させよと、宣ふ折から鐘太鼓、間近く聞ゆる遠攻に、狐は一生懸命の、難儀を人に通ずる魔氣、與市が心に徹してや、眞田は狐をひんだかへ、君の御に隨ひて、命助は得さすれ共、爰は狩場の事なれば、助たりとて狩場の雉子、幸ひこゝにと大木の、朽木に狐を屠り込、即坐の氣轉くちやらぬ、朽木にこもる大將の、運命至き基とは、かゝる慈悲より起りけめ、折しも數多の人音に、いかゞと踉ひたまふ内、列卒とおぼしき大勢が、左右に別れてぞつとかけ寄、ヤア〳〵賴朝たしかに聞、汝一人逐電して、伊豆一國の落緒になり、入道樣には御閉門、國中狩となぞらへて、毎日毎晩吟味の太鼓、兼ての用意と知らずして、によつと出合た芭蕉の花、サア尋常に繩かゝれ、所の代官織原兵馬、討人の役と呼はつたり、斯と聞より眞田與市、身がまへする間も荒身のだんびら、御大將も御帶刀、拔とりたまへば主從の、手練に恐れ踉ふ多勢、ふたつの刄先に切伏られ、受太刀あぶ〳〵織原を、先に押立迯去りしは、拍間もなげに見えにける長追無用と御大將、悠々然と道をかへ、過させたまへは眞田與市、戰ひをはれば其儘に、平氣に歸る道先に、又引返してよせ來る勢、いまだ午時をすぎさる白晝、提灯松明打ふり〳〵、おなたこなた

我日の本の惣名を、女王國女人國、黒齒國とも申と聞く、男ぎれ拂底故、是に遊所をしつらひて、此近郷のたらすめを、救ふはお上のお慈悲しん、アレあの樣に名にも似す、男が店に居ならびて、勤するのも御免の上、世間で男傾城と、いふ諺も當所のいはれ、扨又廓の掟にて、此簀戸内に入込男、たとへ高位高官でも、所の勤なされし上、もしつとまらぬ御かたは、入込其夜をようつとめ、一人前に十二匁、過料を出していぬるのが、郷に入ての郷の法、あら〳〵かくの仕合と、舌まきたてゝ語りしは、さすが雀の忠吉と、いはねどしるき便説なり、樣子をきゝて呆るる兵馬、イヤナニ前垂、スリヤ此所の掟にて、此簀戸内に入者は、武士たる者でも勤をするか、アイ則あの店さきに、羽織引かけ烟艸盆、前にひきよせはな紙を、かたへに置て前燭臺、入くる女の氣をかねて、勤奉公ひと夜きり、家來共こりやどうじや、どんな處にきた事と、あたまをかけば世智右衞門、不承〳〵ににじり出、イヤ申しだなさま、もうこのやうになつた者、いつそつとめてごろじやりませ、アノ勤奉公するのかや、アイアイ、所の法に矢はたゝぬと、しほ〳〵四人がくの字なり、弦なき弓の張合なく、ひと間の内に入にける、早ふけわたる店先の、格子はらへは正面に、燭臺さむき掛あんど、織原兵馬は大小も、茶屋の亭主に取上られ、髮ものんこに結かへて、羽おりの表は當世茶、うらは黒地の痩男、顏に小紋やおきわかれ、君とて誰かながむらん、つゞいて跡に鑓持が、つとめの身迚足とりも、行列ならぬすり

に心して、行松影に見えわたるは、思ひがけなき町つゞき、繼原きつと見咎て、ヤヽ心得ぬあの町家、察する所賴朝が、逆行先と覺たり、いざこいやつと付げんさ、はづんで見てもぐにや〳〵と、町家をさして行先に、立ならべたる町家の體、簀戶には番人其内には、さもきれいなる廣小路、家居淸らに太しき立、或は出格子連子窓、かけたるあんどう屋號をかき、づらりとならぶ燭臺の、光にうつる人影は、樣子ありげに見えにける、繼原兵馬遠慮もなく、簀戶ひらかせて打通り、有あう床几に腰うちかけ、ヤレ草臥たしんぞやと、ほつとひと息三人の、家來も足をさすりゐる、それと見るより簷先に、走り出たる中居の忠吉、千草木綿の布子の上、赤まへたれの色そへて、四人が前に手をつかへ、コレハ〳〵となたかはしらねども、此里のぞんでお出るからは、お心安う賴むぞへと、しやべれは繼原不審の體、ヤア馬鹿者が何ほざく、某は繼原兵馬といふ、當所の代官、おのれ等共に詞はかはさぬ、慮外者めときめ付られ、中居の忠吉けでん顏、ムウ當所の代官とは何おしやんす、爰をどこじやと思はんすへ、ハテ知た事伊豆國三島鄕、ヲヽしんき、爰は相摸の和琴の里、ヤア〳〵なんといふ爰を相摸、アイさかみもさかみ、しかも相州さかみの國、その上所の御政道、一々曰ありな山、いなのさゝ事色事の、根元根本和中散、ドレ一通りお咄しと、四人が中につゝと立、抑この和琴の里と申は、かたじけなくも神代より傳はり、今の世までも相かはらず、男少うして女多し、是によりて異國より、

んそん、又は垣根の隠元豆、まだ手いらずの初茸を、吸物にして上ましよと、袖をひかれて後家おひく。コレ忠す。頃日ちつと遠ざかれば、口上むきがぎつとして、打わける事あけにくひ、知ての通り後家になりや、すぐにびくにと思ふ心、名さへおびくと付たのに、それを破て廓通ひ、大事にかけて貰はにやならぬ、それに袖引褄引は、あつかましやとひぞられて、花どり直す中居が氣轉、サア誤たり〳〵、おわび申すは却て古い、追付四季の花聟さま、三國一とうつ手がお詫、そなたもサア〳〵ひと間へと、口かる手輕に云殺され、皆うか〳〵と打通る、座敷の四人は居住かへ、衣紋つくらふ兵馬が傍、ずつとよつたるおびくが紙子、かは〳〵さはる氣の毒顔、それと知らぬは佛頃、戀に心のおびくが乙聲、イヤノウ忠す、おれが相かた此子にしやう、おげん殿には其子がよかろと、指圖に辰兵衞がじり〳〵と、あとによるまど引そふおげん、殿もお顔に小ざかしく、おかに様にはあのおかたと、さゝれて源四郎うぢ〳〵と、めいわくがればおかゝには打笑、コレ大夫す、なにを隔心しよしんなと、とんとこけたる膝の上、喜見上戸の群雀、さわぎにつれて酒肴、禿子供が取しらべ、四人が脇に引そへば、中居の忠吉手酌にうけ、おひ大臣へとさす腕、とつて引受又ひき受、いつその事に三三九度と、四五盃重ねし濡盃サア上ましよとつきやれは、くる〳〵こけたる盃を、兵馬がとれは辰兵衞は、たばこ吸付指てふき、おげんに渡す心ねを、思ひやつたる盃と、吸ふてやつたるきせるの火、顔にもへ

足に、垢ぎれふかき青疊、已と毛立とろめんの、羽織短き肩の行、合ぬつらさといふ人は、羅刹國にもまれなんめれ、跡はさしづめ源四郎、いつにかはりて鬢さきに、引たる油火にうつり、顔の住居はあしけれど、中に見込の鼻ばしら、まだふみも見ぬ目の内に、晝飯ごりがちら〱と、あふつ火影に亭主の虚助、主人顔して四人に向ひ、コレ皆の衆、今夜は大事のお客故、御酒の相伴お寢まの相手、さいつさゝれつコリヤ〱〱、戀の山芋氣をとろゝ、しんとろ目元になる樣に、蛤くり〱赤貝の、色がかはつて青山椒、先にちつくり飛立斗、逢夜は玉子地黄煎、あまい差圖も所から、わめきちらして奥に入、あとに四人は顔見合せ、面目なげにえりかざり、帶の皺ひく手につれて、表の方はそめき客、淨瑠璃小唄出次第に、騷げどさすが女連、年に恥てや念拂の、調子で直に拍子取、箸を杖にして橋の端を渡りや、垣に結込柿の木を、猫がかきさく爪掃除、揚枝もてこい松葉でせい、雪踏もてこいはだしでせい、セイ〱〱やつとせいと、ぞめく中にも小走りに、眞先がけの後家わげは、よはひ六十字に惣の、匂ひ小脇にかい込て、揚屋の前に立どまれは、跡にがんちのおげんがえび腰、次はちか〱ちかの浦、しほの目たらはら雨足の、そろはぬおかにが這よる格子、内には四人が色取風、外にはアレカコレカとて、我すき〱の男えり、それと見るより中居の忠吉、出るとすぐに袖ひかへ、サア〱およりなされませ、お望次第といふ内にも、ほんと今晩つき出しの、ほんにく肉折えびき

事を見つるかな、察するところ以前の狐、命の禮に討手をたばかり、我をかばふに極つたりと、仰に與市頭をさげ、げに心なき獸類だに、御恩を送るは君が德と、賀し奉れは賴朝卿、しばらく暗默ましまして、冥部の神靈遙拜あれば、四方にはつと狐火の、光りにつれて眞田の與市、大將軍をかしつきて、鵐の窟に立歸る、守口攝意眞莫犯、如是行者傳度世、文覺上人の大行場、表の窟の分野を見るに、澗水漲て藍の如く、朝に染る苔衣、着たる巖はつるぎの如く、夕に煩惱の夢を斷ち、無常を觀ずる云々亭、朽木をあつめて柱とし、朽葉をよせて雨露を渡る、世已に治承四年、冬十一月十日の曙、文覺宿願の子細あつて、氷筋交りの瀧の內、すつくと立たる荒行は、身の毛もよたつ斗なり、御いたはしや賴朝卿、曉の月黃昏の、枯穗の薄にすがる露、政姬諸共朽木屋より、瀧の邊に立よりたまひ、イヤノウ文覺、我生運の拙を恨、足下の一命瀧に擲ち、生かはり死代り平家を狙ひ、本望遂との事ながら、我憚らず心を改め、佛神信仰怠るまじ、行を破て賴朝が、運命祈り得させよと、禮讓あつく述たまへば、文覺瀧の水吹分、アヽ恩の仰をきく事かな、我此瀧に打るゝ事、既に七日に滿せしかば、只今行法やぶりしとて、存命のほど覺束なし、殊に去葉月の末、兵を起して敗績あり、其後平家の虜となり、危き所を時政の、智畧に助る不覺の大將、それを賴に生ながらへ、倶泥刧の本懷を、遂んは猿猴の水の月。今此瀧に身を淸め、魂を悲想天上に歸し、魄をとゞむる金輪際、平家を亡し源氏の世と飜さん

立四人と四人、たがひに見かはす皺白髪、大小えり取り殘る齒は、そめねど黑き首そむけ、おびくは膝に打もたれ、色はどのよな苦をやむ者と、うらやんだのは此首尾かと、しがみ付共勤の身ふり、放すにも放されず、うぢ〳〵すれば辰兵衞も、おげんにとつて引よせられ、見わぐる顔はかさ痕たらけ、耶成執もどりに夕立の、顔をそゝぎし如くなり、殘るおかには横身から、すぐに付こむ閨せがみ、コレ大夫すと源四郎が、手をとる手さき古れん木、わふりこまどふ礒石の、波にうたれし佐用姫と、心自慢のつとの下、帶下の匂ひうかりける、油だんも波に盃の、くる〳〵めぐる酒の醉、サアぎよしなれど忠吉が、火をつけかゆるあんど影、兵馬あたまをかくごの前、うぢ〳〵すれば亭主が立出、ヘッヱ不勤な新參めと、わりわふ銚子ふりわげて、りう〳〵はつしと打つくれは、顔におつる血汐の瀧、流れの身とぞなりにける、源四郎辰兵衞氣味惡く、屛風の中におとじさり、入兼る體虛助が見付、ヱゝ儕等迄が不勤か、サア思ひしれとふたつの髻、しつかと取てガッツカッ、顱と額を打合、柏子は乘てカッ〳〵〳〵、双方一度になかるゝ血、手向ひならぬ所の掟、三人赤つら赤耻を、かくごなからも氣味わるく、屛風〳〵に入るよと見えしが、今迄わつたる揚屋の體、かき消す如く跡たえて、殘る松原風そよぐ、野中に四人が餘念なく、木の葉枯枝むしろ切れ、骸に打かけ額には、流るゝ血汐出次第に、鼾の音もかう〳〵と、眠る姿に賴朝卿、與市もろ共木影を出、四人が寢姿見とゝけたまひ、扨々怪

まする、いふても日本の惣大將、顏の皮をめくつても、たりましよまいと立上り、牛のつな鞭ひた〳〵と、行道白糸瀧の音、遙に見えし朽木屋の、柴折戸近く着にける、手助は牛を片影に、邪魔を拂ふて柴折戸に、何心なく入けれは、梓は用意の野邊鏡、見れは日頃の諸靨、疵付玉の朽椿、詠入てぞしよげり居る、かくと聞得て政姫は、戀の敵の梓姫、心にわらぬ笑顏、此場をすかし歸さんと、朽木のひと間を立出て、ノウそれなるは梓姫か、何故是迄お出しと、立出會釋梓姫、牛に横身の顏そむけ、ムウさうおつしやるは政姫さま、是迄參りし御不審は、ちと間違に存します、賴朝樣のお胤をやどし、閨の月宿の花と、呼るゝ身をば賤しくも、平家の浮世にながらふ故、此瀧壺にて身を淸め、夫婦の圓に參りしと、答ふる詞に政姫せき立、ヤア何とおつしやる、平家の穢を漱がんと、此瀧壺にお出しとや、そりや跡事でござんする、私がとうから身を淸め、賴朝樣と夫婦になり、蝶よ花よと樂の、中によつくり梓樣、ようござんした事わいのと、つきはなければ梓姫、せき立餘り我顏の、疵も忘れて牛よりおり、コレ〳〵〳〵愛な男盜人、お胤をやどして二世迄と、かたらう夫をようね取た、ヘツ憎や〳〵と怒れる顏、政姫見るより打笑ひ、ヤアそなたが聞し梓殿か、ホヽヽコリヤモウ越踏の花聟を、そなたの傍に暫くでも、置たが今更むやくしい、鏡がわらは其顏を、見てふつつりと思ひ切、似合た樣にみつちやくちや、又は山賤田翁の聟ゑり、御肝要と刎付れは、いとゞ燃立梓が心火、ヘツヱ

は、文覺が能大將を得る節と、思ひきつたる返答に、賴朝又も瀧つぼの、深きを厭はず衣にすがり、コレサ文覺、たとへ我運拙くとも、北條三浦を初として、一味の大名餘多たり、然るに賴朝此儘に、望を朽ん胸中を、推量してたも文覺と、淚ながらに宣へば、文覺憤怒の勢ひにて、瀧の兩岸さし渡す、柏の一枝はつしと折、遠慮會釋も波を切、賴朝卿をりう／＼、シヤ聞わけなき御大將、一旦思ひ立たる大行、など成就せで止べきと、又ふり上る柏の枝、見兼て立よる政姬も、共に左右に打付／＼、ヘツエふがひなきお心や、此文覺が指圖せし、如意輪佛の香花を怠り、いふて返らぬよまひ言、早くも用意と叱する眸、せんかたなくも賴朝卿、我過とわきまへて、政姬もろ共すご／＼と、朽木屋さして入たまふ、時しも峯は白銀の、樹々に文なす玉鉾を、踏迷ふたる右左、手助が案內梓姬、夫に別れて世をうしに、乘も戀路の山坂を、歩つかれて牛を止、イヤノウ手助、姉樣のお指圖故、あちらこちらと吟呻ひて、はる／＼爰まて來たものゝ、つく／＼思へは此顏で、君にあはるゝものかいのと、娘心の跡先も、淚は雨の晴曇り、牛の片脊やぬるゝらん、手助はわざと佛頂顏、コレ／＼わるい御合點、その樣に泣しやる故、張た膏藥もめくれます、誰でも病は有內、生れついたぶ氣量ともなし、賴朝さまの爲に迚、くしや／＼突た大事の顏、そりやもう君の心では、芙蓉共蓮花共、思召ねばなりませぬ、コレよう合點なさりませ、銘々つれの戀中なれは、小指を切て畸人になり、眞實心を見せ

まへば宇賀文覺、ふたりの姫を引立て、いざ先奥へと打連立、心を殘し入にける、暮ても白き雪の山々、春をや夜と詠めん、爰に眞田與市義貞、今日君の大事と聞得、鬼武といふ名馬に乘り、三浦の家に傳はつたる、蓬の矢なくゐ脊中おひ、白き綾地の狩衣に、氣をもみ烏帽子引立て、二條の弓の鞭はげしく、朽木屋さして行道先、思ひがけなき谷川の、水玉さりて見えつるが、心火一塊燃上り、乘たる馬もたぢ〳〵、こは心得ずとふり返る、後に妻の櫻木が、文字かき散らせし白無垢姿、頭にふたつの蛇を戴き、馬の尾房を引立る、與市ハツシとひと鞭あて、馬のり返し打向ひ、ヤア怪しき櫻木、伊藤を味方に付たるか、又は首を討たるか、返答いかにと詰寄ば、櫻木涙の目を開き、アヽ淺ましき我身の上、夫にさられ立歸り、たま〳〵逢みし妹が、難儀にかゝる其譯は、賴朝樣のお胤を宿し、旣に大塲と緣定め、いなむを道理と白無垢を、きせて欺く妻結び、自然と宇賀の咎を得、惣身を蛇に責られて、其上五臟をさき破られ、もぬけの骸と世を去ても、只迷はしき此起請を、返し申さん爲斗り、是迄幽魂あらはれたり、詞涼しき櫻木が、顏色變じ立姿、與市つく〳〵打詠め、スリヤその方は賴朝の、お胤にかはつて死たるよな、ホウ遉與市が妻櫻木、未來永々かはるまじ、穢れし起請こなたへと、指圖を悦び櫻木が、渡す一通引裂捨、成佛せよと夫の詞、アヽお嬉しやといふ聲も、風の音のみ櫻木が、着たる白無垢松が枝に、殘て容は消失たり、與市のつたる馬引立、枝なる衣をやなぐゐに、打

口惜しや、我此姿は殿樣へ、義理といふても返らぬ事、いつそそなたと死んだらば、思ひ殘らて成佛せん、思ひ知れと突立上り、抓みかゝれば心得て、嫉妬執着政姬も、負じと身構へふたりの姬、顏に上氣の萠楓、裳はら〳〵風に散、谷の細道朽紅葉、踏立蹴立ころ〳〵〳〵、川にざんぶと滑石、鬪雀人を恐ろしさ、波を切たる振袖の、袂にくゝむ小砂の重り、怪我危しとひと間の手助、とび込水の底深く、游ぎよらんとあせる程、逆卷波に打付られ、川下遙に流れ行、ふたりの姬、生死の境、抓合たるか弱き體、渦にくる〳〵捲込れ　己に命も白波の、あはやと見ゆれば行場の文覺、覺えず瀧をはなれ出、波をけ立てふたりの髱、手にから卷て突立しは、半朽たる松の木に、二筋下る白藤の、花に露もつ如く也、折しも一間を押開き、立出給ふは兵衞佐、古式の裝束改て、道者義明と諸共に、文覺法師に向はせ給ひ、ヤア〳〵文覺、我苟も敎を受、如意輪佛に手向の樒、手折て通る此場の体、只今瀧行破戒有ば、直に院宣頂戴して、平家追討の軍を師ん、返答いかにと宣へば、流石の文覺忙然と、つゝ立上りふたりの姬、左右に提白波蹴上、朽木屋さして入やいな、梓は君に打向ひ、みだるゝ髮を手に受て、アヽお嬉しやなつかしと、寄を政姬つき退れば、道者文覺ふたりの姬、左右に引分引立る、大將悅氣の其中にも、二人の姬の心を酌、踏跟たまへば梓姬、文覺の手に縋り付、コレそなたかは知らね共、私が身の上、イヤ私と、こなたは政姬道者が手に、互に縋り賴朝も、戀のふた道行迷ひ、佇た

もなり、其途の供に政姫を、つれて死だら迷も晴、其時成佛せん物と、思ひさだめて立上れば、表の方に馬上の眞田、時をうつかり伺ひ居る、梓は前なる盃を、はつし／＼とふみ砕き、谷川近くわゆみより、瀧に向ひてつく息は、おのれと燃立如くなり、かゝる折しも瀧頭、遥に立出る宇賀道者、狂文の綾木の葉の衣、かれ木の杖に一巻結付、瀧壺直下に見下して、ヤア梓殿かと頂上の、聲にびつくり見上る顔、相向變れば宇賀道者、衣をふるふて打向ひ、イヤノウちつとも驚かれそ、我仙術の奇特にて、こなたの願ひ叶へてやらう、ヱウ何とおつしやる、スリヤ今迄の私の様子、ヲヽサ全く見とゞけた、そなたの骸を毒蛇に化し、奥の政姫とり殺させ、大望遂て成佛させん、柳龍門の鯉は瀧に上り、其念力にて龍となる、そなたもかゝる難行あらば、道者が毒蛇惡龍に、姿を化して得させんと、勸めに梓なはせき立、ハヽア嬉しや本望や、イデ念力をしらしめんと、小褄引上口そゝぎ、天を拜し地を拜し、漲る瀧壺遠慮なく、飛入體は般若の勢ひ、髪逆立て瀧岸の、岩に手をかけ松柏に、足をとゞめて打水に、さからひ登る有様は、實や龍門天上の、鯉を畵し如くにて、めざましかりける次第也、上には道者下には與市、中に梓が女の念力、巖傳ひに水かき分、よぢのぼつたる絶頂上、姿は女内心夜叉、つつくと立たる行装は、ふしぎにも又恐ろしゝ、表の與市たまり兼、柴戸折押あけ飛て入、水上くわつとふりさけ見、ヤア心得ぬ祖公の斗ひ、其女を毒蛇にして、政姫どのを殺しては、親北條へ

かけなから惘然と、心を澄し居たりしが、やゝ暗默して目を開き、股野が送る一札取出し、一行よんでは眉を寄、二行よんでは瞳を轉し、工風に凝し詞を放ち、アゝ命なるかな頼朝公、此おく山にまします、賤男同然の蟄居ながら、平家に洩れたる知せの一通、是非なき主君の御運命、連てはかなき我身の上、貞女の操を立る妻、或は苦め或は又、勤奉公浮旅を、慕よるべの緣を切、妄執この世に殘る程、未來のくるしみ增るべし、其上賽の河原にて、嘸市太郎が此親を、恨んで泣てゐるであろ、すりやこの與市が死んだ迚、など行さきの有へきやと、一通とり上打詠め、しばらく時をぞ移しぬる、こなたの方には梓姫、ひとつの盃携へて、そろ〳〵立出る物思ひ、表は與市が一心不亂、それとはしらで梓姫、持たる盃下におき、ヘツヱうらめしいこの盃、あの政姬があて付て、此盃は父時政、お味方あらば夫婦との、イヤ極めじやの定めじやのと、聞どもいはぬに何のかの、エゝ腹が立〳〵と、いふてかゝる形容、どうでも戀は仕負內、常さへかざる紅粉化粉、ふたつ鏡よ姿見よ、容づくつて居る時さへ、男の心飛鳥川、かはもやすいが常なるに、見るがけもない此梓、アノ政姬づらが心よう、我君樣に抱かれてゐる、印に顏のうつくしさ、見るはぞ〳〵浦山しく、此子の爲にとなからへし、命か塵とも埃とも、何のこれが惜からう、とはいふ物の自らが、死だあとでは天下晴、夜晝なしに樂まんと、思ふてあの世にいたとても、迚も佛になりやせまい、いつそこの世にながらへて、鬼ともなり蛇と

すな文覺、おれも坊主われも坊主、ぬらりくらりでいひ抜んとは、ハヽヽ片腹いたし、則汝が貴道具、持せし鼎の湯起請とらせ、事を糺さん我計略、ソレ〳〵用意と指圖の詞、畏て繼原が、庭にながるゝ谷川の、水くみうつす鼎の内、下に吹立火の勢ひ、次第につのる文覺が、心は千轉萬一に、事もや洩れんと思案の體、股野陘々たる顔色にて、イヤサコレ文覺、身に覺なき事ならば、湯起請とるに別條あるまじ、もし又少の手がゝり有は、白狀あつて然るべし、そも此鼎は三島の神寶、萬一邪心ある時は、飛ちる湯玉一滴にて、身中三百二十骨、髮膚筋脈爛腐して、即時に命をたつ靈器、早々有無の返答と、詞豐に拷問有、文覺一默雷電の、轟わたる胸の內、さとる股野にさはがぬ伊藤、つめ寄〳〵手詰の詮議、一切無紀の文覺も、否の一言荒法師、何思ひけんずんと立、煮立鼎を打詠、コレ〳〵兩人實撿あれ、身に覺なき湯起請文、金剛界の手に受て、金胎兩部の骸にそゝぎ、罪無趣お目にかけんと、開目半に印契正、都卒天上讀誦し、いで此鼎の沸騰に、八功德の冷氣を湛、焦熱の苦を救はせまたへ、難陀龍王跋難陀と、暗誦終つて鼎の鉉、とらんとせしに虛空より、ヤア〳〵文覺麁忽なりと、聲をかけしは何者と、三人一どにきつと水上、すつくと立しは宇賀道者、勢ひおまつて大音上、清和天皇第六の皇子、貞純親王の苗裔、故左馬頭義朝の三男、兵衛佐賴朝公、只今出御と呼はり〳〵、茂れる松柏押分けて、巖に請する御大將、文覺あはて瀧の下、走り寄てはつたと睨、シヤ見限りは

義理たゝずと、つめよる與市を見やりもせず、梓を引連岩かげに、立いる道者が心底を、心得がたく立つ居つ、氣をくるしむる折からに、あまたの人音股野より、知せの時刻と表に出、乘たる鬼武一鞭に、あてども浪の白泡吹、宿所をさして駈ゆく體、きつと見屆朽木家に、忍ぶまもなく所の代官、繼原兵馬をあないとして、入くる上使は股野五郎、あとに續て伊藤入道、あまたの下部を麓にまたせ、しづ〳〵通る柴折戸先、繼原權に鼻たかく、サア此家の内に誰か有、御上使なりと叫ぶ聲、アラかしましと文覺上人、垢つく三衣を瀧に洗ひ、刺栗あたまを嵐に過、意氣浩然と出向へば、伊藤股野は上座に直り、行義を正せば繼原は、三島の神寶常燃鼎、淸氣に見ゆる椽先の、石面拂はせ餝り置、次第をいぶかる文覺は、驚く體なく揖讓有、コハめづらしきまろうど、此深山の庵室に、上使よばゝり心得ずと、いふを打消伊藤入道、ヤアだまれ文覺、源氏の大將頼朝を、此朽木屋にかくまふよし、注進あつて馳向ふ、サア一刻も頼朝を、渡せ〳〵と詰よれば、文覺ハツト仰天を、見せねと自然と倚髮、股野莞爾と咲をつくり、コレサ文覺上人、衲僧の御身、武心あるべき子細なけれど、人口に膾炙する頼朝の隱れ家、白狀われと問かくれば、文覺如愚の容貌にて、コハ不可思議の難問、朝は如意りん觀音の香花、夕べは千手經文の讀誦、かゝる勤の沙門なれば、官事有共鹿角蜂、私用はもとより蛙面水、世に諂ぬ此文覺、修羅の種蒔兵衞佐、何しにかくしおくべきと、陳ずる詞を伊藤が刎切、ヤア馬鹿つく

も煎湯の内、頓智の股野指添を、拔より早く賴朝の、首指つらぬき引上しに、面部の皮肉爛落、ふた目と見られぬ有さまに、文覺衣體も取亂し、御首取て衣の袖、包におまる荒粒涙、ハツア是非もなき御最期、宇賀道者が短慮を用ひ、穩和威應の異相を棄、無爲に入たる御魂、三界中に流轉せは、御兄弟の中守たて、御名を直に賴朝と號、御無念はらすは安けれど、かゝる姿の淺ましやと、どつところへる文覺が、肺肝見通す股野五郎、さはがぬ體に御首を、受とる手さへふるひ聲、ヲゝ天晴の御覺悟、いざ此上は立歸らん、アゝ伊藤殿には文覺追放、道者が首をイヤ〳〵〳〵、其首持は入道役、貴殿は跡にと祐親は、賴朝の首引たくり、繼原つれて氣味わるげに、簾をさして出て行、あとに股野はためいきし、淚を一度に瀧津瀨の、文覺法師と顏見合せ後悔限りなかりしが、文覺閉付眼を開き、コリヤ宇賀道者死んでくれな、せめては汝を主君の敵、生骨嚙破我腹の、八十日の虫治にやならぬと、聲かけられて宇賀道者、ちつともひるまぬ面魂、ヤア愚也兩人、死すべき時に死せざれは、死に增つたる耻有と、知らぬは不覺の第一たり、そも賴朝の運命は、池の禪尼の一言にて、助る命のはかなさを、いかでか繫ぎ遂べきぞ、此宇賀道者の斗ひには、仰おかれし糸若君、賴朝公と尊號し、院宣わたへて義兵を揚、平家の不意を打所存、非なりと思はばサア兩人、君の敵を討べしと、嘲る詞に股野五郎、コハ宇賀道者の所存と覺えず、今佐殿の御命は、須彌岱山より重き時節、股をくゞり溺をなめ、潜籠

てたる宇賀道者、智勇の人面墮弱の畜心、ヘツエしなしたり口惜やと、踊上つての丶しる山彥、人天一同動搖せり、道者もむねんの顏色にて、ホヽヽ貴僧の恐尤なから、斬までつきたる源氏の運、何とて本望とぐべきぞ、いつそ只今御腹す丶め、敵の刄にかけざるは、先祖の佳名けがさぬ思案と、きく丶より文覺瀧水を、たぐるが如く身をわせり、ヤア何ぜいふ、早佐殿には御腹、こはそもいかにと踏たる岩、碎る斗り蹴立る波、ヤアしづまれと賴朝卿、白無垢の襟おし開き、股血にまみれし御腹を、まき絹しつかとしめ直し、イヤノウ文覺、今迄我をかばふ心底、生々忘れ得ざるぞや、平常其方諫しごとく、武運つたなき我なれは、人手に空敷か丶らんよりと、思ひ切たる此有さま、サテ其方は生ながらへ、殘る兄弟あまたの內、糸若といふ弟あり、父義朝の斗らひにて、加賀越中の境なる、白山といふ大山に、時の隱者天翁を賴み、彼山中に籠居を搆へ、尤右の山おくに、鵺と名つくる惡鳥ありて、鳴雷をとり喰ふと、天下に流布して一人も、糸若か居を知るものなし、鵺鳥の文字賴朝に、音聲通する上からは、彼糸若を守立て、名を兵衞佐賴朝と呼、一度平家を討ほろぼし、我亡靈を慰よと、昔語の顧命を聞、文覺返答荒行の、瀧に淚を爭ひしは、垢に塗れし蛸壺に、鬼蘇を生たる如くなり、道者は大將取て伏、サア御上使達御見分と、はつしと首を討落し、骸を木陰の谷に屠、腹切刀を我腹に、くつとつき立弓手にて、投たる首は前に立し、鼎の內に入けれは、文覺始伊藤股野、立さはげと

首打込鼎の内と、語れは文覺不審をとめ、只今瀧の頂上に、出御ありしは慥に我君、ヲヽ其事は此頼朝、二人が指圖に松拍の、しげみに隱れ梓姫が、最期の血汐腹に濺さ、切腹せりと見せたる捲絹、取て伏たる其内に、松のしげみを幸に、傍なる死骸の首打落し、投たる的は其鼎と、事濃なる仰の條々、げに名を得たる宇賀道者、謀計殆たくましゝ、今はの義明日を開き、我百餘歳の齡をたもち、今丹丘に立返れど、魂此世に留つて、平家を亡す我存命、達してくれよコレ與市、汝は討死したる迚、世間に沙汰する上からは、我白髮を切拂ひ、是を頭に打蔽ひ、其もみ烏帽子しつかとしめ、白地の狩衣鎧に打かけ、昔の名をば苟めに、三浦大助先登と、名乘て手柄をしてくれよ、小野崎さらは孫さらばと、いふ聲共に白瀧の、波の藻屑と息たえたり、上には眞田が取すがり、歎けば下には御大將、小野崎始文覺も、倶に袂をひたさるゝ、歎は尽どと股野五郎、我は文覺追放役、貴僧一人山を出、軍勢統て旗を揚、當月廿日を越ざる内、コリヤ關西關東、望次第、何國へなり共追放と、心をつくる詞に文覺、朽木のひと間上段と、思しき所に立直り、如意輪佛を安置の笈、兩手に携へ前に置、着せし如法の袈裟衣、脫捨〳〵屠り捨、笈につけたる箱の内、用意の大紋長袴、立烏帽子にて僧形かくし、仕込の大小横たゆれは、人々いかゞと躊ふ内、捨たる三衣手にとり上、イヤサコレ股野殿、源氏の方人文覺法師追放有と差出す、僧衣を股野手に移し、ホツ面白き斗ひかな、此文覺を追放して、殘るはヲヽ。

有こそ道なるに、麁忽至極と云はぐせば、文覺怒て手ぬるし〳〵、我裏道より駈上り、道者が體を寸々に、引さき捨るがせめての腹いせ、我も世を去天魔となり、清盛重盛初として、平家の奴原鏖と、天に跨駈込向ふに、ばらりと開襖、内にはふしぎや頼朝卿、如意輪佛の扉の前、床几立させ悉しく、膝丸の御着長、早紅葉の直垂に、虎皮の尻鞘鬼切の、太刀佩しめて御座の脇、小野崎四郎、土肥の次郎、同く三郎、新開次郎、土屋盛長、六騎の面々、美々しき糸毛の甲冑にて、守り奉る行裝を、今の世までも云傳ふ、石橋山の七騎落、かゝるためしと知れけり、道者義明は痛手を忘れ、アゝうれしや本望や、只今討たる賴朝公、蘇生有しぞ文覺殿、イヤサコレ股野殿、お主の敵サア〳〵〳〵勝負有と云伏れば、返答何と文覺股野、あきれて詞も詠ぬ入、奇異の思ひをなしにける、大將おん聲高らかに、イカニ文覺股野五郎、今日我運谷りしを、道者義明が謀計にて、平家をたばかり時節を待、源家の基本をひらく瑞相、祝着せりと仰に兩人、ハツと恭敬濃なり、股野たれたる頭を上、コハ思ひもよらぬ御存命、コレサ只今の御身がはり、誰人なると道者に問へば、それこそ拙者が物がたらんと、道者が旁より眞田與市、祖父の筐と白地の狩衣、烏帽子引しめすつくと立、今日かゝる吟味により、伊藤入道罷越、鼎を以て湯起請取せ、君の隱家窺ふよし、夫なる股野の知せにより、いかゞはせんと思ひしに、とく斗つたる祖父道者、梓姫の嫉妬を見込、此瀧水にさか登らせ、只一刀に指殺し、其

承ると、字々明に讀終り、世に頼敷頂戴あり、股野ははつと心付、斯延引せば入道が、狗を入んも覺束なし、先おいとまと文覺が、三衣を携へ立出れば、與市は涙の手に討取、祖父の首をかき抱き、谷かげ深く入折しも、遙向ふにかけくるは、眞田が家來に手助とて、忠勤諸士におさらぬ奴僕、織原兵馬を糺て、柴折戸ひらき両手をつき、扨これなるは當所の代官、伊藤大場が狗となり、此場の始終を聞とつて、迯ゆく向ふに立塞り、事を明させ搦めたり、いで血祭りとぬく刀、股野しばしと押とゞめ、ヤア手助麁忽すな、其者刃物で殺しては、後日いひ譯むづかしと、制するこなたに遠藤武者、こらへかねてずつと出、よし〳〵今日の武士始、骸む疵にねおころし、草鞋のそこねぬ無間の障罪と、立よる袖に手助がすがり、マア〳〵おまち下さりませ、此織原に文覺様、そりやとうよくな古天秤、似合た奴が成敗と、搦る繩を引はどき、積る深雪に刎とばし、ちつたる木の葉も乃共に、くるり〳〵雪こかし、是で後日は雪倒れ、冥途の道も白雪と、どつと笑のときの聲、勇どいさまぬ眞田與市、ひと間を出て祖父の首、携ふ我子と親の顔、覗く小野崎五人の手前、見ぬふりするも勇み足、七騎はすつくと立上れば、股野は道者の首受とり、腕は冬の櫻木に、鏤む春の花心、御大將は幾千代も、かけて命を繼穗の梅、かつ色見する六騎の物の具、堅剛大樹の堅をなし、手助の手から大木に、ちよつとやどりさ鬼もみな、文覺法師は枯枝に、青葉をかざる立花の眞、與市は根をこち枝をたち、殘る骸

サ知た事、我は還俗源氏の兵、遠藤武者盛遠と再號せん、源君義兵をあげたまふも、高雄山にて拜受せし、院の宣旨の御陰なれば、本望成就遂たる上、高雄山に寺を建、住持は元の文覺法師、先夫迄は遠藤武者、墮落の印はこれからと前なる笈を法杖にて、はつしと碎はてはいかに、安坐の木像血に染し、胴衣をまとひ左の手に、一通とり上璧然と、無念の相を刻しは、樣子あらんと頼朝卿、不審の眉尻高うして、日頃我に香花をとらせ、如意輪佛と告たるは、此木像にて有つるかと、仰に文覺大紋の、袖かきつくろひ末座に下り、夫なる笈の木像こそ、御父左馬頭頼朝公、尾州野間にて御自殺の、臟腑にまみれし染胴衣、左の御手に持たまふは、忝も院の宣旨、是に依て我君に、朝暮拜禮勸しは、此理との演説に、頼朝ハツと飛しさり、在世の父にまみゆる如く、渴仰ありし古事を、今に傳へて文覺が、左馬頭の枯髑髏、持しと誤る基なり、暫くありて頼朝卿、在が如く詞を正し、尊前野間にて無念の御最期、其御鬱憤散せん爲只今軍評議の內、尊顏拜する有がたさ、召たる胴衣の血筋の恥、雪に時日を移さじと、左の御手の院宣を、受とりたまへば列座の面々、一度にはつと平伏す、御大將は恭敷、院宣三たび頂戴あり、さつと開て御聲高く、早く淸盛法師幷に一類を追討すべき事、姦臣朝に在は賢者進まず、彼一類は朝家佛神の怨敵たり、依て前の右兵衞權佐源の朝臣頼朝に仰て、彼輩を追討せしめ、宸襟安んじ奉るべきもの也、院宣に仍て執達件のごとし、治承四年七月五日、散位光能

遠藤武者、ひとつの笈を上坐に備へ、盛長實平遠平なんど、甲冑堅固に居ならびしは、巍々堂々と見えにける、大將御聲潤敷、イヤノウ、大助、與市か討死以來は、渠か生存同然、忠義をつくす志、殊更今日の先登、ソレ遠藤武者到着と、仰せに一巻とり出し、上坐の笈の扉をひらき、在が如く手をつかへ、故左馬頭へ申出る、今日出陣第一の忠臣、三浦大助義明と、遠藤武者か着到に、しるせば與市馬上をはなれ、祖父か笈をぬぎとれは、下に宇賀丸具足して、遙てなたに畏る、折から入くるあまたの軍勢、中にも先かけ佐々木源三・親属大勢引つれて、着到終れは銘々の、陣所〳〵に入間もなく、關八州の甲斐源氏、和田畠山梶原なんど、皆々後陣に相つむる、かゝる折しも北條時政、續いてあとに股野五郎、伊藤大場を高手小手、搦立て引ずり來る、手助もかはらぬ貫差の、紲かたき御陣先、さもいさぎよく扣へける、大將兩人を睨付たまひ、ヤア入道が久かたなり、汝が惡逆日に添して、宥おかれぬ振舞故、今日からめ取たるぞ、恩をうけしといふにはあらねど、汝が宅にて籠居せし、其返禮に賴朝か、手づから首を刎て得させん、扨又大場は船裂の成敗、心得有へしと、仰に與市進み出、コハいかゞしき言上ながら、かく餘命なき伊藤入道、櫻木梓妻鷹部が、忠義に免じて御助命有は、與市に至て有がたしと、申上れは御大將、ヲゝよくも願ひ出せしよ、我も左こそと思へども、軍令きびしき遠藤武者、差配鈍しといはんかと、手討と下知をなしつるぞ、とも角汝計らへと、御免の詞に與市はつゝ

な寸寸に、さかる丶胸に大木の、中にこもりし七騎落、今の世迄も朽木家の、枝葉を殘して立出る

第五

龍は水物鱗虫の長、其時を得て九淵を出、兵衞佐賴朝、東國大半味方に屬し、出陣今月今日と、伊豆の小浦に陣木屋修補らひ、所々に陣幕陣床几、濱邊々々の松原は、白旗風に翩翻と、めざましかりける備なり、ヲヽイ〳〵大助樣ヲヽイと、聲計りして遙の松原、眞田與市義貞は、祖父の讓の白髮を、頭におほふて揉烏帽子、人を欺く白綾の、狩衣のそでまくり上、鬼武といふ名馬にのり、しんづ〳〵と打せたり、又も遙に女の聲、ヲヽイ〳〵大助樣イノウ、と走り來るは月野花野、與市が鐙に引そふて、コレモウシ大助樣、此弓矢此白むく、陣中におかれし故、お忘れもやと差出せば、與市きつと見下して、ホウ忘れしとはよく氣付り、そも此弓矢は天下の重寶、此大助が器にあらず、殊更老後の花軍、太刀ひと腰にてきり靡、名を萬天にあげんとて、コレ此大助が白髮洩、ゐぼし狩衣字鎧丸の、鎧にかためし老骸、其ふた品は兩人に、お預申すとひと鞭あて、ヤア〳〵陣中に物申さん、三浦黨の隨一大助、義明と申瘦親仁、御出陣の第一番、是迄何候と呼はつたり、折しも陣幕さつと開けて、中央の坐は賴朝卿、左にあたつて

日、芦部とよんたる文章、君を始め列座の諸士、鎧の袖もしめやかに、貞志を感ずる斗なり、與市二人の女にむかひ、早々いとまを取すると、赦をうけて悦ぶこなたに、何思ひけん遠藤武者、大紋ゑぼしかなぐり捨、サテ是迄は武士姿、今大軍の出陣に、思ひを殘すこともなし、二人の女は薙髪の形、愚僧が預り國々に、送りとゞけて親類に、恩賞與へよろこばせん、殊更切りたる黒髪は、とりも直さず佛法修行と、月野花野を引連て、はまべに出て纜を引ば數誓の如渡得船、眞田は伊藤を引立て、流人船に乘移れば、互の船の眞中に、股野は大場を引ずり出、今こそこいつが船裂と、纜といて大場の骸、ふたつの船に括付、海にさんふとつき飛せは、傍なる手助進出、首なる貫刺這り捨、サテ約束の御成敗と、覺悟の手助を股野制して、貫刺引上指添ぬき、はらりずんど切はらひ、是で手助は成敗すんだ、汝は向後眞田兵衛義幸と名乘へし、與市殿の一家老、股野が推擧を賞すれは、ハット斗りに平伏す、手助か命貫刺に、つながる錢の紋所、家に傳はる始めなり、早出船と股野が下知、流人科人引分る、船の櫓拍子おせ／＼／＼、ウンといふ間も荒波に、ふたつになつたる大場の體、心地よかりし血祭に、やかて天下を太平丸と、賴朝磯邊に立たまへは、北條與市義幸も、いさみ進る龍虎丸、今こそ時を惠美須丸、世に住吉丸大黒丸七福かねたる宇賀丸の、ためしを爰に照し合ふ、源氏鏡の物語、今の世迄もおきらけき

立、コレ〳〵月野花野、先刻あづけし其白むく、我君様もお聞有ん、別してかゝる大悪人、心をいましむひとつの術、蘆部が書置披露せよ、其上二人も本國に、送りとゞけて得させんと、いとまを得たる二人の女、心いそ〳〵礒陣の、幕にかたみの小袖をかけ、左右にわかれ讀上げる

愛別文の段

甘泉殿の夜となく、晝ともわかで曇る身の、なみだは雨となり行に、付て思ひのます鏡、いつかは胸のふた取て、見せまほしと白無垢に、覺悟ながらもいたはしきは、彌生廿日の曙に、櫻をめでゝ歌連歌、ある君たちと樂しみの、中に枝さす姥さくら、是に付てはさま〳〵に、浮世の色香あさ黄の櫻、ちつて千艸もいろませば、とびかふ螢あざやかにと、長柄の團扇にて、打手引手に氣もちりて、琴のけい古のおこたりを、糺めんとて投入の、艸花とつてりう〳〵〳〵、はつしと打手に情有、何かに心月の隈、預る子故に大事にかけ、千里ひと飛雪の山、こへて又くる春風に、氣を吹そやす大事の頭、一日の日が一年に、夏かと見れば初紅葉、色つく白歯なりをりに、みがく心のせつなさを、かくして我身まさな人、にく〳〵と思はれても、誠の根さへたえせずば、木の芽春雨いたずらに　よしなしごとをあら〳〵と、文して殘したり〳〵、川

お咲文治 裙重血紅跂

作者　達田辨二
　　　吉田鬼眼

上の巻　下總千葉の段

朝夕に、出船入船賑しく、海寛に事足りぬ、下總の國千葉殿の御家中山田幸之進、江戸在番の留守さへも、物事堅く見えたるは、武家の風儀と知れけり、一人娘の嫁入前、衣裳弘とさゝめきて、衣桁に數の縫小袖、花と詠める掛橋や、襖開いて立出る、娘お松が物思ひ、誰に祝の飾り琴、我初戀の其人に、逢て明さん懷しと、浮ぬ心を汲て知る、茶の間のおさつは氣輕者、コレそなた衆はぶらついて、おれにばつかり用澤山、臺所へ出れば料理の手傳ひ、圍ひ廻り水屋道幸の拭掃除、棚飾までしやんと仕舞、花は奥樣の御手際、お松樣の嫁入前、肝心の掃除所は應穴、とそこら邊を笑ひ草、初心なお政が氣の毒顏、コレおさつ殿、お松樣の心も知ず、面白さうにこな樣も笑止な人ではあるはいな、と云を中から引取、イヤもうどつての御祭人も、サアト云と案じ顏、行列の通つた大手先、五日歸りのお顏が見たい、ヲヽ夫々、あなたの樣に

宇賀道者源氏鑑　終

文治殿は拙者が爲には武藝の師匠、御誘ひ據なく推參致してござる、先以て今晩は忝なう存じます、と挨拶すれば奥田友七、イカサマ忠太夫申さるゝ通り、幸之進殿とは懇切の中、外ならぬ儀と文治殿のお誘ひ故、拙者は必竟押付客と申やうな物でござる、ハヽヽと笑ひに興を催せり、お咲は何も會釋して、コレハ〳〵御念頃に思召ばこそ、お揃なされてのお出、幸之進も此間の便に、今晩か明朝は歸られます筈、聞れましたら嘸悅び、イヤモウ此度は文治樣のそれは〳〵いかいお世話、お心遣ひお禮は詞に盡されませぬ、是は〳〵痛入たる御挨拶、何れも御存じの通り、矢島源左衛門殿の子息源治郎殿へ、是なる息女お松殿を拙者が仲立仕り、結納の印納めしは、幸之進江戸表へ御發足の砌、御在府の内事延引致せしを、何とやらカウ子細もあるやうに、源治郎親共申さるれど、仲立の拙者が了簡にも及ばず、江戸表へ書通を以て申談じ、則ち今明日の内御歸宅の筈、申さば矢島は大身、物頭と緣家とならるゝこと、第一はお松殿のお仕合と申物、是と申すも一つは拙者か働、から申せば如何なれど先は其樣なものでござる、幸ひて今日日柄もよく、祝儀始の衣裳びろめ迄には致したと、手柄話の詞に取付忠太夫、イヤハヤ夫は其元のお心遣ひ、御尤千万、去ながら首尾なりまして先づ大慶、何と何れも御覽じたか、御亭主のお留守御內證の御發明、サテお拵の丁寧さ、手道具は申に及ばず、衣裳の摸樣皆江戸風のお好、ヤモ驚入た儀でござるが、卒爾ながら呉服所は何れの御仰付られでござ

突詰た、二疊大目の逼圍、底火沈んで濕り炭、些ぱち〳〵と池田炭、輕い心を持しやんせと、もどかしさうに手取釜、口姦しき折からに、盛り過たる花の香も、夫の留守の影日向、なさぬ娘に母木々と、呼さへ惜き品形、お咲は一間立出て、ノウ娘ご、爰にか、ドレ〳〵ヲヽヲ、鐵漿の似合て柔和見えまする、夫幸之進殿も、今日明日の内お歸り、嘸お悅びなされう、イヤモわしも嬉い〳〵と、子に余念なき眞實は、血を分けたより睦じし、お松はハット手を支へ、お母樣も此間のお心遣ひ、些お休みなされませ、ヲヽ心ばかりか立たり居たり、間ない拵なれど、嬉さにまぎれてか、持病の癪も忘れました、コリヤ皆の者、お若も追付勝手廻りにソレ氣を付よと、上に立ては下々の惠やさしき人使ひ、縹緻に連し氣立なり、折から表賑しく、お客方のお入と、家來が報知の間もなく、羽折袴も内緣の、心安さを誘ひ連れ、入來る堀川忠太夫、後に續いて佐久間文治、奥田友七同道にて、門口に立休ひ、イザ忠太夫殿、友七殿、先々お通り、イヤまづお先へ、ハテサテ平に、イヤ〳〵是非共、然らば左樣仕らうと、先に立たる堀川に、連て座敷へ打通れば、お咲は手をつきしとやかに、是は〳〵夜中と申し却て御苦勞、どれ〳〵樣もお揃なされ忝う存じます、ソレお煙草盆お茶上ませいと、お松諸共挨拶を、忠太夫取敢ず、ムウ今晩は娘御お松殿の衣裳弘とあつて、是なる文治殿を御請待なさるに付、此忠太夫めにも參るやうにとのお使、幸之進殿のお留守の内、御辭退申筈なれども、お仲人の相伴、殊に

ウ江戸でもこまりますは模樣の好、取分お目出度御婚禮、及ばずながら私めが物好、愚痴な緋むくをさらりと桃色、當世の白落し、芦に鷺は徒ら染と、思ふは緋鹿子惣鹿子、綾も綸子も色替り、ふくら雀の衣抱て、お里歸りもやんがてゞござりましよ、近江八景松島や、千賀の塩竈身も焦れ、磯に人目の柵も、わた胴慾な此染物の手間喰ひ、アレ中にも柳の風に靡く、ぬらりくらりとアノ鶯、鶍の嘴の違ひやう、モウ〳〵きついめにあひ見る茶、心の散し染直し、洗ひ播磨の清十郎染、雲に梯霞に千鳥、及ぬことでござりますと、お松に聞す根すり言、取付ひつ付切付に、紅のうらみやかた褄の、模樣二人が忍ぶ摺、皆々夫と氣も付ねば、サテ〳〵氣輕な口拍子のよい男、今宵の座持とほめそやせば、お咲も折を見合て、サア皆樣奥へござつて酒一ツ、ソレ娘御案内申てたもと、いへどうだ〳〵立兼る、お松が戀の人知ず、互に通ふ顔と顔、水の出端に堀川が、ナニ八十七來やれと打連て、皆々一間へ入にけり、お咲は跡にそこ爰と、心を付る一間より出る文治が一人笑、奥口見廻し小聲になり、コレサお咲殿、幸之進殿の久々のお留守、一人力角の土俵入、拍子がなくてお淋しかろと、云つゝ寄添後から、こは〳〵一寸抱さ付ば、振放して、是はマアわつけもない、御座興も事に寄ます、サアマア奥へござりませ、へゝヤ座興とは曲がない、其以前こなたが御前へ、御奉公に見えた其始、ヤモこツ恥しいとなれど、何が書付もせぬ散し書、思ひ〳〵そろ〳〵とやつても〳〵返事せず、たま〳〵

るな、イヤ御家中御出入の吳服所の內、取分馴染の江戸芝から參ります、前代屋彌兵衞へ、此度の世話を賴みましてござりまする、アいか樣承り及んだ前代屋、しかし此忠太夫めは間違ふて出合ませぬ、ヤホンニ夫々、何れも樣へお引合申してくれと豫ての願ひ、此間親子連で下られました、則ち今日子息八十七と申まするが、勝手取持に參つて居ります、幸ひ〳〵お引合申ませう、ソレ〳〵早うと母親の、詞をお松が嬉さの、ほにあらはれし勝手口、小腰屈めて八十七は、一日に夫と江戸風の、意氣なとりなりくつきりと、磨き入たる玉川の、水際の立つ男振り、おめず座敷に手を支ば、文治聲掛け、サヽヽ是へ〳〵苦しうない、サア〳〵づゝとお來やれと、打解けたる挨拶に、友七傍から詞を添え、拙者はかねて存じて居る、アレにござるが佐久間文治殿、こちらが堀川忠太夫殿、ソレ篤とお賴み申しやれと、引合すれば躙り寄り、コレハ〳〵何れも樣方、ようこそお入遊ばされました、御覽の通り若輩者、お目掛られて下さりませ、ムウ成程〳〵身共は佐久間文治といふ者、見知ておくりやれ、サテ飾られし小袖の數々、模樣染色御身が世話召れしとあるが、イヤも驚入た物好、是も御內證の好みでありつらん、少しの內江戸表に育た人、イヤソリヤ身共もよく存じてをる定てお咲殿のお好でござらうがと、褒めそやされてお咲は氣の毒、是は〳〵文治樣の仰やること、江戸に住ば江戸の風、田舍に暮せば鶯の聲もなまると聞ば、伊達も姿も一昔、お耻やと袖覆ふ、八十七も商口、イヤモ

は、八十七樣かと抱付、泣より外の詞なし、突退てヲヽこは〳〵、大事の花嫁御、是迄は大き
にお世話、お茶でも上れ、色々に染替ても、果はすみる茶けんぼうと、私は覺悟してをります、
いやもう江戸でも田舍でも、滅多に涙に油斷がならぬ、必ずおいて下さんせと、いふにお松は
しがみ付、コレ八十七樣、そりや余りじやはいな〳〵、余り酷い胴慾な、花のお江戸の其
中で、意氣とやら通とやら、惚人の多いお前をば、田舍そだちの私等がマア何と、騙されうぞ、
案じ過しは海一ツ、隔て忍ぶ戀中の、逢瀨も波のうつゝにも、仇し心の風替り、見捨られたら
どうせうと、梶なき舟の浮思ひ、お前に別れて余所外へ、何の嫁入する物で、機嫌直して下さ
んせと、縋り歎くぞわりなけれ、八十七もとも涙、誤りましたお松樣・有樣は私も、そんな事
であらうと思ふて居りました、兎角二人が因果じやと、思ふておくれなされませ、ムヽそんな
ら疑ひは晴たかへ、アイ疑ひが晴過ぎて、結句悲しうござりますと、抱しめ〳〵忍び泣、是ぞ
戀路のにく所、お松は邊り窺ひて、八十七が手をじつと取り、サアござんせ、何處へでござり
ます、ハテアノ園の內へ、ハレわつけもない、そりや止になされませ、夫でも邊りに人もなし、
幸ひのよい此首尾、是非に〳〵と煩惱の、綱に引れて地獄とは、後にぞ思ひ知れける、樣子と
つくと佐久間文治、心に頷く一巧み、さし足抜足窺ひより、小柄を抜て襖と襖、ぐつと押込聲
張上げ、不義者見付たお咲殿、早く〳〵と呼はるにぞ、はつと驚き立出れば、文治は猶も居丈

逢ば大三十日の、借銭乞を見る様に、よう難面さしやつたのう、其後是の幸之進の内室、死れた跡へどうした縁か、よい身に花をお咲殿、エヽ昔を思へば味な物、とすれつもつれつ取付て、放れがたなき嫌らしさ、アヽ當座の座興かと思へば、昔を引出して仰るからは、コリヤ座興でもなさゝうな、中お嗜みなされませ、今仰やる通り、アイ山田幸之進が女房、夫のある身でござんす、サア其ある所合點、コレさう難面はせぬ物じや、こちからばつかり登り過した天狗凧、命の糸が切ますし、濡かゝつたる横しぶき、相手になるも五月蠅やと、突退〳〵飛退て、アレヤ奥に皆お待兼、私も座敷へ御挨拶と、云捨奥へひんしやんと、疊蹴立て行跡に、只うつとりと通轉の、釣瓶と首尾はすれ違ひ、合ぬ縁かと入にけり、奥は浮立酒宴の半、お松はそつと抜出て、泣に立足踏どなく、こゝへ〳〵と悲さも、わつと泣れぬ苦しさの、伏沈むより外ぞなき、一間の内は饗應の、歌の唱歌も今の身に、恥しや、年月重ねうき勤、二人のきばに立別れ、人目ながさに急かせかれ、コレナ八十七様、先刻のあてことねすり言、何の嫁入が嬉しかろ、コレ此胸が見せたいはいな〳〵、口にいはねど香に匂ふ、結ぶの神の不粋なか、二股竹に詰んだ縁、結び直して好た同士、互に尻目に顔と顔、云ぬ心を御推もじ、わしやどの様に思ふても、お前と別れ片時も、生て居る氣はごんせぬ、と云て今更云譯の、仕様摸様のはれ小袖、見るもうたてやけがらはとし、引裂んとする後より、コレ待た何するのじやと引たくる、ヤレお前

てつらけれでござるはいの、がこなたはさうではあるまいと、やはらく詞に取付て、お前の心一にて、波風も、ヲヽ立ぬ共〱、ムツ濟だらどうさつしやる、サアどうと云てどうせうな、ヤコレ・そもじがおれにうんとさへいへば此場は見遁す、但しは嫌か、嫌なら直に此通りを、サア〱どうじや、いやか應かの返事をと、弱身へ付込む非道の佐久間、悪魔の魅れか情なや、と胸の苦しさうたてさも、義理の子故に憂ふしの、勤に同じ詞さへ、汚はしや忌はしやと、思へど手詰の難儀には、欺すに手なしと胸を据ゑ、わざと詞も打解て、どうすりやお前の氣に入へと、凭れ掛ればこりやたまらぬと、夢中になつて氣は上づり、雀の宿る鬼瓦、寄添易く見えにけり、仕濟したりと心急き、夫々此間にナソレそこを、ナ合點か、早う〱と文治が手を、取て衣桁の後へと、押やる心は此隙に、早う遁よと氣を揉むお咲、文治は夢かうてうてん、衣桁の内を出つ入つ、コレナア何をぐず〱と、コレ狼狽る所じやないと、此方をおさへて圍の内、夫と知する詞の裏、悟る八十七こお放す、襖はつたり駈出すを、倶にと縋るお松が袂、衣桁の影より母親が、とゞむる隙に八十七は後を見捨て駈り行く、すれ違ふたる旅戻り、主の山田幸之進、奴が挑提先に立、つゝと通ればお松は愕り、ヤヽ父様がと氣もそゞろ、狼狽闇ふ衣桁の後、父に見せじと身をわせれば、合點の行ぬ娘が素振、と思へど態と心を鎮め、ヲヽ娘無事にゐつたか、アイ、悪い所へよう御無事で、お目出度ござんすと、云もおど〱顫ひ聲、

高、夫お咲殿、園の内を御覽なされ、ムヽ園の内が何としましてござんすへ、ハテこま言いはずと見られいと、突飛されて襖の透間、そつと覗いて見て惕り、是はとばかり胸騒ぎ、身も顫るゝばかりなり、はゝさうであろ〳〵、コレお咲殿、慥に乾度預たと、行んとするを引留め、イヤコレ申、氣色を變てこりや何處へ、ハテ知た事、矢島源治郎へ拙者が一分立て參る、サヽ夫に付てどうぞお前を、ムヽ頼みたいと云事か、アイ、サ云事あらばたつた一口、サア承はらうと座に直れば、一間の方を打詠め、涙ながらに手を支へ、お前樣も御存じの通り、なさぬ娘の義理ある中、殊に夫の留守といひ、子供〳〵と思ひの外、ひよんな事を仕出したなア、何と浮目が見られうと、歎き口說は、アイヤコレ涙どころじやござらぬ、こなたが娘に義理があれば、おれも媒の義理がある、大それた事を仕出した、娘を恨みさつしやれと、空嘯いたるいがみ面、サア其遁れぬ落度も、情といふ理を付て、お頼み申も爰の事、云號の源治郎殿も、去年の春の江戸詰から、吉原通ひの身持放埓と、私も聞ば娘も聞く、見ぬ戀の愛想盡し、悋氣からではあるまいかと、思ふは親の身贔負な了簡、幸ひ外に人もなし、お前の心で濟せば濟こと、ナ申、マアノこはい顏はいなと、脊中をとんとたゝかれて、力んだ五體もぐにや〳〵〳〵、ムヽ成程、源治郎も身持が惡さに、一家中から意見して、夫故急ぐお娘の婚禮、イヤもう若い時は誰しもある事、拙者とてもそこやらの人に、ヱヽ世には難面心もあるもの、人のつらさに添

しか晩方御ざんすか、ハア、イヤ其若旦那が、御用がある迚最前御使、晩の船に乘ますれば、少しの間待て居て、お目に掛つて歸りましよと、云に此方は立上り、其通り若旦那へ申ませうと入お絲、彌兵衞荷持を勝手へ廻し、次の間へこそ入にけれ、上下大小さはやかに、立出る此家の秘藏息子矢嶋源治郎、後に續いて母親は、腰板肩衣ためつすがめ、大切な此代參、隨分麁相のないやうに、無事に勤て早う戻りや、アヽ大小はかうとうながよからうに、扇はあるか鼻紙は、印籠に藥もあるかや、ハイ何も揃て持ましてござります、サヽもうお入なされませ、ヲヽ供廻りが揃ふたら早う〳〵、と心を付る氣扱ひ、嫁詮索の頃迄も、子供のやうに思ふのは、何れ世界の親心、惠も深き奥の間の、襖引立入にけり、源治郎は何氣もなく庭へ、折から息せきと來るは吉原揚屋の亭主、ヲツト源治郎樣はづすまいと、思ひがけなき乙聲に、ヤア源助何として、ヤ何としてとは、コレ〳〵源治郎樣、揚代殘り三十兩請取に參りました、サア其事に付てわしも江戸へ、アヽ置しやりませ、相方の太夫樣が段々の斷り故、一昨日迄は待て居たれど、音のさなりもせぬ故に、夕邊の船に飛乘て、下總さん界來たからは、親旦那のお目に掛り、三ツかなわで埒明る、サア〳〵奥へと手を取ば、アコレそりや胴慾じや源助、親父に云ては頓と仕舞、何卒頼むと理りを、云ても聞ず無理無體、砂を引づる大小の、鐺詰りし風情なり、始終聞居る前代屋、怺へ兼て引放せば、ムヽコリヤ見知ぬ親仁樣、引わけてどうさつす、ヤコレ

ハレ呑込ぬ、そちが身振なせ顫ふ、シテ女房はいづくにと、父が詞に猶うろ〳〵、アイ是は私が嫁入衣裳の、母樣は愛にではござんせぬと、云つゝ灯火吹消せば、彌不審立寄て、娘を取て引退る、拍子にばつたり倒たる衣桁、もう是迄と逃出す二人、曲者やらぬと幸之進、長押の鎗をおつ取て、向ふ目先は眞闇り、家來が心得差出す提灯、樣子窺ふ忠太夫、提灯はつしと抜打に、跡をも見ずして三重

中之卷　矢嶋屋輔の段

積善の家には必ず餘慶ありとかや、千葉殿の物頭矢嶋源左衞門が一搆、折目高なる暮しとは、見かけに見えて狂ひなき、時計の響きりん〳〵と、行儀正しき居なりなり、時々手づゝおとしを相手取、年に幾度行通ひ、家中一ぱい常得意、手廣う商ふ吳服屋は、花のお江戸に隱れなき、前代屋の彌兵衞迚、金持ながらしわんぼの、柿の小紋の羽織さへ、慶長時代短きを、常に着馴し得意の門、荷持の男を近く呼寄せ、是が此家中のお物頭、矢嶋源左衞門樣のお屋敷、掛取の時忘れなと、云つゝ通る勝手口、ヤコレハ賄のお磯殿、前代屋の彌兵衞でござります、今晩船に乗なさする御用はござりませんか、お尋ねなされて下さりませ、ヲゝようこそ〳〵、御用もあらうけれど、今日は若旦那樣殿樣の御名代に、千葉明神樣へ御代參、其拵へで奥樣はお取込、何

天窓の禿た親仁めが申てと慮外ながら聞譯て、以後お嗜みなされませ、アヽ御發明な若子様じや、サヽ御合點が參りましたか、申し〳〵と、和かに、人馴れ子馴れ肌馴れし、眞綿意見と見えにけり、しん身の意見に源治郎、差俯いてゐたりしが、アヽさうじや誤つた、おつたら金銀遣ひ捨、冥加の程が恐ろしい、モウ〳〵縦令殿から吉原へ、御上使仰付られても辭退申し、足踏もせまいはいの、金打して見せうか、アイヤ金打には及びませぬ、御得心さへ參りますれば、モ夫程嬉しい事はござりませぬ、もうお出なされませと、イヤ申し必ず〳〵今のお詞お忘れなされますなへ、アヽしたが余りさつきやくな御得心、どうやら可疑な金打じやと、上布見分る呉服屋の、目利に逢て繕ひし、色を違へて出てゆく、彌兵衛は跡を打詠め、アヽ親御様の類の稀ではあるはいと、我身の上に引當て、思ひやり戸や子を思ふ、鶴の襖を押開き、主矢嶋源左衛門、妻諸共に立出れば、ハアヽ是は〳〵御兩所様、私も今晩出船致しまする故、お暇乞に參りました、隨分と御機嫌よく、ホヲヽ然らば今晩出船召るか、夫奥云付た餞別をと、夫の詞にさし心得、手づから渡す帛紗物、はつとばかりに押戴き、内は何とも白紙に包みし重み、扨は最前源治郎殿へ、取替た金返禮、と思ふや否や庭先の、泉水へ打込でお暇申すと立出る、コレ待や〳〵と奥方おし留、連合源左衛門志の餞別、何でこなたは泉水へ、イヤ御志は戴きましたが、奥様、町人でござれども、此親父は男でござります、二十年來商ひの冥加、お泉水へ、ア

小判で面をはつて置て、云事あらばいはんせいの、ヲヽはりかねも云かねもせぬはい、マア氣を鎮めて下に居やと、懐より財布取出し、耳讀み揃へる三十兩、揚屋ぎよつと呆れ顔、嬉しい半分、半分は小うなつて蹲る、サアさつぱりと相濟だ、請取しやれと紙矢立、取添渡せば源助が、さら〳〵と書認め、ハヽ有難や恭なや、ヤ申し〳〵是に懲ずと若旦那、近々の内又お出、雛鶴樣仕舞て置ませうぞ、金懐に押込で、勇進んで立返る、エヽ五月蠅や〳〵、其雛鶴とやら鍋づるとやら、向後よしになされませと、云ど耳にも入ぬ若氣、うはの空なる源治郎、アノ幸之進殿の娘お松に云號あれども、屋敷者はしんから底から見るも嫌ひ、どうも思ひ切れぬは太夫が事、部屋住の悲さに、揚代の滯り手詰となつて嚴い催促、そなたを呼にやつたのも、有樣は金の無心、用立てたもつて嬉しい〳〵と、手を支ゆれば、アコヽ申し悪性金拂ふて貰ふたが、お前は夫程お嬉しうござりますか、アせめて其十分一親御の事を思はしやりませ、私もお前樣のやうな年輩な悴めがござります、モお江戸の事なりや、少々の附合はありうちなれど、格別な身持しおろかぞ、此樣に他國商ひ致すにも、連て歩行親心、町人と侍とはかはれど、子の不便さは源左衛門樣も私も同じ事、金子を御用立ましたも、皆我身につまされて、アヽおいとしやと思ふのはお前樣じやない、親御のお心根、篤りと聞分て身持をお直しなされませ、斯申す私もやつぱり悴が不便さから、子を持ねば親の恩は知ませぬ、ヤコレよいお子じや〳〵、

はゝと、身すぼらしげに手を支へ、御聞もあるべければ、分て申上るに及ばぬ時宜、随分御勇健に、モウ御發足か、殿よりお暇遣はざるゝ御上意の旨あつて、只今お招き申所、其元より御出は御丁寧、扨々昨日御歸宅の旅脚袢、解や解ずに又旅立の御心底、ハレ御笑止千万、御推量下さりませう、家來が灯提切て落し、不義の相人を庇護遁せし方人の侍、よつく面存あれ共、夫は些細の事、めざす敵に廻り逢、四ッに致し罷り歸らば御前宜しう、何が扨お氣遣あられなど、挨拶立派に云合ど、目の内潤むばかりなり、忠太夫大口開て嘲笑ひ、ハヽヽ、アヽ筋は首を顯すといふが、女房は吟味して持べいこと、幸之進御内證、元は賤い下郎育ち、親じやとある醫者の道伯とやらも、取親で實の親は、神奈川の魚賣じやとさ、人の口に戸が立られぬ、夫も搆はず御寵愛なさるゝ、ふん〳〵相手の御内證二ッにはなされうが、文治は滅多と二ッに仕にくい男、先御家中で三番と下らぬ力量、兵術は養眞流のひんぬき、達者にござる、戎侍の手際で、何として〳〵、ャ益ないことに隙取、源左殿お暇申上ませう、ござらうか御上使御苦勞、おさらばと、刀ぼつ込しづ〳〵と庭に下りければ、幸之進近くさし寄、ナニ忠太夫殿申し、只今は何とやら侍と御意なされた、今ゆつたのな、戎侍、トハ又なぜ、ハテ三とせ足立給はず、腰抜の異名さ、ハヽヽたとへ腰抜にもせよ、三年は過さぬ、髭首提げてお目にかけう、イヤ見事、口では提らるれど、本のことになつてはと、云樣胸ぐらしつかと取、コリヤ何とな

イヤ金魚をば放しましたのでござりますと、惡性金を子に貸て取ぬも一匹、戻すも一匹、金魚銀魚の武士町人、別れてこそは立歸る、源左衞門後見送り、何と奧、ア彌兵衞と云者は中々實義ある男、八十七といふ子を持し故、思ひ遣ての計ひと見えた、そこを見込で賴みかけた悴め根性、ア合點がゆかぬはいの、サイナあれじやに依て片時も早う、嫁を迎へ大人う、身持をさせたうござります、したが里通ひを止るといふ、金打をしましたぞへ、アレまだ其樣なことをおいやる、アヽ一人の悴を埒もない者にかなしやる、全體そなたが甘口など、苦々しげに澁口の、舌も引ぬに茶の間のお磯、表より走り入、只今是へ忠太夫樣がお出でござります、何忠太夫殿、是へ通しませい、ヤコレ女房奧へ、とすゝめ遣り、座席改め待居たる、程なくのさ〳〵のけ反て入來る、堀川忠太夫殿よりの御上意あれば、上座致すと横柄らしく打通る、是は〳〵御苦勞千萬、ソレ上下を持早く〳〵、イヤ〳〵、御內用なれば其儘、扨別儀でござない、其元組下山田幸之進、いかい痴漢もの女房を盜まれたとな、ホヲ、驚かしやるは御尤、御子息源治郎殿と、幸之進娘お松と、お云號があるとやら、虛氣者と御緣家におなりなされ、イヤこれ〳〵忠太夫殿、其元には嫁入の詮議にお出か、徒口利ずと御上意は、何とでござると一本さゝれ、ハヽア誠に、イヤ幸之進にはお暇が出ました、此儀呼寄て仰付られいとの儀、ハツ畏り奉つる、ソレ若黨の誰來よと、いふ內に、早案內させ入來る、山田幸之進、時の不肖に藍ざめの、麻上下もし

砕うか、マア一寸出來合が此位、もそつと念入ると、ソレ其腕をぽつきと打折、危い敵討せうより、覺えてござる小細工でもして、町人になり身命を繋ぐが至い了簡、ナア中源左殿左樣ではござりませぬか、いかにも〳〵、イヤハヤ御手練驚き入た仕合、幸之進未熟々々、お手がはれぬと座なりの挨拶、折から來る堀川が歩中間、旦那、殿より急なお召と、いふに驚き又御用か、扨々出頭も是に困る、御亭主お暇申ます、幸之進隨分返り討にお逢なされと、家來引連立歸る、事を好まぬ幸之進、胸おし撫て居たりしが、法外なる雑言堪へかね、傍待と駈出す、アヽ是暫くナゼお留なさる、イヤてや待れよ、めざす敵に廻り逢たい、些細な事にからかはぬと云ぬさつたは空言か、イヤサ夫は夫余りしい悪言、無念や木太刀の折たるは、ヲそれこそは身共がはからひ、刀目ある本刀をひきはだに入、折るやうに仕掛しは其元へ寸志の餞別、アノ忠太夫とつて文治へ内通の悪者、態とこなたを緩慢く見せ、敵に油斷をさせる計畧、御合點が參りましなと、流石大家の物頭情に厚きひきはだに、包みし木太刀の折たるお禮、なまなか詞に盡されず、御志にあまへるやうなれど、願上たき事ありと、次の小庭に舁入れし、駕籠より呼出す娘のお松、うい〳〵しくも心置、霜に痛める其風情、其落着はいかゞぞと、裏門より八十七が、柴戸の此方に忍び足、我を見返る所存なら、思案は胸にあり廣の、氣短き物一本さめ、籬の本に松が安否を窺ひ居る、幸之進手を支へ、杖柱とする拙者めは、行衛定めぬ旅の空、多

さるゝ、イヤサ文治がまづ斯せば、ヲヽ斯致すともぎ放す、そこを拂う眼潰しにぶちかけた、から參つてかうすると、忠太夫が腕先手切もせよとぐつと捻上げ、片手に首筋ひつ摑み、一引ひき寄せ投付れば、飛石に腰したゞか打、おいたゝゝゝ、コリャ手ひどい目に合せたな、ムウ〳〵こな男些と小角力捻つたやら、そんな事じやいかぬ、スハ敵に出合やつといふて團扇を入、どつこいさがりなんどゝ組合、餅ちぎる樣に手先で首に取れぬ、そこでは眞劍、其眞劍といふ物は又むつかしいと、云々近く歩行より、騙し討に打かくる、身を沈んでかい潛り、二の手に來る太刀の、物打丁ど鍔とめに、しつかと受れば源左衞門、ヤレ暫くと聲を掛け、忠太夫殿物に狂ふか、御用ある身が刄傷に及ぶはなんと〳〵、サ物でござる、是も彼文治にお出會の節、先づ斯せば如何なさると申すこと、ハレ御懇切なお指圖、然らば是に木刀あり、序にもそつと指南して、進せられてよからうと、ひきはだかけし木太刀取出し、二人に渡せば拔身は鞘に納れ共、納り難き此塲の時宜、なま智惠な事仕出して、毛を吹き疵を求めうかと、忠太夫が物怪顏、幸之進は本望の、門出の手始腕堅め、身を固めてぞ立向ふ、此方は一途に氣を苛ち、聲を掛けてはつしと打、身を開いて丁ど請け、位を取て附廻し、退は附入る互の目星、散ば打んと躊躇うち、解いて込手請留る、木太刀は中よりはつくと折、たじろぐ所を忠太夫、入込でりう〳〵、疊みかけてなぐり据ゑ、イヤ應へつらう幸之進、まだびくつき召るか、素首微塵に

すは愚痴なれど、足手纏ひはいかばかり、せめてお長屋の端になり共、目を眠つてござつて下されまいか、コレ申し御内室、お執成頼み上ると餘義なき詞、何思ひけん源左衛門、娘を伴ひて庭に下り、いか樣にも、息女を連られ長旅も嘸面倒、御思案を極められたらば、拙者同然の方へ、お預け申て進ぜうか、何が扨此上は、いかやうともお指圖次第、然らば心安かるべし、ヤイ〳〵柴戸の外にをるは新參の中間三平めであらうかなど、云かけられて只ハツ〳〵とばかりにて、狼狽遁れば、コリヤ〳〵、用事がある、夫にをつてよつく聞け、江戸芝三田の前代屋彌兵衛方へ參り、口上には、日外悴源次郎へ、取替の金子の替り、此方にいらぬ代物其方へ預ると、ナソレ、そち迄送つてゐて慥に渡せ、と娘を外へ跡びつしやり、ヤア八十七樣かと抱付其口啣へて、ナアイ〳〵〳〵、內證の戀始て知る、幸之進も奥方も、いつそ心は安堵の思ひ、源左衛門は最前に、我子の難儀を救はれし、恩返しとぞ知れたり、幸之進胸打晴、扨は彼に娘を添せ、緣を切計ひと、察しやつて差たりし、刀取出し是こそこなたのお差料、拙者所望致せし故、此度一家の因とて、下されし備前長光、御返辨申まする、ムヽ夫では其元お腰が明て、イヤ畜生者の血をあやすは、此脇差一腰、刀は是非ともお預り下されよと、差出す心は納約の印、へんがへの心ぞと、請取心に差別あり、出ゆく父は義理のある、母をうたての旅の空、我身も科はありながら、恩と情に赦されし、二世の契りの二人連、一世の親は生死の、境も知

年の竹輩凶に臨んで反、一門迚も頼もしからず、云號申せしこそ幸、かてゝ加へたる事ながら、婚禮取結びたし、御承引下さるべしやといへ共更に返答なく、手を拱いて默然たり。主の心は知ねども、此場のしほと奥方立出、ヤレ〳〵いとしやお松女郎、かゝる事出こずば、今日この頃は嫁よ舅と、めでたい盡し云並べうに、不慮な事の出來たのは、初からなき縁か、但しよかれあしかれ、形の付た上で首尾ならば又有縁か、其時にこそ嫁よ娘よ、ナウお松殿さうじやぞやと、打混じいひかけられ、否ともいはれぬ親の手前、應と云てはいひかはせし、男へ立ぬ起請の罸。おぼこな氣から恐ろしく、兎角隙取ぐず付ば、八十七は延上り、返事次第と氣を苛つ。斯とも松は、しらはの剃刀振りの袂に隱し持、思ひがけない事で、とゝ樣の御苦勞なさるゝさなか、いかに約束なれば迚、千秋万歲めでたいと、いふてよかろかわるかろか、私しやどうなとお指圖に、任せまするでござりますと、云事はいひながら、返事に依て剃刀に。覺悟極めし心なり、生得敏き源左衞門、松が顏色形ふりに、心の内を屹度悟り、此難儀出來ざる其前よりの云號けなれ共、現在母は、女たる道を失ふ其娘、いかにしても世間濟ず、去ながら科なき者、嫁に嫌ふではなし、是非手前にくれうと思召ならば、不義の母が首を土產、松に持せて遣はされ、ハア御尤、然らば不義者が首を土產に、御婚禮、とな、おんでもないこと、さもなくては嫁には勿論、預る事も罷ならぬ。で御ざりますな、ハッア間にはつと入られぬ御中言、押返し申

戯程思議、と押開けば、中には包みし石一つ、外に子細はなかりけり、ムヽ合點がいたはいの、是は咄しに聞及んだ鐵を吸ふ磁石であろ、隨分大事に仕舞ふて置け、と云捨勝手へ入にけり、折から表へてんふらや、買喰の借取にくる、顏をちらりと宇太郎は、逢てはならぬと戸を引立、内より掛金引かけて、おいへの小隅に屈み居る、天麩羅屋は戸口により、まだ日も暮ぬに早い締やう、ヤ一寸明て貰ひましよ、爰な宇太郎に借て置た揚物代が一貫八百五十六文、親方へ斷つても、しやりむり今日は取て往ぬと、わめき散して打たゝけど、答なければハア留守か、イヤ待よ、留守なら外に錠おろす筈、扨は寢てかと戸をぐわた〳〵、是はしたり寢入ばなか音がせぬ、ヤコレ宇太郎殿約束の天麩羅の掛取に來た、明やれ〳〵と又ぐわた〳〵、叩く響にふし穴すつぱり、拔て落れば幸ひと内を覗て、ヤア〳〵あれ程内に居ながら、先刻から留守遣ふて掛おこさぬ横着者、サアさり〳〵明ぬかい〳〵、ヲヽこりやおれが誤り、又貴樣にも云分がある、そりや何で、ハテ人の門の戸不遠慮に叩くさへあるに、なぜ打毀した、イヤこりや節穴が拔けたのじや、夫も叩かねば拔けぬはい、コリヤおれが一番誤り、夫元のやうにして返しやと、云に思案し懷より、鼻紙取出し口で濡して穴へべたり、サアよいかどれ〳〵ヲヽよし〳〵、何と夫では内は見えまいの、いかな〳〵何にも見えぬ、ムヽ見えぬ、見えざやつぱりおりや留守じや、ハアヽこりや聞えた現屈じやはい、そんなら内からおれが見えるか、トレ

れぬ憂別れ、引別れてぞ出てゆく

神奈川の段

世を渡る、生麥村の磯端に、世帶も辛き營は、風もたまらぬ網引の、作治夫婦が詫住居、額に寄年の波、今年も立て極月の、空に雪もつ冬の日や、夫が留守をこて〳〵と、如在内儀のあくせくと、火箸片手に前垂がけ、ホンニ今日の日も餘程たけたに、親父殿の戻りの遲ひは、獵でも利たことであろと、云つゝ見やる表の方、白木の箱をぶら〳〵と、一際ぬけた宇太郎が、お上樣戻りやんしたと、お家に上るも、ちんからこヤイいつも〳〵云付るに辨當置たらなぜ戻らぬ、今度道草喰をると、旦那に告て仕方がある、此後屹度嗜みをれ、ドリヤ夕飯の拵へせうと、火箸取上げ立上れば、宇太郎は其儘つる〳〵〳〵、內儀の腰にひつたりと、吸付引付放れねば、呆れはてゝ突飛し、コリヤたわけめが何しをる、惡い戲言しをつたら、了簡せぬぞと突倒され、倒る拍子につる〳〵〳〵、五德鐵きう鐵火箸、身體へひた〳〵ついたるは、只蓑の虫の如くなり、女房は呆れ立寄て、コリヤまあどうした病じや、とおろ〳〵すれば、コレお家さん、どうした事やら此箱を、戻り道で拾ふたが最後、鐵物がべつた〳〵、身體中へ附ますする、中には何か入てある、ちやつと見て下されと、箱投出せばはら〳〵〳〵、鐵氣は落て元の身に、

なりながら遂に磁石と云物は、ヲヽ知ぬ筈〳〵、何事も神信心、おれ次第数へてやる、サア四郎作とづぶ六は鐵架火箸を手に持た、だに藏是へお出なされ、おれがする樣に十能を擔いだ、コレ皆の衆、此通りにして置て、只今是で吸よせる、是を磁石といふはいの、惣じや磁石の効能は、前で吸ば先が付、後で吸ば跡に付、吸んと思へば吸ひ、向そと思へば彼方向く、サア〳〵向ふの方へ走つた〳〵、ヲツト心得やつし〳〵、石を翳せば忽ちに、三間ばかり吸戻す、サアから側へ寄て置、此石を押廻せば、嫌ふてくるりとやつしつし〳〵、元の所へよろけゆく、三人透さず目くばせし、此利目を見る上は、此方へしてやり金設け、渡せ〳〵と罵しつたり、宇太郎から〳〵と打笑ひ、此石を取んとは百兩富の一番を、二朱で取に異らず、打てかゝるを任せど、透さず請たる件の磁石、かねけですくばる大の字なり、大手を廣げて口々に、子をところ〳〵との子が目ずき、きり〳〵渡せとかけ寄を、透さず磁石の一徳、嫌ふてくるりとどんぼう返り、又組付を氣轉の磁石、吸せてもおる横車、左り巴や右巴、磁石に付てくる〳〵〳〵、轉ぶ所をのしかゝり、得たりや樫の棒取のべ、邊次第に打のめせば、獵師共は手を合せ、アヽ是々宇太郎先生、モウ堪忍して下されと、吼面かはけば棒なげ捨、ムヽそんなら堪忍してくれう、向後おれが磁石をば取うとは云まいか、ヲヽ何の取うと云ませう、トレ往てこませと立上れど、打れたひゞきの疝氣にて、腰骨しびれアイタヽ顔見合て口々に、コレ〳〵宇太先生歩行

〳〵〳〵けもない事〳〵、ムヽ見えぬか、見えずばやつぱりおれも來ぬのじや、何と是で云分わるないがと、肝心の掛打忘れ、理屈くらべに勝た顏、はた〳〵悦び立歸る、女房は一間を立出て、ヤイ阿呆め、又しても〳〵性懲もない買食ひ、重ねてから嗜みをれと、叱る折から閙しげに歸る作治が門口から、嚊戻つたといふや否、網も手桶も打やつて、腰簑とりだ〳〵、やれ〳〵しんどや〳〵、足も腰もめり〳〵云、ヤ夫はさうと嚊もう聽て日も暮る、佛壇へ御明上ぎやいの、ヲヽ愛な人はつがもない、渡世とはいひながら、毎日〳〵殺生して、千燈万燈上た迚、何の如來がお請なされう、ハテさう思やるが大きな違ひ、佛師をするも獵師をするも、商賣して女夫の者が、今日を暮すのは皆如來樣のお影、シタガ佛のお力で叶はぬ物は、ヤ何でござる、サアアノヲヽ夫々、此頃のしけ續で、ざこが一匹上らぬと何か心に思ひ寢の、ヤはつとりと草臥たで、とろ〳〵と迎ひが來たと、横にころりと假寢の、既に物置女房が枕屏風を引廻し、其身は一間に入にけり、跡に宇太郎が一人笑、ムヽそんなら是が磁石とやらか、ドレも一遍吸して見よと、手に取上れば吸寄る、火箸に餘念なき折から、づぶ六を先に立、だに藏四郎作三人連、門口から聲高に、宇太郎殿は内にかい、最前聞ば何じややら、奇妙な物を拾ふたげな、見物しに參つたと高呼り、ヲヽ御大儀〳〵、大きにお世話お茶でも上れ、イヤ〳〵先刻の磁石の利目、一遍見て後でのこと、ヲヽ兎も角もと海端におり立ば、ノウ宇太郎殿、わしらが年に

なりながら遂に一磁石と云物は、ヲヽ知ぬ筈〳〵、何事も神信心、おれ次第徴へてやる、サア四郎作とづぶたは鐵架火箸を手に持た、だに藏是へお出なされ、おれがする樣に十能を擔いだ、コレ皆の衆、此通りにして置て、只今是で吸よせる、是を磁石といふはいの、惣じや磁石の効能は、前で吸ば先が付、後で吸ば跡に付、吸んと思へば吸ひ、向うと思へば彼方向く、サア〳〵向ふの方へ走つた〳〵、ヲットこ心得やつし〳〵、石を翳せば忽ちに、三間ばかり吸戻す、サアかう側へ寄て置、此石を押廻せば、嫌ふてくるりとやつしつし〳〵、元の所へよろけゆく、三人透さず目くばせし、此利目を見る上は、此方へしてやり金設け、渡せ〳〵と罵しつたり、宇太郎から〳〵と打笑ひ、此石を取んとは百兩富の一番を、二朱で取に異らず、打てかゝるを任せと、透さず請たる件の磁石、かねけですくばる大の字なり、大手を廣げて口々に、子をとろ〳〵との子が目ずき、きり〳〵渡せとかけ寄を、透さず磁石の一德、嫌ふてくるりとんぼう返り、又組付を氣轉の磁石、吸せてもおる横車、左り巴や右巴、磁石に付てくる〳〵〳〵、轉ぶ所をのしかゝり、得たりや樫の棒取のべ、邊り次第に打のめせば、獵師共は手を合せ、アヽ是々宇太郎先生、モウ堪忍して下されと、吼面かはけば棒なげ捨、ムヽそんなら堪忍してくれう、向後おれが磁石をば取うとは云まいか、ヲヽ何の取うと云ませう、トレ往てこまそと立上れど、打れたひゞきの疝氣にて、腰骨しびれアイタヽ顏見合て口々に、コレ〳〵宇太先生歩行

〳〵〳〵けもない事〳〵、ムヽ見えぬか、見えずばやつぱりおれも來ぬのじや、何と是で云分あるまいがな、肝心の掛打忘れ、理屈くらべに勝た顏、はた〳〵悦び立歸る、女房は一間を立出て、ヤイ阿呆め、又しても〳〵性懲もない買食ひ、重ねてから嗜みをれと、叱る折から聞しげに歸る作治が門口から、嚊戻つたといふや否、網も手桶も打やつて、腰簑とり〳〵、やれ〳〵しんどや〳〵、足も腰もめり〳〵云、ヤ夫はさうと嚊もう聽て日も暮る、佛壇へ御明上ぎやいの、ヲヽ愛な人はつがもない、渡世とはいひながら、毎日〳〵殺生して、千燈万燈上た迚、何の如來がお請なされう、ハテさう思やるが大きな違ひ、佛師をするも獵師をするも、商賣して女夫の者が、今日を暮すのは皆如來樣のお影、シタガ佛のお力で叶はぬ物は、ヤ何でござる、サアノヲヽ夫々、此頃のしけ續で、ざこが一匹上らぬと何か心に思ひ寢の、ヤはつとりと草臥たで、とろ〳〵と迎ひが來たと、横にころりと假寢の、既に物置女房が枕屛風を引廻し、其身は一間に入にけり、跡に宇太郎が一人笑、ムヽそんなら是が磁石とやらか、ドレも一遍吸して見よと、手に取上れば吸寄る、火箸に餘念なき折から、づぶ六を先に立、だに藏四郎作三人連、門口から聲高に、宇太郎殿は内にかい、最前聞ば何じややら、奇妙な物を拾ふたげな、見物しに參つたと高呼り、ヲヽ御大儀〳〵、大きにお世話お茶でも上れ、イヤ〳〵先刻の磁石の利目、一遍見て後でのこと、ヲヽ兎も角ももと海端におり立ば、ノウ宇太郎殿、わしらが年に

て來たぞ、ホンニさう云しやるので氣が付た、折々互に便は聞ども、身貧な親なりや遠慮して、こちからいかねばそちからもおじやらぬ筈、夫に今ほか〳〵と見えたは、モよく〳〵逢ねばならぬ用か、但氣遣なこつちやないか、ヲヽ嚊としたことが、けたゝましい物のいひ樣、わしが今來たのはな、マアあの何じやはいな、つひ些としたことがあつて、箱根へ湯治をするのじやはいな、ムヽ夫で爰へよりやつたのか、アイ、そんなら何の氣遣ない、イヤ嚊待や〳〵、湯治に往くは聞えたか、些としたことは何ぞ、ハテ親父殿役に立ぬ詞咎めさしやんな、そしてそなた一人じやあるまいの、定て連衆が、サアあるでもなし、ないでもなし、アイヤ其連は爰にをる、拙者でござると表より、ずつと通る佐久間文治、ハアお前がお連か、サアヽヽヽ見苦しけれど、マアお上りなされませと、母ははた〳〵親父は眉に皺を寄せ、コリヤ娘、何共合點が行ぬは、そちが夫幸之進殿には、江戸詰じやと聞たが、其留守の内誰が赦して湯治をする、アイヤ幸之進は拙者が朋輩、先月江戸より歸國ありしが、此度思ひ立夫婦連での入湯、則我等も同道致すところに、此お咲殿が一寸是へ立寄たいとあれ共、幸之進にはまだ外に連もあり、いつもの定宿へ參られしゆゑ、拙者が送つて來たのでござる、嚊聞やつたか、イカイお世話でないか、ハテ扨々、御苦勞にようこそ〳〵、ソレお煙草、コリヤ〳〵阿呆よお茶上げませい、サア〳〵寛と御休足、ハアヽ何ぞ御馳走が、アイヤコレ必ず心遣ひ無用でござる、づかひは致さ

れさうな工面はないか、拜む／＼／＼／＼はいのと手をすれば、夫程にいふ事なら、一番おれが才覺せう、此鐵物を一本づゝ、元の通りにかたげたり、おれは向ふで此磁石、吸せながら音頭を取、聲に續いて合點か、拍子にかゝつて吸てくりよ、わつさりとなぐりかけろ、何でもこつちの若い衆、ヨイ／＼、扨も不思議な磁石の石よ、ヨイ／＼、吸ていふてはこはくの塵よ、ヨイ／＼／＼／＼アリヤ／＼コリヤ／＼よいとな、是から早めてやつてくりよ、吸物に取ては、吸付煙草にねぶとの膏藥、思ひの付ざし座附の吸物、藪蚊にはゝづさすつぺらぽん、いきんでさはつてすつてこい、ヨイ／＼ヨイヤナ、吸れてこそは立歸る、黄昏時の道急ぎ、心あはざる二人連、人目忍べばおのづから、みすぼらしげに門の口、コレ文治樣、私が親里は爰、そこに待てと戶を明て、父樣、母樣内にかと、ずつと這入ば母親が、出合頭に見合す顏、ヲゝお咲か、是は／＼は珍らしや、是親仁殿、娘が來た起さしやれと、云に愕り、ヤゝゝ何じや娘か、ハアテ親仁殿、何をきよど／＼驚こつちやないはいの、ヤレ／＼久しやさお上りや、ホンニ何からいはふやら、正眞の貧乏隙なし、取紛れて此間は、道伯樣へ往かねば便も聞ず、内方にも變る事もないか、そなたも健康で居やつたか、アイ、私は達者でおりましたが、お前方お二人は、ヲゥそりや見る通りじや、嬶も俺も藥一服灸一ッすゑねど、も怪我にくつさめ一ッせず、ぴち／＼した魚取て賣や、よい錢も見れ共どうした事か、頓といでが上らぬはい、シテ先何と思ふ

參つた是非ともに申請て、手前が妻に致す程に、さう心得て下され、イヤ先お待なされませ、此隙ばかりが手ではなし、早速に進せませうとも申にくい、親仁が今にも戻られたら、アイヤ別に手前が申す、先こなたが得心すればことは濟と云物、イヤコレ〳〵嘩様、めつたに得心さしやんすなと、聲を掛て立出る、お咲か濟ぬ顔付に、母は揚はと口を閉ぢ、さし控ゆれば、是文治様、譯も知ぬ親達に、貰ふの貰はぬのと仰ることも何もかい、お志は憎うなけれど、所詮埒の明ぬことじや程に、さつぱりと思ひ切て下さんせ、ヤ何じや思ひ切、コレ其筈じやあるまいがの、イヤ其筈といふ約束はせぬはいな、是はしたり、そりやまあどうした云分じや、道々もコレ此顋のだるい程饒舌たり拜んだり、恥面捨て口説たりや、大方合點の口振であつたが、サア夫はな。只た二人の道すがら、若や無體なことでもあらうかと、氣にさからはぬ様にして、どうやらかうやら爰迄來たは、高がお前をまからばつかり、わしやじだらくな事は嫌ひ、アイ嫌でござんすいやじやはいな、ムヽツ、夫程に嫌なものを、國元でお松と八十七が不義の時、コレ衣桁の影におれを連て退たのは、サア夫もお松や八十七を何卒して遁さうばかり、皆お前を賺したのじや、堪忍して下さんせ〳〵、たとへ何程仰やつても、お前に添てもどうも立ぬ、よしないことに氣苦勞せずと、早う往で下さんせと、云捨てついと立、一間の内へ遁入ば、文治はくわつとせき上げて、シャツ女めよつく欺したなア、遁たとて遁さうか、生てはおかじと

ぬがせめてヲヽ夫よ、今朝の地引に何ぞわろ、噂膳立仕てをきや、おりや漁仲間の太郎助が所へ一走往て來うはい、ハテ夫こそ阿呆を、イヤ〳〵彼奴を遣ては埒明まい、直に彼地で料理して、持て戻るは目ふるまと、云もお客へ馳走風、こつちへまかせと桶ひつさげ、どつかは急ぎ出て行、後に母親心を付、嘸お草臥コリヤ阿呆よ、風呂が湧たら彼方をちやつと入ませ、イヤ拙者は脛の灸が痛む、お咲殿お入なされ、イヤ先づお前召ませいと、云ば阿呆がコレお咲樣、彼方はお脛が痛むと仰やる、灸のかぶれと年のゆかぬ嫁とは、へヽ湯がしゆんでたまらぬげな、強るに及ばぬちやつと〳〵ごんせと、引立てこそ入にけり、文治は母の側近く、さし寄て聲をひそめ、イヤ何お袋、物でござる、今われ〳〵が湯治と云たは、先つゝかけに委い樣子が話しにくさ、間に合の僞言、有樣は幸之進殿とお咲殿は離別しられた、ヱヽイそりや何として、サア氣の毒な事はこなた衆も知ての通り、彼繼子繼母の忌合から起て、あのゝ物のといしふしだん〳〵、云上つて詰る所は互に得心づくでの離別、さつぱりと緣が切ました、ドヲヽ驚は尤さりながら、幸之進と緣が切ても、お咲殿の身の片付は慥にあるから氣遣ない、ハアヽそりや又どなたへ、イヤ此文治が貰ひます、ムヽ自身にさう仰やればお前に違ひはあるまいが、娘は合點でござりますか、サアヽそこじやて、道々も段々いふたれば、私が合點した迚、親達が呑込ねばどうもならぬ、兎角二親次第じやと云るゝ故、こなた衆に直々に貰はん爲、同道して

ゝり付、最一度家捜しして見んと、又引返し走り入る、時こそあれ裏道より、につと根殻の生垣を、めつた／＼と切破る、ほくそ頭巾に大たらを、さし足抜足椽側づたい、そろり／＼と忍び込、姿見るより母親は、こは盗人と驚く内、火を吹消して押入を捜つて襖を明る音、南無三寶と母親が、あせれど口は猿轡、身もだえするを見向もせず、葛籠引出しさげて見て、しつかり重いはしてやつたと、打頷づいて引擔げ、明たる門の戸幸と、足早にこそ遁歸る、母は見る目も悲しさの、千々の思ひを胸にせく、涙やる瀬も泣居たる、文治は猶もせき立面色、心も空に飛で出、角なくまな／＼すのこ迄、捜せど見えぬはめんよう不思議、ホヽまだ見殘したは押入と、襖押明がさ／＼捜り、ヱヽ爰にもをらぬはい、聞えた、方々と尋る内、表へ遁たに極つた、遠くは失まい追駈て、ぶち放さんと込上る、胸はくら／＼黒紛れ、眞黒になつておつかけ行、道引違へうと／＼と、歸る作治が、コリヤどうじや、戸を明て内は暗黒、なぜ火が消たと勝手口、さぐり廻つて釜の下、點す附木に見て悔り、ヒヤコリヤ嚊が縛つてあると、轡も縄も引解けば、ヱヽ親仁殿遅かつた、最前の侍がお咲を殺すと追ひ廻す故、漸々葛籠へ隠したりや、どこへやつたと私を縛つて、サヽヽそりや阿呆めに皆聞た、シテ其侍はどこに居る、たつた今表へ出ました、ホヽ表へ夫聞て落付た、イヤ／＼親仁殿落付れぬことがあるはいのう、今のどさくさ紛れに盗人がはいつての、折角お咲を入て置た、葛籠を盗んでいんだはいの。

駈込を、コレ〳〵待てと母親が留るを振切り振拂ひ、又駈けゆけば駈寄て、帶に取付袂に縋り、詫ても留ても堪らぬがら腹、わた面倒なと突飛せば、ひよろ〳〵〳〵と打仰向、起上つて又しがみ付、腕を摑んで引廻し、投付はね付踏飛し、勢込で駈入ば、ハア〳〵〳〵と母親が、氣を揉みあはせれども、よはき身の、なやみ勞れて詮方も、涙にくれて居たりしが、ヤア〳〵アノ奥に足音は、追駈來るかと見る內に、お咲は廻つて勝手口、しどろになつて逃出れば、阿呆も續いて走り出。アレこはい〳〵〳〵とがた〳〵わな〳〵、コリヤ顫うて居る所じやない、押入明よと母親は、氣も張り葛籠引出して、コレ〳〵お咲、ちやつと這入や、といふ內にも、若や來るかとうろ〳〵きよろ〳〵、あつた蓋してしめくゝり、そこかけ阿呆と押入へ、元の如くに直し置、襖ひつしやり、コリヤ宇太郎よ、わりや太郎助の所へ往て、今の侍があばれると親仁殿を呼でこい、早う〳〵と氣をせけば、ヲツト心得太郎助が、所は磯端廻り道、直に打ば五六町、馬がなければ徒洗足、一文字に駈付んと、揉に揉だる足拍子、踏立〳〵急ぎゆく、勝手口より佐久間文治、蚤取眼に駈り出、母が胸倉ひつ摑み、お咲は裏へ拔たと思ひ、一遍搜せと目に掛らぬは、我隱れたに極つた、サア有樣にいへどつちへやつた、イヤ〳〵知ぬ爰へは出ぬ、ヤア知ぬとはそら〴〵しい、ぬかさにやかうじやをねぢ付て、柄に手をかけせちがへば、アレ人殺し〳〵と、云口押へて有合手拭猿轡、下緒はづして後手に、ぐつとしめ上げ、柱にしつかとく

かしこ、うと〳〵探し廻る、親の心の悲さは、どのやうにあらうと思ふ、おれも相應に物は書け共、女子は女子の手がよいと、アノ噂が世話にして、ちいさい時から教もすりや書もする、成人の後藥となひ中から物の本、買調のへて讀したは何の爲、不義徒は女の身の第一の戒と、何の本にもあることは、コレ此耳のすうなる程、聞たおれさへ忘りやせぬ、夫を見ながら讀ながら、ヨウ大それた事仕出たなア、遁れ隠れても天命なりや、終には捜出されて、死る其身の恥ばかりか、殘る親まで業さらし。末代人の口の端に、かゝる悲しき口惜さ、不孝者恩知ず、罰も報ひも思はぬかと、或は怒り或は歎き、身を顫はしせき入〳〵、むせ返れば母も悲しさ摺寄て、其方を嫁入す其時に、此時がいふたこと、よもや忘れはしやるまい、三界に家なしと、世に便ない女の身の上、縁定つて行からは、親の門さへ送り火焼て、再び返らぬ心なりや、天にも地にも夫程大切な物はない、睦じい上にも中よう諸白髪まで添果うと、思ふて大事にしてくれるが、親への孝行其身の冥加、取譯堅い武士の中、戯言にもじだらくな、話しも夫へ不禮ぞと、くれ〴〵いふたは爰のこと、誠更正氣な生れ付、ちいさい時から諸事萬事、物の置やう直しやう、裏つぎ一ツ當る迄、針目が微塵歪んでも、嫌ふた者が其樣な、大膽な氣になりやつたは、天魔の魅か前生の、因果か業か淺猿しやと、悲しさつらさ數々の、思ひにかきくれかき口說、泣より外のことぞなき、お咲はどから應答さへ、泣湿れたる顔を上げ、父樣母樣、

〳〵、アイヤ其や些とも氣遣しやんな、せいでならうか娘の難儀、こなたは可愛うないかいの、サア、、可愛によつて思ひ付た、其盜人はおれじやはいの、ヱ、イ夫は、サア阿呆めに樣子聞ほど氣遣さ、ほか〳〵と戻つてから、所詮こちとが手くさいで相手にならぬ侍、兎角お咲を內にさへ置ねばよいと思ふたから、犬嚇しの赤いはしまで借て、盜人になつて持出したと、話し半へ宇太郎が、葛籠脊負て立歸れば、親父は門の戶はたとしめ、コリヤ宇太郎よ、爰へ〳〵とおろさせて、疾や遲しと蓋を明、お咲を出せば母は落付、ヤレ〳〵嬉しや、親父殿才覺でどうやらかうやら命拾ふた、したがどうも合點がゆかぬは、幸之進殿と離別したが誠なら、一應屆がありさうな物、其上今の侍が詞の端々、いかにしても氣遣な、コリヤ樣子がなうて叶はぬ筈、コレ娘、隱さずといふて聞しや、聞て胸が休めたい、コレ嚊、そりや問に及ばぬ、おりや密夫して國を立退たはいの、ヤア、、夫をこなたはどうして知てじや、サア其樣子は、幸之進殿へ嫁らす時、取親に賴んだ道伯樣に此間聞た、がそなたに云たら持病の癪が起ろと思ふて、態と隱して居ながらも、どうで命はないものと、思へば不便さあるにもあられず、此間の網打は魚取ふ爲ではない、若や娘が死る共、古鄉戀しく此邊の、淵川へも身を投たか、但しは夫の手にかゝり切れた死骸が流れて來うかと、淺瀨に溜る塵芥、犬ゑのころの影見ても、娘が顏か骸かと、走寄てはかつき上げ、深みにおろす網の目に、魚がかゝれば子の爲と、直に放して爰

いくはいのと、云つゝ立て水盃の、茶杓に汲水よりも涙漲る胸の内、包めど目に洩り柄に傳ふ、雫を供にさし出し。サア〳〵親子一世の別れの盃、おれから一口、ソレ嚊、其方も呑でお咲にさしや、アイト泣々口添て、渡せば取て押戴き、父樣母樣、もう是が今生のお顏の見納。コレ嚊、娘が顏も身一生、も一度見やうと云事はならぬが、おれや目が痛んで明にくい。其方ばかりよう見ておきやと、後向いても脊いても、應へ兼たる顏と顏、三人一同に見合て、はつとばかりに伏沈む、折節表へ立歸り、樣子を立聞佐久間文治、門の戶蹴破り飛で入り、ホヽ斯わらうと思ふて戾つた、お咲らせう、と引立る、どつこいやらぬともぎ放せば、彼方此方へ追廻す、中に夫婦がかせになり。コリヤ〳〵此間に外へ出い、ちやつと〳〵と駈出るお咲、やらじと文治が飛かゝり、帶引つかめばしやらどけして、くる〳〵すつと引ぱるを、母が氣轉の出刄庖丁、すつぱり切れば內と外、一度に倒る其はづみ、作治が手の物網打に、ざんぶりいはせば網はれて、さしもの文治も網代の魚、立も立れず身をもがき、うごめく間に、ヤレ遁い、〳〵〳〵の聲に連、行方知らず三重

下之卷　前代屋の段

繁昌は、爰にとゞまる武藏野や、日本國が一所に、夜晝わかぬ閙しさ、前代屋彌兵衛が、賣弘

誤りました、堪忍して下さんせ、何をいふてもかへらぬ昔水の泡、消て行身と一筋に、わたしやとうから覺悟して居る、樣子は是にと懷より、一通取出し母親に、渡せばとつて押開けば、書置の事、ヤア扨は覺悟か死る氣か、樣子はどうじやと讀かゝれば、親仁もさし寄り、何とじや〳〵、コレ〳〵見さしやれ、是では不義とはいはれぬぞや、いかにも〳〵潔白な身の云譯、ソレ細々と書てあり、ハアヽ扨は繼子の義理を思ひ、お松が爲に身を捨て、不義者になつたなアヽホヽ夫でこそ我娘、出來した〳〵と、いひつゝ涙ぐみ出せば、母も常々知て居る、其方の氣質でそもやそも、不義徒はあるまいと、思ひながらも疑ふて、よしない恨こらへてたも、アヽ勿體ない事仰やる、私こそ苦に苦をかけ、不孝に不孝を重る身の、罪に沈むはいとはね共、歎をかけるが悲いと、しやくり上げ〳〵、喞ち歎けば二親は、誠を立る心根を、聞ほど不便さいおらしさ、顏をも上げず打伏て、身もうくばかり歎しが、やゝ有て作治目を拂ひ、コリヤお咲、娘お松が身の上の、難儀を救はんためばかり、身はけがさいでも淸淨でも、一旦文治と連立退たれば、不義の惡名は遁れぬ、生耻より死耻といへば、必ず未練と云れぬ樣、幸之進に出會たら、手にかゝつて潔ようした、アヽ命長きは耻多し、一昨年の大病で先へいたらよい物を、おりや生過たはいの、イヤこなたより病者な私が、生殘つて憂目を見聞は一生の物思ひ、此樣な悲しいことが、アヽ是々泣やんな、もう何云ても叶はぬこつちや、遲かれ疾かれ皆

二三日此方鳥目にて、お醫者樣へ參られました、息子八十七宿になります、お買物の御用なら手代衆へ、イヤ買物もしませうが、先彌兵衞殿に逢た上、歸らるゝにはまだ間もあらうか、イヤモ追付でござりませう、マアお這入なされてお待あそばせ、いか樣さう致さう、コリヤ供の者は旅宿へ歸り、後程迎ひと家來を戻し、內へ入のも侍の、奥と口との間に立、扨聞及んだより奇麗な店、嘸珍しい織出しもあるであろ、イヤモ閙しい商賣、奇麗なやうでもほこりだらけ、店先にはござられまい、一間へお出なされませ、成程物買の邪魔にもなろ、此方たの部屋でも借申さう、アイ幸ひの小座敷もござります、サアマアこちへと煙草盆、榮ゆる內は下女迄も心は羽二重紗綾縮緬、綸子やんすの茶屋よりも、繫しも能連てゆく、侍の身は取分て世の中の、義理にしがらむ幸之進、二人が所在こゝかしこ、尋ね盡して此家に、宿るも緣に繫れし、娘のお松八十七も、倶に一間を送り出、幸之進樣、今日はしめ〳〵とどうやら空も雪催う、先御休足なされませと、留るも義理の中に立、娘が心は汲ながら、色にも出さず、イヤコレ兩人、源左衞門は某より巨細の譯をよつく知て、此方に預て返したるは、源治郎と緣切て思ひ逢たる二人が中、添せてやる武士の情、サ夫と悟て某が、結納の印の刀をば、其場で直に戻せしは、約束へんがへしたる心、夫故御親父彌兵衞殿と相談の上、內祝言密に夕邊相濟だれば、必ず〳〵二人共、夫婦中よく添遂よ、某は不義者の二人がありか、手掛りあれば高輪の水茶屋迄、日の

めたる呉服店、巻物反物阿蘭陀もの、韃靼國の仕着まで、仕込む太物船廻し、冬年よりの算用を、春立日から棚卸し、僅十露盤一挺に、百萬兩をはぢき込、指は旦那の寶藏、爪より延る世帯なり、おも手代帳面留上、サア是からが藏の算用、切々のない代物、大方櫃で勘定しれる、ヤコレお今殿、旦那も追付お歸りであらう、祝ふて夕飯に柿鱠、ヲあの番頭殿のいはしやることはいの、今日は棚おろしの祝儀と六日年越の祝に、片鰭の付た燒物、アコレ其樣に奢て貰ふまい、今年の棚おろしは五百兩も延る筈が、漸四百兩はか延ぬ百兩心當が違ふた、其上久しいと預り物のお松樣、毎日の小買物、透油の洗粉のと、ヤヘちまの水まで買に走る、まだあるてや、此間からござつたお侍樣、アリヤお松樣の父御樣と見える、ござると其儘親旦那との相談で、急に息子殿とお松樣との祝言、そりや熨斗じや、昆布じやかち栗じやの、ひごずいきじやのとまででつもない買物、せめて此物入を喰物でなりと入合す、今年中の始末はじめ、夕食から七草も、かゆで仕舞やと呟いて、家に久しき白鼠、代物いれし藏のうち、棚捜しにぞ入にける、テモ扨もてぶい人、彼の樣な男持たらおとましや、常住お腹が晝さがり、と譏る日脚も八ツ前、表の方へしと〱と、乘物舁据ゑ戸を開き、出る姿は男とも、女とも見えはかぬ頭巾、まぶかになり形、羽織大小しず〱と、表口におり立て、前代屋彌兵衛殿とは此家とな、在宿ならば逢たしと、聞てお今は是は〱、定てあなたはお得意方でござりませう、親方彌兵衛は

ら、親でない子でないと、思ひ切たそなたの顔、無理とはさら〳〵思はねども、なさぬ中でも假初に、親子となつたは深い縁、顔見せたらば母様か、逢たかつたと取付て、義理にも泣てたもらうかし、思ふてわしは來たはいの、氣強い人と取縋り、恨涙の露雫、娘は猶も身を縮め、扨も〳〵世の中には、無理な事いふお人もある、ムヽ扨はこな樣氣違ひじやの、私が樣な娘に放れ、狂氣したのか但しは衒りか、コレそこにゐる男衆、此人早ういなして下され、衒りじやさうなヲヽこはい、振放して駈入る袂、そりや聞えぬと取付を、拂ふ振袖縫の糸、解てもつるゝばかりなり、樣子を傍に見て居る男、權平新八寄來い〳〵、女子の衒りがうせをつたと、呼出す聲に男供、どや〳〵と飛で出、何じや女子の衒りか、ふとい奴じや、此方かと荒氣なくもお咲が肩骨、摑んで門へ放り出し、世間に流行る女子の衒、重ねての懲しめと、蹴るやら踏やら撲くやら、のう悲しやと駈入るお松、お咲は長の旅づかれ痛みに痛み重なりて、かつぱと轉び絶々の、息も苦しき風情なり、門の物音何事と、表の方へ八十七か、思はず見合すお咲が顔、はつと驚き男共を、引退〳〵棒もぎ取り、此女中樣に過ちがあると、儕ら殘らず解死人じやが、親方に袴を着せるかべら坊めと、叱り付られそりや見よな、何をおのれが、我がとぬすり合、こそ〳〵〳〵と入にけり、八十七聽て抱起し、お松も倶に介抱し、内へ舁込み撫でさすり、名醫の丸藥散藥に、少し心の晴間にも、晴ぬは涙ばかりなり、何にも樣子白髮の親父、黄昏近く

暮ぬ中心せくと、云捨表へ立出る、是非なきものは侍の、親と親との中に立、二人は後を見送りて、しほ〳〵立て入にけり、消果る身は蜻蛉の今日あつて、明日なき身さへ世を忍ぶ、お咲は親の内よりも、身の置どころなく〳〵も、短き命捨端なき、知邊の軒は前代屋、門を覗ひて聲細め、頼みませう〳〵、庭まはりする下男、今日は棚おろしで、閙しうござります、お買物なら明日お出なされませ、イヤ左樣な者ではござりませぬ、是の内に千葉の御家中、山田幸之進殿の娘、お松といふがござるげな、どうぞ密に呼出して、ヲツトそりや安いと、つひ呼で上げませう、アレお松樣どれやれ女中が逢に見えたと、突拔やうな高聲も、アヽ氣の毒と暖簾の、小影に忍び身を隱す、わしに逢といふ人の名を聞てたもどなたじやへと、立出る娘のお松、蔭を見るよりわしじや〳〵、母のお咲と袖頭巾、取間も解しなつかしや、まめにおつたか嬉しやと、先立物は涙なり、ちやつと飛退と、お前は誰じや、何所のお人でござんすへ、世間には似た者もたんとある者、テモ麁相なお方ではあるはいなと、取てもつかぬ挨拶に、お咲はぎよつと、コレお松、そなたは私を見知ぬか、義理ある中の此母を、アイナ義理があらうがどうせうが、ほんぼにこな樣見知ぬはいな、私の母樣は三歳の年お果なされ、親といふのは父樣ばかり、外に親はござんせぬ、テモこはいお人であるはいのと、云放されて思はずも、わつとばかりに泣倒れ、暫し涙にくれけるが、ヲウさういやるも尤じや、不義をした徒者、犬畜生と思やるな

云た其時の私が胸の悲しさつらさ、常々からのいつくしみ、可愛がつて下さんした、御恩を何の忘れましよ、毎日〳〵神佛へ、命乞せぬ日迚もなく、お前に別れた其夜から、泣てばつかりをりましたと、いふも涙にかきくれて、わつとはかりに泣しづむ、八十七涙と諸共に、いかさま其時圍の内で、二人共に死だなら、今の思ひはござりますまい、お前を殺させのめ〳〵と、生ながらへて居られませうか、お松かねての云合せは爰、覺悟はよいかと懐の、剃刀取出す後から、待と聲かけ兩人が、持たる刄物引たくる、ヤア親仁殿かと愕りの、中にお咲が身の上の、隠し所にうろつくばかり、最前から門口で、様子は殘らず聞て居た、コリヤわいら二人が死だとて、あなたの惡名が拔るか、イヤサお命の替りになるか、いかに若いといふた迚、後先知らぬ阿呆ども、イヤヤ奥様、ア驚き入た御心底、なさぬ中の義理を立、何もかも身に引請、覺悟極めたお前のお心、聞て涙をこぼれました、併し夫程潔白なお身の上、死るともな些幸之進様へ、云譯してから死しやりませぬぞ、ガ申此親仁めが些存じよりの事われば、むざ〳〵とは殺させませぬ、必ず〳〵早まつて、犬死をなされますな、何事も私が、此胸にござります、屹度おかくまひ申ます、コリヤ二人共泣ともない、又死るともないぞ、おれが隠居へ連まして、お究屈にはわろけれど、押入の内へ入まして置、幸之進殿歸られても、齒ぶしへも出すな合點か、イヤ申親仁めが呑込でゐるからは、氣遣はござりませぬ、暫しの内の御辛抱と、無理に押

とつぱかは、入んとせしが內の體、是もお咲が顏見て徇り、樣子あらんと片かけに、身を密めてぞ窺ひ居る、內にはお咲が人心地、八十七殿かヱヽ忝なうござんす、お松殿は親でない、子でない物を何のマア、介抱請うやうがない、とはいふものゝそなたはなう、ヱヽ胴慾な人じやぞや、合力請にも衒にも、わしや此內へ來はしませぬ、願ひの通り八十七殿と、夫婦に成たがどうしたぞ、明日殺される今端まで、未來の土產は夫ばかり、そなたの氣には親でない、畜生じやとも思やろが、其畜生には誰がしたぞ、八十七殿と圍の內、忍び逢を文治が見付、聲山立る情けなさ、聟の源治郞へ聞えては、義理あるそなたの命がない、夫が悲いばツかりに、口留の衣桁の影、打惡い夫の歸り、是非なく文治と立退て、不義の惡名請しぞや、其譯しらずとせめてマア何處にどうしてゐることと、苦に疾でたもつたとて、まんざら罸も當るまい、そなた衆二人の事ばかり、憂身の中に案じられ、長い日足も短う覺え、暮れば今宵殺さるゝか、明れば今日が最期かと、思ふもはかないわしが身を、些とは不便と思ひやる心のないは胴慾と、口說たて〳〵、淚は春の雪解けや、軒端爭ふごとくなり、お松は身もよもあられぬ思ひ、しやくり上〳〵、アヽ母樣の勿體ない、何の私が畜生とも、人でなしとも思ひましよ、お前を討うと父樣が、此家にござるを御存じなく、針の莚か劒の中、一日なりともお命が、どうぞ助けて置ましたさ、義理ある大事の母樣を、親でない見た事もない、氣違ひじやの衒じやのと、氣強う

〳〵、さればさ、斯なり下つて來た時には、憎い奴は忰八十七、お松殿と不義徒、見付た文治は則ち仲人、源治郎殿を楯にとり、意地を戀路へ持込で、いや應いはさぬ色じかけ、なさぬ中の義理を思ひ、其場の難儀を紛らす手くだ、折節惡うこなた樣のお歸り、サヽヽ爰が奥樣の不仕合せ、ほんまと思はぬ不義に落ち、家出なされたお心根、實氣を思ひ廻しますれば、本に〳〵おいとしうて成ませぬ、何とマ情ない事になりゐたではござりませぬか、爰の所を聞譯て、奥樣のお命は、何卒此親仁めに、お預けなされて下さりませ、と貰ひ掛たる兀天窓、押付願ひは命の親仁、疊にひたいすり付る、いか樣貴殿の仰の通り、義理ある娘を庇護たる、彼が心を推量は致しをるなれ共、情なきは世の人口、又一家中の思はく、何事も皆因縁づく、御詞背くにあらぬ共、討放さねば武士道、アヽいや〳〵そりや貴方樣には似合ませぬ御詞、申さぬ迚も御存知ではござりませうが、士といふ文字は、表から見ても裏からみても、歪まずひづまず、廉直なるを以て侍とは申ませぬか、人の口の端、朋輩の手前とあつて、科ない人を手に掛けさつしやりましては、理非を分るお侍樣とは申されますまい、お氣には掛さつしやりまするな〳〵、まづ第一女敵討といふ物は、餘り譽た奴ではござりませぬ、よしんば向ふの相人二人、すつぱり仕留たになされませ、すつぱりとした赤耻を、世間へ觸わるく樣な物、又御一家となりますからは、いふべき事はいはぬは不義理、思ふ程のことは申ます、腹を立さつしやりますなへ

やる隱居の間、いなといはれぬいな舟の、二人は親の詞をば、せめて力の友綱や、引連奥へ這ると戻る、一足違ふ影さへも、傾く日脚幸之進、しづ〳〵歸る中戸口、夫と見るより是は〳〵彌兵衛殿、今朝より間違ふてお目にかゝらぬ、改め申に及ばねども、存寄ざる儀に付、此度のお世話の段、御禮は詞に盡されずと、半分聞さし、アヽ申し〳〵藥袋もない、何のお禮に及ぶ事、私も今朝程より叶はぬ用事で出ましたが、あなた樣にはどつちへお越、サレバ〳〵尋捜す兩人、彌兵衛殿お悦び下され、大方有家が知ました、エヽイヤサ敵の有家知れたる上は、此方に逗留も只今限り、只兎に角に娘が儀、偏に宜敷頼み存ずる、御暇乞やらお頼みやら、夫故に一寸罷歸る、兩人へもくれ〴〵、早おさらばと立上る、袖を控へて、アイヤ申し幸之進樣、此親仁があなた樣へ、些お願の筋がござります、御聞なされて下されませうかい、コレ〳〵改まつたお詞、箇樣にお世話に預る上、取分て娘が緣邊、スリヤ御互に深い一家、何か〳〵何なり共、御聞なされて下さりませうか、エヽ忝ないお願と申は別の事でもござりませぬ、今討にお出なされまする仇敵、侍たる女房に不義をしかける佐久間文治、此奴取ぞこなき人非人、成程見事にすつぱりと、御本望とげられませう、したが奥樣お咲樣のお命は、此彌兵衛が申請ました、ハイ左樣思つしやれて下されませ、と云に恟り、ハヱ替つたことのお頼み、其には樣子が、ござります共〳〵、御內室お咲樣の身の上に、微塵も不義はござりませぬ、トハ又なぜ

る筋もなければ、身に叶ひました事なれば、ハアゝ忝けなし〳〵、此家に庇護おかれし、女房お咲を今爰へ、お出しなされて下されい、ヤイヤサ庇護おかれたる事よく存じて罷りある、陳じる所でない、疾々お出し下されう、是は途方もない滅相なとをやり出したは、二人を尋る其元様を、お世話申此内へ、お咲様がかくまい置れませうか、微塵も覚はござりませぬと、けんもほろゝに云放す、詞の内に暮過て、物のあいろもわからぬ鳥目、八十七お松も此場の時宜、どうなることと持て出る、胸の行燈の落付ず、猶も様子を聞居たる、スリヤどのやうに申しても、御出しなされては下されぬじや迄、ハテしちくどい存じませぬぞ、ムウ左様に陳じめさるゝ上は、八十七と娘が縁を切、他人となつて家探し致す、コリヤ面白い、いか様ともお心次第、かくまはぬと申からは金輪奈落の底迄も、かくまひませぬ、又町人なれ共彌兵衛が内、家探しは捌置て、迂濶に奥へ踏込み召さると、脛骨ぶつて打折り、侍ともいはしませぬぞ、見事こなたが、いふにや及ぶと、詞も荒き一間の襖、明ては〳〵立出る、姿あへなや白垢に、浮世を急く死出立、片手には珠數片手には、我と手向の水樒、見るに二人は消入思ひ、心を冷し氣を冷す、覺悟極めし女房の躰、見るにさてこそと幸之進、ヲゝさうなくては叶はぬ所、よもや出すには居られまい、エゝどひつこいお侍、出さうも出すまいも、此方の内に此様な、不埒な君は居ませぬぞ、とつとといんで貰ひましよと、傍にありとも知ぬが親仁、ハアゝイヤ何彌兵衛殿、

〳〵、惣體又密男といふ奴は、女房ばかりがわるいのじやない、連添夫が皆惡いから、サヽヽなぜと仰りませ、平生からじだらくなといふか、惡性らしいといふか、不義を仕さうな女ならば、なぜ疾く去ては仕舞ませぬぞ、又さもなくおとなしい、實體さうな女が密男するは、コリヤ是亭主に何ぞたりがなうて致しますまい、妾狂ひで內をらつひ亂脈にするといふか、或は女郎買に身を打込み、夫々の家業を忘れ、晝夜外を家として居るといふか、女房をむごうするといふか、男の方に惡いことがなうて、今日養はるゝ女房がめつたに密男する者ではござりませぬ、お前樣の事ではござりませぬぞへ〳〵、譯の違ふた我々風情、町人の事なれども次手にお話申ます、此度の儀に付、お咲樣に不義のないことは明白、夫を押て人の口じやの、や朋輩の手前じやのと、名聞にかゝはつて、科もない命を取るは不仁、憚りながら、コリヤ些御了簡違ひかと存じます、と齒に衣きせず突かけ〳〵、無理な理屈も太物屋、義理に寄ては命でも、安賣仕兼ぬ江戸氣質、眞實見えて頼もしゝ、ムヽ成程一々理屈、左樣仰やれば幸之進、返答に當惑致す、併ながら最早上聞に達したる上は、扨はさうかと今更に、とゞまり難きは武士の身の上、スリヤどの樣に申ても、どうも此儀は、只管に御用捨に預りたし、ホイ、アレ〳〵今打は暮六の鐘、最早お暇申請る、勝手にござりませ、お暇申うけるからは、彌兵衛殿改めて其元へ、お頼み申子細がござる、お聞入下されうか、私がお頼みを、聞入て下されぬ其元樣、頼まれます

そりや其元の御勝手次第、先夫迄はお咲殿を、自らが預り飯る、此方の忰源治郎より、ハレお松へ遣はす離縁の狀、夫共に聞入なく、是非とも此場で討氣なら、其首直にお松に持せ、只今連て歸りませうか、と流石一國物頭の、妻の利發は浪風を、立ず此場を納る情け、彌兵衞親子よめお松、暇の狀を押いたゞき、忝涙いとゞなほ、お咲がつらき柵に、堰留られて今は早、死に死れぬ浮思ひ、奥樣何とも申ませぬ、忝ないと伏拜む、何のそれにと三寶の、飾が直によい島臺、尉と姥まで諸白髮、命穗長や海老の腰、嫁をゆづりは橙の、翫ら納る輪飾は、しめく丶りよき七五三、とんどの聲や悦びの、笑顔に勇む其折柄、荷持の男がすつた〱、中々幸之進樣、只今われにて佐久間文治と、半分聞よりつゝ立上り、シテ〱どつちへ、南の方、姿はいかに、上には合羽、下の着物は、紬の竪縞、頭は何と、長範頭巾、合點〱と幸之進、飛が如くに三重追てゆく

敵討の段

雪空や、星の光も影くらき、戀暮の闇に侍の、道を失ふ佐久間文治、お咲が行衞てゝかして、尋ねさまよひ赤羽の、橋の此方にさしかゝれば、向ふより來る提灯の、火影に見合す顏と顏、ヤア夫へ見えしは文治殿か、左いふは堀川忠太夫殿、是は〱珍しやと、互に近くさし寄て、

此程より心付ませぬが、其元にはこりや何となされたか、お眼でも惡うござるかな、イヤ眼も鼻もよう見えます、年は寄ても、此親仁十町先の辻札まで讀まする、そんなちやらくしたと云ずと、行なら早うござりませ、といふに扱はと氣の付鳥目、側に氣を採む八十七が、何にも知ずに親仁樣、ヱヽ知の知ぬのと、儕まで同じ樣に、ちよびく物をぬかしをるまい、默つておろと叱る親、こなたは不便と思へども、詞に出さぬ武士の意地、刀すらりと拔放す、のう悲しやと娘のお松、其手に縋りしがみ付、私を替りに殺してと、刄の下に身を突付け、歎けば道恩愛の、胸にみち來る不便の涙、腕もなまつて見えにけり、未練と心取直し、既に斯よと見えたる所へ、ヤレ聊爾あるな幸之進殿、お咲殿は殺されまい、と聲かけ出る以前の客、ヤア其元は源左衞門殿の御内證、是へはどうして何時の間にと、驚く此方に彌兵衞が悔り、はつと思へど見えぬ目に、いとゞ心を痛むるばかり、お梅の方はしづくと、眞中に押直り、日外手前の屋敷にて、是非娘を嫁らし度ば、不義の科ある母の首、持しておこせ心得たと、夫源左衞門ぞの契約、よもや忘れはなされまい、今お咲殿の首討と、其首を娘に持せ、此方の源治郎へ、嫁入さゝずばなるまいが、ア夫は、但持せてやる心か、サ其儀は、夫ではこゝらわたりに死人が大勢出來う、お咲殿を討さへせねば、五十年が百年、嫁入せいでも大事ない、道ならぬ不義をいひかけ、非義非道なる佐久間文治、殿にもかねぐお憎しみ、一家中への見せしめなれば、

砕いたる早業に、二人は血みどろ数ヶ所の手疵、血汐流れて赤羽の、橋も名にあふ川水も、朱に染なすばかりなり、難なく二人を切ふせ〳〵、のつかかつて留めの刀、心地よかりし其所へ、駈来る矢嶋親子、ホヲヽ南手柄でかされたり、お咲殿の身の上は某預り申べし、歸國の上の沙汰に及ばん、まづ〳〵目出度歸參をと、詞の花のかへり咲、爰にひらくや梅椿、八千代の春の末かけて、榮ゆく御代こそたのしけれ

いやのう文治殿、貴殿の流浪は尤とも思はるゝか、此忠太夫も其元の側杖、源左衛門めが口先で、殿の御前不首尾千萬、浪人して此身の上、貴殿に逢ふと心掛し、其甲斐あつて滿足せり、去ながら彼色めは何と致されたな、サレバ／＼お話し申すも面目ない、拙者を突出し物、生麥の親元から別れ／＼、イヤモ憎い女め、見付次第ぶち放さうと、此邊を徘徊致す、が先刻前代屋でちらりと見付たれ共、もしや彼幸之進めがをらうかと、氣味が惡さに見のがして置たれ共、助け置れぬ女め、ムヽ御尤／＼、併し幸之進めを恐れてのことならば、少しも氣遣御無用／＼、某先達て矢嶋が方にて、竹刀打に打て／＼打すえ申した、拙者が手にさへ足ぬ奴、まして先生の片腕にも、ヤ氣遣は少しもなし、前代屋へ踏込で、二人共にお仕留なされ、ヲヽ合點と身づくろひ、引返さんとする所へ、駈來る山田幸之進、夫と見るより聲をかけ、ヤア不義者の佐久間文治、上聞に達せし女敵、イザ來い勝負と拔放せば、忠太夫嘲笑ひ、ヤア助け置たる其脛骨、我手並を忘れしか、助太刀するに及ばぬ腰拔、文治殿の手にかゝり、早く地獄へつゝ走れと、らんかんに腰打かけ、嘲弄する間に佐久間文治、只一討と切付る、はつしと請て身をかはし、沈んで拂へば飛違へ、秘術を盡す兩人が、爰を先途と三重「切結ぶ、さして剛氣の佐久間文治、手練の山田に付込まれ、しどろになりたる左手の腕、はらりずんと切落せば、見て居る堀川、コリヤたまらぬと、拔合して切てかゝる、事ともせざる幸之進、飛鳥の如く飛廻り、手を

吉野靜人目千本

作者　松貫四
　　　吉田仲二

第一　發端　戀の若草

めでたや〳〵、春の始の春駒なんど、夢に見てさへよいとや申す、ドウ〳〵〳〵、春の廓の色競、ゆりかけ振かけ拔八もんじの打連揚屋入、揚屋の座敷に三日三夜、首尾の小宿に三日三夜、兩方合せて六日六夜、とめたるお客を戀とや申す、よいとや申す、トウ〳〵〳〵〳〵首尾よし中よし御器量よし、世の中よしや義經の、迎の太夫一樣に、若やぐ遊び春駒に、所體繕ふ頬かぶり、はすはと伊達と諸手綱、しめて逢夜の床の海、戀風誘ふ濱荻に、心浮島うき〳〵と、春の野づらの薄霞、東寺の塔の遠からぬ、步行路ひらうて車道、二條大宮玉ぼこの、道にうら〳〵陽炎の、燃る思ひもかうばしき、草踏分て御大將源の九郎義經公、戀故窶す大黑舞、靜ごぜんは三味線に、牽頭の茶藏がふ文作、七福神を先に立て、ふく大黑がござつた、女子好な大黑、一に色は染安く、二に憎らしい仇し事、三に酒が見事にて、四ッ夜晝呑續、五ッいつもの口舌

袩重血紅跂 終

路次の狼藉憚り有、茶藏廓へ、お供申せ、我々は又お跡よりと、聞て二人の濱萩浮島、待やこがれたお二人さま、早うお出を目でしらせ、靜義經先に立、嶋原さして下はりませ〳〵、ヤア非人共かく東西の道を塞いで、コリヤどうするのじや、ヤアこなたは梶原平藏どのかシイ

第二　朱雀野の段

淮南子に曰、柳下惠飴を以て老を養ひ、盜跡飴を見て以て牡を粘すべし、善惡は只一つ、數團に數津八州、天の逆鉾のその滴り、象を顯はし體をなす、勇める男子孕る女子八咫の鏡に身を照らし、心を磨く倭女の、姿の櫻操の梅、色香あやどる春霞、靡隨ふ時津風、いで其頃は文治二年如月半、既に平家は西海の浪に沒し、源氏は榮る四夷八荒、其功空しく九郎義經、讒者の舌にかけまくも、腰越より追返され、無念を押へる親兄の、禮も智謀も著き、堀川御所窺んと、我意驕慢の梶原平三景時、鎌倉殿の覺目出度、諸士の別當に任じられ、左右の羽翼は、醒井兵太、犬間源藏、やつす形も乞骸非人、何かな見出す鵜の目鷹の目、餘寒を凌ぐ菰一重、評議一決あるべしと、各膝をくづしをる鎌倉の討手佐土坊昌俊一揖し、二股武士の備前守行家、引合すれば梶原平三寛々と打うなづき、誠に先達てより密書來往、御意得申すは始てなれど、昌俊どのと御入魂の事なれば、委細は申に及ばず、最前より様子物かげより窺ふ所、

事、六ッ無上にかはゆうて、七ッなんなく中直り、八重九重の閨の內、九本の柱は熊野の權現、十本の柱をば、ヤイ〳〵〳〵茶藏よ、大黒舞、萬歲とが一つに成て、所作のふりが附にくいと、氣をつけられてほんにのう、いつのまにやら萬歲の門違ひ、ごめん〳〵と尻込に、二人の君は待受て、義樣の所作事靜樣の三味線、氣疎い物と譽られて、顏は赤らむ朱雀野や、西日まばゆき酒機嫌、御機嫌よげに御大將、こちとらが所作よりも、濱主浮主が春駒は、ドウ〳〵どうもたまらぬ〳〵、ミウ〳〵やつちやと義經の、重き御諚に思ひ顏、うかぬ浮島濱萩太夫、逢たい見たい土州さん、行家さんも見へぬのは、夕邊の口舌が濟ぬのか、疑深い殿達か、どうした因果でこちやいとしうて、まだ納らぬこの癪と、二人の太夫は義經の、御手を取て懷へ、空焚匂ふ衣の香は、宵の身仕舞焚しめて、更て待夜の月の影、かつら男の惡性は、賤がふせ屋も隔なく、エヽ氣の多いとふり切靜、ソリヤ誰がアノおまへ樣がと打付に、いふが春野の雉子より、けんと色持恨顏、淚は落て若くさに、露や置らん道野邊の、雪氣の水の流の廓に、諷ふ小唄も春めきて、忍び逢夜はいはねど解し二重帶、其睦言の顏とかほ、にくてらし程かはゆさの、夫がつとめの誠の心、つらいは雞鐘うきにナサンサきぬぎぬ、逢は別れの其俤を、忘るゝ隙はない物を、我を忘れぬ戀衣、大盡風の長羽織、ヲヽイ〳〵と招き合、土佐坊昌俊、備前守行家、見え隱れの御供漸々に走り付、御大切に存ずるからは、お爲あしくは斗はじ、斯媚なる女連、

をなし、鎌倉殿へ忠臣を抽んで、適家を起さん心底と、詞の尾につく土佐坊昌俊、此度鎌倉殿より御不審の第一は、郷の君を簾中に備へ、平大納言と縁をくまれし條是第一、又いまだ平家の殘黨爰かしこに徘徊致すを、打すて置て酒宴遊興、いつれも動ぬ釘鎹、いひ開きは有まいと思ひの外、その身の隨弱も皆殘黨を詮議の方便と、ねつぶりといふ積り、只動かぬは郷の君を簾中に備へし科、是一條に義經の身の浮沈、又郷の君は義經が胤をやどして其身は懷胎、手強さ義經を引出し、跡へ廻つて孕女の郷の君、生捕るは袋の鼠と、聞て梶原笑壷に入り、ヤア／＼犬間醒井兼て徒黨の野伏り共、加茂桂の西川原、駈廻つて駈集めよ、急げやつと、下知に隨ひ兩人は、西と東へ別れ行、跡見送て兩人が、手筈極る其所へ、追々迎ひに廓風、禿仲居か赤前垂れ、日早き梶原空寢入り、土佐行家はそしらぬ顏、見るより仲居禿共、土州さんも行さんも、扨てもきついきさしませ樣、二人の太夫主大癇癪、お出の遲いは外心、愚痴の仕樣じやヲゝすかんと、裲びんと刎袴、顏は上氣の花紅葉、燭臺ちつて龍田川、吸物鉢の水くさい、惡性男にみだれ髮、亂かゝり、櫛笄、止盞の雫どんぶり鉢、座しきは持ぬ大じらけ、靜樣も義樣も、持餘しての追使、サアお出いなと引ぱられ、土佐行家はうぢ／＼もぢ／＼、梶原は心得て、ふいと起たる菰かぶり、立はだかつて下はりませに、恟りしたる女子共、氣味の惡さにいに心、どんな所に乞食づら、掃溜山へ來おつたら、海老の殼打つけてこまそゞやいのと打連て、皆々廓へ

まんまと義經は貴殿の手入にて、傾城に魂を奪はれしとな、重疊〳〵此上なしと、悦ぶ尾に付土佐坊昌俊、御覽の通り空氣の大將おだて上、折を見合せ只一討と存ずれども、何の角のと寸善尺魔、併一兩日は過されず討て取手筈、行家殿と計置、其妙計お聞有と、いふに行家しやゝり出、軍術さかしき九郎義經、手ぬるき事にては參るまじと、明晩某が館を廓と名を付け、坐敷の詰り〳〵に伏勢を置き、短兵急に討取思案、又梶原殿には、留主へ廻つて堀川御所、昌俊殿と夜討の手筈、方寸の內に有、旁用意あるべしと、詞を待ず末坐に扣へし、醒井犬間大口明て高笑ひ、ハヽヽヽヽ、口の明た儘の廣言、しるまいと思ふが、御兩所ながら一ツ穴ののら狐、濱萩とやら浮島とやらいふ太夫を、揚詰にして大騷ぎ、義經どのより御兩所の胸中がいぶかしいと、嘲弄すれは膝立直し、兩人が放埓は火を以て火をしめすと、二人の太夫を欺しこみ、義經討とる一ツの方便、倍臣の分として小賢き雜言、今一言ぬかして見よと、刀の柄に手をかくれは、兩人も進寄り、倍臣とて侮らるゝな、二ツなき武士の魂、お目にかけんと用意の竹杖、鯉口くつろげぎしみ寄、景時聲かけヤレ待兩人、某さへ口をつむぎて詞を待つ、理非は兎もあれ靜まれと、制しとゞめて、梶原平三兩人に打向ひ、驚入たる密計、去りながら、七人の子はなす共女に心を赦すなとやら、隨分ぬかり給ふなと、詞の下より備前守、我も清和の流れの末、義經とは從弟同士、いかに時代なれは迚、家來同然の今の身分、無念と思ふ心より、各〳〵と荷擔

思ひ出した、土佐が馴染の濱荻はどうしたい、亭主がふかまの浮島も、早う〳〵に禿共、あいの返事を引内に、通ふや風の神風や、濱荻浮島襠も、左へしやんと京風に、土佐と行家めい〳〵が、男のそばへ寄竹の、世はうきふしのならひかや、二人は俄にまじめがほ、靜ごぜんは見て取て、是は〳〵二人の御衆、自が前方廓の馴染迚、毎日〳〵此館への揚屋入り、夕邊の酒にわたりもせず、早い身じまひ、行家さまも土佐さまも、最前から待かねて、夫は〳〵機嫌がわるい、ちやつと直して上さんせと、いはれて二人が、是は近ごろ恐れ入る、何とせう昌俊、どうやら酒か裏に入た、我君さまも最前から、ねつから物も仰られぬ、これどうでも靜樣、夕邊のせりふが強過たか、但なんぞが過たじやないかと、しつぺい返しに義經公、おれはあの二人が、堅い顏して女郎買、どれ程延た鼻毛じやと、覗いて居たと戯れの、どつと笑ひにサア是から、奥で一献てん〳〵ちき、てれつく〳〵つゝてん〳〵、本粋の親玉御大盡がよねの諸譯に新造が、ヲゝサゝヲゝサゝ合點しやわい〳〵のわいとサ、皆々引つれ入給ふ、梅が香を、慕ふにあらで春のくる、東からげの在所女、田舍とみれど鶯の、京恥かしき艶姿、中門に立留り、爰はかはつた御法度で、男は内へは叶はぬと、表門でいふてじや故、連て來た男を待せ、一人爰まではきはきたが、義經樣への取次は、どういふてよからうと、案じ佇むこなたより、昌俊行家伴ひ出、あたり見まはし小聲になり、なんと昌俊老、いよ〳〵御頼の通り、義經は我家へ引

立歸る、三人顏を見合せて、扨々うるさき女原、一先我は嶋原へ、萬事は後刻梶原どの、ヲヽ此方にぬかりはない、もし仕損せは相圖の狼烟、夫を目當に乘入らん、龜井片岡伊勢駿河武藏を始め泡ふかせ、鄕の君は我手に入ん、いさめや方々諸共に、我につゞけと朱雀野の、草にも心置露や、忍ぶ人目の千本通、暫しは曇る三重　春の日や

第二　行家館の段

權によれば人是を妬み、富貴に充足する時は、鬼神災をなすとかや、西海四海の軍功を、花の都にかけまくも、禁裡の守護職等閑に、年中行事公事裁斷、今は誰にか東國の、下知をも待ず松か枝の、つらなる枝の禮義もなく、戀にぞ九郎義經の、御身の上ぞ危うけれ、殊にこの程備前の守行家の館にて、東登りの土佐坊諸共、長夜の宴にたわひなく、媚く館廓仕立の大騷ぎ、男といふては義經公、昌俊行家三人より、外に奈良づけ爪ざね顏、引舟かぶろが闇押へ、汲や流れの美濃白柿、熟柿になつて備前の守、何と土佐坊、此間上京召さつてから以來、此館に居續、靜御前の扇の手、舞つ諷ふつ此樣に、女ばかりの和ら事、何と鎌倉にはござるまいが、成程備州の仰の通り、都女郎の舞諷ひ、いやもう鎌倉耳には、廿五の菩薩の音樂聞やうで、腰から成佛有難いと、細目になれば義經公、逭坊主程わつて成佛とはやりをつた、ほんに其成佛で

無念の腹立涙ヱヽ聞えぬ靜殿こなた一人の心にて、天晴の大將も、現たわいと世上の口、殊に鎌倉の御不審には、平大納言の娘を娶たのが、三ヶ條の第一とや、ヶ程の大事を身に受けて、酒宴遊興に心を奪れる程の不覺人、ヱヽ見下果た義經公、よし是からは此通り、鎌倉へ注進して、靜諸共憂目を見せうか、いや〳〵、夫よりは當座の耻辱、奥へ踏込靜を殺し、義經さまと差違へ、倶に冥途の苦患を見んと、中門ぐつと錠押切り、駈け行氣相最前より、樣子見聞し土佐坊行家、立塞つてどこへ〳〵、我君をねらはんとはのぶとい女と立塞り、ムヽさういふはどなた樣じや、ヲヽ我こそは土佐坊昌俊、と聞もあへずぐつと詰かけ、鎌倉の嚴命を受ながら、酒興に溺るゝ土佐坊昌俊、鎌倉への手土產に先こなたからと、突かくる利腕取て、ヤ何行家殿、貴殿此女見知り有や、イヤ義經につき添てより今日迄、此女曾て存申さぬ、サアそこに一ツの思案有といふ中、仲居が申土佐樣、最前から召ますする、早う〳〵に引ずられ、行家が耳に口、何やら囁き〳〵て、奥御殿へと引れ行、行家傍り見廻して、こりや女、汝が今義經靜を恨むる性根、見屆けたる故一つの頼み、今宵此館を取卷き、義經を討取手筈なれ共、土佐坊某兩人の內、宿所へ歸れば跡の吟味氣遣しく、表門の人目も憚り、女なれば見咎める者も有まじ、汝是より土佐坊が旅宿、六條坊門油の小路へ馳行、夜討の用意致すべし、狼烟を上げなば早速押寄せよと傳へよかし、さすれば汝が恨有る判官靜も諸共と、半分聞て勇み立、心得ましたと身繕ひ、ヲヽ頼もし〳〵、しからば割符

込、づだい坊には仕果たが、兎角靜といふやつ、晝夜傍を離れねば、討んと思ふ時節も延々、この樣に酒ばかり飲でも居られず、是非今宵は首取て、鎌倉へ遣はす分別、どうぞよい仕樣は有まいかと、いふに昌俊されば〳〵、某迚も別に工夫もござらねど、とかく此上は館の四方を取卷せ、女共にいひつけ、酒の機嫌の折を見合せ、密に搔首にさせ、もし仕損ずる時は、彼取卷し伏勢を以つて討て取謀、夫故男禁制の趣向は、此昌俊が立申した、何といかゞ御ざらうと、咄しの中へ禿ども、申々お二人樣、我君樣の御尋、さゝの相手に女郎さん方は皆たわひ、ちやつと呼んでこいの仰、遲けりや又判官さまの疳癪でござんすと、行をこなたに控へし女、申々と呼びとゞめ、私は遠方からさんした者、お慮外ながら判官樣に、御目にかゝりたうございます、御逢なされて下さりませと、お取次頼ますと、いふに禿が目をつけて、見りや美しい女中樣、我君樣に逢たいとは、大かた色事で有う物、靜樣のいひつけで、譬どの樣な事でも、外の女中に逢す事はならぬとの云付、こつちも弓は引かたじや、その取次は成やせんと、びんしやんとして奥へ入、是々申と呼びとめても、かいも渚の捨小舟、思ひに胸と淡路島、通ふ禿を又呼かけ、申々おまへをどうぞ頼みます、判官樣に御取次と、いふを聞捨て、田舍娘がおはふといふ共、つん〳〵であしらへと、靜樣の云付、田舍から來て大膽な、都女中の殿御をば、寢取うとはマアこはいお方と、はしたなう、氣もませ垣の禿菊、花わしらひに行過る、跡には

様の、お前は討手で有うがな、さう委細を知る上は様子具さに、語つてサア聞さんせ、昔頃より鎌倉にて、梶原父子が頻の讒言、剰へ此度討手を登す條々、万一餘人に討手の大將仰付られ有時は、いたはしや義經ほどの名大將、梶原が舌の根にて御身を失ひ給はん悲しさ、某無理に討手を乞受け、罷り登りし其所存は、鎌倉の油斷を窺ひ、京都より逆寄して、頼朝梶原討込し、谷七郷の大小名、味方に付ば其通り、左なきに於ては一々討取り、義經公を征夷將軍と仰ん存念、折を見合せ此事を、申出さんも傍りの人目、迂濶にいひ出す事にもあらずと、今日迄延引せり、何と御身が詞を和らげ、御謀叛の萠有かないかうらどふて、若も其萠あらば證據をとつて我に見せよ、さすれば俱に事を計り太平を樂しまん、サア何と頼まれくれまいかと、心を明す土佐坊か、脇差すらりと扳放し、庭に折から咲匂ふ、白梅一枝はつしと切折、コレ御覽せ昌俊さま、梅は諸木の眞魁け、眞魁けて鎌倉の、花の兄上討取計略、御頼の一通取て居やんす、堅めの印と差出す花のかんばしさ、男子に増る心の早咲き、昌俊刀拔持て、ヲ、讒言の嘘八百、眞赤な紅梅は、生田の大手の二度のかけ、手柄を鼻にかけたりし、梶原諸共先此樣にと、こなたの紅梅丁と打たる手の内に、じつとしめたる妹背中、難波の事もあしからず、頼むは伊勢の濱荻太夫、戀は曲者物の名も、所によせて川竹の、張持されて土佐坊昌俊、奥と勝手へ別れ入る、早刻限も戌亥過、寢道具運ぶ奥座敷、肴核既に月影に、止盞盃ちり亂れ、燭臺の

の此一通、アイ合點とゆふ髪の、寄手に早う告の櫛、透さぬ行家奥の間へ、女は小褄取上げ髪、油の小路へ急き行、奥は端唄のしめやかに、肱を枕におや鶴よ、蟬の鳴音に尾花が招く、わしやいやいなと駒下駄の、音は幾瀬の浮名にひゞく、土佐が馴染の濱荻太夫、酒の機嫌の浮もせで、何か思ひの有顔に、手水遣ふてしめ直す、色も淺黄の引しごき、結び契の土佐坊昌俊、何と太夫主、いかに勤の習ひじや迚、都育の此肩、加茂川の水で洗ひ込んだを、我等が樣な、東夷に抱付れるは、嘸や嘸うるさからうとしなだれ寄る、此方も返事惜からで、東育のしやんとして、心の廣さ武藏野の、附合にもさういふて下さんすりや、私ら風情はいつそもう、どういふてよかろやらと、俯向く顔に昌俊が、心はたぎる鎌倉海道、通り者めイヤ愛な命取め、いつそ殺せと脊擲けば、女房に持て下んすか、ヲヽ身受して手に手を取り、東路さして道行所作事、したがこつちに計か物思はせ、影では間夫に藍染川、深い所へやるのじやないかや、何ぞ慥かな證據が見たい、といふて新しい仕樣もなし、古けれど起請かい、アヽどふ成と、夕時暮、紅葉の錦神々の、守り袋を明烏、熊野の牛王を取出し、摺住吉の神かけて、かはるまいぞも有ふれし、文言さら〱書認め、差添少し拔かけて、小指の先の六七分、土佐坊我身を切るゝ思ひ、ヲツトよし〱、サア是から我らが心中御覽に入ん、イヤわたしが望には、イヤモどう成と御意次第〱、サア、アノナアノナ、お前の心が明して欲い、とは何と、九郎判官義經

樣、最前寢間の睦言も、二つに割た密々事、義經の寐首をかき、鎌倉へ持參すれば、夫を功に此行家、差詰京都の守護となつて、へゝ一ぱいをして見せうと、いはしやんしたを忘れてか、こはいお方であるはいと、いはれてさしもの備前守、返す詞もなかりけり、負惜みの土佐坊昌俊、憎いは濱荻め、此頃深く云かはして、剰へ最前の起請は反古にする心か、神や佛の罰利生、こはくはないかと、いふもおかしく靜御前、夫か爰へ出る事か、起請誓紙は愚な事、指切爪切入黒痣も、君傾城の勤の習ひ、川竹の身は流次第、水臭いやうなれど、夫を證據にする樣な、野暮なおかたになんのマア、二世の堅がならうかと、重々嘲弄むくゝをにやし、起請取出し寸々に、引裂捨し土佐坊が、空誓文の因縁謂れ、花の都の神無月、誓文拂ひば浮れ女の、紋日の種となりにけり、モヲ是迄と駈行土佐坊、二人の女のがさじやらじと支るを、拂ふ太刀さき目先の稻妻、流石の土佐坊女業、辣む透間にかけ行を、いつく迄もと追て行、靜御前聲をかけ、ヤレ待て兩人、彼は賴朝公の御家人なれば、卒爾に疵を付るなと、我君樣の御諚ぞや、長追無用歸れかし、是程迄に兄親を、敬ひ給ふに引かへて、賴朝樣の御計ひ、恨めしさよと噂流、世に類なきうかれめの、是ぞ誠の涙なる、行家傍の香爐追取て、紅梅目當に投つくれば、兼て仕掛し合圖の狼烟、貝鐘太鼓打立吹立、寄る寄手にさきがけて、かひ〳〵敷も以前の女、につこと笑ふて立たりけり、行家見るよりコリヤどうじや、ヤイ女め、土佐坊が宿所への人數は、アイ

火も消々と、ひるの騷ぎにいとゞ猶、しんとしづまる舘の主、行家そつと差足に、出るこなたの唐紙も、明けて互に備前守、首尾は何と、シイ上々吉、身共が馴染の浮島めに申付、醉臥たる判官が、寢首を掻す今宵の積り、ヲヽ某も鎌倉への云譯に、義經謀叛の志有證據を取れと、濱荻に申付たが、若兩人共仕損じたる時、舘を取卷手つかひ有や、サア何と〳〵、ヲヽ夫も最前の女に申付遣はしたが、イヤ何とやら心元なし、某は一走り、貴殿の旅宿に驅行、庭木の梅に仕掛置たる、狼烟を相圖に攻寄せん、ヲヽいしくも計はれし、しからば合點とかけゆく後の障子の内、右大將家の討手の大將土佐坊昌俊、夫に組せる備前の守、兩人共に動くなと、障子をさつと靜御前、長刀かい込出給へは、左右に隨ふ濱荻浮嶋、襷鉢卷りゝしくも、刀携へ扈從せり、こなたの兩人恟りせしが、中にも土佐坊詰かけて、某は賴朝公の前代參、熊野詣のかへるさ、討手とは何を證據、ヲヽそれこそは自か計畧、濱荻にいひつけて、戀に事よせ心の底、問には落ず語るとやら、口舌せりふのはし〳〵にも、聞とる度々一々注進、我君樣は兼て御存じ、夫故に裏道から、堀川御所へもうお歸り、アイ夫迄もなう最前の、賴朝樣を殺せじやの、梶原親子をなんのかのと、御爲ごかしに謀叛を勸め、證據をとつて鎌倉へ、注進せうとはヲヽ笑止、嘸お殘り多うござんしよと、强いせりふで鰹魚節、出しになつたる土佐坊昌俊、頭をかいて閉口す、備前守ずつと出、某も昌俊に組したとはナ、イヤあらかはしやんすな行家

前へ持參せられしを、我君大に驚たまひ、鎌倉に弓引同然、此上は一先都を開かんと、人々召具せられ、九州尾形を志し、難波の方へ早御立、靜樣にも御跡より、大物さして御越との御口上、某は御臺所、卿の君樣御供の役事閙はしく候と、云捨てこそ引返す、靜御前は身構し、迚も土佐坊討るゝからは、此上何か憚あらん、シと目くばせ新造禿、やり手仲居がとり卷て、火花を散し打合行。跡へむら〳〵舘の家來、遁さじやらじ追取まく、シヤ物々しやと靜御前、につこと笑ふて長刀構へ、木曾に巴の女武者、義經公の御內にて、男勝りと呼れたる、去者有とは知らざるかと、上段下段ひら〳〵〳〵、ひらめく長刀有明の、月の眉墨裳の紅、家來は殘らず秋の木の葉、ちり〳〵はつと梢の行家、漸切拔かけ出る、さもしや返せと呼かけられ、振返つて丁丁々、打あふ太刀先洗んで拂ひ、拂へは靜が水車、目ざましかりける次第也、水の哀れや備前守、首は前にぞ落てけり、浮島濱荻十五夜も、追々に立歸れば、ヲゝ皆の衆手柄〳〵、自がかねての計略、行家土佐が工も顯はれ、此上の悅びなし、我は是より我君の御跡慕ひ追付んと、出行袂に新造禿、二人の女も取付て、倶に御供と縋るを拂ひ、かゝる折から人目有、一先都を開き扇のひらく共、頓て末廣檜扇や、追付かへり三つ扇と、いさめて路に捨扇、女扇の力なく、弱る心を取直し、行先敵の陣扇、破扇の古里に、月をかくして十五夜が、我は人目をかざし扇の折々は、文で御げんと東路や、御兄弟の中啓も、拍子扇の拍子よく、萬歲扇

御不審でござんせう、御見しりないを幸に、靜樣のいひ付で、工の裡を杜若、其八ッ橋の三河の國、矢矧の長者が秘藏娘、今はなき世の淨瑠璃御前。おそばに月の名にし負ふ、十五夜といふ田舍者、ナントお膽がたまげるでござんせうがと會釋する、重々工の顯れ口、此上は判官をと、かけ行向ふへ一樣の、赤前垂は遣手仲居、以前の紅梅携へ出、赤いはよいがしどがない、廓の限りの寄太鼓、聞やきかずに徃のうとは、ならぬ仲居が坐敷の切もり、いやなお客は長刀挨拶、受つ流しつ盃の、手練は早う取肴、魚鱗鶴翼御寢間の陣所、たてきる遣手が鎗襖、腰巾着の紐引しめ、一歩豆板小玉とう、持口かため控へたり、ヱヽ面倒なと裡門口、眞先かける白梅や、白歯の新造禿共、下ぐゝりの腹卷締、亂杭逆木すががきや、胡弓の弓に投壺の矢軍、紅葉袋に洗ひ粉は、嚢砂背水水揚の、御客にやりて合詞、かはいとかけなばいとしと答へ、惚たといはゞ好かんと返事、わいと吸付たばこの火矢、飛す礫の投扇興、投入花の筒先揃へ、切て放すは小指のつめつめ、太股ふつふり紫威し、間に合嘘の鐵炮も、通しはせじと支たり。

行家案に相違して、呆れて詞もなき折から、宙をかけつて御厩喜三太、靜が前に手をつかへ、土佐坊昌俊この舘を拔かへり、提兵勝て百餘人、堀川御所へ寄たる所に、我君元より親兄の禮を重じ、手向ひすなとの下知を受け、しづまり返つて居たる折から、例の荒氣の武藏殿、宿所より直に駈付、土佐が乘たる馬の後に打跨、事をかしやと云まも無、土佐が細首打落し、御

〱と打詠、ア、御奇特な順禮衆、そちらなはお内儀か、結構な善根、極樂といふて遠らはない皆現世にある、兎角此世が大事、此頃九郎判官殿、梶原が舌三寸讒奏の難風には、櫓櫂も立す落人となり給ひ、九州の方とやら、又大和路さしてござつたとやら、嚴しい御詮議、惡事災難凌ぎがたきは娑婆の荒海、岸打つ浪は三熊野の、辨眞が子の辨慶など、肩身がすぼつて笑止な事、してご夫婦は何國のお人、是も他生の御縁ぞと、話しを聞てこなたの順禮、女房共、今御出家のおはなしを聞やつたか、サイノ、義經樣のお身の上、おいとしい事ではござんせんかと、いふた斗で搆はねこちとら、此身の願ひは佛の御回向、他生の緣の御出家樣、お願ひ申上けまする、ハイ女房が申す通り、志す佛の爲、思ひ立つ西國順禮、我々は大津の宿や美濃の谷汲より、京西國を打仕舞、是より紀の路へ心さします、旅は道つれ世は情、其情深い義經樣さへ今の御難儀、大體の善根では、未來の佛果も覺束ないと、思へは先の世が思はれて、あつい涙がこばれますと、夫婦目と目を見合せて、身を知る雨や涙の雨、晴間も見えず袖絞る、旅の僧打守り、お二人は江州大津のお人とや、しからば大津松本の邊に、百合の太郎といふ人ばし有かと問かけられて、アイ、その太郎殿はこちの人と、いはんとする女房を押退て、ヲヽいかにも〱、百合の太郎は我らが念頃、何の爲の御尋ぞと云まぎらせば、されば愚僧は諸國行脚の律僧、此度加賀の白山に登りしに、大津松本にて百合の太郎と尋、言傳屆くれよと賴まれし

の千代八千代、重扇の末かけて、つきぬ例を引汐の、大物さして着扇、都に名殘の扇舞、その名を世世にあふぎけり

第四　大物の浦の段

西の海、一目に三津の浦續き、兵庫高砂住の江の、松は昔の友白髪、是も中能き二人連、夫婦順禮遙々と、只ならぬ身をいたはりて、ちよこ〱休む茶の錢の、大物の浦にぞ着にけり、普陀落や、岸打波は三熊野の、那智のお山に響く瀧津瀨、これ申こちの人、西宮から爰までは二里程も來たでござんしよ、ちと休もじや有まいか、ヲヽテヤ夫れに今日は旅の僧に、行合す手の内をやらなんだ、ちと休がてら、この濱の景色をながめて、一ふく仕らばやと、存候と、腰より出す摺火打、煙草輪を吹煙吹、浦吹く風に錫杖の、音に女房ら、淸兵衞殿、アレ〱あそこへ法印樣、ヲツト心得しんぜましよ、我々は近江の者、志す佛の爲、夫婦連の西國順禮、御出家樣には心斗の手の內、法印樣も只は通さぬ御回向を賴ます、ヲヽそりやしほらしいお志、けふの天道大日如來も見通し、順禮なさるゝ其上を、僧に供養の善根は、此上もなき大慈大悲の觀音勢至も蓮臺へ、救ひとり給ふは疑ひない、南無阿彌陀佛と回向して、家ある方へ急きゆく、あれ〱あそこへ又御出家、是あげましよと入る手の內、回向して彼旅僧、一人の姿つく

所に云なすはかなさ、是も懺悔の內なれや、修行者手を打て、誠に一念無量劫假念無量罪疑なく候よ、餘所事の樣にお物語りも、お內儀の懷胎、其爲の順禮と話にのつて身の懺悔、百合太郎はおん身よの、愚僧加州白山に行くれしに、一人の聖來つて、只今是に不思議あり、三業をしづめ妙典を誦し、見よ〳〵と宣ふ空の月かき曇り、稲光天地須臾に鳴動して、鐵城聳え鐵の網、猛火烈々たる火の車に、罪人を打乘て、牛頭馬頭の惡鬼轅をさしよせ、鐵盤の上へ引ずり出し、上に重る大磐石、エイヤ聲して押程に、血汐油を絞るが如く、紙より薄く押ひらめたる罪人を、串に貫き炎にかけて焙らるゝ、叫ばんとするに聲出ず、猛火眼を焼焦す、おそろしなんども愚なり、彼聖憐たまひ、錫杖とり延助んと仕給へば、と錫杖の眞中ほつきと焼折、御衣の袖燃上ると見えけるが、鐵城破れ罪人も、惡鬼も忽消えにけり、愚僧も身の毛立て恐ろしく、是はいか成人やと問奉れば、聖答へてのたまはく、娑婆にては强盜の張本熊坂の長範といつし者、一生の造惡無量の中、源氏の大將義經の母常盤御前を害したる一惡、千万の罪に超過して、かゝる罪を受るなり、江州大津に彼が一子、百合太郎と云者、夫婦順禮を勤め、札を納め父が菩提を弔ふといへ共、人の恨の報の罪、年々に增進して、佛力にも叶ひがたし、和僧大津の太郎に告よ、今ぞ日影の義經に情をかけ、義經のために一事の陰德を積み、母常盤の亡魂の恨を、宥むる物ならば、地獄變じて三禪の樂となる、父が成佛疑ひなし、くれ〳〵疑

事共有、先其太郎と云人の、先祖は何人にて候、委しく聞たき事こそあれと、樣子ありげに尋れば、順禮夫婦顏見合せ、噂のやうに候へども、其人の懺悔の爲、百合太郎が身の因果、語つて聞かせ申へき、太郎が親は美濃の國に隱れもなき熊坂の長範迚、數萬人の切取剝とり致せし中、義經公の御母常盤御前、東下りの流浪の旅、山中が宿と申所にて、切捨て剝取つたり、其時太郎は十三歳、其後長範牛若丸に殺されし故、太郎は先非を悔、惡念をふつつと切、今は大津に宿屋の營、盜溜し金銀に何乏しからぬ共、桃の種は桃となり、梅の種は梅となる、善惡の報ひ程悲きものは候はず。連添ふ女房と中も能、十四年馴染し中、子は三度迄悦びしが一人も育ず、産家の水の泡と成、勿體なくも源氏の大將義經公のおん母君を手に掛し、親の罪科子に報ひ、常盤御前を害せしは、仁安三年正月五日、女房が産月の、三度が三度正月に當りしこそ、天罰のしるしなれ、又只今も懷胎にて、來正月が十月めなれば、生れぬさきよりなきものと、思ひ極めし夫婦が心、子の育ぬは是非なけれど、現世さへ此報ひ、死たる親の地獄の苦患、さそと思ひやらるゝ迚、常々夫婦泣悲しむ、御出家と申し何やら用ありげなお尋、思し合する事あらば、太郎親子が現世未來、助けてたべと代拜む、妻も淚の手を合せ、未來の舅御浮みなば、生るゝ子供も育やせんと、親を思ひ身を思ひ、ノウ清兵衞殿、成程彼が申せし通り、罪を作りて死したる親の、罪障消滅の爲の此順禮と、我を忘れて身の上を明しながらも氣もつかず、餘

書繪姿を相渡す、此繪姿に似たる法師あらば、早速身共が旅宿迄注進せよといひ渡し、繪姿家來に立させて、先の村へと急ぎ行、百姓共寄集り、何じや脊の高さ六尺有餘、テモ大きな坊主じやの、定て手足も太からう、どこやらの足迄が、思ひやられて浦山しいと、つぶやき〳〵皆とり〳〵、跡に殘りし辻法師、文覺が繪姿をためつすがめつ一心不亂、瞬もせず守り居る、後の藁屋の女房が、覗くも知らぬ辻法印、扨こそ〳〵、十日いぜんに我内へ泊め置し大の法師、一間で文覺とおて名の一通拾ひしより、扨は是こそ我日頃、逢たふ思ひし文覺と、推量ばかりで咒咀せしより、願力通つて病氣の逗留、併文覺は一寺の住職、かく輕々敷有樣はと、樣子窺ひ跟ふ内、けふ結願の日に當つて、泊し旅僧と此繪姿、毫厘も違はぬ高尾の文覺、天の知らせかありがたやと、四方を拜し身つくろひ、我家をさして馳け出す、辻法師が袖を扣へ、申々法印樣、わたしやお前にちつとまゐ、お頼申上げたひ事、お聞とゞけ下さんしたら、お嬉しからうと女氣の、じやら付はなき色仕掛、逸り切たる法印が、氣も魂も我宿へ、うつかりうはの空とぼけ、お前は爰のお家さま、御祈禱か占なら、毎日參る此法印、只今宿に急なる用事、御免と行く手じつと取り、私が心に思ふ願ひ、手の筋で見て當さんせと、しめる手管に、マヽ是申私も願有て、七日物忌致す者、則けふが一七日め、邪淫戒は破られず、其事ならば猶以て、お赦しなされも突放す、又取り付て法印が、顏つく〴〵と打守り、涙に暗き汐曇り、恥しなが

念を拂ふべし、我こそ觀世音菩薩と、示現と倶に大悲の光、其まゝ見えず成給ふと、聞ゐる夫婦は悲しさも、又有難さも信心も、五體にひつしと染渡り、身を投俯て歎くにぞ、語る旅僧も隨喜の涙、衣の袖をぞしぼりける、枯たる木にも花咲す、佛の誓たのもしや、奈落の罪を救ひたまふ、告に任せて悲慈善根、今落人の義經殿の、所縁になりとも情をかけ、母常盤の亡魂の恨を宥たまひなば、父の成佛疑ひなし、爰にて逢も佛縁ぞと、佛名唱へ立上る、コハ冥加なき佛の教、只今のお物語り、冥途の父へ逢ふ心、別れに同じ御名殘り、もし御下向なされなば、青墓や清兵衛と、大津の宿にてお尋ねあれ、おさらば、さらばと見送り見返る、姿も遠く鳴尾潟、西と東へ別れゆく、しづけき空や夏の日の、野寺の鐘の青海に、響き尖き鎌倉武士、何か詮議の旅出立、跡へどや〳〵所の百姓、お觸いかゞと蹲る、ヤイ〳〵儕等は當所の物よな、鎌倉殿お觸の一條、謹で承れ、此度判官義經殿、賴朝公と不和の御中、何卒和順下されよと、京都高尾山神護寺の文覺上人、再三鎌倉へ願れしところ、鎌倉殿右の御返答延引せしを深く恨み、文覺は山を逐電いたせし由、寺僧共の訴、此文覺といふ法師は、往昔鎌倉殿蛭が小島に御座のせつ、平家追討の院宣を、乞下せし其事を鼻にかけ、此度和睦の願ひ叶ぬ事を憤りての事ならん、當時木曾や平家の殘黨共、鎌倉殿を狙ふ時節、もしや文覺彼殘黨に荷擔して、鎌倉追討の綸旨、禁延へ願はんも計られず、大江の廣元殿のいひ付を以て、國々所々に、文覺の人相

山し、今は源氏を恨る文覺、院宣の功もなく、ムヽト獨はく〳〵打頷き、高札に張し繪姿と、件の矢の根をふところへ、納た思案浪人も、跡をしたふて三重「行空の

第五　辻法印住家の段

津の國の、芦火焚家は煤たれて、藻鹽の煙かづくなる、尼が崎の傍に辻法印か住家の軒、看板目當あて物に、手の筋書判相性を、見て貰ふては二十銅、或は一封白露を、置て行のは心持、身上次第大物の、占ひ祈禱錫杖の、ふり廻しよき仕似せなり、母は八十の老の浪、返らぬ昔し姉娘に、別れし日より泣暮し、目も泣潰し一人子の、辻法印を杖柱、勝手覺えし我家の内、探り出て一間のこなた、障子をそつと押あけて、申し〳〵旅の御出家様、ちとお心能うござりますか、先日ふと御宿を申てより以來、御病氣での御逗留、是と申も他生の緣、一樹の陰の舍りとや、先立ました姉めが菩提、御出家様の事なれば、お心遣ひなされずと、緩々と御保養遊ばせと、いふ聲聞て旅の僧、いが栗天窓の六尺ゆたか、束ね熨斗の大夜着脱かけ、是は〳〵お袋の心遣、なが〳〵の御厄介御禮の申し様もない、恭ないと膝直して、アイタヽ此樣に少でも身動きすれば、腕も腰も碎る如く、なま中身體が大きなだけ、持なやみが一しほ苦勞、アイタヽヽヽアヽ申し〳〵、其樣にお身の揉るが第一お毒、風があたらば惡るからふと、障子鎖に老

ら此濱へ、引越た其日から、心そこ惚た心のたけを、けふはいはふかイヤ持しばし、姉が妹かといふ樣な、年増女に口說かれて、なんの嬉しい返事があろと、跡へ心も引浪と、又打よする涙には、いく度袖を濡鷺の、便る方なき捨小舟、こがれ〱し此搭、見て下さんせと懷へ、引込手先引拍子、引出し落す鏑の矢の根、ナニ〱石田次郎爲久と姓名のあるからは、此矢の根こそ粟津にて、義仲公を害せし矢の根、所持せしお前は木曾の御内衆、アイ、根の井小彌太が妹更科、兄も粟津の泡と消え、お主の敵は爲久なれど、さす敵は鎌倉の賴朝殿、何卒一太刀恨んと、思ひし事も何所へやら、戀に心も亂糸、結ぼれ解ぬ思ひのたけ、から何も角も打明て、口說心をかはいやと、思ふて夫婦になつてたべ、拜むわいなア是申し、いやとおつしやりや生ては居ぬ氣と、矢の根を咽へおし當て、いやか應かの返事をと、生死に迷ふ辻法印、もてあましたる其をりから、心の底も深編笠、樣子ありげな浪人が、來るともしら濱砂道の、同じ返事をいふ樣なれど、あの文覺の人相書に、寸分かはらぬ旅僧を、我家に留めしが氣がゝり故、つい往て參つて色よいお返事、ヱ申コレ申と、欺し寄て矢の根もぎ捨、お赦しあれと逃てゆく、耻しい有條を、いはせておいてはづすとはと、跡をしたふて行空の、浪人跡見おくり、落たる矢の根取上て、石田が矢の根持からは、女は慥に木曾の殘黨、尼が崎の辻法印が宿せし旅僧は文覺法師、其文覺は平家追討の院宣の申下せし功もなく、京鎌倉の和睦も叶はず、夫を恨て下

拜む放して下されイヽエだんない、放さぬ〳〵、是は無體と振切つきのけ、内へ逃込そしらぬ顔、表の女は本意なけに、歸るふりして柴垣の陰に隱れて窺ひ居る、掃部法印に打向ひ、拙者に五百崎掃部と申す浪人、先刻よりお留守へ參りお茶の御馳走、コレ〳〵ようこそ御越御覽の通り、目の不自由なる母一人、不都合御免下されと、いふうち娘は法印が、顔を尻目に棧の、來そめたけふの戀衣、綻びかけしえにしの糸、結んでほしさ風情なり、先何か差置お賴申度樣子は、則ち此なる娘、ぶら〳〵病の藥も效なく、とかくに心六ケ敷體、本腹の御祈禱も御賴申し、病症もお占ひ下さるべし、もし物の氣の業もやわらん、或は心に思ふ事叶はぬ抔とのナサ煩ひも、若い身には有ならひ、お考へ下さらば、大慶至極と慇懃に、法印も手をつかへ、娘御の御年の頃も見ます所十六七、陽氣發出逆上にて、得て病ひの發り時、易の面でつひ考へて上ませう、成程〳〵此上は委細の譯、娘めに直におんたづね、篤と御祈念下さるべし、拙者が居つては何かに遠慮、御老母いざ御案内、奥で暫くお咄し申さん、コリヤ娘そちはソレ氣むつかしさ心のたけ、法印どのにお咄申し、彼ナ容體書を御目にかけよと、目でしらせ、樣子白髮の母諸共、心を殘し奥に入る、跡に小園が愛敬の、愛持色の朝顔や、なんと手よらん蔓もなく、手をもぢ〳〵ともつらして、見て下さんせと指出す手先さ、何心なく法印が、取手嬉しさ耻かしさ、しつかりとさへしめかねて、背ける顔の白粉は、何の化粧につけぬらん、法印態

の身の、心をつくる折こそあれ、深編笠の浪人姿、跡には花の顏や、養ひ得たる春雨の、振り袖おほふ耻し盛り、門口に立休らひ、是が彼辻法印が宅、子細は道でいふ通り、心得たるか、某も詞をそへん、則認め置たる一通ナ合點かと、差出せば、何と諸も娘の小園、うつむいて受取中、案內請ふて上り口、主の老女出向ひ、御覽の通り目の不自由な此婆、お聲とても聞なれず、どなた樣でござります、イャ拙者はそといたいた浪人者、法印殿に御意得たく、娘をつれて參つたと、傳へられて下されと、聞て老女が、是はしたり折わるう法印は他行、多用の筋も何かはしらねど、定めし星祭か御手のすぢ、娘御の事ならば相性でも御尋ねの御用であろ、カヘリなするに程も有まい、先夫迄は奥の一間で御休息、何さま直さに御意得たし、御亭主のおるすの內、お勝手に通るも不遠慮、是にて暫らく休足と、煙草の煙曇りくる、一村雨の相合傘、流石岩木にあらざれば、心弱くも女連、我家の門の辻法印、立留つて是はさて、思ひ切て下されと、口のすい程斷りいふに、去とてはしつこい女中、マア〳〵此コレ輪袈裟放さつしやれと振放して、ようく聞しやれや、人の祈禱もしてやる法印、若い女中と相合傘、近所の手前も迷惑千萬と、堅いお前の底の心、解てほしいと手をさし入れ、井手の下紐、コレこそばい女だてらめつさうな、男の臍をア、コレ〳〵アレまだ下へ手をやらつしやると、門の人音母は聞付、さう云は法印じやないか、最前からお客がある、早う戻りやの聲に恂り、ソレ〳〵母者の是々

故、どうでよい殿御じやあるまいと、しんき〳〵で來たけれど、お顔を見るとわぢな氣に、はんにけふの今までも、小袖や帶の染ならで、色とはどんな物じややら、いざしら絹のしらぬ身に、始めて思ひ染模様、たとへ此上父様の、お叱を受る迚、何と思ひ切れうぞ、わしやモウ愛の女房の氣、何のお前に添さうと、芽む芦のうら若き、娘心ぞしどけなき、それ程思ひ詰て居やしやんすを、無理にといふもおとなげない、なり惡い事なれど、さつぱりと思ひきり其かはりに、改めてお前にわたしが一つの頼み、取持て下さんせ、ヱヽあの法印様は思ひきつて、又取持といはしやんすお前の戀人は、アイ最前の繪姿に、寸分違ぬ奥の間に、逗留の御出家様、どうぞ私に取持つて下さんせと、思ひも寄らぬ戀の橋、何と返事も納戸より、立出る五百崎掃部、イヤ其戀男取置て、外に似合の好い男、取持て進ぜうと、いふに愕り、ムヽ其お取持なさるゝ男は、ヲヽ外でもない此掃部、ヱヽと娘が又愕り、ホヽそちが手前も面目ないが、全く器量に惚たでもなし、惚たといふは先斯と、最前拾ひし矢の根の手裡劔、有合ふ机の八足早足、ヲヽ其ぬからぬ器量で奥の客僧に、逢たいといふ根性に眞實首だけ、女房になつて貰たい、成程〳〵成まいでもござんせぬが、わたしに惚れたといはしやんすお前に若や奥様の、其奥の手が有かないか聞合せと、透まに矢の根打返せば、刀の柄にてしつかと受留、ヲヽ結納慥に受納した、ホヽヽヽヲヽおはもじと會釋する、わおなえにしの媒介に、立つたる矢の根八足の、机

と和かに、テモ尋常なお手の筋、其お器量で嫁入をなさるゝに、何の相性所かい、譬丙午でないにもせよ、お前の様な女房持つたら、我らが様な弱味噌は二年とは續まい、御病氣とあるも大方戀とは、著木取ずに見えて有る、其通り奥へ申さう、たつた二人爰に居て、ひよつと疑ひ受るがいな、親御様は御浪人、首と胴との押皆斷、しやうだんしては居られんと、ずんと立を引とめて、私が病氣の容體書、是見てたべと懷より、封じ込たる藻鹽艸、美しい手の筆の跡、せめてみてなと樂うと、封じ開いて、コリヤ何んじや、高尾山文覺上人人相書、脊の高さ六尺二寸、眼尖く色淺黑く、ムゝと思案の吐胸聲を潛め、スリヤこの繪姿をわたさん爲め、戀にこと寄來られしな、フウ様子ありげな艶書の面、早速には思案に落ず、後程までに、アイそんなら色よい御返事待まする、先夫迄はと繪姿を、内ふところへ納めても、下紐とけぬ心の謎々、納戸の内へ入にけり、様子聞たる依然の女、ずつと這入つて、娘御様、先刻にからお前の戀、マほんの事かと案じたが、わけ聞て落付なした、私は又實眞惚た法印さま、ドレ叶へて貰はふと、奥へ行裾待しやんせ、そんならお前は、アノ法印様とはんまに女夫に、ヲゝくも知れた事、さう聞ては猶奥へ、お前をやつてはアノ私がと、跡云兼るおぼこ氣の、顔に照葉の色そへり、コレ〳〵お前はマアアノ、繪姿を法印様へ渡さん斗りの親御の方便、誠の戀ではないじやござんせぬかへ、サレバイナア内を出る時父様の云付には、辻法印様といふ山伏様じやと聞た

娘、こなたの二人も顔見合せ、呆れ果たる一間の内、エヽ無念や只一討と思ひしに、組敷れし殘念やと、念珠が聲ともろ共に、障子にぱつと血煙立、娘はハアツト氣も狂亂、夫の敵と懷劍拔持、同じく一間へかけ入ば、南無三寶大事の娘過させじと、刀追取り駈け行んとせし所に、響渡る大音聲、かくれたるより猶顯るゝはなしと、平家譜代の侍主馬判官盛久動くなやつと聲をかけ、障子をさつと押開き、一間にすつくと立烏帽子、威風凛々輪寶の、大紋の裾踏したぎ、懷劍持たる娘が利腕しつかと押へ、正直を元とする日本國中大小の神祇、非業の命を取らんずる匹夫に力を添給はんや、又それ迄もなし、我こそは我たつ杣に勤學して、三塔一の悠僧と呼れたる、武藏坊辨慶とはしらざるか、念珠如きが咒咀の法、祈りくじくは我珠數先に覺有りん、其辨慶が何故に我娘を擒にし、某を盛久とは何の證據と、いはせも果ずから〳〵と打笑ひ、我君九郎義經公、都を開き九州へ御下向の其折から、大物の邊にて汝等を見咎給ひ、實否を糺せの御諚を受、おびき寄たるけふの時宜、此懷劍こそ二位の尼君秘藏ありし、宇佐にて打たる神息の劍、夫を所持する汝が娘、元暦の戰ひに行方知れぬ盛久と見しは僻目か、あらそはれぬ證據を見せん、ヤア〳〵重安來られよと、呼はる聲に以前の代官、小手腹卷に身を堅め、判官殿の御内にて、四天王の其一人と呼れたる、龜井の六郎重久なり、我君の仰を受け、武藏殿といひ合せ、鎌倉武士と姿を扮し、辨慶殿の繪姿を、文覺の人相書と僞り、詮議に事よせ此

の直に祝儀の島臺、掃部娘に打向ひ、最前より奥にて聞ば其方は、假の戀路を眞ごとにして、法印を戀慕ふ不所存者、それでは兼ての一大事、成就せん事覺束なし、サアさつぱりと思ひ切〳〵と、せり詰られて小園は涙、眞實惣た法印樣、思ひ切迚是がマア、何と思ひ切られうぞ、迚も叶はぬ戀路なら、生存へて何樂しみ、さらばでござんす父樣と、懷劍拔手に女も縋り、あわて留むる其折から、ホヲヽ其文の返事を致さん、と立出る辻法印、此繪姿に寸分違ぬ奥の客僧、近寄らんと斗れし方々は、察する所平家の殘黨、文覺を頼み、又々頼朝追討の綸旨をば、乞受ん心ざしは、蓍の面に明らかなり、かく申す某、辻法印とは世を忍ぶ假の名、誠は遠藤武者盛遠に討れたる、袈裟御前が弟念珠丸、幼少より葛城金峯山に登り、山伏修行の功を積み、立歸つて聞ば姉を討れ、夫渡も發心し、さす敵の盛遠も文覺と改名して、高尾の山に住との噂、譬出家したりとも姉の敵、やはか其儘おくべきかと思へども、母の衣川老の勞見捨がたく、無念の月日送る所、幸此頃我家に泊りし旅の僧、只者ならずと心を付れは、高尾の文覺に相違なし、シヤ恨を晴さんものと思へども、彼は大强力、我は甲斐なき瘦山伏、所詮叶はぬ敵對なれば、習ひ得たる調伏咒咀の法を以て、彼が姿を藁にて拵へ、箱に納めて一間の内、朝夕祈る驗にや、まんまと彼を惱せおく、今宵則結願なれば、一太刀討て本望遂ん、一時遲いも姉への不孝と、身拵へして駈行を、とゞむる娘刎のけ突退、一間の内へかけ入たり、跡にはハア〳〵あやぶむ

らぬ深手の盛久、龜井夫婦武藏坊、忠義を感ずる斗りなり、老母は一間をさぐり出、念珠丸はどうしやつた、ねんじゆ〳〵と尋れば、ヲヽ念珠丸はこの武藏を文覺と心得て、姉の敵と切かけしを、たつた一討ヱヽはつと斗に母親は、前後正體泣倒れ、ヤヨかはいやな念珠丸、かよはきそちが身を以て、文覺を討んとは、姉を思ふ弟の道、無理とは思はぬ去りながら、老さらばひし此母は、目かいは見えず其上に、姉の袈裟さへ非業の最期、剩さへそなたに別れて老の身の、誰を力にせうぞへのう、せめてこの目が見ゆるなら、文覺でない事をとうにいふて聞さう物、かよはい者を胴慾に、一討とはなさけなや、心づよやと詫涙、六代御前も正體なく、せめての事に亡骸を、一目見せてとかき口説、夫子をしたふ恩愛妹背、ひとつに落る涙川、流れ果しはなかりけり、ヲヽ其死骸にあはして進せう、老母も名殘惜まれよと、佛壇の戸をおし明れは、内より出る念珠丸、ヤア御前は死はなされぬかと、おどろく姫君母親も、探りよつて悔りし、ホヽそなたは念珠丸ぶじであつたか嬉しやと、二人は夢のさめたる心地、悦び涙ぞ道理なる、イヤそれがしが存命を、さのみ悦び下されな、この身は則武藏殿へ進上申しおいたれば、やはり世になきものと思 召下さるべし、ヲヽそれこそは辨慶が、老母へわけて御願ひ、念珠丸の年恰好、義經公にいき寫し、鎌倉の詮議きびき敷其ときの、御身がはりと心付、認めおいたる一通を、一間の内にて渡しおき、御味方についたる印、最前障子の血けふりはその血判、もは

家へ入込、女房を先へ廻し、本名さかんと計れども根強き其方、併かく成上からは、最早のがれぬサ〳〵尋常に名乘られよ、女房もう能い、アイ〳〵色に事よせ本名を、問落さうと思ふうち、かう成からはもう叶はぬ、サア有やうに名乘んせ、名乘〳〵と武藏坊、異義に及ばゞ此娘、捻り殺すがサア何と、何と〳〵に詮方なく、どつかと座を組氷の刄、腹にぐつと突立、苦しき息をほつとつぎ、愚人の眼は面にあり、智者の眼は胸にあり、武藏坊を文覺と思ひ込、此家に便りを求め、鎌倉追討の院宣を受んと、思はず敵の謀に落入し口惜さ、かく迄もする事なす事、平家の運の末となる淺ましさ、推量の通り某は判官盛久、夫にましますは維盛卿の御忘れ筐六代御前、情なや御一門は元曆の春の花、壽永の秋の木の葉と倶に、散り失し身の漸に、殘らせ給ふ姫君一人、あさましや平家の嫡流、此時に絕果ん口惜さ、六代御前を男子なりと、世に諷はせしは、討殘されし平家の殘黨、爰かしこにかくれ住を、駈集ん計略も、泡と消たる今日只今、姫君を殺されては、どの面さげて御一門へ、冥途でなんといひ譯なし、のう武藏殿龜井殿、我首とつて判官の見參に入られよ、それかし死る上からは、源氏に弓引者はなし、其代り姫君の御命、何卒助けたまはれかし、コレ御兩人偏にたのみ存すると、忠義に合する兩の手に、かゝる淚は玉あられ、板家にふりくる如くなり、手負にとりつく六代御前、杖柱とも賴たる、そなたに別れて自が、そもや憂身のあられうか、是のう是と斗にて、歎けど返

叅われ、もしも咎る關あらば、コレ此勧進帳取出し、天も響と高らかに、よみあげ給へ武藏殿、ハヽヽいしくも心づけられたり、然らは暫く借用せんと、懐中矢立の筆追とり、一札書て取かはすは、今に殘れる尼が崎、武藏坊が借證文と、其名も高き安宅の關、無事に通りし計略は、末代忠義の先達なり、六代御前は念珠に縋り、離れがたなき御風情、今は盛久涙を拂ひ、斯某相果れば、傳く人なき此姫君、御兩人へ一つのお頼み、念珠丸もろ共に、吉野へ伴ひたまはれかし、はかない縁の念珠殿を、戀慕ふ姫君の心の内、察し入ての此お頼、是今生の忠義の仕納、頼む〳〵といふ聲も、次第〳〵によはり行、心を汲で兩人が、合點〳〵と點く顔、うきが中なる嬉しさの、小褄引わげよしや世の、吉野の川の花の波、妹背の中をいつ〳〵迄もと盛久が、苦しき中に悦びの、眉をひらくや陣扇、アラ目出度や姫君の、門出祝し申さんと、よろぼい〳〵聲を上げ、抑盛久は平家譜代の侍武略の達者、殊には亂舞堪能を以て知られたり、一世小松殿北山にて、茸狩の御酒宴に、盛久一曲一奏の事、世以て隱れなし。いでひとさしといふ聲の、立も苦しき息つかい、納り靡く時なれや、一天四海の内のみか、人の國迄日の本の、草木も靡く源氏の威光、アラ恨しや嬉しやナア、只此上は便りなきこの姫君、いづれも頼といふ聲の、息もせつなき四苦八苦、いとしやなうと六代ごぜん、手負に取り付焦れ泣、念珠丸も共涙、跡に殘れる一人の母、龜井殿の御内證、よきに介抱下されよと、頼もなみだ頼まる

や此世になき同然の念珠丸、命は則もらひ置けり、其代辨慶が此命、老母の爲に我子の敵、此場で討れて進せたけれど、今漂泊の義經公、御先途をも見屆けず、死せんは臣下の道に非ず、晉の豫讓は衣を裂、當座の敵は先斯うと、調伏咒咀の藁人形、箱打やぶつて取出し、蓄たる矢の根ぐつと突立、某を調伏せし此人形は則辨慶、これにて當座の恨を晴し、無事で時節を待れよかし、我君を陸奥に、御供申て其後に、歸る時節も有ずんば、老母の名をは其儘に、死する所は高舘の衣川にて終らん、誓の詞は文治五年、老女が名にし奥州の、衣川にて立往生、末世に傳ふる辨慶が、藁人形の謀、謂にかくと知られたり、龜井夫婦は勇み立、武藏殿の誠の詞、老母も恨もあらじ、イザこの上は片時も早く、吉野にまします義經公、御供申て奥州の秀衡を賴むへし、ホヲ實尤念珠丸も同道して、我君に御目見え、すぐに東の永の旅ナ。ソレ暇乞をと目遣ひに、ハア忝なし武藏殿、母になさけの今の詞、義經公の御供して、奥州さして御越あらば、鎌倉よりの固の關所、其姿にて通られんこと危し〳〵、我今迄の山伏姿、勸進して通られよと、頭巾鈴かけ金剛杖、わたせは辨慶押いたゞき、直にこれにて着用せんと、大紋烏帽子ぬぎ捨て、五智の寶冠九會曼陀羅、八葉八ツ目の草鞋踏み締、即心即佛優婆塞の、行儀を寫す山伏姿、老母はとほし〳〵、一間なる一卷を取出し、智の渡が出家して、俊乘坊重源とて、南都大佛再興せし勸進帳はこの母へ、後世の助けと殘し置、是幸の往來切手、お貸申さん御持

の方へと承る、御同舟叶はず共追付舟をかり出し、櫓拍子早めて波押切り、やがて御對面させませう。とはいふ物の折わるう、一艘も舟はなし、如事はせんと喜三太が、口には諫め沖の方、にらみ詰たる斗りなり、卿の君涙を拂ひ、都をひらく折からも、おん供せんとは思へ共、土佐坊か家來に隔られ、漸そなたを力にて、爰までは來たれども、女の足のかひなくも、御舟に後れ殘る身は、獨斗かこのお胎内の、やゝもいつかは何國て、誰が情をかくべきぞ、便なき身の上や、心ぼそやとこがれて、涙干潟もなき風情、喜三太心を取直し、船はいひ付おいたれば、其用意の出來る中、せめて君の御船影、遠目に見えぬ事はあらじ、あの小高き岡に登り、御見送りあそばせと、いふに嬉しく、ほんに夫々とやかうといふ中日も暮ん、一時も明ぬ中、遠くは行じと打連て、かなたの岡に駈登り、見れば遙の沖のかた、あれかこれかとさゝがにの、蜘のふるまひ柳の葉、是ぞ我せこ我君の、御船ならんと戀しくも、みやる海邊に風かはり、夕影立波の音もとう／＼鳴尾の沖の武庫山颪颯々さ、舟の内には船頭舟子、浪よ／＼とこゑ／＼に、呼はり騒ぐを辨慶制して、一年渡邊福島を出し時、以ての外の大風なりしも、押渡つて平家を亡す、今とても同じ事、何條驚ことならずと、いふに實もと龜井片岡、いつくも敵といふ浪の、聲に力を合つゝ、ゑいや／＼と舟子共、汐に連てぞ漕出す、又も一手の楪か嶽、どつと吹風沖津波、つれて海上霧ふかく、西も東も不知火の、いつくの磯につくし舟、ゆらりゆら／＼由良

ゝ、夫婦も涙武藏坊、心勵みの聲高く、ヤアヽヽ盛久よく聞れよ、さしも平家の强敵を、亡し給ひし義經も、今は浮世を隱れ笠、身の隱れ家の軒もる雨、恨を晴て往生ある、盛者必衰目の當り、夫倩おもんみれば、大おん經主の秋の月も、涅槃の雲に隱れ給へば、老母も歎きを留たまへ、涕泣眼にあらく、涙玉を貫ぬく、思ひを善途に飜へし、供佛施僧の營あれ、一紙半錢奉財の輩は、此世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮花の上に座せん、歸命稽首敬白と、袖はにそみかくだ、女房がいたはる老木の櫻に吉野を指てゆく名殘、殘るは猶しも女氣の、忍び子に臥寅に起、千里も通ふ忠義の道、頭巾のひだも十二人、山伏姿の安宅の關、語り傳へし物かたり

第六　北嵯峨の段

實にや波江の鄭船は風靜つていづ、波頭の謫所夕日影、晴てぞ見ゆる和田の原、八十島かけて出る舟、釣して戻る海士小舟、千舟百舟ちらヽヽと、芦の葉がくれ磯がくれ、浪の淡路や影きえて、おぼろに遠くなる尾瀉、須磨も明石も名のみして、夕暮近き濱邊のかた、はしりつきづく卿の君、おん供には御厩喜三太、後ればせにかけ來り、中々御臺樣、其やうにお氣を揉で、お癪でも發れば惡い、此大物の舟問屋で承れば、我君樣には只た中此浦より、御舟よそひ九州

あらし、身にしみ渡る計りなり、北嵯峨の、尼が庵に宵よりも、喜三太もろ共手枕の、はつるゝ拍子夢さめて、忙然とこそ成給ふ、喜三太傍り見廻はして、正しく今のは大物の浦、怨靈に悩され、君の御船漂泊すると見しは誠か、そんならそなたも平家の一門、怨みの數々いふたのを、お前もごらん遊はしたか、ホイはつと互に顔見合せ、胸に動氣のうつ波や、又も船路を案じ居る、涙はらふて卿の君、我君樣に逢たさも、都の中は敵の巷、昨日にかはる人心、漸こよひ爰へ來て、いかなる人か知らねども、此庵の尼御の世話、ながらく居るも又氣の毒、おなかのやゝは何國にて、生る事や兎に角に、戀し床しの我君樣、逢せてたもと斗にて、喞ち涙に喜三太も、差うつむいて居たりしが、世が世の時でましまさば、御懷胎とて家中の賑ひ、褥に褥をしきかさね、御典藥よとり上よと日々の伺ひ事、夫にひきかへあるに甲斐なき、喜三太一人、どうやらかうやら今宵この所の御一宿、お心細う思召も御尤、去ながら何卒世上の靜まる折を見合せ、我君樣のおん在家、尋搜して御對面させませう、夫までは暫しの御不自由、殊に御姫身の折から、御心を慰られ、御保養願ひ奉る、今の御夢も御心の勞れより、先御休み遊ばせと、心をつけて御手をとり、出る佛間の本尊の前なる位牌にきつと目をつけ、何々御俗稱安德天皇、ヤア是々、こちらに平相國清盛公、二位の尼君、それ〳〵能登殿門脇殿、あちらに重盛宗盛公、主上を始奉り、一門の月卿雲霞の如く、位牌にゑりつけ並べしは、樣子有げに見

の戸や、擢も櫓柄も碎かれて、浮ぬ沈ぬ波のまに〳〵、顯れ出し平氏の一類、數千の猛火散亂し、音は震々電々として、かゝる時節を窺ひ寄り、恨をめい〳〵呼はる谺、凄じなんども愚なり、抑是は桓武天皇九代の後胤平の知盛の幽靈なり、あら珍らしやと夕霧立込め、惡業深き修羅の苦患、思ひぞ出る浦波の、聲をしるべに出舟の、知盛が沈しその有樣に、義經來れと引汐波のもん、長刀取のべくる〳〵〳〵、義經騷ず詞をかはし、太刀音てふ〳〵現の人に向ふが如く、見ゆるこなたの卿の君、アレ〳〵あぶなやハア〳〵と、あせる計に、喜三太もろ共、眼もくらみ心も亂れて、前後忘ずる計りなり、舟には辨慶艫につゝ立、中央大聖不動明王と、押揉む珠數先さら〳〵〳〵、波にたゞへて死靈の聲〳〵、哀しらずや淡路潟、河波の鳴戸のあは雪と、消てもきえぬ恨の數々、我は重衡是は忠度、清經、敎經、通盛、敦盛、敎盛、賴盛、二位の尼君、官女の怨念、瞋恚の炎ひらめき渡り、鴛鴦の思ひ羽妻乞鹿、誰か哀は白旗の、源氏に內裏を追立られ、須磨や明石の苫筵、戀慕の敵は、皆義經にありそ海、深き妬を知らせん物を腹立やと、爰に顯れかしこに消え、猶怨靈は慕ひ來るを、追拂ひ祈退、さつくにかける知盛が長刀、傍りを拂ふて、修羅の妄執雨は矢先、浪は清劍舟は鐵城、西海四海の因果は爰に義經の、舟は吹來る風に連、いづくとも無怨靈の、形も消えて眞の闇、二人はとかう詮方も、渚の千鳥鳴く計り、翅もあらばと身をもだへ、淚の袖やひれふる山、彼古への松浦潟、今目の前に小夜

御寵愛深きと聞、羨ぬ者もなき中に、我も佛と持てはやさるゝ身、同じ身業の扇の手、誰にかは劣べき、妓王妓女とて何程の事わらんと、サア罪深くも思ひ付、清盛公のおはします、西八條の御館へ、押て參りし我念念、清盛公には御怒強く、妓王妓女に耻もせず、推參したる憎いやつ、門前より追拂へと、御意なされしと取次聲、其時の耻しさ口惜さ、我でに作る罪なれど、さうとも思はず妓王妓女、妬しや恨めしと、思ふてすご〳〵八條の、館の御門でましたはいのう、して又其後清盛公の御前へは、何として出られしぞ、ナア其わとを聞てたべ、優しくも妓王妓女、詞をそろへて申す樣、押て參るはよく〳〵に、君がお傍を願ふ心、女の身は相互、殊に同し扇の友、只一度の御目見えを、思ひでにしてかへらせたしと、達て願ふに御心とけ、佛よべとの上意にまかせ、御前に出てひとさしの、靜の袂や扇の風に、映ふ人の花心、我に盛りの色見えて、いつしか二人の御召さへ、遠山鳥のおともなく、長々し夜を獨寢の、喞ちわされる思ひぐさ、もえ出るもかるゝも同じのべのくさ、いづれか秋に逢はで果べき、と一首を殘しうば玉の、黑髮きつてふたり連、嵯峨野の奥に墨衣、殘りし歌を見るからに、我もうき世の夢覺て、忽ひらく悟りの花、花の浮木の龜山や、此庵にたつね來て、倶に佛道修行の身、あさ茅が宿にわりし世を、軒の忍ぶの摺衣、亂れし世の中思ひやる、昔のうさを清瀧の、流れて早き年月に、ふたりの尼も世を早うし、今枯殘る一本薄、穂に出てかたるもはづかしや、御心おき

えにけり、思ひ合する宵の夢、ぞつと身に染のうこはやと、迯出給ふ卿の君、喜三太も悔りの胸なでおろし、何にもせよかく平家の跡を吊ふからは、此庵りの尼も平家の餘類、君に仇をなさんも知れず、一時も早う立退ん、いざさせたまへと手を引、出る後の暖簾上げ、平家と聞て恐れ給ふ卿の君樣、お前は平大納言時忠卿の、御息女にはあらざるやと、主の尼は立出て、誠又平家の餘類ならば、源氏へはこつちから迯る筈、此庵をいで、何國へよるへ、サアそこに味方の人がこざるぞ、源氏といふても鎌倉殿とは敵どし、源氏が源氏を責るやら、平家ときいて平家が迯る、仇も情もあらぬ世の中、よし此尼が平家にて、仇をなすとて何程の事、落武者は薄の穗と、身がらに連て心迄、臆病になられしか、ヤイ喜三太殿と留られて、出るに出られず立戻り、默然として居たりしか、喜三太は横手をうち、ホヽ尤の一言、なま中にこの家を出て、鎌倉方の侍共、みつけられてはおん身の上、物靜なる嵯峨野の庵、あなかしこ人に沙汰ばしし給ふな、シテおん身は如何なる人、いかなる事の縁により、かく平家の一門方、吊はるはいぶかしと、問はれて尼は泪を浮め、お恥しき事ながら、わらはが元は佛御前と、世に謳はれし白拍子、ヱヽほんに夫々、靜御前のはなしにて、きゝ及びたる佛ごぜん、扨はさうかと喜三太も、始て動氣は納りし、尼は佛間を伏拜み、アヽ語るも面ぶせなれど、一通り聞てたべ、白拍子多かる中、磯の禪司が弟子の中、妓王妓女とて、其頃は平家盛んの折から、清盛公に召出され、

も悲しく、コレ〳〵〳〵そなたは手を負ふたか。いとしやのうと尼諸共、藥よ水よと介抱に、苦しき息をはつとつき、御臺樣、敵は殘らず切はらひましたれど、此手で御供はもう叶はぬ、エヽ口惜やと無念の涙、身を震はせば疵口より、流るゝ血汐から紅、戸無瀬の瀧に秋ふせて、紅葉を散らす如くなり、卿の君縋り付、そちに別れて今よりは、いづくをあてに我君の、御有家を尋ぬべき、どうぞ死ずに養生して、力になつてくれかしと、喞ちたまへばお道理と、主の尼も倶涙、詮方もなき折からに、表に窺ふ以前の非人、すつと入て喜三太に向ひ、ホヽ適の御働き、數ケ所の深手嘸かし御苦痛、ケ程のお人をやみ〳〵と、雜兵の手にかけんも殘念、迚も其手でお供はなるまい、卿の君樣は私めがお預り申し判官樣の御有家尋ね御手渡しゝて進ぜませう、サア敵のこぬ内に、御心しづかに御切腹と、いふに喜三太目を開き、ホヽ誰かはしらぬが優しき一言、しかと汝にあづけたぞ、コリヤ必ず〳〵、我君樣に御對面させまして、くれ〴〵賴むたのむぞと、刀を逆手に取直す、尼が稱名卿の君、ふた目とも見もやらす、倶に唱ふる南無阿彌陀、喜三太ぐつと突立つる、非人は御臺を引立てゝ、なぐり情もあら繩め、是はと支る尼を一當、そんなら儕は、ホヽ鎌倉の出頭第一、梶原平三景時じやはやい、乞食と樣をかへ、義經の樣子窺ふ中、漸々尋ねあたつた卿の君、鎌倉への能土産、何と膽が潰れるか、迚も叶はぬわれがざま、此世の思ひ出語て聞すと、聞て今はの喜三太が、無念〳〵と五臟を揉上げ、齒ぎ

なう御逗留、あそばせやいのと打とけて、語るも昔し思はれて、心佛の讖悔はなし、暫しはうさをや忘るらん、かゝる折から梶原が家來犬間の源藏、大勢引つれ庵の表、追取まいて大おんあげ、この家の内に鄕の君をかくまふ段、忍びの犬間か見付たり、供する厩の下郞めもろ共、尋常に腕廻せ、但しひと働してみるか、腕に覺えの此源藏、腰ぬけ厩の毛二才め、馬乘にして繩をかけ、牢屋の飼葉にくらはせん、どう〳〵どうかと訇つたり、驚くふたりをしのばせて、喜三太から〳〵と打笑ひ、ヤア門口に長吼する、犬間の源藏面白い、御厩が駿足に蹴て〳〵蹴ちらさん其時に、叶はんといふて迯吼すな、犬もあるけば棒に合ふ、いらざる詮議取置て、尾を振て立かへれ、いやとぬかせば刀の番木鼈、手足を括つて眞倒、渡月橋からどんぶり水葬、命にかけがへ有ならば、來い〳〵〳〵と待かけたり、物ないはせそ打取れと、込入大勢事ともせず、爰をせんとぞ戰ひける、大勢にわたり合、敷か所の疵は負ひから、烈しき太刀先たまり得ず、源藏始め捕手の大勢、叶はぬ赦せと迯行を、いづく迄もと追て行、表に宵より寢て居る非人、むつくと起て、イヤやかましい、あつたら夢を覺したと、つぶやく內には鄕の君、あるじの尼も立出て、喜三太のう、喜三太どの、長追無用戾つてと、呼はる向ふに人聲足音、非人は菰をひつかつぎ、又も樣子を窺ひ居る、多勢を相手に喜三太が、追ちらし切はらひ、源藏が首提げ、猛心も急所の痛手、よろぼひ〳〵庵の內、御臺樣鄕の君樣と、呼はり〳〵刀を杖、見る

て理詰仕て下されと、いはれて出る文使、ひと目見るより鬼殺し、ぐつと目玉をむき出し、うぬなんでおれが作と懇したと觸あるいた、ヲイ〳〵鬼でもころす鬼殺し、にらみころしてこますぞと、上から出られて富藏が、アヽコレ駄々八もう叶はぬ、わがみがお作と懇した文使は此富藏、あとの難儀遁れるため、殘らず夕邊ぶち負た、アヽコレ〳〵其樣にこはい顏してにらましやますと、どうやら懇せなんだかとも思ふし、コレ〳〵富印し、夫で夕邊この三右衛門にいふたとは口が違ふぞや、お作が所へ、駄々八が文をとゞけてやつたは此富藏、ヤこいつが〳〵云かけひろく頰かまち、蹴裂てくれんと立かゝる、アヽコレ待た駄々八、ア駄々八樣少しおひかへ、一言申上たき事がございやす、何申三右衛門樣、あの樣に睨れて見れば、どう思案して見ても、お作は外に盜人があるわいの、又一分別なされませと、はつきりめかぬ證據人、是さ〳〵、折角尋ねて見付た駄々八、今になつてどぢぐぢや、こりやマアどうせう、十助安兵衛、外に證據はあるまいかと、急な相談大事な所、三人よれば文珠の國惠、四人の智惠なら文珠より、一ツ餘つて大津の所、草津ものゝ三右衛門どの、兼てお作にやこなんが惚て、口說た事も聞て居る、ヤ鬼殺、わりや夫をどうして知てゐる、是はきついは、ヤまだある、文やつて戻されて、朝飯を遲ふ喰せて、これで少しはらがいたと、いふた事も知つてゐる、マア、こりやきついはヤほんに思ひあたつた、お作はこなんが孕したの、女が宿の尻をこはがり、お

しみ歯切手の内に、爪は通てつんざく拳、全身朱に染なせしは、哀にも又いぢらし、、程なく舁くる網乗物、家來の大勢高提灯、御臺所を下部ども、無理に引立打込乗物、行列揃へて振出すや、雪を照らして出て行、影時待と剛氣の手負、摑かゝるをかいくゞり、刀もぎとり拜み打、討るゝ忠臣討佞奸、時の權威に乗物を、追立させて急ぎ行

第七　粟津松原の段

鳰照るや、漣寄る濱傳ひ、波の粟津の松原を、馬追立てひよつこ〳〵、鬼殺し駄々八が、跡きらどや〳〵踏立る、草津の宿屋いつきせき來り、鬼殺し待をれど、口々わめけば馬の耳、コリャヤナ風くらふて隠れても、草津の宿に隠れない友鶴やの三右衛門、猿眼と異名をとつた男の目を拔て、こちのおじれの作を孕ませ、よう拔をさせをつたなア、夕邊から作が見えぬ故、問屋組中衆頼んで捜したれば、孕ませた相手はわり様といふ事聞出した、サア作を戻せヤイ、いやどぬかすと代官様へ願ふてめつきしやつき、僣はコレ盗人になるぞよ、首おこさうより女をよこせ、返事次第で代官所と、嚇しかゝれどせゝら笑ひ、是申親方様、イヤ親方三右衛門殿、さつきにから味な事いはしやんす、こなんの抱へのお作女郎がつぱらんで欠落すれば、なんでおれがお代官様へ行のじやへ、コリヤぬかすなやい、則證據人は爰に居る富藏、サアそこへ出

候所、實正明白なり、萬一受判人主國元の親共等、後日に違亂妨を申出し候はゞ、連判の者共罷出で乾度埒明、御夫婦に御難儀かけ申間敷候、依て證文件の如し、年號月日も高らかに、夜店や安兵衛、岩田や十助、二九屋の富藏當名がないが、是はどうじや三右衛門、ハテそれは勝た者の名を書入、ヲヽ成程こりや尤、途中の事なりや爪判で、了簡めされと押仕廻ば、鬼殺しは腕さすり、是からが勝負の段、相撲取うと立かゝる、富藏扇さし翳し、こなた親方〳〵、こなた馬士〳〵、いさ勝負參らうと、三右衛門が手を取れば、アイヤ〳〵〳〵、そなたは大兵おれは中兵、力くらべの下卑勝負はよしにして、弓鞠茶の湯碁双六、謠はしらず義太夫もしらぬ我らが器用肌、神の御鬮の長短、千くさ結びはどう有う、ハテ女子供じや有まいし、縁結とは馬鹿らしい、男らしう取たか見たか、投長半で勝負せう、此儀もつとも然るべしと、皆車座に居並んで、サア駄〻八賽があるか、それをぬかつて能物かと、煙草入から投出す、投長半の賽三粒、悪い事には染安く、見る三人も助太刀と、小遣錢のざら勝負、既に博奕ぞ始りける、これ〳〵組しやれ出やつしやれ、博奕は五十三次で、誰何人も並木陰、半目からみの片側勝負、賽は半分負てやろ、つぶなら勝負と投る賽、四人が喰れる虎が出て、これが軍の破れぐち、半氣とゆけば長になり、長とかはれば半が出て、はぐりの錢まで打こんで、負腹立程ぐりはまの、是はそつたぞかぶつたぞ、かぶり次手に頭巾足袋、脱程とろき鼻の下、延が續て十六

作を埋んで其罪を、おれにぬすくる惡工、なんと違ひはわるまいが、是からおれが代官所、する所でして見せる、皆うせ上れと逆ねだりに、青うなつたる草津の三右衛門、ゆすりかゝつて衒るゝは、一にあたつた富の札、道におとした心地なり、富藏中へ割て入、コレ申し三右衛門樣、お前お作にはの字なら、强に駄々八が科ばかりでもございやせぬ、今になつて見た時は、どちらが作が色やら分らねば、爰でみにくし一ツの智惠、掛とくの勝負をして、勝た者がお作が御亭主、孕女が夕邊の欠落、唐天竺へも行はせまい、草を分つて尋出し、勝た男と夫婦にすれば、孕だ逆疵にもならぬと、半分さかず友づるや、ヲツト呑込富印、皆までのたまうべからず、何をかくさう三右衛門、お作に心有間筆、書てやつたふみの數々、封もきらずに返した憎さ、其上に孕だ故、八あたりの男の詮議、夫からの欠落、所で駄々八とおれとが掛德して、おれが勝たらば、皆の衆が寄て、作を尋出し、外の色めが手を切らし、おれと夫婦にするのじやの、夫が定なら今爰で、勝た男に作を添すと、惣連判の證文さつしやれか、鬼殺しはなんと思ふと、儕が戀の得て勝手、駄々八も打點き、證文とは面白い、皆の衆も呑込なら、三右衛門殿一筆賴む、ヲヽ合點と矢立の筆、半紙の鼻紙さら〱と、書てわたせば富藏が、讀を聞ゐる十助安兵衛、何じや妻爭ひ勝負の定、證文の事一ツ、此作と申女、爺なし子を孕候所、右の相手三右衛門駄々八兩人の內と相見え候故、掛德の勝負を致させ、勝たる方へ作を女房に遣はし

清兵衛が、夫は氣の毒な、コレ爰に持合せた小玉が廿匁、瀬田の百足屋で錢にして、紙合羽なと買ふて着て、一時もはやういんだがよい、モ知ての通りわしが善根、この金戻すにや及ませぬ、早う〳〵と力を付られ、地獄で佛に青菜屋、清兵衛樣とふし拜み、是から瀬田の百足やで、お足を買ふてゐたゝまらうと、金押いたゞき四人が、寒さ紛らす拍子取、鷺よ鷺々鷺々縮蹐踏む鷺よ〳〵、ゐひるぐわい〳〵ぐわい〳〵〳〵といふてべた居り、元氣づいたる丸裸、揃ひも揃ふ鼻の下、長橋さして立歸る、清兵衛は、うれしげに今日も思はず少しの施し、是も未來の親の爲、南無俗名熊坂の長範、出離生死頓生菩提と、涙の玉や珠數の玉、浪の玉ちる巖とて、取わけ婆の名人が、ほうど行合ひ、これは扨清兵衛樣は石山參か、テモきつい信心者、觀音樣の御利生か、お家樣のお達者さ、お中のやゝもきつい動きやうじや、定めて丈夫な和子でござりましよ、ホヽヽと追從笑ひ、サイノ子育がない故に、觀音樣へ日參も、今の樣に云て下さるし、少心も落付まする、が今月が當り月、胸のかさもへりました、油だんなう見舞ふて下され、アノおつしやる事わいのう、そんな事ぬかりは致させぬと、四方山咄し其中に、清兵衛が前巾着、ちよいと渡ひし手熊婆、見ても見ぬふりの佛清兵衛、あすをも知らぬ老の身で、物ねすむ氣のあさましやと、思へば親の熊坂を、又思ひ出す未來の罪、アヽ南無石山の觀世音、助け給への口のうち、內の男がいつきせき走り來て、申々旦那樣、明日梶原平三樣お泊の先觸が參り

盃、四人殘らず丸裸、助七くれよと口々に、わめけどきかぬ馱々八が、錢も衣類もぐる〳〵卷、馬にしつかりくゝり付、三右衛門に證文突付、サア約束の通り勝た男、當名は馬士の馱々八と、書て下はれ書しやれと、いへど三右衛門佛頂面、ムヽ人相面で書ぬ氣か、アヽ能いは儘よ、かゝざ是から代官所、勝負にかつた作が男、おれが女房に不義した親方、ござれ行うと引立る、アヽコレ書まする〳〵。夫書まするると墨黒に、それでハイようござりますかな、ヲヽ是でよい〳〵。今から作はおれが女房、この着る物もおれが物、證文はなほおれがもの、皆の衆さらばと荷付馬、大津のかたへ追て行。跡にのこるは褌斗り、云合さねど三人が、三右衛門をとり卷て、コレ〳〵貴樣の賴みで女の詮議、仕て見せうして見せうと云たゆゑ、するか〳〵と思へば仕もせいで、仕たといはれてゆすられて、かけ構はぬこちとら迄、密男の受判させ、あげくの果に丸裸、身中が冷る比叡颪、寒うて無念でぶる〳〵と、ふるふ程腹が立て、涙ど水鼻が四ぶ六ぶに流れますはいのう〳〵と、恨を詫る三右衛門、倶に無念の齒ぎしみも、齒の根も合ぬわな〳〵わな〳〵、折から大津の青墓屋、女房が安産願込に、石山參りの歸り足、是が扨草津の友鶴や殿、お連の衆もめつさうな、此松原に丸裸、寒うてどうもたまるまい、どうしたわけじやと尋れば、清兵衛殿か〳〵〳〵、よい所へ來て下された、此難救ふて下されと、樣子殘らず咄す中、三人は猶くもり聲、草津まで三里の道のり、いぬる思案を賴ますと、口々いへば

年今年の閏月で、行先々がづばらみをる、取あげばゞが福徳の三年目、拍子まんの能さおれと、不仕合な貴様と、たつた二人で打博奕か。アヽ能は何も後生じやうつてやるぞ、ヤヽそりやはんかいな有難い、長半かちよぼ一かと、芝原にどつかり坐を組、懐の賽とり出し、ぎえんを祝ふ手轉合。早馬士殿、長半とやらは名ばかり聞て、わしはねから知らぬ博奕、ちよぼ一とやらにさつしやれぬか、ヲヽソリヤお前様のお好次第の乗かける、コレ馬士どの、其賽は仕掛ものじやござらぬかや。アノマ御勿體ないお年寄を欺してよい物でござりますか、申ソレ賽をとくと改めて御ろんじやれませ、ヲヽ見ませうと手にとつて、ひねくり廻し、すり替てやる悪賽と、しらぬは欲に目も見えぬ、眼鏡取出す巖ばゝ、コレ嗅さん錢を賣りやんしよか、ヲイ一分で壹貫五百文にして賣らしやませ。エアノ一貫五百にかへ、テモ胴欲な婆めじやと、思ひながらも子供に花、一本頭の五に二百、これは白いど面白い、白いも道理ばゝじや物、ヤコレ〳〵嗅さん、陰を付たらよかろぞや、ヲヽそんなら裡目の二を少し、張目は二ッ明日は四ツ、うまいうまいと舌鼓、打出す賽は梅の花、大屋へ受て四割半、受け錢打込むしがへし、五と二に一貫八百文、爰が博奕と投る賽、今度も梅の二度のかけ、早馬士は落城して、以前の一分で錢かへば、ばゝが相場は一貫文、馬士はせき上げコレ〳〵婆様、こなたに賣たは一貫五百、其相場で賣らつしやれ、イヤ〳〵高くば止ましよ。年寄は物飽が早うござると氣を持され、やけになつ

ました、サヽ早うお歸りなされませと、云捨とつかは歸りける、サア急うなつてきた、コレ申巖樣、くれ〲も賴ますると夕日影、別れてこそは急ぎ行く、駄ゝ八は、勝たる雜物殘らず賣拂ひ、貫錢かたげ來かゝりて、見るとも白髮の巖、ちよろまかしたる前巾着、口をほどいて、施し好の佛清兵衞、巾着の中に慥かに四五兩と、思ひの外たつた二ぶ、骨折損とぼやくのを、聞ゐる馬士か胸算用、なんでもあの金せしめてくれんと、乙に入たるどす聲で、コヲレ〲おばゝ、こなん能物持てじやの、其金貸て下はれと、松から太く膽で行、おどしを喰はぬそれ者の婆、ヲゝこな馬士殿は目利違ひ、わしや取上の巖とて、受とつた產婦が氣づくと夜々中でもこの海道、獨りあるきする者が、金貸といふたとて、アイ貸ませうといふやうな、あまい婆ではござらぬと、いふ面付から形そぶり、歌や連歌じや行かぬやつと、趣向し替てにこ〲顏、かさから出たは有樣は、こなんの胸中ひき見ん計略、アノ此樣に目が違ふ物、博奕にも負る筈じや、腹立すとも一通り、きいて下されおばゝ樣、わしが不仕合せ、七つ八つから色取覺え、艸津のおじやれと馴初て、一夜が二夜と度重り、爰の名代の子持鮒、顯はれ月も隱しかくした產月の、ひとり口ふへたれば、精出して馬追ても、たかの知れた錢設、それ故しやうことなしに夫婦が着物、賣代なした錢が六貫七百文、今博奕にゆく所じやが、見た所がお前も博奕は好さう、コレ〲へこなんな物相手に博奕打なら、ゝ今じやぞやと、そやし掛られ巖ばゝ、一昨

第八　大津旅籠の段

晩にござれよ必ずやいの、閨の襖を細目に明て、赤前垂をといて待、閨の襖を細目にあけて、赤前垂を解てまと、登る旅人下たる人、知るもしらぬも大津の宿、夕邊〳〵ぞ賑しさ、棟門高き本陣脇、奇麗屋が夕氣色、表は盛砂關札は、梶原殿の泊り迚、矢筈の定紋張幕に、靡き隨ふ時つ風、勝手は料理組板に、水かけ流す居風呂の、下に燃さす薪迄、心をつけて亭主淸兵衛、袴着ながら出來り、扨も〳〵せはしなや、コレ女房どもそなたは、ソレ此月が產月じやないか、此やうに取込中、氣が付うもしれぬぞや、かねて賴んで置た取上げば〻、彼巖殿呼にやりや、ソレ女共お着に間もあるまい、お座敷の掃除はよいかと、詞半へとぼ〳〵と、杖はつけども岩疊づくり、名さへ巖とあらくましき、足音あらく門口から、淸兵衛樣、今宵は梶原樣のお泊り、嘸お取込、お內儀さまも今朝から、勝手の賄ひ働いてか、コレ產月には隨分と身をこなすが、產がかるいと、お定りなる挨拶に、女房は會釋し、コレハ〳〵いはほ樣ようこそ〳〵、毎日〳〵遠い所を御苦勞じや、わたしも今朝から氣もかろく、隨分とはたらきます、ヲヽ夫はよい事や、トレ樣子を見て進ぜう、ヲヽ昨日よりは癪も治り、此腹帯のしまり加減は、余程下へ廻つて來た、二三日にまは有まい、奧へいてとつくりとおなか取て進ぜ、此年寄が毎日〳〵此やうに、

たる馬士が、一貫相場で錢買ふて、二番回りの胴なれば、これからはおれが張ると、もんちに張し四三六、ばゝが投ても梅の花、一貫文は一番に、取れて脱し大脱子、三番つゞいた列の五じや、是が五百で五にそつた、前垂と此手拭ひ、三百六十八文で、三と六とに張ました、サア／＼勝負とせきがくる、巖は氣になる五を張られ、不承々々に投げる賽、二が出て脱子帶前垂、殘らず胴へ引上られ、二番濟んだら是から又、おれが胴しやと馬士が賽を、取る手を婆押へて、二番廻りの胴なれば、張ない物じやなけれども、着物まで張込で、なんでこなたは胴をとる、ヲゝこなたのはり日へ當れば是、此馬を知たか、地鯉鮒の市で九兩一分で買た、金の替りに馬を拂はふ、イヤ／＼おれが持て入ぬ馬、金の替りにやおりやいやじや、ヱゝわたぶの惡い狸婆、助引も有物じや、どうしてなりと錢は拂ふ、じごんじ云ずと張つしやれ、イヤあてのない博奕はいや、ヲゝそんなら一貫宙借しよかい、イヤ錢借す事もいやでござる、ヲゝいやなら置けと婆の顏へ、投付る賽ころ／＼／＼、こけてもやつぱり梅の花、是は不思議と馬士が、投ても／＼五と二と斗り、ヱゝ是で讀た、賽改めるふりをして、五二平賽とすり替たな、街婆めと馬士が、摑みかゝるをかいくゞり、かくし持たる口繩を、首にかけたる引こき結び、尻をたゝけば一散に、駈出す馬に駄々八が、引づかれてぞ三重

シテ其藥持參せしかと、咄しを立聞主の清兵衛、義經公の御胤を懷胎の卿の君、御身の上の一大事、いかゞはせんと息を詰め、耳を濟して聞居たる、景時は笑壺に入、家來共にも聞さぬ密事、卿の君を引出し、彼藥を用ひんず。ソレ〳〵早く引立來れ、ハッと忠太は奥の間へ、いかつがましく入にける、跡に梶原傍を見廻し、コレ幸と有合す藥鍋引下け出、火鉢にかけて打込藥、手づからあふぐ扇の風、そよとの音さへいとひしに、昨日の榮花卿の君、今は胡國の囚はれと、打しほれたる御有樣、平三景時聲をかけ、ナニ卿の君、常ならぬ身に永の旅路、嘸辛勞と察し入る、勞れを拂ふこの藥、イサ召れよと差出す、常にかはりし物和らか猶恐ろしさ、何といらへもなしまさず、コレサ〳〵なんにも氣味のわるい藥ではないわサ。コリヤコレ墮胎のおろし藥、エヽ胎内に宿せし、義經か忰生置ては、末々まで此梶原が心がゝり、水にして仕廻ふはやい、サア〳〵喰へと主從が、中に取込追廻す、遁れ方なき鷲鷹、見入られたる雛鳥の、泣音血を吐思ひにて、わつと斗に歎しが、アヽ拗も〳〵是非もなや、かく囚れと成しより、兼てなき身と知りながら、女のはかない心から、せめてお中のこのやゝを、產み落し參らせてと、思ひかひも情なや、何にも知らぬお中のやゝ、おそろしい墮胎藥、自が身は先立ても、せめて月日の光を見せ、其上は兎も角も、暫しは赦してくれよかし、源氏を守りの氏神も、見放したまふか淺間しや、前世の戒行目出度て、清和の末の御流れ、義經公の御胤を、孕みたまふ御身

通ふのも隨分と大切に、今度は水にならぬ樣に、安々とうませねば、しつかりと禮金がとられぬ、ソレ揉大根や白魚は、血をわらす物喰まいぞ、又御亭主樣も必々、産月の道開きも、度々はならぬぞへと、笑ひをしほに淸兵衞も、打連勝手へ入にけり、折から表さゞめきて、梶原平三景時、人に勝れし緩怠頬、鳥なき里の蝙蝠も、黃昏近き急の道中、網乘物に引添ふて、家來醒井兵太を始め、組子の面々追取圍み、事嚴重に打通る、兵太が取次亭主淸兵衞、冥加至極と跼る、梶原平三遙に見やり、此家の主は儕よな、此度京都堀川御所の沒落、聞も及はん大將義經を始め、龜井伊勢武藏なんど、面を出す者もなく、アノ召つれたる乘物は、義經の御臺鄕の君、生捕て鎌倉へ引渡す、大事の囚人、先乘物を奥へやれど、下知に隨ひ家來共、亭主も勝手へ梶原景時、續て入んとする所へ、息もすた〳〵駄々八が、口綱片手の早追馬、サア〳〵親方、おりさつしやれと、いふまにひらりと番場の忠太、ホヽ馬士大儀〳〵、早行休めと追立やる、梶原見るよりヤア忠太、早打とは心元なし、サ樣子は何と、ハツ鎌倉に御座なさる平次樣の仰には、此度鄕の君を召連、御下向の樣子、兼て義經の胤を懷姙せしと承はる、鎌倉へ入ては、例の秩父廣元なんど、命乞抔といはゞ事六ツケ敷、途中にて胎内の悴、水にして仕廻ふ工面、御典藥に申付、調合せし此藥、早おん用ひ然るべし、委細は御狀に候と差出せば、平三景時逐一に讀終り、ホヽ子を見る事父にしかずと、鎌倉に殘せしが、悴が思案手短で面白い、

ゝ臨月とは申しながら、まだ何の氣もないに、九ツ迄に身二ツとは、ヲゝどん腹をかつさばき、身二ツにして我に見せよ、エゝ密事を知たるおのれなれば、腹かつさばく役目をさすも、鎌倉へ洩れ聞すまい爲、いやでも應でも違背はさせぬと、むごいめしらぬてつ平挫、卿の君は氣も消え〱、主もはつと差俯き、思案途方にくれけるが、胸を定て手を支へ、ハアゝ是非もなき御仰去なから、是迄悲慈を專とし、魚鳥は勿論虫けらの、命さへ取ぬわたくし、斯醜ろしい役目を受るも前世の因縁、町人風情清兵衞なれば、さながら苦しむ體を見ては、心後れは定めの物、卿の君の顔を包み、氣後れのないやうにして、お役目乾度勤めませう、ホゝでかいた〱、後夜まではまだ間もある、卿の君を一間へ連行、忠太乾度相守れ、まづ夫迄は奥の間で、一獻くまんイサ來れ、亭主用意と云捨て、引つれてこそ入相の、鐘も無常の響かや、鳩の秤に身を掛し、佛の悲慈にかはらぬや、清兵衞はなまなかに、心を盡せし甲斐もなく、結句我身にかゝるべき、御運の末の痛はしやと、そゞろ涙に呉居たる、始終の樣子物陰に、女房おさごが聞ぞとも、知らぬ主がとつ置つ、のつぴきならぬ時宜となり、役目を是非なう受合ふたも、御身替りの心當りは女房おさご、とはいへ何と是がマア、命をくれよといはれうか、さはいへ卿の君の命を取ては、修行者の物語りし、父の冥途の呵責となる、兎にも角にも前生の、因果の程のおそろしやと、思ふもいふも胸の内、聞女房も心根を、思ひやつたるうき涙、思案極めてしほ

にて、かゝる憂目もあることかと、世を恨みたる喞ち言、立聞主も御心根、思ひやつたる貰泣、ヤア何程になげいても、かういひ掛つたる上からは、呑でも呑ず呑まいでも、口押割ても呑さにや置ぬ、ソレ番場、畏つたと番場の忠太、茶椀追取立かゝる、清兵衛中へ割て入、マア〳〵マア〳〵お待下されと、忠太が茶碗引たくれば、ヤアうぬ何知つて出しやばり立、殊に樣子を立聞曲者、旁油斷なりがたしと、友打かくればアヽ申し〳〵、樣子は何にも存じませぬぞ、私は少願望がござつて、一生物の命を取らぬ大願、其私が家で子をおろすとは、餘りむごい、十月に足らぬおろし子は、三世の諸佛も一同に、歎かせ給ふと承はります、散りと承たところが、義經樣のお胤が殘らぬ樣にと思召も、御子孫の仇となすまい爲、末の繁榮を思召ての事じやござりませぬか、子孫の榮を思召なら、仇有人にも情をかけ、忝い有難いと思ふ心が、直に御祈禱、左樣じやござりませぬか、爰は私が一ッのお願ひ、どうぞ身二ッに成なさる迄、私にお預下さらば、有難う存じますと、思ひ入てぞ願ひける、いかさま倅がいふ如く、是式に我手をおろし、万が一鎌倉へ洩聞えては事六ケし、爰は己れが願ひに任せ、身二ッになる迄預てくれう、スリヤお預け下さるか、ハアヽ有がたい忝い、コレ〳〵申お悦遊ばせ、ハアヽ〳〵嬉しやと手を合せ、ぞく〳〵悦ぶ有樣は、殊勝にも又しほらし、ホヽ倅が詞に任せ、預るは預るが、産落す迄べん〳〵とは待れぬ、今宵後夜の鐘鳴迄、身二ッにする分別せば、ハーア

泣聲與へ聞さじと、袂を口に押當〳〵て、忍び涙ぞ哀なり、ヲヽ女房、過分な〳〵忝いぞよ、夫婦の中の義理を立、逢も見もせぬ舅の爲、命を捨ても冥途の責、救はんといふ心の操、女房とは思はぬ、コレ手を合して拜ぞや、梶原が云付より、御身替とは思ひ付ど、死んでくれとは云兼て、いろ〳〵と心を盡し、先面體をかくし、腹さへ裂ば其跡は、血汐で顔のあやちも知まい、思切て死でくれとは云ながら、義經公が三代相恩の、お主様といふではなけれど、父の末來を助んばつかり、腹な悴に日の目も見せず、現在親が手にかけて、妻子を殺す因果人、推量してと跡いひさし、詞なみだにくれ居しが、アヽいつ迄いふても返らぬ歎き、コレ女房、卿の昔の姿に似せ、殿上眉に引白粉、下髪に結直しや、アイと泣々女房が、棚よりおろす鏡立、櫛笥の水の露の間も、此世の名殘むせかへる、涙にくもる鼈甲の、笄拔て小枕も、取亂したる姿見や、其俤も記念かと、夫も見やるうき涙、おろの鏡に露時雨、コレ清兵衛殿、夫婦は二世といふからは、逢れる事もあろけれど、親子は一世の契りと聞けば、おなかのやうにはもう逢れぬ、もし廻り逢ふたとて、一目も見ずに死ぬる親子、顔もしらねば行合ふても、子とも親とも得しらづ、迷ふて斗り居るであろ、エヽ愚かな女房、後れ先立は世の習ひ、行先は皆一ツ極樂、救ひとるは佛のお慈悲、自然と親子夫婦とも、あの世では廻り逢、必心迷はずと、只お念佛を忘りやんな、ソレ其襟かけの子安の守り、大事にかけたも皆徒事、手にかけて殺さう迚、祈祈禱はせ

〳〵と、コレ清兵衛殿、そこに何して居さしやんすと、何心なき女房の、顔見るに涌出る涙をかくし、ヲヽ女房共、アノ奥にござるは、義經公の御臺卿の君樣、お胤を宿してござるゆゑ、鎌倉へ擒となつてござるは、何とおいとしぼい事じやないかいの、わがみも知て居やる通り、大物の浦で聞た、父の來未の苦患を救ふは、源氏方の人々のお爲になれば、夫が則善果となると、修行者のはなし、どうぞや力になりたいと、思ふてもいひがひない此體、どうぞ仕樣もあろけれど、おれが口からからうじやとは、おりや身を切る程いひにくいと、そむける顔の横しぶき、袖には落ず心には、落る涙の村時雨、これこちの人、二世と誓の女房に、なぜ打明ていはしやんせぬ、ソリヤ聞えぬ、聞えぬわいな聞えぬわいな〳〵、梶原が難題、思設けぬこなさんの役目、卿の君の腹をさけとのいひ付、わしやよう聞てゐるわいの、悲慈善根を表てとし、假にも酷い心を持ず、佛々といはるゝ身に、この災難は何事ぞ、舅御樣の菩提の爲、源氏に由緣ある人には、夫婦が命捨て成りとも、助け參らす其報、冥途の呵責一日なりと、休め參らせ、成佛得脫有ならばと、いひ合せしは爰の事、求にもとめし源氏の由緣、義經樣のお胤をやどせし、卿の君樣、相孕とは有がたい、願ふてもない御身代り、私を殺して爺御樣の、地獄の苦患助けよとの、是も佛のおあてがい、日の目も見せず消失し、三人の子が後生の爲、わたしは死るが嬉しいと、夫の心を押はかり、思ひ切ても女氣の、涙呑込のみこんで、夫の膝に取付て、

何でもいゝやとはいはぬ人じやと、世間での噺し、そこで此駄々八が、貰ひたい物があつて來たのじや、ムヽソリヤ何を、アノお大事の物じやけれど、こゝなお内儀を、おれに下んせ、ヤ何と、へヽへヽへヽかういや近頃恥しいが、モウ／＼惚て／＼惚て／＼、長半組ど手に付ず、延た目安の眞白も、みんなこなんの顔に見え、好の酒さへ咽へ通らず、いつも三番づゝ蹴倒した、十文盛が漸半膳、コレ痩たのを見て下され、焦れ死する鬼殺しじや、是を見殺しにしては佛清兵衛とはいはれまい、外の者とは違ふて、くれにくうもあろけれど、そこが慈悲善根とやらじや、常から美しい上に、アレ／＼あの樣につくりたてたら、又たまる物じやない、駄々八を立て一番貰ひましたぞや、サア／＼、鬼殺しに下あれと、藪から傍若無人の戀路、胴を据てぞ口説ける、清兵衛も呆れ果、コリヤ駄々八、わりや酒にゑふて居るな、よい加減に管卷やめ、イヤ儕此鬼殺し、酒に醉ていやせぬぞや、ムヽ本性なら猶以て、金銀の無心とは違ふて、味な望は、コリヤ深い工みが、夫は兎も有れ是計は、マア成まい、何じや成るまい、五十三次を勝にかけ、品川から大津迄、隱れのない鬼殺し、貰かゝつた女房、貰はずに置て、此駄々八が立物かい、コレ物をよう合點さあれ、青墓屋の清兵衛は、慈悲第一の男じやと、人の評判するは、物をしみせぬ故じやないか、夫に何じや、女房計りくれとむないか、コレ／＼お内儀樣、ヱヽ逃る事はないわいの、きたない物に障る樣にぴん／＼とじやじや馬、さつきにから氣を苛つも、

ぬわいやい、清兵衞殿、わしやよう覺悟して居る物を、ひよんな事云出して、又泣せて下さんすな、去ながら、女は五障三從の、只さへ罪の深い身に、産ずて死ば血の池の、うき苦しみの其上に、刄にかゝり死ぬる身は未來の程も思はるゝ、譬此身はあび地獄、奈落の底に沈む共、舅御樣の冥途の苦患、助かり給ふ嬉しさに、おなかのやゝもわたしが身も、微塵も惜まぬいとはぬと、思ひ切ても切れやらぬ、妻子に心後髮、倶に亂るゝ清兵衞も、よしないおれに連れ添ふて舅の作りし惡業を、嫁の身に引受て、夫に孝行盡させる、賢女とも貞女とも、三千世界を尋ても、そなたの樣な女房が、今一人有ものか、此世は短かい假の浮世、永い來世で此禮は、此清兵衞がいふわいやい、必半座を分て待ちや、追付跡から行わいやい、ヲゝノウ其一言でその樣な、身の苦しみも苦にならず、嬉しうござる忝ないと、夫婦手に手を取かはし、四の袂に打寄る、泪逆卷ばかりなり、始終の樣子最前より、表に立聞鬼殺し、ぬつと這入れば二人は悔くり、泣聲かくし何氣なく、ヲゝ駄々八、なんと思ふて夜夜半、イヤちやつこなんに無心が有て、ムゝ成程無心呑込んだが、今夜はこつちに取込んだお客も有、折節手元に金もない、明日おじや〳〵、イヤ〳〵なんじやあろと今夜聞て貰にやならぬ、コレ隙はとらぬ、マアちよつと聞て下されと、いふに是非なく、シテ無心といふは何ぼ程じや、イヤ錢金づくの事じやない、こなんは此大津にかくれもない後生願ひ、人に施すが好きじやげな、それじやによつて、人のくれといふ物は、

ありや、梶原殿へぶちまけて仕廻ふぞや、ドリャ臺所で一盃引かけ、花嫁殿をかたげていのと、きをひかゝつて入にける、跡に女房氣もそゞろ、サア／＼清兵衛殿、難儀の上に又難儀、どうせうと思ふてぞ、ハテどうといふたら一寸遁れ、天道次第運次第と、いふ中一間に足音は、見付られなと女房を、暖簾の内に忍ばす中、番場の忠太わらけなく、情用捨も卿の君、おん手を引立のさばり出、ヤア清兵衛、最前申付た通り、最早後夜に間もなし、早く用意と突飛す、ハッと是非なく立かゝり、痛はしながら遁れぬ場所、潔くお覺悟あれと、有合手拭ひ御顔を、包む情もめんない千鳥、泣音をおはふ手拭に、餘る涙の御覺悟、イデ此通り主人に言上、ぬかるな亭主と云捨て、忠太は奥へ暖簾の陰、女房おさご耳に口、心得帶を手取ばやく、卿の君の御上着、手々に脱せ參らせて、女房が身に恐れながら、人目ふせぎの我着物、打きせ／＼帶引しめ、我でに包む我顔も、夫の顔も見納と、心の内に暇乞、夫も張裂うき涙、後へぬつと駄々八が、ヤアのぶとい清兵衛、おれを一ぱいやらうとは、さう味ふはさせぬわい、一旦貰ふた此おさご、我が儘にはマア成るまい、こつちへ渡せと上着の目當、おさごと心得卿の君、宙に引立かけり行、ソレやつてはと追驅しが、イヤ／＼此場に置かれぬ卿の君、取違へしは一つの幸、仕樣もあらんと躊ふ内、命ちゞむる後夜の鐘、冥途の道をいそげとや、奥の一間を立出る梶原平三景時、引添出る番場の忠太、庭には下部が高挑灯、晝かと斗り威を照らす、ヤア／＼清兵

こなんのから尻が追たい計り、コレちよつとこちらを、アレまだびん〳〵、トヽどうしてくれる心じやと、しなだれかゝれば、時も時折も折、こつちの心を知りもせず、面白さうに何じややら、おだしたゝるいと振放す、夫は難面マアちよつとゝ、抱付引付駄々八が、腕もぎ放し、ヤイ駄々八、轉業かとだまつて居れば、つき上がつての此狼藉、善根を積む清兵衞でも、事によつたら赦さぬぞ、ムヽムヽハヽヽヽヽコリヤ面白いわい、夫程をしい女房、遠い所へなぜやるぞ、ヤア何といふ、ヲヽ卿の君の身替り、腹を裂うといふ事を、殘らす聞て居るわいやい、奥にござる梶原殿に、此通り訴人して、何もかもぶちまこか、スリヤ最前から樣子をば、ヲヽ女房くれりや其通り、いやなら奥へ訴人せうか、サア夫は、女房くれるか、訴人せうか、サア〳〵どうするのじや、ホイ、はつと計に當惑し、暫し詞もなかりしが、胸を極めて、成程女房われにやらう、エヽコレ〳〵清兵衞殿、それではお前、サア〳〵〳〵よいてや、今いやといふと梶原殿へナ、マア〳〵何じや有うと、鬼殺にそなたをやれば此場か濟む、ヲヽそりや能合點、何の役に立ぬ、身替を立うより、おれにたもれば命も助り、又此駄々八も嬉しがるか、大底の後生じやない、そんなら直に連ていの、サア噂おじやと引立る、コリヤ待駄々八、改めて無心がある、おれは男の心で、思ひ切てやつて仕廻ぞ、女房が氣にどう思ふやら、とつくりと得心さする間、勝手で待つてたもらぬか、ヲヽ夫程の事は聞てやろが、又ゐちむおりした事が

リヤ清兵衛、ようーぱいやつたなア、着物を目じるしに、引かたげていんだ女房は、我でに掴んだかへ玉、貰ふておいた女房を殺さふとは、わたのぶといさう味うはおれがさゝぬ、鬼殺しがさせぬわい、コリヤ駄々八、何にもいふな、此卿の君を殺さいでは、此清兵衛が役目が濟ぬ、其かはりに、此役目さへ仕廻たら、おれが體をずた〳〵に、刻んで成と、いやじや、我を刻んだ迚、番煙艸のかはりにもなりやせぬわい、とかくほしいは此おさで、コリヤ〳〵そりや何事是はコレ、卿の君、へゝへゝゝテモ押のつよい泥坊め、どれ化の皮引剝でか、清兵衛を引退、めんない千鳥引ほどけば、夫婦はほつと顏見合せ、いかゞはせんと立つ居つ、景時大にむくりをにやし、ヤア憎い亭主が身替り立て、ソレ通すなど下知の下、退さぬやらぬと組子共、清兵衞も一期の瀨さつしたりと、身をかはし、打込十手利腕取り、無双落し膝車、命限りを働け共、多勢に一人叶はゞこそ、押へて繩を掛たるは、無念といふもあまりあり、梶原はせゝら笑ひ、察する所義經が由緣の奴原、二人並べてなぶり殺し、番場の忠太ソレ計へ、はつと計りに立上る鬼殺立塞りイヤさうはならぬ、最前から口叩いて身替の手目上たも、此女房がほしい斗り、こいつは殺し成とも縛りなりとも、女房さへおれに下さつたら、こなさんのほしがらしやる、よい土產やりやんしよと、風呂敷ほどいて取出す、女の生首嬰子も血みどりちんがい、夫婦は見るより、ハツアかく迄心盡せしに、御運の末のいたわしやと、狂氣の如く身悶えし、あ

衛腹かつさばく用意はよいか、町人なれば心がけも有まじ。ソレ刀とらせよ。ハツト忠太が腰刀、ハア有がたし去ながら、いつの世からのならはしやらん、持籠りにて死る時、左鎌にて腹をあばき、親子の體を分くる時は、未來も迷ひ申さずとや、せめて來世は助けたし、何卒此義を、ホヽ鎌で裂うが出刄で裂うが、此方には搆はぬ事、時刻移すな早く〳〵。はつと答へて清兵衛が、一心しめる縄襷、手を取り伴ふ女房が、いとゞ涙の目なし鳥、最期を待たる健氣さを、見るに猶さら我胷を、裂よりつらさ血の涙、一人ばかりの命かや、腹の悴はくらきより、暗き闇路のうき別れ、是も何故我父の、强盗重罪殺生の、冥途の苦患助けんため、廻る月日の日こそ有れ、けふ祥月の命日に、妻と我子を殺す事、淺ましや悲しやと、思ひにいとゞ目もくらみよはる心を取直し、取て引寄せ鎌追取、突たてんとは思へ共、流石恩愛捨がたく、鎌をとる手も大盤石いづくに、刄をあつべきと、思ひ切ても身もふるはれ、そゞろ涙にうろ〳〵、妻が心は百千萬、歎を見せじと喰しばり、咎る涙の包み泣、梶原主從眼を配り、瞬もせぬ此世の責、地獄の呵責目の當り、永き思ひをかけんより、サア〳〵早う殺してと、覺悟極めし女房が、健氣な詞に勵まされ、口に稱名眼を閉ぢ、南無阿彌陀佛と聲より早く、待た〳〵と聲かけて、一散走りに鬼殺し、何かは怪敷一包、庭へかけ入り清兵衛を、突退〳〵、女房を後に圍ふて立はだかる、スハしれ者と家來共、十手振上げ追取卷、アヽコレ〳〵聊爾さつしやりますな、コ

卿の君に逢せ申さんと、袂より取出す一文笛、吹立る音に卿の君、賤の姿をそのまゝに、走り入より、ヤア駄々八、何故かゝる深手ぞと、驚たまへば太郎夫婦、ヤア〳〵御身に恙はなかりしかと、いふより外は詞なく、悦び合ふぞ道理也、手負は息をほつとつき、ヲヽ夫婦とも驚きは尤、語るも面耻しけれど、某は長田の太郎末宗が一子、内海の五郎末定がなれの果、我祖父庄司忠宗は、譜代相傳の源氏武士、待賢門の夜軍破れ、左馬の頭義朝公、傳鎌田は長田か爲、聟といひ又主君なれは、麁畧あらじと心を赦し、頼む木陰に雨洩りて、心かはりし長田の庄司、勿體なや恐ろしや、三代相恩の御主を討奉りし不忠不義、末代武士の見せしめと、逆礫にかけられし、眼前報ふ非道の天罰、國取より馬士迄、落ればおつる世の盛衰、最前様子を窺ふところ、父長範の冥途の苦、助けたい故由縁ない貴殿さへ、卿の君を助けんと、妻子を殺す孝心、元より我は譜代の忠臣、漂泊の義經公へ、忠義をなさば、亡祖父親の罪科も、少しは滅する道理ぞと、朝夕心かける所、卿の君の御身の難儀、救ふ心は此五郎も、貴殿も同じ父の爲、卿の君と知ながら、連れて歸る道すがら、我女房も懐胎は、願ふてもない時の幸、かへりて見れは時も時、産落せしは男の子、心せく儘様子もいはず、藁の上より引出し、何にもいはず首掻切り、取上る生れ子の、はきやア〳〵と泣聲は、辨へ知らぬ嬰子も、母の別れを悲しむか、むごい父じやと恨かと、愚痴に歸るも恩愛の、たるむ心を鬼になし、突殺した其時は、四十四の骨

せり歎ぞかひぞなき、ハヽヽヽ人をやつた報ひが來て、よいざま〳〵、さつき取違へたがおれが幸ひ、連ていんだ此卿の君、直にとん腹かつさばき、首にして差上ます、御褒美はすつしりと、お金に添へて此女房私に下さりませ、邪魔になる清兵衛めは、ぶち殺して跡腹病ず、女夫になつて樂しむ工面と、欲と惡とを粉くそで堅め、布着にした惡者なり、梶原は笑壺に入り、ハテ手短い氣味能奴、でかいた〳〵、願ひに任せ兩人は汝にくれる、心任に取計へ、ソレ忠太、彼めに褒美早是へと、詞の中に鎧櫃、駄々八が前に直させ置、汝に似合ぬ品なれ共、遺恨ある義經が悴、討取たるは戰場の軍功も同前、某が着替の鎧、當座の褒美、鎌倉へ着の後は、屹度取立得させんず、又卿の君が死首水子が體、野に捨て烏の餌食、アヽラ心よや、此儘に夜を込て打立ん、家來共出立の用意、番場來れといさみ立、家來の大勢前後を圍み、悠々として立出る、跡見送て駄々八が、ヱヽ申し〳〵、お取立を忘れまいぞと、うそ〳〵見廻す其中に、泣々女房が夫の繩、とくを遲しと傍なる鎌、憎さもにくしと引たかへ、ぐつと突込む恨の拳、ゑぐり苦しむ强氣の手負、アヽ暫々百合の太郎、只た一言いふ言有、何の一言ヱヽ儕はナア、卿の君を助けん爲め、女房子が命捨、さま〳〵心を盡せしに、ようも〳〵首討たナ、人非人共獄卒共、いふ所もない極惡人、一分試に刻んでも、飽たらぬうぬが體、卿の君の御敵、若君の仇思ひしれと、いふも怒のはら〳〵涙、ヲヽ樣子いはねば、尤々、子細はまだ〳〵いはんより、

經緯の、糸のもつるゝ如くなり、五郎塞る目をひらき、邪智深き梶原が、身かはりくふて歸りしも、か斗り碎く我々が、忠義を不便と佛の惠、亡親の成佛得脫、ちつとも疑あるべからず、裡の裡行佞智の景時、いかなる異變あらんも知れず、卿の君の御身の上、貴殿御夫婦賴み入る、君の行衞を尋ね求め、御對面させてたべ、ヲゝ其儀は少しも氣遣ひあるな、妻子が爲にも命の親、我は則佛果の種、五郎殿御夫婦、又は水子の菩提の爲、髻ふつつと押切て、佛とよばれし仇名をすぐに、阿彌陀坊と改名し、亡父の爲、人々の爲は我身の善知識、妻もろともに黑髮を、切て捨たる輪廻の絆、手負は今ぞ知死期時、未來極樂淨土にて、めぐり近江路立出る、君は此世の旅の空、我は赴く、あの世の旅、菩提の旅の夫婦づれ、いつかはめぐり大坂の、關の清水の澄濁り、浮世の關寺曉の、鐘の響に湖水の、しののめ告る雞の聲、始終窺ふ巖は、子細は聞た梶原樣へ、イデ注進と駈け出る、早足の手負が傍なる鎌、打込行先鎧櫃、ぬつと醒ケ井道さぬ五郎、この世の別れ拜み打、南無阿彌陀佛、みだ佛の、聲も名殘りの朝嵐、君を伴ひいでゝ行

第九　道行旅寐の初花

うきものと、誰かいひけん旅の空、思ふ男をいたゞく笠や、嬉しなみだの袖の雨、目に盛久が

々を、もぎ放される苦みより、百增倍でござつたわいの、是も何故祖父親の、天道にも憎まれし、非道の罪が淺ましや、同じ忠義を盡しても、主殺しの長田が血筋、かく淺ましき死樣は、末代迄不忠の臣の見せしめと、なりゆく我身はせめてもの、亡祖父親の罪亡し、過去り給ひし義朝公へ、寸志斗の申譯、コリヤ〳〵女房、そちが死でくれた故、卿の君も恙なう、此五郎が忠義も立た、ヲヽよう死でくれた、出かした出かした〳〵、最前に此譯を云きかし、得心の上と思ふたれども、もしや未練もおこらうかと、何にもいはぬ胸のうちは、マアどのやうに有うぞやい、譯を知らねば女氣に、嘸胴欲にも恨んで居よ、今追ついて此譯をいひきかす程に、其時恨みを晴らしてくれ、死出の山路も三途の川も、親子三人手を引合て、一ツ蓮でいひわけする、必々迷ふなよと、生たる人にいふ如く、首と死がいを抱しめ、くどきたてたる男泣、卿の君は正體なく、身を喞ちたる御淚、おさでもともにくどき泣、誰しも女子は同じこと、十月の間の身の苦みも、產う〳〵を力にて、安う產して嬉しやと、思ふ間も有やなし、夢見たやうなこのしだら、親は我子の顏しらず、子は又母の親しらず、嘸や迷ふでござんせうと、思へばいとしい〳〵と、歎けば太郎も諸共に、かくゐる事とは露しらず、早まつたるこの深手、御赦免あれ長田殿、我とても父長範が、地獄の苦患助けん爲、君に盡せし忠義は一つ、誠の心盡しなば、亡人々の佛果の種、是悅びのひとつぞと、嬉し淚悲しみ淚、忝なみだ取交て、淚ながらそふ

つたやら、若い女夫のうらやまし、親御の粹が思はるゝ、かわい子に旅させよとの、世の諺も此事と、いはるゝ身にはぞつとしてつらけれど又憎からず、人の口は立られぬ、土佐の町々肩たゆく、供につかれの蘆原峠、見下せは霞の外に、遠雲雀三ツ四ツ五ツ、六田の里に立つゞふ、人目を妨ぐ笠ならで、飴に寄來る乙女子か、おとめさす日もから主を、聲にあやどるひと節は、戀の道をば濡とはなぜにいふぞいな、逢はまれ〳〵、あはぬつらさの袖の露、それで濡じやといふわいな、里の勤は、酒で暮してゐるわいな、間夫に逢瀬の、あずはつらさの袖の梅、それで勤てゐるわいな、諷ふ聲々跡になし、姫は泊の宿いそぐ、思ひは戀の道のべや、二人子に臥し寅に起、あすは登らん花の山、爰ぞ日の本一の坂、吉野の町にぞ三重「着にける

第十　吉野館の段

あら面白の水の流れや、筆にかくとも盡すまじ、東には八幡山崎廻らば廻れ、水車の輪のりせんせきの川浪、川柳は水にもまるゝ、しだり柳は風にもまるゝ、ふくら雀は竹にもまるゝ、都の牛は車にもまるゝ、茶臼は挽木にもまるゝ、實に誠忘れたりとよ、小きりこは放下にもまるゝ、小きりこの袋の竹、世々を重て打納りし、御代ぞ目出度、よいや〳〵と響る聲、御酒の機嫌も義經公、龜井駿河も打混じ、實に兵の変りも、裝束改め靜御前、附添出るは河連法眼が妻

情にて、伴はれつゝ六代御前、人目を略す飴賣に、念珠丸も諸共に、よし野をさしてさし荷ふ、戀の重荷や戀の山、大和にかゝる花の雲、花のふゞきの雪ならば、ほんに幾度拂ふべき、袖なし羽織みじかくも、夢ばかりなる肱枕、一泊りづゝ置て行、夜半の睦言理かしさ、よしや一里二里の、跡は霞が立隠す、天のかぐ山餘所にみて、花の奥へと賣歩行、道行人の徒口も、耳なし山の聞流す、川瀬にあさる鶺鴒は、なれも妹脊の神代の昔、天の浮橋我も又、飴の荷箱をさしおろし、子供集の聲おかしくも、鄙のたはれや口拍子、飴こ買ない、飴買ひな、ひとし殿御と寢た夜は、三重の下紐二重は解て、跡の一重に契ることはな、二世の誓も三世にかけて、わとははづかしはづかしや、きのふにかはる今日の形、飛鳥の里も旅なれて、足袋の紐しめはゞきの緒、牡丹はまだき如月の、空の詠も昔し誰、かゝる櫻を植おきて、吉野を春の山々や、霞の衣のよきを着し、商人姿振袖も、長き日脚のうらゝかに、咲そふ花の綻びを、ぬふは松葉の針仕事、綴させてふ秋ならで、花の雪間にとびさゆる、蝶と胡蝶と戯れに、瀧と落ては浪と寄、露にやどかる下臥の、寢もせぬゆめとちり行て、あさき浮世と思ふにも、跡老樂の母獨、いかゞしたはせたまふらん、いたはしさよと計にて、さしうつむきし莟の露、ぬれにぞぬれし姫君は、初音の床の嬉しさに、旅路のうさも思はれず、世上の女中さんがたへ、ひけらかすではなけれ共、わしか殿御と人中で、自慢したとて呵人は、あられうものか新枕、ほんにどこらでお

御座のはせ、希奉ると、謹んで述ければ、ホヽ只今もいふ如く、天地廣しと云ながら、身を隱すべき方もなく、野に臥し又は海に漂ひ、よる方もなき義經を、かく迄厚き志忘れはおかじ、法眼が我を見知し子細はいかに、ハアヽごふしんも御尤、君いまだ御若年の頃、鞍馬山東光坊のおん許に、御學問の其砌、我も其座に列なつて、見覺え申せし義經公、かく廻り逢奉るも、一方ならぬ法の縁、そつとも御心置るゝなと、世に賴もしき河連が、詞は深山の花ぞかし、取次の下部罷り出、只今御廏喜三太が兄、鬼次郎と申者、此館に忍びまします人々に、お目にかゝりたい迚、門外へ參られしと、申上れは駿河の次郎、ムヽ其喜三太は遙下部の者なれども、君の目通りへも出し者、しかし彼が兄鬼次郎とはノウ六郎、ヲヽ聞及ぶ殊更此館に、忍び給ふ我君と、押付まゐるも心得ずと、詞に法眼何にもせよ、河連が是にて逢ひ、事の樣子を試ん、ソレ其者是へ通せ、先々君には奧の亭、ソレ賤の戸御供申せ、イヤ御入と賤の戸が、案内につれて義經公、靜來れと打連て、奧の亭へと入たまふ、下部が案内にぼつか〳〵、肩に藁苞むしやくしや撥鬢、一腰さすが一曲奴、小腰かゞめて、ハア御免下さりませ、私は御廏の喜三太が兄、鬼次郎と申者、今度義經樣が、都をおひらきなされたを、お前樣のお館に、おかくまひなされて下されたと、喜三太が方からの知らせ、ハア有難や忝なやと、取物も取敢ず、お禮がてらにこの藁苞、中な物はお前樣のお身の爲になるお土産、お受取下されて、義經樣、弟の三太

の賤の戶、君の前に手をつかへ、皆の御旅路お勞れ晴しと存しますれど、片山陰の物侘しさ、何をかふとの品もなく、靜樣に御苦勞かけ、亭主方の私始め、憚ながら我君のお影で、面白い扇の手、今世を忍ぶお身なればこそ、我々づれが御前近う、靜樣の舞を拜むぞ、一しほ冥加恐ろしさ、御赦されと敬の、詞に靜も、ほんにマア不束な妾が舞、我君樣の思召、必笑ふてたまはるなど、愛敬こもる櫻が枝、盛り爭ふ風情なり、君甚だ御機嫌よく、ホヽ賤の戶、兄賴朝の不興を受け、世に漂泊の我身の上、此山に迷ひしを、情ある河連が志、暫くも斯く安穩にくらす事、宿世の機緣と賴し、鎌倉よりの詮議嚴しく、我此山に有事を、洩れ聞えなば一山の爲、かく舞謳ふも今日限り、夫婦が心底いつの世に、忘れおかじとの給へば、是はまあ勿體ないソリヤ何事、源氏の大將義經樣、今梶原が舌先に、御中不和となり給へど、眞實眞身の御兄弟、曇りなき身は晴々と、天下晴て賴朝樣に、御對面は頓ての事、隨分お氣を慰めよと、夫の指圖、必くよ〳〵思召さす、お心廣く御酒宴あそばせ、サアヽヽ申お二人樣、御酒が足らぬか、うき〳〵遊ばせ、ソレ姊共お銚子〳〵、サア〳〵お一ツ召上て下さりませと、人々の氣を引立る亭主ぶり、御大將を始として、靜御前も感じ入、座敷も結句打しめる、館の主河連法眼、一間の內より立出て、謹んで兩手をつき、誠にはからざる此度の珍事、幸河連が此麓にて見掛奉り、見苦しき我住家へ御かくまひ申といふも恐あり、只いつ迄も御勞ればらし、お心おきなく

安樂にくらすは皆義經が働ならずや、其大功ある義經を討んと斗る不仁情、夫に引かへ親兄の禮を重んじ、猛き武勇も押包み、都をひらき、身を山林に隠す至孝、あはれ此法眼を頼み來られかしと、待にまつたる義經公、かくまひ有ば何とする、道も法もなき鎌倉の下知用ひぬ〳〵、むだ口利ず早歸れ、義經の首がほしくば、軍勢を以て押寄せ、此河連が首から先へとられよと、鎌倉殿へいひ聞せよと、猛き詞に富樫もしれ者、ハレさつぱりと申たり、軍勢には及はねども、汝が詞氣味よければ、一先この場は立歸り、大軍を以て押よせん、まづそれ迄は義經の首、汝が首も預けおく、コリヤ必す詞つがふたぞ、ヤアいらざる馬鹿念はや歸れと、勇氣と強氣の詞づめ、表の方へ出行しが、きつと思案を櫻本の、花の木陰に身を忍ぶ、始終とつくと義經公、龜井駿河を召具して、一間の内より立出給ひ、ホヽ様子具に見屆けたり、げに頼もしき勇氣の振廻、某忍び居る事、はや鎌倉へ顯はれたれば、ちつとも油斷なりがたし、武藏が方より此一通、コレ見られよと差出したまへば、逐一に讀終り、ムヽ君に似よりの者あらば、まさかの時の御身替り、アヽ尤なる武藏の斗ひ、早麓迄着せしよし、某よきに斗はんと、卷納むれば駿河龜井、我々兩人忍び〳〵、若君の御行衛、捜し求ん所存なれど、貴殿の心底訝しく、今日迄延引せり、今の心底見る上は、君の御身は河連殿、サアこい六郎イサ駿河殿と、君にお暇たまはつて、出行兩人義經公、今宵は夜と共物語らん、イサ法眼と伴て一間の内へ入たまふ、花の山、

にも、早う逢たうござりますと、指出す藁苞、河連は奴が面體打守り、ムヽハテナ喜三太が兄鬼次郎となア。シテ汝が國はマアいづく、ハイエヽアノ奥州、ハテ遠い所へよう來たな、然らばいよ〳〵弟喜三太が方より、汝が方へ知らせたとな、サアその狀をみるや見ず、宙を飛で、ムヽハヽヽヽみたところが常體の人間、翅がはつて飛できたか、エヽ紛れ者めが、元來わが館に義經公、かくまひし覺えなければ、驚く事はなけれども、奥州より此吉野まで、三日が間で行通ふ、鬼畜の性體サア顯はせ、身の爲になる土産物、望にない持て歸れと、ずんと立蹴に蹴る足首、むんずと摑で御上使、ヤナニ何が何と、鎌倉よりの御上使、富樫左衛門有義と、藁苞より取出す一書、さしもの河連猶豫の體、のつさ〳〵と上座に直り、イカニ河連、九郎判官義經、此山を賴み來る由、鎌倉殿の上聞に達し、急ぎ討取渡すべき條、仰を受て來つたり、まつた、かくまひ置においては一山の滅亡たらん、早く返答いへ聞んと、顚平拉にきめつくれば、ハテぎやう〳〵しき上使よばはり、よしみなき義經、かくまひし覺えなければ、討て出さう筈もなし、益なき詞費さんより、早くかへりて此通り、鎌倉殿へ言上せよ、ヤア覺ないとはしら〴〵しい、かくまひあるかあらざるか、イデ一詮議とつゝ立上る、法眼向ふに立塞り、長袖なれども河連法眼が館、踏込んとは無禮千萬、人を救ふは沙門の役、須彌蒼海の親より受し、骨肉同朋の辨へなく、佞人原が舌先に、人を損ふ右大將賴朝、義經の勳功故、居ながら四海を併呑、

義經公の、御危難を救はん爲か、ヤアどこへ義經、我若氣の誤りにて、重盛公の不興を受、所詮武士道は立まじと、女房もろ共所縁有て、此地に來り、河連法眼と名を改め、年月を送る中、一度は御勘氣御赦免の、時節を待に情なや、重盛公には早御逝去、折を窺ふ源氏方、國々に兵亂し、終に平家を亡し、源氏一統の世と成し我無念さ、さすが敵は九郎義經、ひと太刀恨みん其爲に、味方顏して心を赦させ、龜井の六郞駿河なんど、はや我館を遠けたれば、九郎の頭は手裡にあり、去りながら、軍慮にさかしき義經なれば、討もらしては一大事、兼て一味の衆徒原を、裡手へ押寄させん爲め、吉野川の川岸に、生る大竹ゆひ渡し、假橋を渡さんと、密に人歩を掛し所、元來川水早くして、深きこと又底しれず、中々輙く成就ならず、此橋をかけんには、蜀の臥龍が江を祭りし禮に習ひ、二十以上の男子の首を切て、水神を祭らば、成就せん事疑ひなし、幸なるかな念珠丸、生おいては姬君の迷ひの種、內大臣重盛公の御孫君、匹夫下郞とかたらはせんは、穢らはしや奇怪なり、首をきつて水神を祭り、女儀ながら六代御前を守り立て旗上し、源氏の世を覆へさん、心々どめたまふなと、又切かくればノウ何ぼ其樣にいやつても、二世と誓ひし我夫を、先立てそもやそも、生て甲斐なき此身をば、先へ殺して〳〵と、縋りまとへば六郞も、御心根を痛はしと、思ひながらも振放し、所詮顏を合しては、未練の心も增道理と、念珠を引立一間の內、はたと立切障子に尻さし、姬は正體泣倒れ、更に分ちもなかりけ

尋る花の二人連、武藏が敎へ守る身の、明日を定めぬ蜉蝣の、日影待間の夫婦旅、河連が奥座敷、通るも居所の歩かと、女心のくよ〳〵と、悔むをいさめ念珠丸、誰お取次と、いひ入る、出合頭に河連が、見合す顏は、ヤアなそたは讃岐の六郎と、いふ口ちやくと、ヤヽコレ〳〵音高し、人や聞、我身の上は扨置き、不思儀なるは御身の上、主馬の判官盛久が、密に忍ばせ申すとは、風の便りに聞たる斗り、かく輕々しき御旅路が又九郎判官を尋來る、彼と同道合點ゆかずと、問れて姫は淚ぐみ、御一門もちり〴〵に、須广の内裏を出しより、盛久の介抱に、世を忍びくらせしが、盛久は一筋ぢに源氏を狙はん志、盡せしかひも無最期、自らが身の上を、くれ〴〵も賴み置、今は此世になきぞとよ、又自はあのお方に、思はぬ事の緣により、コレ必呵てたもんなと、跡はもぢ〳〵うぢ〳〵と、いふも淚にわけぞなき、ムヽ扨は源氏の侍と、ヲヽわけ有て某と、假の契りも暫しが中、義經公の面體に似たる某、まさかの時は御身替りと、辨慶と差圖にて、漸々尋ね參たり、早々君に御目見え、御苦勞ながらお取次、よろしく賴み存ずると、いへど答へも諸手をくみ、暫く詞もなかりしが、何思ひけんずんと立、拔手も見せず切かくる、拔けつくゞりつ念珠丸、おしらふ中に姫君は、ノウ情ない何ゆゑに、念珠丸を殺さうとは、胴慾な六郎と、我身を覆ふ刄の中、アヽコレ〳〵六代樣邪魔せまい、おのきなされと切込刀、しつかと取て念珠丸、ハテ心得ぬ此振舞、いまだ御目見えもさせぬ中、かく切かけしは

も目の前で、見てはどうも殺されぬ、明りを消して、ヲヽ夫程の義は用捨致さん、必ず其時兎や角と、仰わりても叶はぬ事と、拔さしさせぬ讃岐六郎、暫く次へ立て行、跡見送て六代御前、涙にくれておはせしが、忠と義理とに責られて、口では立派にいひながら、いとしかはいの大事の殿御、なんと先立自が、世に出た甲斐も樂みも、ながらへて居られうか、いつの因果に思ひそめ、見初た事ぞと、かきくどき正體なみだにくれたまふ、ハアヽげに思ひあたつたり、念珠樣の姉君袈裟御前は、夫の命助けん爲、姿を似せて盛遠に討れ、今の世までも戀塚と、印を殘すも貞女の操、我も夫を大切に、思ふ心は一筋に、千筋となせし黑髪を、根よりふつゝと、懷劍に、思ひ切たる女氣に、必ず未來で念珠樣、添ふてたまはれ我夫と、いふも心に暇乞、燈火ふつと吹消して、あゆむは死出の門出や、表は包む黑髪の、亂心ぞ哀れなる、障子の内にはをた〳〵と、喞ちの聲を驚かす、後夜は知死期の相圖の刻限、立出る河連法眼、眞黑闇も忠臣の、誠の魂殿の一間、さぐる手先に亂髪、是こそ念珠でさんなれと、なんの苦もなく首掻切り、しらせの呼子も忍び足、横川の覺範荒法橋、河連殿候な、兼ての方便今宵の内、假橋を渡し裏の山手へ打入ん、ヲヽサ今宵は過されず、彼水神を祭りの供物、コレ此首一刻も早く用意〳〵、合點〳〵、シテ中陰谷に擒にせし、小悴が儀は何となさるゝ、ホヽ夫とても今宵のうち、敵の末は根を斷て葉を枯らさん、御邊ふたりは此首を、殘る衆徒等に相渡し、中陰谷へかけ付ても經

る、六郎は姫君の御手を取て、顔打詠め、エヽコレ申し、女なれども平家の嫡流、さ程腐た根性で、御一門の人々、御父惟盛公の魂魄へ、どの顔さげて御對面なさるゝぞ、此六郎身をやつし、種々樣々に心を碎くも、主君の恨を晴したいと、思ふより外は、コレ他事に餘念はござらぬわいの、いかに女儀なればとて、源氏の餘類と二世の契り、いかなる天魔の見入しぞと、或は怒り或は恨み、誠をあらはす忠義心、こたへも涙なむしやくり、事を分たるそなたの詞、思ひ切うと心では、いく度思ひ直しても、思ひきられぬ身の因果、念珠樣のお命を、助けてたもるも、自へ忠義と思ふてコレ六郎、拜むわいのと一筋に、思ひつめたる有樣に、エヽ淺ましい御所存じやのう、其心なら思ひきる氣はあるまい、もうこの上は、得心あらうがあるまいが、念珠が命は只今限りと、つゝ立上れば、スリヤどうあつても念珠樣、ハアはつと計にどうと伏し、前後不覺に見えけるが、アヽそうじや、迚もながらへ果ぬ身とは、大物を出る時より、覺悟はかねて仕ながらも、今更の樣に思はれて、なんぼ泣ても悔んでも、叶はぬ命是非もなし、モウさつぱりと思ひ切り、なる程そなたの手に掛う、去りながら一ツの願ひ、一世の契りも源平と、隔る中は此世の名殘り、せめて最後の暇乞、是ばつかりは赦してたも、賴むぞやいのといふ聲も、涙に跡はあやもなく、たゞ打伏て泣たまふ、ムヽ詫と得心なされしよな、しばしの名殘は赦し申さん、後夜の鐘の鳴を限り、サア夫御合點か、成程さつとそなたに討さう、思ひきつて

と、一間の内へかけ入たり、静御前は身をわせり、エヽ我君様に此事が、どうぞおしらせ申したいと、かけ出しても縛り縄、エヽどうせうと身もだへし、引ほどしまる弱腕、女の念力何の其、腕も腕も抜るとも、此縄切いで置うかと、踏しめ〳〵駈け出せど、強き縄目の血ばしりに、争ふ姿裡紅、身にふりかゝる花の雨、涙の雨も降交て、暫し涙にくれ居たる、悲みの、涙眼にさへぎりて、西も東も白波の、エヽ時も時折も折、かういふ事と御存じなら、アヽア酒宴は何事ぞ、エヽ何とせうどうせうぞ、よるべ定めぬうたかたの、いつそ泡とも消もせで、こがれこがるゝ身の行衛、實に誠古へ役の優婆塞は、大峯山より葛城へ、岩橋をかけんと、久米路の神にいひ付たまふ、此御神は像醜き餘り、夜な〳〵斗り彼橋をば、わたし給ふ故、遅き事を怒り給ひ、禁めたまふと聞及ぶ、人ならぬ神でさへ、身にかゝる御禁、ましてやつたなき女の身、譬で申も恐れながら、久米路の神は岩橋の、成就なきゆゑ禁められ、今又静は吉野川、渡す今宵の假橋の、事成就せば我君の、御身にせまる今宵の夜討、たとへ此身は搦められ、此儘に死するとも、女の一念彼橋を、やはか成就さすべきか、岩橋の夜の契りもたえぬべし、わくる侘しき葛城の、神の悪もあるならば、半かゝりし仮橋を、逆まく水に押流し、通路とゞめたまはれかし、南無諸天諸菩薩、源氏を守り給はらば、此静が命を取、君を守護なしたまへやと、只一心に貞女の操、祈るも誹も後手に、任せぬ體を大地に打付、誠を盡す女心、神も憐み給ふら

若を守られよ、早く〱に兩人は、逸足出してかけり行、奥はかくとも取々に、君をいさめの浮世歌、浮世は水の淡路島、通ふ思ひの幾夜も、手燭かゝげて靜御前、色に色ます酒きげん、法眼樣そこに何してござんすと、いふに障らぬ風情にて、ホヽ是は〱我君にはいまだ御酒宴眞最中、法眼も只今それへ、イサ御一所にと立上る、イヤ〱我君のおそばへ、めつたにはやられぬわいな、ヤサノナア何ぼ心おきなうなされても、お傍にござんしては、堅くろしうて御酒宴がしまぬわいな、お傍に居るは女中斗り、我君樣もきつい御機嫌、わたしもたんと醉た故、醉覺しにと爰へ來て、ホヽヽ堅いお前の顏見たりや、とんと醉が醒果た、マア〱お前もそは〱せずと、アレあの奥の三味線は、我君樣をおいさめの、やるせ渚に鳴小夜千鳥、月も沈みし須磨の關、ハア定めなき世の盛衰、さも時めきし御一門、須磨の內裏を一時の煙、皆義經がヱゝ何と、イヤ皆義經公の軍功故、左斗り逞しき大將も、サア梶原がさかしらごと、兎にも角にも世の中の、さだめがたきは人心、ムヽ此河連が心底、若や二心もあらんかと、疑ふての今の詞、尤は尤ながら、かく迄盡す我忠心、サア此盡す忠心は、平家の恨をはらさん爲、此川の水上に、密に渡して今宵の內、不意を討つ謀、殘らず聞た此靜、サア眞直に白狀と、懷劍ひらりと身をかはし、シヤちよこざいな女めと、利腕摑でぐつと捻あげ、用意の早繩手ばしこく、庭の立木にくゝり上ハヽヽヽ氣味よし〱心地よし、年來待得し時來れり、いでや裝束改めん

ん為、我本懐も時を得て、かく仕課せし今月今宵、ハアハヽヽヽ忝けなや有難やと、悦びいさむ其折から、注進と呼はり〳〵、山科の荒法橋、息を切て駈け来り、兼て牒し合せし通り、龍神を勇めの首、川中へ納め丹誠抽んで、巨霊を祭り候所、岩に逆巻谷川の、さしもの荒浪暫くは、しづまり返る其有様、此虚に乗て橋を渡し、大願成就瞬く中、館の手筈諸事万事、別して心付らるべしと、申捨てと引かへす、六郎は悦喜の眉、イザ見分とつゝ立上り、障子開けば妹と脊の、中を隔る川中に、渡す大竹両岸に、しなへし葉末結合せ、かけし假橋川向ふ、松明竿とかゞやかし、一味徒党の荒法師、皆甲冑に身を堅め、我劣らじと川中へ、竹を手ぐりにゑい〳〵聲、見るにハア〳〵静御前、神も佛もない世かと、歎けばこなたは笑の眉、半渡ると見えけるが、岸根砕て大竹の、流に連て数万の衆徒、水の深みへずぶ〳〵〳〵、逆巻浪に押流され、一騎も残らず失てんげり、ハヽヽはつと斗にさしもの六郎、餘りの事に詞も出ず、静は嬉しさ有難さ、是も偏に岩橋の、神の利生の有難やと、悦びいさむ斗りなり、六郎無念の牙を噛み、エヽかく迄心を砕きしに残念〳〵、力夜叉は是より直、中陰谷に押込置、繼若を打殺せ。ソレ早く〳〵と烈しき詞、畏つたと立上る、やらじと静が袂に喰付引留る、エヽ面倒なと切込刀、はつみに切し縛り縄、見捨てかけ出す力夜叉が、跡を慕ふて静御前、中陰谷へと追て行、サア是からは死物狂ひ、無二無三に切入て、九郎が首とり本望遂んと、駈け入らんとする所、

ん、奥の障子を押ひらき、ゆるぎ出たる讃岐六郎、肌に小具足腹巻しめ、いか物作りの大太刀を脇挾み、今宵ぞ實も優曇華の、花待得たる勇足、見るに靜は猶更に、身を揉わせる後の方、以前の富樫は飛で出、ハア驚きいつたる六郎殿、某は宗盛公の牛飼力夜叉といひし者、何卒君の欝憤を晴さん爲、六郎殿とは露しらず、鎌倉よりの上使となり、判官を討たん心、數ならねども某も、倶に人數に加はゝつて、義經を討取ん、高の知れたる此女郎、討殺すも刀穢し、此儘爰につなぎ置、九郎を討を見物させん、奥の酒宴は幸々ヤサ切込んと勇立、ホヽ下郎なれども出かしたり〳〵、兼て手筈の假橋に、水神の祭り、事成就せし棧、もはや相圖の時刻も近し、九郎判官義經が、頭とらんも暫時が内と、思へばいとゞ待久し、御一門の欝憤を、今宵の中に晴さんは、ハア悦ばしや嬉しやな、廿餘年の榮花の春、一時の煙と都をば、霞と共に鳥の聲、鵯越の巖壁を、眞逆落した義經が、烈しき下知にかけ落され、難所を頼の味方の油斷、さしも武勇の人々も、思はぬ不意に驚さはぎ、我劣らじと駒の足、立直さんと知盛卿、能登殿なんど聲々に、きたなし者共、敵は小勢ぞ引包んで、討とれやと制したまへど、大軍の崩れ立たる事なれば、敵か味方か見えわかず、上を下へと上臈たち、おめき叫ぶに氣も引れ、心剛なる人人も、是非も浪路に漂ひて、終に水屑と成り給ふ、其無念さを晴さん爲、吉野川の川上より山手へ廻り、我庭前へひた〳〵〳〵と、逆落しに押かけて、不意を討んは、鐵拐が峯の辱耻を雪

なる此六郎、女に劣りし我身の上、ホヽでかしたよく死だ、此上は義經公、六代御前の御身の上、くれ〴〵頼みたてまつる。最前力夜叉に申付、經若殿を擒にせし、中陰谷へ遣はしたれば、御身の上覺束なし。ホヽ夫とても氣遣なし、其力夜叉と名乘りしは。佐藤四郎兵衛忠信。又六代御前の御事は。此義經が身にかへても介抱せんは。重盛へ昔の恩を報せん爲。必ず氣遣ひ無用ぞと、情のことばに有がた涙、ハアヽ嬉しや〳〵本望や。昨日の仇は今日の情。六代御前の身の上安堵。我も安堵の最期を遂んと、腰刀首に押當諸手をかけ。エイ〳〵と聲の内。首はあへなく落かたに。幽に聞ゆる鯨波。扨は忠信谷中に。取込られしと覺えたり。イテ助勢と三人は、中陰谷へと三重「出たまふ

第十一　吉野塔の段

峯々谷々白妙に。盛年久花の山。塔を圍んで惡僧原。どつと上たる時の聲、佐藤四郎兵衛忠信、扉蹴やぶり顯れ出、シヤ物々しや小法師原、忝くも清和天皇の後胤、源義經公御若君、討とらんなんどゝは、冥加をしらざる惡人共、佐藤四郎兵衛忠信が守護する、若君ならば手からに討取よと、聲より早く高欄より、むらがる中へ飛おりて、左右へぱつと切立〳〵、切散されて惡僧ばら、立足もなく逃ちる中、六尺ゆたかの荒法師、長刀柄ながく追とりのべ、一山に隠れ

思ひもよらぬ左右より、龜井六郎、駿河次郎、小手臑當に身を堅め、ヤア愚なり讃岐六郎、汝が本名しらん爲、態と方便にのつたる體にもてなし、工のだん〳〵見屆たり、留まれやつと詰かくる、一間の内より聲高く、ヤア〳〵讃岐六郎兼吉、對面して得させんと、裝束改め御大將、跡に隨ふ念珠丸、見るに恟り六郎が、ヤア汝は念珠丸、スリヤ最前手にかけしは、扨は一旦の愛に溺れ、念珠丸が身替りに、六代御前であつたよな、エヽしなしたり〳〵、かく迄仕込みし我本望、わづかの執着にひかされ、一時に水の泡となつたよな、エヽ恨めしい姫君、平家の末はかく斗り、天運にも盡果しか、もう此上は一々に、切つて〳〵切り死と、つゝ立上れば、龜井駿河念珠丸、前後左右を追取卷、ヤアさなせそ者共、六郎を打とるべき、究竟の若者あり、早々是への仰の下、立出たまふはアア六代樣、御身の上に過ないか、スリヤ最前討たるは、ホヽ夫こそは汝が妻の賤の戸、この念珠丸にかはらんと、六代御前の覺悟を見て、ヤア無理に自を引立、念珠樣に賴み置、かはりになつてたもつたわいのう、命の親の賤の戸夫婦、助ける事も叶はぬは、よく〳〵因果な我身やと、わつと淚にくれたまふ、六郎も妻の忠義、義經公の情の程、勇氣碎けてどつかと坐し、ハアヽ誤つたり〳〵、入道殿の積惡、積り〳〵し平家の運命、知勇兼備の人々さへ、やみ〳〵うたれ給ひしは、是天命のなす所、我一人にて御子孫を、守り立んとする我慢心、斗る〳〵と思ひしは、却て敵の餌と成、女房が忠義ならすんば、主殺しと

自來也物語

作者　並木春三
芳井平八

妙香山の段

馬乘を畜者は鷄豚を察す、伐氷の家には牛羊を畜ず、百乘の家には聚斂の臣を養はずと、されば越後の國妙香山の絕頂は、碧雲峨々と數丈の巖聳へ、樹木繁茂し、鳥聲長しなへに人跡絕へ、白晝と雖ども朦々と、闇夜の如く靜かなる、岩窟に庵を結び、一人の道人磐上に燈しを照し、香を燒、天に向つて祈念を凝し、何か秘文を讀誦爲す、折から山中鳴動し、黑雲四方に覆ひ重り、鳴神稻妻天地に滿ち、さも物凄き其中に、一ッの岩根に腰打掛け、六十六部の金剛杖に兩手を掛け、山上を睨み付け、瞬きもせず見上る曲者、岸を隔てこなたには、一人の侍旅の妻に武者草鞋、小高き巖に立上り、同じく山上睨み結、樣子いかゞと覆ひ居る、やゝ雲霧晴渡れば、岩窟目當に攀ぢ登る、六部の曲者遙に見おろす以前の異人、忽然と岩上に顯はれ、如何に自來也、汝我奇術を學ばんと來れるならんと、法力にて悟れ共、盜賊の張本たる汝なれは、

なき、横川の禪師覺範が、此長刀にて引導せん、早く成佛〳〵と廣言吐て打込薙刀、忠信得たりと受ながし、つゝと入てなぐる太刀、よせば立じと水車、はらふ長刀とびこえはねこえ、双方劣らぬ勇猛强氣、秘術を盡して戰しが、覺範苛つて打長刀、櫻が枝に打こんで、ぬかんとあせる忠信が、得たりと打込太刀先に、二ツになつて横川の覺範、此世の緣は切果たり、殘る衆徒原舌ふるひ、むら〳〵はつと散る花に、勝色みする勇士の勇み、ひらく綠の兒櫻、手に立敵も有あけ櫻、八重九重に圍むとも、單櫻のちり〴〵に、吹ちらしたる山櫻、武名は千里になり響く〳〵、虎の尾を踏む岩壁を、飛越え刎越え踊こえ、君の御跡慕ひ行、武名の花の咲匂ふ、實に忠臣の盛りぞと、末世に花實を殘しけり

吉野靜人目千本　終

おさらば、某此所に有事、餘人に語る事決して無用、はつと心得立上るこなたに窺ふ以前の侍、扨こそ曲者、召捕んと立寄影、見るより唱へる巽人が秘文、二人が姿は雲隱れ、おやしかりける三重次第なり

御室の段

治る御世の大内山、仁和寺の御殿には、室町殿の御入とて、譜代外様の諸侍、事嚴重に見えにける、當時の官領細川修理之助勝行、はでを盡せし供廻り、斯と聞より當所の役人、三上半之丞出迎ひ、これは〳〵勝行殿、今日は御役目御苦勞千萬、直に御殿へお通り有て然るべう存ずる、これは出迎ひ御苦勞、室町殿には西御門より直樣御入、萬事當所の心遣ひ、赦し召れと互の禮義、皆打つれて入にける、引違へて門内より、椎津の家來脇淵團右衛門、あたり窺ひ立出て、人待體の向ふより、深編笠の浪人姿、傍に立寄顔見合せ、是は〳〵軍太夫殿、いよ〳〵先達申談せし如く、左門之助めを、しい、其義は承知致いてをる、拙者元來東國の浪人者、兼てより椎津の家、仕官を望み居る折から、此一義を頼まれ、それ故此頃より兩三度島原へ通ひ、代々長太夫に近付に成置しも、今日の事を計らん爲め、事仕負せたる其上は、彌よ約束の通り、いやもう、椎津へ仕官は身が推擧、まだ談ずる子細有り、先こなたへと欲惡の、門内さして入

我秘法は赦し難し、併なから賊徒と雖とも、適義氣有志にめで、一術を授くべし、近く來れと有ければ、自雷也大きに感じ入、誠に怪有の道人、如何にも我賊徒の張本たりと雖とも、非道に奪取金銀ならず、主家を引起さんと軍用の手當、かく姿を替て徘徊するも、徒黨を集めん爲め、今計らずも爰に至り、道人にまみゆる事某か大幸、何とぞ奇術を授下さらば、徒黨を催す片腕となさん、偏に願奉ると、さしもの自來也低頭なし、敬ひ入たる計也、望めば異人も打點き、はゝ我も足利家には恨有者、某元日本の者にあらず、唐土陽厚大王に仕し者、先年陽厚大王日本を隨へんと、鎌顯といへる者を日本へ渡し謀を企しに、遂に鎌顯は足利家に召捕れ、日本に命を落す、其後陽厚大王某に曰ふは、汝日本へ渡り、足利家を亡し、事を計れと命を受け、徃此より此土へ渡り、天地乾坤の時節を窺へど未時至らす、今其方に一術を授け、若軍をなさば、其虚に乘て我も計らん、則ち予か信する所は蝦蟇の幻術にて、此一軸に記るせし秘文を唱へ、印を結ぶ時は、忽諸人の眼を暗ます、尤小蛇と雖とも、蛇の血汐を手中に濺ぐ時は、忽靈術は消失ける、又當國椎津家に、重寶する所の蛇丸の劔は、蛇の力を合せし故、此劔を帶する者には、予が妖術は行ひ難し、何卒其方が方便を以て、其劔を奪ひ取置ば、後日の妨を退く道理、此旨よきに心得よ、始終を具に語りける、自來也は打笑ひて、其義は某が兼て手馴し業、盜む事は心安しと、一軸取て押戴き、時を得て御禮を爲さん、いざ

でござんす、お名は知らねど深ふ云交したお方が有と、此廓へござんする、軍太夫様とやら、云ふお方のお咄し聞て、身も世もあられぬ故、逢に來た念が屆き、お顔を見て嬉い程、矢張腹が立はいなと、粹をちらして愚癡に咲、花の梢に鶯の、泣音優しき風情なり、ヲヽそれ故のりん氣な殿て居るわいの、まだ何や彼や言ふ事も事ど、御用仕廻次第廓で逢はふ、ちやつと往にや、大事でござんせぬ、二八が中に出來た緋松、産落すからあの源吾様が、在所へ預かつて居や仕やんす、それ故に今のお詞、それにお前の惡性、どの樣に言はしやんしても、軍太夫様の詞が氣にかゝる、まあ此懐の守の起請、鳥渡見せて下さんせ、はて扨此内は兄者人から預つて來た大切な御判じや、其方が見て何の益、疑ふてだもんなやと、戀に心も現なき、後に窺ふ軍太夫、代々衣は一と筋に、否々ぢやふでも濟ぬは其守、御判といふが誠なら、どうぞ見せて下さんせ、テモ扨も未だかいの、これ見や、大切な御判計、外には何にもないわいのと、渡す所へ三上半平、遽しく走り出て、左門之助殿、御前よりお召と、聲かけられてはつと驚き代々衣を、隠す目遣ひ御判の袋、それ此方へと云ふ間もなく、はて扨何にを躊躇仕やると、世話敷使に呼立られ、御殿をさして入にける、後に扣へし軍太夫、是代々衣殿、ヱヽ軍太夫様か、おゝ最前からの樣子、殘らず後で聞て居た、其判の袋の中には、起請が入て有で有ろ、中改て見られよと、系圖に倒氣袋の中、倶に搜して軍太夫、兼て用意の贋判と、手早く摘り替へ手に渡せ

にける、街なる、人も見かへるはで姿、松の位の八文字、道中ならぬ遠道を、慕ひてこゝへ代々衣は、禿引連急ぎくる、大夫樣何ぼお前が急いでも、廓からは餘程の道、もうこゝがお室とやら、八幡樣をかこ付に、左門之介樣のお顏を、拜みにお出た代々衣樣、お前は嘸嬉からうな、おゝあの子のいやる事はいの、まだつき出しの其時から、馴初た國時樣、可愛なふて何とせう、其方も追付やりて衆に、せかれるは今の事、身に成てこそ思ひ知る、花ならは櫻木、殿御ならば國時樣、早うお顏を見せてたべ、と深き願ひを有そ海、こゝから赦して給はれと、伏拜む手に散かゝる、花を手水の水際も、習ふ方なき姿なり、左門之助國時は、兄國久の代として、下館より徒歩の道、勇源吾か跡備へ、仲間小者は狹箱、抱花菱の門前先、暫休らふ櫻影、それと禿の目づかひも、當り障りを代々衣が、わざと外目に左門之介、言はぬ互の顏と顏、源吾はそれと見て取て、何若殿樣、此度室町殿より、家の重寶龍の御判、差上よとの仰、疎には成難し、去に因て脇淵圖右衞門殿も此所へ參上、早先達て細川殿も御入と有共、未だ刻限には間も有、若し御休足も有んと存、下部に言付打せ置たる幕の內、某は御前の樣子、せめて暫しの櫻花、眺斗は時の興、遊びこやして此花の、必ず盛りを散さぬ樣、お氣晴しが肝要、と我も昔しの粹を通し、皆引連て入にける、跡打見やり左門之助、粹の水上め、いやも斯さし向ひに成た所か喜見城、たまつた物ではないわいの、これ太夫〳〵、なぜにうき〳〵仕やらぬぞ、アイいや

これさ左門之助、等閑ならぬ一大事、返答なくば其身の科、事を計る官領の某、内縁有る椎津家なれば、一家のよしみに依怙贔屓の沙汰有ては、室町殿へ義も立たず、赦し難き左門之介、此所より追放同然、忍び〳〵に盗取れし判の詮議、先それ迄は兄國久にお構ひない、隨分其心を付て尋ねよと、有増見ぬく細川が、詞にはつと國時は、有難涙に伏沈む、團右衛門底氣味悪く、エヽ是非もなき若殿の追放、某も隨分と、心を付て寶の詮議と、いふに源吾は両手をつき、細川様へ一ツのお願ひ、某が御供先にて斯る一大事の起りし故、何卒某も若殿様と御判の詮議を、イヤ尤成願なれ共、科人に供は叶はぬ、其方は一時も早く國元へ立越、兄國久へ此通り、申聞すも忠義の一つ、又團右衛門は跡に殘り、室町殿下向の御見送り、両人共に心得よと、詞も重き官領の、差圖に隨ふ團右衛門、左門之介は無念の涙、制し勇める勇も涙、萎てこそは別れ行、早夕陽に傾きて、室町殿の御立と、呼はるお先供廻り、行先馬手の方よりも、音はどつさり打込曲者、ソレ遁すなと大下馬先き、狼狽騒げは小陰より、やゐ騒がれな旁、斯る事もあらんかと、室町殿のお立と僞り、未だ御殿にうつし参らず、それ共知ず飛道具を、打かけしは何にもせよ、からめ來れの聲の下、引立來る傾城代々衣、ハア此女、あれなる水茶屋に忍び候、傍に落たる此鐵砲、夫故引立參上と、云ふをとつくと細川が、合點の行ぬ其女、さあ返答せよときめ付れば、何と我身の云譯も、いふに云れぬ此場の宜義、只伏沈み泣涙、一應にては申ま

ば、是はな此中には何にもないわいな、然らば外に隠し所、よい〳〵某が口先で取てやろ、まあ其判を大事にめさと、いふに代々衣氣も付す、袋の紐をこて〳〵と、結ぶ其間に軍太夫、我身をはづす其跡へ、すれ違ふたる左門之助、これ代々衣其判此方へおこしや、何とお改なされて嘸本望、我等もそれで落付た、併し爰に居て團右衛門が目にかゝればわるい、御用仕舞ふ迄、向ふの茶屋で待てゐや、そんなら間違ひのう、さあ〳〵早うと云捨て、別れてこそは入にける、人なき透に小かげより、突然と出たる軍太夫、まんまと首尾よう龍の判、此判を奪ひし上は、團右衛門に約束の通り身の出勤、忝いと押戴き其折から、寺の内には數多の人聲、音に驚く身の工、顯れ口と軍太夫、何處なく落て行、折から門内騒しく、左門之介を追取卷、引續いて團右衛門、勇源吾は、胸散亂、跡に扣へし細川も、眉を皺める計なり、侍共は詞を揃へ、これさ左門之助殿、何故に贋物を差下召さつた、さあ返答と詰寄ば、源吾は傍へ差よつて、申若殿樣、御殿にてとくと改め、持參仕たる此御判、何故斯る一大事、さあ申、俯向いてござる所でない、少し成共手掛の、思當りはなかりしか、さあ有樣におつしやれと、せけばせく程左門之助、口へは出ても今更にわつて、云れぬ胸の内、團右衛門目に角立、斯る場所に及んで涙は詮議の爲にならぬ、さあ〳〵の御判は如何なされた、樣子が有うさ子細はと、自身が覺の一工み、此塲て云さぬてつぺいひしぎ、始終の樣子細川が、云ねと胸に善悪を、察して詞なかりしが、

送つて上る物、あのおつしやる事はいのう、私か連て歸ります、左樣なら、まあ〳〵一吹く御上りと、引がら盆を差寄て、分隔なき在所同士、打解てこそ見えにける、故鄕へも、飾らぬ錦心から、浪々の身の軍太夫、母を尋て門の口、内の樣子を窺ひ居る、お咲はそれと氣も付ず、此小梅も少さい時に親爺に離れ、兄の丑松めは惡黨放蕩、女斗の此方、喜樂齋殿が此村へ見えてから、もう三四年にも成ませう、不思議の緣で深切にして下さる、其上に未だ仕業迄、教へて下さるゝは、大體の事ではござんすまい、そして喜樂齋殿はへ、おい野へいかれました、シヽあの御人も、何程好事じやと云て、畑仕事もしんどかろ、宜しうおつしやつて下されや、さわ娘おとや、アイ左樣ならおそへ樣靜にへ、まあよろしうござりますはいな、私も此間に坊の添乳、小梅樣ようお出たへ、あい〳〵あいの暖簾、おそへは奥へ母娘、しづ〳〵立て表口、出合がしらに我子の丑松、それぞと知ぞそむける顏、あゝこれ〳〵、母者人、見ぬ顏とは胴欲な、我は御前の子の丑松じやと、いふをも聞ず行過るを、袖に縋つて軍太夫、扨迚は氣強い、此間から近所へ戻つて居れど、此方が如斯片意地な人じや故、横小路の勘八頼んで、だん〳〵の挨拶、一向取上がない故、今日は直ぐに賴まんと、内へいたら留主、大方爰にと聞た故、態々尋ねて參りました、何卒勘當赦して、内へ置て下され、母者人賴みまするとぞ鼻すゝり、大つげ形にあまへ聲、無理に付たる目の淚、誠しやかに仕かくるにぞ、喰ぬ母親よそ〳〵しく、あ

じ、如何はせんと工夫の內、又も御殿の人走り、細川樣、只今急御用でござります、ヲヽ何方々々、大切なる科人を、櫻の幹に繋ぎ置、番人油斷致すなと、心を配り入にける、櫻の影より突然と、姿顯はす自來也が、唱ふる秘文に付添ふ番人、皆々一度に倒れ伏、見かへりもせず自來也は、しづ〳〵立寄り、代々衣が縛解けば夢心地、やあお前は兄樣こりや何もいふな、此短冊は身が有家、重ねて逢ふ早う行、ヱヽ嬉しやと代々衣は、虎口を遁れ走り行、跡に自來也無念の顏色、ヱヽ主人の仇の足利を、只一討と思ひしに、討そんせしか殘念と、憤怒の體の後の方、樣子うかゞふ細川が、打込手裡劍、櫻にぐつしやり、跡を暗まし三重「落て行

苧績の里の段

世の中の、憂身を何と信濃なる、苧績の里に遁れたる、喜樂齋が詫住居、傾く軒の忍ぶ草、葎茂りて物淋し、舅の留主に嫁のそへ、昔に替る姿さへ、世はあざなへる繩ならぬ、苧績の業の賃仕業、細さ煙りも立月日、自然馴て手ばしかに、隣在所の後家育、年は二七の小梅迚、在所には似ぬ育がら、そへの仕業見習ひに、通來間も供々に、最睦じく見えにけり、小梅樣もうお仕舞と夕間暮、小梅の母は門口から、ヲヽそへ樣精が出ますのう、此方の娘の小梅も、每日〳〵お世話でござります、もう大方仕舞時分と迎ひに參じました、ヲヽあなたもお忙しい中、つひ

其茶に知れるに聲上た物じや、年貢の未進でお代官から嚴しい仰、牢へ入る喜樂齋、段々貴様が歎いて頼む故、一日延し二日延し、三日延し、四日延し今日で丁度五日め、何程留ても、今日は是非喜樂齋を、牢へ入ねばならぬ、さあ喜樂齋は何處に居る、牢へ入ると立上るを、成程〳〵段々と、皆御尤でござります、なれ共せめて御不肖ながら、何卒まあ一日お待下されましたれば、明晩迄は違ひなう、否成らぬ〳〵、そんならせめて明朝迄、今宵一夜さ御宥免。御情お慈悲と手を合せ、涙と供に頼むにぞ、甚作頭剃る程なで。エヽもう情ない、どつと爰へ來ていはふと思ふて來ても、そう此方がしみらひつこう頼むも矢張舅思ひ、あゝしやう事がない、そんならこれ明日の朝は違ひなう頼んだぞや、又今夜だけ代官の、お目玉二つ貰ふて置。必ず違てくださんなと、短羽織の永日の、早ちり〳〵に甚作は、我家へこそは立歸る、早黄昏の鐘の音も、いとゞ哀れを告渡る、おそへは跡に兎や角と、思案詮方納戸口、燈す火影に稚子の、顏つく〴〵と打詠め、源吾殿聞えませぬ、お年寄れた舅御様を、女の手一つに振向、御介抱さへそこ〳〵に、行屆ぬ其中へ、此子を預る御主の胤じやと、只一筆の音信も、夫の指圖と眞實の、我子よりも大事にかけ、無事に成人させまして、戻つて見えたら譽られうと、夫ればかり樂しみに、つらい貧苦の辛抱も、今日といふけふさし當る、年貢の金に父様の、御難義なさるか悲しさに、明日か日戻らしやんしても、戀しい床しいお前に迄、遁れぬ様な身に成て、行ますは

ヽこれ〳〵お若いの、私は此方の樣な子の有覺はない、最男の子も一人は有たれど、夫の勘當知れたればあかの他人、其後鹿谷苑軍太夫とやらいふ侍になつて居ると聞たが、嗚呼子を見る事親にしかずとやら、今又浪人も定めてろくな事では有まい、死れた夫の心がゆかしい、其心を矯直さねば、何時までも、親でも子でもおじやらぬと、憎いながらも餘所事に、眞實眞身の強異見、なんと妹も目に淚、あゝいらざる事に隙入、さあ〳〵小梅、と手を引ば、また取縋を突退て、心強くも子を捨る、藪をへだてゝ隣村、娘を連て立歸る、跡に軍太夫口あんごり、ヱヽ何のこつちや、折角仕込だ立役所、中々是ではいかぬはい、此間京で團右衞門に約束した、椎津家へ仕官の爲に、入る銀を拵へうと思ふて、あのはちくれて有妹め、母者をたらして賣て仕舞と思ひの外、ヱゝ是もすかたん、いま〳〵しい母者め、それよりは爰のかゝめ、最前から見る所が、ても美しい者なあ、こいつも一丁入たへ物じやがなあ、あいや〳〵それよりは此方の金を、爰なかゝめも、ハテ、どうがなと拱手、戀と欲との一思案、あいや〳〵なお妹めをたらして内へ這入、其上で爰のかゝめ、そうじや〳〵と軍太夫、自身在所へ立歸る、跡へいこかは庄屋の甚作、おそへは内に居るか、ヱゝ何でも今日はめつきしやつき、二つに一つの返答をと、聲も辰巳のあがり口、大あぐらかきわなるにぞ、稚子抱へておそへは立出、おゝこれは〳〵甚作樣、毎日〳〵御苦勞樣、まあお茶一ッとあいそも無下に庄屋の甚作、いやもう措て下んせ、

の是にござるは突出しから、馴染だ大事のお方、モ段々様子が有てナ、御流浪のお身の上、紛失した寶の行衛、未だ其外に何や角やで、人目を忍ぶ此姿、はる〴〵と來た二人の心、推量して暫しの內、ヲヽ氣遣ひ仕やんな、どうなとなろぞいの、さうしてあなたは何の人樣、はヽ某こそ、稚津國久が弟左門之助國時、代々衣と二人の中に設けし悴、勇源吾が計ひにて、此苧績の里へ預し由、其行衛も尋ん爲、未練ながらも來りしとて聞て恟り、ムヽそんならあなたは御主人樣、ハイ私は其源吾が女房でござります、すりや其元が、是は〳〵と手を打て悅ぶ內、おそへは立て稚子を、二人が前へ抱き出、ハイ〳〵お預り申しました此和子、愛らしい御成人、に〳〵とした御寢顏、御ろうじて下さりませと差出すを、代々衣が抱き取、そんなら是が絹松かいな、コレイノウこれ母じやわいのう、あれ〳〵父樣も來てござる、これ目を覺して顏を見や、サヽコレ笑や〳〵と二親が、悅ぶ顏を見るに付、我身の憂に夫の事、思ひ出して今更に、戀しさ何とせぐりくる、淚の體に左門之助、我々が悅びに引かへ、歎の樣子心得す、斯成るからは互ひに力、サ子細は如何に、といふに代々衣さし寄て、お連合の留主の中、舅御も有うし此子の介抱、モ彼や是との御心勞、其上に又私ら二人、杖柱共思ふ姉樣、ひよつと煩ひやなど出たら何とせう、ヲヽ夫々、其內には源吾が便りも知うし、はて三人寄は膝とも談合、これいなあ必苦にして下さんすなへ、物思ひな顏見れば、どうやら私は便ないと、打萎れたる淚聲、

いなと聲立て、暫し泣入居たりしが、嗚呼悔むまじ歎くまじ、どうでもさうせにやならぬ物、もう追付迎ひのくる時分、父樣の戻らしやんせぬ先、せめて髮なと取上て、さうじや〳〵と稚子を、脇へ寢さして置火燵、蒲團のくるりたゝき付、アヽ嬉しや寢入たさうなと、立上り取出す櫛笥鏡臺の、蒔繪に殘る昔の香、向ふ鏡に移り行、身の憂淚心細げな三味線の、いとやつれたる二人連、跡や先なる調子さへ、我身からなる亂れ髮、其烏玉の闇の夜も、心の晝と忍ぶ身の、人目の關や目塞笠、哀を添えて彈出す、黑髮の、結ぼふれたる思ひをば、解けてねた夜の枕さへ、一人ぬる夜のあだ枕、袖はかたしく妻じやといふて、若今にても源吾殿が、戻つて樣子聞しやんしたら、矢張我が徒かと、呵つてゞは有まいか、ハアヽ思はれうと儘のかは、愚癡な女子の心としらず、しんと更たる鐘の聲、其上に舅御樣、未だ手のかゝるあの子を殘し、嘸や難義でござんせう、何にも知らず、あの寢顏目が覺たら此私を、母とこがれて泣で有う、アヽ可愛やなあ、夕べの夢の今朝覺めて、床しなつかしやるせなき、あゝあの歌は都歌、はる〳〵の此信濃路へ、如何なる人の袖乞ぞ、進せませうと情有る露の雫は編笠の、透間もる影見合て、ヤア御前は、其方は禿の袖彌じやないか、マア〳〵無事で嬉いが、合點の行ぬ二人連、まあ此方へと、奥底も、眞實見えし姉女郎、いふを力に代々衣は、内へ入る間も心せき、何から角から云ふやら、三國でお前に別れてから、京の島原へ傾城奉公、今は代々衣と申ます、あ

百兩、ソレ右から左と、渡せば手に取りてて〳〵と、押入の小引出し、入る間待兼、コレ〳〵〳〵、金渡したら證文に、親判受判でつかりと、サア〳〵〳〵、爰では何にも云れませぬ、サ體を引かへ、連て往て下さんせ、と聞て肝煎呆顏、いやもう是は近年にない、さつぱりとした水離れ、ヤ夫で此方も心よい、委細の事は藪の下、お竹の所で引合せうと、鋸まうけの肝煎が、直におそへを駕の鳥、涙を包む垂の內、塒放れて越後路へ、駕籠を早めて出て行。はや暮過て薄月夜、軒に松吹風の音、寐に行く鳥の聲ならで、只淋しさぞ増りける、斯とはいざや知らぬ身の、二人は晝の草臥に、しばし寐入を代々衣は、泣子をすかし子守歌、ねん〳〵ねんねこせ、嚊様か抱てやろ、音に目覺す左門之助、供に立出傍に寄、坊が守りは何處へ行た、山を越て、里へ勤に行きしとは、知ぬ二人は子の愛に、心も付ず、ヲヽ寢入たさうな、如何様憎うはない物じやと、餘念なき、折から表へ惡者供、腕を廻せと呼はつたり、ヤア何奴なれば慮外千萬、ヲヽ室町殿へ鐵炮を打かけた代々衣、夫に繫る左門之助、配符の廻つた科人なれば、彈右衛門殿へ渡して銀にするのじや、覺悟ひろげと立寄を、憎い下主めと左門之助、有合刀拔放し、切てかゝれば兩人も、供に拔合切結び、疵付ぬ様搦よと、互に聲かけ挑み合、中に一人は代々衣が首筋取て引立る、はづみに落す稚子の、泣も搆はず連出る、夫やつてはと左門之助、打合ながら追て行、道すれ違ひうそ〳〵と、舌なめ摺して軍夫太、此家のお衣重に横戀慕、誘ひ出し

ヲヽようおつやしつて下さります、有難うござんす忝い、今日につゞまる此身の難義、と云はんとせしが詞を扣へ、どうでもさうせにやならぬ身の、二人が心安めんと、涙隱して空笑ひ、ホヽ〳〵ホヽヽ、ヲヽマあの子とした事が、女でこそ有源吾が妻、お主樣や夫の爲、心勞辛苦を厭ふて、何のマア煩ふてよい物か、モウ〳〵そんな事氣遣ひせずと、サア〳〵お二人共奥へ往て、和子樣を添乳の枕、暫くお休みなされませ、どれお茶でも拵へて上ませう、と氣輕に立ば左門之助、心いそ〳〵代々衣も、安堵の悦び稚子を、二人が中にお手車、連て一間へ入にける、おそへは跡を見送りて、あの樣に二人の悦び、私に力を付て下さる心、アイヤ〳〵、まあ何よりは和子樣の御身は恙なう、生の親御へ渡たれば、夫への云譯は立、アヽ嬉しや〳〵、一ツ叶へは又一ツ、翌迄待れぬ我が身の上、舅御樣へ咄した迚、何の其儘やらしやんせうぞ、お歸りない、其内に一筆殘すが云譯と、涙に流す硯箱、摺墨さへも薄き縁、つひ引寄る行燈へ、筆とまゝなきそれ者流、哀れ昔の全盛も、二度の勤は新潟の、宿の肝煎いつきせき、竹輿をかゝせて入口から、嗚呼藪の下のお竹殿の世話で、奉公人迎ひに來ました、ヤこれ駕籠の衆、一吹さつしやれと、里の習ひの聲高を、おそへはそれと門の口、ヲヽ是は〳〵御苦勞や、併奥にはお客も有、靜におつしやつて下さりませ、ヲヽ込だ〳〵、アシテ其奉公人はな、ハイ、定めしお氣には入るまいけれど、どうぞ私を、ムウ此方か、どれ〳〵、したり見事、三年切で身の代

殿、勤にいたと聞れましたら、定めて徒者と呵られませう、宜う云譯なされて下さりませ、嗚呼モウ〱讀で下さんな、牢へ入より責らるゝより、百千萬の此苦しみ、おりや苦しいわいの〱、最前此方の云しやるには、俺に苦勞をさせまいと隱し包で、嫁御一人の心遣ひと聞た時は、直に牢へ行うと思ふ內、騷動と有故心ならず、戾つて見れば跡の祭り、兄の源吾めは奉公排ぎ、政次郎めは行衛知れず、ほんに〱杖柱共思ふた嫁、餘り孝行過て、日頃の孝行にも似ぬ、胴欲じや〱と、咽返りてぞ泣叫び、正體淚に小梅はせき上、日頃私を子の樣に、可愛がつて下さんしたと、思へば〱おいとしい、さいのう身を賣程の事じや物、嘸つらかつたで有うのに、隱さしやんした恨めしいと、二人が歎にいとゞ猶、老の心のくど〱と、淚果しもなかりしが、漸に氣を取直し、さうじや〱、牢へ入のは覺悟の前、追付て金渡し、取戾すより外なしと、立寄探る戶棚の引出し、財布に入し百兩を、見るにも淚、泣出す絹松、ほんにもう乳が吞たい時分、ゐゝこれ〱、其子はおれが懷へ、ヲゝめつそうな私らが預ります、イヤ〱、最前の騷動と云ひ、爰に置てはあぶな物、サア〱早う〱に母娘、是非もなく子を抱かすれば、さらばと跡は白砂道、せきにせいてぞ走り行、後姿を見るに付、いや增思ひ小影より、軍太夫は踊り出、ヤア味い〱、老惚めが懷の百兩で、身の廻りを拵へ、立身出世は今此時、先へ廻つて一討と、勢ひ込で欠出すを母は抱留、ヱゝ倅は〱まだ根性が直らぬなゐ、追

て連退んと、已一人か點き〳〵、窺ふ跡より人音は南無三寶母者の聲、見付られじと身を潛め、小影にこそは忍び居る、此家の主喜樂齋、今朝より出し野戻りに、何かは內の騷動と、聞に心も落付ず、急ぐ氣は咲梅諸共、漸に欠付て、申々喧嘩とやら拔たとやら、めつたに內へ這入しやんすなへ、ヲヽ合點じや〳〵油斷はせぬ、これ此方衆は跡からござれと、戶口をそつと差覗き、お衣重〳〵、はれ、誰も居ぬさうな、ヱヽ坊主めをたつた一人放とらかして、ハテ、合點の行ぬと、奧口見廻し、ふつと眼の付角行燈、なに書殘しとりや〳〵、ムヽ、年貢の未進故新潟へ勤奉公、ヤア〳〵こりやまあ、とひやうもない事して吳れたはい〳〵と、驚く聲に表の二人、こけつ轉びつ走寄、稚子抱取行燈の影、ヲヽ可愛さうに泣きやんな〳〵、ヱヽそこ所じやないわいの、勤奉公に參り候、身を賣し百兩の金子は戶棚の引出しにござ候、庄屋殿へやつた跡は、あなたのお身の遣ひ料になされ下され候、猶又先程絹松の親御樣方が見え候て匿ひ置候、ムヽ、そんなら今の騷動も、お二人の事で有たか、ヱヽとつとモウかてゝくはへて譯が知れぬわい〳〵、どれ〳〵私が讀ませう、匿ひ置候乳飲子かゝへ嘸御世話、若御病氣でも出やうかと、夫の氣がゝりに存じとりや〳〵、御持藥の大補湯も、村外れの藥屋に賴置候間、御あがり下され、隨分御無事に御暮し遊ばされ候、又々、あなたの着替の綿入、洗濯致し、葛籠の中に入置候、御勝手に御召下され度候、申々まだ爰にも書てござんす、返す〴〵も戀しいは源吾

にわふ親仁じやない、怪我のない內早立去と押へし腕を振放せば、すかさぬ曲者、抱きし稚子鷲掴み、ヤア其子をと取付を、拔手も見せず一わぶせ、わつと苦しむ其隙に、稚子谷へ投放り、返す刀に太股ぐつさり突通せは、チエヽ大切ない主人の子を、おとりにせられた計りに、傍ら如きの手にかゝり、孝行な嫁の身を賣し金を、志しの役にも立ず、剰へ稚子迄盜賊の手に落入とは、よく〳〵運に盡果たか、譬此身は死る共、魂魄其子の影身を守らん、ヱヽ糞やかましいよまい言、こりや、倖が大事がる小悴めはな、たつた今谷へ放つて仕廻たはい、逢たか冥途へ失せをれと、ぐつと突込とゞめの刀、無念〳〵を云死に、六十一期の夢覺て、終にはかなく成にける、笑を作つて軍太夫、死骸の懷中搜し見て、引出す財布の百両包、出世の種と押戴き、跡を晦まし三重遙なる、雲や霞に隔りて、松栢枝を交へ、流水汨々たる幽谷に、盜賊の張本自來也、餘多の手下に松明照させ、青岩に腰打かけ、峰より落し稚子抱き、山上眺めて不思議の眼色、如何成故にか、遙の嶺より此谷へ、ハテ運命の强き小兒、此儘に捨置ば猪狼の餌食とならん、拾ひ育るもア仁の一つ、又此小兒の運命にあやかるを、今宵の働きとして、我は是より立歸る、手下の者は云付し如く心得たか、ヲイ〳〵合點でごんす、そんなら淺野と新町へ、サア二手に分つて、往け〳〵、アヽ何にもしらぬ此寝顔、ハテういやつだな

かけて討氣なら、母から先へ殺して行、さなくばいつかな放しはせぬ、これ〳〵兄様、如斯非道な事をして、出世せうとは情ない、と取付すがる蔦葛、心荒木の軍太夫、右と左へ突飛せば又しがみ付娘の小梅を眞の當、うんと倒るゝ有様を、見向もやらず母親は、猶も取付動かさねば、ヱゝ面倒なと引摑み、投込庭の戸をぴつしやり、飛が如くに三重追て行、春の夜の、早くも更て九ツの、鐘も幽にしん〳〵と、塒の聲と諸共に、さも物凄き山道を、心一筋いつきせき、急で爰迄喜樂齋、跡先見廻し一息繼、やれ〳〵常に通らぬ此難所、おつとりと草臥た、和子が能寢る事はいの、ハア、爰は飯綱山の半腹、新潟迄は餘程の道、一時も早う急がんと、追行跡より軍太夫、韋駄天走りに駈來り是は〳〵よい道連、御老人の只御一人、何所迄お出なさるなといふに、恠しむ喜樂齋、油斷ならずと心に點き、はい私は新潟、アゝいや荷をかたげても此山坂、度毎通る近邊の者、連が有ては結句氣兼、サゝお先へお出なされませ〳〵、ハテ扨何の氣兼、御老體のアゝおいとしいと、存するからの深切、大事の物は、身共に預て置つしやれと、云つゝすり寄懷へ、突込手先をしつかと押へ、コリャ何とするのじや、ヲゝ懷に有此金を、ムゝ扨は推量の通りうぬ追剝やよな、こりや〳〵追剝じやない、あはてな〳〵、鹿谷苑軍太夫様といふ、お侍様の御浪人じやはい、こりや其金で身の廻りをお拵へなされて、御出世を遊ばさるゝのじやはいハゝゝゝ、ヤア小ざかしき山賊め、年は寄ても以前は武士、うぬらが手

に調子、間の襖を押明て、打連てこそ入にける、何とおきよや、今合羽着たお方は、よい男じやないかいの、わしも今夜勤るなら、如斯お方に、サアわしも何卒如斯お方と寢たい、夫はさうと此間、此方へ抱へてゞ有た早枝殿、美しい顏じや、さいのう此所へ勤に見えたも、親御の爲か徒か、さあ何でも男に別れて見えたといふ樣な事か、どんとうさ〳〵とせずじやはいのう、譬男に別れた迚、勤奉公は男の喰飽、ホヽヽヤこんな事云て居ずと、御膳の拵へせうかいのと、襷前垂引しめて、取出したる根來椀、飯盛る汁もる女子共、一人は勝手へ立て行、忘るれど忘れぬ物は戀草の、邪婬の妄念晴やらず、鹿谷苑軍太夫は、喜樂齋を手にかけて、奪ひ取たる金子にて、仕拵へたる身の廻り、大小立派にさしてこなす、心と供に横たへて、此新潟の中住屋へ、尋來りて內に入、某は鹿谷苑軍太夫といふ者、聞ば此家へ此頃抱へし飯盛に、早枝といふ女、適の器量よし、何卒今宵某面會の致し度、態々と參りたり、よきに計ひ頼入と、聞ておきよは會釋なし、夫はまあ〳〵ようお越、先お煙草を上り口、持て出たる煙草盆、いやもう何も揃やんな、ハイ〳〵、併ながらあの早枝樣、如何した事やら、どんとうさ〳〵とせず、お客樣もどうの斯のといふて、ろくに勤てじやござりませぬ、なに勤は嫌ふか、譬勤は嫌ひでも、某が身請致さば心の儘、なあさう云て呼出してたもれ、そんならマアあの座敷へ、さあ御出なされませと、何の苦さへも納戸口、暖簾押明入にける、次第に更る夜嵐も、身にしみ〳〵

新潟の宿の段

雲霞跡遠山に越なして、國々所々を行程に、爰ぞ越後の新潟と、分て賑ふ船着に、往さ來さの旅人を、招くおじやれの杓子顔、いやみな事をすり鉢に、連木のはしき風情にて、手でに直す旅荷物、中に一際目立たる、淺黄合羽に天鵞絨衿、色はくつきり垢抜けは、旅出立のやつし肌、跡にどや〳〵入來るは、泊る人とぞ知られけり、銘々挊ぎの商人も今宵は爰に泊らんと、草鞋とく〳〵上り口、先お一つと汲で出る、茶碗取手をちよつこりと、當るは夫者の常なりし、心さへ早夕陽に傾きて、錢もだいなし奴らさ、ずつと這入て、いや何女中、今宵は我等もお泊りだ、木賃できまらん何程だ、はい〳〵あなたお一人でござりますか、いや忰一人只連たれど、夫は拙者が寶藏にお休みなさる、先我ら一人だ、ヲヽ一人旅は泊ませねど、先の宿へは餘程間も有、夜に入ては御難儀であろ、內證で泊て上ませう、なに內證で泊てくれう、夫は〳〵忝いが、其替りに、お風呂が有ば下も焚、水もうゝませう脊中も摺、どんなせはしない泊りでも、わしや嬉しいと思ふ物、ホヽ〳〵これは〳〵氣の輕い奴樣、まあ悠然とお休みなされませ、いや申夫なるお旅人方、一河の流一樹の陰、袖の振合せも他生の緣、旅は道連世は情、今宵は夜と共お噺し申さん、夫は此方も仕合せ、然らば御一所に斯参らう、いざ御入なされませと、互

下婢、主人へ差上申、ヤ夫は能思し召、ヤナニ軍太夫殿、某も密々談じ合子細もござれば、其女身が屋敷迄、如何様然らば貴殿宜しく御計ひ下されい、こりや家来共、此女屋敷へ同道仕り、随分大切に致せい、ヤナニ早枝とやら、彼者と連立身が屋敷へ、早う〳〵、あいとはいへど行末は、どうなる事と思ひ川、深き契りは夫には、いつ逢事やら定めなく、是非もなく〳〵出て行、跡に二人は膝摺寄、ヤナニ軍太夫殿、兼て貴殿と心を合せ、椎津家を押領せんと、奪ひ取置繼目の綸旨、幷に西天草も某が所持致す、併片腕と頼みし貴殿、何卒椎津の家に近付、猶も事を計ん爲、主人へ取成致し、召抱さする工みの一ツ、成程〳〵、則蛇丸の剱も、先達て我手に入ば、此上は國久兄弟討て捨、直に館を乗取、やがて四海を奪はん事、我掌の中に有、はゝ出かされたり、萬事の手段は屋敷にてと、互に打とけ悪事の密談、此方に窺ふ以前の旅人、つか〳〵と立出、何じややら面白さうなお咄しが耳へ入、私も寢兼てをりますと、いふに兩人顔見合せ、して其方は何者、はい私は長蔵と申て、旅挊ぎの者でござります、ムゝすりや我々が密事を聞たるとな、あいや聞たでもなし又聞ぬでも、夫聞れたら赦されずと、兩方一度に切込太刀、左右へあしらひ丁と受留、是はマアめつそうな、お二人共にどうなされます、ヤ下主に似合ぬ手向ひ立、一大事を洩聞汝、助け置事罷りならぬと、振ほどいて打込を、かはして利腕しつかと押へ、イヤ私も男でござります、譬聞たり共決して他言は仕らぬ、又事と品とに寄ば、

と憂事の、重るつらさ目も合す、人間待兼ね立出る、喜樂齋の嫁お衣重、今は早枝と形振も、變る枕のうき勤、心は暗き角行燈、かさ並れ共晴やらぬ、胸の思ひの獨言、夫源吾殿は日外より行方知す、次第に重る年貢の未進、舅御樣のお心遣ひ、其苦を助う計に、此新潟へ勤奉公、其甲斐もなく舅御樣、飯綱山にて人手にかゝり、非業にお果なされたげな、まだ其上に夫の手より、御主人のお種を預しやんした稚子も、其場で行衛知ずと聞、若今にでも夫に逢ば、何と云譯有べきぞ、斯云事とは露程も、知らずで有う源吾殿、女夫といふ間も內を出、何處にどうしてござるやら、こがるゝ女房の心根を、思ひやる氣はない事か、若しや外へのうつり氣か、樣子が聞たい知らせたい、むごい夫や胴欲と、女心の一筋に、恨み歎くぞ道理なり、早枝〳〵と軍太夫、酣醉紛れ千鳥足、ヤこれ早枝手の惡い、身共に酒を呑して置、爰へ來て何して居やる、最前も云た通り、其方の身の上、今奧で亭主に引合、某が身請致したからは、最早身共が女房だぞよ、エゝあのそんなら私が身を、ヲゝサ受出した、ハアはつと計に胸塞がり、今更何と詮方も、しばし涙に暮居たり、斯る所へ入來る、同氣求る脇淵團右衞門、下部引連しづ〳〵と、案內もなくつゝと通り、ヤナニ軍太夫殿、御紙面の趣承知致して只今參上、これは〳〵御苦勞千萬、某此度椎津家へ仕官を致すも、偏に尊公の御取持祝着に存る、是は御禮痛み入、スリヤ夫成女が貴殿お咄の、早枝とやら申のでござるかな、如何も左樣、某が身受致し、目見の

ばど、別れてこそは三重「立歸る

椎津館の段

始虹見彌生の空も、長閑なる、六ツの花もやゝ解流の、時に名高き越後の國、椎津殿の一構へ、花美を盡くせし館のさま、今日式日の御祝儀と近習小性も銘々に、禮義正しく居ならべば、國久御機嫌麗しく、今日は節句の祝儀迚、家中の銘々、未明よりの勤仕大儀〱、當家の儀は、先祖より代々傳はる、蛇丸の銘劍を以て、災ひを秡除する、蛇は則巳の形成が故に、巳の日毎に賀す、取分今日は上巳の壽き、又曲水の宴迚、流水に盃を浮めて興を催す、我國にても顯宗天皇の御宇より始り、幸庭前へ堰入たる池水へ、盃を浮め酒宴を催さん、ヤア〱女共、用意致せと仰の下、はつと答て姬共、銚子盃携へて、君の此方に扣居る、軍太夫進み出、當時世上を徘徊する自來也と申す强盜は、蝦蟆の妖術をつかひ諸人を惱ます、室町殿より嚴く詮議有といへ共、未だ有所もしれず、然る所當家の重寶蛇丸は、妖術を除くの趣、室町殿にも聞し召し、當家の蛇丸を以て、自來也が妖術をくだき、召捕べく旨嚴命下る、當家の面目是に過ずと、草を分つて詮議致せど、行衞知れぬと雖ども當家の威勢、又は銘劍の德を以て、召捕ん事近きに有と、己が邪智をば押隱し、諂ひ飾り相述る、はゝ其儀は其方と勇源吾、兩人へ申付置は氣遣な

御用にも相立ませう、ハテモ夫共に疑はしくば、御存分になされませと、腰をとすへたる一曲者、ヲよい了簡、是非に及はぬ覺悟せよと、太刀振上ることなたの一間、障子の陰に以前の奴、軍太夫が刀をば、ためつすがめつ、扨こそ尋る名劍、ハア忝しと心の笑、猶も樣子を窺ひ居る、軍太夫刀を納め、心底見えた、其方身が抱て遣はす奉公致せ、これは〳〵有難うござります、お抱なされて下さらば、此身の大慶及はずながら、御奉公致しませう、ホヽ出かす〳〵、まさかの時は役にも立べきやつ、ナント團右衞門殿、こやつ見所有やつではござらぬか、左樣でござる、こりや若者、隨分と奉公大切に致せ、いやモ今殺さる命のかはり、いか體の御用でも、ホヽ頼もし、是よりは座敷にて、主從かための盃せん、身共に付て奥へ來よ、團右衞門殿イザ御出、先々、と慾惡無道の兩人に、隨ふ旅人も一物の、互に心隔の襖、押明てこそ入にける、障子押明立出る奴、跡先見廻し推量に違はず彼らが惡事、今此所にて荒立なば、寶の破却家の恥、屋敷に有ば籠中の鳥、計略を以て恙なく、寶を取得る手段、ハテどうがなと手を拱き、思案半へ立出る旅人、慥に今のが、コリヤ隱密〳〵、其方彼等に近寄こそ幸、方便を以てな、子細は斯と耳に口、ハア委細畏り奉る、必ぬかるな、心得ました、我は猶も姿をやつし、工の底を探り見んと、立出んとする其折しも、戻りかゝつて窺ふ中間、やらぬとかゝるを身をかはし、拔手も見せずから竹わり、お奴樣にはもうお立かな、緣有は重て、隨分御無事、おさらばさら

は七人おてがい、そなたは本妻かわりはせぬ、比翼とかはせし中なれば、偽りいふてよい物か、機嫌直しやく、さあく奥へおじやいのと、手を取給へは嬉しさの、ゑくぼちらりと三日月の、眉の霞も晴ねらん、打連てこそ入給ふ、斯る所へ組子の者、申上ます申上ますと、呼はる聲に立出る、源吾軍太夫座に着は、二人か前に手をつかへ、御尋ねの盗賊自來也、只今城下に於いて召捕ましてござります、ホヽ天晴手柄、それ是へ引出せ、はつと心得網乘物、數多の組子引添て、庭上に昇すへて、自來也出ませい〳〵と、戶を引明れば大あくび、ムヽアヽとろ〳〵とやつて退た、爰は一體まあ何所じや、國久公の御館成ぞ、早く出ませい、エヽざは〳〵とやかましい、左りや夫へ參つてお近付に成うかと、いひつゝ出れば源吾聲かけ、ムヽ其方が今世上を徘徊する自來也なるか、如何にも自來也、運命盡て捕はれしと成しも是非に及はぬ、此上は勝手に首を刎さつしやれと、ちつ共屈せぬ丈夫の眼色、流石と感ずる勇源吾、軍太夫は高笑ひ、ムヽヽヽハヽヽヽ、此奴大分味をやりをる、己れ誠の自來也では有まい、誠の自來也ならば、命助る筋も有んと、陳じねはならぬ所、僅輕足風情に捕れ、自來也なりと自身の白狀、察する所自來也の手下の者で有うがな、召捕れた幸に、自來也と名乘段、ハテ萎らしいやつじやよな、さあ誠の自來也は何所に居る、有體に白狀致せと居丈高、自來也ぐつとねめ付、やあ己が心に引比べ、偽り陳ずる自來也と思ふか、こりややい、此自來也常體の盜賊だと思ふか、某は

し、イヤモ兎角浮世は色と酒、此間其方が召連歸りし早枝、ヤモ適の器量、我等が手生の花にせんと思へ共、兎角心に隨はず、此儀も其方と源吾に申付る、よきに口說某が、閨の伽を致させよ、サ次へ立早く／＼に軍太夫、互に違ふ胸の內、口へは出さぬ奧の間へ、近習諸共立て行、さあ／＼／＼是からは堅い者はない、わつさりと一ツ呑うと、盃取て差出し給へば、銚子を取てつぎかける、其手をじつと引寄給ひ、何と常盤、其方共は堅い屋敷の勤奉公、嘸お寢間淋しかろ、どうじや／＼と、寄添給へば、ちやつと飛退き、これは／＼殿樣のお惡ざれ、お赦しなされて下さりませ、そんなら次の若葉はどうじや、はい／＼私も御免下さりませ、そちもいやか、そんなら田每、わがみはどうじやと、色にたはいもなき體に、姫共は逃て入、ヱヽ皆揃ふた色氣なし、おぼこなやつらで有はいと、打笑玉ふこなたより、そつと出たる幾瀨が思ひ、何と詞もなげ入の、椿一りん手に取て、首筋元からひいやりは、戀の手爾葉としられけり、こなたも胸り、ヲヽ誰かと思へば幾瀨、爰へはまあいつの間に、くる達へ色々と、御座興でもござりませうが、私が心御推量下さりませ、又承はりますれば、此程は早枝殿とやら、美しい御妾樣をお抱へなされし由、さぞや悋氣と思さうが、君を大事と思へばこそ、お諫め申恥かしさ、お情受し其時に、變るまいぞと御仰、今しも嬉しさ忘れ兼、若や私を仇花と、見捨給へばそもやそも、何と身も世もあられうと、諫める胸もそれ／＼に、たゞ一筋の恨みなり、いやモ大名に

へ、これは〳〵聞及びし早枝殿とやら、此頃當屋敷へ召寄られ、殿のお部屋になさんと有を、承引なきは子細ぞ有ん、殿のお寢間の伽を致すは、適身の大慶と、悦んでも隨ふべきに、得心なきは何故と、思はず見合す顏と顏、ヤアこは我夫、其方は女房衣重、此屋敷へ參りしは子細ぞ有ん、樣子は如何と尋れば、衣重は嬉しさ戀しさに、何と詞もないじやくり、源吾は猶も不審顏、親人には御健勝にましますか、其方に預置たる稚子は如何、弟雄次郎も無事に有や、其方の委といひ、打萎れたる其體は、子細ぞ有ん包まず語れ、とせり立夫、問れて女房は涙にくれ、積る思ひのうさつらさ、何時やあなたが奉公稼ぎと出玉ひ、程なく御主人の御種と、お預けなされし稚子、貰ひ乳で育つる中、内證の不勝手、年貢の未進、父樣を牢へ入ると庄屋殿のいはしやる故、父樣に隱し勤め奉公、拙は貧しい故身を賣しか、エヽ不便やなと、倶に涙に暮居たる、折から來かゝる軍太夫、二人が樣子心得ずと、小柴の影に忍び居る、源吾は猶もさし寄て、して親人はどうなされた、さわ父樣は私を、尋にござんした道、飯綱山にて人手にかゝり、お果なされし由聞た時の悲しさ、又稚子の行衞も知ぬはいなわ、ムすりや若君の御行衞は、ホイはつと計にうろ〳〵涙、チエヽしなしたか殘念や、父上も武士の果、某も何卒武家に奉公なし、絶たる家名を起さんと、心を砕し甲斐もなく、譬此身は錦繡を身に纏ひ、何萬石の食祿を蒙る共、父の御最期餘所になし、そも武士道が立べきか、とくにも通達するならば、親

天命を知り、貧窮なる者には仁を施し義を立る、强欲に富る家には押入て金銀を奪取、自來也と書記し、歸るによつて自來也とよぶ、然るに今朝城下において、不意に召捕れしも運の盡、手下の者を助んとこそ思へ、非道を遁るゝ自來也ならず、小雀何ぞ大鵬の心を知らんや、あの爰な大馬鹿めと、云込られて軍太夫、やわ倂血迷ふて何ぬかす、誠の自來也ならば猶以て猶豫ならず、それ組子共、責道具の用意致せとひしめいたり、源吾詞を和らげて、流石の自來也大丈夫、して自來也とは異名ならん、本名は何と、あいや本名名乘は時節が有う、シテそこ元は、某は當家の臣勇源吾といふ者、すりやそこ元が勇源吾殿とな、はてなあ、いやこれ源吾殿、きやつ拷問致させませう、いや〳〵主人へも申上、拷問致すは緩々と、先獄屋へ引、乾度誡め置、畏りました、自來也歩め、どりや獄屋とやらで休息致さうか、案內致せとのさ〳〵、獄屋へこそは引れ行、軍太夫差寄て、いや何源吾殿、先刻仰付られし、早枝殿の儀を貴殿空く、ほゝ其早枝殿とやら、未對面致さね共、如何の儀にて殿には隨ひ申さぬぞ、とくと申聞ませう、なれ共某は若輩者、貴殿も倶々此場に有て、いや此方は是迄に手を盡して居ます、何づれ貴殿お賴み申、萬事は後刻と軍太夫、源吾に心奧の間へ、引別れてぞ三重入にける、同じ館の大座敷、金を盡せし庭もせは、今を盛りの櫻花、姿楊貴妃櫻でも、積る思ひの山櫻、辛氣辛苦の結ぼふれ、早枝は爰に萎れ居る、倶に思案有顏に、源吾はしづ〳〵立出て、早枝が前に手をつか

上は、源吾は御暇遣はされ、早枝儀は某宜しく計はん、ムヽ其方の詞に任せ、源吾めを追拂へと、嚴しき詞も兩人は、親の敵を覘ふ身の、夫と云ねど情の暇、善か惡かは知らね共、主人の仰に是非なくも、打萎れてぞ立上る。こりやく源吾、嵐しで老木の枝は折る共、木に匂ひ増る梅か香。サ散行花は歸らねど、又來春に咲花の、ナ、早行、はつと計に有難涙、血を吐く思ひ婉娩も。かたしくに引分れ、御門外へと出て行。折から奏者罷出、都より御上使として、正木和多理の進樣御入と、申上れば國久公、ハテ心得ぬ、室町殿よりの上使、何にもせよ用意せん、早枝來れと引連て、奥の間さして入にける。時しも響く玉瀬の音、早一陰の告渡る、庭の樹木も嘯など、透を窺ひ團右衛門、邊り見廻し小聲になり、いやなに軍太夫殿、兼て申合せし通計らひ置ば、當家の滅亡近きに有、ほゝ其儀は少も氣ひなし、併源吾めは某が、飯綱山にて討捨たる、喜樂齋の悴とは知ず、同席に有し事ひやいな場所、此軍太夫を敵共知ず、出てうせたうつそり、某は跡を慕ひ遮り討、いざ蛇丸御請取下され、ホヽ然らば西天草御預中一時も早く追付、返り討に致されよ、これ欺すに手なし、油斷召れな心得ました、遠くは行まじ、おさらばと、逸足出して飛で行、跡見送つて團右衛門、此劔を奪ひ取、綸旨も某所持すれば、當家を押領なさん事またゝく内、味いくと點く此方に窺ふ曲者、劔を奪ひ眞の當、元の小陰へ忍び居る。フツと氣の付團右衛門、扨は曲者遁さじと、當り見廻す折からに、早御上使の御入

人と云其方迄、斯艱難はさすまじきに、知らぬ事迚不孝の罸、御赦免なし下されと、無念涙に暮ゐたり、倶に歎に沈しか、あなたが此御屋敷に御出なさるとは、神ならぬ身の露しらず、新潟に勤る內、かはる枕の數々も、終に一度も帶解ず、何卒敵を討うにも、私一人の心づかひ、誰に相談する人も、ないてくらしたうさつらさ、御推量を、と計にて、跡は涙に伏沈む、源吾は泣目を打拂ひ、此上は御主人へ、お暇願ひ倶に天を戴さる、父の敵を尋出し、修羅の妄執晴さんと、つゝ立上るこなたには、始終立聞國久公、衣重は源吾に取縋、まあ／＼待て下さんせ、しばしは積る物語りと、しつと手を取引寄る、此方の方には軍太夫、すりや飯綱山にて討捨たるは、源吾が父にて有しかと、舌を卷てぞ居たりしか、何か心の一思案、咳拂ひして打通れは、はつと兩人飛退て、これは／＼軍太夫殿、先刻より樣々申せ共、承引なき不屆者、貴殿宜しく御取計ひと、いへば軍太夫苦笑ひ、此上は殿へ申上、御賢慮に任せん、ホヽ夫へ參つて計はんと、立出給ふ國久公、先刻より窺ふ所、早枝と源吾は不義を致し居らうがと、黑星さすが明智の一言、軍太夫は思ふ坪、源吾ははつと恐れ入、某は此頃屋敷へ參り、早枝殿にも今日始て見參、不義抔とは思ひも寄ず、いやいか體に包む共、某が白眼だればいつかな／＼、兩人共夫へ出よ、手討になさんと怒りの御氣色、こは御短慮と押留る、內心おのが横戀慕、わざと御前へ手をつかへ、兩人共不義者といへど證據も見定ず、御手討有ては諸人の嘲り、御前の御不覺此

の涙、はら〳〵〳〵、惜や盛りの櫻木も、嵐の爲に是非なくも、ぐつと突込引廻す、團右衛門は立よつて、疵口改め高笑ひ、ムヽヽハヽヽはてよい氣味なくたばりざま、ヤナニ新潟にて、長藏と申合せし通り、萬事の手遣ひ太儀〳〵、これは〳〵御褒美の御詞、斯計らひくれよと其貴樣の御頼、ホヽ事成就なさば一かどの褒美くれん、此上は事急に、室町を亡す手段、と聞て手負は仰天し、ヤアスリヤ、御上使といふたは、コナ國久の狼狽者、今端の引導にいひ聞す、先頭より當家へ入込、今日の上使も某が計略、其方に切腹さし、當家を押領し、猶も室町を亡し、四海に羽を伸す、我大望とは知らず、うま〳〵とくたばつた、ヤ大馬鹿者、チエヽ扨は其方は謀叛の餘類で有たよな、いやなに團右衛門樣、室町を亡しても、武將つぎ目の綸旨なければ、天下は納らぬとやら申事、アイヤ〳〵其儀は氣遣ひ致すな、それ故に先達て、奪取置此綸旨と、懷中より取出し、見すれば透さず引たくり、エヽ有難や、此綸旨を詮議の爲、心を碎きし我を、ヤア〳〵隼人之助、團右衛門を召捕と、下知に隨ひ上使の家來、十手振て立向ひ、腕を廻せと詰寄ば、恟り仰天團右衛門、此方の手負は喜悦の顔色、是迄放埓と見せしも、其方が工を顯さん爲め、又某が命捨ゆゑ、佞人原の工みも顯はれ、繼目の綸旨も御手に入し、ハアヽ有難やと、痛手も屈せぬ悦ひに、團右衛門は呆れ顔、はて合點の行ぬ其方共は、はヽ子細語んよつく聞、某こそ誠の椎津市正國久、今三好の殘黨徘徊し、足利家の綸旨紛失、其上當家の

と、奥へ通して國久公、近習引連出給ふ、團右衛門も座を定め、待間程なく入來る、上使の役目正木和多理之進、上下優美の其骨柄、儲の席に着にける、國久公謹で、御上使御苦勞に存奉る、上意の趣御聞られ下さるべし、ホヽ上意の趣餘の儀にあらず、室町殿へ手に入し此一卷、披見有て返答召れ、ハヽ畏り奉る、なに團右衛門、それ披見致せ、はつと取上押披き、こりや是、天下を押領せん、謀叛徒黨の連判狀、稚津市の正國久判、すりや我君には御謀叛の思し召なりや、何某を謀叛人とは、ホヽのつ引ならぬ其元が龍の印、よも云拔は有まじ、其上先達て室町殿より媒介を以て、其方弟左門之介へ、細川家の息女を婚姻仰付られし所、左門之助には傾城に心を奪はれ、本國へも立歸らぬよし、重々の不屆、急ぎ其方稚津家へ立越、國久へ切腹申付、若あらがひなば軍勢を以て討取と、則館の四方は圍ませ置、さあ尋常に切腹有や、但し和多理之進立寄て討取んや、サヽヽ何と〳〵詰寄れば、はつと計に當惑の、家中の銘々顏見合せ、手に汗握る計なり、國久ちつ共騷がす、此身に取て覺なけれど、申譯なき某が直印、此所にて潔よく、切腹致す、何卒貴殿の御執成、左門之介へ家相續仰付らるゝ樣、偏に願ひ奉る、ホヽ其儀は氣遣ひ有れな、則某が介錯致す、早とく〳〵と上使の詞、ハア小姓共、用意致せよと、君の仰にせひなくも、近習小姓が持出る、白木の三方九寸五分、御前に差置ば、國久取上押戴き、チヱヽ口惜や覺なき罪に相果る、此身の不幸推量有と、さしもに猛き武士も、無念

〳〵幾瀬夫の死骸に暇乞と、情の詞に一間より、疾しや遅しと轉び出、こは我夫の亡骸か、淺ましき御姿、武士の道とは云ながら、今日が一世の別れ共、知ぬ此身は淺はかな、殿樣のお妾は、適似合殿御ぶり、誠の賤と申せ共、恥しからぬ我夫の、お胎にやどした稚子もあなたに似たら器量者、産落したら如何してと、樂しみくらした甲斐もなう、御切腹の其時に、暇乞もようせずに、お次に扣へて血の涙、嘸やお胎のやゝ迄も、お氣にかゝつて嘸や嘸、仰置たき數々も、ござりましたで有うのに、何の因果で武士の、死るを忠義といふ事は、誰何の世に始しと、くどき立たる恩愛の、涙は越後の山々に、いて氷たる千丈の、氷柱も解し如く也、斯る所へ隼人之助、團右衛門を討取て、切首引提立歸り、御門前迄付出し、手いたく働き候へ共、先づ斯う討取候と、申上れは國久公、ほゝ適〳〵、我は直樣都に登、綸言を差上猶も寶の詮議をせんと、つゝ立給ふ此方より、やあ〳〵椎津市正國久、三好長重が忠臣、尾形周馬廣行、對面せんと呼はつて、以前に變る盜賊自來也、鐵帷子小手脚當、勢ひ込で立出れば、はゝ其方が世上を徘徊する、盜賊の張本自來也成か、先刻召捕れしと聞しが、すりや態と舘へ入込しな、はゝ推諒の通、當家へ入込しも、此蛇丸の劍を奪はん爲、態と引れし牢屋の内、へし破ぶりしは我方寸、背鐵城金城、或は盤石を持て圍む共、抜出るは手裏に有、まつた椎津國久其方にも、主人の恨是見よと、天に向つて唱へる秘文、忽聞ゆる鐘太皷、何處共なく數千の軍卒、小

重寶西天草、蛇丸の劒迄、紛失せしは必定謀叛の族の所爲ならん、まつた左門之助が放埒、某本國を治ん爲、都より下りしと僞、面體似たる家老主税を某に仕立、當館へ差越置、猶も綸旨を詮議、又家の重寶尋んと、姿をやつし爰かしこ、新瀉の宿にて、其方と軍太夫の密事の趣、逐一に聞取、某が召連し、それ成浦邊隼人といふ者、其方の味方と成て肌を赦させ、先斯々の謀、態と其方に一味をなし、上使と成て入込、主税に切腹させしも天下の爲、術に落たは儕が天命、さあ尋常に腕廻せと、聞て無念の團右衛門すりや計る〳〵と思ひしに、うぬらが術に落入しか、此上は團右衛門が死物狂ひ、首を並べて覺悟せよと、だんびら引拔切込を、隼人は十手打振て、上段下段と打合中、手練の隼人に拔刀、打落されて團右衛門、コハ叶はじと逃行を、儕其儘逃さうかと、跡を慕ふて追て行、かげ打見やり國久公、手負の傍へ差寄て、ホヽ、遖忠臣主税之助、其方が命捨し故、綸旨安々手に入たり、心殘さず成佛せよ、とは云物の、あたら忠義の武士を、不便の最期と大將も、悲歎の涙に暮近き、鐘も哀を次の間に、聲は聞共儘ならぬ、隔て幾瀬の憂涙、昨日の淵も今日は瀬と、變る夫の有樣を、見るに見なれぬ恨泣、主税之助は主人に向ひ、今斯傍人亡る共、猶も怪しき盜賊徘徊、御油斷なく御身を御大切に、まあ申置べき事なし、最早お暇おさらば〳〵と、詞立派に武士の、笛のくさりをかき切て、刀を拔はがつくりと、はかなく息は絶えにけり、大將涙打拂ひ、やあ

う、ホヽいや貴様のいふた信州諏訪へ氷が張て、恠しやヲチヽちん〳〵、エヽ何ぬかすのじや、我迄を茶に仕をる、サヽいこ〳〵と、身拵らへする其折から、入相告遠寺の鐘、もう日暮じやと道者共、思ひ〳〵に行跡へ、所の雲介馬士共、のつさ〳〵と立出て、こりや八よ、今ざぶに頼まれた、源吾とやらいふやつ、此道筋へ來るで有、先へ廻つて仕まふてくれとの頼み、はうびはずつしり山吹色、何でも晩の長半代じや、ぬかるな合點と點き合松の小陰に忍び居る、早黄昏も過る頃、斯る工の有ぞとは、いざ知らぬ身の迫り、大小立派に差こなし、主人の情の御暇に、親の敵を討得んと、心も勇正村は、急がぬ旅にしづ〳〵と、歩み來かヽる此方には、兼て恪恰聞置し、源吾の來るを松の陰、雲介共は立出て、ヤ是親方、戻り駕じや乘んせんか、もう日も暮れかゝる、此街道は別して物騒、此方の行所迄乘てやろ、但しは、冥途の旅へなり共、勝手次第にやりませうと、わぢに仕かける詞の端、胸に當れど左わらぬ風情、イヤモ急がぬ道の一人旅、物騒なも合點、足も草臥ねば先駕はよしにせう、ヲヽ駕に乘ずば酒代を置んせ、ムヽ乘ぬ駕に酒代とは、ヲヽ、扨はうぬら盗賊よな、こま言いはさずたゝんでしまへ、ヲヽ合點と雨方より、引ばる腕を振はづし、コリヤ狼藉何ひろぐ、物な云すな合點と、心得銘々組付を、得たりと取てづてんどう、眼を配れば我武者共、たゝんで仕まへと抜連て、切込刀を請流し、上段下段と切合中、こりや叶はじと白砂を、掴んで投れば忽に、眼暗めど屈せぬ源吾、

具足固め銘々に、鎗鐵砲を携へて、庭上狹しと居並んだり、隼人之助はえせ笑ひ、ほゝ面白し〳〵、しやらくさい軍兵共、只一摑みと立寄を、國久制して、如何に自來也、いつぞや妙香山にて異人より、授かりし妖術にて、某が眼を暗まさんとは愚〳〵、今某か所持したる、綸旨の威德是見よと、差出し給へばあら不思議や、ぱつと耀く光と供に、庭に居ならぶ軍卒共、皆藁人形と本體の、顯はれけれは强氣の自來也、事共せず、此上は誠の軍勢を催して、戰場の勝負をなさん、先夫迄は市正、汝が命は汝に預る、ほゝ其方の命も、蛇丸諸共預ると、互に廣言勇者と義者、睨み合たる其中に、妻の幾瀨は夫の亡骸かき抱き、果し歎きや越後路へ、皆雁金は歸れども、歸らぬ夫は十萬億土、此方は都と黑姬山、引別れてぞ三重出てゆく

平幡松原の段

何ぼ程、銀を入ても留たき春の入相花の山、晩の泊は足めに問へよ、おしやれ相手の盛り喰も、杓子當りは錢次第、玉味噌汁に紫蕨の、料理ならねど平幡の、小松原へと來かゝりて、何と吉兵衛道中すれば春の事、日は長し景色はよし、イヤモウ別して此越後路は、冬の內は大雪で、往來は自由にならず、しかしながら、信州諏訪は氷で張と、近道ができて、氷の上を渡るげなと、聞より手を組にらみ詰、すつくと立て恟りし、こりや急病か立眩みか、何をするのじやぞいの

女の足のはかどらず、夫源吾殿に追付んと、心はせけどをり悪い此癪、源吾殿はどつちへ行んした、久しぶりにて漸と、逢と其儘引分れ、行衛定めぬ旅の空、敵の有所いかゞぞと、心ならずも歩行、街は草の露ならで、はかなく消し我夫の、血汐成とは知ぬ身の、思はず立寄死骸の傍、はつと驚きヤアこりや我夫源吾殿、何者が此様に手にかけた、闇々と不覚を取夫ではなけれ共、こりや騙し討に極つた、嘸口惜かろ、無念にござんせよのう、これ源吾殿いのう、正村殿と、死骸にひしと抱き付、聲をばかりに歎しは、目も當られずいぢらしゝ、樣子窺ふ軍太夫、松の影より立出て、後へそつと抱き付ば、思ひがけなく飛退おそへ、これ〳〵怖い者ではない、軍太夫樣じや〳〵、ムヽ其方が爰に居るからは、扨は夫を殺たは、ヲヽ推量の通りおれじや、一體そ樣に我等甚執心、それ故殿のお伽と偽、家敷へ引入置、某が心に隨へんと思へ共、何ぼうでも得心せず、樣子を聞ば源吾とは夫婦のよし、其源吾めは敵を討んと出でうせる、先へ廻つて只一討、是といふもそ樣故、死だ男は思ひ切、此軍太夫樣に隨へ、どうだ〳〵と猫撫聲、エヽ穢らはしい、譬どの樣な事が有共、何で儕に隨はふぞ、夫の敵勝負せよ、フヽこは〳〵、イヤ何おそへ物は相談、我等今お手前に切れてくれうが、切れた其跡で心に隨へ、否か如何だ〳〵、サヽヽお切なされ〳〵と、體を傍へ突付る、ヲヽ夫の恨、晴さいで置うかと、用意の脇差抜持て、突共切共こは如何に、薄手も付ねば呆るゝおそへ、軍太夫せゝら笑ひ、お手前甚

卑怯の者共逼さじと、刀を振て立向ふ、兼て工みし駕の垂、明て出たる軍太夫透を窺ひ後より、脊骨へかけて只一つき、こは何者と驚くを、見向もやらず軍太夫、皆々太儀、是からは身共が料理、當座の褒美休め〳〵、こりや有難い皆のもの、息休めに一ぱい呑、サア來い〳〵と打連て、皆々立て走り行、跡に源吾は無念の齒がみ、何者なれば欺し討とは卑怯至極、恨が有ば名乘かけ、なぜ常尋の勝負はせぬ、ヤイ〳〵〳〵、何者とは慮外千萬、こりや鹿谷苑軍太夫樣じやはやい、さあ立上つて勝負せぬか、腰が立ぬか、ハヽヽふ便やなど、土足にかけて蹴飛せば、スリヤ其方は軍太夫よね、何故かゝる欺し討、ヲヽ何故とは其方を生て置てはな、此軍太夫樣ちと御勝手がわしい、が其譯も冥途の土産に、いふて聞さうぞ、こりやそちの親喜樂齋を、飯綱山にて討捨たるは、此軍太夫樣じや、それ共知ずうか〳〵と、敵を討に出た、アノ爰なうつそりめが、やわ〳〵すりや其方が親の敵、觀念せよと拔打に、切れてひるまぬ軍太夫、暫し時をぞ移しける、肩さきずつぱり切付る、無念とあせるを乘かゝり、起しも立ずとゞめの刀、先一方は片付た、しかしちよびとかすり手を、負せおつたと肩先撫、こりやどうじや衣類は切ても、疵の付ぬは、ハアしたり奇妙こりや是、所持致す西天草の寄特、此草は劔は元より、鐵炮も立ぬと、兼てより聞及ぶ、ヤレ〳〵嬉や〳〵と、守を取て押戴、折から人音南無三と、小陰に身を忍ぶ、遲るゝも、終には同じ死出の道、一人とぼ〳〵女房おそへ、夫の跡を慕ひ來る、

りと、其儘そこに倒れ伏、死骸を詠め打笑ひ、本得心の姿じやなわ、生て居る内得心すればよい物を、憎いやつと刀を拭ひ、上立る折からに、速水雅次郎正輝は、諸國を廻る武者修行、此越後路は古郷の、父の案否も如何ぞと、尋て急ぐ旅の空、松原近く來かゝりしを、それと見るより軍太夫、源吾の餘類と心得て、切込刀身を替し、心得たりと拔合し、又討かへる鋭き刀、丁と請留身をかまへ、ヤア麁忽なり、身は諸國修行の旅人、狼藉受る覺なし、汝は盜賊なるや、又は意恨有て人を討果せし物ならん、某を助太刀の者と思ひ刃向ふか、但し又、山賊ならば諸人の爲、只一刀に討取ん、サヽ返答如何にと詰かくれは、アヽイヤ、全く山賊夜盜にあらず、意趣有て傍輩を討取立退者、然らば此方に構ひなし、刀を納らさよ、サヽと兩方刀を納れば、闇はわやなく軍太夫、跡をも見ずに迯て行、折しも村雲晴渡り、月代上れは有々と、二人の亡骸見え渡る、雅次郎は前後を詠め、一人ならず二人迄、手にかけし今の曲者、如何成故か不便やと、見やる死骸へ滴る血汐、スリヤ今請留し切先が、扨は我手に當りしかと、拭ひ取んと懐中より、紙取出す其中に、流るゝ血は源吾が死骸にかゝる、不思議の因縁互の血汐、一つに成、纒ひ廻りて流もやらず、雅次郎乾度目を付、誠や骨肉同胞の血汐は、一つに集ると聞及ぶ、ムヽはて合點行ずと死骸を改め、ヤアこりや是、別れて程經し兄者人、何故に此御最期、嘸御無念にござりませう、兄者人いのうと、あへなき死骸をいだき上、呼ど答もあらざれば、此方の

お手利だ、けれど我等不仁身も同然、西天草といふ者を、所持して居るから、何ぼ切ても刃物は立ぬ、ムヽすりやお家の重寶西天草、其方が盜み所持せしよな、それ故夫もやみ〳〵と、薄手も負せずおへない御最期、口惜かろ、道理じや〳〵、又我等が刀で切時は、これ斯と拔手も見せず切付る、おそへも透さず持たる刀、丁と請るを引ぱづし、右手の肩先切込ば、わつと一聲無念の涙、ヲヽ痛かろ、心に隨はぬ故其通り、應とさへ云ば、今にでも忽瘢を直す、此御守樣、どうだ〳〵、ヲヽ殺さば殺せ、何の儕に隨はふ、ハテしぶとい女、もうよい此上は一料理と、首筋取て引倒し、かゝへ帶にてぐる〳〵卷、後の松へ括付、こりやよつく聞、源吾さへ安々と討軍太夫、女の手くさいではいかぬ、其上まだいふて聞す事がある、源吾が親の喜樂齋、其方が身を賣た銀を持、迎ひにうせた跡を追かけ、飯綱山にて打て捨、百兩の金もコリヤ着服した、ヤア〳〵そんなら其銀も奪取、舅御樣を殺したは、其方にて有しよなと、重る無念齒ぎしみ齒ぎり、ヲヽよく〳〵深い緣なればこそ、親子三人共に、我等がいかい世話、ヱヽさうとは知らいで殘念な、譬へ體は千々に切るゝ共、生變り死變り、恨を晴さで置うかと、氣は鐵石の女氣も、深手にはよはる血の涙、ヱヽ此儘死るが口惜い、誰ぞ此いましめほどいてくれぬかと、身を揉みあせれば、何じやほどいてほしいか、どれ〳〵斯か〳〵といましめを、ほどけば透さず切かゝるを、刀もぎ取軍太夫、肩先あばらの滅多切、呵責の苦しみ斷末魔、刀を拔ばがつく

して居る故及物ばたゝず、それ故にやみ〳〵と夫の最期、何卒術を廻して、西天草を取戻し、現御夫の敵をば、討て給はれ雅次郎樣と、齒を喰しばり無念の涙、始終を聞て雅次郎、スリヤ今の曲者が、軍太夫にて有しよな、お氣つかひなされますな、追付雅次郎が敵を討、修羅の妄執を晴させませう、遠くは行まじ追付てと、かけ出せしが此方も氣遣ひ、行つ戻りつ雅次郎が、心は矢竹とはやれ共、手負は次第によはり果、朝の露と諸共に、はかなく息は絶にけり、はつとばかりに雅次郎、二人の死骸に取縋り、斯る事共知らずして、やみ〳〵他國に有し事、申譯なき不孝の罪、御赦し下され兄者人、赦して給はれ父上と、前後不覺に泣入しは、目も當られぬ次第なり、涙を拂ひつゝ立上り、倶に天を戴かざる、父兄の敵鹿谷苑、天にまたがり地をくゞる共、尋出すは一瞬內、西天草はおろかな事、一心こつたる恨の刄、頓て敵を討おふせ、手向申さん待たまへと、勇氣込だる雅次郎、一木の花や散行二人、せめて亡骸程近き、寺院を頼み取收め、追善供養すみれ草、袖に涙の露深き、今日は如何なる平幡に、女夫が哀れ今の世に、惜やはかなき三重次第なり

柳が淵の段

水に添ふ、えにしやいとも底深く、柳の淵と名におへて、戀も越路の雪消えし、春は櫻もてき

死骸へかけよつて、ヤア兄嫁のおそへ殿、御夫婦共に此有様、おそへ様いのう〳〵と、呼聲耳に通じてや、うんと一聲、氣が付ましたか、此方様は淺痾御心を慥にお持なされ、これ御養生は叶ひますと、帶を引しめ介抱し、用意の藥取出し、口押明てくゝませば、自然と潤す氣付の一德、おそへはむつくと起上り、儕軍太夫夫の敵舅の仇、覺悟〳〵と切付る、雅次郎は刀を請留、おそへ様雅次郎でござる、お氣を慥にお持下され、ヤア弟御雅次郎様、ヱヽおそかつた〳〵、今此所で夫といひ、私迄此如く返り討、と聞て驚き、ナニ返り討とおつしやるからは、父上にも如何なされしぞと、心ならずもせき立正輝、おそへは苦き聲を上、申すもおへない事ながら、舅御様も人手にかゝり、はかない御最期、ヤア〳〵〳〵、シテ〳〵敵は何國の何奴、サア我々夫婦舅御迄、かゝる非業に苧積の里、夫もあなたも御行衛知れず、次第に重る貧苦の上、未進の銀の滯はり、此身を賣し其金を、奪ひ取んと切殺し、敵は知ぬと聞悲しさ、計らず椎津のお館にて、夫に廻り逢た上、殿の情のお暇に、敵を討んと出給ふ、我身も館を立退て、正村殿の跡を追、來る道筋も一足違ひ、思はずはぐれて來て見れば、夫もはかない此有様、敵は椎津の同家中、鹿谷苑軍太夫、其上私をくどけ共、操を立て恥しめし、戀の叶はぬ腹立に、私迄も手にかけて、舅御様を殺たも、我業なりと物語り、聞無念さに軍太夫、只一討と思へども、女の身故不甲斐なく、夫婦諸共返り討、其上軍太夫は、椎津家の重寶西王草といふ物を、所持

たがお出なされた日より、其美しい御器量に、思ひ初ての戀病、それ故日々の玉章も、只の一度のいなせもなく、思ひ餘つた今日の今、花にかこ付呼ませしも、これ此文に詞の花、咲せて上て下さりませと、夕しで若葉小櫻も、色香うつろふ計なり、雅次郎は面色正し、これはしたり長兵殿の御用事と思ひの外、其儀なれは此頃より申如く、望有身といひ、殊に息女は定まる夫も有とやら、文は此儘お返し申、一言申も千言も、同し事と傳られよ、さらばと計櫻の中、一木の松のすげなくも、振切てこそ急ぎ行、木陰を出る娘の美鳥、跡打見やる目に涙、氣の毒餘りに婢共、ほんに難いお若衆樣、つれない心に似も付ぬ、なせに器量はよいぞいなあと、つい云事も焚付の、燃る思ひの美鳥が胸、邊の文と懷の文、見ぬ樣に取變て、これ婢共、此文を今一度お若衆樣に上てたも、サア三人共早う〳〵、それじやといふてあなたを此に置ましては、ハテ拗思ふ樣にもないと常になき、詞もわじな墨付に、思ひ廻せば讀兼る、文の使も主命は、反古にせじと三人が、心殘して急ぎ行、跡に美鳥はしいをりと、身を恨たるかこち言、アゝ思ひ廻せは恥かしい、ほんに此身の不束な、事には心付ずして、今迄人をつれないと、恨んだ事の面目なさ、あなたに嫌はれ何樂しみ、外の殿御に添ふより、今此淵に身を投て、死る覺悟の其書置、御覽じた上少しでも、不便と思し給ふなう、未來て添ふて下さんせ、とはいふ物の惡緣か、私が家の高札を、見てござんした其日より、如何した緣や端の間の、襖の透より思

交せて、鄙も都のあやなれや、よその花見は我花を、人ぞ見かへる盛なる。高き名越の娘の美鳥、妼はした引連て、柳が元にさしかゝる、中に若葉は發才者、これゆふしで殿、此方の旦那樣は如何した思はく、劒術勝れた聟を取と、高札をお立なされた故、追々來るもろくなはない、漸今殘つたは、憎てらしい典膳とやらいふ浪人者、若しあの人に極つたら、いやな事ではないかいのう、若葉のいやる通り、それに引替、離座敷に逗留のお若衆樣、器量といひ立振まひ美鳥樣の思はくは、御尤じやとそやされて、最恥らう娘氣に、そなた衆頼んで日毎の文、一度も返事のないは叶はぬ印、ハテお氣づかいなさるゝな、私等が云合せ、旦那樣の使じやと、此所へ見える約束、そんなら行うとおつしやつたかや、早う逢たや顏見たやと、待るゝ身より待身のつらさ、エヽあなたもせはしない、マア櫻を御覽じませと、進められてもうつとりと、戀に心もうつゝなく、見やる向ふへ、アレ〳〵アレ申お若衆樣がほんにのう、私や如何せうと立つ居つ、まあ此文を上ましてそこへそち達よい樣に、申上てたもいのと、柳の影へ身を添て、たくつく胸の恥かしさ、中に嬉さ取交て、忍ぶ心ぞしほらしき、斯とはいざや知らぬ身の、足さへ速水雅次郎、敵の有家尋んと、此越後路に留まりて、名越の方に逗留す、由縁によつて此所へ、來るを待兼妼共、エヽお若衆樣、遲かつた〳〵と、かきたくる樣に取まければ、ムヽ拙者に用事との儀、何御用でござるな、サアあの其御用事といふはな、私の方の娘御樣が、あな

藝を撰む其中に、五十嵐典膳、劍術師範の浪人と、門弟引連此程より、我聟顏に逗留の、内庭先で稽古の竹刀。人もなげなる振廻なり。勝負終れば典膳聲かけ。ホヽヲ兩人共出精故餘程の上達。今一際敎へたら、何方へ有付ても、三百石や五百石は。ぶら〳〵と見えてござる、ハヽヽ是は〳〵有難い。師匠がよければ我々迄。日增に覺ゆる心の手練、兵治殿。左樣〳〵、今日本で先生に、上越者は誰がござらう。左程の名人達人でも。戀は曲者。此家の聟にならんと有ば、悅びいさんできはめる筈を。今日で四五日留置て。埒を明ぬ主の心底。イヤモ合點が參らぬ、先生にも嘸御退屈と。お髭の塵を取々に。高慢盡す折からに、主の女房立出て、是れは〳〵お客人樣、ちとお休と挨拶に。典膳が橫柄顏、劍術器量勝れし者を、聟に取んと有、高札に付參りし拙者を、何迄待せ置るゝな、サア夫とても夫が望。追々聞お出の方と、立合の勝負を見たさ、則奧にも此頃から、武者修行のお若い方も、ムヽ然らば其若者と。只今是れにて立合ませうか、おいや今朝より他行と云、夫も留主中歸りし上、有無の御返事させませうと。女ながらも請答へ、夫に替る才發女房、春風を、大振袖に含ませて、編笠まぶかに立派の侍、表口に立留り、誰そ賴う〳〵と、いへど答もあらざれば、編笠脫で内に入、承れは此家には、持合せの息女有て、劍術勝れし者を聟に望るゝと有、それ故態々參つたり、早く披露を致せよと、詞に兵治しやゝり出、やお此家の聟は我々が先生、何奴なれば聟なりとは。どんざい千萬早歸

はずも、無端見初たお姿に、ぞつと身にしむ戀風の、さそふ心のうつとりと、如彼殿御も有物か、露のお情受るなら、女に生れた身の過報と、口にいはれぬ恥かしさ、思ひの丈の數々を、筆に云して送る日の、よすが待間の心さへ、細谷川の丸木橋、踏かへされし悲しさの、泣て暮して夜晝を、夢や現も神樣に、無理云たのも幾度ぞ、其甲斐もなく捨る身を、可愛と思ふて下さんせと、あやなき事をくどき立、くどき立たる憂涙、柳の淵に水かさも、いとゞ勝りて見えにける、思ひ極めて泣目を拂ひ、アヽさうじや、何迄云てもとゞかぬ事、若しもや人に見咎られ、留められては恥の恥、さうじや〳〵と女の一念、こつては凄き淵の面、そこよこゝよと見定めて、惜や盛の若緑、柳の枝を力草、かよはき緣の絲切て、念佛の聲と諸共に、底はかなくも成にけり、跡より送る書置を、見るより雅次郎打驚き、過ちさせじといつさんに、柳が淵にかけ戻り、彼方此方と見廻す枝に美鳥が片袖、掛る有樣見て惘り、ヤアスリヤ遲かりしか殘念や、何をいふても此身故、長兵衛殿への申譯、日比の水練是幸ひ、死骸成共引上んと、身づくろひさへ心せき、ざんぶと飛込水けぶり、浮つ沈つ三重游行

長兵衛屋敷の段

北國の、越路に名有五賢村、鄕代官と隱れなき、名越長兵衛か一搆へ、一人娘に聟がねも、武

學の講釋でも仕ろう、いざ兩人共お來やれと、門弟引連入にけり、跡に女房がとつ置つ、娘の美鳥が戻りを待かね、お出なされた連合迄、遲い事やと待詫る、表の方より女共、涙なからに申々、ひよんな事が出來ました、悲しい事と口々に、いふは氣がゝりそりや何事、樣子を早う聞しやいのと、せき立女房女共、さあ樣子は、爰へそれ今と、何をいふやらうろ〱と、狼狽廻る其内に、立歸る主長兵衛、跡に付添雅次郎、是非も泣々内に入、百姓共はしほしほと、戸板に乘し娘の死骸、見るより母は狂氣の如く、ヤア〱、娘は何で死にやつたぞ、樣子が有う此方の人、悲しやのうと計にて、前後不覺に泣入は、長兵衛制して、ヤア見苦しい、客人も見てござるに、嗜みめさと喰しはる、心察して雅次郎、思ひがけなき息女の橫死、皆我故に此しだら、アイヤお客此方樣に何の恨が有うぞ、水練を以て底知ぬ、淵より取上下された、娘が死骸は貴所のお情、嘸御勞ならん、サ御休足下されよと、物數云ぬ一言に、心を殘し雅次郎、涙隱して立て入、其間待兼女房は、夫に縋り涙聲、これ申娘は如何して死ました、譯を〱と譯もなく、問れて父も目を押拭ひ、譯といふたら娘が、あの客人に切なる戀慕、物難き若者にて聞入なければ、其外の聟がねを忌嫌ひ、柳が淵へ身を投て死ると有、これ此書置、是非もなき不所存と、叱りながらも一筋な、心がさせる操のはし、殘念さよる夫が悔み、聞て女房は正體なく、さういふ事を露程も、知たら仕樣も有うのに、母に隱して呉たのが、聞えぬ〱

れ、アヽいや推參ながらやつがれは、朝妻歌之介業久と申、在五中將の跡を追、器量は元より戀の道、和歌は名によぶ達人にて、則息女の御覽に入んと、筆を揮ひし此詠歌、耳をさらへて聞給へ、我夫と、いはれて見たき朝づまや、柳腰なる美鳥女郎に、誠や大星力彌か、小性吉三と手を引て、久松供に連て來ても、跣しで迯る此業久、それを差置聟にならんとは叶はぬ事、と云はぐせば、ヤアごくにも立ぬよまい言、田舍行の鷹つかひ見る樣なざまで其類げた、聟せんさく此段內、臍がよれると、恥しむれば、女房引取、聟にならんとお越なされしは、たしなみをも見受し上、アヽいや是れ御內室、後迄もない此所にて、拙者が門弟と一勝負、それ段內兵治立合めさと、いふに朝妻打笑ひ、ハヽヽ先生だけ味をやらるゝ、然らは立合、日頃の手練お目にかけんと、振袖を帶へ挾んで身拵、相人は段內しなへとしなへ、やあ〳〵とかけ聲し、打込所を受はづし、猿猴朝妻たゝみかけ、兵治も倶に遠慮なく、ぶちすへられて平蜘、腰をさすつてしがみ頰、暫し〳〵、御手際恐入たり、去ながら、勝負は負けるが極秘傳、勝て歸ると夜が寢られぬ、各方も此極意、定て御傳授ござらうの、ヤ忌々しい前髮め、何迷ふて參へうせた、早く歸れとつかうど聲、折角來ながらすご〳〵と、敷居を越せば一さんに、跡をも見ずして迯歸る、典膳はしたり顏、何と內室門弟でさへ今の手の內、長兵衞殿歸られなば、聟は拙者にお極なされ、成程委細咄した上、諸事は夫がお掛合、然らば後刻それ迄は、一間へ參つて軍

次郎、障子押明獨言、ア、思へは此身は不孝者、父に背き兄を捨、家を出たる其跡にて、親人のみか兄嫂、同じ人手に討れし無念さ、敵の行衞尋んと、思はず來りし此家の娘、切なる戀路も望有、身の妨とよそになし、つれなくいひし詞より、捨身なせしも皆我故、不便の最期をさせしよな、魂去すばよく聞れよ、天運至つて敵の首、父兄の位牌へ手向し上、長兵衞殿にも子細を語り、此世と彼世の取結び、來世で逢て身に替し、禮もいはふし睦じう、一ツ蓮に住居せん、南無阿彌陀佛、〳〵、聲曇らせて眞實の、涙隙なき忍び泣、同じ思ひに父長兵衞、一間の内に打しはぶき、お客人〳〵と、訪なふ聲に涙を包立出て、計らざる息女の横死、ア御愁傷と差うつぶく、ハヽア御推量下されい、それに付其元へ折入ての御無心、聞届けて下されうか、何が扨不思議の因緣、此身に叶ひし事ならば、ヲヽ過分に存る、これ兩手をついてお禮申す、子細といふは、改て娘美鳥を進上申、夫婦に成て下されい、エヽイアノ、相果られし御息女と、サヽヽ戀慕ふた未來の迷ひ、せめて晴してやりたいと、思ふは親の因果ぞと、跡は詞も泣顏を、隱して頼む心根を、察し入て兩手を突、何角の樣子御存知有て、來世を契る取結び、身不肖ながら如何やう共、ムヽスリヤ其詞に相違ないか、御念に及ばぬ刀にかけて、ヱヽ忝い〳〵、ヤモそれにて安心仕る、一世一度の娘が祝言、ナニソレ女共、用意〳〵、心得運ぶ熨昆布、千代を壽く島臺も、今日を松竹行末は、長柄の銚子とり〳〵に、恥らう娘を女共、伴ひ

〳〵と、死骸にひしと抱き付、聲を計に泣かこつ、貰ひ涙の百姓共、わつたら器量の娘御を、生ながらの水葬禮、二度の拵へ女中達、佛間を清めて香花とらしやれ、此佛へは水手向るには及ぶまいと、いふも涙のはかし場へ、皆々萎立て行、樣子聞てや五十嵐曲膳、一間より立出で、ア丶氣の毒千萬、斯成たれば是非なけれど、今でも拙者を聟に取ば、死切た其娘が、生返るまい物でもないが、御夫婦、何と聟になされぬかいと、ひやうげ付たる一言も、涙の中に小腹立、ヱ丶面白さうに何じやぞいのう、お前を嫌ふて娘が此時宜、何の聟に取物ぞ、穢らはしいとずつかりいはれ、フ丶丶ハ丶丶承引なくば娘は其なり、應とさへ有ならば、身が大切な袋の德で、たつた今蘇生致さす、これサ如何じや〳〵と押付て、勸る詞を長兵衞聞とめ、如何にも聟に仕らうが、しかと娘は蘇生致すか、ヲ丶其儀は拙者が秘方を以て、長兵衞殿には其死骸連て、一間へお越なされい、如何にも承知仕る、貴殿はお先へ、心得ました、あれにて相待舅殿と、早聟顏の一人笑、奥へ行體見送る女房、イヤノウ此方の人、死切た此娘が、ほんまに蘇生致しますかへ、イヤサ耆婆偏鵲が藥でも、再び蘇生は思ひもよらず、去ながら、きやつが一言、請合た我心は、こりや歎を停め、耳を寄しやれ、の、あい、の、あい、サ合點かと呫き合、娘の死骸を抱上れば、涙ながらに、女房も連て佛間へ三重「入にける、春の日も、早入相の鐘の音に、ちりしく庭の櫻花、無常を告る奥座敷、指込月の弓張や、矢猛心もよはり行、身にも思ひの雅

若相人が手者で御覽じ、却つて此方か命がけ、フヽハヽヽヽヽ、アヽいや必お氣にさへられな、ハテモ聟にならねば他人と他人、助太刀致す筋なしと、思ひがけなき違變の詞、聞て泣入娘より、せき立長兵衛膝つゝかけ、刀にかけし誓言を、反古にして武士か立か、いやモ武士は立うが立まいが、他人の其元いらぬお搆ひ、御用捨に預りたい、ヲヽスリャ如何樣に申ても、助太刀する氣はないじや迄、ヤモ卑怯未練の臆病武士、聟になされて益ない事、外をお賴なされませ、拙者は當家を出立の、用意なさんとわいそなく、障子引立入跡に、娘はわつと泣入聲、洩聞母も走り出、ヲヽ道理じや〳〵わいのう、こがれ慕ふた其人に、今祝言の今と成、思ひがけのう去れた同然、これ〳〵仕樣はないか長兵衛殿と、倶に淚を打消て、ヤアメロ〳〵と何泣顏、エヽ如斯腰拔武士とは知らず、見所有と長兵衛が、兩手を突て賴しは一生の我不覺、見下果たる卑怯者めが、娘も泣な、女房はへな、ナニ、きやつ計か男でない、劍術武邊勝れたる、よい聟を親が持する、ヤア泣な〳〵、エヽ泣なといふに未練至極と、怒りの顏色、美鳥は猶もせき入て、父樣のお腹立、御最とは思へ共、よう思ふてと御覽じませ、譬へ枕はかはさずとも、死だ體を抱上られ、肌と肌とを交へたら、身を穢したも同じ事、外の殿御に添たなら、女の道は何處て立、因果な緣の柵に、結び留しと了簡して、矢張彼方に添してたべ、それが叶はぬ事ならば、いつそ殺して下さりませ、未來の緣は結ぶと有、詞一ツを樂しみに、死る心

出る婚禮姿、見て悔りの雅次郎、蘇生なせしか幽靈かと、呆れて詞なかりける、長兵衞屹度氣色をかへ、前後揃はぬ取結び、表裏の仕業と思はれんか、最前佛間にて五十嵐典膳、奇品を以て蘇生をなせし此娘、捨身の元は貴殿の事、思ひ詰たる貞心を立させたさも、一應では得心なしと知たる故、斯計らひしもまだ外に、押て貴殿へ頼の一儀、ヤナニこりや娘、それ聟殿へ御挨拶、サヽ遠慮はないと指合を、背ける顏に悅び笑顏、娘も今さら恥かしく、所詮叶はぬ妹と脊と、思ひあきらめ身一ツを、捨し千尋の底よりも、肌身合して我内へ、連て戻つて下されし、其お情を何迄も、因果な緣と思召、必見捨給ふなと、又も沈みし戀の淵、わりなく見えて可愛らし、思案違ひし雅次郎、猶も詞の念押て、未來の緣は結べ共、現在の儀は又格別、してまだ外にお頼とはな、成程〳〵、こりや女共、勝手へ立と人をよけ、何を隱さう此娘は、實子に有ず義理有拾ひ子、當家中の內、誠有る人に望まれ、養子娘に遣はさんと、約せし親をサ人手に討れ、尤其方に、云號も同前の弟有とは聞しかど、面體知らず行衞も知らぬ薄緣ながら、一旦つがひし武士の節義、何とぞおのれ此娘に、養父の敵討せんと、思へどかよはき女業、見所有其元、助太刀を頼んとサ此聟がね、娘悅べ、其方が戀路も我望も、一度に叶ふ今宵の祝言、ヲヽ目出たい〳〵、敵の實名養父の名は、アヽイヤ〳〵、これ長兵衞殿、假名實名聞には及ばぬ、此緣組は變改致す、ヤアヤヽヽ、何といはしやる、ハテ敵討〳〵と、心安う口ではいへど、

成長、武者修行に出し跡、父喜樂齋と申者、人知ず討れし後、我兄源吾正村殿、當國平幡の松原にて、其敵にたばかられ、夫婦諸共返り討、不思議に其場へ行かゝり、子細を聞し拙者が無念さ、おのれ敵を尋出し、ずた〳〵に切刻み、本望遂で置うかと、寢た間も忘れぬ我念願、それ故にこそ最前より、事を分たるお頼も、命二ツあらざれば、卑怯未練とさげしまれ、畜生武士といはれても、助太刀ならぬ一通り、聞入有て恨を晴、所詮此身はなき緣と、思ひ捨れ又外に御分別下さるべし、美鳥殿にも淺からぬ、心の操は過分ながら、孝と義理とを辨へて、云號有同然の、人を尋て敵を討、列女の美名を上られよと、理を盡したる詞の內、長兵衞驚き、勇氏の二男と有ば、そんなら此方が侶吉殿か、敵と覘ふは鹿野苑軍太夫で有うがの、ムヽ其譯如何して御存じ、サヽ知らいでならうか、コリヤ娘其方を養子に約束せし、源吾殿の弟なれは、云號せし同然の、ヲヽ矢張本の聟殿じやはやい、エヽ、そんならあなたが定まる殿御、すりや過行れし兄者人と、御契約なされしとな、是は、是は〳〵〳〵と母娘、聟も舅も一時に、晴た心の嬉しさは、花見の庭に雨雲の、脇へそれたる如く也、長兵衞天地四方を拜し、ハヽア嬉しや悅ばしや、今日只今名の如く、此場を去ず敵討、サア〳〵〳〵夫婦共用意〳〵と氣をせいたり、心得ぬ敵討とは何を目當、用意せよとはそりや何を、ヲヽサ〳〵不審は尤、あの奥に居る浪人者、五十嵐典膳と名乘こそ、誠は敵軍太夫、證據は娘を懸望して、蘇生させしは稚津家の

と一筋に、戀と義理とを立通す、娘心ぞいぢらしさ、母も傍から、此中あれ程思ひこがるゝ娘、添してやるが義理の有、親のお慈悲じやないかいな、アコレ必氣つかひ仕やんなや、此母が添してやる、可愛の者やと引寄て、撫さすりたる恩愛の、中を隔てはつたと睨、ヱヽ其身の戀に眼くらみ、義理も法も忘しよな、ヲヽよし、此上は是非に及ばぬ、望の通り首討て、ヤアわつぱめも刀の相伴、未來で二人添してくれる、觀念せよと拔刀、驚く母は其手に縋り、アヽこれ〳〵、お前は狂氣なされたかいのう、先刻に此子が死骸を見て、口は立派に仰しやても、心は泣てござつたを、思ひがけなう助かつた、其悦びに引かへて、親の手にかけ殺さうとは、餘りむごい胴欲と、恨歎て留る母、邪魔ひろぐなと突退蹴退、振上る刄の下、娘は覺悟の身を惜まず、寄を支へる母の親、これのう待てと右左、停むる慈悲と付廻す、父が思ひの不便さも、十六年の春秋を、荒い風にも當させじと、育し花の姿をば、浮世の義理と武士の意地、殺すは如何なる報ひぞと、思へび持たる刀さへ、千萬鈞の錘より、重き瞼に潸然淚、留め兼てぞ歎しが、氣を取直す刀の下、差付る娘の首、既に斯よと見る所を、走出る雄次郎暫らくと、停むる腕を振拂ひ、ヤアよい所へ臆病者、娘と一所に冥土の旅立、覺悟致せと切付るを、拔つくゞりつしつかと留、やれ早まられな、長兵衞殿義心撓まぬ御心底を、見拔し上は約を變せし申譯、包まず語る子細有、サヽサヽヽ心を鎭て、お聞下され、元某は信濃國、苧績の里にて

れて下さりませ今日は如何成日なるぞや、娘が死だ悲しさも、又助かつての縁結び、悦ぶ間もなうお前の身に、打て變りし此お姿、定なき世といひながら、餘りはかない侍の、妻には何で成たぞと、くどき歎けは娘の美島、アヽこれ〳〵、其お悔を聞つらさ、皆私しが不孝なから、少時よりお世話に成、海山増る親の恩、送らぬのみかお命迄、捨て給はる勿體なさ、冥加に餘る此身の科、御赦されてと計にて、跡や袂に取すがり、親子夫婦が別れの涙、堪へ〳〵し雅次郎、倶に溺る雨霰、落て流れて越後路に、雪解渡る計なり、雅次郎はつと泣目を拂ひ、ハヽア信有義有舅の詞、仰に隨ひ敵の行先、聞知る迄は美島殿暫らく母御へお預け申、忌日の營終つて後、再び伴ふ敵討、西天草を取得る共、又取得ぬ迚も善惡の、鏡に照す我一心、やはか仕損し申べき、ヤコレ〳〵〳〵、氣づかひ有なと立上る、樣子を窺ふ段內兵治、鐵炮引さげ顯はれ出、師匠に仇する前髮め、今討殺す觀念せよと、筒先揃へて指向たり、ムヽムヽムヽハヽヽヽ、西天草は持ねども、雅次郎が身は金鐵同然、ならば手柄に討て見よ、ヤ憎い廣言迯さじと、迯ら迯響かす音より早く、飛越早足振討に、二人は四ッに、手練の切味、手負は思はず聲を上、ホヲヽ遖聟殿、出立の血祭りもよし、早お行きやれ、おさらばさらばも娘が名殘、心の思ひ由なに、越路の雪と消行姿、見捨て歸る雁金の、便りを松の色變へぬ、契ぎりを殘す別れ路を、見かへり〳〵三重出てゆく

重寶、西天草の奇特ぞと、知たる故に僞つて、聟に取んと取合て、結納として其一品、暫く預け置れよと、我手に入たる西天草、此一品を持たる故、劍術無雙の源吾殿、彼れ如きに闇々と、無念の最期是非もなし、今日手に入上からは、勝負は互の運次第と、アレ奥に留置、座敷の口々、鐵炮にて圍せたれば、いつかな迯出る氣遣ひない、早く〳〵と老人の、勢ひ込で勸る折から、奥庭遙に鐵炮の、火蓋切音つるべ打、扨こそ迯行鹿野苑、討留たるかとせき立内、追々知らせの下部共、一間に籠し軍太夫、塀を乘越立退故、待設けたる鐵炮の、玉は當れど事共せず、落失ましたと銘々が、詞に雅次郎南無三寶、いで追かけんと美島も、倶にかけ出すを長兵衛聲かけ、ヤレ待兩人、飛道具を遁れしとは、ムヽ、我手に入し西天草、合點行じと拔刀、腹にぐつと突立てたり、是は何故の御生害と、驚騷ぐを押鎭め、ハヽア讀たり〳〵、贋物を拵へ置、我をたばかり渡せし名草、見知なければ身を捨て、眞僞を糺す此切腹、二ツには又おめ〳〵と、手に入敵を取迯せし、我誤りを顧て、喜樂齋殿源吾殿へ、義心を顯はす言譯ぞや、さは言ながら追付ても、西天草を所持する内はうかつに勝負は覺束なし、術を以て奪返し、二人三人の仇のみか、我切腹も彼故と、思ふて夫婦睦じう、目出度敵を討てたべ、とはいふ物のよく〳〵、親に縁なき此娘、不便にござるいぢらしい、これ賴存する聟殿と、其身の手疵厭ひなく、子故に迷ふ親の慈悲、其お心は知ながら、むごい爺御と暫しでも、恨んだ母が愚さを、お赦しなさ

して居た折節、此信濃路にござるよし、所はさだかに知ね共、若しや廻り逢かと、私が願ひに母樣の、ならはせ給はぬ旅の空、私を連てのお慈み、生々忘れ置ませぬと、涙ぐめば、ヲヽアノ娘のいやる事はいのう、私も夫長兵衛殿に別れてより、佛を願ふも菩提の種、又雅次郎殿を尋ん爲、兩方かけた此順禮、母に心をおきやんなと、聞て娘は嬉し顔、何卒ぞや早う尋ねて逢たうござんす、まあ〳〵如來樣へ參詣致し、お願ひ申上ませう、さあ〳〵御越と親子共、本堂さして連て行、世の中の、苦は色變て何しかに、松の位の代々衣が、捨し所體も長旅路、吾妻かげも、一やうに結び留たる惡緣の、俱に連立左門之助、人なき小陰に立休らひ、今跡にて行合しは、正しく足利方の追手の者、人なき道を歩め共、それと目立も二人故と、いふて其方か、兄の有家を尋出す迄と、斯同道とは知給はず、兄上は嘸御憎しみと、涙と俱に聲曇れば、代々衣袖しぼり、其憂事も此身故、おいとし樣やと潸然と、袖をかざしの初時雨、晴間は分ぬ風情なり、代々衣猶も涙聲、それに付ても思出すは絹松が事、苧績の里にて別れしより、年月立ば行衛も知ず、何卒尋て逢たいと、歎けば俱に國時も、肉身分し悴が事、我も不便に思へ共、家の大事に替難く、太切なは劍の詮議が肝用ならん、さあ〳〵行うと勸られ、何とせん方代々衣も、涙拂ふて立上る、斯る折から追手の役人、見る目かぐ藏、家來引連ぞつとかけ付、ヤア〳〵椎津左門之助、傾城代々衣汝等兩人、討手に向ひし見る目かぐ藏、それ討取と下知の下、めい

善光寺の段

五逆消滅自他平等、補陀落淨土の殿造、善光寺如來は、靈驗あらたにましく\て、諸國の參詣群集なし、所の賑ひ繁昌は、げにも佛の光りなり、何と太郎作、此度の開帳はすさまじい詣でじやのう。わごりよや此方は所に住ながら。度々詣もせないに、餘國からは奇特のもうで、いや我等此間から三度參つて、有難い御印文を戴きやしたから、是見さつしやれ、頭正面から御光りがさす、是で夜分も挑灯がいらないわいのう、それは奇特のもうで、私は漸く御開帳が始まりてから。今日が始さ。有難い御印文の戴かば、極樂の木戸口。ヱイヤ／＼と大入、僅鳥目百錢宛とは、下直な物ではないか。是程有難い御印文、わちとがおかゝが、まだ戴かないから、早く戴せたい。何さ内のお嚊は如來樣の御印文より、我等が御印文毎晩／＼戴かすから、極樂往生疑ひないハ。ヤ彼是いふ間に日が更けた、定めてお嚊が待つらん。早く詣でゝさつしよと、打連てこそ立て行。秋風の。身にしみ／＼と忘られぬ、夫の行衞を尋ねんと、戀の重荷を笈に包むは。名越長兵衞の娘美鳥は、母親と倶に二人が順禮と、姿をやつす旅の空。菅の小笠に竹の杖、悟放十方爰彼こ、迷ふがゆゑに三界城、尋ね吟ふ親子連、深き如來の御惠、頼まん物とたどり來て、申母樣夫雅次郎に、いつぞや別れてよりふつつり便も聞かせず、案じ暮

の流線にして、繪にも及ばぬ風景は、彼神仙の住居せし、崑崙山も斯やらん、爰に怪しき館をかまへ、數多の手下取こもり、頓て四海を一吞と、時を待間ぞ榮花の夢、爐に股がる節木作の荒男、手足を延し大欠、鳴呼何と山猫。お頭や此方が、人も通はぬ此山に、金銀は自由自在、何に不足もなけれ共、お頭がいましめの、かみ長で樂しみたいわい、サイヤイお頭の望の通り、日本國を一吞にしたら、其方や此方はお大名、お頭の居間見る樣な御殿の內で、數多の美女を取かへ引かへ、日本國を寄る樂しみじや、何と味いか〳〵、ヲゝおりや又十七八か二十位のぽつとり者が、好じやはいハゝハゝ、それはそうと、お頭が注文で、熊鷹が取に居た代品物、何卒手に入りやよいがな、こりや天狗よ。おりや一走り、樣子見て來うはい、そりや太儀じや、ヲゝ合點と山猫は、谷間をさしてかけり行、跡に鼻藏伸び欠、爐の暖にぶら〳〵眠り、遠近の、立木も知ぬ夜の道、覺束なくも鴛鴦の、番ひ離て跡や先、火影を目當にたどり付、暫し傍に佇みて、左門之介聲潜め、のう代々衣、此庵が其方の兄、自來也の住家ならん、道々もいふ通り、某が爲には仇有中、うか〳〵と來る所ならねど、我家の重寶蛇丸の劍、今自來也の手に有ば、奪ひ得させんとの詞といひ、人倫絶えし此山中、爰迄は伴ひしが、彼等逢ば惡かりなん、我は是より古鄕へ歸り、有無の返事を相待ん、もしも劍を取得ざれば、夫婦の緣も是切と、行んとするを袂に縋り、そりや聞えませぬ左門樣、何ぼ敵の所緣でも、子迄設けし戀中を、終一口に

〳〵十手打振て、捕た〳〵と組付を、此方も遉椎津の弟、引拔振拂へば、シヤこざかしとかゞ藏も、同じく刀引拔て、打合切合切結び、火花を散して三重追て行、跡に代々衣氣は坐、夫の身の上氣遣ひと、同じく跡を慕ひ行、參詣人も騷ぎ立、中をゆう〳〵拔くる美鳥、母樣いのう、ヱヽ何方へ行しやんした、お怪我はないか氣遣ひなど、見やる此方へ雲介共、やあそこに居る女、我を尋ねてゐたのじや、サア此駕へ乘おらうと、無理に手を取引乘る、こは何事と驚く美鳥、こま言いはずと早乘と、無理におし込ぐる〳〵卷、中には美鳥が聲を上、何故私を此樣に、無體の仕業は盜賊か、かどはかすのか胴欲な、母樣いのうと聲立れど駕の鳥、詮方中に泣計り、やう〳〵跡を尋ね來る、美鳥が母は此體を、見るより恂り取縋り、ヤア〳〵〳〵駕の内なは我娘、こりや何とするどうすると、支へ留れど女業、泣もかなはず踏飛し、駕舁上て一さんに、飛が如くに急ぎ行、跡に母親狂氣の如く、いとし可愛の娘をば、奪ひ取れては、なき我夫に何とまあ、どう云譯が有うぞと、前後正體なき入しが、アイヤ〳〵、泣て居る所でない、跡より追付取戻さん、さうじや〳〵と一筋に、踏も分たぬ山道を、こけつまろびつ三重慕ひ行

自來也住家の段

八重山路、名も黑姬の山岳は、岩間に樹木生茂り、峯には霧の絕間なく、麓は霞の絹を帶、谷

それ先度な新潟の廓で近付に成た福助、おいらが仲間へ入てくれと、だん〳〵の頼み故連て戻た、これ此方へ這入んせ、爰へござんせ〳〵、コレ是は天狗さんといふて、おれが兄分じや、よう頼んで置んせ、エイ〳〵〳〵、エヽ扨はあなたが天狗樣でござりますか、アヽ誠や斯る深山におはしますとは、兼て御高名承りました、何卒金銀の通力自在に成術を御敎へ給はらば、譬此身は天狗樣の、若衆に成共厭ひはせじと、ひゝへに鼻蔵打默き、如何樣よう思ひ込だ物じや、然し貴樣を若衆とは、今の女を見てから、銀のかはりの鉛で、こいつは餘程うけにくい、金銀を自由にせうと思へば、先づ發端が晝鳶から宵覗き、人の油斷を眼張て、着類錢銀嫌ひなく、懷へ捻込〳〵摑取、おつとそれから家尻切、草樹も眠る時分を考へ、こし〳〵〳〵と切破ぶるを、寢耳に入て目を覺さば、騒す紛らす鼠啼、ちう〳〵〳〵といふ聲に、にやんと言にや又仕かけると、山猫が眞顔で敎へるいがみの秘傳、マア〳〵當分は水も汲だり足摩だり、これ何しても商賣に、愚はないぞや、が何如見ても正直さうなが玉に疵じや、イヱ〳〵今から隨分根性はのゑとう持まする、そんなら山猫、近付の爲に部屋で一杯呑ふかい、ヲヽよかろ〳〵、さあ〳〵ごんせ〳〵、アヽいや暫らく〳〵、どうやら不用心な內方、此柳籠裏は、モ大事の〳〵私が身上、何處に置ませうぞいな、エヽ何處の彼處と、高で盗人と相住居じやはいの、持てござれと打笑ひ、皆々部屋へと三重入にける、やゝ冴渡る秋の夜の、最物凄き隠れ家に、錦の戸張に住連引

退うとは、餘り酷ひ胴欲と、恨淚の眞實も、粋程愚癡は深かりし。國時も心根を、察し入て詞を和げ、ヲヽ其恨は尤なれ共、御劍が手に入ねば切腹と兼ての覺悟。兎に角首尾よう、あい私も以前は武士の娘、奪ひ取てお渡し申さん、ホヽ必吉左右知られよと、しめし合せて左門之助。元來し道へ引返せば、暫しと留る袖袂振切〳〵氣強くも、跡白浪と別れ行、是非も淚の代々衣は。心ならねど塵打拂ひ、歩む足元そば道に、躓き持添枝折戸、申々ちと樣子有て參りし者、御免なされて下さりませと。訪なふ聲に目覺す鼻藏、此山中に女の聲、若しや變化の業ではないかと、ぞつとしながら透し見て、二度恟りの鼻藏は、氣拔の如くうかりひよん、代々衣態と慇懃に、自來也樣に御願ひの筋有て、遙々尋ね參りし者、何卒お目もじ下さる樣、おまへをお頼み申ます、アイ、お頭は今寐て居らるゝ、起らるゝ迄アレ〳〵〳〵〳〵あの離座敷で、ゆつくりと休足さんせ。よい時分に知してやるは、それはマア〳〵お嬉しや、宜しう頼み上ますと、女は彼所へ入にけり。テモ美しい御面相頭に逢て願ひとは、ムウ、廓をはいと欠落者、かくまふておくれと云ふような事か、但しは頭がいぶして居るのか、あの離座敷にたつた一人、エヽ惜い物じや、アヽこりやまあ何卒仕樣はない事かと、うてう天狗の鼻柱、さんばい仕かねて居る所へ、いきせき戻る山猫が、こりや天狗よ〳〵、エヽ何をしてけつかるぞい、猿辷りの岩角迄。一目さんに行て見たれど、影も形も見えんわい、所に世には物好な、人も有物じや、

捨て義理が立物か、愛の道理を酌分て、劔を戻して下さんせ、それをお詫の種として、館へお歸り有樣に、賴上ます兄樣と、夫を思ふ一筋は、よその見るめも哀なり、ヤア身の徒の云譯、左程すゝしい心なら、大切ない御主君の仇敵、足利家の奴原を一人にても討取うと思ふ所存はなく、色にたはるゝ不屆者、今討放すも刀の穢れ、父に代つて身が勘當、此座に叶はぬ出てうせうと、烈しき兄が一言に、のう情ない兄樣、父樣や母樣には、少時にお別れ申、便りに思ふ兄樣に、御勘當請たらば、私や何とせうせうせうと、立たり居たり身を悶、前後も分ず泣洗む、やあ勘當が悲しくば、國時が首を討、サアそれは、但しは勘當請たいか、サアそれは、二ッに一ッの返答せい、左なくば血筋の緣を切、七生迄も勘當ぞと、詞鋭くいひ放し、障子引立入にける、跡には一人泣くづをれ、暫し詞もなかりしが、漸に顏を上、思ひ廻せば此身程、悲しい者が世に有うか、國時樣の御難義の、元はといへば此身故、何卒御代に出したいと、兄樣賴み蛇丸の、劔を貰ふてどうしてと、便に思ふた甲斐もなう、殿樣討と御難題、どうであ討れふぞ、討ねば兄への不孝となり、討は女の道立ず、こは何とせん悲しやと、重る憂に代々衣の、涙に浸す袖袂、振合緣も七ッ子が、よい寐惑ひの目をすりすり、これお前は何處の伯母樣じや、何で其樣に泣しやるぞ、どこぞわるけりやさすつてやろ、ヲゝしほらしい事ようういふて下さつたのう、これほゞ、お前は自來也樣のお子かへ、いやおりや愛の伯父樣に、ひらはれた子じやは

はへ、異なる法衣を身に纏ひ、唱ふる秘文の聲澄て、殊勝にも又怪しけれ、勤行終つて目を見開き、ハヽア待設けたる今月今宵、我望達せりと、さも潤はしき其顏色、遠目にそれと代々衣は、よもぎ折なりと眞身なる、椽側傳ひに立出る、姿を乾度打見やり、やあ其方や妹のお絹じやないか、おゝ兄樣、お健にお暮し遊ばし、お嬉しうござんする、ムヽ人跡絶えし隱れ家へ、夜中といひ女の身で、尋來りし所存は如何に、さいなあ、はし折かゞみの一人の兄樣、戀し床しのと思へ共、憂伏しげき勤の身の上、いつぞやお前の下さんした、其短冊の下の句に、佛法僧の啼に付てもと有からは、扨兄樣の隱れ家は、黑姫の山奧ぞと、尋吟ひ參りしは、私しからと折入て、ムヽ其頼といふは、アイ其頼といふはな、蛇丸の劍を呉いといふのか、身は帷幕の內に有て、千里の遠さを悟る某、是式の小事知まいと思ふか、先達ていひ聞せしを、我りや何と聞く、主親の仇敵、足利の親族、稚津國久が弟左門之助、廓へ入込世の風說、おのれ傾城の身でそ幸、たばかり寄て討取と云付置しに、却て彼か艶色に迷ひ、我を欺かんとする不所存者、兄弟と名乘も穢らはし、早立去と怒りの面色、代々衣わつと泣出し、其お叱りは無理ならねど、私が願ひの一通、聞分て下さんせ、お主樣や二親の、菩提を問ひたい計に、君傾城の憂勤、有が中にも國時樣、互に末の云約束、わりなき月日立中に、情の種を身にやどし、産落したも早七年、それのみ計か劍の紛失、兄御樣の御不興も、皆私から起りし事、今浪人の御身の上、見

てたもつたのう、それ程慕ふ其方をば、見捨て死る心根を、思ひやつてたもいのう、とはいふ物のいぢらしや、此儘死は孤子と、世間の人にさげしまれ、嘸や苦勞を仕やうのう、因果な私が子と生れ、産落すから人手に渡し、一日だんまり膝元で、乳房を含ます事もなく、子心にも苦勞させ、今別る、此母が、心の内は阿鼻地獄、世界の業を身一ッに、請ついだるか淺ましや、因縁薄き親子ぞと。膝に引寄抱きしめ、前後正體なげふして、泣叫ふこそ道理なれ、折から谷間騒がしく、泣入娘を引立〳〵、情用捨もあらしこ共、庭上に引据て、何でも手しぶい血まぶれ仕事、どりや手料理を、と領髪摑み引寄れは、待て下さりませ、何故の此有様、譯を聞して下さんせと、泣詫れば冷笑ひ、お頭のいひ付で、われが腹を立割て、心の臟を引ずり出し、血をしぼつて藥にすると、聞て猶しも身を震はし、マア〳〵待て下さりませ、私もちつと譯有て、戀しいお人を待る身の上、其御方に逢ふ迄の、命を助て下さんせ、お情お慈悲と手を合せ、頼めど更に聞入ず、既に斯よと見えければ、代々衣中を押隔、支へ爭ふ其所へ、跡を慕ふて美鳥が母、それと見るよりかけ寄て、娘を圍ひこれ〳〵、こな樣達は此娘を、手込にして何如するのじや、これ娘、私が爰へ來たからは、何にも恐ひ事はない、さあ〳〵おじやと引立れば、やれ面倒な老ぼれめと、引ずり戻すを母親が、そうはさせじと支へても、老の力の叶はゞこそ、身を揉みあせる一間より、ヤア若共暫く待と聲をかけ、ゆるぎ出たる自來也が、し

いのう、といふ顔熟々打守り、見れば見る程面ざしの、見覺え有稚顔、若やそれがと引寄て、そんならお前は、父様や母様の名は知らずか、いや少時で覺えねど、常々伯父様の云しやるには、父様や母様は、此中に書て有、是を印に尋ねへ、といはしやつたはいのう、ムヽそんなら伯母が見てやりましよと、いひつゝ守り押開、つく〴〵詠めてこりやこれ過にし年、國時様がわしに下さつた起證文。そんなら矢張我子の絹松、是れいのう、其方の母は私じやはいのう、ヤアそんならお前は母さんか、逢たかつたと縋り付、わつと計に泣居たる、ヲヽ可愛や〳〵〳〵のう、其方に別れそれよりも、憂艱難の此母が、寢ても覺ても其方の事、思ひ出さぬ事はなく、此絹松は如何したと、明暮案じて居たわいのう。ようまア無事で居やつたと、引寄〳〵抱きしめ、又さめ〴〵と泣居たる、代々衣やう〳〵顔を上、これ絹松、我身は賢者じや程に、此母が今いふ事をよう聞きや、爰の伯父様は私が爲には兄様、又其方の父様とは敵同士、其父様のいひ付で、劍を貰ひに來れ共、聞入なき其上に、其方の父様を討て來ひとの難題、討ば女の道立ず、討ねば兄へ義理立ず、迚も死ねばならぬ此身、殊に其方の父様は、國時様といふてお大名の若殿様、賤しい母が此腹から、生れ出たる其方なれば、我身が私を殺してたもると、返つて其方の出世じや程に、聞分て殺してたも、否否おりや大名にならいでも大事ない、母様が死しやるなら、私も一所に死ますと、其一言を聞母の、胸一盃にせぐりかけ、ヲヽようぃふ

の軍兵、十重二十重に追取卷、頃しも秋の最中なる、三五夜中の月の色、山の端隱れ霧覆ひ、叶すはやと見る中敵方より、射かくる矢先は雨霰、御運拙く長重公、敵の一矢を身に受給ひ、はじとや思しけん、某を近く召れ、汝此場を落延て、我存念を受ついで、稚き姬を守り育、我鬱憤を晴せよと、仰と倶に御帶刀、腹に突立無念の御最期、御傷はしく思へ共、御諚に任せ、なんなく一方打やぶり、爰よ彼こと吟ふ中、姬君我手に守護致さば、軍勢催促延引と、ちゞに心を苦しむ折から、不思議に出逢名越長兵衞、御譜代の出入といひ、本より誠心知たる故、是究竟と我存念、一部始終を物語、姬君しつかと預け置、其後は折々內通にて、姬の御安否聞計、又音信を通せぬも一つの術、我はそれより軍用金を集めん爲、自來也と改名し、諸國を廻る其中に、思ひよらざる毒矢の惱、是を治せんと計らひしに、思ひがけなき主君の姬君、廻り合しも不思議の御緣、あら有難やと計にて、過越方の大畧を、今見る如く物語、扨はさうかと驚く人々、中に美鳥は我身の素性、始て聞し心の悅び、それに付ても雅次郎樣、何處に如何してござるやら、比翼連理のかたらひも、仇には成やせまいかと、思ひ過しが知らるゝと、又も案じにくれ居たる、イヤ申姬君樣、それは氣づかひ遊ばすな、不日に打立力を添、首尾よふ本望遂し上、御婚姻を取結び、大將軍と仰ぎ參らせ、再び三好の御旗上と、聞て美鳥は手を合せ、戀し床しの正照樣、夫婦になして下さるは、此上もなき私が悅び、結ぶの神共氏神共、冥加に餘

づく〳〵と座に直り、如何に汝等、身のせつなさに樣々と、我を恨ん不便さに、其云譯にはわらね共、委しき譯を云聞さん、某先年故有て、敵の毒矢を身に請しが、其毒惣身五體に殘り、時としては氣を取失ふ病を生ず、是を癒さん術には、孫眞人が妙藥にて、十歲以上の女の心血、是を合して服する時は、忽平癒と聞及び、其故斯は計らふたり、身の因緣と諦めて、命を吳れよと有ければ、母親傍へさし寄て、何を隱さう此者は、私ら夫婦の子ではなく、命にも身にも替へぬ大切ない人より、預り置し大事の娘、殺さで叶はぬ譯ならば、代りには此母を、殺し成と突なりと、お役に立て下さんせ、あの母樣の勿體ない、是迄長の御養育、せめては私が此身をば、否々其方は殺されぬ、其故に長兵衞殿、其方の望をかなやう計、お腹めしたじやないかいのう、否え其でも、いや私がと、義理を立ぬく親と子の、心の中こそ道理なれ、自來也とくと聞濟し、今いひし詞の端長兵衞とは、若し名越氏の事にはあらずや、あい、成程我々は當國蒲原郡、名越長兵衞が女房娘でござりなす、扨はと自來也立寄て、いざ先是へと兩人を、上座に直し押下れば、親子は驚き差寄て、我々が名を聞て、敬い給ふあなた樣は、ホヽヲ御不審は御尤、やわ〳〵者共、其方達は次へ立、休足致せと人をよけ、先何角差置、長兵衞殿には切腹有しとな、ハア、殘念至極御愁傷察し入、扨又我世を忍ぶ一部始終、其姬君の御身の上、物語らんと座を搆へ、過つる應永十二年、御主君三好長重公、御謀叛の思し立、足利方より數萬

き目を開き、ヲヽ嬉しうござんす忝い、劒がはしい計に、命を捨て私が願ひ、聞入て下さんしたは、名僧知識の引導より、猶有難い其お詞、これいのうこれ絹松、大切ない此劒、我身の手から父様へ、大事にかけて渡してたも、名殘惜いは國時様、此世で添れぬ惡縁も、未來は一ツ蓮葉の、花の臺で待ますする、とはいふ物の情なや、刄で死る私が身は、修羅の街をうろ／＼と、劒の山に吟ふて、よう浮まぬでござんせう、不便と思ひ折節の、御回向頼上ますと、今端の際迄煩悩に、迷ふ心ぞいぢらしき、美鳥も傍に倶涙、今殺さるゝ身は助り、悦ぶ我に引替て、夫の爲に命迄、捨て誠の眞實心、いとしやのうと手を取て、歎けば母も諸共に、また其上に月花共、譬がたなき子を殘し、嘸や心が引さりよと、口説立れば稚子が、これ母様、必死で下さるなど、足ずりしたるいぢらしさ。思ひやつて母美鳥、義は鐵石の自來也も、妹と甥が一世の別れ、五臓六腑をしぼり出し、肉をくり出す憂思ひ、堪へ兼て、はら／＼／＼、漲り落る瀧津浪、岩を砕る如くなり、代々衣苦しき顔を上、あゝ忝い有難い、我子は何處に、國時様逢たいわいのといふ聲も、次第によはる斷末魔、惜や盛の花嵐、はかなく息は絶えにけり、わつと泣出す稚子の、心を察し誰々も、涙果しはなかりける、折しも一間に聲高く、ヤア／＼三好長重が殘黨、尾形周馬廣行に、椎津市之正國久、それへ參つて對面せんと、障子をさつと以前の福助、長上下に優美の姿、しづ／＼と立出給ひ、如何に廣行、汝三好が謀叛を請繼、再謀を廻す共、

る廣行殿と、親子が顔を見合して、嬉し涙に呉居たる、何思ひけん代々衣は、用意の懐劍取出し、我子を膝に抱き寄、手を持添て我と我、咽にがばと突立れば、こは何故の生害ぞと、美鳥も母もかけ寄て、介抱すれば絹松が、これ母様、お前は何で死しやるぞ、私も一所に死たいと、慕ふ子よりも母親が、可愛や〳〵のう、此母が死るのはの、最前もいひ聞した、浮世の義理にからまれて、迚も死ねばならぬ此身、其方は早う成人して、きつきとした武士になり、母が菩提をとふてたも、頼むは其方計ぞと、抱き寄れば縋り付、お前が今死しやつて、跡に殘た此ぼんは、何と成うと思はしやる、なぜ生て居ては下されぬ、酷ひ母樣胴欲と、恩愛無量の血の涙、手負は苦しき息をつぎ、これ申兄樣、お殺しなさらて下さりませ、其お心とは露知らず、さげしんだのが勿體ない、我こそ道に背きし身の、云譯の爲此自害、せめては此身を役に立、それを功に殿樣に、劍を戻して下さんせ、何卒お願ひ申ます、拜むわいなと手を合せ、兄と夫へ身一ッを、立る心ぞ健氣なる、ホヽヲ出かした妹、其方が切なる志、我念願達する上は、おことが今の功にめで、望有て奪ひし劍、今改て絹松に遣す間、是を未來の土產とせよ、只情なきは我身の上、主君の爲とは云ながら、肉身の妹が、血汐をすゝつていかめしく、武道を磨く某が、心の内を推量せよ、さはいへ長の年月を、憂苦界に身を沈め、たま〳〵廻り逢ながら、親い詞も有事か、非業に死る其方が貞心、不便の者と自來也が、悲歎の涙に呉れければ、手負は苦し

息を切て駈くる一人、夫と見るより両手をつき、音づれ山に住居の浪人、鬼首剛右衛門と申こそ、彌猛る鹿谷范軍太夫に相違なし、今日家内を窺ふ所、所用有迚此房州へ來る由、慥に聞付注進と、委細の演舌小頭悦び、然らば銘々身を隠し、呼子を相圖に馳集り、生捕て立歸らん。併劍術勝れし上、西天草を所持すれは、油斷なせそと下知をなし、引分れてぞ忍ぶる、往來も繁き其中に、小性仕立の大前髪、淺妻歌之介業久は、浪々の身のよるべなく、色事指南を業として、人立見かけ聲張上、さあ〳〵是は浪華の町々に、誰知ぬ者もない、色事指南の宗匠淺妻歌之介とは我事也、濡一通の傳授なら、叶はぬ戀はする〳〵〳〵、未娘遊女妾者、後家尼人の女房でも、何の苦もなく手に入るは、我等が家の傳授事、若如斯御用なら、頼ましやんせとわめきける、行交ふ旅人寄たかる、中にも夫と白髪の親仁、はて耳寄な先生様、夫に違ひはござりませんか、成程戀一通は我等が得物、見れば御老體じやが、アヽ聞えた、何か、娘御にても敎て呉いと云様な事かな、アヽイエ〳〵、今時の娘や息子が、親の世話に成迄、色氣知ずに居ませうかいの、私は御本山の世話人、中でも少と口利者、御再建や報恩講参も、目當がなうては出來ませぬ、何卒能後家や内儀を極樂淨土へ引入て、成佛がさしてほしさ、俄雨の相合傘、暗い夜は送らうと、小挑灯で釣かけても、いつかな事アヽ穴賢〳〵、何卒彼方から持て來る様な、傳授が有ば御指南をと、年にも恥ぬ色好、蕋破と知られけり、鹿爪らしく歌之助、ヲヽ夫は

某斯て有内は、足利の世は磐石、及ばぬ望をなさんより、前非を悔んで降參せば、一命を赦し呉ん、返答如何にと詰寄ば、から〳〵と打笑ひ、ヤア存外なり椎津國久、儕の心に引比べ降參などとは事をかし、此廣行が胸は大鵬、日本僅か六十餘州、眼をかくる某ならず、唐天竺も一吞に、三好の旗下となさん望、無益の舌を動さんより、軍勢催ふし攻寄よ、ヲヽいふにや及ぶ、者共來れの聲の下、承ると込入勇士、手下と思ひし鵬始、皆一樣の出立にて、廣庭挾しと居並んだり、國久公の下知によつて、斯さまをかへ、とくより入込汝が家來は討取たり、覺悟ひろげと詰寄中、廣行透さず相圖の狼烟、上ると齊く山々谷々、幾億萬騎の鯨波、エイ〳〵おうとこだまに響き、物すさまじく聞えけり、自來也勇でやわ〳〵國久、名もなき平場の合戰は、良將の好ぬ所、時日を定て攻討ん、ホヽホヽ面白し〳〵、互の勝負は再會〳〵、いざ凱陣と兩將も、思ひは同じ伯父甥の、中に美鳥と母親は、野邊の營み經羅尼、唱ふる聲や鯨波、其名も尊き黑姫の、山の奥にぞ住暮す、勇有智有義心有、世にも希なる兩大將、跡ふりかくす遠霞、晴行胸の明の鏡、盡ぬ涙を果しなき

松原の段

人欲は濡手で摑む安房の國、罪は上總の國境、ひそめき集る捕人の人數、何か知らせを待所へ、

からくと、小文太が傍へすり寄、太もゝふつつりアイタゝゝ、これは先生どうしめさる、いやさ此位にせねば行ぬ、まだ傳授も色々あれど、爰は途中重ねて宅へお越なされと、詞に兩人横手を打、あつぱれ色道開山の先生、さうした形になりなされた、以前の噺が聞たいく、イヤモお尋ねなく共云たふてならぬ所、先有ましをお聞あれ、やつかれ事はもど久我の助清すみと申、紀の國背山に有けるが、ひな鳥姫の切なる戀路、聞がいやさに夜遁して、吉祥院へかけこんで、小姓吉三とさまを變へ、勤る中に八百屋のお七、杉諸共に戀慕ふ、こは叶はじと難波がた、東堀の油屋へ、丁稚となつて身を潜、又もやお染といふ娘、我になづみて數通の狀文、餘り惚らるゝがつらい故、此信濃路へ立越えて、今の名は淺妻歌の介業久、所に當國去寺方の住持樣、光り耀く本堂の、りんとう花瓶の三ツ具足、コレ、此眞鍮に打こんで、瞑程にくく、有頂天の住持さん、夜晝なしに吸つけば、なま蛸樣と異名を受、ぬうくとした中成しに、同じ城下に美鳥といふ、生娘に行付て、毎日百本二百本、書も書たりあてがきは、大かた馬の見入し如く、木やりでも音頭でも、留てサア留らぬナア色の道かいなあよ、住持大きに腹を立、娘をのくかいやか應か、應かいやか二ツ一ツの返事せいと、胸づくしを引つかむ、此方も一期の大事ぞと、これ坊さん、此廣い日本に私ならで、若衆はないか、よしないにせよ有にせよ、精進物では身がつゞかぬ、ちつと肴を喰さぬかと、云さま取た通ひ付、酒は一石六斗三舛五合

頼もしいお心入、併ながら、後家や娘とは違ふて、人の女房と枯木の枝はナ、してやんしてどうしたへ、登りや登る程ナあんけらこん、けらこんけらあんけらけたいな物じやはナ、夫餘程六ケ敷、何卒もつと心安いのを教て下さりませ、成程そんならまあ黒燒やへいて、ヱヽそりや守宮かな、いやも其守宮も度々買てやつて見たが、泥龜の間にも合ませぬ、氣の早い、守宮ではござらぬ、其泥龜の事じや、門へ理料泥龜、放し龜泥と賣に來るを、買て川へ放してやりさへすりや、此方の戀はつひ叶ふ、はあそれなら泥龜を放せば、彼方から惚て來ますかへ、ハテ物は理詰でなけりやいかぬ、年寄の色事は、兎角丸さへ放せばよいといふ事、したり奇妙じや、六十年來知なんだ、早う逝で其通り、おせわ三十の包錢、恪い顏にも煮抜の玉子、買て逝うと精一盃、腰を延して歸りけり、跡へ來かゝる侍二人、點き合て傍に寄、ヤナニ其方が色道の指南を致すとな、某は三十一二な後州を、落す口傳が受たい、身共は又十六七な生娘を手に入る、御指南頼む前髪殿と、聞て圖に乘歌の介ヲヽ安事〳〵、夫古き歌にも、成か成らぬは目元で知ると申せ共、目元位で知るなら、藪睨の娘は念佛講に合ねばならぬ、まあ後家を落すは深切ごかし、否應のならぬ義理のせつばへ付込ば、きりやうにはかゝはらず、ひだるい時味ない物なし、とつひずる〳〵と出來ますする、扨又娘の戀路といふ物は、十分ほれて居ながらも、只恥かしいが一盃故、いやじや〳〵は定り詞、そこをずゐぶんしたたるう、斯いふ目づかひして

と、詞に天眼頭を下、何が扨、只今では師也主也重る御恩、お爲とござらば一命成共、ヲヽ出かす〳〵、其心なら打開明す一大事、近う〳〵と招き寄、何か咄しの其折しも、此方に窺ふ以前の小頭、夫と見るより相圖の呼子、しらせに追々馳集る、組子の大勢追取卷、ヤア〳〵鹿谷苑軍太夫、汝椎津の恩を忘、西天草を奪取、勇を討たる比興の振廻、殿の仰に國々迄、尋捜す討人我々、腕を廻せとひしめいたり、驚ながら軍太夫、弱身を見せず嘲笑、ハヽヽハヤア椎津家に恩有とは、大鳥の心に雀杯が知べきや、われ追ちらせ磯兵衛と、口は立派に透有ば、身を逃れんず下心、それ組取と下知につれ、右往左往に寄所を、天眼磯兵衛駈隔、防争ふ其隙に、道を求て鹿谷苑、逃行先を支る捕人、さうはさせぬと天眼が、强氣の働き入亂れ、上を下へと三重返しける、

一ツ家の段

有漏路より、無漏路に通ふ一舎り、雨も厭はじ風は猶、吹すさびたる野分の嵐、騷ぐを餘所に菊桔梗、草に宿かる茅の庵、一本すゝめる女郎花、昔の姿何處へやら、我も斯とは思はねど、頭に霜を戴きし、老の住居ぞ物侘し、老女は庭におり立て、盛りの千草打詠め、心なき草花も、時來つては榮えを顯はす、此身は何時か枯果て、憂を伴ふ人さへも、雲ど隔たる苦しみも、又

五夕、そりやこそ大事の和尚さんに、精を付いで叶ふまい、買人をやれといふほどに、小僧作僧おはり梵妻、出入の花屋駕籠の者、しめたかしわに葱一把、ゆで蛸さげて來るも有、臺所から座敷迄、何處では味噌を摺る、爰では泥鰌汁、鰻鯉鮒燒玉子、當る物を幸ひに、呑込喰込ゆすり込、秘藏の子猫がはり、程ない私をくわへてかけ出すやら、寄てかゝつて喰たをせば、此事檀家へ隱れなく、我等も寺を夜拔して、なれぬ世過も美鳥といふ、娘故じやてござんする、ム、其美鳥といふは、名越氏の娘で有う、ヲゝ成程、其撰取美鳥の聟でござんす、すりや儕が稚次郎じやな、我々が先生を敵とねがふ前髮め、觀念せよと兩人か、踏やら蹴るやら擲くやら、片息になる其所へ、鹿谷苑軍太夫は、鬼首剛右衛門と變名し、劔術指南の内弟子と、他事なく仕ゆる天眼磯兵衛、供に引連出來る、夫と見るより剛右衛門、其奴は日外名越が方にて、立合望し大馬鹿者、討殺して何の益、赦し召れと先生顏、淺妻漸人心地、アゝ嬉しや〳〵、お情深い先生樣、いつそ私をお抱下され、お足按つて其上で、お寢間の伽でも致ます、ホゝホゝと追從笑ひ、おかしさこらへ天眼磯兵衛、里見家へ仕官有ば、ヶ樣な馬鹿も又一興、御兩人は彼を引連、お歸り有て先生の、有付濟で跡よりお越、然らば左樣と小文太助兵衛、悦ぶ淺妻歌之介、腰を按つて連立行、跡打詠め剛右衛門、イヤナニ磯兵衛、其方事は新參ながら、日外氏神にて相撲の手並、感心して我家へ呼寄せ世話致し呉るも、大望有身共故、まさかの役に立ん爲

二ッに切付れど、ちつ共騒がず振回る、眞向目當に又切込、白刄を片手に引握り、ハテこしやくな人よ、わらはが心を疑ふて、有家を人に洩さうかと、欺し討とはいらぬ氣もせい、サア落付て休ましやれと、突放されて悔り仰天、ムゝ慥に手應へ後袈裟、其疵もなく、白刄を直に摑し老女は、スリャ其方も西天草を所持せしよな、ヲホゝ〳〵ハゝ〳〵、草の葉木の根を力にして、身を身る婆じやない、其方が持た西天草も、一旦の德は有ても、今の樣な惡根性を止ぬ時は、これッヒ此首が落るぞや、そこに懷中して居やる、西天草を賴にして、刄向ふて見る心なら、此婆が木刀の手の內、手は手足は足と、切放して見せませうか、サゝ何じや、アゝいや段々誤り入ました、ハッハゝ、驚入たる奇術の妙手、此上は拙者をお弟子に、ヲゝ夫も時節が有で有う、マア〳〵奥へと敎る一間、天狗の住家か仙人の、隱居樣では有まいかと、恐れ慄き鹿谷苑、扨もえらい婆じやなと、ぞゝ神立て入にけり、秋は常さへ物淋しきに、野もせにすだく蟲の音も、風に亂るゝ小萩原、露踏分て二人連、元の雫と消行し、父兄の仇を尋ね侘、此一ッ家にさしかゝる、美鳥は夫の袂を扣へ、申雅次郎樣、モウ日も暮るに道筋も、次第に細き萑の中、踏迷ふたのじやないかいなと、心細げに跡や先、見やれば此方も實誠、街道ならぬ此山の手、斯る難儀も我なす業、赦して下され美鳥殿と、詫る詞は耳に立、アレ又しても、よそ〳〵しい他人向、美鳥どうせい斯せいと、なぜ云ては下さんせぬ、二人連立旅の空、一ッ所に寐な

樂しみに引變る、時節も大方忌日の正當、せめて佛に咲揃ふ、花を供して手向んと、新取色の數々を、佛間に備へ一心に、何か思ひの願ひ言、稍傾きし秋の日も、天の惡報己が身に、當ると知ぬ鬼首、道なき道に落人の、恐るゝ薄荻の葉に、露の其身の置所、尋ね求る跡よりも、慕ふ捕人が右左、捕たと組を振ほどき、投付投退行先を、猶も支へる一生懸命、どうど打付足首にて、呼吸のとゞめ取付一人、兩の手に咽を一しめ、落入死骸、蹴飛して柴戸に寄、道に迷ひし旅の者、今宵の一宿足休め、無心ながらと云入れば、老女は始終をそ知らぬ風情、何方か知らぬが二里三里、遠里離し此おばら家、不自由でも苦しからずば、ハテモ如何成と、赦しの詞、過分〳〵と横柄に、打通りたる其人相、主つれ〴〵打守り、ハテなお適ゆゝしき骨柄、なれ共面に顯す其身の積惡、ヤ何と、イヤさお天の網のかゝつた人じやの、夫は、其上死靈の祟が有、非道に人をあやめた、サア夫は、サア〳〵〳〵、と見透す如く、云詰られて言句も出ず、思案の内にも生れの肝惡、邪智を含で飛しさり、恐しき老女の明察、何を隱さん拙者こそ、人を害せし科により、追人の多勢に取圍れ、危急を遁れ來りし身の上、何卒救ひ下さらば、大恩死す共忘れじと、低頭してぞ賴みける、ホゝホゝ賤しき婆を夫程迄、賴むと有を捨ても置れず、幾日なり共逗留さつしやれ、ナニお匿ひ下さるとな、ヲイノウ人の知らぬ荒野の一ツ家、奥の納戸へサアござれ、ヤアヱイ〳〵と、立上り、先に立たる後より、聲をもかけず欺し討、體は

〳〵と應す詞、若や敵の手がかりを、聞出す綱と兩人は、顔見合せて長柄としなへ、イザお相手と身繕ひ、老女は木太刀兩刀に、構へ尖き互のかけ聲、ヤア〳〵やつと上段下段、打ば拂ひ拂へは付入、手練の爭ひ、青眼八雙虎亂入、打合得物は放れず去ず、梢を傳ふ猿猴の、水月或は心妙劔、諸流の極意を我物と、暫し時をぞ移せしが、一心凝たる孝子の鑓先、肚を一突たぢ〳〵老女、美鳥がしなへの拜み打、討れながらに聲を上、ヲヽ日頃の鍛錬遖見事、御兩人、其手の內では氣遣なし、鹿谷苑軍太夫を、先此如く討取て、二世を固めの夫婦中、サ武士の誓ひに相違は有まい、急いでわらはが取結びと、有合銚子盃も、三々九度內證の、入譯知た取捌き、夢ではないかと嬉さの、袖に餘りし美鳥か悅び、雅次郎一圓合點行ず、假に敵の名を呼て、勝負を學び其上にて、祝言せよと心有、老女の指圖は厚けれど、敵の首取、親や兄の位牌に手向、其場にて免しを受て取結び、サア其親御樣兄樣が、先つ斯せよと差圖の婚禮、證據は是と佛檀より、取出す二基の假位牌、劔樹院喜樂大居士、劔勇源智信士、二ッの戒名覺が有うがや、誠に是ぞ父兄の靈牌、ハアハヽヽと飛しさり、敬ひながら見知なき、老女の素姓如何ぞと、顔を詠めて訝かる體、ホヽ驚きは斷りぞや、何角は跡にて物語らん、マア盃を美鳥樣、アイ〳〵と取上て、見事は見ても改る、二世の固めの恥しさ、今から眞の夫婦ぞへと、心にいふてさしつけに、口籠りたるおぼこさよ、位牌の尊前いなみもならず、雅次郎

がらも、ほんに一度の手枕に、夢の逢瀨も有事か、敵を討た其跡で。男御樣や兄樣の、位牌のお前で祝言の、盃すると云延し、今にも敵に出合た時、かよはい女の力にて、若切れて死だなら、お前は殘つて私一人、賽の河原へやる氣かへ、せめて人なき折々は、女房と云て下さんせ、酷い難面お心と、恨涙のかこち言、洩聞えてや庵の老女、枝折戸明てさし覗き。見ればお若い二人連。モウ日も暮たに此野邊は、人里遠き離れ庵、内へ這入て休足なされ。サア〳〵此方と招かれて。夫は千萬忝し、一夜も情の行暮し、難義の舍り御芳志と、おづ〳〵入ば主の老女、爐の澁茶汲で出す、心の端香一癖有、家内を見廻し雅次郎、斯る遠所の一ッ家に、掛け並べたる竹刀しなへ、御子息樣のお心がけな、アヽ否々此家に住はわらは一人、見れば密々話しの樣子、敵をねらふ人よのう、アヽ否々全く我々は、ハアテ隱さつしやるな、本名は勇佐吉郎。女中は美鳥と云ふかの、ヱヽ、スリヤ私等が實名迄、ヲヽ譯有て知て居まする、今にも敵軍太夫に廻り合、容易討取覺が有か。ムヽ心得ぬ其一言、若輩ながら武士の魂、やはか本望遂いで置うか、ソレ〳〵〳〵、血氣にはやるは匹夫の勇、油斷大敵此婆が、若しも敵の由緣ならば、欺すに手なし此通りと、隱せし竹刀打かへるを、かはして庭へ飛越二人、直に左右へ木太刀としなへ、即座の手裏劍しつかと請、ヤ滅多に油斷は致しませぬ、ホヽヲ心がけ遉〳〵、此上は軍太夫に、わらはが代つて勝負の試み。長柄なり共木太刀成共、立合て見る心はないか、サア

かれ地に伏て、悶え歎きし有様は、目も當られず哀なり、アヽ愚や御夫婦、親じや物兄弟じや物、慕ふ心は一ツにて、一世の縁と血脈の肉縁、今眼の前にござれ共、互に見えぬ妄執の、闇路に迷ふお二人様、娑婆と冥途を身一ツに、見てゐる私が其苦しみ、劍に死せし魂魄は、修羅の巷に吟ひて、劍樹地獄を目前、無念の涙は八寒の、氷と成て解やらぬ、恨の數は瞋意の炎、大焦熱の身を焦す、其悪業は誰故ぞや、皆鹿谷花軍太夫、討て苦患を助けてたべ、場所は當國鏡が浦、尾形周馬の計ひにて、萬事の用意備つたり、明なば本望成就の吉日、早う〳〵と導く詞、涙拂ふて稚次郎、スリヤ自來也の手配りにて、鏡か浦へ參れとな、ハヽア畏り奉る、とは云物のなつかしい、此場が何と行れませうぞ、ヲヽお二人共、名殘盡ぬは理りなれ共、修羅の妄執晴させよと、アレ靈魂のお差圖でござんすはいな、ハテはつと心を取直し、立上れ共後髮、名殘をしさに行迷ふ、輪廻を切て一筋の、烟と消るお衣重が姿、見返り見返る夫婦が思ひ、胸を定し走行、又も形ちを顯はす死靈、アヽ嬉しや本望や、此上は敵軍太夫、來たれ〳〵、と呼聲は、耳に雷奥の間より、二ツの心火に誘はれて、狂ひ出たる鹿谷苑、ヤア小ざかしき死靈共、早なくなれと拔刀、切拂へ共雲霧の、中に立舞おそへが姿、爰に顯はれ彼こに消、軈奈落へ伴ふ罪人、憂目を見せで置可きかと、くるり〳〵と付廻し、逃ても逃さぬ怨靈の、しもとに打れて軍太夫、かつぱと轉ぶも夢うつゝ、有し庵もきえ〳〵に、鳴は遠寺の鐘の聲、夜はほ

引受て、呑盃を見やる老女は嬉しげに、相に相生の、行末久しかるらんと、壽き祝へは雅次郎、もだしがたなき詞に随ひ、斯取納めし上からは、位牌を持れし老女の由緒、お聞せ有と尋られ、ヲヽ今は何をか包む可き、位牌と見れは位牌にて、喜樂齋樣源吾殿、無念の魂魄あり〳〵と、傍にござるが目に見えぬか、ヱヽ、何とおつしやる、サア、わらはも倶に闇々と、非業の刃に討れし此身、お前の爲には兄嫁、勇源吾正村が、女房衣重でござんすはいのう、甲斐亡魂の顯はれて、假に見ゆる姿ぞや、といふ內、忽白髮の、頭は綠の黑髮に、變ずる姿面痩て、おぼろ〳〵と見えにける、是はと計り二人共、夢に夢見し心地にて、猶彌増るなつかしさ、扨は此身を御慈愛の、深き惠に兄嫁御の、御取持にて有しよな、ハヽア勿體なし恐れ有、さは去ながら御無念の、魂爰に在ますは一目は逢て弟よ、我子と云て一言の、お詞さへも下さらぬは、倶に天を戴かぬ、敵を得討ぬお憎しみ、不孝の罸か淺ましや、何國にござる親人樣、兄上のうと聲を上、空を詠めつすみ〴〵を、見廻し〳〵うろ〳〵と、乳房離れし稚子の、昔に返る其風情、美鳥が悲しさやる方なく、少さい時の事なれば、しみ〴〵お顏も知らぬ身を、嫁と思ふて御位牌の、前で嬉しい取結び、させてやらふと有難い、御不便餘る今宵の舍り、迚もお慈悲の有うなら、夫に一目私にも、お姿見せて給はるやう、兄嫁樣のお取なし、願ひ上ます〳〵と、涙ながらに手を合せ、拜み廻れは雅次郎、お慈悲〳〵と計りにて、狂氣の如く駈廻り、天にあこ

鏡浦の段

鏡か浦と聞えしは、南に海上漫々と、北は續し柏崎、日輪かう〳〵晴渡れば、三國一の富士の峰、爰に寫るを里人の、呼傳へたる地名とかや、尾形周馬廣行、雅次郎美鳥に力を添、敵を釣出す手配し、待設けたる其所へ、息を切て天眼磯兵衛、お頭の仰に隨ひ、軍太夫めをたばかつて、奪ひ返せし西天草、取戻さんと某か、跡を慕ふて追付是へ、早御用意と告知せは、自來也悦び出來した〳〵、二人の本望達する時節、汝は兼て云聞せし、西草天の奇特をもつて、兩人へ力を添よと廣行が、詞も未だ終らぬ所へ、眞砂を蹴立軍太夫、跡を慕ふてかけ來り、ヤア憎い磯兵衛、恩を忘れて大切な、西天草を奪ひし曲者、人非人めとねめ付れば、ヤア人非人とは俤が事、喜樂齋源吾夫婦、非道の刄に討たる敵を討せん爲、磯兵衛に申付、誘寄しは此自來也が謀、ヤア〳〵逸見雅次郎、早く是へと詞の中、兼て用意の白装束、美鳥も倶に甲斐〳〵しく、勇進んで顯れ出、ヤア如何に軍太夫、其方か手にかけし、喜樂齋忰雅次郎、嫁の美鳥、父兄の仇、兄嫁の敵、尋常に勝負、勝負と詰かゝれは、敵などゝは事をかしや、俤ら一々返り討と、刀引抜目を配れば、右と左に雅次郎美鳥、盲龜の浮木に逢見る心地、火花を散して三重「挑しが、孝心全き」切先に、切まくられて軍太夫、よろめく所を付入て、切伏〳〵兩人は、今ぞ

の〳〵と、三重明渡る、空の景色も打晴て、塒放れし朝鴉、耳に入てや軍太夫、勃然と起て、ハアラ不思議や、老女といひしは打殺そへが亡魂、喜樂齋源吾迄、有々我を恨だる怨念、但しは狐狸の仕業かと、邊りを睨んで立たる所へ、數ケ所の深手によろめく足、踏しめ〳〵天眼磯兵衛、朱に成てかけ來り、ヤア先生には恙なきや、ハヽア嬉やと、どつかと座す、ヤア磯兵衛、其方はこりや手を負たな、ハヽア仰の如く、椎津家の多勢を相手に追散し、是迄かけ付來りしも、先生を落さん爲、此方のお爲に死れば本望、今一防ぎ支へる內、片時も早く此所を、サ立退給へと勸むれば、ア否氣遣ひ致すな、何百人にて圍む共、大木に集る蟻同然、其手疵もたつた今、元の如く癒して呉る、こりや是こそは、椎津の重寶西天草、暫く其方が懷中へと、肌にしつかと納る內、流るゝ血汐も忽に、癒合疵口跡もなく、不思議と呆るゝ天眼、何と見たか、奇々妙々の其一物、それさへ有ば刄物は愚、石火矢にて圍む共、身共が體は別條ない、ドレ手疵が癒たら、此方へおこせ、ヤイうつそりめ、今迄儕に付添て、態と手疵を拵へたも、西天草を取う爲、是が〳〵はしくば我行先、此迄ござれと打笑へば、ヤア〳〵〳〵、扨は儕たばかつたな、憎い奴と飛かゝるを、拔つくゞりつ天眼磯兵衛、はづみを打て突飛し、忝しと韋駄天走り、かけ行く跡を鹿谷菴何國迄もと三重追てゆく

狸和尚勸化帳
化地藏略緣起

化競丑滿鐘

作者　曲亭馬琴

上の卷　化の川原の段

腥き風一しきり行秋に、森の木の葉もちりけむと、ぞつと身の毛もたつか弓、引手のうちの物たべと、親子みたりで化河原、松葉折たく欠徳利、汁のみすから三つ鼎、あふぐ扇の紙やれて、往來をおくり狼に、娘姑獲も月草の、さかりにげなき寡鳥、ぬくめてはだにだいた子は、流石いしより重けれど、かるひ世わたり袖乞の、牢人ばけと見えにけり、往來たゆれば母の狼、飯桶片手にコレうぶめ、今日もモウ八ツさがり、三十や五十のはした錢もらふて、親子三人くはれうと思ふかへ、是といふもおのれが心たつた一ツ、明ればちやうど三年あと、節分の夜の厄はらひに、追まくられたばけ仲間、千座が沖の乘合船、大原のざこね見るやうに、もゝくりあふた孫なし子、どこの馬の骨やら、牛の糞やら、顏さへ知らぬ化物に義理立て、緣付うと云ふても合點せず、おれが糞を藥種屋へ賣てやつても、一人ぐらゐの口すぎを、しかねる婆々じやなけれども、何をいふても邪魔になるは其餓鬼め、澤庵づけの石より重うて、ひだるい腹で

開くる優曇花の、花待得たる敵討、思ひ知れよととゞめの刀、心地よくこそ見えにけれ、自來也扇おし開き、ホヽ適手柄と賞美の詞、雅次郎美鳥、勇立たる其折しも、遠音に響く鐘太鼓、自來也は耳側立、合點の行ぬあの物音、何にもせよ御兩所は、早く此場を落られよと、詞の中に此方より、細川勝行椎津國久諸共に、數多の軍兵引連て、ヤアヽ自來也、汝足利家に仇を爲さんと計りしも、夫成主の忘れがたみ、世に出さんす志、斯仇討も濟上は、雅次郎美鳥は夫婦となし、三好の家を引起さん、心得たるかと勝行が、詞に自來也腰刀、拔より早く腹にぐつと突立、ヱヽ有難や忝や、西天草も椎津家へ差し戻せは、思ひ置事更になし、何れもおさらは〳〵と、さしもに猛き勇者の最期、けなげに感する計りなり、イザ勝時と雅次郎美鳥、三好家を再興の、時も繪本の自來也と、忠孝全き物語、描き筆に書取て、開卷の春や平かに、納ま御代ぞ目出度けれ

う、ホヲヽ早速の得心祝着〳〵、頼みと云ふは餘の儀にあらず、云はんとせしが四方見廻はし、ナニ狼、それに居るは汝が娘よな、親子とあらば苦しからねど、謀は密なるをよしとす、暫く遠ざけておくりやれと、云へば娘打ちうなづき、成程是は御尤、コリヤヤイ姑獲、今あなた様が此婆に、内々のお頼みがあるとおつしやる程に、少しの間此餓鬼を連て行て、柳の下で遊ばせて置きをれど、稚子渡せば姑獲鳥、虎の尾を踏み狼の、口をのがれて立て行く〳〵後見送りて窮奇馳、其方も知る如く、見越入道三ッ眼入道の兩家は、夜刃白鬼の大將なれば、多くの化物にうやまはれ、富貴歡樂心のまゝ、然るに近年三ッ眼入道老衰によつて、嫡子白狐之介に家督を讓らんとの結搆、我主人山水天狗は、正しく三ッ眼の弟ながら、別腹なれば力なく、いとけなさより愛宕山へ登山なし、さながら家人の化物同然、其無念骨髓に徹し給ひ、此虚を伺ひ白狐之介をそつておとし、三ッ眼の家を押領し、折よくば見越入道を打ほろぼし、化物の惣大將とならんとのくはだて、幸ひなるかな明日朦閽神の社にて、見越三ッ眼兩家の重寶、文武火茶釜白狐の玉、とりかはさんとかねての契約、其場で智惠を古狼、惡魔王の勅使、般若の局となりて入込みくれなば、主人天狗も滿足あらん、事成就せば其身の出世、當座の褒美となげやる小判、見るより尻尾を古狼、小判取上げ、ヲホヽヽコリヤ狐仲間の木の葉ぢやない、はんまの〳〵山吹色、イヤモシお氣遣ひなされまするな、惡魔王の勅使、般若の局とやらになつ

だかれはせぬ、けたいの悪いめろさいじやと、耳まで裂る口わいて、どなりちらせばうぶめ鳥、いとゞ悲しく涙ある、「襤褸の袖も縁の糸、結ぶえにしは大としの、らくらが沖の涙枕、水もらさじと云ひかはした、殿御の顔は白雪の、積る情の紀念の重荷、此子の顔に似たお方が、わりもやすると朝夕に、行きかふ人の袖につき、此子を抱いて下さんせと、頼む詞をしほにして、「くらべては見る男の顔、みとせの月日今日の日まで、めぐり合はぬは妹と脊と、親子の縁のうすいのか、年よらしやんした母様に、袖乞さする不孝の罪、許してたべとばかりにて、袖に餘りしうき涙、おちて流れて血の池の、水を溢るゝ如くなり、ヱゝ聞きたくもないよまいごと、一言いへば二言めから、めろ〳〵とほえづらかわく、よい〳〵、ソウおれが云ふこと聞ねば、是から親の威光、其餓鬼めは川の中へはかしてみ、おのれをば見世物士に賣てやり、左團扇で暮らさにやならぬ、此方へよこせと抱とる稚子、「ノウコレ待つて」と止むるうぶめ、「ヱゝ面倒な」と踏飛し、かけ出す向ふへしづ〳〵と、乘物つらせて竊奇鼬、後に從ふ小化物、序あしゝと狼は、元の所へ立歸る、乘物傍に竊奇鼬、用意の床机に腰打かけ、ナニ化の河原のおくり狼とはそちがことよな、某は山水天狗の郎等竊奇鼬と云ふ化物、チトおり入つて頼みたい仔細有つて尋ねまゐつた、ナント頼まれてはくれまいかと、半分聞かずにこれは〳〵、山奥そだちの狼に、「お歴々の化物様から、お頼みとは冥加ない、お金にさへなることなら、何なりと御遠慮な

と云ふ寶物を取交し、其後で祝言があるとの事、化物仲間も多い中で、アノ手入らずの轆轤樣をぶつちめると云ふことは、アヽ化物冥理に叶ふた仕合せ、婚禮の日の日でり雨より、お床の上がづぶぬれにならうと思へば、おいらが小僧めもよる〳〵は、貰ひ淚を濺し居ると、語るを聞いて化平が、ヤイ〳〵何いふぞい、ごくにも立ぬ隣の寶、吾らはやつとの小化物、あなたは白狐の大化物、白狐と奴の假名違ひで、手爾葉が合ぬと打笑ふ、話す後へ見越の執權猫亦にやん平、三毛織の上下に、天蓼の紋髭くひそらし、嘯く顏は虎ならで、さす大小も二股の、尻尾と見えていかめしさ、知らぬが佛の小化物、それはさうと御家老の、青鷺之進樣、化納と云ひ心まで、云ひ分のない執權職、それに引かへて猫亦殿、マア顏付からして佞人らしい、まづ第一に冀しが惡く、さて其次には盜み喰ひ、まだ其上に御主人の、轆轤姬樣に心を掛け、鹿の戸樋の横戀慕、椀のおわびの片おもひ、お主の祿を盜人猫、赤手拭より毛氈を、かぶらぬ用心することじやと、內所の話も聲高に、語るは下部のならひなり、ヤイ〳〵ざわ〳〵と喧しい、用事なくば次へ立てと、睨み付けられ吃驚敗亡、夜明けの幽靈見る如く、皆たちさえでにげて行く、後に猫亦默然と、前膝折つて思案顏、折から向ふへ來かゝる獺、それと見より小腰をかゞめ、コレハ〳〵猫亦樣、それにお出なされまするか、イヤモ方々とお尋ねまをしました、偖かねて仰せ付けられました妻戀ふ鹿の生血、やう〳〵と手に入りましたと、服紗とく〳〵取出す壺、

て、見事しおほせてお目にかけやせう、「シイコリヤ聲が高い、此所にてひまどり、「見とがめられては後日の妨げ、委細は館で云ひ合さん。ソレ小化物、用意の乘物是へもて。ハット答へてかきすゆる。悪事にふわと乘物の、戸を引開くれば、コリヤどうじや。たべ付けぬ鋲打乘物、あんまり御念が入り過ぎたと、頭の方からはいこむ狼をかしさ耐へて化物ども、戸を引立てかき上ぐる。折から歸る姑獲鳥、此體見るより二度吃驚、「コレヤ母樣をどうするのじや、譯を聞かねばなんぼでも、やらぬ／＼と取縋る。案じはさすが親子の情。「エヽ邪魔すなとあらけなく、振りきる袂。取りつく袖、立寄る處を窮奇鼬が、さそくのあて身に姑獲鳥、ウントとばかりに、たぢ／＼／＼、乘物やれと一散に、道をはやめて三重

朦罔神やしろの段

行空の、悪魔が原に魔魍さびし、化の玉垣見越の松、三ツ眼に光る燈明に、額の文字さへ朦罔神、今日祭禮の設けとて、幽靈幟黑幕は、晝をも夜の化世界、掃除しまふて小化物、一つ處へ寄りこぞり、ナント聞いたか化内、此樣においらが使はるゝも、三ツ眼入道樣の御子息、白狐之介樣と、見越の姫君轆轤姫樣、結髪とやら澤庵漬とやらだげな。そこで今度三ツ眼樣が御隱居なされて、家督とやら五德とやらを、白狐樣にお讓りなさるによつて、文武火茶釜、白狐の玉

見ましたなら、喜びましやうとお髭のちり、そろ〳〵持込む商ひ口、實にもすつぱの獺なり、山水天狗眉を顰め、各々の忠心にて、謀計既に整ふと雖も、心憎きは鷺之進、一網かぶせる手段はいかに、ホヽ夫とても此猫亦、かくお味方いたす上は、青鷺ぐるみ打つてとる、はかりごとは我方寸、何かの事は神主の、化物方にて三ツかなわ、然らばわれにて密談せん、兩化來たれと山水天狗、打連れ奥に入りにける、秋日和、空も次第にむら雲の、通り神樂に雷の聲、音打ちませて雨もよひ、傘に縁ある轆轤姫、附添ふ腰元なめ女、はした化物とり〴〵に、對の帽子の白妙も、けわい化粧の立姿、よしあし引の山寺の、狸も後に從ひて、携へ持てる文福の、茶釜の箱の二筋道、向ふの土手を白狐之助、供は奴の狢内が、擔げた鍵に玉の箱、光り照りそふ初花の、匂ひくらぶる風情なり、それと見るより腰元化物、アレ〳〵折も折とて向ふの道を、戀聟君の白狐樣、モウシ〳〵ろくろ姫樣、御挨拶遊ばせと、云はれてくわつとはお紅葉、御苦勞樣やとばかりにて、首を伸たり縮めたり、張替へ傘の吹き降りに、柄の抜たるが如くなり、白狐之介も會釋して、コレハ〳〵ろくろ姫殿、今日は三ツ目見越の寶合せ、とくよりとは存せしかど、何かに隙どり思はぬ遲參、委細のことはわれなる社檀、イザ先お入りとしとやかに、云ふ詞さへ遠淺の、聲吹きおくる寒風に、ぞつと嬉しくろくろ姫、しやなり〳〵と歩めども、首は四五町驅出たし、心いそ〳〵社の前、夫と互に設けの床几、腰打ちかくれば、狸は手をつ

渡せば猫亦手に取下げ、出かした〳〵牝牡交合の鹿の血を、酒にひたし飲ますれば、如何なる化女も忽に、心亂るゝと聞き及ぶ、今日朦囮神の造酒頂載の折を幸ひ、此血潮を酒にひたし、轆轤姫に飲ますれば、日頃の戀も叶ふはいま、人目にかゝらぬ其内に、拜殿の瓶子はやく〳〵心得獺立寄つて、二ツの瓶子携へ出で、血潮手早くしたみ込み、お神酒の口を合せる謀、元の處へ押直し、イヤモシ戀をまをせば拙者が妹雪女狸めが妻となりしを、天狗樣のお目に留り、妾におこせと有がたい御意、折々妹になぞかけても、狸めに義理立て、酔のこんにやくのと合點せず、兎角邪魔になるはあの狸、おつ片付けるよい工夫が、ありそな物で御座りますと、話も杉の木影より、ホヲ其工夫語らんと、立出づる山水天狗、朱鞘の大小緋の衣、夜に三度日に三度、もゆるばかりの出立に、悠々と上座に直り、我かねてより、見越三ツ眼の兩家を押領せんと、より〳〵語らふ連判狀、十に九ツ事成就、只此上は兩家の重寳、奪ひ取らんず謀、文福茶釜我手に入らば、茶釜預る狸が落度、首打おとすに手間隙いらず、その時こそ雪女、何程節義をまもるとも、夫なくば心をあらため、我に從はんは必定、其仲立はすつぱの獺、其身の出世は心の儘、心得たるかと得手勝手、我慢に高き鼻柱、長押の素鎗に異ならず、イヤモウ狸さへばらしてしまひますれば、妹めはお寐間の伽に、フウ見事する氣か、ソリャお氣遣ひなされますな、あなたのお鼻の二尺八寸、狸のきんの八疊にも、をさ〳〵劣らぬ看板を、とつくりと

打鳴らす、貲や山鳩の、鼓は狸が腹にしみ、我を忘れて、こつくりこくり、むむさこらへて、ハテ心得ぬ、傳へ聞く丑滿頃、化物などに出でんとすれば、人間ねむけさすとかや、我化物の身をもつて、鼓の音を聞くと等しく、頻りに眠りを催すは、さては人間此所へ、現はれ出づる前表か、何にもせよ、ハテねむや堪へがたやと、其儘ころりと高鼾、不思議にも又たわけらし、サア此隙にと腰元共、狸の顔へ風呂敷打かけ、各手に寄つて袴の紐、とく／＼引出すきん玉は、急ごしらへの八疊敷、まづ／＼是へと手をとつて、無理にならべるろくろ姫、白狐之介も座に着けば、ろくろ姫はもだ／＼と、云ふて善いやら惡いやら、胸は今更らはゞかりの、關に人目をはぢらふ風情、爰らは氣轉と粹内が、夫と知らする合圖の目遣ひ、娵ばけもそろ／＼と、其座をはづし立て行く、手持なければ白狐之介、立んとするを引止めて、ソリヤ聞えませぬ白狐之介樣、そもや二人が戀中は、稚遊びのつゝ井筒、高安ならぬ竹藪に、咲いた野菊も千代かけて、そなたを置いて二人とは、外に穴をば堀りやせぬと、云はしやんしたを忘れてか、願ひ叶ふて親々の、ゆるしを受けた云名付、祝言の日を指折りて、かぞへて思ひよるのとの、今日は九日稲荷さん、こんと啼く音も氣にかゝり、粹な情で父上の、名代に來た甲斐もなう、すげなくいのとは胴慾な、難面わいなと振袖に、からまる首は縄になり、結ばる縁ぞ誠なれ、白狐之介も今更に、岩木ならねば背なで擦り、互の役目大切ゆゑ、すげなう云ふたは堪忍しや、わし

き、此度御兩家緣談とゝのひ、當社朦囮神の社にて、文福茶釜、白狐の玉とりかはさんとかねての契約、茶釜預かる拙者が役目、御用意あつて然るべしと、申上ぐれば白狐之介、名玉の箱手に取上げ、父三ッ眼が命を請け、家の重寶白狐の玉、聟引手に參らするも、兩家和合の誓ひの璽、叔父の天狗も先刻より、此處にと聞き及べば、取交すには間もあらんと、の給ふ詞になめ女、ヲゝソレ／＼なんぼ寶物を取替へにお出し遊ばしたとて、日頃から戀しひ／＼と戀ひ焦れた、殿御のお顏も見るや見ずに、隨德寺に遊ばしては、是がほんの月夜の玉、ほいない事じやないかいなと、云へば皆々口々に、成程なめ女が云やる通り、はる／＼のおひろひで、ろくろ樣にもお草臥、互に床几に腰掛けては、居酒屋で話するやうでもどかしい、なんぞよい敷物が、ありそな物と四方見廻し、ヲゝある／＼、イヤノウ狸樣、時の用には鼻もそぐ、お前のきんの八疊敷、ちつとのうち爰へ敷き、お二人樣をゆつくりと、据らせまをして下さんせと、云へば狸が興さめ顏、エゝつべこべと何を云ひめさる、穢くるしひ拙者がきん玉、敷物なぞとは尾籠至極、罷ならぬとつごとなき、詞にはつとなめ女、腰元化物も持餘し、靑い息つくばかりなり、傍に見かねて奴の狢內、アゝモシ／＼、お前方はさりとは／＼智惠がない、モシ其仕樣はコレかう／＼と耳に口、ムウスリヤそなた眠氣を付ける咒を、知つていやると云ふのかいな、ハテ何事もだんまりで、爰らは我らにおまかせと、神樂の鼓手に取上げ、ヤアポン／＼と

猪内が、後を慕ふて追ふて行く、音に驚き目覺す狸、コハ何事と立上れど、きんの重量でたぢ〳〵、廣げたきん玉見て吃驚、手早く操込む袴の襞、茶釜の御箱大切ぞと、小脇にかい込み身構ゆる、早刻限といふだすき、狐が鈴の音合圖にて、立出る猫又天狗、衣服あらため白狐之介、名玉の箱うや〳〵しく、ろくろ諸共座に着けば、天狗左右を打見やり、契約の通り兩家の重寶、此處にて取交されよと、叔父の詞に白狐之介、箱取出せばろくろ姫、みづからとても父上の名代、茶釜預かる狸が役目、イザお請取下されよと、相方立寄り箱の紐、解かんとしたる折も折、勅使のお入りと呼はる聲、ハテ心得ぬ俄の勅使、仔細あらんと猫亦天狗、狸も共に出迎ふ、化て威光を鳥居先、勅使と僞る狼姿、五十路の上の齡さへ、二ッ三ッ四ッ五ッ衣、實に狼に衣とは、云はずとしるき出立なり、夫と見るより會釋して、ホヲ早速の出迎ひ大儀〳〵、自らことは惡魔王の内勅受け、發向したる般若の局、案内あれと云ふ聲も、谺に響く遠吼に、天狗猫亦頭を下げ、思ひがけざる勅使のおいり、かくまをす某は、白狐之介が叔父山水天狗、見越の執權猫亦にやん平、不時のお入りに俄の不用意、見苦しけれどお通りと、挨拶すれば悠々と、上座に直り袖つくろひ、勅使の趣餘の儀にあらず、此度見越三ッ眼の兩家縁談整ひ、双方の寶物取交さんとの契約ありと、惡魔王内聞まし〳〵、見越三ッ眼は化物の棟梁、異變あらば天魔の騷動、見とゞけ參れと魔王の勅諚、私ならぬ是公、御用意あれとありければ、白狐狸

が心はコレこうと、じつとしむればしめかへし、ヲヽ嬉しやと縋り付く、戀は思案の垣間より、三國一じやうつておけ、しやん〳〵〳〵とさゞめきて、出立る腰元代物、狸殿のきんの上では、お二人ともにお氣づまり、幸ひわれなる幕の內、サア〳〵早うと押やりつきやり、是からこちらもお二人の、睦言聞いて一汗かこ、サア御座んせと打連て、並木の方へ歩み行く、樣子とつくと立出る狢內、何か心に一たくみ、そろ〳〵伺ふ幕の影、忍び寄つて名玉の、箱の紐とく取出し、社檀の剛飯さそくのかへ玉、箱をつきやる幕の內、猶も伺ふ狸が寐息、そろ〳〵這寄り文福茶釜、箱引寄せて取出し、傍の幟引切つて、茶釜を包みしつかと脊負、社檀に供へし神酒德利、手早く入れて箱の紐、しめたと喜ぶ笑の眉、玉おしいたゞきかたじけない、さる化物に賴まれて、白狐之介が下部となり、付けねらふたる二ッの寶、寐入りむじなの術を以て、狸めは死人同然、不思議に手に入る名玉茶釜、天狗公へ差上ぐれば、出世の手がゝりオヽそれよと、行かんとしたる後より、玉ひつたくり駈出す、獺そつ首摑みなにひろぐと、引き戾せばせゝら笑ひ、コリャヤイわれにばかりよいことされては、此獺樣の出世の蔓がきれるわへ、ものしたものをものするのだ、出世の山分け名玉は、おれに吳ろとまた駈出すを、利腕とつて引廻はす、此方もしれもの身をかはし、口に頰張る名玉を、やらじ渡さじ放さじと、揉合ふ拍子に獺が、我を忘れて呑込む名玉咽につかへてぐんびくび、胸を叩いて逃出す、のがさじものと

わつてか紛失せし、寶の詮議仕らん、とは申せども此塲の罪、見のがしては魔王へ恐れ、彼是思ふて鷺之進が、持參なしたる此三品は、取りも直さず三人が首、彼は狸が腹になぞらへ、かく斷われば狸は切腹、面は即ち白狐が首、ろくろ嬶になぞらへし、鈴の形は丸くして、此鈴の緒の長さは六尺、引き伸したる轆轤首、是ぞ當座の首實撿、詮議の日延べ幾重にも、御訴訟まをすは家老の役目、偏に願ひたてまつると、云ひまはしたる辯舌は、懸河に水や渡るらん、イヤさう甘くは行くまいわへ、斯いふ天狗は白狐が後見、殊更ろくろ嬶に縁わらば、三ツ目見越一致して、謀叛のきざしありなんどゝ、世上の風聞ある時は、我々までが身の破滅、其云ひ譯は立つまいと、おのが田へ引く水掛論、柳に流す鷺之進、イヤ其儀はちつともお氣遣ひあらるゝな、白狐之介とろくろ嬶の、縁は只今切れてしまふた、とは又何故にどうら問ふ猫亦、ホヽ其譯語らん是見られよ、茶釜と思ひし神酒徳利、元は一對夫婦陰陽、今かく一ッ放るれば、時にとつての夫婦の離別、神酒をこぼせば元の水、陶によそへし神文と、云はれて猫亦俄に仰天、陶持つ手を押止め、アヽコレ〳〵鷺之進殿、其神酒をこぼされては、此方にちつと、アヽコレひよんな處へ陶が出た事ではある、イヤナニ鷺之進殿、御心底見えました、夫にはとんと及ばぬことぢやと、おのれが謀だ陶の血潮、こぼれかゝりし此塲の體、それと見てとる鷺之進、ハヽヽヽ此塲に及んでいらざるとめだて、緣の切れ目の此陶は、破談の證據互の金打、まつ

詞をそろへ、コハ有難き魔王の勅諚、家の面目此身の大慶、双方の寶物、かねて用意仕ると、勅使の前に箱押直し、蓋を開けばコハ如何、名玉ならぬ貝赤な閼伽、茶釜にあらぬ神酒陶、とんだ茶釜に野干と狸、呆れはてたるばかりなり、扇振上げ山水天狗、白狐之助なりう〳〵、是はと驚き立寄る狸、猫亦すかさず刀の鍔、遠慮會釋も滅太打、眼むきだし聲荒らげ、ヤア大切なる両家の重寶、紛失すれば互の滅亡、言譯なくば切腹するか、たゞし細首打落さうか、サア〳〵〳〵と詰寄る両花、いとゞ悲しくろくろ姫、白狐様に科はない、自らを殺してたべ、ノウコレ狸、身の言譯はないかいなと、歎き給へど白狐之介、狸も返答なく聲の、こんくわい前に立たごりけり、大口あいて般若の局、フヽハヽヽと冷笑ひ、斯いふこともあらんかと、悪魔王の賢慮、今更ら感じ入りますわいの、寶なければ両家の自滅、ろくろ姫も罪はのがれぬ、三化ともにみづからが、目通りで首打放しや、用意〳〵と勅使の權威、かしこまつたと猫亦天狗、刀するりと抜放し、既にかうよと見えたる處に、ヤア〳〵双方聊示あるな、白狐ろくろ狸の首、勅使へお渡しまをさんと、とゞむる聲は見越の執權、青鷺之進、水際立らし立派の侍、何か三品を携へ出で、勅使の前へ差置けば、横目で見やり、コリヤ何じや、鈴に鼓に狐の面、是が詮議の手がゝりか、但し女と侮るのかと、なぢる詞に鷺之進、寶紛失いたす上は、三化ともに罪科のがれず、首うたんは理の當然、しかりと雖も此處にて、みな〳〵落命なす時は、誰

其如く、名玉茶釜を取戻し、再び歸參はまた〻くうち、其時こそは惡化原、首を洗ふて待つて居よと、袴の股立とり〴〵に、寄らば切らんと身構へたり、ヤアかねてより此猫が、心をかけしろくろ姬、のめ〳〵と渡さうか、ソレ者共三化ともを打つて取れ、かしこまると組子の化物、井筒の中より現はれ出で、やらぬと向へば鷺白狐、狸も共に拔合せ、心得たんぽの腹鼓、打てか〻るを馬手へかけ、逃ぐるを尻からすた〳〵切り、鼓の胴切れぽん〳〵と、切立てられて小化物、むら〳〵〳〵と逃行けば、猫亦天狗も大勢の、臆病神にさそはれて、社の後へ逃げ込んだり、サア此隙にと鷺之進、泣入り給ふろくろ姬を、脊にしつかと四方の目配、ヤア〳〵狸白狐君、此行く先は皆敵地、われ〳〵一所に落行かば、謀の拙に似たるべし、某一方切りひらき、ろくろ姬の御供せん、兩化には此塲をのがれ、何方にも身をかくし、實の詮議肝要ぞと、心をつくれば白狐之介、狸もろとも靑鷺が、情を感ずる袖に露、わけて柄もりのろくろ姬、みづからとても白狐樣に、お別れまをして何時かまた、お顏を見んづ見られんと、惜む名殘に脊中から、見送る首は長けれど、短い赤繩有爲轉變、宿なし狐野の狸、たちはに迷ふぬれ鷺之進、羽がいもがれし主從妹脊、右と左へ別れ行く

中の卷　箱根の先化住居の段

この通りと刀の手のうち、切りはなしたる陶の、酒は地上に散亂せり、時に不思議や般若の局忽かわる其形相、天を拜し地を拜し、頻に低頭なしたるは、訝かしくも又恐ろしゝ、鷺之進きつと見て、ハテ心得ぬ、時は今季秋の天、しかも霜降の節にあたつて、酒中の血潮に老女の振舞、天地を拜する有樣は、呂氏春秋に見えたる本文、九月霜降の時を得て、狼獸を祭ると聞く、酒中の血潮は正しく獸、偖は狼希代の曲者、ソレと目くばせ白狐之介、心得狸も立向ふ、ちろりと見やり何ひろぐ、斯あらわるゝ上からは、破れかぶれだ覺悟しやと、尻をひねつていきばり〱、一ひりひつたるおのれが糞、燈明の火に投付ける、煙り忽狼の、糞は狼煙と立登れば、次第に聞ゆるよせ太鼓、シヤ小賢しやと白狐之介、狸もろとも切付くれば、かい潜つたる飛鳥のかけり、ひらりと飛込む井筒の拔道、南無三寶と白狐之介、狸も共に立寄る井筒、うちより突出す拔身の素鎗、偖は伏勢口惜やと、無念こらへて兩化は、井筒をにらんで守り居る、天狗くわん〱と打見やり、ヤアうつそりの鷺之進、我かねて見越三ッ目の兩家を滅亡し、化物の頭とならんと、窃に招く一味の化物、かく多勢を以てとり卷ば、あんちん町の籠同然、命惜くば降參せよ、異議に及ばゝ此世のいとま、吸物椀へ葬らうか、いかに〱と詰寄れば、鷺之進ちつとも騷かす、ヤア忠義一途の某に、降參なぞゝはことをかしや、縱令幾千萬の化物をもつて圍むとも、ろくろ姫のお供して、館へ歸るに何妨げと、鋭き詞に白狐狸、ヲヽ我々とても

れても身ははれぬ、傘のうちさへ狭き世に、ぐわひちがひしろくろ姫、狸が家を目あてにて、歩み疲れし其風情、跡に伺ふ網笠は、何か故ある化物と、見えて小影に立忍ぶ、姫は切戸に立寄りて、ほと〲と打叩き、コレ誰ぞてゝ明けてたも、早う明けてたもいのと、の給ふ聲に狸が思案、フウ暮れかゝつて戸を叩くは、てつきり米屋か薪屋めが、借錢こひにうせたであろ、爰らは我らが得手物の、狸寢入をする場所と、其儘そこへ肱枕、空鼾して居たりける、姫は表に氣をせいて、打てど叩けど答なく、暫し佇み給ひしが、ヲヽそれ〲自が頭の伸るは此様の時ばかりの調法、ドリヤまづ内を伺ふてと、頸をのばして垣越に、一文凧の切れたる如く、ふわり〲と、先首はかり内に入り、様子を見れば主人の狸、そらとは知らぬ寢姿に、姫君の首傍へ寄り、ノウ狸目を覺してたも、コレ自じやはいのう、ろくろじやわいのうと、云ふ聲聞いて狸は刎起き、ヤ今のはたしかに聞いた聲、したがあたりに誰も居らぬ、スリヤ夢であつたか、アイヤ〲空寢に夢見る筈もなしと、そこら見廻はし姫の首、見付けて吃驚、ヤ貴女はろくろ様じや御座りませぬか、如何にもろくろじやわいのう、コハ思ひよらぬ御來臨、まづ〲是へと姫の首、上座に直し手をつかへ、見ますればお供もなく、斯る貧家へ只お一人、何故あつてか氣遣はしと、不審の詞にろくろ姫、ヲヽ其疑は尤、今更ら云ふも恥かしながら、白狐之介様とみづからが、思ひ〲し戀中を、猫亦天狗にへだてられ、名玉の紛失より、白狐様のお行

玉くしげ箱根の先は化物の、お定まりなるかくれ里、野暮に隣れる化住居、我得手物の指南所に、親子三人が打寄つて、僅に肥す腹皷、主人の狸本讀さし、空うちながめて、ホウ雨もやんださうな、此小僧めは何して居る、道で口爭などしてをらねばよいが、アヽ子は三界の首枷じやと、云ふ間ほどなく立歸る、狸が一子川太郎、まだ九ツの藪育、竹の子笠を打冠り、盆に豆腐の小半丁、ちよこ〳〵走る頭勝、かの赤本に畫いたる、とうふ小僧と見えにける、切戸口からコレとゝさん、今戻りましたぞや、オヽ出來した〳〵、大分おとなしうなりをつた、したがコレ川太郎、父が云ふとようわきまへよ、其方はどう云ふ生れ付きか、頭の皿へ水が溜ると、子供に似合ぬ力が出て、人を投げたりほかしたり、モ樣々のほてヽんでう、川だちは川ではてると、よう人なみの化物になりをるまい、父が云ふと聞き居らぬと、見世物師にくれてしまふがどうじや、アイ、どうじや、アイ、聞きをらぬかと睨付くれば、イヱ〳〵モウ惡あがきはしませぬほどに、見世物にやつて下さるなや、ヲヽ合點がいたが其豆腐、母が傍へ持つて行け、アイ〳〵何でも云ふこと聞きますると、納戸の内へ走り行く、後に狸は越方を、思ひやつたる獨言、アツア其昔は見越入道公に仕へ、自由自在に化し身が、文福茶釜の紛失より、かく浪々の今の身の上、かゝる貧苦もお主の罰、アヽ化物の身の上にも、只儘ならぬは浮世じやなア、モ是とても返らぬ操言、ドリヤ一服と安烟草、心のうさを忘れ草、煙り燻らす雲行の、空は晴

呼びに来た、ちよつと一走りいかねばならぬ、内に氣をつけてたも、アイそんなら行て早う戻つて下さんせと、云ひつゝ羽折打着せれば、大小ぼつ込み門の口、暫し心を見送り外、胸におさめて急ぎ行く、後に女房雪女、ふたり見廻はし是はしたり、隣から借て使ふた手燭皿、まだ戻さずに置いたさうな、是ちよつとかへしに、イヤ／＼／＼、セウ夕飯に間もあるまい、ドリヤ支度をと納戸口、細板うす刄揃ゆる、鍋に豆腐の白妙も、さすが持下にはおもふな、照りそふ顔に但氣なくも、狭き袂のつぎ／＼は、破れかゝらし味噌こしに、螢入れたる如くなり、賤る處へ表の方、うそ／＼來たるは兄の瀬平、門口から胴調聲、コレ妹そんなとはかして置け、わいら夫婦がきんの直ると話に來たぞ、上り口から大胡座、それと見るより雪女、ア、兄さんよう御座んした、よい話とはソリヤ何じやへ、ハテ何と云ふて外でもない、わいら夫婦が日頃から時る、文福茶釜の在所が知れた、コヽまた阿呆云はしやんせ、イヤ戯言でない、是はツかりは日頃の望じやない、大極上雑切のほんまの事じや、スリヤ何と云はしやんす、ほんのことで御座んすかへ、そんなら早うこちの人に、知らせて欲しいと飛立つ嬉しさ、抑じめてコレまちやへ、知れは知れたが肝心の、れこさが無けりや手に入らぬ、夫も木の葉の小判じやゆかぬ、逢んなの山吹白雨なけりや、取戻すよがならぬ、ナント肝がどんだ茶釜でおらうがのぞ、聞いて妹がふさがる胸、當惑顔と見てとる瀬平、してやつたりと顔向になり、サそこじやてナ・所で薬

衞知れず、どうぞま一度お顔が見たさ、密に館をぬけ出て、其方を力に來たわいのと、首ばかりなる目に涙、切戸の外の胴までも、身をふるはせて立給ふ、ハウア御家來も多き中、化損ひの某を、お力とは冥加ない、必お氣遣ひあそばしまするな、シテお首ばかりお立越で御座りまするか、イエ〳〵胴もいつしよに伴ふたわいの、シテ又お胴は何方に、サア最前から表に待たせて置ひたわいの、コレハ〳〵存せぬとて嘸お待ちかねで御座りましよと、云ひつゝ立て切戸口、明けて身體を伴へば、首をまき込むろくろ姫、少しは心安まりける、折柄表に聞ゆる足音、狸はあたり見廻はして、何處へがなおかくしまをさん、ヲゝ幸ひ〳〵時の用には是甚だ、穢るしうはさふらへども、まづ某がきん玉な、暫のうちの御隠家、毛體なけれど是からうど、きん玉打かけ忍ばする、程なく息せき來かゝるは、村のあるきの小化物、切戸口からとんきよ聲、コレ狸殿穴に御座るか、何か詮議の筋がある、たつた今呼んで來いと、庄屋の化作殿が云ひ付けてよこされた、早う御座れと喧しく、どやいてこそは立歸る、ハット狸が當惑の、疵もつ足元股倉の、きん玉に打向ひ、御窮屈には候はんが、少しの間此內へ、御忍び下されよと、御手を取つて戸棚の內、姫を忍ばせ戸をぴつしやり、錠前しつかとおち付く胸、コレ女房ども雪女ど、夫の聲に納戸より、アイト答へて立出る女房、慌しいお前の呼聲、案じるとじやないかいな、イヤ案じる事じやなけれども、今何やら用があるとて、庄屋殿から

めて奥へ入相の、化の時刻に王魔が時、主人の狸は打萎れ。思案も空も暮れかゝる、道を急いで吾家のうち、コリヤ雪女なにしてをる、火を點さぬかと腹立聲、行燈提げて雪女、ヲゝ此方の人戻らしやんしたかと、云へども更に答へなさ、夫の不機嫌くみかねて、サアお茶あがれとさし出せば、イヤ馬の小便飲みとうない、コレ女房ども、云うて聞かすることがある、マア下に居や、おりやモウどう云ふとか、われにふつ〳〵厭たぞよ、エゝ、じやによつて去てしまふ、縁切つたぞや、フゥ思ひかけない愛想づかし、コリヤお前氣が違はしやんしたの、イゝヤ氣も違はぬ酒にも醉はぬ、ほんまに愛想が盡たのじやと、云はれて急立つ雪女、ずつと寄つて夫の胸倉、ソリヤ聞えぬわいなこちの人、子なかなしたる二人が中、氣にいらぬ事あらば、ナゼかう〳〵じやと打明けて、云ふて聞かして下さんせぬ、さう云ふ水臭いお前の心とは露知らず、今の今までお前のためになと、云はんとせしが押かくし、後は涙に暮れ居たる、エゝ、めろ〳〵と返らぬ操言、すつぱりと縁切た、暇の去狀受取つて、とつととうせうと投出す一通、手早く取上げ、見て悔り、こりや是ろくろ姫樣の人相書、コリヤヤイ、さう云ふ增花が出來たによつて、縁を切らねば其女子と、言交した詞が立ぬ、ものにたとへて見やうなら、是この盆の豆腐の淡雪、まづこの如く打散らせば、消えて忽ちとの水、覆水ふたゝび盆にかへらず、女房さらばと立上る、裾引とめてこちの人、マア〳〵待て下さんせ、ソリヤ尤じやがたつた一言、云ひ

鑵と化ようなら、其金も又出來る、フウソリヤ又なんで、ハテ淨瑠璃本を見やいの、夫の爲には勤奉公をする、人間もあるじやないか、それ程までに思ふ心底、四條河原へ其身を賣り、見世物公奉する氣なら、今宵のうちにも金は出來る、前かど熊女と云ふたは出たが、雪女とはこいつよつぽど新しい、百兩位はおさへたばさまと、何か心に一企み、おだてかくればふわとのり、ソリヤモ夫の爲なれば、つらひせつない恥しい、見世物奉公も厭やせぬ、四條河原はまだのこと、大坂にては道頓堀、伊勢は白子の觀世音、山あらし同樣に、蜜柑籠へ入れられて、恥さらすとも大事ない、コレ兄樣どうぞ、相談して下さんせ、フウそんなら得心したのじやな、サイナアしたがこちの人狸殿に、此譯云ふては止むるは必定、今宵丑滿の鐘を合圖に、迎ひに來て下さんせ、ヲヽおりやきは來るがコレ妹、かならず手筈を間違ふなよ、アイ心得ました、そんなら後にと獺は、とつかは出る切戸の外、立どまつて胸算用、コリヤ大分まんがようなつた、面白狸のはらつじやわへ、あの女郎さいを釣り出して、天狗樣へ手渡しすりや。褒美はずつしり此身の出世。うまい〳〵と、振向く途端見合す顏、まだ行かしやんせんかいなと、聲かけらて紛らす詞、ヲヽ必ともに間違ふなと、尻ひつからげ走り行く、後にしよんぼり雪女、何かのことを思ひやり、心のうちはうやむやの、關の軒端にふり解し、雪の玉水散りかゝる、涙押へて立上り、アヽ今日もモウ暮るさうな、ドリヤ火を點そと獨言、夕とゞろきの胸のうち、をさ

付けて、ずゐぶんまめで大きうなり、化の稽古に怠らず、人らしう化やつたら、母が菩提もとふてたも、名残をしやと其儘に、嘆き襖の隔より、ウヤウハア天をかける人魂、地を走る化物まで、親子のあはれ知らざるや、ムゝあれは夫の腹鼓、是が此世の聞きをさめかいのう、モウシこちの人、おさらばで御座んすぞへ、ヤアとさの鼓のうつゝとも思はれぬ身こそうらみなれ、ホンニかへす〴〵も果敢ない身の上、夫子に別れ消ゆる身は、油のたらぬ雪燈籠、積る思ひの其果は、氷の地獄におちらるゝ、責は目前此世から、迷ふわいな、迷ふわいなと雪女、嘆く涙はおのが身の、一度に溶けて流るゝばかり、とわり責ていぢらしき、思ひ直して、ヲゝさうじや、迚もながらへはてぬ身の、未練の歎きに時うつり、仕損じてはお主へ不忠、さうじや〳〵と有合ふうす刄、取るより早く我とわが、胸元がはと突立る、狸は奥より轉び出、女房出來した、モウ死だかと、云ふ聲寢耳に稚子も、目を覺して走り寄り、コレ母様なんで死なしやる、わしも死たい〳〵と、頭の皿に頑是なく、川童と伏して泣き叫ぶ、狸も手負に取縋り、コリヤ女房ども雪女、苦しかろうが聞いてくれ、先刻庄屋へ呼ばれしは、天狗猫の下知とあつて、待もうけたる窮奇鼬、多勢を以ておつとりまき、今日ろくろ姫様此家へ、御入りありし事譯を、訴人あつてよつく知る、疾首討つて渡せよと、のつぴきならぬ詞づめ、さま〴〵に僞りしが、家探しせんとの一言に、きつちり詰りし其塲の仕儀、下腹に毛のなき我も、是非に及ばず受合ふて、

たひとがと取付くを、未練な奴めともぎどうに、襖をはたと入る後は、身にふりかゝる悲しさと、積る嘆は雪女、解けて苦しき夫の謎。袖に玉散る涙をはらひ、スリヤとうからろく〳〵姫様をかくまふて置しやんしたか、最前庄屋から呼びに來たは、そんならてつきり聞へたわいの、さうとは知らず兄さんと、云ひ合せたる見世物奉公、それより是は目前につきつめたお主の難義、心は二ツ身は一ツ、生別死別のへだてはあれど、どうでつま子に別るゝ因縁、お主のために消る命、さら〳〵惜うはなけれども、文福茶釜の事わけを、たつた一言云ふて死にたい、今更奥へ行たならば。命を惜む未練者と、さげしまるゝも恥かしい、と云ふて云はずに死れぬ此身、どうしやうぞいのどうしやうと、我を忘れて聲をあげ、泣音もれてや納戸より、走り出でたる川太郎、これ母さんぼんは寢むたうなつたわいの、早う寢かして下されと、縋るわが子に泣顔を、見せじと涙押ぬぐひ、ヲヽ寢むたくば爰へ寢や、わしも一所に寢るわいなう、可愛の子やと引寄せる、此世の名殘四鳥のわかれ、親子の緣のうす蒲團、小豆枕を取添へて、子に添ぶしも是かぎりと、思へばいとゞせきくる涙、聲も曇りて、コレ川太郎、だまつて爰にねんねこせい〳〵、ねんねが子守はどこへ行た、どこへ行た、龜山越えて化に行た〳〵、ふしもしどろにくれ竹の、子はすや〳〵と寢入ばな、顔つく〴〵と打まもり、アツア可愛や。何にも知らぬがいぢらしい、コレ川太郎、寢耳にもよう聞きやや、此母は今死る程にの、食物万事に氣を

たるさし足ぬき足、後に人音をりわしと、暫し小影に立忍ぶ、程なくぞや〱鎌鼬、手の者引具し入り來り、ヤア〱狸、約束の時刻ゆゑ、首請取に立越えた、きり〱渡せと權柄顏、ハヽア疾より用意つかまつる、イザ御首をとさし出せば、首請取つて篤と改め、いかにも姫の首に相違ない、でかした〱、役目が濟めば身ども戻る、家來きたれと鎌鼬、首桶携へ立歸る、始終を小影に伺ふ獺、くひちがひたる胸算用、破れかぶれと飛で出で、今のはたしかに妹が首、遠くは行くまいぼつ付いて、イデ注進と駈出す、腰に飛付く川太郎、最前よりの歎のうち、夥多の皿に涙が溜り、忽備はる千人力、行くをやらじと揉合しは、蚯蚓に蟻の付きたる如く、持餘したる獺が、踏こたへたる力足、小腕にかへしてすでんどう、起しも立てず立寄つて、矢鱈無上にこそぐれば、アハヽ〱と笑ひ出し、其儘息は絶にけり、偖はと一聲柳の梢、小戻りしたる鼬が家來、うちの樣子を伺ふ體、それと見付ける狸が早業、うす刄の手裏劍あやまたず、どつさり落れば疵口より、たばしる血潮獺が、尻の穴へかゝるとひとしく、不思議や尻の穴のうち、光り發する其有樣、狸は乾度目もはなさず、アヽラ不思議や、人間則小天地水火激して雷をこり、飲食腐れて屁を放つ、是はそれとは事かはり、尻から發するいなびかり、偖は此奴火打石のよごれしを食ひけるか、ハヽヽハヽヽアラ希代のわざを見るものじやなア、あの尻の穴にこそ仔細わらんと立寄つて、改め見れば一つの名玉、コリヤこれ三ツ眼の重寶白

歸るみち〳〵思案を極め、愛相盡しの謎々は、ろくろ姫樣に其方が面體、似たるを幸ひ胸だくみ、御身代りと打明けて、云ひ聞かするも知つたれど、態と詞をもうけしは、氣を勵さん我が計略、常日頃から貞節に、してくれる其方じやもの、何のまあ緣切ろう、愛相が盡さやうぞ、氣强う云ふたもお主のため、コレこらへてくれ女房ども、夫婦は二世と聞くからに、未來は一つきん玉ぞや、十符の菅薦七かぶり、八疊敷をあけて待て、忠義に死すとは云ひながら、不便のものゝ身の果やと、耐へ〳〵し淚川、かち〳〵山の土船も、浮いて流るゝばかりなり、手負は苦しき息を吐き、其一言が千僧の、經陀羅尼にもまさりし供養、嬉しう御座んす嬉しいわいな、それに付けてもわしや一言、云ひ殘した事がある、最前兄さんが見えてな、文福茶釜のありかが知れた、したが百兩と云ふ金がなければ、取戾されぬとある故に、わしやお前にかくして、見世物に奉公する心で、相談はしたけれど、さてあたつたるお身代りに、わしや命を捨まする、どうぞ茶釜を取戾し、出世して下さんせ、こちの人、コレ川太郎は何所にゐやる、モウ目が見えぬと這廻り、今際のきわにも夫のこと、忘れぬ心ぞ誠なる、狸は妻の心根を、聞けばきく程重なる思ひ、取亂したる恩愛の、歎は人も化物も、別れはおなじうき世の名殘、苦痛させじと立上り、縋る我子を押のけて、南無阿彌陀佛と心で唱名、首は前にぞ落にける、折から聞ゆる遠寺の鐘、定めなき世に定めある、數かぞふればはや丑滿、合圖の時刻と獺は、忍んで來

の執権青鷺之進、主人の狸は見てびつくり、これは〳〵と驚けば、ホヽヲ不審は尤、ろくろ姫の御身の上氣遣はしく、見えかくれに附添ひ來りし某、物影にて始終を聞き、驚き入つたる夫婦の忠義、感ずるに餘りあり、まつた川太郎のあやまちも、頭の皿より起りしと、幸ひ是なる手塩皿、十人前の其一ツを、まづこの如く此井の中へ投入るれば、罪ある子息は入水も同然、後に殘りし九枚の皿、取も直さず九歳の稚子、隨分大切手しほにかけ、不便を加へて養育あれ、狸は損氣じや合點かと、此場を濟す智仁の詞、語り傳へし皿屋敷、古跡は今に殘りける、ハヽアハヽヽヽ有難しと、喜ぶ狸、イザ姫君をお渡し申さん、御對面あられよと、云ひつゝ立つて戸棚の戸、開くれば姫は最前より、泣き腫したる御目元、不便の雪女が最期やと、嘆き給へば青鷺が、其御歎きはさることながら、時刻移つてあやまちあらば、夫婦が忠義も水の泡、いざさせ給へと御手をとれば、姫は泣々暇乞、青鷺はげみの聲高く、ヤア〳〵狸、名玉ふたゝび手に入る上は、貴殿は此家を立出て、白狐之介の御行衛、尋ねもとめて同道あれ、某は姫の御供申て立歸り、貴殿夫婦が忠義の樣子、見越公へ申上げ、歸參の願もとりもたん、親子は跡にてゆる〳〵と、妻の亡骸弔はれよ、さらば〳〵に主人の狸、歎のうちの喜びは、武運ひらくる歸國の花香、茶釜も妻の遺言にて、わり家も大抵推察せよ、かたじけなやと勇みても、此方を見れば又涙、胸は二重にたつか弓、春の日影の雪とけに、消て果敢なき妻の身は、此世から

狐の玉、我手に入りしは天のたすけ、かたじけなしと押戴く、又起き上る手負の曲者、よろめく所を川太郎、大地へどうと投付くれば、其儘狸が止の刀、今の世までも云ひ傳ふ、川童が好む尻子玉、いはれは是と知られけり、斯る處へ又ぞや〳〵、立戻つたる窮奇鼬、ヤア〳〵狸の横道者、よく似せ物を摑ませたな、首受取つて行道にて、忽水と消失せしは、察する處雪女か、首を討ちしと覺へたり。天狗公の仰をそむく、命知らずの不敵者、それ家來ども打取れと、下知に從ふ小化物、打つてかゝるを川太郎、父をかこふて立隔たり、あたるを幸ひ摑み投げ、手玉のいしなご曲手毬、寄居虫はじきの八ツあたり、右と左へ竹がへし、子供の働き似合ぬ力量、心地よくこそ見えにけれ、窮奇鼬は此隙に、狸を目掛け切付くれば、心得たりと引ぱづし、其身を沈んで丁と受け、其まゝ返して切込む太刀先、丁々と互の手練、暫が間戰ひしが、鋭き狸が太刀先に、あしらいかねてたぢ〳〵〳〵、力つき夜に窮奇鼬、爰ぞ最期の一ッ屁と、尻をまくつてぷい〳〵〳〵。武威に誇りし狸さへ、餘り臭さに辟易し、躊躇ふ隙間にこそ〳〵〳〵、臆病風と諸共に、宙を舞ふてぞ逃れ行く、殘る家來も手練に怖れ、皆ちり〳〵に逃失せたり、最前よりの働きに、頭の皿の水失せて、力つきたる川太郎、其儘かしこへ打伏せば、父の狸は思案をきはめ、惡者ながら現在の、伯父を殺せし川太郎、不便ながらものがれぬ罪と、刀提げ立寄つて、既にかうよと見えたる處に、ヤア〳〵聊爾せられな狸殿と、襖開いて立出る、見越

はつしやれ、加持がようさく祈禱がよし、蛙の目玉が前へ付くやら、兎の前足が長うなるやら、モさま〳〵の奇妙不思議、ノツ化右衛門殿、ヲヽそれ〳〵、年寄りの化物衆が、たつみあがりになつて騒がしやるのも、どんと無理とは思ひませぬ、イヤそちこち云ふうち暮れたそうな、又明日の晩世話になりましよ、サア〳〵御座れど人魂の、提燈ともし打連て、我家をさして立歸る、跡には一人山男、門口しめてくつたく顏、煙管引寄せ燻らする、室の八嶋のうす煙、たてし襖を押明けて、そろ〳〵出る白狐之介、探ぐる手先も烏玉の、闇路を辿る目なし鳥、それと見るより山男、手を取り遙上座に直し、さぞ御窮屈で御座りませう、同行衆も歸りますれば、少しの內なと御氣ばらし、御休息遊ばしませうと、慰めまをせば白狐之介、名玉の紛失より、思ひ掛なき盲目となり、此家に忍ぶうき月日、所詮武運に盡きたる此身、かねて覺悟は極て居れど、忘れがたさは其方の親切、油揚豆腐赤の飯、備そへて日々の饗應、それのみならず朝夕に、藥のことまで拔目なく、世話してたもる忠臣の、志に絆されて、今日までながらへ居るぞやとのたまう內も見えぬ目に、とゞめかねたる御淚、コハ不甲斐なき御詞、改めまをすに及ばねども、某元は三ツ目譜代の化物なれど、若氣のあやまり、百物語の化くらべに、遲參なしたる科により、縛り首にもなるべきを、君の母御夜叉御前のお情にて、命助かり阿呆拂ひ、何卒一ツの功を立て、御勘氣お詫と朝夕に、心を碎く年月を、早やかぞふれば二十年、然に此度、

なる雪佛、流れて三ツ瀬川太郎、あまたの皿の水いらず、親子がよつて野邊おくり、火宅にのこるかたわれも、煮らるゝ思ひ狸汁、歎は共にしるのみか、南無あみじやくし貝じやくし、すくひ給へと手を合す、親子主從四人づめ、南一片の唱名も、とゞく眞如の月の出に、道をもとめてたどり行く

下の卷　山男旅籠屋の段

化物の、旅はと問へば道もなく、蜘蛛の巣に似たやれ笠に、鷹の化したる鳩の杖、一寸法師に大頭、脚伴のいらぬ巡靈が、肩にしだるゝ楊骨柳、行きこふなりもさま〴〵の、妖怪變化に合の宿、旅籠屋多き其中に、家名もよしや足引屋、評判高き山男、下女のお化が前垂の、しわがれ聲でとまらんせ、とまらしやんせと夕間暮、細い手で引くうしろ髮、世渡る業ぞしんきなる、ホット疲勞れ、是はきやうがるまんのわるさ、あれ程の旅化衆、一人もとめはせいで、てつきり旦那はんの目玉はいたゝくであろ、それはそうと奥に御座る、和尙さまや同行衆に、茶も煎じて出さゞなるまい、アヽしんどやとつぶやきて、勝手をさして走り行く、奥よりどや〳〵立出る、同行の小化物、コレハ〳〵山男殿、今日はいかい御馳走、イヤモありがたいことで御座る、わし共が口から、から云ふは勿体ないが、アノ和尙樣は正眞の化た地藏樣じや、はて何故と云

潜戸ぐわらりと誰さんじや、何の用じやと見合す顔、フウ誰かと思へば藥種屋の化兵衛殿、夜が夜中に何事じやと、落着き顔をじろりと見やり、イヤ餘りしらさるまいぞへ、コレ山男殿、今日はいつだと思はしやる、眞暗闇の晦日じやないか、何の用とは何のこと、藥種の代金取りに來ました、瓦庇のはたごや株、相應な身代じやと思やこそ、一月續た龍腦と眞珠の代、コレ帳面を見さつしやれや、殘らず〆て十五兩、親方まへが濟ぬわいの、今夜は是非〳〵勘定さんせと、どつさり据る居催促、もて扱ふて山男、イヤモウだん〳〵と間違うて、嘸腹もたと、こならしやろ、長うとは云はぬモウ四五日、イヤ待まいわいの、その四五日も聞きあきた、コレよう物をつもつても見さしやれや、こなさんの内に病人らしいものは見えぬぞへ、龍腦眞珠が何に入るのじや、飯の菜にはなるまいし、コリヤてつきり引賣りするのじやな、引賣されて商人が立物かへ、モウヨイヨイ、是からは代官所へ行て、旅籠の山男は、引賣しますかたりしますと、出る處へ出て請取らう、マアさう思ふて居さしやれと、立をとゞめる當座の間に合化兵衛殿、金渡さう、ヤ、勘定しやう、フウコリヤ面白い、今まで出來ぬ其金、拂ふとは又どうして、イヤわしも化物仲間で名の知れた山男じや、引賣するかたりすると云はれては、男が立ぬ、成程こなたの云ふ通り、わしが内に病人はない故に、不審にも思はしやろが、ありやうはかう云ふ譯、此頃中からわしの内に、泊つて御座る和尚樣が、夢想の藥こしらへる程に、こ

天狗猫亦が企叛によつて、思ひよらざるお家の騷動、シヤおのれやれ、忠義を立つるは今此時と心を盡して君の御在所、こゝかしこと索めしかど、御顔知らねば手がゝりなく、いかゞはせんと夙夜に天地を祈りし惠にや、猫亦が下知とあつて、所々に立たる君の繪姿、夫をしるべに明くれと、お尋ねまをせし某が、寸忠とゞいて思はずも、此家に泊り給ひしより、不思議に名乘る主徒の緣の糸筋つきやらぬ、山男めが心の喜び、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、存じよらざる御眼病、妙藥良醫手を盡せど、今以て御快氣なく、嘸お心うく覺されんが、某かくてある上は名主ふたゝび取戻し、御目も程なく開く御武運、只何事もお氣長う、時節をお待ち遊ばせと、力を付くる忠心の、詞に誠を現はせり、白狐之介も山男が忠義の心感じ入り、とかういらへもなかりける、やゝあつて山男、ヤ何かのことに取紛れ、肝心の儀を失念せり、今朝醫者のまをせしは、其御眼病をなをさんには、互に戀慕の心深き、男女の生膽を取つて藥に合せ服し給はゞ忽地平癒あらとんの物語、是とても容易は得難き品には候へども、いかやうにも才覺いたし、其妙藥だに手に入らば、御全快はまたゝくうち、かならずお案じ遊ばすなと、申上ぐれば白狐之介、何からなにまでそなたの深切、過分〳〵との給ふ折柄、表へ來かゝる人音に、見付けられては事むづかし、早く〳〵と山男、御手をとつて二階の梯子、忍ばする間も表の戸、破れるばかりに打叩き、コレ誰も居らぬかへ、宵から寝たのか明けぬかと、どなり散らせば山男、

になりませう、連て御座れと眞向になり、珠數つまぐりて待居たる、しづ〳〵立て表の方、待くたびれし化兵衞が、手をとり伴ふ和尚の前、後は野となれ山となれ山男、其場を外し立て行く、化兵衞は兩手をつき、私事は藥種屋の化兵衞とまをす者、藥種の代金十五兩、お渡しなされて下さりませと、云へば和尚は偖こそと、合掌して南無阿彌陀佛、イヤモヲシ和尚樣、山男方まで遣はしました、龍腦眞珠の代金を、南無阿彌陀佛、請取に參りました、南無阿彌陀佛、晦日のことにも御座りますれば、其十五兩を、南無阿彌陀佛、なむあみだ、南無あみだ佛と一心不亂、合點行かねば化兵衞が、和尚の顏を打まもり、コレ和尚樣、念佛どころじやないわいの、藥種の代金十五兩、出來るか出來ぬか挨拶さんせ、南無阿彌陀佛、エヽ腹の立、何を云つてもなんまいだ、ハヽア聞えた、てつきり和尚は聾だな、コレサ念佛聞きには來ませぬわいの、十五兩の金取りに來たと、大聲上げて耳に口、和尚は猶も合掌し、偖は亂心增長して五塵六欲のちまたに迷ふか不便やな、衆生煩惱即菩提、南無阿彌陀佛とせめかけ〳〵、祈りいのられ化兵衞が、猶もせき立ち大聲あげ、サア金よこせ請取らう、どうじや〳〵と詰め寄れば、此方もまけじと珠數押もみ、互に爭ふ念佛と催促、追つ追はれつくる〳〵〳〵、まわり〳〵の小佛か、堂々めぐりに異ならず、双方精をもみ切つて、まづ休息と逃込む化兵衞、きたなしかへせと化和尚、奥を目かけて追ふて行く、諸行無常の夜も既に、初更の鐘をつく〴〵と、宿とりおくれ

れ〳〵の藥種買ふてくれろと賴まれて、買ふて進ぜた眞珠と龍腦、久しい馴染の和尚樣、十兩や十五兩の金、此方らから催促も氣の毒ゆゑ、今日までは云はずに置いたが、わしもこなたに疑うけては面はれじや。今和尚樣呼んで來る程に、相對づくでとらしやれと、まじめで云へば眞面目でうけ、さういふことなら其樣に、早う話て下されば、わしも此樣に腹は立ぬ、ようごんす、こなさんへ貸した藥種なれど、めんはれとある事なら、相對して金請取ましよ、夫は近頃かたじけない、ちつとのうち此處に、待てごんせと云ひ捨て、奧へ入るも當座の身のがれ、程なく伴ふ化和尚、頭巾に包む頭勝、よほ〳〵立出で珠數つまぐり、同行衆も戾られた故、お勸めをして居る處へ、慌しく呼びに來たを、誰かと思やお亭主山男殿、何の用じやと問はれてもおし〳〵、サアあなたをお呼びをしたは、何で御座ります、ヲヽそれ〳〵わたしらが懇にいたす友達が、不圖亂心いたしました、ホヲ夫は氣の毒なことで御座る、じやによつてあなた樣の、御十念をさづかりたいと、其女房子に賴まれて、只今あれへ合連れました、お加持なされて下さりませと、賴めば頷く化和尚、夫は何より安いこと、シテ其氣違の年は幾計で、名は何と云ひますな、ヱヽ年はたしか三十八、名は化兵衛とまうします、何の因果かぞんじませんが、明暮のうわ言にも、龍腦眞珠の代金くれ、十五兩の金渡せと、夫ばツかりを口走り、何のたわいも御座りませぬと聞ひて呑込む化和尚、ようござる〳〵、愚僧か十念さづけたら、大概正氣

後は二人がさし寄つて、年も若木のふし柴を、折りつゝくべる連理の奇縁、煙草吸付け船幽靈。イヤノゥ女中さん、女子一人で坂東順禮、年若と云ひ子持と云ひ、思ふ男に死に別れ、味氣ない世とあきらめて、佛頼みに出たのかへ、ナンノイナア、成程云ひかはした男もあつたけれど、ちと譯あつて生別れ、又其上に去年の秋、一人の母に捨てられて、親と夫を尋る此身、風のたよりもないつらさ、いつそ淵河へ身を投げて、死うと思ふは幾度か、思ひかへすも此子が可愛さ、推量して下さんせと、語るうちにもおろ／＼涙、袖にもらふて男順禮、夫は近頃氣の毒千萬、したからき世はさま／＼で御座んすぞへ、わしとても譯あつて、親と妻を尋ぬる身の上、たつた一人の兩親には、稚い時捨られて、顔も知らねば名も知らぬ、親の行衛を尋ぬるうち、思ひ出せば四年あと、ちくらが沖の乘合船、水際の立つよい娘、物云ひかけたが緣のはし、一言いへば二言いひ、少しのとから根が出來て、誘ふ水待つ渡りに船、仇し契の揖枕、ほいない別れのきぬ／＼に、又逢ふまでの紀念ぞと、柄杓の底を打拔いて、書いてやつたる一首の歌、フゥさう云はしやんすりや此方にも、覺のある柄杓の底、シテ又歌の上の句は、しら浪の、あとなきかたにゆく船も、ふゝ其下の句はかうかいな、ヤゝナント、風ぞ便りのしるべなりけり。フゥ其下の句を知るからは、そんなら其方か、となさんか、其時あふた、殿御か、女中か、盡ぬ緣とて不思議の對面、紀念の柄杓は是こゝにと、腰にさしたる底拔け柄杓、此方も取出す柄

し順禮が、背に笈摺薦包、持し柄杓の底拔けて、流れ渡りの船幽靈、後よりたどりよるの道、おなじ出立の順禮女、笠に書いたる同行も、只名ばかりの稚子を、肌におふたる姑獲鳥、歩み惱みて、マヲシ〳〵旅の御方、道同ひましよと聲かけられ、フウ見れば女子の順禮どの、殊に子持の夜の旅、連にはぐれたと云ふことかいの、イヱ〳〵親子たつた二人、冬の日の暮れやすく、宿とりおくれて思はぬ夜道、ソレハ氣の毒困らさんしよ、我らもたつた一人旅、連にならうと云ひたいが、女一人に男の道連、こなさん嘸氣遣いであろ、したがわしもちと譯あつて、女はきつい禁物じや、フウさう云はしやんすりやわたしもな、心に深い願ひがあつて、男はきついきらいで御座んす、ソレハ互に物怪の幸ひ、こなさんさへ遠慮でなくば、いつしよに宿とりましよかい、さいなア、一人旅では宿をも不自由、御遠慮なくばどうなりと、お心次第に致しましよ、そんなら相談出來たと云ふもの、アレ向ふに見ゆるは慥に旅籠屋、夜の更ぬうち急がんと、杖を互の倶ぢから、船幽靈にうぶめ鳥、腰は見えねど足引屋が、門さし覗けば下女のお化、それと見るより走り出で、サア〳〵お前方おとまりかいな、爰は名代の足引屋、旅籠でも木賃でも、泊らしやんせと袖引けば、此方の二人は地獄が佛、誘ふ水ぞと船幽靈、うぶめも共に内に入り、草鞋とく〳〵お家の上、サアお茶あがれとお化が愛相、麁朶へし折て圍爐裡のはた、サア〳〵寄つてあたらんせ、ドリヤ風呂の下見てこよかと、とつかはとして走り行く、

たが、心當りもあることか、サア心當りがあることなら、何の苦勞をしやうぞいな、シテ又お前の父さんは、オヽ我とても其如く、仔細あつて稚い時、生別れした親爺樣、命のうちにめぐり逢、親子の對面させ給へと、心をこめて相撲なる、化地藏に誓願かけ、百日通夜せし甲斐あつて、夢中の靈驗ありがたく、尋ね來りし此家の內、そんなら此家の御亭さんがお前の生の父さんかへ、コリヤ卒示に云はゞ事の邪魔、親子夫婦の緣の糸、一ッに寄つて賴母敷、わたしも嫁で御座んすと、名乘り合ふのは今宵のうち、女房悅べ、こちの人嬉しいわいなと、寄添ふ女夫、奧より息せき下女のお化、サア〳〵風呂がよう沸いた、ちやつと〳〵と糶立つれば、稚子抱いてうぶめ鳥、何かのことは寐てはならぬ、サアござんせと女房顏、ハテわつけもない床急ぎ、マア〳〵いきやと船出靈、打連て入る中暖簾、引違ふて立出る、此家の主人山男、兩手こまぬき思案顏、今物影にて樣子を聞けば、今宵泊りし巡禮こそ、我子船幽靈にてありしよな、見覺のある額の黑子、チヱヽ有難やかたじけなや、互に戀慕の心深き、男女の生膽をとつて、藥に合せ服すれば、彼お方の眼病も忽なほる希代の妙藥、今の話は願ふに幸ひ、奧へ踏込み二人が命、アイヤ〳〵いかに忠義を立つればとて、はる〴〵慕ふて來たものを、我子かとも嫁女かとも、名乘らで殺すは無得心、名乘らば互に未練の種、ハテどうがなと左思右思、胸はたく〳〵目に淚、たもちかねたる山男、崩て流れて震動に、洪水の入りし如くなり、同じ思ひにおらね

杓の底、しつくり合ふた妹脊の奇縁、ノウなつかしやと取縋り、嬉しさ餘りておろ〳〵涙、外に詞も泣くばかり、脊撫でさすり船出靈、ヲヽ道理〳〵、其なつかしさは此方も同然、モ忘るゝ隙はなけれども、處も聞かねば名も知らず、顏さへ定かに覺えねば、紀念の柄杓が心の頼み、西は九州つくし潟、東は伊豆浦安房上總、沖行く船を目にあてて、柄杓借せよと聲からし、呼びしも若や其船に、其方が乘つて居やるなら、名乘り合ふ便もと、思ふ心もいつしかに、船幽靈の底拔杓柄と、浮世の人の夜話に、成りし此身も戀ゆゑぞやと、語る詞は今の世まで、船幽靈のかし柄杓、いわれはかくと知られけり、涙の隙にうぶめ鳥、稚子抱上げ見やしやんせ、何にも知らずよう寐た寐顏、お前の顏に生うつし、是が情のかたみで御座んす、フウ情のかたみと云やるからは、そんなら一夜の仇夢も、忘れがたみの種となつたか、サア此子ゆゑにいくせの苦勞、明けて三ツになるけれど、年弱なれば丸二ツ、てうち〳〵が上手でな、うま〳〵とゝもよう云ふわいな、其愛らしさを見るにつけ、二親揃ふて育てたなら、こんな繿縷も着しやせまいと、思へばいとゞ涙の種、雨風うけて人の門、吾身のことは露いとはず、肌身はなさずもり育て、風一ツひかしやせぬ、辛苦萬苦は詞にも、筆にも盡きぬ辛棒も、お前に手渡ししやうばかり、思ふ心の百分一、推量してと取縋り、涙先立つ女氣を、思ひやつて目をしばたゝき、そなたの深切忘れは置かぬ、何にも云はぬ嬉しいぞや、したが其方も、母者人を尋ると云やつ

ト丶丶てほれる〳〵、イヤノウ山男殿、山で暮らした其昔は、こな様とは隣合せ、昨日今日と思ふたが、モウ二むかしになるわいの、アノ椀白の小僧めは、大きうなつたであらうかの、サレバ聞かしやれ其事じや、藁の上から嚊めに死なれ、手しほにかけて育てんも、親に似ぬ子でほんの鬼、稚い時から山をきらひ、海川ばかり慕ふゆへ、わしもせんしようかわきかね、はつぱりと見限つて、十二の年から行方知れず、子を持たぬ昔と思や、なまなかに苦はのいた、夫はさうとこな様のおむこ殿は、器量しあげたことであろ、男の子より女の子は、格別やさしいものじやげな、ナンノイナさう片おしに云はれもせぬ、わしが娘も譯あつて、去年の秋から行衛知れず、今は此婆たゞ一人身、ハテこな様も此わしも、子は持ながら生別れ、是とても前の世の、因縁かくとあきらめりや、なか〳〵さつぱりするわいの、話も酒もモウ是きり、サおさめさんせ〳〵、イヤ〳〵是は最一ツ強ひ分じや、と云ふで何も肴はなし、アヽ是なんぞありそなものと、四方見廻す亭主振り、茶碗取上げ狼婆ナニ山男その、こな様におさへられた此盃、こつちに望の肴がある、フウこなたの望の肴と云ふは、サアからめて渡しや、ソリヤ誰を、白狐之介を、ヤヽナント、天狗公より密々の上使、山男座が高ひ、ハアヽヽヽと飛退り、互に席を改むれば、衣紋つくろひ狼婆々、此家の主人山男、白狐之介をかくまひ置くこと、注進あつてよつく知る、去によつて出口〳〵は、大勢を以つて取まきおけば、もはや逃れぬ尋常に、

ども、焼野の雉子が夜の道、提燈ともさせ夥多の同勢、天鵞絨包の乗物は、女と見えて奥床し、乗物立せ化侍、うや〳〵しく手をつかへ、仰付けられし山男が家居、此處にて候と、おとなふ内より乗物の、戸を明けさせて狼婆案内しやと云ふ聲に、夫と心得化侍、門口にさし寄つて、足引の山男とは爰許よな、天狗公の奥女中、密々の御用あつて、御入りなるぞと呼ばはる聲、胸にぎツくり山男、疵持つ足もと煙草盆、取片付ける其隙に、乗物出づる狼婆ナニ皆の衆、自事は此家に暫く隙どる用事あれば、宿はづれなる役人の、化物方にて供待しや、早う〳〵と追立てやり、佇む門口イサ是へと、くゞり戸明くればしづ〳〵と、上座に通る裲襠さばき、顔見てびつくり山男、お女中様の御入りと、いしてらしう案内したを、誰かと思や昔馴染の狼どの、テモゑらひ出世じやのと、すつくり云へば此方もさるもの、イヤモ昔は山住の狼婆、人を送つた袖乞から、一足飛びの奥女中、今はうさんなお局役、地白地黒を身に纏ひ、うやまはるれど有やうは、昔が戀しう御座るわいの、身分が重けりや氣がつまり、面倒臭い切口上、此方の宗旨にないことたらけ、餘まりせつなき宿下り、お隙貰ふてたづねたは、昔馴染のこな様に、貧乏徳利茶碗酒、ねだりにはる〴〵來たわいの、ソレハようごんしたの、幸ひ爰にわしが寐酒、肴はなけれど久振りじや、一ツはじめて指さうかへ、コリヤ話せると襠の、肩肌ぬいで置手拭、此方も鉢卷大胡座、さいつおさへつ茶碗酒、樽の底拔け心の底、互に詞の後引上戸、ヲ

寄つたる段梯子、眞一文字に駈上ろ、アット一聲二階のうち、障子にたばしる血潮のくれなゐ、奥にもばつたり首打つ太刀音、コハ訝しと狼婆、首提げて飛下りる、二階の下家に山男、血潮したる、首提げ、出合頭に見合す顔、ヤア其方や狼南無三寶、仕損じたるかと切込む太刀、發矢と受けてうなり聲、ヤアうつそりの山男、白狐之介は此婆が、たつた今首にした、じたばたしてもモウ叶はぬ、尋常に繩かゝりやと、云はせも果ず山男、剛悪不道の狼婆、お主の敵のがさじと、付入り付入る勇士の太刀先、わしらい兼て狼が、肩先すつばと切下げられ、ウントのつけに倒れ伏す、止の刀と立寄るを、起直つて狼婆、はやまり給ふな山男殿、御眼病の妙薬手に入り、さぞ本望で御座らうのと、詞かけられ山男、傍なる二ツの首見てびつくり、ヤア狼に討れ給ひしは、白狐之介様と思ひの外、コリヤコレ悴船幽靈、我手にかけしは女順禮、コハ〳〵いかにと驚けば、痛手によわらぬ丈夫の狼、苦しき息をほつとつき、ノウ山男殿、此婆と思ひ込み、こな樣の手にかけしはわしが、娘のうぶめじやわいの、モ不審にも思はしやろが、一通り聞いてたべ、此婆も其昔は、三ツ眼入道様へお宮仕へ、鬼も十七茨も花、入道様のお手がつき、懐姙なして玉の輿、慾と嫉妬の二ツに迷ひ、若し奥様が御座らずば、上見ぬわしであろものと、日に〳〵つのる瞋恚のほむら、終には奥方夜乃御前を、咒殺さんと思ひ立ち、夜毎に丑の時参り、悪事千里のたとへに洩れず、事あらはれて此身の罪科、既に死罪ときはまりしを、

白狐之介をからめて出しや、異議に及ばゞ此婆が、奥へ踏込み縄かけうか、サア／＼なんとヽ詰寄すれば、思案極めて山男、どつかと座して吐息つき、かく露顯に及ぶ上は、陳ずるに言葉なし、いかにも白狐之介は縄打つて、お渡しまをさん去りながら、主從の名殘暫のうち、ハヽヽヽ事をのばして身代りなど、、夫もわるやつ其手はくはぬ、ガからめて出すに相違なくば、少しは用捨してくれう、八聲のとりが互の合圖、乾度白狐を請取るぞよ、云ふにや及ぶそれまでは、御上使樣にはゆつくりと、奥の亭にて御休息、案内せいと狼婆四方に心おく座敷、徐々立つて入りにけり、後見送つて山男、思案しかくも突詰た、今宵の手詰胸撫おろし、ハツア是非もなき御運の末、心を盡せし妙藥の、手掛り出來て嬉しやと、悦ぶ間もなく今の急難、モウ此上は破れかぶれ、奥へ踏込み狼婆が首打落し、白狐樣の御供して立退くより、外に思案はさらにない、さうじや／＼と四方の目配、そろ／＼寄つて押入れの、戸を引明けて取出す、昔忘れぬ山刀、錆ぬ心の早ねたば、目針しめして尻ひつからげ、奥の一間へ忍入る、はや夜もふけてしん／＼と、軒の干菜に音づるゝ、風ふくろうの鳴聲も、只何となく物凄し、音靜まれば狼婆々、懐劔抜きもち忍び出で、白狐之介をからめてわたそと、安請合の山男が、心のうちが訝しい、最前ちらりと見て置いた、白狐之介がかくれ家は、たしかにあれなる二階の内、忍び入つて首打落し、天狗樣へ差上れば、此身の榮耀は心の儘、さうじや／＼とさし足ぬき足、伺ひ

の幸雄が筒先へ、向ふより猶百倍増、只此上の情には、孫が身の上頼みます、頼む〳〵と云ふ聲も、次第に弱る息次に、布引裂て狼が、疵口しつかと山男、聞けば聞く程こなたの心底、男の化も及ばぬ忠臣、そういふことゝ知つたなら、何の手疵を負せうぞ、はやまりたはわがあやまち、さりながら、流石はこなたの娘じやな、よう潔く死んでくれた、悴めも出來し居つた、とは云ふものゝ此年頃、はる〳〵尋てこしかたを、語る間もなく妹と脊が、親子の名乘もしはせいで、殺した親の心は鬼、せめて未來は夫婦のかため、今は敢果ない首になど、盃さするが責てもの、親の情と二ツの首、手に取上げて二度吃驚り、ヤヽ悴の首と思ひしは、石の地藏の御みさし、娘にあらぬ地藏の寶珠、コハ〳〵如何にと呆れ果、暫し言葉もなかりしが、ヤヽわつて山男、ヲヽ夫よ是にて思ひあたつたり、最前悴船幽靈が、うぶめ鳥へ語りしは、親の行衞を尋んため、化地藏へ祈願をかけ、百日が間籠りしと、聞きしは正しく化地藏の、身代りに立せ給ふか、ハヽヽ有難の靈驗やなア、二人の子供は親々の、命のせどに立つたる孝心、恵は忽地藏尊、彼等が命にかはらせ給ふか、不思議〳〵と狼も、倶に合掌伏し拜む、誓は石に太刀の跡、其名も高き化藏地、古跡は今にいちじるし、斯と見るより船幽靈、うぶめも共に走り出で、ノウ婆樣何故の生害ぞと、縋り歎くを取つて突きのけ、ヤイうろたへたかたわけ者、地藏菩薩の利生にて、二人が命助かりしは、ありがた迷惑不仕合せ、その面下げてのめ〳〵と、

憎いともおぼされず、夜叉御前のお情にて、命助かり追拂らはれ、山家住居のうき難儀、産落したは娘のうぶめ、入道様のお種ながら、我身の心邪ゆゑ、子にまで苦勞させるかと、前非を悔めどかへらぬむかし、いかにもして此御恩報ぜんものと此年月、心を盡せし甲斐あつて、忍びの者の注進にて、疾より知つたる彼妙藥、不思議に奥にてあふたる娘、聟殿にも譯云ふて、死んでくれろと頼んだら、聟も娘も喜んで、お主のため、親のため、忠と孝とに捨る命、迚も死ぬ身を親々の、手にかゝつて死たいといさぎよい、二人が願ひ、委細のことを云ひ合せ、夫を明かさぬ今夜のしぎ、主と親とへ二人の身代り、お役に立て血潮の妙藥、白狐之介様へ上げて下され、聟と娘が命をとり、義理ある和子の眼病の、藥にするは此婆が、夜叉御前様へ恩かへし、コレ推量して下されと、始て明す狼は、實義に勇むものなりけり、始終を聞いて山男、心得がたきはこなたが心底、斯まで恩義を思ひながら、天狗猫亦に一味して、贋勅使となり入込みしは、ホヽヲ夫とても吾が計略、我慢に募る天狗猫亦、うはべは味方と見せかけて、先を潜つて二ツの寶、彼等が手には渡さじと、甥の狢と云ひ合せ、先へ廻つて文福茶釜、白狐の玉はやす〳〵と、奪ひとりしが情なや、白狐の玉は其場にて、獺めに奪取られ、心ならずも其事を、明さず暮らした此年月、名玉再び尋出し、其時こそは此婆が、手立を語らんばかりの寸志、娘や孫を振捨て、敵のために山犬と、なりし此身の苦しさは、針の莚に座したる思ひ、山

に入るからは、今ぞ浮世に出花の新茶、狸和尚が文茶福釜と、末世の記録にとゞめんと、勇み進めば狼が、今はの際の喜びに、つれてがつくりおちしで時、ハアツトばかりに泣くうぶめ、不便の最期と白狐之介、感涙とゞめかね給へば、側に従ふ化物も、ともに哀れを催せり、歎の隙に船幽靈、うぶめが肌の稚子抱取り、覺悟極めしわれ〳〵が、不思議に命助りしも、化地藏の佛德なれば、せめては此子に出家させ、佛恩報じ二ツには、祖母の菩提を弔はせんと、云ふもあはれに古狸、ホヽ殊勝なり〳〵、其子の導師は此狸、今まで着たりし袈裟衣、法の首途の餞別ぞと、渡せば戴きしは〳〵と、着せて詠むる孩子の顏、ちくらが沖にて舉けたる、此子の名をも今よりは、海坊主とや世に云はん、出家堅固にとげよやと、誓ふ詞はみどり子の、年もよう〳〵三才圖繪に名を殘す海坊主は、此稚子のことなりけり、斯る折柄表の方、俄に聞ゆる人馬の音、コハ何事と山男、狸狢も一同に、君を圍ふて立上る、程なく駈來る鷺之進、天狗猫亦に縄をかけ、庭上遥にどつかと引据、某晝討の謀をもつて、天狗猫亦を生捕し所に、君此所にとはほのかに聞き、御迎ひのため參上と、申上ぐれば白狐之介、ホヽ出來したり鷺之進、敵ながらも天狗は叔父、私にははからひがたし、惡魔王へ奏聞とげ、罪の輕重追ての沙汰、二ツの寶下に入るからは、両家の婚姻和合のしるし、頓てろくろの見越入れ、三ツ眼の覗ひ里びらき、開く武運も狼や、皆の化衆の忠義ぞと、宣ふ詞に山男、狸も共に歸參の魁、狢も一ツ穴

ながらへて居やうと思ふと、勵ます詞に船幽靈、實われながら誤つたり、忠義のために捨る命、サア首討つて妙藥の、御用に立て下さりませと、うぶめも倶に手を合せ、覺悟の體に山男、ホヽヲ出かした兩人、とても逃れぬ此場の運命、觀念せよと氷の刄、既にかうよと見えたる所に、ヤアはやまるな山男と、聲も隔の唐紙を、さつと開けば白狐之介、頭に載く天靈蓋、腰に馬骨の太刀を佩、藻屑の直垂さはやかに、名玉携へ立たまふ、左右に從ふ二人の勇士、和尚と見えしは古狸、藥種屋ならぬ大狢、文福茶釜を小脇に抱へ、君を守護せし有樣は、訝かしくも又目覺しき、白狐之介遙に打見やり、狼山男が忠臣感ずるに餘りあり、我思はずも狸夫婦が忠義によつて、ふたゝび手に入る名玉の、威德によつて目の病、忽地癒てまのあたり、闇夜に月の出でたる思ひ、此上は兩人の命とつて何かせん、卒尓なことをはやまるなと、制し給へば狼が、只手を合す喜び涙、思ひはおなじ山男、不審晴れねば膝立直し、心得がたきは二人の化物、シテ〳〵おん身は如何なる者ぞと、咎る詞に古狸、ホヽ其不審はもつとも、和尚と化けて此家の内へ、入込み來りし某は、見越の忠臣古狸、白狐之介の御身の上、心元なくよそながら、附添ひまをす忍びの直宿、又某も其如く、又それがしも其如く、藥種屋化兵衞とは假の名、狼が甥大狢、夫とわかさず此日頃、龍腦眞珠を貢ぎしも、叔母狼が差圖の寸志、我手に入りし文福茶釜、イザお受取りあられよと、渡せば受取る狸が喜び、ハヽア有難し〳〵、茶釜ふたゝび手

加々見山舊錦繪

作者　容楊黛

頃は延文夏の空、鎌倉の管領足利持氏卿、六浦金澤山々の、獸狩あるべし迚、今日思し立つ朝霞、召も定めぬ玉鉾の、草踏分る武者草鞋、出立は君臣別ちなく、皆一樣に異の姿、並行く跡勢子の者、あらゆる獸荷ひ連れ、兼て搆の御休所、暫しと腰を掛らるゝ、和田左衛門謹んで頭を下げ、今日の狩倉は近頃に覺えぬ得物、君にも嘸御滿悦と、申上れば持氏卿、愈御機嫌麗しく、いざ折よしと紙崎主膳、御小筒盃を取敢ず捧ぐれば、和田左衛門倶々に、打混じたる主從が、賤しき業を興とする、貴人ぞいづれ貴人なる、遙向ふの山合より、勢子に追れし子鹿一匹、狩出さるれば持氏卿、ソレ討留よの御諚の下、紙崎はつと立上り、アレ討留よ源藏と、あせれどハット平伏し、猶豫なす内一散に、子鹿は遁れ走り行く、持氏卿御機嫌損じ、イヤコリヤ／＼主膳、彼奴如何なる所存あつて我詞を用ひず、子鹿を遁せし其子細、具に尋問べしと、御氣色惡くの給へば、紙崎も不審をなし、末々の御奉公とは云ながら、君恩に二ツはなし、ヤアー／＼下郎め、御意を背き子鹿を射ざりし申譯仕れと、席を打て尋ぬれば、ハット計りに恐れ

めでた、船幽靈にうぶめ鳥。助かる命長き日に。浪風治まる海坊主、光る白狐の玉の春、一筆書きの戯と、拙き文を巻納む

化競丑滿鐘　終

幔幕の内より持氏卿を初とし、續いて出る和田左衛門紙崎主膳、威儀を正して出向へば、悠々として細川頼之、狩屋の床の設けの座、互の禮儀事終り、此度義詮公御代參として、伊豆箱根に幣を納め、其道々噂を聞に、先達て亡びたる赤松満祐が殘黨、邊鄙の在郷に隠れ住、兼て事を計ふ由、下々の沙汰大方ならず、正敷君は義詮公の御連枝、鎌倉の柱石たれば此事申上ん爲、道を過つて此狩場へ、態々參上致せしと、申上れば持氏卿、先達て貴所の御息女、操姫を我弟縫之介に娶せよと、則ち養子と定められ、疾より我方へ引取しが、内縁ある此持氏、外ならず思召し、御内意の親切忝なしと述給へば、此方も夫と打寛ぎ、我娘操こと、貴君へ差上し事なれば、御心任せたるべけれど、諚意の上は遠からぬ中、婚姻の儀式御調へ給はるべしと、親子の道の慈しみ、いづれ劣はなかりけり、ヲヽ御尤なる御仰、近々に日柄を選み、弟が婚姻調へ申さん、御安心下されよと、事を分たる御詞、頼之も笑を開き、此上は赤松が殘黨の、其逆徒を治め給ふが肝要たり、アヽイヤ其儀は兼て持氏思慮を運らし置し所、斯申和田左衛門紙崎主膳控へおれば、日を待ず切鎭ん、御心安かれと、申上れば頼之卿、ヲヽ各の忠勤も悉く言上申べし、イザヤ歸舘と立給ふ、薫も深き武門の袖、花を比る禮儀の形、大將はじめ並居る諸士、見送る行列小松原、緑榮ゆる君が代の、御遊の御狩勇しく、八十氏川の末廣さ、譽ぞ高き三重の久方の

入て居たりしが、稍あつて顏を上げ、私事元は獵人、鐵炮達者とお聞に達し、御足輕組へ召抱へられ、則ち今日も勢子の其中へお雇に撰れ、只今子鹿見遁せし御咎、恐れながら一通り申上ん。私儀幼少より殺生を好み候へ共、親たる者、申置しは、畜類ながらも生ある物、親を討ば子を助け、子を討ば親を助く。親子共討時は、根を斷て葉を枯す不仁の至と、亡親めが常々戒め、只今迄助け來りし所、今日只今恐れ多き君命とは申せ共、止事を得ず御諚を背きし身の罪科、遁るゝに所なし。御咎は覺悟の上。イザ御政法御行ひ下さるべし、と悪びれず、恐れ入て申すにぞ、持氏卿感心まし〱、下郎には似合ぬ心底、奥床し頼もしゝ、鳥類畜類も恩愛の至極の心は同じ、父が詞の節を守て命を背き、身の咎を顧ざる仁義の一言、感ずるに猶餘りあり、イヤ何紙崎。歸館なさば源藏に、早く褒美得させよと紙崎と、仰にハット主膳がお請、面目餘る源藏が、悦びいはん方もなし、折もこそあれ遠見の侍、御前に頭を下げ、京都將軍家の御執事細川殿、伊豆箱根二所權現へ御代參の歸りがけ、君の御遊を聞召され、此狩場へ御入あつて、御内談の趣ある由、早速に御注進と、言上申立歸る、和田の左衞門取敢ず、細川殿には御一門同然なれど、御遊の裝束禮服に改め、御對面あるべしと、申上れば持氏卿、實尤と諸士引連れ、イヤナニ源藏には休息と、仰せも重く幔幕を、絞らせてこそ入給ふ、程もあらせず此方より、行列美々しく出來るは、京都の執事細川賴之、御入なりと道芝に、各足を止むれば、

しよ、といへば畑介早合點、アヽコレ〳〵〳〵、皆迄いふな込だ〳〵、わりや彼い白米を喰じやな、爰は我等も大通を見しらじ、先へ往てやらうが仕出の所は、アレアノ向ふの松、我等が色は眞黑な、麥飯喫を賞翫と、ちやり散かして出て行、後にお來は吹出し、ホヽヽモいつでも〳〵じやら〳〵いふお方であるはいナア、といふを打消聲を潜め、ヲヽ其方は何も知ぬからじや、今でこそ天竺浪人、實の所はサ誰あらう、御家老職紙崎殿の弟御、若氣の至り身持放埒、カノ堅藏の主膳殿の、勘氣受て流浪の身の上、御歷々じや程に、さう思ふて此上共、心を付て物いやと、聞てお來がテモ扨も、水の流と人の行衞、モウ能ういふた物でござんす、ヤアほんに久振じや、氣晴しに酒なと買て來うかいなア、ヤソレハ御馳走、ナコレ迚もの事にソレ諸白を、アイそんなら買て來やんせう、德利は借て戻らうと、夫に一ッ諸白の、酒屋をさして急ぎゆく、源藏は後打詠め、酒買ふて來る其内に、久し振じや産神へ、參つて來うと獨言、隣村へと出て行、世を憂と、浮世の中を浪々の、身には思ひの花姿、娘と見えて十八九、形も所體も萎たれし、生地の儘なる美しさ、コレ申し父樣、今日初立の願解さ、モウ此樣な嬉しい事はないはいなと、親を思ひの優娘、心も對の貌形、聞親の身は猶更に、ヲウ嬉しい道理〳〵、常から其方の孝行、私が又今度の大病、生藥師の玄伯殿も、匕を投た其所を、我身の精力、神佛の力ばかりで療治仕果せ、今日初立の神參りも、皆其方の介抱の影、其惠冥利とやらでも、

第二

五月半の花菖蒲、爰も名に負ふ東路や、梅澤村に足休め、茶店女房の器量よし、よしや葦簀の茶の花香、色を含みし優姿、折柄來る足輕の、源藏と見るよりも、ヲヽこちの人、何としてござんした、ホヽ女房共、日和がよさに店出したな、若殿のナソレ御內用、今日一日お隙を貰ひ、內へ往て見れば、店出してゐると聞た故、直に爰へ出掛て來たど、聞にお來は會釋して、此間は鹿狩で、御用も繁く、休まんす隙もあるまい、今日ゆるりと休んせ、コレ出花一ッと汲で出す、夫婦が中の濃茶なり、世を拗ねて、浮つ沈みつ瓢簞の、流れ渡りの畑介が、ぶら〳〵爰へ來かゝりて、互に夫と顏見合せ、ホヲウ畑介樣、此間はお物遠、アいつがいつ迄詰らぬ御身分、天竺浪人の其姿、些お嗜みなされいと、恥しめられてサレバ其事、私も切身に鹽が染み、思ひ當た今日此頃、志を改め、兄貴の勘當を赦して貰ふ、一ッの功を立たいと思ひ、色々と工夫すれど、是を斯との分別も立ぬ、いかう凝ていつて來た、コリヤ內儀、と二人差向ひ、しつぽりとエヽうまいな〳〵、アヽおらは樂む相手はなし、白犬など抱て寢て、こたつの代りにするがせいさい、今日はおれも腐れぬきに、此梅澤に此頃仕出しの麥飯と出掛る趣向、幸ひな所で逢ふた、サア貴樣も一所におじや往う、イヤ私は叶はぬ用事がござりますれば、お跡から參りま

た金、娘は娘格別の事、人參代の五兩の金で、娘の初を買切にするのか、出世抱へた大事の娘、ならぬ事置てくれと、老のいらくらずつかりと、いふては見れど命金、借たは定のおろ〳〵涙、ソリャ喧嘩よと人立の、見る目も遠娘氣の、泣より外の事ぞなき。善六は大息つき、テモ扨も見掛に似合ぬ肝太な親仁めじやはいやい、死る所を助けてやつて、まだ其上に恥面かゝされ、モウ夫で云分わるまい、是からは此方も意地づく、小判十兩ないとはさせぬ、お代官へ訴へて、お定りの手鎖掛させ、夫で濟にや願ふて水牢、待てをれと駈出す、ノウ悲しやと娘のお初、取付縋り泣沈み、お前樣の仰しやる事、無理とはさら〳〵存じませぬ、父樣の大病で、今日か明日と思ふた時は、假令此身を賣てなりとも、取留たいと思ふた所、お貸なされた五兩の金、千万兩の金よりも嬉しかつた、其御恩まだ其上に、不束な私の面倒見やうとある、お志の厚いお前、父樣は昔し形氣、當人の私が合點すりや、どうなりとなるはいなと、含む淚の流し目は、泣よりもなほ哀れなり、善六は身中もぐにや〳〵、臍の緒切て初物の、色身遣自に指打くはへ、アノ肝心のそもじが夫なりや、親父殿はわしが親、假令此身は天秤棒で打叩きに逢迄も、何の其厭はふぞい、善は急げじやサアおじやと、引立る腕捻放し、胸ぐら取て、ヤイ善六、年はもゆかぬ子心にも、此親へ孝行と思やこそ、そもやそも我やうな山猿と、夫婦とならふといふはいやい、高が五兩で繋いだ命、俺も武士じや、今戻す金の代りに命をやれば、帳面はさらりと消る

何卒我出世の行末、祈るより外望迚はない、親の欲目と我ながら思へど、器量押立どこへ出しても、屹とした御奉公人、見る影もない其形させ、ヘヱヽ口惜い、無念なはいやい、貧の病は藥もなく、助てくれる佛神の、力にも及ばぬかと、瞼を洩る涙聲、聞に娘も悲しさを、見せじと作る空笑顏、アノ父樣の譯もない、愚痴らしい事いはしやんす、世の中の浮沈、昨日に代る今日の出世は、世にたんとある事なりや、氣をめいらした物でもないと、親の心を慰る、心遣の眼に涙、さうじや／＼能ういふてくれたなア、サアわさ／＼と氣を活して、明神樣へお禮申し、我身が出世奉公口も、懇にお願申そ、サア／＼おじやと、親子共、いそ／＼として行く後へ、ヲヽイ／＼十内殿、浪人殿とうなり呼はるぞす聲に、ハッと思へどそ知ぬ體、行過る間にすた／＼と、息を切て、コレ十内、イヤ爰なずるや先生、其耳をかつさらへて、今いふ事能う臍の下へ聞ておくれ、先斯じやは、お身樣が長々の御浪人でさつち／＼、其中へ貴樣の大病、お娘一人が立たり居たり、餘り見る目が氣の毒故に、此鷲の善六世間並の分相を減して、五兩一分に二割の禮金、無利足のやうな安い金、參人代の五兩の金、元利積て金十兩、おから立の貴樣の內へ、用立た此善六、宛のない金は借ぬは、コレ此お初を我等が目當、コレ十內殿、今日初立の其祝儀に、聟定の祝ひ事、サア一ッ打ませう、打て下され親仁殿と、髭撫上てへし付る、傍にはハッと悲しさの、何と詞も泣入娘、十內は膝すり寄、イヤナニ善六、借た金は借

坂間傳兵衛と云ます者、親の代から仕合よく、今鎌倉の分限帳にも、乘てゐる我等が身代、自慢ではござらぬが、十兩や二十兩お取替申た迚、さして困る身分でもなし、私が娘も三年以前、お出入屋敷足利樣の奧御殿へ、御奉公に出ましたが、お氣に入て今お中老に出世しました、子を持た身は相互ひ、娘御の孝行なに私は泣てゐましたはいの、不躾なとながら、此體でござつては、奉公口の出世も出來まい、慮外ながら一二年私が娘にお預なされ、勤方見習ふたなら、私が世話して、屹とした御奉公人に仕立て見せませう、入ぬ世話と思はしやろが、アノ娘御の孝行な心に、緣でがな尤愛なつて、胸一盃をいふて見ますと、奧底もなき眞實は、涙に夫と見えにけり、十内は只伏拜み、嬉し涙の隙よりも、威儀改めて兩手を支へ、重々厚き御恩の程、娘が身の上迄、殘る方なき御惠み、此方より願ふてなり共、御恩報じの御奉公、望ところの幸ひなれば、ム丶スリヤ得心でござりますか、マア早速の得心で、私もいかう嬉しうござる、日柄選んで些も早々、とさくい詞に娘のお初、旦那樣のお情、死でも忘れ置ませぬと、いふも恩義の初一念、さらばとばかりそこ〳〵に、東西へこそ別れゆく、端下な取形抱へ帶、ぬめり姿も白絖の、古今帽子もしほらしく、道それ者の道芝は、下越の宿の太夫職、禿共引連て、茶店の元に歩み來る、立歸る源藏夫と見る、是は〳〵道芝樣、思ひも寄ぬコリヤ何處へと、尋ねられて飛立思ひ、源藏が胸倉確と取、ヲ丶能い所で逢ました、ヱ丶お前は聞えぬお人、縫之介樣

と、云も敢ず刀を腹、ノウ悲しやと娘のお初、縋り付て止るにぞ、放せ、放さじせり合後、人立中を押分て、商人風のじんとう親仁、十内が手を屹度押留め、私や往來の者でござんすが、見まする所御浪人の、いかう御難儀な節と見えます、殊に又御病氣とやら、お互に年寄は、只さへ家が古なつてゐりや藥力も廻り兼る、其命を僅な金で死うとは、ソリヤ御麁相、お近付ではなけれ共、娘御のアノ孝行貞節な今の樣子、御笑止に存じます、持合せた金子十兩コレお貸申、御出世の上御返しなされと、詞と共に懐中より、取出したる小判十兩、サア御返金なされよと、突付られて親子は只、夢見し心地嬉しさの、何にたとへん樣はなし、十内は地にひれ伏し、馴染好みもなきお方、御恩の金も此塲の難儀、御辭退なしに拜借と、ずつと立てコレ善六、借用の金十兩、返濟すれば言分有まい、借用證文イサ返せと、投付られて善六が、工面の違ふ膨れ面、不承〳〵に懐より一通を取出し、ソレ借證文返してやります、ハテ扨物には變のある物、見ず知ずの通り違ひに、金十兩貸てやるとは、世には又樣々な醉狂者もおるものと、金請取て懐手、のつか〳〵と出てゆく、跡に親子は詞さへ、涙に噎び手を支へ、只今も申せし通り、見ず知ずの我々親子、大難を救ひ給はりし、御恩は何と報ずべき、ヤイお初よ、倶々にお禮申せと親も子も、骨に徹へし悦び涙、只伏拜むばかりなり、アヽコレ其樣に、何のマアお禮に、及ばぬ事、先何か差置て、是を御緣お近付になりませう、我等事は船ヶ谷の米問屋、

氣を苛ち、里氣の儘の癇癪は、留め兼たる折からに、お來はとつかは戻りかけ、見るより吃驚德利はつたり取落し、二人を押分源藏を引立、コリヤ我をれ、俺を酒屋へ出し拔て、アノ女とこつてりちん〳〵、エヽマ憎體らしい男面と、叩いつ喚く間違悋氣、源藏をかしく、エヽ何吐す、コリヤやい、アノ女中はといふを打消、イヤ〳〵古手な云譯此方聞ぬ、マ厚皮な女面、どんなお顏じや見てやらうと、脊けし顏を差覗き、どうやらこな樣は見たやうな、我もお前は見たやうなと、いふにお來は心付、もし稚名はお宮とは云ぬかへ、アイ宮と申ましたが、稚名を知てござんすお前は、ヲヽコレ姉のお來じやはいの、エヽ姉樣か、妹か、ヤ懷しや〳〵、と取付縋り姉妹は、嬉し淚にくれ居たる、源藏は不審晴ず、コリヤ女房、太夫樣を妹といふ子細は何じやぞい、サア樣子知しやんせねば合點が行まい、此お宮が九ツの年、私が大病の物入、父樣が此子をば、手越の宿へ賣しやんして、今の名は道芝と、其名をば聞たれ共、逢事ならぬ曲輪の掟、懷しう思ふてゐたが、久しう見ぬ間に、ヲヽ能い太夫樣になりやつたのう、といふもおろ〳〵淚聲、道親身の挨拶に、道芝も打萎れ、思ひがけなき御目もじ、父樣にも御息才など、餘所ながら聞ました、お前も御無事で嬉しうござんす、源藏樣を私が妹聟とは、知ぬ事迚澤山さうに、堪忍して下さんせ、アイヤ〳〵互に知ねば其筈〳〵、道理で面ざしが似たと思ふた、若殿と云交したお傾城が、賤い女房の妹といふ事が、お耳へ入つては爲にならぬ、

も此頃は、曲輪へお越ない故に、お前頼んだ日文の返事、なぜ取ては下さんせぬ、逢たい見たい願參り、日頃念ずる長谷寺の、觀音樣へと志し、頼に思ふたお前迄、聞えぬ仕方胴慾と、恨み詞に、サヽ尤じや〳〵、是には段々咄しのある事、コリヤしげの、其人達を連立て、そこら一遍歩行て來い、アイ〳〵そんなら太夫樣、向ふの堤で遊んできやんしよ、サア〳〵ごんせと打連て、足早にこそ急ぎゆく、道芝は心急き、咄したい其譯を、早う聞して下さんせと、せり立られて、サヽ咄さねばならぬ譯といふは、此度京都義詮公の上意として、細川家の姫君と御祝言なさるゝ筈と、聞より吃驚り、エヽそんなら御姫樣と御祝言なさるゝかへ、アノ祝言を、エヽ腹の立〳〵〳〵、コリヤ何せうぞいな〳〵、アヽコレ〳〵何せうぞい〳〵、サヽヽマア氣を緊て聞たがよいはいの、併若殿樣はお前に義理を立御承引なき故に、兄君持氏卿の御立腹、やつさもつさの其最中、此譯の納る迄は、曲輪通ひも御遠慮と、聞に猶更戀の意地、エヽ縫樣も張の弱い、そこをぐつと押たがよいはいな、殿樣と私が中は、お前も知てでざんす通り、突出しの初より、互に變るな變らじと、云交したる二人が中、祝言さすこと私やいや〳〵、縫樣のお傍に居たい、連て居て下さんせと、粹な育ちも色の道、愚痴の涙ぞ誠なり、ヲヽ腹の立は道理じや〳〵、去ながら、お前を館へ連立ては、夫こそは亂騷ぎ、コレ今暫し辛抱なされ、イエ〳〵斯いふ内も氣遣な、早う行たいサア〳〵連て往て下さんせ、是非に〳〵と

茶店の者よな、かゝるいぶせき所に似合ぬ、ハテ艶かなる縹致、某も不思儀の緣、其方が手づから茶を持てやい、ソレ〳〵銀のお茶碗、コリヤ〳〵其茶碗では氣が替らぬ、やはり茶店の其茶碗、早う〳〵とありければ、夫早く持々、ハツト恐れて立上り、氣もわく〳〵と湧茶釜、嗜茶碗清水燒、茶臺に乘て恐々と、面映げにぞ差出す、茶碗取上持氏殿、御機嫌よく打笑給ひ、ホヽ天晴成る茶の香氣、ハテ偕遠目に見るよりも、猶美き此花香、アソレ乘物の歌書持、畏つて近習の武士、取出し差上れば、挾し折枝を取せ給ひ、往古西行法師が芳野にて、花の名所を求んと、幾重の山に分入しに、道を尋ぬる人もなく、案じ煩ふ道芝の、木草に付し白紙を慕ひ、花の名所を得たりし時、芳野山、去年の折枝の道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねん、夫より是を折枝と號け、今某が名も同じ、此花の姿に迷ふ道しるべの此枝折、ナコリヤ、サ合點が行たかと、古事を花に擬へし御戯れ、差出し給へば、お來は夫と推量し、ハツト驚き恐れ入、ハアヽ勿體ない恐れ多い、賤い私がお茶の給仕、御褒美のお詞、又賤い此花お手折なされんとの御意、冥加ないと申しなせうか、有難うは存じますれど、此花も主ある梢、折取ことは憚りながら、お赦されて下さりませと、恐れ入たる詞の端、ムヽ扨は其花には主あるとな、譬へ花守あるにもせよ、某が心の儘根引にし館へ移し詠るは安けれども、木折にせんは無下なるべし、サ篤と思案し返歌せよと、仰に何と夕日影、やゝ時移る其所へ、紙崎主膳徐々と、家來引具し

必ず此事沙汰は無用、アイ夫は互に隱して濟すが、濟ぬは祝言、縫之介樣が眞實お姫樣を嫌はしやんすが定ならば、私を館へ連て往て、お傍に置て下さんせ、さうない内は何程でも、疑ひは晴ませぬ、姉樣倶々能やうに、頼みまするとも涙含む、眞實見えて道理なり、ヲヽ其方の身の出世じや物、何の如才があろぞいの、コレ源藏殿、何卒思案はないかいなと、いふに暫く差俯むき、ハテ其樣に疑しくば、お館へ入る工夫、萬事は私が胸にある、若殿と賺し合せ、明日に迎に行程に、さう思ふて待たがよいと、聞て心もいそ〳〵と、アイ〳〵、そんなら曲輪へ戻つて待てゐるぞへ、しげの〳〵と呼聲に、アイと返事も長畷、男も倶に立戻れば、イヤ女房共、畑介樣が嘸待てござらう、俺や鳥渡往て來やうかい、ヤ道芝是でお別れ申ませう、そんなら必ず姉樣ではない女中樣、モウお暇申まする、ヲヽそんならモウお歸りか、隨分健康で煩はぬ樣にお勤ヱヽお去ば、さらばと盡せぬ名殘、互に見返り見送りて、手越の里へ返りけり、かゝる折柄、持氏卿忍びの御遊を輕々と、御乘物に召給ひ、道を拂ふて出來る、お來は果然近習の侍、ヤア女下れ〳〵、ハイ〳〵私は此茶店の者、殿樣の御通りも存じませず、不調法の段は眞平、御赦されて下さりませ、イヤサお通りのお目障り、片寄れ退れと引立る、ヤア〳〵者共暫く待、其女に用事ありと、仰にハット近習の武士、威儀を正して控へゐる、持氏殿は徐々と床几を假の御設け、悠々と御腰掛り、お來が容儀にめでさせ給ひ、コリヤ〳〵女、其方や此

是から直に親里へ往まする、あり付次第無事の便りを聞して下さんせ、ヲヽ能う合點した、委細は早速知せの狀、必ず待て居ますぞへ、隨分健康で、お達者でと、互に包む胸と胸、明ていはれぬ暇乞、涙に暮の鐘の聲、空に知れぬ五月雨や、泣別れてぞ三重「ゆくすゑの

第三

爰に鎌倉の守護職、官領足利持氏卿、三老と倶に、民の裁斷聞召れん其爲に、問注所に御入あれば、相詰る人々には、老臣仁木將監、和田の左衛門紙崎主膳、其外昵近御傍衆、威儀嚴重に見えにけり、將監人々に打向ひ、先達て京都よりの嚴命下り、細川家の御息女操姫樣を、我君の御舍弟縫の介樣に云號け、則ち御養子分になされ、疾より舘へ入せ給へ、斯樣祝言甚だ延引、よく〳〵聞け縫の介樣、當所手越の傾城にうツ惚れ、婚禮御承引なしと、一家中の取沙汰、何にもせよ取急ぎ御祝言調はずば上意を背くの恐れあるべしと、苦り切て申すにぞ、紙崎は差寄て、何れにも評議の上、先は御前を伺はんと、皆打連れて奥の間へ、徐々立て入にけり、廣間も寂り夕日影、奥より忙しき袴の音、大將の御舍弟縫之介、何かは知ず小性が胸先、引立て突飛し、今日目見した小性の噂、よく〳〵見れば其方、コリヤヤイ道芝、形を扮して入込だは、此舘に云交した男があるに極つた、サア其名をいへ〳〵、此縫之介より外枕は交す者はないと、

謹んで、今日京都より上意の趣出來、御迎の爲參上仕る、ホヲヽ紙崎太儀〳〵、ヤナニ女、必ず〳〵返歌を待と、御乘物に召給へば、近習若黨備を立て、徐々と歩む後備へ、紙崎は訝しく、女に屹度目を付て、心の要緊てゆく、扇が谷のお館へ、御供申急ぎゆく、お來は跡を詠めやり、思はずほつと溜息つき、テモ扨も悲哀な事、そして辛氣な物を貰ふた、と屈托半へ夫の源藏、戻りかゝつて一思案、ヲヽ能所へ戻らんした、コレマア聞て下さんせ、ヲヽ樣子は皆知てゐる、ヤ女房共、其方に談合する事がある、聞てくれるか、ヱア改つた事云しやんす、マア何でござんすへ、イヤ少し思ふ子細あれば暫の中親里へ往でたも、ヱヽ夫やマア如何して其譯は、サヽ樣子云ねば驚きは尤、知やる通り足輕位の切米では、いつかな出世の時は得ぬ、心當は、都へ立越え、奉公に有付ば、其時こそ立身出世、聞分て給も女房と、思ひ込だる夫の顏、譯を知ねは氣にかゝり、ムヽコリヤ如何でも深い心入、コレ女房の私に何遠慮、何故いふては下さんせぬ、ハテ其譯は後で知る、得心して早う去ね、イヤ〳〵譯を聞ねば、何程でも去る事は私やいや〳〵、樣子を聞して下さんせと、縋り歎けば、ヱヽ聞分のない、夫が出世の妨せば、夫婦の縁を切うか、サヽ夫は、得心したら早う去ね、ハア、はつとばかりに胸迫り、暫し涙にくれけるか、良あつて心付、ヲヽ夫よ、思ひ廻せば廻す程、私は爰にゐられぬ品、知て夫がそれぞ共、云れぬ譯ゆゑ親里へ、身を隱せとの事なるかと、いはず語らず心で納め、成程

の新枕、いつ祝言がある事やら、月日を指に折々は、泣て暮してをりまするを、恨涙に暮給ふ、そんなら貴方が云號のお姫樣、疾から來てござるかへ、そんな事であらうと思ふた、エヽ余りじや〳〵、能う私に隱さんした、エヽ腹の立〳〵、コリヤ〳〵新參の小姓、何を譫言、イエ〳〵新參の小姓じやいな、お前と深ういひかはした、道芝といふ傾城じや、此方やだんない〳〵、サア〳〵曲輪へござんせと、縫之介の手を取れば、イヤ〳〵そんな慮外はさせまいと、姫も取付諸蔓、彼方此方に引纏ふ、後に立聽く仁木將監、操姫樣御待あれと、聲に恟り三人は、手持無沙汰に見えにけり、コレ〳〵縫之介樣、此將監は何事もお隱しなさるに及びませぬ、此お小姓は私預り、品宜敷計らひます、お姫樣と諸共に、奥の御殿にお出なされ、アイヤ斯なつてはモウ隱さぬ、此姫を嫌ひはせねど、サア〳〵合點してをります、夫でも祝言はならぬ〳〵、是は扨何とお聞なさるヽぞ、おいやならいやに致しますてや、そんなら道芝は、其方に乾度預けたぞ、御安堵なされ先々奥へ、早う〳〵と進められ、心は先へ道芝が、後にといふを目で知らせ、是非なく奥へ縫之介、姫諸共に入給ふ、廊下の方より足音して、持氏卿御出ぞうと呼はれば、小姓を側に將監は、禮儀正しく控ゆれば、立出給ふ持氏卿、寛仁柔和の御骨柄、續いて出る和田紙崎、御側小姓が御酒盃、中央の間に座し給へば、仁木將監取敢ず、先刻仰付られし、新參の此小姓、篤と窺ひ候處、姿を扮せし女にて候と、申上れば一座の恟り、和田左衞門つヽ

能う偽をいふたな、放埒者徒者、人外め、手討にする覺悟せいと、腹立聲に道芝は、恨めしげに顔振上、エヽ殿樣胴慾な、過し頃より御館に、遁れがたき事ありと、只た一度の文使ひ、夫から頓と便なく、逢ぬ日數も七夜十夜、待明しても晝さへ暗き胸の中、逢れぬ事に定まらば、いつそ死たいお手討に、合せめての思ひ出と、身を摺寄て恨言、眞實見えていぢらしき、ヌリヤ俺に逢ばかりで、小姓姿に扮したか、アイ何時も御供の源藏殿に打明て頼んだら、此樣に男に仕立、目見とやら噓いふて、私や爰へ來たわいな、お前に逢たいばツかりで、女のあられぬ此姿、思ひやつて下さんせと、抱付たる涙には、いかな大名高家でも、ほろりとさせる睦じさ、哀は後に知られけり、最前より物影に、將監が窺ふとは、夢にも現縫之介、もうよい〳〵夫で疑が頓と晴た、是から居間へ連て往て、此間から懈怠した、用がたんと支へてあると、手を引連て立上る、奥の方より操姫、立出給へば二人は吃驚り、俄に行儀押繕ひ、ホヲヽ是は〳〵操姫殿、何用あつて爰へ御出、ハイいや申殿樣、あれに居るは見付ぬ小姓、御召仕でござりますか、ヲヽ夫々、アレハ今日目見した新參者じや、コリヤそこに居る新參の小姓よナ、こりや小姓よ、小姓じやわいの、ムヽ貴君のお傍使ひなら、何の遠慮に及ぬこと、イヤ縫之介樣、今更申に及ねど、義詮樣の仰には、御前と私は云號、疾から此館へ來て、朝夕お傍に暮せども、遂に優いお詞は、露ほども受ぬ情なさ、愚痴な愚鈍な身を悔み、よるべ初瀬の神祈り、肝腎儀式

連て往てくれいとある、此御殿の殿樣とあれば御前樣、何憚る事はなけれど、端手な傾城の姿で、御殿へ通たと噂があつては、何やら惡さうな事じやと存じ、お小姓の姿に扮し、御目見にして這入せました、下郎の私、味やつたと存じましたが、不調法になりましたら、憚りながら幾重にも、御免を願ひ奉つると、恐入てぞ見えにけり、持氏卿打笑給ひ、傾城が戀慕ふを、此持氏と心得、世上の聞えを思ふは神妙、見所のある下郎、小姓共源藏に酒をくれよ、夫々との給へば、銚子盃三寶を、椽側に差置て、有難き御意の盃頂戴致せ、ハヽア、イヤモ有難いと申さうか、冥加に餘る御意の程、給まするは猶慮外と、三寶の御盃、押戴き〳〵懐へ納むれば、持氏御機嫌麗はしく、ヤア〳〵將監、先刻申付たる事、いよ〳〵評議糺すべし、又源藏には、用事あれば、暫く夫に控ゆべしと、御諚の下に次の間より、遠侍罷り出、北の方より御使として、局役岩藤、中老尾上お次迄參上、通し申し候はんやと伺へば持氏卿、ホヲヽ兩人共是へ通せ、イザ疾々と仰に連れ、軈てかくとぞ云次る、花の香の、隙洩る風に送られて、徐々出る長廊下、遙下りて手を支へ、北の方樣の御口上、今日は問注所へ御入遊ばし、御政道の御評議是ある由、嘸かしお氣詰、右御伺ひとして局岩藤中老尾上、參上と披露につれ、持氏卿も御悦喜まし〳〵、ヲヽ兩人共太儀〳〵、二人の使者の饗に、此傾城は奥へ連ゆき、花月の間で一獻酌う、アイ縫樣のござる所へ、連て往て下さんせと、憚る色も中々に、小姓姿をほら〳〵

と寄、女を男の姿に扮し、御館へ入ること怪みの第一、乾吟味遂べき事、アイヤ〳〵將監そこらは脱りませぬ、今朝入込みし此小姓、合點行じと思ふより、態と奥へ通せしが、御舍弟縫之介樣を戀慕ふ此女。去に依て云號を嫌ひなさる、若樣の其病の根は此小姓、イヤ將監殿お待なされ、娵をお嫌ひなさるゝ事聞も及ばぬ、アイヤ鑑相は申さぬ、元來物を諂ひ飾るは此將監嫌ひ物、ありの儘に申が實義、扨々お笑止千万と、芥掻出す舌先に、根ざしありとぞ見えにけり、持氏卿氣色を正し、弟縫之介事は追て沙汰に及ぶべし、最前遠目に見たる小姓、ソレ目通へと仰の中、アイとおめたる氣色なく、御前へ居直れば、コリヤ女面を上げよ、とためつすがめつ持氏卿、其方は梅澤の茶屋で逢たる女ではないか、麗しいまだ見ぬ花を尋んと、古歌を書たる文の枝折覺えつらん、ヲゝ殿樣の何を云しやんすやら、そんな覺はないはいな、ムゝ小姓に成て入込しは、其方が物好か、テモいろ〳〵な事問お方じや、縫樣に逢たさに、足輕の源藏殿さ連立て來たわいな、何足輕の源藏が連來りし女とや、將監に吟味させん、其源藏を呼出せ、早く〳〵との給へば、ハット近習は立上り、間毎に傳る聲々に、まだ目にも見ぬ奥御殿、初て上る椽側傳ひ、恐れ入て平伏す、將監聲かけ、ヤア〳〵源藏、今呼出したは別儀でない、是に居る小姓、見覺て居やうがな、イヤサ女を小姓の姿に扮し、お館へ入たるは、其方が所爲であらうがな、ハアゝ成程、今朝あの女中が、途中で私を呼かけ、此お館の殿樣に逢に行のじや、

ら、兎角に御身健に、御養生は酒の一德、御無病なを肝心と、酒の文字を差上ますと、當座の頓智に小姪達、源藏が書たるも、君の興に差上れば、四つの盃とり〴〵に、御殿をさして入にける、後は三人聲潜め、御舍弟のお身の上、治りいかにと評議の、表の方より溜りの侍、罷り出で兩手を支き、仁木樣へ申上ます、相摸八郡の郡代共、御願ひの筋あつて、直に御對面申度由、大勢伺候仕る、如何はからひ申さんや、ナニ此時節に直談せんとや、暫く次に控へさせよ、ハツト答へて取次が、表へ急げば御殿より、御側衆立出で、只今のお盃、御上覽に入し所、酒の文字を書たるは、御身の養生、源藏が發明以の外御意に入り、向後侍に御取立、椽側の間を勤むべしと、上下大小を下さるゝと、臺の物差置ば、三老共に物をも云はず、源藏は悔り顏、下郎の私勿體ない、御赦されて下さりませ、イヤ辭するに及ばぬ御諚意じや、御意じや〳〵と小姪達、御手に着せる上下も、どてらの上へしやつきりぐわつたり、恐な紐の緊括り、差こなしたる業物の、しやんと居直る袴振り、此通りを言上と、使は奥へ急ぎ行、紙崎は目も掛ず、只今申せし御舍弟纔殿、御身持放埒は、傾城が根ざしなれば、此根ざしを打切て、仕舞より外はない、ヲヽ此左衛門も其通り、仁木殿如何致さう、サレバ〳〵、傾城をさつぱりと、打切て仕舞も近道、此儀は御留所いか樣共、勝手次第と意地ある詞、源藏はつゝと寄、お見出しに預つた私、甲に着て申ではござりませぬが、傾城をお切なさるは、大根を切より安けれど、最前

と、我君に引添ば、諸士は頭を下げみすや、張臺深く入給ふ、後は寂と物音も、何かは思案の三ツ鐵輪、椽側には源藏が、退屈顔にきよろ〳〵と、欠びを隠す折からに、奥より使のお側小姓、敬々しく白臺に、三ツ盃を取載て、評諚の間へ差出し、我君只今酒宴の中、各へ仰出さるゝは、武門の大將常に忘れず、樂むべき物は何なるぞ、銘々此盃に書留て、くらいと謎をかけたる御上意に、皆々ハツト領賞し、盃手ん手に硯箱、筆手上るも慢勝に、初筆は將監慾深く、金銀の文字書付る、紙崎主膳が賢人と、書た心は賢さを、登げて用ふる君子の道、次には和田が國の字を、書しも常に大將の、下を憐む仁者の道、各臺に直しける、源藏は伸上り、中々となた樣も憚りながら、私も些ばかり思はくがござります、幸ひ最前お上から、下された此盃に、書て上げたら存じますと、はつかりいへば仁木が引上、ホヽコリヤ出來した、御機嫌に入た其方、却て興を催す事、存じ寄の文字を書き、早く上い、赦す〳〵、ハヽ有難しと源藏は、飛立氣色懐の、矢立取出し疾々と、書認めて盃を、評諚の間へ差出せば、左衞門は手に取り上げ、ムヽ是は酒といふ文字、武門の大將常に樂むべき物に、酒といふ字は甚だ不遠慮、御憤りの恐あれば、差控へよと止むれば、アヽイヤ申々、憚ながら私が心は左樣ではござりませぬ、關八州の公事裁判、御一人の御思慮より、御政道を行ひ給へば、お氣の結れは知た事、御欝散遊ばすこと、お薬の廻りより、直に験のある御酒の徳、世の譬にも酒の事を、愁を掃ふ玉箒とや

き左衛門も、無念隱して將監と、倶に大杉同座の禮儀、評議の間へ控ゆれば、此方も詞改り、水際立し受答へ、取々挨拶ある所へ、當番の侍ひ罷出、先刻申し達たる相模一國の郡代、將監樣へ直談の御願、今朝より相待をります、ホヽ郡代が願裁判をして取せん、只今是へ通すべしと、將監が計ひに、相模の郡代打連立、庇の間に畏り、郡代頭罷出、此度光明寺普請成就に付き、我々が領分は仁木殿の御支配故、大檀那として、高割の金子出すべき旨、先達て仰付らるゝ所、領内へ觸度申付しが、先年建長寺造營の節、經料出金致したれば、此度は御赦免と、領分の百姓共我々が屋敷へ詰かけ、歎の願一黨す、權を以て押時は忽に事亂れ、いかゞ計ひ申さんや、仁木公の御意次第、我々も覺悟ありと、思ひ込だる願の筋、將監苛つて居丈高、ヤア虚氣たる郡代共、百姓に賺されて、臆病風の腰拔武士、此將監が一旦申出せし事、違變あらば其方共、一々に首を刎ね、梟木に曝さんと、睨み廻して罵れば、郡代共詞なく、事しらけてぞ見えにけり、大杉は立上り、郡代に打向ひ、仁木殿の詞も立ち、其方達が百姓を憐む心も立やうに、此大杉が差圖致さう、ハヽ有難き仕合、双方治る御仕法は、ハテ何の別の子細はない、先百姓へ經料の金子、赦し遣したがよからう、ハテ百姓へ赦し遣し、仁木公への申譯は、ハテそこに又手段がある、八郡の郡代知行、當年分一ツに束ね、我君へ差上られい、何、銘々が當年の知行をな、イヤサ斯くは未熟の至り、百姓を憐む所存ならば、身を捨て武士道の、器

から見受まするに、アノ道芝は持氏卿の御機嫌にも入てあり、第一は傾城が、お手討になるやいなや、世上へぱつと沙汰廣がり、縫之介樣の御放埒が、我君の不德と成て、京都へ聞えし時、取返しは成なすまい、此道芝が納め方、私にお任せと、いふに將監横手を打ち、驚き入たる源藏の計ひ、尤至極致したと、此評諚も源藏が、主君へ盡す忠義なり、重ねて奥より御傍衆、將監樣へ御諚意あり、只今源藏が評議上聞に達せし所、忠節の趣なれば我君甚だ御感あつて、只今より苗字を赦し、大杉源藏と名乘り、評諚の間を勤め、知行坐席も各と同格、則ち衣服長袴下し置るゝ者なり、と高らかに相述れば、和田紙崎は口を閉、取持顏の將監も呆れ入たる氣色なり、大杉はつと白臺を、押戴けば小姓達イサ召されよと立かゝり、又着せかへる褒れの公服、同じく奥よりお側の使、左衛門殿御諚意あり、紙崎主膳こと先達て光明寺の普請、只華美を表にして、役目の實義を失ふ越度、續いて今日傾城を刑罰して、我に耻辱を與んとしたる短慮の至り、只今より評諚の間を下り、椽側を勤よとの仰なりと、聞て恟り紙崎主膳、差俯むいて詞なし、やゝあつて面を上げ、委細畏まり奉る、又改めて拙者が願、御取次頼み入、大杉殿は才智を以て高祿を給はれど、氏系圖正しからず、仁木和田此主膳が家柄は、三老の格式にて、奥御殿を相勤る、大杉殿には此評諚の間を限り、奥御殿の出仕を御無用になし下されと、我君への御願と、詞を殘し徐々と、椽側の間へ引退り、どつかと座せば件の使、言上せんと立て行、墨付惡

立上る、將監は罵聲、ヤア〳〵原田軍平早く參れ、ソレ紙崎主膳を追拂へ、イザ大杉殿、改て我君へ御目見と、左衛門諸共打連て、前代未聞の出世の袂、翻してぞ入にける、始終の樣子最前より、尾上は一間立出て、わたり見廻し紙崎が、傍へ立寄聲を潜め、樣子は殘らず承りました、忠臣無二の貴方樣、御勘氣の此上は、心元なき御家の有樣、行末迚も覺束なく、案じ彌增す世の中やと、末賴みある詞の端、ヲヽ優しくも申されたり、元町人の其元なれ共、今中老とお取立、其忠臣の魂見込、賴み置度一大事、伯父大膳を初め、方人の仁木將監、花の方御親子を追失なはん謀、何卒貴所の忠臣にて、二方の御身の上、偏に賴み存ると、忠義に凝たる武士の、低頭平身なしにける、折から出る奥使ひ、尾上が前に手を支へ、只今御出なされませとの仰られでござります、ヲヽ岩藤樣よりの使とな、イヤ申主膳樣、最前奥にてお局の懷中より落し密書、拾ひ置しも詮議の手がゝり、成程〳〵、心よからぬ大膳岩藤、あの兩人が立振舞、某に成替り隨分心付られよ、と云ぬ色なる武士の、別れてこそは立て行く、奥の方より大杉源藏、道芝を小手縛り、抱への帶を猿轡、引立出る足音に、縫之介も走出、ヤア新參の大杉源藏、其傾城を何とする、イヤお騷ぎなさるな、道芝に繩を掛たは私ならぬ君の仰せ、細川家のお姫樣と御婚禮なさるゝならば、此傾城は拙者が計ひ、市中に隱し置き、誰憚らぬお妾樣、サア御得心か、御承知なくば道芝は、今此座にてたつた一討、アヽコレ〳〵滅相な、夫切て擶る

量を出すは爰の事。何と得心が參つたか、將監殿の仰も破らず、百姓の心も養ひ、双方治る武士の器量天晴〳〵、身不肖ながら此大杉が、申受ける知行を以て、八郡の郡代へ、褒美として分ち與へん、安堵召れと押付て、人の器量に仕立上げ、事を治る大杉が、器量の程ぞ類なし。八郡郡代共平伏し、ハヽ有難き大杉樣、御褒美所ではござりませぬ、武士の誠を道引なされ、八郡の鑑と致さん、ヤ仁木將監樣。當年分の郡代知行、經料に差上ます、ホヽ夫では此一木も大慶、ハヽ私共が暇れを取る、師匠は則ち大杉樣、暇申て百姓共、悦さんと郡代は、勇み立てぞ歸りける。又も奧よりお傍の使、評諚の間に立出て、只今の決斷上聞に達し、大杉殿に御上意あり、我祿を捨て國を治る大慮の程、感ずるに餘りあり、今日より老分の役目として、中央の間へ出勤すべし。則ち烏帽子大紋を、此印に下さるゝと、臺の物差出し、又主膳殿に御上意。其身の不才を顧ず、源藏を奧御殿へ入まじとの願の條、不屆至極の次第なれば、大小を取上げ、門前より追拂へとの仰なりと。聞て遉の紙崎も、驚く顏色大杉には、又着かへる勳の、幅も大紋立烏帽子、中央の間へのつし〳〵、峯に朝日の登るが如く、主膳は遙椽側の、麓に曇る村雨と、降ゆく身こそ是非もなき。大杉は大紋の、袖かき合せ聲凉しく、ヤア〳〵紙崎主膳殿、我匹夫よりかゝる立身、貴殿には君の御勘氣受け、目前天地と別れ共、榮え衰ふは世上の常。數ならぬ共此大杉、御前惡くは計ふまじ、暫の艱苦凌れよ、といへど主膳は答なく、表の方へと

く持氏卿、立出給へば仁木將監、胸にたゝへし惡事の鴆毒、さも恭しく濃茶の手前、謹んで奉れば、持氏御手に觸給ひ、ヲヽしほらしや汝が手前と、既に呑んとし給ふ折しも、次の間より聲高く、ヤアく我君、其お茶暫く御控へあれと。呼はる聲に仁木は悄り、コレサく大杉、何故お茶をお留めさるゝ、サレバサ、あのお茶は毒でござる、ヱヽコレ大杉ソリヤ何を云めす、たつた今此將監が、ナコレサ差上た茶、毒があつて堪るものか、テモ毒に極つてある、但し又毒でなくば先づ其元毒味なされ、イヤ其儀は、ホヽヲ呑れまいく、毒の印しで見せんと、茶碗追取り庭前の、松の繁みに打かくれば、數多の小鳥一時に、落て果敢なくなりにけり、御覽なされしか持氏卿、此毒藥は南蠻より傳はる秘法、兼て認め置たる仁木將監、君を弑する謀叛の次第、眞直に白狀と、きめ付られて監將が、算用ぐわりと、イヤコレ大杉毒の事は貴殿にも、ヲヽ一味と見せたは詮議の種、ふかくと大事を明す大痴漢、主君の御罰應へたかときめ付られて將監は、もう是迄と討てかゝる、得たりと源藏突立ば、ソレ遁すなと將監が、下知に群る雜人原、右徃左徃に離立れば、立足もなくむらくと、遁るをやらじと追て行、透を覗ひ曲者が、縫之介と姫君を、小脇に掻込驅行んとする後より、慕ひ來りし道芝が、コレ縫樣と驅寄を、大勢踏倒し一散に、表をさして驅て行、群る中を切拔て、驅來る奴の雪平、跡に續いて藤內が、大勢引具し追取卷き、ヤア主なしの紙崎が、二合半の浪人奴、腕を廻せと犇いたり、ヲヽ能い所

物か、スリヤ御祝言遊ばすか、サア夫は、御承知なければ暇乞、サア〳〵に口籠り、應共否とも云れぬ手詰、道芝は恨めしげに、見上る目には腹立涙、只伏沈む計りなり、大杉刀拔放し、今が最期と振上る、刀の下に縫之介、マア〳〵待て〳〵、待ならば速かにお受の返答、承はらん如何〳〵と、手詰の折柄、當番の侍蒼皇しく、今日晝の見廻りに、何者共相知ず、寶藏を切破り、縫目の御綸旨失候、早速注進仕ると、息を切て言上す、ハツト驚く縫之介、我預りの御綸旨は、何者が奪取しぞ、時も時折も折、かゝる惡事も重る物か、こは何とせん口惜やと、無念の涙はら〳〵と、きこつを絞るばかりなり、大杉は聲高く、ヤア犬淵早參れ、其方は御舍弟を御供申、君の御前へ來るべしと、云付やれば犬淵は、縫之介を伴ふて、奥の間へこそ入にけり、何思ひけん源藏、道芝が縄解ほどき、椽より下へ突落し、心あつて赦し遣す、ソレ勝手次第に屋敷を立退け、早疾々と詞の下、嬉さ恐さ一散に、表を指して走り行、一間を出る仁木將監、大杉が傍へ寄り、初より一物ある御邊と睨んだ眼に違はず、本心聞て滿足致した、然ば事を急になすべし、其手段とて外にもなし、濃茶を君に獻ずる時、毒藥を知れ人知ず討取ん我計略、悦ばれよ大杉と、速り切たる詞を打消し、サレバ其毒藥麁略の義は有まじけれど、互の大望分目の大事、仕損じては事の破れと、念を押れてナニサ〳〵、家に傳へし秘法の毒藥、其疑は無用〳〵、萬事は斯々と耳に口、牒し合せてゐる所へ、早御歸館と呼はる聲、何心な

上れば持氏卿、川原をさして打給へば、俄にけし留む駒の足、鐙一當あてさせ給へど、跡へ〳〵とたじ〳〵、御落馬危く見えければ、左衛門は驅寄て、四方を乾度アラ不思議や、水火の中も事ともせざりし御召の名馬、恐るゝ物目にかゝらず、何を指て怪し飛やらん、夫馬は乘る人の變を知す、其妙獸察する所、此邊に君に敵對ふ、其伏勢隱れゐるに極つたり、立別れて叢を詮議せよと、下知する折から、百騎ばかりの隱し勢、鬨をどつとぞ上にけり、スハ一大事と左衛門が、眞先に進み出、何者なれば路次の狼藉、名乘〳〵と聲掛れば、一揆の内に其有樣、大將分と見えたる一人、眞先に大音揚げ、お大名のお通りと存たる此我々、命惜くば大將の首を渡せと、罵つたり、左衛門は嘲笑ひ、イデ物見せんと太刀拔き翳し、爰は我等に御任せ、我君には此川を打越給へ、御跡を取切て、敵の大勢一人も、此川は越せじと、群る中へ驅入て、上段下段虚々實々、入亂れてぞ戰ひける、君も御馬を早め給へば、お供の同勢ゑい〳〵聲、半渡ると見えけるが、樣子見濟し以前の曲者、水底を潜りゆき、持氏卿の御馬の足、ずばと切たる覺のわざ物、アレ助け參らせと、焦慮ばかりに眞の闇、そこ白浪と流れゆく、手ん手に松明照し合、川下より御死骸をかき抱き、見奉つれば、コハいかに御首は討れたり、ハツト驚く其所へ、息を切て驅來る左衛門、呆れ果たるばかりなり、思案を極め聲を潜め、御首討て立退しは、一揆の業に相違はなけれど、横死とあれば御家の滅亡、只何事も隱密〳〵、御病氣なりと

へ犬淵藤内、叱人なしの氣儘の仕事、イサ來いやつと仁王立、ヤアくわんたい成る毛奴め、物ないはせそ討取と、藤内が下知に連れ、打てかゝる雜兵共、シャ小癪なと拔翳し、多勢を屈せぬ手練の働き、目覺しかりける三重次第なり、一間の内より持氏卿、和田の左衞門御供にて、立出給ふ折からに、取て返す大杉源藏、御前に向ひ手を支へ、本海道は將監が伏勢あるべし、相摸川より近道を、上屋敷へ御歸舘あれ、跡は某計はん、左衞門殿御供と、呼はる聲と諸共に、燈し立たる數の松明、手綱搔繰り召の駒、和田の左衞門が引添ふて、相摸川へと急ぎゆく、折もこそあれ一散に、驅來る畑介が、夫と見るより拔刀、切込む切先確と留め、ヤア心得ぬ此振舞、樣子語れと氣を苛てば、ヤア成上りの鮟鱇侍、うぬが舌より兄主膳、家は沒收君には勘當、汝が首を手土産に、兄への功の時到來、觀念せよと又切込、飛退つて早まるな、麁忽すな、汝が兄主膳殿を追失ひ、まだ其上に持氏公を毒害なさんとせしは仁木將監なるぞ、謀計顯れ只今、相摸川へ落行しぞ、早く追掛打取つて、兄への功を立られよと、聞より畑介立上り、スリヤ兄を失ひ、其上に家國を押領せんと工みしは仁木將監とや、合點じや任せと畑介は、川原をさして急ぎ行く、降頻る夜半の嵐に水音も、物凄まじき相摸川、ハイ／＼ハイと先を拂はせ、燈し連たる松明に、前後を守護し押來るは、足利持氏卿、川端近く着給へば、跡に引添ふ和田左衞門、御馬前に謹んで、水は高く見え候、上の二瀨は水勢薄く、此瀨より御渡しと、中

尋ねなされます、アヽ子細有て密に尋る、身は仁木將監が家來、犬淵藤内といふ者、大杉源藏が家來原田軍平といふ奴、此奴も倶々尋る由、先を取れては身が一分が立ぬ、見付次第早速に注進せば、褒美は望みに任せん、必ずぬかるな、家來參れと目を配り、別れてこそは立歸る、跡に眼兵衛濟ぬ顏、ムヽそんなら手越へやつた道芝は、欠落をしをつたか、といふを德兵衛が聞咎め、コレ貴樣は其傾城と近付かと、問れてはつと、イヤ〳〵近付でも何でもなけれども、今甚う流行太夫と聞た故、名は疾から知てゐる、ヤ何の役にも立ぬ話しして隙入ては互の損、サアおじや〳〵と話しをば、花で散して花崎の、問屋をさして急ぎ行く、世渡りも、儔が心の儘ならぬ、面も異名も一對の、上見ぬ鷲の善六が、何か工面の巧み面、肩で風切る向ふより、歩み來る、原田軍平邊り見廻し、コリャ〳〵善六、約束の時刻を違へて、ようも待せたなと、いへば善六、アヽ軍平樣、其お叱りは我等が覺悟、俄事が出來ました故に、思はぬ隙入り、扨お頼みの一通り、仰聞られ下されませ、ヲヽ其丈夫を見込し上は話して聞さん、大膳公よりお頼みの筋といふは、今御病氣と披露してゐる大殿の持氏殿は、疾に死て仕舞たはやい、エイ病氣分にして置ねば、家督願ひの妨、時に二人の息子達の中、惣領の花若殿は、花の方に出來た子で、正銘正眞の殿のお子じや、月若殿は雪の方の腹に出生、是が伯父御大膳樣と、雪の方と密通なされて、設けられし御子故、惣領子を追退て、月若殿に此家をやりたいといふが伯父御の

世に披露し、家中の内より外様へは、此大變を深く隱し、御跡目相續迄、事隱便に計るべし、ソレ御乘物イザ早う、と指圖に泣々御死骸、皆々寄てかき乘れば、左衛門も跡に立、行列迚もそこ〳〵に、思ひも辿る玉鉾の、舘をさして急ぎゆく、此方の岸へ曲者が、ぬつと出たる其有樣、血刀引提げ切首を、川へ打込みうそ〳〵と、邊見廻し見廻して、徐々として落ゆく樣、不敵なりける三重

第四

花の名所は、エヽソレ都に芳野、エズトセノセイ、井出の山吹、エヽソレ、杜鵑に花萩よ、エズトセノセイ、何と德兵衛花咲の花問屋迄は余程遠い、休んで一吹呑うかい、ヲヽいかにも、そんなら休もと荷を卸し、堤に腰掛け摺火燧、ナント眼兵衛殿、今日の花はよかろがや、ヲヽサ能代物じや、アヽしたが日和が堅いので、花畑の水の世話、年が寄てはしんどい〳〵、サア何處も夫で迷惑なと、煙管筒を銜へて商話し、斯る所へ仁木が家來犬淵藤內、手の者引連出來り、ヤイ〳〵兩人、足利殿の御舍弟縫之介殿、細川家の御息女操姫、又傾城道芝、若此道へ來なんだかと、聞より眼兵衛耳峙て、イヱ〳〵そんなお方は見えませぬが、其道芝と仰りますは、年越の里の傾城でござりますか、ヲヽサいかにも〳〵、ハテナアして又、其三人は何でお

主膳様、ヲヽ最前より木影にて、様子は殘らず見屆けた、ホヽでかした〳〵、ハ様子御存じの上なれば、早お暇と又驅け出す、コリャ待雪平、そちや驅出して何國へゆく、道芝を追手の奴原、切散さん其爲に、ホヽ尤ながら先控へよ、大杉が手を假ても尋ね出し、持氏卿へ道芝を差上ずば御立腹、兎角妨げになるは傾城道芝、不便ながらも手に掛ずばなるまい、ハテどうかなと主從は、思案取々なる所へ、イヤ其お役目は私に、仰付られ下さりませと、木影を出る眼兵衞親仁、様子ありげに見えにけり、ヤア終に見なれぬ其方、何を知て小癪千万、アヽイヤ其様にお叱りなされまするな、私は其傾城道芝が親でござります、道芝事は幼い時奉公に遣しましたが、今では全盛の大夫になりをつて、勿體ない若殿が可愛がつて下さりますとの噂、よう聞てをりまする、今お咄しを聞ば、若殿と娘と縁が深い故、姫君様と御祝言もなされず、又御大將へ差上いではやつぱり縫之介様の御身の難儀、ハテ娘さへ得心して、持氏様へ參りさへすれば、何所も彼所もよいじやござりませぬか、じやに依て娘に得心させます程に、此役目を私に、云付さしやつて下さりませと、理非を分たるさつぱり親仁、思案も深き眼兵衞なり、紙崎主膳打頷き、スリヤ其方は道芝が親じやな、ホヲヽ神妙なる一言、併し女の一途の了簡、いか様に申ても聞入なき其時は、ハテそりやモウ是非がござりませぬ、何で助からぬ彼奴が命、人手に掛けるより、私が手に掛けて殺しまする、ムヽ緊と其詞に相違はないな、ハテ親が子を殺しまする

願ひ、實家老の和田左衞門、新參の大杉源藏、此二人が六ケ敷さに、色々工夫なさるれど、花若殿は御實母の花の方の、御殿にござれば、仕樣しがくの手段にあぐみ、所を我等枕を割、案じ出した其趣向は、花の方の上屋敷へ、往來しやる其折柄、溢れ者をかたらふて、無二無三に切散し、花若の母御を仕舞へば、跡は直に掻廻さわる、供廻りも女計らひ、よろ〳〵侍五人か十人、お身の手には行そな物、斯大事を語つて聞す上は、是非仕果せてくれねばならぬ、ナント智惠ではわるまいかと、取締なくはつとした謀とは見えにけり、善六は跡先も、欲の一字にふはと乘り、お氣遣なされますな、子分子方を此指で、數へて見れば三四十人、命知ずの下駄組あれば、屹度勤めてお目に掛うと、承た此方も滅法彌八、安受合の欲の鵰、胸を据て云放せば、ヲヽ心地能いお身の一言、夫聞て安堵致いた、委細は追て沙汰に及ばん、夫迄はナニ善六、軍平樣、互に秘すべし〳〵と、邊見廻し善六は、別れてこそは急ぎゆく、後見送つて原田軍平、ヤア〳〵者共、道芝が行衞尋ね搜さん、イザ來いやつと云捨て、駈行んとする所へ、思ひがけなき、雪平は走りかゝつて軍平が、首筋摑んで二三間、投付られて砂まぶれ、ヤアうぬは奴の雪平め、又しやくり出て邪魔ひろぐか、ソレ遁すなと主從が、切てかゝるを事共もせず、薙立〳〵切立る、鋭き切先狼狽眼、コリヤ叶はぬと軍平始め、ばら〳〵〳〵と逃行を、ヤア卑怯者遁さじと、追掛ゆく後より、雪平待てといふ聲に、はつと恟り振廻り、ヤアお旦那、紙崎

サア私もたんと話し度事があれど、何も叶はぬ大事の用、其内緩りと聞ませうと、行んとするを又引留め、サヽマヽ待やといふたらマア待やいの、コレ其方が大事の用といふは、若殿を尋るのか、エヽ、ヤコレ隠しやんな、知てゐる〱、まだ其上に、わりやアノ廓を欠落したであらうがな、ムヽ合點の行ぬ、成程私は欠落しましたが、様子を知ての其譯を、サ話して聞して下さんせと、いふ顔眺め涙含み、何でいはねばならぬ事、がマア是は斯して置て、其方には此親が、改めて無心がある、聞てたもるか、ムヽ久し振で逢た父様、無心とは何でござんすへ、ヲヽ外の事でもない、其無心といふは、縫之介様の事を思ひ切て、持氏様の御殿へ、お伽に上て貰ひたい、エヽ變つた事をいはしやんす、何でも是には、ヲヽ様子がある〱、イヤモウ様子がなうてなろかいやい、コレ若殿縫之介様は、そちと深う云交してござる故、姫君と御祝言なく、夫故細川家へ申譯立ず、二ツには持氏様、お心を懸なされたとある、差上ねば是も又、縫之介様の御身の難儀、其方が心を取直し、若殿様を思ひ切て、持氏様のお心に隨へば、われが身の爲、おれも出世、殿様も又御祝言なさるれば、お家も治まる何所もよい、サ愛の道理と聞譯て、得心してくれ、コリヤ娘、モこんな無理な事を頼む親、嘸酷い親と思はうが、何ぞ譯がなうては頼まぬ、第一はわれが身の爲、何卒聞入て下されと、頼む涙聞く涙、倶に涙の淵ならん、思ひ掛ないお頼、定て是には様子がござんせうが、父様是ばかりは、堪忍して下さんせ、

に誰何と申ませう、ホヽウ出來した〳〵、ソレ此の一腰は當座の褒美、エヽ此一腰を、サ百姓の魂を、武士の性根に入かへて、緊りとナ、得心さすが國の爲、又娘が爲、合點が往たか、ハアいかにも、なるならざるは刀の鯉口、切か切ぬは生死の境、合點でござります、其方が宅は雪の下、名は眼兵衞と申ます、緊と詞を番ふたぞと、心殘して紙崎は、雪平引連立歸る、後打眺め眼兵衞は、暫し思案に暮れけるが、アヽ儘ならぬ浮世の中、切ないは身の難儀、人手に掛さすまい爲に、俺が殺すと一寸遁れ、併し欠落したといへば、何所をせうど、余人の目にかゝらぬ中に、アヽ早ふ逢たいと、案じる親の心が通じ、血筋の緣か道筋を、尋ね曲輪の道芝は、職に放れてうろ〳〵と、走り躓き小石道、ばつたり當るも緣の綱、ヲヽ是は〳〵、餘り道を急ぎまして思はぬ麁相、お赦しなされて下さりませ、エヽ滅相な人ではあるはいの、思案して居るどうぶくら、何やらよささうな思案も、恟で引込だ、麁相なわろでは有るはいの、ヤ娘じやないか、さういはしやんすはヲヽ父樣か、娘か、はつと刀を後へ廻し、互に驚く計りなり、ヲヽ娘其方に逢たうて〳〵ならなんだに、よい所へよう來てくれたなア、サア私もお前に逢たうて、アイヤ此中不思議に姉さんにも逢ました、母樣もお健なさうな、マアお前も御無事で嬉うござんす、久し振で逢ましたれど、甚う氣の急く事がある、緩とお目に掛りませうと、行を引留、コリヤ〳〵〳〵〳〵、マヽヽ待や〳〵、其方には篤りと、話さねばならぬ大事の〳〵用がある、

や、婆や姉に逢たが能い、アイ〳〵そりや猶嬉うござんする、そんならさうして下さんせと、いそ〳〵悦ぶ道芝が、先へ進むは無常の風、早誘ひ來る暮六ツの、ハアモウ鐘が鳴、幸ひ人の通りもない、向ふの土橋で一思ひ、ヱヽ父樣、何いはしやんすぞいナア、アイヤあの向ふの土橋はの、人の渡る度毎、浮雲といふこと、ヱ何の浮雲ことがあろ、私が先へ渡るはいな、ヤ何じや、先へ渡る、ヲヽさうじや〳〵、どうで渡らにやならぬ其身、篤りと覺悟して、お念佛申て渡つたがよい、ヲヽ仰山な、橋一つ渡る事を、何の苦にする事があろ、サアござんせと先に立、知ぬが佛眼兵衛が、心は鬼の目に涙、堤傳ひの野邊送り、消る間近き道芝が、浮身の果こそ三重

第五

秋の山、紅葉の床に男鹿の寢たるしほらしや、たてぬきに露霜下し、錦は山の紅葉ばの、渡らば錦なかたえん、浮世渡りの數々に、憂を積し雪の下、藁屋の軒の詫住居、娘お來が賃仕事、ぶんぶ綛操くる〳〵と、絲より細き瘠世帶、拵に暇なかりけり、折柄鄰の女房が、佐兵衛を連て內に入、ヲヽコリヤお來樣、いかう情を出さんすの、ヲヽお市樣ようお出、何程わたふた情出しても、高が細い此仕業、モ埒の明物じやござんせん、ヲヽそりや道理、シタガそんな細い

殿樣の事思ひ切、姫君との御祝言を、どうマア夫が見てゐられう、外の事なら何でも聞う、此事ばかりは赦してと、口說歎けばヱヽ聞譯のない、わりや親への孝行忘れたな、行ねば其方が爲にもならぬ、コリャ泣ずと得心してくれ、コリャ泣な〳〵、サヽ娘、賢い者じや、サ聞譯てくれ、コリャ手を合して親が拜む、コリャ拜む〳〵、ヱヽ是非な勿體ない〳〵、段々の入譯を、聞入ぬ憎い奴と、思ふてじや有うけれ共、外の男を持事の、ならぬといふ其譯は、何を隱さう殿樣の、お種を宿してをりまする、と聞て恟り、ヤアそんならわりや懷胎してゐるか、アイしかも左り孕、アノ男の子か、ハアはつと計り、どうと伏し、暫し詞もなかりける、道芝は面映く、勤に誠はない物と、いへども深い互の緣、若殿樣に思はれて、幾夜さ交す睦言の、其きぬ〴〵も重りて、可愛さ積るお情の、やゝを設けた二人が中、父樣申し、ヘヱヽ餘まり面難胴慾な、私が心も思ひやり、堪へて下んせ父樣と、いふも淚の淵瀨川、戀の柵堰留て、喞ち歎くぞ道理なる、親は胸迫せぐり來る、淚吞込み吞込んで、コリャ娘、ヲヽ夫なら我がのが道理じや〳〵尤じや、ハテモウ其身に成たら何とせう、樣子を聞ば聞程不便、是非がないと諦めて、可愛けれ共切ねば、ヱヽ、アヽいやサイノ、緣を切ねばならぬ所じやけれ共、モウ切らぬがよかろうといふてとじや、ムヽそんならアノ聞屆けて下さんしたか、ヱヽ忝なうござんすと知ず悅ぶ子の心、親は不便と血の淚、左右いふ中モウ日暮、今夜はこつちに泊つて、久し振じ

隱しに、此頃中お前を頼み、此身を賣て其金で、母樣の人參代、思ふ程療治して、夫で行ねば念も殘らぬ、金の入樣子、必ず沙汰して下さんすなと、親を思ひの孝行に、お市も聞て貰泣、孝行なお前の眞實、惡みがなうて何とせう、お來樣後に〳〵と門の口、泣目を拂ふて行て行、お來は跡に一人言、ア世の中は樣々じやな、夫源藏殿は出世の望で家出さしやんしたが、何所に如何して居さんすやら。よもや出世をさしやんしたら、あき別といふではなし、便のない事も有まい、わしや置去にあふても、更々恨みる心はない、神佛へ向ふても母樣の御病氣、二つには源藏殿の出世をば、祈ぬ神も佛もない、若世に出なば元の夫婦と、書殘さんしたを樂みに、月日を數へ待はいな、ア惡い事が重なれば、又此樣に重る物か、人の身の上と水の流程定まらぬ物はない、アヽ思ひ廻せば廻す程、兄弟ながら憂身の上、妹は手越の里に勤の身、此姉も同じ川竹、前生よりの約束と、思へば因果な身の上も、又も涙にくれゐたる、斯る折柄表の方、大小立派の侍、一人內の樣子を窺ひ〳〵、小陰にこそは忍びゐる、漸顏を上、アヽ愚癡な事思ひ出して逐泣た、我身の事に身を賣者さへ有に、況て親の爲じや物泣まい〳〵、浮沈みは七度と、いふを此身の樂みと、心も髮も取上る、勝手へ萎れ入跡へ、忍ぶ被垣組崎主膳、續いて奥へ忍び足、ひそ〳〵として隱れ入、斯とは白髮の母親は、一間を出て、コレ〳〵お來も仕事はしまいさうな、わしも今日は又臆病がいから惡い、アヽ此親父殿は何してぞ、いつよりも遲

仕事せうよりも、此中お前の言んした其相談が調ふて、今其お人を連立て來は來たがお來樣、内方の首尾合は、アイよい共〳〵、何柄何迄お市樣の、モいかいお世話でござんしたと、愛相笑顔に見とる丶佐兵衞、イヤコレ隣のおかみ樣、お前の言んした代物は彼子かへ、アイ彼子でござんす、シタリ見事、そして金の望はへ、夫はお前の目一杯に、ムヽイヤモ百兩が物は屹度有て、百兩で手を打とかい、アイそんならさうして進せて下さんせ、成程〳〵此方にも氣に入た代物、今半金渡しましよ、跡金の五拾兩は、親父の戻られ次第、證文に印形さしやれは其時に渡ます、おれも往て來る所が有ば、支度して待ていやんせ、つひ戻りますと詞數、言ねは粹の商賣がら、能代物と心には、獨笑して出て行、お來樣マア〳〵相談が濟で目出度てござんす、樣子うす〳〵聞た所が、お前も今は新やもめに、ならんしたさうなが、ぶし付ながら今分のお前の身で、大まいの金の入用とは、アイ成程ソリヤ合點行んすまい、其譯と言は外でもない、母樣のぶら〳〵病、物喰んすと間もなうもどす、かくとやらほんゐどや、むつかしい病じやげな、百日の内に直らねば、死なしやんす病じやと、聞悲しさは身も世もあられず、方々の醫者衆に見て貰ふ度毎に、療治とてもないではないが、迚も貧しい身の上では、所詮養生も屆くまい、此病には人參をあく程入て呑せねば、内が衰へて有によつて、療治が屆ぬ、時節じやと諦よと、聞て悔しい今の貧苦、大まいの金才覺する、當も手當も内證の詰、二人の親達には秘し

ても隱されぬ道芝が親里、此內へ戾つてゐる事見屆て此詮議と、聞より母は、はつとばかり、塞る胸に思案を極め、ハテ此上は是非に及ぬ、迚も遁れぬ娘道芝、如何にも御渡申さうが暇乞する間、ヤアならぬ〳〵叶はぬ願、猶豫せば倅共、繩打うか何と〳〵、とひしめく所へ、申上ます、只今僕の雪平め、向ふの辻で見付し故、引つかまようと存じたれど、旦那を差置慮外と存じ、御注進申上ますと、聞て恟り、ナニ雪平めがそこらにをるか、エヽ邪魔なやつ、引くゝるは安けれ共、今出合ふては勝手が惡い、コリヤ婆、首は後程受取にくる、家來共、道をかへて斯塞れと、ひるまぬ顏は長田の裏道、家來もしどろに立歸る、母は吐息をさつくりと、お來は何氣もナウ母樣、そんなら妹は戾つてゐるかへ、何所に居やるへ、そしてマア、ひよんな事受合ふて、此納りは如何付事、私や氣遣な〳〵と、案じも眞身の妹姉思ひ、思ひ續て母親は、詞なく〳〵顏を上、其方にはまた逢さぬが、最前道芝が戾つて身の上咄し、戀故に科人に成た譯、いふに違はす追人の侍、手詰に成た詮の詰りは、お來其方に母が賴みが有、親子の中でも是計りは、餘り〳〵云兼た、逆樣な事なれど、妹道芝が身代に立て死でたも、エヽイ、ヲヽ恟りは尤じや〳〵、世の世界に、是程無體な無心はなけれど、胤腹一ツの姉妹可愛さに何のかはりが有うぞいの、分て妹が殺されぬ譯は、足利殿の弟御、縫之介樣に思はれ、我々ふ迄い、娘が身は輕るけれど、重お胤をやどしてゐる、其子が太切さ、今の追人が見違た程、似たが因果の

り、道で持病が發はせぬか、アヽ氣遣など老の身の、案じに胸も休らず、そよと吹風いとゞ猶、身にしみ渡る妄執の、非業の死に道芝が、消し魂魄我ながら、形を假のしよんぼりと、母様はそこにかへと、言ふに恟り、ヤア其方は娘、思ひがけない何の間におじやつたと、言ふも不思議の立姿、母様御久しうござんす、樣子有てせつない苦しい憂めに逢ふて、心がゝりな事有故、裏からそつと只一人、父樣はお留主かへ、ヲヽ親仁殿は今朝商物持て往て、未だ戻らしやれぬ故案じて居る、ムヽ夫は幸、お前に密に咄したい事が有、奥へ來て下さんせ、ムヽ久しう逢ぬ此母に、咄したい事が有、そして夜中に只一人、竊に咄したいとは氣にかゝる、マア奥へ、アイマア、お前から行しやんせ、そんなら娘、サアおじやと、何のけんによも納戸口、打連てこそ入にけり。色香漏れくる破障子、移す鏡の柳腰、見かはすばかり髮形、木綿假合ぬ女房盛り、ハア短夜のモウ初夜前、今宵四ツが內の名殘、終に仕なれぬ曲輪の勤、八文字とやら如何するぞ、エヽこんな事なら妹に習うて置たらよかつたに、アヽどうやら小褄を捌取て、エヽ口惜いと潛々淚、雨夜の月と疑がはる、折柄表に大淵藤內、うろ〱眼に戶口を覗き、家來共アレ見たか、アノ女めは慥に尋る傾城め、さうじや〱と込入主從、母はかけ出立塞り、アヽコレ聊示せまいこりや何事、イヤとぼけまい、手越の里の傾城道芝、足利の館へ男に化て入込し科、首討との御諚意、エヽイアイヤ〱、そんな傾城が此方へ來た覺えはない、ヤア狸婆め、隱

どくを門に聞悔り、もしも樣子を聞たかと、危ぶみながら上り口、コレ婆今いやつたは何の事じや、誰事じやと尋ねられ、ハツトしながら當座の間に合、イヤノウ此方の戻りの遲さに、思はずとろ／＼轉寢に、我子を殺した夢を見て、ひよつとアレが本の事なら、悲からうと思ふて涙が、何にやら夢に見た、ホイ親子の血筋夢に知せが有も道理、コレ親仁殿、夢に知せとは何知せ、イヤ夫は、アノ妹道芝、廓へ往てから便もせず、生た共死だ共、夢に我共知せさうな物じやといふ事、ヲヽ本に親仁殿、最前から妹が來て、イヤモウ氣遣さしやんすな、夫は／＼達者で、今奧で姉と咄してゐるわいな、ヤアと悔り、ドレ／＼／＼何所にと覗けば、姉と差向、ソレ能女房に成たで有うがの、ホンニさうじや、矢張さうじや、アヽ南無阿彌陀／＼、エヽいま／＼しい、達者で戻たに念佛は何ぞいの、サイノ、めんよう、年寄といふ者は、念佛が口癖に成て、嬉しい事にも終南無阿彌陀、餘り妹が大きう成たで、嬉し過て涙がこぼれる、ヲヽソリヤ道理いの、嬉しい事さへ夫じや物、嘸此方の事を聞しやんしたら、ホヽヽヽ私とした事が、ひもじからうに焚付て、茶漬進じよと勝手口、泣に立こそ哀成、イヤひもじい所か、おもや胸が一杯に成て有はいのと、いふ間泣々女房が、附木燈して佛檀に、上る御明しいは粗共、心合たる女夫中、花は手生と眼兵衛が、立る具足の鶴龜も、短い壽命と觀念し、妻が撞木を取上れば、エヽ是婆、今夜は佛の日でもなし、其方が看經する事はない、念佛はおれが申すわいの、

此身代、若殿のかはりに立と思ふて、母に命をたもやいのと、思ひがけない頼みには、思案とかうも涙ぐむ、難儀は二つ身は一つ、心一つに分兼て、成程尤な樣子聞た上、さら〳〵みれんじやないけれどな、氣の毒な事は、私もこちらに樣子が有て、少命が入まする、知ての通り義理有夫、別た時から身に持た、胤は私も同し事、尤お歷々と浪人と、位は違つて有けれど、夫に預つた大切さに違はない、命一ツは惜まねど、貧しい夫を持た故、お中の子迄是程に位が違ふかと思へば、口惜うござんす、とはいへ妹の命も大事、何卒仕樣はない事かと、身賣の譯も今更に、言ぬがましの投島田、身を投伏て泣居しが、アヽさうじや、幼いから病じやな私、妹のお宮が傾城になりやつたも、其扱ひに入た金、私が夫は浪人の不自由さ、何角に付てお前方に、御苦勞かけるも皆私故、恩の有妹の代りに成事じや物、成程潔う死ませう、道芝は何所にぞ、逢て一言いひたい事が、ヲヽそんなら死でたもるか、アイ、ヱヽ忝い出かしやつた、よう得心してたもつたのうと、死ぬる我子に手を合せ、悅ぶ親は我ながら、嘸氣遣共人目には、期る例は何の罪、何の因果と隱し泣、姉も後へ殘る目に、涙包で奧へゆく、同じ迷ひの親心、眼兵衞はとぼ〳〵と、花の盛を切捨る、子は三界の首かせと、肩に思ひの枯柴を、荷ふて歸る門の口、可愛や婆が朝夕に、影膳すゑて待娘、靈供とかはる世の有樣、思へば我家も這入兼、佇む中にも女房が泣聲、浮世の義理とは云ながら、思へば酷い親の身で、現在我子を殺かと、く

妹、怪我しやんなと振上る、ヤレ待て女房と眼兵衛が、姉が手を取引退る、イヤ〳〵切ねばならぬ譯、切しはせじと姉思ふ、冥途の魂魄眼兵衛が、今は是迄南無阿陀彌と、女房が刀引こくり、すつぽと切たる刄の下、形は消て佛檀の、前に殘るは首計り、ヤア〳〵親仁殿、何で妹を切たのじや、父樣是はと泣お來、呆れ涙の折柄に、肝煎が高呼り、サア〳〵姉樣、跡金持て迎に來た、泣て居ては何迄も果ぬ、是から勤の大事の骸、サア〳〵爰から直に乘てござれと、泣入お來が手を取て、無理に連出手を叩けば、聲諸共におろせ駕、門口に舁据れば、コレ〳〵娘を何方へ連て行、樣子を聞うと取付眼兵衛、お來は涙の聲を上、コレ〳〵父樣、久しう母樣の御病氣、其上ふがひない夫を持た故、お年寄れて色々の御艱難、此身を賣てせめてもの御恩報じ、此事を夫へもく〳〵傳へて下さんせと、いふ聲共に伏沈み、泣を泣せず、イヤサ樣子は跡の事、先娘子の身の代と、投出したる五拾兩、サア乘んせと、無理やりに、駕におし入押込で、道をはやめて急ぎ行、眼兵衛は金取上、コレ〳〵婆、おりや一ツも合點が行ぬ、主有姉が勤奉公、定て是には樣子が有、サヽヽきり〳〵譯を聞してくれと、せきにせき立、此方もうろ〳〵、サヽヽ私も妹が勤奉公に行事は夢にも知ませぬ、何じや知ぬ、ヲイノ、此方の留守に足利家の追手が來て、妹を渡せとのつ引ならぬ手詰の難儀、一寸遁れに受合しが、縫之介殿の稗をやぜせし其樣子、私とても其昔は、足利家の恩有者、似たを幸ひアノ姉を身代に頼みしに、

イヤ此方の看經はいつでも成、今夜は私がお念佛の入事が有わいの、イヤサ、おれも念佛申さにやならぬ事が有、ヲヽそんなら共にと同音に、鉦打鳴し、南無阿彌陀〳〵〳〵、唱ふる念佛はかはらねど、言はず語らず二親の、涙くろめん方もなき、一間の內も姉妹が、明ぬ心の闇深く、ノウ妹、久しぶりで顏を見て、嬉しいも暫の中、いふに云れぬ譯有て、此來は今宵から遠い所へ行ねばならぬ、何又逢やら逢れまいやら、お年寄の二親に、たつた一人の妹、隨分達者で居てたもや、夫に付ても賴みたいは、親の爲に大礒へ身を賣たれど、夫も行れぬ譯に成、行ねば母樣の用にも立ず、言兼た無心なれど、私が代に大礒へちとの間往て下さると、其金で母樣のアノ病が直りさへすりや、私や死でも心は殘らぬ、只さへ其方は私故に、一度ならず二度の勤、賴も此方に何や角や、樣子は跡で知る事、一生の無心を又賴みます妹と、今はなき身の道芝共、知ぬ心根猶悲しく、姉樣の爲なれば、火に入水にも入けれど、肝心の此體が今日有て、明朝は果敢ない世のならい、其上にお前迄、そんな便ない事いはしやんす、今から火樣や母樣は誰を便に、嘸歎の上のお歎と、一倍よはらしやんせうと、夫が悲い、お前計は何方へも、行ずと何卒二親の、御介抱申てたべ、何いふ事も此世では、皆徒事と成果る、跡の悔みの悲しさと、親子一世の隔の障子、別れを急ぐ四ツの鐘、南無三寶時移ると、母は一腰さし心得、サア今切ぞと覺悟のお來、ノウ姉樣、殺させぬと、覆に成は亡人共、知ぬ母親コレ〳〵大事の

女房泣な其方や何にも樣子は知まい、反謀人赤松滿祐の足輕、嘉嶋權平といふ者、物數ならぬ者なれ共、魂は誰に負べきや、足利家に仇せんと、心を盡す此年月、我娘道芝が懷胎なせしは足利の種、一刀に差殺し、主人へ立る寸志の忠義、今主膳殿に見顯はされしは運の盡、去ながら侍の數に入り、切腹するは我本望、モウ何にも物申さぬ、と〳〵と引廻す、ヤレ待嘉嶋、小身には似合ぬハレらい者、娘道芝を殺たも、うはべは縫之介殿へ忠義と見せて、下心は足利家の胤を懷胎したる故、水子も敵の片われと、娘と共に指殺す、夫程の根強い性根、如何程に拷問する共三郎が行衛は言ふまじ、最早尋ぬ安堵して勝手に死、コリヤ其方に遣した其刀は、我親紙崎兵庫、赤松滿祐を討取し時、無念こつて刀に喰付たる、赤松が最期の歯形、其刀で切腹すれば、主從一所に討死も同然ぞと、闇に彌增殘念さ、主人の最期の此刀で、娘を殺し我も死す、因果の業は今果す、婆、去た、緣切たれば赤の他人、如何に忠義なれば迚、我子を殺し、また顏も見ぬ初孫を刺殺す、婆勘忍して〳〵、科人のおれが爲に、必菩提やなど弔やんな、娘が爲に尼に成と、心任せと一言は、今はの情も情ない、娘は殺し夫に別れ、死際に成退去とは、何面目もないじやくり、心を察して紙崎主膳、假にも殿の暫も、御寵愛有し道芝が、母には詮議のお構なし、姉が身の代百兩の、兼ては妹が追善供養、跡弔ふが肝要なり、イサ歸らんと夕闇に、出るを遣じと大淵藤內、心得主膳が小柄の手裏劍、丁と來かゝる雪平が、一人も殘

何で又此方は妹を切たのじや、活して戻しや、活して返しやと、おやも涙に伏沈む、眼兵衛も咽び入、尤じや〳〵、が妹を切たは樣子有ての事、主有姉に身を賣せて、聟へ何と云譯せうぞ、身の代の此金戻し、姉のお來を取返すと駈出すを、ヤア〳〵眼兵衛、申聞す子細有、暫待と一間より、立出る紙崎主膳、是はと計り眼兵衛夫婦、更に不審は晴やらず、紙崎は二人に向ひ、ナニ眼兵衛、姉のお來が身を賣しは、大磯ではないはいやい、ムウシテ、又姉が身を賣し、其先は何處何方、ヲヽ姉道芝を其方に討せたは殿の爲、我家來を曲輪の者に仕立身の代を與へ、買取し姉のお來は、此主膳が詮議有て、我方へ只捕しは子細有、姉が夫の名苗字を聞に、我推量少しも違はず、詮議の種の姉が身の上、樣子は追て申聞さん、先何か差置てふしぎなるは此刀、眼兵衛、コリヤ以前より其方の所持成か、ハイ、其昔手一合取ました故、今に放さぬ鰹かき、イヤ〳〵尋常ならぬ名作の證據、此刀を振上れば、最前死靈が消しは、正敷武將の家の重寶、午王丸の名劍、先年赤松滿祐此太刀を奪取り、謀反ならずして亡び失、其後行方知ざる名劍、是を所持する其方は、滿祐が餘類と見た目は違はじ、名劍只今手に入と云、謀反人赤松滿祐が悴、赤松三郎といふ者、大將軍に仇をはさむよし、何國に有共行方知ず、此行衛を知たる者は其方ならで外になし、サア眞直に白狀せよ、陳ずるにおいては骨をひしいで白狀さす、サア〳〵何と〳〵、結寄られて眼兵衛が、刀引拔我腹にぐつと突立る、コレハト取付女房を、取て突退、

ばお跡から、兵部殿御案内頼ます、然らばお出と榊兵部、先に立て鳥居前、宮居をさして引連行、折もこそ有向ふより、身中が欲の摑面、鷲と名うての善六が、きよろ〳〵眼とうそ〳〵〳〵、見ゆる此方に岩藤が、ヤレ待兼ました、委細は昨日の文の通り、日外も大膳殿よりの密書で、間注所で取落し、樣々と搜して見たれど、かいくれに見えなんだが、十が十尾上めが拾ひおつたには違ない、スリヤどうも其分に置れぬ尾上め、夫故に今日の趣向、まだ其外に何や彼や、咄す事がたんと有、委細の譯は神主の所で、呑込ましたサアお出と、人喰馬にも合口と、打連てこそ行跡へ、桃井求馬時房が、何の願の神詣、鳥居間近く歩み來る、引返して善六が、邊りきよろ〳〵ねめ廻し、求馬が傍へ立寄て、イヤ申お侍樣、終にお目にはかゝりませぬが、此鷲の善六といふ男が願ひ、初對面の天窓から氣に入うが入まいが、是でも非でもお侍樣、聞てもらはにや男が立ぬと、何か根ざしの云廻し、求馬もむつと若氣のはやり氣、思ひ直して和らを入、成程今御自分の申さるゝ通り、終に見もせぬ某へ、是非にと有其頼み、一通り承はらんと詞の下、懷より文取出し、笑顔もち〳〵申し今の樣に云た時は、小六ケ敷事云かけて、喧嘩でもしかける樣に、お腹も立うし、御合點も參りますまいが、高が斯いふ筋でござります、エヽアノお前に、モウ〳〵〳〵死る程惚れてゐる、其女中が命にかけて私への頼み、私も又おたくさい事いふた事はない故、持前の喧嘩仕立て、お前を口說文使の私、一ッ屋敷の傍輩同志

らず皆殺し、切て捨たる老の髮、未來を契る友白髮、先立無情の鐘の聲、風にちりぐ散花の、盛は雪と消果て、月の出汐に立出る、忍び編笠夜半ながら、不覺の歎戀故の、其亂れ髮俤に、涙の露を賤が家に、置別てぞ出て行

第六

かけまくも、太敷立し宮柱、和光の塵も影淸き、ときはかきはの神樂唄、千代を壽く鶴が岡、弓矢取身の守迚、群集は押も分られず、一際目立鋲乘物、足利家の奧女中花の方の御代參、咲揃ふたる花盡し、外珍敷女郎花、さはらば落ん玉あられ、ふるや鈴の音大麻の、引手に神も靡くらん、當社の一禰宜榊兵部、夫と見るより出向へば、乘物明て局岩藤、跡に續て中老尾上、行儀も適しとやかに、會釋して立出れば、神主兵部も共に式臺、先以今日の御代參、御苦勞至極と挨拶の、詞に付て局岩藤、ヲヽ其後はお久しや兵部殿、相替らず今日の代參、足利家の武運長久、御祈念賴入まする、其次手には此局が、諸願滿足を情出して、御祈なされ下されよと、にがみ走りし空笑顏、仕濟し顏に相述れば、尾上は夫と差心得、一封の願書取出し、花の方取分心を籠し此願書、御奉納下されよと、差出せば收納、イザ御神拜遊はせと、詞の内に局岩藤、イヤノウ尾上殿、ちと私用ながら、待合す人が有程に、先へ往て下され、左樣なら

寄そふて、わりなき中ぞ睦さ、不義者見付た動など、聞より二人ははつと計、ヲヽお局樣何の間に、イヤ今日は私も御代參に來ました、ヤコレ味やらしやるのう、大切な御使に道草の痴話遊びか、ヲヽ能行儀じやの、イヤ結構な御身持じやはいの、不義はお家の堅い御法度、ふたり共に覺悟しやと、俄に詞あら〳〵敷、穗に顯れしは戀の意地、柊に咲花ならで、二人は雪と消たき思ひ、イヤ申お局樣、必竟相おつしやりますな、私が身に取まして、更々不義の覺えはござりませぬぞ、イヤおしやんすな〳〵、たつた今求馬殿と、吸付たり引付たり抱付たり取付たり、イヤモしたゝるい事の有條をコレ、此黑い目で見て置た、何と夫でもわらがふかと、齒にきぬきせず云まくれば、求馬こらへず、これ岩藤樣、人の不義を改める此方こそ不義の詮議、ヤア何じや此岩藤を不義者とは、コノぬつべりとした顏はいの、イヤコレ岩藤樣、其いやらしい目付で付つ纒しつ、今も今迄コレ此文と、出して見すればはつと計、赤面すれば早枝引取、サこりや潔白なお局樣じやはいな、不義はお家のきつい御法度、サア此方より申し上うかへ、サア夫は、但し拙者が言上致さうか、サア夫は、サア〳〵そんなら、モようござるはいのう、不義の詮議は互に是切、イヤ何求馬殿、お局樣、スリヤ申し分はござりませぬかと、早枝と目と目見合せて、別れてこそは立歸る、折柄告る供廻り、イザ御立と夕榮の、中老尾上先に立、多くの女中取圍み、對の帽子も一樣に、群居る鷺の如くにて、翼しの鳥居の前、イサお局樣御一

で、色事は法度じやげなが、命づくの戀の取持、お前じや迚まんざらに、餘り腹も立そもない事、其文納て下さんせと、かさ押にやる文使、荒木を切て取持口、求馬は何の心もなく、文取上て見るより恟り、投返さんとしたりしが、役柄と云日頃の氣質、後日の當も如何ぞと、一寸遁れと、コレハ〳〵善六殿、存寄ざるお取持、何が若輩我等迚も岩木にあらねば、お志し何程か祝着、此文忝う受納めます、返り事は此方よりと、よしなに返事賴入と、懷へ入るゝを見て、俄に作るわいそぶり、扨も〳〵お前樣は、數ならぬ此私が一言を、お立なされて下されます、只今の御返事、有難い〳〵、主も嘸此返事待に待てゞござりませう、ヤ何お侍樣、必御返事待ますと、儕一人がでかし顏、肩怒らして懷手、宮居をさして入にけり、跡に求馬は只一人、文の返事を兎や角と、思案に小首傾けて、暫し小影に佇めり、斯とはいざやしらにぎて、縁の絲ゆふ結合す、人目をそつと墟早枝、としやおそしと走寄、物をもいはず求馬が顏、うらめしさうに打詠め、エゝ聞えませぬ求馬樣、アノいおわるの岩藤が、目顏を忍び轉寢の、其睦言の度々に、其方を退てそもやそも、外に枕はかはさぬと、云しやんした其時の、其一言を樂しみに、思ふてゐるにどうよくな、つれないはいなと計にて、かこつも戀のならひかや、求馬ははうぞ待おまし、コレハ〳〵又其方もマアたしなみやいのう、イヱ〳〵〳〵、よもやとは思へ共、油斷のならぬは男心、私や夜の目もあはぬはいな、ハテ疑ひ深いと手を取ば、アゝ嬉しやと

にさへまするの何の彼のと。申す様な事がござりませうぞ。おつしやる通り町人の娘、親共がお出入の御縁を持まして、御奉公に上りまし、だん〳〵とお取立、かやうな重い御奉公も、有難い此身の仕合せ、根が町人の私が事、嘸や不束な事斗でござりましよ、此上迚も岩藤様、憚らりながらよい様に、たらはぬ事を御遠慮なう、お叱なされてお差圖頼み上まするど。柳流しのしなやかに、云廻したる利發さよ、ヲヽ何じや、町人の娘故、足ぬ勝ちな勤方を、私に差圖して呉れろ、ホヽヽヲヽつべこべと薄い唇じやの、此方の若い其舌先で、こね返さるゝ私でもござらぬ。何のそもじの御發明で、私が差圖を受さうな事がいの、コレ次手じやによつて云ますが、此方の親元は町人ながらも金持で、御屋敷の御金御用を勤みやるといふ、其用達顔の高慢か、鼻の先へぶら付てコレ、此顔に見えるはいの。コレ〳〵。上の事いふではないか。金の威光はきつい物じや、アノ其角とやらいふ誹諧師の發句に、コレ聞しやれや、口切や汝をよぶは金の事、コレ金持顔は此上迚も止めにして下され尾上殿、御役向はお中老、此岩藤は局役、お素ならば御用人格じやぞや、女子一通りの事は勿論、萬一狼藉者が奥向へ切入か、又盗賊などが忍び入、其時には役柄じや、女子ながらも御前の堅、討留る器量がなければ勤まらぬ奉公じやが、此方も武家方の御奉公さしやるからは、長刀の一手も心得てござらうの、ソリヤアノ、誰に稽古さつしやつたぞ。ソシテアノ其お師匠様は何と云ますや、コレ〳〵尾上殿、アヽ

所にと云に岩藤ふしやう〳〵、立上らんとする所へ、來かゝる鷲の善六が、兩手を土にイヤお局様、最前申上んと存じましたれど、かの事に取まぎれましてナ申し、ばつたりと失念を仕りましてござります、外の儀でもござりませぬが、此間仰付られました金子の儀、へゝゝ御受取下さりませと、半分云せずコレ善六、何つもながら心遣は過分〳〵。しかし流石は町人の其方、奥向の事知ぬ筈は尤、コレ此岩藤は局役じやぞへ、むさくろしい物を取扱ふ役じやない、其金は針妙の澤に渡しや、能にと斗詞數、云ぬ色なる山吹の、包取出し善六が、アゝ町人と申す者は、賤しい者でござります、神佛より尊う思ふ此金を、むさくろしい物などとお手に觸ぬといふは、アゝ又格別なお歴々様、うなる程金持ても町人といふ物は、アゝ賤しい物でござりますと、云つゝ金を懷へ、お屋敷さして急ぎ行、跡打見やり局岩藤、アノ善六とした事が、私がいふ事氣にもさへず、正直な生れ付、何とおもはしやる尾上殿、町人には珍らしい氣耻しいアノ善六、町人は賤しい物と感心した今の樣子、ヤコリヤ本に、ちつと此方には差合で有た物、ホゝゝヲゝ私とした事が、づか〳〵と氣の毒な、イヤ本に尾上殿、アノこな樣の宿といふは、金持なれど町人、假親しての御奉公、スリヤ今私が言ふた事、氣にさはりやしませぬかと、あたな所からしかける詭譎、扨は何つぞや問注所にて、密書を拾置し事、けどつて今日の此仕儀と、思へば猶もそらさぬ顏、コレハ又岩藤様の痛入ます御挨拶、何のまあ私が氣

を、ふいて下されぬか、アノ私に、ヲイノ、エヽ、いやか、じやといふて夫がまあ、ホヽヽヽ臆病者の腰抜に、刄物よごしやうより、幸な此草履と、足にかけたる土草履、尾上が頭を丁々々、是はと斗り奥女中、氣の毒餘り立騒ぐを、尾上は聲かけ、コレ〳〵騒ぐまい女中達、岩藤樣が此尾上を、御異見の爲めの御打擲、コレ私が有難うて〳〵、母樣の御折檻と思ふて、此身のふし〴〵迄、有難うて忝い、イヤ申岩藤樣、產の親も及ばぬ御異見、エヽ有難う存じまする、此上は隨分と武藝をも心がけて、御奉公を致しましよ、又、此お草履は私が爲には、御敎訓の此一品、申受けまして、私が守と、懷中したる大丈夫、類希成忠孝に、流石の岩藤呆れ果、口をつぐんで居たりしが、ヤア何じや、其草履を私に貰ふて守にかける、アノ守にヤ、テモ恐しい辛抱な人、異見した甲斐が有、以後を屹度お嗜、サア〳〵行ましよと、替草履、歩行路ひろふも氣隨しと、歸る岩藤殘れる尾上、髮も亂れて我ながら、口惜しいやら無念なやら、顏は茜とせきのぼし、こらへ〳〵しため淚、一度にどつと伏轉び身も浮く斗り歎しが、數多の女中立寄て、コレ〳〵尾上樣、アノ憎體なお局の、氣質は常から能御存じ、お腹立はお道理なれど、いつもの事じやと思し召、必お氣にさへられずと、先々屋敷へ御歸りと、諫立れば泣々も、かゝへ引しめ立上り、女心の一筋に、又思ひ出す口惜淚、早寺々に暮の鐘、明日に我身も消て行、夕告鳥の泣々も、打連館へ急ぎ行く

愛な人わいの、人にばかり口たゝかせ、此方は耳でも潰れたかと、かみ付られて尾上は只、赤らむ顔を押隠し、お恥かしい事ながら、其心がけはないといふのかヤレおとましや氣の毒や、重い役を勤ながら、役向の勤方を知ぬといふは、ソリヤアノ何じやぞや、ヲゝ夫よ、本の是が祿盜人といふ者じやぞや、イヤコレ知行盜人といふ物じや、盜人じや、〳〵、何とさうでは有まいかと、まくしかけたる雜言に、無念の涙たもち兼、齒を喰しばりこらへゐる、ヲゝ何じや、泣しやるか、ヲゝちつとこたよう、悔しかろ、町人の娘じや迚、今では武家の御奉公人、本にさうじやはいの、最前もいはしやるには、心付ぬ事有ば、御指南頼といはしやつたの、ウゝドレ敎へてやろと立上り、持たる扇振上れば、身をかはして打落す、手向なさば一打と懐刀抜放せば、是はと驚く女中達、尾上も今はたまり兼、供に拔んと立寄しが、思ひ廻せば廻す程、大恩受し御主人の、御せんども見届ず、我身に過有ならば、跡に殘りし親達の、御歎は如何計と、こたへるつらさ苦しさは、胸も張さく血の涙、身もうく計歎しは、傍で見る目も哀也、相手にならぬは此岩藤が恐しいか、但しは又おくれたのか、流石は町人の娘なれば、刄物ざんまいは恐しい筈、怖い筈、ヲゝ道理じや、〳〵、そんならコリヤ納ましよ〳〵、ドレ〳〵〳〵、歸りましよ〳〵、ホンニ〳〵〳〵、此方にかゝつてコレ〳〵〳〵、これ見さつしやれ、足袋も草履も砂まぶれじやはいの、イヤコレ尾上殿、ヤ何と此草履のよごれたの

ば差出のおなか、ホンニ此方は仕合者じや、結構な旦那を取ば、勤ながらも骨は惜まぬ、其方の旦那尾上様の心よし、何から何迄御發明な御生れ、道理こそ育が育しや、お宿といふは誰有うぞ、鎌倉一番の大分限、舟が谷の坂間とやらいふ米問屋、少さい時からお姫様育、此お屋敷の御金御用、一式御勤が勤みやるげなの、人は氏より育じやと、影口咄し腰打て、負ぬお冬が壺々口、氣にはかきやんなおなかゞ御主人、お局の岩藤様、此廣い御殿の内、誰一人お睦じう相口といふが根からない、コレお初殿、昨日御が岡の事聞てか、イヱ私は何も存じませぬ、マア〳〵聞きや、お局様と尾上様と御同道で御代參にお出なされた時、例のはんざんが出たかして、有う事かはしたない、御用先で惡口たら〴〵、まだ其上に大それた、お中老もお勤なさる、此方の御主人尾上様のおぐしを、主の草履でたゝいたといの、勘忍強い尾上様、御代參なりやお上の名代、じつとこらへて、秘隱に其場は濟で仕廻ふたけなが、ナント思やる、聞でゐる内、かけ構ひないこちと迄、腹が立て〳〵〳〵。夕部は癪が差込で、およなかをたべなんだ、苦は色かはる松風の、評判物じやと口々に誘る折柄、奥の間より立出るは、顔も心も直ならぬ、曲くねつた局岩藤、邊見廻し〳〵て、ヤイ〳〵女共喧い、そりや何をいふ、次へ行ぬか、立ぬかと、叱られながら婢共、我部屋〳〵へ立て行、コリヤ〳〵初、我にはちつと用が有、爰へ來い〳〵、こはい事はないはいのう、來いといはゞおじやいのう、アノ其方は女共を集て、一

第七

星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ケ谷に棟高き、前の官領足利家の思ひ人、花の方の御館、咲續たる花の御所、盛十寸見の奥御殿、色香争ふ長局、武家とはいへどなまめかし、世の憂を、空吹風の有頂天、くつたくなしの婢共、一ッ所に寄集り、ヲヽおなか女郎お冬女、軒から軒の隣部屋も事多い時は遠々敷、今更云に及はぬ共、人目には樂に見え、奉公向のせつろしさ、人の樂しむ正月遊びも、御儀式事にかゝつてゐて、寶引一度引事ならず、在所に居れば朝から晩迄、針打したりやり羽子手鞠、お雜煮腹のへるのも忘れた。ホヽヽ、御膳仕廻へばお櫛にかゝり、お下り迄の其内に、繼物したり時分の身仕廻、ヲヽお秋のいやるに違はない、人一倍精出しても、部屋方者と賤まれ、能奉公もする事ならぬ、皆面々の肩づくじや、此春の出替には、出てのけうと思ふたれど、アヽ何國も同じ鷄の音色と、重年をしたのじや、どの白壁も同じ事、緣次第じやとさがな事、口もはしたの姦しさ、主の噂も鳥影も、日脚も延て八ッ下り、お下りのお迎と、お初が夫と氣も浮ぬ、小腰かゞめて、コレハ〳〵皆打寄て、お睦じい面白さうなお咄し、新參の私故其仲間へは這入ない、後にゆるりと逢ましよと、御殿をさして行所を、コレ〳〵お初殿、其方も此方が仲間内、マア〳〵爰へと呼かけられ、いや共云れず惣々の、中へすわれ

斯くの通りと述にけり。ムヽすりや御家督は花若様、申し是迄色々の心盡は徒事かと、はいなげに問詞を打消、何にもせよ其方や我等が面白からぬ趣なれ共、肝心かんもんの継目の綸旨、ナ、ナ、我等が方へ隠し置ば、花若の家督相續思ひも寄ず、シテ〳〵兼ての首尾は如何と、密々誰も人や聞と、邊を詠め岩藤が、膝摺寄サレバ其事、大切なアノ密書、日外間注所で取落し、ハット思ふて、色々と捜しても見えぬ密書、尾上めが拾ふことは、鏡にかけて睨んで置た、スリヤ尾上めを其分に濟しては、寢覺心がとんと濟ぬ、昨日鶴ヶ岡へ御代参、尾上めを同道、能折柄と思ふた故、立つ居つにいじめかけ、ドウ喧諍仕かけても、上手遣ふて相手にならず、場所がらを辨へ、御代参の私へ對し、慮外有ては身の越度、となかす程に〳〵、煮ても焼ても喰はるゝ様な、大體利發な女めではないはいの、詮方盡て人柄を崩し、私がはいた草履を持つて、尾上めが天窓をくらはせ、手向させうと思ふた所、聞て下され恐しいやつ、夫をも辛抱しくさつて、手持無沙汰に其場を仕廻ふた、時に尾上めが婢に初といふ小あま、年に似合ぬさいはおけの差出者、又此奴めに手向させて、夫から尾上めに付込うと思ふて、今も今迚さん〳〵にいじめかけたが、是も又同じような辛抱強い賢い奴、手向所か誤つてばかり居をつて、是も又つぼへは行ぬ、此分ならばなか〳〵もない、あいつを遠ざける事は成まい、兼て此方の工みの様子、けどつてをるアノ尾上め、思案かりたい大膽様と、毒氣吹込一ッ息、焔とばかり身を

はな立て何で人の咎いふぞ、サアなぜ自が事を悪ういやつた、何ぞ意恨でも有事か、又は尾上殿が悪ういへと云付たか、サア最ちつと爰へおじやいのう、どうじや、どふじやいのうと、猫撫聲も氣味悪く、お初は漸傍へ寄、イヤ私はたつた今參じまして、何にも申す間はござりませぬ、何も申しは致しませぬ、お赦しなされて下さりませ、と行んとするを小腕取、モウ〳〵夫で知た、奥聞うより口閉と、悪うぬかさぬ物を何赦す事が有、アノ悪根性の尾上づら、主が主なら俤迄、悪工みをしさうなしびとめが、佛性な此私を、ようも〳〵ない事迄拵へて、なせ云やがつた引さがれめ、ドレ顔見せよ、テモ能顔じやナア、ムヽ能器量じやなア、と傍若無人に引寄て、つめつゝ突ついじめられ、おろ〳〵涙お初が思ひ、誤りましたも出ばこそ、只伏沈む計也、お口女中の聲高く、お上屋敷より、お使者のお出と案内の、聲に岩藤ぎよろ〳〵目、ヱヽうぬは仕合せ者、只置やつではなけれ共、能時のお使者故赦して呉れる、立てうせいと怒りの立蹴、口惜涙押隠し、しほ〳〵として立て行、程も有せず長廊下、のつか〳〵と權柄眼、出向ふ岩藤互に夫と表向、相口馬の會釋はら〳〵、ヲヽお使者と有ばそなたかと思へば大膳様、御苦勞様やと互の目遣、仕込悪事の友烏、したり顔に座に直り、其以來は打絶申た岩藤殿、お使者の趣餘の儀ならず、持氏卿御病氣成と世上へ披露し、御賢息二方の中、惣領たる花若殿は花の方の出生成ば、御家督との御内意、申し入よと後室君景壽院の、今日の御口上、

廊下しづ〳〵御殿を尾上が下り、夫と見るより、ヲヽ御機嫌よう今お下り、いつ〳〵よりも遲いお下り、どうやらお顔持もすぐれず。お心悪ふはござりませぬか、アノ初とした事がけうとい物いひ、毎日〳〵の御前勤、下りの早い事も有、御用が多けりや遲い事も有は此上儘有事、勝手知らぬ其方故、案は無理ならず、サア、供しやと何氣なさ、詞に夫と氣も付ず、上べを包む、上草履、直す草履も昨日の意恨、意ひ憎て一筋に歩む廊下も心には、羊の歩みひまの駒、神ならぬ身の夫ぞ共、知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸明て内に入も、常に變りし顏色を、悟らせまじと猶にまぎらし、正直はさつきにから、持病の癪が起たわいの、夕まゝも給たうない、いつもの通りさすつてたも、ハイとお初が指寄て、先お枕を遊ばしませ、お風召なとかい卷を、かひ〳〵敷も立廻り、お癪の起るもお道理樣じや、夫に付ても輕い者は、奉公迄も氣散じに、旦那樣やら御家來やら。お友達見るやうに、お心安うなさつて下さりや、病氣もござりませぬ、ヲヽいやる通り、上々方の宮仕へは、如何にしんきを遣ふ物、其方の爺御は武士と聞たが、世が世ならどのやうな御奉公も仕やる筈を、町人の娘の私が遣ふといふは、嘸や嘸心うくも思やらう、とかくに人は時節を待、花咲春を待のが肝心、ヲヽ勿體ない事御意遊ばす、何事も大旦那のお咄しに御存じならん、私親子が受し御恩は、口にも筆にも盡されませぬ、せめてもの御恩報じ、不調法は此私が、お傍で何卒御奉公とお願申、此春から初奉公

焦す。大膳も諸手を組、暫ためらひ居たりしが、ムヽはて扨しぶとい女め、なみ〳〵の謀に乘らるゝ女ならず。ハテどうがなと思案のうち、襖の影に婢のお初、様子窺ひためらふ共、知らぬ岩藤せゝら笑ひ。アヽ御山な大膳様。此家を一呑にと企るお前や私が、アノ小尼一匹が何で夫程恐しいぞ、アリャ堪忍ぶでも有まいが、眞實生得た臆病者、又これから摸様をかへ、おいつを追出す其思案は、お案じなされますな、コレ爰にござりまする大膳様、ムヽ然ば能に斗らはれよ、きやつめ一人ぼひまくれば、跡はのゝ宮高砂の、ヲヽアノ妾づらは心よし、大殿は死で仕廻ふ、若殿の小びつちよ殿に、宛行扶持を喰せて置ば、此一家中はお前と私が、シイ、聲が高い壁に耳、岩の物云世の譬、互の胸は得と秘めして。岩藤吉左右を相待申すと、浮べる雲の空頼み、奥と表へ時宜式禮別れてこそは入にけり、跡見送りて襖の影、お初が夫と、拔足差足、邊り詠めて溜息つき、テモ恐しい工み事、お下りの遲ひ故、どうかかうかと思ひ過し、倍臣の行事ならぬ奥御殿。いて見ようとは思ふたれど。咎らりよか、叱られよかと、取てかへした襖の影、悪局の岩藤どのと、アノ伯父御の大膳殿、大それた悪事の相談、コリャ大切な事じやわいの。尼上様に申し上、お上への御忠節、アイヤ〳〵〳〵證據も持ず、大切な事をな妾中に、是を訴へてお主様を科に落し、そのやうな御難儀を懸る、工みの程も知れぬ、私が大事のお主といふは。尼上様より外にはない、そうじや〳〵と一筋に、恩義に迫る主思ひ、待間もとけし長

何ばかりと、思し召ぞいのお情ない、ヲヽ阿房らしい何のこつちや、拍子にかゝつてお前様へ、御異見の様にヲヽおかし、ドリヤお薬を見てこよかと、何か詞に綾の絲、勝手へこそは立て行、跡に尾上は胸せまり、忍び涙の淵も瀬も、明日は亡名を白紙に、硯の海の底はかと、なき長文も跡や先、書置筆の命毛も、露と散行はかなさを、絶入ばかり忍び泣、涙と共に書留め、葦の文箱も浦島が、明てくやしき意恨草履、文諸共に文箱の、紐引しめてかたへなる、手箱の中を形身はけ、數も涙の玉櫛笥、細々數も小文庫に、思ひ詰たる憂涙、包に餘る小風呂敷、中結しめて玉の緒も、今を限りの空結に、封もしどろにかきくれて、思はずわつと泣聲も、袖に包みし忍び泣、何心なく勝手口、お初は心いつきせきと、煎じ上たる薬鍋片手に茶碗携へ出、サアお薬と差出し、見れば包と文箱に、きつと目を付コレハしたり、お心悪いに何所へのお文、お氣がつきやうに何事と、問懸られてさあらぬ體、イヤ此文は母様へ、急に上ねばならぬ文、此包太儀ながら、つひ往て來てたもと物がるに、云付られてもおく〳〵と、どうやら濟ぬ今日のしだら、不承〳〵に、アノ参れなら参りませうが、アレ御らうじませ、空合も曇つてくる、勝手ケ間しう思し召ませうが、明日の事になされませぬか、テモ初とした事が、如何に心安立迚、主の云付る宿への使、明日の事にでもせいとは、如何に女の主なれば迚、主の云付を背きやるか、イエ〳〵〳〵何の御意を背きませう、御持病の癪も發り、お顔持も悪い故、イヽヤ癪氣は

の御面倒、有難う存じまする、其大切なお前様が、御病身なを案じ申、何卒お煩ひの出ぬ様にと存じますが、年はも行ぬ私が口から、ませた事をいふ小しやく者と、お叱も有うけれど、兎角に人は氣を晴して、物にくつたくをさへ致さねば、煩ひは出ぬ物じやと、功者なお醫者の申されましたが、其御養生には物見遊山、アノ、お前様も芝居はお好でござりませうなア、ヲヽ、成程私も芝居は好じやが、其方も定めて好じや有うが、イヤモウ好のだんではござりませぬ、さう申す中歌舞伎より操芝居の淨瑠理が、私は面白うござります、ヲヽ夫なれば咄しが合ふ、私もきつい淨瑠理が好、併たま〳〵の宿下りより外は、淨瑠理本で樂しむばかり、私もお屋敷へ上りませぬ其前は、よう見物に參りましたが、當り淨瑠理も多い中に、アノ忠臣藏の淨瑠理程、面白いのはござりませぬぞへ、ヲソリヤ誰も同じ事、アノ師直殿の憎さ〳〵、イヤ申し、お前様のお心には、鹽谷殿の師直へ切懸られし其所は、尤な事に思し召かへ、但し又、不了簡な事に思し召か、サマア何と思し召ます、さればの、御短慮には有たれど、意根に意恨重る上は、御尤にも有うかいの、イエ〳〵、憚りながら、ソリヤお前様の御贔負口、鹽谷殿は大不了簡、ナゼト御意遊ばせ、大切な身を輕々敷、短氣に其身を亡し給ひて、親御様のお歎、本に私とした事が麁相な、鹽谷殿に親御はないもせぬ物、ナニ何と思し召、家國を亡し奥様始、御家中散々、たつた一人の不了簡が、千萬人の身にかゝつて、御恩を受た者共の、歎の程は如

の御不便がり、御恩は海も猶淺く、山より高き御惠み、片時忘れぬお二人樣、此中のお文にも、母樣の細々と、いかう此頃はおしなべて、引風の時行病、一しほ案じらるゝ程に、コレ此守は萩寺の、厄病除のお守、傍輩衆も多い事、惡い病の折見廻、移らぬ程に大事にかきや、又其上に身用心といふて外にはない、給物に氣を付て、氣鬱せぬ樣に折節は、酒もたべて氣を晴し、煩はぬ樣第一は、御奉公大切に、又合藥の黒丸子、切た時分と氣を付て、モウ三年で御年も明、御禮奉公を早うして、下りやるを指折て待て居ると、小さい子供か何ぞの樣に、成人の此私を、大事がつてござる其中へ、アノ文を御覽じたら、何と身も世もあられうぞ、常に氣細な母樣の、此場で直に死しやんしよ、今死る此身より、跡の歎を見る樣で、胸もはりさく悲しさは、何の因果の報にて、親子の緣の薄墨に、書置筆の逆樣事、必お赦し遊ばせ、と正體涙せぐり上、身も浮ばかり取亂す、アヽ我ながら未練なり、女ながらも武家奉公、草履を以て面を打れ、何面目に存へて、人に顏が合されう、とは思へ共大切な、御前樣への忠義を思ひ、今迄はながらへしが、此書置に委細の譯、伯父大膳の惡事の密書、命を捨て上への忠臣、只何事も宿世の約束、最期のはれの支度して、一遍の經陀羅尼、唱ん物と一間なる、佛間をさして、日も西へ、夕日まばゆき空色も、磨立たる練塀作り、足利家の門口、文箱抱へて出るお初、形振見ずにいきせきと、行向ふより二人連、何かぶつくさ咄し合、來るもおはつが心の辻占、行違樣、叶はぬ〳〵モウ叶は

モウ直つた、日のたけぬ内早う行きや、アイ、何をうざ〳〵するぞいの、行といはゞ行ぬか、ハイ、只今參りますはいのと、文箱取上次の間の、案に胸も張葛籠、明て出したる生木綿の、在所染なる紋付も、部屋方者の一てうら、帶仕直して獨言、今日にかぎつて此お使、行ともなうて〳〵、尾上樣のお身の上が、案じられてどうもならぬ、昨日鶴が岡の喧嘩の樣子、御殿一杯の取沙汰を、御存じないか、私に迄お隱しなさるお心の程が、どうも私は案じらるゝ、眞實底から大切に思ふお主の大事を、虫が知するとやらいふのじやないか、アヽ心元ない〳〵、御機嫌に違ふても、往たふりして逝まいか、イヤ〳〵〳〵、どういふ急な御用やら、知ぬ事をさうも成まい、かういふ時の佛神樣、さうじや〳〵と麁手水、一心無我の手を合せ、南無觀音樣〳〵、南無鬼子母神樣〳〵、お宿へ參つて歸ります中、主人の身の上賴上ます、ドリヤ一走に走つて來うと、小褄りゝしく高かゝげ、錠口さして出て行、影見ゆる迄見送りて、こらへ〳〵し胸の中、思はずわつと伏沈み、消入ばかり歎しが、やう〳〵に顏を上、まだ昨日今日、馴染もない此私を大切に、大恩受た主人じやと、年はも行ぬ心から、大事に思ふて吳る心、コリヤ、忝いぞよ、嬉しいぞよ、岩藤へ意恨を察し、さつきにも餘所事に、淨瑠璃の譬を引、私が短氣な氣も出よかと、云進したる健氣な利發、今別れたが一生の、別れとは知ずして、嘸やとつかは戾つて來て、歎かん事の不便やと、身も浮ばかりせき上て、前後不覺に歎しが、やゝ有て顏を上、父樣や母樣の、此年月

傍で見る目のはがゆくて、さつきにも淨瑠理の譬を引、お心を引て見れば、鹽谷判官の短慮なも無理とは思はぬ尤じやと、おつしやつた時の其嬉しさ、其お心に張が有ば、天晴お手はおろさせぬと、悦びは悦びしが、ひよつとお前が淨瑠理の、鹽谷判官をなされてはと、態とお前をおなだめ申、透を見合せ岩藤を、一刀に刺通し、御恩を報じ奉らんと、思ふに甲斐も今宵の有樣、お書置の此面、追付敵岩藤が首引提て御無念の晴さしませう、必お待遊ばせと、意恨の草履手に取上て、打詠め〳〵、無念の涙血を灑ぎ、凝り堅りし烈女の一念、義女の其名を末の世に、錦と替る麻の衣、女鑑と知られけり、夜も早初夜を告て行、お夜詰觸の音さへて、鉄行燈の光りさへ、いとゞ淋しき長局、胸撫おろし手を組て、思ひ詰たる其眼色、氣も張弓の三日月も、入さの影の暗紛れ、手水鉢に差寄て、柄杓持手もわな〳〵と、救ひ上たる水一口、恨みの草履片手には、血汐滴る尾上が懐劔、片手片足の早ねたは、庭の千種に泣連るゝ、蛙の聲の物淒し、邊り見廻し奥の間へ、眞一文字に走り行、忍び入たる奥御殿折節人もとだえしは、天の與へと剰深く伺ふ折柄、何心なく岩藤が、出合頭は最究竟、待設けたる九寸五分、中老尾上が召仕ひ主人の意恨覺有んと突かくる、此方もしれ者身をかはし、ヤア推參なる下司女、ひしいでくれんと裲襠脱ぎ捨て、お初がさゝ腕むずと取、組伏んと金剛力、押せ共突共ひるまず去らず、一心凝たる主の仇、かよはき力にふりほどき、付入〳〵挑合、念力通す恨みの刃、請

ぬ、取て返すがまだしもの事、可愛事をしましたと、闇辻占にお初がはつと、見やる空には一群の、泊烏の鳴連て、最期を告る魂よばひ、心細さも身にしみて歩みもやらず立留り、ア丶氣にかゝる〳〵、辻占の今の咄し、烏啼の此惡さ、アレ〳〵けしからぬ胸騷、コリャお宿へは行れぬはいの、樣子は知る丶此文箱、封を開き見てのけうと、思ひ切て封押切、見れは包し草履片々、文取上て押開き、何じや、書置の事、コリャ叶はぬと懷へ、一字も讀ず一參に、御門の内へと三重入相の、鐘も無常を告て行、轉んづ起つ廊下口、半狂亂のお初が仰天、部屋の襖も案内なく、一間を見ればコハ如何に、朱に染たる尾上が亡骸、抱上て只うろ〳〵、エ丶しなしたり遲かつた、今一足早くばな、此御最期はさせませぬ、コレ申尾上樣〳〵、旦那樣と呼と答へも涙より、外に詞も泣沈む、ふえのくさりを思ひの儘、かき切てござる物を、何と答へが有物ぞ、ナニ御前樣御披露、ム丶コリヤさつき、窺ひ聞た岩藤が密書、是さへ有ば御身のわかりは立、有難い〳〵、コレ申御無念の魂はまだ家の棟にお出なされう、エ丶聞えませぬはいのう〳〵、昨日鶴ケ岡で岩藤賴に、草履を持てお打れなされた、其取沙汰屋敷一抔、御家來の私が身で、口惜しう有まいか、無念では有まいかいのう、女子にてこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を晴しかねやうか、夕邊一夜まんぢ共せず、今日迚も思案とり〴〵、モウ打明てお咄しなさるか、今打明てお咄しかと、見合せて見てもお隱しなさる丶、エ丶ふがひないお生れじやと、

も直に二代の尾上、血汐に觸れし彼が衣服、改させよと仰の下、世も廣ぶたに一重、お初が前に差出せば、思ひも寄ずお初は只伏拜み〳〵、有難涙にくれゐたる、大膽がひつと顔、源藏は詞を改め、君々たるの御はからひ感じ入奉る、イヤノウ尾上殿、殘る方なき御前の首尾、お羨しう存ずると、詞遣ひも早夫と、打てかへたる折目高。お初は何と挨拶も、暫し控へてゐたりしが、恐入て手をつかへ、勿體なくも賤しい此身に、空恐しき御懇の御意、有難い共嬉しい共、申上る詞もなし、たゞ此上のお情には、せめて主人の菩提の爲、尼法師共さまを變へ、跡吊ひ度御願ひ、偏に願上ますと、眞實見えし主思ひ、並居る女中も供涙、袖より袖や濡すらん、花の方も御嘆盡り、女たる身の鑑と成、願の一條感ずるに猶餘り有、去ながら、尾上が自害は私の意恨ならず、是密書、イヤナニ此書置、スリヤ其方が忠心も、仇を討しといふばかりで、主人尾上が志を立やらずば、全き忠とは云れまいぞよ、ナ、コリヤ合點がいたかと詞のなぞ、胸にこたゆる大膽は、空うそぶいてさあらぬ體、さときお初は心付、斯迄深き御恵、御意を返すも恐有れば、宜敷お請お取なし、源藏樣とわるびれず、おめず場うてぬ取廻し、實中老の役柄も、恥かしからぬ風情なり、いざ拜領の此小袖、早改てと女中の口々、お初は面目身に餘り、お請致せし上からは、早速衣服改て、御禮申筈なれど、せめて尾上が野邊送り、矢張此儘是なりで、供を御免の御願ひ、偏に願ひ奉ると、道を立たる貞實心、花の方も感心有、ヲヽしほらし

取給へと名乘懸、柄も折よと突通され、流石の岩藤七轉八倒、物音聞付女中方、てんでに長刀引そばめ、御前を守護し取圍、次の間より、大膳源藏、おつ取刀に欠來り、此體見るより驚く大杉、大膳お初をはつたと睨め付、ヤア儕大膽者、御寢所間近く劍戟を振ひ、大老たる岩藤を手にかけし、不敵の段々一歩だめしの刑に行ふ、覺悟ひろげと呼はる聲、漏て奧より花の方、女ながらも天性と、備る武威の功しや。しづ〳〵と出給へば、ハツトばかりに大膳大杉、仰は如何と控へ居る、お初は嬉しく岩藤を、心の儘にとゞめの刀、報ひは早き斷末間、心地能こそ見えにけり、遙か下りて懷中より、一通取出し尾上が同席、藤江が前に手をつかへ、此書付こそ主人尾上、心を込めし密書なれば、憚りながら御披露と、差出せばソレ此方へと花の方、手に取上て封押切、奧より端を繰返し、見給ふ體にお初が安堵、もう此上は片時も早く主人の供と、既に自害と見えけるにぞ、アレ停めよと花の方、仰に人々立重り、御意じや〳〵に、お初ははヽつと、恐入たるばかりなり、花の方は氣色を正し、ナニ源藏、思ふ子細有なれば、尾上が死骸目通りにて改めよ、早とく〳〵の仰に連、變果たる亡がらを、涙ながらに跡や先、女力のしほ〳〵と、蒲團の儘にかき出る、源藏立寄死骸引上、打返しとくつと改め、相違なき自死、篤と見分仕候、と申上れば花の方、ヤイ、初とやらん出かしたり、其場を去ず主の仇討留しは、武士も及ばぬ忠臣の程、ヲヽ神妙にも健氣也、其忠臣を感ずる餘り、今より取立中老役、其名

葉の、其中山のさゞめこと、言はぬ色なる床の內、實の一ツだになき花の、氣強いお方と目に漏る、淚にせぐり關川の、寢物語のうさつらさ、結ばぬ夢も覺が井に、番場鳥居本打過て、流るゝ日脚よどみなき、越知川にこそ着にけり。姬は猶更行惱み、只さへ旅は憂物と。其言種も況て又、人目忍ぶの憂旅と、胸もせまりし露淚、しほるゝ花の一しほれ。ヲゝ道理〳〵實誠、踏もならはぬ道もせに、世を忍ぶ今の憂身、道行人の今教し、越知川と云は是で有うが、折も折と渡しも絕え、ハテどうがなと見やる向ふ。岸に添たる苫船を、是幸ひと嬉しさの、堤傳ひに岸はり上、ノウ〳〵其船へ物申さん、急ぐ旅路の足弱を連、渡しもたえて難儀致す、浮世の情渡してたべ、のう船人と呼子鳥、覺束なくも夕霞、一圓の心火炎々と、立寄ひたる苫舟の、內には花の立姿、世を浮船の梶枕、戀中川の深き瀨も、朝妻船と世の夢の、覺てはかなき道芝が。馴れし廓の一ツまへ、きつゝなれにし水馴棹、指手引手も全盛の、里の姿を其儘に、影を三ツ瀨の渡し守、見やる二人も夢現、ア其方は道芝じやないかいの、ホンニさうじや道芝殿。不思議な所で、アゝコレ〳〵必ず麁相云まいぞや、ムウ何其不思議晴やらぬ、今は此世になき人の、此浮船に此妾は、夢じやはいな、ヤア何と、夢幻の有やなし。露置日陰稻妻の、光待間の仇し夢、浮川竹の底深く、浮みもやらぬ流れの憂身、ういぞつらいぞ勤のならひ、煙草呑でも喜世留より、咽が通らぬ薄煙、泣て明さぬ夜半迚もなし、人の詠となる身ははんに、しんく

き初が願、聞屆たり、勝手次第と仰の下、大膳は不興げに、ナニ源藏落着の上は片時も早く、見苦しき女が死骸、御殿の穢片付召れと、云に源藏二の間の口、イザ女中達、乘物をかき入て、廣敷迄出されよと、詞に隨ひばらく／＼と、淚拂ふてかき上れど、昨日迄も今朝迄も、お情受し尾上樣、いたはしさよと女氣の、又取亂す咽び泣、お初は跡に引添ど、淚も限り盡果て、步も行も夢の夢、胡蝶の夢は悟れ共、悟り兼たる愛別離苦、會者定離ぞと定なき、夜半の嵐に花散て。惜や可愛や手向草、主は消れど名は朽ぬ、忠臣義女の道廣く、館をはなれ三重「出て行

第八　道行戀の幻

なき影の、絶ぬも同じ淚川、寄るべ定ぬ浮船の、甲斐なきえにし薄雲に、幻衣のはかなさも、餘所は詠めの櫻時、月と花との二人連、結ぶとすれど解け安き、寄片絲に縫之介、消にし露の道芝が、なき魂慕ふ戀衣、思はぬ人を身にかへて、立る心の操姫、ならはぬ旅の妹背鳥、鎌倉山の朝なだき、霞とともに日をこめて、世を忍ぶなる形振も、曇り勝成花曇、胸の曇も晴やらぬ、思ひの影の鏡山、近江路さして行空も、片思ひ成中津川、樫上坂もいつしかに、濁さぬ水の桶暇、戀の重荷のうき寢鳥、君に大田の戀中も、深き鵜沼の宿越て、末の松山長柄川、御影寺の誓影賴む。今の憂身をくいせ川、六の渡りの舟よばい、いつしか花の心とけ、互に思ひ青

夢の世に、年經ぬる身は老にきと詠じたる、大宮人の言の葉に、鏡山の里離れ、軒も疎の片庇、門に懸たる看板も、世の立大庇口やさん、墨色薄さかせ世帯の、春の寒さを袖屏風、肘をかたしき轉寢も、住所淋しき侘住居、馴ていつしか操姫、略すとすれば自ら、鄙に目馴ぬ爪はづれ、差寄て、コレ申し又お風召さうぞへ、申し〳〵とゆり起され、やつと目覺す縫之介、ヤア道芝か、死だと聞た其方がマア、何として此有樣、イヤ申し縫之介樣、そりや何と御意遊ばす、ムツこりや夢を御覽じたの、ヤ本に夢で有たか、道芝じやないかとは、マ面白さうな、サア替つた夢じや聞てたも、其方と私が鎌倉から、爰へ來に旅の空、越知川の渡場で、道芝か幽靈に、ヲヽコハ、ヲヽ怖い筈〳〵、其方と二人此私を、我夫じや我夫と、せり合ふた夢見たは、執着深く、迷ふて居るか可愛やと、云ふ顏熟々打詠め、同じ女に生れても、思はるゝ身と思はれぬ、身は夫程に迷ふかへ、道さへ分ぬ深山路の、木々にも花は咲物と、ぴんと尻目は有りふれし、涙ぞ戀の戀ならん、聞にもじ〳〵縫之介、手持無沙汰の折も折、立出る畑介が、イヤ申若旦那、世を忍ぶお身の上で、端近の轉寢、今にも主が戻つたら叱ましよぞへ、又操樣も操樣と、心付れば縫之介、本にさうじや、十內の歸らぬ內奧へ行、サア其方もおじやと手を取て、わりなく見えし妹脊中、打連一間へ入跡へ、浮世とは、今ぞ身に知十內が、心のしがく內證の工面の胸も晝下り、とつかは戾る我家の軒、內へ入より邊を詠め、コレハ〳〵畑介樣嘸お待兼、

まんくの苦の世界、四季の紋日は小車や、先春は花のもと、手折し枝を樂しみて、床に詠る春の風、そより〳〵と花吹散す、ちらり〳〵と櫻の薫り、野山を寫す里景色、夏の曙有明の、つれなく見えし別れ鳥、ほぞんかけたと囀るは、死出のたをさや、冥途の鳥と泣明す、籠の鳥かや恨めしや、秋の夜長に牡丹花の、燈籠踊の一節に、殘る暑さを凌がんと、大門口の黄昏や、いざ鈴虫を思ひ出す、つらい勤の其中に、可愛男を待兼て、暮待虫を思ひ出す。虫の聲々可愛らし、我が住家は草葉にすだく、露を枕にさはらば落よ、泣て夜毎の妻はしさうに、殿御戀しき機織虫よ、露を枕にさはらば落よ、泣て夜毎の妻はしさうに、晝は物憂草の陰、冬は落葉に、戀の山道踏分て、染木〳〵には、草葉も枯てサイナ〳〵、君が心に木がらしの、踏分て染木〳〵には、草葉も枯てサイナ〳〵、君が心は、木がらしの、草に吹しく朝の霜、木の間のしづく置そへて、イザ此方へと夕暮の、茜さす日も染色の、山の端隱れ諸羽がい、手に手を鳥の夕告時、姫はやらじと留むる袖、引ぞわづらふ花と花、顏に照そふ楓の綻び、裏吹紅の夕紅ゐ、裳ほら〳〵散かう風情、はてし繩手の一筋を、二道かけしあだ櫻、散行影の花のふゞき、花の鏡の川の面、跡白浪も夢の夢、覺てはかなき三重

第九

た浪人殿、様子を聞は身過の占は上手じやと、村の者が噂するが、私も一算見て貰たいが、宿にならば頼て下され、サレハ此四五日は八卦も隙故、此鏡山の傾城町へ、辻賣の占やさん、モウ戻りさうな時分なれば今少しお待なされ、ドレ澁茶など御馳走にと、爐へさしくべる一煎、自在の竹も眞直な、正直正路馬鹿律義、庄屋殿顔も打やつて、イヤ何十内殿、考へて貰いたいと云其子細はの、へゝホゝどうやらわしや云にくいわいの、デモ譯おつしやらんと知れませぬ、そんなら云なせう、アノ、色事の事じやわいのホゝゝ、ヲヤ〱恥しうて云にくいはいの、サアおつしやりませいな、そんなら死ると思ふて云ませう、アゝ能年をして、貴様の手前も、面目中橋おまんが若後家、どう云ふ縁か惚たが因果、村中へ對し、此様なみだらがましい事しては、庄屋の役目がとんと濟ぬと、たしなんで見ても情なや、朝晩かのめが、路次の出這入り、見れば見る程彌増戀路、一日逢ねば百の錢、つゝけてやりたい、私が氣を、知すにくらす彼女、此中聞はいやな噂、きやつめには瘡けが有て、前度大きに煩ふたと聞て、アゝイヤ待暫し、何程戀は叶ふても、自慢してゐる此鼻が、ひよつとマアへたと成、ふが〱に成ては濟ぬが、若又夫も外のやつが燒餅で、藁を焚て邪魔するのか、そこがとんと分ぬ故、此占が見てほしいのじや、是は〱先以て、風流な面白いお願じや、シテ邪魔仕さうな其わろは、お心當がござりますか、サレハ〱其邪魔方めは、武佐の宿の問屋めじやが、しん底行ぬやつじやて、ムウ、武佐

カノお二方は、アヽイヤお二人は今奥へ、夫は重疊〳〵、扨て內證の工面に、方々と歩行て見たれど、モ行ぬは金、兎角頼みはお前の占ヤ兎やかう云內最う晝過、お客達も來る時分、御苦勞ながらいつもの通り、ヲヽ合點じやと押入の、戸を押明てそろ〳〵と、這入四這跡引立、煙草くゆらす納め顔、折柄ひよか〳〵表口、ぬつと這入て、頼みませう、庄屋の作左でござる、十內殿はお宿にか、ホコレハ〳〵御遠慮深い、萬事お世話に成まする私、御案內とは、イヤ〳〵さうでおりやらぬてや、何程今落ぶれやつても、親父の代迄は此村の長百姓、親御の代に身上仕もつれ、打續く不仕合に、親達始め內儀迄、ばつた〳〵死果られ、乳呑子の娘を連、知邊が有迚鎌倉へ下られたに、又此春は內儀の年忌と、奇特にも戻られて、終づる〳〵と在所住居何とマア、アノ結構な鎌倉に居馴た身で、片田舍の在所住居は、小淋しうて嘸わるかろ、ヤコレ少又此方の內へも咄しにござれやと、奥庭もなき深切咄し、コレハ〳〵御馴染迚、御懇切なお詞、今おつしやります通り、私も鎌倉の緣者を頼み、アレ是とする中にも、娘一人を心の樂しみ、其娘めも成人致し、今は鎌倉の官領樣の、奥女中へ奉公仕りますれば、身から一身の今の氣散じ、夫に又此程は、鎌倉の緣者共より、據ない夫婦連の掛人と、聞て此方も氣の毒の、眉に皺寄にじり寄、夫を私がいふ事じやて、行ぬ中へ此頃見れば、わいや〳〵と口がふへて、其士が‥にそうしやると、影ながらも思ふてゐた、ヤ夫はさうと、アノ貴樣と一所に爰へ見え

から見せうと、算木取出し鹿爪らしく、ハア丶コリヤむづかしい卦じや、色道トチナンヒンといふ卦じや、色事と見えますわいな、ヤアあの私が願か、色事と見えますかいの、見える共〳〵、しかもコリヤ外から燒餅で、惡い病が有といふて、お前と縁を切うとしをるやつが有、ヤア其燒餅迄見えますかいの、見える共〳〵、其邪魔するやつの方角は、エ丶辰巳の方、武佐の邊りの者で有うと、戸棚で聞た一通り、云並べられテモ扨も、けうといは、是程に迄合ば合物か、ヤレ〳〵怖い見通し、モウ〳〵お暇申ませう、皆樣是にと云捨て、我家を指して歸りける、跡見送つて軍平は、さもいかめしく膝摺寄、見通しと有ば、此方より申すに及ばず、占申す其一件、見通してくれめせと、賴みかくれば畑介は、蓍木取出し押戴き、暫し考へ居たりしが、橫手を丁ど驚顏色、見るより軍平氣をいらち、イヤ何先生、殊の外の御驚、如何の義成ぞ、早く樣子を聞し召れば、サア丶扨氣の毒千萬、全體此卦が首落損といふ卦で、變交は離の卦に當て中切たり、何でも物の離れる心じやが、何ぞ心當がござりますかと、問れて軍平諸手を組、小首傾け居たりしが、ハア丶奇妙〳〵、某鎌倉を踏出す時、我等が女房は懷胎、又秘藏の三毛猫、こいつも懷胎、相孕は天地開闢の忌言と、孫子吳子も云れしが、兎角是のみ氣に懸る、片時も早く、卦の面、占召れと氣をせいたり、サア面をいへば斯でござんす、お前は生得正直な、能人で有けれど、生れ付て欲深く、惡人に一味して、大切なお主樣を、しばれく丶れと

の者とおつしやれば、爰から方角はかう〳〵と獨言、丁ど辰巳へかゝつてゐる、コレ〳〵ソリヤ何事を云しやるぞいのう、ハイヤ、私も此間は、アノわろに八卦の稽古、夫で方角を考へなしたと。ぬらりくらりも世渡りの、筈を合せる折こそ有、一目にしるき鎌倉武士、家來引連權柄眼、案内もなく内へ入、跡の村にて噂に聞た、正銘見通し占者とはお身がことか、大切成尋者、詮方盡た折に、幸一筭賴む、ソレ早く〳〵、サア早く占へ、是は〳〵お歷々樣、お急ぎの樣子なれ共、カノ占者只今は宿に居ませぬ、モウ今に歸りませう、イザ是への挨拶に、遠慮荒しこ打連て、上座にむずと押直り、身が事は定めて音にも聞つらん、鎌倉足利殿の御内において、原田軍平實永といふおれさ〳〵、官領家の弟縫之介といふ徒者、細川家の息女操姬、夫婦連の欠落者、八卦の面に考へさせ、行衛尋出すにおいては、褒美は乾度山吹の、黄金の花を咲せて呉んと、髭撫上しくはんたい頰、始終の樣子十内が、聞濟して立上り、押入の戸へ相圖の咳、戸棚の中をそろ〳〵と、後へそつと畑介が、廻つて出る表口、何氣内證通しのてんたん、内入機嫌にこ〳〵と、ホヽウ作左衛門樣、お侍樣、どなた樣も御免〳〵。とお家の眞中、包おろせば十内が、サテ〳〵今日は遲い戻りの、此お二人も最前から、貴公の戻りをお待兼じや、ハイイヤモ今日は廓の門を這入や否や、ヤレ待人よ失物よと、煙草一ぷく呑隙なく、ヤレ〳〵えらう草臥たと、包解けば十二銅、見るより庄屋は呆れ顔、畑介は會釋して、イヤ申作左樣、先お前樣

ざし百貫、白幣には南鐐の雪の白銀花を咲せて、大三寶へ山盛に、是を献じて米屋に酒屋、横代家賃、節季〳〵の溜りおどもり〳〵さ〴〵の、かゝり穢と科戸風や八重の鹽路、日向のおどの橘の、甚だ早き潮を以て、拂ひ給へと祓はすれば、其罪科の災難障り、さつぱり祓ひ捨さへすりや、首落の難受合ふて、除いて進せる我法力、斯の通りと出放だい、ハゝア驚入たる貴公のお詞、此上に何疑ひ、御存しの通り旅の空、有合せたる路銀の有だけ、斯の通りと懐中の、打違より小判三兩おづ〳〵と差出し、是は至つて些少ながら、お初穂の眞似事、先何よりは急難の、首の所を御祈と、四角四面に相述れば、畑介は不承〴〵、コリヤ何じやたつた三兩、大層な祈禱を云付て、たつた三兩の目くさり金では、先此方は得致さぬ、脇をお頼みなされませ、おいとし様やと入んとす、アゝ申し〳〵、是非〳〵祈禱を頼ぞとよ、イヤ〳〵、迚も是では祈られぬ、夫は餘り、お胴欲樣でござりますと、ぐんにやり軍平思案を廻らし、ヤナニ、コリヤ〳〵、コリヤヤイ、家來共やい、わいらも今聞通り、主人の災難救ふは忠臣、違背有まい、其方共が嗜の、路銀を何卒貸てくれ、何がさて〳〵、主君の爲と有事なら、何しにいなみ奉らんと、てん手に出す懐の、壹歩貳歩を取集め、御覽のごとく家來けん族、取集めました所がやうやく壹歩が、ハヤ一二三四五、ハイ六歩ござります、御受取下されて、よきに御祈念願上奉る、ヲゝ御上は障りなふ武運長久御祈申せば、お氣遣は少もなし、目出たう受納致したと、聞

鵜の目鷹の目、惡人に方人なさんす故、天道の憎しみで、遠くは三日、近くては今宵中に、お前の首は落るぞへ、何とすりやあの、天道樣の憎しみ故、此軍平が首は今宵中に、すぽんと落るかな、如何にも左樣、スリヤ此首が、ハア、ヱヽ、能も武運に盡果しと、目に持涙ばた〳〵〳〵、齒の根も合ぬ風情なり、畑介猶も圖に乘て、ヲヽ悲しいは尤じやが、まだ氣の毒なとが有、お前の内儀もお前に似て邪見な故、殊の外な難產で、いかう苦しんでござるが、命の程が危い〳〵、ヤア〳〵夫はマア本かいの、是のう〳〵とばかりにて、わつと聲上泣出す、アヽコレ〳〵、まだ有〳〵、お前の秘藏になさんす三毛猫も、夫が何と致したへ、サア六月二十九日の夜、犬に嚙れて死だと見える、サテ〳〵氣の毒千萬と、聞よりいつそ涙も留り、ぎつく〳〵としやくり泣、雨氣上りの蟇、灸をすへたるごとく也、ヲヽ道理〳〵、其樣に思はんす事なら、祈禱でもアヽイヤ〳〵、まだ〳〵お前の氣が直らにや、アヽ申し〳〵、モウ〳〵是切にとんと心を入かへますはいな、スリヤ眞實惡心を、飜へす心かへ、是がまあ翻へさずにおられませうかいな、イヤ申、此首の落ぬ樣、祈禱してさへ下さらば、死でも御恩は忘ませぬ、ムヽ其心なりや私も又、首の落る災難を、祈り退けて進せる心じやが、此祈禱は一通りの安い初穗では、祈られぬ、先神前の飾付、供物の數が日數に表し、三百六十四品を飾、綾や錦の水引戸帳、神酒も並酒はならぬなり、伊丹劍菱男山、菰冠の數十二樽、是も十干の數に合せ、青幣には青

に顔打詠め、ムツ驚き入た出世の様子、土産物の美々しさ、子細こそ定て有らめな、アイ其子細と申ますは、大切な尾上様、岩藤と申局役に恥しめを受給ひ、アノ御自害なされましたわいなア、ナニ御自害なされしとや、シテ〳〵其跡は、如何じや〳〵、大恩受しお主の敵、其場を去ず御殿にて、岩藤を討留ましてござります、何じや、當の敵を其場も去ず討留しとや、ムヽヽ遖手柄、出かした〳〵、扨又出世の其譯は、サア其敵岩藤を、討留し御褒美迄、尾上様のお跡役、中老役にお取立、名をも二代の尾上と下され、冥加に餘る此身の出世、また其上に有難い御意には、お前の事迄お尋の上、出世の姿親にも見せ、悦ばすが孝の道じや、諺にも古郷へ錦を偹る其本文、三十日の日數のお暇、遥々と尋登し今日の今、何に譬ん嬉しさを、御推量遊ばせやと、功成遂し悦びは、涙に含む其風情、聞親の身は猶更と、思ひの外に中内が、顔色筋をあらゝげて、スリヤ敵討た其褒美、其身に咲す花の出世、其方嬉しいか、人たる者の立身出世、願ぬ者はなけれ共な、爰な道知ずめ、今我が云並たる忠臣顔の立身出世、忠の道に似た畔道の、是を名付て横に歩行、蟹忠の道といふはいやい、コリヤよつく聞、誠忠義の譽といふはな、御敵を討亡し、御主人を助け参らせ、其身も君に取立られ、君臣共に全ふして、目出度君に仕ふると、立身共譽れ共、人も譽名をも殘す、大恩受し大切な御主人、敵の爲に自害なされし、其敵討たはよけれ共、御褒美迄取立られし、其御主人は何人ぞ、儕が主人の又御主人、如何に御意

て軍平氣も落付、ヤレ〳〵今は心もさつぱり、少夜の明た心地せり、然らばお暇、早お出か、委しくは鎌倉より、おさらば、さらばも門の口、きはいいさんで立歸る、跡に二人は寄てぞり、テモ味いお客がとれて、今日は思はぬ能もうけ、祝事にお神酒上う、如何樣まんの直つた目出た酒、肴は私がして置う、そんなら酒屋へ一走り、いて來ませうと烟介は、勝手見廻し缺徳利、とつかはとして出て行、憂かりける、世も引替へし今の身の、花咲春に近江路へ、鋲乘物の光りさへ、名も照添し鏡山、古郷へ歸る唐錦、油段掛たる挾箱、對の六尺打物も、所目馴ぬ供廻り、駕脇の小侍、門口に小腰を屈め、卒爾ながらお尋申さん、十内樣には御在宿下さるや、鎌倉より御息女樣、只今是へ御入と、聞に驚く十内が、表を見れば美々敷其體、不審晴ねばにじり寄、見ますれば、お歷々の御女中樣を、娘に持し覺はなし、定て夫は人違へと、云間に夫と表の方、駕前にひざまづき、御賢父樣御在宿、イザ御對面と駕の戸を、明る間としと立出る、お初も今は咲花の、世に開きたる出立榮、彌生時服の合白に、三千年祝ふ桃色の、打掛姿艷に、しづ〳〵と打通り、我家ながらもおもはゆく、父の前に手をつかへ、先何よりはお爺樣の、御機嫌のお顏を拜し、お嬉しう存じまする、付ましては私事、思ひ寄ぬ身の出世、譯はゆるりとお咄し申さん、遙々と鎌倉より、長の旅路のお土産迚も、心ばかりと詞の下、飾立たる白臺に、沙綾縮緬の卷物を、目通りに並べ置、十内は默然と、手を拱きて居りしが、さも不思議氣

事では有まいく、名聞欲の立身出世、出かし顏の忠義せんざく、勘當じや、出てうせい、ヱ、、イヤサ勘當したは大恩有、尾上樣の御兩親へ、せめてもの身が云譯、大切なお主を失ひ、娘めが其代に、褒美の出世致せしと、どの頬下て何面目、勘當は愚な事、生替死替り五々百生も生なかへ、又と面は合さぬぞと、義に激せさる一徹の、裏は子故の悲き恩愛、見せじと隠す親心、裏の裏成節義の涙、まぶたを洩るゝばかりなり、云詰られて詮方も、詞なくく表に向ひ、コリヤ皆の者、道々も云聞す通り、大切な御用承り、尋ね來りし其譯を、勘當請しアノ父樣へ、一通り申談ずる其間、次の村代官が方に控へ居て、暮を相圖に迎の節、云付た品持參せよ、ハツト受たる家來共、跡の村へと急ぎ行、折柄戻る畑介が、來かゝる門に立聞の、内の樣子を窺ひ居る、尾上は詞改めて、何申し十内殿へ、足利家よりの上使、何御上使、アイ、上使でござりますと、さも重々敷其勿體、官領家の奥女中、尾上殿とやらいふ御歴々、御上使とは身に取て覺なけれど、イザ先あれへ御通と、刀引提不承く、上下座を切て控へ居る、上使迚別儀ならず、其方事、お家の一家老紙崎が家に其昔、長役勤居たりし、高木十内といふ名苗字迄、子細有て上には御存じ、然るにさいつ頃、綸旨の紛失、御舍弟縫之介殿御申譯立難く、姫君諸共御行衛知ず、所々方々御在家、尋捜す其折から、此鏡山に蟄居なせし、其方が方に二方共、かくまひ忍ばせ參らす由、事明白に注進に及ぶ、奥方花の方樣の御賢慮有て、此尾上を檢使の役、京都

が重い迚、倍臣の身分として、直參と成て主人の跡役、主の名迄下された迚、よし〳〵と其名を名乘、いかめしげに忠義呼はり、第一が御主人へ無遠慮、コリヤヤイ、何程主の主じや迚も、我が主ではない、其方が御主人ではない、我が主人と頼みし人は、自害なされた尾上樣成ばやい、外の主人に取立られ、嬉しいの有難いの譽れじやの手柄のと、名聞ぶつた賣物忠義、心有人々は、爪はじきして笑ふはやい、畢竟主の不仕合が、其方が爲の仕合と成は、お主の災難が家來の身の吉事と成た無理出世を、儕はさつく嬉しいかいやい、形は產共其樣な根性には產付ぬ、ヲヽ出かした、忠義者じや、其性根から身に纒ふ、古鄕へ飾る錦の袖も、身共が眼からは綴と見える、乞食め、非人め、其腐た魂で、ひけらかしたうせた人畜生、見るも中々いま〳〵しいと、並べ立たる土產の卷物、立蹴にはたと蹴散し〳〵、一句一言道理の道理、云詰られて一言の、返す詞も泣入ばかり、淚の外に答へなし、傍に聞ゐる附々は、シヤ法外者赦されずと、友打かけて詰寄を、アヽ是々慮外せまいぞ、今お聞の其一々、此身の上にひしとこたへて、御返答に詞もない、騷いで見苦しい、控へて居よやと押鎭め、制せられて附々も、鎭りかへつて控へ居る、尾上は猶も恐入、お腹立の一々さら〳〵、無理とは存せねど、是を斯との云譯は、親にも打明て、云れぬといふ大切な、尾上樣のお志、立る忠義は神ならで、外に夫ぞと白露の、心の內のせつなさを、能に推量下されと、淚に咽び詫にける、親に云れぬ忠義といふは、ろくな

なく、御家來の娘が御主樣と肩を並へ、其弟御樣が、其家來の世話におなりなさるゝといふも、時世連おいとしぼや、世は小車の浮沈みと、かこち涙の優くも、心を汲し詞の色、畑介もしば〳〵と差俯向て居たりしが、テモ扨も〳〵御深切添ひ、とは云物の昔は昔、今は今の其方の身分、家來わしらひはモウ是切、ナニお女中樣、アノすい鉢の山吹の花、人の身に譬ていへば、やもめ女見る樣な物、ナ、何と思し召ますへ、アノ山吹な人に譬、やもめ女子見る樣なとは、ムウ、七重八重、花は咲共吹山の、實の一ツだになきぞ悲しさ、サア、其實の一ツだになさ、花の香は深うても實がならうては、先祖へ對し大の不孝、アおつしやればそんな物、盛り短き人の身なれば、誘ふ水有ばいなんとぞ思ふ、世を萍の思ひのたけ、畑介樣、お前は何と思し召ど。言ぬ色なる山吹の、口なし衣主や誰、畑介はうつかりと、現心に何が何と、身を萍の其よるべも、誘ふ水有ば誘はれて、流てくるお心かへ、サア、マア心は心なれど。浮氣がちな男心、是でど見ゆる心中を見ねば、返事のならぬも尤。イザ心中をお目にかけんと、云より早く腰刀、拔かくれば、アヽコレ申し、そりや指をお切なさるか、是は又お前も初心な、若輩な心中立、ヲヽ阿房らしい、ムヽ指切がお氣に入ずは腕を突うか股を突のか、イヽヱイナア、私がお前にお望申す心中は、サア其心中は、お前のお首が貰たい、マア何が何と、サア二ツないお命が心中に貰たい、ムヽコリヤ面白珍しい類のない心中じやはへ、其又命が心中にほしいと云、其方の心は、サア

への申し譯、縫之助樣の御首受取歸るべき首、ホヽヽヽ本にマアあられもない、女の役目不相應も、主命は背かれずと、是非なう申上まする、女だてらに子細らしい、鹿爪らしい口上を、ホヽヽヽ、さ御粧ふ、始終の樣子十内も、當惑せしが思案を極め、ムウ委細の事注進有ば、陳するに詞なし、花の方樣の御賢慮、女中の檢使此上は、御諚のごとく、縫之介樣の御首、御檢使へ御渡し申さん、暫しの內あれ成一間へ、御休足下さるべしと、胸と胸とを隔の襖、明て言れぬ親と子が、拔差ならぬ手詰の切羽、つばめを合す一思案、伴ひてこそ入にけり、間に立聞畑介が、何げないふり酒德利、勝手見廻す納戸口、此方は障子押明て、出る尾上を畑介が、不思議さうに打詠め、是はまあどなたかは存じませぬが、ようマアお出なされました、私めは是の掛人、畑介と申す居候、してお前樣は何御用でお出なされたお方樣と、何くはぬ顏知ぬ振、ムウ、此家の掛人と有からは、アノマアお前樣が聞及びました、畑介樣でござりますか、存せぬ事とは申しながら、無禮の段はお赦しと、會釋こぼして手をつかへ、敬ひかしづく其風情、アヽ申し〳〵是はマア何とした迷惑、モシヱ、私めは其樣に、お歷々のお前方に、結構な御挨拶受まする者じやござりませぬと、身をうぢ〳〵とかゞみ居る、子細お咄し申さねば、御合點の參らぬ筈、私事は十內が娘、初と申しまする者でござります、樣子有て取上られ、此身分とは成たれ共、親十內が御主人、主膳樣の弟御樣、御流浪の御樣子も、よう存じて居まする、人の流と水の行末、飛鳥川の淵瀬定め

姫諸共、膝に引敷剛氣の畑介、捻伏せ〳〵怒のをす聲、ヤイ二人共によう聞よ、十内初めわいら二人へ、貞節に見せかけて油斷させ、首討て大膳殿へ進ぜる心で、鎌倉へ飛脚を立、檢使に呼だアノ軍平へ、今首にして渡す程に、覺悟せよと覺えの業物、如何は仕けんきりはづせば、刎返して縫之介、畑介が左の脇腹突通せば、うんとばかりに倒れ伏、音に驚く十内も走出、コハ何事と押隔つ、妨すなと打拂ひ、留め刺んと立懸るを、ヤレ若旦那今暫し、早まり給ふな只一言、申上度子細有と、云ふに十内詰寄て、イヤコレ畑介樣、日頃よりの貞節義心、夫に引かへ此場の有樣。やうすならでは叶はぬ所、サア〳〵其子細何と〳〵と問詰られ、ヲヽ其不審只今晴す、鎮つて聞て呉れと、云より早く刀を拔、左のあばらを突立聲震るはし、非義非道を働いて、君を欺き奉り、御手にかゝる其子細、一通り申上ん。忠臣無二の縫崎が、弟と生れたれど、若氣の至り身持放埒、兄主膳に勘當受け、所々方々と流浪の身の上、身にしむ秋も肌薄く、霜に臥寢に立、何國を夫と身の佇み、飢に勞て死んず身と成果し其所に、仁木將監が逆意の樣子、聞と等しくお舘へ馳付し所に、逆賊の源藏が斗ひとは露程も、思ひ寄ざる此畑介、やみ〳〵と欺かられ、相摸川へ落行は、仁木なりと心得て、此は宵闇猶更に、降しきる春雨に、川水高き相摸川、渡りも絶て水音も、さも物凄く更行空、雨夜の星とひらめく松明、遠目に夫と窺ひ見て、コハ源藏が詞に違ず、仁木將監此道を、落來るぞと心に悦び、としや遲しと松影に、

其心中外にはない。コレ此小柄が其心と、投出したる覺えの小柄、見るよりぎよつと畑介が、手に取上て見て恟り、ナニ此小柄が心中を、望むと云其譯は、ソレ其小柄御覽じたか。足利家の御重寶、家彫の二匹獅子、紙崎の家へ拜領有しは、世の人の知所、先君持氏卿御病死とは僞り、日外仁木が騷動の節、相摸川において不慮の御難儀、何者共知す持氏卿の、御召の馬の足を切、御首を討て立退し、其曲者が取落せし、二匹獅子の其小柄、エヽスリヤ持氏卿には御病死ならず、相摸川にて御落命。ホイ、ハツト覺えの小柄。白眼詰諸手を組で一ツ息、ヲヽ當惑なさんすも無理ではない、假初ならぬ命の心中、此場で夫と、ツヒちよつと、心中も見せられまい。暮を限りにお前の心中、待て居りますぞへ、畑介樣と、詞の目釘鯉口も、しめて小柄の判事物、一間へこそは入にけり、跡には一人畑介が、とつおいつの一思案、暖簾の影に縫之介、姫諸共に窺ふ體、夫と見るより思案を極め、四も五も喰ぬ上使の女、縫之介が首討に來たと云立て、實はおれを仕廻ふ氣で、爰へうせたアノ女、コリヤ大事に成て來た、先を越されては後手に成、ちつ共早く縫之介が首を討、兼て手筈の軍平を以て、大膳樣へ差上んと、大だら腰に不敵の畑介、奥をさして窺ひ足。イデ一討と納戸口。べつたり行合顏見合せ、明た口へ二人が細首、覺悟ひろげと切込だん平、さしつたりと受流し、主に刄向ふ人非人、切先に覺えよと、丁と打たる刄先と刄先、姫は危さ氣も絶〴〵、剛力の畑介に、切立られて縫之介、ひるむ所を

に頼みし、源藏こそは心得ね。其方を謀り君を失ひ奉りし、其逆賊は大杉源藏、此上は油斷ならすと、不審の詞姫君も、共に涙の聲くもらせ、知ぬ事迚我君の、早まり給ひし今の其身、いとをしさよと御歎き、十内も泣目を拂ひ、御幼少より身持放埓。御舍兄にも御勘當、此年月の御艱難、いつ花實迚咲すして、惜や盛りを散すかと、道三世の別れの涙、歯を喰しばり伏沈む、歎きの内に一間より、御用意よくば縫之介樣、イサお腹召させいと、立出る尾上が前、縫之介は差寄て、綸旨を失ひし其科人、我首討て家の相續、偏に頼と首差延、思ひ詰たる覺悟の體、ヲヽいさぎ能い御覺悟。花の方樣の御賢慮にて、お身代の首討と、太刀取兼し撿使の役目、主人尾上か名代として、心を盡し術を以て、先君の御敵を討亡し、主の尾上が志立よと有、重きお主の尾上樣の。御忠節を無にせじと、名聞の出世共、譏らば譏れ名を捨て、お志を立たい爲、ヲヽ此親も最前は、冥利に更る不所存者と、勘當せしに樣子を聞、安堵致せし身の大慶、御推量下さるべしと、怒の涙引替て、嬉し涙ぞ道理なる、日も黄昏の其時刻と、畑介か傍へ差寄て、此尾上が目利の身代、優にやさしき縫之介樣の、御身代に逞しき荒男の畑介殿の首討て、實撿に入大杉が、逆意の工み見顯す、見出しの種の身代首、イザ是迄と露散る光り、刄の下に畑介が、首は前にぞ落てけり、ハットばかりに人々も、手向の一句表には、兼て相圖の尾上が迎ひ、首桶携へ入來れば、イザ此上は二方共、鎌倉へ御供して、大膳が方に奪取たる。御綸旨

身を潜め窺ふ所、大杉が追入と見え、險しく戰ふ其有樣、時分はよしと川の面、水底を潜行、馬の諸足切付れば、たまりもあへず首搔切、追入を遁れん其爲に、其儘首は水中へ、打込で其場を遁れ、われ是と見合す內、持氏卿にも御病死とや、力と賴む兄主膳も、御勘氣受て行衞知ず、時節を待て歸參の願と、此鏡山へ尋登、昔の好見十內が、情に依て送る月日、お二方の我をお賴み、エヽ天の與へ、我忠節盡さんは、此時節と思へ共、エヽ口惜きは其日を送るたつき迚も、浪人者の相住居、お二方の御養育、何とせん角とせんと、迫る貧苦の剛敵には、力迚も弱り果、思ひ付たる占やさん、十內と云合せ、愚な人を欺し衒り、盜賊よりも猶卑怯な、世渡りなして今日迄も、心を盡す其折柄、今日はからずも上使の女、コレ此小柄を我に見せ、相摸川の其一件、聞たる時の我悔り、天日を戴きて、片時の內も立べきや、切腹迚も武士の業、主を殺せし世の大法、竹鋸の此身の科、兎や角と案じ煩ひ、せんずる所君を欺かり、御敵と成て、御手討をせめてもの申譯と、扨こそ斯は計ひし。知ぬ事とは云ながらも、敵の術に乘はと乘、三代相恩の御主君を、敵と思ひ討奉り、一ツの功は立たりと、今迄も悅びしが、思へば思ひ廻はす程、弓矢神にも見放され、よつく武運に盡果し、此身の上と先非を悔、せぐり上たる荒涙、五體を震ひ身を打伏、前後不覺に取亂す、理りせめて哀れなり、始終を聞て縫之介、心切なる汝が忠節、感ずるに猶餘り有、扨又汝が今の詞、よつく思ひ合するに、忠臣無二と心

明治三十一年八月十三日印刷
明治三十一年八月十六日發行

定價金六拾錢

校訂者　水谷弓彦

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
博文館

を取戻し、再び御代に出し參らせん、恐れ有ど此乘物、時の用にはお赦し受、お相輿に召ませいと、殘る方なきはからひに、十內も氣色をかへ、縫之介樣御生害、御檢使の尾上殿、や役目御苦勞〳〵と、他人向成おれ夫に、首桶抱へ立出る、聞も及ばぬ女の檢使、惡びれもせずしづ〳〵と、別れを告て出行振、內は同向の俱淚、外は勇の揃への行列、振出す手先徒若黨、跡に引添打かけの、姿も見事女文字、古鄕の晴は忠と義の、夜の錦や織替し、花の身代世語に、殘す女の鏡山、別てれこそは出て行

此作上梓の時十段目間に合はず故に九段目迄を正本として賣出しきといふ

加々見山舊錦繪　終

續帝國文庫

全部五拾冊

背皮金文字入
洋裝上製美本
紙數壹冊千頁

正價（●壹冊金六拾錢　●六冊前金參圓五拾錢　●拾貳冊前金六圓九拾錢　●廿五冊前金拾參圓　●全部五拾冊前金貳拾五圓　●郵稅壹冊拾六錢　●目方四百匁）

空前の大出版を以て、讀書社會を驚動したる**帝國文庫**は、既に豫期の如く**五拾卷**を發刊して、江戸時代に於ける名著傑作無慮**三百九拾五種、三千百九拾壹卷**を公にしたり。されど昇平二百餘年、作家輩出し、編什太だ富む、遺珠猶多くして、年と共に湮滅せんとするの憾轉た切なり。仍て**更**に**五拾卷**を**續刊**し、集**大成**、**全部壹百卷**を以て、當時の佳作名著を網羅し、以て古書を今日に保存し、江戸文運の隆盛を永く後世に傳へんの宿志を成さんとす。印刷校訂の精良、製本體裁の美麗堅牢の如き、久しく既に江湖諸君の認識せらるゝ處、續々刊出、大に斯文の精光を發輝せんとす。

續帝國文庫目次

自第壹編至第廿四編　●第廿五編以下の目次は追て廣告すべし

第壹編　**眞田三代記**……著者不詳
第貳編　**近世說美少年錄**……曲亭馬琴

幸堂得知翁校訂

忠臣藏淨瑠璃集

全壹冊洋裝上製
背皮金文字入
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

本書目次

帝國近世の一大美談、一大偉蹟たる赤穗義士の復讐を、感激之を謠へる淨瑠璃を集め、玆に本書を成す。事の忠孝貞烈人を感奮せしむるのみならず、行文聲調の妙、またいふ可らざるものあらん。

饗庭篁村翁校訂

近松世話淨瑠璃

全壹冊洋裝上製
脊皮金文字入
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

本書目次

饗庭篁村翁校訂

近松時代淨瑠璃

全壹冊洋裝上製
背皮金文字入
正價金六拾錢
郵税拾六錢

本書目次